英霊達とリリカルまじかる頑張ります

MRZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英霊達とリリカルまじかる頑張ります

【Ｎコード】
Ｎ７６８２Ｏ

【作者名】
ＭＲＺ

【あらすじ】
高町なのは、フェイト・テスタロッサ、八神はやて、月村すずか、アリサ・バニングス。五人の少女がセイバー達、第五次サーヴァントと出会う。それによって動き出す彼女達の運命。
果たして、この出会いが導くものは悲劇かそれとも……
Ａｒｃａｄｉａで投稿しているものです。

始まりの夜（N&F&H）（前書き）

これはリリカルなのはとＦａｔｅのクロスモノです。サーヴァント達がなのは達と出会うものです。元はネタ的なものでした。

なるべく原作通りのキャラを維持しようとしていますが、作者は未熟者故にキャラが崩れる事があるかもしれません。

更に、設定なども作りが甘く、違和感や疑問を感じる事もあるかと思います。

なので、それを許容し、尚且つ指摘などして頂けると嬉しいです。

現在、Ｓｔｒｉｋｅｒｓまでを構想しています。

オリジナルキャラは出しません！てか、出せません！そんな力量も技術もないので……。

原作乖離著しい上に、バトルは基本苦手なのでそこもご了承ください。

始まりの夜（N&

は自分の求めるものじゃない事だけは、なんとなく感じ取っていた。
セイバーは、幼い少女の言葉に先程までの表情ではなく、どこか不思議そうな顔をして、なのはを見つめた。

「私は、なのはは……あなたと、ともだちになりたいの」

自分の言葉に軽く驚くセイバーを見て、なのはは嬉しかった。自分はそんなものじゃないくらい驚かされたのだ。その十分の一でも返す事が出来て満足したのだ。
そんななのはの笑顔を見て、セイバーも笑みを浮かべた。二度目の召喚時は月光の中で。今回は星光の中、幼い少女に呼ばれた。イリヤスフィールよりも幼い彼女からは、強大な魔力を感じる。だが、それはどうでもよい事だった。

「友、ですか……。なら、失礼ですが貴方の名前を聞かせて頂きたい」

セイバーは、自分が出来うる限りの優しい声でそう言った。

「あ、はい。私はなのは。高町なのはです」

「ナノハ？　……なのは、ですね。私はセイバー。セイバーと呼んでください」

こうして少女は、初めての友を得るのと同時に、永遠の友をも得た。星の光が差し込む部屋に、二人の笑みが輝いていた……。

突然の出来事に、フェイトは戸惑っていた。それは傍にいたアルフやリニスも同じ。

フェイトが様々な魔法に挑戦していた最中、転移魔法を構成した時、それは突然現れた。

「おいおい、今度は子供かよ。ま、十年後に期待か、こりゃ」

全身を青いタイツのようなものでつつみ、手には紅い槍を所持している。

アルフとリニスは全身で警戒感を示しているが、男はそんなものはどこ吹く風とばかりにフェイトを見つめている。

「そんな警戒すんな、って言っても無駄だわな」

やれやれと両手を挙げて、男はフェイトの前で膝をついた。

「サーヴァントランサー、召喚に応じ参上した。お嬢ちゃんがマスターって事でいいか？」

真面目だったのは途中まで。名乗りを終えると再び立ち上がり、フェイトの頭に手を乗せる。

それをなぜか不快に思えない事に、フェイトは驚いていた。その手は暖かく、自分を安らげるように、ぶっきらぼうではあるが優しく撫でている。

そんなランサーの態度に、まず安堵したのはリニスだ。本能も、理性も、勝てない、と判断した相手。それがひとまず敵ではない。それがわかっただけでも良かった。

（フェイトも無意識に甘えているようですし、安心ですね）

「え？　え？　ランサー？　マスター？」

「ああ。ま、主人って意味だ」

「主人？　……えっと、多分違うと「フェイトから離れろ！」て、アルフ？！」

見ればアルフがランサーの腕に噛み付いている。それを止めようとするフェイトと、決して放すまいとするアルフ。そして、噛まれているにも関わらず、笑みを浮かべてフェイトを撫で続けているランサー。

そんな光景を眺め、リニスは思う。この男ならば、もしもの時から二人を守り抜いてくれるのでは、と。

そして、願わくばその時が訪れないようにと、強く強く念じながら、微笑みを浮かべて三人の傍へと歩き出した。

「えっと……」

「ふむ、今回はまともな召喚のようだ」

はやては唐突な現状に、必死に頭を回転させていた。冷静になれ、とまだ十歳にも満たない少女が自分に言い聞かせていた。

両親が亡くなり、独りになってまだ日も浅い。そんな中、突如として現れた謎の男。はやては冷静に、いたってシンプルな結論に辿り着く。

「うん。ケーサツや」

「ちょっと待て」

何やら呟いていた男を無視し、電話をしに行こうとした途端、不審者が若干焦りを帯びた声で待ったをかける。
はやてはそれでも止まらない。制止を流し、車椅子を動かそうとして――――男が目の前にいた。
「君の考えは理解出来る。だが、私の話を聞いてほしい」
「おじさん、ドロボーやろ」
「こんな格好の泥棒がいるかい？」
そう言われて、はやては改めて男を見る。赤いコートのようなものに、黒い服。おまけに白髪ときている。
確かに、泥棒には相応しくない格好だ。泥棒は、渦巻きのような模様の袋を背負って、頭巾をしているものだった。
はやてはそう思い出し、男をドロボーとは言わない事にした。
「ならなんや？」
「サーヴァントだ」
男の言葉に再び頭が混乱し出すはやて。そんな少女の姿に、男は何かを思い出し、微かに笑う。
自分も『あの時』こうだったのだ、と。日常に非日常が入り込んだあの日。なら、自分がすべきは赤い彼女の役割だと。
「まあ落ち着け。サーヴァントは使い魔の最上級だと思ってくれればいい。つまりは……」

そこまで言って、彼は言葉を濁す。目の前の少女にわかるように説明するには、あの時自らが拒否した言葉しか浮かばなかったからだ。

即ち、召使い。だが、それは己の誇りに賭けても使ってはならない。

そこまで考えて、男は何かに気付く。先程から少女以外、誰も出て来ない事に。

「なぁ……」

そんな彼を思考から引き戻したのは、消え入りそうなはやての声。見れば、俯いて膝に置かれた手が震えている。

「何かな」

穏やかな声だった。思えば初めから気配が少女以外なかった。それから導き出される答えは一つ。

「おじさんは……ツカイマさんなんか？」

「そうだよ」

「それって、わたしのそばにいてくれるって事？」

「君が望むなら」

「なら――――――っ！！」

勢いよくはやてが顔を上げると、そこには男の笑顔があった。見る者を穏やかにするような笑顔があった。

思わず言葉を失うはやてに、男はしゃがんで、はやての震える手にそっと手を重ねた。

「選んで欲しい。このまま一夜の夢として忘れて生きるか、私と共に生きてみるか」

我ながらズルイと、男は思う。こんな聞き方を一人で暮らす子供にすれば、後者を選ぶに決まっている。だが、男はどんな形であれ、少女に決めて欲しかった。

車椅子での生活。まだ小学校に通い立てかその直前か。どちらにしろ、この少女に待っているのは大人でも辛い生活だ。

それを支えてやりたい。だが、押し付けではなく、少女の意志でそれを選んで欲しい。それが男の問いかけの真意。

彼女が望むなら、どんな相手にも立ち向かおう。彼女が願うなら、どんな事をも成し遂げよう。この身は一振りの剣。故に己が望み等はなく、主の望みが我が望み。

「どうかな？」

男の声に、少女は我を取り戻したように、数回瞬きをした。そして、男の予想通りの答えを……。

「いやや」

言わなかった。それどころか、両方とも蹴った。

「忘れる事も出来んし、共に生きる事も違う」

「では――――」

どうするのか？と続けようとした。が、それははやての言葉に遮られた。

「家族や」

「なっ……」

「わたしの家族になって、一緒に暮らす。共に生きるって、なんか違う気がするんよ。一緒に暮らすって言う方がしっくりくる」

先程まで弱々しい雰囲気をしていたとは思えない程の断言。はやては男の目を見つめたまま、そう言って笑った。

その力強さに、男も黙った。なぜなら、その言葉にある女性を見たから。

（ああ、どうやら俺は、よっぽど気の強い女性に縁があるらしい）

穏やかな表情を浮かべ、どこか遠い眼をする男を見て、はやては胸が高鳴るのを感じた。

それが何を意味するかなど、まだ幼いはやてに知る由もない。しかし、それが不思議と悪い感じがしない事だけは、確信を持って言えた。

「そういえば、まだ名乗っていなかったな。私はアーチャー。サーヴァントアーチャーだ」

「あ、わたしははやて。八神はやてや」

そうやって互いに名乗りあったところで、なぜだかはやては笑い出した。それを不可解そうに見つめるアーチャー。

どうかしたのかと尋ねても、ただただ笑うのみ。
ややあって、はやては笑うのをやめ、なぜ笑い出したのかを話し出した。
曰く、アーチャーの名前を聞いた時、くだらないダジャレを思いついたらしい。それがツボに入り、苦しかったと、はやては語った。

「あまり聞きたくはないが、どんなものだ」

「ぷくっ……ア、アチャーなアーチャーや」

そう言うと、再びはやては笑い出す。どうやら相当気に入ったらしい。
一方のアーチャーは「やはり聞くのではなかった」と言って苦い顔をした。それがますますはやての笑いを刺激する。
そんなはやてを見ながら、アーチャーは小さく微笑む。この日、孤独だった少女に、久方ぶりの笑いが戻った……。

――――――

始まりの夜（S&

この時の彼女はしらないが、この異様な身体能力の高さも、彼女を特殊たらしめている要因の一つだった。
感情に任せた動きが、ベッドに六歳が乗ったとは思えない程の負荷を掛けているのが、その何よりの証拠だ。

（普通じゃない私は、他の子みたいに生きていけないんだ。だって、私は……）

「『化物』、なんだから」

呟くと同時に、風がすずかの頬を撫でる。それが、すずかには自分の言葉を肯定しているように思えた。

――――――彼女を見るまでは。

綺麗な髪をたなびかせ、見た事もない眼帯なのだろうか。両目をそれで隠し、胸元が露わになっている黒い服を着こなしている。
だが、すずかが一番驚いたのは彼女の雰囲気だった。

（私に……似てる気がする）

驚きで動けないすずかに、女性は無言で歩み寄って行く。何か声を出さなければ、と思うのだが、なぜか声を出してはいけない気がしている自分がいる。
そんな事を考えているうちに、女性はすずかの前に辿り着き、おもむろにその手をすずかの頬に当てた。

「泣いて、いたのですか」

綺麗な声だった。女性は優しく涙を指で拭うと、視線の高さをすずかに合わせる。

瞳は見えない。でも、見つめられている。すずかは確かにそう感じた。

女性は呆けるような表情のすずかに、微かではあるが笑みを浮かべた。

「似ていますね……」

「えっ……？」

「いえ、気にしないでください」

「……私、似てますか？」

「……ええ。とても」

女性の言葉にすずかは、自分が間違っていないと確信した。

誰かは分からないが、この人なら自分を受け入れてくれる。なにせ、自分を似てると言ってくれたのだから。

厳密に言えば、女性の指した似ていると言うのは、すずかと自分ではなく、別人となのだが。それを指摘する程、彼女はすずかを知らなかった。

一方の女性は、目の前の少女を見ながら、ある者の面影を重ねていた。

（本当に似ています。マスターとサーヴァントは、どこか共通点があると言いますが、まさかここまでとは）

どれくらい時間が経ったのだろう。二人はお互いを見合ったまま、一言も発せずにいた。

すずかは、どう切り出そうと考え、女性はただそれを待っていた。時計の秒針が刻む音だけが、部屋の中に響いていく。
そして、すずかが話を切り出そうとしたその時。

「すずかお嬢様、寝てしまいましたか？　そろそろお風呂に入られた方がいいですよ」

心配そうなファリンの声に、すずかはやっとの思いで固めた勇気を、完膚無きまでに砕かれた。そんなすずかを見て、女性が小さく微笑む。
未だに声を掛け続けるファリンに、すずかはどこか疲れた声で返していた。それを聞き、嬉しそうに返事をするファリン。そんな会話を、女性はただ静かに聴いていた。

やがてファリンが下がると、すずかは拗ねたような顔をした。おそらく、自分の決意を見事に無にしてくれた事を思い出しているのだろう。
そんなすずかの顔を見て、女性は嬉しそうに語りかけた。

「良かったですね」

「何がですか」

「先程より、いい表情をしています」

そう言われて、すずかは気付いた。あれほどあった不安が、今は微塵もなかったからだ。
不思議そうな顔のすずかに、女性は笑みを浮かべてこう言った。

「貴方は一人ではない、と気付いたからです」

女性は語る。自分にも、人とは違う事に悩み苦しんでいた『家族』がいた事を。　その女性も最後には、自分を受け止めてくれる人達がいる事を思い出し、強く生きていった事を。そして、自分もまたそうしてもらった一人であると。

その話を聞いて、すずかは己の状況を改めて考え直してみる。

姉がいる、ノエルがいる、ファリンがいる。例え、自分が何であろうと受け入れてくれる『家族』が、自分にはいる。

そう思った時、女性がすずかの髪を撫でながら言い切った。

「それに、世の中には色々なヒトがいます。私や彼女を友人と言ってくれた者だっていたのですから」

意外と、世界は捨てたものじゃないですよ。そう言って、女性は優しく微笑んだ。

その微笑みに、すずかもまた笑みを返す。そして、先程女性の名を聞こうとした事を思い出した。

「あ、あの、私！　月村すずかといいますっ！」

そう言いながら、すずかは自分に驚いていた。大声を出す事などほとんどない彼女にとって、自分が出した声量は他人のものに感じられた程だった。

すずかは自分の動揺を隠せないまま、女性をただ見つめて問い掛ける。

「あ、貴方の名前を教えてください」

聞き様によっては、初心な口説きにも取れそうな声。だがその瞳

に映る輝きは、女性を少し驚かせた。
一瞬の間の後、女性はその口元を緩めて答えた。

「私はライダー。サーヴァントライダーです」

その声に込められた想いを、すずかは知らない。そしてライダーも、ソレを気付かない。
何故ならそれは、姉が妹を得たかの様な嬉しさが滲んでいたのだから……。

突然だが、アリサ・バニングスは言葉を失っていた。誘拐されたからでも、今から乱暴される所だったからでもない。
誘拐など、もう何度も経験している（ここまで危ないのは初めてだが）し、乱暴されるのも覚悟していた（それでも怖くはある）からだ。
アリサが言葉を失っているのは、視界に映っている光景だった。

廃ビルの窓。そこのむき出しのコンクリートに腰掛け、長い刀を抱えている侍。折から吹く風に、着物が微かに揺れて音を立てる。
アリサの周囲にいた誘拐犯達も、同じ様に言葉を失っていた。それもそうだ。なぜなら、先程までそこには誰もいなかったのだから。

「よい月夜よなぁ」

誰もが言葉を失う中、侍はそう言い出した。まるでそれは独り言でも漏らしたように。

「俗世は様変わりしておるが、月の美しさは変わらぬ」

すっと左手を上に上げ、その形を何かを持つように変えた。アリサには、それが何か理解できた。父親がよくお酒を飲む時にする仕草だったからだ。

「このような時は静かに杯を傾け、雅を感じるがよいのだが……」

そこまで言って、侍はアリサ達を初めて見た。

それだけでアリサは安心感を感じていた。侍が何者かは知らない。もしかいたらこの廃ビルの幽霊かもしれない。それでも、それでもだ。

（ああ、アタシ助かったわ）

そう確信し、アリサが安堵したのを契機に、誘拐犯達は侍に向かって動き出した。

その手には、ナイフや拳銃と言った凶器が握られていたが、侍はそれらをまるで気にも留めず、ただ一言。

「無粋よな」

それだけ言うと、いつの間にかアリサの傍へ立っていた。戸惑う誘拐犯達を眺め、侍は静かに手にした刀を構える。

それだけ。それだけにも関われず、誘拐犯達は動けなくなった。

彼らは、誘拐のプロフェッショナルチームであった。当然、修羅場等も経験している。今更、刃物を所持した男が一人現れた所でどうという事はない。

――――――はずだった。

だが、現実には誰も動こうとしない。いや、出来ない。本能が、理性が告げる。

コレからは助からない。逃げろ、とさえ思えない。ここにいる全員が同じ心境だった。

死んだ、と。

侍はまったく動かない誘拐犯達を見て、僅かに、傍にいたアリサさえ気付かない程の声で呟いた。

「幼子には目の毒よな」

そして放たれた斬撃は、誘拐犯達を全員倒した。『死』ではなく『気絶』という形をもって。

事の全てを見ていたアリサだったが、流石に一撃で終わるとは思っていなかったのか、何度も目を瞬かせていた。

すると、アリサは急に体が軽くなるのを感じた。見れば、体を縛っていた縄が綺麗に切られている。

「これで動けるであろう」

「ありがとう。誰だか知らないけど、ひとまずお礼は言っとくわ」

アリサの言葉に侍が軽く驚いた。自分のどこかに変な所でもあったのだろうか？　そんな風にアリサが思っていると、答えは予想の斜め上をいっていた。

「なんと、異国の娘が流れるような日本語を「ちょぉぉぉっと待ちなさい！」」

古風だとは思っていたが、どうやら目の前の侍は、本気で時代錯

誤の存在らしい。簡単な話を聞けば、気が付くとここに居て、自分が襲われそうになっているのを見つけたのだと言う。
アリサはそんな事を飄々と語る侍を、心底胡散臭いものを見るように見つめていた。

「まあいいわ。とにかく助けてもらったんだし、お礼はちゃんとするから」

「ふむ、私は別に構わぬが……」

「アタシが構うの！　とりあえず名前を聞かせて。いつまでもお侍さんじゃ、呼びにくいわ」

「それもそうよな。私はアサシンのサーヴァント。名を佐々木小次郎と言う」

そんな風に二人が話していると、俄かに下の方から声がしてきた。その中の声の一つに、アリサがよく知るものがあった。
本当にこれで助かった。そうアリサが思った時、小次郎がゆっくりとアリサの頭に手を置いた。
何を、と言おうとして、アリサは言えなかった。視界が滲んできたからだ。何でと疑問に思う前に、小次郎が呟いた。

「幼き身でよく耐えたものよ。だが、恐怖に涙するは恥でない」

「べ、別に――っく……アタシは……怖く、なんて」

「そうであろう。そなたが涙するは嬉し涙よ。なら、何を躊躇う事がある。思う存分流せばよい。私と月以外は誰もおらぬし――――」

私は何も見ておらぬ。

それが切欠だった。アリサは流れ出す涙を止める事が出来なかった。ただ声を押し殺して泣いていた。

それを視界から外し、小次郎は月夜を眺める。手から伝わる温もりと、流す涙の暖かさに、アリサはある決意を固める。

（アタシを泣かせてタダですむと思わない事ね！　絶対お返ししてやるんだからっ！）

余談だが、この後現れたＳＰ達が小次郎を誘拐犯と勘違いし、アリサが鮫島達を一喝するのだが、その様子を見て小次郎が大いに笑った事だけ記しておく。

――

ひとまず、ジュエルシード事件までで召喚されたのはこの五人です。

残りは別の場所での召喚となりますので、しばらく出番なし。

当面はこの五組それぞれに焦点を当てた話になります。

「ではスズカ、ファリンと買い物に行って来ます」

「うん。ライダー、ファリンをよろしくね」

「ふふっ、わかっています」

笑みを浮かべるライダーにつられる様に、すずかも笑う。最近序列変更があり、ファリンはライダーの妹分になってしまっている。まあ、本人も「ライダーお姉様」と呼んでいる辺り、満更でもないようだが。

「では……」

「行ってらっしゃい」

メイド服を翻し、ライダーは歩き出す。歩きながら、少しずれた眼鏡を指で直す。既に違和感がなくなりだした格好を思いながら、ライダーは思う。自分も変わったな、と。

あの日、彼女に似た面影を持つすずかに出会った『始まりの夜』から、既に半月。月村の家にも慣れ、メイド服にも慣れた。清楚な雰囲気にどこか妖艶さが漂うのは、ライダーが着ているせいだろう。初め家主である忍は、ミニスカートタイプを着せようとしたが、ライダーとすずかの抵抗&弁護により阻止され、ノエル達と同様のロングとなった。

柔らかな日差しと鳥のさえずり。それを目覚ましに、すずかはゆっくり目を覚ます。すると、何か違和感を感じた。

「あれ……？何で……」

窓とカーテンは開いていたはず。そう続けようとして、意識が覚醒する。

「そうだ！ライダーは！？」

「呼びましたか？」

どこか不思議そうに答えた声に、すずかは慌てて振り向く。そこには、昨夜と同じ格好で眼鏡を掛けたライダーの姿があった。その手にした絵本がどこかシュールだ。

「えっと…」

「はい」

「お、おはよう。……ライダー」

「おはようございます、スズカ」

その何とも言えない光景に、すずかは若干戸惑うも、何とか挨拶を交わす。ライダーはそれを平然と受け入れ、返した。そして、またその視線を絵本へ戻す。

ちなみに、手にした絵本はすずかのお気に入りだったりする。

しばらくライダーのページをめくる音だけが部屋に響く。その光景を見つめ、すずかはある疑問を浮かべた。

「ライダー……」

「はい？」

すずかの声に、ライダーは再び視線を戻す。その瞳の美しさにすずかは魅入られそうになるものの、何とかそれを抑え付ける。そう。疑問はそこにある。

「その眼鏡は？」

「以前いた場所で頂いたものです。思い出の品、といえば品ですね」

まさか、残っているとは思いませんでしたが。言って、ライダーはそう感慨深そうに呟いた。

すずかは、ライダーになぜ最初から眼鏡ではなかったのかを尋ねた。それならあんなにビックリしなかったのに、と。

その言葉に、ライダーは笑みを浮かべて答えた。仮にこの状態でも、スズカは驚いたと思います、と。

それは否定できない推理だったが、すずかは反論する。ビックリの度合いが違う。それにライダーが反論――するかと思ったのだが、彼女は申し訳なさそうな顔をした。

「そうですね。それは確かに…。すみませんスズカ」

「えっ？」

想像した事と違う反応に、すずかは戸惑う。違う、そうじゃない。自分は謝ってほしかった訳じゃない。ただ、ライダーともっと話がしたかっただけなのだ。そう思い、何か言わなければと思った時だった。

ライダーが、笑っていた。

それはどこか悪戯を成功させたように。だけど、どこか詫びるように。そこですずかも気付いた。

「もしかして……」

「はい、少しからかってみました。ですがあまり気分はよくないですね。スズカ相手では……」

そう言って、ライダーは心底後悔しているのだろう。顎に手を当て、何事かを呟いている。セイバー相手ならばとか、リンはなぜあんなにも嬉しそうに……等と言っている。

聞き慣れない名前ばかりだったが、すずかはそれよりも聞きたい事があった。

「ライダー……？」

すずかがそう声を掛けた瞬間、ライダーが少しだけ固まった。どうしたんだろう、とすずかが見つめていると、ライダーは何か慌てたように視線を動かした。

「な、なんですかスズカ」

「何で眼鏡を掛けるの？」

「いえ、それは……えっ？」

想像した言葉と違ったのか、ライダーは何かを弁明しようとして、聞かれた事を理解した。だが、それがどうして気になるのかがライダーにはわからなかった。

「目が悪いって事じゃないんでしょ？どうして眼鏡を掛けるの？すごくキレイな瞳なのに」

もっとはっきり見たいな。そんなすずかの言葉に、知らずライダーは喜んでいた。そして同時に悲しんでもいた。なぜなら、その事を話す事はすずかの望みに応えられない事を意味するのだから。

「分かりました。なぜ私が瞳を隠していたのか、それを教えます」

ライダーは、静かに語り出す。己の本当の名と、それにまつわる事実を。

蛇の怪物メドゥーサ。その名はすずかも聞いた事があった。見た者を石に変え、恐ろしい姿をした『化物』。ライダーはすずかに理解し易いように、難しい言葉や単語は使わず、簡単に話した。その語り口には何の感情もなかったが、姉が出てくる話の箇所だけは、懐かしむような響きがあった。

すずかは、その話をするライダーを見て酷く心が痛んでいた。ライダーは何か悪い事をしたわけではない。それなのに、怪物にされ、実の姉をその手にかけさせられた。自分の意思に関係なく、望まぬ状況に置かれた。すずかは、そこでやっと気付いた。自分が感じた感覚は、この事を無意識に感じとっていたんだと。

そして、それを理解したすずかは、自分の最後を語りだそうとし

たライダーに……。

「もういい！もういいよっ！！」

叫んだ。聞きたくないと言わんばかりに。怒りの感情そのままに、すずかは激しく首を振る。

そんなすずかに、ライダーは言葉がなかった。わかったからだ。なぜ、すずかが怒っているか。何に対して激怒しているか。

（優しい子ですね、本当に）

すずかは泣いていた。それは怒りの涙。理不尽に対する抗議の証。神様という存在に、少女は初めて憤りを感じていた。

ただ愛された。その相手に奥さんがいて、怒りが愛した夫にではなく、ライダーに向かった。ライダーが誘った訳でも、近付いた訳でもない。

なのに、悪いのはライダーにされた。住む場所を追われ、姿を変えられ、大切な姉達を亡くし、最後には命さえ奪われた。

自分が泣く事で、何かが変わる訳じゃない。それでもすずかは思った。自分がライダーの味方になろうと。例え世界を、神様を敵にしても、自分だけは、絶対に自分だけはライダーの傍にいようと。

奇しくもそれは、ライダーの二人の姉が出した結論と同じだった。

そして、すずかはライダーに抱きつき、強く抱きしめる。

「スズカ……」

「もう大丈夫だよ。ライダーには、私がいるから」

ずっと傍にいるから。その言葉に、ライダーも優しくすずかを抱

きしめる。自分の事を我が事のように感じ、泣いているすずかに。ありったけの感謝と想いを込めて。

それは、すずかを起こしにきたファリンが来るまで続いた……。

「あの後大変だったなぁ…」

あの日の事を思い出し、すずかは笑う。部屋に入ってきたファリンが、ライダーを侵入者と判断して大騒ぎになったのだ。ノエルに忍までやってきて、すずかは説明に苦労したのを思い出す。困った事に、ライダーがファリンとノエルに勝ってしまったため、余計にややこしい事態になったのも要因の一つだ。

結局、すずかの言葉とライダーの態度で理解はされたが、そこからがまた大変だった。

ライダーが伝説の存在だと言う事、現れた理由が分からない事、そして彼女もまた吸血種（本当は違うが、ライダーがそうした方がいいと判断した）である事がわかったからだ。

戸惑う忍ではあったが、すずかの様子から、ライダーが既にすずかの中でどういう存在か把握し、それに免じて不問とした。この判断に、ライダーは忍にリンを重ねた。

その後、例の格好の話となり、そこでも色々とあったのだが……。

（でも、ライダーは楽しそうだったよね）

無理難題をふっかける忍とそれを助長するファリン。それを落ち着いて嗜めるノエルに慌てるすずか。それを眺め、ライダーは確か

に笑っていたのだ。
すずかは知らない。そのやりとりが、かつての衛宮邸を彷彿とさせていた事を。ライダーがそれを思い出し、自分の立ち位置に内心苦笑してたのを。

そしてライダーはすずか付きのメイドとなり、ファリンが教育を担当（忍の悪戯めいた発案）したのだが……。

「これはですね……」

「こうですか？」

衛宮邸での暮らしで、家事をある程度していたライダーに隙はなく、ファリンが逆に教わる方が多かった。
それでも、先輩としての意地を見せようとするファリンだったが、持ち前のドジを如何なく発揮。それをライダーがフォローする結末になり、見かねたノエルがライダーの教育を変わる事となり……今の形に納まるに至る。

「それにしてもサーヴァントかぁ。私だけの護衛みたいなモノだってライダーは言ってたけど……」

すずか付きなのは、ライダーがサーヴァントの意味をすずかにそう語ったからだ。

テーブルの上にある写真立てを眺めて、すずかは思う。来週からは小学生だ。
あの時あった不安はもうほとんど消えた。色々なヒトがいるから、友達だってできるはず。初めから打ち明ける事は出来なくても、いつかそれを打ち明けたい友達が出来る。それで嫌われてもいい。い

ざとなれば自分には家族がいる、ライダーがいる。それに……。

「意外と、世界は捨てたものじゃないんだから」

ライダーの言った言葉に、すずかは勇気付けられた。ライダーがそう思ったのなら、きっと世界はそうなのだと。テーブルの写真立てには、月村家全員で撮った写真と、慣れないメイド服に照れているライダーとの2ショットが飾られていた。

「ライダーの様に、私もなれるといいな」

誰かを勇気付けられる人に。そう呟くすずかの顔には、希望と言う名の確かな輝きが宿っていた……。

――――――

ファーストデイズ（F&

その表情はどこか呆れるように、だが楽しそうに見えた……。

テスタロッサ家と槍騎士のファーストデイズ

お説教が終わった後、ランサーを待っていたのは質問攻めだった。しかし、それらはランサーのとっては予想通りのものばかりだったため、比較的早くすんだ。ただ気になったのは、ランサーがサーヴァントの説明をした際のリニスの反応。どこか驚きながらも、最後には悔しそうな顔をしたからだ。

それよりも問題は別の所にあった。それはランサーがフェイトに質問した事。ここはどこだ、と言う問いかけ。それにフェイトではなく、リニスが答えた。

「時の庭園です」

「なんだ、そりゃ」

次元世界、管理局、ミッドチルダに魔導師とランサーの聞き覚えのない言葉ばかり。試しにと、リニスがやってみせたのは『バインド』と呼ばれる拘束魔法。

突然現れた光の輪に驚くランサーだったが、それが魔力で出来ている事を認識した途端、音も立てずにバインドが消えた。

『っ！？』

「便利な代物だが、構造が甘いんだよ」

ランサーがやったのは、バインドの魔力に自分の魔力を加えただけ。ルーン魔術の使い手たるランサーから見れば、基本デバイスありきの魔法は、穴だらけなのだ。この身がキャスターとして召喚されていれば、おそらくもっと早く解除できたと語るランサーに、リニス達は心の底から思う。

この男が敵でなくて良かった、と。

長い通路を歩くフェイト達。向かう先はフェイトの母プレシアのいる部屋。

母さんに紹介しなきゃ、とフェイトが言い出し今に至るのだが、ランサーには気になっている事があった。それはリニスとアルフの雰囲気と、リニスの忠告。

「決して過去から来たなどと話してはいけません」

ランサーとフェイトに強く告げるその表情に、フェイトでさえ戸惑い、ランサーも鬼気迫るモノを感じたのだ。更に、ランサーの話や現状を説明している時と違い、明らかに不安そうな顔をしている。今もフェイトが母親の事を語るたびに、何とも言えない表情を浮かべていた。

聞くべきか否かと思ったが、会えば原因も分かるだろうとランサーは結論付けた。その考えは良くも悪くも的中する……。

「入るね、母さん」

アルフとリニスは外で待つと言い、フェイトが開けた一際大きな扉の先にいたのは黒髪の女性。その身体に宿る魔力はフェイトを凌ぎ、全身から他者を圧倒する気配を漂わせている。

だが、ランサーが反応したのはもっと別の事だった。

（魔力が安定してねぇ……これは――――病か？）

魔力探知に長けるサーヴァントだからこそ分かる。その体が弱っている事は。しかし、目の前の女性――――プレシアはそんな様子を一切見せず、フェイトとランサーを見つめる。

「……その男は？」

「あ、ランサーと言って……その、私が召喚しました」

実の娘に話しているとは思えない態度に、ランサーは怒りを通り過ぎて驚いていた。プレシアはまったく表情を変えず、ただモノでも見るかのようにフェイトとランサーを見ていたからだ。今も経緯を説明するフェイトを、路傍の石でも見るかの如き目で見下ろしている。

（おいおい、マジかよ。やっとマシなマスターかと思えば、こんなとこに厄介事が隠れてやがった）

内心、ランサーはやはりとも思っていた。

なぜリニスとアルフが部屋に入らなかったか、なぜフェイトが母親の事を話すたびに気まずそうにしたのか。その答えが眼前にあった。

フェイトの話にプレシアが興味を抱いたのは、バインドを壊した方法だった。ランサーが使い魔である事にも興味があったようだが、それよりも相手の魔力に自分の魔力を加える等の聞いた事がない事に意識が向いたからだ。

その話を詳しくと言われ、フェイトは嬉しそうに語り出す。ラン

サーに説明された事を懸命に思い出しながら、フェイトは語る。合間合間にプレシアが聞く事に詰まりながら、ランサーに助けてもらって答えるフェイト。

それをランサーはただ黙って支えた。途中、プレシアが自分に直接尋ねた時には一計を案じた。

「わりぃが何言ってるかわからねえ。フェイトの言葉しか俺の知ってる言葉に聞こえねぇんだ」

フェイトが何か言おうとするが、プレシアがフェイトに通訳をさせるように促し、フェイトが無視される事を回避させたのだった。そうして十分ほど話し、プレシアはもう聞く事はないとばかりに二人を追い出した。それでもフェイトは、愛する母と長く話せた事に喜んでいた。

そんなフェイトを、ランサーは複雑な心境で見つめていた。リニスもアルフも、今日初めて会ったランサーでさえ気付いている。プレシアは、フェイトを何とも思っていない。娘どころか人として見てるかすら怪しい。にも関わらず、フェイトはプレシアを慕っている。

（だが、俺が何とかする問題じゃねぇ）

自分がするべきは、来るべき戦いに備えてフェイトを鍛える事。まだまだこれから伸びていくフェイトを、一人前の戦士にする。それだけが自分がすべき事だと、ランサーは分かっている。分かっているが……。

（だからってほっとけるかよ）

このままでは、フェイトは報われない。プレシアはフェイトが強

くなっても何も思わないのだろう。自分の役に立つモノにしか興味を抱かない。それも、すぐになくなる。アレは人として壊れた奴の目だ。ランサーはそう思い、ある男を思い出していた。

忘れようのない相手。自分の誇りを踏み躙り、利用価値がなくなった途端あっさりと捨てる事を選んだ男。その男の目に、プレシアの目はどこか似ていた。

外で待っていた二人に「今日は母さんがたくさん話してくれたんだ」と告げるフェイト。その後ろを歩きながら、ランサーは誓う。それは声にならない想い。それは誰も知らない誓約（ゲッシュ）

（フェイトの想いを、あいつの努力を報われるようにしてやるか。この――槍に賭けて！！）

槍騎士はそう誓い、苦笑を一つ。我ながら、らしくない。そう思いながら、ランサーは歩みを速める。

「で、悪いが何か食わせてくれ。腹が減ったんでな」

「ラ、ランサー、頭が重いよ」

フェイトの頭に腕組みし、そうリニスへ告げるランサー。その行為に弱くも抗議の声を上げるフェイト。

「わかりました。じゃあ、食事の支度をしますね」

「ちょっと！フェイトが嫌がってるだろ！」

どこか呆れたように返すリニスに、今にも噛み付かんとするアルフ。

怒るアルフ、嗜めるリニス、うろたえるフェイト。そして、笑みを浮かべながら逃げ出すランサー。逃がさんとばかりに追いかけるアルフに、置いてかないでと走るフェイト。ため息をつきながらそれでも笑みを見せるリニス。そんな光景を見ながら、ランサーは思う。

ああ、こういうのも悪くねぇ――

――と。

おまけ

「出来ましたよ～」

『待ってました！』

「ふ、二人共、落ち着いて」

今にも掴みかかろうとする二人を、フェイトは何とか宥める。

「じゃあ早速……」

食事に手を伸ばそうとするランサー。同じようにアルフも食べようとして、何かに気付いたのか動きが止まった。

「さすがにこのままじゃ食べにくいね」

その言葉と同時に、アルフの姿が変わる。狼から人間の女性へと。

ランサーはその光景に口笛一つ。視界に映っているのは、美人と呼んで差し支えない女だったからだ。

「で、どうなってんだ？」

口笛を吹いておきながら、ランサーは悪びれもせずリニスに尋ねる。その手には、アルフが狙っていたチキンステーキがしっかりと握られている。

フェイトは、手掴みなんて……と驚き半分憧れ半分の視線でそれを見つめ、アルフはそのキレイな顔を歪めて唸っていた。

「使い魔は、アルフのように動物が素体です。ですが、主の魔力を消費する事で人の姿になることが出来るのです」

ちなみに私もそうですよ。そうリニスが告げると、ランサーは驚いた顔をした。だがそれも一瞬。すぐにいつもの顔に戻して呟く。

「ま、しかしそう考えると……」

アルフとリニスを交互に眺めるランサー。その視線に、リニスは恥ずかしがり、アルフは首を傾げた。

「いい女だよな、お前ら」

『っ？！』

軽い調子ではあるが、その声に込められたものは本音の称賛。生まれてこのかた口説かれる事などなかった二人に、ランサーの一言は強烈だった。そんな二人の様子に、ランサーは面白がって言葉を

かける。
　どうだ、本気で俺の女にならねえか？と言ってみれば、リニスは赤面しアルフは怒鳴る。初心だねぇ～とからかえば、二人揃って首を横にし無視の姿勢をとる。
　そんな風に盛り上がるランサー達を、フェイトは一人不思議そうに眺めて呟いた。
「早く食べないと、食事冷めるよ？」
――――――

ファーストデイズ（A&

立ち去る時のアリサの顔を思い出し、小次郎はそう断じた。その顔は笑っていたのだ。どこからか「にひっ」と聞こえそうなぐらいに。

そうやって笑うアリサと、キャスターの笑みが重なり、知らず小次郎は懐かしむように笑みを浮かべる。そんな彼を、朝日だけが見つめていた……。

お嬢様と傾奇者のファーストデイズ

「いい天気ね！」

窓を開け、伸びをし終えて、アリサはそう言い切り、着替えを手に取る。

本来なら、大財閥の令嬢ともなれば手伝い等をするメイド等がいてもおかしくないのだが、バニングス邸には、いやアリサの周囲にはそのような者は敢えて付けられていなかった。

アリサが望まなかった事と、両親の教育方針でもある『人の上に立つならば、立たれる者の気持ちを知れ』の精神で、アリサは同年代の子が自分でする事は全て自分でこなすように育てられていた。

着替えを終え、アリサはすぐさま部屋の外へと出た。そして出迎えた鮫島に、挨拶もそこそこにこう尋ねた。

「小次郎はどこ？」

アリサが捜しているとも知らず、小次郎は庭を散策していた。柳洞寺にいた頃は山門から動けず退屈していた事もあり、自由に動き回れる事に、小次郎は喜びを噛み締めていた。

それに、バニングス邸は西洋式の庭園であった事もそれに拍車をかけた。日本庭園にはない味を、雅を感じながら小次郎は歩く。

「いささか侘び寂びが足らぬが、これはこれでまた良いモノよ」

小次郎が特に気に入ったのは庭の中心にある噴水だった。枯山水とは正反対の発想に、小次郎は驚きと感心を抱いたのだ。

「水をこうも惜しげなく……贅沢ではあるが、これもまた文化の違いか」

ま、雅には違いないと呟き、そろそろ屋敷に戻ろうとして――――その動きが止まった。

そこには、仁王を思わせるような雰囲気の腕組みしたアリサの姿があった。無論、小次郎にとってアリサがそんな姿勢をした所で、脅威でも何でもない。だが、その目に宿った光が小次郎を止めるに至った。

「勝手にウロウロするなぁぁぁぁぁ！――はぁ――はぁ――っおかげで、庭を走り回るはめになったじゃないっ！！」

鮫島から小次郎が庭にいると聞いたアリサは、早速とばかりに庭に出たのだが、小次郎は既に戻り始めていたため、庭をほぼ一周するはめになった。

勿論その最中に何度も、どこかに行ってしまったんじゃないか？と言う不安を抱き続けて走る事にしたのだが、その疲れと苦しみを

全て小次郎へと叩きつけたのだ。

そんなアリサの剣幕も、小次郎には微笑ましいものにすぎない。それどころか、面白がって顔に笑みさえ浮かべて答えた。

「それは健脚であるな。幼子にしては大した者よ」

「幼子って呼ぶな！名前で呼べって言ってるでしょ！居候なんだから少しは言葉ってもんを……」

「はて？私は構わぬと言ったものを、礼だと言って連れてきたのはそなたではなかったか？」

どこか嬉しそうに問いかける小次郎の言葉に、アリサは答えに詰まる。小次郎が言っている事は事実。目の前の侍は、確かに礼には及ばないと言った。それを強引に連れてきたのは自分である。ならば、小次郎の立場は居候ではなく、客人が妥当になる。

幼いながらも、アリサはそこまで考え、そして悔しがった。それはもう誰の目からも明らかな程に。

俯き手を握り締めているアリサを、小次郎は楽しそうに見つめる。昨夜のお返しにと、少しばかり大人気なく理屈で攻めたのだ。しかし、アリサはいかに頭の巡りが良いとはいえ、まだ子供。小次郎も、少しやり過ぎたかと思ったその瞬間。

「男のくせに細かい事気にするなぁぁぁぁっ！」

、アリサが吠えた。それはもう見事に。獅子か虎かと思わんばかりの咆哮だった。

その声に、小次郎は確かに空気が震えるのを感じた。その証拠に、

表情は唖然としている。そして、耳鳴りが小次郎を襲い、頭を鈍く痛めつけた。

肩で息をしながら、アリサはどうだと言わんばかりに胸を張る。その光景を眺め、小次郎は思う。

ああ、この女子は虎の子か、と。だから髪が黄金色をしておるのかと納得した。

「と・に・か・く！もう朝食の時間なんだから、早く来なさいよ」

「承知した。さて、異国の朝餉はいかなモノか」

「だから、ウチを異国扱いするのやめなさい」

並んで歩く二人。時代がかった姿の小次郎と西洋人形の如きアリサの組み合わせは、違和感を感じさせながらも、どこかしっくりくるものがあった……。

用意された朝食は洋風。パンにスープ、サラダにベーコン。それにサニーサイドアップと呼ばれる半熟の目玉焼きが並んでいた。

一般的なメニューには、昨夜の食事を小次郎があまりにもあれこれ聞くものだから、アリサの母が誰でも知っている方が、気を遣わずに食べられるだろうと、そう手配してくれたのだが……。

「この汁物は？」

「コンソメよ。野菜や鳥なんかを一緒に煮込んで作るはずよ」

「この菜物の盛り合わせは？」

「サラダ。色んな野菜を食べ易い大きさにして、ドレ……タレをかけて食べるの」

ほらこれとアリサに手渡され、小次郎はドレッシングのビンを眺める。日本語と英語が書かれたそれを、面白そうに小次郎は眺めた。アリサはそれを横目で見やり、ため息一つ。母の気遣いは、どうやら無駄に終わったようだ。小次郎にしてみれば、アリサの家にある物全てが珍しい。純日本と呼べる物でない限り、小次郎の興味は尽きないのだ。

だけど、とアリサは思う。知らない物を尋ねる時、小次郎の顔はどこか幼く見える。純粋に未知との触れ合いを楽しんでいるのだ。だから子供の自分にさえ、素直に聞く事が出来る。

それに引き換え自分はどうだ。大人に負けじと物を知ろうとし、塾や習い事をし共に遊ぶ相手もなく、同い年の子とは違う生き方をしている。もし、自分が小次郎の立場なら、素直に子供に物を聞くなど出来ない。

それはプライドが邪魔をするからだろう。小次郎にはプライドがないのだ。だからそう出来るのだと、アリサは結論付ける。それは大きな間違いなのだが、生憎それを指摘する事は誰にも出来ない。

「どうかしたか？」

「……へ？」

「何やら思い詰めた顔をしておったのでな」

そう言って小次郎はスープを啜る。れっきとしたマナー違反だが、

日本人たる小次郎にそんな事は関係ない。
両手で皿を持ち、静かに啜るその姿はどこか浮いていた。ちなみに、小次郎の手元にもスプーンやフォークは置かれている。
その光景を見て、アリサは頭を抱える。

（教える事が多すぎる！）

物の名前や使い方。果ては文化やマナー等、これではまるで先生ではないか。そう思った時、アリサの脳裏にある提案が閃いた。うまくいけば、自分を子供扱いする小次郎に一泡吹かせられる作戦を。

以下、アリサのイメージです。

「いい、小次郎。あんたは外国の事を知らなさ過ぎ」

「ふむ」

「だから、アタシが教えてあげるから感謝なさい」

「おお、それはかたじけない。よろしく頼む」

「うむ！じゃ、これからアタシの事はお嬢様と呼びなさい」

「畏まりましたお嬢様……これでよいか？」

「よいよい。苦しゅうないぞ～」

「これだ！」

アリサがそう思い、小次郎に声を掛けようとした時には――――。

もう小次郎の姿はなかった。

慌てて周囲を見渡すも、小次郎の姿はどこにもない。見れば、小次郎の食事は綺麗に平らげられていた。

なら外か。そう結論付け、席を立って食卓を後にしようとした所で――――。

「なんだ。もう食べぬのか？」

もったいないと言いながら、小次郎が厨房の方から現れた。その手にしているのはコンソメが並々と入った皿。

呆気に取られるアリサを横切り、小次郎は静かに席に着く。そして先程のようにスープを啜り出す。一切ぶれる事のないその所作に、アリサは感心すら覚え始めていた。

そんなアリサを小次郎は一瞥すると、視線をアリサの食事へ向ける。それは、アリサに食べないのかと言わんばかりであった。

それに気付き、アリサも席に着く。残っていた食事を下品にならない程度に急いで食べ、アリサは隣へと視線をやる。

小次郎はゆっくり味わうようにコンソメを飲んでいた。その表情は心なしか嬉しそうだった。

「そんなに気に入ったの？」

「うむ。先程板前に聞いてきたが、そなたの言う通りの作り方であった。大地の恵みをふんだんに煮込んで作るとは、贅沢よな」

そう答え、小次郎は空になった皿を見つめる。アリサの気のせいだろうか、その横顔がどこか悲しそうに見えたのは。

声を掛けようにも、その悲しみは深い事が分かる。そうしてアリサが迷っていると、小次郎が口を開いた。

「しかも色が琥珀とくれば、目にも雅なモノよ。大地の恵みに人の知恵、二つの結晶には恐れ入る」

まさに珠玉の一杯よ。そう語る小次郎は、既にいつもの小次郎であった。

アリサはそれに安堵するが、同時に先程見せた表情が気になって仕方なかった。

アリサは知らない。小次郎は元々百姓の出で、佐々木小次郎等という存在ではなかった事を。元百姓だからこそ、己の現在を鑑みて、その不条理さに思いを馳せたのを。

今のアリサには、知る事が出来なかった……。

食事を終えたアリサは、さっき思いついた提案を小次郎へ告げた。

それを聞き、願ってもないと応じる小次郎。と、ここまではアリサのシナリオ通り。だが、そうは簡単に運ばないのが世の中というもの。

「じゃ、これからはアタシを――――」

お嬢様と呼びなさい。そう続けようとした。だが、それを遮るように小次郎は言った。

「わかっておる。ちゃんとありさと呼べばよいのであろう？」

小次郎の言葉に、アリサは何も言えなくなった。名前で呼べと言ったのは自分だ。なら、この流れでそう言われてもおかしくない。しかし、その顔にはありありと怒りが浮かんでいた。発音が違う。それが怒りの訳。だが、小次郎は気付けない。西洋の言葉も、一部を除き片言に近いのだ。

「如何したありさ。名前で呼んではならぬのか？」

「それでいいけど、そうじゃな～～～～いっ！！」

アリサの心からの絶叫は、屋敷全体に響き渡ったのだった……。

――――――

ですが、結構この二人も賑やかです。

ファーストデイズ（H&

「断る」

「ぶ～」

「膨れてもダメなものはダメだ」

「ケチ、アホ、イジワル、人でなし、カイショウナシ、ドロボーネコ、ウワキモン！」

「待て。今、最後の方は聞き捨てならぬものがあったぞ」

「お昼のドラマでよ～聞くんよ。ちょう意味は知らへんけど」

「……そのドラマは君には早い」

そのやりとりを終え、ベッドにはやてと共に横になるアーチャーだったが、興奮しているのだろう。はやては一向に眠る気配なく、アーチャーの腕に抱きついて質問を続けていた。

どこの出身等のアーチャー自身の事から、明日はどうすると言った事まで様々だ。相手をしていれば　その内眠るだろうと、アーチャーは思っていたが、その勢いが弱まる事がなかったため、ある提案をした。

それは、朝自分より早く起きたら、質問に何でも答えると言うモノ。はやてはそれを聞き――わずか三分で寝た。

それを見て、アーチャーは苦笑すると共に、何があっても負けら

れないと決意したのだった。

「さて、食事の支度でもするか」

寝息をたてるはやての頭を軽く撫で、アーチャーは静かに部屋を後にするのだった……。

夜天の主と弓兵のファーストデイズ

八神家のキッチンに佇むアーチャー。その背からは、戦場を詳細に観察するかの如き雰囲気が漂う。否、ここは戦場なのだ。

彼にとって、家事それも料理とはまさに戦いと呼べるもの。故に、敗走はなく、必勝こそが彼の必然。

しかし、彼はキッチンをしばし眺めて呟いた。足りんな、と。

彼の腕を十全に振るうためには、この調理器具だけでは力不足。ならば、どうするのか？簡単だ。ないのなら、創ればいい。

「投影（トレース）、開始（オン）」

自分にとって言い慣れた言葉と共に魔術回路が動き出す。そして、アーチャーの手から――――。

「ふむ、こんなところか」

包丁や鍋などが手品のように現れていた。それらは世間では高級品と言われるモノばかり。どこかの万年金欠宝石少女がいれば、間違いなく売り飛ばして資金にする事請け合いの光景だ。

アーチャーはそれらと元々あったものと交換する。そして、それらを邪魔にならぬよう収納スペースへ入れた。

（彼女の母親の形見かもしれんしな）

捨てずにしまったのはそれが理由。この家について、アーチャーは知らぬ事が多すぎる。それもあって、彼は手始めとばかりに食事を作ろうとしていたのだが、冷蔵庫の中を見て固まった。

そこには、飲み物や調味料以外何も入っていなかったのだ。まさかの事態に、さしもの皮肉屋も沈黙した。そして、彼はゆっくり冷蔵庫の扉を閉じた……。

はやては一人で暮らしている。そして、車椅子での生活。おそらく食事等は配達で賄っているのだろう。そう判断し、アーチャーはその顔を歪ませる。早朝から開いているスーパーはある。だが、それがどこにあるかわからない今、どうする事も出来ない。だからといって諦めるのは許されない。何もせずに諦めるなど、彼には決して出来ない結論だからだ。

「不本意ではあるが、それしかあるまい」

苦渋に満ちた声。活路はある。だが、それは彼の中では苦肉の策。

「時間は有限。ならば、急ぐとしよう」

そう結論を出し、彼は静かに走る。はやての部屋へ消え、即座に戻り玄関へ向かう。そしてドアを開け、閑静な住宅街を駆けるアーチャー。幼き少女のため、そして己の信念のために！

包丁が野菜を刻み、軽快な音を響かせ、コンロにかけられた鍋が僅かに震えている。黒い無地のエプロンを着け、無言でアーチャーは調理をしていた。

彼が向かった先はコンビニエンスストア。最近は生鮮食品も扱っていた事を思い出し、何軒か梯子したのだ。結果として食材は手に入ったものの、その鮮度などは納得のいくものではない。しかし、しかしである。

（食材を生かすも殺すも腕次第。ならば、私の腕で足りぬ分を補えば済む事っ！）

無論、目利きをし、少しでも状態の良いものを選んではきている。ギリギリ及第点なら、後は工夫と技術で勝負。それがアーチャーの結論。持てる全てをぶつけ、彼はこの調理に挑んでいた。

一方、静かな死闘が行われているキッチンから離れたはやての部屋。心地良い眠りに浸っていたはやてだが、漂ってくる匂いと音に意識が覚醒し始めた。

（あれ……？ええ匂いや……お出汁の匂いやな。この音は……包丁か）

そこまでぼんやりと思い、次の瞬間目が覚めた。誰がこれをしているのか。そして、それが何を意味するのか。

「負けてしもた……」

聞きたい事は山ほどあった。でも、答えてくれないかと思うような事もある。だからこそ、アーチャーに勝って色々聞こうとはやては意気込んでいたのだが、結果は見事に惨敗だ。

しかし、どうやってアーチャーは料理をしているのだろうとはやては思う。食事は宅配にしているから、冷蔵庫には使える物は何もないはずだ。それに、買うにしてもスーパーはまだ開いていないし、お金も持ってるとは思えない。

それだけ考え、はやてはまず着替える事にした。身体をベッドから動かし、車椅子へ。そして、タンスの中から着る物を引っ張り出していく。

（でも、朝ご飯かぁ……。こんなに楽しみなんは久しぶりや）

知らず鼻歌混じりに着替えるはやて。そんな時、ドアがノックされ――――。

「起きたのか、はやて。何か手伝う事はないか？」

アーチャーの声がした。開けない所に、彼の気遣いが見える。はやては少しビックリしながらも、笑顔で答える。

「特にないわ。おおきにな、アーチャー」

「そうか。なら、顔を洗ったらテーブルに着いてくれ。食事の用意が出来ている」

「うん。すぐ行く」

はやてがそう答えると、アーチャーは待っていると言い残し、またキッチンへと戻っていった。その足音を聞きながら、着替えを再開したはやてだったが、視界が滲んでいる事に気付いた。

どうしてと思った時、はやてが思い出したのはアーチャーの一言。

――――待っている。

両親を亡くして以来、一人で済ませていた食事。それが、今日からは違う。自分を待ってくれる人が、食事を作ってくれる人が、『家族』がいる。それが、涙の理由。昨夜から出来た新しい同居人、アーチャー。彼は自分の『家族』になると言ってくれた。それが、こんな形で証明されるとは、はやては思っていなかった。

（神さまに謝らなアカンな。アーチャーと会わせてくれて、ホンマにありがとうございます）

両親を亡くした日、はやてはなぜ自分も一緒に死なせてくれなかったのかと、神を恨んだ。たった一人で生きていく。それが幼い少女にどれ程辛い事かは、言葉に出来ない。だが、神ははやてを見捨てなかったようだ。

（でも、もしかしたら恨んだからアーチャー連れてきたのかもしれん）

はやての脳裏に、手を合わせ謝る白髭の老人の姿が浮かぶ。そして、そんな事を思って笑いながら涙を拭う。許してやろう。相手はよぼよぼのおじいちゃんなんやから、とはやては思い、また笑う。そして、車椅子を動かし洗面台へと向かうのだった……。

用意された食事に、はやては目を疑った。豆腐の味噌汁、だし巻き卵、ほうれん草のおひたしに焼き海苔と、実に純和風の献立が並んでいたのだ。ただ、白米だけは既製品をほぐしただけのようだが。それでも驚くはやてに、アーチャーは語る。

自分がもっとも得意とする和食を作る事は、夜の内から決めていた事を。そして、食材を揃えるためとはいえ、申し訳なかったがはやての財布を借りた事を。けれど、自分が苦労した事などは一切触れない。はやての性格を、アーチャーは既に把握し始めていたからだ。下手な事を言えば、顔を曇らせてしまう。だからそれらの事を聞き、はやてが笑った時、アーチャーも笑った。

「ま、御託はこれぐらいにして、まずは食べてくれ」

「せやな。いただきま～す！」

後にはやては語る。あの時の衝撃は、一生忘れないと。

「う……」

だし巻き卵を口にし、はやては固まった。その反応に、僅かだがアーチャーにも緊張が走る。秒針の音だけが、静かに響く。どちらも微動だにしない。ややあって、はやての口が咀嚼を再開する。心なしかゆっくりに見えるそれを、アーチャーは真剣な眼差しで見つめる。

今ならば、ランサーの動きさえ見切るのではないかと言わんばかりの眼力で。

やがて、名残惜しそうに嚥下するはやてを、アーチャーはただ黙って見守る。

「ど……」

「……ど？」

ゴクリと息を呑むアーチャー。想像と違う言葉に、その顔は戸惑いを隠せない。

「どうしてこんなに美味しいんや～～～～っ！！」

はやての絶叫に、アーチャーは小さく安堵し、笑みを浮かべる。

「当然だ。私にかかれば、この程度の味など造作もない」

すまし顔で語るアーチャー。その表情からは、絶対の自信が溢れている。そんなアーチャーを無視し、はやては既に他の物を食べ始めていた。それも、美味しいと目を輝かせながら。その光景を見て、アーチャーはただ嬉しそうに微笑むのだった。

「ホンマにアーチャーは料理が上手いんやなぁ……」

食後のお茶を飲みながら、ぼんやりとはやては呟いた。その視線の先には、食器を洗うアーチャーの姿がある。本当は色々話しながら食べようと思っていたのに、あまりに美味しい食事に会話も忘れて食べ続けてしまった。結局、話は片付けが終わってからになった。

後片付けをしているアーチャーを見ながら、はやては思う。

（意外とガンコなんやな、アーチャーって。今日は全部自分でやる！なんて……）

手伝いを申し出たはやてに、アーチャーはこう断った。

「気持ちは嬉しいが、今日は私に全てやらせてほしい。なにしろ、久しぶりの事なのでね。勘を取り戻しておきたい」

「でも……」

「その代わり、明日からは頼む」

そう笑みと共に言われては、はやても引き下がるをえない。仕方ないのでお茶を淹れ、こうしてくつろいでいるのだが……。

（なんや、変な感じやな。まるで歳の離れた兄妹や）

そんな事を思い、はやては笑う。そして、もしここに両親がいたらなどと思ってしまう。

屈託なく笑う母と微笑む父。二人に手をつながれて歩く自分。それを後ろから呆れながらもついてくるアーチャー。

そんな光景を幻視し、はやては瞼を強く閉じる。涙がこぼれないように、アーチャーに気付かれないように。

そんなはやての肩に、何かが触れた。

「どうした。埃でも目に入ったか？」

アーチャーの手だった。その問いに無言で首を横に振るはやて。声を出さないのは、それで分かってしまうと思ったからだろう。しかし、アーチャーには無駄な事だった。

彼はそれだけで何かを悟ると、笑みを浮かべて語り出した。

「はやて、君は確かこう言ったな。私と『家族』になってほしいと」

無言で頷くはやて。それを確認し、アーチャーは続ける。

「なら、我慢しないでくれ。言いたい事なら言えばいい。やりたいならやればいい。ダメならそう言うし、出来るのなら力になろう」

支え合い分かち合うのが家族だから。まるで、一人で抱え込むなと言っているようなその言葉に、はやては涙が止まらなかった。抑えていた声も、もう限界だった。

流れる涙も拭わず、ただアーチャーの手の温もりを嬉しく思いながら泣いた。そんなはやてを、アーチャーは黙って見つめた。今必要なのは、言葉ではない。自分以外の温もりなのだと、アーチャーも知っているから。

こうして、二人は『家族』としての第一歩を歩き出す。二人は知らない。その姿を、一匹の猫が注意深く見つめていた事を……。

――

ファーストデイズ四本目。

はやてがおマセになった理由は、良くも悪くも保護者がいなかった

からだと俺は思います。

ファーストデイズ（N&

その二つの気配は、家を後にし、外へと出て行った。遠ざかる気配にセイバーは思う。なのはに聞く事がまた増えたと。

出会いの後、簡単な話（ここが日本である事と、海鳴という町である事）をなのはから聞き、時間を考えセイバーが寝る事を勧めた。そのため、セイバーは高町家の事を何も知らない。

「仕方ありません。私ももう少し寝ましょう」

可愛らしい寝顔のなのはを見つめ、セイバーは笑みを浮かべるとその目を閉じる。そうやって眠ろうとするセイバーに、世界は残酷だった。

「さ、朝食の支度をしなきゃ」

なのはの母である桃子が、普段よりも少し早くから食事の支度を開始。その音と匂いに、セイバーはすぐに目を覚ます事となったのだった……。

高町家と騎士王のファーストデイズ

（何があったんだろう？）

気持ちよく目を覚ましたなのはが見たのは、『待て』を極限までさせられている犬の様な雰囲気を発しているセイバーの顔だった。

そんな事を感じていると、そのセイバーと目が合った。

「あうっ」

「お早うございます、なのは」

その視線の強さに、思わずなのははたじろいた。そんななのはの様子に気付かず、セイバーは挨拶と共に体を起こす。

全身から怒気とも呼べる空気を漂わせ、彼女はなのはを見据えた。その目は、昨夜よりも真剣だ。何を言われるのだろう。そうなのはが覚悟した時だった。

「朝食の時間です」

「へっ？……あ、そうだね」

「早く着替え、居間に行きましょう」

「そ……そうだね」

セイバーの有無を言わさない雰囲気に、なのははただ頷くしか出来なかった。家族がセイバーの事を知らない事も忘れるぐらいに、今のなのはは動揺していた。それはセイバーも同様である。昨夜から今まで何も食べておらず、更には食欲をそそる匂いを一時間以上嗅がされていたのだ。そのため、騎士王は食いしん王に変化していた。

急かすようなセイバーの視線を受けながら着替えを終えるなのは。それを確認するやなのはを抱き抱えて部屋を出るセイバー。声を出す事も叶わず、なのははは初めてのお姫様抱っこを同性にされるという、非常に稀有な体験をした。

「着きました」

「あ、ありがとうセイバー」

唯一の救いは、家族がそれぞれ用事があり、居なかった事か。恭也と美由希は学校の日直、桃子は士郎の世話と出掛けていて、テーブルには桃子の字で「あたためて食べてね」と書いてあるメモが一枚と、ラップをかけられたまだほのかに暖かい料理の数々。それをなのははどこか寂しそうに眺めるが、セイバーは既に今か今かとなのはを待っている。そんなセイバーに、なのはは犬の姿を再び重ね、笑みを一つ。

「セイバーは座ってて。私がご飯よそうから」

「わかりました。では、大盛りでお願いします」

「にゃはは。あ、ラップ取ってくれるとうれしいな」

「ええ、心得ています」

そんなセイバーを横目に、なのはは茶碗を取り出す。自分用のものと、父の使っていたものを手にジャーを開け、ご飯をよそう。

それをそわそわしながら待つセイバー。そして、なのはから茶碗を受け取り……。

『いただきます！』

食事は比較的早く終わりを告げた。元々なのは分しかご飯がなかった事、セイバーが凄まじい速度で御代わりした事が重なり、ご飯

が綺麗になくなったのだ。
空の御釜を見せられた時のセイバーは、まさに青天の霹靂といった顔を浮かべた。なのははそれを見て、乾いた笑いを浮かべるしかなかった。

食後のお茶（これはセイバーが淹れた）を飲みながら、なのははセイバーに様々な事を話した。家族の事、家庭の事、自分の事。それをセイバーは黙って聞いてくれた。時に脱線し、思い出話になっても遮る事無く相槌を打ち、言葉に詰まりそうになるなのはをただ優しく待ち、全てを話し終えた頃には、お昼近くになっていた。

「……よくわかりました。なのはは、お父上が良くなってくれれば、また家族で過ごせるのですね」

「うん。お母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんも、お父さんがにゅういんしてるから、なのはの相手ができないんだと思うの」

どこか悲しそうに答えるなのはに、セイバーは何かを決意すると静かに立ち上がる。

「なのは、その病院に行きましょう」

「え？なんで？」

突然の申し出に、なのはは目を瞬かせる。自分が行っても邪魔になるだけ。その考えが脳裏をよぎる。そんななのはの思考を読み取ったのだろう。セイバーは微笑むと、力強く断言した。

「私にいい考えがあります」

セイバーと共に、なのはは聖祥大付属病院へとやってきた。見舞いには何度か来ていたため、道に迷う事はなかったが、セイバーの格好が目立ったせいで道中好奇の目で見られた。

二人は士郎のいる病室へと向かう。なのははセイバーに、道すがらどんな事をするのかと尋ねたのだが、セイバーは答えてはくれなかった。ただ、任せてほしいとだけ告げて。

病室のドアの前に立ち、なのはは恐る恐るノックする。そして意を決して声を掛けた。

「なのは、だよ。入るね」

「えっ？なのは？」

想像もしない娘の来訪に驚く桃子。その声に若干の罪悪感を感じるも、肩に置かれたセイバーの手に勇気を出してドアを開ける。

そこには、こちらを見て驚く両親の姿があった。

生死不明の重症を負いながらも、不屈の精神で一命を取り留めた士郎だったが、意識は取り戻したものの未だに退院のメドは立っていない。そんな夫を献身的に支える桃子。それを聞いたセイバーは、なのはにイリヤスフィールの姿を重ね、ここまで来たのだ。

愛娘と共に現れた金髪の少女に、二人は言葉を失うが、セイバーは出来うる限りの柔らかな声で自己紹介を始めた。

「初めまして。私はセイバー、なのはの友人です。今日はお父上のお見舞いに来ました」

その言葉に再び両親は驚く。家から出た事がないはずのなのはが、年上の、それも外国人の友人を作った事に。一方のなのはは、セイバーの友人という言葉に喜びを隠せず、満面の笑顔だった。

簡単な挨拶だったが、娘の初めての友人が見舞いに来てくれた事に士郎も桃子も笑みを浮かべて歓迎した。そして、セイバーは先程までの表情を変え、真剣な面持ちでこう切り出した。

「そして、その怪我を治しにも」

セイバーはそう言うと、その手を掲げて呟く。

「全て遠き理想郷（アヴァロン）」

次の瞬間、眩い光がセイバーを包み、その手に何かが現れる。それは聖剣の鞘にして、万物から身を守るセイバーの切り札。

セイバーが死後辿りつくと言われている理想郷の名を冠した癒しの力。

何が起きたのか戸惑う三人。セイバーはそれを気にも留めず、アヴァロンを士郎の体に置く。やがて淡い光を放ち、士郎を輝きが包む。それを見ながら、桃子もなのはも動けずにいた。その光はとても優しく、暖かな気持ちにさせてくる。そんな印象を受け、ただ黙って見守る二人。そして、輝きが消えた先には、何も変わらぬ士郎の姿とアヴァロンがあった。

だが、目に見えぬ変化は起きていた。

「……痛みが消えた……？」

信じられないとばかりに呟く士郎。そして、ゆっくりと起き上が

り、自身の体を動かし始める。それを見て、セイバーは笑みを一つ浮かべアヴァロンを回収する。やがて、完全に直った事を理解した士郎が桃子に笑顔を向ける。それで全てを理解したのだろう。桃子も両目から涙を浮かべ、その胸に飛び込んだ。

互いに涙を浮かべ抱き合う両親の姿に、なのはも知らず涙を浮かべる。そんななのはに、セイバーは優しく寄り添うのだった……。

両親に手を繋がれ、嬉しそうに歩くなのは。それを見つめ、微笑むセイバー。

あのすぐ後、士郎は担当医を呼び、退院したい旨を告げた。無論、そんな事が許される訳はないのだが、士郎たちの懇願と根気についに病院側も折れ、退院の運びとなって現在に至る。

「ね、お父さんお母さん。お願いがあるんだけど」

なのはの声に、士郎は分かってると言わんばかりに笑みを浮かべる。桃子も同様だ。

「セイバーちゃんの事だろ?」

「勿論いいわよ」

「部屋をどうするかだな」

なのはの言葉を待たずして、二人はそう言って考えを巡らせる。驚いたのはセイバーだ。まさかこんなあっさりと結論を出されるとは思っていなかったからだ。

「ま、待ってください！貴方達はそれでいいのですか！？」

それは暗に、あんなものを見ても何も聞かないのかと言っていた。それを感じたのだろう。士郎は真剣な眼差しでセイバーを見る。

「確かに色々と聞きたい事はある。でも、それは君が話したくなったらで構わない」

「そうよ。不思議な光景だったけど、それが？貴方はなのはのためにああしてくれた。それに、大切なのはあれが何なのかって事じゃなくて――」

セイバーちゃんがなのはのお友達って事よ。そう言って、桃子はセイバーに微笑む。それに士郎も応じ、微笑みを向ける。なのはも微笑み、セイバーを見つめる。三人の笑顔に、セイバーは一瞬呆気に取られるが、何かを思い出したのか笑みを浮かべ、答えた。

「そうですか。ならば、貴方達の気持ちに感謝を……」

「そんな固い態度はなし。これから一緒に暮らすんだから。私、桃子よ」

「そうだな。俺は士郎。士郎で構わないよ」

二人の雰囲気にセイバーは面食らうが、士郎の名を聞いた時に軽い驚きを見せると、小さく呟く。

「何かの縁なのでしょうか……。よもやまた『シロウ』をアヴァロンが癒すとは……」

そんなセイバーに、三人は顔を見合わせる。どこか懐かしむような顔に遠い視線。そして、そこはかとない哀しみを湛えた雰囲気に、何か気になる事でも言ったのかと思ったからだ。

そんな三人に気付かず、セイバーはそうしてしばらく立ち尽くす。そんな彼女を現実に引き戻したのは、自分の体が訴える空腹の声だった。

恥ずかしがるセイバーに、笑いながらも早くお昼の支度をしないと、と歩き出す桃子。それに苦笑しながら同意する士郎となのは。

そうして歩き出す四人の顔に浮かぶは満面の笑み。仲良く歩く親子と、それを眺めて微笑む少女。誰が見ても、幸せそのものの光景がそこにはあった……。

おまけ

ただ沈黙のみが支配していた。呆気に取られる士郎と桃子に、苦笑いのなのは。そして……。

もくもくと食べ続けるセイバー。その勢いは止まる事を知らず、既にご飯は四杯目だったりする。

「――モモコ、御代わりを」

「え、ええ」

――まだ食べるのか！？

そんな心境で見つめる士郎に、もう開き直ったのか笑みさえ浮かべる桃子。ちなみに、なのはも士郎も既にセイバーの食事を見守っ

ている。
そして、桃子が茶碗を持ち、ジャーを開けて……動かなくなった。
どうしたのかと思うセイバー。だが、残りの二人には想像が出来た。

「ごめんなさい。もう、なくなっちゃって……」

夕食時と同じぐらい炊いたのに、と呟く桃子。それにセイバーは驚きのち照れの表情だ。士郎はそんなセイバーに笑みを浮かべ、なのはも笑う。

「これは、もう一つジャーを買った方がいいかしら？」

「そうだな。それにセイバーの服なんかも必要だし」

「じゃあ今度のお休みにみんなで買い物に行こう！お兄ちゃんやお姉ちゃんも一緒に！」

はしゃぐなのはに、笑みで応じる士郎と桃子。セイバーはそれを聞き、辞退しようとするが踏み止まる。なぜなら――。

「みんなでお出かけするの、楽しみだなぁ」

そんな風に笑うなのはを見たから。そして、その『みんな』に自分も入っている事を理解したから。

（それでは、友ではなく家族ですよ、なのは）

そんな事を思いながらも、セイバーの顔はどこから見ても嬉しそうだった……。

ーーー

とある一日（S&R）

「ライダーは聞いた？」

突然の忍の言葉に、紅茶を注ぐライダーの手が止まる。

「何をですか？」

「すずかが喧嘩の仲裁したって事」

忍の意外そうな表情に、ライダーは笑みを浮かべて応じる。そう、ライダーは知っていた。すずかが喧嘩を止めた事も、それがキッカケで友人を作った事も。昨夜、寝る前の他愛のない雑談の際、本人から聞かされたのだ。

だから、ライダーは知らないであろう忍に、取っておきの情報を教える事にした。

「ええ。それに友人が出来た事も」

「へえ、そうなんだ」

「アリサとナノハと言うらしいですよ」

その顛末を話していた時、すずかはこの上なく上機嫌だった。ライダーに何度も何度も語っては、嬉しそうに名前を呟いていたから。

そして、今日はその一人であるアリサの家へ遊びに行っている。

出掛ける際のすずかの笑顔は、ライダーにも分かる程に輝いていた。

ライダーの話に、忍は笑みを浮かべると、手にした本を閉じる。
そして、残っていた紅茶を飲み干し空を仰ぐ。

「仲良くしてるかしら？」

「スズカなら大丈夫でしょう」

即座に答えたライダーに忍は苦笑しながら、それもそうかと呟くのだった……。

月村家と騎乗兵のとある一日

帰宅したすずかは、夕食後にやや興奮気味にバニングス邸での事を話した。自宅に負けぬような邸宅だった事、ＳＰと呼ばれる人達がいた事、洋風の庭なのに、和服（作務衣）を着た小次郎と言う専属庭師がいた事等、話題は尽きなかった。

ライダー達はそれを嬉しそうに聞き、すずかの話に相槌を打つ。今度は自宅に呼びたいと言うすずかに、ノエル達が笑みを見せる。

「では、屋敷の大掃除をしなければいけませんね」

「後は庭の手入れも重点的に、ですね」

「ファリンはあまり張り切らぬ方がいいと思いますよ」

かえってドジを踏みますから。そう断言するライダーに、ファリン以外が笑う。言われたファリンは、拗ねた表情でライダーを睨む。それを見て忍が放った子供みたいとの一言で、ファリンが叫んだ。

「忍お嬢様ぁ～～！」

怒り心頭のファリンに、忍も謝るが笑っていてはしょうがない。ノエルが嗜めるがどこかノエルも楽しそうだ。ライダーはそんな光景を眺め、視線をすずかへ移す。

すずかも笑みを浮かべ、三人を見つめている。だが、ライダーの視線に気付いたのか、視線をライダーへと移した。

「どうかした？」

「いえ、賑やかだと思いまして……」

どこか懐かしそうに答えるライダー。その声に、すずかは答える。

「ライダーが来てからだよ？こんなに賑やかなのは」

すずかの言葉が意外だったのか、ライダーは驚いた顔ですずかを見つめた。それを微笑ましく思い、すずかは笑みを返す。

ライダーが来てから、月村家には笑いが絶えない。以前からファリンと忍がムードメーカーだったが、ライダーが来て以来、それが余計に際立っていた。ライダーの的確な意見や鋭い指摘に、二人がリアクションを返すからだ。それにノエルやすずかまで笑い、それが更なる笑いに繋がる。

今も、ファリンに詰め寄られて忍が困っているが、いつもなら仲裁役のノエルも、どこか楽しそうにそれに参加している。そんなやりとりを横目で見ながら、すずかは告げる。

「本当にライダーが来てくれてよかった」

ライダーがもし居なければ、すずかはアリサやなのはと友達になれなかった。
その友人を得るキッカケ。それは、クラスの一人がアリサの髪の色をからかった事に端を発した……。

クラスの自己紹介が終わり、担任の教師がいなくなった途端、一人の少年がアリサの髪を指差し、外人色と言い出した。無論、アリサはそれを無視していたが、あまりにもしつこいためについにアリサも我慢の限度を超えた。
その少年へ無言で近付き、勢い良く蹴り飛ばしたのだ。たまらず後ろへ倒れる少年に、追い討ちをかけるようにアリサは言った。

「男のクセにしつこい！自分が日系色だからって、外人外人うるさいのよ！！」

蹴られたショックで少年は呆然としていたが、自分が馬鹿にされた事は理解できたらしい。顔を真っ赤にして、アリサへ掴みかかろうとした。
だが、そんな少年を止めた者がいた。すずかである。

「ダメっ！気持ちは分かるけど、手を出したらいけないよ」

「そうだよ！それに、先に人を怒らせたのは君なんだから」

少年を諭すすずかに、同調する声。それがなのはだった。なのははすずかの前に立つと、少年にこう言った。

「自分が嫌な事は人にしちゃいけないの。でも……」

そこまで告げ、なのははアリサへ振り向く。その視線に、アリサは僅かに怯む。なのはは怒っていたからだ。

「嫌なら嫌って言わなきゃなの。言葉にしないと、何も伝わらないんだよ」

はっきりと言い切るなのはに、アリサは言葉がなかった。そして、何かを考えた後、バツが悪そうに少年へ顔を向ける。

「わ、悪かったわ。その、蹴って……ごめんなさい」

それを聞いて、すずかもなのはも笑みを浮かべる。少年も毒気を抜かれたのか、それに謝罪で応じた。そんな事があり、その後すずかは、なのはとアリサから少年を抑えた事を感心されたのだ。

それにすずかは照れながらも、お返しとばかりになのはとアリサを誉めた。自分の意見をはっきり告げたなのはと、素直に間違いを認めて謝ったアリサを。そんなやりとりを経て、三人はそれぞれの名前を再確認し、友人となった。

すずかは思う。あの時、少年を抑えなければ二人と友達になる事はなかったと。そして、あの時そう出来たのは、ライダーから勇気を貰ったから。何かを待つのではなく、自分で何かを起こす。その勇気をライダーからもらったから、動く事が出来たのだとすずかは思っていた。

そこにすずかを現実へ引き戻す声が響いた。

「ねぇライダー、ちょっと助けてよ！」

さすがに旗色が悪いと判断したのか、忍がライダーに助けを求めたのだ。それに、ライダーは口の端を歪めてこう言った。

「欲しい本があるのですが……」

どうでしょう？と言わんばかりの声であった。ライダーは、月村家で養われているが、メイドとして働いている扱いにもなっている。そのため、週に一度僅かだがお金を貰い、書店まで本を買いに行っている。

そのジャンルの雑多さに、すずかと忍も驚いたものだ。そして、今彼女が欲しがっているのは女性向けのファッション誌を始めとした三冊。なので、渡りに船とばかりに、ライダーはそう告げたのだ。

「い、いいわ。来週は二倍出す。だから――っ！」

助けて。その言葉を言う前に、ライダーがファリンを取り押さえていた。正確には、二倍のにの音辺りで動き出していた。あまりの事に、忍もノエルも、当のファリンも言葉がなかった。

ライダーは、ファリンの耳へ口を寄せると静かに囁きだす。

「ファリン、それぐらいでいいでしょう……」

「ら、ライダーお姉様……息が……」

「あまりシノブを困らせてはいけません。もう十分反省しています……」

「は、はい……」

「では――後片付けは私とノエルがやりますので、ファリンはお茶を淹れてください」

妖艶な雰囲気を一変させ、ライダーはそう言い放ち、食器を手に厨房へと消える。後に残されたファリンは、顔を真っ赤にして床に座り込んでいる。そしてノエルも後を追うように食器を手にして動き出し、すずかは呆然とそれを眺める。そして、呆気に取られている忍へ、ライダーが厨房から舞い戻り告げる。

「約束をお忘れなく」

それだけ告げ、再び厨房へと消えるライダー。それを呆然と見送るすずかと忍。ファリンは小さく「脈拍が……血圧が……」と呟いているが、その顔がどこか嬉しそうに見えるのはきっと気のせいだろう。そんなファリンが再起動したのは、ライダー達が食器を洗い終わった後だった……。

ファリンの淹れた紅茶を飲みながら、再び穏やかな雰囲気に包まれる月村家。それぞれの手には本があり、忍は工学関係、すずかは推理小説、ライダーが礼儀作法、ノエルは心理学、ファリンがドジをなくす百の方法であった。

元々月村姉妹は読書家だった。それにライダーが加わり、読書の輪が広がったのだ。忍はライダーへ、ライダーはすずかへ、すずかが忍へと本を薦めあう事が盛んになった結果、月村家全体が読書家になっていった。

ノエルはライダーのように感情溢れるヒトになるために、ファリ

ンは初めは三人の話についていくためだったが、最近は自分を変える系の本を読んでいる。

「ね、ライダーはどんなジャンルが好きなの？」

「ジャンル、ですか……？」

忍の問いかけに、ライダーは困ったように表情を曇らせる。ライダーにとって、好きなのは読書そのものであり、ジャンルにこだわり等ないのだが、最近特に読み漁っているものを思い出し、ライダーはそれを答える事にした。

「本屋さんがオススメするものです」

「は？」

「本のプロが読んだ方がいい、と宣伝されているものです」

まさかのライダーの返しに、忍は言葉を失う。それは聞いていたすずかとファリンも同じだ。

戸惑う三人に、ライダーはおかしな事を言ったでしょうか？と言わんばかりの顔をする。

そこへ、ノエルがピシャリと言った。

「ライダー、それはジャンルではなくコーナー名です」

ノエルの突っ込みに全員が頷く。ライダーはそれに、そこまで大差ないと思いますがと不思議顔。だが、ノエルが首でそれを否定。

そんな二人だが、すずかは知っている。よく二人が互いに薦めあうのが、部下のうまい操縦法等の本である事を。

そして、それを見てファリンが軽く凹んでいた事も。

「では、ノエルは何なのですか？」

「私は人間心理です」

「あ、私は恋愛小説です」

「私は……ま、ファリンと同じでいいわ」

「私はファンタジーかなぁ」

ノエルの言葉を皮切りに、次々と好きなジャンルを告げていく月村家。それを聞き、ライダーは何やら悩みながら問いかける。

「私も……何か絞った方がいいのでしょうか」

「いいんじゃない？別になくても」

あっけらかんと忍はそう告げた。彼女としては軽い雑談として聞いたのであって、ここまで大袈裟に捉えられるとは考えてなかったのだ。

だからこそ、忍はライダーに微笑みかける。

「だってライダーは、読書は好きなんでしょ？」

「……はい」

「なら、それでいいの。無理に話合わせようとしないで、ないならないって言ってくれればそれでいい」

こんなの他愛のない家族の会話よ。そう告げた忍に、ノエルとファリンも頷く。すずかもライダーに笑って頷く。

その言い方に、ライダーは心に迫るものを感じた。この月村家に来て一月弱。まだそれだけしか経っていないのに、自分を家族と言い切る忍達に言い様のない感情を抱いたのだ。

（これが感動と言うのですか……？ああ、涙が溢れそうとはこんな気持ちなのですね）

最後に泣いたのはいつだったか。そんな事を思いながら、ライダーは微笑む。その目に、微かに光るモノを浮かべて……。

――――――

は思っています。

とある一日（A&

リサに優しいのであった。

お嬢様と傾奇者のとある一日

門の前で立ち尽くす一人の少女。彼女、月村すずかは、生まれて初めて自宅以外の豪邸を見た。その横で自慢げに立つアリサだったが、彼女は知らない。自分が月村家に訪れた際、まったく同じ反応をし、すずかに同じ事をされる事を。

「ま、こんなとこで立ってるのもなんだし、早く行きましょ」

「そ、そうだね」

アリサについていきながら、すずかは辺りを見渡す。西洋風の庭は見慣れているが、それでも他人の家だとどこか違うように見受けられたからだ。だが、そんな中に完全に浮いている存在がいた。

それは、枝きりバサミを手に、肩にタオルをかけた作務衣姿の小次郎だった。そんな違和感全開の姿に、すずかは呆然と立ち尽くす。それに気付いたアリサが、視線の先を追い――その場から駆け出した。

「こんの、バカモノぉぉぉぉぉ！！」

叫びと共に繰り出された跳び蹴りを、小次郎は逃げるでもなく、上体をそらし空いている手で受け止める。跳び蹴りの状態で固定されるアリサ。足首を掴まれ、何とかしようとバタバタと暴れるが、小次郎に何かを言われ、大人しくなった。ただ、その顔を真っ赤にしていたが。

すずかはそれを見て、驚き苦笑する事しか出来なかった。

以下、そのやりとり。

「放しなさいよ！」

「それは出来ぬ」

「どうしてよ！？」

「服に土が着いてしまうのでな」

「いいから放せ！」

「暴れるでない。すかーとがめくれあがっておるぞ？」

「なっ――？！」

小次郎に静かに降ろされ、アリサはブツブツ文句を言いながらも、どこか恥ずかしそうにすずかの所へ戻ってくる。そんなアリサに、すずかは尋ねた。

あの人は誰なのかと。それにアリサはこう答えた。小次郎と言って、住み込みの専属庭師であると。そして、自分を丁寧に扱わない奴だとも言った。

「そのわりには、アリサちゃんと仲がいいんだね」

「べ、別にそこまでってワケじゃないけどね」

他に比べていいだけよ。そう答えて、アリサは急ぎ足で玄関へ向かって歩き出す。それはどう見ても照れ隠し。そんなアリサをすずかは小さく笑みを浮かべて追いかける。小次郎は、そんな二人を眺め、おもむろに植木の手入れを始めるのだった。

その後、すずかと色々な話をし、アリサがやっている習い事の一つにすずかも興味を持った事で、会話は更に盛り上がった。今度はなのはも一緒にと約束し、すずかが帰った時には、時計が六時を過ぎていた。

初めて同年代の、しかも同性と話した事はアリサにとって大きな出来事であった。興奮冷めやらぬ彼女は、夕食時にもすずかとの話をし、小次郎を呆れさせた。だが、それを顔に出さない辺りに小次郎の優しさがある。しかし……。

「それでね……」

「ありさ、手が止まっておるぞ」

食事が始まって既に五分が経つが、未だにアリサの食事は一品たりとも減っていない。さすがに小次郎もそれは見過ごせないのか、手にしたナイフとフォークでハンバーグを一口大に切断し、それをフォークに刺すと、アリサの口の前へ持って行く。その見事な所作に感心するアリサだったが、それもそこまで。

「ほれ」

まるで餌を与えるようなその言い方にアリサは青筋を浮かべるが、

ここで怒ってはまた小次郎を喜ばせるだけだと思い、黙って口を開ける。
入れられたハンバーグからは、濃厚なソースの味と肉の旨味が口一杯に広がり、それがアリサを笑顔にする。
それを眺め、小次郎も同じ様にハンバーグを口にする。

「肉を食すのは些か慣れぬが、これは美味よな」

「でしょ？今度はステーキやトロットロに煮込んだビーフシチューを食べさせてあげるわ」

驚くような小次郎に、アリサはそう言った。小次郎が未だに慣れない事の一つが食事。菜食中心だった時代の小次郎からしてみれば、肉を食べる事などほとんどなく、しかもそれが洋風になれば更に珍しいものとなる。
そのため、アリサは小次郎にもっと驚いてもらおうと、シェフ達に頼んで様々な料理を出させている。おかげで、食事は小次郎のこの上ない楽しみとなっていた。
……どこかの騎士王と違い、味ではなく、食材や見た目などの雅さに重きを置いているが。

そんな小次郎は、アリサの挙げた料理名に心底不思議そうな顔をしていた。それがアリサには堪らなく優越感を感じさせる。何しろ、小次郎は基本アリサを小馬鹿にしているので、こういう時でなければ小次郎の上に立てないからだ。

「すてーきとは何だ？」

「牛肉を厚切りにして炭火で焼くものよ。専用のたれをかけたり、塩をかけたりして食べるの」

「ほう、単純よな」

「でも、お肉の味が純粋に楽しめるわ」

「それも然り。では、びーふ……？」

「ビーフシチューよ、シチュー。そうね……」

自慢げに語ろうとして、アリサはふと思った。考えてみれば、シチューを説明するなんてした事がないと。シチューはシチュー。そう片付けてしまうのが普通だから。

そう、それはアリサが小次郎に出会ってから、常にしてきた事だった。世の中の事を説明する時、自分が如何に『常識』と言うモノに縛られているのかを実感するのだ。

これはこういうものだから、こうなんだ。その一言で深く考えない。どうしてそうなのか？誰が決め、なぜそれを誰も不満に思わないのか？正しいとか間違っているなんて、絶対はないはずなのに。そこまで考えた所で、現実に引き戻された。

「……如何した、ありさ」

小次郎の声だった。そこに若干だが戸惑いの色が見える。

「別に……少し思う事があっただけよ」

「左様か。で、しちゅーと言うのは如何ようなものか」

アリサの声に感じるものがあったのか、小次郎は話題を変える意味も込めてそう聞いた。

「ま、簡単に言えば牛肉と野菜の煮込み料理よ」

詳しくはシェフに聞きなさい。そうアリサは言って締めくくった。その顔はいつものアリサであった。

それに小次郎は笑みを浮かべ、目の前のハンバーグへとフォークを伸ばしてため息を吐く。

「ありさが考えに詰まったせいで、せっかくのはんばーぐが冷めてきておる。急いで食べねばならぬか」

「何よ。あんたが説明させたんじゃない！」

「む、ぽたーじゅに膜が出来始めたか」

「聞け！」

「おお、この人参は菓子であるか。野菜で甘味とは恐れ入る」

「無視するなぁぁぁっ！！」

まさに虎の咆哮。しかし、既に小次郎も慣れたもので、アリサが叫んだ瞬間耳を塞いでいる。

完全に遊ばれている事を理解したアリサは、それならとフォークを手にし、小次郎のハンバーグを奪った。

一瞬、何が起きたか分からぬ顔をした小次郎だったが、アリサが自分の食事を盗った事に気付き、微かに笑った。

「……手癖の悪い事よ」

「ふんっ。……アタシを無視するからよ」

ハムッと盗ったハンバーグを口に入れ、美味しいと言わんばかりに笑顔になるアリサ。そんな彼女を、小次郎は眺めて呟いた。

――――やはり、女子は笑顔が一番よ。

そんな小次郎の呟きには気付かず、アリサは食事を続ける。その顔に満面の笑みを浮かべながら……。

おまけ

「で、これが時間」

アリサが小次郎に見せているのは携帯電話。寝る前の僅かな時間、毎晩行われるアリサの現代教室。本日の教材は文明の利器。

「なるほどな。……科学、と言うのは凄まじいものよ」

手渡された携帯をしげしげと見つめる小次郎。先程までアリサに色々と説明されたが、その機能を完全に理解する事は出来ないようだ。

そんな小次郎に、アリサは苦笑気味に教えた。最近はアタシ達でも完全に使いこなすのは難しいから、と。

その言葉に小次郎は驚き、その表情のままこう問いかけた。

「ならば、なぜこのような物を作るのだ？」

道具は使いこなせてこその道具であろう。小次郎はそう言った。その反論にアリサは耳が痛かった。増えていく機能、ぶ厚くなる説明書、そして起きる事故。それらは全て小次郎の言葉で言えば片付けられる。

使いこなせないものを使うな。不必要なものを作るな。それは、自給自足で生き、創意工夫で苦労を乗り越えていた時代の小次郎だからこその台詞。

あれもこれもではいつか破綻する。本当に必要なものを作り、使い易いものを目指す。それがどれだけ正しいかは、アリサにも分かる。分かるのだが……。

「ま、あれよ。付加価値がないと売れない世の中だから」

そう告げるアリサに、小次郎は妙な世の中になったものよ、と呆れ顔。

そんな風に、二人の夜は更けて行くのだった……。

――

すずか編の裏と言うかその頃のアリサ達というか。

すずかは小次郎がサーヴァントだとは知りませんし、ライダーも気付けません（すずかが苗字を聞いてない&日本人名過ぎる）

アリサもすずかからライダーの事は聞いていますが、今は共通の話題で頭一杯で小次郎に話していません。

本格的に彼らが出会うもしくは知るのは、もうしばらく後になります。

とある一日（N&

差し出されたセイバーの手を掴み、なのはは立ち上がる。今日は日曜日。学校は休みで、高町家は全員でお出かけする事になっていた。

本当は、つい先日出来た友人の誘いを受けたかったが、家族全員で行動するのは中々出来ない事もあり、断らざるを得なかったのだ。

（セイバーに教えてもらったもん。言わなきゃ何も伝わらないって）

あの日、士郎が退院した日の夜。セイバーは高町家の全員にそう告げた。子供だからとか大人だからとか関係なく、家族として思っている事を正しく伝えるべきだと。誰もなのはの悩みに気付けなかったのは、そこにあるのだと、セイバーは言い切った。

その言葉に、なのは達は何も言えなかった。セイバーが責めているのではなく、優しさを正しく向けてほしいと純粋に願っている事を誰もが感じ取っていたからだ。セイバーは思う。この家族は優しいから、自分の苦しみを他者に知られまいとして、余計苦しめる結果になってしまったのだと。

それをセイバーはもうさせたくなかった。他者を思いやる事は大事だが、そのために自分を犠牲にする事だけはさせたくない。昔の自分の姿を、幼いなのはに見てしまったから。他者のために、望まれる姿であろうとしていた自分と、同じ境遇にさせないために。

（あれで、みんな変わったよね）

士郎と桃子は以前にも増して休みを大事にするようになった。それは、家族との時間を大切にしたいから。恭也と美由希は鍛錬を厳しくした。それは恭也の期待に、美由希が応えたいと願ったから。なのはは思った事を隠さず伝えるようにした。ただし、セイバー優先で。友達であり、姉であり、他人であるセイバーは、一番客観的

に意見を述べてくれるから。

こうして、高町家はより絆を強める事になった。それが、後の悲劇を回避する事になるとは知らずに……。

高町家と騎士王のとある一日

「ただいま～！」

「只今帰りました」

帰路に着いた二人は家に着くと、まず玄関からそう声を掛ける。

「お帰り～！もうご飯だからお父さん達も呼んで来て～！」

すると、桃子の声が返ってくる。これがいつもの日常。

『了解っ！』

どこか凛々しく、だけど可愛く答えるなのはに、真剣そのもののセイバー。そして、二人は庭にある道場へ向かう。そこからは、時折固い物がぶつかり合う音が聞こえてくる。

なるべく静かに戸を開けるなのは。その視線の先では、恭也と美由希が睨み合っている。

その邪魔をしないように、なのはは見守っている士郎へと近付いていく。セイバーもそれについていく形で歩き出す。

「お父さん」

「ん？もうそんな時間か」

なのはが来た事で、全てを察し士郎は呟く。そして、膠着しそうな二人に向かって告げた。

「後三分だ。引き分けなら今日のセイバーの買い食い代は二人持ちだな」

『っ？！』

その声に二人が動いた。一瞬だが、セイバーが目を輝かせたのを見たからだ。沈着冷静な雰囲気を持つセイバーだが、食の事になると別人のようになる。それは高町家全員の認識だ。セイバー泣いても飯やるな。それが高町家の教訓。それが出来なければ、彼女に食事を与えてはならない。同情すれば、必ず自分（の財政）に返ってくるのだ（既に、高町夫妻は経験済み）

神速でぶつかり合う二人。それをキョロキョロと視線で追うなのはと、静かに見つめる士郎とセイバー。無論、なのはには見えていないが、それでも必死に追いかけようとする所が可愛いものだ。そんななのはと違い、セイバーはそれを一つも見逃さぬようにしている。

御神の剣士は、彼女にとってこの上ない相手なのだ。以前戦った小次郎の剣。アレと似たものを感じていた事と、魔力も使わずこれ程の動きをしてくるのだ。その事が持つ意味は大きい。

既に、セイバー自身恭也や士郎と戦っている。未だに魔力を使わない状態では、セイバーも容易に勝ち越す事が出来ない。

「む…」

「決まりましたね」

恭也の大振りを好機と取った美由希だったが、それが恭也の誘いだった。だが、美由希もそれは覚悟の上であり、迫り来る小太刀を敢えて流さず受ける事で勢いを殺し、己の小太刀を叩き込んだ。

しかし、それすら読んでいた恭也は打ち込まれた一撃を耐え切り、再度残りの小太刀で斬りつけた。

肩で息をする恭也と美由希。それを見てどこか残念そうなセイバー。なのはは隣の士郎から、一連の流れを教えてもらっていた。

「っ――お前――はぁ――持ちだ――っからな」

「わかっ――はぁ――はぁ――てるよ」

どこか嬉しさを滲ませる恭也と、悔しさと寂寥感が漂う美由希。

（これで、今月のお小遣いパー……トホホ）

そんな事を思いつつ、美由希は道場の後片付けを始める。見ればなのはとセイバーが道場から出て行く所だった。去り行くセイバーの背中を眺めて美由希は願う。どうか、今日は僅かでも控えてくれますように、と。

高町家の食事は、ある意味スゴイ。料理や素材ではなく、量がスゴイ。ご飯の量もさる事ながら、オカズの量も多いのだ。

原因は、育ち盛りの子供達ではない。一年以上前からいる家族同然の少女であった。

「モモコ、御代わりを」

「は～い」

もう誰も何も思わない。まだ食事が始まって五分と経過してないとしても。それが当然なのだ。これが十分なら話は別だ。

大丈夫か、具合でも悪いのか、病気かもしれないと心配されるだろう。そういうものなのだ、セイバーという少女は。

「なのは、今日は何を買うんだ」

「えっとね……」

「あ、父さん醤油取って」

「ああ、ほら」

「シロウ殿、私にはソースを。目玉焼きにはかかせない」

「セイバー。はい、御代わり」

賑やかな食卓。ちなみに、セイバーは全員から呼び捨てを望んだ。それに応えてセイバーと皆は呼んでいる。セイバーも同じく呼び捨てなのだが、士郎だけは殿付きとなっている。

セイバー曰く「家長だから」との事だが、深い理由があるのだろうと桃子と士郎は考えている。

常人が見たら驚くような量の食事も、セイバーの前では普通の食事。二つあった御釜のご飯も、綺麗になくなり、テーブルの上のオカズも残っているものは何もない。食後のお茶を啜り、セイバーは静かに告げた。

「ごちそうさまです」

「お粗末様」

既に食べ終わっているなのは達も、それを聞いて片付けに動き出す。

それぞれが各々の食器を持って行き、それを桃子が洗う。洗われた食器を美由希が拭いて元の場所へ。恭也はテーブルを拭き、なのははその手伝い。士郎はセイバーとサッカー評論。

いつもは仕事や学校などで慌しい朝だが、たまの休日はこんな風にゆったりと時間を過ごす。出掛けるのはお店が開き出す十時からなので、それまでは自由時間。

「ここでラインを上げれば……」

「いや、でもここからクロスに振る方がいいんじゃないか？」

サッカーチームの監督をしている士郎が、セイバーとサッカー談議をするようになったのは半年前。欠員が出た際、セイバーに代理を頼んだ事がキッカケだった。見事な運動能力を如何なく発揮したセイバーは、永久出場停止という名誉の処罰を受けた。でも、そのプレーには多くの人間が賛辞を贈ったが。

テーブルに目をやれば、恭也となのはが掃除を終えて、雑談していた。

「学校は楽しいか」

「うん。友達も出来たし、お勉強も楽しいよ」

満面の笑みで答えるなのはを見つめ、頭を撫でながら恭也は思い出す。あの頃、どこか自分の意見を述べる事に臆病だったなのはに、恭也は気付いてやれなかった。それを悔いる自分を、なのははこう言って許してくれた。

自分が淋しいと言わなかったからだと。悪いのは恭也ではなく、本音を言い出せなかった自分だから。そう告げたなのはに、恭也は思った。

強くなったと。幼いながらも、セイバーという友を得て、妹は成長したのだな。そう感じた事を。

そして、キッチンからセイバー達の様子を美由希と桃子が見ていた。

「しっかしさ」

「んっ？」

「セイバーもすっかり『高町』だよね」

「そうね。まさに、高町セイバーね」

食器をしまいながら笑う美由希と桃子。実際、セイバーを養子にしたいと桃子は提案した事があったのだが、セイバーはそれをやんわりと断った。その時、セイバーに言われた一言が、今も桃子の心に残っている。

セイバーはこう言った。桃子の気持ちは嬉しいが、自分にも親はいた。だから、貴方を親と呼ぶ事が出来ない。でも、許されるならもう一人の母と思って桃子に接してもいいだろうかと。

その申し出に桃子は喜んでと応じ、それまではなのはの母という立場で応対していたセイバーが、急にどこか甘えるようになってくれたと、桃子ははしゃいだものだ。

もっとも、その違いは桃子にしか感じられないものであるが。

概ね、高町家は平和。この日もそうだった。郊外に出来た大型ショッピングセンターに行ったまでは……。

「じゃあ、お昼にここで合流って事で」

桃子の提案に頷く一同。まずは女性と男性に別れて散策し、お昼を食べてからそれぞれに別れて行動。最後に食料品を買って帰宅。そういう手筈になっていた。ちなみに集合場所は、二階にあるフードコート。先程から、セイバーの視線がせわしなく動いている。

解散、の一声で動き出す高町家。セイバーはフードコートに未練がましい視線を送りながら、美由希に引きずられている。

「後でまた来るから」

「それはそうですが……」

桃子の言葉にセイバーは言葉を濁す。そんなセイバーになのはが告げる。

「あんまり駄々こねると、おやつ抜きなの」

それを告げられたセイバーの顔は、驚愕の一言に尽きた。それだけではない。掴んでいた美由希の手を振りほどき、心からの許しを得るかのように桃子に縋り付いた。その光景に、否応なく周囲の視線が集まる。

「ちょ、ちょっとセイバー……」

「ごめんなさいごめんなさい。もう言いませんので許してください」

周りの視線などお構いなしに懇願するセイバーを眺め、美由希はなのはへ呆れた視線を向ける。

「どうすんの、なのは……これ」

「にゃ、にゃはは……どうしよう……」

そんな二人の目の前で、セイバーの懇願は続くのだった……。

一方、男性陣はというと……。

「これなんかどうだ？」

「いや、これは少し派手じゃないか？」

なのはのための小物を見ていた。初めはファンシーな雰囲気にたじろいた二人だったが、なのはの入学祝いと友人が出来た事を兼ねて、プレゼントするものを選ぶために突撃したのだ。

……まあ、選び出したらそんな事を忘れてしまった二人ではあるが。

「髪飾り……？」

「お、それはいいな」

恭也が目をつけたのは、リボン等の髪飾りだった。様々な色や形の物を見ながら、二人は悩む。ちなみに、成人男性がファンシーショップで真剣に物を見定めるのは、かなりシュールである。周囲の女性が先程からじっと二人を見つめているし。

結局、二人は淡いピンクのリボンを買った。これをなのはは大変気に入り、常に身に着けるようになるのだが、ある時から身に着ける事がなくなる。その理由は、また別の話。

お昼の集合までに、女性陣が見ていたのは衣服や小物類。男性陣はスポーツ用品や日用品。それらの話をしつつ、フードコートを歩く高町家。中でもセイバーは、目にする物全てに反応を示し、そのたびになのはが説明していた。

それを見ながら、美由希は気が気でなかった。セイバーが食べる物は、全部自分の払いになるのだから。

「それで、どうする？」

「せっかくだ。皆好き勝手に店を選ぼうじゃないか」

士郎の言葉に異議はなく、それぞれが思い思いの物を頼みに行く。

ただし、セイバーだけは美由希の後をついていったが。

テーブルに並ぶ料理の数々。士郎は海鮮丼、桃子はドーナツが三つ（チョコ・カスタード・プレーン）にパイ（アップル・アーモンド）が二つ、それにジャワティ、恭也は盛りそば（天麩羅付）、美由希はカルボナーラ、なのははオムハヤシ、そして……。

「す、すごいねセイバー」

「ええ、色々あって迷いましたが、これだけにしました」

セイバーの前にあるのは、ナポリタンに石焼ビビンバ、それに石狩汁という体育会系もびっくりのメニューだった。ちなみに回った店で軽く五分はメニューを凝視している。

「……大丈夫か？」

「うん。……意外と少なくすんだ」

バランスを考えましたと語るセイバーの横で、美由希はがっくりと項垂れていた。それに心で手を合わせる恭也。

そんな様子を眺め、なのはは呟いた。

「まだおやつを買ってないから、問題はこれからなの」

その呟きに、美由希が顔を勢い良く上げ、セイバーを見る。その視線に気付き、セイバーが美由希を見返した。

美由希の視線に含まれたものに、セイバーは首を傾げた。

「どうしました？」

「ねぇセイバー……これで満足だよね？」

お願いだからそう言って。そんな想いを込めた問いかけに、セイバーは笑みを浮かべて答える。

「何を言っているのですミユキ。後は甘味を買わねばなりません。一階にたい焼きが売っていたので、それを買わねば」

嬉しそうにそう返し、スパゲッティを頬張るセイバー。その言葉に完全に打ちのめされる美由希。そして、それを同情の眼差しで見つめるなのは達。こうして、お昼は過ぎていった……。

お昼を食べ、自由行動になったのだが、なぜか二人組になってしまうのが高町家。士郎と桃子、恭也と美由希、なのはとセイバー。話し合ったわけでもないのに、そうなってしまうのは仲が良いからなのか。ともあれ、三組はそれぞれに歩き出す。

「ね、セイバーはどこに行きたいの？」

「特にありませんよ」

「え～っ、つまんないの」

「では、なのはの行きたい所に」

そう笑みと共に言われては、なのはも黙らざるをえない。結局、三階にあるアミューズメントコーナーへ向かった。

様々な機械が並び、雑多な音を響かせるそこは、セイバーにとっては初体験の連続だった。

ＵＦＯキャッチャーで苦戦し、クイズゲームに唸り、レースゲームに興奮し、メダルゲームで大勝した。

そんなセイバーとなのはも一緒になって楽しんでいた。一番二人が気に入ったのは景品のウサギとライオンのヌイグルミ。

セイバーはライオンが欲しかったのだが、中々取れず、なのはが何とか取ったのだ。その際、手前のウサギも一緒に落ちたのだが……。

「これはなのはに」

「ふぇ？」

「お礼です。私には、これで十分ですから」

今日の思い出に、とセイバーがなのはに手渡した。しばらくそのウサギを眺めていたなのはだったが、言われた事を理解したのだろう。

満面の笑みでそれを抱きしめ、感謝の気持ちをなのはも告げた。

「私こそありがとう！セイバー！」

その後、再び合流した高町家は、食料品の買出しを終えて（勿論、セイバーは帰り際にたい焼きとみたらし団子をＧＥＴ）帰路に着い

た。

家に着いた時には、既に日が暮れていて、すぐに夕食の支度となったのだが、珍しく桃子の手伝いをセイバーが買って出た。

それは、セイバーなりの感謝の気持ち。何も話さぬ自分を受け入れ、家族同然に良くしてもらい、今日もまた思い出をくれた事に対する精一杯の恩返し。

「さ、まずは何をすればいいですかモモコ」

「そうね……じゃあまず」

――――手を洗って来て。

その言葉にセイバー以外の笑いが起こり、セイバーは恥ずかしそうに手を洗いに行く。その途中でふと思う。

（ああ、これが家庭なのですね。シロウ達とはまたどこか違う暖かさを感じます）

でも、とセイバーは呟く。まだ私は、あの温もりが恋しいのです。そう呟きながら、セイバーは誓う。いつか全てを話して、キチンと現在と向き合おうと。この暖かさを愛しいと思っているから。だから、必ず機会が来れば明かす。その想いを、強く心に誓って……。

――――――

リボンの登場。何のためのものかは、皆さんのご想像通りです。

そのためだけに書いたわけではないですが、肝心なのはそこだったりします。

すずか、アリサ、なのはと今回は同じ時間軸での話でしたが、どうだったでしょうか？

とある一日（H&

（周囲に人はなし。いるのは……）

そう考えながら周囲をごく自然に窺うアーチャー。そこにいるのは――――。

（いつもの猫、か）

この家で暮らすようになってから、アーチャーがよく見かける猫がそこにはいた。初めは魔力を感じたので使い魔かとも考えたが、この世界に魔術師がいない事は把握したため、その可能性を無くした。今は、偶然魔力を持ってしまった特殊猫として接している。

「またお前か」

可愛らしい声で鳴く猫。その近くまで近付き、ポケットに忍ばせてある小魚を取り出す。

「ほら」

手に乗せ、それを差し出すと、猫は嬉しそうに食べ始める。それを眺め、アーチャーは思う。

（ここまでなるのに、苦労したものだ）

最初は視線が合っただけで逃げられ、次は近付こうとして逃げられ、三度目は警戒されながらも、小魚を与えて現在に至る。

はやてがこの猫を飼いたいと言い出したのが、そもそもの原因。アーチャーが二度目に逃げられた際の話をした所、はやてが是非飼いたいと言い出したのだ。

当然アーチャーは止めた。野良猫のようだし、人に深い警戒心を持っているから無理だと。それでも、はやては退かなかった。結局、アーチャーが色々試して、それでだめなら諦めると約束させたのだが……。

（まったく、こうもうまくいくとは思わなかったな）

三度目の際、試しに声を掛けてみたのだ。通じる通じないはともかく、動物に敵意がない事を表すにはそういうのも効果があると知っていたからだ。そして、小魚を与える事に成功し、アーチャーがそれを無表情ではやてに伝えると、はやては満面の笑みでガッツポーズしてこう言った。

「よっしゃ！首輪と名前考えな！」

「気が早い」

手に乗せた小魚が無くなったのを見て、アーチャーは手を引っ込めた。猫は前足で顔を掻いている。それを見て、アーチャーは笑う。もしかしたら、この猫も優しさに飢えているのかもしれないと。

夜天の主と弓兵のとある一日

あの後、猫はまたどこかに行ってしまった。だが、去り際にアーチャーを見ていたので、おそらく明日も来るだろうとアーチャーは踏んでいた。

「アーチャー、ちょう来て～」

「分かった。すぐ行く」

リビングからのはやての声に、アーチャーは空の洗濯籠を手に家の中へと戻る。

すると、そこには鉛筆を手に白紙と向き合うはやての姿があった。その紙には、何やら文字が書かれている。

「どうした？」

「これなんやけど……」

そう言ってはやてが見せたのは、猫の名前らしきものが書き連ねられたチラシの裏。みけ、たま、しゃむ、ぽち等様々だ。

それを認識し、アーチャーはこめかみを押さえた。

「まさかとは思うが、これは「ねこの名前や！」……だろうな」

予感的中とばかりに更に苦悩を深めるアーチャー。それを見ながら。不思議そうに首を傾げるはやて。

アーチャーは告げる。懐き始めてはいるが、まだまだ飼うのは早いと。それにはやては反論する。飼う事になってからでは遅いと。

そんな討論をしばらくし、結局折れるのはアーチャーだった。

「……致し方ないが、名前を決めるのは協力しよう。だが、首輪やトイレ等の準備はダメだ」

「ええやん。ここまできたら全部「それでは君の思い通りだ」……ケチ」

口を尖らせ、アーチャーを見つめるはやて。それを気にも留めず、アーチャーは洗濯籠を手に動き出す。今日の予定は買い物と図書館への本の返却となっている。

はやての部屋に入り、目当ての本を手に取ろうとした時、アーチャーはある本に目を奪われた。

（何なのだ、この本は……？）

それは鎖で縛られていて、開く事が出来ないようになっている。だが、その本から感じる魔力はどこか不気味ささえ漂わせている。

「どないした？」

アーチャーが中々戻ってこないので、はやてが様子を見に現れた。それを幸いとアーチャーは件の本を手に取り尋ねた。

この本は何だ、と。はやてはどこか納得した表情で答える。

よくは知らないが、物心ついた時から家にあり、一度も開いた事がない事を。そして、妙な愛着があり、捨てずに取ってあるとも。

それを聞き、アーチャーは密かにある事を試みる。

「解析（トレース）、開始（オン）」

だがその瞬間、彼に本能的な『何か』が告げる。コレは危ない。手を引け、と。

「っ？！」

「アーチャー？」

思わず手を引っ込めてしまうアーチャー。それをどこか不思議そ

うに見つめるはやて。その時のアーチャーの顔は、恐怖に歪んでいたのだ。

一方のアーチャーは、ある確信をする。未だ分からぬ監視者。その目的はこの本だと。

それを確かめる術はない。しかし、アーチャーは迷わない。少しでも可能性があるなら、徹底的に。それが、彼のやり方だ。

「はやて、この本を私に預けてくれないか？」

「ええけど、何で？」

「何、少し気になってね。それに、見た目もある。君には似つかわしくない」

そう言って、アーチャーは鎖で縛られた本を手に自室へと向かう。使われていない部屋を掃除し、その一室をアーチャーの部屋としてはやてが使わせているのだ。

手にした本を棚に入れ、それを外から容易に見える位置に置く。そして、気付かれないようにトラップを仕掛け、念のために簡易結界を敷き、準備を終える。

アーチャーは、監視者の目的を明確にするためにこの罠を仕掛けた。もし、この本の入手が目的なら、必ずここに侵入する。だが、それ以外の目的ならば、目立つ動きは起こさない。まずは、相手の目的と実力を知る必要がある。そのための罠、そのための結界。

「な～、ほんまにどうしたんや」

「別に何でもない。さ、そろそろ出掛けるぞ。まずは図書館からだ」

いつもの顔に戻し、アーチャーは車椅子を押し始める。それにはやては何か言いたそうだったが、黙る事にした。アーチャーの表情が、どこか怖かったからだ。

（一体、何があるんやろ、あの本に）

そのはやての疑問に答えが出るのは、ここからかなりの時間が必要だった。

「今日は何にする？」

「そうだな……。む、鳥が安い。…チキンカレーでどうだ？」

「ええな、ならわたしが野菜の皮むきするわ」

「頼む。後はサラダでも作るか……」

スーパーのカゴを抱えるはやてと、車椅子を押すアーチャー。その姿はこのスーパーで知らぬ者はいない程の有名人であった。

何しろ、その容姿が目立つし、更にはやてが車椅子と来ている。事情を聞いた人達は、皆揃って大変だねぇ～、頑張るんだよと言って応援してくれていた。

はやての人見知りしない性格と、アーチャーの主夫ぶりもそれに拍車をかけ、ご近所で知らぬ者はいない有名兄妹（となっている）なのだ。

アーチャーの料理を食べてから、はやては急に自立心が芽生えたのか、アーチャーから家事を教わりだした。車椅子なので危険だと

アーチャーは言ったのだが、はやてはそれを承知で頼み込んだ。現在、はやてはもっぱらアーチャーの手伝いをしながら、炊事や掃除を教わっている。

「な、それわたしが作る」

元気良く手を挙げるはやてに、アーチャーは笑みを浮かべる。

「ほう……サラダとは言え大変だぞ？」

「ふふん。わたしやって、いつまでも手伝いだけやないって教えたる」

アーチャーの言葉に自信たっぷりに返すはやて。それを聞き、アーチャーは笑みを深める。

「ならば任せよう。マカロニサラダを、な」

「な、なんやって～～っ！？」

「おや？どうしたはやて。先程までの自信はどこへ行った？」

皮肉屋スマイルではやてを見つめるアーチャー。それに、はやては悔しそうな視線を向ける。だが、それも少しすると一転、同じような笑みを浮かべてこう言った。

「ならアーチャー、お手伝いたのむな。わたしはまず野菜の皮むきあるから」

「なっ……」

「任せるって言うたな？せやからサラダに関してはわたしが指示出す側や」

その台詞に、アーチャーは嫌な既視感を覚える。何かこの論理の仕方は覚えがあると記憶が訴えるが、同時に本能が思い出すなと叫んでいる。そして、その言いようのない不安は、とどめのはやての言葉で的中する。

「あれ？どないしたアーチャー。さっきまでの余裕はどこ行った？」

そうにっこりと微笑むはやてに、アーチャーはあかいあくまの姿を重ね、首を振る。そんな事はあるはずないと、強く強く言い聞かせるように。

開きかかる記憶に蓋をし、彼は今までの会話を忘れる事にして、買い物へと思いを移す。そんなアーチャーを、楽しそうにはやては見つめていた……。

楽しくも騒がしい食事を終え、二人は後片付けをしていた。今日のカレーは美味しかったとはやてが言えば、アーチャーがサラダはまだまだと返す。それにむくれながらも、食器を洗うはやて。そんな彼女を、さり気なく気遣いアーチャーは次の食器も手元に差し出す。

たった二人の家族。だが、不思議と淋しくはない。それはアーチャーがいつも傍にいるから。はやてが何かをする時、アーチャーは必ず見てくれている。手を貸すのではなく、見守る。はやてが言い出さない限り、アーチャーは手を出さない。

それが優しさだと、はやては知っている。なぜなら、はやてが危

険に晒された時は、すぐさまやってきて助けてくれるのだ。

「明日の朝はカレーやな」

「ふ、一晩寝かせた私のカレーは驚くぞ」

「お～、なら驚かんかったら罰金百万円や」

「どうしてそうなる」

そんな会話をしながら、はやては思う。こんな時間がずっと続きますように、と。

強く、強く、心から願いながら……。

――――――

とある一日（F&L）

額から滝のような汗を流し、フェイトは目の前の相手を見つめる。
まだ三分も経過していない。にも関わらず、ランサーはフェイト達三人を圧倒していた。
初めにアルフが襲い掛かった。それを槍で一蹴、その隙を突いてリニスが幾重にもバインドをかけたが、それも三十秒と持たずに消され、まるで計っていたかのように、飛び掛っていたフェイトとリニスを蹴散らした。離れては槍で、近付けば体術で。魔法を放ってもフォトンランサーではまるで効果なく、それにまず当たらない。
そんな絶望じみた状況でも、フェイトは諦めなかった。彼女には、切り札とも呼べる魔法があったから。

【アルフ、リニス、少しだけ時間を稼いで】

【いいけど、何する気だい？】

【試してみたいものがあるの】

フェイトの指すものが分かったのか、リニスが若干上擦った声で叫ぶ。

【まさかっ！？ダメですフェイト。それはっ！！】

そんな制止の声を振り切り、フェイトは目を閉じ、手にしたデバイスを掲げて何かの詠唱を始めた。
それにランサーは面白そうに口元を歪め、槍を地面に突き立てる。
その行動に、アルフとリニスの表情が驚きに変わる。

「何するかしらねえが、面白ぇ。見せてみろ、フェイトォ！！」

咆哮。それをまるで意にも介さず、フェイトは詠唱を続ける。それは、今の彼女では到底出来ない大魔法。

フォトンランサー・ファランクスシフト。彼女の使える魔法でも最大の威力を誇るものだが、使用条件があった。

それは、万全の状態である事。無論、今の彼女が万全であろうはずがない。身に纏ったバリアジャケットは傷付き、魔力も三分の一程消費している。

『フェイトっ！？』

詠唱を続けるフェイトが、一瞬よろめく。それを支えようと動くアルフとリニスだったが、それが叶う事はなかった。ランサーの視線がそれを踏み止まらせたからだ。手を出すな。そう告げる眼差しで二人を睨みつけるランサー。その気迫に、二人は微動だに出来ない。

そんな中、フェイトは何とか詠唱を終え、その名を告げる。

「フォトンランサー・ファランクスシフト……ファイア！」

それは雷光の雨。ランサーを撃ち抜かんと殺到するプラズマランサーの群れ。それを、フェイトは必死に見据えていた。

やがて、舞い上がった煙が晴れて行き、ゆらりと人影が現れた時、フェイトは絶望した。全身に傷を負っていたなら良かった。せめてかすり傷でもあれば、フェイトはまだ希望を持てただろう。だが、現れたランサーは無傷だった。その手にした槍を振り、フェイトを見つめて――――。

「やるじゃねえか」

笑った。どこか嬉しそうに、でも悔しそうに。

「え……？」

困惑するフェイトに、同じようなアルフ。ただ、リニスはランサーの表情の意味を悟った。

（槍を使ったから……ですね）

「俺は避け切るつもりだったが、一発だけかすりそうになったもんでな」

槍を肩に担ぎ直し、苦笑い。それでフェイトも理解したのか、その顔に喜びが浮かんでいた。

「じゃ、じゃあ……」

「おう。合格にしてやらぁ」

『やったぁ～！』

からからと笑うランサー。よほど嬉しかったのか、アルフはフェイトを抱き上げながら喜んでいる。フェイトも笑顔を浮かべている。その光景を横目に、リニスはゆっくりランサーへ近付く。それに気付き、ランサーはいつもの笑みを浮かべた。

「何だ？」

「優しいですね」

そのリニスの言葉に、ランサーは驚きもせず答えた。

「へ、そんなんじゃねえよ」

そう答えるランサーはどこか楽しそうだ。リニスはそんなランサーに、自然と笑みを浮かべる。今回の戦いの意味。それは、フェイト達がランサーに戦い方を教えてもらえるかどうか。無論、ランサーは初めからそのつもりではあったが、リニスがそれに待ったをかけた。

出来れば、フェイト達の実力を知ってからにしてほしいと。

結果として、合格になったが、本来はランサーに一撃当てれば合格となっていた。にも関わらず、ランサーは当てていないフェイト達を合格させた。

ランサーは語る。最初から、合格させるつもりではあった。だが、それは自分達の全力が通じない相手がいると教えてからだったと。その意味で、あの魔法は丁度良かったとも。

そんなランサーに、リニスはある決意を決める。それは……。

テスタロッサ家と槍騎士のとある一日

あの訓練の後、フェイトは念のために休む事になり、アルフはその付き添いも兼ねて傍にいる事を選んだ。それを好機と捉えたリニスは、ランサーをデバイスルームへと連れてきた。

「へえ、中々面白いな」

初めて見るものに、興味を示しながら、ランサーは視線を動かしている。それをリニスは可笑しそうに笑う。先程の戦闘で見せた表情とまるで別人だったからだ。戦士でありながら少年。そんな表現がぴったりの存在。それがランサーなのだ。

「で、話ってのは何なんだ?」

「……私がフェイト用のデバイスを作っている事は話しましたね?」

リニスの言葉にランサーは頷く。今日の戦闘で使ったものも、リニスが試作したものだからだ。もっとも、リニスからすれば、あれは未完成らしいのだが。

「それが私にプレシアが与えた最後の指示。おそらくそれが終われば……」

私は役目を終え、消えるでしょう。そうリニスは告げた。ランサーは僅かに驚きを見せるが、それもすぐに消える。リニスがまだ何かを伝えたそうだったからだ。

ランサーの視線に、リニスは意を決して語りだす。ここからは、決してフェイト達には言わないでほしいと前置いて。プレシアの目的とフェイトの秘密、それらに関わる全てを。その内容は、ランサーにとっても衝撃だった。

プレシアには娘がいた。名をアリシア。夫を亡くし、女手一つで育てていたのだが、ある時プレシアの行っていた研究実験が事故を起こし、大惨事を引き起こしてしまった。そして、それに愛娘であ

るアリシアも巻き込まれ、覚める事のない眠りについたのだった。
だが、プレシアはその現実を受け入れなかった。愛娘を生き返らせるために、様々な生命工学や研究を調べ、模索し、実験を繰り返した。

「思えば、あの時にプレシアも死んでしまったのかも知れません」

リニスはそう言って、話を戻す。その一つである『Ｐｒｏｊｅｃｔ　Ｆａｔｅ』に目をつけ、アリシアの記憶や外見などを完全に模倣した存在を作り出したのだ。しかし、それもアリシアには成り得なかった。それがフェイトなのだと、リニスは告げた。

「結局、プレシアは現存の技術に望みを持てなくなったのか、失われた超技術の象徴アルハザードを追い求めています」

おそらく、フェイトはそのために利用され、捨てられるでしょう。それだけ告げ、リニスはランサーを見据える。その目は、貴方はどう思いますかと問うていた。その視線に、ランサーは何でもない事のように言い切った。

「関係ねぇ」

その答えに絶句するリニス。ランサーは続けてこう言った。アリシアがどうのプレシアがどうのなんて興味ない。自分がすべきはただ一つ。フェイトを守り、立ちはだかるモノを全て突き穿つのみだと。その言葉に、リニスは安堵と悲しみの感情を同時に抱いた。この男なら、フェイトだけでなく、プレシアも助けてくれるのではないか。そんな期待があったからだ。

しかしそれは、今打ち砕かれた。ランサーはフェイトは助けても、

プレシアは助けない。そう思い、俯くリニス。
だが、ランサーはただ、と続けた。リニスがその声にランサーの顔を見る。

「あの女に、フェイトの頑張りを認めさせなきゃ癪だしな。だから、ま……」

簡単には死なせねぇよ。そうランサーはリニスに告げた。その顔は普段の人懐っこいものではなく、真剣な漢の顔。
その眼差しに、リニスは見惚れた。そんなリニスの横を通り過ぎ、ランサーはドアの前で立ち止まる。

「それに、お前も消させやしねえ。何せお前は――――」

良い女だからな。背中越しにそう言って部屋を出て行くランサー。
部屋に一人残されたリニスは、流れる涙もそのままにただ感謝していた。
ランサーを遣わせてくれた存在に、神と呼ばれる存在に初めてリニスは感謝した。

（本当にありがとうございます。ランサーと引き合わせて頂いて。フェイトやアルフと出会えて。プレシアとアリシアに助けてもらえて）

これまでの全てを感謝するように、リニスは涙を流しながら祈り続けていた……。

リニスと別れたランサーは、ある考えを持ってプレシアの元へと

向かっていた。リニスとの約束を果たすために。
長い通路を走り、ようやく目的の場所に辿り着いたランサー。そして、その扉を勢い良く開け放つ。

「……何の用？」

「あんたに良い話を持ってきた」

「良い話……？」

ランサーの言葉に、プレシアが僅かに反応を示す。それを食いついたと言わんばかりに、ランサーは告げた。先程リニスから聞いた話を。そして最後にこう付け加えた。

「で、仮にアリシアが生き返るとして、あんたは今のままでいいのか？」

「……どう言う事？」

「例えばだ、せっかくアルハザードとやらに行く方法が見つかっても、今のあんたじゃただで済まないだろ？」

ランサーの指摘に、プレシアの表情が僅かに変わる。そこに、更にランサーは続ける。術があっても、当の本人が耐え切れないのでは意味がないと。だから、今は自分の体を労わる事が必要だと。
それにプレシアが反論しようとして、出来なかった。ランサーが床に何か文字のようなものを刻んだその瞬間、プレシアは体が少し軽くなった感じを受けたからだ。

「力を象徴する『太陽』のルーンを刻んだ」

「……すごいわね」

ランサーはそう告げ、プレシアに視線で訴える。体の調子はどうだと。それを感じとり答えるプレシアは、いつもの表情ではあったが、その声には驚きが若干含まれていた。

それを理解し、ランサーはプレシアにこう告げた。

「せっかく娘が生き返っても、母親にすぐ死なれちゃ救われねぇ。だから、俺に考えがある」

「何かしら」

「おっと、教えてやってもいいが、条件がある」

「……言ってごらんなさい」

ここだ。そうランサーは感じ、獰猛な表情で告げた。

「リニスをくれ」

「……話次第ね」

「そうかい。ならここで終わりだ。精々娘を泣かすんだな」

ランサーの一言に、プレシアの余裕が消えた。不治の病と言われている自分の体を、文字を刻んだだけで症状を軽くした。その事実がプレシアにランサーの重要性を訴える。アルハザードに近付く術を知っているかも知れない。そんな期待を抱かせるには、ランサー

の行為は十分だった。

「待って！……いいわ。好きにしなさい」

立ち去ろうとしていたランサーを、プレシアは引き止めた。その言葉に含まれた焦りの色に、ランサーは自分の賭けが成功した事を悟った。

「勝手に消したりしねえだろうな」

「しないわ。……でも、喰えない男ね」

「ああん？どういう意味だ、そりゃ」

ぽつりと呟いたプレシアの言葉に、ランサーは耳ざとく反応した。プレシアはそんなランサーに、不適な笑みを浮かべて問いかけた。

「あの子の言葉しか分からないんじゃなかったの？」

そう言われ、ランサーは呆気に取られるが、すぐに笑い出して答えた。

「んな事も言ったな」

「……まあ、いいわ。それより、話を聞かせてちょうだい」

そう答えるプレシアの顔には、いつもはない表情があった。ランサーはそれを確認し、己の考えをプレシアに告げるのだった……。

ーーー

遭遇編その1

「いらっしゃいませ。二名様ですか？……では、こちらへ」

どこかぎこちない接客。その言葉遣いも少したどたどしい。それでも、応対された側が笑顔なのは、それが金髪の可愛らしい少女だからだろうか。案内し、立ち去ろうとした時も、頑張ってと声を掛けられている。

「は、はい。ありがとうございます」

戸惑いながら、笑顔で答える少女。それはエプロンを着けたセイバーだった。なのはが学校に通うようになり、時間を持て余したセイバーに、桃子が翠屋の手伝いを持ちかけたのだ。

初めは接客は、と渋っていたセイバーだったが、桃子の提案した新作優先試食権に即座に合意。こうして、セイバーは翠屋で働き出したのだが……。

「お姉さ～ん」

「え……？あ、はい！今行きます」

人と接する事は慣れていても、それが客商売ともなると話は別で……。

「すみません。注文いいですか？」

「し、少々お待ちください」

まだ二組しかいないのに、既に困惑気味のセイバーだった。

騎士王、騎乗兵の存在を知る

朝の時間を終えて、軽い休憩をもらったセイバーは、椅子に座って、テーブルに突っ伏していた。そんな彼女を、桃子と士郎は微笑ましく見つめる。

あの後もオーダー提供やお会計等、セイバーは戸惑いながらもそれらをこなし、無事に朝の時間を乗り切ったのだ。勿論、桃子や士郎の手助けに、お客さんの暖かい気持ちもあればこそだが。

(接客とは、ここまで疲れるものなのですね)

そう思いながら、セイバーが考えるのは、相手をした客の事。皆、セイバーの事を微笑ましく見つめ、頑張ってと声を掛けてくれた。その一言がどれだけ自分は嬉しかったか。自分には向いていないと思っても、その一言で頑張ろうと言う気になった。

(私も、単純なのかも知れません)

どこか笑みを浮かべ、セイバーはそう思った。なのはが帰ってくるまで、まだまだ時間がある。なのはに笑われないようにしなくては。セイバーはそう自分に言い聞かせて立ち上がる。

「シロウ殿。教えてほしい事があるのですが……」

少しの時間も無駄にすまい。そんな思いを胸に、セイバーは店内へと戻るのだった……。

「ね、今日学校終わったらウチのお店に寄らない？」

「翠屋に？」

「でもいいの？」

なのはの提案に、アリサとすずかはそう返す。お昼の食事時、屋上で食べるお弁当をつつきながらの雑談。その中でのなのはの言葉は、二人にとって意外なものだった。

なのはの家が自営業なのは、二人も聞いていた。そして、そこが翠屋という人気店である事も知っていた。だからなのか、あまりなのはも翠屋の事は話さない。自慢しか出来ないから、となのはは苦笑してその理由を告げた。

そんななのはが、わざわざ自分からお店の話をするのは珍しい。アリサとすずかはそう考え、なのはを見る。

「実はね、今日からセイバーが働いてるんだ」

「へえ～、あんたの言ってた年上の友達が？」

「そうなんだ。あ、それで？」

「にゃはは、一人で行くのは気が引けて……」

お客さんとして行きたい。そうなのはは言った。それに二人も納得し、下校時に寄り道する事になった。

それが、セイバーにとって大きな出会いに繋がるとは知らずに……。

「ありがとうございました。またお越し下さい」

笑みを浮かべ、カップルを見送るセイバー。お昼のピークも過ぎ、店内も落ち着きを取り戻し始め、セイバーも僅かだが息を吐く。

初めこそ戸惑う事も多かったセイバーだったが、忙しくなるにつれ、そんな事もなくなっていった。厳密には、そんな余裕がなくなったのだ。やって来る客、怒涛の如きオーダー、それらの洗礼を受け、否応なくセイバーは鍛えられた。

「セイバー、少し休憩していいわよ」

「そうですか。分かりました」

桃子の言葉に、セイバーはまた一息吐き、奥へと向かう。そんなセイバーを士郎と桃子は嬉しそうな笑みを浮かべて見つめる。

「……すごいな」

「ええ。集中力は誰よりもあるわ」

お客さんの反応も上々だし、と笑う桃子。その言葉に士郎も頷き、呟く。男性客が増えるかなと。それに桃子が当然よと答える。

「私の自慢の娘だもの」

そう断言する桃子に、士郎はただ笑うしかなかった。

校門を出て、翠屋へ向かうなのは達。歩きながらの雑談も、内容は翠屋とセイバーに関するものばかり。

何が一番のオススメなのか、から、どんな性格の人か等、なのはは常に答え続けるのみで、話題を振る事が出来なかった。そんな会話を取りとめもなくしているうちに、目的の翠屋が見えてきた。

「あ、あれだよ」

「へ～、オシャレじゃない」

「うん。すごく良い雰囲気」

友人二人に誉められ、なのはは照れくさそうに笑う。それを隠すように、なのはは店のドアを開ける。

「いらっしゃ……あら？なのはじゃない」

「えへ、来ちゃった」

「「お邪魔します」」

軽く驚く桃子に、なのはの後ろからアリサとすずかが顔を出し、小さくお辞儀する。それだけで何かを悟った桃子は、笑顔を浮かべ言葉を返す。

「いらっしゃい。それと初めまして。なのはの母で、桃子って言い

ます」

「初めまして。アリサ・バニングスです」

「初めまして。月村すずかと言います」

礼儀正しく挨拶する二人に、桃子は内心良く出来た子達だと感心していた。そんな桃子に、なのはは今一番気になっている事を尋ねた。

「ねえお母さん。セイバーは？」

「えっ？ああ、奥で休んでるわ。頑張ってたから」

そう告げて、桃子は何か悪戯めいた笑みを浮かべ、なのはにこう言った。

「奥のテーブルに座って待ってなさい。すぐにオーダー聞きに行くから」

「いいの？」

「うん。なのはのお友達が来たんだから、今日は特別よ」

その言葉に嬉しそうな声を上げる三人。それを見て、微笑む桃子。三人はすたすたと奥のテーブルへ向かうが、そんな一部始終を苦笑しつつ士郎は見ていた。桃子の考えている事が分かったからだ。案の定、桃子は店の奥へ消えて行く。

（ま、なのはもそれが目当てみたいだしな）

そう思い、士郎は笑いながらも、これからの事に思いを馳せるのだった。

「ゴメンね」

「いえ、十分休みましたから」

そう答え、セイバーは再び仕事へと思考を切り替える。桃子は電話対応でしばらく動けなくなりそうと、セイバーに手助けを願い出たのだ。

無論、セイバーはそれを断るはずがなく、店内に戻ると言われた通りに水を三つ載せたトレーを手に、奥のテーブルへ向かう。

そこには、なのはと同じ学校の制服の少女が三人。一人は背を向けているが、二人はセイバーを見て――頷いた。

（？……何かあるのでしょうか、私に）

その行動の意味が分からず、セイバーは首を傾げるものの、相手が子供でも仕事をこなさなければと、テーブルの横に立ち――言葉を失った。

「にゃは、頑張ってるねセイバー」

「な、なのは？どうして……」

そう、なのははセイバーにこう言った。冷やかしには行かないから安心してと。それを聞き、セイバーは内心安堵していたのだ。自

分が接客に不慣れな様を見せずにすむと。
なのはの前では、セイバーはしっかり者（既に、そんなイメージを自分で崩していると思っていない）でありたかったのだ。

目に見えて動揺するセイバーに、なのはは笑みをこぼすと、アリサとすずかに視線を移す。

「アリサちゃん、すずかちゃん。この人がなのはの一番最初のお友達の、セイバーです」

「初めまして。アリサ・バニングスです」

「初めまして。月村すずかです」

「あ……は、初めまして。セイバーと言います」

二人の挨拶に、セイバーもやっと思考を取り戻し、挨拶を返す。その態度はまだ落ち着きを失っていたが。
そんなセイバーに、二人は笑みを浮かべる。なのはの話していた通りだと、改めて感じたからだ。年上だけど、どこか同じ歳ぐらいに感じる時があり、キリッとしているけど、どこか可愛い。なのはが簡単に話したセイバーの人物評。それは、実に的確に言い当てていた。

そんな笑う二人に、セイバーは困惑顔。なのははその理由が分かるのか、同じように笑っている。
だが、セイバーは完全に思考をリセットし、水をテーブルに置き、なのは達にオーダーを聞こうと伝票を取り出した。

「それで、ご注文は」

「あ、私はアイスレモンティーとチーズケーキ」

「なら、アタシはアイスミルクティーにショートケーキ」

「私もアリサちゃんと同じもので」

「かしこまりました」

オーダーを確認し、セイバーは一礼して下がっていく。その後姿を見て、アリサとすずかは感心していた。

それは、凛々しいという表現がピッタリのものだったからだ。おそらく、あれがエプロンではなく、ちゃんとした正装ならば、もっと映えるだろう。

そう二人は思い、ふと自分達にも同じような存在がいた事を思い出す。

「あ、そうだ。なのはちゃん、アリサちゃん、今度うちに遊びに来て。是非会わせたい人がいるの」

「それって、この前言ってたライダーさん？」

「ライダーさん？」

「何ですって？！」

すずかの言葉で、アリサが告げた名前に反応したなのはだったが、それ以上に反応したものがいた。

それは、オーダーを告げ、なのは達の所へ戻ってこようとしていたセイバーだった。

その顔は、信じられないものを聞いたと言う表情だ。そして、そんなセイバーに三人は驚きを隠せなかった。

動けない三人へセイバーは素早く近付くと、すずかの目を見て問いかけた。

その人物は女性か。その髪の色は紫で、恐ろしく長くないか。そして最後に、妙な眼帯をしていないかと。

その問いに、すずかは驚きながらも、全てを肯定した。それを聞き、セイバーは驚きを隠さぬまま、すずかにこう告げた。

「スズカ、ライダーに伝えて頂けませんか？セイバーが話したい事がある、と」

「えっと、いいですけど……セイバーさんはライダーの知り合いなんですか？」

「……以前、共に暮らしていました」

それだけ告げると、セイバーはどこか遠い目をしてテーブルから離れていく。その後姿を見て、なのはは胸が締め付けられるような感覚を覚えた。

セイバーは、自分の過去を話したがらない。それを士郎達は特に気にせず、暮らしている。だが、なのはだけは少しだけセイバーの過去を聞いた事がある。

セイバーが教えたのは、衛宮邸での日々の一部。高町家と同じように、自分を受け入れ、家族同然に接してくれたと、セイバーは懐かしそうに語った。その時、確かにセイバーは言ったのだ。戻れるのなら戻りたいと。

勿論、なのは達と離れたいと言う事ではない。もう一度会えるな

ら、会ってみたいと言う事だとセイバーは優しく告げた。

（でも、セイバーにとって、そのお家は大切な思い出なんだよね）

なのははそんな事を思い、浮かんでしまったある考えを必死に否定する。

（違う！セイバーは私を置いてどこかに行ったりしない。だって……）

「私は、なのはの剣になります。そして盾にもなります。しかし、なのはが望むのなら――」

私はただ、貴方の友でありましょう。剣でも盾でもない。ただなのはの友として、傍に。あの日、出会った夜にセイバーはそう誓った。だから、となのはは思う。

（絶対にセイバーはいなくなったりしない。私と約束したんだから！）

このなのはの思いは、その後も変わらず強く残り続ける。そして、それが遠い未来の奇跡となるのだった……。

――――――

サーヴァント遭遇編その一。

衛宮邸組の二人が、ついに出会います。セイバーとライダー。二人が出会う事で、一体何が起きるのか？

その模様は、この次で……。

こんなに複線張って……回収できるかなぁ……。

遭遇編その2

「セイバー……ですか」

「うん……」

すずかから告げられた内容は、ライダーを驚かせるには十分だった。それは、自分以外のサーヴァントがいたという意味だけではない。

近くにサーヴァントがいたにも関わらず、今日までその存在に気付けなかった事でもあるからだ。

（もしかしたら……。いや、でもそれは……）

ライダーの中に生まれた一つの推測。そして、それはある意味あってはならない事。

「話がある、と言っていたのですね？」

「う、うん」

「そうですか……」

ライダーは、己の推測を確かめるべく、セイバーに会う事にした。だが、その前にすべき事がライダーにはあった。

不安そうな顔で自分を見ているすずかを安心させる。それが今ライダーがしなければならない事だ。

優しい笑みを浮かべ、ライダーはすずかの髪を撫でる。そして、

心からの想いを込めて告げる。
スズカの考えているような事にはなりません、と。だから心配いらないとライダーは微笑む。すずかはまだ不安が残っているものの、そのライダーの笑みに笑みを返す。ライダーを信じよう。それがすずかの想いであり、導き出した結論だった。

騎乗兵、騎士王と再会する

いつものように午前の仕事を終え、ノエルとファリンに許可を得て、ライダーは屋敷を出た。向かう先は翠屋。そこに居るであろうセイバーに会うためだ。

忍にねだり、創ってもらった専用自転車を駆り、ライダーは疾走する。
その様はまさに風。凄まじい速度で道を駆け抜けるライダーは、その視線の先に目当ての建物が見えると、ブレーキをかけると同時に自分の足を地に着け、車体を斜めに傾ける。
土煙さえ上がりそうな勢いで、自転車は店先で見事に停止。ライダーは、何事もなかったように鍵を締めて店の中へと入って行く。

「いらっ……」

「お久しぶりですね、セイバー」

笑顔のまま固まるセイバーに、ライダーはそう答えた。セイバーが固まったのは、ライダーのメイド姿にあった。
見事に着こなしているからではない。その裾が擦り切れ汚れていたからだ。それも、尋常ではないほどに。

未だ固まるセイバーに、ライダーは首を傾げる。そして、その視線を追い理由を理解して呟いた。

ああ、汚してしまいましたか。そう言ってわざわざそれを払いに店を出るライダー。その際に鳴った鈴の音で、セイバーはようやく我に返った。

「桃子、すみませんが少し外します！」

「え、セイバー？」

「このお詫びは必ずします。では！」

戸惑う桃子に、そう一方的に言い放ち、セイバーは店を出た。そして、店先で汚れを払っているライダーの前に立つと、その手を掴み走り出す。その後ろから、桃子の声がしたのを感じ、セイバーは更に速度を上げる。

それに気付き、ライダーは問いかけた。

「何を急いでいるのです？」

「私にも色々あるのです！」

「やれやれ……」

そう言いながらも、ライダーの表情はどこか懐かしそうであった……。

海が一望出来る公園。そこにあるベンチに座り、二人はただ黙っている。その視線は共に海へと向けられていた。
公園まで来た二人は、近くにあったベンチに座ると、黙って海を眺める。ライダーはセイバーが切り出すのを待ち、セイバーはどう切り出すかを悩んでいた。
ややあって、セイバーは意を決して口を開いた。
「私がここに来たのは、もう一年以上前になります」
セイバーの独白に、ライダーは視線を送る事で続きを促す。
セイバーは、召喚されてから今までの事を簡潔に、そして噛み締めるように語った。
その内容に、ライダーも思わず聞き入ってしまった。それは、高町家の対応が月村家と同じだったから。突然現れた自分を家族として扱ってくれる。そんな共通点を見出し、ライダーは思わず呟く。
「……似ていますね」
私の所もそうなのです。そう言って、ライダーは自分の事を語りだした。
召喚された時、目の前の少女にサクラの姿を重ねた事。彼女も人には言えない悩みを抱えていた事。そして、自分を受け入れ、家族だと思ってくれている事。
それらをセイバーも聞き、呟く。
「……似ていますね」
「ええ。まったくです」

そう言い合う二人。その表情は苦笑い。そりが合わないのは互いに認めるところではあるが、なのに何故こうも現状が似ているのか。それを考え、同じ結論に行き着いたからだ。

「シロウ達のせいですね」

「それを言うならおかげですよ、セイバー」

そう。二人が久しく忘れていた人との繋がりとその温もり。それを思い出させたのは衛宮士郎。そして、凛や桜、大河にイリヤといった衛宮邸の面々。あの場所で得たその暖かさが、自分達の中に残り、きっと寂しい想いを抱いていた少女達の下へ呼んだのではないか。

そう二人は結論付けた。

その後、しばらく二人は無言で景色を眺めた。その沈黙は初めとは違い、どこか穏やかなものを漂わせていた。

しかし、ライダーがその雰囲気を破る発言をした。それは……。

「セイバー……」

「何です？」

「おかしいとは思いませんか？」

ライダーが語ったのは、憶測に過ぎないと前置きされたが、一つの結論を告げた。

自分達の記憶が残っている事や、魔力供給を受けていないのも関わらず、未だに現界出来る事。そして、これはライダーしか分からなかったが……。

「霊体化出来ない、ですか？」

「ええ。昨日、スズカから貴方の話を聞き、話をしようと思って霊体化しようとしたのですが……」

何故か出来ず、そこでライダーは確信した。即ち――――受肉していると言う結論を。

「ば、バカな。そんな事――――」

「私もそう思います。ですが、それ以外ないのです。この私達の状況を説明出来るのは」

信じられないといった顔のセイバーに、ライダーは無表情でそう返す。霊体化は、ライダーにとっては出来て当然の行為。故に、意識しなければ気付けなかったのだとライダーは語る。そしてライダーは、どうしてこうなったのかをこれから調べてみると告げた。セイバーはそれに対し、自分に出来る事はないかと尋ねたが……。

「セイバー、貴方は現状のままで構いません」

「何故です！貴方一人に任せる訳にはいきません！」

「落ち着いて下さい。私と貴方はサーヴァントと言っても、成り立ちが違うでしょう」

ライダーが告げたのはこうだ。自分は完全な死者として英霊になったが、セイバーは死者ではない。なら、もしかしたら自分と同じとは言えないと。

だが、セイバーはそれにこう反論する。なのはとラインが繋がっていないのは事実だ。にも関わらず、自分は魔力に満ちている。だとすれば、自分も受肉している可能性が高いと。

それから少し口論は続き、終わりが見えないかとも思ったのだが……。

「……ですから」

ライダーが何度目かになる言葉を言おうとしたその時だった。セイバーがライダーの予想しえない言葉で、それを遮ったのだ。

「私にも手伝わせて下さい！友ではありませんかっ！」

セイバーの言葉に、ライダーの思考が止まる。そんなライダーに、セイバーはどこかハッとした表情を浮かべるが、僅かの逡巡の後、開き直ったように言い切った。

「何かいけませんか？確かに私と貴方は明確にそうなった訳ではありません。ですが、共にシロウ達と過ごし、笑い合った我々は『家族』ではありませんが、友ではあると思います！ライダーがそう思わなくとも、私はそう思います。ええ、思っていますとも！」

「セイバー……」

「その友が一人で苦労を背負いこもうとしているのを、黙って見過ごせる訳がありません！ですから――っ」

そこまで言って、セイバーは深呼吸をしてライダーの方を向き告げた。

「私にも、手伝わせてください。同じ日々を過ごした友人として」

そう告げるセイバーは、優しげな笑みを浮かべていた。ライダーは、そんなセイバーに呆気に取られるものの、すぐに表情を戻して答えた。

「……仕方ありませんね。では、互いに調べる事にしましょう」

「それでは……」

ライダーの言葉に、セイバーはライダーにゆっくりと右手を差し出す。それを不思議そうに見つめ、ライダーは尋ねた。

これはと。それにセイバーはムッとした顔で答えた。友と認め合ったのだから、その証の握手ではないかと。それに、再び呆気に取られるライダーだが、小さく笑みを浮かべるとそれを握る。

「フフッ…変わりましたね」

「そう言う貴方もです」

そう言い合うその顔は、どこか嬉しそうに笑っている。そんな横顔を、春の日差しが照らしていた……。

学校から帰るや否や、すずかはライダーを捜した。いつもなら一番に出迎えてくれるはずのライダーが、出迎えてくれなかったからだ。

ファリンを見つけ、出かけていると聞いたのだが、それでもすず

かはどこか落ち着けなかった。
信じている。信じているが、怖かったのだ。ライダーが昔の知り合いの下へ行ってしまうんじゃないかと。

（早く、早く帰ってきて……！）

そんなすずかの願いが届いたのか、部屋のドアをノックする音がする。それに飛び跳ねるように反応し、すずかはドアを開けた。

「どうしたのですか、スズカ。そんなに慌てて……」

そこには、驚いた顔のライダーが立っていた。その手には翠屋と書かれた箱がある。
セイバーとの話を終えたライダーは、自転車を取りに行くついでに翠屋でシュークリームを人数分買って帰ったのだ。
勿論、セイバーが接客させられ、ライダーに若干からかわれたが。

「これからシノブ達とティータイムと洒落込もうと思いまして、スズカを誘いに来たのです」

もう、三人共待っています。そうライダーに告げられ、すずかは嬉しそうに頷き、部屋を出た。前を歩くライダーと並ぶようにすずかは歩く速度を速める。それに気付いたライダーが、歩調を少し緩めすずかに合わせる。
すると、すずかは空いているライダーの手を握り、微笑んだ。

「ありがとうライダー」

「いえ、どういたしまして」

互いに微笑み合い、二人は歩く。その視線の先には、椅子に腰掛け、同じように笑みを浮かべている忍達の姿があった……。

――――――

遭遇編その3

「で、よく分かんないけど、セイバーさんとライダーさんは知り合いらしいわ」

寝る前のいつもの時間。現代教室を終え、今日の出来事を語るアリサ。そのアリサの話に、小次郎は驚きを顔に張り付けていた。端正な顔立ちを固め、幽霊でも見たのかと言わんばかりの表情だ。

「ありさ、もう一度言うてくれぬか？」

「ん？何を？」

「今日出会った者の名を」

初めて聞く小次郎の真剣な声に、アリサは戸惑いながらも答えた。

「セイバーさんよ」

一体何なのよ。そう呟くアリサから視線を外し、小次郎は外の月に目をやり、内心で喜びを溢れさせていた。

己が好敵手と認めた相手が、もう二度と会えぬと思っていた相手がこの町にいる。それが小次郎の眠っていたものに火を付けた。

ふつふつと燃え上がる内なる炎を感じながら、小次郎は笑う。

（待っておれセイバー。あの時の楽しみを、喜びを今一度味わおうぞ）

そんな事を思い笑う小次郎を、アリサはどこか寂しそうに見つめ

ていた……。

傾奇者、騎士王と再戦する

あくる朝、小次郎は日課の庭仕事を終えて、セイバーに会いに行こうとしたのだが、一つ大きな問題があった。

小次郎は、屋敷から出た事がないのである。バニングス邸は広い。そして、その庭も。故にその庭を世話している小次郎としては、のんびり世話をしていれば時間が過ぎていく。そして、一番大きな理由。

それは、アリサが外出を禁じたから。アリサは、いつか自分が小次郎を案内してやろうと考えて、そう命令した。それに小次郎が従う義理はないのだが、それを少し匂わせただけで、アリサが涙目になったため、小次郎は今まで庭弄りをして過ごしてきた。

「ふむ、道を聞こうにも鮫島殿はおらぬし、下手に出かけ迷いでもすれば、ありさが笑うのみ。はてさてどうしたものか」

そう考え、結局小次郎はこの日出掛ける事を諦めた。それはある事を思い出したからだった。

（セイバーは今、翠屋なる茶屋で働いておると、ありさが言っておったな。ならば、昼間行ってもあしらわれるだけか）

こうして、小次郎は残念そうなため息を吐くと、庭へと戻っていく。会えぬなら、せめて刀を振り、邪念を無くそうと決めたからだ。

本来の格好に戻り、愛刀の物干し竿を構え、小次郎は刀を振るう。その姿は、美しくもどこか悲しそうに見えた。

学校からの帰り道、アリサは習い事に向かう車の中で、一人不安に駆られていた。

原因は、昨夜の小次郎の様子。小次郎はあまり物事に執着しない。そんな小次郎が、セイバーの名前には異常な反応を示した。

無断外出は禁じているが、元々小次郎はそれに従う必要がない。それをアリサは理解しているからこそ、不安だった。

（あいつ、セイバーさんと知り合いだっていうのかしら。時代錯誤侍のくせに！）

本人が聞けば、それとこれがどう関係する、と呆れる所だろうが、今のアリサに正論は意味を持たない。

そう、アリサはきっと認めないだろう。その感情が、嫉妬と呼ばれるものだと言う事を。

矛先こそ小次郎に向けているが、不安の原因はセイバーが可愛らしい女性だった事と、もう一つ。

（あいつ、アタシは片言っぽいのに、セイバーさんの名前は綺麗に発音してた！）

昨夜、無意識に小次郎はセイバーの名を呟いた。それをアリサは確かに聞き、余計に腹を立てていた。

「帰ったら……絶対色々聞き出してやるんだから！」

そんなアリサの決意に比例するように、車も速度を上げるのだった……。

小次郎は、困惑していた。いつものように帰ってきたアリサを出迎え、いつものようなやり取りがあるかと思えば、アリサは小次郎に何も言わず部屋へと向かって行ったのだ。

こんな事は今までなく、小次郎には原因が分からない。ただ、恐ろしい程不機嫌である事だけは察していた。

「すまぬが鮫島殿、原因を知っていれば教えてくれぬか？」

「……それが、私にもさっぱり」

「そうか。……つまらぬ事を聞いたな、許せ」

アリサの傍付きである鮫島に分からないとなると、小次郎に取れる方法は一つしかなかった。

その方法を考え、小次郎は苦笑い。と言うのも、それは直接尋ねるという至ってシンプルなもの。

（私も変わったものよ）

そう思い、小次郎は食堂へ向かう。もうすぐ夕食の時間だ。アリサが来るのを待ち、そこで何に怒っているのか聞こうと、小次郎は思っていた。

一方のアリサと言えば、小次郎に対して自分が取った行動に後悔していた。

せっかく小次郎が、普段と同じように接してくれたにも関わらず、アリサは何故かそれを無視して逃げるように部屋まで来ていた。

あそこでいつものように会話していれば。そんな思いが先程から頭を巡る。もし、これが完全にアリサが悪ければ、何の躊躇いもなく謝罪する事が出来るのがアリサである。しかし、今回はアリサの中では小次郎が先に悪さ（アリサとしては）をした。

よって、アリサは自分だけが謝る事はない、と思っている。故に、悩み苦しんでいた。

（悪いのは小次郎なのよ！……でもでも、アタシの態度も問題よね……）

「あ～、どうしたらいいのよっ！！」

そこに、アリサのお腹の鳴る音が響く。ふと時計を見れば夕食の時間。アリサは、未だ結論を出せぬまま食堂へ向かう。

その表情は、まるで死地に赴く戦士のようだった。

普段ならば、出てきた料理を小次郎が尋ね、それにアリサが答えたり、あるいはその日の出来事を、アリサが小次郎に語ったりするのだが、この日は珍しくそうではなかった。

理由はアリサが言い出せなかったのでも、小次郎が聞かなかったのでもない。この日は、たまたまアリサの両親が揃って食事に参加できたのだ。

「どうだいアリサ。学校の方は？」

「すごく充実してるわ、パパ」

久しぶりに会う娘に、満面の笑顔で接する父。

「小次郎さんはどうです？少しはウチに慣れました？」

「そうさなぁ……。未だにまなーと言うものには戸惑うが、大体の事は理解したかと」

一方の母は、小次郎にとめどなく問いかける。

ただのボディーガードに過ぎない小次郎が、こうしてアリサの両親と食事出来るのは、両親がアリサの恩人である小次郎を大層気に入っていたからだ。

言動が古風ではあるが、風流を理解し、今時には珍しい程義理堅い。更に、腕が立つにも関わらず、それを自慢もせず、ただ愚直に高みを目指している。

何より、アリサが慕っているのが大きい。仕事であまり傍にいてやる事が出来ない自分達に代わり、アリサを見守ってくれている。それに、アリサの笑顔が増えたと言う報告も入っている。

それを二人は聞き、小次郎に言葉にならない感謝をしていたのだ。

「小次郎君は、庭の手入れを良くしてくれているそうだが」

「私の単なる気晴らしよ。気にする事もない」

「あらまあ。でも本職の者達も誉めていましたよ？」

「それは重畳。私の気晴らしが役に立って何よりよ」

後は、自分達に対して特別な対応をしない事。誰を相手にしても

己を崩さず、乱さず、淡々と振舞う。それが小次郎の良い所だと、二人は思っている。

そうして、久しぶりの家族揃っての食事も終わり、アリサは帰宅の際の事を謝ろうと、小次郎の下に駆け寄ったのだが……。

小次郎は、たまにしか会えない両親との時間を大切にしろ、と告げ、与えられている部屋へ歩いて行ってしまった。

アリサは、その言葉に甘える事にした。何故なら、そう告げた時の小次郎はアリサの良く知る表情だったから。去っていく背中に、アリサは小さく呟く。

「……ま、今回はこれでチャラにしとくわ」

アリサはそう呟くと、笑顔を浮かべて来た道を戻る。両親に色々と話したい事がある。まずは、最近出来た友人の事を話したい。

その思いを胸に、アリサは駆け足で通路を駆けて行くのであった。

翌日、アリサは普段のアリサに戻っていた。小次郎は、何があったか理解できなかったが、機嫌が良くなっていたので良しとした。

「じゃあ、行ってくるわ」

「気をつけてな。……おお、そうであった」

元気良く歩き出していたアリサの足が止まる。振り向き、視線で尋ねるアリサ。それに、小次郎は神妙な面持ちで切り出した。

「翠屋なる茶屋へは、どのような道で行けるか教えてくれぬか？」

「いいけど、アタシが帰ってきてからね。それまで待ってなさい」

そう言い切って、アリサは小次郎の答えも聞かずに歩き出す。それを何も言わず見送る小次郎。その顔にはいつもの笑みが浮かんでいた。

アリサが帰宅すると、小次郎は有無を言わさずアリサを連れて屋敷を出た。車でと鮫島が言ったのだが、アリサは歩きで構わないとそれを断った。それを聞いて、鮫島はどこか苦笑気味に「お気をつけて」と見送った。

小次郎は初めて歩く海鳴の町に、興味深そうにしていた。目に映るもの全てが、小次郎にとっては未知のもの。街灯に電信柱、信号機に横断歩道。子供のように不思議そうに尋ねる小次郎に、アリサは呆れながらもどこか嬉しそうにそれに答える。

端から見れば、それは滑稽にしか見えないだろう。だが、当の本人達には楽しい時間であった。特に、アリサにとっては。

そんな時間も、やがて終わりが来る。翠屋に着いたのだ。そして、その店先にセイバーとなのはがいた。エプロン姿ではなく、普段着で。アリサがなのはを通し、小次郎の事を伝えておいたためだ。

その姿に、小次郎は小さく笑みを浮かべると、静かにセイバーへ語りかけた。

「久しいな、セイバー」

「ええ、貴方も変わらぬようで何より」

「……何処が良い？」

「こちらへ」

挨拶もそこそこに、二人はそう言って歩き出す。アリサはその後を追おうとして、なのはに止められた。

疑問を浮かべるアリサに、なのはは無言で首を横に振る。邪魔しちゃいけない。そうなのはが言っているように、アリサは思った。見れば、なのはの手も震えている。

（そっか……アタシもなのはも邪魔者扱い、か）

視線を戻せば、既に二人は見えなくなっていた。アリサは、それをどこか寂しく思い、呟いた。

「小次郎の……バカ」

その呟きは、夕闇の風に溶けて消えた。

町外れの山の中。士郎達が朝の鍛錬に使っている場所に、二人はやってきた。

「まさか、貴方までいるとは思いませんでした」

セイバーはそう言って本来の鎧へと変わる。その手には、風を纏った聖剣を携えて。

「私の方こそ、よもやお主が居よう等とは思わなんだ」

小次郎もそれに応じるように、本来の着物姿へ変わる。その手には、愛刀の物干し竿を携えて。

「どうしてもやるのですね」

「応よ。試合うぞ、セイバー」

その声で、小次郎の雰囲気が変わる。その構えは、セイバーも良く知るもの。

”燕返し”そう呼ばれる小次郎の必殺剣。本来在り得ぬ現象を引き起こし、同時に三発の斬撃を叩き込むもの。

簡単に言えばただそれだけ。しかし、それがどれ程恐ろしい技かは、その身で受けた事のあるセイバーには分かる。

何しろ、あのセイバーですら二度は避け切れないと言わしめた技なのだから。

「いきなりですか……」

「無論。あまり時間をかけると、騒々しいのがおるのでな」

此度は急がねばならぬ。そう小次郎は苦笑いで答える。セイバーは、そんな小次郎を見て、微かに笑みを見せると、聖剣を構える。

だが、それは小次郎も初めて見る構え。どこか居合いを思わせるそれに、小次郎は恐怖と感動を覚えた。

「……私も以前のままではない」

「それは重畳。ならば……」

そして、時が止まる。いや、正確には止まったかのように二人が動かなくなったのだ。
風が静かに吹き抜けていく。木々を揺らし、木の葉が音を立てる。そして、その揺れが収まった瞬間。

「「っ！」」

空間が爆ぜた。繰り出される斬撃。だが、それは一筋しかなかった。

「……見事」

「……いえ、これは私だけの力では成し得ませんでした」

小次郎の喉元に突きつけられた聖剣。小次郎の刀は振りぬかれる直前で止められている。
あの瞬間、小次郎が燕返しを放とうとした時には、セイバーは既に小次郎の懐に入り込んでいた。それに小次郎が気付き、対処しようとした時には遅かった。
セイバーの聖剣が刀を弾き、燕返しを阻止し、そのまま喉元へと突きつけられた。

セイバーが使ったのは、御神の技である”神速”だった。しかし、それは本物ではなく、あくまでセイバーが自ら模倣したもの。
魔力を開放して得られる元来の爆発力に上乗せし、まだほんの三秒しかもたないが、肉体のリミッターを外す事が出来るようになったのだ。
士郎に何度も挑み、耳で聞き、体で覚えた奥の手だったが、その反動は大きく……。

「ぐっ……」

セイバーの強靭な体を持ってしても、現状三時間は満足に動けなくなる。それが最大の欠点。

故に、セイバーはこれを神速ではなく”諸刃”と名付けている。

「成程、私と同じく真っ当な剣ではないか」

「え、ええ。”御神”と言うそうです」

「御神？……それは興味深い。今度会わせてくれぬか、セイバー」

そう尋ね、セイバーに肩を貸す小次郎。それに礼を言って、セイバーは立ち上がる。

「いいでしょう。キョウヤは強い相手と戦うのが好きですから」

「ほう。それは益々興味深い。私もお主のような芸当を身に付けねばな」

そう言って笑う小次郎に、セイバーも笑みで返す。そして、内心思う。小次郎に御神を教えてよかったのだろうか、と……。

ーーー

遭遇編その３

セイバーのオリジナル技は、メリットよりもデメリットの方が多い欠陥技。

なので、セイバーがこれを好んで使う事はあまりありません。

……苦情は受け付けますし、反省もします。でも、やりたかったんです。お許しを……。

空白期（A&

に勝ちたかった。それを理解し、美由希も士郎も恭也の思いを感した。

そして、その一撃を小次郎は――――。

「……見事よ」

耐え切った。いや、正確には自分から跳ぶ事で衝撃を逃がしたのだ。柳の如きその動きに、恭也だけでなく士郎達すら驚愕した。御神の奥義。それを喰らいながらもしっかりと二本の足で立っている。それが三人にとってどれ程恐ろしい事か。

更に、恭也は今の一撃で力のほとんどを使い切ってしまった。小次郎もそれを理解しているのだろう。静かに構え――――。

その瞬間、道場の空気が張り詰めた。それと同時に三人は悟る。もう、勝ち目はないと。それだけの”何か”が小次郎の構えにはあった。

「これも武士の情け。せめて我が秘剣で終いとしよう」

その言葉に恭也はどこか心が震えるのを感じた。これ程の剣士が、自分を認めその奥義を見せてくれる。

それを理解し、恭也は身体に力を入れる。先程から感じる圧迫感を振り払い、立ち上がって小太刀を構える。

その恭也の姿に、小次郎も笑みを見せ「やはり強き剣士よ」と呟いた。

「恭也、受け取れ。我が秘剣、燕返し」

放たれるは三つの剣閃。それが同時に襲い掛かる。逃げ場無きその攻撃を、恭也はかわすのではなく、敢えて受けた。

静かに崩れ落ちる恭也。それを士郎が支えた。そして、そのまま視線で小次郎へ礼を述べる。剣士として小次郎の行為に感じるものがあったから。

奥義を見せた恭也へ、自分の奥義を見せる事で応えた小次郎の在り方に心からの敬意と感謝を込めて。

それを見て、なのははただ驚いていた。負ける事などないと思っていた兄の敗北。セイバーと士郎以外には無敵と信じていた存在。それを見事に倒した小次郎に。そして、剣士の礼儀等は理解出来ないが、それでも小次郎が恭也を認めたからこそ、最後の技を出した事ぐらいはなのはにも分かった。

(小次郎さんって……ホントに凄い人だったんだ)

なのはの抱いた思いは、美由希や士郎の思いでもあった。セイバーは、そんな高町家の面々の表情を見て呟く。

「……私といい勝負をすると言ったはずです」

それは、どこか拗ねるような声だった……。

傾奇者、女心を知らず

あのセイバーと小次郎の再会&再戦の次の日。小次郎は高町家にやってきた。目的は一つ。セイバーが会得した”御神”の剣技を見るためだ。

セイバーから既に事情を聞いていた士郎達だったが、小次郎の技

量を知りたいと恭也が言い出し、そのまま試合となった。
だが、結果は恭也の敗北に終わった。神速に初めこそ小次郎も驚いたが、驚いただけだった。
セイバーと互角の戦いが出来る小次郎からすれば、恭也達の神速の速度は見えぬ程ではなかった。

だが、恭也の放った薙旋だけは小次郎も心から驚き、そして同時に称賛したのだ。
人の身でありながら、そこまでの技を会得し、更に研鑽する姿に。そして、飽くなき向上心と勝利を諦めない姿勢へ応えるために、小次郎は敢えて燕返しを放ったのだ。
小次郎の心に、御神の剣士、見事なり、と思わせた恭也に対する最大限の礼。それを瞬時に汲み取り、恭也も立ち上がったのだ。
最後まで挑戦する姿勢を崩さないように、と。そして、今小次郎は士郎と戦っていた。

士郎は手強かった。理由として戦闘の経験量が違う事と、恭也と小次郎の試合を見ていたのが大きい。
小次郎の剣閃を紙一重で防ぎ、防げないと分かるや自分へのダメージを最小限に抑えるべく、受け流す。
小次郎の戦い方に近いものはありながら、士郎は力もある。恭也でさえ未だ追いつけない姿が、御神の剣士の一つの完成形がそこにあった。

「やるな、流石は恭也の父上と言ったところよ」

「小次郎さんこそ。もう御神の剣を読み始めてますね」

互いに浮かべるは笑み。士郎は、ここ最近感じていなかった高揚感から。小次郎は、恭也よりも洗練された士郎の強さから。

それぞれ喜びと楽しさを表情に浮かべている。それを見ながら、なのははぽつりと呟く。

「何でお父さん達って、戦うのが好きなんだろ……？」

それはなのはには分からない感覚。誰かと戦う。それは、自分も相手も傷付ける事になる。何か理由があり、仕方ないならまだ納得出来る。

だが、ただ強くなりたいだけで戦うのは、なのはには理解出来なかったのだ。

（強さって、誰かと戦わないと持てないものなのかな？）

その答えをなのはが得るのは、この日からかなりの時間が必要となる。

結局、勝負は士郎の敗北で幕を閉じる。勝負を決したのは、小次郎の放った燕返し。

それを士郎もかわしきれず、何とか耐え切ろうとしたのだが、それも叶わずに床に伏した。美由希はその光景に驚愕すると共に、小次郎の強さを改めて感じていた。

セイバーは士郎の傍に駆け寄り、心配そうに声を掛けるなのはを見つめていた。恭也は士郎が敗れるところで気が付いたらしく、呆然とそれを眺めて呟いた。

「見えなかった……」

その呟きに、美由希も頷き、視線を小次郎へ向ける。最後の剣閃、燕返し。それを離れた場所から二度も見ていた美由希だったが、それを見切る事は出来なかった。

美由希も恭也も知らない。彼らは本当は見えている。だが、それが同時に見えたために、見切れていないと思っているだけなのだ。

それを士郎達が知るのは、この日の夜。なのはがセイバーに、燕返しの事を尋ねた際の答えを聞いてである。

（”御神”の剣士。そして、その技……中々興味深いものよ。良い修練相手にもなりそうだが……さて）

小次郎は視線を士郎からなのはへ移し、しゃがみこんでその頭に手を乗せた。それになのはが顔を上げると、小次郎は真剣な表情で告げる。

「すまぬな。つい加減をし切れなんだ、許せ」

「小次郎さん……？」

「私らしからぬ事よ。つい、そなたの父上が強いものでな。熱くなりすぎてしまった。だが、心配いらぬ。士郎殿は……ほれ」

なのはに安心させるように笑う小次郎。その視線を受け、なのはが振り向くと士郎が目を覚ましたようで、なのはと視線が合った。

それに士郎がどこか申し訳なさそうに笑い、なのははそれに喜びながらも文句を言った。

そして、それを聞きながら恭也達も笑みを浮かべ、セイバーが小次郎へ近付く。

「やはり変わりましたね」

「よく言うわ。そなたが一番変わりおったくせに」

「そうですね……そうなんでしょう」

二人して笑い合うセイバーと小次郎。そんな二人の視線の先では、心配したと怒るなのはに謝っている士郎と恭也がいた。

アリサは不機嫌だった。朝起きた時、小次郎は外出していたからだ。無断ではない。鮫島に言伝を頼んでいたから。

だが、それでも納得はいかなかった。何故なら行き先は高町家。目的はおそらくセイバーだろうと思ったからだ。

（アタシが起きるまで待ちなさいよ！）

そして、今、アリサは食堂で小次郎を待ちながらある事を考えていた。それは、どうすれば小次郎が高町家から早く帰ってくるかである。

現在の時刻を見れば、いつもなら朝食を食べ始めている。それにも関わらず、小次郎は未だに帰ってきていなかったのだ。

小次郎の性格上、朝食を向こうで食べる事はないと思うが、それにしても不安なのだ。なのはへ電話しようと何度思った事か。

そして、アリサが六度目になる携帯での連絡を断念した時、小次郎が現れた。それに一瞬笑顔になるアリサだったが、すぐにそれを消し、不機嫌な表情でそっぽを向いた。

それに小次郎は不思議顔。だが、まだアリサが朝食を食べていないのを悟り、笑みを浮かべて椅子へと座った。

「先に食べておればいいものを」

「……別に。アタシの勝手でしょ」

「……待たせてすまぬな。これからの事を話してきたものでな」

「そ。まぁいいわ。食事にしましょ」

小次郎の謝罪に若干機嫌が良くなった瞬間、小次郎の告げた”これから”に再び機嫌を悪くし、アリサは素っ気無く会話を打ち切った。

それに小次郎はアリサの不機嫌を悟るが、原因にまでは思い当たらないようで、首を傾げるだけだった。

最初は不機嫌なアリサだったが、食事をしている内に段々といつもの調子になり、小次郎もそんなアリサに笑みを見せた。

特に、小次郎がフレンチトーストの由来を尋ねた時に、フレンチはフランスの事で、トーストは焼いたパンだと聞いた途端、小次郎が言った一言がアリサの不機嫌を根こそぎ持っていった。

「？　ふらんすで焼いたぱんという事か？」

もう爆笑だった。アリサの中ではこれ以上ない程のヒットである。小次郎の言った奇妙キテレツな言葉の中でも、これは中々ない。

そんな風に笑うアリサに小次郎は不思議がるも、柔らかな笑みを浮かべそれを見つめた。

こうして、その日の朝食も笑顔で終わりを迎えたのだった。だが、アリサの心の底には、まだ不安が燻っていた……。

「トレーニング？」

「うん……セイバーと一緒にね」

「そうなんだ。それで今日から始めるの？」

いつもの昼休み。屋上で風を感じながらの食事時、なのはが言い出した「これからあまり遊べなくなるかも」の発言に、アリサとすずかが尋ねた事に対してなのはが答えたのが、それだった。

アリサが確認するように問いかけ、すずかが遊べなくなるとの言葉から、今日からとそう判断したのだろう。

その言葉になのはは無言で頷く。それにすずかはどこか寂びしそうな表情。アリサは、なのはが何故そんな決断をしたのか、何となく察していた。

（なのはも不安なんだ……）

自分が感じた取り残される感覚。あれをきっとなのはも感じたのだろうとアリサは思った。だからこそ、アリサは力強く言った。

「いいじゃない！　自分が決めたなら頑張ってやりなさいよね！　アタシも何か始めてみるから」

（アタシも負けない！　絶対置いてかれるもんか！）

「あ、アリサちゃん……うんっ！」

（アリサちゃんも、なんだね……一緒に頑張ろう、アリサちゃんっ！）

その言葉に込められた思いを察し、なのはも笑顔で頷く。互いに

笑顔を見せ合う二人を、すずかだけが不思議そうに見つめていた。
だが、満面の笑顔のなのはとアリサに、すずかも結局笑顔になるのだった。そして、せめて一週間に一度は三人で遊ぼうという提案を出したすずか。
それが二人に受け入れられると、すずかは安堵の表情を浮かべるのだった。

その日、家に帰ってくるなり、アリサは小次郎に対してある事を告げた。

「じょぎんぐ？」

「そ。早朝の運動って体にいいらしいの。だから、明日からするわ」

アリサの提案に、小次郎は何やら思案顔。それを見て、アリサは断言する。そう、それは自分の決意。そして、子供っぽい抵抗。

「でも、早朝だって何かと物騒でしょ？　だから、あんたが護衛なさい」

「……護衛なら、鮫「あんたがやるのっ！」……承知した」

裂帛の気迫で告げるアリサに、小次郎は従った方がいいと思い、反論を諦めた。
早朝にやるという事は、高町家での鍛錬に行けなくなると考えた小次郎。その事が顔に出たのか、どこか寂しげな表情をしていた。
それを見て、アリサが顔を背けてこう続けた。

「でもそれは、あんたがなのはの家で訓練してからでいいわ。ただし、それが終わったらすぐに帰ってきてアタシの護衛よ。いい？」

その発言に、小次郎はアリサの考えのキッカケを悟ったが、それがアリサの嫉妬から生まれたものとは思わず、ただ帰りが遅くなった事に対して寂しくなったと勘違いしていた。

とはいえ、アリサの不安を感じ取った事に変わりはないので……。

「……気を遣わせてすまぬな」

「別にいいのよ……明日からよろしくね」

そう言ってアリサは屋敷の中へと入っていく。その後ろ姿を見送りながら、小次郎は笑みを浮かべる。

出会った当初は、どこか不安定な心をしていたアリサ。それが、今や他者に気を配るようになっていた。その成長を感じ、笑っていたのだ。

（男子、三日会わずば剋目して見よ、とは言うが、女子も似た様なものよ……子を持つ親の気持ちとはこうであるか）

自分の考えが親のように思え、小次郎は心底おかしそうに笑う。

それを夕日がただ黙って見つめていた。

ーーー

空白期という幕間。こんな感じに書いていこうと思います。

やはり戦闘描写が苦手です。書けてもこんな感じに短い……。

でも、やはり書いて思うのは、こんな日常を書く方が俺にはまだ向いてると感じる事です。

……Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編、大丈夫か？

鼓動編（無印ｖｅｒ）

「バルディッシュ、セットアップ」

”セットアップ”

フェイトの体を包み込む魔力の光。それがほぼ一瞬で衣服へ変化し、フェイトを包む。

それを見て、ランサーはしきりに感心していた。無論、バリアジャケットにではなく、バルディッシュにである。

リニスが完成形だと胸を張っただけあり、それはランサーの目から見ても良い出来と思えたからだ。

「じゃ、早速やるか」

フェイトがバルディッシュの感触を確かめたのを見計らって、ランサーはそう笑って言った。

いつもの訓練。ただ、実戦形式は最後。それまでは、リニスとランサーによる戦術の講義。死線を何度も越えたランサーの話は、何にも勝る生き残る術であり、リニスはもとよりアルフですら、その話に聞き惚れる程の内容の英雄譚なのだ。

まあ、ランサー本人はそんな気は更々ないし、意図的に話していない部分もある。

ランサーの話が終われば、次はリニスによる魔法を用いた戦術の話に変わる。

これはランサーも興味を持っていて、特に設置型の魔法を聞き、ルーンと組み合わせられないかと本気で考えているぐらいだ。

しかし、ランサーは魔法が使えない事が分かり、それは幻と消え

た。

そして、講義が一段落すると、ランサーとアルフが食事を要求。
それに苦笑しながら動くリニスに、手伝いを買って出るフェイト。
ここまでがいつもの流れ。ランサーとアルフによる肉の奪い合い、
それを何とかしようとするフェイトと、楽しそうに見つめるリニス。
そんな風に、時間は過ぎる。だが、その流れは確実に何かの始まりを運び始めていた。

槍騎士、赤狼に語る

「ま、今日はここまでだな」

「……ですね」

ランサーの視線の先には、大の字になって倒れているアルフと、
バルディッシュを支えに何とか立っているフェイトの姿。
リニスは床に座り込み、疲れながらも笑みを浮かべていた。

ランサーとの戦いは、フェイト達にとって得る物ばかりだった。
魔法が通じない相手に、どう対処すべきか。もし、勝てないならどうすればいいのか。そんな事を即座に判断し、実行しなければ、待っているのは敗北という名の死。
無論、非殺傷の概念や次元世界の常識はランサーも知っている。
だが、彼は言う。

「追い詰められた奴が、そんな事に構ってくれると思うな」

そうバッサリと切って捨てた。そもそも、戦うのに自分の命を賭けない事自体、ランサーには信じられない事なのだ。

故に、ランサーが叩き込んでいるのは、勝つ方法ではなく負けない方法。如何にすれば、格上を相手にしても負けずにすむか。どうすれば逃げられるかを徹底的に教え込んでいた。

フェイトはランサーに、持ち前のスピードを見出され、アルフと共に前衛としての心構えと役割を教え込まれ、リニスには司令塔としての重要性と後衛としての弱点を示唆された。

「撤退は負けじゃねえ。立派な戦術だ。どんなに笑われても、侮辱されてもいい。とにかく生きろ」

ランサーはそう三人に告げ、最後にこう締めくくった。

「生きて生きて、最後に勝って笑うのさ」

獰猛な笑みでそう言い切ったランサーに、フェイト達は何も言えず、ただそのランサーの顔を見つめるだけだった。

三人は知らない。それがランサーの本来の戦い方ではない事を。誰よりも逃げを打つ事を好まない事を。

突然だが、ランサーは戦いが好きだ。それと同じぐらい宴会が好きだった。気に入った相手との語らいは、何にも勝るランサーの楽しみの一つなのだ。そして、この日は……。

「「バルディッシュ完成おめでとー！」」

「お、おめでとう……」

バルディッシュ完成という宴会の名目があった。製作者であるリニスへ向かって声を掛ける三人だったが、ランサーとアルフのテンションに、若干気後れ気味のフェイト。そんな三人に、リニスは微笑み一つ。

テーブルには、リニスの作った料理が所狭しと並んでいる。肉料理が多いのは、ま、ご愛嬌という奴である。言い終わるや否や思い思いに手を伸ばすランサーとアルフ。その標的は肉料理。まさに肉食獣そのものだ。

「まったく、少しは落ち着いて食べてください」

「いいじゃないか。本当にめでたい事なんだか…って！それ、アタシの！！」

「へ、余所見する方が悪いんだよ」

子供っぽい笑みを浮かべ、アルフの手にしていた鳥の唐揚げを口に入れるランサー。それに怒り心頭と言った顔で迫るアルフ。

そのやり取りは、まるで似た者同士というか兄妹みたいというか。とにかく、それをフェイトもリニスも呆れながらも、どこか笑顔で見つめる。

そして、フェイトは思う。この場に母が居れば、どれだけ楽しいのだろうか。しかし、今プレシアは体調を崩し、自室で療養している。リニスとランサーが世話しているので、大丈夫だとは思っているが、それでも会いたいと思ってしまう。

（でも、ダメ。ランサーが言ってた。母さんは私を大事にしてるから、病気がうつらないように、滅多に会っちゃいけないんだって）

ランサーからそれを告げられた時、フェイトは嬉しくて思わず泣いてしまった。それをランサーが気まずそうにしながら、頭を撫でてくれたのを、フェイトは今でも覚えている。

リニスが姉なら、ランサーは兄だとフェイトは思っている。

（アルフは……妹、かな？）

そう考え、フェイトは笑みを一つ。いつか必ず、この輪の中に母を加えてみせる。そんな事を心に強く誓うのだった。

「具合はどうだ？」

「良くはないわね」

ルーンを刻まれた部屋の中央にあるベッドに、プレシアは横たわっていた。

内側には、力の太陽を。外側には、守護を意味する大鹿を刻み、免疫力と生命力を増加させている。

ランサーは、ルーン魔術を使ってプレシアの体を出来る限り休め、アリシアの事をリニスに任せる事を提案した。無論、自身が持つ魔術の知識を教え、それと魔法技術を組み合わせる研究も、既にリニスが始めている。

ランサーが狙ったのは、プレシアの暴走阻止。それと、フェイト達との和解だった。体を病魔に蝕まれ、精神的にもプレシアは追い詰められていったのだと、ランサーは読んだ。

故に、愛する娘を突破口に、自分を見つめ直す時間を与え、以前

の状態に近付けようとしていた。勿論、それだけではない。可能ならばアリシアもどうにかしたいと考えている。何故ならば、彼女は……。

（フェイトの姉ちゃん、だからな）

未だに互いの存在を知らない二人ではあるが、もし可能ならおそらく助けたいとフェイトは思い、アリシアもまたフェイトに会いたいと願うだろう。アリシアが喋れるのなら、きっとそう告げる。

そうランサーもリニスも思っていた。だからこそ、余計プレシアを死なせる訳にはいかなかった。

（母親が、自分のせいで死んじまうなんて……させるかよ！）

もしアリシアが目を覚ました時、母親が余命幾ばくもなく、それが自分のためだと知ればどうなるか。

今度はアリシアが、プレシアと同じ気持ちになるかもしれない。そこまで考え、ランサーは首を振る。

そんな事はないと。自分が絶対に阻止してみせる。例え、この身が朽ち果てようとも――――！

そんな事を思っているランサーを、プレシアは黙って見つめていた。

自分が人形と内心呼んでいるフェイトを守り、使い魔でしかないリニスを欲しがり、煩いアルフをからかい、そして――――。

（私を助けようとする、なんてね）

プレシアはそう思い、微かに笑う。それは嘲笑。自分に対する嘲り。

己を省みず、ただアリシアの事だけを考えていたはずだった。でも、ランサーの一言がそれを間違いだと気付かせた。

アリシアが生き返っても、自分が共に過ごせないなら、それに何の意味がある。あの楽しかった日々を取り戻すために、自分は行動していたのではなかったのか。そう気付いた時、プレシアはやっと冷静に自己を見つめる事が出来た。

そして、思い出したのだ。かつて、アリシアと約束した事を。だからこそ、ランサーの提案を受け入れ、こうして療養しているのだ。

「おかしなものね……」

「あん？」

「何で、こんな大事な事に気付かなかったのかしら」

プレシアの言葉に、ランサーは僅かに考える。そして、心底呆れたように返した。

――難しく考えすぎなんだよ、てめえは。

そんなランサーの言葉に、プレシアはそうねと返し、思いを馳せる。あの失った日々。それが取り戻せる。そんな予感を感じながら……。

アルフは困惑していた。ランサーに、お前に話しておきたい事があると言われ、ランサーの部屋に呼び出されていたからだ。

その時の真剣な表情を思い出し、アルフは顔を赤める。が、それを首を振って戻して、呟く。

「一体何だってのさ……。あいつはリニスが欲しいって言ったって、あの女が言ったじゃないか」

この前、久しぶりにフェイト達の前に現れたプレシアは、リニスを見つめてそう告げた。

そして、リニスはランサーの傍でプレシアの世話にあたっている。

今のリニスの様子は、見ていて分かるぐらい嬉しそうだ。アルフもリニスと同じく元は動物だ。だからこそ、余計分かる。リニスが女としてランサーに惹かれている事は。

（バカらし……何でアタシ、こんな事考えてんだろ）

アルフにとって、ランサーはフェイトや自分を鍛え、食事を取り合い、よくちょっかいを出してくる奴でしかない。

決して、戦っている時は恐ろしいけどカッコイイとか、何だかんだで自分の好きなものは譲ってくれて優しいとか、たまに可愛いとかいい女だとか言われて嬉しいとか、思っていないのだ。

そんな色々を思い出し、アルフは再び首を振る。そして、意を決してランサーの部屋へ入った。

「呼ばれたから来たぞ～」

「おう。ま、ここに座れよ」

ランサーの部屋は、ほとんどモノがない。正確には、ベッドと時計以外ない。物欲がないのか、ただ何かを置くのが嫌いなのか知らないが、とにかくランサーの部屋は綺麗だった。

そんな事を思っているのが分かったのか、ランサーは笑って告げ

た。

「欲しいもんはあるが、暇がなくてな。何せ、今は色々忙しいしよ」

「そんなもんか？」

「そんなもんだ」

その割には、よく昼寝している所を見かけたりする。そうアルフは思って、言うのを止めた。これでは、いつものように雑談&からかいの流れにいく。そう感じて視線をランサーに送る。

それをランサーも分かったのか。先程までの軽い雰囲気は鳴りを潜め、たまに見せる真剣な表情に変わる。

「話ってのは、簡単に言えば今後の事だ」

ランサーはそう言って、低い声でただしと付け加えた。その前にしなければならない話がある、と……。

話を聞き終わり、アルフは感情のやり場に困っていた。大事なフェイトを道具としか考えていなかったプレシア。その彼女がフェイトの姉に当たる少女を想って行動し続けていた事。そして、その無理が祟って体を弱らせている事。それを何とかするべく、リニスとランサーが努力している事。

プレシアへの怒りは当然ある。だが、ランサーに言われた言葉が、それを素直に出させないでいた。

――――アリシアがフェイトで、お前がプレシアならどうする。

そう。どうしようもない怒りを出せないでいたのは、理解出来てしまったから。なぜプレシアが凶行に走ったか。どうしてフェイトを見てくれなかったか。

（辛かったんだ、あの女も）

自分が失った愛する娘そっくりの存在。それから慕われる度に、心配される度に、己の過去を突きつけられている気分になっていたのだ。

だから、フェイトを娘ではなく道具として見なければならなかった。そうでもしなければ、自分の心が壊れてしまうと。

それだけ考えて、アルフは涙ながらに叫んだ。

「でも！辛いのはあの女だけじゃないっ！フェイトだって辛いんだよ！」

頑張っても頑張っても、プレシアはフェイトを見てくれない。どこまでいっても声さえ掛けてもらえない。それでもフェイトは、いつも決まってこう言うのだ。

――――きっと、今度は笑ってくれる。

そんなフェイトの表情を思い出し、アルフは突然立ち上がり、喉が張り裂けんばかりに吠える。

それは、最早言葉になっていない。しかし、そこに込められたものはランサーには伝わった。フェイトの想いが天に届けと。純粋な願いが、無垢な祈りが叶うようにと言わんばかりの強い思い。それが、アルフの全身を通して流れているように感じられたからだ。

そんなアルフの咆哮を聞きながら、ランサーは静かにアルフの頭に手を置き呟く。

「もういい。もう分かった。だから、泣くな」

――女に泣かれるのは、苦手なんだよ。

その言葉に、アルフは我に帰る。ランサーはただ気まずそうに頭に手を置いているだけ。それだけ、それだけのはずなのに、アルフは涙が止まらなかった。

それは、さっきまでの涙とはまた違う涙。先程のものが悲しみの涙なら、今流れているのは、嬉しさの涙。自分と同じ思いを持っている奴がここにいる。フェイトを、リニスを、自分達を絶対に裏切らない存在がここにいる。

そう思って、アルフは流れる涙を拭いながら、笑みを浮かべるのだった……。

ややあって、アルフが落ち着きを取り戻したのを確認し、ランサーは本題を告げた。

それは、これからの事。フェイトの地力を上げ、どんな相手にも負ける事がないようにしていく。そして、アルハザードなんていう不確かなものじゃない方法で、アリシアを助けられるものを見つけ出す。

それと同時に、プレシアの体を治す術を見つけなくてはならない。ルーンで出来るのは、精々延命治療のようなもの。根本的な解決策を見つけなくてはいけないのだ。

「で、お前にも協力してもらいたくってな」

「フェイトに教えないのはやっぱり……？」

「あ～、まあ、なんだ……出来るなら最後まで知らねぇ方がいい」

そうアルフに告げるランサーは、どこか遠い目をしていた。その目に、アルフが感じたものは哀しみ。きっとランサーも、この事で思う事があるのだろう。

アルフはそう考えて、不敵に笑う。それは、アルフなりの励まし。いつも自分をやり込めてくれるランサーへの、ちょっとした仕返し。

「とか何とか言ってさ、話すのがメンドーなだけだろ」

「はっ、んなワケね～だろ」

「いや、そうだね。大体あんたはさ……」

愚痴を言い始めるアルフ。それをあしらいながらも、たまにムキになって反論するランサー。それにアルフもヒートアップし、口論は三十分も続いた。

その終止符は、アルフのお腹の音。時計を見ればそろそろ夕食時。毒気を抜かれたからか、ランサーも笑みを浮かべてアルフを見る。

そんなランサーの笑顔が気に入らなかったアルフは、鋭い犬歯を見せて尋ねた。

「何さ？」

「いや、やっぱ可愛らしいって言うんだよな、この場合」

「なっ？！」

「ま、お前もリニスもいい女だぜ。毛色は違うがな」

二つの意味で、と続けてランサーは笑う。アルフはそんなランサーに、掴みかかるように迫る。

それをかわし、部屋から駆け出すランサー。それを必死に追い駆けるアルフ。逃げながらもからかうランサーに反論しつつ、アルフは思う。

（やっぱアタシ、こいつ嫌いだよ！）

そう思いながら追い駆けるアルフ。だが、その顔はどこか楽しそうだった。

――――――

鼓動編（A' ｓｖｅｒ）

朝の日課である洗濯物を干しながら、アーチャーは視線を感じ振り向いた。そこには、既にお馴染みとなった猫の姿があった。

「ああ、待っていたぞ」

アーチャーは言うと、いつもの小魚ではなく、用意してあった御椀を猫の前に置く。そこには俗に言う、ねこまんまが入っている。朝食の残りを使ったものだが、アーチャーは捨ててしまうよりは、有効活用するべきと考えて用意したのだ。

「残り物ですまないが、味は保障する。食べてくれ」

そうアーチャーが言うと、それを理解したのか。猫は渋々と言った雰囲気で食べ始めるが、一口食べて動きが止まる。

それに、アーチャーの表情が強張った。まさか、自分の料理は動物には通用しないのか。そんな考えが一瞬過ぎり、思い直す。

いや、自分の料理はあのトラにも通用したのだ。ならば、同じ猫科の生き物に通じぬはずはない。

アーチャーが自分の料理に絶対の自信を取り戻すと同時に、猫が先程よりも速い速度で食事を再開した。

それを安堵の表情で見つめるアーチャー。だが、今日はこれで終わりではない。はやてに頼まれた事を遂行しなければならないのだ。

その内容とは……。

弓兵、監視者と対峙する

「な、アーチャー。聞きたい事があるんやけど」

「どうした？分からない問題でもあったか」

そう答えて、アーチャーは畳んでいた衣服をテーブルに置く。

今年、本来なら学校に通うはずだったはやては、通信教育という形で勉学に励む事にした。学校に行けない事もないが、無理して何かあったら大変だとはやて自身が決断したのだ。

本音は、アーチャーと離れたくないという事だったのだが、それを素直に言える程、はやては精神的に幼くなかった。

「ちゃう。勉強の事やなくって、猫の事や」

「……問題に集中しないか」

「それがちょう気になってな。あの猫ちゃん、オスなんかメスなんか聞いてなかったな～、て」

はやての言葉に、アーチャーは呆気に取られるが、確かに自分も確かめてはいない事を思い出し、呟いた。

「言われてみれば確かに。確認していなかったな」

「な、そやから名前決めるためにも、明日確認しといて。もう、大分懐いたんやろ？」

はやての言う通り、この三週間小魚や干物などを与えてかなり警戒心は薄れているが、それも以前と比べればだ。まだどこか、心を

許していない気がアーチャーにはしていた。
理由は猫の視線。大分マシにはなったが、未だにこちらを見る視線はどこか鋭い。おそらく、人間に余程酷い目に合わされたのだろうと、アーチャーは推察していた。

密かに飼い猫にしようと企むはやてに、何度となくアーチャーは釘を刺しているのも、それが根底にある。
距離を置いて接するべきだ。それがアーチャーの結論。よって、名前をつけるのは反対しないが、飼い猫にするとなると話は別なので……。

「分かった。明日何とか確認を取っておこう」

「うん。頼むな、アーチャー」

「だが、性別が分かったからと言って首輪を買うのはダメだ」

「な、何言うて「ホームセンターのチラシに赤丸が打ってあった。あれは君の仕業だろう」

「しもた！……隠すの忘れとった」

見事に、チラシのペット用品のあれこれにチェックがされていた。それを見て、アーチャーは軽く笑みを浮かべてはいたが、それをはやてが知る事はなかった。
その後もはやてと雑談しながら、アーチャーはいつものようにその日を過ごした。

（さて、そろそろいいか）

御椀にあった餌も綺麗に無くなり、猫は満足そうに舌なめずりまでしている。それを好機と見たアーチャーは、出来るだけ猫を怖がらせないように持ち上げた。

そして、その陰部を確認して――暴れ出した猫に手を激しく引っ掻かれた。

「ぬ、やはりまだ触るのは早かったか？」

威嚇の声を上げ、アーチャーを睨む猫。心なしか、顔が赤いようにアーチャーは思った。

「猫とはいえ、女性は女性か。……すまない」

なんとなく感じた罪悪感を振り払うように、アーチャーは言った。その言葉に気を落ち着けたのか、猫は幾分か機嫌を戻したようで、アーチャーを見る目がいつものものに近くなった。

それに、アーチャーも息を吐く。これで猫が二度と来なくなれば、はやてに何を言われるか分からなかったからだ。

安堵するアーチャーに猫は一鳴きすると、塀に飛び移り、歩いてそのままどこかへ消えてしまった。

ここ最近の去り際は、こんな感じだな。そんな風に思いながら、アーチャーは残りの洗濯物を干していくのだった。

「それで、メスなんか」

「ああ。おかげで名誉の負傷だ」

「いや、チカンしたから当然やろ」

「誰のせいだと思っている」

「はやてはまだ危ないから、私に任せておけ……って言うたアーチャーのせい」

微妙に似ているモノマネをして告げるはやてに、アーチャーは反論を諦めた。こうなると、結局はやてのペースになり、自分が折れなくてはいけなくなるからだ。

最近、アーチャーははやてとの論戦勝率が七割を切ったように感じていた。まぁもっとも、それは自分のせいなので、自業自得なのだが……。

「じゃあ、名前は女の子っぽくせなあかんな！」

「……好きにしたまえ」

もう何を言っても無駄だ。そうアーチャーに思わせる八神はやて。現在、小学一年生。

「う～ん……フェリシア、はちょうちゃうな。……チャムチャムやと、長いし」

あ～でもないこ～でもないと言いながら、楽しそうに笑うはやて。その顔を見て、アーチャーも笑みを浮かべる。

すると、そこへはやてが問いかけた。何かいい案はないかと。それに、アーチャーはやや考え、こう答えた。

「リン、と言うのはどうだ？」

アーチャーにしてみれば、それは他愛いや悪意しかない冗談だったのだが、それを彼女を知らないはやてが気付くはずはなく、何度かその名を繰り返して……頷いた。

「良しっ！それや！！」

「なっ？！」

驚くアーチャーを尻目に、はやては綺麗な名前だとアーチャーを誉めている。このままでは、リンと言う名で決まる。

そう考えた途端、どこからかあかいあくまの声で「猫に私の名前付けるなんて、いい度胸してるわね。待ってなさい。すぐそっちに行ってあげるから」と幻聴が聞こえた気がした。

そう思ったアーチャーの行動は迅速だった。まず、はやての前に立ち、その両肩に手を置いて真剣な眼で告げた。

「すまないが、その名はやはりやめてもらえるか」

「なんで？綺麗やし、ええ「頼む」やけ……ど……」

初めて見るアーチャーの真剣な表情に、はやては顔が火照るのを感じ、急いで俯いた。何故かそれをアーチャーには見られたくないと。更にそれを悟られないために、普段よりも大き目の声で告げる。

「わ、分かった。なら、他の名前考えてな」

その言葉に安堵したアーチャーは、善処しようと返してはやてか

ら離れていく。その足音を聞きながら、はやては顔を押さえていた。
やはり少し熱い気がすると、はやては感じた。

（何やろ……？風邪やろか？でも、体はダルないし……）

きっと恥ずかしかったのだろう。そう結論付け、はやては再び勉強に意識を向ける。

いつか、歩けるようになった時、学校の授業についていけるように。そう思って、はやては強い志を胸に、問題集へと挑むのであった。

図書館の前で、立ち尽くすアーチャー。彼は今はやてを待っていた。本来ならついて行くのだが、はやては自分で行ける所は一人で行きたいと、アーチャーを待たせて、中へと入っていった。

（用件は返却のみだし、そう心配する事もないか）

そう考え、アーチャーは笑みを浮かべる。少々過保護かもしれないと思ったからだ。

時折吹き抜ける春風が、日差しを浴びる体に心地良い。そうアーチャーが感じた時、周囲の空間が色褪せて、一切の音が聞こえなくなった。

「ほう……結界の類か。この世界に魔術師はいないはずだったのだが、私も耄碌したかな？」

解析せずとも、アーチャーにはこれが結界である事はすぐに理解出来た。過程こそ違え、世界が変わるように感じると言う点では、

彼の切り札と同じなのだから。
そんな風に軽口を叩きながら、周囲を警戒しつつアーチャーは気配を探る。

「お前は何者だ」

そんなアーチャーの目の前に、仮面を着けた男が突然現れた。その視線に、アーチャーは心当たりがあった。

「貴様か。ずっと私を監視していたのは……」

「……答えろ。お前は何者だ。なぜあの少女の下にいる」

仮面の男の言い方に、アーチャーが微かに表情を変える。それは怒りと嘲り。

「下にいる、だと？違うな。散々監視しておきながら、そんな事も分からなかったのか？」

「何？」

「私ははやての下にいるのではない……共にあるのだ！」

気合一閃。アーチャーは投影した干将・莫耶で男に斬りかかった。その鋭い一撃に、男が取った行動は回避でも防御でもなかった。

「何だと？！」

男の前に、バリアとでも呼ぶべきものが展開されていた。それが干将・莫耶の切っ先を防いでいる。そして、男から何か嫌なモノを

感じ取ったアーチャーは、即座にその場から離れた。
直後、そこに光の弾が殺到した。それを察知したアーチャーの行動に、男は感嘆の声を上げた。

「良く気付いたな。もう少しだったんだが」

「生憎、悪運は強くてね。こういう時の勘は良く当たる」

「成程な」

苦笑している男だったが、その体に隙はなく、アーチャーも責めあぐねていた。あまり手の内を晒したくないという思いと、相手の魔術が問題だった。
詠唱もなく、瞬時に展開出来る防御魔術など、アーチャーも聞いた事がなかった。あのまま押し切っていれば、おそらくあの盾は壊せるだろうが……。

（他にも何か隠していると思った方がいいな）

相手の出方も分からず、未知の魔術師相手に戦うには、状況が悪すぎた。何しろ、ここは結界の中。相手のテリトリーなのだ。
だからこそ、アーチャーは現状を打破する術を模索する。宝具クラスを投影すれば、この結果を破壊出来るだろう。だが、それはリスクが大き過ぎる。

「……一つ答えろ」

「何かな？」

「お前は……守護騎士ではないのか？」

「守護騎士？……ふっ、この身が騎士に見えるかね。私はただのしがない弓兵だよ」

「つまり、守護騎士ではないのだな」

「……もしそうだとしたらどうする」

アーチャーの声が一段と低くなる。そして、その身に纏う殺気もより濃いものへと変わっていく。

それに男は――構えをといた。

それに警戒を強めるアーチャーだったが、それを気にせずに男は言った。

「もうお前に用はない」

「おや……逃げるつもりか？」

「ああ、そうさせてもらう」

アーチャーの挑発を、アッサリと男は受け流し、その場から空に向かって――。

「飛んだだと……」

「一つだけ忠告する。あの本には関わるな」

「待て！あの本が狙いなら、何故奪いに来ない。いや、そもそもどうして監視に留める。その気になれば――」

アーチャーの言葉に答える事なく、仮面の男は姿を消した。それと同時に、色褪せていた景色が戻り、日常の音が甦った。
そんな中、アーチャーは先程の戦いで得た情報を整理していた。

（得られた情報は、守護騎士と言う言葉に……謎の魔術）

それに、とアーチャーは呟き、視線を空へと移した。

「あの本に関わるな、か」

それはつまりはやてに関わるなと言う事だ。そして、関わり続ける限り、またあの仮面の男が現れる。あの得体の知れない攻撃は厄介だが、勝てぬ相手ではない。アーチャーはそう感じていた。
次に戦う事があれば、必ず倒す。それだけの確信が出来る要因があるからだ。
それは、相手から感じた魔力量。確かに強大だが、それはあくまで人間としては、だ。加えて、戦い慣れはしているようだが、接近戦は不得手のようだった。
その証拠に、アーチャーの剣撃をかわせなかった。様子見と情報収集をするために加減した一撃だったが、相手はそれに反応できなかったのだ。ならば、この身で勝てない者ではない。

「アーチャー、お待たせ」

「……意外に遅かったな」

はやての声に、アーチャーは思考を止めた。それと共に、気持ちを日常に切り替え、何事もなかったように表情を作る。

「返却が並んどってな。それで時間食ってしもた」

「それなら仕方ないな。で、今日の昼は何にする」

いつもの様にはやての車椅子を押し始めるアーチャー。それに笑みで返すはやて。

穏やかな日差しの中、二人の声が楽しそうに響く。そうして離れていく後姿を、あの猫が黙って見つめていた……。

――――――

交流編その1

その日、すずかは図書館に来ていた。読書好きのすずかは、買うだけでなく、こうして手軽に本を読める図書館にもよく顔を出していた。

それに、付き添う形でライダーも来ているのだが、最近すずかはむしろ自分がライダーの付き添っているような感覚があった。

今も難しい専門書の辺りで本を探している。ライダーがよく読むのは、とても買えないような高価な本。

「……また貸し出し不可なんだろうなぁ」

すずかの視線の先には、大きな本をその場で読み始めたライダーの姿があった。

ライダーがその場で本を読むのは、大抵そういうケースなのだ。

どうして座って読まないのか、とすずかが尋ねた際、ライダーは座りに行く時間がもったいないと答えたから。

なので、今のライダーは完全に読者モード。おそらくすずかが声を掛けるか、本を読み終わるまでその場から動かないだろう。

そんな光景に笑みを浮かべ、すずかも再び周囲の本を見渡し、興味が湧く物がないか探し始めた。

その時、視線の先に車椅子の少女が映った。その少女は、すずかも何度か見かけた事がある。

どうやら、棚の中段にある本を取ろうとしているらしい。だが、車椅子の上に背丈が低い事もあり、手が届かない。

「あのままじゃ……危ない、よね」

そう思うや否や、すずかは踏み台を探した。そしてその少女の近くに立って、目的の本を手に取って少女に手渡した。

「はい。これだよね？」

「あ、どうもありがとうございます」

その独特の喋り方に、すずかは若干驚き、そして笑みを返す。

「どういたしまして。でも、ダメだよ。見てて危なかったから」

少しドキッとしちゃった。そうすずかは続けた。それに、少女は少しバツが悪そうに頬を指で掻く。

「ほんま助かりました。実はわたしも、これ、ちょう危ないかな？って思っとって」

「ホント何もなくてよかったよ」

「ほんまにありがとうございました」

そう言って頭を下げる少女に、すずかは微笑み尋ねる。

「ね、お名前教えてもらってもいい？」

「えっ？」

そんな事を聞かれるとは思わなかったのか、少女の顔が驚きに変わる。自分も逆の立場ならそうなるだろうな、と想像し、またそんな反応を好ましく思いながら、すずかは自分の名を告げた。

「私、月村すずかって言います」

「あっ……ええっと、わたしははやて。八神はやて言います」

「はやてちゃん、だね。……うん。可愛い名前」

「そんな……。それ言うたら、月「すずかでいいよ」……すずかちゃんもキレイな響きやんか」

苗字で呼ぼうとするのをやんわりと遮り、それを受けたはやての言葉に、すずかは照れ笑い。それを見て、はやてが更に誉め始めて数分で、二人のやり取りはお開きとなる。

はやての背後にライダーが現れたのだ。それに驚き固まるはやて。小声で「メイドさんや……」と呟いているが、その目はしっかりとライダーの胸部に注がれている。

「スズカ、そろそろお昼です」

ライダーの言葉に、すずかは手元の時計に目をやる。確かに時刻は正午を告げようとしていた。

「わかった。じゃあはやてちゃん、また今度」

「うん。またな、すずかちゃん」

互いに手を振り合い、別れる二人。ライダーは、そんな様子を眺め、不思議がる。

すずかの交友関係を既に把握しているライダーにとって、はやては未知なる存在だったからだ。

「スズカ、彼女は？」

「はやてちゃん。今日知り合ったばかりの子」

「そうですか……」

ならば納得です。そう呟きライダーは歩く。その手は、すずかと繋がれていた。彼女達は知らない。それが、とても大事な出会いになる事を。

令嬢、夜天の主と友になる

「少し遅くなってしまったか」

今日は休日という事もあり、はやてを図書館に送り、アーチャーは一人買い物を済ませていた。

本当ははやても行きたがっているのだが、アーチャーは混雑が予想されるため、周囲の迷惑になりかねないと、はやてを説得し、祝祭日や休日等の日は、自分一人で買い物を済ませる事にした。

まあ、その反面はやてが色々と要求する事になり、アーチャーに迷惑を掛けているのだが、アーチャーもはやてもそれを互いに楽しんでいる節がある。

そして、今日はこの後、はやてが欲しがっているゲーム機を買いに行く事になっている。そのため、軽く摘める物をと思い、アーチャーはサンドイッチを作ってきたのだが、そのために少し時間を食ってしまったのだ。

「ん？……上機嫌だな」

アーチャーの視線の先には、笑顔で手を振るはやての姿があった。その様子に、軽く意外性を感じたアーチャーは、疑問を浮かべたまま車椅子の後ろに立つ。

「ちょう遅刻や」

「すまない、簡単な昼食を作っていたのでね。後で公園ででも食べよう」

「そか。ま、今日は気分がええし、大目に見たる」

そう言って、はやては再び満面の笑顔を見せる。それは、アーチャーの見せたバスケットの中身に期待しているだけではない。

アーチャーはそう思い、聞いて欲しそうに自分を見つめるはやてに苦笑しつつ、尋ねた。

何か良い事でもあったのか、と。それにはやては、よくぞ聞いてくれましたとばかりにすずかとの出会いを語り出した。

それを合図に車椅子は動き出す。柔らかな日差しを浴びながら、カラカラと音が響く。その音に混じってはやての声が聞こえている。

「で、今に至るっちゅーわけや」

「成程、良く分かった。で、もうそろそろお目当ての店だぞ」

どこか笑みを浮かべ、アーチャーは視線ではやてを促す。その先には、ゲームショップがあった。

それを見て、はやては急かす様に視線をアーチャーに向ける。そ

れに応じ、アーチャーは車椅子の速度を上げる。
それに楽しそうな声を上げるはやて。その声に悪戯じみた笑みを返し、アーチャーは更に速度を上げる。
それにははやても驚くが、即座に急停止を掛けるアーチャー。それでもはやてが落ちないようにしている所が彼らしい。

「何してくれるんや！」

「何、君が楽しそうだったのでね。少しばかり刺激を増やしただけだ」

満足して頂けたかね？そう笑うアーチャーに、はやては頬を膨らませる。仲の良い兄妹のような姿がそこにはあった。

麗らかな昼下がり。庭にあるテーブルに腰掛け、すずかはライダーが淹れてくれた紅茶を飲みながら、春風を感じていた。
その膝には、猫が一匹心地良さそうに眠っている。それは向かいに座っているライダーも同じ。膝に乗った猫にどこか躊躇いながらも、その背を撫でている。
月村家は猫屋敷と呼んでもいい程猫がいる。その世話もノエル達の仕事の一つなのだが、ライダーはこの仕事だけが唯一苦手だった。

「はやてちゃん、か。また会えるといいな」

「会えるでしょう。彼女もよく見かけます」

すずかの呟きに、ライダーはそう答える。彼女は、平日も暇を見つけては図書館を訪れている。なので、はやての事も知ってはいる。

だが、彼女の傍にアーチャーがいる事には気付いていない。受肉し、存在が完全に確立された状態では、サーヴァントと言えど気配は人とそう大差ないものになってしまう。
それにいかなる運命の悪戯か、ライダーがはやてに遭遇する時に限って、はやては返却のみで帰ってしまうのだ。よって、待っているアーチャーと鉢合わせる事もなかった。

「そうだね。……ライダーも大分手馴れてきたね」

「そうでしょうか？未だに、これだけはファリンに勝てません」

それ以外なら圧勝なのですが、と言いながら、ライダーは猫の喉を触る。それが嬉しいと言わんばかりに、猫はご機嫌な声を出す。

「そうだね。ライダーに勝てる唯一の仕事だって、ファリンも自慢してたっけ」

「それ以外でも頑張って欲しいけどね」

「お姉ちゃん……」

突然現れた忍は、当然のように空いてる椅子に座り、紅茶を無言で催促する。ライダーもそれを分かっているので、座った時点でカップに紅茶を注ぎ出している。
程なく出てきた紅茶に、満足そうに頷き、忍はカップに口をつける。

「もう、お姉ちゃんったら自分で注ごうよ」

「人に淹れてもらうから美味しいんじゃない」

それに、一応ライダーもメイドなんだからと、忍は笑う。ライダーもその言葉に頷き、すずかにこう告げた。

「そうですよスズカ。シノブはものぐさな「っ！……ちょっとライダー！」」

紅茶を噴出しそうになりながら、忍はライダーを軽く睨む。それに、何でしょうと言いたそうな顔でライダーは首を傾げる。それに更に不機嫌な眼差しを向ける忍。そして、それを笑いを堪えながら見ているすずか。

「誰がものぐさよ、誰が！」

「シノブですが……？」

「違うでしょ！」

「何がです？」

そんなやり取りが展開され、すずかはもう限界だった。堪えていた声を出し、その笑い声に二人は口論を止めた。すずかが笑う事は珍しい訳ではない。

だが、声を上げて笑う事はあまりない。今もお腹に片手を当て、片手で何とか声を殺そうと口を覆って笑っている。そのためだろう、膝で眠っていた猫が起き出し、どこかへ行ってしまう。

それを眺めながら、すずかは申し訳ない気持ちを抱きながらも、声を抑える事が出来ずにいた。

そんなすずかを、忍とライダーはやや唖然とした表情で見つめていたが、やがてそんな風に笑うすずかに、どちらともなく微笑む。

「ま、もういいわ。何か気が削がれたし」

「同感です。スズカは心を癒す力でもあるのでしょうか？」

「さて、ね。……ライダー、もう一杯もらえる？」

「ええ、分かりました」

穏やかな昼下がり。月村家の庭を爽やかな風が吹き抜けていた……。

それから一ヵ月後、図書館に楽しげに語らうすずかとはやての姿があった。あの後も度々出会い、本の話をするようになり、もう友人と呼んで差し支えない関係になっていた。

「今日もライダーさん来てへんの？」

「うん。気を利かせてくれてるんだと思う」

そう。二人が楽しげに話すようになってから、ライダーは意図的にすずかと図書館に行く事を避けるようになった。

それは、なのは達と違って中々会う事が出来ないはやてに配慮した事と、以前からの懸案だった、自身の事を調べるための時間を取るためでもあった。

「そか。優しい人やな、ライダーさん」

「それ、ライダーに伝えとくね。きっと照れると思うけど」

「あ、ええなぁ。照れるライダーさんとかわたしも見たい」

はやては、既にライダーとも会話する仲になっていた。と言っても平日にたまに会えば、くらいのものだが。

ちなみに、何度かその胸に手を出しそうになって踏み止まった事が多々ある。もっとも、はやてが気付いていないだけで、ライダー自身はそんなはやての葛藤を見ていたのだが、何も言わないだけだったりする。

「そや。今度、わたしの家に遊びに来て。面白いゲーム買うたんよ」

「そうなんだ。……じゃあ、来週の日曜日は大丈夫？」

「よっしゃ。なら、来週な」

「うん。来週ね」

はやてが出した小指にすずかも小指を絡ませ、互いに笑顔を見せる。

「いつか、アリサちゃんやなのはちゃんにも会わせたいんだけど……」

「あ～、良く話してくれるお友達やな。写真で顔は知っとるし、わたしも会いたいけど……」

そう言って二人揃って苦笑い。二人の共通の話題はやはり本。だがアリサはともかく、なのははあまり本を読まないイメージがある。

そうすずかは思っている。それを聞いているはやても、一人会話に入れずオロオロするなのはを想像した。
二人の苦笑いは、つまりそういう事であった。

「あ、でもゲームはなのはちゃんも好きみたいだから」

「おお、なら何とかなるか」

そう言ってまた笑う。今度は水を得た魚のように、元気な姿のなのはを思い浮かべたから。

「なんや、わたし達けっこうヒドイ事考えてる気ぃする」

「ふふ、同じく」

そう言って笑みを浮かべ合いながら、すずかは思う。きっと、アリサやなのはとも、はやては仲良くなれると。
何しろ、あのライダーと物怖じせずに話す事が出来るのだから。
なら、アリサやなのはにも同じように接する事が出来る。そうすずかは結論付け、いつか来るだろう日々に思いを馳せる。

はやてを加えた四人で楽しく過ごす、そんな光景に……。

ーーー

原作ではどうか知りませんが、ライダー効果ですずかが図書館に来る率アップ。

そのため、はやてと遭遇する可能性が上がり、こうなりました。

空白期（H&

笑しつつ洗濯物を干していくアーチャー。
時間から考えて、そろそろ来る頃かと思い、アーチャーがはやてに食事の入った皿を渡す。それは、みーちゃん用にされた皿。新しく買うと言って聞かなかったはやてだったが、アーチャーの「無駄遣いは許さん」の一言に沈黙。
それに二人では皿を沢山使う事もないので、一枚ぐらいみーちゃん用にしても問題は無かった。そのため、八神家に”みーちゃん皿”と呼ばれるものが出来たのだった。

「おっ、来た来た」

可愛らしく声を出しながら、塀を降りるみーちゃん。それをいつも以上に笑顔で迎えるはやて。それに気付いたのか、みーちゃんはどこか不思議そうに首を傾げた。
が、はやてが皿を置くとそれもすぐに元に戻り、食事に駆け寄り食べ始める。

「お～、相変わらずよ～食べるなぁ」

「そうだな」

「う～ん……でも、昨日はもうちょうゆっくり食べとった気ぃするなぁ」

はやての呟いた何気ない一言に、アーチャーも日々の事を思い出し、注意深くみーちゃんを見つめた。確かに、初めて自分の作った食事を与えた時と今では、食べ方が違うように感じた。

（あまり気にしていなかったが、雰囲気もどこか時折違う気がするな）

それが何故かは分からなかったが、アーチャーはそれを頭の片隅で覚えておく事にした。どうしてか、流していいような気がしなかったのだ。

この時から、アーチャーの中で再びみーちゃんへの疑念が生まれ始めた。そして、それが思わぬ形で功を奏すのだが、それはまだ当分先の話。

やがてみーちゃんが食べ終えたのを見て、はやてが両手を広げて微笑みかける。それに応じてみーちゃんがはやてに近付いたところで……。

「おいで～、みーちゃん」

「っ？！」

「おわっ！？　……どないしたんやろ」

呼びかけに驚いたのだ。明らかに、呼ばれたのが自分の名前であると理解したかのように。それにはやても驚いた。だが、はやては突然呼びかけた事に驚いたとしか感じなかったのか、そのまま不思議そうにみーちゃんを見つめた。

するとみーちゃんも立ち直ったのか、再びはやてに向かって近付き、その膝に乗った。それをどこか訝しげに見つめるアーチャー。

しかし、その視線を直接みーちゃんに向ける事はせず、洗濯物を干しながらそれに隠れるように見ていた。そして、はやてと戯れるみーちゃんを見つめながら、ある事を考えていた。

（あの仮面の男の視線を感じなくなって久しいが……もしや……？いや、流石に考え過ぎか。……だが、あの猫にはまだ何かある気

がする。
　注意だけはしておくか）
　そんな風に考えるアーチャーに気付かず、はやてとみーちゃんは楽しそうに遊ぶのだった……。

「みーちゃ～ん、ばいば～い」
　塀に登り、はやて達を見つめているみーちゃん。それに笑顔で手を振るはやて。アーチャーは苦笑混じりにそれを眺め、軽く手を振る。
　それに満足したのか、みーちゃんは一声鳴くとそのまま去って行った。それを見送り、はやては二度ほど頷き、アーチャーへ視線を向ける。
　その視線から何を言いたいかを察し、アーチャーはピシャリと告げる。

「首輪はダメだ」

「何でや！？」

　どうして分かったという表情のはやて。それにアーチャーはため息一つ。仕方ないといった表情で告げた。

「先程の名前を呼んだ時の反応を見ただろう？　あれは、おそらく別の名で呼ばれているのだ。だからこそ、驚いたのだろう」

「そうなんか？　わたしはてっきり突然声を掛けたからや思っとっ

た」

「それもあるかもしれん。とにかく、飼い猫の可能性も出てきた。首輪は、もう少し様子を見よう」

「しゃ～ないか。でも、最後はもう受け入れてくれとったなぁ」

初めこそ名前を呼んでも反応が悪かったみーちゃんだったが、徐々に慣れたのか、最後は嬉しそうに鳴き声を上げていた。

それを思い出し、はやては笑みを浮かべる。それにアーチャーは内心微笑みながらも、こう呟く。

「ただ諦めただけかもしれんぞ」

「何で人の喜びに水差すんや！」

その一言にはやてが怒る。それに皮肉屋スマイルで「何、私は自分の経験から言っただけだ」と返すアーチャー。そんな言葉にはやては一瞬笑みを浮かべるも、すぐに怒りの顔に戻し「どういう意味や！」と言い返す。

そこから始まるいつもの口論。だが、そこにあるのは怒りでも呆れでもない。この他愛ないやり取りを心から楽しんでいる。そう、喜びと嬉しさがそこには溢れている。

そして、始まりは口論でも、それがやがてその日の話へと変わるのもいつもの事。昼食や夕食の献立をチラシや冷蔵庫の中身を確認し、相談しながら決めていく。

最近はやても作れるものが増えてきており、簡単な食事ならば一人でもこなせる程に成長していた。だが、味は未だにアーチャーには遠く及ばず、更なる精進を誓い、はやてはアーチャーの教えを受

けている。

「今日は……牛肉が安い、か」

「あ、なら肉野菜炒めはどうやろ。そろそろ野菜使い切らんと……」

「そうだな。なら、それは夕食にしよう。片栗粉でとろみをつけ、中華丼仕立てにすればいい」

「お～、じゃ、わたしスープ作る。卵とワカメで中華スープ！」

「……では頼む。昼食だが……」

「な、それなんやけど……」

こんな感じで会話する二人。とても子供と大人の会話ではないが、それでもどこか楽しそうに二人は話す。

何を作るか。誰がやるか。チラシを前に色々意見を出し合う。はやての要望をどこか嫌がりながらも、それを叶えてやるアーチャー。アーチャーの意見を納得しながらも、どこかで反論するはやて。

でも、結局最終的には両者とも受け入れてしまうのだから仲がいい。そんなこんなでこの日も献立を決め、はやての勉強が終わり次第買い物に行く事で決着となった。

外の暑さが嘘のように感じる店内。そこにアーチャーとはやてはいた。梅雨に入り、蒸し暑い日が続く中、はやての楽しみは晴れた日のみーちゃんとの戯れと、図書館でのすずかとの会話。そして、スーパーでの買い物なのだ。

別に雨が降っても構わないのだが、アーチャーが風邪を引く事もあると言って中々出させてくれないのだ。

（ほんま、過保護なんやから……）

そう思いながらも、その優しさがはやては嬉しいのだ。だからこそ、つい甘えてしまう。雨の日の買い物は、アーチャーも普段よりも早めに帰ってくる。

はやてを一人にしておくのが心苦しいのだ。だが、それをはやては気付きながらも、口にする事はしない。ただ、熱いお茶を準備して出迎える。

それがここ最近のルール。そして、はやての淹れた熱いお茶を飲みながら、二人でするその日の会話がはやての雨の日の楽しみ。

（雨の日が楽しくなるなんて思わへんかったわ。アーチャーが来てくれてから、つまらない日がないもん）

「どうした？　何か気を惹く物でもあったのか」

そんな風に考え笑うはやてに気付き、アーチャーが不思議そうに問いかける。それにはやては余計に笑みを深くして首を振る。

「何でもないわ」

「そうか。さ、今日もしっかり見極めてもらうぞ」

「よっしゃ！　任せて」

これもいつもやり取り。食材の見分け方を実践しながら、はやてに覚えさせるクイズ形式。これも最近のはやての楽しみ。

まず何のヒントもなしに、アーチャーが選んだ二つの品物を見比べて、どちらが質がいいのかをはやてが見極める。

例えそこで正解していても、それの根拠を聞き、間違っていれば指摘し、不正解扱い。不正解でも、目を付けた根拠が合っているなら誉める。

そんな授業のような状況がはやてには堪らなく楽しい。そして、正解した時の一瞬見せるアーチャーの笑みが好きなのだ。

今日は牛肉の見極め。それをはやては不正解。目の付け所も良くなかったのだが、アーチャーはどこか仕方ないといった表情で告げた。

今回はかなり厳しいものにした事。だから、はやてが間違えるのも仕方ないと。それを聞き、アーチャーからそういう場合の見極め方を教わるはやて。

それを周囲の主婦達が聞いて成程と頷いていた。そして、そのままはやて達はお菓子売り場へと向かう。すずかと知り合って一月が経ち、最近はたまにすずかが遊びに来るようになったのだ。

そのため、手軽に摘めるスナック菓子をはやては欲しがっているのだが……。

「これだな」

そう言ってアーチャーがカゴに入れるのは、新潟で取れた米を使った煎餅。とてもではないが、小学生が好んで食べるお菓子ではない。

「……なぁ、どうしてもあかんの？」

「スナック菓子は、あまり体にいいものではない。煎餅などは流石に自宅では作れんが、その類が欲しいなら、私がそれより美味しい

ものを作ってやる」

そう、アーチャーが買うのは煎餅やアラレといったもの。スナック菓子はほとんど買わせてくれないのだ。どうしてもと言えば、苦々しく一つ買ってくれるが、それでも野菜等を使った比較的体にいいものしか買わない。

はやてもそれが分かっているので、強くは言わない。確かにアーチャーの作るおやつはどれも美味しく、すずかも驚いた程なのだ。

「……そやけど……」

「はやて、勘違いするな。私は好きでやっているのだ。それに、君達が嬉しそうに食べるだけで作り手としては満足する。それを、今の君なら分かるはずだ」

アーチャーの言葉にはやてが思い出すのは、初めて作った目玉焼き。黄身は潰れ、とても美味しそうに見えないそれを、アーチャーは文句も言わずに食べた。そして、笑みを浮かべて「まぁ、お世辞にも上手ではないが……美味かった」と言った。

その言葉を聞いた時、はやては涙を浮かべて微笑んだ。その時、はやては教えられたのだ。作った側として、何が一番嬉しいのかを。

どんなに疲れて、どんなに大変でも、誰かが”美味しい”と言ってくれる。それだけで全ての苦労が吹き飛ぶのだ。それを思い出し、はやてはアーチャーを見つめる。

アーチャーは既にはやてから視線を外し、レジへと向かって車椅子を押していた。だが、はやてはそんなアーチャーへ心の中で呟く。

（ほんま、わたしは幸せもんや。こんなにわたしの事を考えてくれ

る人がおる。ほんま、おおきになアーチャー）

この日、はやては初めてアーチャーを唸らせる味を出す。

その時のアーチャーの顔を、はやては終生忘れなかった。

――――――

交流編その2

「じゃあ、また明日」

「うん。またな～」

互いに手を振り合い、はやてとすずかは別れた。

いつものように図書館で会話し、共に連れ立って外に出た所で、また若干言葉を交わして別れる。

二人が友人となって早三ヶ月。最初は図書館のみの付き合いだったが、今ははやての家にも遊びに行く仲になっていた。

そして、それに伴い……。

「今度はなのはちゃん達も一緒だからね～」

「分かっとる～。楽しみにしとるな～」

やっと都合をつけ、はやてとなのは達の初顔合わせが行われる事となったのだ。

明日が待ちきれないといった顔のはやて。それを微笑ましく思うアーチャー。

この時の二人は知らない。その楽しみにしている明日が、将来を左右する出会いの日だったと……。

少女達の想いと繋がる絆

家までの帰り道、はやてはずっと翌日の事を話していた。何をす

るか、何を話すか、考え出したらキリがない程話題が湧き出してくる。

そんなはやてに、アーチャーは内心微笑ましく感じながら告げる。

「相性最悪ならどうする？」

「お～、それは大丈夫や。わたしにはアーチャーがおるし――」

アーチャーとうまくやっていけるなら、大抵は平気やから。はやてがそう口の端を吊り上げて言い切り、アーチャーの方を見上げた。

それにアーチャーも負けじと笑みを浮かべて呟く。思い込むのは勝手だが、相手は子供だという事を忘れるな。それにはやては頬を膨らませてブーイング。

事実だと切って捨てるアーチャーに、大人げないと呟くはやて。

それにアーチャーは皮肉屋スマイルで返す。そんないつもの雰囲気。

「さて、今日はどうする？」

「そやな～、軽く蒸し暑いし……涼しげなもんがええ」

「承知した。なら、冷やし中華に棒棒鶏（バンバンジー）といこう」

「おっ、中華やな。なら、わたしはササミ裂くのやりたい！」

嬉しそうに宣言するはやてに、アーチャーは笑みを浮かべ、ならついでに錦糸卵でも作ってもらうかと返す。

それにはやては少し不満顔。アーチャーから家事を習い出してかなり経つが、未だにその腕はアーチャーには遠く及ばない。

だからだろうか。それを知っているアーチャーを睨み、文句を述べるが悉くあしらわれてしまう。そんな会話が車椅子の立てる音と

混ざりながら、夏の空に消えていった。

「……時間、かかっちゃったな」

すずかはそんな事を呟くと、入道雲が流れる空を見上げる。

本当なら、もっと早くはやてとなのはやアリサを会わせられるはずだったが、前準備として互いの事を知っておいた方がいいとすずかが考えた事と、急になのはが予定が空きにくくなったのが重なった。

そのため、様々な情報をやり取りし、なのはとアリサが会いたいと言い出してくれたのだ。はやてにその話をした時、嬉しかったのか、その目が涙目になっていたのをすずかは見た。

「私が会ってほしいなんて言うのは、何か違う気がしたんだよね……」

二人がはやてに会いたいと思ってくれるようにしよう。自分のために都合を付けさせる事に、罪悪感を感じていたはやてのため、すずかが選んだ方法がそれだった。

おかげで時間は掛かったが、はやても何の躊躇いもなく会う事を快諾したし、なのはとアリサも優先的に予定を空けてくれた。

そこまで思い出し、すずかは笑う。はやてがかなり読書好きと教えた時、なのはは予想通りに感心し、アリサに突っ込まれていた。なのはとは大違いね、と。

（それから、読み易くて面白い本ない？って聞かれるようになったんだよね）

そう、なのははは国語が苦手だったが、はやて効果（アリサがこう名付けた）により、その成績を向上させていた。
明日会う時にお礼を言わなきゃと、なのはが言っていたので、おそらくはやては戸惑い、理由を知って笑うだろうとすずかは予想している。

「……っと、いけない。そろそろ帰らなきゃ」

まだお昼前とは言え、もう日差しは真夏の太陽が激しく照り付け南国並み。日射病にならないようにしなきゃ、と思いすずかは家路を歩く。その足取りは、心境に呼応するように驚く程軽かった。

「明日のトレーニングは中止、ですか？」

「ごめんね、セイバー」

「いえ、それはいいのですが……どうしてです？」

セイバーが小次郎と再戦した翌日から、なのははセイバーとトレーニングをやりたいと申し出た。
最初は、休日にしているランニングかと思ったセイバーだったが、なのはが望んだのは、もっと本格的なものだった。
さすがにそれはと、セイバーは止めたのだが、なのはの意志は強く、士郎監修のメニュー以外の事を絶対しないという条件で、なのはとセイバーのトレーニングが始まった。
今では、体力と反射神経、動体視力ならアリサにも勝てる自信がなのはにはあった。

なのはがそんな事を言い出した理由。それは、少しでもセイバーに追いつきたいと考えたから。置いていかれたくないと、思ったから。

セイバーに守ってもらうだけじゃなく、自分もセイバーを助けられる存在になりたいと、心から思った。

そのために、苦手な運動方面を鍛えようと考えた。長所を伸ばす前に、欠点を少しでも改善しておこうと思ったからだ。

おかげで、アリサやすずかとも中々遊ぶ事が出来なくなったが、アリサは小次郎の一件で理解を得ていたし、すずかは自分が納得するまで頑張ってと励まされた。

「明日、すずかちゃんのお友達のお家に遊びに行くの。だから」

(はやてちゃん、だっけ。本好きの明るい賑やかな子だって、すずかちゃんは言ってたけど)

「そうでしたか……わかりました。では、明日は休養日とします」

「ありがとう、セイバー」

笑顔でお礼を言うなのはに、セイバーも笑みで返す。もう少ししたらお盆になる。そうなったら、セイバーだけじゃなく、家族ぐるみでの修行が待っている。キャンプの用意を持って二泊三日という日程の、実際はキャンプでしかないのだが、なのはにとっては山登りだけでも、結構なトレーニングとなる。

その時に、今日の分を取り戻すぐらい頑張ろう。そう思い、決意を改めるなのはであった。

アリサは上機嫌だった。それは明日、八神はやてに会えるからだ。なぜ、それがここまで嬉しいのか。それは、はやてがすずかから見せてもらった写真の感想にある。

はやてはアリサの髪の色を見て、羨ましそうに「キレイな髪の毛やなぁ……」と言った。それをすずかから聞いた瞬間、アリサは即決ではやてと会う事を承諾した（アリサは自分の髪の色等にコンプレックスを持っている）のだが、なのはがあの一件以来自分を鍛え始めたため、今日までそれが延びてしまったのだ。

（でも、それも今日でおしまい。なのはも、やっとトレーニング休んで会う気になったし、楽しみね）

すずかの話によれば、はやては親戚の人との二人暮らしで、関西系の訛りがある子。趣味は読書と料理との事。

それを聞き、自分も何か料理でも習おうかと思ったが、それを止めた人物がいた。バニングス家の専属庭師にして、アリサのボディーガードの佐々木小次郎である。彼はアリサから、そう相談を受けた際、即座に答えた。

「止せ止せ。ありさが炊事など無理よ」

「どうしてよ？」

「生粋の箱入り娘ならば、確かに家事は出来た方が良いが、生憎ありさは虎の「トラじゃなぁぁぁぁい！！」」

その時のやりとりを思い出し、思わず拳を握るアリサ。しかしそれも、ふと緩められる。

「……お淑やかになれば、小次郎はアタシの傍にいるのかな……」

思い出すのは、あの日セイバーと小次郎が戻ってきた後の事。疲れた顔のセイバーと、どこか嬉しそうな顔の小次郎が帰ってきたのは、二人がアリサ達の前から消えて三十分ぐらい後の事。二・三言セイバーに何かを告げ、小次郎は楽しげに帰路についた。

その道すがら、アリサは何も聞けなかった。初めて見た表情の小次郎。それをもたらしたのがセイバーだったと言う事は、アリサの心に強い衝撃を与えた。

あの日以来、小次郎はアリサに許可を得て、早朝の高町家に通うようになった。その理由は後日なのはが教えてくれたため、納得できたが、それでもアリサの気分は晴れなかった。

結局、小次郎がセイバーの所に行っているのが気に喰わないのだろうと、アリサは考えている。アリサは、まだ恋愛感情など理解できない。

好きと愛してるの違いなど明確に分からない。でも、好きと嫌いの違いは分かる。そして、それで言えば小次郎は……。

「好きになれる訳ないでしょ、あんな奴」

そう吐き捨てるように言って、アリサは誰に聞かせるでもなく、ポツリと呟く。

――――でも、嫌いじゃない。

アリサ・バニングス、小学一年生。その心は、早くも多感な時期を迎えている。

「「「こんにちは～」」」

「お～、いらっしゃい。とりあえず上がって」

「「「お邪魔しま～す」」」

元気良く挨拶を交し合うなのは達。声がキレイに揃っているのは、仲がいいからなのか。そんな三人にはやては笑みを一つ浮かべて、リビングへ三人を案内する。

そこには、お茶の用意をするアーチャーの姿があった。

「あ、お邪魔してますアーチャーさん」

「ん？ああ、すずかか。それと、髪を結んでいる方がなのはで、ブロンドの方がアリサか」

初対面の少女達を簡単に呼び捨てするアーチャー。だが、そんな事を気にするような事はない。

既にすずかによって、アーチャーの事も知っていた二人は、聞いた通りの人なのかと理解し、それぞれ自己紹介と挨拶を終える。

それにアーチャーは軽い笑みを浮かべ、挨拶と共に自己紹介をした。

「さて、まずは座ってくれ。それと、君達は紅茶は平気かな？」

「はい」

「ええ」

なのはとアリサの返事を聞き、グラスに注がれていく紅茶。それを淹れるアーチャーは、実に様になっていた。思わずアリサとなのはが見入る程に。

そんな二人の様子に、はやてとすずかは微笑み一つ。その光景は、自分達が初めて同じものを見た時とまったく同じ反応だったからだ。

きちんとティーポットを使い、水で紅茶を淹れ、それを冷蔵庫で冷やすという手間を掛けたアーチャー謹製のアイスティ。

それを四つ。目にも涼やかなグラスに入れられ、手前に置かれる。好みで使えるようにミルクまで添えて。

「ふぇ～……」

「……やるわね」

「ふふっ」

「えっと、ま、アーチャーはこういう人なんよ」

一切の無駄なく動くアーチャーの所作に、感心するなのはとアリサ。それに慣れたとばかりに笑うすずかと、どこか照れくさそうなはやて。

そんな四人に構わず、アーチャーは茶菓子のシフォンケーキを切り分けている。ちなみに、今日のこの時のために、アーチャーは二日前から材料や茶器を準備していたりする。

キレイに四等分されたそれを、グラスの横に置き、アーチャーは仕事は終わったとばかりにリビングから出て行こうとする。

それをはやては止めなかった。同じくすずかも。なのはとアリサだけが少し気にしていたが、はやての笑みに理由を思いついたらしく、その顔に納得の色が見えた。

「優しい人だね」

「ちょうイジワルやったりするんやけどな」

はやての言葉に、アリサが「確かにそんな感じね」と返した途端、全員が笑う。と、そこでなのはがある事に気付いた。

「にゃはは……って、まだはやてちゃんに自己紹介してないよ！？」

「あ～、そういえばそうね。……何か、もっと前から友達だった気がしてたわ」

「だね。じゃ、まずはやてちゃんから……」

すずかの言葉に、はやては頷くと、なのは達の顔をしっかり見つめて微笑んだ。

「こうして会うんは初めまして、やね。わたしは、八神はやて言います。はやてって呼んでくれると嬉しい」

「初めましてはやてちゃん。私は高町なのは。なのはでいいよ」

「初めましてはやて。アタシはアリサ・バニングス。アリサでいいわ。それと、髪の事誉めてくれてアリガト」

笑顔で互いを見つめ合う三人。それを嬉しそうに見守るすずか。その光景は、まるで以前からの友人であったかのような雰囲気が感じられるくらい、何の違和感もなかった。

それから、四人はとにかく話した。学校の事や家の事、家族の事に趣味の事などなど、喋り足りないと感じるぐらい話した。

予想通り、なのはのお礼の言葉にはやてが困惑し、理由を聞いて納得しつつ笑った。

そして途中に、アーチャー作のお昼（エビピラフにミニトマトサラダ×４）を食べて、それから夕方までゲームをしながら過ごした。

更におやつとして、アーチャーが差し入れたホットケーキとホットココア（冷房で体が冷えているので）を平らげ、さすがにこれ以上は無理だと思う時間まで、四人は遊び続けた。

「じゃあ、またね」

「今日は楽しかったわ」

「またね、はやてちゃん」

玄関で思い思いに手を振る三人。それを心から嬉しく思い、はやても負けじと手を振り返す。

「うん。わたしも楽しかったわ。また遊ぼな～！」

はやての声に、三人は笑顔で頷く。そうして三人が見えなくなるまで、はやては手を振り続けた。

そんな光景を見ながら、アーチャーはなのはから感じた魔力に自分の想像が当たっている事を確信した。

（あれだけの魔力を隠しもせず、それに対して動きがない。やはり、この世界に魔術師はいない。……だが）

以前自分を襲撃してきた相手を思い出して、アーチャーは眉間に

皺を寄せる。
あの仮面の男は、確かに魔術を使ってきた。なら、どういう事なのか。そこで思いつくのは自分と同じく……。
（異端者（イレギュラー）、か）
そう考えれば納得がいく。この世界とは違う世界からやってきて、何らかの理由であの本に目を付けたが、何か事情があり直接行動には移せない。でなければ、アーチャーが現れる以前にあの本が奪われている。あの謎の魔術は、異世界のものだろう。ならば、自分が知らないのも頷ける。
だからこそ、監視していつか行動出来る機会を待っているのだろう、とアーチャーは結論付けた。
そんな風に思考に耽るアーチャーを、はやては不思議そうに見つめていた。難しい顔で物を考えている時のアーチャーは、何か自分の知っているアーチャーではない気がしているからだ。
そこへ、熱風が吹きぬける。その暑さに顔をしかめるはやてと、我に返ったアーチャー。
「む、そろそろ家に入ろう」
「そやな。な、今日は晩御飯何？」
「豚が安かったのでな、生姜焼きにしようと思っている」
そんな会話をしながら二人は家の中へと戻っていく。楽しげに笑みを浮かべながら。
それはいつもの日常。穏やかで緩やかな平和な時間。だが、その時間がいつまでも続かない事を、二人を見つめる猫だけが知っていた。

ーーー

遭遇編その４

今日も賑わう喫茶翠屋。その賑やかな店内の一角だけが沈黙に支配されていた。

そこにいるのはメイド服のライダーとエプロン姿のセイバー、そして――Ｔシャツにジーンズ姿のアーチャーだった。

三者に共通しているのは、困惑。その内容は違えど、浮かべている表情は同じ。先程から一言も発せず、ただ時間だけが過ぎていく……。

どうしてこのような事態になったのか。それは今から三十分程遡る……。

英霊達の再会と結ぶ誓い

「な、翠屋さんに行ってみたいんやけど」

キッカケははやてのそんな一言。つい最近出来た友人、高町なのはの両親が経営する喫茶店。中々評判が良く、アーチャーも何度か近所の付き合いで聞いた事があった。

弓兵、アーチャー。既にその身は近所で評判の主夫となっている。

「それは構わないが、どうして急に行きたいと？」

「あのな、なのはちゃんが言っとったけど、明日から三日くらい出掛けるらしいんよ」

「それで？」

「そやから、見送る代わりに気ぃつけて行ってきてって言いたいんや。今日はお家の手伝いする言うとったし」

そんなはやての言葉をアーチャーは笑う事はせず、ただ黙って立ち上がる。そして、そのままはやての部屋へ行き、手にある物を持って現れる。

それは麦わら帽子。夏の日差し対策にアーチャーが買った物だ。ちなみに、はやてへの誕生日プレゼントでもある。

「なら、これを身に着けてくれ。今日も日差しが強い」

「うん。それじゃ……」

「ああ。行くとしよう」

アーチャーの言葉に笑顔で頷くはやて。それにアーチャーは笑みで応える。手渡されたお気に入りの帽子を被り、ご機嫌と言わんばかりにはしゃぐはやてを見ながら、それに呆れながらも、どこか嬉しそうに相手するアーチャー。

そんな二人を、真夏の太陽が激しく照らしていた。

まだ朝と呼んで差し支えない時間にも関わらず、夏の太陽は燦々と光と熱を放っていた。そんな中、汗を流しながら庭仕事をする二人のメイドの姿があった。

「お姉様～、終わりました」

「こちらも終わりました。さ、次はノエルと合流し、屋敷の掃除です」

疲労の色を見せるファリンに、ライダーは容赦なく次の仕事を告げる。その言葉にファリンが崩れ落ちた。

どうやら休みたいらしい。潤んだ瞳でライダーを見上げるファリン。それを困った顔で見つめるライダー。

そんなお見合いがたっぷり三分。先に根負けしたのはファリンだった。

「あ～、もう限界です！」

そう言うや否や屋敷へ走って行ったのだ。どうやら直射日光に耐え切れなくなったようだ。

それを見送り、ライダーはため息一つ。そして、その後を追うように歩き出すと、先の方を走るファリンに向かってこう言った。

「そんなに急ぐと危ないですよ～」

「ふぇ？」

その声が原因なのか、はたまた既にそれが決まっていたのか。ファリンはライダーが声を掛けると同時に、キレイに躓き……。

「あうっ！」

地面と熱いキスをした。それはもう、見事なまでに。そのあまりの光景に、ライダーでさえ足を止める程だった。

「……大丈夫ですか、ファリン」

急ぎ足で近付くライダー。数々のドジを見てきた彼女でさえ、今回のは中々痛そうだった。故にその声にも心配の色が見える。

そんなライダーの声に、ファリンはゆっくりと起き上がり、呟いた。

「なんで私だけこんな目に……」

その目はまさに涙目。世知辛い世の中を恨むようなその呟きをしているファリンに、ライダーは内心微笑ましいものを感じながら、それを表に出さずに手を差し伸べた。

それをファリンは掴んで立ち上がり、トボトボと歩き出す。その後をライダーは追う。

すっかり意気消沈しているファリンを、ライダーは何とかしたいと思った。元気で明るいファリン。その彼女が自分をお姉様と呼んだ時、ライダーは不思議とすんなりそれを受け入れられた。

以来、すずかとは違う意味でファリンはライダーの中で妹のような存在に変わった。それはきっと、ファリンが無邪気で素直な性格なのも影響している。物事を考え過ぎるライダーにとって、思った事を正直に表現出来るファリンは、ある意味羨ましい存在でもあった。

だからこそ、今のファリンを見る事はライダーにとって辛い。

(何かないでしょうか？ファリンを元気付ける方法は)

これまでのファリンとの出来事を思い出すライダー。まだ一年も経っていないが、それでもその思い出は山のようにある。

共に料理を作り、焦がして失敗した事や、買い物帰りに団子を買

って二人だけで食べた事など、ファリンとだけに限っても数え切れない程思い出がある。

（……そうです。ファリンは甘い物が特に好きでした）

そんな中でも多いのが食べ物に関する事。それに改めて得た友人の顔を思い出すが、それを振り払おうとして、はたとライダーはある事を思いついた。

「ファリン、翠屋のシュークリームはいりませんか？」

「え……？欲しいですけど……どうしてです？」

「仕事を頑張っているファリンに、私からのささやかなご褒美です」

元気付ける意味合いも込め、優しく微笑むライダー。それが伝わったのか、ファリンも徐々に表情を笑顔に変えた。

こうして、ライダーは残りの仕事をノエル（事情を話すと苦笑しつつ了解した）とファリンに託し、愛車を駆って翠屋へと向かう。

そこに予想だにしない相手が待っているとも知らずに……。

「「いらっしゃいませ」」

入口のドアの鈴が音を立てると同時に、セイバーとなのはの声が重なる。

喫茶翠屋。そこの看板娘なのはと、最近名物店員となったセイバー。夏休みのためか、最近はモーニングが終わった後も客足が中々

途切れない。
その要因に自分が含まれない事を、美由希が気にして少し落ち込んだのは、内緒の話。

「モモコ、ケーキセット二でモンブランとショート」

「は～い」

「シロウ殿、アイスのブレンドとカフェオレです」

「よしきた」

セイバーの声に即座に動く高町夫妻。セイバーの後ろでは、なのはと恭也がオーダーを聞きまわっている。

「ご注文を繰り返します。ガトーショコラにアイスティーですね？」

「セットが三つですね。かしこまりました」

男性客にはセイバーや美由希が、女性客には恭也かなのはとなっていて、余裕がない時以外はそれで動くようになっている。

「はい、二百六十円のお返しです。ありがとうございました～」

笑顔で見送る美由希。レジは基本その時空いている者がする事になっているので、当然誰がするかは運次第。

夏休みに入り、忙しいと言っても、お昼や午後のピークに比べればまだ軽い。そのためか、高町家の面々には余裕がある。
特にこの四ヶ月を働き続けているセイバーにとって、この程度は

自分一人でも何とか回せるレベルであった。
勿論、手伝いをよくしている恭也達から見ても、セイバーの上達ぶりは凄まじく、特に美由希はどこか凛とした雰囲気を漂わせるセイバーに尊敬の念すら抱いた。

そうして、そんな忙しさが落ち着き、それぞれが小休憩を取り始めた頃、彼らが現れた。

「いらっしゃいませ」

「えっと、わたし、なのはちゃんの友達で八神はやて言いますけど……なのはちゃんいます？」

「なのはの友達？ちょっと待ってて」

笑顔で出迎えた美由希だったが、相手が妹の友人と分かるとその笑みの質を変えて、店の奥へと消えた。
それに対し、少し不安顔のはやてを見て、アーチャーは笑みを浮かべて囁いた。

「心配するな。営業妨害ではないし、後でシュークリームを買って帰るだろう」

暗に、客でもあるから気にするな。そうアーチャーは告げた。それをはやても分かったのか、若干表情を和らげる。

「そや、な。……って、美味しそうなケーキやな～」

「まったく……。む、確かにこれは……」

視界に入ったショーケースへ視線を移すはやて。その変わりようの早さに呆れつつも、同じく視線を移し、その目を鋭くするアーチャー。

その目は、腕利きパティシェだった桃子のケーキが、己の域と同等かそれ以上である事を読み取っていた。

一方のはやては、目にも鮮やかな品揃えに心を奪われていた。はやても女の子。甘い物は大好物とまではいかないが、好きではある。

そんな風にショーケースを眺めている二人に、なのはは声を掛けにくかった。

何しろ、質こそ違え、二人は食い入るようにケースを見つめている。そんな光景に、なのはは苦笑いを浮かべつつ、軽めに声を掛ける事にした。

「いらっしゃい。はやてちゃん、アーチャーさん」

「あ、なのはちゃん」

「邪魔しているぞ」

良かった、聞こえた。そう内心思いながら、なのはは用件を尋ねた。それにはやてが先程と同じ内容の話を返し、なのはに満面の笑顔を向ける。

「そやから、気ぃつけて行ってきてな」

「ありがとう、はやてちゃん！」

わざわざ自分にそう告げるために来てくれた事に、なのはは心から喜んだ。

そんなやり取りを端から見ていた士郎達だったが、そのはやての思いにその顔を綻ばせていた。

そこへ鈴の音が響き渡る。音に反応し、アーチャー達が振り向いた先には……。

「ら、ライダー……だと」

「アーチャー……ですか」

見事なメイド服に身を包み、楚々として立つライダーの姿があった。ちなみに、裾がまた擦り切れ、汚れていたりする。

「お～、ライダーさんや。お久しぶりです」

「ハヤテ……？そうですか、貴方の言っていた親戚と言うのは……」

「にゃ？アーチャーさんもライダーさんの知り合いなの？」

何とも言えない雰囲気を醸し出していたアーチャーとライダーだったが、なのはの言葉にアーチャーが敏感に反応した。

「どういう意味かな」

「えっと、ウチには「セイバーもいるの「何だとっ？！」……言えなかったの」

「まあまあ、気ぃ落とさんといて」

なのはの言葉をライダーが、ライダーの言葉をアーチャーが遮り、なのはは若干いじけていたりする。

そんななのはをはやてが慰めていた。そして、先程のアーチャーの声が聞こえたのか、店の奥からセイバーが顔を出し――。

「どうしたので……」

固まった。それはもう見事に硬直した。――アーチャーと共に。

「……とりあえず、奥の席にどうぞ」

このままでは埒が明かない。そう判断した美由希の提案に、三人は静かに動き出す。

そして、なのははやてを店の奥にある休憩所へと案内した。おそらく、また色々あるんだと、そう予感したから。それに、はやてにも話を聞かなければならない。そうなのはは思い、車椅子を押した。

こうして、やっと冒頭に戻る。

「……まさか、私以外のサーヴァントが現界しているとはな」

「感知出来なかったのでしょう？当然です」

――私達は受肉しているのですから。

ライダーのその言葉に、アーチャーの表情が変わる。それは狼狽。以前の、いや昔のアーチャーならば、そんな事はないと一蹴しただろう。だが、今の彼には心当たりがあった。

（あの時、猫に傷を負わされたのは、使い魔だからかと考えていたが、受肉していたならば納得がいく）

以前はやてに頼まれ、猫の性別を確かめた際、怒った猫に手を引っ掻かれ、傷を負った事があった。その際は、その後現れた監視者の使い魔かと思い、警戒していたのだが、受肉しているとすれば辻褄が合う。

それに、猫からはこちらを警戒するような視線がしなくなったし、監視の視線もあれ以来不気味な程感じなくなっていた。

「だが、証拠がない」

しかし、アーチャーはライダーの言葉にそう返す。そう、それはあくまでも推論。明確な証拠がなければ、アーチャーとしては鵜呑みに出来る話では、到底なかった。

だが、ライダーもそう来ると思っていたのだろう。どこか呆れた顔でこう言った。

ならば、霊体化出来ますかと。その言葉にアーチャーはとある事を思い出す。それは自分の数少ない使える魔術。

「解析（トレースオン）、開始」

自分自身を解析し、確かめようとしたのだ。そして、それから分かったのは……。

「ば、馬鹿な……本当に」

ラインが繋がっていないのに魔力を自ら生み出している。そして、仮初ではない『肉体』を得ていた。

「やはり、貴方も自分の事を把握していなかったのですね。ま、当然です。誰が受肉しているなどと考えるものですか」

ライダーのどこか愚痴るような言い方に、アーチャーは違和感を感じるが、それを追求する余裕は今の自分にはない事を、彼は理解していた。

薄々おかしいとは思っていた。なぜあの聖杯戦争の記憶が残っているのか、なぜあの幻の四日間の記憶があるのか。座に戻れば、それらは消えてしまうはずなのに、と。

「……今回は世界に呼ばれたとばかり思っていた」

「成程、確かにそれなら理解出来ます。ですが、それではなぜ現れた時に人がいたのでしょう」

「……そうか、君達も……」

ライダーの発言で、アーチャーは全て理解した。自分と同じように召喚された時、彼女達もまた孤独に怯える少女に出会ったのだと。そして、そんな少女の支えになろうとしたのだろうと。

思い浮かべた想像に、アーチャーは笑みを一つ。それはいつもの皮肉屋としてのものではなく、あの日はやてと初めて出会った夜に見せたもの。

”エミヤシロウ”としての笑み

その笑顔に、セイバーとライダーは心奪われる。目の前にいるのはアーチャーだった。だが、同時に別の衛宮士郎でもある。

自分達を一人の女性として扱い、不器用ながらも他者の夢を自分の夢に変え、前に進み続けた『正義の味方』

それとは至った場所は違う存在ながらも、出発点は同じなのだ。

二人は知らない。彼は、もう掃除屋として己を呪い続けた男ではない。在りし日の『想い』を取り戻し、パートナーの少女に、大丈夫だからと笑顔で告げた『正義の味方』だとは。

（あの笑み……やはりアーチャーも『シロウ』なのですね）

（彼も以前のままではない、と言う事ですか。……あまりスズカを接触させない方がいいかもしれません）

その笑みに抱く思いこそ違え、二人は確信する。この男は信頼に足る相手だと。

「……アーチャー、話があります」

「何かな？」

「私とセイバーは、現状に至った理由や原因を調べて動いています。貴方にも、それに協力してほしいのです」

それだけ告げて、ライダーとセイバーはアーチャーを見つめる。アーチャーは、目を閉じて思考を纏めようとしているのだろう。その雰囲気は、先程までとは別人のものだった。

「……いいだろう。ただし条件がある」

「条件とは？」

「何、そんなに難しい事ではない。はやての事だ」

アーチャーが出した条件。それははやての足の事だった。原因不明の病気で、未だに治療法が分からずにいる。それを治す術か方法の発見及び見つかった際の協力。それと……。

「なのは達の家への招待、ですか」

「ああ。はやては中々自宅以外で遊ぶ事が出来ない。あの通り、車椅子なものだからね」

「成程、つまり強く誘われたとでもならない限り、遊びに行き辛いと」

ライダーの言葉に、アーチャーは無言で頷く。

はやては何度かすずかに誘われる機会があるにはあった。だが、すずかの気遣いが災いし、明確に誘うまでには至らなかった。

すずかは、車椅子のはやてに家まで越させるのは悪いと思い、はやては、車椅子の自分が行く事ですずか達に気遣いさせたくないと思った。

こうして、未だにはやては自宅以外ですずか達と遊んだ試しがなかった。

「お安い御用です。夏休み中に必ず」

「ええ、泊まりも出来るようにしましょう。きっとノエルやファリンも協力してくれます」

「……なら、契約成「違います」……何がだ？」

話が纏まったと言おうとしたアーチャーに、セイバーが異議を唱えた。隣のライダーは何か思い当たる節があるのか、頭を押さえている。しかし、その表情は苦笑だったりするのだが。
不可解と言わんばかりの表情のアーチャーに、セイバーは凛々しい顔を緩めて笑う。

「これは誓いです。なのは達の絆を守るという」

「なっ……」

言葉を失うアーチャー。ライダーは小さく「やはりそうきますか」と納得の顔。

「私達は厳密に言えば、もうサーヴァントではないのでしょう。ですが例えマスターでなくとも、なのは達を守りたいと言う思いは変わりません」

違いますかと尋ねられ、アーチャーは答えに窮する。それを横目にライダーはセイバーに同意する。
スズカを守るのは、当然です。はっきりと言い切り、ライダーはアーチャーを見る。その目は、はっきりさせなければセイバーは納得しませんよ、と告げていた。

「……そうだな。こうなった以上、開き直るしかあるまい」

そう告げ、アーチャーは答えた。自分もはやてを守るのに何の躊躇いもないと。それを聞き、セイバーは満足そうに頷き、右手をテーブルの中央に置く。
それにライダーは苦笑しつつも、同じように手を重ねる。そして視線をアーチャーに向け、それをテーブルに移す。

その仕草にアーチャーも気付き、ため息を吐いて手をそれに重ねた。

「これで私達は、誓いを同じくする友です」

「……一体、彼女に何があった」

「どうやら、彼女の影響らしいですよ」

アーチャーの問いかけに、ライダーは言葉と視線で答える。その視線の先には、紅茶のお代わりを店の奥へ持っていこうとしているなのはがいた。

その姿を見て、アーチャーは納得した。確かに彼女ならば、誰とでも友になろうとするだろう、と。そして、その傍にいるセイバーがその影響を強く受けているのだろう。そう考えた。

「そう言えば、何故ライダーはここに？」

「あ、そうでした。セイバー、シュークリームを五つ持ち帰りでお願いします」

忘れていました、とライダーは言って立ち上がる。それにセイバーも続き、ショーケースへ。

一人残される形になったアーチャーは、どこか楽しそうに笑みを浮かべると、席を立ちその後を追う。

慣れた手つきでシュークリームを箱に詰めるセイバー。それを見ながらうまくなりましたねと言いつつもからかうライダー。そんなやり取りを眺めてアーチャーは無意識に呟いた。

「……平和だな」

その声に、呆れと喜びを滲ませて……。

――――――

空白期（N&

ている。

「なのは、凄いわね。こんなに……体力ついてたのね」

「にゃはは、セイバーとのトレーニングの成果です！」

「うふふ、そうね……私も何か始めようかしら？」

笑顔で語り合うなのはと桃子。それを眺め、微笑むセイバー。視線の先では、士郎達がもう川辺にテントを張り始めていた……。

修行とキャンプは紙一重？

テントを張り終えた士郎達は、早速とばかりに訓練を――――するのではなく、手にしたのは釣竿。

なのはが不思議そうにそれを見つめるが、セイバーはそんななのはに笑みを浮かべて告げた。

この山での滞在中は、基本自給自足なのだと。つまり、魚や木の実などを自分達で調達しなければ食事にはありつけないのだ。

それを聞きなのはは驚きを見せるが、同時に疑問も浮かんだ。そして、それを確かめるべくセイバーへと問いかける。

「どうしてセイバーは、そんなに落ち着いてるの？」

ご飯食べられないかもしれないのに。その言葉にセイバーは自信満々に答えた。もっとも、それによって気楽そうな顔をしていた士郎と恭也に戦慄が走ったのだが。

「それは当然です。シロウ殿達が魚を沢山釣ってくれると私は信じています。ええ、信じていますとも」

だからうろたえないのです。そう言い切ったセイバー。その言葉の裏に込められた『裏切ってくれるな』という想いを感じ取り、二人は他愛のない話をしていたのだが、それをピタリと止め、無言で竿を川へと投げ入れる。

その体から流れるは剣士の雰囲気。退路を絶たれた者が放つ決死の覚悟。それを全身から滲ませて、二人は手にした竿へ神経を集中させた。

それを見て、美由希は思わず呟かずにはいられなかった。

「これ……本当に（二人には）修行になってるよ」

その呟きを聞いていた桃子は苦笑していた。その視線は、必死の形相で浮きを睨む士郎達へと注がれている。

セイバーはそれに気付かず、なのはと二人で飯盒を準備していた。そう、持ってきた食材は白米と二日目のカレー用の材料のみ。流石に調味料もあるが、それも基本的なものだけ。

そして、セイバーとなのはは米の量を計り、それを汲んだ川の水で洗い出す。美由希は、ほのぼのとキャンプを楽しむなのはと、死地に赴いたような士郎達の対比を感じ、桃子に断言した。

「きっと、ウチでのキャンプは、大人が見ると修行って読むんだね」

「……美由希、それは少し笑えないわよ」

「……ごめん」

そんな風に美由希を注意する桃子の視線の先では、魚を一匹ずつ釣り上げ、静かにガッツポーズをする士郎達の姿があった。

「お兄ちゃん、これは？」

「ん？　それは……大丈夫だ」

「せ、セイバー、それは流石に毒キノコだよ」

「そうなのですか？　言われた通り地味な色ですが……」

「真っ白でしょ？！　毒だって、それ！」

手にしたキノコを恭也へ見せるなのは。それを見て、恭也からOKを貰い、なのははは嬉しそうに手にした籠にそれを入れる。

セイバーは美由希の指摘に不満そう。確かにセイバーの手にしているものは、真っ白な色をしていた。しかもかなり大きい。

それを見てなのはと恭也は、セイバーがそれを選んだ理由がすぐに分かった。だが、それを言う事はしない。だから視線をセイバー達から外し、他の物を探すのは、当然の事といえた。

なのは達が木の実などを探すと聞いて、恭也は釣りを士郎に任せ（押し付けたとも言える）、なのは達と山の恵みを採りに来ていた。

表向きの理由は、魚だけでは絶対食料が不足すると判断したためだ。もっとも、士郎は恭也に対し「裏切り者～っ！」と叫んでいたが。

ちなみに桃子は、士郎と一緒に恭也の使っていた竿を使って釣り

をしていた。釣果は、桃子が十七匹に対し、士郎は四匹という結果に終わった事だけ書き記す。

原因は、士郎に余裕がなかったため。そして、その気迫で魚を怯えさせてしまったからだった。

楽しくキノコや木の実等を採取するなのは。一方、セイバーは何故か先程からいやに大きい物ばかり見つけていた。食べられる物から食べられない物まで実に様々だ。

それもあってか、なのは達は何だかんだで楽しく採取をしていた。なのはがある物を見つけるまでは……。

「ん？　今、何か動いたような……？」

キノコを探すなのはの視界を一瞬何かが横切った。それが気になり、なのはは視線を横切ったモノが見えた方へ動かし、固まった。

そこにあったのは、蜂の巣。しかも、ただの蜂ではない。地面に巣を作っている蜂。そう、スズメバチだ。この時、なのはが幸運だったのは、騒がなかった事と季節が秋ではなかった事。

もし、これが秋ならば、スズメバチは攻撃的になっていて、危険度は段違いに跳ね上がるのだ。

「？　どうしたのですかなのは。何か見つけたの……」

一点を見つめて動かなくなったなのはを不思議に思ったセイバーは、そう声を掛けてゆっくりとなのはの下へと近付き……。

「……動かないでください、なのは」

セイバーはそう告げた。そんな言葉になのはが心の中で叫ぶ。

（動きたくても動けないよっ！）

そんななのはの内心を知らず、セイバーは蜂の巣を確認し、その表情を凛々しいものへと変えると、その雰囲気を察知したのか、恭也と美由希も二人の傍へ近付いて……。

「……そういう事か」

「どうする？　恭ちゃん」

二人も蜂の巣を確認し、表情を変える。これがクマならば何の問題もなかった。それなら、セイバーや美由希、恭也がいれば恐れる事はなかった。

だが、スズメバチとなると話は別だ。まず、数がはっきりしない。そして的が小さい。最後になのはがいる事が最大の問題。自分達の身を守れる恭也達ならともかく、なのはでは自分の身を守る事も出来ない。

そんな事を考える恭也と美由希だったが、セイバーは躊躇う事無く手にした籠を恭也へ渡し、なのはを抱き上げてその場から走り去る。その行動に、恭也と美由希は一瞬呆然とするが、蜂が動き出したのを見て慌てて走り出した。

逃げる二人を追うスズメバチ。まるでマンガかアニメだが、本人達にとっては笑える話ではない。下手をすれば死に至る事もあるスズメバチは、下手な刺客よりも恐ろしい存在なのだ。

「セイバー！　逃げるならそう言ってくれっ！」

「違います！　これは逃走ではありません！　戦略的撤退ですっ！」

「同じ事だよ！　って、蜂が意外と速いっ？！」

「にゃあぁぁぁ！　蜂が追い駆けてくるよ～！！」

なのはを抱き抱えたセイバーと、山菜が入った籠を抱えた恭也と美由希は走る。この時、もう少し冷静になって考えれば、きっともっとマシな結果が待っていただろう。だが、生憎四人にはそんな余裕がなかった。

だから、単純な事を忘れていたのだ。そのまま走ればどうなるかという事を……。

「「「「あっ……」」」」

そう、段差になっていたのだ。下との距離、約五メートル。普段なら何でもないが、突発的に落ちれば如何にセイバー達でも驚くもの。

そのまま自由落下するが、そこは御神の剣士と最優のサーヴァント。三人は何とか着地。しかし息を吐く暇もなく、まだ蜂が追ってくるのですぐさま走り出す。

そうして、士郎達の待つ川辺へと戻った時、なのははポツリと呟いた。

「キャンプって……ホントに修行なの」

そのなのはの呟きに、セイバー達は何も言い返せなかった……。

士郎が起こした火を使って鍋を暖める桃子。その中身は、なのは

達が取ってきたキノコ等だ。それを味噌で味付けしただけの山菜汁。
そしてその横では、なのはが頑張って起こした火で飯盒を暖め、その前でなのはが士郎から炊けたかどうかの判断の仕方を教わっていた。
恭也と美由希は木の枝に魚を刺し、別の火で焼き魚をしているし、セイバーは先程から何かを思い出しているのか、遠い目をして空を見上げている。

（まるで……あの頃のようですね。野営を思い出します）

それは、昔の記憶。まだ、セイバーが一人の王として生きていた頃の思い出。辛い事や悲しい事ばかりしかない。そう思っていた頃の記憶。
だが、こうして静かに思い返してみれば笑顔があった。ほとんど悲しみや憎しみばかりの時代だった。それでも、確かにあった笑顔がある。それを思い出し、セイバーは微笑む。

（こうして考えると……私も大切な事を忘れていた。シロウ、貴方が教え……いえ、思い出させてくれた事は、今も私の中で生きています）

あの日、過去に囚われていた自分を悟らせてくれた言葉。それをセイバーは噛み締め、小さく呟く。

「無かった事になど出来ない。過去をやり直す事なんて、望んではいけない……」

その言葉が今の自分に繋がっている。そうセイバーは思い、視線を後ろへと向ける。そこには、楽しそうに笑うなのは達がいた。

「……私にも、守りたい『家族』が出来ました。いつか……貴方にも話せる日がくると信じています」

――その時、貴方はどんな顔をするのでしょうね、シロウ。

そんなセイバーの声は、肌寒さを感じる山風に乗り、静かに空へと消えた。

その後、桃子特製の山菜汁にセイバーが感激し、初めてのキャンプになのはがはしゃぎ、焚き火を囲んでの家族の会話に、全員が家族の絆を改めて感じた。

いつもよりも綺麗な星空になのはと桃子が感動し、そんな二人に士郎達は笑みを浮かべる。士郎が淹れたコーヒーや紅茶を飲みながら、六人はなのはの眠気が限界に達するまで話し合った。

「……クスッ、寝ちゃったわ」

桃子に寄りかかるように、なのはは静かに寝息を立てていた。それを見てセイバー達は微笑む。生まれて初めての経験を連続でしたのだ。その疲れは相当のはず。それを知るからこそ、士郎達は早く寝た方がいいと言ったのだが……。

「やだ！　まだ起きてる」

と言って、なのはは聞かなかったのだ。それは意地ではなく、純粋に寝たくないという気持ち。もっとこの時間を過ごしていたいという素直な想いだった。

「なのはも……本当に変わったな」

「そうだね。セイバーが来て少し変わって、小次郎さんと出会った日からかなり変わったよ」

どこか遠い目をする士郎に、美由希も同意するように答えた。それを聞きながら、しみじみと恭也が呟いた。

「……ホント、セイバーが来てくれて良かった」

「そうね。私もそう思う。こんな風に皆でキャンプなんて、昔じゃ考えられないもの」

その桃子の言葉に全員が苦笑する。そう、この山登りを兼ねた修行自体は昔からやっていた。だが、なのはや桃子を連れてくる事はないはずだったのだ。

しかし、セイバーと出会い、なのはが自分を鍛え始めた事でそれが変わったのだ。毎年のキャンプに自分も行きたいと。そうなのはが言い出したのだから。

「ですが、その下地はなのはの中に元々あったものです。私は、なのはのキッカケになっただけに過ぎません」

「ううん。セイバーがなのはを、私達を変えてくれたのよ」

「そうだぞ。あのままじゃ、どれだけなのはに寂しい思いをさせた事か……」

「それに、あたし達の相手としても凄く助かってるし」

「そうだな。おかげで自分の限界を二つ程超える事が出来た気がする」

口々にセイバーの意見を柔らかく否定していく。そして同時にセイバーが来てくれた事を感謝する。その言葉の節々に込められた想い。それがセイバーの心に沁み込んでいく。

常識的に考えれば、怪しい者でしかなかった自分を、暖かく受け入れてくれた高町家。そして、今では本当の家族のように接して――いや、本当の家族として接している。

「そうですか。そう言ってもらえて……嬉しいです」

（本当に……私は幸せです）

その想いを表情に表すセイバー。満面の笑みに、士郎達も嬉しそうに笑みを返す。こうして、夜は更けていく。セイバーの心に”暖かい何か”を残して……。

翌朝、なのはは驚いた。何とセイバー達が昨日の蜂の巣を持ち帰ったからだ。今後の登山客の事を考え、退治したのだという。

なのはは巣に興味があったのだが、士郎の「気持ち悪いぞ」の一言で見るのを止めた。

その日の朝は、昨日取ってきた山菜の残りを使った炊き込みご飯。その味に五人が舌鼓を打つ中、一人離れた場所でセイバーは……。

「……ダメだ。私には出来ない……っ！」

密かに珍味と言われている蜂の子を食べようとしたが、その見かけや蜂の幼虫という事に抵抗感を拭えず断念していた。
そんなセイバーを他所に、なのは達は山の恵みを堪能するのだった。

（楽しい事って、あっと言う間だよね）

帰りの電車の中、なのはは外の景色を眺めてそんな事を考えていた。二泊三日のキャンプ。だが、それが終わりを迎えるのは想像以上に早かった。
二日間の内、一日は士郎達の鍛錬で桃子とセイバーの二人以外とは遊べなかったのもあるが、それでも早かったとなのはは感じていた。

ふと視線を動かしてみれば、向かいの座席では、美由希がシートにもたれて寝ているし、恭也はセイバーとトランプをしている。おそらくポーカーだろうとなのはは思った。何故なら、恭也が何度も悔しそうな顔をしているからだ。

（セイバーって、対戦になると強いんだよね）

賭け事や勝負事になるとセイバーは無類の強さを発揮する。それをなのはは良く知るからこそ、ゲームでの対戦をセイバーとはしない。
初めこそなのはが圧倒していたが、セイバーも慣れ始めると恐ろしい程に強くなるのだ。まぁ、ＲＰＧだけはそうでもないが。

（でも、勘がものを言うものは、本当に強いからなぁ……）

そんな事を思い出し、なのはは小さく笑う。それを隣の士郎が気付き、不思議そうに尋ねた。

「どうかしたのか？」

「……ううん。何でもないよ、お父さん」

その答えに士郎は若干不思議には思ったものの、笑みを浮かべてなのはの頭に手を置いた。

「そうか。で、楽しかったか、なのは」

「うん。また、みんなで行きたいな」

（そうだ。今度は私が釣りをやろう！　それで、セイバーと勝負するんだ。うん、そうしよう！）

そんな事を考え、なのはは笑う。それに士郎も笑う。そしてそんな二人に気付き、桃子が「何？　お母さんも仲間に入れて」と言ってきたので、それになのはは笑顔を浮かべて答えた。

「あのね、また来たいなって。それで、今度来る時は……」

桃子と士郎に楽しそうに語るなのは。それを聞きながら微笑む二人。

こうしてなのはのキャンプは終わりを迎える。

その胸に、多くの思い出を残して…

…。

ちなみに、恭也はセイバーに連戦連敗だったとさ。

――

お盆のキャンプ話。二日目は、士郎達三人は御神の剣士としての鍛錬をしていたので割愛。

カレーは夕食兼翌朝の朝食でした。セイバーの想いと高町家の想い。

それがなのはの知らない所で通じ合っていた。

……一瞬、ここで真名話もありかと思った俺は考えなしです。だって無印前じゃん！

空白期（S&R）

それは、まだなのは達が二年生になる前の事……。

「ドライブ……ですか？」

「そう。ライダーも見事に免許取ったし、初運転を兼ねて五人でお出かけ。いいでしょ？」

「行きましょうライダーお姉様！　紅葉が綺麗ですよ～」

ファリンの見せたのは、旅行案内のチラシだ。そこには美しい紅葉の写真が印刷されており、確かに目にも鮮やかであった。

それを見て、ライダーは少し思案するが、何かを思いついたのか、笑みを浮かべて頷いた。

「……いいですね。では、紅葉狩りにでも出かけましょう」

紅葉、舞い散る中で……

月村家五人での外出。実は、それは結構珍しい。何だかんだで、高町家との繋がりが強い月村家。

そのため、何かイベントがあるたびに、なのはや恭也を誘ってしまい、五人だけで、というのは中々なかったりする。

それを考え、ライダーは今回の外出に頷いた。たまには家族水入らずもいいだろうと考えて。

いつもはノエルが運転するが、今回は助手席にノエルが座っている。後部座席は、忍とファリンに挟まれる形ですずかが座っていて、三人で楽しげに話している。

それを聞きながら、ライダーとノエルは微笑み合い、視線を前方に向ける。

「大分人気が無くなってきましたね」

「そうですね。さて、そろそろ看板などが出て……あ、あれですライダー」

ノエルの指差す方へライダーは視線を向ける。そこには、ガイドブックに乗っている紅葉の名所への案内があった。

その指示を記憶し、ライダーはゆっくりと加速する。本来ならば、ライダーは速度を限界まで出したがる。

しかし、今回は自分以外の者が乗っているために安全運転を心掛けている。後は、呆気無く速度が出るのにもやや不満がある様子。

だが、一番の理由は……。

「あ、あれ見てすずか」

「どれ？」

「あ、凄いです。赤や黄色が一面に……」

すずか達が景色を楽しめるように。何気ない車内の会話を出来る限りしてもらいたかったのだ。

今のように、みんなが喜んでくれる時間を少しでも長く出来るようにと。

（私も……やはり変わったのですね）

今まで、季節の移り変わりにそこまで意識を向けた事等なかった。だが、今は違う。春夏秋冬を楽しみ、愛でる。

そんな日本人の心がライダーにも芽生えてきたのだ。その影響は、衛宮邸での日々と……。

（すずか達のおかげですね）

季節毎の風物詩や旬の食べ物。それらを欠かす事無く教えてくる忍とファリン。それを時に嗜め、時に補うノエル。

そして、そのやり取りを微笑み、慌て、楽しむすずか。そんな中で暮らしていれば、ライダーも変化するというものだ。

だが、その変化をライダーはむしろ喜んでいた。興味を持てる事があまりなかった以前に比べ、今は趣味が段々出来てきたのだ。

まぁ、それもサイクリングやサーフィン等の何かに乗るというものばかりなのだが。

そうこうしている間にも、車は進む。駐車場へ入り、本来なら躊躇うような難しい場所へあっさりとライダーは車を入れる。

そのテクニックに、忍達だけでなく、誘導員達や他のドライバーさえ拍手を送った程だ。

そして、五人は大勢の人にややため息を吐きながら、ゆっくりと歩き出す。ライダーだけは、持ってきたリュックを背にして。

視界一杯に広がる紅葉の世界。鮮やかな黄色や紅を楽しみながら、五人は歩く。途中にある売店を冷やかし、道行く人との僅かな会話をしつつ、五人は景色を堪能していた。

「この辺りなら良さそうですね」

やがて、あまり人のいない場所まで来た所で、ライダーが背にしていたリュックから、大きめのビニールシートを取り出した。
そして、それを地面に敷き、ファリンがそれに真っ先に座ろうとしてノエルに注意される。

「先にすずかお嬢様です」

「は～い……」

「別に気にしないのに……」

すずかは苦笑しながら、靴を脱いでシートに座る。見上げれば鮮やかな紅。見渡せば色取り取りの山々。
そんな景色を眺めて、心から来て良かったと思うすずか。その表情にライダー達も笑みを見せる。
そして、忍にファリンも座り、ノエルとライダーも静かに座って景色を眺めた。
誰も何も言わず、ただ紅葉を眺める。その色合いや周囲の空気に、心が落ち着くのを感じながら。

（凄いなぁ……こんなに綺麗な紅葉は初めてかも）

（良い雰囲気ね、ここ……今度は恭也と二人で来たいかも）

月村姉妹は共に向かいの山々を見つめて、思いを馳せ……。

（美しいですね。これが紅葉……秋の情緒、ですか。良いものです）

（赤に黄、それに緑。本当に綺麗です……お土産に一枚持って帰ろ

う）

メイド姉妹も、風に揺れる葉を眺め、思い思いに心を動かし……。

（この国は、本当に情緒というものを大事にしますね……これだけの人が、ただの葉を見るために動く。まさに、雅のためですか。アサシンは……本当に日本人なのですね）

ライダーは、その場を訪れた人の数を思い出し、小次郎の事を考えて小さく笑みを浮かべる。

そんな風にどれ程過ごしただろうか。やがて、ファリンが思い出したかのようにリュックを引き寄せた。

その行動の意味を理解し、ノエルとライダーは苦笑する。すずかと忍は若干分からないのか、不思議そう。

ファリンがリュックから取り出したのは、ランチボックスと水筒。それを見た瞬間、すずかと忍も理解し、笑い出した。

「花より団子ね、ファリンは」

「ち、違いますよぉ。そろそろすずかちゃんもお腹が空くだろうと……」

「ふふ、ありがとうファリン。確かにもうお昼だもんね」

忍の言葉にファリンがどこか顔を赤くしながら反論するも、どこか弱い。それにすずかは笑みを見せて、そのランチボックスを受け取った。

その中身は紅葉狩りという事で、ファリン作のおにぎりとノエルとライダーが作ったおかずの二段重ね。水筒の中身は、緑茶である。

それを見て、すずかは嬉しそうに「遠足みたいだね」と呟いた。

「じゃ、早速頂きましょ」

「うん」

「じゃあ、ライダーお姉様が」

「私、ですか？」

「ええ。ライダーが今回はある意味主役ですから」

ファリンの言葉にライダーはどこか困った顔をするが、ノエルの言葉に苦笑した。そして、観念したように手を合わせると……。

「では、いただきます」

「「「「いただきます」」」」

ファリン作のおにぎりは、概ね好評だった。概ねというのは、中身を入れ忘れていたり、あまりに力を入れて握ったせいで固くなっていたものがあったため。

一方、ライダーとノエルのおかずは何の問題もなかったのだが、それを忍が「面白みがない」と言ったため、ライダーの「では、今夜はシノブが面白みのある”美味しい料理”を作ってください」と返し、忍を沈黙させる一幕があった。

その時の忍の表情に、すずか達が声を出して笑ったのは言うまでもない。

「では、私とファリンは売店に行ってきます」

「あ、私も行くわ……すずかは？」

「私はもう少しここにいる」

そのすずかの答えに忍は笑みを返すと、ライダーへ視線を向ける。それに気付き、ライダーも視線を向けて首を横に振る。

「そっか。じゃ、行って来るわね」

「うん」

「気をつけて。後、無駄遣いをしないように」

「ライダー……私を何だと「行きますよお嬢様」……時々ノエルも私の敵になるわよね……」

まるで自分の発言を遮るように歩き出したノエルに、忍はブツブツ呟きながら後を追う。それを笑いを噛み殺してすずかは見送った。

そして、その後姿が見えなくなったところでライダーが言った言葉が、すずかの我慢を決壊させた。

「子供としか思えないです」

呆れたように言い切ったライダー。それが先程の忍が言おうとした事の答えと分かり、すずかは吹き出した。

その笑い声を聞きながら、ライダーも笑う。紅葉が風に揺れる。

そして、それにより紅葉が枝から離れ、ユラユラと舞い落ちる。

それに気付き、すずかが視線を上へ移した瞬間、突風が吹き抜けた。一瞬目を閉じるすずか。そして、目を開けると……。

「わぁ……」

「……綺麗ですね」

地面の紅葉や枝の紅葉が辺り一面を舞い散っていた。まるで紅葉の雨。そんな中、ライダーがふと手を差し出した。

すると、その手に一枚の紅葉が、吸い込まれるように静かに乗った。

それを見たすずかが、自分の手を同じように差し出す。するとすずかの手にも、吸い込まれるように紅葉が乗った。

ライダーの紅葉はやや黄色が残るものの真紅。すずかの紅葉は黄色と赤が半々。それを見てライダーが微笑む。

「まるで、人間のようですね」

「え？」

「大人を真紅とすれば、赤子が緑。黄色は子供で、赤と黄が半分ずつなら……」

「……子供から大人へなり始めてる？」

すずかの言葉にライダーは頷き、こう続けた。

「まさに今の私達です」

「……そうだね。早く真っ赤にならなきゃ」

どこか楽しそうに答えるすずか。それにライダーも楽しそうに笑い、視線を手にした紅葉へと戻す。

（いいものです。こんな穏やかな時間を……貴方達とも過ごしたいです、サクラ）

（ライダーって、やっぱり時々詩的な表現するなぁ。あれ？　でもライダーのも少し黄色があった気がする……）

その後、戻ってきた忍に、ライダーが完全黄色の紅葉を渡すのを見て、すずかだけが小さく笑っていた……。

――――――

空白期

照りつける真夏の太陽。どこまでも続く砂浜。そして、視界に広がる大海原。

ここはバニングス家のプライベートビーチ。なのは達は、小学校二年生となり、夏休みの思い出作りにここへ来ていた。

はやても連れて行きたいと、アリサが提案した海水浴。初め、その話を聞いたなのは達は揃って難色を示した。

それは、はやての事を思ってだった。海水浴場は人が凄いし、車椅子のはやては絶対来ない。

そうなのはとすずかが言うと、アリサが自慢げにこう答えたのだ。

「大丈夫よ！　アタシのプライベートビーチに行くんだから！」

なのはの夏、みんなの夏

車で海鳴から走る事、実に二時間弱。その浜は静かで、眼前には穏やかな海が広がっていた。

その近くには、おそらく宿泊用なのだろう。オシャレなペンションのような建物まである。

そんな光景を眺め、どこか人事のようにはやては呟いた。

「は～、すごいな～」

「まったくだ……さて、はやて」

「ん？」

「……水着に着替える前に、課題を片付けるのではなかったのか」

その呟きに同意し、アーチャーはやや苦い顔ではやてを見つめた。確かに出かける時、そう言っていたはずだったからだ。

アーチャーの目の前にいるはやては、既に赤を基調としたワンピースタイプの水着を着ていた。見れば、なのはやすずかも水着になっている。

なのははピンクのワンピースタイプ。すずかは水色の同じタイプだ。ちなみにアリサは鮮やかなオレンジの同じタイプ。このためだけに水着を四人で新調しにいったのだ。

「それがな、アリサちゃん達は宿題持ってきてないん言うんよ」

「……分かった。今回は大目に見よう」

はやての視線は、みんな持ってきてないのに自分だけやるのは嫌だ。そんな想いを込めたものだった。

それを感じ、アーチャーはそれ以上の追求を止めた。そうしても何の意味もないからだ。

視線をはやてから後方へと移し、アーチャーは歩き出す。

車から降ろした荷物を運んでいる小次郎。その横で恭也もそれを手伝っていた。アーチャーもそれを手伝うべく、近寄って――。

「いい所に。アーチャー、これを立ててきてください。スズカ達の休憩スペースを作らなければならないので」

水着姿のライダーに呼び止められた。車を降りる時まで確かに普段着だったはずだ。

ライダーはアーチャーにパラソル等一式を手渡し、車のトランクを閉めた。
その道具を受け取り、アーチャーは何かを察したのか苦笑いを浮かべる。
「……了解した。ライダー、君も着替えたのか」
ライダーは、その言葉に困った顔で頷いた。ライダーが着ているのは、黒のビキニタイプ。選んだのは、言うまでもなく忍。
その忍はといえば、紫の水着に着替え、すずか達と一緒になって海で遊び始めていた。それを横目で見ながら、二人は息を吐く。
「……無理矢理です。私はまだいいと言ったのですが……」
「成程。やはり車内ではやてと話し合っていたのは、それだったか」
今回は、なのは達高町家が四人、月村家は三人、アリサと小次郎、はやてにアーチャーの計十一人。
バニングス家が手配したマイクロバスをライダーが運転し、ここまで来たのだ。
ちなみに、ノエルとファリンはお留守番。日帰りのため、すずか達の夕食等の支度をするのだそうだ。ファリンは行きたがっていたが……。
「まぁ、いいのです。セイバーに比べれば……」
「私がどうかしましたか？」
ライダーの声に反応したのは、車内から現れたセイバーだった。
その姿も既に水着になっていた。

白いビキニタイプの水着。それにアーチャーは、一瞬とはいえ見とれた。だが、それを感じさせないように意識を切り替え、尋ねた。

「君も既に着替えたのか？」

「ええ。海で泳ぐのは初めてなので、楽しみだったのです」

そう答えるセイバーは、歳相応の少女の表情で笑った。それにアーチャーもライダーも笑みを浮かべる。

それにセイバーは気付き、照れくさそうに顔を伏せた。すると、そんなセイバーを呼ぶ声が聞こえてきた。

「セイバー、早く早く～！」

「あっ、はい。今行きます！」

楽しげに手招きするなのはに答えると、セイバーは急いで浜へと向かう。その後ろ姿を見つめ、二人は呟く。

「「子供だな（ですね）」」

余談だが、セイバーは最初、海面を走ってなのは達を驚かせた。精霊の加護によるものだったのだが、セイバーは海にも適応されて喜んでいた。

まぁ、その後は普通に泳いでいたが……。

「これで終わりですか？」

「うむ。済まぬな美由希殿。手伝ってもらうつもりはなかったのだが……」

「いいんですよ。私はまだ泳ぎたいって気分じゃなかったんですから」

そう言って美由希は笑う。着替え終わり、浜に向かおうとしたところ、建物の方へ荷物を運ぶ小次郎を見かけ、つい手伝いを申し出たのだ。

だから、既に眼鏡は外し、いつでも泳げる状態だった。小次郎はそんな美由希に笑みを浮かべ、ぽつりと一言。

「しかし、水着と言うのは些か破廉恥なのだな。露出が多いと思うのだが……？」

「え、ええっと……水の抵抗を減らすために、生地は少なく薄くしてあるんですよ」

美由希の格好は、南国系の色使いでパレオつきのもの。それをまじまじと見つめる小次郎。その視線に邪気はなく、純粋な興味だった。

だが、その視線にどこか慌てたように美由希は答える。それに小次郎は納得するも、まだ何か気になるようで……。

「美由希殿は、見られて良いものなのか？」

「小次郎さんなら大丈夫です。って、あの、気にしないんじゃなくて、その……」

しどろもどろになる美由希。それを不思議そうに眺め、小次郎は

呟く。

――――まぁ、その姿も中々雅なものよ。

その呟きが美由希の動きを更におかしくしたのだが、それに気付かず小次郎は歩き出す。

美由希もそれについていく形で歩き出した。向かう先は賑やかな声のする浜。

そこでは、なのは達が海で遊び回っていて、はやてはすずかと砂を使って城を作っているようだ。

（ふむ。泳ぐのは、鍛錬の一環と考えておった時代とは違うか。しかしも海でとは、な。やはり”現代”と言うのは面白きものよ）

（小次郎さんって、結構大胆だな～。あんなにジロジロ見られたの初めてだよ。でも、不思議と嫌じゃなかったな？　……恥ずかしかったけど）

「美由希殿、良ければ私に現代の泳ぎを教えてくれぬか？」

「え？　ああ、いいですよ。じゃ、迷惑にならないように、なのは達のいない方に行きましょうか」

そんな風に会話しながら二人は歩く。この後、クロールなどを披露する美由希と、それを見よう見真似で覚える小次郎の姿があった。

その子供のような小次郎に、美由希は微笑む。そんな二人の水泳教室は、昼まで続いた。

美由希が小次郎を意識し出すのは、これが最初のキッカケだった……。

運んでいた荷物を降ろし、恭也は息を吐く。視線の先にあるクーラーボックスの中身は、スポーツ飲料などのドリンク類だ。
小次郎が運んでいた方のクーラーボックスには、昼食用の食材が入っている。昼は浜でバーベキューをする事になっているのだ。
そのため、アーチャーが現在下拵えをするべく、建物内の厨房で働いている。まぁ、格好は水着なので、中々シュールだろうが。

「……何ぼ～っとしてるの？」

「いや、アーチャーさんに悪いなとな」

「いいのよ。自分から言い出したんだし、ね」

そう言って、忍は恭也の腕に胸を押し付ける。その感触に慌てて周囲を確認する恭也。幸い誰も見ていなかったが、忍はそんな恭也に口の端を吊り上げた。
そして、耳元に顔を近付け囁いた。

「もう、別に初めてって訳じゃないクセに」

「っ！？　忍！」

からかうような囁きに、恭也が微かに声を荒げるが、それはただの照れ隠しだと忍は知っている。
スッと恭也から体を放すと、悪戯めいた笑みを見せて走り出す。
勿論、去り際に――――。

「恭也のムッツリ～」

そう、捨て台詞を忘れずに。それに恭也は呆れながらも、ため息を吐いて追い駆ける。まだ水着にはなっていないが、仕方ない。ここで追い駆けなければ、確実に後で拗ねるか文句を言われるからだ。

（ったく、忍の奴も子供みたいなとこがあるんだからな。……ま、そこが可愛いところでもあるのか）

さり気無く惚気ながら、恭也は走る。その視線の先には、浅瀬が見える。それも、人目に付きにくいような感じの。

この後二人は、ライダーが捜しに行くまで姿を見せなかった。現れた時、忍の肌艶が良くなっていたのは……後で分かる事である。

恭也と忍が揃って浅瀬に消えた頃、浜の方では……。

水飛沫を上げて、はしゃぎ合うなのはとセイバー。互いに水を掛け合い、笑っている。ライダーは先程から黙々と泳ぎ続けていた。その速度は凄まじく、何度も沖と浜を往復しているのだろうが、最早それが何回か分からぬぐらいの速さだった。

すずかとはやても最初こそ波打ち際で遊んでいたが、今は砂浜で芸術に挑戦していた。

そして、そんな光景を眺め、アリサは満足そうに頷いて視線を横へと移す。

「……まだ？」

「……もう終わる」

ポンプを使い、ビーチボールを膨らませているアーチャー。それをまだかまだかと待つアリサ。下拵えを終え、浜へと戻ってきたアーチャーを出迎えたのは、意外にもアリサだった。

アリサは軽く驚くアーチャーに、無言でポンプとビーチボールを手渡し「小次郎が美由希さんとどこかへ行ったのよ」と告げた。

そして、それだけでアーチャーは全てを理解し……。

「……終わったぞ」

「ありがとう！」

こうしてアリサの要望を聞いてやっていたのだ。お願いや頼むからと言わず、要求を突きつけるアリサに、アーチャーがきんのあくまの姿を思い出したのは、言うまでもない。

恐るべきは過去の記憶か、それとも刷り込まれた世話好きの性か。とにかくアーチャーは、アリサにはどこか逆らえない時があった。

ビーチボールを抱え、走っていく後姿を見つめながらアーチャーは思う。

（はやてもだが、アリサもどこか凛達を思い起こさせる時がある……主にはやては口調で、アリサは言動だが）

彼は気付いていない。アリサはともかく、はやての場合は、自分が少なからず原因になっているとは。

砂浜に対角線を描くように座るなのは達。その四対の視線はビー

チボールに注がれている。
ちなみにセイバーはライダーと遠泳対決をしている。お昼までには帰ってくると言っていたので、なのは達は心配していない。
セイバーが食事時に帰らないなど、ありえないのだ。

「ほら！」

「ほい」

「え？　え？　に、にゃぁ～！」

アリサからはやて。はやてからなのはへ打ち返されたボールは、なのはの上を通り過ぎる。それを何とか打ち返そうとしたなのはだったが、そのままひっくり返ってしまう。
そう、これはその場から動かずに、何度打ち返せるかを競うルール。はやてが同じ条件になる遊びにこだわる、アリサ提案のボールゲームなのだ。
意外とこれが楽しく、すずかもアリサも先程から何度も打ち返せず、悔しい思いをしていた。

「なのはちゃん、大丈夫？」

「な、何とか。でも、砂が口に入ったかも……」

何度かペッペッと繰り返すなのは。それをアリサは笑みを浮かべて見つめていた。
何しろ、なのはは打ち返した回数が一番少ないのだ。
原因は、なのはの運動神経だけではない。はやてから打ち返されるボールのコントロールにもあった。
打ち返せるように調整するアリサやすずかと違い、はやてはボー

ル遊びなどやった事があまりない。
なので、中々上手い場所にボールを打ち返す事が出来なかったのだ。

「ごめんなぁなのはちゃん。わたしが、もっと上手に返せればええんやけど……」

「いいよいいよ。私が運動音痴なのもあるんだし」

すまなさそうに謝るはやてに、なのはは笑顔で答える。それに、はやても笑みを返し、告げる。

「よっしゃ！　なら、次は絶妙な球を返したるな！」

「うんっ！　私も頑張るよ」

互いにガッツポーズを見せ合うなのはとはやて。この後、初めて継続回数が三十を超え、四人の盛り上がりは凄いものとなった……。

煙が立ち上る砂浜。そこにはバーベキューセットを前に、鋭い目で串を睨んでいるアーチャーがいた。
その周囲には、セイバー達が集まっていた。視線は全て串に向けられている。
串には、野菜や魚介、肉などが刺さっている。どれもアーチャーによる”仕事”が施されていて、堪らない匂いを出していた。
なのは達もその匂いに我慢出来ず、遊びを切り上げ、今か今かと待っている。美由希と小次郎も匂いで昼時と理解したのか、砂浜に戻ってきた。

恭也と忍はまだ姿を見せず、ライダーはそんな二人を捜してくると言ってこの場を離れた。

「いい匂いだよね～」

「まったくです……」

「なのは、セイバー、涎出てるよ」

美由希の指摘に慌てて口元を拭うなのはとセイバー。その視線の先にあるのは、目にも鮮やかな串の数々。

魚介の串には、アーチャー特製の醤油ダレが塗られており、それが何とも言えない香りを漂わせる。

更に、肉の串には、アーチャー作バーベキューソースが塗られているので、その香りもあって相乗効果は高い。

なのはのように涎とはいかないまでも、アリサやすずかでさえ、その香りには食欲を刺激され、先程からお腹が鳴らないか心配している。

「……これ、何で作ったんや？」

「後でレシピを教えよう。それとさり気無く串を確保しようとするな。それはまだだ」

タレを真剣に見つめながら、シレッと串（魚介大目）を手にしているはやてに、アーチャーのストップがかかる。

それを苦い顔で従うはやてだったが、小さく「ケチ」と言うのは忘れない。

はやてが手にした串はもう食べられる状態になっていた。だが、アーチャー基準では、まだ完全ではないのだ。

「何とでも言え。君には体の事を考慮した串（野菜のみ）をくれてやろう」

「それはおおきに。でも、わたしは野菜よりも、お肉とか魚とかが必要や思うんよ」

「心配いらん。きちんと今日の夕食で食べさせてやる」

「わたしは今食べたいんや！」

いつものような会話を繰り広げる二人に、なのは達は苦笑い。仲がいいのは結構なのだが、今ははやての大声がお腹に響く。

食欲を刺激する匂い。滴るタレとソースの音。見るからに美味しそうな串の数々。それに、なのは達の我慢も限界を迎えるところで……。

「良し、ここから先はもういいぞ」

「「「「やったぁ！」」」」

思い思いに串に手を伸ばすなのは達。それを微笑ましく見ている美由希と小次郎。セイバーは、既に串を両手に確保しているところが恐ろしい。しかも、肉と魚介の大目のものだ。

そんなセイバーに視線を送っていたアーチャーだったが、それにセイバーが気付き――。

「な、なんですかっ」

「……いや、何でもない」

どこか恥ずかしそうなセイバーに、アーチャーは何も言わず、黙々と串に食材を刺しては、網に置いていくのであった……。

その頃、ライダーは困惑していた。気配を探り、二人を見つけたのだが、そこで展開されていたのは所謂”情事”というもので……。

（さて、いつ声を掛けるべきでしょうか）

視線の先では、忍が恭也に馬乗りになっている。どうやら互いに行為に夢中になり、周囲の気配に気付かないようだ。

ライダーは何とか自発的に気付いてもらおうと、先程から気配を敢えて出しているのだが、それが効果なしと判断した。

ふと視線を後方へと向ければ、すずか達が楽しそうに食事をしているのが見える。

それを微笑ましく思う反面、ライダーは自身の空腹を感じていた。受肉した事により、三度の食事が欠かせないものになったためだ。

それに、今日の昼食はアーチャー作。それはライダーにとっては中々味わえないものなので……。

（何か手はないでしょうか？　このままではセイバーに粗方食べられてしまいます）

何としても食べたかったのだ。勘違いしてはいけないが、ライダーは食欲魔神ではない。

ただ、どこか士郎の料理を思わせる味に、彼女は郷愁にも似たものを感じているのだ。

ふと気付けば、恭也と忍が互いに息を切らせて抱きしめあっていた。どうやらきりがついたようだ。

それを認識するや、ライダーは静かにそこから若干離れ、声を出した。

「シノブ～、キョウヤ～、どこですか～？　もう、昼食の時間ですよ～」

その瞬間、二人のいる方から物音がした。慌てる息遣いやうろたえる声まで聞こえる。

ライダーはそれを確認し、息を吐いて空を見上げる。そこには雲一つない青空がある。

「……この暑さが二人を狂わせたのでしょうか」

思わず言ったその呟きは、幸運にも二人に聞かれる事はなかった。だが、二人が姿を見せた途端、ライダーは棒読みに近い感じでこう言った。

「ああ、こんなところにいたのですね。捜しました。では、私は先に戻っていますので」

二人が言い訳をする暇すら与えず、ライダーは走り去った。それを二人はただ呆然と見送るしか出来なかった……。

そんなこんなの海水浴も終わりを告げ、太陽の光が夕日に変わり出す。

後ろ髪を引かれる思いのなのは達だったが、それでも誰も文句を言わずに車へと乗り込んだ。

夕日を浴びながら走るマイクロバス。その車内では、なのは達子供組が安らかな寝息を立てていた。

すずかとはやてが互いにもたれあいながら眠り、アリサは小次郎に寄りかかって眠っている。

それを微笑みながら見つめる美由希と忍。アーチャーはライダーの話相手をし、小次郎はアリサが起きぬように気をつかいながら、水平線に沈む夕日を眺めていた。

そして、なのははといえば……。

「やれやれ……」

セイバーにもたれかかって眠っていた。恭也がそんななのはに上着をかけて、小さく笑う。

何故なら、なのはがセイバーの手をしっかりと握っていたからだ。

そんな微笑ましい光景を見て、恭也は心から思う。こんな時間がずっと続くように、と。

恭也が二人からそっと離れ、忍の横に座る。美由希は景色ばかり見ている小次郎の後ろへ行き、今日の感想を尋ねていた。

「んっ……セイバぁ……」

「……何ですか？」

寝言に優しく答えるセイバー。それが聞こえたのか、なのはは笑みの形に顔を変えて呟いた。

「大好きぃ……」

そんな言葉にセイバーは穏やかな表情を浮かべて小さく答えた。

――私もですよ、なのは。

――――――

空白期（F&

空白期（F&L）

時の庭園。そこでランサーがしていた事と言えば、厳しく激しいフェイト達の訓練と、リニスから教わり、フェイト達と共に魔法の勉強。そして……。

「具合はどうだ？」

「ええ。それなりね」

プレシアの精神安定だった。それがある意味では一番大きな役割ともいえる。これがなければ、おそらくあの結末はなかったのだから。

ランサーの声に、柔らかい声で答えるプレシア。ランサーがプレシアの治療に手を貸すようになって既にかなりの時間が経ち、初めこそ声にも棘があったプレシアだったが、それも大分和らいだ。

というのも、ランサーがそれを注意したのだ。心を休ませなければ、体が休まらないと。それにプレシアも納得し、段々とではあるが口調を穏やかにしていった。

現在、プレシアの部屋にはリニスがいない。リニスはアルフとフェイトと共に昼食の支度をしているのだ。

その際、リニスからランサーは言われたのだ。プレシアが話をしたいと言っていると。

「そりゃ良かった。で、話があるって聞いたんだが？」

「……アリシアの事を何とか出来るかもしれないわ」

「……教えてくれ」

真剣な眼差しでプレシアを見つめるランサー。その輝きと力強さにプレシアは言いようのない安心感を覚える。

プレシアは知らない。自分がランサーに向ける視線が、単なる信頼出来る相手へ向ける視線ではなくなっている事を。

それをリニスが見ればこう言っただろう。それは、親愛の情を持つ相手に向けるものだと。

女達の想い

プレシアがランサーにしたのは、ジュエルシードと呼ばれるロストロギアの話だった。その情報を聞いた時、ランサーは疑問に感じた事があった。それは、その情報をどこから入手したのかという事。

それにプレシアはどこか悪戯っぽく笑った。その笑みにランサーは少し驚くも、同じように笑みを返した。

「……管理局に少し、ね」

「へぇ……バレないようにしたんだろうな？」

「誰に言ってるのかしら？　そんな簡単に分かりはしないわ。それに分かる頃には、ジュエルシード自体は行方不明よ」

（こんな風に楽しく会話するのなんて久しぶりね。アリシアが生きていた頃以来かしら……？）

そう思い、プレシアはおかしそうに笑う。ランサーは、そんなプ

レシアにやや不思議そうな表情を浮かべるが、別に悪い反応ではないと思い、特に何も言わなかった。
だが、そのプレシアの笑みがどこか少女のような雰囲気に思え、からかいを含めて呟いた。

「結構可愛く笑うじゃね～か」

「っ？！」

「ま、お前がそう言うなら心配ないな……信頼してるぜ」

ランサーの言葉に動揺して頬を赤く染めるプレシア。それを見て、満足そうにランサーはその場を静かに離れる。
そして、そのまま扉まで歩き、プレシアの方へ視線だけ向けて告げる。

「俺がお前を信じるように、お前も俺を信じろ。絶対損はさせねぇ」

そう言い切ってランサーは部屋を出る。その後姿を見送って、プレシアはどこか見惚れたように呟いた。

「損どころか、もう十分得をさせてもらっているようなものよ」

そして、こんな事を思い、プレシアは目を閉じる。

（ランサー、貴方が私を信じるのなら、私も貴方を信じるわ。それが……例えどんな事であっても……）

それは、こう思っているから。望みがなくなった自分に、ランサーがどんなモノを与えてくれたか知っているから。

――貴方に会えた。希望を貰った。それだけでも、私は得をしてるわ。

テスタロッサ家の食卓は戦争だ。といっても、ランサーとアルフが取り合うだけで、リニスとフェイトは別に争う気はないのだが。

「あ、それアタシの！」

「へっ、俺の視界に入ったのが運の尽きだ」

今日もまた、ランサーがアルフの食べようとしていた鳥のもも焼きを奪い取り、笑みと共にそれにかぶりつく。それを悔しそうに睨みながら、アルフも負けじと、ランサーお気に入りのローストビーフを鷲掴み、その口へとほうばる。

それにランサーが怒りながらもどこか楽しそうにその手を料理へ伸ばす。アルフも笑顔を浮かべてそうはさせじと手を伸ばす。

それを見ながらリニスとフェイトは苦笑い。食事が賑やかなのはいいのだが、些か騒々しすぎるのだ。

故に、リニスがやれやれといった表情で立ち上がり、料理の載った皿を取り合う二人に対して……。

「いい加減にしてください」

バインド。それも幾重にも重ねたものだ。ランサーとアルフがそれに気付き、水を打ったように静まり返る。

そう、それはリニスが我慢の限界寸前の合図。それ以上騒ぎ取り

合うなら、一切の食事の支度を自分達でやれという暗黙の宣告。
実際、以前同じ事をされ、二人はリニスの食事を三日間お預けにされたのだ。フェイトとリニスだけ美味しそうに料理を食べる中、二人が許されたのは、保存食の缶詰とレトルトだけ。
最初こそ平然と食べていた二人だったが、流石に同じものばかり三日も続けば嫌になるもので、リニスに謝って許してもらった経緯があった。

「ふ、二人共、仲良く食べよ？」

「そそそ、そうだね。フェイトの言う通りだ」

「お、おう。いや、俺はそろそろアルフに譲ってやろうとだな……」

ドンッと音を立て、リニスが椅子に腰掛けた。その表情はとてもいい笑顔。だが、ランサーとアルフは知っている。あの笑顔の下には、般若の顔が隠れているのを。
だからこそ、無言で座る。そして、黙って食べる。普段なら使わないナイフやフォークを使って。それを見て、リニスが頷く。フェイトはそんな三人を見て小さく呟く。

「リニス、二人のお母さんみたい」

その呟きに気付かず、リニスはただ黙って二人が食べ終わるのを見つめていた……。

食事の後片付けをフェイトとアルフに任せ、リニスとランサーはある部屋に来ていた。そこはデバイスルーム。

かつてリニスがバルディッシュを製作して以来、整備以外では使われていない部屋。だが、そこで最近行なっている事がある。

「ではランサー、これに太陽のルーンを」

「おう」

リニスが手渡したのは、一般的に”ストレージ”と呼ばれる魔法のデバイス。バルディッシュが”インテリジェント”と呼ばれるのは、優秀な人工知能を有しているためである。

優秀なインテリジェントデバイスだが、欠点もあり、一つはコストが高い事。もう一つは適性があり、どんな優秀な魔導師でも、それに適応出来なければインテリジェントは使いこなせない事が挙げられる。

対するストレージは、何のくせもなく誰でも使える反面、これといった強みもないのだが、コストも低いため、大抵の魔導師がこのストレージを使っているのだ。

だからこそ、主流として使われているストレージを強化する事をリニスは考えた。道具としての機能。それをコストを掛けず高める。そこで注目したのがルーンだった。

力を象徴する”太陽”と守りの”大鹿”を刻む事で、魔法の威力やバリアジャケットの防御力を底上げしようと考えたのだ。

「……終わったぜ」

「では、早速」

だが、リニスもいきなり二つのルーンを刻む事はしない。一つずつ試し、それぞれでデータを得てから二つを試す事にしていた。

そして、まず太陽のルーンを刻まれたストレージを手に、ランサーへ向かって魔法を放つ。

「バインドッ」

「ぬっ……」

見た目は普通のバインド。だが、リニスは確信した。それがいつもよりも強化されている事に。何故なら、ランサーが解除するのに手間取っているからだ。

普段ならば、ただのバインドなど五秒ともたない。それが、今のバインドは実に十秒以上ランサーを拘束しているのだ。そして、バインドをランサーが解除したところで、リニスは感想を尋ねた。

「……どうですか」

「話を聞いた時はどうかと思ったが……厄介だな、これは」

ランサーはどこか嬉しそうに答えた。そう、これはあくまでも実験だった。魔術と魔法の融合。その目的は、アリシアの再生とプレシアの治療に役立てるため。

今回の事でルーンがデバイスに影響を与えるのは分かった。そして、それが魔法の構造の脆さを補強しているのは、ランサー自身が感じ取った。

これを応用し、治療系の魔法も効果を上昇させる事が出来れば、プレシアの病気も何とか出来るかもしれない。

「では、次は大鹿をお願いします」

「おう！」

想像以上に上手くいったため、ランサーとしても気合が入ったのだろう。リニスから手渡されたデバイスに、先程よりも意気揚々とルーンを刻む。

そうして、ルーンを刻まれたデバイスは結論を言えば守りに関するもの全てが向上していた。シールド等の身を守る魔法に留まらず、バリアジャケットの強度や相手からの魔法に対する耐性も向上している事が後に分かる。

これを基にデータを取り、後にリニスとランサーはインテリジェントにも適応させ、守りはなのはに、力をフェイトに付与させる事となる。

「では、最後に両方をお願いします」

「うしっ！」

最後に二つを組み合わせたデバイスを使ったのだが、これが予想だにしない結果をもたらす。

「では、まず……」

バリアジャケットを展開しようとリニスがデバイスを起動させた瞬間、デバイスから恐ろしい程の魔力が放出される。

それをランサーが感じ取り、その手に槍を出現させ、リニスの手からデバイスを弾き飛ばす。そして、リニスの傍へ駆け寄るとかばうようにその体を抱き寄せた。

それが完了するかしないかのタイミングでデバイスが爆発した。

その音に目を閉じるリニス。ランサーはリニスを守りながら、その視線をデバイスへと向けていた。

爆発した原因は分からないが、おそらく二つのルーンの加護をデバイスが受け入れられなかったのだろうと、リニスは結論付けた。
処理能力や許容量などがあるように、魔術の付与も限界があるのだろうと。その推測に、ランサーも納得した。
元々この世界にない魔術。それに魔法世界の道具が適応出来たのだけでも凄い事なのだ。故に、欲張り過ぎてはいけないのだ。これは、本来ありえない力なのだから。

「しかし、これだけでも収穫だな」

「そうですね。ただ……まだバルディッシュには」

「ああ。壊れないとは言い切れないからな」

ランサーの言葉にリニスは無言で頷く。そう、まだ永続的に使えると分かった訳ではないのだ。それも含めた実験をしなければならない。

「でも、一歩前進です。いつか完全に魔法と魔術を融合させてみせます」

「頼む。俺は、生憎ルーンしか使えないもんでな」

そう言ってランサーは悔しげな表情を見せる。他の魔術も知識としてはある。だが、使えなければ意味がない。
その知識の中には、上手くすればプレシアに使えるものもある。だが、それをどうすれば使えるのかがランサーにはわからない。
効果は知っていても、使用法を理解していない。それがランサーの知識の欠点。聖杯戦争の際、座から得た情報はあくまでランサーとして役に立つものだった。

キャスターとして召喚されていても、それはきっと変わらないだろう。何故ならば、それは彼が生きた時代には無かった魔術なのだから。

そんな悔しそうなランサーを見つめ、リニスは胸の動悸を落ち着かせようとしていた。先程の爆発から自分を守ったランサー。その胸に抱かれ、リニスは改めて感じたのだ。自分が強くランサーを意識しているのを。

（さっきのランサーの顔、とても雄々しかったです……あれが”漢”の顔というものなのですね）

リニスは山猫を素体とした使い魔である。つまり、普通の男よりも強い男に惹かれ易いのだ。それも、理性ではなく本能で。故に心奪われる。嘘偽りない想いをぶつけるランサーに。自分を飾らないその生き方に。どこまでも実直に、どこまでも豪胆に己を貫き通すランサーに。

そんな風にランサーへ想いを寄せるリニス。だが、それを口にはしない。まだ、そんな事を言い出せる状況ではないからだ。それを深く理解しているからこそ、リニスは尽くす。プレシアに、ランサーに。いつか全てをやり遂げた時、その時がこの想いを明かす時なのだと。

（その時、貴方は私を受け止めてくれますか？）

そんなリニスの想いを知らず、ランサーは砕け散ったデバイスを見つめるのであった……。

「よぉ」

「……フェイトはもう寝たよ」

「そうか……なら丁度いいな」

深夜と呼んで差し支えない時間。急にランサーがフェイトの部屋を訪れた。だが、目的はフェイトではなくアルフだったようで、ニヤリといった笑みを見せてアルフを手招きした。

それに不思議がるアルフだったが、ランサーの表情からは悪意はしないため、いそいそと部屋を出る。

部屋を出た所で、ランサーが手にしているものにアルフの視線が向く。そこにあったのはワイン。しかもグラスまで二つ持って。

「ワインなんてどうすんのさ？」

「決まってんだろ？　飲むんだよ」

当然といえば当然の答えに、アルフは沈黙。そして、どこか頭を押さえながら告げる。

「アタシさ、飲んだ事ないんだけど」

「ならこれが初めてか。良い女は酒もいけるにこした事はねぇ。今日で慣れとけ」

「いや……あ～、もういいや」

まだ反論しようと思ったアルフだったが、ランサーがあまりにも楽しそうに笑っているのを見て、それを打ち切った。

それに、自分も興味があったのだ。アルコールというものに。だから、何の不満も抱かずランサーの部屋までついていく。

そして、グラスを受け取り、ランサーがコルクを指で摘んで抜くのを見ても、アルフはそれがおかしい事だとは思わなかった。

後に、コルクを取るための道具があるのを知った時も「ああ、そうなんだ。でも、ランサーならそれ無しで開けれるよ」と、むしろ笑ったぐらいだ。

グラスへ注がれる赤い液体を眺めるアルフ。その鮮やかな色合いに、アルフは思わず「キレイ……」と呟いた。

それを聞いて、ランサーが笑みを浮かべる。そのアルフの声がとても艶めいていたからだ。

「……よし、んじゃ」

「えっと、乾杯……でいいの？」

「そうだな……アルフの初めての飲酒に乾杯ってな」

「はいはい……」

チンッと澄んだ音を立てるグラスとグラス。ムードの欠片もないが、それが自分達らしいとアルフは思った。試しとばかりにワインを口に入れる。苦いような辛いような、でもどこかクセになるような不思議な味が口の中に広がる。

美味しいとは言えないが、不味いとも言えない。それがアルフの感想。だが、ランサーは勢い良く飲んでいる。グラスではなく、このまま直接飲みたいと言いながら。

（は～、いい飲みっぷりだねぇ）

ランサーが三杯目を飲み干す間に、アルフはやっと一杯目を飲み終えた。空になったグラスに、ランサーがお代わりを注ごうとして……。

「アタシはいいよ。ランサーが飲みな。ほら」

「っと……へへ、わりぃな」

ランサーから瓶を取り上げ、残りをグラスに注いでゆくアルフ。それを嬉しそうに受けるランサー。この酒盛りは、アルフにとっての大事な思い出の一つになる。

何故なら、このワインを空にした後、ランサーがぼんやりと呟いたのだ。

「……やっぱ、良い女と飲む酒は美味いぜ」

「っ？！」

（こ、こいつ、また良い女って……）

ランサーの呟きにアルフはやや嬉しそうに顔を背ける。それをランサーは特に気にもせず、空瓶とグラスを持って立ち上がる。

「俺はこれを片付けてくる。お前はフェイトのとこに戻りな」

「……そうする」

そして、そのままふらりと部屋を出て行き、ドアが閉まる瞬間ぽつりと一言。

「……ありがとよ、付き合ってくれて」

「あっ……」

アルフが言葉を返そうとした時には、もうドアは閉まった後だった。静まり返る部屋に残され、アルフは呟く。

「……何さ。お礼を言うのはアタシの方だってのに」

こっちこそ、誘ってくれて嬉しかった。それを言いたかったアルフ。リニスが欲しいと言ったランサー。だからアルフはリニスを応援していた。

だが、今日の事で気付いた。自分は、ランサーに惚れている。リニスとランサーが一緒にいるのが、最近どこか嫌に感じてた。その理由が、今夜のやり取りで分かった。

（どうしよう……？　アタシ、ランサーが好きなんだ……）

先程から感じる顔の火照りは、決してワインのせいだけではない。ランサーの去り際の言葉。それがずっと頭の中で繰り返される。

そして、同時に不安に思う。自分はお世辞にもリニスと違い女らしくない。行儀も悪いし、言動も女性らしくない。全てがリニスと違う。

（アタシじゃ……敵いっこないよ、ね）

初めての恋。初めての想い。でも、それは叶える訳にはいかない。

リニスはアルフにとっても姉のような存在。その幸せを邪魔したくない。だけど……。

（辛いよぉ……苦しいよぉ……誰か教えておくれ。アタシ、どうすりゃいいのさ……）

ランサーのベッドに横たわるアルフ。考えるのはリニスとランサーの笑顔。そして、それを見つめる事しか出来ない自分。

そんな想像をし、アルフは泣いた。きっと、リニスとランサーが二人でプレシアの世話をするようになった頃なら、彼女はそれを心から祝えただろう。

だが、今はもうそれが出来ない。度重なる訓練や食事、そして今回のようにたまに過ごす二人の時間。それが、アルフを変えてしまった。

使い魔ではなく、一人の女へ。何も知らない子供から、恋を知った女性へと。

この日を境に、アルフはランサーをどこか熱っぽく見るようになる。それにリニスは気付くも、何も言わなかった。

それは、気を遣ったのでもなく理解出来なかったのでもない。それは自分も同じだったから。だから、リニスは言わない。アルフの成長と変化を嬉しく、どこか複雑に思いながら。

（ランサー、アルフまで変えてしまうなんて……いえ、私も変わったのです。本当に貴方は……凄い漢なのですね）

（アタシ、決めたよ。いつかこの気持ちをアンタにぶつける。それでどうなっても、アタシは構わない）

二人は知らない。既に彼を慕っている者が、想いを寄せる者がいる事を。

二人がその女性を知るのは、まだ先の話……。

――――――

出会い編その1

地球からそう離れていないとある管理世界。辺境世界とも呼ばれるここに、一人の管理局員がいた。彼女は、制服ではなく普段着と少し大きなバッグのみという格好で、転送ポートを後にする。

「……確かに何もないとこだわ」

外に出て見えるのは、平原と山、それに森というのどかで平和な景色。だが、ここに彼女が来たのは観光などではない。

（勘が正しければ、ここに例の事件に関係する研究施設がある……）

そう思い、彼女は歩き出す。しかし、その足取りは軽い。それもそのはず、彼女にとって今回の任務は……。

「でもラッキーよね～、休暇も兼ねた仕事なんて。あ～あ、あの人も連れてきたかった～」

先程までのシリアスはどこへやら。そんな事を呟いて彼女――クイント・ナカジマは歩き出す。公然とバカンスを楽しむように、彼女は歩く。

辺境世界ではあるが、何もない訳ではない。住む者も少ないながらも存在し、店や宿泊施設だってあるのだ。だから、クイントにとってこの仕事はまさに至れり尽くせり。

（ま、その分、色々とハードでしょうけど……）

そう思い、彼女はとりあえず目についた売店でアイスを購入し、

食べ始める。彼女は知らない。この世界で人生を大きく変える出会いをする事になるなどと……。

英雄王降臨！

「は～、つっかれた～」

一日中歩き回り、クイントは唯一の宿泊施設の一室に入るなり、ベッドへ倒れこんだ。気分転換にやってきた管理局員。そんな印象を与えながら、彼女はこの周辺を歩き回ったのだ。

無論、ただ観光していた訳ではない。情報を確かめるべく、さり気無く聞き込みや調査もしていた。そして、そこから得られたのは……。

（山を越えた先の渓谷、か）

山で家畜を飼育している男性の話では、その山を越えた先に渓谷があり、そこに住んでいる学者らしき男がいるのだそうだ。

時折山を降り、日用品等を買いに行き、その男性の農場にもよく発酵食品や肉を買いに来るのだという。

何故らしきかというと、白衣を着ている事からそう判断したらしい。実際男性が何をしているのか尋ねた際、医療関係の研究をしていると答えたそうだ。

その話を聞き、クイントは明日そこに調べに行く事にした。犯罪者にしては、無用心と思うかもしれないが、こんな辺境世界ではかえってこそこそしていた方が目につくのだ。

それに、今回のような辺境では、上辺だけでも人付き合いをして

いた方が不信感などを抱かれずにすむのだ。そして、辺境故に管理局の目も届きにくい。自然保護などをしている世界ならいざ知らず、ここのようなただのどかに暮らしているだけの世界は、管理局自体もあまり目を光らせていないのも事実。

だから、今回クイントが所属する首都防衛隊の一つ『ゼスト隊』に情報が来たのは、まさに運が良かったとしか言えない。

ゼスト隊の隊舎で料理長を務める女性が、ここの農場と懇意にしており、いつもここからバター等を仕入れていたのだ。それが、ここ最近量が減ったので不思議に思い尋ねたところ、農場主から先程と似た話を聞かされたのだ。

それを聞き、クイントが不審に思い、隊長のゼスト・グランガイツへ調査を申し出たのだ。そう、管理局に届出のない研究機関があるかもしれないと。そしてそれが何を意味するのかを。

だからクイントは頼み込んだ。もしかしたら思わぬモノに繋がるかもしれないと。それを聞いてもゼストは渋ったが、クイントの『女の勘』主張に押し切られる形で許可を出した。

だが、表向きは捜査ではなく休暇扱い。それは何も無かった時のため、ゼストが気を回したからだった。まぁ、それをクイントは知らないのだが。

「とりあえず、今日はもう休んで……明日に備えよ～」

そう呟き、クイントは伸びをした。そして、一度寝返りを打って……。

「あ、そろそろ夕食の時間だ」

むくりと起き上がり、鼻歌混じりに歩き出す。後にこの宿の主人

は語る。あれ程大量の食事を食べる人を初めて見た、と……。

明けて翌朝。クイントは決めていた通り、山向こうの渓谷を目指して歩き出した。整備された道が終わり、険しい山道になっても、もくもくとクイントは歩いた。普通の人間ならとっくにへばっているだろう傾斜ものともせず、クイントは山を登りきった。

山頂からの景色にしばし体を休め、宿の主人が持たせてくれた弁当を取り出すクイント。

簡単なサンドイッチだったが、それをクイントは感謝しながら食べる。量は、彼女からすれば少なかったが、それでも常人なら満腹になる程度はあった。

それをあっさりと平らげ、クイントは再び歩き出す。農場の男性が教えてくれた話を思い出しながら、山を下っていく。

（……アレ、ね。確かにただの小屋みたいだけど……）

やがて、その視界に山小屋らしき建物が見えてくる。とても何か研究しているようには見えないそれを、クイントは注意深く観察する。

人気はない。気配もない。だが、おそらくサーチャーの類はあるとクイントは踏んでいた。

慎重に小屋へと近付くクイント。そして、小屋の扉へと手を伸ばし……。

「すいませ～ん。誰かいらっしゃいますか～？」

ノックした。ぱっと見は迷った観光客にも見えるクイント。それに対して何らかのリアクションがあれば、と思ったのだが……。

（反応無し、ね……）

予想通り何の反応もなかった。それにクイントは躊躇いもなく扉を開けた。鍵が掛かっていたようだが関係ない。魔力で強化した状態の彼女は、常人では有り得ない力を出せる。

そして、小屋の中に踏み込んだクイントは、すぐさま中を見渡し、床の一部だけ音が違う事に気付き、そこに思いっきり拳を打ち付ける。

そこに現れたのは、地下への階段。それを見てクイントは確信を得る。ここは、自分達が追い駆ける事件と繋がる場所に違いないと。

そして、持ってきた荷物の中から愛用のデバイスを取り出し、身に付ける。リボルバーナックルと呼ばれるそれは、ストレージに属する物なのだが、クイント専用デバイスのため、クイントにとってはインテリジェントよりも優秀なデバイスである。

そして、自作のローラーブーツ。これもクイント専用のデバイスだ。クイントの戦い方は、一般的な魔導師とは違うので、こういう特殊なデバイスが求められた。

――シューティングアーツ。

簡単に説明するなら、一撃離脱を信条とする格闘技。相手の懐に入り込み、強烈な一撃を叩き込む戦闘スタイル。

一撃必倒。それがクイントのモットーであり、シューティングアーツの極意。それを実践するには、高速移動が出来るにこした事はないので、ローラーブーツが創られたのだ。

「さ、行くわよっ！」

そして、装備を終えたクイントは、自分に気合を入れるようにそう告げると、階段を駆け下りて行った……。

「何よ……これ……」

あの後、長い地下通路で彼女を待っていたのは、金で雇われたであろう違法魔導師達だった。だが、ランクとしては高い者でもおそらくB。しかも、自分より強い相手と戦闘した事のない者達だったようで、クイント一人を相手に十五人という差を使いながら、連携も取れないわ戦術もないわで話にならなかった。

それを一人残らず倒し、デバイスを使われる事のないように破壊し、全員をバインドで拘束して通路へ放置してきたのだ。

そんなクイントが通路を抜けた先で見た物は、想像だにしないものだった。

自分によく似た髪をした少女が二人、ポッドに入れられている。そこにいた研究者らしき男を捕まえ、事情を聞こうとするも、男は何も知らないと言って聞かなかった。

仕方なくクイントは男を気絶させ、そこにあった端末からデータをコピーしようと操作を始めた。だが、そこに表示されたのは信じられない事実。

「そ、そんな……」

（私の遺伝子が使われているですって？！）

その少女二人は、事もあろうにクイントの遺伝子を基に作り出された存在だったのだ。それを裏付ける証拠もそこにはあった。

クイント自身のパーソナルデータである。生年月日から現在の住所までが詳しく表記されていた。それを見て、クイントは愕然となりながらも、冷静にこの事を考えていた。

（どういう事？　誰かが私の遺伝子を手に入れて、クローン培養した……？　でも、それに何の意味が？）

そんなクイントの前に今度は別のデータが表示される。それは、ランクの高い管理局員全員のデータ。ただ、クイント程詳しくはなかったが。

そのデータに共通するのは、どれも最後に『適合率』との文字があり、それが低い事だった。その事がクイントに推理の答えを出させた。

（そうか！　私だけじゃなく、ランクの高い管理局員の中から”戦闘機人”に適合しやすい者を選び出していたのね。

そして、私が一番数値が高かった。だから私の遺伝子を基にこの子達を……）

そう結論付け、クイントは唇を噛む。その答えが導き出すものを悟ったからだ。つまり、管理局内部に犯罪者と通じている存在がいる。それも上層部に。

出なければ、局員全員のデータなど得られるはずがない。そして、クイントの遺伝子を確保する事も。

そんな事を考えていたクイントだったが、意識を現実に戻し、ポ

ッドへ視線を向けた。そこにいる二つの命。それは自分の遺伝子から生まれた少女達なのだと。それを思い、クイントは考えるより先にポッドからその二人を解き放つべく動いた。

パネルを操作し、外界を遮っていたガラスが無くなった途端、クイントは幼い二人の少女へ駆け寄り、暖めるように抱きしめた。

「……ぁ……」

「ぅ……」

その温もりに少女達は目を覚まし、自分達を抱きしめる存在に気付いた。だが、驚く事なく二人はそのままクイントを抱きしめ返した。

本能の部分でクイントが自分達の味方だと悟ったのだろう。その証拠に、二人は満面の笑みを浮かべている。

「おはよう……そして初めまして。私が……母さんよ」

「母さん？」

「おかあ……さん？」

クイントが想いを込めて告げた言葉に、少女達は首を傾げる。だが、その微笑ましい光景を邪魔する者がいた。そう、気絶していた男である。

彼は、クイントの意識が少女達に向いた時に目を覚ました。幸いバインドされていなかったため、彼はクイントを倒せる手段を実行する事が出来た。

彼は三人に気付かれぬように、静かに端末の置かれているデスク

へと近付く。そして、ゆっくりとその引き出しを開ける。そこに入っていたのは、質量兵器と呼ばれる物。大の男でも両手で支えねば、反動で骨が外れる事もあるマグナムと呼ばれる大口径の銃だ。

彼はそれを手にし、クイントへその照準を合わせる。そして、その頭を狙って発射した。この時、クイントが向けていたのが背中でなければ別の結末が待っていたかもしれない。

背中ではなく、横顔なら男の行動に気付いたのはクイントだったのだから。だが、背中で起きた事を知りえるような力をクイントは持っていない。だから、気付いたのは自ずと……。

「「あっ！」」

「えっ？　……くっ！」

少女達だった。男が銃を構え、クイントに狙いを定めた瞬間、それに気付き二人して声を上げた。その声にクイントも意識を後方へ向けて、際どく弾丸を防いだ。

だが、受けたリボルバーナックルにはヒビが入った事からも、その破壊力が窺える。それを見て、クイントは少女達を背中で守るように隠す。

クイント一人ならば、男の下へ近付きすぐに解決出来ただろう。だが、今動けば少女達に被害が出る可能性もある。クイントは男がきちんと狙いを付けられない事を悟っていた。

先程の一撃も、おそらく頭部を狙ったのだが、弾丸は頭部ではなく彼女の右肩へ向かっていたのだ。

（下手に動けば……あの子達に狙いがいく……！）

クイントが動けないのはそれを恐れているから。男が破れかぶれになり、銃を乱射でもされたら防ぎようがない。先程の衝撃から、クイントの使う防御魔法では、もしかすると危険かもしれないとの判断もそれに拍車を掛ける。

だから動けない。クイントに取れる手段はただ一つ。相手の弾が無くなるまで防ぎ切るのみ。だが……。

男が次に行なったのは、銃撃ではなかった。そして投降でもなかった。彼が狙ったのは、手元にある何かのスイッチ。

それを男は躊躇いもなく押し、大声で叫んだ。

「ハハッ！！　これでお前も終わりだぁ！」

「どういう事よっ！？」

「今押したのは、周囲を崩落させるものだ。研究成果を失うのは癪だが、管理局に渡すぐらいならいっそこの手で……」

「バカな事を……っ！　今すぐ止めなさいっ！」

クイントの叫びを男は最早聞いていないのか、そのまま笑って自分の頭に銃を突きつける。それを見た瞬間、クイントは咄嗟に少女達を抱き寄せ、その視界を塞ぐ。

突然の事に驚く二人だったが、直後に聞こえた轟音に銃声は掻き消された。そして、クイントは必死の想いで周囲にバリアを展開する。

（お願いっ！　何とか耐えて！！）

その腕にいる幼い命を守るために……。

「ねぇ……ねぇってば」

「う、ううん……？」

「あ、起きた……」

体を揺さぶられ、クイントが目を覚ますとそこには笑顔の少女達がいた。その顔に煤汚れがあるものの、怪我等は見当たらない事にクイントは安堵の表情を浮かべた。

そして、周囲を見渡してクイントは愕然となる。何とか三人がいる場所だけは空間が残されているが、周囲を岩で覆われていたのだ。

それを見て、自分達の状況を把握しひとまずの安全を理解するクイントだったが、先程の崩落で完全に生き埋めにされたと思い返し、その表情を曇らせる。

だが、それを見た少女達が不思議そうに顔を覗き込んだ。その顔を見た瞬間、クイントは笑顔を見せる。

（ダメ！　私が不安になってどうするのよ！　絶対、この子達と一緒に帰るんだから！）

「どうしたの？」

「ううん。何でもないわ」

「ね、さっきの人はどうなったの？」

背の高い方の少女がそうクイントに尋ねた。それに背の低い少女

も気になったようで、クイントの方へ視線を向けた。その無邪気な視線に心を痛めながら、クイントは誤魔化す事にした。
分からない、と。それは嘘だった。クイントは知っている。あの時男が取った行動がもたらすものを。だが、それを聞かせるには二人は幼すぎる。

故に真実は言わない。そして、話題を無理矢理変える。この事を早く忘れてくれるように。

「ね？　どれぐらい私寝てた？」

「う～ん……分かんない」

「たくさんじゃなかったよ。少し、かな？」

話の例え方が可愛らしく、クイントはつい笑みをこぼす。それに二人も笑顔を返す。不思議とそれだけでクイントの中に希望が湧いてくる。
まだ生きてる。必ずここから出られると。しかし、周囲の状況を考えると迂闊な事は出来ないのが現状だった。

（魔法を使えば何とか道は作れるかもしれない。でも、その衝撃でまた崩落しないとも限らない）

今ある空間もいつ崩れるか分からないようなものなのだ。下手をすれば完全に潰れる事になりかねない。そう判断しながら、クイントは何とかここから脱出する方法を考える。
そんなクイントとは正反対に、二人の少女達は気楽なものだった。彼女達は基本外に出る事があまりなかった。出る時は検査や実験等のあまり良い事ではなかったのだ。

「ね、あの石大きいね」

「ホントだ。でも、大きい石はたくさんあるよ？」

「どれが一番大きいかなぁ」

「う～ん……あれ」

背の低い少女の問いかけに答える背の高い少女。その表情は一様に明るい。この状況を正しく理解していないのか、それともそれを考えまいとしているのかは分からない。

だが、その視線はやがてクイントへと向けられる。その深刻そうな表情を見て、二人は初めて困った顔を見せた。

「……どうしたの？」

「……え？」

「凄く……怖い顔してる」

その言葉にクイントはハッとした。そして、誤魔化していいものかと悩んだ。幼いながらも、この二人が状況を理解するのも時間の問題だ。

その時に落ち着かせるより、今の内にしっかりと説明し、理解させるべきか。そんな考えがクイントの頭をよぎる。

その迷いを感じ取ったのか、二人は互いに顔を見合わせ頷いてクイントの手に自分達の手を重ねた。

「え……？」

「大丈夫だよ」

「うん。きっと助けが来てくれるから」

二人の言葉にクイントは心震えた。幼い二人が険しい表情の自分を見て、あろう事か励ましてきたのだ。本来ならそれは大人である自分の役目にも関わらず。

幼いながらも優しさと思いやりを持っている二人をクイントは優しく抱き寄せ、心から願った。

（何でもいい！　この二人を助ける力を！　私に、この困難を切り開く力をっ！！）

その想いを感じ取ったのか、二人も願う。それは、純粋な想い。心から願う初めての祈り。

（（私達を助けてくれる人が来ますように……））

そして、その三人の想いは形となり、全てを切り開く力を呼び出した。

「ん？　ここは……？　どうやら”現世”のようだが……」

何が起こったのか、クイントには理解出来なかった。だが、一つ言えるのは、突然現れた目の前にいる金色の鎧を着た存在が、自分よりも遥か高みにいる者という事。

その身に纏う存在感。圧倒的な威圧感と神々しさ。それらが目の前の相手の異常さを伝えてくる。そんな風にクイントがその雰囲気

に呑まれている間にも、二人の少女はそれに物怖じせず、とてとてと近付き……。

「ぬ？」

「ねぇ、お兄さん誰？」

「どこから来たの？」

無邪気に問いかけた。それに男は不思議そうな表情を浮かべるも、すぐに偉そうな表情に変え、高らかに言い放った。

「我（オレ）は、英雄王ギルガメッシュ。その名を知らぬ者はいない真の英雄よ」

高笑いさえするギルガメッシュ。それを聞いて二人は顔を見合わせ――首を傾げた。

「「……誰？」」

「なっ……！」

流石に知らないとは思っていなかったのか、ギルガメッシュは二人の言葉に驚愕し、そして再度告げた。

「ええい、知らぬのか！　全ての財を手にし、最初にして最後の真なる王！　それが我、ギルガメッシュだ！」

「「……知らない」」

「だあぁぁぁぁ！！」

絶叫。その声で再び崩落が起きるかもと思わせるような声だった。
それを二人は耳を塞ぎながらも、楽しそうに笑っていた。
そんな光景を、クイントはただ呆然と眺めていた。自分は身動きさえ出来なかった相手。それに何の警戒心さえなく近付き、会話する二人に驚いていた。

絶叫が止んだ後も、二人はギルガメッシュに問いかける。どこから来たのか、何で鎧を着ているのか等、実に子供らしく目についた事を次々に尋ねていく。
それをどこかウンザリしながら、簡単に答えようとするギルガメッシュ。まぁ、大抵ギルガメッシュが話し終わる前に次の質問をし「我の話を聞け！」と言われていた。それでも、二人が怯えない程度に加減はしていたようだが。

そんな質問も終わり、二人が満足したのを見て、やっとギルガメッシュがクイントに気付いた。視線が合ったのだ。だが、それは先程まで二人に向けていたものとは違い、冷たくまるでクイントを物か何かとしか見ていない眼差しだった。
それに、クイントは本能的に危機を感じる。だが、それにも関わらず体が動こうとはしなかった。無理だ。あれからは逃げられない。そんな感覚がクイントの全身を包む。

「ほぅ……雑種がいたか。丁度よい。ここは……む？」

突然クイントを見ていたギルガメッシュの視線が変わる。それは、微かだがクイントをクイントとして見つめた視線。それにクイントは戸惑うも、その後のギルガメッシュの一言でその理由を悟る。

「貴様、この娘達の母親か……？」

「えっ……？　あっ！」

ギルガメッシュは、僅かな共通点からある父娘の関係を見抜いた男だ。故に、クイントと二人の関係もすぐに感じたのだろう。

「どうなのだ。はっきりしろ」

「わ、私は……」

先程は色々あって思わず母親と名乗ったが、本当に自分がそう名乗っていいのかとクイントは迷っていた。遺伝学上は確かに肉親と呼べるかもしれない。だが、実際には自分の腹を痛めて産んだ子達ではないのだ。

そのクイントの迷いをギルガメッシュは感じ、興味を失ったように告げた。

「……まぁよい。我が聞いたにも関わらず、答えぬとは礼儀を知らぬな。雑種は雑種か……もうよい、娘に免じて許す。疾く失せろ」

ギルガメッシュはそう言うと、踵を返し、その場を離れようとして周囲の状況に気付いたようだ。完全に岩で道は塞がれ、出る事は出来なくなっている。

それに舌打ちをし、ギルガメッシュが何かをしようとしたのを見た瞬間、クイントは崩落を恐れ、反射的に叫んだ。

「止めて！」

「……我の許可無く発言し、しかも行動を妨げるか。先程は見逃し

たが、此度はない」

そう言ってギルガメッシュは腕を上げる。すると、何もなかったはずの空間に大量の武器が現れたのだ。それを見て、クイントは驚愕する。

（転送魔法?!　しかも、これだけの数を一瞬で?!）

彼女の同僚にも優秀な召喚魔導師がいるが、その彼女でさえ今のような芸当は出来ないだろう。そうクイントは思い、同時に戦慄した。その標的はどう考えても自分だったからだ。

その事実を認識し、クイントは明確な死を覚悟した。絶望を肌で感じていたのだ。

「疾く失せろと言ったにも関わらず存在し、更に我の邪魔をする。礼儀知らずの雑種よなぁ……」

クイントの表情に何か満足したのか、ギルガメッシュはどこか楽しそうにそう言った。それを呆然と聞くクイントだったが、その視線がある一点を見た瞬間、光を戻した。

その変化にギルガメッシュも気付き、視線をそこへ向けると……。

「ここにいるよ～」

「お～い、誰かいないですかぁ～?」

少女達が岩と岩の隙間に向かって楽しそうに笑っていた。それに軽く唖然となるギルガメッシュ。そんな彼に、クイントは真剣な声で告げる。

「お願い。私はどうなってもいい。だから、その子達だけは助けてあげて」

「……我に命令するのか」

「違うわ。私にはそんな力はない。でも、今この場から、あの子達を無事に助け出せる力を持ってるのは貴方だけ。だからお願い！あの子達だけはっ！」

クイントの目に浮かぶ涙を見て、ギルガメッシュは視線をクイントから二人へと向ける。そこには、クイントの必死の言葉に反応し、ギルガメッシュを見上げる二対の瞳があった。

（……チッ！　だが、このままでは埒があかんのも事実か。ここがどこかも分からんし……）

「……勘違いするなよ、雑種。我は貴様の願いを聞いた訳ではない。この娘共のためでもない。ただ、我の道を阻むものを吹き飛ばすだけだ」

「……ありがとう」

「ふんっ！」

クイントの言葉にギルガメッシュは顔を背けると、自分を見上げていた二人を押しのけるようにし、クイントの方へと追いやる。それに少し慌てるように二人はクイントの傍へ行き、ギルガメッシュへ視線を戻す。

そして、何かしようとするギルガメッシュに向かって、二人は元気良く声を掛けた。

「頑張って～！」

「負けるな～！」

その声にギルガメッシュは笑みを浮かべ、その手に一振りの剣を取り出す。それは、異様な雰囲気を放つ剣だった。無邪気に声を出していた二人でさえ、息を呑んでしまう程の。

それはクイントも例外ではない。ただその剣に目を奪われていた。その剣の名は、エア。乖離剣と名付けられし”世界を切り裂いた”宝具。

「些か興が乗った。いいか、余波で吹き飛ばされんようにしておれ。どうなっても我は知らん！」

その言葉をキッカケに、ギルガメッシュが手にした剣が唸りを上げる。そのまるで削岩機を思わせる形状が回転し、恐ろしい程の風を巻き起こす。

「天地乖離す（エヌマ）――――」

その声には、威厳と雄々しさがあった。何人足りとも覆せぬ力があった。そして何より――――。

「開闢の星（エリシュ）――――っ！！」

全てを捻じ伏せる迫力があった。文字通り、天地を乖離させるだけの輝きを放ち、それが行く手を塞ぐ物全てを吹き飛ばす。いや、その力はその世界に留まらず、次元を超えた場所にも影響を与えていたのだ。

それは、朝も夜も切り裂く一振り。

森羅万象全てを乖離す、最強の力。

英雄王だけが放てる絶対無二の一撃。

崩落の危険をどこかで危惧していたクイントだったが、その一撃を放ったギルガメッシュの動きを見て、それは杞憂だったと悟った。彼は、エアによる一撃で崩落すると予想していたのだろう。クイント達がいた場所の真上から正面にかけてが綺麗に無くなっていたのだ。

山の形を変えた攻撃にクイントは内心驚きながら、久方ぶりの空に息を吐いた。そして、抱きしめていた二人をもう一度抱きしめ、頭を優しく撫でる。

「もう大丈夫よ。何も心配いらないから」

「「……うん」」

「？　どうかしたの？」

少し前とは別人のように静かな二人。それにクイントが不思議そうな表情を浮かべるが、その理由はすぐに分かる。

「何だここは！　何もないではないかっ！」

二人の視線の先にいたのは、金色の鎧を着た男。そう、ギルガメッシュだ。彼は周囲の景色に不満を述べると、クイント達へと近付いてくる。そして、何か警戒するクイントに……。

「で、雑種。ここはどこだ。疾く答えよ！」

「……は～、もう何がなんだか……」

（とにかく、この人をどうにかしないと。あの力、魔法なんてものじゃない。ロストロギアに近い”何か”だわ）

そんな事を考えるクイント。それに不満を告げようとしたギルガメッシュだったが、それは出来ず終いとなる。

「ね、さっきの何!?　何なの!?」

「教えて！　ね、ね！」

目を輝かせ、二人がギルガメッシュを見上げていたのだ。その純真な瞳に、ギルガメッシュはどこか満足そうに笑みを浮かべ……。

「何だ？　気になるか？　良かろう。ならば……待て、汚れた手で鎧を触るな！　ええい、教えてやるから泣くな！」

これが、クイントとその娘達、そして英雄王と

の出会いだった。

ーーー

無印序章

彼、ユーノ・スクライアは困惑していた。それは目の前にいる一組の男女が原因であった。

男は全身を青い服で包み、その手に赤い槍を持っている。女性、とは言っても少女であるが。彼女は黒を基調とした格好をしており、それから感じる魔力からバリアジャケットだと予想した。

問題は、彼らが空間転移で現れた事。そう、ここは輸送船の貨物室。ユーノが発見した古代遺失物を、時空管理局へと運んでいる途中なのだ。

「よぉ、すまねぇが」

「ジュエルシードを、渡してください」

その問いかけに、ユーノは彼らの目的を理解すると共に、自分が何も出来ない事を悟った。悟ってしまった。

目の前の存在、特に男の方には自分では何も出来ないと思わされたからだ。

本能が、理性が、直感が告げる。歯向かうな、と。

（……でもっ！）

ユーノは必死にそんな己を奮い立たせる。彼が発見したジュエルシードと呼ばれるロストロギアは、危険物と呼んで然るべき物だからだ。

それを知りながらあっさりと渡せる程、ユーノは臆病でも弱くもなかった。

「な、何のためにジュエルシードが必要かは知りませんっ！でも、これは危険な物なんだ！だから――――」

渡せない。そう言おうとした。でも、出来なかった。何故なら――。

「そうかい。……小僧、お前中々根性あるな」

「え……」

男がどこか嬉しそうにユーノを見たから。その視線は、まるでユーノの伝えたい事を知り、その思いを誉めてくれたようだったから。そんな男の眼差しに、ユーノは呆気に取られた。

だが、次の瞬間。

「……ランサー」

「うしっ、さすがだフェイト。後はずらかるだけか」

ユーノが手にしていたはずのジュエルシードのケースが、少女の手に握られていた。

（高速移動魔法?!そんな、いくら何でも気付かないなんて!?）

うろたえるユーノを他所に、フェイトと呼ばれた少女は、手にしたケースを大事そうに抱え込む。それを守るように、ランサーと呼ばれた男がユーノの前に立ちはだかる。

その雰囲気は、何人たりとも通さない。そんな印象を受け、ユーノは立ち尽くす。自分にもう出来る事はない。そう思った。

もしれない。
――だが、そんな彼に天が味方したのか

「なんだぁ？」

「震動……？」

「まさかっ！？」

突如として、揺れ始める輸送船。それが意味するものを理解し、ユーノは叫ぶ。

「次元震だっ！！」

それがキッカケだった。揺れていただけの船に軋むような嫌な音が聞こえて来る。
それに焦るユーノとフェイト。ただ一人、現状の恐ろしさを理解出来てないランサー。
そして、何とかフェイトが転送魔法を起動させようとするが――。

「ダメ！座標が固定できないっ！」

「落ち着けフェイト！」

次元震の影響か、はたまた突然の事態にフェイトが動揺したためか、時の庭園の座標が固定出来なくなっていた。
そのため、焦りが濃くなるフェイト。それにランサーの意識が向い

た瞬間！

「チェーンバインド！」

起死回生の行動。ランサーとフェイトの自由を奪い、ユーノは即座にケースへ走る。

ランサーはバインドを破ろうとするが、ユーノは元々デバイス無しで魔法を行使していた。つまり、自然とその構造が鍛えられていた。それにランサーの油断もどこかにあった。魔法は基本構造が雑。その思い込みが作用し、意外に強靭なユーノのバインドに手間取った。

そして、その間にユーノの手がケースにもう届くと言う所で――。

天は、彼を見放した。

一際大きな音と共に、貨物室に亀裂が走った。それは図ったかのようにケースの下に。ユーノの手が届くまさにその瞬間、それを嘲笑うかのように、ケースは次元空間へと落ちていった。

その途中で、中身を零しながら……。

「そんなっ！」

「ちっ、肝心な所でついてねぇのは相変わらずか」

「……ランサー、脱出するよ」

愕然となるユーノ。そんな彼を横目に、自身に悪態を吐くランサー。そして、既に思考を切り替え、冷静に転送魔法を準備していた

フェイト。
それに反応したのは、ユーノだった。ジュエルシードを無くし、その上襲撃者にまで逃げられる訳にはいかない。その使命感が彼に立ち上がる力を与えた――だが。

二人はユーノが立ち上がったのと同時に消えてしまった。それを契機に、輸送船が激しく揺れ始める。
焦るユーノに、船員達からの念話が届く。脱出しろと。既に自分達も避難している。その声を聞き、ユーノは――。

「っ！！」

飛び出した。ケースが落ちていった場所目指して。それは無謀だっただろう。それは自殺行為にも見えただろう。
しかし、それは確かにユーノ・スクライアたる行動だった。どこに落ちたかは知らない。でも、その世界に危機をもたらすであろうジュエルシードを、野放しには出来ない。己が発見した物に対する責任感からこの輸送船に同乗したのは、こういう事態を防ぐためだったはずなのに。
それが彼の行動理由。幼いながらも考古学を学び、遺跡発掘等に携わってきた者として、過去の過ちを繰り返してはならないと。許してはならないとの思いが、そんな行動に出させた。

――こうして、物語は動き始める。

ジュエルシードから始まる『絆』の物語が……。

それは、終わりの始まり

「いってきま～す」

「いってらっしゃい」

セイバーに見送られ、なのはは笑顔で走り出す。もうあの『始まりの夜』から四年以上が経ち、なのはは小学三年生になった。未だに運動神経は残念だが、体力や動体視力ならセイバーの折紙つき。ただ、やはり速く走ったりするのは苦手なので――。

「にゃっ？！」

転びそうになるのは、よくある事。

「っと、危ない危ない」

しかし、そこで転ばなくなったのもまた成長。最近、特技にバランスと書こうかと考える高町なのは、現在小学三年生。

学校に向かうバスの中、三人の少女が会話に花を咲かせていた。

「でね、小次郎の奴ったら、少しは女子らしさが出てきおったかな

んて言ってさ」

そう言って、笑みを浮かべるアリサ。昔はどこか気にしていた自分の容姿も、ここ二年程は自慢するようになり、その理由をなのは達は『はやて効果』と呼んでいる。

「小次郎さんらしいね。あ、そうだ。今度小次郎さんにウチの庭もお願いしていいかな？ライダーがその方が景観がいいって」

微笑みを浮かべ、相槌を打つすずか。後半の辺りで浮かべた表情は、どこかすまなさそうだ。

「じゃあ、お兄ちゃんやアーチャーさんにもお願いしようよ。その方が早く終わると思うの」

名案とばかりに告げるなのはだが、それに二人は苦笑い。

それじゃ、庭仕事そっちのけで戦い始めるでしょ、とアリサが突っ込めば、すずかも、アーチャーさん一人でやる事になると思うよ、と続く。

それになのはは不満顔だが、少し想像して……。

「ごめんなさい」

心から謝った。会った途端に互いの獲物に手をかけ、ジリジリと間合いを測る恭也と、悠然としながらも、一時も目を離さない小次郎。それを横目にため息を吐くアーチャーの姿を幻視したから。

その行動に、わかればいいと言わんばかりに頷くアリサ。すずかは小さく笑みを浮かべるのみ。

そんなこんなで、この日も過ぎていくはずだった。下校時に、なのはが謎の声を聞かなければ……。

（くそっ……封印しなきゃ、いけないのに）

全身を傷だらけにしたユーノは、霞む視界を何とかするべく意識を強くする。眼前にいるのは、ジュエルシードの思念体。元来、ユーノは戦闘などした事がない。そして、攻撃魔法も使えない。それでも、何とか無くしてしまった内の一つを封印し、二つ目を発見したのだが、そのジュエルシードは既に何かの願いを受け、変貌していた。

必死に戦ったユーノだったが、有効な術を持たぬ彼に思念体が倒せるはずもなく、現状のように追い込まれていた。

思念体はユーノを睨みながら、距離を取る。それを見て、ここしかないとの思いがユーノに生まれる。

弱った体に鞭打ち、飛び掛ってきた思念体に、何とか封印魔法を展開したユーノだったが、思念体はそれに耐え切り、逃げるようにその場から離れていく。それを見届け、ユーノは意識が遠のいていくのを感じた。

（ダメ……なんだ……あれ……ほっと……）

ユーノの思いとは裏腹に、体は緊張から開放された事も手伝い、急速に眠りへと落ちていく。その直前、ユーノの体が光に包まれた。そして、光が収まったそこには、一匹のフェレットらしき動物が傷だらけで眠っていた。

時の庭園。そこの一角にあるプレシアの部屋。そこにランサーとリニス、それに部屋の主たるプレシアの姿があった。

「で、落としたのね」

「……ああ」

やや憮然とした顔のプレシア。それをリニスは黙って見ている。ランサーと言えば、まるで悪戯を見つかった少年のような表情でプレシアを見つめ返している。

「……ま、仕方ないわ。まさか次元震が起きるなんて予想できなかったもの」

「原因不明なところも気になりますね。あ、でもご心配なく、既にジュエルシードの落ちた場所は、ある程度絞り込む事が出来ましたから」

リニスの言葉と同時に出現するモニター。そこにはミッド文字で色々と書かれているが、ランサーにはさっぱり読めなかった。

「で、どこだ？」

「第九十七管理外世界。現地惑星名称、地球です。まだ、何処にとまでは分かりませんが」

「……管理外でよかったわ。管理局もうかつには手が出せないでしょうし」

「はい。おそらく派遣されるとしても、かなりの時間を要するはず

です」

「なら、なるべく早めに……どうしたのランサー」

先程から黙っているランサーに、プレシアが意識を向ける。それにつられるようにリニスも視線を向け、言葉を失った。

ランサーはこれまで見た事ない程、嬉しそうな笑みを浮かべていたからだ。

そんな表情に何も言えないリニスとプレシア。それに気付く事なく、ランサーは呟く。

「そうか……この世界にもあったのか。これなら……うまくすりゃ……」

ランサーのそんな呟きに、二人は何も言えないまま、ただその呟きに耳を傾ける。その内容は、二人を驚かせるには十分なものだとは知らずに……。

楽しい下校時間。なのは達も例に漏れず、三人仲良く会話をしながら歩いていた。

今月から、なのはも二人と同じ塾に通う事になり、そこへ向かう途中、アリサが塾への近道と言ってわき道に入り、少し経った時だった。

【助けて……】

「ふぇ？」

突如として頭に響いた声に、なのはは立ち止まってしまう。それに不思議そうに首を傾げるアリサとすずか。
そんな二人の視線に、なのはは恐る恐る尋ねた。
今、何か聞こえなかった、と。それに二人は互いの顔を見合わせ、小さく笑う。

「何も聞こえないよ」

「なのは、怖がらせるならもっと雰囲気出しなさい」

「ち、違うよぉ。本当に何か――」

聞こえた。そう言おうとした時、再びなのはの頭に先程の声がした。

【助けて……誰か……】

「やっぱり聞こえる」

先程よりもはっきりと聞いたからか。なのはの口調は強かった。
そのなのはの言葉に、二人も互いの顔を見合わせ、何かを感じたのか頷いた。
そして向けられた視線は、何か言う訳ではないが、なのはを信じると言わんばかりの力強さがあった。
それを嬉しく思い、なのははお礼を告げると同時に走り出す。

「で、どこから聞こえるのよ？」

「こっち！こっちから聞こえる！」

アリサの問いになのははは時折聞こえる声を頼りに走る。そして、しばらく走った先にいたのは……。

「フェレット、かな？」

「怪我してる……」

「まったく、酷い奴もいたものね！」

全身に傷を負ったフェレットの姿だった。見るのが痛々しい程の姿に、三人の表情も曇る。

なのはがハンカチを取り出し、フェレットの体をそれで包む。静かに慎重に持ち上げて、なのは達は息を吐く。

「どうする？」

「この子がなのはちゃんに声を掛けてたのかな？」

「まあ、状況的にそうでしょ。……この子もサーヴァントとか言わないわよね？」

不思議＝サーヴァント。アリサの中では、サーヴァントとはそういう扱いなのだ。

それを聞き、なのはは苦笑気味に笑う。

「それはないと思うけど……」

「とにかく、手当てしないと」

雑談に流れていきそうな空気を、すずかの発言が戒める。それに

二人も頷き、ゆっくりと歩き出す。
その途中、アリサはフェレットに微かな警戒心を抱いていた。
なのはだけに聞こえた声。傷だらけの体。そして……。

（何であんな所にいたのか、ね）

そこまで考えて、アリサは頭を押さえる。よくは分からないが、厄介な事が起きようとしている。そんな予感を感じたからだ。
それは隣を歩くすずかも同じだった。もっとも、すずかはアリサとは違う意味で嫌な予感を感じていた。
もし、このフェレットが自分達の日常を壊す存在だったらどうしよう。そんな感情がすずかの中に漠然と生まれていた。
そして、なのははフェレットを運びながら、静かに、でも確かにある予感を感じ取っていた。

何かが変わろうとしている。そんな事を一人思い、呟く。

「でも変わらないし、変えさせない。……私の大切なモノは、絶対に」

その呟きは、誰に聞かれるでもなく、春風に乗って消えていく。
緩やかに、穏やかに、少女達の日々は変化を始めていた……。

――――――

無印編序章。

かなり怪しい出だしでしたが、いかがでしょうか？

なのはが魔法と出会うのを期待していた方、申し訳ないです。

次回、やっと一話らしくなる……はずです（汗

無印一話

塾からの帰り道、なのは達の頭はある事で埋め尽くされていた。

（（（あのフェレット、一体何なんだろう……））））

アリサは疑念、すずかは不安、なのはは困惑。思いこそ違え、その相手は先程病院に預けてきた動物であった。

あの後、アリサが携帯で獣医で検索をし、槙原動物病院という場所を見つけ、そこへ三人で運んだのだ。

手当てをしてもらい、診察した獣医さえ疑問に感じたフェレットらしき動物。それになのは達は揃って苦笑い。

そんな会話をしていると、意識を取り戻したフェレットもどき（アリサ命名）がゆっくりと周囲を見回し――。

「ふぇ？」

「なのはを……」

「見てる……ね」

その視線をなのはに向け、しばらく見つめた後、また意識を失った。

その行動が、余計に三人の中に何とも言えないものを生む。明日様子を見に来ると言って、病院を後にした三人ではあったが、その心中は決して穏やかなものではなかった。

二人と別れ、なのはは家族に今日の出来事を話した。とは言っても、声を聞いたというのは伏せてだが。

なのはもまだどこか半信半疑だった事と、何故かまだ話す時ではないと感じたからだ。

なのはのそんな思いを知ってか知らずか、家族達は中々核心をついた質問を浴びせる。

「でも、よくそこに動物がいるのが分かったな？」

ギクッ、と言わんばかりになのはが表情を変える。それに全員が気付くが、誰も何も言わない。それは、なのはが自分で話してくれるのを待っているからではない。知っているからだ。なのはが話さない時は、何か理由があるからと。

故に、内心笑みを浮かべながら士郎達は質問する。

「それに、そっちは塾とは反対方向なんだよね？何でそっちに？」

「フェレットみたいらしいが、捨てられてたのか？傷だらけだったそうだが……」

「ウチでは飼うのは厳しいけど、どうする？」

矢継ぎ早に繰り出される問いかけに、なのはは答える暇もなくオロオロするばかり。そんなのはを見て、セイバーが微笑み助け舟を出すことにした。

「まぁ、それくらいにしましょう。まずは食事です。さ、なのは」

「う、うん。いただきます」

「「「「「いただきます」」」」」

セイバーの言葉にほっとした表情を浮かべるなのは。それを笑顔で見つめる士郎達。

少しからかいすぎたか、と思いながらもどこか楽しそうな家族の顔。それになのはも気付きながら、心で感謝。

（ありがとう。ちゃんと分かったら、絶対話すから）

心から信じあえる家族。その暖かい心遣いを、改めて感じるなのは。食卓に浮かぶ笑顔は、変わる事無く輝いていた。

「それで、一体どうしたのです？」

お風呂に入り、後は寝るだけとなったなのはに、セイバーはそう問いかけた。食事終わりに、なのはが視線でセイバーに話があると言いたそうだったからだ。

そんなセイバーに、なのははどこか自分でも信じられないという顔で本当の事を話した。

「……で、病院に預けてきたの」

「……頭に直接声がした。それに間違いはないですか？」

「う、うん。確かにそんな感じだった」

セイバーの固い声を、なのはは若干不思議に思いながら、そう断言した。

その答えに、セイバーはしばらく黙り込んでしまったが、何か意を決した表情でなのはを見つめる。

「……なのは、それはきっと魔術です」

「魔術？あのおとぎ話なんかの？」

なのはの言葉にセイバーは頷き、少しだけ自分に関する話をした。自分はその魔術が存在していた世界の出身であり、なのはにはそれを使う魔力があると。

そして、おそらくその動物が魔術で生み出された使い魔だろうという事を。

なのははセイバーの話を聞いて、どこか納得していた。急に現れ、今や大切な存在、セイバー。それが魔術と呼ばれるもので召喚されたとしたら、そういうものかと理解できてしまったからだ。

それに、あのフェレットもどきが魔術を使えるのなら更に納得。セイバーによれば、自分には魔力があるが、アリサやすずかにはそれがないそうだ。

「じゃあ、あの子は……」

「ええ。何処かにマスター、主人がいるはずです」

「なら――――」

その人を捜そう。そう言おうとした時、なのはの頭にまたあの声

が聞こえてきた。

【この声を聞いてる方、お願いです！力を貸してくださいっ！】

「っ！？セイバー！」

「……声が、聞こえたのですか？」

「うん！助けてって」

「……分かりました。行きましょう。責任は私が取ります」

「ありがとう、セイバー！」

なのはの言葉に笑みを浮かべ、セイバーはその身を鎧で包む。なのはも急ぎパジャマを着替え始め、セイバーは部屋の窓を開け放つ。夜風が吹きぬけ、セイバーの髪を揺らす。その後ろから普段着に着替え終わったなのはが、セイバーに近寄って――。

「行きますよ、なのは」

「うん！」

その腕に抱かれ、空を舞う。それに空を飛ぶような錯覚を覚えつつ、なのははセイバーを案内する。声の聞こえる方へ、あの動物病院へと。

ユーノは焦っていた。未だに完治していない体に魔力、それで弱

っているとはいえ、思念体を相手しなければならないからだ。
さっきから助けを呼んでいるが、おそらく誰も来ないだろうとユーノは思った。
きっと、ここは管理外世界。それも、魔法文化がない世界だろうと、ユーノは結論付けた。
理由は簡単。見た事もない文字に、自身の治療が終わっていない事から、治療魔法を使えない事が推察出来たからだ。
故に、ユーノは焦っていた。満足な結界も張れない上に、助けも望めない。とどめに自分の体調は完全じゃないときていれば、もう絶望過ぎていっそ笑えるくらいだ。

（でも、諦めるものか！）

あの時、絶対に抗えないと思ったランサー相手に、自分は一瞬とはいえ出し抜けたんだ。なら、目の前の奴にだって同じ事が出来るかもしれない。
そう思い、ユーノはそれを否定する。

（違う。やってやるんだ！例え、僕一人でも！！）

思念体の攻撃を何とかかわしつつ、懸命に隙を窺うユーノ。そんなユーノの健闘に応えるように、奇跡が舞い降りた。
――それは騎士だった。青いドレスに鎧を纏い、その腕には少女が抱き抱えられている。まるでおとぎ話だ、とユーノは思った。

「なのは、下がっていてください。ここは危険です」

「分かった。気を付けて、セイバー」

抱えた少女にそう告げて、騎士はゆっくり少女を降ろす。そして少女の言葉に微笑み、頷く。すると、すぐさま思念体へと視線を向け、手に不可視の武器を携える。

ユーノは、それを見て漠然と剣だと感じた。見える訳じゃない。でも、それは剣だと思った。だって――。

（そんな姿が、似合いそうだから）

セイバーに見惚れるユーノに、なのはは急いで近付き、抱き抱えた。

セイバーが危ないと言ったのは、相手が強いからじゃない。自分達まで巻き込みかねないからだ、となのはは思った。

だからこそ、今なのはが出来るのは少しでもセイバーの負担にならない事。

「大丈夫？もう平気だから」

「……えっ？あ、ちょっと待って」

「話は後！今はセイバーに任せよう」

突然喋り出すユーノに、なのはは大して驚く事無く走り出す。前もってセイバーから聞いた話と、頭に聞こえていた声から、喋る事も出来るかもしれないと予想していた事が功を奏した。

走りながら、なのはは後ろを見た。そこでは、セイバーが思念体相手に剣を振り下ろしていた。

（負けないでね、セイバー）

「なっ……再生した!?」

セイバーの会心の一撃を受け、思念体は確かに一度動きを止めた。しかし、その与えた傷が瞬く間に消え、再び動き出したのだ。

さすがに、セイバーもそれを予想出来るはずもなく、僅かばかり意識を乱した。それを隙と見たのか、思念体はセイバーから離れて行く。その向かう先は……。

「まさか、なのは達が狙いですか?!」

そうはさせないと、セイバーもそれを追う。その視線の先には、必死で逃げるなのはの姿。

このままでは先回りするのは難しい。だが、無理に先回りしようとなると……。

「風を解き放てば……しかし、周辺にどう影響するか」

海鳴の町は、セイバーにとって守るべきもの。いたずらに力を振るえば、ここに住む者達に迷惑を掛ける事になる。

その思いがセイバーを迷わせる。そして、下した答えは――。

「なのは! 右に跳んでくださいっ!」

そう叫ぶと同時に、セイバーは思いっ切り勢いをつけ、思念体目掛け突撃した。その勢いを加え、思念体はアスファルトに激突する。

一方のセイバーは、反動で逆方向に跳ね返されたが、何とか体勢を整えて着地。すぐになのは達の下へ駆けつけ、剣を構える。

「無事ですか?」

「うん。セイバーも大丈夫？」

「ええ。しかし……」

セイバーの視線の先では、丁度思念体が体を起こしているところだった。あれだけの衝撃を与えたにも関わらず、ダメージを負っている気配がまったくない。

どうすればいいのか。セイバーの脳裏に浮かんだのは、絶対にして最強の切り札の存在。

（ダメだ。アレは使えない。威力が大き過ぎるし、何よりも被害が尋常ではない）

そう結論付け、セイバーは眼前の相手を睨む。もうなのは達を逃がす訳にはいかない。下手に逃がせば、先程の二の舞になる。

かといって、このままではジリ貧だ。有効な手立てが使えないし、他に何も思いつかない以上、セイバーには打つ手がない。

そんな時だった。セイバーの聞き覚えのない声が聞こえてきたのは。

「アレは封印魔法を使うしかありません」

「なっ？！『魔法』ですって！？」

「魔術じゃないの？」

セイバーの驚きとは正反対に、なのはは不思議そうにそう尋ねる。なのはにとっては、魔術も魔法も大差ない。共にファンタジーの世界のものだったからだ。

そんな二人の問いかけを無視して、ユーノはなのはを見つめて、対応策を告げる。

「今は時間がありません！このデバイスを使って、あれを封印してください！それ以外、あいつを止める術はないっ！」

「……分かりました。なら、時間は私が稼ぎます。なのははその封印の準備を！」

そう言って、セイバーは再び思念体との戦闘を開始する。残されたなのはは、ユーノの首元に光る宝石のようなものを手に取った。不思議と、それは暖かかった。それをユーノから外し、自分の手の中へと握り締めるなのは。ユーノは、それを見て頭を下げた。

「ごめんなさい！君達を……巻き込んでしまって」

「それは、これが終わってからゆっくり聞くね。今は、あれをどうにかしなくちゃ、だよ」

申し訳なさそうなユーノに、なのははそう告げると、微笑みを浮かべる。

それに、ユーノは思う。強い子だと。そして優しい子だとも。だからこそ、今はそれに甘えよう。謝罪など、これが終わればいくらでも言える。

（ありがとう……。本当にありがとう！）

「じゃあ、これから僕の言う通りに続けて！」

「うん！」

ユーノの声に力強さが戻る。それが嬉しく思え、なのはも自然と声に力が入る。

ユーノの言葉を、一字一句違わずになぞっていくなのは。その声には、どこかぎこちなさもある。しかし、それを上回る程の決意のようなものがあった。

（セイバーを、この町を、大切なモノを守りたい！）

「不屈の心は、この胸に！レイジングハート、セットアップッ！！」

なのはの願いが、祈りが、想いが光になってその身を包む。それに微かに困惑するなのはだったが、ユーノが告げた「自分を守るものを想像して」と言うアドバイスに気持ちを切り替える。

自分を守るもの。そんな事を想像した時、真っ先に浮かんだのはセイバーの鎧。でも、違う。そうなのはは思って、別の想像をする。

自分はセイバーじゃない。なら、身を守るのは鎧ではなく、服だ。そしてその元になるのは――――。

（セイバーが、私にピッタリって言ってくれた学校の制服！）

光が収まった時、セイバーは見た。純白の衣装に身を包み、天使のような雰囲気を漂わせ、ゆっくりと降りてくるなのはの姿を。

手にしたのは杖。その先端には、紅い宝玉が輝いている。その輝きに恐怖を抱いたのか、思念体がなのはへ飛び掛った。だが……。

「させません！」

セイバーの鋭い一撃がそれを阻止。それに怯んだのを好機と見て、ユーノが叫ぶ。

「今だ！封印を！！」

「うん！お願い、レイジングハート」

”シーリングモード、スタンバイ”

なのはの声に応じ、姿を変えるレイジングハート。そして、それが終わるのを見計らい、ユーノは告げる。自分だけの呪文を唱えてジュエルシードの封印処理を、と。

その言葉になのはは頷き、心を研ぎ澄ませる。この三年近い修行の日々で、士郎やセイバー達から教わった事を思い出し、告げる。

「リリカル・マジカル！ジュエルシード、シリアル２１！」

”封印”

光がリボンのように放たれ、思念体を絡み取る。そして、そのまま光が包み込むように思念体を覆い……。

「終わったのですか……？」

それが消えた先には、菱形の宝石だけが残されていた。ただ、そこに何かがいた痕跡は、被害という形で残されてはいた。

ゆっくりとユーノが宝石に近付き、なのはへ視線を送る。

「レイジングハートでこれに触れて」

「うん」

言われた通りになのはがレイジングハートを宝石に近づけると、それをレイジングハートが自分の中へ吸い込んだ。
それを見届け、なのはとユーノが息を吐く。その顔には、どこか達成感さえ漂っていた。
だが、一人だけそんな雰囲気とは違う者がいた。セイバーだ。

「……宝石は、これ一つですか？」

「えっ……？いえ……まだ、あります」

「そう……ですか」

気まずそうに答えるユーノの声にそう呟き、セイバーは普段の格好に戻って静かになのはへ近付き――その体を抱きしめた。

「すみません、なのは」

「えっ？えっ？」

何が起きているのか分からない。それがなのはの素直な感想だった。
自分はただ、セイバーを助ける事が出来て嬉しかった。でも、何故かセイバーは自分に謝っている。

「せ、セイバー？どうしたの？」

何かされたかな、となのはが先程までの事を思い返そうとして、セイバーの言葉で思考が止まった。

「なのはを……巻き込んでしまいました」

それは、奇しくも先程のユーノの言葉と同じ。だが、込められた想いが違う。

ユーノが自分が起こした不手際の事件に巻き込んだと思ったのとは違い、セイバーは裏の世界、つまり、魔術や魔法などの非日常に巻き込んでしまったと感じていた。

セイバーが、思念体を倒せるなら良かった。それならば、なのはには今日の事は、一夜の夢だとしてもらえばよかった。ユーノの手伝いを自分がし、なのはには変わらず、日常を暮らしてもらえば良かった。だが、あれを封印出来たのはなのは。

つまり、セイバーでは倒せない。そして、この騒動を起こした原因はまだ残っている。となれば……。

（なのはが……戦わざるを得なくなるっ！）

自分が付いていれば、確かに危険は減るだろう。でも、戦場に絶対はない。今回すら、危うくなのはに危険が及ぶところだった。次も守りきれるとは限らない。故に、セイバーは悔やんだ。己の未熟を、至らなさを、何より――。

（これでは、シロウと同じではないですかっ！！）

優しいなのはの事だ。またこのような事が起きると分かれば、決して見過ごしたりはしないだろう。

それはまるで、誰かが傷付く事や悲しむ事を嫌がり、自ら戦いに身を投じた『衛宮士郎』と同じではないか。

しかし、まだ衛宮士郎には魔術使いとしての力と覚悟があった。だが、なのははただの子供だ。魔法を得たと言っても、それを日々鍛錬していた訳でも、ましてや知っていた訳でもない。

そんな葛藤を続けるセイバーを、なのははただ黙って抱き締め返す。その腕に自分の想いをありったけ込めて。

「なのは……」

「セイバーは悪くないよ。悪いのは、きっとこんなものを生み出した人。だから、セイバーは悪くない」

そう言って、なのはは優しく囁いた。

「それに、セイバーを誘ったのは私なんだから、ね」

だから、もう気にしないで。そう言って微笑むなのはに、セイバーは瞳を閉じ、静かに答えた。

――まったく、なのはには敵いませんね。

笑みを浮かべて告げるセイバーに、なのはも笑う。それを見つめてユーノは思う。この二人に自分がすべきは、言葉なんていう簡単な謝罪じゃない。

この笑顔を守るために全力を尽くす、という行動による謝罪なんだ。そう心に誓う。

月と共に星が輝く空の下、出会った時と同じように、二人の笑顔が照らされていた……。

ーーー

無印二話　前編

「とりあえず、現状を確認しましょう」

あの戦いの後、簡単な自己紹介をし、帰る道すがらセイバーがそう話を切り出した。それをユーノも考えていたらしく、小さく頷き、簡潔に語り出す。

自分の事、魔法の事、そして――ジュエルシードの事を。

友の温もり、家族の温もり

ユーノの話を聞き、セイバーはおぼろげではあるが、ジュエルシードの本質を見抜いた。

手にする者の願いを叶える力。それは、彼女が昔望んで止まなかったものに似ていたのだ。

（まるで聖杯ですね。……では、まさかジュエルシードは願望器っ!?それも誰でも発動できる恐ろしいものっ!?）

自分の中の推測が正しければ、最悪の場合『抑止力』が働いてしまう。そこまで考えて、セイバーは気付いてしまった。

今、この海鳴にはサーヴァントだった者達が四人もいる。しかも、受肉しているため、その能力を僅かだが向上させていたりもする。

それに、全員が人間側に捉えられていてもおかしくない。万一の場合『守護者』として機能させられたら、どうなるか。まさか、自分達が召喚されたのは、この事を世界が予感していたからなのか、という考えが浮かぶ。

セイバーはそんな己が想像に身震いした。それは、この愛する町を、人を、友を、自らの手で滅ぼす事になるのだから。

おそらくその事を考えたためだろう。セイバーの表情は強張り、恐ろしいものになっていた。それに気付いたのだろうなのはが、静かにセイバーの手を握る。

その暖かさに我にかえるセイバー。そして、そんなセイバーになのはは笑った。

「怖い顔してたよ。どうしたの？」

「えっと、少し考え事を」

「そっか。でも、そんな顔するなら……考え事禁止なの」

にっこりと笑うなのはを見て、セイバーもまた笑みを浮かべる。それは困ります、と答え、手を握り返す。その手の温もりを嬉しく思い、なのはもセイバーも笑顔を浮かべる。

それを見て、ユーノも笑みを浮かべる。そこからは言葉はなかった。しかし、確かな何かがあるのを、ユーノは感じていた。

（なのはとセイバーは強い絆で結ばれている。だから、言葉なんかなくてもいいんだ）

羨ましい、と思いつつ、ユーノは首を振る。二人は、自分さえも受け入れてくれたではないかと。なら、羨ましがるのではなく、その域にまで二人に信頼されるようになればいい。まずは、今後の事となのはの魔法に関する知識を増やさなければ。そう考えるユーノ。

それは自分の手伝いのためではなく、なのはの身を守ってもらうためのもの。危険に巻き込んだ自分に出来る数少ない恩返しだと、

強く心に言い聞かせて……。

自宅に戻ったなのは達を待っていたのは、恭也と美由希だった。二人は玄関前で待ち伏せ、なのはを問い詰めようとしたが……。

「私がコンビニに行こうと連れ出したのです。すみません」

セイバーがそう言って頭を下げた。それに何かを悟ったのか、二人は追求を諦め、二人と共に家に入った。

リビングに入ると、士郎と桃子が待ってましたというように座っていた。ちなみにユーノは、既に美由希によって捕まり、可愛がられている。

両親はなのはの外出を咎める事はしなかった。ただ、連れ出したセイバーは若干叱られはしたが。

それをなのはは、内心申し訳ないと思いながら見ていた。恭也はユーノを弄り倒している美由希に呆れ、ため息一つ。

セイバーを叱り終えた桃子は、美由希の手にしているユーノに反応。それを感じ取った美由希がユーノを手渡し、ご機嫌だ。

それに横の士郎も一緒になって、ユーノに色々を話しかけていた。試しにお手、と言ったらユーノがしてしまい、ちょっとした驚きすらしていた。

そんな和やかな空気の中、セイバーとなのはは迷っていた。ユーノから聞いた話をするか否か。無論、いずれは話す。でも、今話すべきかそうじゃないのか。それが二人の悩み。

「どうする？」

「ユーノの話では、ジュエルシードは残り十九。とてもではないですが、三人では探しきれません」

「じゃ……」

なのはが、セイバーはどうするのかと尋ねようとした時だ。セイバーは微笑み「ここから先は、なのはが考えてください」と言い切った。

その言葉になのはは困惑した。今まで、なのははセイバーと相談した時、セイバーの意見をほぼ採用してきたからだ。

そんななのはの心境を知っているかのように、セイバーは真剣な表情で告げる。

「これからのなのはの道は、なのはの意志で決定してください。私の言葉に囚われるのではなく、貴方の意志で貴方だけの道を」

――私は、その道を共に行きます。なのはが望む限り。

そう断言し、セイバーは微笑む。それは、なのはの背中を後押しする力。どこか手を引かれていたなのはを、優しく隣へと並ばせるような、そんな笑顔。

それを受け、なのはは決心する。自分の道を、自分で決めて、自分で歩こう。それにもう不安はない。だって――。

（セイバーが隣に居てくれるんだから！）

「お父さんお母さん、お兄ちゃんお姉ちゃん。……お話があります」

「魔法、な」

そんな士郎の呟きは、家族全員の感想だった。

あれからなのはは全てを語った。ユーノとの出会いから現状に至るまでを包み隠さずに。そんな夢物語とも言える話を、高町家の面々は信じた。それはセイバーという存在がいたから。

誰に知られる事もなく現れ、重症だった士郎の体を癒した人物。それがなのはの話を笑い話に出来ない理由。

「申し訳ありません。僕が、僕がもっとしっかりしていれば……っ！」

「そんなに自分を責めないの。ユーノ君は悪くないわ」

「そうだよ。何とか一人でも頑張ろうとしたんだから」

人の姿に戻ったユーノの言葉に、桃子と美由希がそう慰める。こうなったのは、ジュエルシード発掘をユーノがしたと聞いて、桃子が「どうやって？」と尋ねてユーノが話した内容から、全員が妙な反応をした事がキッカケで、ユーノが人間だと言う事が発覚したからだ。

そして、事情を聞いて、ユーノを責める人間は高町家にはいなかった。

確かに、たった一人で行動した事は無謀で無計画だ。しかし、それを誰が責められる。幼い少年が己の危険も顧みずに行った行為を、否定出来る訳がない。

「でも、なのはさんを巻き込んでしまいました」

「それは、もう言いっこなしって言ったのに。それに、さん付けも敬語も禁止。私、そんな事をいつまでも気にするような子じゃないよ」

「あ、ありがとう……なのは……」

軽い調子で答えるなのはに、ユーノはそう言って頭を深々と下げた。その目からは涙さえ流して。

それに慌てるなのはと、それを微笑ましく見つめる士郎と桃子。恭也もさすがにユーノの涙に怒る気はなく、むしろその気持ちに共感し、顔を背けていたりする。そんな恭也をからかいながらも、美由希はセイバーと視線を合わせて笑う。

いつもの高町家に、新しい顔が加わった瞬間だった……。

「じゃあ、しばらくはそのジュエルシードの情報集めと探索だな」

士郎の発言に、全員が頷く。あれからユーノが落ち着いたのを契機に、家族会議が行われた。

結論として、封印出来るのがなのはしかいない事や、セイバーでも倒せない事から当面はそれぞれで情報収集に努める事になり、見つけたなら、そこから出来るだけ離れずなのは達を待つか、それに誰も手を出せないようにする事になった。

ちなみにその手段だが、直接触れられないようにケースか何かで覆うだけ。それだけでもいいから、出来るだけ人目に触れないようにする。

それが今の状況で出来る精一杯の手段だった。

「あたし達は、学校でそれとなく聞いてこうか」

「そうだな」

「俺達はお客さんからだな」

「それと、見つけても持ってこようとしないようにしなくちゃ。壊れやすいとか言って、ね」

それぞれで今後の動き方を確認し合う家族達を見て、なのははユーノとセイバーへと視線を向ける。

「私達は？」

「とりあえず、なのはは学業を優先です。昼間はユーノも休養していてください」

「えっ、でも……」

それはさすがに。そうユーノが答えようとした時、セイバーが優しく告げた。

「時間に余裕はないかもしれません。だからこそ、焦ってはいけないのです」

「そうだね。いざって時に動けなかったら、意味ないもん」

セイバーの意見を笑顔で肯定するなのは。そんな二人の言葉に、ユーノもどこか力を抜いた表情を浮かべる。それに笑みを浮かべ、互いを見合う二人。

「……そうだ、ね。じゃあ、またしばらくさっきの姿になってるよ。あの姿の方が治りも早いから」

「「え～、もうもどっちゃうの～？」」

ユーノの発言に不満そうな声を上げたのは桃子と美由希だ。せっかく可愛い息子や弟が出来たみたいで嬉しかったのに。

そんな風な事を言いながらユーノを見る桃子と美由希に、全員が苦笑い。なのでユーノが、食事時くらいはと言うと嬉しそうに桃子がユーノを抱きしめた。

美由希はと言えば、お風呂一緒に入ろうよなどと発言し、ユーノが顔を真っ赤にして慌て出した。今度はそれにユーノ以外が笑った。こうして、魔法とのファーストコンタクトは幕を降ろす。

海鳴市から若干離れた遠見市。そこにある高層ビルの屋上に、突然現れる三人の人物。その者達は、自分達の周囲を確認し、男が話を切り出した。

「無事に到着、と。さて、まずはあの町があるかどうかから調べなきゃな」

「ねぇランサー。探すのは何て町だっけ？」

「アルフ忘れたの？確か――――」

”冬木”って所だよ。

次なる展開を……予感させながら

――――――

無印二話　中編

地球の日本に降り立ったランサー達は、まず当初の目的である『冬木市』を探すため、ランサーを先頭に本屋へとやって来ていた。
あの幻の四日間で現代に順応していたランサーは、どうすれば一番安全に情報が得られるかを理解していた。
そのために、無料で情報が得られる場所の一つである本屋に来たのだ。

「ええっと、地図地図……」

「フェイト、読める？」

「全然。ミッドとは違う文字ばっかりだから」

置いてある本を見ながらボソボソと話すフェイトとアルフ。
ミッド出身のフェイトからすれば、漢字に平仮名、片仮名や英語等様々な文字が溢れる日本は、理解し難い言語体系を使っている世界なのだなぁと思わせるのに十分だった。
彼女は後に、日本の公用語が漢字や平仮名と片仮名三つの文字を含めた一つのものである事を聞き、大いに驚く事となる。

「お、ここだ」

フェイトがアルフに英語を見て「ミッド文字に似ている」と少し驚きながら語り合っているのを横目に、ランサーは地図のコーナーへ辿り着いていた。
とりあえず日本全国の地図を手に取り、目次で細かく調べる。そこに自分の求める町の名がない事を理解し、ランサーは己の悪い方

の推測が正しい事を知る。

（冬木はなし、か。つまり、ここは完全に別の世界って奴だな。くそっ、魔術師の嬢ちゃん達がいりゃよかったんだが）

ランサーが期待していたのは、ここに冬木が存在し、士郎達が住んでいる事だった。

ルーンしか使えぬ自分と違い、現代の魔術を使える凛達ならば、アリシアやプレシアの事を何とか出来る方法を知っているかと思ったのだ。

しかし、冬木はなく、おそらく魔術師もいない。何故なら――。

（あの嬢ちゃん、第二魔法を求めてる家系だとかカレンが言ってたな。なら、その家系がない訳がねぇ）

つまり、ここが士郎達のいた世界の平行世界ならば、遠坂家がない訳がない。その逆もまたしかり。なら、この世界に魔術師は存在しない。

「はぁ～。……行くぞ、フェイト、アルフ」

「う、うん」

「何だ？探し物は見つかったのかい？」

些か気落ちしたようにも見えるランサーを、不思議に思いながら追い駆ける二人。そのアルフの問いかけに、ランサーはややぶっきらぼうに答えた。

「欠片すらねぇ」

そう言ってランサーは悔しそうに小さく呟いた。

――――きっとあいつらなら、手を貸してくれただろうによ。

変わりゆくモノ、変わらぬモノ

「じゃ、行ってきます」

「はい。気をつけて」

「なのは、いってらっしゃい」

セイバーとユーノに見送られ、なのはは走り出す。昨夜決まった方針、そしてユーノからの提案により、なのははかつてない程緊張していた。

実は今日の夜から、ユーノによる魔法の勉強が始まるからだ。自衛のために使って欲しい。そうユーノはその提案の趣旨を告げた。

それをなのはとセイバーは有難く受け入れた。ユーノの気持ちと覚悟を感じ取ったからだ。そして、なのはが緊張している理由はもう一つ。

（アリサちゃんとすずかちゃん、はやてちゃんも驚くよね）

親友達にも打ち明ける事を決めたからだ。それはその近くにセイバー達と同じような存在がいるから。

――隠し事みたいで、何か嫌だから

それがなのはの結論。それを聞き、セイバーは笑って賛成してくれた。きっと理解し、手伝うと言い出します。そう付け足してさえくれたのだ。

そんな事を思い出していると、なのはの前にスクールバスが止まる。それに意を決してなのはは乗り込んだ。

私立聖祥大付属小学校。そこがなのは達の通う学校。その屋上にあるベンチに座り、お昼のお弁当を食べ、なのははアリサとすずかにゆっくりと打ち明けた。

それは、昨夜起きた事の顛末。一切隠さずなのはは語った。魔法の事、ジュエルシードの事、そして自分の決意を。

「……で、なのははこれからも、ジュエルシードだっけ。を封印してくのね？」

「うん。私しか出来ないし、それに――」

何よりもこの町を、皆を守りたいから！

そんななのはの言葉に、アリサはどこか諦めムード。すずかは笑って「なのはちゃんらしい」と頷いている。その言葉にアリサも同意し、言い放つ。

「確かにね。でもいい？ぜっっったいに危ない事は極力避けなさい。後、もし手が必要なら言う事！小次郎を貸すから」

「アリサちゃん、小次郎さんは物じゃないよ」

「そ、そうだよ。気持ちは嬉しいけどね」

二人の言葉にアリサはフンッと顔を背けて言い切った。

「小次郎はアタシのもんよ。だって、アタシのサーヴァントなんだから」

ここにアーチャーがいれば、きっと懐かしんだだろう。それ程、今のアリサはあかいあくまにそっくりだった。

自信に満ちている表情、その雰囲気。そして、微かに照れているところまで完璧に。

そんなアリサになのはとすずかは笑みを浮かべる。すると、すずかが何か思い出したように問いかけた。

「そういえば、ユーノ君だっけ？男の子なんだよね？」

「うん。そうだよ？」

何か問題あったかなぁ、という顔のなのはに、すずかは悪戯めいた笑みを浮かべて告げた。

「良かったね。もし打ち明けてなかったら、なのはちゃん、知らずに着替えとかしてたでしょ？」

その発言に固まるなのは。そんな事はないと言おうとして、否定出来ない自分がいたのだ。

おそらくあの時桃子が疑問に思わなければ、なのはも特に意識せ

ず過ごしていた。下手をすれば、一緒にお風呂まで入ったかもしれない。

そこまで考え、なのはは顔を赤くする。同年代の男の子と入浴する事を平然と出来る程、なのはは子供ではない。

そんななのはに、すずかもアリサも微笑み一つ。その場はすずかやアリサも必要なら手伝う事と、いずれユーノと二人を会わせる事でお開きとなった。

麗らかな春の日差しを浴び、ユーノはある事を考えていた。

それは、全てが終わった後、管理局にランサー達の事を教えるか否かだ。ジュエルシードを奪いに来たのは間違いない。でも、とユーノは思う。

（悪人じゃない。そんな気がする）

あの時、確かにユーノは聞いた。立ち去るその瞬間、ユーノに対し、小さくだったがランサーはこう言った。

「死ぬなよ、か」

そう、その一言がずっとユーノの中で引っかかっていた。その気になれば、自分を殺して奪えばいい。でも、まるで最初から危害を加えるつもりがなかったようにユーノは感じていた。

だからこそ、最後にあんな事を言ったのではないか。ユーノはそこまで考え、決意する。

（もし、またどこかで会う事があれば、その時にジュエルシードを何故必要とするのか聞こう！きっと、何か深い訳があるはずだ）

あの時、自分に対して誓めたのは、ランサーもジュエルシードが危険なものだと知っていたからだ。だからこそ、そこまでして何故求めるのか。それが知りたい。

そして、おそらくランサー達もここに来るはず。なら、その時が勝負だ。そうユーノは思う。

「僕が力になれるものなら、手伝いたいんだ」

ランサーのあの眼差し。それを信じ、ユーノは一人そう呟くのだった。

「良かったね、アリサちゃん」

「何が？」

学校が終わると同時に、なのはは急いで教室を出て行った。昼の話をはやてにもするのだそうで、もう連絡はメールでしてあるとの事だ。

それを見送り、アリサとすずかは帰り道を歩いていたのだが、突然すずかがアリサにそんな言葉をかけたのだ。

「変わらなかったね、なのはちゃん」

「……そうね。確かになのはは変わらなかった」

「私達も、だよ？アリサちゃん」

アリサが言おうとした事を、読んでいたかのようなすずかの言葉に、アリサは言葉を失う。そんなアリサに、すずかは笑みを向け、言い切った。

「それはこれまでもだし、これからもだよ。何があったって、私達の絆は変わらない」

「すずか……」

「変われる自分、変わらぬ絆。私は、そう思ってるから」

そう告げて、すずかは微笑み一つ。アリサは、そんなすずかに一瞬呆気に取られるが、すぐにいつもの表情を浮かべ、強く頷いた。

「そうね！何があったって、アタシ達はアタシ達なんだから！」

「うん！」

言って互いに笑い合う。変わらぬ日常などない。変わらないのは、自分達の絆だ。そう思ったところで、はたとアリサが呟く。

――ユーノって奴が男なら、初めての男友達が出来るのかな？

――そうなるといいよね。

ユーノ・スクライア。その彼の知らない所で、静かに友達候補が増えつつあった。

後に彼は語る。初対面で友達になろうと言われたのは、生まれて初めてだった、と。

はやては瞳を輝かせていた。なのはの話に出てきた魔法という言葉に、胸がときめいたからだ。すずかの好きな本をはやては良く借りて読んでいるせいもあるのだろう。

更にアーチャー達というある種のファンタジー（本人達は否定するだろうが）の存在も大きい。

なのはの語る話も疑う事なく、すんなり受け入れた。それは、アーチャーがいるからだけではない。

相手がなのはだからだ。嘘が嫌いで、隠し事も嫌い。そんななのはが作り話をする訳がない。それに信じる理由がもう一つ――――。

（なのはちゃんは、わたしを親友って言うてくれた）

なのはは言った。親友のはやて達に隠し事をしたくないと。その言葉に、はやては顔にこそ出さなかったが、心の底で涙した。

知り合ってもう一年半以上経ち、何度も遊び、時にはお泊り会もした。大事な友達。そう思っていたのだが、なのはは更に上いく親友と言い切った。それにはやても思わず「わたしもなのはちゃん達は親友や思っとる！」と返したのは、当然の事と言える。

もっとも、なのははそんなはやての声に若干驚いていたりしたのだが。

「で、そのジュエルシードやったか。それを探すんやな？」

「うん。当面は皆で手分けして、かな」

なのはの言葉に、はやては笑顔で頷き、問いかける。

「なら、人手は多い方がええよね？」

「ふぇ？う、うん。そうだね」

「よっしゃ、ならわたし達も探すの手伝うわ！」

「ええ～～っ！？」

さすがにそれは。そうなのはが言おうとした時だった。はやてが淋しそうな表情で呟いた。

「わたし、基本家から出ないんよ。出るって言っても決まった場所ばっかりや。そやから、この町も詳しく知っとるとこ少ないんよ」

そんなはやての独白を、なのはは黙って聞き入る事にした。それを見て、はやては「おおきにな」と笑って、続きを語った。

なのはの手伝いを通じて、もっとこの町を知りたい。それを理由に様々な場所へ行きたい。そして、勉強が終わってしまうと暇ばかりになるから、一石二鳥だとも。

そんな言葉を聞き、なのはは迷った。確かにはやて達は一番時間に制約が少ない。アーチャーもはやての世話を生業にしているようなものだし、護衛としても申し分ない。

しかし、なのはは一点だけ不安があった。それは――。

「最悪、怪物と戦うはめになるんだよ？」

それは、はやての身の安全だけを考えた言葉ではない。アーチャーが傷付く事もあるのだ、とはやてに告げたのだ。

そんな事を分かっていたのか、そこでキッチンで作業をしていたアーチャーが口を出す。

「心配はいらん。聞けば、その怪物とやらは魔力で出来ているらしいな。なら、私には絶対的な武器がある」

だから、心配はいらない。そんな自信と安心を感じさせる言葉に、なのはもはやても笑った。

何だかんだで、アーチャーは優しいのだ。今だって、その気になればはやてを嗜める事が出来たはず。でも、そうせずにはやての弁護をした。

つまり、そういう事だ。

「おおきにな、アーチャー」

「なに、私がその程度の相手に遅れを取るなどと思われたくないだけだ」

そんなアーチャーの言葉に二人は笑み一つ。声にこそ出さないが、思いは同じ。だからこその笑顔。

「それじゃ、はやてちゃん気をつけてね。アーチャーさん、はやてちゃんをお願いします」

「気ぃつけてな。あ、わたしにもユーノ君、紹介してな～」

その言葉に頷き、なのはは八神家を後にする。その背に、午後の日差しを受けながら。

そしてその直後、なのははジュエルシードの発動を

感知するのだった。

――――――

無印二話　後編

なのはは急いでいた。八神家を後にした直後、感じた感覚。それがジュエルシードの発動だと、ユーノが教えてくれたのだ。
そして、今はそのユーノと合流し、反応のあった場所へと向かっていた。

【でも、本当にいいの？セイバーを呼ばなくて……】

【今から呼びに行ってたら時間かかっちゃうよ。それにセイバーを待ってる間に誰かが傷付いたら、セイバーも私も嫌だから。大丈夫、無理はしないし、きっとセイバーも来てくれる】

ユーノの言葉になのははそう言い切る。誰かを守れる力があるのなら、迷う事無く使う。それは、なのはが教えられた御神の言葉。
そして、セイバーからも「自分が例え無力でも、それが許せないと思うのなら、絶対にさせてはいけない」と言われている。
ならば、自分は出来る事をする。戦う事は出来なくても、誰かを守る事は出来るはず。そうなのはは思う。

そして、そんななのはの言葉にユーノも感じるものがあった。自分がこの世界に来たのは、ジュエルシードが原因で誰かが傷付いたり、悲しんだりするのを防ぐためだった。
なら、自分もなのはのように行動するんだ。それが、今の自分に出来る唯一の手段なんだから。そうユーノは思い、なのはに告げる。

【今から結界を展開するから、なのははレイジングハートを！】

【うん。よろしくユーノ君】

ユーノは周囲に結界を展開させる。一瞬にして景色が色褪せていく。そして、なのははポケットからレイジングハートを取り出し、告げる。

「レイジングハート、セットアップ！」

”スタンバイレディ、セットアップ”

なのはの声に応じ、起動するレイジングハート。起動コードなしでそれを行うなのはを見て、ユーノは確信する。なのはの持つ魔法の才能は、まさしく天才レベルだと。

バリアジャケットを展開し、なのはとユーノは神社の石段を駆け上がる。そして、その先にいたものは――――。

それは、夕日の思い出

「げ、原生生物と融合してる……」

「犬、だね」

恐ろしい外見をした怪物。その傍には、飼い主であろう女性の姿があった。

「僕があいつを惹きつけるから、なのははあの人を！」

「分かった。ユーノ君、気をつけて！」

なのはに告げると同時に、ユーノは怪物の前へと躍り出る。そして、眼前で防御魔法を展開し、怯ませる。
なのははその戦闘を避けるように、女性へ近付き、ＲＨに告げる。

「レイジングハート、この人を守るものを出して！」

”ワイドエリアプロテクション”

レイジングハートから放たれた光の壁が女性を包む。それを見て、なのはは頷き、視線をユーノへと移す。そこでは、ユーノがバインドを駆使して怪物の動きを封じようとしていた。

「ユーノ君、こっちは終わったよ！」

「分かった！なら、こっちもこのまま抑えるから封印を！！」

「うん！」

ユーノの思いに呼応するようにチェーンバインドが数を増やす。それを檻のように巧みに展開し、怪物の動きを制限していく。
それを無駄にすまいとなのはが動く。その思いに応え、レイジングハートが輝きを放つ。その光に怪物がたじろいた隙を突き、ユーノのバインドがついにその体を捉えた。
そしてレイジングハートが形を変え、封印態勢に入る。それをなのはが力強く構えた。

「リリカル・マジカル！ジュエルシード、シリアル１６！」

”封印”

輝く光がリボンのように怪物を包み込む。そして、それが激しく輝いて消えた先には、大人しくなった犬の姿とジュエルシードが残されていた。

気を取り戻し、周囲を見渡す女性。その足元には、先程の犬がいる。女性は首を傾げ、立ち上がるとその腕に犬を抱えて歩き出す。

それを後ろから見送るなのはとユーノ。心無しかその顔は嬉しそうだ。

「うまくいったね」

「うん。ユーノ君のおかげなの」

「いや、なのはがいたから出来た事だよ。……僕一人じゃ、封印出来なかった」

どこか淋しげな表情をするユーノに、なのはは笑顔でこう言った。

「でも、私一人でもあの人は守れなかった。……それが出来たのは、ユーノ君がいたから」

「なのは……」

「助け合っていこ？私、ユーノ君と友達になりたいし」

そんな風に笑顔で告げるなのは。その顔は夕日で照らされていて、朱が差している。ユーノはその笑顔に見惚れる。しかし、それも瞬

間。すぐに気を取り直して、弱く尋ねる。

「友達？僕と？」

「うん。だめ、かな？」

「だ、ダメじゃないよ！むしろ……嬉しい」

「にゃは、よかったぁ。断られたら、どうしようかと思ったよ」

「断るなんてそんな……。なのはとなら、友達にならない方がおかしいよ」

あまりにはっきりした口調で告げるユーノ。それになのはは目を丸くするも、言われた事を理解し、照れくさそうに笑う。

それにユーノも自分の言葉を思い返し、照れ隠しからその顔を横に向ける。

そこから少し、二人に会話はなかった。だが、ユーノがそろそろ帰ろうと告げて動き出した後、なのはが頷き小さく呟いたのを、ユーノは気付かなかった。

――――かっこよかったな、ユーノ君。

その時のなのはの横顔が赤かったのは、夕日のせいなのか違うのか。それは、誰にも分からない……。

おまけ

ジュエルシードを封印し、二人が高町家に戻ると、セイバーが血相を変えて出迎えた。どうやら発動に気付かなかったようで、気付いた時には結界が消える瞬間だったようだ。

「すみません……」

借りてきた猫のように項垂れるセイバーを、なのはとユーノは微笑んで見つめる。

そして、ユーノがさっきの状況を説明し、自分達もセイバーに連絡しなかったのが悪いと言い、頭を下げる。

それに追随するようになのはまで頭を下げるものだから、セイバーが慌てる慌てる。

「あ、頭を上げてください。なのはもユーノも！これではまだ怒られた方がマシです」

「でも、連絡手段がないのは辛いね」

「念話が使えればいいんだけど……」

セイバーは魔法が使えない。それは昨日の時点で判明した事だった。

ユーノが言うには、魔法は『リンカーコア』と呼ばれるものが必要で、それがセイバーにはないのだそうだ。

しかし、魔力はある。そこでセイバーが立てた理屈は、魔法は使用にリンカーコアが不可欠で、魔術は使用に魔術回路が不可欠と言うもの。

その推測は正しく、セイバー達は一切魔法が使えない。逆もまた然りで、なのは達は魔術が使えないのだ。

もっとも、これが完全に判明するのは、なのは達が管理局と関わ

ってからなのだが……。

「では、やはり持つしかありませんか……」

「そうだね。そうしようよ」

「……何の話？」

自分の知らない所で話が進んでいると感じたユーノが尋ねると、それを聞いていた美由希が答えた。

「携帯だよ、携帯電話」

知らない？そう首を傾げる美由希にユーノは頷く。そこから始まる携帯講座。ユーノはそれを面白そうに聞き入っている。

そんな二人を横目に、セイバーとなのはは以前もらってきたカタログを眺め、思案中。

実は、セイバーに携帯を持たせる案は前にもあった。だが、セイバーが「持っているだけでお金がかかるなど、私にはもったいない」と言って断ったのだ。

「やっぱり画質がいい奴だよ」

「ですが、基本料金が……」

「む～……。なら、容量の大きい奴は？」

「通話料が高いです」

「……じゃ、シンプルな奴」

「……なのはと同じものでいいです」

静かにイライラしていたなのはに気付き、セイバーは模範解答を出した。その発言にジト目のなのはだが、セイバーのすまなさそうな顔を見て、大きく頷く。

こうして、後日セイバーに携帯が持たされるのだが、パケットゲームにハマリ、翌月こっぴどく桃子に叱られるのであった……。

ーーー

番外編　マスター達とリリカルまじかる頑張ります

「あれ？　遠坂～、ここどこだ？」

訳が分からない。それがなのはの素直な感想だった。父が入院する今、なのははは懸命に”良い子”を演じている。家族の負担にならないように。だが、なのはも子供だ。甘えたい時やワガママを言いたい時もある。だからお願いしたのだ。

――――本音を言い合える誰かが欲しい！

そう願った瞬間、いきなり目の前に男の人が現れた。赤い髪の兄である恭也と同じぐらいだろうか。高校生のように見える男性。

そんな状態になって、うろたえたいのは、むしろなのはの方だった。だが男は誰か捜し、いない事が分かると肩を落とした。うっかりがどうだのやっぱり嫌な予感がだの言っていたが、それを見つめるなのはに男も気づき、少し戸惑いながらもしゃがんでこう問いかけた。

「あのさ……ここ、君の家かな？」

「う、うん。そうだよ」

「そう、だよな。えっと、ここは日本？」

「うん。そうだよ？」

何でそんな当たり前の事を聞くんだろう。そう思ってなのはは首を傾げた。そんななのはの仕草が微笑ましかったのか、男は笑みを

浮かべた。それになのはも笑みを返す。
そうして、男は何かを思い出したように告げた。
「俺、衛宮士郎って言うんだ。お嬢ちゃんは？」
「あ、なのは。高町なのはです」
こうしてなのははは友達ではなく、もう一人の兄を得る。これが運命の始まりと知らずに……
「士郎君達がいない……？　少女？　それに……狼に女性……な、この魔力は使い魔？！」
突然現れた男装の女性。それにフェイト達は言葉を失っていた。転送魔法を試してみた瞬間の出来事。いきなり目の前に現れたのは、スーツに身を包んだ女性だったのだ。しかもその女性はフェイト達に対し、勝手に驚き、うろたえている。
さすがに見かねたリニスが女性へ話しかける事にした。どこか唸りを上げるアルフを下がらせ、フェイトの前に出るリニス。
「えっと、貴方は何者ですか？　どうやってここへ？」
「……その前に自分が名乗るべきでは？」
「……そうですね。私はリニスと言います。貴方は？」
「バゼット・フラガ・マクレミッツです。ここへは気が付いたらとしか……今日は面接があると言うのに……」

何やら悔しそうに顔を歪めるバゼット。それを見て、フェイトは思う。この人は、敵じゃないだろうと。何故ならこちらに警戒はしているものの、フェイトへは一度も鋭い視線を向けないからだ。アルフやリニスにはやや厳しい視線を向けているが。

だからだろうか。フェイトは思わず言ったのだ。

「あの、アルフもリニスも敵じゃないですから」

「え？　あ、これは失礼。つい、魔力を感じるものですから」

幼いフェイトに指摘されたのが少し意外だったのか、バゼットはややすまなさそうにそう答え、視線を和らげた。それにリニスやアルフも気を落ち着けたのか、息を吐く。そして、フェイトは尋ねるのだ。面接って何、と。それにバゼットは懇切丁寧に答えたのだが、それがあまりに詳しすぎ、フェイトは途中から覚えていなかったりする。

ただ、バゼットが仕事を探している事だけは理解した。こうして、テスタロッサ家に戦闘面のプロが加わる。彼女の魔術知識はプレシアを助け、フェイトにとってのお姉さんとなっていく……

「あっちゃ～、失敗したのか……」

「ええっと……」

「まさか、制御に失敗するなんて。今回はヘマしてないのに……」

「もしも～し……」

「何よ！　士郎！　今、私が……」

そこで女性は気がついた。そこが自分の知る場所ではない事に。そして、自分が感情をぶつけた相手が車椅子の少女だった事に。

しかも、少女は今の一言で涙目になっていた。それを見た瞬間、女性の中に罪悪感が生まれ――――。

「ごめんね。貴方を泣かせるつもりじゃなかったのよ。ホントにごめんなさい。だから許してくれるかしら？」

「……ぐすっ。うん、ええよ。お姉さんが何か勘違いしたのは分かるから」

「ありがとう。でも……ここに住んでるの貴方だけ？」

女性のその質問に少女が小さく頷いた。それだけで、女性は少女の状況を把握した。自分がいるにも関わらず、少女以外誰も現れない事。そして、車椅子にも関わらず、一人で住んでいる事。つまりは――――。

（一人っきり、か……）

その姿に幼い日の自分と妹の姿を重ねる。親を亡くし、一人で生きた自分と、親から離され、一人で苦痛に耐えた妹。その両方が目の前の少女に重なるのだ。たった一人で親もなく、苦痛に耐えて生きる日々。それがどれだけ常人には辛い事か。

自分だって、魔術というものが無ければどうなっていたか分からない。そう思い、女性は少女の前に屈んだ。

「ね、わたし……実は家に帰れなくなったの」

「そうなん？」

「ん。だって、いきなり現れたでしょ？　だから、帰り方が分からなくて」

「……そうやね」

「それで！　厚かましいんだけど……」

「何や？」

「ここにしばらく居させてくれない？　帰り方が分かるまで」

突然の申し出に目を瞬かす少女。その視線を逸らさず、女性は待った。ずるいと思う。たった一人で暮らす少女。その寂しさに付け込んで、今自分はギアスまで使っている。でも、本音を言えば女性はここに居てやりたかった。

この少女の辿る道は、おそらく自分でさえ嫌になる程厳しい道だろう。だから、出来るだけ傍に居たかった。帰る道など、その気になれば、一人でも探せるだろうし、ここで厄介にならずとも何とかする術はある。だが、出来るならこの子の傍にいてあげたいと思ってしまった。

（何か、他人の気がしないのよね……この子）

「どう？　ダメかしら」

「……条件がある」

「そう、なら……え？」

「条件がある。家賃とか払ってくれるか？　そやな……全部込みで月二万でどや？」

女性は言葉を失った。ギアスが通じない。それは、目の前の少女に対魔力があるという事。だが、目の前の少女からは魔力の反応は感じない。

それ故に驚いているのだが、理由はもう一つ。そう、しっかり家賃を請求してきた事だ。それも、かなり美味しい値段。高過ぎず、しかも月々払う事が可能な額。これなら、どこかでバイトなり何なりをすれば簡単に払える。

「……オッケー。商談成立ね。私は凛。遠坂凛よ」

「凛姉さんやな。わたしははやて。八神はやてや」

こうして、奇しくも同じ声の二人は共に住む事となる。この日から、はやてと凛は本当の姉妹のようになっていくのだが、それは別の話……

「えっと……」

すずかは言葉を失っていた。突然目の前に見知らぬ女性が立っていたからだ。だが、それはどうも女性も同じらしく、戸惑った表情を浮かべてすずかを見ている。

このままではいけないと思ったのだろう。女性は優しい声でこう

切り出した。

「ここ、どこですか？」

「あ、海鳴市です」

「海鳴……日本なんだ。良かったぁ～」

どこか安心したかのように息を吐く女性。それにすずかもつられて笑みを見せる。それに気付き、女性も先程よりも優しい笑顔を浮かべた。そして、何故か他人の気がしないと二人は同時に感じていた。

しばらく見つめ合う二人。それを先にやめたのは、すずかの方だった。聞きたい事があると女性に告げて。女性はそれに快く頷き、答えられる事ならと笑って言った。

すずかが聞いたのは、どうしてここに現れたのかと言う事。それに女性は姉の実験を手伝っていたら、事故に巻き込まれてこうなったのだろうと答えた。何の実験かは女性は教えてくれなかったが、すずかは知らない方がいいと言っていたので、おそらく危ない実験だったのだろうとすずかは理解した。

「それで、これからどうするんです？」

「そうだね。どうしようかな……」

そう言ってかなり困った顔で思案を始める女性。先輩がいればとか、姉さんならきっととか言いながら、うんうん唸っている。それを見て、すずかは何となく放って置けなくなった。まるで大きくなった自分が困っているように見えたからだ。

「あ、あの……もし良ければ家で働いてみませんか？」

「え？」

「その、使用人って事になるんですけど……衣食住は保障しますから」

すずかの言った事を理解し、女性は小さく笑った。それはすずかを馬鹿にするものではなく、その心遣いに感謝してのもの。女性はすずかに対し、こう告げた。気持ちは嬉しいけど、自分一人の意見で決められるのと。それにすずかは少し戸惑うも、はっきり頷いた。私もこの家の人間だからと。必ず認めさせてみせます。そう言い切ったのだ。

「……そう。ありがとう。じゃあ、いつまでか分からないけど、お世話になるね」

「はい。あ、お名前……」

「そうだったね。私は間……遠坂桜」

「？　……私は月村すずかです。よろしく桜さん」

何故か途中で首を振って桜はそう告げた。すずかはそれに何か引っかかるものを感じるも、口に出す事無く答えた。だって、名前を言った時の桜の表情はとても嬉しそうだったから。

すずかと桜。どこか似た雰囲気を持つ二人は、これから忍が文句を言う程の関係を築いていく。まるですずかが大人になったような

錯覚を与えて……

「助かったわ」

「いえ、当然の事をしたまでよ」

アリサは自分を助けてくれた女性に礼を述べ、手首を擦っていた。有名な財閥の令嬢であるアリサは、先程まで誘拐グループに拘束されていて、後少しで乱暴されそうだった時に、目の前の女性が現れ助けてくれたのだ。

「でも、どうしてこんな場所に？」

「料理を教わろうと、坊やの家に上がった途端、光に包まれたのよ。そして……」

「気がついたらここに？　何の映画よ、それ」

大人とは思えない話だが、だがそれ以外に現状を説明出来る術はない。何せ、ここは廃墟。人も寄り付かないような建物なのだ。まぁ、何も持たない女性がたった一人で誘拐犯を倒したのは、流石に驚いたが。

しかも、相手は銃やナイフなどを所持していたにも関わらず、だ。それには、アリサも目を疑ったのだ。素手の女性が凶器を持つ複数の相手を圧倒するなど。まぁ、圧倒というか何故か全員昏倒してるのだが。

「……ま、いいか。えっと……」

「そうね。く、葛木メディアと呼んでちょうだい、お嬢さん」

「じゃあ、葛木さんね。アタシはアリサ・バニングスよ。お礼をするから家に来て」

「……そう。じゃあお言葉に甘えるわね。後、色々とアリサちゃんにお願いがあるの」

お転婆アリサ。その家庭教師兼護衛となった葛木メディア。これによって、アリサは着せ替え人形のような目に遭うのだが、それはまだ先の話……

「へぇ、竜がいるんだ」

「……う、うん」

雪原で話す二人の幼子。一人は銀色の髪の少女。もう一人は桃色の髪の少女。先程まで狼に襲われていたのだが、銀色の髪の少女が魔法を使って追い払ってくれたのだ。

桃色の髪の少女――キャロ・ル・ルシエは少女が見つめる竜、家族同然のフリードリヒを抱き抱え、少女へ見せた。すると、人見知りの激しいフリードは、少女へ甘えるような声を出した。それにキャロは驚くが、少女はそれにどこか意外そうな表情を見せ、小さく笑った。

「この子、名前は？」

「あ、フリードリヒ。わたしはフリードって呼んでるけど」

「フリード、ね。いい名前じゃない。気に入ったわ」

「きゅく～」

少女のいい名前と言う言葉に反応したのか、フリードは上機嫌で声を出す。それに少女も機嫌を良くし、笑みを見せる。そして、キャロもそんな少女に久方振りの笑顔を見せた。それを見て、少女も笑顔を見せる。互いに笑顔を見せ合い、少しすると少女が何かを思い出したように不機嫌になった。

「にしても、並行世界転移か。成功といえば成功だけど……リンったら、止めた方がいいって言ったのに」

「ど、どうしたの？」

「こっちの話。あ、そうだ。名前、何て言うの？」

「え？　え？　わたし？」

「当然でしょ？　貴方以外いないんだもの」

少女はやや呆れ顔でそう言った。それにキャロはどこか嬉しそうに笑みを浮かべ、心なしか緊張したように答えた。

「わ、わたし、キャロ・ル・ルシエですっ！」

「キャロ、ね。私は、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。イリヤでいいわ」

こうして出会った二人。この後、流れの竜召喚師と謎の魔導師コンビとして名を売っていくのだが、それは先の事だった……

兄――ティーダ・ランスターが任務中に負傷した。そう聞いて少女は急いで病院へ向かった。受付で病室を聞いて、嫌な予感を振り切るように走った。途中で看護士達に注意されたが、それでもその速度は変わらない。そして、やっと目当ての場所に到着して中へ入った。

そこには、痛ましい姿のティーダと、変わった格好のシスターだろうか……がいた。

「えっと、お兄ちゃん？」

「あ、ああティアナか。カレンさん、この子が話した俺の妹です」

「そうですか。彼女が……」

女性――カレン・オルテンシアはどこか楽しそうに笑った。その笑みを見た瞬間、ティアナは言い様のない不安を感じた。何か関わってはいけない気がすると。

聞けば、ティーダが撃墜されて落下した際、彼女が助けたそうだ。何か布のようなもので体を捕まれた。そうティーダはどこか苦笑いで告げた。だが、そのおかげで地面に激突せずに済み、こうして生きているとの事だった。

ちなみに、その追い駆けていた犯罪者もカレンの布で捕縛され、無事に御用と相成ったそうだ。ティーダは失態とも言えるが、一命を取り留めたし、カレンが捕まえられたのも、ティーダが犯罪者を

弱らせていたためと分かり、帳消しとなったそうだ。

「……そうなんだ」

「ああ。だから、な。落ち着いて聞いてほし「そのお礼として、しばらくご厄介になります」

ティーダの言葉を遮り、カレンはサラリとそう言い切った。それを聞き、ティアナは一瞬理解出来なかったが、視線をティーダに向けると、申し訳なさそうにしていたので、それが本当の事だと分かった途端――。

「嘘だっ！！」

叫んだ。心の底から否定するように。それをとても嬉しそうに眺め、カレンは口の端を吊り上げて言った。

「いえ、事実です。ティーダさん、そうですよね？」

「え、あ、ああ……」

「ちょっとお兄ちゃん！」

何故かカレンに強気になれないティーダにティアナは怒鳴るものの、カレンはそんなティアナにとても良い笑顔で告げた。

――これからよろしく、ティアナさん。

この後、カレンのいびりから逃げるため、ティアナは寮生活出来る管理局の訓練校へ行く事を決意するのだった……

とある違法研究所。そこでクイントは言葉を失っていた。自分に似た少女達がいるからではない。その二人の少女に何かを聞かせている男がいたのだ。男は神父なのだろう格好をしているが、その雰囲気はどこかそれにそぐわない。

長身で見るものが見れば、その体は無駄なく鍛えられているのが分かるだろう。クイントもそれは分かるのだが……

「それで？」

「それで？」

「ふむ。主は言った。自分を愛するように隣人を愛せと」

微笑ましいのだろう。声だけ聞けば。だが、男達の周囲には、研究所のスタッフと思われる者達と、雇われていたであろう魔導師達が軒並み倒れているのだ。それをいないように男は手にした聖書をすらすらと読み上げている。

クイントはそんな光景に眩暈を感じながらも、二人の少女と男を保護する。男の名は言峰綺礼。この後、聖王教会に目をつけ、面白がって入信し、修道騎士として名を馳せる事になる。ちなみに、彼が滞在したためか、ナカジマ家では月に一度ある料理が作られる事となる。ゲンヤだけはそれについぞ慣れる事はなかったが、妻のクイントと娘二人は中毒になる程に気に入ってしまうのだった……

時空管理局本局　通路。そこを歩く一組の男女。そして、女性の

手を繋ぐ少女がいる。女性の名は、メガーヌ・アルビーノ。そして、手を繋いでいるのはルーテシア・アルビーノ。メガーヌの娘だ。そして、その二人と共に歩いている男性。彼は、メガーヌが面倒を見ている次元漂流者なのだが、仕事で忙しい彼女に代わり、ルーテシアの世話をしてくれているのだ。

「本当に助かってるわ、葛木さん」

「いや、こちらも世話になっている。礼には及ばん」

「でも、宗一郎は色々教えてくれる」

「教師だったからな。だが、さすがに小学生は教えた事がなかったので、いい経験になった」

メガーヌはある事件で重傷を負ったのだが、同僚の知り合いである修道騎士と葛木に助けられ、何とか一命を取り止めた。その頃から葛木はルーテシアの面倒を見てくれているのだ。

「隊長も無事ならいいのだけれど……」

「ゼストなら大丈夫だろう。あれ程の男だ。きっとどこかで生きている」

ゼストと葛木は茶飲み友達とも言える間柄だった。ゼスト隊に保護された際、葛木がゼストと腕試しをした事から認め合い、良く相談に乗ったりしていたのだ。

そして、実を言えば葛木は見たのだ。あの時、メガーヌを助けた際に奥の方を走る少女と運ばれていくゼストを。だが、それを追う事は出来なかった。メガーヌの方も一刻を争う事態だったからだ。

それに、運んだという事は生きているだろうと葛木は考えていた。死体をわざわざ運ぶ必要はない。生きているからこそ使い道がある。そう思っているからこそ、葛木はそうメガーヌ達に言ったのだ。

「ね、宗一郎。今日は何を教えてくれる？」

「……倫理だな。私の担当科目だ」

こうして葛木は帰る術を探し続ける。彼が妻と再会するのは、実にこれから数年の時が必要だった……

ーーー

無印三話　前編

夜の学校。そこに立つはなのはとユーノ、セイバーの三人。
ジュエルシードの反応を感じ、こうして行動するのも慣れたもの。
セイバーがまず相手の動きを惹きつけ、ユーノが結界を展開。
そしてなのはが最近習得した魔法でセイバーを援護する。

「レイジング・ハート！」

”ディバイン・シューター”

射撃魔法。それは、なのはのセイバーやユーノを援護したいという思いが生んだ力。
その光弾は意志を持つかのように、怪物へ向かっていく。セイバーの動きに合わせるように、魔力弾が怪物を襲う。
そして、それをかわしたところをセイバーが斬りつけ、怯んだ隙にユーノがバインド。

「今です！」

「なのは！」

「リリカル・マジカル！ジュエルシード、シリアル１３！」

”封印”

そこをなのはが封印する。これが最近確立されつつあるパターン。
前衛をセイバー、中衛をユーノ、後衛なのはのチーム。これが見事にはまり、ここ二戦はものの三分とかからずに封印出来ていた。

レイジングハートがジュエルシードを収納し、この日も無事終了。

「これで四つですか」

「うん。でも、まだ沢山あるから」

「油断大敵、だね。とりあえず帰ろ？少し疲れたよ」

少し辛そうな表情のなのはの言葉にユーノが頷く。

「そうだね。シューターの制御は慣れないと結構神経を使うだろうから」

「しかし、見事なものです。私の動きに合わせてくるとは」

「ふふん、セイバーの動きはずっと見てきてるから」

笑顔。それは、そのなのはの言葉に、セイバーとユーノが浮かべたもの。

高町家に向かって歩き出す中、三人は他愛ない会話を交わす。ユーノが高町家にやってきて、まだ二週間弱。

いや、もう二週間弱と言うべきか。怪我も完治し、既に身の上話までさせられた彼は、密かに桃子と美由希の『高町ユーノ計画』が始まっている事を知らない。

それを裏で食い止めているのは、誰であろう恭也と士郎だった。

恭也は、あくまで友人としてユーノとなのはを関係させるべきと主張。士郎は、本人の意思なくそういう事は不味いと常識的意見。

結果、ユーノ本人に聞いてから養子縁組の話は進める事となり、ユーノの知らぬ所で二人の計画は事実上停止されるのだった。

よく朝、高町家にある道場からいくつもの音が響いていた。

「どうした。そのような動きでは、私の剣閃はかわせぬぞ」

「くっ……まだまだぁ！！」

小次郎の木刀が振り下ろされる。それをユーノが魔法で防ぐ。それと並行してチェーンバインドを展開、小次郎を捕らえようとするのだが。

「何度も同じ手は食わん」

「なっ……」

小次郎はバインドに敢えて木刀を絡ませ、その場を離脱。そして素早く代わりの木刀を手に取り、ユーノへと迫る。

それにユーノは転送魔法でかく乱しようとするが、発動までの僅かな時間は小次郎にとっては絶好の好機。

「これは少しばかりの礼よ」

（あれって、小次郎さんの得意技！？）

なのはの表情に戦慄が走る。それはもう幾度となく兄や父が敗れた技。動体視力に自信があるなのはにさえ、未だに見切れない無敵

の剣技。
その名を燕返し。小次郎の必殺剣がユーノを襲う。そう、それは想像以上に健闘したユーノに対する、小次郎なりの気遣い。
その身は未熟なれど、その意気や良し。それを表すための、秘剣。

「がっ……」

咄嗟にユーノが展開したシールドと衝突する小次郎の剣閃、だがその鋭さがそれを打ち砕く。容赦ない小次郎の一撃がユーノに直撃する。いくら加減はしてあるとはいえ、それは意識を刈り取るには十分だった。それを見て、恭也が立ち上がる。

「そこまで！」

「ユーノ君っ！」

その声に、観戦していたなのはが駆け寄る。その表情は不安一色だ。それが、早朝の高町家の定番になり始めてもう一週間。
キッカケは些細なものだった。ユーノがなのはのやっているトレーニングを見て、このままじゃダメだと思った事が始まり。
そこから士郎や恭也に頼み、自分を鍛えてほしいと言い出した。勿論、同じ男としてそれを分からぬ二人ではない。
その日のうちから、ユーノは恭也と美由希の弟子となった。御神ではなく、あくまで剣術としてのだったが。

「どうです？ユーノの奴は」

「……初めは些か戸惑ったが、慣れればどうという事はない。しかし、内心見くびっておったわ。初見では厄介なものかもしれぬ」

「小次郎さんにそこまで言わせるとはねぇ。……あたしも負けてられないかな」

「いや、実際良くやったと思うぞ。俺達も勝ってはいるが、魔法には結構手を焼いたじゃないか」

士郎の言葉に恭也は頷く。小次郎同様、恭也もユーノを甘く見ていた。しかし、的確なバインド展開とシールドの強度に、それが驕りだったと気付かせれたのだ。神速を使い、試合には勝ったが、恭也にとってユーノは、それ以来美由希とは違う期待を抱かせる相手となった。

美由希もセイバーも試合結果はそうだった。ユーノは戦闘をするタイプではなく、むしろ学者や研究者といった人間だ。

だからこそ、ユーノは頭を使う。どうすれば自分が勝てるのか。そこまで流れを作るにはどうするのか。そういう考えを既に持っていた。

士郎も恭也も美由希も、そしてセイバーでさえユーノを倒したのは、使う必要はないと思っていた『神速』や『魔力放出』を使ってだった。

それだけ魔法の使い方が上手く、また巧みだったのだ。それに、初見ではどの魔法がどんな効果を持っているか分からないのも、強みの一つ。

故にユーノは意外に善戦していたのだ。だが、恭也達は知らない。それは日々、ユーノが高町家の修行風景を仔細漏らさず観察した結果なのだ。

そんな小次郎達から離れた場所で、なのはとセイバーがユーノを見つめていた。

「大丈夫ですよなのは。アサシンは加減していましたから」

「それは分かってるけど……」

セイバーの言葉になのはも同意するが、それでも心配なのだ。何せ、小次郎は恭也や士郎に勝てる人なのだ。

その試合を見た時、なのはの小次郎を見る目が変わった。それまではアリサの家の庭師だと思ってたのだが、実は凄腕の剣士なのだと知ったからだ。

なのはが心配そうにユーノを見つめる中、なのはを見る恭也の視線が鋭くなる。

（また強くなったとは思うが、なのはは渡さん！）

（あ～、まただよ。恭ちゃんも過剰なんだよね）

その視線の意味するものを知り、美由希は苦笑い。恭也は、なのはとユーノの仲を変に勘繰っている。美由希の目から見ても、まだ所詮お友達だろうとしか見えないのに、恭也はどこか別の見方をしているのだ。

ま、そう見ながらも恭也もユーノを弟扱いしている所があり、この前なども共に釣りに出かけてたりする。

ここだけの話、士郎と恭也にとってユーノは数少ない男仲間。

そして、境遇故に甘えなかった恭也と違い、ユーノはどこか遠慮はあるものの、歳相応の甘さを残していたりする。

士郎は恭也に出来なかった分、ユーノを息子同然に可愛がり、恭也は恭也で弟と思って面倒を見ていたりするので、やはり高町家は甘い。そして、そんな家族同然の扱いに、ユーノが密かに涙したの

も内緒の話。

「では、私はこれで失礼する」

「はい。今度は俺とやりましょう」

「いや、父さんじゃなくて俺が先だ。第一、この前やったばかりじゃないか」

「はいはい。それは、後で。まず、道場の片付けね」

「いつもすまぬな。私も手伝いたいが」

小次郎はそう言って困り顔。そう、小次郎は一度も道場の片付けや掃除をした事がない。本来ならば、小次郎とて武士の端くれ。道場に対し礼を払うのだが、それが出来ない理由があった。

「いいですって。アリサちゃん、待ってるんですから」

「……すまぬ」

美由希の言葉に小次郎はそう答え、軽く頭を下げる。それに笑顔で手を振る美由希。

そう、小次郎が高町家に出入りするようになってから、アリサは軽いジョギングを始めるようになり、その護衛に小次郎を指名しているのだ。

それがアリサなりの抵抗なのは、小次郎以外全員理解している。だからこそ、微笑ましく小次郎を送り出す。

「う……」

「ユーノ君、大丈夫？」

小次郎が出て行くのと同じくして、ユーノは意識を取り戻した。周囲の様子を確認し、ユーノはポツリと呟く。

「……また、負けた」

その呟きと共に、ユーノの視界が滲む。士郎や恭也達と戦い、次は負けないと意気込んで臨んだ小次郎との試合。

小次郎の何とも言えない佇まいに、一度は飲まれかけたユーノだったが、その瞬間ランサーの事を思い出し、それを跳ね除けたのだ。

最初は小次郎も様子見の部分があって、ユーノ優勢に展開されていた試合だったが、ユーノのチェーンバインドに小次郎の片腕が捕らえられた後から状況が一変した。

ユーノが勝負を決めるため、一気呵成に攻めようとした瞬間、小次郎がバインドを引き千切ろうとしてバインドが軋み、ユーノの驚きを誘った。

バインドが力任せで軋みを上げる（小次郎が僅かだが対魔力を得たため）という光景に、ユーノの意識が逸れたのを感じた小次郎は、距離を詰め、自由に動く足でユーノを蹴り飛ばした。

その攻撃でバインドを解いてしまったユーノは、先ほどの通りやられてしまったのだ。

「ユーノ君……」

声を押し殺し、涙を流すユーノに、なのはは何も言えなかった。

それは、下手な言葉は余計ユーノを傷つけると思ったから。

なのはは知っている。何故、ユーノが自分を鍛えようと思ったか。

それが、昔の自分と同じだったからだ。

（守られてるだけじゃ……嫌なんだよね）

セイバーによって守られるなのはとユーノ。封印するのはなのは。ユーノは役に立ってない訳じゃない。昨夜のように、的確に相手の動きを制限し、二人のサポートをしている。でも、本人はそれだけじゃ嫌なのだろう。

「なのは、今は一人にしておきましょう」

「セイバー……うん」

静かに声を掛けるセイバーに、なのははそう応じ、道場を後にする。去り際、一度だけユーノの方を振り向き、呟く。

「ユーノ君は強いよ。絶対に、あの時の私よりも」

その視線の先には、士郎と恭也に励まされているユーノがいた。

「初めまして。アタシ、アリサ・バニングスよ」

「初めまして。私は月村すずかです」

「は、初めまして。僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノって呼んでほしい」

あれからしばらく後、なのは達はグラウンドに来ていた。今日は

士郎が監督兼オーナーをやっているサッカーチームの試合がある。翠屋ＪＦＣというチームで、その応援とユーノの紹介を兼ねてアリサ達を誘ったからだ。

「そ、ユーノね。アタシはアリサでいいわ」

「私もすずかでいいよ。よろしくユーノ君」

「こ、こちらこそよろしく、すずか。それと……アリサ」

どこか緊張するユーノに笑みを浮かべるなのは達。だが、彼女達は知らない。ユーノが緊張している理由。それは、普段から聞いている小次郎のアリサ話が原因だと。

曰く「本当は虎の娘」や「気に入らなければ骨の髄までしゃぶられる」などと吹き込んでいた。それを真顔で言うものだから、ユーノは素直に信じてしまったのだ。小次郎は真面目で腕の立つ武人。それがユーノの評価だから当然と言える。

「後、もう一人紹介したい子がいるからね」

「あ、はやてちゃんだね」

「やっぱりはやても会わせてって言ったのね」

なのはの言葉に、俄かに盛り上がる二人。それを横目にユーノは視線をグラウンドへ移す。そこでは、多くの少年達がボールを追い駆け、走り回っている。

それがサッカーと言うスポーツだと、ユーノは知っていた。高町家で士郎やセイバーがテレビを見ながら、あ～でもないこ～でもないと言いながら熱中しているのを、何度も見ていたからだ。

（楽しそうだな……）

小さい頃から遺跡発掘等の仕事や勉強に従事していたため、ユーノは同年代と遊んだ経験が少ない。

だからだろうか。眼前の光景が、ユーノには少しだけ羨ましく見えた。そんなユーノの横顔を、なのは達は黙って見つめる。

（ユーノ君……何か悲しそう）

（何よ、あんな顔して。こっちは無視？……いい度胸してるじゃない）

（サッカーが珍しいのかな？……でも、何で寂しそうなんだろう）

三人の少女は同い年にも関わらず、どこか物悲しい雰囲気を漂わせるユーノを、様々な意味で意識していた。そんな四人を遠くから呼びかける者がいた。その独特の喋り方に、なのは達三人がそちらへ振り向く。

「お～い。今着いたで～！」

「「「はやて（ちゃん）！」」」

アーチャーに車椅子を押されながら、はやては嬉しそうに手を振る。それに駆け寄る三人。

それを見つめ、ユーノはなのはから聞いた親友の名前を思い出していた。

（そうか。彼女が八神はやてか。事故が原因で歩けないんだ、って

言ってたな）

楽しそうに笑う四人を見て、ユーノも笑う。なのはがあんな風に笑っていられるように、早くジュエルシードを回収しなければ。

そんな思いがユーノの中に強くなる。すると、ユーノの視線がアーチャーと合う。その瞬間、アーチャーが口の端を上げた。

その笑みの意味するものがユーノは分からず、困惑の表情。それにアーチャーは益々笑みを深くする。

（まったく……。どこにもいるものなのだな、女難の相が見える相手というのは）

おそらく、これをあかいあくま辺りが聞いていれば「それを今のあんたが言う？」とそりゃいい笑顔で言い放っただろう。

現在、アーチャーを意識しているのは三人の女性。敢えて誰とは言わないが、かなり熱烈にアーチャーに好意を抱いている。

まぁ、その内の一人は「お嫁にいけない」と言う事までされたのだが。それをアーチャーが知るのは、今年の冬が終わる頃。

ある程度喋ったところで、試合開始の時間となり、なのは達は応援席で観戦する事に。ユーノはアーチャーと共に、セイバーと同じベンチで観戦している。一緒にと、なのはが誘ったのだが、アーチャーが男同士の話がしたいと申し出たため、なのは達少女四人での観戦となっている。

「ユーノ君やったか？可愛い顔しとるな」

「そうだね」

「女顔って奴よね」

「でも、さっきはすごく男の子っぽい顔してたよ？」

「おっ、何や面白そうな話やな。すずかちゃん、それ詳しく」

「お、応援しようよ～」

興味をユーノに示すはやてに、なのはが困ったようにそう言った。

それに三人が笑い、頷いて声を上げる。

すると、四人の声が効いたのか。それまで一進一退の攻防をしていた試合が、一気に翠屋ＪＦＣのペースに変わった。

……まぁ、男なんてみんな素直で単純なもので、美少女が応援してたら、いいとこ見せようとするものなのだ。

それを別の場所から見ながら、ユーノは苦笑い。自分もきっと同じような事をされたら、目の前の少年達のように張り切る姿が浮かんだからだ。

「何か面白い事でもあったかね？」

「いえ、笑い事じゃない気がして」

ユーノの答えにアーチャーは楽しそうに笑みを浮かべ、視線をなのは達へ向ける。

「まぁ、確かに彼女達は可愛いからな」

「はやてもですね」

「何故わざわざはやてだけを個別で告げる」

ユーノの言葉にアーチャーは少し嫌そうな表情でユーノを見る。

それを見て、ユーノは笑って答えた。

「だって、アーチャーさん、はやてだけ視線合わせなかったですから」

思ってないのかと思いました。そう続けたユーノにアーチャーはややムスッとした顔で、それを否定。

確かにはやてに視線は合わせなかったが、それははやてが自分の視線に敏感だからだ、と言ったのだ。

それを聞いて、ユーノは「いや、それってどうなんです？」と思ったのだが、言うのはやめた。嫌な予感しかしなかったからだ。

そんな風にユーノとアーチャーが会話する横で、セイバーは力の限り声を張り上げ、応援するのだった……。

ーーー

……強くなれ、ユーノ。支援専門でも強くなれ。

「今日はみんな良く頑張った！そんなに長く時間は取れないが、祝勝会だ。英気を養い、次も勝つぞ！」

士郎の言葉に、翠屋ＪＦＣの面々が歓声で応える。あの後、試合は翠屋ＪＦＣの勝利に終わり、そのままの雰囲気で、翠屋で祝勝会となったのだ。

それとは別に、なのは達は、外にあるオープンカフェスペースでくつろいでいた。セイバーは、中でチームの少年達と楽しそうに話している。

「いや～、初めてサッカーを生で見たけど、結構面白いもんやね」

「だよね～。私も思わずハラハラしちゃった」

やや興奮気味に話すはやてに、すずかも同意し笑みを浮かべる。

「アタシとしては、もう少し盛り上がりが欲しかったわね」

「え～、十分盛り上がってたと思うよ？」

少し不満げな表情で告げるアリサに、なのはは不思議そう。

「どうです？そちらは」

「いや、ダメだ。やはり反応が分からないというのが厳しいな。何か手があればいいのだが……」

そんな四人の和やかな雰囲気のテーブルとは対照的に、隣のユーノとアーチャーのテーブルでは、ジュエルシードについて話し合っていた。

アーチャーは、ユーノからジュエルシードの詳しい説明を受けた時、迷う事なく「破壊するべきだ」と主張した。それをユーノやセイバーが何とか説得し、とどめとばかりに後からそれを聞いたはやてが「人様のもんを勝手に壊したらあかん！」と言い放ち、アーチャーは渋々ではあるが引き下がった。

そして、破壊出来ないなら、一刻も早く回収するべきと思い、はやてと探索するのは勿論、深夜も一人で探索していた。

それを知っているのはユーノとセイバー、そしてライダーに小次郎の四人。

前者二人は本人から聞き、後者二人は偶然出会った。その時分かったのは、ライダーや小次郎もすずかやアリサから話を聞き、早く日常を取り戻してやろうとの気持ちから、アーチャーと同じ行動を取っていた事。

それを知った時、三人揃って苦笑を浮かべ、お互いに変わったと言い合ったものだ。

「でも、小次郎さん達も協力してくれたおかげで、大分探索範囲が絞れましたから」

「そうか。そう言ってもらえると助かる」

「残り十七。広域探索魔法が使えれば、もっと効率も上がるんですけど……」

「出来ない事を言っていても仕方ない。それより、いいのか？」

「え？」

アーチャーの突然の一言にユーノの思考が止まる。その視線が注がれているのは、自分の後ろ。つまりなのは達のいるテーブルであった。

アーチャーが言いたい事を理解し、ユーノが恐る恐る振り向くと、少し拗ねた表情のなのはとアリサ、苦笑を浮かべるすずかに面白そうに笑うはやてがいた。

それが何を意味するのか。それを理解したユーノは電光石火の動きで頭を下げた。

「ごめん！なのは達を忘れてた訳じゃないんだ！ただ、今アーチャーさんとジュエルシードについて話してて……」

――だから、と続けようとして、なのは達が笑い出した。

その表情の変化に、ユーノは一瞬何が起きたのか理解出来なかった。そして、そんなポカンとするユーノに、アーチャーが告げた。

ユーノは、なのは達にからかわれたのだ、と。それを聞き、状況を把握したユーノは怒りや呆れでもない感情が湧き起こった。

――しょうがないな、なのは達は。

――ユーノ君が悪いんだよ？私達を無視するから。

そう告げるなのはの表情は、誰が見ても嬉しそうな顔をしていた。

他愛ないやり取り。屈託のない笑み。それをくれるかけがえのない親友達。それを心から感謝するように。

楽しげに会話するなのは達。それを眺め、アーチャーも笑みを浮かべる。しかし、その表情が一瞬にして曇る。

（あの男、二年ぶりに現れたかと思えば、ジュエルシードに手を出すな、とはな）

そう。アーチャーが初めて深夜ジュエルシードの探索を行おうとした時、あの仮面の男が再び現れたのだ。

そして、身構えるアーチャーにジュエルシードに手を出すな、と告げ再び消えたのだった。

それにアーチャーは確信を持った。監視の視線がなくなったのは、こちらを監視する別の手段を得たのだと。

そして、ユーノとの話で男の使ったものの正体も判明した。

（魔法、か。つまり奴は魔導師という存在。ならば、あの本はジュエルシードと同じロストロギアと呼ばれるもの）

そう考え、アーチャーは一つの結論に辿り着く。それはある種の真実。それは、ある種の誤解。

（あの本を奴が監視するのは、封印を解かないように見張っているのか。なら、ジュエルシードに手を出すなと言うのは何故だ？……そうか、あれは強大な魔力の結晶。それが封印を壊しかねないという事か。奪っていかないのは、おそらく害意を持つ者が触れると反応する類のものなのだろう。とすれば、あの本に関わるなと言う言

葉も納得がいく）

だが、それはあの男の言葉を好意的に取って信じるのなら、だ。

そう自分に言い聞かせる。そんなアーチャーだったが、しかし、と呟き空を見上げる。

白い雲と青い空。時折吹く春風が心地良い。そんな麗らかな春の日差しを受け、アーチャーは思う。

（奴もどこか本気ではなかった。ならばあの男も、この平和を守ろうとしているのかもしれん）

そう考える自分に、アーチャーは笑みを一つ。

――随分と甘くなったな、私も。

そんな呟きが、車の排気音と共に空へ舞った。

「……マジか」

「はい。間違いないと思います」

とある高層マンションの最上階にある部屋。そこが現在のランサー達の拠点だった。そのリビングでランサー達はモニター越しにリニスと会話していた。

「ジュエルシードが……この近くに」

「まだその町と決まった訳ではありませんが、おそらく」

「なら、早速……」

そう言って動き出そうとするアルフを、ランサーが無言で手を出し制した。それに続こうとしたフェイトも同様だ。

ランサーは視線をリニスに向けたまま、自分に言い聞かせるように告げる。

「ダメだ。まだこの町にないって決まった訳でもねえ。海鳴って町についても、もう少し情報を集めるんだ」

（そうだ。俺はこいつらに頼りにされてる。そんな俺が慌てたら、フェイト達が余計焦っちまう）

「でも！」

「焦るんじゃねぇ。急いては事を仕損じる……この国の言葉だ。どんな時でも冷静さをなくすんじゃねえ」

どこか焦りを見せるフェイトに、ランサーは内心の焦りを押し殺し、そう言って黙らせる。それにアルフも黙らざるを得ない。

フェイトはランサーの弟子のようなもの故に。アルフは信頼し頼れる漢故に。

その絆は既に断金。かの三国志に登場する小覇王孫策と美周朗周瑜が交わした友情。それにも勝る繋がりなのだ。

「それに、いざって時は俺が熱くなっちまうからな。余計、フェイトには冷静でいてもらわね～と」

人懐っこい笑みでそう言われてしまえば、フェイトも何も言い返

せない。そのまま、ランサーがフェイトの頭を撫でれば尚の事。
それを見てリニスとアルフは笑みを浮かべる。くすぐったいと言いながらも嬉しそうなフェイトと、満面の笑顔でどうだと言わんばかりに撫で続けるランサー。
まさに兄妹と呼ぶに相応しい光景が、そこにあった。

「で、プレシアの様子はどうだい？」

「……良くはありません。緩やかではありますが、悪化しています」

フェイトがランサーとじゃれているのを横目に、アルフとリニスはそんな会話をしていた。
フェイトには、プレシアがジュエルシードを欲しがっているのは、自分の病気を治すためと伝えてある。本当は違うのだが、それもあわよくばと思っている事なので、嘘とも言い切れない。
この理由をフェイトに告げる時、プレシアは珍しく言い淀んだ。その理由を知る者はいないが、プレシアは無意識にフェイトへ本当の事を告げない事に良心が痛んでいたのだ。
だが、プレシアはそんな事に気付かないし、勿論ランサー達も知る由はない。

ただ静かにランサーの撒いた種が、ゆっくりと芽を出し始めたのだ……。

楽しい時間はあっという間に過ぎるもの。あの後、ユーノを加えた五人の話は止まる事がなかった。
ユーノは幼い頃から部族の大人達と発掘などの仕事をした事があるため、その時の話は、なのは達にとっては非常に興味深いものがあ

った。
逆にユーノはアリサやすずか、はやての話に興味を持った。大人顔負けの知識量を持つアリサとすずか。家事等の話やアーチャー仕込みのサバイバル知識。それらは知識欲旺盛なユーノには、得るものが多い話だったからだ。
そんなユーノとは対照的に、なのはは少し不満気味。自分と話をしている時より、ユーノが三人の話に夢中だったからだ。
でも、となのははユーノを見る。そのユーノの表情はとてもイキイキしていた。だから――。
（もう、今回だけだからね。……次はないよ？ユーノ君）
許す事にする。歳相応の表情をしているユーノに免じて。そして、笑顔を浮かべると、話が一段落したのを見計らって、なのははこう切り出した。
「ね、五月の連休なんだけど……」
「ゴールデンウィークがどうかした？」
「何かあるの？」
アリサとすずかの言葉に、ユーノが不思議顔。それを見てはやてが解説をする。それに補足や雑学をアリサとすずかが入れ、終わるのを待って再びなのはが語りだす。
それは遊びの誘い。毎年恒例の家族旅行。今回は泊まりを視野に入れたもの。
その誘いに喜んでと応じるアリサとすずか。はやては迷っていた

が、アーチャーが「なら、私が骨休めで行かせてもらおう」と言った途端「一人は嫌や～！」と怒りながら叫び、誘いを受けた。

もっとも、それがアーチャーなりの後押しなのは、今日のやりとりからユーノですら理解している。こうして、連休の温泉旅行は、高町家、月村家、アリサと小次郎、それにはやてとアーチャーが加わる団体旅行となる。

まだなのは達は知らない。この旅行に更なる参加者が加わる事になる事を……。

――――――

無印三話　後編

祝勝会も終わりを告げ、翠屋からぞろぞろと少年達が出て行く。
それを横目に、なのははアリサ達へ問いかけた。

「ね、この後はどうするの？」

「私はお姉ちゃんとお出かけ」

「アタシはパパとショッピング！」

「わたしは特にないけど……」

「夕飯の買い物をして、帰るとしよう」

はやての視線にアーチャーがそう答える。それに笑顔で頷くはやて。なのははユーノを見て、ユーノに念話で尋ねる。どうする、と。
別に直接聞いてもいいのだが、この和やかな雰囲気でジュエルシードの話は、場違いな気がしたからだ。

ユーノもそれは同じなのか、さして驚く事もなく、その問いかけに答えた。

【今日は完全休養に当てよう。探索範囲も大分絞れてきたし】

【いいの？　別に私は平気だよ？】

【でも、朝の魔法訓練や夜の練習なんかで疲労はしてる。士郎さんからも言われたでしょ？】

無茶は目をつぶるが、無理は許さない。なのはが魔法の訓練を始めた時、士郎はそう言った。

それは、なのはの我慢強さを考慮しての発言だった。昔からどこか自分の事を後回しにして、他者の事を優先するところがあったなのは。

だからこそ、ジュエルシードに関しても無理をどこかですると、士郎達は読んでいた。

そのため、なのは本人に強く言い聞かせたのだ。休める時に休むのも、大切な事だと。

【分かったよ。……もう、ユーノ君までお兄ちゃんみたいな事言う～】

【みんな、なのはが心配なんだよ】

そんな会話と並行して、二人はアリサ達とも会話する。マルチタスクと呼ばれる技能で、前線魔導師には必須とも言われるものの一つだ。

なのはも最初はかなり苦労したが、持ち前の才能かすぐにそれを習得してみせた。ユーノは念話相手に、セイバーは会話相手として、それぞれ苦労をかけたのだが。

「あれ……？」

念話を終えたなのはの視界に少年がいた。その手には、ジュエルシードのようなものが握られていて、それを彼はポケットに入れた。

それを見てなのはは考える。それが本当にジュエルシードなのか、と。もしかしたら見間違いかも。そんな事を思い、なのはは立ち上がった。

突然立ち上がるなのはに、不思議そうな表情を浮かべるアリサ達。

「ちょっとごめん」

そう言って、なのははその少年へ近付いた。振り向く少年に、なのはは疑問に思った事を聞く。

「菱形のキレイな石がさっき見えたんだけど、見せてもらえないかな？　友達の落し物に似てたから」

そんななのはの言葉に、少年も素直にポケットから先程のものを取り出す。それは間違いなくジュエルシードだった。なのははそれを確認して、頭を下げる。

友達の落し物に間違いない、と。だから返してもらえないかと。

そんななのはに少年は笑顔で頷き、ジュエルシードを渡す。偶然拾ったんだ、と語る少年に、なのはと事情に気付いてやってきたユーノが揃って礼を述べる。

それを照れくさそうに受ける少年。そこへマネージャーらしき少女が現れて――。

「何があったの？」

「えっと、実はね……」

少年から事情を聞き、少女は笑みを浮かべて少年を誉める。それに益々照れていく少年。なのはとユーノがまた礼を述べて……と、それを端から見ていたアリサが呟く。

「……で、いつまでアタシ達はこの寸劇を見てればいいのよ」

「あ、アリサちゃん、寸劇は酷いと思うよ。せめて……小芝居、かな？」

「何気にすずかちゃんも言うなぁ……」

そんなこんなのやりとりが、実に五分弱続いたとな。

伝える気持ち、伝わる気持ち

アリサ達と別れて、なのはとユーノは士郎と共に高町家に帰宅。と言っても、士郎は少し休んでまた出勤なのだが。

一緒に風呂に入るかとの士郎の誘いを断り、なのははお昼寝タイムとばかりに部屋へ。ユーノが代わりにそれを受け、男二人のまったりタイム。

ちなみに、セイバーはそのまま仕事中。サッカーチームの少年達との会話で、やる気十分だった。

「なぁユーノ君」

「はい？」

士郎の背中を洗いながら、ユーノは首を傾げた。力加減は良いはずだ。何せ、もうこれで士郎の背中を流すのも五回目だ。

何を聞かれるのだろう、とユーノが思っていると、士郎は静かにこう言った。

「良かったら、うちの子にならないか？」

それは真剣な声。でも、どこか優しく穏やかな声。何でもないように告げられた言葉に、ユーノは手が止まった。その言葉自体は、何度か言われた事はある。桃子や美由希がよく冗談めかして言うのだ。

でも、こんな風に真面目に言われた事はない。それが意味する事がユーノに理解出来た時、その目から何かが溢れそうになった。

「別に、養子になれって訳じゃない。ようは気持ちの問題さ。どこか他人行儀が抜けないからな」

「そ、それは……お世話になってる居候ですし」

「俺はな、ユーノ君。初めて君の身の上を聞いた時、思った事がある」

士郎の言葉に、ユーノは黙る。それは、続きを促す沈黙。真剣に聞き入るという証。それを感じ取り、士郎は軽く笑い「ま、まずは風呂に浸かろう」とユーノを促す。

「……どうして君となのはが出会ったのかって考えた時な。それは、俺達夫婦に神様がくれた贈り物なんじゃないかって思ったんだ」

「贈り物、ですか？」

「ああ。恭也は色々あって、普通とは言い難い子供時代を過ごさせてしまった。それで男の子が欲しかったんだが、俺も母さんもなのはで手一杯になってな……」

そう言って、士郎は息を吐く。そして、ユーノの方へ視線を向け、笑って告げた。

「だから、俺は君を息子として接したい。普通の子供でいさせてやりたい。そう思ったんだ」

「士郎さん……」

その言葉に感激して瞳を潤ませるユーノ。それに士郎は笑って返す。

――父さん、でもいいからな。

――はい、し……父さん。

そう言って、ユーノは顔を伏せてしまう。照れと恥ずかしさと色々な感情が混ざり合ったのだろう。それを優しく微笑み、頭に手を置く士郎。

後にユーノは語る。自分を救ってくれたのはスクライア一族だが、自分を『子供』にしてくれたのは高町家だった、と。

そんな会話が風呂場で行われている時、なのははベッドに横になり、ぼんやりとある事を考えていた。

それはユーノが話してくれた襲撃者の事。それも、自分と同い年ぐらいの少女の事だった。自分がひょんな事から集める事になったジュエルシード。それを狙い、ユーノの前に現れたという『犯罪者』だが、ユーノの話ではそういう人間には見えなかったとの事。

「フェイトちゃんって名前なんだよね」

あの出会った日の夜、ユーノが話した内容は、セイバーを驚かせた。ランサーと言う名を聞いた時、セイバーが慌ててライダー達に召集をかけたぐらいだ。

だが、ユーノの話と状況から、セイバー達は一つの結論を導き出した。

それは、事情を聞きだし、何故ジュエルシードを求めるかを把握する事。ランサーがジュエルシードの本質を見抜いているのは、ユーノとのやりとりで察している。だからこそ、何故聖杯に望むものがないランサーが、それに類似するものを必要とするのか。

それを確認してから対処を決める、という事でセイバー達の意見は纏まったのだ。

「……ジュエルシード、何で必要とするんだろ？」

自分と同じぐらいの少女。それが何故ジュエルシードという危険なものを欲しがるのか。

もし可能なら、それを聞いて手伝える事なら手伝いたいとなのは は思う。それは、ランサーというセイバーと似た存在がいるから。きっと、その少女も自分と同じく寂しさを感じていたのだろうと思ったから。だから、出来る事なら友達になりたい、となのは は思う。

少女達がジュエルシードを集める本当の意味をなのはが知るのは、その少女と出会って二週間程の時間が必要となる。

「でも、あれね。ユーノって意外と博学よね」

「そうだね。遺跡発掘とかなんてちょっとロマンチックだよ」

「そんな話をしたのですか？」

二人の話に、ライダーが不思議そうに尋ねた。二人の迎え兼護衛として彼女はいた。小次郎は現在、月村邸で庭仕事の真っ最中だろう。

そして、ライダーもユーノと既に顔は合わせている。それ故、ユーノがどのような人間かは知っているが、どういう事をしてきたかまでは知らなかった。

「うん。面白い話が聞けたよ」

「ま、まだ話のストックはありそうだし、今度にでも聞き出してやらなきゃ」

楽しそうに笑うアリサに、すずかとライダーも笑みを浮かべる。

そんな中で、ライダーは思う。

（彼の話ですか……もう少し詳しく聞く必要があるかもしれません。魔法世界の話は、私達の受肉の理由解明の手掛かりになるかも……）

そんな事を考えるライダーの前を歩きながら、アリサとすずかはバイオリンの話を始めるのだった……。

「みーちゃん、ご飯食べたやろか」

「心配ない。今まで一度でも残した事があったか？」

「ないなぁ。あの子、ほんま不思議な子やな」

みーちゃん。それは八神家に毎日顔を出すメス猫の名前である。はやてが単純な方が覚えやすいと付けた。ちなみに初めてそう呼んだ時、みーちゃんは驚いたような反応を示し、はやてを驚かせた。

今はすっかり大人しくなり、はやてもよく遊んでいる。首輪は付けてない。

「そうだな。何せ、首輪を付けるかという話の翌日には首輪をしていたからな」

「みーちゃん、実は飼い猫なんやけど、毎回こっそり首輪外してたんちゃうか？て思たもん」

「それかこちらの言葉を理解し、飼い主に首輪を付けてもらったのかもしれん」

冗談で言っているが、アーチャーの言葉は正しいのだ。それがどういう事かまでは、さすがに知り得る事はなかったが。

そんな事を話しながら、二人は笑う。いつものスーパーへ着き、買い物カゴをはやてが抱える。

入口のチラシを改めて確認し、アーチャーが動き出す。

果物や野菜を目利きし、カゴに入れていく。それを見て、はやても目利きの勉強。

たまにアーチャーから出される目利きクイズに、はやてが頭を捻るのもいつもの事。最近は目利きも上達し、アーチャーの出題もかなりシビアなものになっている。

今回の鰆も、本当に些細な差で見極めなければならない問題で、はやては何とか正解をもぎ取った。

「む、出来るようになったな」

「どや？わたしも大したもんやろ」

既に一般的な小学生レベルを遥かに超え、はやての家事スキルは大人顔負けになりつつある。だが、はやての目指すアーチャーや桃子はかなりの高み故、未だにはやては自分が未熟と考えている。

「では、そんなはやてに今日の夕食を任せよう」

「お～、それはええな。なら、助手のアーチャー君に献立は決めてもらおか」

「そのまま作るはめになるので謹んで断る。昼食は焼きそばでいいか？」

「あ、目玉焼き乗せてな」

打てば響くような会話が出来て、軽口を言い合える相手。そして、一緒にいて心地良い人。

それがはやてのアーチャーへの評価。こんな他愛もないやりとりが、はやてにとっては何よりも大切な時間。

「ぬ、レジが混んでいるな」

「そやな～。どこも並んどる」

混雑しているレジ。今日は休日。本来ならばアーチャー一人なのだが、はやてが今日は一緒に行きたいと言ったため、こうして買い

物をしにきたのだが……。

「邪魔になっとるかな？」

「気にするな。喋るカートと思えばいい」

アーチャーの発言にはやてのパンチが炸裂。それを笑みと共に受け止めるアーチャー。そんな光景を、周囲は微笑ましく見つめていた……。

「艦長、話と言うのは？」

「貴方も聞いたでしょ？　原因不明の次元震」

「ああ、あのロストロギアの輸送船が巻き込まれた事件ですね」

黒髪の少年の言葉に、艦長と呼ばれた女性が頷く。

「その事件、アースラが担当になったから」

「何故です？　既に調査は始まっているのでは」

少年の言葉に、女性は首を横に振り、告げる。

「それがまだなの。管理外世界に近いせいで、動きが遅くてね」

ややウンザリするように、女性は顔に手を当てる。それに、少年も同意するようにため息一つ。

「とにかく、出発は未定ですが、現場での判断は全て貴方に任せます。分かったわね、クロノ」

「了解しました。……というか、いきなり雰囲気を変えないでください母さん」

時空管理局。その存在が、静かに動き出そうとしていた……。

――――――

無印四話　前編

海鳴市を一望出来る高台。早朝という事もあり、そこには人気がなかった。ただなのはとユーノ、セイバーを除いては。
そこに立つのは、バリアジャケット姿のなのは。それを見守るようにユーノとセイバーが見つめる。

「じゃ、なのは」

「うん。レイジングハート」

”フライヤー・フィン”

魔力で出来た羽がなのはの体を空に飛ばす。飛行魔法。それは、なのはの才能を信じたユーノが薦めたものの一つ。
その読み通り、なのはは見事にそれを物にし、今や飛ぶ事になのはは何の不安もなかった。飛行時特有の浮遊感に笑みを浮かべつつ、なのはは意識を次の事へ移す。体の動きを制御しつつ、なのはは次の魔法を準備。

「いくよ、レイジングハート！」

”はい、なのは”

なのはの声にレイジングハートが答え、それになのはは笑顔を浮かべる。本来ならば、レイジングハートは、なのはをマスターと呼ぶ。しかし、それを良く思わないなのはは、何度も言ってそれを変えさせたのだ。
なのは、と。マスターではなく、名前で呼んで欲しいと。主従で

はなく、助け合う友人として。そんななのはの言葉に、セイバーが出会った夜を思い出したのは、言うまでもない。

”フラッシュ・ムーブ”

レイジングハートが発動させた魔法は、厳密に言えば高速移動魔法なのだろう。

しかし、なのはが目指したものは、御神の奥義である『神速』だ。昔から出来たらいいな、と思っていた技。それを魔法なら、と意気込んで考えた。

その意気込みをレイジングハートに告げ、二人で完成させた魔法。それ故に、なのははこれを『瞬間移動魔法』と呼んで、レイジングハートと共に後で喜んだ。

「なんと……」

「凄いや……やっぱりなのはは天才かも……」

今回の練習は、なのはの考案した新魔法のお披露目だった。それが危険ではないか、またちゃんと制御出来るのか。それを判断するためにセイバーがいる。だが、それ故にこの魔法が何を意図して考案されたか理解した。

だからこそ、セイバーは苦笑い。そう、セイバーは知っている。なのはが昔から羨ましそうに、神速を駆使して戦う恭也達を眺めていた事を。

（本当にシロウ殿の子ですね）

肉体ではなく、魔法でそれを実現したなのはに、セイバーはクスリと笑う。その視線の先には、満面の笑顔を浮かべるなのはの姿が

あった。

「あれ？　恭ちゃんにユーノ君……お出かけ？」

「はい。なのはと恭也さんとすずかの家に」

「ま、俺は付き添いみたいなものさ」

恭也の何となしに放った言葉に、美由希の視線が鋭くなる。
それを感じ、ユーノはそろそろと離れ出す。それを恭也は掴まえようとするが、それより早く美由希が動く。

「そんな事言って、ど～せ忍さんとイチャイチャするんでしょ～！」

「お、おい。別にイチャイチャなんて……」

「いいなぁ～、あたしも恋人欲しいな～」

ジト目の美由希。それに無言の恭也。だが、その視線が逃げたユーノへ向けられている。

（何とかしてくれっ！）

（無理ですよ！）

そんな視線のやりとり。高町家の女性は、基本怒らせると怖い。

特に桃子には、誰も頭が上がらない。
余談だが、ユーノは、女性陣から大事にされているので、未だにそんな経験無し。それをこっそり妬んでいる恭也であった。
ちなみに、恭也もユーノも知らないが、美由希は、密かに小次郎といい仲になりつつある。唯一アリサは知っているが、それをどうこう言う事はない。
未だに自分の気持ちがはっきりとしない上に、なのはの姉という事もあり、黙認しているといったところだ。
一方、当の本人である小次郎は、美由希がそういう対象として見ているなどとは知らず、今はただセイバーと同じ女剣士として、興味を抱いているに過ぎない。

「お待たせ～」

そして、救いがないと絶望しかけた恭也を助けるべく、天が助けを遣わした。出掛ける準備を終えたなのはが、リビングに姿を見せたのだ。
それに安堵するユーノ。恭也は顔にこそ出さないが、内心両手を合わせ感謝していた。美由希は、それを知ってか知らずか若干満足顔だったりする。

「よし、バスの時間も近いし、行こうか二人共」

「はい」

「うん」

急いで歩き出す恭也とユーノ。それに不思議そうな表情のなのはが続く。

（何があったんだろう？）

そんな事を考えるなのはだったが、状況も知らない彼女に答えが出せるはずもない。程なくして玄関に着き、靴を履いて歩き出す。

「いってらっしゃ～い」

出掛けるなのは達を笑って見送る美由希。それに手を振って応えるなのはとユーノ。

晴れ渡る青空。吹き抜ける春風。それを感じながら、なのはは呟く。

「……今日は良い事がありそう」

なのは達がバスに乗り込み、月村邸を目指していた頃。海鳴の町に、三人の人物がやってきた。一人は豊かな胸元を強調するような、白いタンクトップにデニムのパンツというラフな格好。

もう一人の男も同じくラフなもので、白いTシャツにジーンズ。そして、そんな二人とは正反対に、可愛らしい格好をした少女がいた。

青いブラウス、青いスカートという上下青で決めた金髪の少女。何故青で固めたのかは、それが敬愛する男のイメージカラーだろう。

「さてと、これからどうすんの？」

「ま、まずは探索魔法だったか？　あれを使って調べてくしかねぇ」

「そうだね。じゃ、どこか人目に付かない場所を探さなきゃ」

少女の言葉に二人は頷き、ゆっくりと歩き出す――が。

「あ、ハンバーガーだよフェイト～。少し早いけどお昼にしようよ」

「お、あっちはフライドチキンがあるじゃね～か。なら、こっちでサイドメニューと行こうぜ」

歩き出して早々、駅前の飲食店に持ち前の食欲を剥き出しにする二人。そんな二人へ、フェイトは慌てるように首を横に振る。

「だ、ダメだよ。まだ何もしてないし、朝ご飯食べたばかりだよ！」

そんなフェイトの説得も空しく、結局フェイトが折れる事になり、少しどころかかなり早い昼食を買って、それらを食べる場所を探す事になるのは、後の良い思い出となるのであった。

大邸宅と呼んで差し支えない月村家を前に、ユーノは立ち尽くす。それを恭也となのはが微笑みながら見つめる。

それは大抵の人間がこうなる事を分かっているからだ。それと同じリアクションをした二人だからこそ、ユーノの気持ちは良く分かる。

そんなユーノに声を掛け、二人は歩き出す。立派な玄関に辿り着き、ベルを鳴らす恭也。それを待っていたかのように、扉が開きノエルが顔を出した。

「お待ちしておりました。恭也様、なのはお嬢様。そして、ユーノ

様ですね。お名前はすずかお嬢様から伺っております」

恭しく頭を下げるノエルに、恭也となのはは笑みを浮かべる。

「久しぶりだな、ノエル」

「お久しぶりです、ノエルさん」

「ええっと……初めまして。僕、ユーノ・スクライアです」

「お初に御目にかかります。私、月村家のメイド長をしております、ノエル・K・エーアリヒカイトと申します」

唯一ノエルと初めて会うユーノだけが、その雰囲気に動揺していた。その様子にノエルは楽しげに笑うと、仰々しい程の自己紹介をした。

それに益々困るユーノに、なのはも笑みを浮かべて「気にしなくてもいいよ。ノエルさんはこういう人だから」と告げた。

それに恭也も頷き、苦笑い。その内慣れる。そう言って恭也となのはは歩き出す。既にノエルがその前を案内するように歩いているのを見て、ユーノも慌ててその後を追うのだった。

「なのは達、そろそろ来るかな？」

「うん。もう来るんじゃないかな？」

「……相変わらずすずかちゃんちは猫屋敷やな」

優雅にファリンの淹れた紅茶を飲むアリサとすずか。それぞれの膝には当然のように猫が乗っている。

かくいうはやてもその膝に猫を乗せているのだが、一匹ではなく二匹なのが違いである。それを優しく撫でながら、はやては周囲を見渡す。そこかしこに猫がいる。どれもノンビリしている光景に笑みを浮かべるはやて。

「そうだね。でも、里親が決まってる子もいるから、ね」

「あ～、お別れが近い子もおるちゅ～事か」

「ま、それでも猫天国には変わりないわ」

「ですね」

アリサの言葉にはやても頷く。すずかはそれに苦笑一つ。そして、その横のファリンが笑顔でそう同意する。

そのテーブルの横では、忍とアーチャー、それにライダーが談笑していた。まぁ、もっぱら話しているのは忍で、二人は紅茶のお代わりを注いだり、猫の相手をしながら相槌を打っているだけなのだが。

ちなみにアーチャーは、来た途端にライダーから無言で手渡された執事服を着ていたりする。

これが、月村家でアーチャーが過ごす時の決まりになったのは、今から一年と半年前。はやてのお泊り会の礼だと言って、その日の夕食をアーチャーが作った際、給仕から何まで完璧にこなす姿を見て、忍がはやてに持ちかけ着せたのが始まり。

以来、アーチャーが来るたびにこの執事服が定番になり、アーチャーの抵抗にも関わらず、忍の強権とはやての懇願（の名を借りた

半ば脅迫）により、彼はもう抗う気もなくし、今に至る。
余談だが、アーチャーは執事服を着せようと迫る忍とはやてに、かつての魔術の師である”あかいあくま”と、とある縁で知り合った名門魔術師の金髪令嬢の”きんのあくま”の姿を見たとか。
彼女達も、アーチャーに執事服をよく着せようとした。それを思い出し、懐かしくなったアーチャーは（渋々を装って）執事服を着る事にしたのだ。

「失礼します。恭也様達がお着きになられました」

「恭也～」

控えめなノックと共に開かれたドア。そこからノエルが現れ、その後ろから恭也の姿が見えた途端、忍は席を立つ。
それに息を吐くライダーとアーチャー。小声で「やっと開放されました」とか「まったくだ。私は相談員ではないぞ」などと聞こえているが、それは幸い忍には聞こえていない。

「お、おい忍」

「じゃ、私達は部屋に行ってるから」

「ふふ、では後でお茶をお持ち致します」

抱きつくように恭也に寄り掛かり、その腕に自分の腕を絡め、忍は笑顔でそう告げて歩き出す。その光景を微笑ましく思い、ノエルは笑みを浮かべて返す。
そして、それを眺めてしみじみとはやてが呟く。

「なんや、見せ付けられたな」

言葉はなかったが、なのはやアリサはうんうんと頷いた。それにすずかは苦笑い。ユーノはそんな光景を横目にアーチャー達の下へ。

そして、ノエルとファリンは一礼し、お茶の用意をするべく去った。

「こんにちは、アーチャーさん。お久しぶりです、ライダーさん」

「ああ」

「久しぶりですね。元気そうで良かったです」

ユーノとライダーが出会ったのは、セイバーが召集をかけた時。高町家道場で行われたその会議に、ユーノも同席していたからだ。

ランサーと直接対峙したユーノの話と意見から、セイバー達の結論は決まったのだから。

ちなみに、ライダーが元気そうと言ったのは、ユーノがセイバー達と鍛錬を行っているのを聞いているからだ。それをセイバーから聞いた際に「殺さないように」と真顔で告げ、いつかの戦いを再現しそうになったのは、二人だけの秘密。

「アーチャーさんははやての付き添いですか？」

「ああ。……後はファリンの指導だ」

「本当に助かっています。アーチャーが教えるようになってから、ファリンのドジも大分減りました」

アーチャーが初めて月村家で働いた日。ファリンがその動きに感動し、弟子にしてほしいと申し出たのだ。

無論、アーチャーは断ろうとしたのだが、ファリンの懇願とノエルや忍からも頼まれれば嫌とは言えなかった。
それ以来、暇を見つけてはファリンの家事の先生じみた事をしていた。と言っても、はやてが勉強をしている午前限定だが。
そんなユーノ達とは対照的に、なのは達は関心を話ではなく、猫に注いでいた。

「にゃは、ホント人懐っこい子ばかりだね」

「アタシも欲しいけど、犬がいるから」

「わたしは、毎日遊びに来るみーちゃんで十分やからな。でも、飼い猫も憧れるな～」

「もしその気なら誰か貰ってくれていいから。いつでも言って」

それぞれ膝に猫を乗せ、楽しそうに撫でたり抱えたりするなのは達。とそこへ、お茶の用意を済ませたファリンが戻ってきた。それを見ながらなのはが尋ねる。
そういえば、今日はライダーは働かないのかと。ライダーはそれに些か困った表情でこう返す。

「スズカが今日はお休みだと言うものですから……」

確かにそう言うライダーの格好は、普段のメイド服ではなく、Tシャツにジーパンというものだ。なのはとユーノはその格好に納得し、頷いた。
その横で、ファリンがアーチャー監視の下、紅茶を注いでいく。

その目はいつになく真剣だ。一つ一つの所作に全身全霊で挑むファリン。それを見ているすずか達もどこか緊張している。

やがて全てのカップに紅茶を注ぎ終わり、ファリンは小さく「よしっ」と呟いた。

「皆様、どうぞ」

笑顔で告げるファリン。それに笑みを浮かべるすずか達だったが、ライダーは苦い顔でアーチャーは渋い顔。

何かミスでもしただろうか。そんな表情のファリンに、アーチャーが告げたのは、予想の斜め上。

「もてなす相手を緊張させてどうする」

「あうっ！」

正論と言えば正論。それが理解出来たファリンはションボリと肩を落とし、ライダーの傍へ近寄って――。

「お姉様～～っ！！」

泣き付いた。いじめられた子供のように。それをライダーはどこか苦笑しながら受け止める。

「分かっていますよファリン。貴方は頑張りました」

「私、私ぃ～～」

一生懸命にやったのに。そう言ってライダーの胸に顔を埋めるファリン。それを優しく撫でるライダー。

そんな光景を微笑みながら見つめるなのは達。アーチャーはやや憮然としているが、はやてはファリンを見て「……ええなぁ」と呟いていたりする。

「ホント、平和だな」

そんな光景を見て、噛み締めるようになのはは呟くのだった。

彼女は知らない。この後、大切な親友となる少女との出会いが待っているなどとは……。

――――――

無印四話　中編

「穏やかなとこだね、ここ」

「そうだね」

アルフの言葉にフェイトは頷いて笑う。ここなら母さんも少しは良くなるかな。そんな思いがフェイトの中を一瞬過ぎる。

だが、それは出来ない。リニス曰く「絶対安静」なのだ。そう思い直し、フェイトは拳を握る。早くジュエルシードを集めて、プレシアに届けなければ。

そんな風にフェイトが考えていると――――。

「ま、早いとこジュエルシードを見つけねぇとな」

ランサーはそう言って、アクビを一つ。おかげで緊張感の欠片もない。フェイトは、握り締めていた拳から力が抜けていくのを感じた。

そう、フェイトとアルフは知っている。それがランサーなりの気遣いなのだと。無駄に力む事無く、事に当たれるようにと。

それを分かっているから、二人は笑みを浮かべて頷く。

風が吹く。微かに海の匂いを含んだ風が。それを感じ、フェイトは呟く。

「……今日は良い事がありそう」

それは奇しくもなのはが呟いたのと同じ言葉だった……。

月村家の庭にあるテーブル。そこに座り、なのは達は談笑していた。話題はもっぱら連休中の旅行についてだ。

何をするかや何を持っていくか等、止まる事なく話が弾む。会話の中心はアリサとはやて。それになのはがたまに加わり、すずかとユーノは時々訂正や抑え役になっている。

「やっぱトランプは必須でしょ！」

「いや、ここはドドーンとボードゲームや」

「ＵＮＯとかはどうかな？」

「オセロとかもいいと思うよ」

「……ごめん。卓球、っていうのはダメかな？」

――――やってみたいんだけど……。

はやての方を気遣うように見ながらユーノが言うと、一瞬なのは達が驚き、互いに顔を見合わせる。

「どう……？」とアリサが聞けば、「そやな、温泉言うたら卓球やな」とはやてが笑って言う。それに笑顔ですずかが応じ、なのはも安堵したように頷いて、何かを思い出したか苦い顔。

「私、はやてちゃんと見学でいい？　話し相手をしたいの」

「そんな心配いらへんよ。わたしも卓球やったるから」

「え……その、あ、危ないから念のために止めといた方が……」

――――いいと思うよ？

そのどこか申し訳なさそうな声に、四人が笑う。それはなのはが言った言葉の裏まで理解しているから。なのはは運動音痴。そして、はやてが一人参加出来ないと思い、乗り気でなかったのも手伝って見学を申し出たのだ。

それを四人が察していると分かり、恥ずかしそうにしながらも、なのはは拗ねた口調で「笑わなくてもいいのに……」と呟いた。

そんななのはの言葉が余計に四人の笑いを誘い、なのはが怒る。それを笑いながら宥めようとするユーノとすずか。アリサとはやては、そんななのはを指差しておかしそうに笑う。

そんな五人の様子を離れた場所から眺める者がいた。ライダーだ。彼女は、楽しそうに笑い合う五人を見て、微笑む。

（いいものですね。願わくば、こんな時間がずっと続いてくれればいいのですが……）

そう思って、ライダーは首を振る。こみ上げる不安を振り払うように。

あの日、ユーノからジュエルシードの話を聞いた時、ライダーもセイバーと同じ発想に辿り着いた。

即ち、自分達の受肉したのは、世界がジュエルシード暴走に備えたものなのではないのか、という結論に。

無論、そうと決まった訳ではないが、ライダーはこの話をセイバー達が聞いた時、全員が同じような事を考えたのが分かった。
だからこそ、ジュエルシードを一刻も早く回収しなければ、との思いが強かったのだが、一つ気がかりがあった。
それはすずかの事だった。最近あまり遊んでいない事もあり、今日は休みと言われたので、すずかと接するべきかと思い、ここに残っていたのだが……。

（あの様子なら構わないかもしれません）

ライダーの視線の先には、なのはに謝っているすずか達の姿があった。その賑やかな雰囲気を確認し、ライダーは静かにその場を離れる。

「行ってきます、スズカ」

誰ともなく呟き、ライダーはその身を宙へ躍らせる。探索に出かけ、ジュエルシードを見つけるために。一刻も早くすずか達が平穏な日常を過ごせるようにと、願いながら。

同じ頃、厨房にはアーチャーに指導されるファリンの姿があった。

「変に力むな。肩の力を抜け」

「は、はい」

優しくファリンに声をかけるアーチャーだが、ファリンはどこか

緊張している。それを内心微笑ましく思いながらも、アーチャーはため息一つ。
仕方ないか。そう言うようにファリンの背後に立ち、その手を優しく支える。

「あっ……」

「いいか？　下手な力はいらん。ただ、心を込めて注げばいい」

「……はい……」

「君は張り切りすぎるきらいがあるからな。少し気を抜くぐらいで丁度良い」

そう告げ、アーチャーはそっとファリンから離れる。その瞬間、ファリンが名残惜しそうな声を漏らしたが、生憎アーチャーにそれは聞こえていない。
どこかボ～っとするファリンに気付かず、アーチャーは思う。

（……もしかしたら、凛のうっかりも変な力の入れようが原因かもしれん）

そう考え、そんな事はないかとアーチャーは微かに笑う。例えそうだとしても、もうおそらく会う事はない相手だ。
ならば、こんな事を考えても仕方ない。そう思い、アーチャーはファリンへ視線を戻して言い放つ。

「さて、ではもう一度だ。ファリン、紅茶の支度は十分か？」

時同じくして、ここ忍の部屋では、恭也達が優雅に紅茶を飲みながら、外の声に笑みを浮かべていた。

「外は賑やかみたいね」

「そうだな」

「すずかお嬢様も、ご友人が増えて楽しそうで何よりです」

忍の言葉に恭也とノエルも笑顔で答える。ただノエルだけは、それに続けるように「些か元気過ぎる時もありますが」と告げた。

それに忍は微笑みながら頷く。昔はどこか内向的だったすずかだったが、なのは達と友達になってからというもの、見違える程に外に出るようになった。

特にはやてと仲良くなってからは、彼女の家に良く遊びに行くようにもなった。歩ける事が幸せな事だと、はやてと接して十分理解させられた。

そう言ってすずかは、はやての分まで歩こうというくらい活動的になったのだ。

「しかし、ユーノの奴も大変だな。すずかちゃんはともかく、アリサちゃんやはやてちゃんはパワフルだからな」

「そうね。でも、それぐらいどうにかできないと恭也には勝てないわよ」

「……怒った母さんを止められるなら、俺は負けを認めてもいいな」

「桃子様が怒る事などあるのですか？」

ノエルの問いに、恭也と忍は無言で頷く。心なしかその顔は青い。
恭也は語る。桃子の数少ない怒り話を。それを不思議そうに聞くノエル。忍は恭也の横で若干震えていたりする。
それは去年のクリスマス。忍も手伝い、翠屋は大忙しだった。事件の内容を簡単に言えばこう言う事だ。

「酔っ払いがやってきてな。そいつがセイバーに絡んだ。セイバーは何とか穏便に済ませようとしていたんだが……」

「その男が、事もあろうにセイバーを突き飛ばしたのよ。恭也も士郎さんも運悪く接客中だったもんだったから」

「それを見ていた母さんが、黙ってその酔っ払いの前に、満面の笑顔で立ちはだかって、こう言ったんだ……」

「「私の娘に何て事してくれるんですか。早く出て行ってもらえないと、大変な事になりますよ……って」」

声を揃えて二人は言うと、何かを思い出したのか、また少し震えた。

「……警察を呼ぶ、ではないところに恐怖を感じますね」

ノエルの呟きに、二人は何も言わず、ただただ頷くだけだった……。

「ほらほら、ここがいいの？」

「おっと……ごめん、嫌だった？」

盛り上がっていた話も落ち着き、五人はそれぞれ猫を相手に過ごしていた。

ユーノも恐る恐るだが、猫相手の世話のやり方を覚えていった。時々なのはやすずかから助言を貰い、ぎこちなくだが猫を触っている。

「はぁ～、癒されるな」

「ふふっ、そう言ってくれると嬉しいな」

「にゃ、どこ行くの？」

まったりと寛ぐはやてにすずかが笑顔で答えた横で、なのはの抱えてた猫が突然逃げ出すように走り出したのだ。

それを追いかけるように、なのはも走り出す。微笑ましい光景に、四人も笑みを浮かべ合う。

「なのは、僕もついてくよ」

「丁度いいし、軽く動きましょ」

「賛成や。少しは自然と触れ合わんと」

「じゃあ、私が車椅子押してくね」

単純に好意からなのはの心配をしたユーノに続くように、アリサが立ち上がる。それに呼応してはやてが頷くと、すずかも楽しそう

に立ち上がった。
四人は先を走るなのはを追う形で、その後ろを歩き出す。その視線の先では、なのはが転びそうになっていた。

「っ！？」

「フェイト！」

突然ジュエルシードの反応がフェイトを襲う。精神リンクしているアルフもそれを感じ取ったようで、フェイトを見つめている。

「ジュエルシードか」

ランサーの声に無言で頷くフェイト。それにランサーは目つきを鋭いものへと変える。
アルフも既に先程までのノンビリムードではなく、獰猛な表情をしていた。そんな二人の変化に、フェイトも表情を厳しいものに変え、視線を動かす。
見つめる先は、反応のある場所。周囲に人がいない事を確認し、フェイトは呟く。

「バルディッシュ、セットアップ」

”イェッサー”

黒いバリアジャケットに身を包み、フェイトは空を翔ける。それに続くようにアルフも舞い上がる。ランサーは最速のサーヴァントたる速度で、そんな二人を追う。程なくして視線の先に、大きな屋

敷が見えてくる。

（待ってて母さん。すぐにジュエルシードを集めて帰るから！）

その頃、なのは達は目の前の状況に戸惑っていた。ジュエルシードが発動したのを感知し、急いでセイバーへ連絡したのだが、その直後目の前に現れたのは、事もあろうに巨大な猫だったからだ。

「……ねぇ、これがジュエルシードって奴の影響なの？」

「う、うん。どうもあの猫の大きくなりたいって願いに反応したみたい」

呆れるようなアリサの言葉に、ユーノはどこかバツが悪そうに答えた。その後ろでは、はやてとすずかが猫を見上げている。

「お～、これだけ大きいと餌とか大変や」

「そうだね。後、遊び相手はライダーじゃないと無理そう」

「そ、そんな事言ってる場合じゃないよ、二人共」

ノンキに話すはやてとすずかに若干脱力しかかるなのはだが、視線をすぐに猫へと戻す。猫はなのは達を見て、楽しそうに鳴き声を上げるだけで、まったく危害を加える様子はなかった。

（でも、このままっていう訳にもいかないよね）

なのはがレイジングハートを握り締めたその瞬間、ユーノが結界を展開した。色褪せていく景色に、アリサ達が軽い驚きを見せる。

「なのは、これでいいから。早く封印を」

「うん。レイジングハート」

”スタンバイレディ。セットアップ”

光に包まれ、一瞬にして姿を変えたなのはに、ユーノを除く三人が歓声を上げる。そして、なのはが早速封印をしようとした時、後ろから何かが近付いてくる感じがした。

それが無性に気になったなのはが振り返ると、その視線の先には――。

「魔導師……」

「何だ？　あの時の小僧も一緒かよ」

「げ、何か大勢いるよ」

三人の人物がいた。その中の一人に、なのはは強く心奪われる。黒いバリアジャケット、金色の髪、そして……どこか助けを求める瞳に。

一方のフェイトも、なのはの姿に何か心惹かれるものを感じていた。

自分とは正反対の白いバリアジャケット、栗色の髪、そして……どこか優しげな瞳に。

「「貴方は……誰？」」

出会いは突然に。この日、なのは達はフェイト達と対面した。

それが、この世界そのものの運命を変える出会いだったとは、この時誰も知るはずがなかった……。

――――――

無印四話　後編

「「貴方は……誰？」」

そんな互いの問いかけに、二人は目を丸くする。まったく同じ言葉を、同じ様に聞かれたのだ。それで驚いたのは、なのはとフェイトだけではない。ランサー達やユーノ達も面食らっていた。

（初対面の相手に、警戒心もなしに、かよ）

（初めて会った時より、少し表情が柔らかい……？　でもどうして……）

戸惑う一同を、猫の声が現実に引き戻す。それになのはとフェイトも視線をそちらへ移し、それぞれデバイスを構える。

「とりあえず……」

「今は封印が先、だね」

頷き合うように声を掛け、二人は告げる。

「レイジングハート」

”シーリングモード”

「バルディッシュ」

”シーリングフォーム”

その声に応じ、形を変えるレイジングハートとバルディッシュ。
それを見て感嘆の声を上げるはやて達。
一方、警戒するようにランサーとアルフはなのはから視線を外さない。ユーノもフェイトから目を逸らす事無く見つめる。
その視線の先で、二人による封印が終わろうとしていた。

「リリカル・マジカル！」

「ジュエルシード、シリアル１４！」

”” 封印””

光がリボンのように猫を包み、雷がその周囲を覆う。
そして、それが共に消えた時、そこには元の大きさに戻った猫とジュエルシードが残されていた。
それを確認するや、フェイトが弾かれるようにそこへ向かい、ジュエルシードを回収する。

「これで、やっと一つ」

嬉しそうに呟くフェイト。だが、それを見てユーノが叫ぶ。

「どうして君達はジュエルシードを必要とするっ！　それがどんなものか知ってるんだろ？！」

「それは……」

「ランサーさん！　貴方はアレの危険性を知っているはずだ！　なのに何故？！」

気まずそうに顔を伏せるフェイト。いくら母親のためとはいえ、人の物を盗もうとしている。そんな罪悪感が彼女の口を塞いでしまう。

それを見て、ユーノの矛先はランサーへと移る。それは、セイバー達から聞いた彼の話も影響している。

根は優しく正義感溢れる漢。そうセイバーが断言した。故に、その彼なら答えてくれるとユーノは思った。

「そうだよ！　理由を聞かせて！　どうしてジュエルシードが欲しいの？！」

ユーノに加勢するようになのはも叫ぶ。彼女もまたユーノを信じている。その彼がそうまで言うなら、きっとそうだ。それに……。

（あの子。確かフェイトちゃん、だよね。すごくキレイな目をしてた）

悪人の目は、どこか濁りがある。そうセイバーや士郎は言った。ならば、彼女はそうではない。必ず理由があるはずだ。

そうなのはは思うからこそ、問い質す。何故犯罪に手を染めてまで、ジュエルシードを求めるのかを。

「そうですね。それは私も是非聞かせてほしいです」

「っ！？」

「「「「「セイバー（さん）！」」」」」

何か躊躇う素振りを見せるランサーの背後から現れたのは、完全

武装のセイバーだった。
その出現に驚きを隠せないランサー。それとは対照的に、喜びを見せるなのは達。
フェイトとアルフは、セイバーの姿や雰囲気からどこかランサーに近いものを感じ、ランサーの傍へと駆け寄るのだった。

結びつく運命と希望の光明

セイバーを先頭に、集合するなのは達。片やランサーを前に立て、なのは達を見つめるフェイト達。アリサとアルフが睨み合おうとするが、すずかとフェイトに窘められ、渋々従っている。

「……まさかお前がいるとはな」

「私だけではありません。ライダーにアーチャー、アサシンもいます」

「なっ……本当か？」

「嘘ではありません」

セイバーの言葉に、ランサーは一縷の希望を見出し始めた。凛達魔術師はいないが、セイバー達サーヴァントがいるなら、まだ手はあるかもしれないと。
だが、そこでランサーは疑問に思った事があった。セイバーの挙げた名前の数である。

「おい、キャスターはいないのか」

「……ええ。未だに彼女とバーサーカーは確認出来ていません」

もしかしたら、ここではない場所にいるかも知れない。そんなセイバーの声を聞きながら、ランサーは内心舌打ちする。

キャスターがいれば、問題はほぼ解決したようなものだったからだ。再び希望を絶たれた形になったランサーだったが、それでも彼は諦めなかった。

「なら、もしかすりゃどこかにいるかも知れないって事か」

「……断言出来ませんが、可能性はあります」

セイバーの言葉に、ランサーは頷き、深い意味はなかったのだが、ふとなのはへ視線を移す。それに気がついたのか、なのはは若干驚いた表情を見せると、戸惑いながらも笑みを返した。

今度はそれにランサーが驚きを感じ、小さく笑みを浮かべる。

（へぇ、結構将来有望そうじゃね～か）

（な、何だろう？　何か変な事したかな？）

そんな風に互いを見ているなのはとランサーだったが、そのランサーの視線を快く思わないのか、セイバーがやや大きめの声で問いかけた。

「それで、何故貴方がジュエルシードを集めるのです」

「……ま、簡単に言えばこいつのためだ」

そう答え、ランサーがフェイトの頭に手を置く。それになのは達の視線が、一斉にフェイトへ向けられる。
それに若干の恥ずかしさを感じ、フェイトは顔を伏せた。そんなフェイトの様子に、笑みを浮かべるなのは達。

セイバーはそんなフェイトを眺め、内心頷く。想像していた通り、ランサーの目的が自分のためではなく、他者のためだった事に。
そして、その相手も見たところ悪人と言う訳ではなさそうだ、と。
だからこそ、余計に聞かねばならない。

「では、ジュエルシードを何に使うつもりです」

「あ～、それは「母さんが病気なんです！　それを治すには、もうジュエルシードしかなくって……」

ランサーの言葉を遮ってフェイトが叫ぶ。それに込められた思いが、嘘偽りない本物だと、セイバー達には感じられた。何故なら、そう叫んだフェイトの表情は、深刻且つ焦燥感が色濃く見えたのだ。
それに間違いはないか。ランサーに、そう問いかけるような視線を送るセイバー。それをどこかバツが悪そうにだが、ランサーは頷く。
そんなランサーの態度にセイバーは何かを感じ取るが、それを敢えて聞かずに告げる。

「……いいでしょう。信じる事にします」

「セイバー、マジで言ってんのか……？」

「ユーノ、どうですか？　何とかならないでしょうか」

そんなランサーの声に対して、セイバーは鎧を消し、戦う意思はないとばかりに視線をユーノへと向ける。それにユーノはどこか考えながら告げた。

「病気って事なら……おそらくだけど、暴走の危険性もないと思う。健康な状態に戻りたいって事だから」

「まぁ、確かにそれで暴れる事はないかもしれないけど……」

「健康にってお願いして暴れ出したら、本末転倒よね」

そうアリサがすずかの言葉に続き、はやてとなのはが頷く。

「でも、あくまで推測に過ぎないし、ジュエルシードでどこまで効果があるかは分からない。それに、万が一って事もあると思う」

「そうですか。……ユーノ、では？」

「元々封印して保管するつもりだったけど、人助けみたいだし、ね。……それに、おそらく不治の病なんだと思う。それなら、確かにジュエルシードみたいな危険なものにでも縋りたくなるよ」

ユーノはそう言って、笑みを見せてなのはへ視線を向ける。それを理解し、なのはも笑って頷き、レイジングハートに告げた。

「レイジングハート、ジュエルシード出して」

”いいのですか？”

「うん。困ってる人を助ける力があるなら、迷う事無く使いなさい、

だよ」

”分かりました。なのはがそう言うなら”

そうして放出されるジュエルシード。その数、六つ。それをなのはとユーノがそれぞれ手に取り、フェイトの方へ歩き出す。

それを呆然と見つめるフェイトとアルフ。ランサーは、なのはを見つめて「セイバーのマスターは、今回もお人好しか」と懐かしむように呟いている。

「えっ……？」

「本当ならダメだけど、これで助かる命があるなら。でも、暴走の可能性がない訳じゃない。だから、使う時は言って。力になるから」

「私もだよ。それと……お母さん、治るといいね」

戸惑うフェイトに、微笑んでジュエルシードを手渡すなのはとユーノ。それを受け取り、フェイトは少し呆然とそれを見つめるが、ハッとなって顔を上げて二人を見つめる。

「あ、ありがとう！　本当に、本当に……」

そう言いながら、フェイトの視界が滲み出す。初めて感じる他者の優しさ。悪い事をした自分に、目の前の人達はただ怒るのではなく、理由を知って許してくれた。

それだけではない。助ける約束までしてくれた。危険だから力になる、と。

「あんた達、ホントにありがとよ～！」

「にゃ！？」

「ちょ、ちょっと！？」

泣き出したフェイトに笑みを浮かべていた二人だったが、それをアルフが後ろから抱きしめる。

その目には光るものがあった。それを見て、微笑むセイバー。ランサーはといえば、未だに泣き続けるフェイトへと視線を向けていた。

そこには、フェイトへ駆け寄りハンカチを差し出すすずかと、同じように近付き、励ましの言葉を掛けるアリサとはやての姿がある。

（……これで、少しは望みが持てる、か）

ジュエルシードは全部で２１もある。セイバー達が協力してくれるなら、心配していた探索時間も短縮できる上に、懸念しているプレシアの事とアリシアの事も何とかなるかもしれない。

そうランサーは考え、視線を再びセイバーへと移す。

「アレがヤバイもんだってのは、重々承知してる。だがよ」

「分かっています。封印出来る人間が増えたのですから、分担して発見に当たりましょう」

「……迷いがねぇな」

「当然です。私達は、なのは達の笑顔を守るために動いているのですから」

――だから、そちらの事情は詳しくは聞きません。話したくなったら話してください。

（私も、未だ話していないのに、それを貴方に強要出来る程、私は恥知らずではない）

そう考えて放たれたセイバーの言葉に、ランサーは一瞬言葉を失う。セイバーは見抜いているのだ。ランサーがまだ何か隠している事を。

だからこそ、セイバーは敢えて聞かない。ランサーの性格を知っているが故に。いつか本当の目的を自分達に告げると信じて。

それを分からぬランサーではない。だから、と自分に言い聞かせる。

それを話すのは、今ではないと。それはジュエルシードが全て集まった時だ。故に、ランサーは本来言いたい事ではない言葉を掛ける。それにありったけの想いを込めて。

「すまねぇな」

「構いません。それより、行きましょう。ライダーやアーチャーも交え、色々と話し合いたい事もあります」

「あいつもここにいるのかよ。……あまり気は進まねぇが、しゃ～ないか」

セイバーの提案に、ランサーがぼやきながら後を追う。それに呼応し、なのは達も歩き出す。フェイトはすずかにハンカチのお礼を言って、尚且つなのはとユーノに改めて礼を述べた。

アルフは、アリサから耳と尾について聞かれて平然と「狼だから」と答えている。

それを聞いて驚きながら、はやてはこの後の事を予想して笑い、その近くを先ほどの猫が、何事もなかったかのように鳴きながら通ってゆく。

それに微笑ましいものを感じ、笑みを浮かべるなのは達。すると、なのはが何かを思い出したようにその足を止める。

「えっと……。私、高町なのは。貴方の名前を聞かせて欲しいな」

「え……？　あ、うん。フェイト、フェイト・テスタロッサ」

「じゃあ僕も。ユーノ・スクライアって言うんだ」

「アタシはアリサ。アリサ・バニングスよ」

「私は月村すずか。すずかでいいから」

「わたしは八神はやてや。はやてって呼んでな」

「え？　え？　そ、そんなに一遍に言われても……」

覚えられないよ。そう言って困るフェイトに、五人が笑う。それにフェイトが照れて、俯いてしまう。

それを見て、余計笑みを浮かべるなのは達。可愛いと誰かが言えば、そんなに照れなくてもと誰かが笑う。そんな少女達を見ながら、アルフは思う。

（フェイトがあんな顔するの初めて見るよ。……にしてもこれ、ランサーがいなけりゃどうなってたのかね？）

そう考えて、アルフは笑う。バカバカしい、と。ランサーがいなかったら、そんな事考えられないと自分に言い聞かせて。

心から嬉しそうに微笑むアルフの視線の先には、戸惑いながらも笑顔を浮かべるフェイトの姿があった……。

――――――

無印四話　おまけ

あの後、セイバーとランサーはなのは達と別れ、すずかに断りを入れて、厨房でファリンとお茶をしていたアーチャーを連れ出し、共に一室を借りて、話し合いを始めた。

生憎ライダーは出掛けてしまったらしく、ファリンの話では、おそらく昼には戻ってくるとの事だったので、先に互いの情報と状況、そしてジュエルシード収集の目的を伝え合ったのだが……。

「で、ジュエルシードをその母親の治療に使いたいと？」

「……ああ」

アーチャーの言葉に、ランサーの表情が曇る。それを見て、アーチャーもセイバー同様に、ランサーが何か隠している事を悟った。

だが、それを尋ねる前に、アーチャーは確かめなければならない事があった。

「……色々と言いたい事があるが、その前にランサー、君に聞きたい事がある」

「何だ……」

「霊体化出来るか」

「はっ、んなもの聞く「なら、やってみせろ」……何だってんだ、一体」

どこか喧嘩を売るような物言いに、怒りを見せるランサーだった

が、アーチャーの表情に何かを感じ、早速霊体化しようとして……。

「……ん……だと……？」

出来なかった。それを把握し、セイバーとアーチャーから「やはり……」と言う呟きが漏れる。

戸惑うランサーに、アーチャーが語った。自分も含め、確認されたサーヴァントは全員受肉している事を。

そして、まだ確定した訳ではないが、その原因にジュエルシードが関わっているのではないか。そう考えている事を。

それを聞き、ランサーも納得した。何故自分がフェイトに呼び出されたのか、その理由が分からなかったが、それならば理解出来ると。

そして、セイバーとアーチャーの告げた、なのはやはやてとの出会いもランサーには人事ではなかった。

どこかで孤独に怯える少女。それはフェイトにも当てはまったからだ。確かにアルフやリニスはいた。だが、フェイトが一番相手にして欲しかったのは、プレシアだった。

それを良く知るランサーだから、フェイトが孤独に怯えていたと断言出来る。それだからこそ、ここまで足掻いているのだ。

「……で、君の本当の狙いは何だ」

「……今はまだ言えねぇ」

「アーチャー、待ちましょう。ランサーは騙し討ちや偽る事は出来ない人です。少なくとも、口にした事は本当の事だと思います」

セイバーの言葉に、アーチャーはどこか突き放したように返した。

「だが、アレは聖杯よりも厄介な代物だ。それを本当に治療に使うなら、全部集める必要はない」

「何が言いたい……」

「本当は治療などと言う目的ではないのだろう。……何か”奇跡”でも狙っているのかね？」

その言葉にランサーの表情が真剣なものに変わる。それを感じ取り、アーチャーも表情を変える。

室内に流れ出す険悪な雰囲気。一触即発。そんな言葉がピッタリの状況に、セイバーは大きく息を吐いた。

「何をしようと勝手ですが、ここはスズカ達の家です。戦うなら外でどうぞ。それと、貴方達が争うのを見て、ハヤテやフェイトがどう思いますか？」

「「……ちっ」」

揃って舌打ちするアーチャーとランサー。それをヤレヤレと思って見つめるセイバー。こうして、いつかの戦いが再現される事はなくなったが、二人は改めて思う。

こいつとは、相容れない、と。

英霊達の輪、少女達の輪

一方、そんなセイバー達とは離れたすずかの部屋では、なのは達

少女五人が楽しげに会話していた。
ユーノは、アルフと共に忍の部屋へ事情を説明しに行った。それと、なのは達少女組を邪魔したくなかったというのもある。

「それで、ランサーと出会ったの」

「……ホントに似てるね」

「うん。私も突然ライダーが現れたから」

「アタシもそう。急に出てきて、驚いたの何のって」

「わたしもそやね。気が付いたらおったわ」

フェイトの語ったランサーとの出会いに、なのは達は納得顔。何しろ、多少の違いこそあれ、大筋が同じなのだ。
何の前触れもなく現れ、自分を守り助けてくれる存在。そして、今では家族と呼んでもいい程の仲。それが、五人に共通する感覚。故に、話し出すと止まらない。

フェイトの話をキッカケに、なのはが、すずかが、アリサが、はやてが、それぞれサーヴァント達との出会いを話していく。それを聞きながら、フェイトは驚き、感動し、頷き、笑った。
すずかとアリサだけは、話が話だけにありのままとはいかなかったが、それでもフェイトは食い入るように聞いていた。

「……皆、同じだね」

それを聞き終え、フェイトが噛み締めるように小さく言った。

「うん。だから、友達になれたのかも」

「そうだね。確かにそれも一つの要因かな」

なのはの言葉に笑顔で答えるすずか。それを見て、フェイトが羨ましそうに呟いた。

――――いいな。

それを聞いて、みんなが笑う。そんななのは達の反応に、どうして笑っているのか分からないといった顔で、フェイトがうろたえる。

そんなフェイトに、なのはが全員を代表して優しく告げる。

「フェイトちゃんも友達だよ？」

「……え？」

「そうだね。嫌じゃなければ、だけど」

「い、嫌なんて……」

「なら、いいじゃない。仲良くしましょ、フェイト」

「で、でも……」

「なんや？　フェイトちゃんはわたしらの事嫌いか？」

「そ、そんな事っ……」

ない。そうフェイトは言った。強くはない。でも確かにはっきり

とそう言い切った。それに四人は顔を見合わせ、笑って頷いてこう言った。

「「「「これからよろしく！　フェイト（ちゃん）っ！！」」」」

「う……うん！　よろしく、なのは、アリサ、すずか、はやてっ！！」

喜びを噛み締めるように、流れる涙を拭う事もせず、フェイトは笑顔を浮かべる。その笑顔は、これまでにない程の輝いたものだった。

その頃、高町家では……。

「やっぱ、小次郎さんは強いですねぇ」

「何の、美由希殿も中々のものよ」

道場に座って、汗を拭きながら語り合う二人。そう、美由希が一人留守番したのは、小次郎が来る事を知っていたからだった。

アリサの護衛としてバニングス家に住んでいる小次郎だが、基本アリサが望まない限り、行動を共にする事はない。

それは、小次郎に自由でいて欲しいとアリサが思っている事と、アリサの邪魔をしないようにと小次郎が考えた末の結論。なので、今日は自分の好きなように過ごしてほしいと思い、アリサが小次郎に暇を与えたのだ。

昨日、試合終わりに美由希へ小次郎がそうなるだろうと伝え、それを知るが故に、美由希はこうして残っていた。

「でもいいんですか？　アリサちゃんの傍にいなくて」

「構わん。何せ、月村家にはライダーがおる。それに、はやてが来るならアーチャーもいよう。心配はいらぬよ」

小次郎の言葉に、美由希も納得。何しろ、アーチャーは士郎が「戦いのプロだ」と言う程の男であり、ライダーはセイバーと互角に渡り合うとの事。それを考え、そんな者を相手に勝てる者がいるはずない、と美由希は思った。

「さて、そろそろ昼時か。暇するとしよう」

「え～、もう少しいいじゃないですか」

「気持ちは嬉しいが、何分腹が減ったのでな。昼餉を食べに戻ろうと思う」

「あ、じゃ、あたしが作りますよ。ね？　それならいいですよね」

美由希の言葉に小次郎は少し考えるが、何か思いついたのか頷き、告げた。

「ならば、飯と塩でむすびを頼む。それならば、私にも出来よう」

「え？　小次郎さんも作るんですか？」

「美由希殿に甘えるだけにもゆくまい。私の分は美由希殿が、美由希殿の分は私が作ろう」

それでどうだ。そんな表情で美由希を見る小次郎。勿論、美由希が満面の笑みで頷いたのは、言うまでもない。
ちなみに、恋する乙女の力か美由希のおむすびは普通に食べれるものだった。小次郎の幸運が高い事が影響したのかもしれない。

ややあって、ここはセイバー達のいる部屋……。

「……帰ってきてみれば、とんでもない事になっていたのですね」

ライダーの言葉に、セイバーが深く頷く。お昼になったので、一度戻って来たライダーが見た物は、不機嫌な顔をするアーチャーとランサーの二人だった。
良く見れば、セイバーが鎧姿になっている。それからライダーは何が起こりかけたのかを理解した。

「相変わらず仲が良いのですね」

「「良くない」」

ライダーのどこか呆れた声に、二人が息ピッタリにそう返す。それに微かに笑みを浮かべるセイバーとライダー。それは、まるで子供の喧嘩のような雰囲気が感じられたからだ。

だが、そんなアーチャーがふと時計に目をやり、気迫十分に立ち上がった。
それに訝しむような視線を送るランサー。対して、その理由が分かるのか嬉しそうなセイバーと、それに苦笑するライダー。

「昼食の時間だ。君も食べるかね、ランサー」

その一言に、ランサーが拍子抜けしたのは言うまでもなかった。

その頃、忍達はユーノの話に驚いていた。何しろ、自分を襲撃し、ジュエルシードを奪おうとした相手に協力すると言ったのだから。

そんな忍達の反応に、アルフはどこか居辛そうに頬を掻いている。

「……そうか。それがお前やなのはの答えなら、俺は何も言わない」

「恭也……」

「ありがとうございます！」

ほっとしたように笑顔を見せるユーノ。アルフは、そんな結論を出した恭也に何かしらのシンパシーを感じた。

（今の言い方、こいつやあのチビちゃんがそう言わなかったら文句がある！　みたいな言い方だねぇ）

その思考が自分に似ているとアルフが気付かされるのは、高町家と深く関わるようになってからの事。

「ただし、もしなのは達に何かあったら……」

「それはないよ。アタシらだって、好きであんな事したんじゃないさ」

「恭也さんの気持ちは分かります。でも大丈夫ですよ。ランサーさんは、セイバー達と同じ存在ですから」

アルフとユーノの言葉に、恭也も理解はしたようで、放ち始めていた殺気を消した。それに安堵の息を吐くユーノ。忍も今の恭也と同じ思いらしく、どこか諦めたように呟いた。

「ま、信じるしかないわね。私達の『家族』の目を……」

「ノエル、そちらはどうだ？」

「大丈夫です。もう仕上がります」

「ファリン、いけるな？」

「任せてくださいっ！」

執事とメイドの三人組が、厨房の中で忙しく動き回っている。チーフがアーチャー、サブにノエル、新人ファリンといったところであろうか。

食事についても、アーチャーは教師的立場だった。唯一の違いはノエルもそれに含まれる事か。忙しく働きながらも、指示を出し、料理を作り、そして全体を把握する。まさにアーチャー劇場だった。

そんな厨房から離れた食卓で、今か今かと料理を待つのはセイバーとはやてだ。食欲から楽しみなセイバーと、料理人として楽しみなはやて。その姿勢こそ同じだが、興味を抱いているところが決定的に異なっていた。

「せ、セイバー……落ち着いて」

「そうだぞ。フェイトちゃん達もいるんだから」

ただ、それに耐えられないとばかりに、なのはと恭也がセイバーを制する。初めて見るセイバーの様子に、フェイトとアルフは軽く驚いている。

それもそのはず。セイバーの第一印象があまりに絵になるものだったため、そのギャップはかなりのものだったのだ。

唯一ランサーだけは、そんなセイバーを知っているので、懐かしそうに笑っていたりする。

「そ、そうでした。私とした事が……」

「あ、えっと……気にしないで」

「そうだよ。アタシらだって、早めに昼を食べなきゃあんたみたいになってるさ」

アルフの言葉に、ライダーが反応する。それは、単純な疑問。

「まだ食べられるようですが、一体何を食べたのです？」

「ん？ああ、ハンバーガーとフライドチキンだろ。それを……」

アルフの語る食べ物の量に呆れ返る一同。ランサーもだよ、とアルフが言って余計に沈黙。

ファストフードだけとはいえ、それだけを食べて尚まだ食べるアルフとランサーに、全員が呆れていた。

感情も突き抜けると、それが元々のモノと別のものに変わる事がある。今回はまさにそれ。

そんな話をしていると、アーチャー達が料理を運んできた。そのメニューに、目を輝かせるセイバーとはやて。アルフとランサーも、もうそこまで食べれないにも関わらず、その料理に目を奪われていた。フェイトは初めて見るものがあり、向かいのなのはに尋ねている。

「お待たせしたな。さ、食べてくれ」

こうして、なのは達とフェイト達の出会いは過ぎて行く。ジュエルシードの探索は、フェイト達が探索魔法を使えるので、それで位置を特定ないし限定し、封印をなのはが行う形で纏まった。

フェイト達の拠点が遠見市なので、色々と不便だろうとはやてが自宅を使ってくれと提案。それに反対したアーチャーだが、はやての「友達を泊めるのがそんなに悪いか」との一言に沈黙。

こうして、後日八神家にフェイト達がやってくる事になり、探索も早く終わるだろうと誰もが思った。

そして、ついでとばかりにフェイト達にもなのはが旅行の事を提案し、それをランサーとアルフがノリノリで参加表明して笑いを取る一幕もあり、終始和やかな空気でその日は終わりを迎えた。

こうして運命が変わる。それが良い方向なのか、悪い方向かは……誰も知らない。

――――――

幕間1

それは、フェイト達と出会った次の日の事。はやては起きてからずっとそわそわしていた。

それを見ながら、アーチャーは今日何度目か分からないため息を吐いた。

「朝食を食べてから来ると言っていただろう。それに荷物もある。おそらくまだ来ないぞ」

「分かっとる。でも、もしかしたらがあるやろ」

これなのだ。既にこのやり取りも四回目。はやてはもうずっと玄関前でスタンバイ中。朝食が終わった後から、こうなのだ。

何だかんだ言いながら、アーチャーも洗濯などを終えて、それに付き合っているのだから優しいものだ。

そんな二人を見て、みーちゃんもそわそわ。はやての腕の中でキョロキョロと顔を動かしている。

彼女はいつものように食事を終え、はやてと戯れて帰るつもりだったのだが、はやての「みーちゃんも紹介せな」の一言により、こうしてはやてに捕らえられていた。

そんな風に過ごす事、実に三十分。待ちに待った瞬間が訪れる。

鳴り響くチャイム。それに反応し、ドアを開けようとするはやて。

アーチャーがさり気無くみーちゃんを抱え上げ、それをサポート。

そして、ドアの先には……。

「こ、こんにちは……」

どこか緊張した面持ちのフェイトがいた。

「いらっしゃい！　よ～来てくれたな」

「え、えっと、短い間だけどよろしく」

「こちらこそよろしくや。仲良～しよ」

ニコニコ笑顔のはやて。それにつられてフェイトも笑顔を見せる。

一方、そんな二人とは対照的に、玄関先で睨み合う男二人。その後ろでアルフが気まずそうな顔をしている。

「……どけよ」

「馬鹿を言うな。まず、女性が先だろう」

「アタシはランサーの後でもいい「ほら見ろ。こう言ってるじゃね～か！」……うん」

「レディファーストを知らぬとは、やはり”猛犬”の名は伊達ではないな」

「いい度胸だ……表出ろ」

既に戦闘態勢。限界突破しそうな二人を止めるキッカケになったのは、意外な事にみーちゃんだった。

二人の殺気に当てられ、慌てるように逃げ出したのだ。その声にはやてが顔を出す。

「何いつまでも玄関におるんや！　みーちゃん怖がらせてへんと、

早くランサーさん達をリビングまで案内し！」

はやての言葉にアーチャーが苦虫を噛み潰したような顔をし、対するランサーは勝ち誇ったような表情を浮かべる。

だが、それも長くは続かない。はやてに続くようにフェイトも顔を出し「ランサーもアーチャーさんを怒らせないようにね」と言ったからだ。

こんどはそれにランサーが苦い顔。それにほくそ笑むアーチャー。そして、そんな二人を見てアルフが一言。

「……ホントはあんた達、仲良いだろ」

「「良くない」」

ようこそ、八神家へ！

それからややあって、リビングには仲良く話をするはやてとフェイトの姿と、その横で、色々と質問し合っているアーチャーとアルフがいた。

ランサーはと言えば、ソファーに座り、我が物顔でテレビを見ていたりする。

「でな、この子がみーちゃん言うんよ」

「へぇ……触ってもいい？」

「ええよ。もう、大分大人しなったし」

恐る恐る手を出すフェイト。それをみーちゃんは黙って見つめ、されるがままに撫でられる。

「……本当に良い子だね」

「やろ？　ここまでするのは苦労した「のは私だが？」……んよ」

途中で遮られ、気分を害したようにはやてが口を尖らせる。フェイトはそんなはやての顔に笑みをこぼす。

そのはやてとアーチャーのやり取りが、すごく自然だったからだ。きっと本当に家族のようなんだろう。そうフェイトが思って、視線をランサーへ向ける。

それに気付いたか、ランサーもフェイトへ視線を向ける。それにフェイトは少し驚くも、微かに笑みを浮かべて「何でもない」と返す。

そんな二人から視線をアルフに戻し、アーチャーは話を再開する。

「……で、使い魔だったか？　そちらでは死んでいても蘇生可能なのか」

「ま、そうだね。でも、動物限定だよ？　人間を使い魔にしようなんて考えないからね」

「……その言い方では、出来ない事はないという事か？」

「どうなんだろ？　リニス辺りにでも聞かなきゃ分からないけど、出来ても多分誰もしないと思うよ」

アルフの発言にアーチャーが首を傾げる。その疑問を理解し、アルフが笑って答える。

使い魔にするという事は、つまりその体に新しい魂を与える事なのだと。動物なら、別の自我を得て喋り出しても納得出来るだろうが、人間はそうもいかないだろう、と。

その言葉にアーチャーも納得がいった表情を浮かべる。確かに、別人のようになってしまっては、生き返っても意味がない。

それは、その生き返らせたかった故人ではなく、同じ姿をしたまったくの別人にしてしまうのだ。

その結論に行き着き、アーチャーは合点がいったとばかりに頷いた。

「後、使い魔は主人と契約を交わすのさ」

「ふむ、使い魔なのだから、それは当然か」

「ちなみにアタシは、ずっとそばにいる事だよ」

アルフの言葉に、アーチャーは笑みを浮かべた。実に彼女らしいと思ったからだ。

そして、視線をフェイトへと向ける。そこには、はやてと楽しそうに語らうフェイトの笑顔があった。

「……アタシはね、あの子の笑顔のためなら何だってするよ」

「奇遇だな。私もはやてを笑顔に出来るのなら、努力は惜しまんつもりだ。何しろ、自分の生活に関わるのでね」

――ちなみにセイバー達も同じ考えをしている。

そう続けたアーチャーの言葉に、アルフは嬉しそうに笑う。

――そりゃ心強いね。

――まったくだ。

そう言い合う二人の視線の先には、笑い合うはやてとフェイトの姿があった。

お昼になり、アーチャーはアルフとランサーを連れ、買い物へと出て行った。はやてとフェイトも行くと言ったのだが、アーチャーから「今日ぐらいはゆっくり話をし、情報交換をしておけ」といういつもの気遣いを受け、はやてがフェイトをゲームに誘った事で決着となった。

みーちゃんは、さすがにあまり引き止めるのも悪いと思い、はやてとフェイトに見送られ帰っていった。

「さ、何しよか？」

「私、ゲームとか全然知らないからはやてに任せるよ」

そう言ってフェイトははやての手伝い。ゲーム機を取り出し、はやての指示通りに配線を繋いでいく。

そして、某メーカーの人気配管工がタイトルのカーアクションゲームを二人で始める。始めての事に戸惑うフェイトを、誘導して進むはやて。

その内、フェイトも操作に慣れ、段々熱が入り始める。

「あ、スターや」

「これなら……はっ！」

「おおっ！　フェイトちゃんやるな！」

「うん、大分コツは掴んだからね。はやて、置いてくよ？」

「ぬ、あんま調子乗ると……こうや！」

無敵が切れた途端、はやての操作キャラ（カメの大王）が投げた緑こうらがフェイトの操作キャラ（緑のドラゴン）に炸裂。堪らずスピンするフェイトのキャラ。

「す、凄い……」

「当然や。なのはちゃんにもわたしは勝てるんやから」

回転するフェイトのキャラを抜き去り、再びトップに踊り出るはやてのキャラ。

それに追いつこうと、走り出すフェイトのキャラだったが――。

「ゴール！」

「ううっ……追いつけなかった」

的確にアイテムを使い、時にはＣＰＵさえ壁に使うはやてに、フェイトは二位を取るだけで精一杯だった。

結局そのままはやてが一位で終了となったのだが。

「はやて、もう一回いい？」

「ええよ。何度でもかかってき」

フェイトの要望で開始される第二回戦。こうして、アーチャー達が帰ってくるまで二人の戦いは続いた……。

スーパーへ向かう道。アーチャーは隣を歩くランサーへ視線を送る。それに気付き、ランサーも頷く。

アルフもその意味を理解しているようで、真剣な表情で歩いている。

「……あの猫をどう思う」

「……おそらくだが、ありゃアルフ達と同じだな」

「間違いないよ。アタシもそう感じたから」

周囲に気配等を感じないと把握し、話し出す三人。アーチャーは、ずっと疑問に思っていたのだ。

あの仮面の男が監視をしなくなっても尚、何故こちらの事を把握していたのか。そして、その推測として燻り続けていた事が、どうやら当たりらしいと思ったのは、アルフと使い魔の話をした時だ。

その話をし出した辺りから、みーちゃんの様子が若干おかしくなったのだ。それに気付き、アーチャーはランサーとアルフを連れて出てきた。

そう、二人にはどう見えていたのか確認するために。

「となると……」

「心当たりがあんのか？」

「今はまだ言えん」

アーチャーはそう皮肉屋スマイルで返す。それに苦い顔を浮かべるランサー。それは、昨日ランサーがアーチャーの問いに対して言った言葉だったからだ。

だが、何かある事だけはランサーとアルフにも分かった。だからこそ、二人は告げる。

「ま、この事が片付いたら力になるよ」

「……しばらく世話にもなるしな」

そんな二人の申し出を、アーチャーは内心感謝しながら笑って答えた。

「当然だ。タダより高いものはないとしれ」

その言葉にランサーとアルフが文句を返したのは言うまでもない。だが、そんなアーチャーの内心を感じ取っているのか、その表情はどこか呆れが混ざっているように見えた。

アーチャー作の昼食（肉が食べたいとランサーとアルフがうるさかったので）のメニューは、鳥肉の竜田揚げに人参、大根、里芋の煮物。それに豚肉の冷しゃぶサラダと豆腐とワカメの味噌汁という

和食だった。
フェイトは初めて見る食材、特にワカメに首を傾げ、はやてから海草と聞くと「そんなものも食べるの？」と軽く驚きながらも完食した。
アルフとランサーは肉料理ばかり食べ、アーチャーとフェイトからお叱りを受け、それをはやてが笑って見ているという微笑ましい一幕もあり、終始和やかに食事は終わった。

そして、食事の後片付けはフェイトとはやてがやると言い出し、アーチャーはその言葉に甘え、食後のお茶を淹れていた。
アルフはランサーとテレビにご執心のようで、二人してひっきりなしにチャンネルを変えている。
あまりにも忙しなくチャンネルを変えるので、アーチャーがそれを注意し、ランサーがそれに噛み付く。アルフはそれを仲裁する事もなく、サングラスを掛けた男性が司会の番組を眺めている。

（何か、ええな。家族が増えたみたいや）

（何だろ？　すごく楽しい。リニスがいた時とは違うけど、これも家族みたいだ）

洗い物をしながら、聞こえてくる話し声にそんな事を思うはやてとフェイト。ふと互いに顔を見合わせ、笑みを浮かべる。

「とりあえず……」

「うん。そうだね」

二人は頷き合って後ろへ振り向き、言い合いを続けるアーチャーとランサーに向かって――――。

「「いい加減にし（て）」」

こうして、フェイト達の八神家での日々は過ぎて行く。たった一月にも満たない生活。それでも、後にはやてとフェイトは語る。

あの日々は、自分達二人だけの秘密の思い出になった、と

――――――

無印五話　前編

「改めて見ると凄いよね、この人数」

「確かに、これは凄いな」

美由希の呟きに恭也も同意。ワゴンタイプの車が二台。それだけの規模になった今回の旅行。

先頭車両は士郎がドライバーを務め、助手席に桃子で、後部座席にノエル、恭也、忍、小次郎、美由希、ファリンが乗り、アルフは狼形態でファリンの膝の上。

二台目はドライバーをライダー、助手席にアーチャー。後部座席がセイバー、ランサー、そしてなのは達子供組となっている。

大人組と子供組に別れ、更にフェイトやはやての事を考えて、仕方なくランサーとアーチャーを同席させているのだが、その緩衝役として、セイバーとライダーがいたりする。

何しろ、二人がその気になると、止められるのはセイバー達ぐらいだからだ。

「今頃、すずか達は楽しく遊んでるでしょ」

「だろうよ。まぁ、ランサーとアーチャーが大人しくしておれば、だが」

「……小次郎さん、不安になるんでやめてくださいよ」

「大丈夫さ。フェイトとはやてがいるんだ。喧嘩なんて出来ないよ」

不安そうな表情の美由希に、アルフはそう笑って告げる。その言葉に頷くノエル。

あの出会った日、二人の仲とフェイト達に対する態度を見た彼女も、アルフの意見に賛成だった。

「その通りです。お嬢様達の前で迂闊な事をすれば、後が怖いのを御二人共知っていらっしゃいますから」

「ですよね。フェイトちゃんもはやてちゃんも、ああ見えて気は強いですからね」

ファリンの言葉に全員が笑みを浮かべるが、はたと忍が呟く。

「……でも、はやてちゃんって、そんなに大人しそうには見えないけど」

「忍さん、それは言わない約束よ」

「でも、はやてちゃんは元々大人しい子だったと、アーチャーさんは言っていたぞ？」

士郎の言葉に、納得の忍。だからこそ、これを言わねばならない。そう思い、忍は断言する。

「じゃ、因果応報って事ね」

その言葉に今度こそ全員が声を出して笑った。

大人組がそんな風に盛り上がっている頃、なのは達はと言えば……。

「ダウトッ！」

「え～、何でわかるんやろ」

「アリサ、すごいね。これで三回連続だよ」

トランプに興じていた。後部座席を倒して、後ろの辺りに円を作りながらのトランプ大会。

本当はフェイトへの軽いレクチャーだったのだが、勝負事にムキになるアリサが徐々にヒートアップし、現状に至る。

種目もババ抜き、七並べ、ポーカーと来てダウトとなっていた。

この後はおそらく大富豪となるだろう。

その証拠に、先程なのはがユーノに大富豪のルールを教えている。

アリサも、フェイトへ同じように説明をしていたから間違いない。

「どないしよ？　カード、こんなに増えてしもた」

「う～ん、でもこれなら逆に……」

はやて・すずかペアが、手札を見ながら作戦会議。それを見つめてアリサ・フェイトペアも考える。

残りのなのは・ユーノペアは困り顔。何しろ、現状手札が一番少ないのだ。つまり、口で言う数と手札が合わない事の方が多い。

「どうする？」

「……とにかく順番を考えて、これを最後に出来れば……」

「……そっか。ユーノ君、あったまいい～」

ユーノの作戦に笑顔のなのは。それに照れ笑いのユーノ。その向かいで、同じくカードを睨むアリサとフェイト。

「で、これを何とかスルーさせれば……」

「でも、もしはやて達が三のカード全部持ってたら？」

「ぬ……でも、やるしかないわ。女は度胸よ！」

「あ、アリサ……かっこいい」

冷静なフェイトの懸念に、アリサはそう言い切った。その凛々しさに憧れの眼差しを向けるフェイト。

そんななのは達を眺めながら、笑みを浮かべるセイバー達。

運転しているライダーも、バックミラーでその様子を見て、微笑んでいる。

「すっかり仲良くなりましたね」

「だな。ま、こっちとしても大助かりだ」

「……ジュエルシードも、こんなに早く見つかるようになるとはな」

アーチャーの言う通り、フェイト達が探索魔法を使い、それで発見したものをなのはが封印という流れで、恐ろしい程効率が上がったのだ。

それは、封印の事まで考えて探索をしなくても良くなった事が影

響している。魔力消耗の事を考慮せず、探索のみに全力を傾ける事が出来るようになったフェイトは、広範囲探索魔法をアルフとともに行使し、その成果を挙げていた。

一方のなのはも、そんなフェイトに負けられないと魔法の勉強に力を入れ、先日なのはの要望で初めて行ったフェイトとの模擬戦において、新しい魔法『ディバイン・バスター』を習得した。

キッカケは、フェイトの放ったサンダー・スマッシャー。ディバイン・シューターを同じように撃てれば。そんななのはの思いにレイジング・ハートが応えた結果が、その魔法に変わった。

それの習得と戦闘結果によって、自身の得意属性が集束と放出である事と、防御が異常に頑強だとユーノとフェイトに言われ、現在なのはは、もっと凄い魔法の開発と防御の強化に余念がない。

ただし、それを知った士郎やセイバーから、あくまでも程々にと強く念を押されはしたが。

特にセイバーがなのはにそう言ったのは、自身が使用する聖剣の事を思い出してであった。

あれも魔力を集束し、放つモノ。故に、ディバイン・バスターも体に掛ける負担が相当な魔法だと直感から察し、なのはを心配したのだ。

ちなみに、なのはがフェイトとの模擬戦を希望したのは、魔法を実戦レベルで磨いているフェイトから色々学びたいとの思いからだった。

「ですが、まだ残りは少なくありません。慎重に行かないと」

「そうだな。ライダーの言う通りだ。だからこそ「休める時に休む、だろ?」……ああ、そうだ」

ランサーの言葉に微かに苛立ちを見せるアーチャー。それを見て嬉しそうなランサー。

アーチャーは、言葉を遮られたから苛立っているのではない。ランサーが、固い言い方しようとすんなと言わんばかりに笑みを浮かべたからの苛立ち。

ランサーでなければ、おそらくアーチャーもこうはっきりと反応を示したりはしないだろう。だが、この二人が実は一番噛み合うのも、セイバーとライダーは知っている。

（どちらも生き残る事に関しては一流ですからね）

（まったく、似た者同士なのですから……）

どこか苦笑を浮かべつつ、それを眺めるセイバーと横目で見つめるライダー。

そんなライダーの視界には、近付きつつある目的の旅館の姿があった……。

海鳴温泉だよ、全員集合！　前編

時の庭園のプレシアの部屋。ベッドを囲むように様々な機械が置かれている。そんな中、リニスが食器を片付けながら、プレシアに告げた。

「ランサーの報告では、ジュエルシードも順調に集まっているようです」

「みたいね。……この分なら間に合うかしら？」

「間に合うに決まってます。弱気な事を言わないでください」

「そう、だったわね。ごめんなさい」

リニスの咎めるような声に、プレシアは笑みを浮かべて謝った。

あの日、ランサーからの報告を聞いた二人は驚いた。何しろ、ランサーと同質の存在が暮らしていて、尚且つ、ジュエルシード発見者の少年と共に協力してくれるとの事だったからだ。

当然、初めは疑ったプレシアだったが、ランサーの「俺を信じろ」との言葉に黙らざるを得なかった。それだけプレシアは、ランサーに全幅の信頼を寄せている。

「……今頃、ランサー達は……温泉？　だったかしら」

「ええ。現地の療養施設で完全休養するそうです」

「……まぁ、肝心な時に倒れられても困るもの。大目に見るわ」

「プレシアも連れて行けるなら連れて行きたい、とフェイトとランサーが言ってましたよ」

リニスのどこか窺うような言葉に、プレシアは笑みを微かに見せて「そう……」と呟いた。

――――いつか、あの子”も”連れて行けたらいいわね。

そんなプレシアの言葉は、外に漏れる事なく消える。ただ、彼女の心の中にだけ、その変化の痕跡を残して……。

旅館に到着した一同は、男性陣が荷物運びで働く事になり、その間、女性陣は賑やかにこれからの事を話し合っていた。
ただし、なのは達は既に行動を決めていたので、五人で早速お風呂へ直行する事に。それに呼応し、美由希に忍、アルフ（着いた瞬間人型にチェンジ）もそれに便乗する事になった。

「じゃ、行くわよ」

「あ、待ってよアリサちゃん」

「なのは、温泉って病気にも効くって本当？」

「うん。だから、今度はフェイトちゃんのお母さんも一緒に来れるといいね」

なのはの言葉に、フェイトは小さく頷く。そう、”今度”を必ず実現させるんだ。そのために、ジュエルシードを早く集めないと。
そんな思いを胸にフェイトは歩く。
そんなフェイトの気持ちを知ってか知らずか、なのはも思う。

（フェイトちゃんのお母さんを早く治すためにも、後で念のために探索魔法を試してもらおう。ここにもあるかもしれないから）

そんな風に歩くなのは達の後ろで、はやてがすまなさそうにアルフを呼び止めた。
一人車椅子のはやては、お風呂場まで車椅子では迷惑になると思い、アルフに運んでもらおうと考えた。その思いを気遣い、アルフは二つ返事でその体を抱え上げようとした。

だが次の瞬間、それを横からライダーが制止するように取り上げた。

「アルフ、ダメですよ。ハヤテはこう見えて油断ならないのです」

「へ？　どういう事だい？」

「……ハヤテ、何故アルフの胸部を凝視しているのですか……？」

セイバーの言葉にアルフがハッとする。そう、ライダーの抱え方は、はやてが胸に手が届かないように肩で担ぎ上げているのだ。

その意味を理解し、アルフは苦笑い。そして、同時にライダーに感謝する。

「すまないね」

「いえ、気にしないでください。……さ、行きますよ」

「う～……ライダーさんがイジワルや」

「あはは、はやてちゃんって男の子みたいだね」

「ホント、ある意味女の子で良かったわ」

「……なのは達が聞いていなくて良かったです」

どこか呆れたような美由希と忍。やれやれと息を吐くセイバー。

そんなセイバーの発言に、内心アルフとライダーが呟く。

（（もしかしたら、聞かせた方が良かったんじゃ（のでは）……？）

）

その予想が当たって二人が後悔するのは、これから五年以上後の事。

浴衣になり、部屋で寛ぐ士郎と桃子。恭也とノエルも浴衣に着替えてまったりとしている。ファリンは、急須でのお茶の淹れ方をアーチャーから教わっている。

小次郎とランサーは、早速とばかりに人目に付かなさそうな場所まで試合をしに行った。

本当は恭也も行きたかったのだが、ノエルとファリンから、忍をほったらかしにしたら黙ってないと言われ、仕方なく諦めた。

「それにしても、驚く事だらけだな」

「そうね。フェイトちゃん達の事もだけど、ランサーさんの事も、ね」

「セイバーに勝てるかもしれない。それだけで俺にとっては驚きだよ」

恭也のその言葉に頷く士郎。何せ、セイバーは未だ負け無し。士郎でさえ、魔力放出を使われれば、勝つ事はまず不可能だ。

何度か追い詰めた事はある。だが、それは魔力放出を封じた状態のセイバーだ。本来ならば、勝ち目はまったくない。

ちなみに、セイバーは何度か魔力放出無しで勝とうとしているが、元来の負けず嫌いが影響し、それを出来ずに使ってしまっている。

それを知るのは、セイバーとそれを内心悔やんでいる様子に気付

けるなのはのみ。

「勘違いするな、恭也。私や小次郎、それにライダー。誰もが条件や状況によってはセイバーに勝てるのだ。何もランサーだけとは限らん」

「そうです！　アーチャーさんは強いんです！」

「……何故そこでファリンが意気込むのですか？」

ノエルの指摘に、顔を赤めて俯くファリン。それを微笑ましく見つめる士郎と桃子。既に恭也とアーチャーは戦術論を交し合い、それに気付いていない。

そんな穏やかな時間が、静かに流れていた。

何かがぶつかり合う音が響き渡る森の中。その中の少し開けた場所で、向かい合うように佇む小次郎とランサーの姿があった。

その手にはそれぞれの得物が握られている。そして、互いに嬉しそうな笑みを浮かべて、得物を向け合った。

「やるじゃね～か」

「お主こそ。以前と違うのはそちらも同じか」

「へっ……そういうこった！」

ランサーの神速とも言える突きが小次郎を襲う。だが、小次郎はそれを軽々といなす。

それが数十合。剣舞と呼んでもいい程の動きで、ランサーの攻撃をいなし、流し、逸らす小次郎。

ランサーはそんな小次郎に喜びを噛み締めていた。死力を尽くすとまではいかないが、全力を出せる相手との戦いは、やはりランサーにとって何も勝る生き甲斐なのだ。

（前よりも技の冴えが上がってやがる。……こいつはおもしれぇ！！）

（ほぅ……更に速くなるというか。……良かろう）

どちらともなく一旦得物を引く。先程までの火花散る戦いが嘘の様に静まり返る。

静寂。だが、それもほんの一瞬。再び始まる閃光の如き打ち合い。だが、その速度は先程とは比べ物にならない。

先程が”目に見えない”速さなら、今回は”目に映らない”速さ。もう、刀や槍を動かしているのかも分からないのだ。途中から見れば、おそらくそう言う事しか出来ない。

御神の剣士である士郎達なら、まだ辛うじて”目に見えない”速さかもしれない。だが、常人には既に理解の範疇を超えている。

セイバーを持ってしても、これを完全に捉えるのは至難の業かもしれない。

最速のサーヴァント、ランサー。そして、絶技のサーヴァント、小次郎。スピードｖｓテクニックともいうべき戦いが、展開されていた。

「オォオォオォッ！！」

「はぁぁぁぁぁっ！！」

互いに咆哮を上げ、速度とその冴えをそれぞれ研ぎ澄ます。心は熱く、されど思考は冷静に。そう小次郎が思えば、ランサーは心も思考も熱くなれと思う。

だが、願うものは同じ。それは強者との戦い。ならば、今の状況を喜ばずして何を喜べと言うのか。

「チッ！　埒が明かねぇ」

「それはこちらとて同じ事よ」

「なら……」

「勝負……」

互いに構えるは、必殺の構え。己が絶対の自信を託せる唯一無二の攻撃。

「刺し穿つ（ゲイ）……」

「秘剣……」

「ダメですよっ！！」

突然の声に、思わず気を逸らす二人。声の主はユーノだった。荷物を運び終わり、ユーノは何ともなしに散歩していた。その途中、森の方へ向かう二人を見て、気になってついてきていたのだ。

戦いを始めた二人を見て、後学のために、と集中して見学していたユーノだったが、次第に熱くなる二人の闘気に当てられ、気が付けば拳を握って見守っていたのだが……。

「小僧……」

「見ておったのか……」

「今の、確かお互いの必殺技ですよね!?　何で殺そうとしてるんですかっ!!」

そうユーノがかなり焦って叫ぶ。それを聞き、二人にも僅かに反省の色が浮かぶ。

いくら戦いに夢中になっていたとはいえ、二人して本気になりすぎていたようだった。

それを理解し、小次郎とランサーも苦笑を浮かべる。確かにあのまま続けていたら、どうなったか分からなかった。

互いに、殺す気はなかったが、少々熱くなり過ぎたようだ、と笑って告げるランサーと小次郎。

そんなやりとりを、ユーノは呆れながらもほっと一息。

（これ……僕いなかったら、どうなってたんだ……？）

そんな事を考え、心の底から息を吐いたユーノだった。

――

温泉話です。

肝心の場面は次回に。今回のメインはランサーｖｓ小次郎ですかね。

本来でも戦っていただろう二人。しかし、令呪の縛りを受けていたランサーでは本気の戦いは不可能。

対する小次郎も、御神の剣士達との戦いで技に磨きをかけたので、ランサーも小次郎も互いに以前と違うと感じた訳です。

……こんな描写しかできなくて申し訳ないです。

無印五話　中編

湯煙立ち込める大浴場。それを前にし、フェイトは驚きからか声を失う。

ただ大きなお風呂だと聞いていたフェイトにとって、温泉大国日本の大浴場は、常識の範疇ではなかった。

「……大きい」

「そっか。フェイトちゃん達のとこには温泉ないんだっけ？」

「驚いてるとこ悪いけど、ここよりも大きなお風呂もあるのよ。この国の人達は、お風呂大好きだから」

呆然と呟くフェイトに、美由希と忍が声を掛ける。それを聞き、信じられないと言わんばかりの表情をするフェイト。

それが可愛らしくて、二人の笑みを誘う。そんなフェイトとは対照的に、はやては目の前の光景に心躍らせていた。

美由希、忍、アルフ、それにライダーと魅惑的な”おっぱい”が並んでいるのだ。

ちなみに、はやてが女性の胸に執着するのは、無意識に母性を求めているからだと、アーチャーは分析している。

（何とかして触ったらなアカンな）

そんなはやては、現在セイバーが抱えている。結局、セイバーとライダーも美由希達に誘われ、風呂に入る事にしたのだ。

既にライダーはすずかの背中を洗うため、セイバーにはやてを預け、現在仲良く洗いっこ中。

キチンと自身に暗黒神殿（ゴルゴーン）を施し、鏡を極力視界に入れない辺り、ライダーの徹底振りが窺える。

ま、おかげでライダーはかなりの近眼さんになってしまい、すずかに手を引かれているのだが。

アリサはなのはと楽しそうにしながら、洗いあっている。アルフは簡単に掛け湯をし、早々に湯船に浸かっていた。

「ハヤテ、まずは体を洗いましょう」

「へ？　あ、そうやな。セイバーさん、お願いします」

「ええ。では行きましょう」

はやてを抱え、なのは達の下へ向かうセイバー。そのセイバーの胸を注視するはやて。

（む～、もう少し大きければ良かったんやけど……残念っ！）

（何でしょうか？　ハヤテから、何かイラッとするものを感じます）

持ち前の直感で、侮辱された事を感じ取るセイバーだが、生憎それがどういうものかまでは理解できない。

はやては一瞬セイバーの表情が変わったのを見て、勘付かれたかとも思ったが、セイバーが何も言わなかったのでよしとした。

そんな二人の視界の隅で、楽しそうに笑うなのはとアリサがいた。

「でも、良かったわね。もう半分切ったんでしょ？」

「うん。後八個だからね。頑張って終わらせるよ」

なのはがグッと手を握る。それにアリサも手を握り、頷く。

「その意気よ！全部終わったら、お祝いしましょ。フェイトのママも一緒に、ね」

「そうだね！全快祝い、って言う事で」

「なら、場所はどこにする？」

そんな二人の話が聞こえていたのか、すずかがそう話に入ってきた。

だが、それを嫌がるなのは達ではない。むしろ、それに頭を捻りだした。

それをぼんやりとした視界ながら、可愛いと思い、ライダーが助言を出す。

「いっそ、レストランというのもいいかもしれません。料理も出ますし、広さや椅子も貸切にすれば十分です」

ただし多少高くつきますが。そのライダーの発言に、なのはが閃いたような顔をした。

「あ、じゃあ翠屋にしよう！　お母さん達も参加出来るし、お金もそこまでかからないよ」

なのはの言葉にアリサもすずかも笑顔で頷く。ライダーは、そんな三人を見つめて微笑む。

（本当にナノハは良い子です。フェイトが加わり、どうなるかと思っていましたが、彼女も良い子でした。スズカ達との関係も益々深

めているようですね）

こうすれば翠屋の名前を挙げるだろうと、ライダーは思い、先程の提案をした。

月村邸やバニングス邸という選択肢もあったが、それよりもアットホームな雰囲気がある翠屋の方が適していると考えたのだ。

フェイトの母親の話は、ランサーからある程度は聞いている。訳あってフェイトとは距離を置いているらしいが、それも病気のためだとランサーは言っていた。

（詳しい事情は分かりませんが、おそらくその人も辛いのでしょう）

ライダーの想像はある意味正しかった。プレシアが、アリシアを思うが故にフェイトを遠ざけているのは、まさにそれ。

だが、憎む気持ちはもう大分薄れ出していた。その要因となっているのは、アリシアとの約束だとは、流石に誰も知りえないのだが。

もっとも、そんな事を知らないライダーは、娘と距離を置かなければならない、という一点について辛いだろうと思っている。

そんなライダー達とは離れた位置で、フェイトは美由希達に家族の話をしていた。

「リニスさん、か。じゃ、フェイトちゃんにとってはお姉さんなんだ」

「はい。私に色んな事を教えてくれた優しい姉さんです」

「色んな事って、魔法も？」

「はい。家事なんかも少し教えてもらいました」

嬉しそうに答えるフェイト。先程から話すリニスの話を、美由希や忍が聞いて感心したり、驚いたりしていた。それがリニスを誉めているからだろう。フェイトは自分が誉められているみたいに嬉しくなって、誇らしく語る。

それを微笑ましく思いながら、美由希と忍は聞いている。自分達も妹がいる身だ。だからだろうか。リニスと呼ばれている女性に親近感を抱き、それを自慢げに話すフェイトに、なのはやすずかを重ね、笑みがこぼれる。

（なのはも、あたしの事、こんな風に話すのかな？）

（すずかも、こんな感じに思ってくれてるのかしら？）

姉として思う事は同じ。だからこそ、フェイトの話は二人にとって、リニスと会ってみたいと思わせるには十分。

こんなに思われている人なら、きっと良い人に違いない。同じ『姉』として、是非一度話をしたいと二人は思った。

そして、そんな一同を湯船から眺めながらアルフが呟く。

「何かいいね、こういうの……」

そんな賑やかで、そして穏やかな時間をしみじみ感じながら、アルフは思う。

絶対全て上手くいく。そんな風に思えるように、流れが良い方向に向かっている、と……。

「では、行きましょうか」

「ああ」

「さ、アーチャーさん、行きましょう！」

「ファリン、浴衣が乱れる。あまり引っ張るな」

嬉しそうにアーチャーの浴衣の袖を掴むファリン。それに微かに呆れながらも、ついていくアーチャー。

そんな二人を見つめて、微笑むノエル。恭也もそんなファリンに笑みを浮かべる。

四人も大浴場に向かう事にしたのだ。士郎と桃子は、しばらく二人で話をするとの事で、部屋に残っている。

そんな風に話しながら四人が歩いていると、大浴場の入口でランサー達とばったり出くわした。

疲れながらも笑みを見せるランサーと、いつもと変わらない表情の中に、微かに喜びを滲ませる小次郎。

そして、何故かかなり濃い疲労の色を見せるユーノの姿があった。

「お、何だ。お前達もこれから風呂か」

「ええ。ランサーさん達もですか？」

「何分汗を掻いたのでな。それに、温泉に来たのに入らぬ訳にはい

くまい？」

「そうですね。入らなきゃ損です！」

そんな会話をしている恭也達を他所に、アーチャーとノエルはユーノへと視線を向ける。

「……何があった」

「あの二人……後少しで必殺技を使うところでした」

「それは……ユーノ様も大変でしたね」

「僕がいなかったら……どうなってたかと考えると……」

そう呟いてユーノはガックリと肩を落とす。それに、アーチャーが黙って手を頭に置いた。

ノエルも黙って、ユーノの肩に手を乗せる。その温かみが、ユーノに良く頑張ったと言っているようだった。

恭也達がランサー達と出会った頃、部屋に残った士郎と桃子は、静かにお茶を飲みながら視線を窓の外へと向けていた。

そこには、緑に覆われた山々と晴れ渡る青空が見える。

「……何だか不思議ね」

「……だな」

桃子の呟くような言葉に、士郎はそう応じる。

「セイバーが家に来て、貴方が治って……」

「小次郎さんやライダーさん、アーチャーさん達と知り合い……」

「「ユーノ君となのはが出会った……」」

そう言いあって、二人は笑う。そう、全てはあの日。セイバーが高町家に来た時から始まったのだ。

人の縁は奇跡の巡り合わせだと、二人は考える。それに、文字通りセイバーとの出会いは”奇跡”だったのだから。

それからしばらく、士郎も桃子も何も言わなかった。会話せずとも、互いの想いは伝わっている。

もう、何度考えただろう。もしなのはが、セイバーと出会わなかったら、と。その度に、頭を過ぎるのはなのはの孤独な姿。

そして、その心に気付いてやれぬまま、過ごしてしまう自分達。

今でもゾッとするのだ。あの夜、セイバーが告げた言葉を。

――もし、なのはが家族を思い、自身の気持ちを押し殺すなら、きっといつか、それを貴方達が後悔する日がきます。

それを士郎も桃子も今になって実感していた。もし、なのはが魔法と出会った事を黙って、ユーノと二人でジュエルシードを回収しようとしていたら、どうなっていたか。

最悪、なのははたった一人で戦う事になっていたかもしれないのだ。誰にも話さず、話せず、一人で恐ろしい事件に飛び込んでいく。

そんな『ありえない状況』を考え、士郎は首を振る。そんな事を

考えても仕方ないと。
それは桃子も同じだったようで、見れば軽く頬を叩いている。そして、桃子も士郎の行動を見ていたようで、互いに苦笑しあう。

「今は感謝しよう。セイバーと出会えた事に」

「そうね。それと、ユーノ君にも出会えた事に」

そう言い合い、二人は笑顔を浮かべる。暖かな日差しが、その横顔を照らす。それはまるで、二人の気持ちが天に伝わったかのようだった。

一方、ノエルとファリンが加わった女湯は騒然としていた。
原因ははやてが美由希の胸を触った事に端を発しているのだが……。

その後、それに反撃した美由希。それを見ていた忍が面白がってライダーの胸を揉んだ後から、はやてが本領発揮。湯船を器用に泳ぐように移動し、油断していたアルフを触り、それに驚いたアルフを面白がったファリンまでそれに参加。
それを見て、いそいそと離れ出すなのはとすずか。アリサもフェイトを守るように隅の方へと移動。
セイバーとノエルは何とかそれを収めようとするが、逆に悪乗りした忍と自棄になったアルフが襲い掛かったのだ。

以下、その流れ

「美由希さん、キレイな肌しとるなぁ」

「そうかな？」

「ちょう触ってもええ？」

「別にいいよ」

「じゃ……ほれ」

「キャッ！　はやてちゃん、胸を触るのはどうかな～？」

「ちょ、美由希さんくすぐったい！」

「……いいわね、あれ」

「……何やら嫌な予感が」

「ラ～イダ～～ッ！」

「な、シノブですかっ？！」

「おおっ、忍さんに負けてられんな。……てい！」

「キャン！　……何すんのさ！？」

「アルフさん可愛い～！　あたしもやります～」

「な、ちょっと止めなってば！」

「……なのはちゃん、逃げよ」

「そうだね。……何か近くにいると危なさそうだもん」

「フェイト、アタシから離れるんじゃないわよ」

「あ、アリサ？」

「止めなさい。ハヤテもアルフも」

「ファリンと忍お嬢様もです」

「やられたままなんて嫌なんだよ！　あんたもやられれば分かる……さっ！」

「そうよ！　ノエルもされたら分かる、わ……よっ！」

「「ふぁっ？！」」

そして、そんな光景を他人事のように眺めるはやて達。まぁ、はやては隙あらば触ろうと考えているらしく、手をどこか卑猥に動かしている。

そんなはやての視界の先では、アルフと忍がセイバーとノエルの胸を揉みしだいている。それを見て、美由希とファリンも参加し、

アルフと忍の胸を鷲掴みし出す。
それに意気込んで参加しようとするはやてを、アリサが全力で止める。フェイトはオロオロしながら、助けを求める視線をなのはとすずかへ向けた。

そんな中、忍から解放され、静かに離れたライダーがその様子を聞いて一言。

「混沌としてますね……」

そのどこか疲れた呟きに、なのはとすずかがゆっくり頷いた。

そんな女湯の喧騒を聞きながら、男性陣は実に静かだった。
いや、静寂を装っているだけだ。水面下では、ランサーとアーチャーの激しい戦いが繰り広げられている。

「いいじゃね～か。俺だけが痛い目みるだけなんだからよ」

「直接的には、な。だが、貴様が覗く事を知りながら止めなかった時点で、我々も同罪にされる事を理解しろ」

先程からこんなやりとりが何度交わされているか。そんな事を思いながら、ユーノは湯船に顔を沈めるが、その顔は赤い。
何しろ、先程から女性陣の艶っぽい声が聞こえてくるのだ。忍にアルフ、美由希やファリン。特に本気で嫌がっているセイバーやノエルは、かなり大きな声で聞こえる。
恭也は無言を貫いているが、顔が心なしか赤い。それがのぼせ始めているからとは、ユーノは思わない。

「……些か淑やかさには欠けるが、あれはあれで女子らしくて良い」

「れ、冷静ですね……」

「何、少々枯れておるだけよ」

「……俺も、小次郎さんのように達観出来れば」

隣から聞こえる会話や声に、普段と変わらない表情の小次郎を、ユーノも恭也も尊敬の眼差しで見つめる。

そんな三人とは離れた場所で、ランサーとアーチャーが湯船から出て、手拭いを腰に巻いた状態で睨み合っていた。

「どうしても止まる気はないのか」

「へっ……ここで行かなきゃ男が廃るだろ！」

「……最早、言葉では止まらんか」

そう呟き、アーチャーの手に干将・莫耶が握られる。それに無言で槍を構えるランサー。

見る者全てを威圧する気迫が両者から流れるが、忘れてはならない。彼らは、全裸の上に手拭い一枚でそれを行っているのだ。

だからこそ、それを見てユーノと恭也は思う。

（（お願いだから、せめて戦闘服でやってくれ（ください）……））

ちなみにそんな二人を止めたのは、遅れてやってきて、事情をユ

ーノから聞いた士郎だった。娘と妻を持つ父は強し。

ーーー

無印五話　後編

大浴場の騒動も士郎と桃子の参加で終わり、男性陣も女性陣もそれぞれがどこか疲れた顔をして歩いていた。
まぁ、例外として小次郎とはやてだけは上機嫌だったのだが。

そんなこんなの温泉旅行だが、何も騒ぐ事ばかりではない。夕食を終え、夜の闇が色を濃くし出すと、まず恭也と忍が二人で消えた。
それを見て、美由希が小次郎を夜の散歩に誘い、アルフも負けじとランサーを誘う。
小次郎もランサーも二人の誘いを快く承諾し、それを見ていたファリンが意気込んでアーチャーに声を掛けようとして、言葉を失う。

「少しお話があるのですが、いいでしょうか？」

「構わんさ。何だね？」

「ここでは何ですので……」

「……分かった」

予想外に、ノエルがアーチャーと連れ立って大広間を出て行ったのだ。それを呆然と見送るファリン。
そんな彼女を微笑ましく見つめる士郎と桃子。なのは達は食事が終わると六人で外へ出て行った。夜の散歩と星を見るのだと言って。

「ファリンちゃん、追いかけたら？」

「っ！？　……はい！」

桃子の言葉にファリンが動き出す。おそらくノエルの話は、ファリンが想像しているようなものではないと、二人は予想している。
だからこそ、ファリンをけしかけた桃子に士郎は何も言わない。
ただ、少しだけ苦笑は浮かべていたが。
そして、それを見ていたライダーは隣で満足そうにしているセイバーにこう呟いた。

「モモコは、どこかタイガと同じ匂いがします」

「……否定はしません」

「それにしても……」

「何です？」

「相変わらず良く食べますね」

そう。セイバーは一人でお櫃一つを平らげた。それにフェイトが驚いていたのは言うまでもない。

「いいではないですか。……と、そろそろ行きましょう」

「スズカ達の所にですか？」

「一応、念のためです」

セイバーの言葉にライダーは笑みを浮かべ、立ち上がる。それに続くようにセイバーも立ち上がり――。

「「邪魔にならないように、ですが（ね）」」

そう言い合って笑う二人を、士郎と桃子は笑顔で見つめていた。

後編

海鳴温泉だよ、全員集合！

月の光と星の輝き。それと僅かな照明の明かりだけを頼りに、なのは達は歩く。

先頭はユーノ。その両隣にアリサとなのは。フェイトはすずかと共にはやての車椅子を押している。

ユーノは地球での星の読み方を話していた。それは、発掘や遭難した際の位置を知る方法の一つとして、古来からある知識。

昔ミッドチルダで習得したものと同じように、地球の星読みもある事を知り、何かの役に立つかと思って覚えたからだ。

「で、あの北極星を基点に、位置を把握するんだ」

「ホント、色々知ってるわね」

「ユーノ君って博学だよね～」

「そ、そんな。ただ、興味があって覚えただけだよ」

感心するアリサとなのは。その視線に照れるユーノ。後ろで聞いていたフェイト達もそれに同意するように頷いている。

そして、ユーノの話は星から星座、それにまつわる逸話へ移る。
その、時に悲しく時に美しい内容に、なのは達は聞き入る。
ユーノはそんななのは達に「僕も、調べていく内に惹き込まれていったよ」と笑みを浮かべて告げた。

そんな話をしながら、六人は歩く。見上げれば満天の星空。淡く月が輝く中、夜の闇と星の光が彩る世界。
普段では感じる事のない幻想的とも言える光景。それが少女達の心に何かを刻む。

それぞれが抱く思い。それは違う形だけれど、願いは同じ。

（いつか、またみんなで来たいな。……うん、絶対）

（何て言うのかしら？　こう、一生の思い出でいいのよね、この場合。もっと増やしていきたいな、こういうの）

（キレイな空……。いつもとは違う感じがする。また来年も……みんなで来れたらいいな）

（旅行なんて始めてやけど、やっぱ楽しいな。……はよ足治して、今度は自分の足で歩くんや。みんなと一緒に）

（今まで夜空なんて意識しなかったけど、こんなにキレイだったんだ……。きっと、友達と一緒だから、だよね）

（ミッドも地球もどこでも、星空は同じなんだな。だけど、きっとこの光景は今だけのものだ。なのは達と見るこの星空は……）

夜空を見上げ、六人はそう思う。自然と表情も穏やかになり、笑

みが浮かぶ。そして、互いにそれに気付き、顔を見合わせ微笑み合う。

「必ずまた来ようね！」

なのはのその言葉に、五人は笑顔で頷くのだった……。

「……ね、恭也」

「何だ？」

「私達の一族の話、覚えてる？」

忍の言葉に、恭也は無言で頷く。夜の一族。その事は忍から既に聞いている。それがキッカケで、恭也は忍と付き合っているのだから。

「すずかがね、そろそろなのはちゃん達に話そうと思ってるらしくて」

「……そうか」

「うん。前々から考えてたみたいなんだけど、なのはちゃんが魔法の話をしたでしょ？　あれが決心させたみたい」

忍の発言に恭也も納得する。すずかは優しく素直な子だ。故に、なのはが包み隠さず話した事は大きな後押しになったのだろう。

自分だけ隠し事をしているのは、きっと気が引けたのだ。それな

ら、その話をしようと思っても無理はない。そう恭也は思った。

「でも、ちょっと問題があって……」

「？　なのは達なら受け入れると思うが……？」

「違うの。そこじゃなくってね。その……」

言いよどむ忍。それを不思議そうに見つめる恭也。忍は少し考え、恭也に一度視線を向けて「ホントに分からない？」と尋ねた。

それに真顔で頷く恭也を見て、忍が「……鈍感」と呟いた。

「いい？　なのはちゃん達だけなら問題ないの。問題は、ユーノ君」

「……そういう事か」

そこで恭也も納得がいった。夜の一族の秘密を打ち明ける事は、ある意味の契約でもある。

同性のなのは達ならさして問題ではないが、異性であるユーノだけは話が別だった。

「そ。すずかの性格からして、彼だけ打ち明けないなんてありえない。だけど……」

「打ち明ければ、ユーノを伴侶にせざるを得ない、か」

「……まぁ、別に強制って訳じゃないけど、ね」

――それを強く意識してる時点で、すずかも満更でもないでしょうし。

そんな忍の呟きは、既に思考を巡らせ始めた恭也には届く事無く、夜の闇へと消えていくのであった。

夜風が髪を揺らし、それを心地良いと感じながら美由希は小次郎と歩いていた。

先程から会話はない。だが、不思議とそれを美由希は嬉しく思っていた。

（何だろな。……こういうの、結構好きかも）

ちらりと視線を横にやれば、小次郎もまた美由希を見ていたようで視線が合う。

それに若干気恥ずかしくなりながらも、美由希は笑みを浮かべてみた。それに小次郎も笑みを浮かべ返す。

トクン、と美由希の鼓動が速くなる。それと共に顔の辺りが熱くなる。出来るだけ自然を装いながら、美由希は顔を背ける。

（あ～、どうしよ。絶対、顔真っ赤だ、これ）

そんなうろたえる美由希に、小次郎は不思議顔。すると美由希が眼鏡を外し、息を吐いて顔を押さえ始めた。

それを見て、小次郎は前々から感じていた疑問を尋ねてみる事にした。

「美由希殿」

「へっ?!　あ、ええっと……何ですか?」

「何故眼鏡を掛けておるのだ？」

見えていない訳ではなかろう。そう言われ、美由希はどこか納得したように笑う。

これは、切り替えみたいなものなんですよ。そう答えて美由希は語る。眼鏡を外す時は、基本御神の剣士としての自分なのだと。

その切り替えを自分でつける意味合いも込めて眼鏡を掛けているのだ、と。

（なるほどな。美由希殿もやはり現代の剣士であるが故に、自らけじめをつけているか。……古き私にはなきものよ）

それを聞き、小次郎は納得したように頷く。そして、眼鏡を掛け直す美由希を見て、何気なく告げる。

――しかし、掛けぬ方が美しいと思うのだが……？

その一言が、美由希の顔を茹蛸のようにしたのは、言うまでもない。

散歩中に見つけた池の近くの芝生。そこに座って、ランサーとアルフはぼんやりと景色を眺める。

「……いいよね、こんなのも」

「……そうだな。悪くねぇ」

二人の視線の先には、水面に映る月影一つ。その儚さが、どこか今の時間を表している気がして、アルフは視線をランサーへ向ける。
その目に、強い決意を灯して。

「ねえ、ランサー」

「ん？」

「あたしって、さ……良い女かな？」

「当たり前だろ」

アルフの問いかけに、ランサーは躊躇う事無く笑って言い切る。
それに何かを決意したのか、アルフは真剣な眼差しでランサーを見つめ――――。

「リニスよりも？」

尋ねた。踏み出そうとした一歩。それは仲間じゃなく、『女』としての第一歩。
どこか不安そうな表情のアルフ。それを感じ取り、ランサーは先程までの笑みを消し、真摯な雰囲気を漂わす。

「リニスよりも、なんて言えねぇ」

その言葉に、アルフは小さく「……そうだよね」と呟く。だが、ランサーはそのままこう言い切った。

「お前はお前だからな。リニスと比べてどうすんだよ。どっちも違う部類の良い女だ」

――だから、んな顔すんな。

そう言って、ランサーはアルフの方へ向かって笑みを見せる。それは人懐っこい笑顔。

リニスもアルフも好きな、ランサーの心からの笑み。それにアルフは心から嬉しそうに、ランサーへ抱きつく。

それに若干驚きながらも、ランサーも笑って受け止める。その逞しい胸に顔を埋めながら、アルフは思う。

（ごめんよリニス。でも、アタシだって本気なんだ。ランサーは、渡さないからね！）

（一体何がどうなってんだ？　……ま、いいか。本当にツイてやがるぜ、今回は。ん……？）

そんな風にランサーが笑った時、視界のどこかで何かが光った気がした。

それが妙に気になり、ランサーはアルフを優しくひき放し、その光ったものを探しに池に近付く。

すると、そこには池に沈んだジュエルシードがあった。

「おいアルフ。フェイトを呼んでくれ」

「……どうしたっていうんだい？」

「ジュエルシードがあったんだよ」

こうして、アルフの甘い時間は脆くも崩れ去った。ちなみに、この事をアルフから告げられたリニスが、複雑そうな思いでランサー

を見つめたのは本人だけの秘密。

ランサー達の場所で、ジュエルシードが発見された頃、アーチャーはノエルと自身が割り当てられた部屋にいた。

部屋割りは、男性陣が士郎・恭也・ユーノでまず一つ。ランサー・アーチャー・小次郎で一つ。

女性陣が桃子・美由希・忍・セイバーで一つ。ライダー・ノエル・ファリン・アルフで一つ。最後になのは達五人で一つとなっている。

「で、話と言うのは」

「……薄々勘付いておられるとは思いますが、私とファリンの事です」

ノエルの言葉に、アーチャーは小さく息を吐き、尋ねる。

「何故今になって……」

「すずかお嬢様の決意を聞いたからです」

ノエルは語る。自分の事を親友達に隠して生きるのは辛い。嫌われてもいい。この旅行が終わったら、本当の自分を知ってもらいたいんだ。

そうすずかは旅行前にノエル達に宣言した。それを聞き、自分も世話になっているアーチャーに、己の事を隠している事が嫌になったのだと。

だからこそ、この旅行中に全てを話しておきたい。そう思ったのだ、と。

「……そうか。では、君達は……」

「はい。自動人形と呼ばれる存在です」

ノエルの話に、アーチャーは驚きを見せなかった。既に夜の一族の話自体は忍から聞きだしている。その身に纏う雰囲気が、記憶の中にある使徒や真祖に近かったからだ。絶対に話さないと誓わされたりもした（その時の雰囲気は、あかいあくまばりだった）

だから、ノエル達の事も当然聞いていた。しかし、驚かないのはそれだけが理由ではない。

ノエル達がどんな存在だろうとも、彼女達がすずか達をどれだけ愛し、また家族として暮らしているかを知っていたから。

その心が作り物などではなく、紛れもない本物だと感じていたから。故にその話を聞いても、アーチャーには別に驚くべきものはなかったのだ。

「……以上が、私達の話です」

「……この事を忍は知っているのか？」

「はい。許可は頂きました」

「そうか……」

そう言って、アーチャーは息を吐き、告げる。

「そろそろ時間も遅くなってきた。風呂にでも行こうと思うが、君はどうする？」

「……いいのですか？」

「それが何を指しているかは知らんが、一つだけ言っておく。私は、君達姉妹がどんな存在だろうが構わん」

アーチャーの言葉にノエルの表情が変わる。それは驚き。それを無視し、アーチャーは言い切った。

「ただ、はやて達の幸せを邪魔するのでなければそれでいい。……それに、君達は教え子でもある。情が無い訳ではないからな」

――つまり、そういう事だ。

そう言って、アーチャーは立ち上がり、背中を向ける。そんな行動にノエルは静かに笑みを浮かべる。

それをこっそり覗いていたファリンは、涙を浮かべて笑顔を見せる。

（良かった。アーチャーさんに嫌われなくて、本当に良かったっ！）

だが、この後ファリンは二人に見つかり軽く説教される。しかし、その雰囲気がどこか優しかったのは言うまでもない。

一方、ジュエルシードを回収し、笑顔のなのは達。それを後ろから見守り、微笑むセイバーとライダー。

その思いは奇しくも同じ。この笑顔がずっと続きますように。その願いを二人は心から祈る。

「……セイバー」

「何です？」

するとライダーが足を止め、セイバーに声を掛けた。それに不思議そうに振り返り、セイバーも足を止める。

「馬鹿な話だと私自身思います。ですが、敢えて聞きます。……サクラ達とスズカ達を会わせたいと思った事はありませんか」

「……そう、ですね。ない、と言えば嘘になります。きっとそれが叶うなら楽しいでしょう」

そう答え、セイバーは空を見上げる。そこには満天の星空がある。ライダーもそれにつられるように見上げ、呟く。

――この星空を、サクラ達も見ているでしょうか？

――私達がそう思うなら、そうなのかもしれません。

その呟きに答えるセイバーの声は、どこか懐かしむ響きがあった……。

楽しかった旅行も、あっという間に終わりを向かえ、宿を引き払う士郎達。

それを眺め、セイバーがライダー達にある提案をした。それを、苦笑しながらも了承する四人。

「さ、ミユキ。お願いします」

「は～い。じゃ、撮りますね。はいチーズ」

旅館をバックに、微笑むセイバー。それとは対照的に無表情のアーチャー。ライダーはどこか笑みを浮かべ、小次郎は普段の顔。ランサーは面白そうに笑顔を浮かべ、Ｖサインまでしている。

このサーヴァント達の写真は、それから始まるセイバーのアルバムの最初を飾る事になる。そして、それを見ていたなのは達も参加し、撮られた写真がその下に飾られる。

そこにはセイバーの字で、”かけがえのない友達と、愛しい家族と共に”と書かれる事となる……。

「おっかしいな～」

「何がおかしいんだ、エイミィ」

オペレーターにして、自身の補佐官を務める女性。エイミィ・リミエッタの声に、クロノはその手を止める。

現在、次元航行艦アースラは、行方不明の少年と次元震の原因を突き止めるべく調査中なのだが……。

「いやさ、輸送船が破壊される程のレベルにしては、色々妙なんだよね」

「だから何が言いたい」

「次元震じゃないんじゃないかな、これ」

エイミィはそう言って、モニターに様々なデータを表示していく。
それは過去の次元震のデータと今回のものとの比較だった。
確かに似ているが、どこか違う。ぱっと見ただけでもそう見えるデータに、クロノが尋ねる。

「なら、君はどう思っている」

「……原因は分からないし、あくまで勘だよ？　これ、人為的な何かが原因だと思う」

「……次元震を作為的に起こした者がいると？」

「ううん。多分だけど、そんな意図はなかったんじゃないかな？　これ見て」

エイミィが操作して表示されたデータは、この次元空間から近い管理世界のものだった。そこには、信じられない程の魔力反応が表示されている。

「……これは？」

「次元震が起こったのと、ほぼ同じ時間の近くの管理世界のデータ。これが原因じゃないかなと思うんだけど……」

でも、何の根拠もないし、ね。そうエイミィは苦笑い。だがその目は、これが絶対関わっていると信じている目だ。

クロノもそれを感じ、そのデータに目をじっくり通す。

「……丁度その世界で、局員が事件担当していたのか。名前は……」

――クイント・ナカジマ、か。

静かに、またどこかで運命の輪が動き出していた。その輪が、なのは達と噛み合うのは、まだ十年近い時間が必要だった。

――――――

幕間2

夜も深まり、明かりも消えた室内。だが、そこにあるのは安らかな寝息などではなく……。

「でな、みーちゃんがな……」

「そうなんだ……。あ、そういえばこの前ね」

真っ暗な室内に布団が五つ。そこでうつ伏せになって、顔を出し、なのは達は楽しいお喋りタイム。

普段ならもう寝ている時間でも、大人もいなければ保護者もいない状況では、こうなるのが子供というもので……。

「にゃはは、それじゃアーチャーさんが可哀想だよ」

「でも、はやてったら楽しそうに笑ってたんだから」

「当然や。あれはアーチャーが悪い」

自身満々に言い切るはやてに、アリサもすずかも笑みを浮かべる。

大抵、この五人（フェイトがいない頃は四人）で話す時、良く話題になるのはサーヴァント達だ。

身近な共通点であり、何より話に事欠かないのだ。面白い話から大変な話まで、実に多岐にわたる事もあり、気が付けばこういう流れになる。

もっとも、セイバー達はセイバー達で、話し出すとなのは達の話題に終始するのでどっちもどっちだろう。

「そういえば、フェイトちゃん」
「何？」
「ランサーさんって、魔術は使えるんだよね？」
なのはの問いにフェイトは頷く。それに興味を持ったのは、ファンタジーが好きなすずかだ。
「魔術って、どんなの？」
「なのは達のとは違うんでしょ？」
すずかとアリサの言葉に、フェイトは少し考えて話し出す。以前、ランサーから聞いた事を思い出しながら……。

”ヒト”ならざるもの

フェイトが語ったのは、ルーン魔術に関しての話。それを聞いて、なのはは不思議顔。
何故なら、なのはがセイバーから聞いた魔術は、それとはまた違ったものだったからだ。
「……私が聞いたのとは、違うんだね」
「なのははセイバーさんに聞いたの？」
「うん。ええっと、強化とか流動とか何だか色々あるんだって」

アリサの言葉になのはは必死に記憶を辿る。そして出てきた単語を告げたのだが、それでどういう事が出来るのかは、なのはにも理解出来ていない。

だが、アリサはその単語だけで大体の事を察したようで、頷いてこう言った。

「つまり、魔術っていうのも分類があるって事ね。ルーンとかも魔術で、強化とかも魔術なんでしょ。分かり易く言えば、学校の教科と一緒よ」

学問という括りで国語や算数等に分けるように、魔術も大きな一つの括りであり、それを細かく分類するとルーンや強化等に別れていくのだろう。

そうアリサは説明した。それにフェイトも頷き、魔法も同じようなものだからとそれを後押しした。

なのは達は身近な例えで語ったアリサに尊敬の眼差しを向ける。それをどこかくすぐったそうに思いながらも、満更でもない感じのアリサ。

「でも、セイバーさんは魔術使えないんだよね？」

「そうなの。魔力はあるんだって。でも、魔法も魔術も使えないの」

「セイバーは宝具に魔力を使うんだよ。サーヴァントは大抵そうだって、ランサーも言ってたし」

すずかの言葉に苦笑いのなのはに、フェイトが笑みを浮かべながらそう言った。

だが、そのフェイトの発言に四人が首を傾げた。そして、それに

今度はフェイトが不思議顔を浮かべる。

「……知らないの？」

フェイトの言葉に頷く四人。宝具等と言うものは初めて聞く言葉だった。そして、そこでなのは達はふと気付く。

自分達があまりセイバー達の事を知らない事に。聞いた事は何度かある。答えてくれた事もある。だが……。

（サーヴァントが何なのか、って事は聞いてなかったな。……あれ、私知らない事多い？）

（小次郎の奴、アタシにはまだ早いとか言ってたのよね。……それにしても宝具って何？）

（ライダーの名前は教えてもらったけど、宝具なんて初めて聞いたよ。……どんなモノなんだろう？）

（う～ん、アーチャーは昔の事聞くとめっちゃ表情怖なるからなぁ。……聞くならランサーさんやな）

（し、知らなかったんだ。……教えちゃっても良かったのかな？）

そんなのは達に、フェイトはどこか申し訳なさそうにしながら語り出す。宝具の事やサーヴァントの事を。

彼らは英霊と呼ばれる存在で、異世界から来た者達。ランサーは本人曰く「人間としてはとっくに死んでる」らしく、大抵のサーヴァントがそうだと言う事。

そして、彼らには”宝具”と呼ばれる切り札があり、それの使用には基本魔力が必要だと言う事。ランサーは、名前の通り槍がそれ

なのだと。
ちなみに、同じ話をプレシアにした際、死者蘇生ではないとランサーは明確に断言した。魂のみになり、都合により仮初の肉体を与えられる事を伝えた。
それを聞いたプレシアは、どこか悔しそうな表情で黙る事しか出来なかった。人間の力ではなく、世界によって束縛される。それも聞き、プレシアは完全に興味を失った。同時に、世界に縛られる事になっても自分を貫けるランサーに、改めて感心したのも事実だったが。

なのは達も死者と言われても、それ程驚きはしなかった。初めて出会った時の異常さから、その方が納得出来るとさえ思った程だ。
そして、その話を聞いて、アリサは疑問を浮かべる。小次郎はアサシンと名乗っていた。なら、宝具とやらは何なのか。
アリサはアサシンの意味を知ってはいる。だが、小次郎の風貌や言動などが”暗殺者”という言葉とは少しも合致しないので、困惑していた。
そんなアリサとは多少違うが、宝具が見当もつかないのはすずかも同じ。ライダーは魔眼の事を話してくれたが、それが宝具とは思えなかったのだ。

「じゃ、アーチャーの宝具は弓やな？」

「そう……だね。多分そうだと思うよ」

「セイバーは？」

「剣士って意味だと思うから……剣、かな」

その名から予想が付けやすいなのはとはやてに、フェイトは少し

不安そうであるもの、そう答えていく。
それを聞き、なのはは、セイバーが手にする見えない剣を思い出す。どんな剣なのか分からないが、セイバーの切り札なら、おそらく凄いものに違いないと、なのはは確信していた。
一方のはやては、アーチャーが弓を持っているところを見た事がない。故に、何とかその姿を想像しようとするが、思いつくのはいつもの皮肉屋スマイル。

（……ダメや。全然想像できん。それどころかイライラしてくるわ）

頭を軽く押さえながら、はやてがそんな事を考える横で、すずかがなのはに質問中。内容は、セイバーとライダーは昔一緒に暮らしていたらしいが、何か聞いてないかという事。
それになのはは、以前セイバーから聞いた衛宮邸の話を語り出す。それを聞き、すずかは聞き覚えのある名に気付く。

「桜さん？」

「ふぇ？　うん。セイバーが話してくれたよ。凛って人の妹さんで、お料理上手なんだって」

「……凛さん……妹……」

「どうしたのよ？」

何かを呟き出したすずかに、困惑のなのはと戸惑うフェイト。アリサは不思議そうに声を掛け、はやてはその声で意識をすずかへ向けた。

「あのね、その桜さんって人の事、セイバーさんは何て言ってた？」

どこか恐る恐ると言った感じのすずかに、なのはは疑問を感じながらも思い出す。
セイバーが桜をどう言っていたかを。そして、若干の間が開いてから……。
「優しくて、暖かで……強い人って言ってたよ」
「……そっか。やっぱりライダーの言ってた通りなんだ」
なのはの答えに、すずかは噛み締めるように呟く。ライダーの言っていた、自分達を家族や友人と呼んだ相手。その一人がセイバーなのは、その答えで確信出来たからだ。
そんなすずかに、なのはが何気なく言った言葉が大きな衝撃を与えた。
「そういえば、セイバーが言ってたけど、その人も少し普通の人とは違ったんだって」
思わず息を止める。その表情は恐怖一色に染まっていた。幸い下を向いていたから、顔は見えないだろうが、心臓の鼓動が早鐘のように響いていた。
破裂しそうな思いを秘め、すずかはそのまま耳を澄ます。すると、なのはの言葉にはやてが反応し――。
「何が違ったん？」
「確かね、魔術師の家で生まれて、養子に行ったんだって。その時に決まりか何かで、凛さんと他人みたいに接しなきゃいけなかったんだって言ってた」

「それは嫌だね」

「でもね、セイバーが言うには、その決まりも色々あって無くして、姉妹に戻ったんだって」

「そうなの。でも、複雑よねその状況。姉妹なのに姉妹じゃないって」

アリサの言葉になのは達は頷く。なのはもフェイトも知らない。自分達も似た様な環境にいるなどと。その過程こそ違え、姉妹でないのに姉妹という表現は、二人にも当てはまるものがあるのだ。

すずかはその話を聞きながら、小さく「……それだけ？」と尋ねた。

それになのはは記憶を辿り、セイバーとの話を思い返そうとしていた。そんななのはを横目に、はやてが疑問に感じた事を聞いた。

「すずかちゃんは何か知っとるんか？」

「えっ？」

「いや、セイバーさんが知っとるって事は、ライダーさんもやろ？そやから聞いてみたん……やけど……」

後半尻すぼみになっていくはやて。段々すずかの表情が曇っていったからだ。まるで聞かれたくない事を聞かれたような反応。それが今のすずかの顔に如実に出ていた。

そんなすずかだったが、その内心は揺れていた。それはライダーが話してくれた事を話すか否か。桜が自分のように人には言えない

苦しみを背負っていた事を。

（……どうしよう？　桜さんはライダーの大切な人だし、それに内容も内容だから……）

「一つだけ約束してくれる？」

「約束？」

「うん。……桜さんの事、悪く言わないで欲しいんだ」

それは切実な願い。すずかとしては、ライダーの大切な桜を嫌って欲しくない事と、自分の憧れでもある桜の事を勝手に話す事に対するせめてもの償いだったのだろう。

だが、それは彼女の本心からの想いでもある。無意識にすずかは、この話を自分の話と同じに捉えていたのだ。

「実はね……桜さんには、人に言えない秘密があったの。受け入れてくる人の方が少ないような内容の……ね」

すずかは桜の事を全て聞いた訳でない。ただ漠然とそう言われただけなのだ。自分と桜は良く似ていると。それ故、すずかは明確に桜が抱いていた秘密を知らない。

だが、その状況の辛さと言い出せない申し訳なさは痛いほど理解出来ていた。今の自分が、まさにそうなのだから。

「詳しい話はライダーもしてくれなかった。でも、その秘密を親しい人達に隠して生きるのは、凄く辛かったんだと思う」

だからだろう。語るすずかの口調にも熱が籠る。それは普段の彼

女からは考えられないもの。

「けど、けどね？　話したくなかった訳じゃなかったんだよ？　ただ、それを話して嫌われるのが怖かったの！」

その目に涙を浮かべて、すずかは語った。それは奇しくも桜の想いを明確に言い当てた。そして、同時に自分の想いも……。

そんなすずかを、なのは達は息を呑んで見つめていた。そして、やや間を置いてアリサが言った。

「……気持ちは何となく分かるわ。でも、アタシがその桜さんに会えるならこう言ってる。例え貴方がどんな人でも、セイバーさんやライダーさん達のように、貴方を大切に思ってる人は嫌ったりしないって」

「うん、私もかな。それに、受け入れられないって言っても、それはその人を良く知らないからだよ」

「フェイトちゃんの言う通りやな。わたしもアリサちゃんと同じ気持ち。わたしなんかは、逆に話してくれたら嬉しいわ。ああ、わたしの事そんなに信頼してくれてるんやって思えるから」

そんな三人の答えにすずかは意外そうな表情を浮かべていた。そのすずかになのはが笑顔で最後に告げる。

「それに、すずかちゃんがそんなに大事に思う人だもん。きっと、私達も嫌ったりしないよ」

そのなのはの言葉に、すずかは涙を一筋流し、嬉しそうに頷く。

――そうだね。なのはちゃん達ならきっとそうだよ。

――にゃはは、ちょっと単純かも？

なのはが言った一言に、アリサが「一緒にするな」と噛み付いて、はやてが「そうやそうや」と囃し立てる。それを横目に、フェイトは時計へ視線を移し「あ、こんな時間だ……」と呟いた。

すずかは賑やかになるなのは達を眺めて、旅行前の決意を新たにした。桜のように、自分も勇気を出そうと。

（すずかちゃん、やっといつもの顔に戻ったや。……そんなに好きなんだね、桜さんの事）

出来るなら、一度会ってみたいなぁ。そんな事を思いながら、なのはは言い放つ。

「と、とりあえずそろそろ寝ようよ」

余談だが、翌朝五人は桃子にお説教される。理由は言うまでもない。

次元航行艦アースラ。その一角にある艦長室。そこにある畳に座り、リンディはある資料へ目を落としていた。

「発見者のユーノ・スクライア君、か」

それは、次元震に巻き込まれた輸送船に乗り込んでいた人間のリスト。その中で唯一消息不明なのが、ユーノだった。

救助された乗組員の話によれば、彼は自ら次元空間に飛び込んでいったとの事。おそらくロストロギアである『ジュエルシード』を追って行ったのだと、リンディは予想していた。

現在、彼がどこにいるのかは依然として掴めていない。だが、リンディには心当たりが一つだけあった。それは――。

「第九十七管理外世界……」

そう、地球だった。未だに付近の管理世界で何の情報も得られない以上、残る場所はそこしかない。

しかし、管理外を調査するには、上の許可がいる。そして、それが中々通らないのもリンディは良く知っている。

明確な根拠や次元世界の危機等であれば、上層部も許可を出すが、今回のように行方不明者の捜索だけでは厳しいのだ。

（何とかすぐ許可が下りるような……そう、キッカケがあればいいのだけれど）

そう考えてリンディは頭を振った。何を馬鹿な事をと思ったからだ。それでは、何か事件が起きてくれるのを待っているみたいではないかと。

それに、許可が中々下りないだけで、時間さえ掛ければいずれ許可は下りる。そう自分に言い聞かせ、リンディは呟く。

――このまま、何もなければいいのだけれど……。

時の庭園。そこにあるプレシアの部屋。ベッドで横たわるプレシアの横で、機械を操作するリニス。

すると、何かが反応を示す。それは、地球に近い次元空間にいる管理局の次元航行艦に、動きがあったと言うもの。

「……いつもの調査活動ですか」

安堵し、モニターから視線を移すリニス。プレシアは静かに眠っている。だが、その体が病魔に蝕まれ、余命幾ばくもない事をリニスは知っている。

ランサーのルーンの加護により、本当ならありえない程の生命力を保っているが、それもそろそろ限界が近い。それ故、リニスとランサーは焦っている。

アルフには詳しい事をあまり知らせていない。それは、どこでフェイトに知られるか分からないからだ。本人もそれを危惧し、進んでリニスの考えに従い、行動している。

「……プレシアだけでなく、アリシアの体も長くは持ちません。ランサー、出来るだけ早くしてください」

誰に聞かせるでもなく、リニスは祈るようにそう呟く。

ジュエルシードが全部揃うまで、残りあと七つ。

ーーー

無印六話　前半

「残りは七つですか……」

「ああ」

「……ランサー、分かっているとは思いますが」

「任せろ。後一週間の内にケリをつける」

リニスにはっきりと言い切り、ランサーは通信を切る。何も映らなくなったモニターを見つめ、リニスは呟く。

「信じています、ランサー。……私も、プレシアも」

ジュエルシードを巡る物語の終幕は、近い……。

加速する流れ、知らされる事実

通信を終えたランサー。そして、それを隠れるように見守るアーチャー。アルフは、リビングではやてやフェイトと朝食用のホットケーキを焼いている。

小さく歯を食いしばり、拳を握るランサーに、アーチャーは何も言わない。会話の流れから、フェイトの母親が長くは持たないという事を理解したからだ。

「……残り七つ。探索していない場所も少ない。終わりも見えた、か」

「……ああ」

アーチャーの現状確認に搾り出すような声でランサーは答える。その表情は、まさに鬼気迫るものがあった。

そんなランサーに、アーチャーは慰めも皮肉も言わない。自分と立場を置き換えて考えれば、そんな事をしても無意味と知っているからだ。

故に、彼がランサーに掛ける言葉は一つだけ。

「そんな顔ではフェイト達に気付かれる。少しクールダウンしていろ」

「……言われるまでもねぇ」

そう告げてアーチャーは部屋を出て行く。その姿が見えなくなってから、ランサーは呟く。

――ったく、アイツにだけは心配されたくね～のによ。

アーチャーとランサー。この因縁の関係にも、微かだが変化が出始めていた……。

朝食を終えたなのはは、セイバーに見送られて美由希と途中まで一緒に歩き、バス停まで向かう。

あの温泉旅行の後、一段と家族間の絆が強くなった気が、なのははしていた。

まぁ、桃子が再び『高町セイバー』の話を持ち出したが、それもセイバーは断った。

ただ、桃子の懇願に負け、二人っきりの時は”母さん”と呼ぶ事にされていたが。

（きっと、ものすごく恥ずかしがってるんだろうな）

なのはの脳裏に、顔を赤くしながら「か、母さんっ」と呼ぶセイバーの姿とそれを嬉しそうに聞いてる桃子の顔が浮かんだ。

そんな事を考えている内にバス停に着き、計ったようにバスが到着。

そして中に乗り込み、なのははアリサとすずかに手を上げ、笑みを見せてふと思う。

（そういえば、今日ユーノ君が出かけるって言ってたっけ。行き先聞くの忘れたけど、どこに行くんだろ？）

そのユーノは八神家に来ていた。ランサーとアーチャー、二人に呼び出されていたのだ。昨日の探索の後、明日話がある、と真剣な眼差しで言われて。

チャイムを押すと、待っていたのかアーチャーが出迎えた。そのままユーノは、案内されるままアーチャーの部屋へと足を踏み入れる。

部屋の中には、ランサーがいつもとは違い戦闘服で座っていた。

その雰囲気から、只事ではないとユーノは感じ、表情を強張らせる。
アーチャーに促され、ランサーの向かいに座るユーノ。それを確認し、アーチャーがドアのカギを締めた。

「それで……話というのは？」

「……ジュエルシードを全部一遍に使った場合、最悪どうなる」

ランサーの放った言葉にユーノは驚愕する。確かにジュエルシードは、今まで手に入れた分を、ランサーがフェイトの母親の治療に使用するため、全て所持している。
しかし、それを一斉に使うとは思っていなかったのだ。精々二つか三つを使い、病気を完治出来るまで同じ事をすると思っていたのだから。

「……分かりませんが、これだけは言えます」

ユーノは一度息を整え、ランサーの目をしっかり見据えて断言した。

「暴走、なんてものじゃすまない事になります。それこそ、最低でも次元世界の一つや二つ消し飛ぶレベルで」

「……そうか」

「止める術はあるか？」

「……おそらく無理です。ジュエルシード全ての魔力が暴走したら、人間の力じゃ止められない」

アーチャーの問いかけに、ユーノは出来るだけ冷静に答えた。本当なら叫んでいてもおかしくない。だが、ここにははやてやフェイトがいる。

下手に騒いで二人に聞かれでもしたら不味い。それがユーノの激情を辛うじて抑えていた。

一方のランサーとアーチャーは、ユーノの答えに想像が間違っていなかった事を確認していた。

”聖杯”というモノを知っている二人にとって、ジュエルシードの暴走がどれ程恐ろしいものかは容易に想像出来たからだ。

そして、ユーノの言葉で確信した事があった。それは、その災害の原因は魔力である事。だからこそ、アーチャーとランサーは同時に頷く。

（いざという時の備えは理解した）

（これなら、気兼ねなくやれる！）

そう、それを止められる可能性がアーチャーにはある。だからこそ、ユーノを呼んだのだ。

ランサーの対魔力を持ってしても、簡単に破れなかった魔法を使える彼を。

「ユーノ、すまないが少しやってほしい事がある」

「……何ですか」

「バインドをアーチャーに掛けてみてくれねぇか？」

突然の申し出に戸惑うユーノ。てっきりさっきの話絡みだと思っていたからだ。

ランサーの言葉の真意を量りかねているユーノに、アーチャーが告げた一言は、凄まじい衝撃となって彼を襲った。

――――もしかすると、その万が一をどうにか出来るかもしれんぞ？

いつものように、屋上で三人揃ってお昼を食べるなのは達。その表情は心なしか、普段よりも明るい。

「で、どう？」

「うん。お母さんもお父さんもいいよって」

「じゃあ、後は……」

「フェイトのママを治して……」

「翠屋で全快パーティーなの！」

三人が話しているのは、この一連の件が終わった後の事。フェイト達を主役にした全快祝い。それについての打ち合わせだ。

生憎はやては自宅にフェイトを泊めているため、直接の話し合いは出来ないのだが、メールでのやりとりで細かい事を話し合っていた。

そのままパーティーの事を話していると、すずかが急に思い詰めた表情を浮かべ、なのはとアリサを見つめた。

「……あの、ね。実はなのはちゃん達にお話があるんだけど……」

「どうしたの？」

「何よ？」

不思議そうにすずかを見つめるなのはとアリサ。その視線をしっかりと見返し、すずかは告げた。

今日、はやての家に行ってフェイトやはやて、ユーノも交えた五人に話したい事があるのだ、と。

そのすずかの真剣な眼差しに、二人も只事ではないなと感じ、はっきりと頷き、その提案を受けた。

そして、それを合図にチャイムが鳴り、すずかは先に教室に戻ると言って去っていった。

「……何かおかしかったね、すずかちゃん」

「そうね。……ま、いいわ。どうせ後で分かるんだし」

そう言って立ち上がるアリサ。なのはもそれに続くように立ち上がり、ふと空を見上げる。

（さっきのすずかちゃんの目……鍛錬をお願いした時のユーノ君の目みたいだった）

それは何かを決意した者の目。それを知るからこそ、なのはは思う。すずかの決意を無駄にしないように、自然体であろうと。

何があっても親友。自分が魔法と出会った事を受け止めてくれたすずかを、今度は自分が受け止める番なんだ、と。

「なぁユーノ君、どないした？」

「ユーノ、何かあったの？」

はやてとフェイトの視線の先には、何かを真剣に考えるユーノがいた。先程アーチャーの部屋から出てきてからというもの、ずっとこうなのだ。

昼食中もどこか上の空だったユーノ。それは、楽しく三人で会話したいと思っていた二人にとって、不思議でしかなかった。

いつもは良き聞き手であり、話題がなくなりそうになるとさり気無く別の話題を振ってくれるユーノ。

そんな彼が話題どころか、相槌さえしないなど始めてだったからだ。

「え……？　ああ、ごめん。ちょっと、ね」

「考え事？」

「……うん。色々とね」

「そか。でも、目の前に美少女が二人もおるんやから、少しはこっちの相手もし」

そう言って笑うはやて。それにユーノは苦笑いを浮かべ「自分で言う？」と返す。それにはやてがからかうように「何や？　わたしは可愛くないんか」と返し、ユーノは参ったとばかりに両手を挙げる。

それを見て楽しそうに笑うはやてとフェイト。そして、そんな三人を眺めて微笑むアルフ。

（ホント、フェイトが良く笑うようになったよ。……はやて達には感謝しなくちゃ）

そう思うのも一瞬。すぐに視線を細め、念話を送る。相手はユーノ。

【分かってるとは思うけど……】

【フェイト達には言わないよ。というか言える訳ないだろ。……ジュエルシードを一斉に使おうとしてるなんて】

【でも、何とかなりそうなんだろ？】

【アーチャーさんのアレが、魔法に通用するのは証明された。それに、魔力自体を霧散させるものまである。確かにあれなら何とか出来るかも知れない……でもっ！】

【心配いらないよ。ランサーもいるんだ。そのための……ええっと】

そこで詰まるアルフ。アルフが言いたい事を理解し、ユーノが若干ため息混じりに答えた。

【……ゲイジャルグ】

【そ～そ～、それそれ。な、大丈夫だよ】

楽観的なアルフの口調に、ユーノは内心苦笑い。だが、そんな自分もまた、どこかで同じ気持ちを抱いているのを、ユーノは感じていた。

放課後、なのは達三人は八神家へと向かっていた。すずかによれば、ユーノも八神家にいたらしく、そのまま残って待ってくれているとの事。

すずかからの大事な話という事で、フェイトも探索を後回しにしてくれた。勿論、ランサーやアーチャーも了解済み。

歩きながら、なのは達には会話がなかった。決して意識した訳ではない。だが、何故か喋るのが憚られたのだ。

しかし、その沈黙は気まずいものではなかった事もある。それは、すずかを中心に手を繋いでいるからなのだろう。

右手をなのはが、左手をアリサが繋ぎ、その互いの温もりを感じながら歩く三人。

声にせずとも、その暖かさが告げている。何があってもこの関係は変わらない。それは、すずかがアリサに言った言葉。

（何があってもアタシ達はアタシ達。そう言ったのはすずかだから）

（絶対、変わらないし変えさせない。私の大切なモノは）

（……不安が消えていく。そうだよ、ライダーが言ってた。世界は捨てたものじゃないって）

（（（だから、きっと大丈夫））））

同時に同じ結論を出し、笑みを浮かべる三人。それに気付き、更に笑みを深くする三人。そんな三人の視界に、八神家が見えてくるのであった……。

八神家内、はやての部屋。そこにすずかを始めとした六人が揃っていた。その視線は、皆一様にすずかに注がれている。

「……あのね、話って言うのは……私達の一族の事なんだ」

その視線をしっかりと受け止め、すずかは語り出す。自らの事を。その異常性を。それをなのは達は軽く驚きはしたものの、奇異の目で見たり、嫌悪の感情を示す事もなかった。

それは、すずかを良く知っているから。彼女がどういう人間で、どんな心の持ち主かを分かっているからだ。

それに加えて、なのは達の非日常への適性が高くなっていた事もある。何しろ、英霊や魔法などに関わっているのだ。

よって、今更吸血鬼と言われても……。

「……どう？　分かってくれた？」

「うん。すずかちゃんはすずかちゃんって事だね」

話を終えたすずかに、なのはが告げた一言が全てだった。それに頷いていくフェイト達。その表情は皆笑顔。

それを呆然と見つめ、固まるすずか。それを五人は笑顔で見守る。

やがて、なのは達の行動を理解し、すずかは瞳を潤ませて微笑んだ。

その行動が喜びと感謝の表れである事を察したなのは達は、そんなすずかに微笑みを返す。

（すずかは強いな。私が同じ立場なら、きっと泣いてると思うよ）

フェイトは瞳を潤ませながらも、涙を流さないすずかを見ながらそう思った。この中で一番なのは達との付き合いが短いフェイト。だからこそ、フェイトはすずかが自分の秘密を話し出した時、内心動揺を覚えると同時に嬉しさも感じていた。

それは、自分も秘密を話す『親友』に含まれたから。すずかは言った。親友であるなのは達にこれ以上隠し事はしていたくないと。

（私も……親友なんて……）

その言葉を思い出し、フェイトは視界が滲むのを感じて慌てて顔を背けた。

だが、それをユーノが気付き、周囲に気付かれぬよう、フェイトへ向けて念話を送る。

【どうしたの？　フェイト】

【えっと、目にゴミが入っちゃって……】

【……そう。あまり擦らないようにね。眼球が傷付く事もあるから】

【わ、分かった。ありがとうユーノ】

【どういたしまして。……僕も、きっとなのは達も、フェイトの事はすずかと同じように思ってるから】

【えっ……？】

【”親友”って事】

ついユーノの言葉に振り向いたフェイトに、ユーノはそう答えて

微笑み一つ。
それに、フェイトは顔を赤くし、また顔を背ける。だが、その原因が先程と違う事をフェイトは感じ、呟く。
「どうしたんだろ？　……鼓動が早いし、顔が熱いし……病気かな？」
それを後ではやてに相談し、はやてが面白がって色んな事をフェイトに吹き込むのは、また別の話。
――――――

無印六話　後半

すずかの告白という出来事も無事に終わり、なのはとフェイト達探索組は連れ立って出かけていく。
それを見送るはやて達。だが、すずかだけはどこかまだ様子がおかしかった。
それは、ついさっきまで話していた事が影響していた。

（やっぱりユーノ君は優しいんだね）

そう思い、頬を微かに赤くするすずか。はやてもアリサもそれには気付かず、ただ今後の事を話し合っている。

（私の事を受け入れてくれただけじゃなく、別にしきたりに縛られる必要はない、なんて……）

すずかは、ユーノにだけ別に話さなければならない事があった。
それは、契約の事。
異性であるユーノには、伴侶となるか、全てを忘れるか、どちらか選んでもらわねばならないとなっていたからだ。
厳密に言えば、結婚ではなく誓約に近いものなのだが、姉である忍と恭也の馴れ初めを聞いていたすずかとしては、頭がその事で一杯になっていたのだ。

そして、すずかは契約の事を話すため、ユーノに相談があると言って話をしたのだが……。

「すずか、それはさすがに不味いよ」

「そ、そうだよね。いきなりこんな事を「違うよ」……え？」

真剣な表情ですずかの目を見つめるユーノ。その目は怒りを宿していた。

「僕が言いたいのは、しきたりに無条件で従うのが不味いって言ってるんだ」

ユーノは語る。確かにしきたりは大切かもしれない。だが、それはあくまでも状況に合わせていかなければダメなのだと。

だから、すずかに言い切る。無理に自分を伴侶になんてしなくていい。すずかが、本当に好きな相手と幸せになってほしいから。

そうユーノは真剣な眼差しで告げた。その力強さに、すずかは声を失う。

「心配しないで。絶対すずか達の事は誰にも言わない。……墓まで持ってくよ」

先程までの真剣さを消し、ユーノは最後におどけるようにそう言って、なのは達と共に探索へと向かったのだ。

その後姿を見つめ、すずかは思う。ユーノの気持ちを嬉しく感じ、そして同時に……。

（あんな風に見つめられた事、なかったな）

ユーノの眼差しを思い出し、すずかは顔が赤くなるのを感じた。

そして、小さく呟く。

――私、本当にユーノ君を……？

そんなすずかを優しく風が撫ぜて行く。少女の心に、少し早い大人への階段を感じさせながら……。

終局へのカウントダウン

「まさか、こんな街の真っ只中にあるなんて……」

「でも、封印も終わったし、これで残りは六つだね」

どこかホッとした感じで呟くユーノ。それを聞きながら、なのはが言った言葉に頷くフェイト。その表情は笑顔。

何故なら、残りのジュエルシードの場所は既に特定しているからだ。

「でも、問題はいくつもある。まず……」

「海、だからね」

「それと、六つともそこにあるってのも厄介だねぇ」

ユーノの指摘にフェイトとアルフが答える。ちなみに今回の封印作業には、セイバーもランサーも来ていない。

セイバーは仕事が抜けられず、ランサーはアーチャーと話し合う事があると八神家に居残り。そして、それでも不安がない理由とし

ては……。

「ですが、纏めて封印できれば手間も時間も短縮できます。その方がフェイト達には都合がいいでしょう」

「だね。ライダーの言う通りだよ」

そう、すずかの迎えに来たライダーがいるからだ。封印に向かっている途中、後ろからライダーがなのは達に合流したのは、つい三分程前。

どうやらすずかの迎えのために八神家につくなり、そのすずかに頼まれ、なのは達の手伝いをしにきたらしい。ライダーは「すずかに頼まれまして」と言ったので間違いない。

実際、フェイト達が合流してからは発動前に発見出来るようになった事もあり、ほとんどセイバーやランサーがいなくても大丈夫な状況ではある。

しかし、いつ何があるか分からないので、大抵ランサーが同行していたが。

「でも、一度に複数のジュエルシードが発動したら大変なんだ。海のジュエルシードは、いつも以上に慎重に行かないと」

ユーノの纏めに、なのは達は無言で頷く。その後も帰り道での話は、海に眠るジュエルシードをどう対処するかに終始した。

そこで決まった方針としては、探索魔法で一つずつ位置を特定し、それを強制発動させ封印する事を繰り返すというものだった。

さすがに海の中を潜って探索するのは骨が折れるし、何よりも時間の余裕もない。なのはやフェイト達は知らないが、ランサーはアルフに告げていた。あまり猶予がなくなった事を。

「二日に分けて終わらせよう。なのはとフェイトの負担が大きいけど……」

「私は構わないよ。早くフェイトちゃんのお母さんを治したいし」

「私もいいよ。体調はいいし、何より充実してるから」

ユーノの表情が曇るのを見て、なのはもフェイトも笑顔で答える。それにユーノが苦笑い。二人に気を遣わせた事を理解したのだ。

すると、アルフがそんなユーノに一言。

「アタシがいるって事忘れんじゃないよ」

アルフの案はこうだ。自分が探索と強制発動を担当し、フェイトとなのはが封印を担当する。ユーノは行動時の飛行魔法を担当し、少しでもなのはやフェイトの負担を減らす。

その案を聞き、ライダーが小さく「意外と頭も使うのですね」と言った。そんなライダーの発言に怒りを見せるアルフ。それになのは達三人が笑ったのは、当然の事だった。

ライダーと別れ、まだ余裕があると言って、なのはとフェイトはユーノとアルフと共に、海鳴海浜公園へと来ていた。

話し合いの結果、今日の内に探索だけでも終えておこうとなったからだ。位置を把握し、大体の場所を記憶して明日に備える。

ユーノが展開した結界の中、その作業をなのはとフェイトがしている中、アルフとユーノは邪魔にならないように、念話である事を話し合っていた。

【これが終わったら、あんたはどうすんのさ？】

【僕？】

【当然だろ？　あんたも部族の所に帰るのかい？】

アルフの言葉に、ユーノは言葉を失った。きっと、これがなのは達と出会った頃なら、迷う事無く帰ると言えただろう。

だが、今のユーノにとって、帰るべき場所は”高町家”になっていた事に気付いてしまったのだ。

士郎から”子供”にしたい、と言われた日。桃子から”お母さん”って呼んでもいいわよ、と言われた日。美由希や恭也から”弟”のように思ってる、と言われた日。

セイバーから”仲間”だと言われた日。そして、なのはから”親友”と呼ばれた事を。

それらの事が思い出され、ユーノは悟ったのだ。自分がどう思い、どうしたいのかを。

【……そうだね。帰るよ】

【そうかい。じゃ……】

きっとなのは達も寂しくなるね。そう言おうとした。だが、アルフがそう続ける前に、ユーノははっきりと告げた。

【高町の家に、ね】

その言葉に、アルフは驚いた。そう答えたユーノの声は、静かだ

ったが反論させない力強さがあった。

【……そっか。あんたにも帰る家があったね】

【アルフ達はどうするの？】

【ま～、まだ分からないけど……多分時の庭園に戻るんじゃないかな】

アルフのその声に不安や嫌悪と言った感情はない。何故ならあそこにはリニスがいる。そして、まだどこか割り切れない気持ちもあるが、フェイトの母、プレシアもいるのだ。

そして、もしかすればそこに……。

「終わったよ～」

「これで、六つ全部の位置は大体把握したから」

アルフの思考はそこで止まった。なのはとフェイトが戻ってきたのだ。そして、バリアジャケットを解除し、公園へと降り立つ。

それを確認し、ユーノが結界を消して周囲の状況が元通りに戻った。

「少し疲れたかも。お腹も空いたし」

「私もだよ。今日は晩御飯何だろ？」

「桃子さんが朝言ってたじゃないか。シーフードカレーだよ」

歩きながらそんな会話をするなのは達。それだけ聞けば、歳相応

の三人なのだろう。アルフはそんなフェイトを真剣な表情で見つめる。

「いつか教えるからね、フェイト。フェイトにはお姉ちゃんがいるって」

そう呟き、アルフもまた歩き出す。その表情は普段の陽気なものへと変わり、三人の夕食話へと嬉々として加わる。

肉が食べたいと言い出すアルフ。それに少し笑いながら叱るフェイト。アーチャーの料理がまた食べたいと呟くなのはを、ユーノはからかうように桃子に伝えておくと告げて走り出す。

それにどこか笑みを浮かべながらも、怒るようになのはがそれを追い駆け、フェイトも置いてかれまいと走り出す。

（ユーノ君、たまに意地悪だよね。……でも、私にしかそんな事しないみたいだし……うん。でも、許してあげない）

（またやっちゃった。なのは相手だと、時々言っちゃうんだよな。……拗ねると可愛いからいけないんだ、きっと）

（なのはとユーノ、仲が良いよね。……なのは達とは結構仲良くなったけど、ユーノと私もそうなれるかな？）

（ったく、フェイトだけでも大変なのに……。守りたい”笑顔”が増えてくよ、困った事にさ）

追い駆けあう三人を眺め、アルフは微笑む。そんな彼女を、皐月の風が撫でて行く。それはまるで、彼女の想いに同意するようだった……。

ジュエルシードが揃うまで、後六つ……。

「許可が下りたんですか？」

「ええ。やっと、ね」

どこか疲れた顔のリンディを見て、エイミィは、何か上層部から言われたのだろうと察した。

何しろ予想では、後三日は掛かると思われていたのだ。だが、それが早まった事を喜ばないクルーは、このアースラにはいない。

エイミィもそう。いつ調査を命じられてもいいように準備していた。それを知っているからこそ、リンディが真っ先に許可が下りた事を自分に伝えてくれたのだ。

「クロノ執務官は……」

「もう通達済み。でも、行動は明日からにさせたわ」

「管理外、ですからね」

「そう。念のために周辺調査はしておかないと」

普段の砕けた態度ではなく、一局員として接してきたエイミィに応えるように、リンディも艦長として言葉を返す。

リンディがエイミィを気に入っているのは、こういう切り替えが的確に出来るところもある。故に、早いところ息子であるクロノと上手くいってほしいと思っているのだが。

「では、サーチャーを散布するように指示を出しておきます」

「頼むわね。それが終わったら、貴方も休みなさい。ここのところ働き詰めでしょ」

リンディの言葉に優しさが混ざる。それを感じ取り、エイミィは苦笑を浮かべた。そして、小さく頷き「了解です。お心遣いに感謝します」と笑顔で答えた。

それにフッと微笑み、リンディはブリッジを後にする。そして、艦長室に戻りながらある事を考える。それは、上層部から伝えられた話。

(何者かが、ジュエルシード関連の情報をハッキングしていた可能性がある、か)

許可が早く下りたのは、それがキッカケ。そして、やっと判明したジュエルシードの本質もそれに拍車をかけた。その本質とは――。

「次元干渉型のロストロギア」

それが万一暴走した場合、周辺の次元世界を巻き込む大災害となる。それが認められたため、アースラの管理外への干渉が認められたのだ。

だが、リンディには一つ確信めいた希望があった。それは、今まで一度もそれらしい兆候が確認されていない事だ。つまり、ジュエル

シードを誰かが封印しているという事。
そして、それが出来るであろう人物に、リンディは心当たりがあった。

（きっと、ユーノ・スクライア君がいるんだわ。なら、現在までジュエルシードが暴走していないのも頷ける）

それがリンディの唯一の気がかりを消した。生きている、と。そして、たった一人でジュエルシードを回収しようとしているのだ。
管理局に連絡しなかったのは、おそらくその術がなかったのだろう。でなければ、きっとそんな余裕もない程追い詰められているのかもしれない。

早く助けなくては、と思う個人の部分と、状況を確認してからではなければいけない、と訴える局員としての部分がせめぎ合う。
だが、やはり最後に勝つのは艦長としての自分。大勢の命を預かる立場としての決断を優先させるしかない。

（……まったく、嫌なものね。どうしてこうも……）

――――世界は、こんなはずじゃない事ばかりなのかしら。

後に彼女は知る。その言葉を覆す存在がいる事を。そして”奇跡”と呼ばれる現象をその目で見る事になる事を。

ーーー

無印七話　前編

それは、もう戻らない日々。それは、忘れえぬ記憶。それは、大切な思い出。

「……あのね。私、妹が欲しい！」

「妹？」

「うんっ！　……ダメ？」

可愛らしく首を傾げる金髪の少女。それに女性、プレシアは微笑んで答える。

――分かったわ。アリシアのお願いだもの。

――じゃあ、約束だよ、ママ。

そしてそれは、遠く儚い幻……。

解き放つ黄金の輝き

「夢……？」

「プレシア？　どうかしましたか」

「いえ、何でもないわ」

心配そうに見つめるリニスに、プレシアは手を振って答える。それを何か気に掛けながらも、リニスは再び視線をモニターへ戻した。

管理局が動き出した。それをリニスが気付いたのは、ついさっきの事。いつもと違い、局員が地球へと送り込まれたのを確認したのだ。

それを知ったリニスの行動は迅速だった。真っ先にランサーへ連絡し、管理局が介入し始めた事を伝え、サーチャーが撒かれてしまった事を告げた。

そして、最善の対応としては、出来るだけ今日中にジュエルシードを回収し、帰還する事だと結論付けた。時間を掛ければ掛ける程動きが取れなくなると締め括って。

「……にしても、まさかこうも早く管理外に介入してくるなんて」

「……おそらく、ジュエルシードが原因でしょうね」

リニスの呟きに、プレシアはそう答えた。プレシアは、あくまで推測としてと前置いてから、ジュエルシードの正体について語りだした。

「おそらく、アレは”次元干渉”のロストロギアよ」

「次元干渉……？　まさかっ！？」

「そう。……願いを叶えるのは、あくまで副産物か、もしくはそれを切欠に発動するのでしょうね」

プレシアの言葉に、リニスは声を失った。もし、それが本当なら管理局が介入を早めたのも頷ける。次元干渉という事は、最悪の場合、次元世界の危機に直結するからだ。

それに思い当たったところで、リニスは気付く。プレシアはそれに気付きながら、何故止めなかったのか。そんな事を考えたのだ。

リニスの視線に、プレシアも言いたい事を理解したのだろう。苦笑を浮かべてこう言った。

「ランサーや貴方達が懸命に足掻くのを見て、言えると思う？　それに、私は思ったのよ……」

――ランサーなら、何とかするかもしれない、って。

そう言ってプレシアは微笑む。穏やかに優しげに。視線を上げ、天井を見つめながら呟く。

「アリシア、貴方との約束……ママは果たせるかしら」

それが何を意味するのか。リニスには、知る事が出来なかった。だが、その表情に宿るモノは伝わったのか、微笑みを浮かべて作業に戻る。

「……プレシア。辛いかも知れませんが、もう少し寝ていてください。長話をしたから疲れたでしょう」

「そう、ね。そうさせてもらうわ」

次はどんな夢が見れるのか。そんな楽しみにも似た感情を抱きながら、プレシアは目を閉じる。その顔は、どこか喜びさえ浮かんで

いた……。

「時空管理局、か……」

「ああ。リニスの話じゃ、もう動き出したらしい」

早朝にも関わらず、ランサーはアーチャーの部屋を尋ね、丁度目を覚ましたところで話を切り出したのだ。

内容が内容なので、アーチャーは不満を述べなかったが、内心はやや複雑だった。いきなりノックもなしに入り、挨拶も抜きで「ヤバイ事になった」と言われれば、思う事もあるのだ。

ちなみに管理局の事は、ユーノとフェイトの口から既になのは達にも伝えられている。それを聞いたなのはの感想は――――。

「何か本当に警察みたいだね」

という単純なもの。だが、アーチャーからすれば、その存在はどこかでエリート集団を思わせるものがあった。

それは、『管理局』と言う名称からも感じられる一種の優越感にも似た響き。次元世界を管理するというのは、どこか上から目線だと思ったのだ。

世界の治安維持を目指すなら、管理ではなく保安や防衛等の言葉を使えばいい。それを『管理』と表現するところに、妙な選民思想にも似たものを感じたのだ。

当然ながら、それをアーチャーはなのは達には伝えていない。それは、変な先入観を与えないため。

間違っていると思うのも正しいと思うのも、なのは達が決める事

だと思っているから。自分は、尋ねられた時に自分の主観を告げるだけ。

そうアーチャー達は考えているのだ。

「……それで、今日中に終わらせたいと？」

「……ああ」

苦い顔のランサー。その気持ちはアーチャーも理解出来る。何せ、昨夜はやてとフェイトがある約束をしていたのを知っている。

それは、明日の夕食をいつもより豪華にした『お疲れ様パーティー』をするというもの。それも八神家だけで。

そのパーティーに込められた本当の意味を二人は知るからこそ、互いにやるせない思いになっていた。

（本当ならば、今日は準備に当て……）

（明日に本番って、事だったのによ……）

そう、本当はフェイト達との『お別れパーティー』なのだ。会えなくなる訳ではない。だが、共に寝泊りするのは最後となる。

だからこそ、はやてとフェイトの気持ちの入れようは凄かった。入念に話し合い、メニューは互いの好きなものを出す事に決まった。

料理は、はやてが主に腕を振るい、補佐をアーチャーが務め、フェイト達は主賓として扱われる事まで決めていたのだ。

「……二人には私から言っておく。とにかく今は、ジュエルシードを回収する方が先だ」

「……応よ！」

一瞬浮かんだ言葉を打ち消し、想いを込めて力強くランサーは答える。それに反応を示さず、アーチャーは背を向ける。
せめて、別れぐらいは言わせてやらねばな。そう告げて部屋を出て行く背中に、ランサーは無言で感謝する。

（いつだったか、貴様は言ったな。自分には誇りなんかないと……）

思い出すのは、あの聖杯戦争での事。教会前でのアーチャーとの会話。

（だがな？　誇りはあったんだよ、貴様にも。英雄ではなく”漢”としての誇りが）

そう思って、ランサーは呟く。それは、決して本人には言わない言葉。

「アーチャー……貴様の生き方、認めてやる。この、クー・フーリンがな」

いつもは楽しい朝食の時間。それが、今日は違っていた。会話はある。しかし、それをしているはやてとフェイトに――――笑顔はない。
どこか無理をしているような笑み。何とか普段と同じように、と意識しているのだろう。それが逆に互いの気持ちを掻き乱す。
そんな状況になったのは、アーチャーが告げた先程の話が原因だった。

そして、それはその場にいるランサー達も同じだった。まだ十歳にも満たない少女達が、空元気を出して会話するのを見ていて、心が痛まぬはずがない。

だが、それをどうこう言える資格は、今の三人にはない。何を言っても、二人に本当の笑顔は戻せない。

（……やり切れん、な。こういう雰囲気は）

（……許してくれなんて言わねぇ。だから、絶対にプレシア達を助けてみせるっ！　それが、俺のせめてもの償いだ）

（フェイトもはやてもごめんよ。でも、こうするしかないんだ。……でも、何で今になってっ！）

思う事は違えども、それは全て二人の少女に対するもの。だが、ふとアルフはあるものに気付いた。自分の頬を流れる涙に。

それは、精神リンクしているからこそのものだとアルフが気付き、視線をフェイト達へ向けると――。

「あのね、はやて。私達、きょ「そ、そんでなっ！　夏には、すいかを食べるんよ」

「そう、なんだ。……私も、食べてみたかったよ」

互いに泣きながら、それでも微笑みを浮かべて話し合うフェイトとはやての姿があった。

別れの挨拶をしようとフェイトが切り出そうとする度に、はやてがそれを遮る形で話題を振る。

それをランサーもアーチャーも止めようとはしない。それをして

いいのは、自分達ではないと知っているから。
おそらく、もうそんなやりとりを何度もしているのだろう。はやてもフェイトも目が真っ赤になっている。

フェイト達が八神家に来て、たった二週間弱。だが、その間に出来た思い出は多い。はやてとフェイト。共に兄弟もなく、親と接した記憶も薄い。
そんな二人が、共同生活で培った絆は深い。明るいはやてと少し内気なフェイト。だからこそ、相性は良かった。はやてが喋り、フェイトが聞く。
それでも、いざという時のフェイトは強い。はやてが思わず怯んだ事もある程なのだから。

「……はやて。私達、きょ「あ～、そう言えばな……」

そして、またはやてが遮ろうと声を出して、そのまま止まる。フェイトが涙を流しながら、はやての手を握りしめたからだ。
そのフェイトの目に宿る輝きに、はやても悟ってしまう。もう、終わりなのだ、と。

「ありがとう、はやて。今まで楽しかった。だから、これだけは言わせて」

――嬉しかったよ、一緒に暮らせて。だから……またね。

――それを言うのはわたしの方や。ほんまにおおきに。……気ぃつけてな。

それが限界だった。互いに堪えていた感情を溢れさせ、声を上げて泣き出した。

二人はどこかで気付いているのだ。もう会う事が難しい事に。このままでは、おそらく会えなくなるだろうと。

だからこそ、ずっと互いに”ありがとう”と”またね”を繰り返す。

何度も何度も……繰り返しながら。抱いた予感が、本当にならないようにと、願いながら。涙が枯れるまで……言い続けたのだった……。

海鳴海浜公園。そこに、フェイト達はいた。本来ならば、時間を掛けて回収するはずだった六つのジュエルシード。

それを急遽、今日中に回収しなければならなくなったのだ。そのため、アーチャーとセイバー、なのはとユーノもそこにはいた。

「まさか、こんな事になるなんて……」

「仕方ないよ。ロストロギアの個人使用は本来なら犯罪なんだ。いくら事情が事情でも管理局の立場なら、確実に……」

「捕まえる、のでしょうね。だからこそ、早く終わらせなければ」

なのはの呟きをキッカケに、ユーノとセイバーが続く。そう、今朝なのはは、はやてから電話で伝えられたのだ。

管理局が地球に介入し始めたので、フェイト達が今日で帰る事になったのだ、と。だから、最後の協力をして欲しい。

そうはやての掠れた声で告げられ、なのはは学校を休んだ。無論、理由を聞いた桃子と士郎が即座に許したのは、言うまでもない。

「ごめんね、なのは」

「いいよ。これでずっとお別れって訳じゃないし、ね」

真っ赤な目で告げるフェイトに、なのはは微笑みを返す。本当なら、なのはも泣きたかった。

ああは言ったものの、フェイトがどこか悲痛な面持ちなのを見て、なのはも感じたのだ。もう、会う事が厳しいだろうという事を。

でも、フェイトの顔を見て、決して泣くものかと思った。悲しんでいるフェイトを、笑顔にさせようと。自分が泣くのは後でいい。

そう決意し、なのはは視線をフェイトから海へと戻す。そこに眠る六つのジュエルシード。それを封印し、フェイト達を笑って見送るために。

「じゃアルフ、手筈通りに頼む。……アーチャー」

「分かっている。投影（トレース）、開始（オン）」

ランサーの声に応えるように、詠唱したアーチャーの手には、赤い槍が握られていた。それは、かの有名なフィオナの騎士が使いし破魔の紅薔薇（ゲイジャルグ）。

それをランサーへ手渡し、アーチャーは再び詠唱し、その手に今度は歪な短剣を出現させた。

「……成程。それでジュエルシードを無力化するのですね」

「ゲイジャルグはともかく、こちらはまだ確実ではないがな。それとランサー、それはあまり保たんからな」

「分かってる。だが、頼りにさせてもらうぜ」

アーチャーが投影した武器を両方知るセイバーは、即座にランサ

ーとアーチャーが考えている事を理解した。
それにアーチャーがどこか不安そうに答え、ランサーへ注意を促す。だが、それを受けてもランサーは笑みを浮かべるだけ。
そして、その視線は鋭く海上を睨んでいた。

ランサーとアーチャー、セイバーが立てたプランは、アルフがジュエルシードを強制発動させ、浮き上がったものを無力化するというもの。
それには、いざという時の備えとして『破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）』が機能するのかを確かめるためでもあった。
危険な一斉発動に踏み切ったのも、発動させた瞬間に管理局に気付かれるなら、少しでも手間を省く事を考えたため。そしてもう一つ。
それは、実際の有事の際は、全てのジュエルシードを相手にしなければならない。だからこそ、六つ如きで怯む訳にはいかなかったのだ。
そして、それが確認出来た後は、残りの対処をセイバーが引き受ける事となっている。

「結界展開。もういいよ」

「じゃあ……いっくよ～！」

ユーノの言葉にアルフが強制発動の準備に入る。フェイトとなのはは、既にデバイスを起動し、バリアジャケットを身に纏う。
ちなみに二人にも、一斉発動の理由を万が一の時の備えを試すためと告げてある。それに納得し、二人は何も言わなかった。

アルフが放った魔法が海に大量の魔力を流す。その瞬間、凄まじい魔力が周囲に迸ると共に、海面が荒れ、波が起こり、いくつもの

竜巻が巻き起こった。
　それを見つめ、ランサーは槍を脇に抱えてフェイトとユーノに掴まり、空へと浮き上がる。アーチャーは海上を睨み続け、セイバーはなのはを送り出し、その場に留まった。
　そんなセイバーを見てアーチャーは苦笑し、なのはは楽しそうに笑っている。そう、何故なら彼女は……。

「アルフ、貴方はそこで休んでいてください」

「セイバーはどうすんだい？」

「ご心配なく。……はっ！」

　そう答え、セイバーはその身を海上へと躍らせる。それを驚きの表情で見つめるフェイト、ユーノ、アルフ。
　そう、セイバーは水に沈む事無く歩く事が可能なのだ。聖剣を与えた精霊による加護。それがこちらでも有効なのは、以前行った海水浴で実証済み。
　故になのはは何も言わず、セイバーを置き去りに出来たのだ。ランサーは「……やっぱ沈まねぇのか」と呟いた。

「さて、まずは俺が切り開く！」

気を取り直し、フェイトが展開した魔法陣を足場に、手にした槍を竜巻に向かって突き出すランサー。それが一つの竜巻を綺麗に霧散させる。
　それに驚くフェイトとなのは。だが、それも即座に復活する。それにランサーが神速の突きを繰り出し、猛威を振るう竜巻の影響力を弱めていく。その隙間を狙って、アーチャーが手にした短剣を投

げ放った。

ジュエルシードに当たった瞬間、それに短剣が反応し、ジュエルシードの一つが魔力を失う。

そしてそれにより、竜巻の数が減り、影響力も少しだが更に弱くなったのを見て、なのはがジュエルシードへ向かう。

「凄い……封印できたよ！」

そのジュエルシードは既に封印された状態になっていた。それをレイジングハートから教えられたなのはは、密かに感心していた。

アーチャーが以前言った魔力に対する絶対的な武器。それが先程の短剣だと理解したからだ。

「これで証明出来たな」

「……ですね。でも、残りは――」

どうします。そうユーノが口にしようとした時だった。ランサーが何やら下を見て、表情を変えたのだ。猛犬とも呼べるようなものに。

それと同時に風が吹き荒れた。ユーノがその視線を下に向けると、そこには剣を掲げたセイバーの姿があった。

「残りは、私に任せてください。その後はなのは、フェイトが即座に封印を」

「何をするの？」

「封印って……どうやって……？」

そう尋ねるなのはとフェイトだったが、セイバーが構えている剣から恐ろしい程の力を感じ、その視線は剣に釘付けだった。
それにユーノは、以前聞いたセイバーの切り札を思い出し、呟いた。

「エクス……カリバー……」

その呟きにランサーは頷くと、なのは達に向かって叫ぶ。

「さっさと離れるぞ！　巻き込まれるかもしれねぇ！」

「わ、分かったっ！」

「了解です！」

「セイバー、頑張って！」

（宝具っていうのを使うんだ……それなら……きっと！）

動揺するフェイトと頷くユーノ。なのはは一人竜巻を前に佇むセイバーへ、離れながらも声援を送る。その顔に信頼の笑みを浮かべて。
それにセイバーは微笑み、頷いた。そして、意識を前方の竜巻へと向ける。

（あまり時間は掛けられない。フェイト達の為にも、なのは達の為にも……。ならば、一気にかたをつける！）

ジュエルシードを発動させれば、否応なく管理局が気付く。だか

らこそ、今回は時間を掛けていられない。そう、ルールブレイカーでは確実だが手間が掛かる。

故に、彼女は聖剣を使う事を選んだ。その輝きを持ってジュエルシードの魔力を吹き飛ばす。それが、自分が何者なのかをなのは達に教える事になろうとも。

そして僅かにでも、それがジュエルシードを沈静化させたところをなのは達が封印する。それがセイバー達の結論。

「約束（エクス）された……」

掲げるように持たれた剣から、強い光が溢れ出す。それを離れて見ていたなのはには、何故か太陽ではなく”星の輝き”に見えた。

（キレイ……。沢山の星が集まっていくみたい……）

「勝利の剣（カリバー）――――っ！！」

セイバーから放たれる力ある言葉。それに呼応し、聖剣が目が眩む程の輝きを放つ。

ユーノは精一杯結界の維持に神経を集中し、それをアルフも支える。だがそれも、結局無駄に終わってしまう。

セイバーの聖剣の光は、最終的に結界を突き抜け、それを掻き消したのだ。そして、それをなのはとフェイトは魅入られたように見つめていた。

それは、黄金の輝き

”最強の幻想（ラスト・ファンタズム）”と称される光の剣

星によって鍛えられし神造兵装にして、終わらない夜を砕く刃

「そろそろだな。二人共、封印の準備はいいか？」

その光の残照を呆然と見守っていたなのは達だったが、ランサーの言葉に意識をジュエルシードへと戻す。

そこには、あれ程激しく暴れていた竜巻はなく、穏やかな海が見えた。

「結界を張り直した。さ、早く！」

ユーノの言葉に弾かれるように二人は飛び出す。そして、ジュエルシードをそれぞれ素早く封印していく。

それを見守るランサー。アーチャーは周囲を警戒していた。アルフは先程の結界維持で再び疲れたようで、地面に座り込んでいる。

ユーノは内心安堵していた。結界が突破されたのが輝きが終わる直前だったからだ。

ユーノは知らない。先程の一撃は、セイバーの全力ではない事を。そして、アルフが援護していなければ、それでも結界が途中で掻き消されていた事を。

「……こっちは終わったよ」

「こっちも……終わった」

その言葉にランサーとアルフが息を吐く。ユーノとセイバーも同

様だ。だが、アーチャーだけは違った。周囲の警戒を怠る事無く、言い放つ。

「ならば、早く行け。いつ管理局が――――」

「すまないが、そこまでだ」

突然現れる黒髪の少年。歳の頃なら十代前半かぎりぎり後半だろうか。黒い服を身に纏い、手にはなのは達と同じデバイスを所持している。

「僕は、時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ。君達に聞きたい事がある」

現れたのは、招かれざる客人。それは、別世界の使者。そして、後の絆を繋ぐ大切な案内役

時空管理局。

その存在が、今、なのは達の前に現れた。

――――――

アニメ第七話突入。結局登場は同じ話数でありながら、ジュエルシードは全部回収済み。

そして、ついに使われた聖剣。その輝きこそが、なのはとフェイトに大きな影響を与えます。

……それが何かは、おそらく皆さんはお分かりのはずです。

無印も残すは少し。ラストスパートです！

無印七話　中編

クロノは手にしたS2Uを静かに構える。視線は赤い服を着た白髪の男――アーチャーを見つめている。
だが同時に、周囲の人間に対しても注意は怠らない。その中に、行方不明だったユーノの姿を見つけるも、驚きを感じず、クロノは思った。

（やはり母さんの言う通り、か。だが、何故こんな辺境世界に魔導師がいる？　まぁいい。今は……）

「まずどうして君達がジュエルシードを回収しているかを教えて欲しい。それと――」

「答えない場合は？」

クロノの言葉を遮り、アーチャーはそう問いかける。その視線は鋭くクロノを見据えていた。
そんな突き刺すような視線を受け、クロノは目の前の相手が、どれ程の修羅場を越えてきたのかを理解した。
だからこそ、下手な事は出来ないという事も。一つ間違えれば、自分の命はないと。それ程の威圧感をアーチャーは放っていたのだ。

「……申し訳ないが、実力行使するしかない」

「ふむ、成程。だが、一つ聞きたい」

「何だ」

「出来ると思うか？」

口調こそ変わらないが、込められた殺気が違う。クロノでさえ、思わず後ずさりそうになる。けれど、執務官という誇りと責任がそれを踏み止まらせる。

それに気付いたランサーとアーチャーは、内心でクロノを誉める。歳の割に既に心構えが出来ている事を。

おそらく、クロノは一人で自分達を止められるなどと考えていない。それでも、退けぬ何かがある。だからこそ、踏み止まったのだ。

（まだガキだが、見込みはあるな。……雰囲気は俺寄りじゃなく、アーチャー寄りな感じだが）

（ほう、子供かと思ったが、中々気構えだけは大したものだ。……どこか親近感を感じるのは、気のせいか）

そんな内心を表情には一切出さず、アーチャーはクロノを見据え続ける。それを正面から受け止めるクロノ。

そして、そんな緊張感の高まる中、何かを思いついたのかユーノが叫んだ。

「アーチャーさん、待ってくださいっ！」

「……どうした？」

「クロノ執務官と仰いましたね」

「……ああ」

「その質問は……僕が答えます」

ユーノは戸惑うなのは達を他所に、クロノへと話し出す。それは、事故により輸送船からジュエルシードが飛び散ってしまった事に始まる、これまでの簡単な話。なのは達が現地の人間で、自分に協力してジュエルシードを集めてくれているという話だった。

勿論、フェイト達の襲撃の事などはせずに。そしてその間、ユーノは念話でなのは、フェイト、アルフにある考えを伝える。それに合わせてほしいとも告げて。

それに気付かず、ユーノの話を聞きながら、クロノは疑問に思った事を尋ねる。それは、使い魔を連れている少女。フェイトの存在だ。

「彼女は明らかにこの世界の人間ではないな。彼女はどうしてここに？」

「フェイトは、ここには偶然来たんです」

ユーノの言葉に驚きを見せるセイバーとランサー。アーチャーだけは、何かを悟ったか平然としていた。

おそらくユーノは、フェイト達を自分の協力者として管理局に思わせ、もしものために罪を完全に無くす算段なのだろう。

それを察すると同時に、アーチャーの中である言葉が思い出される。そして、この状況を終わらせる方法に辿り着いた。

（この世界……か。以前、フェイトも言っていたが、ここは管理外と呼ばれているらしいな。ならば……）

アーチャーがある閃きを得ている間に、ユーノが語ったのはアーチャーの推察通りの内容だった。

フェイトは使い魔と共に、色々な世界を旅していて、この地球には、転送魔法が何らかの影響で狂ってしまい、来てしまった事。

そして、偶然にもこの海鳴でユーノ達と出会い、事情を知って手伝ってくれているのだと。

フェイトもアルフもそうだと答えた。なのはも、おかげでジュエルシードを集めるのが楽になったと付け加えて。

それを聞き、クロノは訝しがりながらも理解はした。そうだと言える証拠もないが、そうではないと言える証拠もないからだ。

「……分かった。つまり彼女達も善意の協力者なんだな？」

「はい。とても良い人達です」

ユーノの締め括りに、クロノが頷いたのを見て、アーチャーが再び口を開いた。その表情には、どこか勝ち誇ったような笑みが浮かんでいる。

「話は終わったようだな。ならば、もう聞く事はないだろう」

「……いや、ジュエルシードを渡して欲しい」

「そうか。封印されても危険物。それを回収したいのは、そちらも同じか。だが……ここは管理外世界と呼ばれているらしいな？」

アーチャーの言葉にクロノは頷き、一瞬の後に表情を曇らせる。

アーチャーの言いたい事を悟ったのだ。アーチャーもクロノが苦い顔をしたのを見て、笑みを浮かべた。そして、あっさりとこう告げ

た。

「つまり、ここは君達の管轄ではない。観光で来ているならともかく、仕事をするというのは少々問題ではないかね？」

「……そういう事か。成程な」

アーチャーの言葉にランサーも納得し、笑みを浮かべた。ユーノとセイバーもその意味に気付き、軽い驚きを表していた。

ただ、なのはとフェイト、それにアルフは理解出来ていないようだったが。そんな三人に、ユーノが念話で伝える。

【つまり、ここは管理局が管理していない世界だから、管理局は何の権限もないってアーチャーさんは言ったんだ】

その説明に感心し、三人はアーチャーへ尊敬の目を向ける。同様にセイバーもそれに気付き、その発想に至ったアーチャーへ称賛の視線を送った。そんな視線を受け、アーチャーは尚もクロノを論破するために続けた。

「で、君は何と言った？　ジュエルシードを渡して欲しい？　それはむしろこちらが言いたい。勝手に降ってきて、それが恐ろしい危険物。魔法などという力がなく、本来なら抗う事も出来なかった。こちらにも、これを調べる権利がある」

「それは……」

悔しいが、クロノにアーチャーの言葉を止める術はない。全てが正論なのだ。確かに地球には、魔法文化がない。魔力を持つ者が少ない事も関係しているが、やはり決め手は管理外扱いにある。何せ、

魔法文化がある管理世界でも危険物扱いがロストロギアの基本。
　更にそれを強硬手段に出ようとしても、管理外では、管理局の名は何も意味を成さない。それどころか、取り様によっては侵略者扱いされる事もある。そんな事実を知るクロノだからこそ、アーチャーの論理に、沈黙せざるを得なかった。

「君は、どうやら話が分かる人のようだ。なら、ここは退いてはもらえないか。ジュエルシードは既に回収を終えた。扱いについてはユーノがいる」

　心配する事はない。そう言わんばかりのアーチャーの言葉に、クロノは久方ぶりの敗北感を味わっていた。
　今までも負けた事は何度もあった。だが、職務上の論戦で負ける事などほとんどなかった。それが管理外で出会った男に、完膚無きまでに論破される事など思ってもなかったのだ。

（完全に納得出来る訳ではないが、彼の言う事にも一理ある。ならせめて、先程の魔力反応の事だけでも聞き出さなければ……）

「分かった。ここは退こう。だが――」

　そこで、突如巨大なモニターが現れる。そこに映っていたのは緑の髪の女性。突然の乱入者に戸惑うなのは達。だが、アーチャー達は違った。
　その女性の雰囲気から、彼女がクロノの上司に当たる事を見抜いていた。その証拠にクロノもどこか驚いている。

「初めまして。私は、次元航行艦アースラ艦長のリンディ・ハラオウンです」

「なっ……艦長、どうして」

「何か困っているようですので、せめてそれ「必要ない。誤解などしていないよ。君らには君らの言い分があるのも理解しているつもりだ」

リンディの言葉を遮り、アーチャーは捲くし立てる。それは悉くリンディ達の痛いところを突いていた。

ジュエルシードの危険性と扱いについても、発見者であるユーノがいる事と既に全て封印を終えている事を挙げて論破。

ロストロギアは管理局が管理保管する事も、それは管理局が認められている世界に限るもので、地球人としてそれに従う義務はないと退ける。更に、それならば余計に早くこれを回収に来て欲しかったと言われれば、リンディ達としても耳が痛い。

リンディがそこについては謝罪すると、アーチャーも少し意外だったようで、やや驚きを見せた。ジュエルシードについてどうするのかという質問に関しても、ユーノがいる事から推察出来ると言って打ち切った。

「貴方には悪いが、ここでは管理局は完全な部外者だ。心配せずとも、そちらに保管させようとしたユーノが、悪事にこれを使うはずないだろう」

「それは……そうですが……」

「とは言え、君達もまったくの無関係とは言い切れないのも事実だ。どうだろう。日を改めて話をしよう。三日後でどうだ」

アーチャーの突然の申し出に戸惑うクロノとなのは達。だが、リンディは違った。そんなアーチャーの申し出に、思うものがあった

のだろう。

「失礼ですが、何故急に話をする気に？」

「何、自分が逆の立場ならどうだろうとな。下手をすれば大事になるのが分かっていて、すごすごと引き下がる訳にもいかないだろうとね」

「お心遣いとご理解に感謝します。でも、何故三日も？」

「すまないが、今日の疲れもある。それに私達にも予定があってね。その調整も含めて三日欲しい」

リンディは考えた。アーチャーの言い分におかしい箇所はない。だが、あれだけ自分達を言い負かしておいて、いきなりこうこられても何か裏を感じる。

そう思ったのだ。だからこそ、交渉材料になる手札を切ろうか思案した。そんな心情をアーチャーも熟知しているのだろう。何かを躊躇っているリンディに、こう告げた。

「気が進まぬならいい。だが、話し合いの場を設けるのは、これを最初で最後にしたい。そちらもあまりこちらと接触を持ってはいけないのではないか？　……先程の光についても、そこで話そう」

（さて、これで食いつくか。時間稼ぎと事後処理を兼ねる事になるなら、一番いいのだが……）

「……分かりました。では三日後、ここに迎えを出します」

（やはりこちらの知りたい事を理解している……。時間稼ぎをする

気なのでしょうけど……いいわ、今は飲むとしましょう）

互いの狙いはどこかで察しているが、どちらとしてもこのままで終わらせる訳にはいかない。そんな思いを微塵も見せず、二人は見つめあう。

「了解した。中々話の出来る相手で助かったよ、リンディ艦長」

「いえ、貴方こそ話の分かる方で良かったですわ。ええっと……」

そこでリンディが言葉に詰まる。それに少し笑みを見せ、アーチャーは名乗った。

「アーチャー、と呼んでくれ」

「分かりました。ではアーチャーさん、私達はこれで……」

「ああ、少し待ってくれ。無いとは思うのだが……」

通信を終わろうとするリンディに、アーチャーは何でもないようにそう切り出した。その口調にリンディは嫌な予感がするも、笑みを浮かべて問いかけた。

「何でしょう？」

「監視の類はやめてほしい。それと追跡等の調査もだ。もっとも、管理局がプライバシーを――」

「そんな事はしない。こちらとしても変な誤解を招きたくないからな」

どこか心外だと言わんばかりのクロノ。それに、アーチャーは内心若いなと思いながら、どこか申し訳なさそうに答えた。

「そうか……何、少々用心深くてね。気を悪くしたのならすまない」

そのアーチャーの言葉に、リンディは内心で完敗を悟る。こちらを牽制するだけでなく、クロノの真面目な性格をも理解し、堂々と言質を取ったのだ。

これでは、リンディ達に出来る事はほとんどない。だが、このまま終わる訳にもいかない。そう思い、リンディは告げた。

「いえ、結構です。当然の事ですもの。ただ、もし何か問題が起きた場合は……」

「ああ。君達の職務に従った行動を取ればいい。ま、そんな事はないがね」

アーチャーは、そのリンディの対応に感心していた。さすがは人の上に立つだけはあると思ったのだ。

あのまま終われば、アーチャー達の行動にリンディ達は何も手出し出来ないままだった。

だが、自分達の基準で問題が起きた場合、手を出すと言ってきたのだ。それも、アーチャー達が文句を言えないように。

それはせめてもの抵抗。そして、現状リンディ達が取れる最善の切り替えしだった。

（こちらの少年はまだ青さがあるが、彼女は厄介だな。こちらの狙いも薄々勘付かれているか……）

（これが今は精一杯。……相当の切れ者ね。会話の流れを完全に掴まれたままだったわ）

そんな二人のやりとりを、なのはとフェイトは呆然と眺めていた。ユーノも分かる範囲で念話解説をしてくれたが、それでもなのは達には理解出来ない状況だった。

ただ、なのはは思う。アーチャーはフェイト達の事を考えて話してくれているのだと。素直ではないが、とても優しい人。それがなのはのアーチャーの印象。

故に、その会話の真意が分からずとも、アーチャーの真意だけは理解しているのだ。

（やっぱり、アーチャーさんは凄いなぁ）

なのはがそんな尊敬の眼差しを向ける横で、ユーノはアーチャーの理論展開に感心していた。

相手の言いたい事を言わせず、こちらの都合に合わせさせ、適度に欲しい情報を匂わせる。殺気を放ったかと思えば、紳士的な対応で相手を翻弄する。

（管理局の事を知らないにしても、一歩も退かずに有事以外の不干渉まで確約させるなんて。持てる全てを最大限に活用し、道を開く……か。そういえばそんな戦い方をしていたって、セイバーが言ってたな）

そんな話術にユーノが内心唸っている中、フェイトもまた感心していた。だがその視線は、アーチャーの前にいるクロノに注がれている。

（凄い……あんな風に堂々と意見を言えるなんて……）

殺気を放つアーチャーを相手に、一歩も退かずに対応したクロノ。その姿は、どこか人見知りする自分から見て、憧れるものだった。

いつかは自分も、クロノのように誰に対しても、退かずに堂々と意見を言える人になりたい。そんな思いを強く抱き、フェイトはクロノを見つめていた。

「……では、また三日後に」

「ああ。その時はお手柔らかに頼む」

「こちらこそ、そう願いたいですわ」

「じゃあ、失礼する」

そう告げてモニターが消える。それと同じく、クロノも転送魔法で現れた時と同じように消えた。

静寂がその場に戻る。それに安堵の息を吐いたのはアルフだった。小さくなのはやフェイト、ユーノも息を吐く。

ランサーはアーチャーに近付き、何事かを話し合っていた。そこにセイバーが近寄り、その会話に加わろうとするが……。

「では、いいのだな？」

「……ああ。フェイト達はアルフ辺りに連れ出してもらうさ」

「何の話ですか？」

ランサーとアーチャーは視線を交わすと頷き合い、セイバーへ視線を向ける。その視線に不思議そうな表情のセイバー。

そんな彼女に対して、アーチャーは真剣な表情で告げる。

「セイバー、君はなのはにライダーと小次郎を呼んでくれるように頼んでくれ」

「……分かりました。後で理由を聞かせてください」

「ああ、心配すんな。きっちり話すからよ」

（そうさ。ここまできたのなら、こいつらの助力に応えなきゃならねえ！）

それにセイバーも頷き、視線をなのは達へと向けた。そのランサーの視線に含まれたモノを理解したからだ。

そのセイバーの視線の先には、緊張から解放され、疲れた表情のなのは達がいた。そんな彼女達に、セイバーはゆっくりと近付いて行く。

「なのは、頼みがあるのですが……」

「えっと……何かな？」

「スズカやアリサに連絡して欲しいのです。ライダーとアサシンの力も借りたい、と」

ついに願いの宝石は集まった。それが呼ぶのは、災いか……それとも……。

ーーー

無印七話　後編

それは、セイバーがエクスカリバーを使用した時の事だった。
アースラはジュエルシードの反応を探知し、オペレーターであるエイミィが、そこへクロノを誘導しようとした矢先の出来事だった。

「うそ……これ、あのデータと……」

エイミィの視線の先には、膨大な魔力反応が表示されている。そのデータは、以前見た謎の次元震のものに酷似している。
そのデータを即座に解析に回しつつ、クロノへ転送魔法の座標を送る。そして、最終的にその魔力反応は、周囲を覆っていた結界を突き破り、空へと消えた。
その光にエイミィは、いやモニターを見ていた全員が思わず手を止めた。

「……キレイ……」

そのエイミィの呟きは、その場にいる全員の言葉だった……。

槍騎士の告白、クロノの英断

あの後、なのは達は八神家へと戻った。管理局の干渉を心配する必要がなくなった事に加え、猶予が三日出来た事をなのはがはやてに伝えたためだ。
戻ってくるなり、家から飛び出すような勢いで、はやてがフェイトに駆け寄った。それを驚きながらも受け止め、二人は苦笑い。

「……なんや、朝の自分が恥ずかしいわ」

「私も……同じだね」

そう言いながらも、二人は笑みを浮かべる。また訪れる別れ。それを感じながらも、今回のようにまたすぐ会える。そんな気がしていたからだ。

そして、そんな二人を見つめて、アーチャーははやてに告げる。時間は出来たから、準備をするといい。その言葉に二人が嬉しそうに頷いたのは、言うまでもない。

はやてとフェイト、アルフになのはがパーティ用の買い物に出かけたのを見届けて、家の中へと戻るアーチャー。

そこには、ランサーとセイバー、そしてライダーと小次郎がいた。なのはの連絡を受けたアリサとすずかは、即座に小次郎とライダーへ連絡を入れた。

ライダーは直接、小次郎は鮫島経由で二人の頼みを聞き、八神家へとやってきたのだ。

「それで、話というのは？」

「ジュエルシードの使い道についてだ」

ライダーの質問に、アーチャーはそう言い切った。だが、それに驚くものはいない。セイバーを始め、サーヴァント達はどこかで予想していたのだ。

ランサーのジュエルシードの使い道が、病気の治療などではない

という事を。

何故ならば、本当にそれを望むのなら、既に打つべき手はあるのだ。セイバーの持つ癒しの力。それを頼ればいいのだから。

現に、話を聞いた時、セイバーは密かにランサーへ提案した事がある。しかし、ランサーはそれを断ったのだ。

それは、最後の手段だったからだ。アリシアを助けられなかった場合の、最悪の状況での手段。

プレシアだけでも助ける。しかし、早々にプレシアを治してしまえる手段を得てしまえば、ジュエルシードを使う名目がなくなりかねない。

そして、セイバーもランサーが下した結論から、ランサーの狙いが別にある事を確信したのだ。

「……やはり治療などではなかったか」

「ですが、それも本音であるのには変わりないでしょう。全てはフェイトのため、ですね？」

小次郎の呟きに、ライダーがそうフォローを入れる。それに頷くランサー。その表情は真剣な武人そのもの。

そんな気迫に、セイバー達も固唾を飲んでランサーの言葉を待つ。

そして……。

「あれを使うのは……フェイトの姉を生き返らせるためだ」

そのランサーの発言に、全員が驚きを見せる。そう、何故ならばその願いは……。

「本気で言っているのか。そんな事が許されるとでも？」

アーチャーにとっては、簡単に許容出来ないものだった。それは生命の尊厳に関わる事だからだ。
だから、それは許される事ではない。生命の倫理に反する行為。失ったものを乗り越えたからこそ、今の自分達があるのだ。
そう、アーチャーの視線は語っていた。

そして、それはセイバーも同じ。シロウと出会い、昔の自分が望むものを間違いと知った彼女にも、その考えは見過ごす事は出来なかった。
それに、ランサーの語った事が事実だとすれば、腑に落ちない事があったのだ。

「待ってくださいっ！　まずフェイトの姉であれば、彼女が何も知らないのはどうしてです!?」

「落ち着いてくださいセイバー。……話して頂けるのでしょう？」

疑問を投げかけるセイバー。それを宥めながら、ライダーは視線をランサーに送る。それにランサーは頷き、語り出す。
プレシアとアリシアに起こった悲劇とその顛末を。そして、フェイトの出生の秘密までも。

リンディは艦長席に座り、大きく息を吐いた。今までも上層部と論戦をした事はある。だが、そのどれと比べても、今回のアーチャーとの論戦は分の悪いものだった。
クロノの対応が悪かった訳ではない。あれが局員としては当然だ。しかし、それが今回に限っては相手が良くなかった。

もし、自分があそこに行く事になっても同じ対応をしたはずだ。何せ、相手は管理外の住人。その対応は出来る限り慎重でなければならない。

（でも、それがアーチャーさんに付け入る隙を与えてしまった）

まずは、その気になれば抵抗すると認識させて、こちらが強気に出られないと分かった後は、出来る限り穏便にこちらの撤退を促した。それから、管理局の管理という部分を的確に突き、管理外である事を前面に押し出して反論を封じられてしまった。

こちらの要求は悉く却下され、質問は上手く誤魔化され、こちらの行動理由にも軽く文句を言われた。最後は知りたい情報を提供してもらう代わりに、不干渉と時間を与える事になった。

その気になれば、まだ打つべき手はあった。だが、それを打てなかったのには、理由がある。

何とか緊急時の手出しだけは現状で勝ち取ったが、それが相手の想定内だろう事はリンディにも分かっていた。

完全に、相手の思うままだった。こちらが得たものは少なく、失ったものは多い。

（あんな風に会話をリード出来る部下が欲しいわ。……それにしても、弓兵（アーチャー）と呼んでくれ、とはね）

リンディはそれを思い出し、苦い顔。どう考えても、偽名としか思えないような名だったからだ。だからこそ、余計に思うのだ。

彼らは油断ならない相手だと。そして、敵に回してはならない相手だとも。そして、その一端をクロノへの殺気から感じたが故に、リンディは敢えてカードを切らなかったのだ。

それは、ユーノの身柄の保護とジュエルシードの出土元。それは管理世界であり、管理局の管轄下にあるのだ。

あの時、返答を躊躇ったのはそのカードを切るか否かを考えたため。そしてそれを思案していたところに、情報開示を匂わせる発言。断れば教える事はないと告げられ、まさしく思惑に乗せられたと、感じていた。

そして、それとは別に気になった事もある……。

「アーチャーさん……。あの悲しい目は、一体何を……見てきたのかしら」

見つめあった時に垣間見えた深い悲しみ。それがどうにもリンディには気になっていた。それはまるで……。

（あんな悲しい瞳。……あの人を失った後のグレアム提督のようだった……）

そして、それは自分もそうだったと、リンディは思い出し、決意する。三日後の話し合いの席では、少しでもその悲しみに迫ろうと。

そう、まず相手を知る事から始めよう。それが何事にも通じる基本なのだと、自分に言い聞かせて。

「クロノ君、これを見て」

アースラに戻ったクロノを見るなり、エイミィが見せたのは、先程の光のデータだった。

そして、それを見たクロノは驚愕の表情を浮かべる。それが示すものと似た様なものを、つい最近見たばかりだったからだ。

「……間違いはないのか」

「当たり前だよ。……あたしだってまだ少し信じられないぐらいなんだから」

そのエイミィの言葉に、クロノは視線をデータへ戻し、真剣な眼差しのまま呟いた。

「彼らは……一体何者なんだ……」

恐ろしい程の魔力を使い、次元震を起こしかねない一撃を放つ存在。それが管理外にいる。

それを上層部が知ればどうなるか。それを考え、クロノはエイミィに視線を向け、告げた。

「このデータ、艦長に見せたら徹底的に消去しておいてくれ」

「ちょ？！　……クロノ君、それは――」

「責任は僕が取る。それに、こんなものを上が見てみろ。間違いなく、僕らに別の命令が下される」

息を潜めるエイミィに、クロノが答えた言葉は非常に重たい響きを秘めていた。

そのクロノの言葉にエイミィも表情が強張る。それが何を意味するか、エイミィにも理解出来たからだ。

そして、その内容は確実に良くないものだとも理解したのだ。それは……。

「この対象の捕獲。もしくは……」

「だからだ。局員として間違っているとは思う。だが、僕は迷わない。彼らは悪人じゃない。そして、同時に敵にしてはならない相手なんだ」

奇しくもクロノの導き出した結論は、母親のリンディと同じものだった。直接会話をし、尚且つクロノは面と向かってアーチャー達に接した事もあり、余計に感じたのだ。

サーヴァント達の異常さを、その威圧感と存在感を。それを思い出し、クロノは決心する。次に会う時には、何とかこちらとの和解を図ろうと。

せめて、敵対する相手ではないと理解してもらう。それが出来なければ、いずれ管理局とアーチャー達が衝突する。そんな予感を感じていたから。

（……あの時、彼らがその気なら、僕は死んでいてもおかしくなかった。だが……）

あのアーチャーの殺気を受けた時、退かなかった自分を、アーチャーはどこか意外そうに見つめていた気が、クロノにはしていた。

それは昔、訓練で想像以上の事をやってのけた時の、魔法と戦術の師匠達と同じ雰囲気だったのだ。

だから、クロノは余計に思ったのだ。彼らは悪人ではないと。そして同時に知りたくなったのだ。何故、自分をそんな目で見たのかを。

（アーチャーとか言っていたな。次に会った時、その真意を聞きだしてみせる）

（あっれ～、クロノ君が珍しく男の子してるや。……うんうん、やっぱこうじゃないとね～）

そんな風に決意するクロノを、楽しそうにエイミィが眺める。しかし、その表情はどこか情愛の色が濃く出ていた……。

「……だから俺は、フェイトのために動いてきたんだ」

ランサーの語った話は、セイバー達にとっても言葉を失う内容だった。プレシア母子に起こった悲劇。そしてフェイトの誕生の秘密。それを聞き、セイバーもアーチャーもライダーも沈黙した。小次郎でさえ、その表情を悲痛に歪めている。

彼らは不幸というものを知っている。それを跳ね除けて生きた者達も知っている。だが、これ程の話は中々ない。

娘を愛するあまり、狂い始めていたプレシア。その母親を献身的に支えようとするフェイト。もし、ランサーがいなければどんな結末を辿っていたのか。

それを思い、セイバーは首を振る。考えてはいけないと。そんな『ありえない状況』を想像しても仕方ないのだと。

「……それで、じゅえるしーどで可能な話か」

「可能性は限りなく無いに等しいな。死者を生き返らせる等と、それこそまさしく”魔法”だ」

アーチャーの表情は苦いものだった。死者蘇生を許す事は出来ない。だが、それがフェイトの母親を生かしている希望でもある。

そして、フェイトが姉の事を知れば、可能なら同じ事を望むだろう。そして、彼が思い出したのは、あの遠い日の記憶。

本来なら死んでいた自分を助けた少女。彼女との繋がりを思い出

し、アーチャーは決心する。
救えるのなら、全てを救いたい。そう思っていた事を。切り捨てられてしまった一。その存在であるアリシア。彼女を救おうと。
それに、魂が死んでいないのならば、厳密には『死』ではない。そうアーチャーは結論付ける。
だが、それが単なる詭弁であると理解しているから。そして、かつての自分ならば絶対に認めないからこそ、彼は苦い顔なのだ。
何とか自分が納得して、フェイトの力になろうとしている。それを強く感じていたから……。

「私も同感です。そんな方法があるなら、既に誰かがやっています」

それにセイバーも同じ表情で答える。確かに死者蘇生は許される事ではない。だが、それを望みに生きる事を彼女には否定出来る資格がなかった。
それは以前の自分そのものなのだから。今の自分があるのも、シロウに出会ったからこそ。出会っていなければ、自分もプレシアと同じ考えを抱き続けていただろう。
だからと言って、アリシアを見捨てる事も出来ない。何故なら、ランサーが言うには、プレシアはその死を乗り越え始めたという。

推測だが、とランサーが前置いて話した事も、セイバーの決断を迷わせている原因だった。
やり直しではなく、取り戻す。そうランサーは言い切った。全てを無かった事にするのではなく、乗り越えた上で取り戻すのだと。
それが詭弁だとセイバーも理解していた。だが、セイバーは思う。詭弁も詭弁で一理あると。
そう思う事で、セイバーも己を納得させようとしていた。本来あったはずの幸せなプレシア達の笑顔。
そのために力を貸したい。そして、なのは達の笑顔のためにも、

それを成してやりたい。
かつての自分は、過去そのものをやり直そうとした。だが、今回は違う。今回は未来を取り戻すのだ、と。
悲しみの過去を越え、それを糧にし未来を繋ぐ。アリシアが生き返っても過去は変わらない。そう結論付けて……。

「ですが、何か手はないのでしょうか？　可能性がないからと言って諦めては、スズカに会わせる顔がありません」

そんなライダーの言葉にその場の全員が考え込んだ。なのは達六人の仲の良さは痛い程知っている。
もし、この事をなのは達が知れば、ショックを受けながらも、必ずどうにかしようとするはずだ。
それをそれぞれが理解しているからこそ、何とかしたかった。なのは達の”笑顔”を守る事。それがその場にいる全員の総意なのだから。

（アヴァロンでは死者蘇生までは無理。マーリンがいれば何か手はあったかもしれませんが……くっ、無力です）

（聖杯でも魔法でも不可能な死者蘇生、か。魂が生きているなら……そう考えたが……待て？　魂……魔法……）

（どうしてランサーがキャスターを捜していたか、ようやく分かりました。……情けないですね。また私は、何も出来ず見守るしかないのでしょうか）

（女狐さえおれば楽になったやもしれんな。……だが、それはそれで困る事になったやもしれん。兎も角、今は何か手を考え出さねばな）

（アーチャーの言う通り、今のままじゃ絶対に無理だ。何か、何かねえかっ！）

深刻な表情で考え込む五人。だがその中で一人だけ雰囲気が異なる者がいた。アーチャーだ。

彼だけは、四人が悲痛な面持ちを浮かべるのに対し、どこか活路を見出したような表情で考え込んでいたのだ。

そして、四人が思い悩む中、小さく「……あったぞ。何とか出来る可能性が」と呟いた。

その呟きに四人が一斉にアーチャーを見つめる。その視線を受け、アーチャーが語ったのは、四人の想像を超えるものだった。

「死者蘇生の術自体は、問題もあるが既にこちらの世界の魔法で確立されている。厳密には違うのだろうが、結果はさして変わらん。それと”魔法”を組み合わせられれば……或いは……」

そうしてアーチャーの話した方法に、セイバー達は一縷の希望を見出した。だが、それは”奇跡”と呼ぶに相応しい程の内容。

だからこそ誓う。必ずやそれを成し遂げてみせると。

セイバーが無言で差し出す手に、苦笑しながら手を重ねるライダー。呆れたように手を重ねるアーチャー。小次郎は軽く笑みさえ浮かべながら手を重ねる。

そして、それが何か分からないランサーに、セイバーを除いた三人が視線を手へ向ける。

それに何事かを悟ったランサーは、小さく驚きを見せたがすぐに笑みを浮かべてそれに手を重ねた。

「必ず、成功させましょう。フェイトのために、そしてなのは達の

ために！」

セイバーの言葉に、四人は力強く頷くのであった……。

少女達の知らぬ所で、英霊達は誓いを立てる。その誓いは形を変えながら、彼女達を守り続けるものとなる。

――

後編。クロノの凄さが出ればいいな、と思って書いたところが自分的メインです。

局員としては間違っていると知りながらも、それが大局的に正しいと言えるなら断行出来る男。クロノ・ハラオウン。

……そして、彼も既に英霊の影響が……。

男二人はマスター的位置ではないですが、その影響が強く現れるかも知れません。

無印八話　前編

管理局との接触から一日明け、なのは達は時の庭園に来ていた。
ここにいるのは、なのは達だけではない。
すずかやアリサもいるのだ。はやてさえいる。本来なら、ここに来るのはサーヴァント達やなのはとユーノだけだった。
だが、急遽アーチャーの要望で、はやて達三人もフェイトの家へついてくる事になったのだ。
その理由をアーチャーは教えてくれなかったが、フェイトの家に行く事に誰も反対はしなかった。

「これが……」

「すごいね……」

「ごっついなぁ……」

庭園に着いた途端、アリサ、すずか、はやてがその外観に呆然とする。豪邸という事ではなく、ただその異様な外観に言葉がなかったのだ。
それはなのはやユーノも同じだったようで……。

「大きいの……」

「アリサやすずかの家とは、違う意味で凄いね」

「え、えっと、とりあえず中に……」

そんな五人の反応に、照れたり喜んだりしながら、フェイトは嬉

しそうに中へと歩き出す。
それに続くように歩き出すなのは達。ちなみに、なのは達は今日学校をお休み。
保護者達の深い理解により、昨日は皆で八神家に泊まり、そのまま時の庭園へとやってきたのだ。

長い通路を歩いて行くなのは達。先頭はランサー達サーヴァント組が務め、なのは達はその後ろを歩いていた。
歩きながらフェイトに色々と質問するなのは達。どこがどういう部屋なのかや、フェイトの部屋はどこ等の一般的な質問をアリサやなのはがすれば、はやてとすずかは、魔法の道具とかはないのかや、リニスさんの部屋を教えてなどの変わった質問をした。
まぁ、はやてだけは内容が内容だけに、アリサに突っ込まれて痛い思いをしていた。車椅子を押しているすずかも、それはさすがに止めなかった。

そんな風に和気藹々としているなのは達とは違い、セイバー達には緊迫感が漂っていた。
ジュエルシードを使った大博打をする前に、フェイト達に知らさなければならない事があったからだ。
そして、それはある意味、その後待っている大勝負よりも、厳しいものだったからだ。
フェイトの出生の秘密を打ち明ける。それをアーチャーが提案したのは、昨日の誓いの後だった……。

懺悔と愛情の果てに

「本気ですか?!」

セイバーの声が部屋中に響き渡る。それに動じず、アーチャーは頷いた。それに全員が戸惑いを感じていた。いや、小次郎だけが平然としている。

小次郎は、無表情で佇むアーチャーにこう切り出した。

「つまり、知られるよりは教える方がいいという事か」

「……そうだ。このままでは、フェイト達に強い衝撃を与えるだけになってしまう」

「言いたい事は理解出来ます。しかし……」

アーチャーの言い分を理解し、ライダーは困惑の表情。彼女はすずかの抱えていた苦しみを知っている。

自分の異常性を告げられた夜こそ、二人が出会った日なのだから。すずかは自分の一族の秘密だけであそこまで苦しんだ。フェイトは自分の生まれた理由を知ったら、どうなってしまうのか。

それがライダーが素直に賛成出来ない要因になっていた。それを知ってか知らずかセイバーは、アーチャーにこう詰め寄る。

「ですが、自分が姉の複製などと言われてフェイトがどう思うと――」

「ならば! ……ならばこのまま黙っていて、どうやって彼女に力を借りる?」

その反論にセイバーは何も言えなくなってしまう。確かにアリシ

ア復活のためには、フェイトが必要不可欠なのだ。
だからこそ、フェイトには真実を明かさなければならない。蘇生の基本を行うのは、彼女でなければならないのだから。

それを分かるからこそ、セイバーもランサーも何も言えなかったのだ。小次郎だけはアーチャーの意見に賛成しているようで、最初の発言以外何も言わなかった。
そして、アーチャーが告げたのは、更に全員を驚愕させるものだった。

「出来るなら、なのは達にも伝えたい。それが出来なければ、成功率を落とす可能性がある。無論、その役目と判断はフェイトに任せるがね」

そんなアーチャーの言葉を思い出し、ランサーは表情を曇らせる。アーチャーの提案をリニスに伝えた際、プレシアが聞いていたのだ。
彼女は、ランサーを見つめてハッキリこう言ったのだ。

――――あの子には、私が伝えるわ。

その眼差しは、病弱と思えない程力強く輝いていた。その眼差しにランサーは賭けた。プレシアがフェイトを助け、守ってくれると。
既にプレシアは、あの出会った頃のプレシアではない。そう直感で感じたランサーは、任せる事にしたのだ。プレシアの中に眠る”母の愛”に。

「……しかし、広いな」

「俺も最初はそう思った。ま、住めば都だったか？　慣れれば何でもね～よ」

「異界の文化は雅が無いな。侘び寂びも感じぬし、面白みに欠ける」

「おそらく、ここはそういう要素を考えて作っていないのでしょう」

「それで、一体フェイトの母上はどこに」

「この先の大きな扉。そこがプレシアの部屋だよ」

セイバーの問いかけに答えたのは、ランサーではなく、先程からずっと黙っていたアルフだった。

気のせいか、その口調には微かな不安が滲んでいた。それは、彼女がある事を恐れているからだった。

フェイトの出生の秘密をプレシアが教えると聞いた時、アルフは底知れぬ不安を感じたのだ。

ランサーによって安定し、穏やかになったとはいえ、プレシアはアルフにとっては強い嫌悪の象徴だった存在だ。

それがフェイトの秘密をどう話すのかが、気になって仕方なかったのだ。

やがて巨大な扉の前まで辿り着き、セイバー達はそこで止まる。それにつられるようになのは達も足を止め、フェイトが不思議そうに前へ出てくる。

「どうして入らないの？」

「今日はな、フェイト。お前しか入れないんだ」

ランサーの言葉にフェイトは驚きを顕わにした。何故なら、ランサーを紹介して以来、フェイトはプレシアの部屋に入ってはいけないと言われていた。

そして、唯一フェイトが入ったのは、ジュエルシードを持ってきてほしいと告げられた日だけだったのだから。

だから、フェイトは早くなる鼓動と感じながら、視線で本当に良いのかと尋ねる。その窺うような視線に、ランサーは力強い頷きで返す。

「……じゃあ、行ってくるね。ごめん、なのは達も待ってて。すぐに戻ると思うから」

そのフェイトの言葉に笑顔で頷いて、なのは達はフェイトを見送る。そして、そんなやり取りをランサー達は何とも言えない表情で見つめるのだった……。

久しぶりの母の部屋。それにフェイトは高鳴る鼓動を隠せぬまま、緊張しつつ中央のベッドへと近付いていく。

そこには様々な機械に囲まれながら、静かに横たわるプレシアとその世話をしているリニスがいる。

「久しぶり、リニス。それと、ただいま」

「お帰りなさいフェイト。さ、そこに座ってください」

「うん」

ベッドの横に置かれた椅子に座り、フェイトは眠っているプレシ

アへ視線を向ける。
最後に会った時よりも弱っているように感じながらも、心無しかどこか顔色は良くなっているようにフェイトは思った。
そんな風にプレシアの顔を眺めていると、それにプレシアが気付き、フェイトへ視線を向けた。

「……帰ってきたの」

「う、うん。ただいま母さん。ジュエルシード、全部集まったよ」

満面の笑みを見せるフェイト。それにプレシアはどこか遠い目をして呟いた。

「ああ……本当に……」

「？　母さん？　どうしたの？」

初めて見るプレシアの表情に、不思議そうな顔をするフェイト。
そんなフェイトを見つめ、プレシアは視線をリニスへ移す。
それを受け、リニスは小さく頷き、部屋を出て行く。それを困惑顔で見送るフェイトだったが、次のプレシアの言葉にそれが驚きに変わる。

「フェイト、貴方に話があるの。とっても……大切な話が」

プレシアの口から語られた真実。それは、以前リニスがランサーに語った内容を、少しだけ詳しくしたもの。
アリシアを失った事故の原因。それは、研究のスポンサーが事故

の危険性を無視し、早急に成果を求めたため。
そして、事故の可能性を知りつつも、結局実験を断行してしまった自分の愚かさ。
その罰として、アリシアを失ったと思った事。それを加えてプレシアは語ったのだ。

それらの話は、フェイトにとっては驚愕の一言だった。己の全てを否定されるような内容。
それに、今まで信じていたものが、音を立てて崩れていく感覚を覚えていた。
顔色は蒼白。血の気は既に失せ、どこから見ても異常としか思えない状態だった。その目は、プレシアへ話を止めてくれるように懇願していた。
それでも、プレシアは話を止めなかった。それは、自分がフェイトと越えなければならない事だったからだ。
全てを知らせ、自分の過去と決別し、フェイトと向き合わねばならない。例え、フェイトに嫌われる事になろうとも。
そう、自分が今までフェイトにしてきた事に比べれば、その程度の苦痛は軽いものだ。罰にさえならない。だから、プレシアは覚悟を決めていたのだ。
最悪、アリシアもフェイトさえ自分の傍から離れたとしても、構わない。そうなっても当然の事を自分はしてきたのだから。
そう決意していたから。だからこそ、プレシアは躊躇わずに語った。フェイトへ想いのたけを込めて。

「これが、貴方が生まれた流れよ」

「……そ、そんな……嘘、だよね？」

プレシアに弱くしがみつくフェイト。それに小さくプレシアは首

を横に振り、告げる。

「いいえ、本当よ。私は最初、貴方をアリシアとして生み出したの」

苦痛に表情を歪めながらも、プレシアは断言した。その一言に、フェイトは崩れ落ちようとしていた。

掴んでいた手から力を抜き、そのまま椅子から落ちそうになって――。

「フェイトっ！」

だが、それを止める者がいた。その温もりと声に、フェイトはゆっくりと顔を上げて、驚きを浮かべた。

それは、プレシアだった。弱った体とは思えない程の力で、フェイトの体を抱き寄せていた。

フェイトが驚いたのは、その行動だけではなかった。プレシアは――泣いていた。

「か、かあさ、ん？」

「ごめんなさい……。とても許してなんて、言えないけれど……これだけは聞いて」

プレシアの言葉にフェイトはただ黙って耳を傾ける。

「私は……忘れていたの。アリシアは一人だけ。どんなにコピーやクローンを作り、記憶を移したところで、それはアリシアの姿をした別人だと。だからね、フェイト。私は最初、貴方を貴方として……ゴホッ……見る事が出来なかった。アリシアの紛い物。そんな風にしか……ゴホゴホッ……見えてなかった。でも、今は違う。今な

ら……ゴホッ……貴方を貴方と、フェイトとして……ゴホゴホッ……見る事が……ゴホッ……出来る。今更だけど、私は本当に貴方を……ゴホッ！」

プレシアの語る内容に、フェイトに段々生気が戻る。それと同時にプレシアの話の意味を理解し、涙が溢れていく。

だが、その途中でプレシアが咳をし出した。そして、その間隔が徐々に早くなっていく。その嫌な咳に、フェイトの不安が大きくなり……。

「母さんっ！！」

そして、ついに長話に疲れたプレシアの体が倒れ掛かった。それを今度はフェイトが支える。背中をさすりながら、そのままゆっくりベッドへと寝かしつけた。

顔色が悪く、息も荒い。それを見てフェイトはリニス達を呼ぼうと椅子から立とうとして、プレシアに手を掴まれた。

その力は弱く、その気になればフェイトでも簡単に振りほどける。だが、フェイトに振りほどくなんて選択肢はなかった。

出生の秘密。明かされた真実は、確かに重かった。でも、その後にプレシアが語った事もまた真実。

ならば、自分がどちらを重視するかなど決まっている。すずかの秘密を聞いた時、自分は何と思った。すずかはすずか。なら、自分は自分だ。

だからこそ、その手を握り、優しい声でフェイトはプレシアに語りかける。

「……心配しないで母さん。大丈夫だよ、リニスを呼んでくるだけだから」

「……フェイト。お願いを……聞いてくるかしら？」

息も絶え絶えのプレシア。その口元には血がついていた。それを静かにタオルで拭き取り、フェイトは視線をプレシアへ向ける。

その弱った体を何とかしたいと思うも、今のフェイトに出来る事は、プレシアの願いを聞き、元気付ける事だけだった。

「当たり前だよ。私は、母さんの娘だから」

――当たり前だよ。私、ママの娘だもん。

だからこそ、心からの微笑みを見せるフェイト。その姿が、プレシアにはアリシアと重なって見えた。

それにプレシアも微笑みを返し、告げたのは一言。

――アリシアを、お姉ちゃんの事をよろしくね。

――任せて。母さんも姉さんも絶対助けてみせるから。

そうフェイトが力強く答えると、プレシアは嬉しそうに笑って眠りについた。一瞬、フェイトは慌ててプレシアへ駆け寄るが、寝息を立てているのを聞き、安堵した。

そして、安らかに寝ているプレシアへ微笑みかけ、フェイトは歩き出す。その手に、バルディッシュを握り締めて。

初めて感じた母の温もり。そして、心からの願いを胸に、フェイトは告げる。

「行こう、バルディッシュ」

”イエッサー”

その身をバリアジャケットで包み、フェイトは行く。そして、一度ドアの前で立ち止まり、ベッドに横たわるプレシアの方へ振り向き、呟く。

「行ってきます。母さん」

（私はフェイト・テスタロッサ。母さんが名付けてくれた……私だけの名前。だから……私は私！）

その胸に宿るは勇気と希望。そして、絶対の決意。おそらく姉の事は、ランサー達がその術を知っているのだろう。

ならば、それを聞き、自分のするべき事をしよう。今度、母に会った時、今度は喜びの涙を流してくれるように。

フェイト・テスタロッサ。本当の彼女の人生は、今まさにここから始まった。

――――――

いよいよ無印の終わりも迫り、後はアリシアの事を残すのみ。

……今回と次回も実は評価が怖かったりします……

無印八話　中編

【リニス、母さんがさっき血を吐いたの。今は落ち着いて寝てるけど、見てもらっていい？】

部屋から出てきたフェイトは、念話でそう告げた。内容が内容だけに、なのは達に聞かれるのは不味いと判断したからだ。

部屋から出てきたフェイトの格好は、バリアジャケットになっていたので、なのは達は不思議そうに見つめる。

リニスはフェイトの念話に頷くと、急いで部屋の中へと戻っていった。そして、フェイトはそのままランサーの前まで歩き、尋ねた。

「教えてランサー。どうすればアリシアを、姉さんを助けられるの」

その発言に驚くなのは達。そして、そんな驚くなのは達を無視して、フェイトは強くランサーを見つめる。

その言葉と視線の意味を悟ったランサーは、フェイトへ視線を向けて答えた。

「それには、ここにいる全員の力が必要だ」

その答えに、フェイトは若干躊躇いを見せる。だが、それも少しの間だった。

ランサーの言った言葉の意味を、裏に込められたものを理解し、意を決して頷いた。そして、なのは達へ向き直り、真剣な表情で告げた。

「……聞いて欲しい事があるんだ。〝親友〟のなのは達に……」

そのフェイトの目に宿る光に、なのは達は息を呑む。そして、全員がその視線に同じ眼差しを返し、頷くのだった……。

約束は光の彼方に……

フェイトは迷う事無く自分の出生について語った。アリシアの事だけ話しても良かったのだが、すずかの話を聞いた自分が、なのは達に隠し事をするのは嫌だったのだ。

勿論、それを話す事にフェイトは抵抗がない訳ではない。だが、それも全て自分と姉であるアリシアを助けるためなのだ。

ジュエルシードを使ってアリシアを生き返らせたい。そうプレシアは言った。そして、そのためにどうすればいいのかをランサーは知っている。

だからこそ、フェイトはなのは達に明かした。そして、なのは達が誤解しないように、こう告げた。

「母さんはね、これからは私を私として見てくれるって、言ってくれたんだ。今まで見てあげられなくてごめんねって、涙を流しながら」

――だから、生まれた理由なんてもういいんだ。母さんが私は私って言ってくれたから。

そう言い切り、フェイトは微笑む。その力強い微笑みに、なのは達も何も言えない。そして、まずなのはが、フェイトの手に自分の手を重ねて言った。

「良かったね、フェイトちゃん。後はお母さんの病気を治して、お姉ちゃんを助けるだけ！」

「そうね。どうやるか知らないけど、魔法があるんだから何とかなるわよ！」

「私達がどうやって力になれるか分からないけど、頑張るから！」

「そや。大船に乗った気でおってええよ！」

それに続くように、アリサが、すずかが、はやてがフェイトの手に自分の手を重ねていく。その温もりに、フェイトは心が強く暖められていくのを感じていた。

そして、最後にユーノがゆっくりと手を重ねる。

「ジュエルシードが散らばった時、僕は見つけた事を心から後悔した。でも、ジュエルシードが誰かを笑顔に出来るって分かった時、僕は嬉しかったんだ。本当はしてはいけない事なんだと思う……。けど、僕も手伝うよ。〝親友〟として！」

「ユーノ……みんな……っ！！」

フェイトの瞳に涙が浮かぶ。それになのは達五人も涙を浮かべる。

――何があっても、この絆は変わらないから。

その言葉をすずかが告げ、全員が力強く頷いた。そして、アリサが続けて「フェイトのお姉ちゃんも加えてね」とウィンク混じりに告げる。

それにはやてが「当然や。七人になったらまた賑やかになるな」と笑って応える。
そんななのは達を見つめ、セイバー達も笑みを浮かべる。そして、ランサーが大声で言い放った。
「うしっ！　これから段取りを説明すっから、良く聞いてくれ！」

リニスは、プレシアの状態を見て驚いていた。確かに弱っていた。だが、今はどこか安定感が増していたのだ。
それはプレシアの表情を見ても明らかだった。優しく穏やかな笑み。それを浮かべ眠るプレシア。心音は静かに、だが、力強く響いている。
まるで、まだ死ねないと言っているように。そんな雰囲気を感じ、リニスは願う。全てが上手く行くようにと。
「……リニス」
「！　プレシア、喋らないでください。体力が低下しているんですよ？」
そのリニスの言葉にプレシアは苦笑を見せると、目を閉じた。
【これならいいかしら？】
【……長くはダメですが……それでどうしたんですか？】
【私は、最低な母親だったわ……】

プレシアの言葉に、リニスは何も言わず黙る。それをどう取ったのか、プレシアはどこか楽しそうに語り出す。

【アリシアは一人。そんな簡単な事も気付かず、フェイトを生み出した。……馬鹿よね。あの子はアリシアを基にして生まれた時点で、まったく別の存在だったのに】

【その事をフェイトは知らず、貴方を母として慕い続けました】

【ええ。それが昔の私には、うっとおしいものでしかなかった。でも、素っ気無く接していた自分を慕い続けたのは、紛れもなくフェイトだったから。今なら分かる。あれは、フェイトだからこその気持ちだったのね】

消したはずのアリシアの記憶が作用したのかもしれない。でも、それを理解し、プレシアは思ったのだ。自分は何と愚かだったのかと。アリシアもフェイトも自分を慕ってくれた大切な娘だったのだ。

その事を気付かせてくれたのはランサー。体を労わり、気持ちを落ち着けさせ、冷静に自分と周囲を見つめ直す時間をくれた男。

そして今は、かつての自分の悲願であったアリシアの蘇生を試みてくれる。いや、成功させると言ってのけた。

【プレシア、これだけは覚えておいてください】

【……何かしら？】

【貴方は最低な母親だったのかもしれません。でも、それは貴方が思っていた事です。フェイトから見た貴方は、いつでも最高の母親

です】

リニスのその言葉にプレシアは言葉を失い、そして涙を流す。精神リンクでリニスもそれを感じ、共に泣く。

プレシアは今、心の底から喜んでいた。ランサーと出会えた事に。そして、フェイトを”産んだ”事を。

そんな涙を流すプレシアから視線を外し、リニスは思う。ランサーが無事に戻ってくるように、と。

これから、ランサー達が挑もうとする事の無謀さを知っているから。

（ランサー、必ず戻ってきてください。フェイトには、いえ私達には貴方が必要なのですから！）

時の庭園　最深部。そこにアリシアの体が入ったポッドが置かれている。ランサーの指示で、リニスが傀儡兵を使って運ばせておいたのだ。

リニスの話では、アリシアの体も維持が出来なくなりつつあり、プレシアよりも時間の余裕がないとの事。

それを聞き、ランサー達はほとんど準備を出来ぬまま、儀式に挑まざるを得なかった。

「あれが……」

「姉さん……」

なのはの呟きにフェイトの呟きが続く。全員の視線がポッドに入ったアリシアに注がれていた。

その外見は確かにフェイトそっくりだった。違いといえば、多少フェイトより体が小さい事だろうか。

「でも、本当にアタシ達がこれを持っていいの？」

「ああ。だが、強く願うのはまだだ。まずはフェイトの方の準備が先だ」

「そ～ゆうこった。フェイト、頼むぜ」

ランサーの言葉にフェイトは無言で頷くと、ポッドへと歩き出す。そして、それについていく形でなのは達も歩き出す。

今、なのは達子供の手には、アーチャーから渡されたジュエルシードが一つずつ握られている。そして残りをセイバー達が三個ずつ手にしていた。

フェイトの分は、アルフが預かり、準備が出来次第手渡す事になっていた。ジュエルシードを全て配分し、ポッドを正面に扇状に並ぶ。

正面にランサー。その両隣にセイバーとアーチャー。セイバーの隣にライダー。アーチャー側は小次郎という布陣。

なのは達は、それぞれのサーヴァントの後ろで待機していた。

「……こっちの準備はいいよ」

ランサーの後ろで、儀式の準備を終えたフェイトの言葉に、ランサー達の表情が強張る。そう、それから行うのは大魔術を超える”魔法”なのだ。

アーチャーが立てたアリシア復活の方法。それは、使い魔の儀式を利用したものだった。

死者蘇生が使い魔にする事で可能なのは、既に確認済み。問題はその際に起こる魂の変化だった。
それをジュエルシードを使う事で、もう一度変化させようというものだった。アリシア本人のものに。
第三魔法。それを応用し、一度離れたアリシアの魂を即座に移す。
そんな分の悪い賭け。

そのための『根源』への道への呼び水に、サーヴァント達のジュエルシードを使い、”魔法”そのものをなのは達のジュエルシードで行う。
『根源』があるかないかは確かではないが、アーチャー達は魔術が使える事や自分達が存在する事からあるだろうと判断した。
そして、その両方の成功率を少しでも上げるため、英霊たるライダー達とはやて達が必要だったのだ。
霊体というある種の魂であった特殊性と、純粋にフェイトのために願う事の出来るはやて達の想いに賭けて。

「いよいよ、だね」

「うん。……ね、ユーノ君は――」

隣のユーノが言った言葉に、なのははふと、成功すると思うと聞こうとして、思い止まった。
それは、決して口にしていけない言葉だと思ったのだ。
そんななのはの気持ちが分かったのだろう。ユーノはなのはの方を見ず、ただその手を握り、はっきりとこう言い切った。

「あっ……」

「大丈夫。絶対上手くいく。だって――」

「だって？」

「僕らには、セイバー達がついてるんだから」

その表情は絶対の自信で満ちていた。眼差しはしっかり正面を見据え、その輝きは希望の光を宿している。

そして、その手から伝わる温もりが、自分を勇気付けてくれたから。

（そうだ、ね……。ありがとう、ユーノ君。おかげで不安がなくなったよ！　セイバー達がいるんだもん。絶対上手くいくっ！）

感謝の気持ちを心の中で告げ、手を握り返してなのはも正面を向く。その視界に見えるは、アリシアの入っているポッドと――――。

（信じてるからね、セイバー！）

自分の最も信頼する騎士がいた。その頼もしい背中に、なのはは自分の想いを込めた視線を注ぎ、告げる。

「こっちもいつでもいいよ！」

「よし、なら始めるぜ！　フェイトォ！」

ランサーの声にフェイトが使い魔の儀式を開始する。それと並行し、サーヴァント達がジュエルシードへ願いを込める。

込める願いは一つ。『根源』への道を開く事。それに呼応し、ジュエルシードが輝き出す。その膨大な魔力が吹き上がり、セイバー達を襲う。

それを何とか抑え込む小次郎とアーチャー。ランサーとライダーはまだ平気そうだが、それでも苦しさを覗かせている。
四人がそれぞれ苦労する中、セイバーは一人平然としていた。だが、その額には汗が滲んでいる。
セイバーは周囲の状況を見て、苦しそうなランサー達に向かって叫ぶ。

「これぐらいで蹲いてどうするんですか！　私達は誓ったはずですっ！　あの誓いを忘れたのですか!!」

「セイバー……」

（凄い強い光……。それに怖いぐらいの力。でも、セイバーなら……大丈夫だって信じてるから！）

セイバーの凛々しい姿に、なのはも自身のジュエルシードを握り締める。出会った時、自分の友達になると言ってくれたセイバー。言った事は決して嘘にしない。そんなセイバーが放つこの光に、負けないような光を自分も放つんだ。
その決意し、なのははただ、セイバーの背中を見つめ続けた。

セイバーが平然としているのは、対魔力に優れるからだけではない。決して挫けたりしないと。その気持ちがそうさせているのだ。
何故なら、彼女が一番強く願っているのだ。この大博打の成功を。故にセイバーの手にしているジュエルシードは、一番激しく輝いているのだから。
それを見て、最初に応えたのは小次郎だった。その手にしたジュエルシードが輝きを増し、セイバーに迫る勢いで光を放ち出した。

「私とした事が、我が身可愛さに加減してしまうとはな。セイバー

の言う通りよ。私達の背におる幼い命。
それが危険に身を晒しておるのに、我々が足踏みとは情けないとは思わぬか？」

「小次郎……」

（アタシを庇うように立っちゃって。……まったく、相変わらず格好つけるんだからっ！）

その輝きと小次郎の言葉に、アリサは笑顔を見せる。その背の頼もしさ。それは、あの日出会った時の頼もしさだったからだ。

そして、そんな小次郎に感化されたのか、今度はアーチャーが手にしたジュエルシードが輝き出す。
その光は、強くどこか暖かささえ感じさせるものがあった。

「確かに小次郎の言う通りかもしれん。更に、私の後ろにいるのは車椅子の少女なのだからな。
あまり性分ではないが、私も久しぶりに熱くなってみるとしよう」

「アーチャー……」

（わたしを守るように立っとる……。なんかええな。こう頼りになるちゅ～か、安心出来るわ）

優しく暖かな光。それを放つアーチャーに、はやては出会った日の温もりを思い出す。
それが自分を不思議な程落ち着かせてくれるのを感じ、笑顔を浮かべながら、はやてはその背中を見つめるのだった。

アーチャーが輝きを放ったのを見て、ライダーも負けじと輝きを放つ。その眩しさに、思わず目を逸らしてしまうすずか。

「まったく、少しばかり自分が余裕だからと言って、調子に乗るのはどうかと思いますよ、セイバー。
ですが、少々無様でした。私達が背負ったモノは、簡単に守れるものではなかったのですから」

「ら、ライダー……」

（眩しくなくなった……？　ライダーが、光を遮ってくれてるんだ……）

眩しさが薄れたのを感じ、すずかは視線を前へ向けた。輝きから自分を守るように、ライダーが手を胸に当てていた。
出会った時から自分を守り、支えてくれたライダー。その光は、どこか穏やかな雰囲気を持っているように感じ、すずかは笑みを浮かべた。

そして、最後に最も強い輝きを放たせる者がいた。ランサーのジュエルシードがセイバーの輝きさえ超えて、光り出す。

「黙って聞いてりゃ好き勝手言いやがって。だが、ま、嫌いじゃねぇぜ！　そういうのはよっ！！」

「ランサー……」

（強い光。でも、不思議と心が落ち着いていく。……きっと、ランサーの光だからだ）

初めて会った時から、いつも優しく、時に厳しく自分を導いてくれたランサー。だからその光も自分を導いてくれている。

そうフェイトは確信し、心から思う。この儀式は成功するのだ、と。そこまでの道標。それをランサーの輝きがしてくれると固く信じて。

「ジュエルシードが……共鳴してる……？　でも……」

「凄いね、こりゃ……」

その輝きを眺め、ユーノとアルフは思わず呟いた。五人の放つ輝きは、信じられない程の魔力なのだろう。だが、それが少しも怖くない。

制御しているとかではない。本当に怖くないのだ。必ず、これをどうにかする。そんな絶対の自信を感じさせてくれる存在。

それが、目の前にいる。二人はそう断言出来た。

五人の放つ光。その魔力は、次元干渉を起こしていた。だが、その向かう先はバラバラではない。

その魔力は制御されているかのように、一つの目的のために動いていた。次元震が起きない理由はそこにある。

次元干渉を無秩序ではなく、指向性を持って行わせる。それは、セイバー達の願いが『根源』へと至る道を望んだから。

そして、ついにポッドの前方の空間が歪み始める。そこに現れたのは、虚数空間と呼ばれるものだった。

飲み込まれたら最後、出てきた者はいないという恐怖の象徴。だが、どこかそれは本来の虚数空間とは違うようにも見える。

そして、それを見たセイバー達は揃って叫んだ。直感的に、それぞれが感じ取ったのだ。あれが『根源』への道か、あるいはそのも

のだと。

「「「「「開いたっ！」」」」」

その声をキッカケに、今度はフェイトが儀式を完了させる。契約内容は簡単だ。そう、ずっと一緒に生きる事。

それをフェイトが宣言し、そしてなのは達がジュエルシードへ願いを込める。

願う事はただ一つ。アリシアがアリシアとして目覚めますように。そう心から純粋に願う。

（お願いっ！　フェイトちゃんのお姉ちゃんを……）

（アリシアを生き返らせてくださいっ！）

（私達の想いを……っ！）

（どうか叶えてくださいっ！）

（ジュエルシードよっ！）

なのはが、アリサが、すずかが、はやてが、ユーノが、そして……。

「お願いっ！　目を覚まして、アリシアっ！！」

アルフからジュエルシードを渡されたフェイトが叫ぶ。それをキッカケにジュエルシードが、全てを消し去る程の輝きを放った。

全員がそれに目を閉じる中、フェイトは確かに聞いた。誰かの声を。その声はこうフェイトに告げる。

――まったく……。どこにいっても、セイバー達は世話焼きなんだから。

――貴方は、誰……？

フェイトの疑問に声はどこか可笑しそうに答えた。

――それは秘密。貴方のお姉さんの魂、確かに戻したからね。

――ま、待って。貴方は……！

――お姉さんと仲良くね。じゃぁ、セイバー達によろしく……。

そこでフェイトは気を失った……。だが遠のく意識の中で、こんな言葉を聞いた気がした。

――今度は会えるといいわね。

フェイトが意識を取り戻した時、全員が同じように気絶していた。ジュエルシードは、はやてが握っていた一つを残し、粉々に砕け散っている。

それは、アーチャーが封印したモノだった。それをユーノは回収し、後に管理局へ提出する事になる。

フェイトが周囲に声を掛け、全員が意識を取り戻し、視線をポッドへ向ける。そのポッドのガラスは砕け散っており、その中身はない。

その光景に誰もが言葉を失った。失敗したのか。そう、誰もが思った……。しかし……。

――その時、ポッドの後ろから声がした。

「……う、ううん。ここは……？」

その声に、フェイトが走る。弾かれたように駆け出し、ポッドの裏に回り込む。そこには……。

「あれ？　鏡、かな？」

「……あ、アリシ、ア……？」

フェイトの呟きに、少女は不思議そうに首を傾げた。自分の名前を呼ばれたからだろうか。だから、少女は疑問符を浮かべたまま尋ねる。

「？　……何であなたがわたしの名前知ってるの？」

「！？　……アリシアっ！！」

フェイトに抱きつかれ、戸惑うアリシア。それに構わず、フェイトは強くアリシアを抱きしめる。

「え？　え？　一体何なの？　ここどこ？　ママは？」

ついに”奇跡”は成し遂げられた。だが、まだ全てが終わっていない事を、この時の彼らは知らない。

それが、新たな災いなのかは……まだ分からない。

――――――

無印八話　後編

セイバー達がジュエルシードを発動させた時、当然その反応をリンディ達も感知していた。
即座に発信源を割り出し、サーチャーを送りつけた。この時、リンディ達は運が良かった。
何故なら、リニスはプレシアの事で精一杯であり、残りの者達は儀式に集中していて、誰もサーチャーに気付けなかったのだ。
そして、そのサーチャーからの映像を見て、リンディ達は驚愕する。

「な、何て事なの……」

「ジュエルシードを……何に使っているんだ」

常識を超えたレベルの魔力を生身で抑え込み、更に次元震を起こす手前まで高めている。いや、もう起きていてもおかしくない。
むしろ起きていない方が不思議なくらいなのだ。その原因が、アーチャー達五人なのは、リンディ達全員が感じていた。
更になのは達までジュエルシードを使い出したところでサーチャーは役目を果たせなくなり、その魔力量は最早計測出来ないところまで上昇した。
計器を心配し、データを取っていたエイミィが、小さく悲鳴を上げる。

「ダメですっ！　これ以上はこっちがもちませんっ！」

「分かったわ。現時点を持って、彼らをロストロギアの不法使用の容疑者として確保します。クロノ執務官！」

「了解しました。直ちに現場へ向かいます！」

「お願いします。ですが、これは管理外の人達が関わっている事件です。彼らの扱いには、一層の注意を払って下さい」

クルーからは、クロノ一人でいいのかと声が上がるが、リンディの「現状では、クロノ執務官以外に適任者がいない」との言葉に、全員が沈黙した。

アーチャー達に対して不干渉を取らざるを得なくなった事をクルー達も知っている。そして、有事の際の行動は確かに認めさせている。

それでも、計測不能な魔力を何とか制御している謎の多い相手。それに対して対抗出来る者など、このアースラにはクロノ以外はいなかった。

「分かっています。……僕らは戦いに来たんじゃないと、知ってもらいます」

「頼みました。クロノ・ハラオウン執務官」

リンディの言葉に、クロノは敬礼で応える。それにリンディが敬礼を返す。その内心が複雑に揺れているのをクロノは知っている。

だからこそ、告げる。たった一言。口には出せないが、それでも伝えなければならないと。

【必ず帰ってきます、母さん】

【……気をつけてね、クロノ】

きっちりと公私を分けるリンディだが、それでも危険度の高い場所へ息子を送る事に抵抗がない訳ではない。それをクロノは少しでも和らげたかった。

だから伝えたのだ。自分は死にに行くのではないと。行って必ず帰ってくるのだと、分かってもらうために。

「転送準備完了！　クロノ執務官、転送場所は現場から多少距離があるので注意してください」

【絶対無事に帰ってきてよ？　あたし、クロノ君以外の補佐なんてしたくないからね】

「分かった。エイミィ、頼む」

【縁起でもない事を言うな。……そもそも君を補佐に使うのは、僕ぐらいしかいないから心配するな】

クロノの答えに不満そうな表情を浮かべるエイミィだが、その手はクロノへとサムズアップを送っていた。

それに小さくサムズアップを返し、クロノは転送装置から消えた。

それを見届け、リンディは僅かに躊躇いを見せる。

そして、何かを決意し告げる。

「念のため、私も万一に備え、出動します。アースラの事はエイミィ管制官に任せます。……頼むわね」

「任せてくださいっ！」

そう、クロノだけを危険な目に遭わせる訳にはいかない。だからこそ、自身も前線に出る事を決意したのだ。

それを知るからこそ、エイミィも何も言わない。自分も、力になれるなら飛び出して行きたい気持ちだったから。
だが、自分が一番力になれるのは、ここ管制席。オペレーターとして全力でクロノとリンディを支える。それが、エイミィの決意。
（クロノ君、信じてるからね……）

”奇跡”の代償

「ママッ！」
「あ、アリシア……！？」
「も～、ビックリしたよ。起きたら全然知らない場所にいて、わたしそっくりな子がいるんだもん」
プンプンと擬音が付きそうな表情でプレシアを見つめるアリシア。
それが夢ではないと知って、プレシアは涙を流す。
そして、ありったけの想いと力でその体を抱きしめた。それに戸惑うアリシア。だが、プレシアが泣いているのに気付き、アリシアは不思議そうにプレシアを見つめる。
「どうしたの？　ママ、どこか痛いの？」
「違うの……違うのよ、アリシア。痛いんじゃなくて嬉しいのよ」

「嬉しいの？」

「ええ。……そうだ。アリシア、貴方に教えなきゃいけない事があるの」

プレシアはそう笑顔で告げると、フェイトへと視線を移す。そこには、どこか寂しそうな表情のフェイトがいた。

それを見て、アリシアが不思議そうに首を傾げる。その仕草が可愛らしく、プレシアは笑みを深くするとフェイトを手招きした。

それに戸惑いながらもフェイトがプレシアに近付き、アリシアの隣へと立つ。

「この子はフェイト。貴方の妹よ」

「妹？　……ホントに約束果たしてくれたんだ」

「ええ、勿論よ。フェイトはアリシアの妹で、ママの大切な娘。それは、誰がどう言おうと変わらないわ」

「母さん……」

「ママ……」

プレシアの涙ながらの断言に、フェイトは涙を溢れさせる。アリシアは、そんなプレシアとフェイトに感化されたのか、瞳一杯に涙を浮かべフェイトに抱きついた。

それに驚くもフェイトも嬉しそうにアリシアを抱きしめ返す。そして、そんな二人をプレシアが優しく抱き寄せる。

それを見てリニスもアルフも涙を流す。なのは達も流れる涙を袖で拭っていた。そんな感動的な室内に、ランサー達の姿はない。

彼らは、先程の場所に留まっていたのだ。その理由は……。

時の庭園の最深部。そこにいるのは、セイバー達五人とクロノ、そしてリンディの七人だった。

フェイトが動揺するアリシアと共にポッドから顔を出し、喜んだのも束の間。そこにクロノが現れたのだ。

だが、クロノは状況から全員いる必要はないと判断。アーチャー達五人に話があると告げた。

その理由を理解しているアーチャーは、それに従い、なのは達に、先にプレシアの部屋へ戻っているように伝えた。

それに不安そうな表情を浮かべるなのは達だったが、セイバー達が笑顔で心配いらないと言うと、渋々従って戻っていった。

まぁ、はやてとアリサだけは、去り際にクロノを軽く睨んでいたが。そして、それと入れ替わりでリンディが姿を見せたのだった。

「……さて、まずは何から聞きたいのかな？」

「ジュエルシードを使ったのは、何のためだ」

「人助けです」

クロノの言葉に、ライダーが何でもないように答える。その答えに若干毒気を抜かれたのか、クロノの表情から鋭さが幾分消える。

だが、リンディはその言葉にも表情を変えず、ややきつめの視線をアーチャー達へ向けている。

「……どういう事ですか？」

「話せば簡単だが、一つだけ言っておく。信じられんと思うぞ？何せ、我々もまだどこか疑っているぐらいだ」

「構いません。聞かせて頂けますか」

リンディの強い眼差しに、アーチャーも応えるように視線を鋭くする。そして、語った。ジュエルシードを使った一連の流れを。使い魔のシステムを利用し、死んだアリシアを生き返らせる。その際、宿る魂を本人のモノにしただけ。簡潔に言えば、たったそれだけ。

無論、”魔法”の事は伏せ、単にジュエルシードに、アリシア本人の魂を宿らせて欲しいと願っただけと告げて。

その”奇跡”としか表現出来ない事実に、リンディ達は声を失った。理論としては正しい。だが、それで本当に叶えられるものなのか。

そう言ったリンディの言葉に、アーチャーはどこか自傷気味に答えた。

「まったくだ。自分で考えておいて何だが、こうも上手くいくと嫌になるよ」

「……それで、ジュエルシードは全て？」

リンディは、地面に散らばるジュエルシードの欠片を見つめて尋ねた。それに小次郎が不思議そうに答えた。

「いや、一つだけ残っておった。ゆーのが持っておるから、今度持参しよう」

そんな小次郎の言葉に、クロノもリンディも全てを悟った。アーチャー達は初めから今回の事だけを狙っていたのだと。

ジュエルシードを死者蘇生に使う。そのためにこちらにジュエルシードを渡そうとしなかったのだ。全てが終わるまで、これを成し遂げるために。

現に、今のアーチャーからはあの時のような敵意が欠片もない。残りの四人も同じ。警戒も緊張もしていなかった。

それを裏付けるようにジュエルシードの譲渡もあっさりと認めたし、事情も簡単に話していた。

「そうですか……。では、もう一つ――――」

「個人で使用する事に関しては、確か犯罪だったな。それは認めよう。だが、我々を捕まえると色々厄介ではないかな？」

「……どういう意味だ」

「何、君達が犯罪者と取引したような事になってしまうと思ってね」

そのアーチャーの言葉にクロノは驚愕し、リンディは唇を噛んだ。そう、アーチャーとの会話は録音してある。

それは、念のための用意として備えてあったのだが、それすらアーチャーは自分の有利な材料にしてしまったのだ。

確かにあの時、アーチャー達は犯罪者ではなかった。その主張を通す事は可能だ。しかし、未然に防ぐ術があったにも関わらず、それをしなかったのも事実。

自分が手札を切らないように情報開示を匂わせたのも、全てはこのためだったのかと考え、リンディは改めて思った。

（私達は、とんでもない相手と出会ったのね。……でも、悪くはないわ。ここから逆転しましょう。この人達を、必ず次元世界を守る力にしてみせる！）

単なる時間稼ぎ。そうとしか思っていなかったあの提案に、まさかこんな隠し技を込めていたなんてと。そう内心で考え、リンディは今度こそ、心からアーチャーに対してこう言った。

「はぁ……こんな気持ちにさせられたのは、久しぶりですわ」

「艦長？！」

笑顔さえ浮かべてアーチャーに告げたリンディに、クロノは驚きを隠せなかった。母がそんな顔をするのは、本当に久しぶりだったからだ。

悔しさではなく、感心を前面に出した表情。心から敬服していると言わんばかりの笑み。それにクロノは戸惑い、同時に気付く。

それは自分も感じた事だと。アーチャーの二手先三手先までも読んだ話術。どうなってもいいように、周到に張り巡らされた策。

その事に気付いた時、クロノも思ったのだ。今の自分はこの男には敵わない、と。

だが、クロノは自分の母の凄さも改めて感じる事になる。それは、リンディの告げた内容が……。

「でも、そちらも捕まる訳にはいきませんよね？　全て話して頂けるのかしら」

というものだったからだ。その発言の裏には、教えてくれなければ大変な事になるという意味が込められている。それには、クロノ

だけでなくアーチャーさえ唖然とした表情を浮かべたのは、言うまでもない。
リンディは、事情を話さないのなら、自分達が処分されてもいいから、アーチャー達も道連れにすると言ったようなものだからだ。
それを悟り、アーチャーが小さく苦笑した。これは厄介な事になってきたと、そう思って……

リンディ達がそんな話し合いをしている頃。アースラ艦内は静まり返っていた。
リンディが出て行ったすぐ後、魔力反応は消えた。次元震も起こらず、全てがいい意味で想像を超える結果となった。
ジュエルシードは次元干渉型ロストロギア。にも関わらず、次元震が起きないなんてどうしてだ。
クルー達がクロノ達の安否を気遣う中、そう思ったエイミィは、片っ端からデータを調べ上げ、ある事に気付いたのだ。

「次元干渉を、指向性を持たせて行っていた……？」

確かにジュエルシードは次元干渉を行っていた。しかし、そのエネルギーがデータ上は完全に制御されていたのだ。
まるで、指向性を与えられたかのように。だから、次元震が起きずに済んだのだとエイミィは考えた。
そして、そのデータを即座に個人用のメモリーに保存し、次元震反応を感知した初期のデータにすり替える。無論、発覚したら大問題だ。
それを平然とやってのけ、シートにもたれかかり、息を吐く。

（よくわかんないけど、クロノ君。これ、絶対やばい事だらけだよ。……アースラでよかったよ、この件引き受けたの）

そう思って、エイミィは呟く。

「この件終わったら、クロノ君には沢山奢ってもらお～っと」

それぐらいしても、バチは当たらないよね。そんな事を考えながら、エイミィは視線を天井へと向ける。

もうこの事件も終わり。そんな予感をひしひしと感じ、伸びをするエイミィ。そしてその予感は、正しく当たっているのであった。

「では、詳しくはまた明後日にでも」

「分かった。その際は全員で行った方がいいか？」

どこか疲れたようなアーチャー。その言葉にリンディは即座に是非と答え、笑みを浮かべた。それに苦笑いのアーチャー。一方のセイバー達は既に疲れ切った表情だ。あの後、リンディが提案したのは、簡単に言えば司法取引だった。

アーチャー達のした事を何とかする代わり、例の光やそれに関わる事について話す。そして、なのは達がジュエルシードを使った事も手を打つ代わりに、リンディの要請に応じて、事情次第で力を貸す事を約束させられたのだ。

ただ、管理局ではなく、あくまでリンディ個人に手を貸すという事にアーチャーは拘ったため、完全に思い通りとは行かなかったが。

アーチャー達としては、管理局と対立する事になっても構わないのだが、なのは達をそれに巻き込みたくはない事と、彼女達があまり争いを好まない事を考えて、手を打つ事にしたのだった。

まぁ、小次郎だけはリンディの手練手管を見て、キャスターを思い出したのか笑みを浮かべたままだったが。

「さ、帰るわよクロノ。緊急事態だったとは言え、不法侵入に近いのだから」

「……分かりました。というか母さん。何でそんなに元気なんですか……」

「いいじゃない。では、これで失礼します。明後日、お昼頃にあの場所へこの子を行かせますので」

既に思考能力が落ちたのか、リンディのあまりの対応に疲れ果てたのか。クロノは口調が完全にオフモードになっていた。対するリンディも口調はオフモード。開き直った途端、アーチャーの話術が通じなくなったのもあってか、リンディは絶好調だった。

特になのは達の事に言及した時、アーチャー達が動揺したのをリンディは見逃さなかった。それを攻め手に、リンディは一番望んでいたアーチャー達の協力を取り付けたのだから。

だが、その言い方が若干脅すようにも取れたため、アーチャー達の怒りを買いそうになって、リンディが慌てる一幕もあった。

それもリンディの謝罪とクロノの説明により、事無きを得て、この結果に至ったのだ。

「……了解した。ではまた明後日にな。リンディ艦長」

「はい。明後日もどうぞお手柔らかに」

「それは私の台詞だよ」

「うふふ、では失礼します」

「……失礼する」

満面の笑みで立ち去るリンディと、疲れた顔で立ち去るクロノ。そんな対比する表情のハラオウン母子を見送り、セイバー達は大きく息を吐いた。

先程の大掛かりな儀式。そして、聞いているだけとはいえ、高度な論戦を展開されていたのだ。神経も疲弊するというものだ。

唯一、小次郎だけは、アリサが関わる話以外どこ吹く風とばかりに聞き流していたが。

「……終わりましたね」

「あ～、やっとな」

噛み締めるようなライダーの言葉に、ランサーが心からそう答える。そしてそのまま地面に倒れこんだ。

背を床につけ、呆然と天井を眺めるランサー。それに何かを感じたのか、セイバーはその隣へと座った。

「流石はクー・フーリンですね。最後は貴方が決め手でした」

「はっ、よく言うぜ。お前達が発破かけたからだろうが」

「ふむ、それもそうさな。だが、お主が一番強い輝きを出させておった」

「そうですね。あの最後の輝きが”道”を開いたのだと思います」

そう言いながら、小次郎とライダーがランサーとセイバーの横に腰掛ける。その視線も、天井を見つめていた。

「ま、これでほとんど片付いたか。後はフェイトの母親だけだが……」

「……セイバー、頼み「構いません。あの時も言ったはずです、ランサー」

アーチャーの言葉にランサーが体を起こし、真剣な表情で頼みを告げようとした。だが、それをセイバーは遮ってそう言った。

「困っている者を助ける力があるのなら、迷う事無く使う。それが御神の、いえ、高町の教えです」

そんなセイバーの言葉に、ランサーは一瞬の間を置いてから、笑みを浮かべてその肩に手を乗せた。

それを不思議そうに見つめるセイバー。そしてランサーが告げた一言が、セイバーを怒らせる事になる。

「ホントにお前いい女になったな。ま、まだちょいと色気が足んねぇ～が」

笑いながら告げられたその一言を聞いた途端、ライダー達が即座に離れた。そして、セイバーが無表情で立ち上がり、ランサーへこう言い放った。

「とはいえ、渡すのはフェイトでいいですね。貴方には、少し灸を据えねばならないようですから」

「お、おいっ！　何怒ってやがる!?」

「そういうところだ、ランサー」

「御愁傷様です」

「骨は拾ってやろう」

口々にランサーへ言葉を掛けるアーチャー達。その顔は一様に楽しそうに笑っている。

それを聞いて、ランサーは出口向かって走り出す。それをセイバーが追い駆けていく。

そして、それを止めもせず笑みを浮かべて見送るアーチャー達。

「勘弁してくれぇぇぇっ！」

「待ちなさぁぁぁいっ!!」

そんな、どこまでも続くと思われた二人の追いかけっこを止めたのは、声に気付いたなのは達でしたとさ。

こうして、後に彼らがジュエルシード事件と呼ぶ出来事は幕を閉じる。

だが、これもまだ彼らの”運命”の一部の終わりに過ぎなかった……。

ーーー

無印八話　EX

「では、これを」

「おう。……フェイト、これをプレシアに渡すんだ」

あの追いかけっこの後、セイバー達だけでなく、ライダー達も戻ったので、全員がプレシアの部屋へと集合した。

そして、儀式の成功に感謝するプレシア達に、セイバーとアーチャーは、どこか苦い表情を浮かべながらもそれを受けた。

ライダー達はそんな二人の気持ちを知るが故に、話題をプレシアの事へと切り替えた。

そして、それを受け、セイバーがアヴァロンを出現させて、ランサーは受け取ったそれをフェイトへ手渡した。

それが何を意味するのか解りかねるフェイトへ、なのはが納得の笑顔を浮かべて答えた。

「そっか。それは怪我だけじゃなく、病気も治せるんだ」

「どういう事よ？」

そんななのはの言葉に、アリサ達子供組が揃って不思議顔。それを見て、なのははまずフェイトを促した。

プレシアにそれを持たせればわかると。そう言って。

それを受け、フェイトはアヴァロンをプレシアへと手渡した。それをプレシアが受け取った途端、アヴァロンが淡く輝き出す。

それは、以前士郎を癒した光。見る者を安らげる神秘の輝き。幻想的な光景に、プレシアだけでなく、誰も言葉を発しない。

ただなのはだけは、プレシアを輝きが包んでいた時間から、その症状が重いものだったと改めて感じていた。

（……やっぱり、お父さんの時より長いの）

やがてその輝きが収まり、プレシアは驚きを見せる。体を襲っていた倦怠感等の症状が軒並み無くなっていたからだ。

そんなプレシアの表情から何かを察したのか、リニスが即座にモニターへと駆け寄って状態を確認し――。

「そ、そんな……本当に……」

驚愕した。そして、段々とその目に涙を浮かべた。目の前に表示されたデータが示すもの。それは、プレシアの状態の回復。

不治の病。そこの域まで達していた症状が、綺麗に完治していたのだ。

そして、その涙を拭う事もせず、リニスは振り返り告げた。

「プレシア、奇跡は終わっていなかったんです。病気が……病気が……」

「……そうなのね？　本当にそう思っていいのね？」

プレシアの信じられないというような声に、リニスは何度も首を振り、頷いた。それにフェイトも全てを悟り、プレシアを見つめた。

「母さん……っ！」

「ああっ……フェイト、アリシアっ！」

「わっ、どうしたのママ？」

再びフェイトとアリシアを抱き寄せ、プレシアは涙を流す。それを見て、アリサ達も事情を理解して喜んだ。

プレシアの病気が完治した。それを理解したからだ。そしてそれぞれが騒ぎ出す。

アリサはすずかと一緒になって笑顔を浮かべ、なのははやてと手を繋いで微笑み合う。ユーノはそんななのは達から顔を背け、一人静かに涙を流す。

（僕が見つけたジュエルシードが、こんな結果をもたらすなんて……）

自分が発見したジュエルシード。それは災いをもたらすものになるはずだった。……なのは達に出会わなければ。

その出会いが今の光景に繋がったのを思い、ユーノは心から感謝していたのだ。

一方、セイバーはランサーから返されたアヴァロンを見つめ、はやてへと視線を向けた。それをアーチャーは遮るように立ち、アヴァロンをしまうように視線で告げる。

それを見ながら、ライダーと小次郎は苦い顔を浮かべる。ランサーは、アルフとリニスから感謝の言葉を告げられながら、それを横目で見つめていた。

そう、以前もセイバーは、アヴァロンをはやてにも使おうと考えていた事がある。だが、アーチャーはそれを断ったのだ。

その理由として、アーチャーが告げたのは理由にならない理由。

――――何やら嫌な予感がする。

その一言を持って、アーチャーはセイバーの好意を断った。だが、セイバーはそれに異を唱える事はしなかった。
はやての事を大事に考えているアーチャーが断るという事は、余程の事と思ったから。
だからこそセイバーはその時も、そして今回もそれに従った。手にしたアヴァロンを消し、視線を再びプレシア達へと戻した。

（シロウ。貴方は今の私を見て、何と言うのでしょう？　呆れるのでしょうか？　それとも……誉めてくれるのでしょうか？）

涙を流し合うプレシアとフェイト。アリシアは一人戸惑いを隠せないが、嬉しそうにプレシアを抱きしめ返している。
それを見つめ、セイバーは微笑みを浮かべた。取り戻した時間。
だが、それは決して間違っていなかった。
そんな思いを、強くその光景から感じていた……。

”魂”が意味するモノ

（こんな”奇跡”はこれっきりだろう。だが……悪くない。……ああ、俺はこの光景をどこかで願っていたのか）

セイバーが感じていたもの。それはアーチャーも同じだった。
過去をやり直したのではなく、過去を乗り越えたからこそ、あのプレシア達の姿があるのだと。
それを実感し、彼も思う。自分達の行いは、決して間違いではな

いと。絶対に正しいとも言い切れないが、間違っているとも言い切れないのだ、と。

そんな遠い目をしている二人を、ライダーはどこか微笑ましく眺めていた。

（まったく、二人して同じような表情をして……。それでは、まるで夫婦ですよ）

隣り合うセイバーとアーチャー。無意識なのだろうが、その顔は笑みを浮かべている。視線は、揃ってプレシア達を見ているので、余計そう見えた。

そして、そんな事を思いながら、ライダーは視線をランサーへと移した。そこでは、微笑ましくも大変な光景が展開されていたからだ。

「ね、ランサー。ホント、あんたがいて良かったよ」

「ランサー、本当に無事で良かったです」

「あ、ああ。……にしても、色々疲れたぜ」

両腕をアルフとリニスに掴まれ、どこか戸惑い気味なランサー。気のせいか、二人の間には火花が散っているようにも見える。

その光景に、ライダーは桜と凛の関係を思い出し、小さく笑う。

そして、ランサーへ向かって一言。

「ランサー」

「あん？」

「ご愁傷様です」

「またかよ！？　……今度は何でだ……？」

先程と違い、自分が気の毒に思われる事に気付いていないランサー。どうやら、ある意味で女運の無さは顕在のようだ。

だからこそ、余計にライダーは笑う。そう、それはまるで……。

（士郎のようですね。……もしや、複数の女性に好意を抱かれるには、色恋に鈍感でなければいけないのでしょうか……？）

その考えは、正しいとは言えない。だが、間違っているとも言えない。それが分かっているから、ライダーもそれ以上考えない。

そんな中、ただ一人小次郎だけが、静かに室内を眺めていた。その視線は、真っ直ぐにアリシアを見つめていた。

（あの娘、まったく魔力を感じん。どういう事だ……？）

使い魔であるアルフやリニスから感じるものを、アリシアからは感じる事が出来ない。それに小次郎が気付いたのは、アヴァロンの輝きが収まった後だった。

あの最深部ではジュエルシードの影響が残っており、魔力を感知する事が出来なかった。だが、アヴァロンの優しい輝きがその感覚を取り戻させた。

セイバー達は、それよりも思う事があるのか気付いていないようだったが、小次郎だけは、気配察知に優れるアサシンのクラスのためか、その異常性に気付いていた。

だからこそ、小次郎は待っているのだ。全員が落ち着き、話を切り出せるタイミングを。

そんな小次郎の思いが通じたのか、プレシア達がやっと意識を周囲に戻した。その腕からフェイトとアリシアを放し、表情はどこか喜びを滲ませている。

そして、プレシアがセイバーへお礼を述べる。それに当然の事をしただけと答えるセイバー。

話がそこで一旦途切れたのを見計らい、小次郎は自分の感じた疑問を全員に問いかけるべく、声を発した。

「すまぬが気になる事がある」

その小次郎の問いかけが、予想だにしない結末を気付かせる。そして、まさしくアリシア復活が”奇跡”だった事を思い知るのだった……。

アースラに戻ったリンディとクロノは、急いで今回の報告書を作成していた。エイミィも交えての大仕事。そう、全ては今回の事を上手に処理するために。

帰艦した二人にエイミィが見せたデータは、とてもではないが上層部に提出出来るものではなかった。

次元震を起こすはずの魔力エネルギーを、周囲ではなく指向性を与えたかのように干渉させた。それが意味するものは、セイバー達が次元干渉を制御したように見えるという事。

そんなデータを見れば、間違いなくセイバー達の存在そのものが問題視される。そして、セイバー達は管理局には入らないと明言している。

それを聞いて、上層部が下す判断はおそらく一つ。レアスキル持ちではなく、生物型ロストロギア扱いを下す。

そして、捕獲もしくは封印か”処理”する事になるだろう。

それを瞬時に理解した二人に、エイミィはどこか悪人じみた笑みを浮かべ、もう一つのデータを見せた。

それは、感知された当初の、次元震が起きても不思議ではない程度のデータ。そして、それが何を考えて表示されたデータかを把握し、リンディとクロノは苦笑した。

「あたしは何もしてないですよ？　だって、あんな凄い魔力で計器が狂ったんですから。だからこのデータしか残ってなかったんです」

そんな言葉を悪びれもせずに告げたエイミィ。それにクロノは呆れ顔。リンディは、どこかおかしそうに笑みを浮かべたのだった。

そして、今三人はそのデータを基にした報告書を作成中なのだ。

簡潔に言えば、ジュエルシードが何かの拍子で暴走してしまい、それをリンディが何とか抑えつけ、クロノが封印しようとしたのだが、運悪く虚数空間が出現していたため、一つを残しジュエルシードは紛失してしまったという内容。

暴走したキッカケは判明していないが、おそらく大勢の人間がいたため、無意識の願いを受けてそうなったのではないかと結論付けてある。

「……これなら、アーチャーさん達に害は及ばないわね」

「真実ではないですが、まったくの嘘でもないのが厄介ですね」

「クロノ君もそうやって大人になっていくんだねぇ」

それぞれが報告書を眺め、思い思いに意見を述べる。その報告書

は、ほとんどリンディが作ったもの。だが、虚数空間の記述はクロノの提案だった。

エイミィがしみじみ呟いたのは、真面目が売りのクロノが率先して、虚偽に近い報告書を作る事に協力したからだ。

事実、それはエイミィだけでなく、リンディさえ驚く事だったのだから。そんな呟きに、クロノはどこか遠い目をして答えた。

「……詳しい事情は知らない。だが、生き返ってくれるなら……そう思う相手がいる人間の気持ちは分からないでもない」

「……ゴメン」

どこか羨ましいと言いたそうなクロノ。それにエイミィは、己の発言がキッカケでクロノの過去を呼び覚ましたのを感じ、謝った。

それに、気にしないでいいとクロノは告げ、視線をリンディへと向けた。それに気付き、リンディも視線をクロノへ向ける。

「とりあえず、今回の事はこれでほとんど終わったわね」

「ええ。後は事後処理と報告を兼ねた話し合いだけですが……」

そう言ってクロノは苦い顔。それとは正反対にリンディは笑顔。その対比を見て、エイミィはリンディへ尋ねた。

「何かあるんですか？」

「ん？　実はね、アーチャーさん達が民間協力者として協力してもらえる事になったのよ」

「表向きは、な。実際は完全な独立愚連隊だ。判断は自分達でする

し、命令は出来ない。……これでも譲歩した方らしい」

満面の笑みで言い切るリンディ。それを補足する形でクロノが続く。それを聞き、エイミィが浮かべた表情は――――。

「うっそ。凄いじゃないですか、艦長。オーバーS級の戦力ゲットですね」

笑顔だった。それどころかはしゃぐようにリンディへ詰め寄っている。それをリンディも嬉しそうに応じ、まるで親子のように会話している。

艦長室だからこその関係。上司と部下ではなく、まるで母と娘だとクロノは思いながら、視線を天井へと向ける。

（アーチャー、か。まさか、あの少女達のために動いていたなんて……）

アーチャー達の事情を簡易的にしか聞けなかったが、行動目的の根底にあったものは、クロノも理解していた。

何故なら、それを理解したが故に、リンディはアーチャー達の協力を条件付きとはいえ取り付けたのだから。

まぁ、リンディの不用意な発言で危うく怒らせるところだったが。なのは達のために。そのためにアーチャー達が動いていたと知った時、クロノは軽い驚きを感じたのだ。

（あれだけの能力を持ちながら、それを社会のためではなく、自分の信念のために使う……か）

管理局へ協力する事を固辞し続けるアーチャーに、リンディがその理由を尋ねた際、アーチャーはこう答えた。

（組織は個人を殺す。大勢のために少数を切り捨てる事を、自分の意志ではなく、誰かに委ねる事だけはしたくない）

そのアーチャーの言葉を、噛み締めるように心で反芻し、クロノはその思いを汲み取っていた。

その言葉の持つ意味。それを深く理解していたから。だからこそクロノにとって、アーチャーは忘れていた感情を呼び覚ます存在になった。

それは、憧れ。幼い頃、男なら誰もが抱く感情。それをクロノは抱いた事がなかった。いや、憧れる人物はいる、だが、それは理性が尊敬出来ると感じた相手だった。

理性ではなく、本能で憧れた存在。そんな相手は今までいなかったのだ。おそらく、本来ならば父親に抱くのだろう。だが、クロノには、父親の記憶はほとんどない。

彼が物心つくかつかないかの頃、『闇の書』と呼ばれるロストロギア絡みの事件で殉職したからだ。だからこそ、クロノがアーチャーに憧れるのはそれに近いものがあった。

それをクロノは分からない。だが、着実にその心に憧れは息づいている。彼がそれを自覚するには、まだ時間が必要だった。

小次郎の告げた疑問は、その場にいる全員に衝撃を与えた。唯一事情を理解していないアリシアだけが、そんな周囲を不思議そうに眺めていた。

アリシアから魔力を感じない。それを聞き、セイバー達もアリシアへ注意を向け、確認した。

確かにアリシアからは魔力を感じなかったのだ。そして、更に確

かめるべくフェイトが念話を試したが、アリシアはそれに無反応だった。
魔法が使えるなのは達が全員で試したが、誰にもアリシアは反応しなかった。

「……どういう事だ」

「もしかしたら……」

呆然と呟いたアーチャーの声に、ライダーは何かを思い出したのか静かに語りだした。

「以前リンに聞いたのですが、人を形作っているのは、”魂”だそうです」

そこから始まるライダーによる、魔術的見地から見た人間の構造。
それは、その人物をその人物たらしめているのは、魂なのだという事。
体が誰であろうと、魂がその人物のものならば、その魂に影響され体が変化するのだと。
その具体例として説明されたのは、なのはの魂をフェイトの体に入れる事が出来るなら、フェイトの体はなのはに変わるという事だった。

そこまで聞き、アーチャーもライダーの言いたい事を理解した。
自分達が行った行為。それは何だったかを思い出したからだ。
アリシアの体を使い魔として再生させ、そこにアリシアの魂を移す。それはつまりこういう事だ。
体は確かに使い魔に変化していたのだろう。だが、そこにアリシアの魂が入った事により、体がアリシアに変化したのだ。

「確認したい。アリシアは魔法が使えたか？」

「……いえ、アリシアはリンカーコアがなかったから……」

「まさか……。なら、本当に……」

プレシアの答えに、ランサーが信じられないと言った声を漏らす。
それにアーチャーは頷き、言い切った。

「そうだ。彼女は”アリシア”として復活したのだ。紛れも無く、な」

アーチャーの告げた内容に理解が及ばないなのは達。それにセイバーが簡単に説明する。それは……。

「要するに、アリシアは使い魔ではなく、完全な人間としてここにいるという事です」

「そう、アリシアは間違いなくアリシアとして目覚めたのですよ。魔法の使えない、ただの少女として」

セイバーとライダーの言葉に、若干の間を置いてフェイト達が納得した。そして、それが意味する事も理解し、フェイトはアリシアへ視線を向けた。
ただ、さっぱり事情が分からないアリシアは、首を傾げてプレシアに問いかけた。

「どういう事？　一体みんな何を言ってるの？」

「いいのよ。アリシアは分からなくても。……〝大きく〟なってね、アリシア」

「？　うん。すぐにフェイトよりも大きくなるからね、ママ」

無邪気に頷くアリシアに、プレシアは優しく微笑み頷き返す。それをフェイトが嬉しそうに見つめる。そして、ゆっくり近付いていき――――。

「ねぇ、母さん。アリシアの事、どう呼べばいいかな？」

そう尋ねた。そう、姉に思えない外見。それがフェイトを困らせていた。なにしろ姉さんと呼ぶと、どこかアリシアは嫌そうだったのだ。

だから、母親であるプレシアに決めてもらおうと尋ねたのだが……。

「そうね。……アリシアはどう呼んでほしい？」

「う～ん……。フェイト、顔そっくりだし、背はわたしより高いし……妹って感じしないんだよね」

「そ、それは……」

流石に「アリシアを基にしてるからだよ」とは言えないフェイト。それを知らず、アリシアは唸り声を上げていた。そして、何かを決意したのか、フェイトへ笑顔を浮かべて告げた。

「アリシア、でいいよ」

「……いいの？」

「うん。でも、いつかわたしがフェイトより大きくなったら、お姉ちゃんって呼んでね」

笑顔でそう言ったアリシア。その笑顔にフェイトは強く頷いて笑顔を返す。

――――分かったよ、アリシア。

――――えへへ、すぐに追い抜いちゃうからね。

そんな会話をする二人を、その場の全員が微笑みを浮かべて見つめるのだった……。

おまけ

話も終わり、なのは達子供達はアリシアを中心に集まり、恒例ともいえる行事を行おうとしていた。それは……。

「じゃあ、最初はなのはからお願い出来る？」

「うん。えっと、初めましてアリシアちゃん。私、高町なのはです。なのは、って呼んで」

「初めましてアリシア。アタシはアリサ・バニングス。アリサでい

いわ」

「初めましてアリシアちゃん。私は月村すずか。すずかでいいよ」

「初めましてアリシアちゃん。わたしは八神はやて。はやて、って呼んでな」

「初めましてアリシア。僕はユーノ・スクライア。ユーノって呼んでくれると嬉しいかな」

「え？　え？　そんなに一遍に言われても……」

覚えられないよ～。そう不貞腐れるように答えたアリシアに、なのは達がかつてのフェイトを思い出し、声を出して笑った。

――――――

無印最終回　前半

アースラ艦内にある艦長室。そこに、セイバーを始めとするサーヴァント組五人と、リンディとクロノの二人。そして、プレシアとリニスがいた。

何故、ここにプレシア達がいるのかというのは、ただ一つ。アリシアとこれからの自分達の事を話し合うためだった。

場の空気は和やかではあった。だが、それはあくまでリンディとプレシアだけ。残りの面々は、揃って何とも言えない表情を浮かべていた。

その理由。それは、プレシアの決意と覚悟の打ち明け話を聞いたリンディが感動し、それに付随して自分の夫を亡くした事件を語りだした事に端を発する。

互いに大切な者を失った。そして、リンディはそれを受け止めて乗り越えた。プレシアはそれを拒絶し、執着した。

だが、その思いを分からぬリンディではない。共に子を持つ親として、プレシアが抱いた気持ちに共感するのも無理はない。

だからこそ、全てをフェイトに打ち明けた決意と、その覚悟に心打たれたのだ。

自分が嫌われてもいい。ただ、娘に全てを知らせぬまま死ぬのは心苦しいと。

それからは、もうリンディとプレシアの母親トーク全開だった。既に話し合う事は無くなっていたのもあってか、リンディもプレシアも饒舌に子供自慢をしていた。

それを聞くはめになったセイバー達は、揃ってため息。おそらく、これが終わるには、かなりの時間を要するだろうと予測できたから

だ。

（なのは達は今頃下校時間でしょうか。……仕事に行きたいです）

（はやては、今頃フェイト達と共に遊んでいる頃だな。……おやつは我慢してもらうか）

（スズカ達、今日はハヤテの家で遊んで帰ると言ってましたし……迎えに行ければいいのですが）

（本来であれば、美由希殿や恭也と試合えたのだが……女というのは本当に話し好きよ）

（かったるいな、ったく。フェイトやアルフが羨ましいぜ……ねむ……）

（プレシアもリンディさんも楽しそうでいいのですが……。ま、まぁランサーと共にいれるから良しとします）

（何だろうか……今ならこの場にいる全員と意思疎通が出来る気が……いや、リニスさんだったか。彼女だけは無理だな）

そんな風に時間は過ぎていく。もう、後半はただのお母さん同士の自慢大会になっていたが。

取り戻した日常（じかん）、そして……

結局、その話し合いで話したのは、セイバー達が”この地球”の人間ではない事。そして、魔法とは違う魔術を使えるという事。

宝具については、それぞれが持つ切り札で、あの光はセイバーの宝具が放ったものだと教えた。詳しい事は教えられないというよりも、自分達にも明確に理解出来ていないと言って打ち切った。

そして、何故かと言えば、自分達が基から作った道具という訳ではなく、その製法に関するものは、何一つとして残っていないからだと告げた。

更に調べようにも、世界が違うのでそれすら困難であり、手の打ちようがない事も語った。

それにリンディがロストロギアと同質の物だと理解を示し、クロノは極力それを使わないで欲しいとも告げた。

それにセイバー達も同意し、元から頻繁に使う気はない事を告げ、止むを得ない事態以外は使用しないと約束した。それと……。

「なのはさん達を管理局には勧誘しません」

リンディはどこか残念そうだったが、そう約束した。現時点でＡＡランクの魔力を持つなのはとフェイト。

それを管理局に勧誘しない事は、まさに苦渋の決断だった。だが、それをすればセイバーとランサーが黙っていないと告げたのだ。

リンディが管理局への勧誘をすれば、真面目で正義感の強い二人はおそらく管理局で働く事を考えてしまう。

だからこそ、セイバーとランサーは強く反対したのだ。まだ二人を子供でいさせてやりたいと思って。

勧誘自体は、二人がもっと成長し、自分の判断で自分の進路を決める時期になれば許すとなった。

それは少なくとも１５歳。それまでは勧誘禁止。それを聞き、リ

ンディが肩を落としたのは言うまでもない。

そして決まったのは、以前の時に決まった事の再確認と、アリシアの扱い。そして、テスタロッサ家の地球への移住だった。

既に死亡扱いになっているアリシアがミッドで生活するのは、色々と問題がある。そのために、プレシアが地球への移住を提案した。

だが、管理外に住むのは色々と手続きが必要なため、一度プレシア達がミッドチルダに戻る事になったのだ。

それと並行する形でアリシアの事も何とかしてみると、リンディは言った。せめて死亡者扱いだけでも何とか出来れば、と語るリンディ。

それにプレシアが感謝を述べると「同じ子を持つ母ですから」と笑顔でそれに答え、プレシアが深い感謝を告げる一幕もあった。

そして、もう一人それについていく形で、ミッドに行く事にした者がいた。ユーノである。

セイバーからプレシア達の話を聞き、ユーノは高町家の面々にこう言った。

「僕も、一緒に一度ミッドに戻ろうと思います」

その理由は、一族の者達が心配しているだろうから、それを安心させたいからという事と、はっきりと自分の決意と想いを告げ、帰って来たいと告げた。

そうユーノは言った後、小さく息を吸ってはっきり言い切った。

「僕が帰ってきたいのは、ここですから」

「ユーノ君……」

「そう、か。なら、俺は何も言わない。……気をつけて行ってこい、ユーノ」

驚いたようななのはの呟き。それを聞き、真剣な表情で告げられた士郎の言葉に、ユーノは僅かに驚き、そして頷いて答えた。

「……はい、父さん」

「いいなぁ……」

「いつの間にそんな呼び方を……」

二人のやり取りにどこか羨ましそうに呟く桃子と美由希。恭也は、そんなユーノを小さく小突き「俺も、兄さんと呼びたきゃ呼べ」と呟く。

それにユーノが嬉しそうに笑みを浮かべ、頷いた。そんな光景を見て、なのはは笑顔を見せると同時に、どこか寂しくも思っていた。

フェイト達はいつこちらに戻れるか分からないと言う話だった。ユーノもどれぐらい掛かるか分からないが、それと同じぐらいだろうと感じていた。

（管理外、だからね……）

滞在するには、様々な許可がいるとセイバーも言っていた。だから、ユーノやフェイト達と再会する事は、時間がかなり必要だろうとなのはも思っていた。

セイバーは、そんなのはの気持ちを察し、その肩に手を置き告げた。

「大丈夫です。ユーノもフェイト達も必ずまた会えます。……絆は

永遠です」

「……うん。ありがとう、セイバー」

その手に自分の手を静かに重ね、なのははある事を決意する。それは、再会を誓うための儀式……。

（アレ、フェイトちゃん達に渡そう。そして……）

フェイト達がミッドチルダに帰る。それをそれぞれのサーヴァントから聞き、なのは達は急ぎ例の計画を準備した。

桃子や士郎、アーチャー達の力を借り、翠屋を貸し切った『全快&行ってらっしゃいパーティー』である。

フェイト達が帰るまでの時間は、思ったよりもなく、それこそかなりの強行軍な下準備だったが、フェイト達の相手をランサーが買って出たおかげで、気付かれる事もなく、何とか当日を迎える事が出来たのだ。

そして、その会場となった翠屋には、リンディやクロノ、エイミィの姿もあった。プレシアと話が合い、色々と今後の事も考え、アーチャーが招待したのだ。

その姿が見えた時、アリサやはやてが何か警戒したが、プレシアがリンディを見て嬉しそうに近寄ったのを見て、それも早々に消した。

更にエイミィが持ち前の性格で、なのは達と打ち解けたため、はやてとアリサを始めとする『管理局』に対する不信感は大分払拭する事になった。

「へぇ～、みんな同い年なんだ」

「はい。でも、エイミィさんとクロノさんは違うんですね」

なのはが笑顔で頷く。それに呼応するようにアリサ達も頷きを見せる。ただ、アリシアだけは不満そうだったが。

「まぁね。あたしが二つ上。でも同期なんだよ、訓練校の。今は上司と部下になっちゃったけどね～」

「ねぇ、どうしてエイミィはお姉ちゃんなのに、クロノの部下さんなの？」

「あ、アリシア。せめて”さん”を付けようよ」

「いいよ、呼び捨てでも。あたし、アリシアちゃん気に入っちゃった。あ、後敬語は無しでね。仲良くしよ？　ね」

「アタシもエイミィさんの事、気にいったわ。……大分気さくな人だし」

「私も。……でも、本当にいいんですか？」

すずかの言葉に、エイミィはスマイル&ウィンクで応える。それがやたら決まっており、はやてとアリサ、アリシアから感嘆の声が漏れる。

「ええなぁ、エイミィさん。何や、大人の女って感じや」

「それ程でもないよ。で、さっきのアリシアちゃんの話なんだけど、

実はね～……」

エイミィを中心に盛り上がるなのは達。クロノとの昔話などをし、なのは達が抱いていたクロノの印象を変える事ばかり意図的に話す。それは、なのは達にあるクロノやリンディへの、ひいては管理局の悪印象をなくすため。

自分が自己紹介した時の雰囲気から、管理局がなのは達子供達には良く思われていないのを悟り、エイミィは積極的にクロノやリンディの個人話をした。

それと同時に、自分達が常に心掛けている事等も交えつつ、管理局員がどんな者達かを語る。誇大にならないように、細心の注意を払いながら。

そんななのは達とは離れた場所では、リンディとプレシア、士郎に桃子という親達が会話に花を咲かせていた。

「そうですか。旦那さんを……」

「すみません。お辛い事を……」

「いえ、気になさらないでください。……でも、桃子さんが羨ましいですわ。こんな素敵な旦那様がいらして」

「本当ですわ。フェイトもお世話になったようですし」

今後の事も話し合いながら、次第に話題は子供達の事へと移っていく。なのはやアリシア、クロノ等の昔話をしながら、共通の悩みや問題などを全員感じてきた事や、今後心配している事なども似ていて、四人はどこでも親の悩みは同じなのだと笑い合った。

「いつになるか分かりませんが、こちらに戻った際には――」

「色々と頼りにしてください」

「ええ。私達も、なのはとフェイトちゃんやアリシアちゃんが友達になってくれたのが、本当に嬉しいんですから」

「……それは、私の方です。本当に、本当にありがとうございます」

プレシアが深々と頭を下げたのを、二人はどこか気まずそうにしながらそれを止めさせる。

そして、それを見ていたリンディは、プレシア達がこちらに早く滞在出来る手段を思いつき、プレシアへ切り出した。

「プレシアさん。もし宜しければ嘱託魔導師になりませんか？」

そのリンディの提案に、プレシアは若干の躊躇いを見せたが、リンディの告げた内容に驚き、同時にリンディの手を握り、感謝する。

嘱託魔導師になり、その窓口をリンディが行なう事で、プレシアにアーチャー達との連絡役も兼ねた仕事をしてもらう。

そのための段取りも出来ない訳ではない。条件としては、プレシアが嘱託試験に合格する事だが、条件付とはいえＳＳランクのプレシアならば大丈夫とリンディは思った。

嘱託となれば、ある程度管理外への滞在も大目に見られるかもしれない。おそらく通常よりも時間が短縮出来る。それを考え、プレシアもその提案を受け入れた。

そして、親達の横ではクロノとユーノが話していた。その表情はどこか暗い。

「……そうか。君もここに……」

「ええ。一族の皆も分かってくれると思います」

「……時間は掛かるぞ。何せ、君は「ジュエルシード事件のきっかけであり、重要参考人ですからね」……そうだ」

フェイト達がジュエルシードに関して無罪になった反面、ユーノは事件に対し、責を負う事になった。といっても、軽いものである。具体的に言えば、事件の概要を話す。それだけ。だが、それはスクライアへ戻る前にしなければいけない事であり、時間はかかる。それに仕方なかったとはいえ、ユーノは管理外の人間に魔法を教えてしまったのだ。それに関した事も状況から大した事はないと予想されるが、その間完全にミッドに缶詰だ。

それが終わった後でなければ、スクライアの所まで行く事が出来ない。そして、プレシアが嘱託魔導師になれば、ユーノよりも早く地球に行ける。

つまりプレシア達よりも、ユーノは地球へ戻れるようになるまで時間が掛かる事を意味する。

「大丈夫ですよ。僕は犯罪者じゃない。……ですよね？」

「ああ。それについては心配いらない。ユーノ君は、むしろ事件解決に尽力さえした。……誇っていい」

「それは、僕じゃなくてなのは達です。……僕は、ただ自分の見つけたものに対しての責任を果たそうとしただけです」

そんなユーノの言葉に、クロノは呆れたように呟いた。

――それを誇れと言っているんだ。

――クロノさんこそ、アーチャーさんと対峙出来た事を誇ったらどうです？

しつこいクロノの言葉に、ユーノが微かに怒りを覗かせる表情で答える。それにクロノもどこかムッとした顔になる。

これが、後に続く二人の因縁の始まり。今でこそ『クロノさん』や『ユーノ君』で呼び合っているが、これがいつしか呼び捨てになる。

それは、この日からすぐに訪れる事になる。

そして、そんな二人から離れた別の位置では……。

「恭也。はい、あ～ん」

「やめろ忍。ノエル達が見ているぞ」

「見てないわよ。嘘吐くならもっとマシな嘘吐くのね」

見せ付けるようにいちゃつく忍に翻弄される恭也。そのやり取りを確かにノエル達は見ていない。

いや、正確には誰も見ていないのだった。そして、その後ろのテーブルには……。

「これ、アーチャーさんが作ったんですね」

「見ただけで分かるのか……」

「勿論ですっ！　アーチャーさんの料理なら、目隠ししたって匂い

で当ててみせます！」

「アーチャー様、これはどうでしょう？」

「……頂こう」

アーチャーの隣に陣取り、その腕を絡めるファリン。ノエルはそれを咎める事もせず、自分の作ったものの品評を聞くため、さり気無く箸で差し出している。

それを微かに戸惑いながら食べるアーチャー。ちなみにファリンは会場の飾りつけを手伝っていたので、料理を作る事が出来なかったのだ。

そして、その横のデザートが乗ったテーブル近くには……。

「美由希殿、これは？」

「それはガトーショコラです。小次郎さんって洋菓子は全然知らないんですね」

ケーキを前に不思議そうに尋ねる小次郎と、それに笑顔で答える美由希の姿があった。

小次郎はパーティーが始まってから美由希との話もそこそこに、興味を初めてみる料理、特にお菓子へと向けた。

それに内心不満を覚える美由希だったが、小次郎との時間を過ごせる事に変わりはなく、段々と上機嫌になり、今は笑顔で過ごしていた。

そして、その近くでは……。

「これ美味しいよ、ランサー」

「ランサー、これを食べて頂けますか？」

「お、おう。……てか、近ぇよ！　アルフもリニスも！　食いモンが近ぇ！」

満面の笑みで、それぞれ食べ物を差し出す二人。だが、その雰囲気は少しも和やかではない。

二人してランサーの腕を確保し、ランサーが好む肉料理を、押し付けるようにランサーの顔へと向けていた。

その妙な迫力にランサーは気圧されながらも、何とかしようとしているが、その結果はご覧の通りであった。

「……何やら取り残されている感が……」

「？　どうしました、ライダー」

「いえ、何でもありません。……口にソースがついていますよ、セイバー」

目の前で展開される光景に、ライダーはどこか寂しさにも似た感情を抱き、呟く。

それを聞き、セイバーが右手に鳥のもも肉を持って振り向いた。それに視線を移し、目にしたものに内心呆れながらも、ライダーは優しく指摘した。

それを受け、セイバーが慌てたように口を拭くためにナプキンを手にとる。それを眺め、ライダーは思う。

こんな時間を取り戻すために、自分達は動いていたのだと。だからこそ、密かに微笑む。この状況を作る原動力となったセイバーに。

それは、初めてライダーがセイバーに対して払った尊敬の想い。

そして、親愛の表れ。

（こうして見ると、セイバーはやはりどこか変わりました。……存在感が増したのでしょうか……？）

（何でしょう？　ライダーが笑っています。……そ、そんなに滑稽だったでしょうか？）

無論、そんなライダーの想いにセイバーが気付けるはずもなく、ただ自分がした事に対して恥ずかしがるだけだった……。

そんなこんなのパーティーも、いつかは終わりが来るもので……。

「今日は、私達のためにこんな盛大なパーティーをして頂いて、本当に感謝の言葉もありません。特に、フェイトとアリシアのために力を貸してくれた方が、こんなにもいた事に……心から感謝します。ありがとうございました」

プレシアの言葉に誰もが黙って耳を傾ける。そう、プレシア達は、明日リンディ達と共にミッドチルダへと出発するのだ。

テスタロッサ家との実質的な別れは、明日の見送りであるが、士郎達にとってはこれが見送りのようなもの。

知り合ってすぐに別れるのは寂しいが、戻ってくると知っているからかその表情は明るい。

「いつになるかは分かりませんが、またこの町に戻って来たいと考えています。その時には、改めてご挨拶に伺いますので、よろしくお願いします。……アリシア」

「え、えっと……今日は楽しかったです！　友達も一杯出来たし、エイミィやクロノともお話出来て嬉しかったよ！絶対にまた会おうねっ！　約束だよ？　……フェイトの番だよ」

「う、うん。……言いたい事はアリシアと一緒。私、この町に来て良かった。なのは達に会えて、沢山の人達に会えて……。絶対に、絶対に戻ってくるから！　だから……少しだけさよならです。ありがとう……ございました……っ！」

満面の笑顔で語ったアリシアとは対照的に、フェイトは徐々に涙を浮かべていき、最後は感極まって涙ながらの締めに、なのは達も涙を流した。

士郎達もそんなフェイトの気持ちを思い、瞳を潤ませていた。そうして、プレシア達が最後の言葉を終えたところで、ユーノがクロノに押し出される形で前に出た。

【きっちり自分の口から告げたまえ】

【……後で覚えていてくださいよ】

そんなやりとりを交わし、ユーノは周囲を見渡して、意を決して告げた。

「僕も、ミッドに戻る事にしました」

その発言に驚いたのは、高町家を除く全員だった。特にアルフの驚きは大きい。本人から帰るのは高町の家だと聞いていたからだ。

「まず、僕の事で心配している部族の皆を安心させたい。そして、フェイト達と同じように、僕もこの世界で暮らせるように許可を取

ろうと思うんだ」

ユーノがそう言うと、全員に納得の空気が漂った。特に顕著だったのはすずか。それをはやてに指摘され、慌てて手を振っていた。

「ただ、ジュエルシードの事で色々と話さなきゃいけない事が多いからね。時間は……フェイト達よりも掛かると思う」

その一言に、再び空気が微かに重みを増す。だからこそ、ユーノは笑顔で言い切った。

必ず帰ってくると。『家族』がいるこの町に。〝親友〟がいるこの町に絶対帰ってくると。

その言葉は、紛れも無いユーノの決意。それを感じ取り、なのはは笑顔で頷き、思う。

（ユーノ君、嘘吐かないもん。……信じて待ってるからね？）

念話で言わないのは、何か恥ずかしい気がしたから。そして、何かすずか達に悪いと思ったから。

自分だけ魔法に頼るのはズルイと感じたからこそ、なのはは心で呟くだけにしたのだ。

こうして、この日のパーティーは終わりを告げた。幾多もの縁を繋ぎ、またそれが新たな絆を生む。

そして、いつか絆は奇跡を紡ぐ力へとなる……。

ーーー

無印最終回　後半

「今頃、見送りの真っ最中か……」

「そうね。……泣いてないといいのだけれど」

店の準備をしながら、士郎と桃子はそう言い合う。その表情は笑顔。そう、なのは達は今朝発つフェイト達の見送りに出かけている。学校が休みだったのも幸運だった。だからこそ、何の気兼ねもなく見送りに行けたのだ。まあ、学校があっても遅刻させて見送りに行かせただろうが。

「……寂しくなるな」

「そう、ね……」

フェイト達と出かけた旅行や昨日のパーティーを思い出し、二人は願う。出来るだけ早くフェイト達が戻ってこれるように、と。

Ｉｎｎｏｃｅｎｔ　ｍｉｎｄ

海鳴海浜公園。そこに準備された転送魔法陣。そこにリンディ達とプレシア達、ユーノがいた。そして、向かい合うようになのは達の姿がある。

見送りに来たのは、なのは達子供組とセイバー達サーヴァント組

のみ。士郎達大人組は仕事や敢えて来ない事を選んだ。
一番辛いのは、なのは達だと分かっていたから。だからこそ、深い関係を築いたなのは達とセイバー達だけにしておこうと考えたのだ。

「ランサー、体に気をつけて」

「あまりフェイト達に苦労をかけないようにな」

「おう。で、お前には言われたくねえ」

セイバーに笑みを、アーチャーには呆れ顔を返すランサー。それに二人は笑みを浮かべる。

「みっどちるだとやらの土産話を楽しみにしておるぞ」

「食べ物は結構ですので、出来れば向こうの本を買ってきてください」

「ああ、わ～った。にしても、買うのはいいけどよ？　文字読めるのか……」

小次郎には楽しげに、ライダーにはやや驚きを返すランサー。
それにライダーは、読めないならそれはそれで面白いのでと返し、小次郎がそれに笑いながら同意するように頷いた。
ランサーはそれに苦笑いしつつも、きちんと買ってくると約束した。

そんな風に和やかにしているサーヴァント達と違い、どこか賑やかな雰囲気が漂うのは、子供達だ。

「絶対、今年中に戻ってきなさいよ。出来れば夏までに」

「あ、アリサちゃん。夏は……流石に無理じゃないかな？」

「ね、夏に戻って来れたらどうなるの？」

アリサとすずかのやり取りに、アリシアが問いかける。それにアリサが旅行に行こうと告げる。

その行き先は決めていないが、きっと楽しいからと言い切るアリサ。

それに微笑みながらすずかも頷く。アリシアはそれを聞き、絶対夏には戻ってくると力強く言い切った。

「残念や。もう少ししたら誕生日やったのに。出発、わたしを祝ってからにしてくれへんの？」

「ご、ごめん。来年は絶対お祝いするから」

「にゃはは、はやてちゃんもワザと意地悪言ったらダメだよ～？フェイトちゃんが本当に気にしてるから」

なのはの言葉にはやてが舌を出す。それにフェイトが騙されたといった表情ではやてを睨む。

それにはやてが少し慌てて謝ろうとしたところで、そんなはやてに今度はフェイトが舌を出す。

フェイトの行動に軽く驚くなのはとはやてだったが、それに二人して笑顔を浮かべる。フェイトも楽しそうに笑みを浮かべた。

「でも、ユーノが一緒に行くのは良かったわね」

「僕としても、一人で戻るより寂しくないから大助かりだよ」

「わ、私も話し相手になってくれる人が多いのは嬉しいから」

アリサの言葉に笑みで答えるユーノ。その視線をフェイトへ向けると、フェイトもそれに頬を赤くしながら頷いた。

だが、それを見ていたアリシアが、頷きながらも不思議そうにフェイトへ尋ねる。

「わたしも～。でも、何でフェイトは顔赤いの？」

「お～、アリシアちゃんはええ事言った。ささ、フェイトちゃん答えを――――いたっ！」

はやての笑みを浮かべた言葉に、アリサの無言の鉄拳が炸裂。フェイトは戸惑いながらも「べ、別に変な意味はないよ」と答え、アリシアは不思議に思いながらも納得。

ユーノはそんなやり取りを聞きながら笑みを浮かべる。フェイトが顔を赤くしているのは、きっと照れているのだと思っていたから。

周囲が変に意識しないようにと考えて、自分が変に意識してしまったためと判断したのだ。

「ユーノ君、色々大変だろうけど気をつけてね」

「うん。体壊さないようにしてよ？」

「ありがとうすずか、なのは。大丈夫だよ。取調べは、クロノ執務官が担当してくれるそうだから」

ユーノの言葉に二人も安心の表情。クロノの人となりは、エイミィとの話で大分把握していたからだ。
真面目で堅物だけど、義理人情はある。決して杓子定規で判断しない人間。それがエイミィの告げたクロノの人物像。
故に、ユーノの事も心配いらないと思えたのだ。
そして、そんな七人にクロノが近付き、小さく告げた。
「そろそろ行こう。あまり待たせるのも悪い」
「……そうですね」
アースラは事件調査を終え、もう帰艦しなければならない。それは、クルー達が久方ぶりの休みを取れる事にも繋がるのだ。
それを理解しているユーノだからこそ、クロノの言葉に気まずそうな表情を返したのだ。
そんなユーノとクロノの会話を聞いたなのはが、突然付けていたリボンを取った。それは、入学祝いとして士郎達がくれたもの。
風になびくように揺れる髪。そして、呆気に取られる周囲に構わず、なのはは、そのリボンを一つずつフェイトとアリシアへと手渡した。
「これ、私のお気に入りのリボンなんだ。これ、フェイトちゃんとアリシアちゃんにあげる」
「なのは……」
「……いいの？」

アリシアの言葉になのははは笑顔で頷いた。再会を信じてるから。思い出と約束の品にしてと告げて。

それにフェイトがリボンを抱きしめ、アリシアがなのはのリボンを嬉しそうに見つめる。

そして、フェイトが自分のリボンを外し、その一つを代わりにとなのはへと手渡した。再会を誓うから。思い出を貰ったお礼と約束の証にと。

「フェイトちゃん……」

「私も同じ。お気に入りなんだ、これ。だからなのはに……」

「じゃ、わたしも～」

そしてアリシアも一つを外し、なのはへ手渡した。それを受け取り、なのははは微笑んだ。

それを見て、アリサ達が失敗したような表情を浮かべた。

「もう、なのはだけずるいじゃない」

「私達も何か持ってくればよかったね」

「そやな。……よし、わたしの髪の毛を……」

「不気味よ！　てか、嬉しくないわっ！」

「あ、アリサちゃん……段々突っ込みが板についてきてるよ」

はやての発言にアリサが反論。それを見てすずかがやや苦笑い気味に告げた。

それにアリサ以外が笑い、アリサがはやてのせいだと言ってまた笑いを取る。

そして、アリサがなのはに二人からのリボンを付け、すずかがフェイトに、はやてがアリシアにそれぞれリボンを付けた。

そしてなのはは、ユーノに向かってどこか躊躇いがちに告げた。

ユーノにも最初リボンを渡そうと思ったが、男の子にそれはどうかと思い、諦めた事。そして、代わりに用意したのは……。

「袋……？」

「う、うん。クッキー焼いたんだ。……初めてだから、あまり自信はないけど」

「ありがとう。大切に食べるよ」

嬉しそうなユーノの言葉に、なのはは顔を赤くしながら笑みを浮かべた。それをはやてがニヤニヤ眺め、アリサから本日二度目の鉄拳を喰らう。

すずかは、そんな二人をどこか悔しそうに見つめ、フェイトは、そんななのはを羨ましそうに見つめていた。アリシアだけが、単純にクッキーを貰った事に対して、いいなと言っていた。

「……さ、行こう」

全てが終わったのを見計らい、クロノが告げる。それに頷き、ユーノ達が歩き出す。

なのは達は、その場からそれを見送る。気付けばセイバー達も隣に来ていた。

「セイバーも何か渡した？」

「いえ。……ああ、ただ思いは渡しました」

「思い？」

「ええ、また会いましょう、と。……さ、そろそろですよ」

セイバーの言葉になのはが視線を戻すと、転送魔法陣の上にフェイト達が並んでいた。

それに大きく手を振るはやて。それに続けとアリサとすずかも手を振り出し、負けじとアリシアが振り返す。

なのはも両手を振り、ユーノ達へと声を掛ける。セイバーもなのはのように両手を振り、激励を送る。

ランサーがそれに手を挙げ、ライダーとアーチャーはそんなセイバーに苦笑し、小次郎は笑みを浮かべている。

フェイトとユーノも手を振り、アルフも大きく手を振り返す。リニスとプレシアはそんな光景に微笑み、リンディも小さく笑みをこぼす。

クロノはどこか羨ましそうにそれを眺め、小さく「エイミィ、頼む」と告げた。

「いい？　せ～のでいくわよ？　せ～の……っ」

「「「「行ってらっしゃ～い！！」」」」

アリサの呼びかけを瞬時に理解し、なのは達が大声で叫ぶ。それにフェイト達も顔を見合わせ、頷き合って……。

「せ～の……」

「「「行ってきます！！」」」

ユーノの掛け声に合わせ、フェイト達がそれに応じる。互いに笑顔を送り合う。そして、その直後フェイト達が消えた。

まさに図ったようなタイミングで。それになのは達は揃っておかしそうに呟く。

「「「「……絶対エイミィさんだ（や）」」」」

そんな四人を見つめ、セイバー達は微笑みを浮かべた。悲しい別れではなく、希望に満ちた別れだったと。

だからこそ、これからを考えなければならない。管理局と関わった以上、魔法世界との接点が増える。

幸か不幸か、魔力を持っているのはなのはだけだが、今後の事を思えばそれでも問題だ。

（なのはが管理局へ行く事を決めた時、ハヤテ達はどうするのでしょう……）

仲の良いなのは達。管理局については、リンディとの話で色々聞いている。その局員のほとんどがミッドチルダに居を構えているそうだ。

つまり、局員は他の世界勤務でない限り、大抵ミッド暮らしとなる。地球は、管理外で辺境らしく、そう簡単に行き来できないと予想出来た。

それは、なのはと中々会えなくなる事を意味する。そして、もう一つの問題は……。

（私は……ついて行くべきでしょうか。それとも、ここでなのはの

帰る場所を守るべきなのでしょうか？）

そこまで考え、セイバーはふと笑う。それは、まだ先の話なのだ。

それに、まずなのはが管理局に入らない事も十分有り得るのだ。

故にこれ以上考えても意味がない。そうなった時に考えればいい事だ、とセイバーは思い前へ視線を向ける。

そこには、はやて達と笑い合うなのはの姿がある。それにセイバーは微笑みを浮かべる。どうなろうとも、自分はあの笑顔を守るために動くのだ。

その初心を思い出し、セイバーはなのはへ呼びかけた。

「なのは」

「？　どうしたのセイバー？」

「そろそろ行きましょう。翠屋の手伝いをしなければ」

「は～い」

それに呼応し、はやて達もそれぞれ動き出す。はやて達はすずか達と共に図書館へ。アリサは小次郎を連れて買い物へと。

途中まで全員で歩くなのは達。話題は、間近に迫ったはやての誕生会。会場は去年と同じく八神家。何が欲しいかと尋ねられ、はやては冗談で「妹」と答え、アリサ達を呆れさせる。

絶対アリシアを見たからでしょう。そのアリサの言葉にはやてはバレたかと苦笑い。すずかはそれに苦笑しつつ、確かに可愛かったもんねと頷く。

なのはもそれに頷き、みーちゃんが妹だと思えばと告げる。それにはやてがやや呆気に取られた後、その発想はなかったと笑った。

緩やかに過ぎていく時間。穏やかな日々。誰もが平和が戻ったと実感していた。しかし……。

アーチャーの部屋。そこの棚に置いてある鎖で縛られた本。それから不穏な雰囲気が漂う。まるで、何かが目覚めようとするかの如く。

誰かが言った。終わりは始まりなのだ、と。次なる災い。それはもう、すぐそこまで迫っているのかも知れない……。

――――――

A' s序章

「今日はほんま楽しかったな～」

「そうだな。こちらとしても腕の振るい甲斐があった」

明日ははやての九歳の誕生日。本当なら、明日誕生日会をすると聞いていたはやてだったが、サプライズに拘るアリサにより、バースディィイヴパーティーを決行されたのだ。

アーチャーは、どうやら知っていたらしく、料理をちゃっかり準備（はやてには、明日の仕込みと告げていた）し、はやてを騙す片棒を担いでいた。

そして、つい一時間前になのは達が帰り、お風呂から上がってノンビリとリビングで寛いでいたのだ。

本当ならフェイトやアリシア、ユーノ等も来て欲しかったが、それは叶わない事をはやては知っている。だからこそ、来年はと思っていた。

「でも、セイバーさんのプレゼントはないな……」

「……言うな。用意しただけ去年よりマシだ」

「でも……特大シュークリームは、なぁ」

セイバーは、去年の誕生日会に何もプレゼントを用意しなかった。その教訓から今回は自分で考え、何と桃子に協力まで仰ぎ作ってきたのが、ジャンボシュークリームだった。

思い出すのは、自慢げなセイバーの顔。誰も考えつかないものを用意したと言って出した表情と、その後の全員からの視線に恥ずか

しがっていたセイバー。

ちなみに、それは中々上手に出来ており、それに関してはアーチャーも驚いた程だ。まぁ、皮を焼いたのは桃子なので、セイバーはクリームを作っただけなのだが。

それをはやては内心苦笑しつつ食べた。そして、セイバー達にも食べてもらった。その時、一番喜んでいたのは、他でもないセイバーだった。

「しかし、そう言う割には喜んでいたように見えたが？」

「当然や。どんなもんであれ、わたしのために用意してくれたんやから。セイバーさんは……若干怪しいけど」

そう言ってアーチャーとはやては笑みを浮かべる。おそらく、今頃なのは達から同じように言われているだろうと想像したからだ。

「……さ、そろそろ眠れ。夜更かしは美容の天敵だぞ」

「お～、アーチャーがわたしに女性扱いを。はっ、明日から九歳やからか！？　守備範囲になったんかっ！？」

「……そんな言葉をどこで覚えた」

「マンガ」

「……最近の少女漫画という奴は……」

頭を押さえるアーチャー。はやてはそんなアーチャーに笑みを浮かべると、車椅子を動かそうとして止まった。

そして、どこか言い出し難そうにアーチャーへ視線を向ける。それにアーチャーも気付き、何事かと思って口を開いた。

「どうかしたか」

「えっと、あんな……今日、一緒に寝たいんやけど……あかんかな？」

「大人扱いはまだ遠いな……今夜だけだ」

「うんっ！」

アーチャーに車椅子を押され、向かうはアーチャーの部屋。実はこうしてアーチャーの部屋ではやてが眠るのは、今回が初めてではない。

最初はアーチャーが部屋を作った次の日。二度目は夜にホラー物の映画を見た時。三度目はすずかから忍の話を聞いた日。

それ以外にも多くある。そして、その度にアーチャーは決まって「今夜だけ」と言っていた。つまり、何だかんだで、アーチャーははやてに優しいのだ。

部屋に入り、アーチャーに抱えられ、車椅子からベッドへ移されるはやて。ちなみに俗に言う『お姫様抱っこ』である。

はやてが丁重に扱えと言ったために、アーチャーがからかいを含めて始めたのだが、はやても初めこそ動揺したり恥ずかしがったりしたが、現在では特に何も感じないのか、平然としているように見える。

（あ～、何やろ。やっぱ落ち着かんな）

実際はかなり照れているのだが、それにアーチャーは気付いていないのだ。

「さて、では明かりを消すぞ」

「うん、ええよ……優しくしてな」

「……やはり自分の部屋へ行け」

こんなやり取りも毎度の事。二人してどこか笑いながら言い合う。そして、明かりが消え、少し他愛ない話をしていたが……。

「……すぅ……」

横になってしばらくし、はやてが眠りに落ちた。それを確認し、アーチャーも目を閉じた。時刻は午後十一時を過ぎ、もう今日も終わりを告げようとしていた。

その名はヴォルケンリッター

時計が規則正しく時間を刻む。そして、それが午前零時をさした瞬間、鎖で縛られた本が宙に浮き上がり、怪しげな光を放つ。

その魔力にアーチャーは意識を覚醒させる。そして、視線を動かし、空中に浮かぶ本を見た瞬間、その手にとある宝具が握られる。

それは、ルールブレイカー。魔力で出来たものを初期の状態へと戻すロストロギアの天敵。

そう、アーチャーがジュエルシードにルールブレイカーを試したのは、この本が何らかの原因で封印から解き放たれた時に備えるため。

だが、アーチャーがそれを突き刺す前に、変化が起こる。床に魔法陣が現れ、そこから人間が四人現れたのだ。

その身に魔力を纏い、さながらサーヴァントの召喚のような状況に、さしものアーチャーも戸惑いを隠せない。

そして、その四人の人物は跪いたまま、口々に喋り出す。彼らは闇の書の主を守る守護騎士。その名をヴォルケンリッターというらしい。

その口から出た守護騎士という言葉に、アーチャーは仮面の男の言葉を思い出す。自分を見た時、男が尋ねた守護騎士。それが眼前の四人なのだと。

そして、闇の書の主というのがはやてを指している事に気付き、アーチャーは静かにはやてを揺り起こした。

「はやて、起きろ」

「う、ううん……何や？　もう朝？」

「いや、異常事態だ」

アーチャーの言葉にはやては目を擦りながら、視線を動かし、その目を見開いた。

そこには、桃髪の女性に金髪の女性。赤髪の少女と獣の耳と尾を生やした男性がいた。

「さて、君達の言う主はこの少女だ」

「主？」

事態を飲み込めないはやてに、四人を代表し、シグナムと名乗った桃色髪の女性が説明を始める。それを聞きながら、アーチャーは内心でため息をついていた。

ＪＳ事件と呼ぶ事になったジュエルシード事件終結からまだ日も浅い。にも関わらず、厄介事が起きたと理解出来たからだ。

そう、それはこの闇の書をどうするかではなく……。

「……ですから、貴方が我らが主なのです」

「ほ～、何やわたし凄い人やったらしいで」

「のようだ。で、聞きたい事があるのだが」

この状況を収める事。そう思って告げたアーチャーの言葉に、全員が訝しむように視線を送る。それにアーチャーが、はやての保護者のようなものだと告げ、更にはやてが家族だと告げると、その視線が若干和らいだ。

それにアーチャーは苦笑すると、一番確認しなければならない事を尋ねた。

「君達は魔導師か？」

その質問をした途端、再びシグナム達の表情と気配が変わった。だが、それをものともせずアーチャーは続けた。

「何、知り合いにいるものだからな……はやて」

「へ？　う、うん。なのはちゃんとフェイトちゃんって言って、わたしの大切な親友なんよ」

はやては急にシグナム達が雰囲気を変えた理由が分からず、不思議そうにしていたが、アーチャーに話を振られた理由は理解出来た。

だから、笑顔でシグナム達に向かって告げた。その言葉にシグナム達は戸惑いを見せた。親友。その言葉を使う仲がどういうものかを、彼らもよく理解していた。

「……我らは魔導師ではありません。ベルカの騎士です」

「べるか？」

「……違いを聞かせてもらえるか？　何分私達は魔法について詳しくないのでね」

アーチャーの言葉にはやてが頷いたのを見て、シャマルと名乗った金髪の女性が語り出す。

魔法にはミッド式と呼ばれるものと、ベルカ式と呼ばれるものがあり、ベルカ式とは、ミッド式とは違い、近接戦闘や個人技に重きを置いた魔法体系。

そして騎士とは、ベルカの使い手の中でも一流の者に許された称号なのだと。そして、ベルカ式は現在では使い手も減り、衰退しているとも告げた。

それを聞き、アーチャーは納得した。何故リンディやリニスがベルカの話をしなかったのかを。

知り得るはずの無い魔法。更に衰退しているとなればわざわざ教える必要はない。それに、リンディはともかくリニスは存在そのものを知らなかった可能性もある。

そう考え、アーチャーは視線をザフィーラと名乗った獣耳を生やした男性へと向けた。

「失礼だが、君は使い魔か？」

「……ベルカでは騎士を守る存在を使い魔と呼ばず、守護獣と呼ぶ」

「おお、かっこえ～な」

その後、蒐集という『闇の書』本来の目的行為についての話になったが、はやてがその詳しい方法を聞き、きっぱりと断言した。

「禁止や！」

「「「「はっ？」」」」

「人様に迷惑かけるような事はあかん。それに、凄い力言うても……」

はやての脳裏に思い起こされるのは、ユーノから聞いたジュエルシードの暴走の推察。

（ジュエルシードも、下手したら世界を壊しかねんってユーノ君も言っとたし）

「わたしはそんなんいらん。とりあえず、今は『家族』が増えて嬉しい。みんなで平和に暮らす。ええな？」

「いや、家族と言われましても……」

「シグナム達はわたしを守る騎士なんやろ？　で、わたしは主。そやから面倒見るんは当然や！　やから、家族」

はやてにとって、大きな力は災いを呼ぶ事になるものとしての意味合いが強かった。それは、ジュエルシードと関わったからの結論。だから、蒐集という、人のリンカーコアを狙い、尚且つ疲弊させる事など当然許せるはずはなかった。

故に望むのは、平和な暮らし。そして、新たな『家族』の出現を喜びたい。そんな気持ちで一杯だった。

一方、シグナム達ははやての発言に戸惑っていた。今まで多くの主を見てきた彼らにとって、蒐集を禁止した者は初めてだった。それもプログラムに過ぎない自分達を家族と呼ぶなど、何から何まで理解が追いつかない事ばかりだったのだ。

そんなシグナム達の戸惑いを理解したアーチャーは、微かに笑みを浮かべると立ち上がった。

そして、全員にこう告げた。夜も遅いし、詳しい話は朝にしようと。それにはやてもシグナム達も頷き、アーチャーはシグナム達をそれぞれ空き部屋に案内するからと部屋を後にした。

はやてはどこか不服そうだったが、先に寝てると告げ、ベッドに横になった。

「あ、ヴィータはわたしの部屋でええよ。アーチャーは出来るだけさっさと戻ってくる事」

そうドアが閉まる瞬間に告げる辺り、やはりはやては強かだった。

「それで、何が聞きたい」

「……察しが良くて助かる」

アーチャーは部屋を出ると迷う事無くリビングへと向かった。そして、全員分のお茶を淹れ、椅子に座った。

シグナム達もどこか警戒をしながらではあったが、椅子へ座った。そして、シグナムが四人を代表してそう切り出したのだ。

「強大な力と言っていたが、それはどんなものだ？」

「何？」

アーチャーが尋ねたのは、意外な事だった。シグナムだけでなく、シャマル達もどこか驚いた表情を浮かべている。

それにアーチャーはやや呆れた顔で答えた。

「当然の事だと思うがね。聞けば、今までは蒐集を行なうのが常だったようだ。そしてその完了で得られる見返りは、強大な力。しかし、それが何かは分からん。なら、聞きたいと思うのも当然では？」

「蒐集を成し遂げた後……」

アーチャーの質問に全員が黙ってしまう。思い出そうとして、何故か思い出せない事に気付いたからだ。

今までも何度か蒐集を完了させた事はある。だが、何故かその記憶が綺麗に消えているのだ。

その事に、何故だかシグナム達は言いようのない不安を覚えた。

「……分からない、と言うところか」

「……ああ。何故か知らんが思い出せん」

「そうか。それが癒しに使えるのならと思ったのだが……」

アーチャーの言葉に、シグナム達が疑問符を浮かべた。それにアーチャーは語った。はやての足の事を。

闇の書の力が治癒に使えるものなら、それに頼ろうと思ったのだと。それを聞き、シグナム達も納得した。

そして、同時にアーチャーが本当にはやての事を考えている事を理解していた。

（どうやら、この男は本当に、主の事を親身になって考えているようだな……あまり警戒し過ぎるのも考えものかもしれん）

（一先ず、この人は敵ではなさそうね。それにしても、足の病気だなんて……私の力で治せるかも。朝になったら試してみましょう）

（こいつ、本当に敵じゃね～のか……のくせに、さっきあたしらの殺気を受けて平然としてやがった。どっちにしろ、油断はできね～な）

（主の言う通り、家族なのだな……とすれば、先程の無礼を詫びねばならんか）

四人が何かを考え始めたのを見て、アーチャーは苦笑しつつある事を告げた。

「私を疑ったり、怪しんでもらって構わん。私が逆なら同じ反応をするからな。だが、出来ればはやての前ではやめてほしい。はやて

は君達を『家族』と言っていただろう。あれは私も同じようなものだからだ。親近感を感じたのかもしれん」

「どういう事だ？」

「私も君達と同じで、普通の人間ではないという事だ」

アーチャーは自分とはやての出会いから今までを簡単に語る。それを聞き、シグナム達から警戒心が薄れていく。

アーチャーが告げた内容。それは、まさしく騎士と呼んでもおかしくないものだった。はやての笑顔のために。それを守るために行動しているのだと。

それを聞き終わった後、シグナム達が全員して椅子から立ち上がり、アーチャーに対して頭を下げた。

それにアーチャーは苦笑を浮かべ、止めてくれるように告げる。自分の嘘だったらどうする、と。

その言葉にシャマルが、嘘ならはやてに聞かれてバレるようなものにしないと反論した。

だがアーチャーが、意識を操っているかもしれんと返せば、シグナムが、そんな器用な事が出来るようには見えんとバッサリ。

その言葉にアーチャーが、内心過去の自分を思い出し、微かに悲しんだのは内緒の話。

「……とりあえず確認しておくのは以上の事だ」

「何だよ？」

「君達は、表向きはやての親戚という事で通す。異論は認めん」

ヴィータの言葉にアーチャーはそう言った。その言葉に、シグナム達は頷く。それを確認し、アーチャーは次の言葉を告げる。

「そして、はやての事は外では名前で呼んでもらう。これも異論は認めん」

それにシグナムとザフィーラがやや心苦しそうに頷く。一方、シャマルやヴィータは別に何でもないように頷いていた。

「管理局に知られるのは避ける。これについては安心しろ。接点があるからこそ、打てる手がある」

アーチャーの発言に、シグナムとシャマルが安堵する。ヴィータやザフィーラもどこかホッとした表情をしている。

「最後に、蒐集行為は禁止……だが事情によっては、はやてには秘密で行なう」

「……万が一に備える、か」

「確かに気になるものね。足の病気が原因不明の麻痺なんて」

そう。アーチャーが危惧したのは、はやての病気の事だった。もしその原因が闇の書にあるなら、覚醒した今、どうなるか分からない。

そう考え、シグナム達に提案したのだ。もし、闇の書が原因ならば、その力で何とか出来るかもしれない。故に、それに備え、万一の場合ははやてに黙って蒐集行為を行うと。

ただ、人ではなく魔法生物と呼ばれる存在限定。それもはやてに知られた時を考慮し、殺さない程度にする。完全蒐集をし、対象を

殺すのは禁止。

「でなければ、私が酷い目に遭わされるのでね」

そう告げた時、シグナム達は揃って笑みを浮かべ、そして力強く頷き賛成した。まだはやてと出会って間もないが、優しい心の持ち主である事は理解していたのだ。

そして、同時にアーチャーの性格も。なにしろ、シグナム達が魔力の多い魔導師からも奪えばいいのではと提案した際、アーチャーはこう言い切った。

「効率はいいのだろう。だが、ならば聞く。君達は、自分達の苦労を減らすより、はやての心に傷を作る事を取るか。それとも、はやての笑顔のために、自分達の苦労を増やす事を取るか……どちらだ？　私は迷う事無く後者を取る」

そして、先程の言葉に続く。それははやての事を考えて言った言葉だった。だが、同時に他者を傷付ける事を、どこかで避けている節も見えたのだ。

だからこそ、シグナム達は主従揃って優しい心の持ち主と思い、それに従う事にしたのだ。

騎士として、主に言われた事を破りたくはない。だからこそ、シグナム達は願う、アーチャーの不安が外れてくれるようにと。

「さて、もう時間も遅い。話はこれぐらいにしよう。細かい事はまたでいい。部屋は空いている所を好きに使ってくれ」

「分かった……アーチャー、と言ったな」

「そうだが……何かあったか？」

自分の部屋へ戻ろうとしたところで、シグナムに呼び止められ、アーチャーはその足を止める。

「いや、これから面倒を掛けるだろう。すまんな」

「私達、魔法がない世界は初めてだから」

「……世話になる」

「苦労をかけるだろうが、よろしく頼む」

それぞれがアーチャーに告げた言葉に、アーチャーは、どこか他人行儀だった頃のはやてを思い出し、笑みを浮かべる。

そして、その表情のまま四人に告げた。

「気にするな。我々は家族になったのだ。支え合い分かち合うのが当然なのだから。だから――」

――言いたい事があれば言ってくれ。やりたい事ならやればいい。ダメならばそう言うし、出来る事なら力になろう。それが『家族』というものだ。

そう笑みと共に告げ、アーチャーは去っていく。それは以前はやてに告げた言葉。その声に込められたのは、紛れも無い優しさと思いやり。

それを感じ取り、シグナム達は更に驚いた。何故なら、歩き去るアーチャーからはまったく警戒心が感じられなかったのだ。

（あの笑み……あの言葉……そしてこの無用心さ。奴は……本当に

我々を……？）

（あんな顔も出来るのね。でも……家族、か。本当にあの人は、こちらを警戒しないで家族として扱うつもりかしら……？）

（何だよ、あいつ……ああ、くそっ！　一体何なんだよ、あんな隙だらけにしやがって！　……そっちがそのつもりでも、あたしは……）

（……長年騎士を見てきたが、あれ程の男は中々見た事がない。どうやら、今回は色々と今までとは違うようだ。だが……）

こうして、守護騎士達の八神家最初の夜は終わる。

翌朝、アーチャーの作った朝食の美味しさに、全員が言葉を失うのは、また別の話……。

――――――

魔法と出会っているために、守護騎士に驚きが少ないはやて。そして、仮面の男から聞いていた言葉により、アーチャーが色々と動き出す……のかな？

既に原作と違い、アーチャーという先駆者がいたため『家族』認定もあっさりです。

この話から秋までは、のんびり平和な空気です。……多分。

「……つまり、管理局には知られたらダメなんやな？」

「そうだ。リンディ艦長達個人なら理解を示してくれるかもしれんが、管理局全体は完全に不可だ。
何せ、この闇の書はロストロギア。しかも、聞けば過去に何度か敵対してきているらしい」

シグナム達が現れた翌朝。今日は、はやての誕生日なので、おそらくなのは達が直接お祝いを言いに来るとアーチャーは予想した。
なので、はやてにシグナム達の紹介と彼女達への説明を任せるために、昨夜の内に決めた事を伝えていた。
まぁ、朝にすると言っていたにも関わらず、既に話し合ったアーチャー達に対して、はやてが不満を述べはしたが。

そして告げたのは、近所には遠縁の親戚と説明する事となのは達には真実を話してもいい事。ただし、条件として管理局への情報漏洩をさせない事が絶対と念を押した。
それにはやては笑みを浮かべて言い切った。なのは達は事情さえ理解してくれれば、絶対に誰にも言わないと。そのはやての断言に、シグナム達はどこか信じられないと感じていたが、アーチャーだけは「だろうな」と笑いながら同意した。

「とにかく、わたしが伝えるのは、蒐集ちゅう迷惑な事はせ～へんって分かってもらう事やな」

「そうだ。今回の闇の書は、誰かに危害を加えるものではない。それを理解してもらう必要がある」

「で、もし何かのキッカケで暴走とかしても……」

「私が無力化出来る。これだけ条件が揃えば、彼女達も不安には思うまい」

そのアーチャーの言葉にはやてが頷く。アーチャーがジュエルシードを無力化したのは、ユーノ達からはやても聞いている。だからこそ、不測の事態にも不安などなかった。

ただ、唯一の懸念はシグナム達がいなくなってしまう事だったが……。

「ま、まずそんな事態にはならないだろう」

そう言うアーチャーの言葉に、はやても心から頷き、視線をシグナム達へと向けた。

全身タイツのようなものを着ているシグナム達。その格好を見て……。

「まず、服をどうにかせんとな」

こうして、アーチャーがはやての両親の衣服を修繕し、とりあえずの普段着を確保する事になるのだった……。

『騎士』から『家族』へ……

現在、はやて達六人は駅前のデパートに来ていた。というのも、何とか当座の服は確保出来たのだが、元々サイズが合っていなかったり、男性用は、ある程度アーチャー用に修繕したため、ザフィーラ用の数が少なかったりと問題もあった。

そして、女性であるシグナムとシャマルは下着という問題があったので、必然的に買わざるを得なかったのだ。

「じゃ、わたし達は婦人服売り場に行くわ。お昼前に待ち合わせ場所に行くから」

「分かった。なら、私はザフィーラと紳士服売り場へ行き、先に待ち合わせ場所で待っているぞ」

フロア案内を見ながら、二人は待ち合わせ等を話し合い、男性と女性に別れて歩き出す。時間がおそらく掛かるであろう女性陣。それを考慮し、アーチャーはそう告げた。その事をはやても理解し、どこか苦笑気味に頷いた。

そして、はやてはシャマルに車椅子を押してもらい、四人でエレベーターへ。だが、アーチャーはザフィーラと共にエスカレーターへと向かう。エレベーター前が混んでいたのを見たからだ。

「……俺は衣服など必要ないのだが」

「くどい。確かに本来ならそうなのだろうが、曲がりなりにも八神家で暮らす以上、人らしくしてもらうと言ったはずだ」

どこか躊躇いがちに告げるザフィーラに、アーチャーがそう言って黙らせる。守護獣たるザフィーラにとって、衣服は戦闘時に着る騎士甲冑でしかなかった。それが、今回は主とその家族の意見によ

り、普段から衣服を着用する事を義務付けられたのだ。
同じ頃、似たような事をシグナムが発言し、はやてに同じように論破されていた。

「……本当にお前は、主のような事を言うのだな」

「三年以上も共に過ごせば嫌でも影響を受ける。それと、はやてだ」

「……そういうところもだ」

アーチャーの指摘に微かに苦笑をしつつ、ザフィーラは呟いた。
その視線の先には、目的の売り場が見えてくるのだった……。

「二人共、これはどうや？」

「いえ、その……少し過激では……」

「は、はやてちゃん。私はこういうシンプルなので……」

「な、なぁ……何かはやての目がギラついてね～か？」

はやて達女性陣は、意外にも衣服はあっさり決まったのだが、中々決まらないものがあった。そう、下着である。
ので、現在下着の絶賛試着中。といっても、はやてがシャマルとシグナムの反応を見て、楽しんでいるだけなのだが。

選ぶ色も黒や紫、赤といったものばかり。大人しい色は一切渡さず、デザインも中々派手なものばかりという徹底振り。それにシグ

ナムもシャマルもたじたじ。幼い外見に劣等感を抱くヴィータが、内心子供の姿で良かったと思う程の熱の入れようだった。

そうした下着選び（の名を借りたはやての欲望発露）は、耐えかねたシグナムとシャマルが勘弁して欲しいと告げた事で終止符を打たれる事となる。

その二人の表情にはやても悪かったと頭を下げ、許しをもらったものの……。

（……まぁええか。今日のお風呂で楽しませてもらお）

全然、まったく、これっぽちも懲りていなかったのだった……。

それぞれの服選びも終わり、一度待ち合わせの場所であるレストラン街へとやってきたはやて達。すると、既にアーチャー達は店の選別をしていた。

どうやらザフィーラがどんな料理かを聞いて、それにアーチャーが答えているようだ。その様子を遠巻きに女性達が眺め、ヒソヒソ話していた。

その内容は分からなかったが、どうも二人を見ている女性達の反応から”カッコイイ”と思われているとはやては感じた。

（ま、確かに二人共、こうして見れば男前やからな）

どこか満足げに頷き、はやては視線でシャマルに近付いてくれるように伝える。それに応じて、シャマルが車椅子を動かした事でシグナム達も動き出す。

それまでは、周囲のディスプレイ等を見ていたようで、特にヴィータが料理のサンプルを食いつくように見入っていた。

「何話とるんや？」

「何、ザフィーラが聞いた事のない料理ばかりだと言うのでね」

「アーチャーに説明をしてもらっていました」

どこか畏まったザフィーラの口調に、はやてはやや寂しく思いながらも頷いた。敬語なしでと言ったにも関わらず、シグナムとザフィーラはそれだけは、と固辞したのだ。名前で呼ぶのは承服するが、敬意を払う事に問題はないと言って聞かなかったのだ。

アーチャーは、はやてが納得するならそれでいいと告げ、はやては二人がどうしてもと言うので構わないとしたのだが……。

（あ～、やっぱせめて外では禁止にしとくべきやったな……）

どこか違和感を感じる物言いに、はやては内心苦笑し、視線をアーチャーへ向ける。アーチャーもそれは同じだったようで、表情は苦笑気味。

「さ、じゃ……何食べよか」

「はやてちゃん、私達は……」

「何がどういう物か知りませんので……」

「ある……はやてにお任せします」

「……あたしもはやてに任せる」

シャマル達三人は揃って困った顔で答えた。ザフィーラが主と呼ぼうとし、アーチャーの視線で言い直す。
唯一ヴィータだけは何か言いたそうだったが、三人の答えを聞いてそう言った。
だが、そんなヴィータに笑みを浮かべ、アーチャーがはやてに視線を送る。それを受け、はやても笑みを浮かべて頷いた。
そんな二人のやり取りに疑問符を浮かべる四人。すると……。

「わたしはヴィータに決めてもらいたいな」

「え？　いや、でも……」

「どうした？　まさか君は、自分の意見を持たず、はやてに委ねる事しか出来ないのかね？」

「んだと！　んな訳あるか！　あたしだって意見ぐらいっ！」

「お、何や？」

「……あの旗が刺してあって、色々乗ってるやつが……食べたい」

そこまで聞いて、シグナム達もはやてとアーチャーが何を考え、そして先程の視線だけのやり取りで何を通じ合ったかを悟り、感心していた。

（成程、ヴィータの反応から聞き出そうとしたのか……）

（でも、ヴィータちゃんは素直に言い出せないから、ああやって言い出し易いように挑発して……）

（言わせた、か。念話を使わず、視線だけでそれを理解し合えるとは……やはり、アーチャーと主は深い絆があるようだ）

三人がそんな感想を抱いたのと同じように、ヴィータもまた二人の狙いとそれに乗せられてしまった自分に反省していた。

だが、それと同時にどこか嬉しく思っている事に気付いていた。

（くそ、まんまとアーチャーに乗せられちまった。でも、はやてもアーチャーもあたしのために言ってくれたんだよな。あたしのため……か）

そして、昼食はヴィータの希望通りファミリーレストランへ入り、楽しく食事をした。

自分の頼んだものが”お子様ランチ”と呼ばれるものだと知り、ヴィータが何とも言えない表情して、全員に笑われる一幕があったり、はやてとアーチャーによる分析や批評があったりしたが……。

食事を終え、後は帰るだけとなったのだが、アーチャーはせっかくなので色々と見ておきたいと申し出た。

住む者が増えた事で、入用になるものが他にもあるかもしれないと。それにはやても異論はなく、そのまま全員でデパートを見て回る事になった。

寝具コーナーでは、シャマルとヴィータが羽毛布団に感激し、シグナムはアーチャーから枕の重要性を教わり、はやては真剣にリビングで寝ると言い張るザフィーラと、部屋で寝るようにと説き伏せていた。そして、女性陣のパジャマを購入。

雑貨コーナーでは、シャマルとはやてが色々と楽しげに見ている

後ろで、ザフィーラとシグナムがそんな二人を微笑みを持って見つめ、アーチャーはヴィータの質問に答えながら、売り物のヨーヨーを実演したりした。ここでは、特に何も買わず。

そして、子供が大好きな玩具コーナーで……。

「あ……」

色々と見て回るという事で当然ここにも足を運んだのだが、そこでヴィータが目にしたのは、とあるウサギのヌイグルミ。

シャマルは、少女に人気の擬人化した動物を主体とした人形や小物に「可愛いっ！」と心奪われ、シグナムは、少年に人気のヒーローの使う剣や銃の玩具に「中々良く出来ている」と目を惹かれていた。

ザフィーラはそんな二人をどこか意外そうに思いながらも、静かに笑みを浮かべ、はやてはシャマルと一緒になって、どれか買おうと盛り上がっていた。

唯一全体を見渡していたアーチャーだけが、そんなヴィータの反応に気付き、その視線を追って微笑んだ。

「欲しいのか？」

「っ！？　ち、違う。誰があんな……」

「そうか……だが、残り一つか。おそらく次に来る頃には無くなるな」

「……何が言いてぇ」

「それは私の台詞だ。言っただろう。言いたい事があるなら言ってくれ、と」

そのアーチャーの言葉にヴィータはハッとなった。そして、視線をアーチャーへと向け、そのまま固まる。

（な、何でこんなに優しい顔してんだよ、こいつ……）

そこには、ヴィータが初めて見るアーチャーの微笑みがあった。その穏やかさにヴィータは声を失い、ただアーチャーを見つめる。

アーチャーはそんなヴィータにどこか不思議そうに思いながらも静かに近付き、こう告げた。

「私もはやても、心から君達を家族と思っている。だから、君達の意見を聞いているのだ」

「……笑わね～か」

「何を笑う。どこも可笑しくなどない。君は可愛らしい少女だから、な」

アーチャーの”少女”という表現に怒りを感じるヴィータだったが、それを堪えて無言でウサギのヌイグルミを持ち上げ、アーチャーに押し付けた。

それを苦笑混じりに受け取り、アーチャーははやて達の傍へ向かう。その後姿を拗ねるように見つめ、ヴィータは呟く。

「……ありがとよ」

その表情こそ拗ねていたが、声にはどこか嬉しさが滲んでいるようだった……。

家への帰り道。両手に二つずつ荷物を下げたアーチャーとザフィーラ。シグナムも手にしているが、その量は少ない。最後に食料品を買い、荷物が増えたのだ。そんな三人の前を歩くのは、車椅子を押すシャマル。そして、上機嫌なヴィータ。

はやてはシャマルと共に、そんなヴィータを見つめて微笑んでいる。

ヴィータの腕に抱えられているのは、デパートで買ったヌイグルミ。アーチャーが包むのを断り、そのままヴィータへ渡したのだ。それを照れながらもお礼を述べて、ヴィータはずっと嬉しそうに抱えていたのだ。

「しかし、こんなにも食料が必要か？」

「……言い忘れていたな。今日ははやての誕生日だ」

ふと思い出したように言ったシグナムの一言に、アーチャーがそう小さく答える。それに驚きを見せるシグナムとザフィーラだったが、アーチャーがはやてに聞こえないように言った事で、何かを悟り笑みを浮かべた。そして、シグナムが確認するように小さく尋ねる。

「……パーティーでもする気か？」

「そうだ。はやての誕生祝いと家族が増えた事を祝うために、な」

「……手伝える事はないか？」

「ないな。何、はやての相手はヴィータ達がしてくれそうなのでな。

正直他に思いつかん。精々皿等を並べてもらうぐらいか」

どこかすまなさそうに問いかけるザフィーラだったが、アーチャーはそれに苦笑で答える。その言葉に二人も苦笑を浮かべ、視線を前を行くははやて達へと向ける。

楽しそうに語り合うはやてとヴィータ。それに笑顔を見せて加わるシャマル。そんな光景を眺め、シグナム達にも笑みが浮かぶ。

（騎士として、こんなに穏やかな時間は初めてかもしれん。家族、か。こんな中で生きていくのも……悪くない）

（守護獣としての務めより、家族としての務めの方が難しいかもしれんな。だが……良いものだ、こういう日々も）

そんな事を思う二人に浮かぶ笑みを見て、アーチャーもまた笑みを浮かべる。

（最初はどうなるかと思ったが、はやてのおかげか意外と早く現代に順応し始めたようだ。

後は、私への信頼だが……ま、それは追々得ていくとしよう。さて、そのためにも、今夜の食事は尚の事気合を入れねばならんか）

そう思うアーチャーの表情には、心からの笑顔が浮かんでいるのだった……。

――――――

――――――――――――――――

無印からA-sまでの空白期。たった一日でも変化を与えるはやてとアーチャー。

おそらく二人共『家族』に対する想いを強いからでしょう。アーチャーなんて、本当に他人を家族として想って接してましたからね。

次回はこの続き。冒頭でもあったなのは達とヴォルケンの初対面です。

笑顔を浮かべ、楽しそうに歩くなのは達。そう、なのは、すずか、アリサの三人は八神家に向かっていた。用事は一つ、はやてに誕生日おめでとうと言うため。

昨日のサプライズパーティーで伝えたには伝えたが、やはり当日に言わなければと思っている三人は、言葉だけでもと八神家を目指していた。

「さすがにもう驚かせるネタがないわ」

「アリサちゃんは驚かすの好きだよね」

「にゃはは、でもはやてちゃんも喜んだし、昨日のパーティーは成功かな？」

なのはの言葉通り、はやては最初普通に遊ぶものと思って三人を迎え入れた。だが、なのは達がはやてと遊んでいる間に、密かにアーチャーが後からやって来たセイバーとライダーを招き入れ、三人でパーティーの準備をした。そして、全てが整った合図に、アーチャーがはやての部屋へ現れ「迎えが来た」と告げる。それになのは達は、はやてを最後にするようにリビングへ。

飾りつけされた室内。テーブルには、アーチャーの料理の数々とセイバーが持参した桃子作の誕生日ケーキ。そして、驚くはやてになのは達から告げられる「誕生日イヴパーティー」との言葉。

三人からそれを告げられた時、はやては……。

「そうね……まさか泣くとは思わなかったけど」

「それはそうだよ。明日だと思ってたのを突然されたらね」

「はやてちゃん、泣きながら怒ったもんね。わたしをショック死させる気か！　って」

入念にはやて本人も交えた打ち合わせをし、当日を楽しみにしておけと言われていたはやて。だが、それを大きなフリにしようと考えたのはアリサ。

かくして、前代未聞の前日誕生パーティーが決行されたのだった。

さすがに今日はパーティー無しで、ただお祝いの言葉を伝えるしか出来ないのだが。

（はやてちゃん、今日はアーチャーさんとお祝いするのかな？）

そんな事を考えるなのは。その視線の先には、八神家が見えてきていた……。

新しい出会い、芽生える心

八神家のリビング。そこにあるソファーに座り、なのは達三人がどこか困った顔をしていた。その原因は先程はやてから聞かされた話。

「まさか……ねぇ……」

「はやてちゃんの家に……」

「ロストロギアが……あったなんて……」

アリサ、すずか、なのはの順に言葉を紡ぐ。その危険性が少ない事やもしもの際の対処も確立されているので、三人も不安はないと言ってもいいのだが、その表情が微妙なのは……。

「リンディさん達には、内緒……なんだ……」

「フェイト達にはどうするのよ？　プレシアさんは管理局に入るようなもんでしょ？」

「それもそうだけど、一番の問題はシグナムさん達だよ！　もしもの時はシグナムさん達はどうなっちゃうの？シグナムさん達は、闇の書を封印したら消えるかもしれないんでしょ？」

なのはの言葉にアリサ達の表情が暗くなった。そう、リンディ達管理局関係者には言わないで欲しいとの言葉より、いざといった時の対処の結果が問題だったのだ。

それははやても同じように感じているのか、どこか苦しそうな表情だったが、それでもはやてはハッキリと言い切った。

「大丈夫や！　そうなっても、何とかみんなは助けてみせる。それに、そうならんよう色々アーチャーが考えてくれとる。そしてっ！」

「「「？」」」

「……わたし達には、アーチャー達がおる。そやから……大丈夫やっ！」

はやての笑顔に、三人は一瞬呆気に取られるが、すぐにそれに笑顔を浮かべて頷いた。

「そうだね。でも、何とかリンディさん達にも分かって貰えたらいいのに……」

「そうね。なのは、何か手はない？」

「え？　う～ん……あ！　はやてちゃんが主だから、今までとは違いますよ……って言うのは？」

「確かに彼女達は納得するだろうが、管理局全体はそうもいかん。確実に何らかの制限か監視が付くだろう」

なのはが思いついた案は、アーチャーによってすぐに撃沈した。それにがっくりと肩を落とすなのは。アリサとすずかは、そんななのはを笑いながら慰めていた。

はやてはどこか苦笑い気味になのは達を見つめ、シグナム達はなのは達の話す内容から、三人がはやてと同じく優しい心の持ち主だと把握していた。

（真っ先に心配するのが、暴走時の被害ではなく、私達の事とは、な……）

（はやてやアーチャーの言う通りだ。こいつら、本当にはやての”親友”なんだ）

（今日出会った私達の事を受け入れただけじゃなく、もしもの時の心配まで……本当に優しい子達ね）

（平和な時代だから、と言ってしまえばそうかもしれん。だからこそ、このような優しき心は尊いのだろうな……）

四人が改めてこれまでと現状の違いを感じ、小さく笑みを浮かべる。その視線ははやて達四人に注がれていた。互いに笑い合いながら、何とか良い意見はないかと議論しているが、どれも問題があるのかアリサやすずかがダメ出しし、それになのはとはやてが、あ～でもないこ～でもないと意見を出す。

そんな微笑ましい光景を見て、シグナムも自然と思う事があるようで……。

【ヴィータ、シャマル、ザフィーラ】

【どうしたよ？】

【何？】

【何かあったか？】

【……何があっても主達の笑顔を守るぞ】

【アーチャーみてぇだな……ま、はやてに関しては言われるまでもね～】

【あら、じゃあなのはちゃん達は？】

【……はやてが泣くかもしれね～からな。仕方ねえから守る】

【もう、ヴィータちゃんは素直じゃないわね】

笑いながら言われたシャマルの言葉に、ヴィータはそっぽを向いた。それを三人が小さく笑みを浮かべる。

【ザフィーラはどうだ？】

【盾の守護獣の名に賭けて、あらゆる災厄から守り切ってみせよう】

騎士として、家族として心密かに誓う。そう、それはアーチャー達の誓いと同じ。少女達の笑顔を守るために戦う。その想いは、騎士ではなく一人の人間してのもの。

それに四人はまだ気付かない。しかし、はやてとアーチャーとの触れ合いが、なのは達の想いが、四人に”心”を与えた。いや、目覚めさせたのだ。

一方、アーチャーもそんなはやて達に笑みを浮かべていたが、ある事を思い出し、表情を僅かに変える。それに気付く者はいない。

（あの仮面の男、猫を通じてこちらの状況を知ったはず。さて、これで奴の正体も判明するか……）

そう、今朝みーちゃんへはやてはシグナム達を紹介していた。アーチャーが敢えて紹介させたのもある。みーちゃんが使い魔なのは既に知っている。だからこそ、その主人であろう仮面の男が何者なのかを確かめなければならない。

実は、アーチャーには一つの仮説があった。それがあるため、管理局に気付かれるかもしれない可能性を敢えて犯したのだ。

（ジュエルシード事件の際、奴は一度現れ警告したのみだった。管理局員ならば、そのままで終わらせるはずがない。おそらく、奴は

管理局員ではないのか、あるいは何か事情があって闇の書を監視しているのだろう。しかし、奴は管理外と呼ばれているここで、魔法をあっさり使った。それが露見しないと踏んでいたためだろうが、それは局員らしからぬ行動だ）

そう、仮面の男が局員ならば、ＪＳ事件の際に何もしないはずがない。だからこそ、アーチャーは試したのだ。

これで管理局が動けば男は局員となり、ＪＳ事件の際何故行動しなかったのかを追及し、はやて達への制限や監視の類に関する牽制に使い、動かなければ局員ではないのか、または後ろ暗い事があるのだろうと結論付けられる。

だがアーチャーは、十中八九局員ではないと踏んでいる。リンディ達との話し合いの中で既に聞いているのだ。彼女達が地球にやってきたのは、調査の延長線上だったと。つまり、誰かから連絡は受けた訳ではないのだ。

（仮面の男の事は、念のためシグナム達には教えておくか……？……いや、下手に警戒させて相手に気取られても不味い。まずは相手の出方次第か。それにしても、私達がいるから、か……信頼が重いな）

そう考えを纏め、アーチャーは苦笑する。そして、その視線をはやて達からシグナム達へ移し、小さく告げた。

「私は夕食の準備を始めるから、はやて達を見ていてくれ。それと、夕食を食べていくかも聞いてくれ」

「ああ、分かった……ヴィータ」

「何だ？」

静かにキッチンへ向かうアーチャー。それを見送りながら、シグナムはヴィータへ呼びかける。それに不思議そうな表情のヴィータ。それを見て、シグナムはさらりと「主達から今の事を聞いて来てくれ」と告げた。

その内容にヴィータが何か言おうとするが、それより早くシャマルがはやて達に声を掛ける。

「はやてちゃん！　ヴィータちゃんが遊んで欲しいって」

「なっ？！」

「お～、そかそか。なら、何しよ？」

「やっぱトランプでしょ！」

「ね、ゲームにしようよ」

「私は何でもいいよ」

シャマルの一言でまた騒がしくなるなのは達。定番をアリサが提案する中、さり気無くなのはが、自分の得意分野にしようとする辺り、中々抜け目ない。すずかはそれを気付きながらも微笑んで決定を委ね、はやてはちゃっかりトランプを手にしていたりする。

そんな四人を見て、ヴィータがシグナムとシャマルを横目で睨む。

「……覚えてろ」

そう言って、ヴィータははやて達がいるソファーの方へ歩いていく。はやてが手招きしているからだ。その背中を見つめ、シグナム

達は笑う。
それは、以前なら考えられない光景。戦いに身を置くのではなく、ただ平穏に身を置き、主の家族として過ごす。それは、守護騎士として生きていた中で初めての事。だからこそ、思うのだ。”守りたい”と。

「な、はやて。晩飯をええっと……」

「なのは、だよ。高町なのは」

ヴィータが自分を見て言葉に詰まったのを感じ、なのははもう一度名乗った。それをヴィータは聞いて頷いた。

「高町達も食べてくのかって、アーチャーの奴が聞いてくれってさ。」

「あ、アタシはいいわ。今日はパパ達と一緒に食べられるかもしれないから」

「私も遠慮するね。今、ファリン達のお手伝いしながら、お料理のお勉強してるんだ」

「私もいいよ。今日ははやてちゃん達だけで、ね」

そのなのはの言葉で、はやては思い出した。今日が何の日だったかを。そして、三人が断った理由はそこにもあるのだと気付いた。
だからはやてはどこかすまなさそうに、でも嬉しそうな声で答えた。

「そうか……ちょう残念やけど了解や。アーチャー、聞こえとった

な？　なのはちゃん達はいらないそうや」

そのはやての言葉に、アーチャーは無言で片手を挙げた。それを見て、はやて達は笑みを浮かべる。そして、それを合図にアリサがトランプをシャッフルし、それぞれへ配っていく。

ババ抜きに決まったようで、はやてはヴィータにルールを教え、見本のように数字の同じカードを捨てる。それを見て、ヴィータも同じようにカードを捨てていく。なのは達も同じように捨て、手元に数枚のカードが残る。

そして、ジャンケンをし、カードを引く順番を決める。はやてが勝ち、はやてがヴィータから、ヴィータはなのはからカードを引く事になった。

「……ふっ、ヴィータの奴、何だかんだで楽しそうだな」

「そうね。なのはちゃん達も楽しそう……」

「いいものだな、この世界は」

三人の視線の先では、トランプを手にし、なのはからどれを引くか迷っているヴィータの姿があった。しかも、どうやらなのはにババがあるらしく、なのはがどこかドキドキしている。

（ど、どれ引くかな？）

（くそ……どれがハズレだ……？）

なのはの手にある札は五枚。その中の一枚がババ。なので、ヴィータは五分の四の確率に賭けた。だが、手が一枚の札に掛かった途端、念話がヴィータに聞こえてくる。

【それ、ババだよ】

【……心理戦のつもりか？】

【ち、違うよ。ヴィータちゃん、初めてだから勝って欲しいなぁって……】

【へっ、生憎あたしにはそんな同情は……いらねぇ！】

やがてヴィータが意を決して引いた札がババだったようで、なのはは苦笑を浮かべ、ヴィータが引いたまま若干固まった。

そして、元に戻るや否やなのはに「卑怯だそっ！」と言い出す始末。それになのはが「何でっ？！」と言って困惑していた。

そのやり取りの内情が分からないはやて達は、やや不思議顔。

「……ったく」

「ふふふ、ヴィータちゃんもすっかり仲良しさんね」

「……あれでは騎士の名が泣くな」

呆れながらもどこか笑みを見せるシグナム。シャマルは微笑みながらそれを見つめ、ザフィーラは微かに笑みを浮かべてそう呟く。

そして、そんな会話をキッチンで聞いているアーチャー。その表情は柔らかな笑み。だが、それでも手つきは熟練のもの。一つのミスもなく、淡々と作業をこなしていく。

（やれやれ、フェイト達がいなくなったと思えば、今度はシグナム

達か。賑やかになるのは結構だが、私の苦労が増えるばかりだな）

そんな事を思いながら、次々と料理の下拵えを終わらせていくアーチャー。その顔には、暇を持て余したシャマルやシグナムが手伝いを申し出るまで、終始笑顔が浮かんでいた……。

出会った少女達と騎士達。それが意味するのは、新たな縁と新たな道。

――――――

八神家　リビング。そこのテーブルに五つカップが置かれ、そこからは微かなハーブの香りが漂っていた。アーチャーが淹れたハーブティーだ。八神家は基本緑茶だが、すずかと接点が出来てからと言うもの、紅茶も置くようになり、アーチャーのこだわりから心を落ち着けたり、安眠効果などがあるハーブティーも増えてきていた。

だが、昨日と違い、カップに手を付けず、シグナム達は目の前のアーチャーへと視線を向ける。アーチャーはその視線を涼しげに受け流し、静かにカップを傾けた。

「……そろそろ始めよう」

「それはいいが、飲まないのか？　毒など入れんし、そんな気もない」

「……私は頂くわ」

「シャマル？」

「どうしたんだよ？」

「私達に毒なんか入れたところで、アーチャーさんに得などないもの」

【出された物に手を付けないのは、相手への明らかな不信感よ。それに、淹れてくれるところから飲むところまで見たのだから】

「それもそうだな。ならば、俺ももらうとしよう」

【シャマルの言う通りだ。奴がどういう性格かは、我らもある程度は知った。それに、主とあれ程意志を通わせる男だしな】

シグナムのどこか急かすような声にも、アーチャーは動じる事もなく、そう切り出した。それを受けて、シャマルがゆっくりとカップに手を伸ばす。そして、どこか不思議がるシグナムとヴィータにそう告げて、静かにカップを傾けた。その言葉にザフィーラも頷き、カップへ手を伸ばす。

それをアーチャーはどこか苦笑混じりに見つめた。それに気付いたシグナムがやや訝しむように視線を送る。その視線の意味を悟り、アーチャーはすまないと言って、こう続けた。

「いや、はやてがいないだけで、お茶一つがここまで警戒されるとは。そう思っただけだ。他に他意はない」

「そうか……いや、謝るのは私も同じだ。主が家族と呼ぶお前を疑い過ぎるのも、良くなかったかもしれん」

「仕方ない。確かに君達にとって私は、信頼に足る存在ではないのだろうからな。気にしないでくれ」

「……すまん」

シグナムの言葉にアーチャーは笑みを浮かべる。律儀なのはいいが、あまり固く考えるな。そう告げて再びカップへ手を伸ばす。そのアーチャーの言葉にシグナムは少し憮然としたが、それを口にする事なく自分のカップへと手を伸ばす。そして、カップを傾けた。

横目で見てみれば、ヴィータも飲んでおり、視線が合った。それ

にシグナムはどこか苦笑するも、ヴィータと揃ってカップを置いた。

「では、始めよう。まず私が聞きたい事は一つ」

「んだよ？」

「はやての事だ」

「「「「？」」」」

アーチャーの問いかけの意味を理解出来ず、四人は疑問符を浮かべる。何故なら、はやての事は、むしろ四人の方がアーチャーに教えてもらう事の方が多いのだから。

だが、次のアーチャーの一言に四人は納得する。それは……

”闇”に光を当てる夜

「なのは達が魔法を使えるのは、リンカーコアと呼ばれるものがあるからだそうだ。はやては闇の書の主なのだろう？なら、何故魔法が使えないのだ。リンカーコアがないとでも？」

「……成程な。おそらくだが……」

代表で答えたのは、騎士達の纏め役であるシグナム。はやてのリンカーコアは、おそらく闇の書の中に内包されているので、魔法行使は出来ないのだろうと告げた。それを聞いてシャマルがそれを肯

定する。リンカーコアがない人間が、そもそも主になれるはずはないと。それに、シグナム達守護騎士も、はやての魔力で存在を維持しているとの事。

それを聞き、アーチャーは納得した。そして、それを確認し、次はシグナム達が質問を始めた。なのはが管理局に入っていない理由や、フェイト達の事。そして、リンディ達管理局との関係についてと、話は簡単なものから複雑なものにまで及んだ。

アーチャーがそれを全て答えた頃には、ポットに入っていた紅茶がなくなっていた。それに気付き、アーチャーが少し失態をしたというような表情を浮かべた。

その理由を四人は理解出来なかったが、アーチャーの手にしているポットを見て、何となくだがそれを悟った。そして、誰ともなく笑みを浮かべる。

「……すまん。私とした事が残量に気を配り忘れるとはな。すぐに代わりを淹れるから待っていてくれ」

そう言うと、アーチャーはポットを片手にキッチンへ。その後姿を眺めて、シグナム達は呆れ顔。それもどこか苦笑気味。

（まったく……奴は何なのだ。茶の代わりをすぐに用意出来なかったぐらいで。まぁ、それが奴らしいと言えば奴らしいか）

（別にそこまで気にしなくてもいいのに。でも、管理外世界とは分かっていたけど……まさか局員と個人的な協力関係とは、ね）

（あいつ、晩飯の時も思ったけど、もしかして家事全般に関してあなのかよ？　だとしたら……はやて達の言った通り”主夫”ってやつだな）

（やれやれ、我々へ気を使うのは程々で構わんのだが……主といい、奴といい些か気を回し過ぎな気がするな）

そして四人は互いの表情を見て、小さく笑う。考えている事が同じだと感じたのだろう。その時、ふとシャマルが呟いた。

「こんな風に笑い合うなんて……今まであったかしら」

「……平時に念話もなしで互いの考えが分かるなども……なかったな」

シャマルの呟きにザフィーラがそう続き、それにシグナムが頷いた。ヴィータも何も言わなかったが、どうやら同じ事を思ったらしく、その事に少し意外そうな顔をしていた。

以前も互いの考えが分かる事はあった。だが、それは戦闘中のみ。戦いを離れれば、互いの事には不干渉とでも言うように、ほとんど無関心だった。それがどうだ。はやてが主になり、たった一日。アーチャーやなのは達との触れ合いもあったが、それがここまで自分達に影響しているとは。

そんな事を考え、四人は黙った。それは心地良い静寂。これまで感じた事のない雰囲気。まるで、本当に自分達が『家族』になったような空気を感じて、四人は声を出さなかった。

そんな四人の前に、アーチャーがティーポットを手に戻ってきた。だが、その香りが先程とは違う。それに気付いたシャマルが尋ねると、アーチャーは少し意外そうに「よく気付いたな」と表情を変えて答えた。そろそろ寝る事を考え、安眠効果のあるカモミールティーにしたのだと。

その言葉にシャマルが笑う、そこまでしなくてもいいのに、と。

「何を言う。相手が誰であろうと、誠意を持ってもてなすのは当然だ。そこに一切の妥協はない」

「お前……本当は執事だろ」

ヴィータは遊んでいた際、アリサやすずかから聞いたのだ。アーチャーが月村家に行った時は執事服を着こなし、実に本職と見紛う程の働きぶりをしていると。

だが、そんなヴィータの言葉にアーチャーはどこか軽く笑みを見せて「そうだとしたら何だね？」と返した。さすがにそれはヴィータも予想していなかったのか、少し驚きを見せると顔を背けて「何でもね～よ」と答えるだけだった。

その後の話は、昨夜決めた事に関する再確認などをしていたのだが……

「やはり思い出せんか……」

「……ああ。我々も、何とか記憶を呼び起こそうとしているのだが……」

どうしても蒐集完了後の事がアーチャーも、そしてシグナム達も気になっていた。忘れようのないはずの記憶。それが異様な程綺麗に消えているのだ。考えれば考えるだけ不安になってくる。それがシグナム達の思いだった。

一方のアーチャーとしても、それはどうしても見逃せない話だった。最初は、シグナム達が敢えて教えないようにしているのかとも考えたが、四人の様子からしてその可能性が薄い事を悟っていた。

（まさかこれ程までにうろたえるとは、な）

昨夜といい、今夜といい四人は見るからに戸惑っているのだ。それが演技かどうかはアーチャーには分かる。それが、本心からのものだと。

シャマルやシグナム辺りならば、まだ誤魔化しも出来るだろうが、ヴィータはどこか顔に出易い節がある。その彼女が焦りにも似た感情を見せている事に、アーチャーは確信に近いものを抱いたのだ。

「……しかし、そう考えると歴代の主は何とも短絡的だったのだな。自分が得る力が何なのかも知ろうとせず、ただ蒐集させるとは」

「そう、だな……むっ」

何か思い出した事でもあったのか、シグナムが表情をやや険しくし、アーチャーを見つめた。

「どうした？」

「いや、何か今の言葉に聞き覚えがあったような気がしてな。主が短絡的と言ったところから最後までが、な」

「……どういう事だ？」

「シャマル、どうだ。お前も聞き覚えはないか？」

「言われてみれば……どことなく」

「あたしもだ。確かに、何かそんな事を誰かに言われた気がする……あ～、くそっ！　何か腹立ってきた！」

「俺にも覚えがある。その後、こんな事を言われたはずだ」

――”救いがないな、お前達も……そして彼女も。同情するよ”

その言葉にアーチャーは黙る。そう、何故か彼はその言葉が引っかかった。言い方も内容も、まるで自分が言いそうなものだからなのもある。だが、何よりもアーチャーが考えていたのは……

（彼女……だと？　それはその時の主か？　だが、それならば主と言えばいいはず。まだ何か……闇の書にはあると言うのか……？）

その疑問に答えを出すべく、アーチャーは尋ねた。その彼女というのは、その時の主の事を指しているのか、と。

それを聞き、即座に答えは返ってこなかったが、ややあってからシャマルが答えた。おそらく違うと。それは、マスタープログラムであるもう一人の守護騎士と呼ぶべき存在の事だろうと。

「管制人格、か」

「ええ。ただ、蒐集が四百頁を超えてからじゃないと……」

「起動しないのでな。それに主の承認がいる。おそらく会う事は出来ん」

シャマルとシグナムの言葉にアーチャーも納得し、ふと尋ねた。

それが、ある意味での運命への岐路。

「マスタープログラムと言ったな？　それならば、闇の書の力の効果等も説明出来るのではないか？」

その発言に四人の表情がハッとなる。どうしてそれに気付かなかったのか。そんな思いが顔から表れていた。しかし、そのための大きな問題が一つあった。それは……

「だが、主が許さん」

「ええ。はやてちゃんが蒐集を禁止しているし……」

「……無理、だな」

「致し方ないが、諦めるをえん」

そう、はやてが蒐集を禁止している現状では、四百を超える頁を蒐集するのは不可能だ。それを四人は思い出し、そうアーチャーへ告げたのだが、アーチャーはそれにどこか苦笑を浮かべてこう返した。

「何か忘れていないか？　はやては君達を『家族』と呼んだのだ。なら、一人だけ寂しい想いをさせると思うかね？」

その言葉が何を意味するか知り、四人は驚愕する。それは、はやてに管制人格の事を教え、四百頁までは蒐集を許可させるという事。確かにそれならば、はやても許可を出すかもしれない。

だが同時にそれは、はやてがなのは達に言った事に反する事になる。そうシグナム達が考えたと同時に、アーチャーは真剣な表情で告げた。

その事は自分からなのは達に理解を求めると。それに、万が一に備える意味でも完成時の事を知る必要があると。そして、もし反対

されても何とか説き伏せてみせるとも。これに関しては、全ての責を自分が負うと断言し、アーチャーは言った。

　これで結果的にはやてに笑顔が増えるのなら、自分はどう思われても構わない、と。

「それに、四百頁までは蒐集を終えておけば、いざという時も残りが少なくすむ。それではやてを助ける事になるなら、安い物だ」

　その決意と覚悟にシグナム達は黙る。その声に込められた真摯さを感じ取り、真意も悟ったからだ。

（いざという時には、全ての責を背負うつもりか。悪いのは、自分一人だと。だがそれは……）

（はやてちゃんだけじゃない。それはなのはちゃん達のためでもある。はやてちゃん達に及ぶかもしれない危機、それを回避する……でも）

（こいつ、どうしてそこまで自分を蔑ろに出来んだよ。お前に何かあったら、はやてだって悲しむって分かってんだろうが！）

（この男の本質、見えたかもしれん。ならば……我らがすべきは……）

　視線を互いに送り合う四人。それだけで、何を考えたかを察し、頷く。そして、アーチャーへ視線を戻し、シグナム達も真剣な面持ちで告げた。

　自分達も責任を負う、と。それは騎士としてだけではない。はやての、アーチャーの家族として当然の事だと言い切って。

はやての事を思って行動するのは、本来守護騎士の役目だと。それならば、責任を取るのは自分達だ。そう言ってシグナムはアーチャーへ向かってはっきりと告げた。

「私は烈火の将シグナム。そして、炎の魔剣レヴァンテイン。この剣、お前と共に主の道を切り開こう」

「私は湖の騎士シャマル。そして、風のリングクラールヴィント。この癒しの力、貴方と共にはやてちゃんを守ります」

「あたしは鉄槌の騎士ヴィータ。そして、鉄の伯爵グラーフアイゼン。この鎚、お前と共にはやての不幸を打ち砕く」

「俺は盾の守護獣ザフィーラ。この拳と鋼の体、お前と共に主を助け、全ての災いを防ぎ切ろう」

シグナムをキッカケに、シャマルが、ヴィータが、ザフィーラが宣言する。それは、騎士としての誓い。それは、アーチャーを同志と認めたからの言葉。それは、はやての『家族』だからこその想い。それを理解し、アーチャーはそれに応えるべく、告げた。

「私は弓兵のサーヴァント、アーチャー。その言葉、有難く受け取らせてもらう。そして誓おう。決して、はやての笑顔を無くさせはしないと」

その言葉に四人が頷いた。それにアーチャーも頷きを返す。こうして、彼らの想いは繋がれた。

翌朝、はやてはもう一人の『家族』の存在を知らされ、大いに悩む。だが、そのための方法が、少なくとも他者に迷惑を出す事がないと知り、四百頁までの蒐集を渋々許可した。

なのは達への説明と理解はアーチャーがすると聞き、はやては自分も共に行くと言ったため、アーチャー達は揃って苦笑した。

そして、蒐集への備えとしてシグナム達は、はやてに騎士甲冑のデザインを願い出た。それを受け、はやてがどこか楽しそうにデザインを考える間、アーチャー達は蒐集対象について打ち合わせ。

なるべく頁を稼ぎ易い生物を見つけ、基本的にその種族のみを蒐集する。これは、蒐集の意味を知ったアーチャーが、万一の事態が起きた場合、闇の書に多くの攻撃方法を与えないための提案である。

その分、苦労と労力は多いだろうが、それをシグナム達は厭わないと言い切って笑みさえ浮かべた。

騎士達は、使命ではなく自らの想いで立ち上がる。『主』ではなく、愛する『家族』の笑顔のために。

それは、彼らの”人間”としての第一歩

……

ーーー

たった一日で、と思われるかもしれません。ですが、守護騎士達は人間不信ではないですし、長きに渡る暮らしで人を見る目はあるはずです。

それに、アーチャーの言葉と提案はいつもはやての事を考えている。それを理解したなら、こうなるだろうと思って書きました。

批判も聞きますし、反省もします。でも、後悔はしません。現時点での、これが俺の精一杯です。

幕間3

高町家　道場。そこで木刀を片手に佇むセイバーと、同じく木刀を手にやや息を荒げたシグナムがいた。

「まさか……これ程の騎士がいるとはな」

「それは私の台詞です。烈火の将、その名は伊達ではないですね」

あの日、蒐集を決意したアーチャー達は、はやてと共に高町家を訪問。事情説明と理解を求めた。なのはやセイバー達は、万が一の備えとしての意味合いが強い事と無人世界限定での蒐集と聞き、了解した。

その背景には、はやてが許可を出したという事とアーチャーが決断したという事の二点が大きく作用していた。

時刻は既に昼を過ぎている。シグナム達は、現在蒐集を行なってはいるが、毎日という訳ではない。週に三日のペースで行なう事に決まったのだ。

その理由は、はやてがみんなで過ごす時間も欲しいと要求したため。それにアーチャーは苦笑いで応じ、シグナム達も当然従った。そして、彼らはこうして思い思いに趣味や日課を作り出していた。

シグナムは、セイバーや小次郎を始めとする剣士との手合わせ。それに、恭也の伝手で剣道道場の非常勤師範をしていて、子供達から先生と呼ばれ満更でもないようだ。

シャマルは、はやてやアーチャーから家事を習い、桃子からはお菓子作りを教えてもらっているが、どちらも中々上達しない。

ヴィータは近所の公園にいる老人会と知り合い、そこのアイドル

的存在となった。また、なのはと最初に色々あったせいか、よく遊んでいて、ゲームで対戦したり、夕方の魔法訓練でしごいたりと楽しくやっている。

ザフィーラは、基本的に八神家の警備員をしているが、近所で力仕事で手が足りないという時は頼りにされる存在となっていた。

ちなみに、ご近所の考えるシグナム達の家族関係は以下の通り。

シグナム＝ヴィータの姉で長女。シャマル＝同じく姉で次女。ヴィータ＝妹で三女。ザフィーラ＝ヴィータの兄で長兄。アーチャーが、四人ははやての母方の親戚と言ったためか、はやての母は国際結婚の末に生まれた事になってしまったが。

「……魔法を使わずに戦うのは、やはり慣れんものがあるが、鍛錬には丁度いいっ！」

「くっ……それは同感ですがっ！」

「チッ！　そう簡単にはいかんか」

シグナムの突きを捌き、すかさずセイバーは返す刀で斬りつけるが、それをシグナムも跳んでかわす。魔法無しの試合。それを最初聞いた時、シグナムはセイバーの言葉を疑った。騎士は、何も魔法が無ければ戦えない訳ではない。特にシグナムは剣の騎士。その剣技に並ぶ者は、ほとんどいないと思っていたのだ。

（だが、それは私の思い込みだった。セイバーや佐々木など、この世界には腕の立つ剣士が多くいた。喜ばしいな、この時間は）

純粋な剣術だけで戦える事は、シグナムにとってこの上ない楽しみと言えた。生憎、まだ全力での手合わせはしていないが、現状で

も十分満足なのだ。騎士道を行くセイバーと武士道を行く小次郎。その二人だけでなく、御神の剣士たる士郎達までいるのだ。

彼女にとって、現状はまたとない絶好の鍛錬の場なのだ。故に自然と笑みが浮かぶ。それを見て、セイバーは内心微笑んでいた。

（あれではまるでキョウヤです。本当に戦う事が好きなのですね、シグナムは）

そう思っているセイバーだったが、その表情はシグナムと同じように笑っていた。

それぞれの日常、それぞれの想い

「はい、ケーキセットお待たせ致しました」

にっこりと微笑み、テーブルに飲み物とショートケーキを置くシャマル。身に着けているのは、美由希のエプロン。今、彼女は桃子に頼まれ翠屋の手伝いをしていた。というのも、お菓子作りを教えてもらう代わりに、翠屋を手伝う事。それがシャマルが桃子から出された条件だったのだ。

セイバーは、シグナムと出会ってから定期的に休みを取るようになり、その穴をどう埋めるか悩んでいたところへ、シャマルがお菓子作りを教えて欲しいと言ってきたのだ。

それを渡りに船とばかりに桃子は思い、シャマルに手伝いを頼み出た。シャマルは初めこそ戸惑ったものの、お客さんから励まされ

たり、声をかけられる事で次第にやる気を抱き、手伝い始めて僅か三日でレジ打ちまで覚えたのだ。

（常連さんの顔も覚えてきたし、後はそれを完璧にするだけね。でも……私、すっかり店員さんだなぁ）

はやて達に美味しいお菓子を作ってあげたい。アーチャーは料理が得意で、菓子類はそこまでではないと言ったのを聞き、シャマルは自分がそこを担当しようと思った。

そのため、アーチャーが認めるお菓子作りの達人である桃子に頼み、教えてもらおうとしたのだが、交換条件に出されたのは、店の手伝い。

最初はちょっとした好奇心だった。それが、初日を終えたら自分から”次”を望んでいた。

（そして気がつけば、シフトの仲間入りだもんね……）

現在、シャマルは翠屋勤務五日目。セイバーとは、昨日初めて共に仕事した。その動きと捌き方に熟練のものを感じ、シャマルがその旨を伝えるとセイバーはどこか照れくさそうに俯いて「そ、そんな事はありません」と答えるしか出来なかった。

それにシャマルが内心微笑んだのは言うまでもない。

「シャマルさ～ん、これ五番さんにお願いね」

「あ、は～い！」

桃子の声に笑顔で応え、シャマルは動き出す。夕方になれば美由希が現れ、手伝いは終了。そして、今日は桃子からスポンジケーキの上手な焼き方を教えてもらえるのだ。

（さ、今日こそスポンジケーキを綺麗に焼いてみせるんだから！）

むんっと気合を入れるように、シャマルは袖をまくるのだった……

麗らかな日差しを浴び、ヴィータはほのぼのとベンチに座っていた。視線の先では、老人達がゲートボールを楽しんでいる。

つい先程までヴィータもその輪にいたのだが、今は休憩中。アーチャーに持たされた水筒を開け、中に詰められたスポーツ飲料を直接飲む。

老人達が見ていれば、ヴィータもそんな事はしないのだが、今は皆ゲームに集中していて、ヴィータの方へは視線を向けていない。

そのため、ヴィータは行儀が悪いとしりつつ、そんな行動に出た。

「……うめぇ」

運動した後に飲むジュースは、ヴィータにとっては、風呂上りのアイスにも並ぶ幸せな一時をくれるもの。ちなみに、ヴィータはアイスが好きだと分かった途端、はやてとアーチャーにより、アイスは一日一つ宣言が発令され、ヴィータは本気で「な、何とか二つにしてくれよ」とはやてだけでなく、アーチャーにまで懇願したのだ。

（あ、今日は箱アイスが安売りしてたな。アーチャーに言って買わせるか？　いや、あたしが一緒に行って、はやて経由で買ってもらう方がいいか）

はやてやアーチャーと同じく、ヴィータも毎日スーパーのチラシを確認している。見るのは決まってアイスやジュースだったりする

が、次点でお菓子。これはアーチャーが厳しいので、駄菓子系のものを買うしかない。酢昆布や五円チョコなどは、アーチャーも渋々ながら「確かに家庭では食べられん味だな」と許してくれるのだ。ま、一つか二つしかダメだが。

（でも、確かにあいつか作るおやつの方が旨いんだよなぁ……。シャマルがお菓子を作れるのを待ってたら、はやてがばあちゃんになりそうだし）

さり気無く酷い事を考え、ヴィータは水筒を下ろす。視線の先では老人達が手招いている。それに笑顔で手を挙げ、ヴィータは立ち上がる。その脳内では今日の予定を思い出しながら。

（もう少ししたら家に帰って、買い物行って……夕飯食べたら、なのはの訓練だな。今日は、どうやってしごいてやるか……）

初めはなのはの名前が中々覚えられず、苦戦したヴィータだったが、最近は訓練中に怒鳴る事も増えたためか、すんなりと名前を呼ぶ事が出来るようになっていた。

だが、ヴィータは知らない。今は自分がなのはをしごいているが、これから数年後、お返しとばかりに成長したなのはが模擬戦などで襲い掛かってくる事を。

「ザフィーラは、何かしたい事探さへんの？」

「……不器用ですから」

通信教育の本日分の課題を片付け、はやてはアーチャーから頼ま

れた三分間クッキングのレシピを書き記した。
そして、無言で雑巾を片手に部屋の隅の汚れを拭いているザフィーラへそう問いかけたのだった。
現在、八神家の家事は完全分担制になっており、炊事をアーチャーとはやて、洗濯をシグナムかシャマル、掃除をヴィータとザフィーラが担当している。

尚、相手が了承すれば交代も可能。そして、手伝いは好きにしていい。そのため、シャマルはよく炊事の手伝いをしていて、最早レギュラーとも言える。
しかし、そんなシャマルでさえ趣味や日課を見出し、平和な日々を謳歌しているにも関わらず、ザフィーラだけは、無骨に掃除のみしかする事を持っていないようで……

「でも、時々ご近所さんへ遊びに「あれは手を借りたいと言ってくるので、手伝いに行くだけです」……さよか」

はやてとしては、出来る事なら全員に趣味を持って欲しいと考えている。アーチャーとも話して思ったのは、習うより慣れろが四人には適した接し方との結論。
故に、はやては積極的にシグナム達を伴って交流した。高町家、月村家、バニングス邸やスーパー等、自分が接点となれる場所は全て連れて行った。その甲斐あってか、シグナムは高町家と繋がりが強くなり、シャマルも翠屋で働き出し、ヴィータはご近所でのマスコット的存在へとなり、そこから自分達の趣味や日課が出来ていったのだが……

（ザフィーラだけは、ほんまに何も無いもんなぁ……）

繋がりがない訳ではない。現に近所付き合い等はむしろ積極的に

してくれている。だが、趣味はない。日課といえば、こうしてはやてと共に昼を過ごしたり、早朝や夜に海浜公園へ行き、鍛錬をするぐらいだ。

何とか趣味を持たせられないだろうか。そんな事をはやてが考えていると、ザフィーラはそんなはやてに静かに告げた。

「主、私は現状で十分です。趣味とは、個人で考え方や感じ方が違うもの。ならば私は、こうして傍で主の笑顔を見守る事が趣味と言えます。

心遣いは嬉しいですが、私は何も趣味がない訳ではありません。ですので、お気になさらず」

「ザフィーラ……」

「さ、そろそろ図書館へ行く時間でしょう。私が随伴しますので、少しお待ちを」

そう言って、ザフィーラは手にした雑巾を洗いに行ってしまった。その後姿を見つめ、はやては小さく呟く。

――何や、ザフィーラまでアーチャーみたいな事言うようになったわ。

その顔は、嬉しくて堪らないというような笑顔だった……

月村家　キッチン。そこにアーチャーはいた。シグナム達が現れてから、はやての傍に常に誰かがいるようになったため、ファリンの指導が毎日へと変わったためだ。

だが、今日はそこにファリンとノエルだけでなく、ライダーと何故か小次郎までいたりする。

「これは……とまとのすーぷか。それにしては冷えているようだが？」

「冷製スープだ。これからの時期、こういうスープが好まれる。食欲がない者でも、これならばという者も少なくない」

先程ノエルが作ったスープを前に、小次郎が興味深そうに見つめた。その言葉にアーチャーは簡単に説明し、視線をライダーへと移した。ライダーは、ファリンと一緒になって同じ物を作っていた。

今回、小次郎がここにいるのは試食係を務める事になったからだ。バニングス家での仕事を終え、昼食を取らずに、小次郎はここでも庭仕事をしながら試食の時を待っていた。

アーチャーが小次郎を呼んだ訳はただ一つ。最近、ノエルとファリンがやたらと試食の際に迫ってくるのだ。それを、小次郎という身代わりを立てる事で回避しようとしていた。そのための条件を小次郎に出されたが、それはアーチャーにとって造作もない事だった。そのため、あっさりと小次郎は試食役を引き受けた。

ライダーが参加しているのは、すずかが最近料理を習い始めた事に起因する。アーチャーから教わっているノエル。そのノエルからしか教わろうとしないのを見て、ライダーは少し寂しく思い忍に相談したのだ。それを聞いた忍が「ライダーは難しい料理は出来ないからでしょ？」と答え、ライダーは納得した。

すずかは家庭的な料理だけではなく、凝ったものも覚えたいのだろうと。故に、食事を一手に執り行っているノエルへ師事するのは、当然の事だと。そして、何とか自分にも師事を仰いでくれるようにと、ライダーはこの場にいるのだ。

簡単に言えば、妹にもっと頼ってほしい姉の気持ちである。ま、おそらくライダーはそれを否定するだろうが。

「……お姉様、これを」

「ありがとうファリン」

出来上がったスープの味を確かめるべく、手渡されたスプーンをスープへと沈ませるライダー。そして、それを持ち上げ口へ運ぶ。その動作は洗練されており、貴族の令嬢と呼んでも差し支えない程気品溢れるものだった。惜しむらくは、服装がメイド服だった事だろう。

（……いい出来です。これならばアーチャーといえど……）

（お姉様が笑った？　あ、きっと美味しかったんだ。なら、アーチャーさんに誉めてもらえるかな……）

口に広がる味に笑みを見せるライダー。それからスープが上出来だと理解し、ファリンも笑みを浮かべる。そして、二人揃って視線をアーチャーへ向け、スープを黙って差し出す。

それを受け取り、アーチャーはそれを小次郎の座るテーブルへと置いた。

「待たせたな。では、存分に味わってくれ」

「待ちかねたぞ。さて、ライダー達の腕前、しかと味わうとしよう」

どこか楽しそうに小次郎はそう告げると、静かにスプーンを手にし、皿へと沈ませた。その中身をすくい上げ、口へと運ぶ。その所

作は、ライダーが貴族なら、小次郎は公家とでも評すればいいのだろうか。ライダーとは違う優雅さが感じられるものだった。

それは、小次郎がアリサから徹底的に仕込まれたものだと、誰も知らない。アリサは、小次郎がどこに行っても恥を掻かずにすむようにと、厳しくマナーを叩き込んだ。もっとも、小次郎自身も作法等に対し、どちらかと言えばしっかりした方だったので、さほど苦労せず、アリサは教育を終えた。

「……どうですか、小次郎さん」

「ふむ……ふぁりん殿とライダーの方はやや酸味が強いな」

「では……私のはどうでしょう」

「のえる殿の方は……良く出来ておる。だが、惜しむらくは微かに味が薄いな。おそらく、とまとからの水分がライダー達のものより多かったのだろうよ」

的確に公平に小次郎はそう告げた。それを聞き、感心するファリン。一方でアーチャーも二つを比べ、同じ結論を出した。ライダーとノエルはアーチャーの品評と小次郎が同じ事に驚くと同時に、小次郎も鋭い味覚を持っている事を実感した。

そんな三対の眼差しを受け、小次郎は不思議そうな表情。そして、皿に残ったスープを飲み干し、アーチャーへ一言。

「それで、よもやこれで終いではなかろうな？」

「……分かっている。君の要望通り、和食を用意している。少し待て」

「それは重畳。何、ありさの板前は和食は出来ぬと申すのでな。たまに和の味が恋しくなるのよ」

そんな事を聞きながら、ライダー達は自分達のスープを飲みながら反省会。まずはトマトの見極めからとライダーが言えば、ノエルは味付けもトマトの質に合わせなければと言い、ファリンはどっちも美味しいですけど……とノンキに言ってごくごく飲んでいる。

そんな三人を他所に、小次郎はアーチャー作の焼き魚定食を味わうのだった。

（ふむ、これよこれ。やはり日本人には、この味が一番よな）

（受肉したからか、小次郎も食事が欠かせぬからな。しかし、少しずつセイバーのようになっていないか、小次郎は）

どこか嬉しそうに食べる小次郎を見て、アーチャーはそんな事を考えて苦笑していた……

「もう、六月も半ばねぇ」

「ホント、時間が経つのって早いね」

「ふふっ、でもユーノ君達とお別れしてもう二週間以上、か……」

アリサの言葉になのはがしみじみと頷き、すずかがそれに笑い、同時に想いをここにはいない親友達へと馳せる。

それに二人も頷いて、視線を窓へと向ける。日差しはまだ高いが、後少しで下校時間となる。今日は三人共塾があるため、揃って塾ま

で歩いて行く事にしているのだが……

「いつ……帰ってくるんだろうね？」

「さぁ？　でも、きっと驚くわよフェイト達」

「だね。はやてちゃん家にロストロギアがあった、だもん。でも、プレシアさんにはどう伝えるの？」

なのはの言葉にアリサもすずかも悩む。未だにいい考えは浮かばないのだ。プレシアが嘱託魔導師になるという事は、なのは達も知っている。そして、それがどんな事を考えて下した結論なのかも。

プレシアはフェイトやアリシアと平和に過ごしたいのだ。そのため、自分達がいる地球での暮らしを実現するために管理局と繋がりを作った。

（フェイトちゃん達にも教えないと色々問題だし……でも、プレシアさんが困る事にもなるし……）

なのはの頭に甦る親友の少女達とその母親の姿。その笑顔をまた曇らせる事はしたくないが、黙っているのもよくないと知っている。

思考を呼び戻し、視線を再びアリサ達へと向ける。すると、二人もどうやら同じ事を考えたらしく、視線が合った。

それが何となくおかしくて笑う三人。そして、ひとしきり笑ったところでアリサが言った。

「ま、なるようになるわよ。フェイト達が帰ってきたら、その時に考えましょ」

「そうだね。でも、フェイトちゃん達はともかく、プレシアさんと

話をするのは、アーチャーさんがいい気がする」

「それは私も賛成。私達とはやてちゃんがフェイトちゃん達。アーチャーさんがプレシアさんかな？」

なのはの意見にすずかが賛同し、アリサもそれに頷きを見せた。

今はまだいないフェイト達へ思いを馳せ、なのはは思う。

きっと、上手くいくと。みんなが笑って過ごせると。根拠はないが、なのはは何故かそんな気がするのであった。

（フェイトちゃん、ユーノ君、アリシアちゃん……早く帰ってきて、また遊べるといいね）

今はまだ誰も知らない。少女達の再会が近い事を……

――――――

他のキャラにも焦点を当てたいと思います。

幕間4

月村家　中庭。そこに四人の男女がいた。そう、セイバー達である。四人はテーブルに着き、ライダーが淹れた紅茶を手に、ある事について話し合っていた。その内容は……

「で、どうなのだ。蒐集とやらは？」

「思ったよりは順調だ……と言うよりは、予想が厳しすぎたという感じだ。はやての一言があったのも大きいがね」

小次郎の問いにアーチャーはどこか苦笑混じりに答える。つい最近、はやてはアーチャー達に、管制人格をなるべく早く外に出してやりたいと言って、それに四人も応えようと奮起している。

今日はそれに関連し、アーチャーが、ランサー達が居なくなった後、初めての会合をしたいと申し出たのだ。話題は、最近八神家に現れた守護騎士達と、ロストロギアである『闇の書』についてである。

「それでも、それなりに苦労はされているのでしょう？」

「ああ。だが、まだ想定内と言える」

「それは当然でしょう。聞けば、長きに渡る戦乱の世に生まれたとか。ならば、腕が立って当然です」

ライダーの言葉に余裕を見せるアーチャー。その答えにセイバーが納得の表情を見せた。それをアーチャーも理解しているので、やや笑いさえ見せて頷いた。

そう、既にセイバー達も、本人達からシグナム達の事を聞いていた。そして、その本来の目的であった蒐集についても。だが、現在の蒐集行為についてはセイバー達はそれ程心配していなかった。何故ならば、八神家には、はやてとアーチャーがいるから。

優しいはやてと、誰よりも犠牲を出す事を嫌うアーチャー。必要とあれば割り切れる。だが、それでも可能ならば全てを救う。それを常に目指して動く男。それがアーチャーだったからだ。

そして、今は最悪の状況に備え、最低限の蒐集を行なっているのだが……

「しかし解せぬな。闇の書とやらの完成後が分からんというのは」

「……確かに気になります。そこはどうなのです？」

「シグナム達も私も、現状では管制人格に頼らざるを得ないと考えている……」

「そうですね。相手はロストロギア。せめて、ユーノかプレシアの知恵を借りられれば……」

ライダーの言葉に全員が頷いた。これが魔術絡みなら、まだ何とかなったかもしれない。しかし、相手が魔法世界の物では手の打ちようがなかった。

その知識を持っている者達は、揃って異世界へと旅立ってしまっている。それでも、四人も何故かシグナム達が思い出せない事が気にかかっていた。その気持ちが特に強いのは、誰であろうアーチャー。

（記憶が不完全、か……まるであの時の私の言い訳のようだ）

かつてアーチャーは、聖杯戦争に召喚された際、真名をマスターに隠すため、こんな事を言ったのだ。

召喚が正常に行なわれなかったためか、記憶が混乱している、と。それをマスターであった少女は信じ、真名を名乗らずにすんだのだ。

（まぁ、今回の覚醒が正常かどうかは判断しようがないが……待て？　彼女達は闇の書のプログラムと言っていたな……）

アーチャーの意識が過去へと飛ぶ。そう、確かにシグナム達は、自分達を守護騎士プログラムと言った。

プログラムなら、どうして記憶が不鮮明になるのか。その理由を考え、アーチャーは一つの仮定を打ち立てる。

それは、システムそのものが破損もしくは変質しているという事。つまりは”バグ”である。何らかの衝撃か要因により、闇の書に異変が起きた。そう考えれば納得もいくのだ。

そして、アーチャーはその異変の原因に心当たりがあった。

（はやてがジュエルシードの魔力を浴びたせいかもしれんな。直接は危険と思い、ルールブレイカーで無力化したものを使ったのだが……）

そう、あのアリシア復活の時、はやての手にしていたジュエルシードだけが残ったのには、そんな理由があった。

闇の書の封印に魔力が関係していると仮定したアーチャーは、ジュエルシードの配分を自ら引き受け、はやての手にしたジュエルシードを、敢えてただの石になったものにしたのだ。しかし、その気遣いもどうやら無駄に終わったらしいとアーチャーは思った。

そんなアーチャーの心情を知ってか知らずか、セイバーが思い出

したようにこう言った。

「そういえば、蒐集は魔力を吸収するようなものだとか。残ったジュエルシードがあれば、どれだけになったのでしょう？」

「さあ？　ですが、仮にも聖杯のようなものですし、かなりのものにはなかったと」

「そう考えると惜しい事をしたものよ。くろの達に渡すのではなかったか」

どこか楽しそうに笑う小次郎。それにセイバーとライダーも笑みを浮かべ頷いた。勿論、それは冗談である事は二人も理解している。だからこそ、楽しそうに笑うのだ。

アーチャーもそんな三人に呆れながら、笑みを見せる。そして、視線を空へと向けて想いを馳せる。

（ランサー達は、今頃どうしているのだろうな）

帰還の刻、迫る

「ようやく許可が下りました」

「そう。ありがとう、リンディさん」

時空管理局本局。そこにある喫茶スペースに、二人の女性がいた。一人は、名前を呼ばれたリンディ。そして、もう一人は……

「いいんですよ。ただ、定期連絡は忘れずにお願いしますね、プレシアさん」

「ええ。嘱託魔導師として、立派に職務を果たすわ」

プレシア・テスタロッサである。彼女はつい先頃行なわれた嘱託試験に合格し、晴れてリンディ配下のアースラクルー扱いになった。その人事の裏には、リンディの親しい同僚であるレティ・ロウラン提督の尽力があった事は言うまでもない。

――レティ・ロウラン。

彼女は人事関係の部署におり、その伝手があるからこそ、リンディはプレシアへの提案が可能だったのだ。

その見返りとして、プレシアの力をレティの依頼で貸し与える事にもなったが、それはプレシアも承諾しているので問題はなかった。

問題になっている事があるとすれば……

「で、レティがですね……」

「まだ諦めてくれないのね。もう、レティさんも悪い人ではないけれど……ね」

フェイトを局員へスカウトしてくるのだ。それも頻繁に。それをリンディも嗜めているのだが、元々ミッドチルダは就業年齢が低い事もあり、それを大っぴらに止める事が難しいのも現状だ。

レティもプレシアやリンディと同じく子を持つ母。そのため、プレシアも話が合い、リンディの仲介もあってすぐに打ち解けたのだ

が。

「まぁ、レティの言い分がこちらでは普通ですから」

「そうなのよね。それは分かるけど……」

「地球へ行けば、否応なく諦めますよ」

「そうね。でも、それはそれで寂しくなるわ」

プレシアはそう言ってリンディを見る。それにリンディもどこか寂しそうに頷き、視線を返す。リンディが珍しく愚痴を言い合える相手。それがプレシアだった。自分と同じような経験をしただけではない、元々研究者だったプレシアの意見や視点は、現場一筋でここまで来たリンディにはないものだったのだ。

現に、嘱託試験までの間、プレシア達はリンディ達のハラオウン家に滞在し、その間も、プレシアはリンディの仕事に意見や助言、時には民間協力者としてフェイト達と共に手を貸してくれたのだ。

その間、たった二人だけでは広いだけだった家が急に手狭になり、リンディとクロノは密かに苦笑した。

一方、プレシアはプレシアでリンディと同じく寂しさを感じていた。共に子を持つ母親。意見が食い違う事もあったが、それで喧嘩する程二人は若くない。むしろ、それを良い刺激にし、互いを支え合ったようなものだった。

プレシアも愚痴を言える相手が出来て嬉しかったのもある。リニスは親の悩みを知らないし、ランサーには女の愚痴は言えない。そういう点でもリンディは理想の相手だったのだ。

密かに二人で飲みながら話して過ごす時間は、この一ヶ月強の生活の中の良い意味での怠惰的時間だった。

「また会えますから」

「そうね……明日の見送りには？」

プレシアの問いかけにリンディは申し訳なさそうに首を振った。
それをプレシアはどこか理解していたようで、何も言わずに頷いた。

「アースラも次の任務が入ってしまって……」

「仕方ないわ。慢性的な人手不足だもの。優秀なアースラクルーを遊ばせておく余裕は、管理局にはないでしょう」

「あら、その評判に一役買ったのはどこの誰かしら？」

「さぁ？　私達は言われた事をしただけよ。きっと指揮官が優秀だったのね」

「よく言うわ」

「貴方こそ」

そう言い合って二人は笑う。たまにこうして砕けた喋り方をするぐらいには、二人も関係を深めていた。ただの上司と部下ではない雰囲気が、そこには確かにあった。
そして、地球での滞在が認められた経緯には、リンディの働きかけ以外にレティの理解と……

「そうだ。グレアム提督にもよろしく伝えておいて」

「ええ。でも、アリア達もきっと寂しがるでしょうね。リニスさん達と気が合っていたもの」

リンディやクロノの恩人であるグレアム提督による尽力も大きい。地球出身のグレアムは、リンディから地球にもロストロギア被害が出そうだったとの話を聞き、プレシア達の地球滞在を支援したのだ。故郷が被害に遭う前に局員が動けるように、と。

そして、そのグレアムの使い魔であるリーゼアリアとリーゼロッテとも、プレシア達は面識が出来た。

猫の使い魔であるリーゼ姉妹は、同じ猫科のリニスと意気投合し、特にヤンチャなロッテに手を焼く事もあるアリアは、アルフの面倒を見ているリニスに親近感を抱き、特に仲を深めていた。

一方、ロッテは思考がどこか似ているアルフと気があったのか、よく一緒になってリニスとアリアの手を焼かせていたのだ。

その光景を思い出したのか、二人は微笑みを浮かべた。そして、互いに遠い目をして外を見つめる。そこに広がる景色を眺め、どちらともなく呟く。

と。

――また、一緒に飲みましょ……

リンディ達が本局でそんな会話をしている頃、ミッドチルダのとあるデパートでは……

「次、次は何買う？　アクセサリー？　それとも靴？」

「エイミィ、少し買い過ぎだ……」

「わたし、靴がいい～」

「よぉ～し、靴屋にレッツゴ～！」

「ゴ～！」

「あ、アリシア……」

フェイト達四人が買い物の真っ最中だった。リンディからプレシア達へ地球滞在の許可が降りた事を聞き、エイミィがクロノを伴い、全員で買い物へと繰り出したのだ。

本当はランサー達もいたのだが、エイミィとリニス達の目論見により、二手に分かれている。後、言うまでもないが全てクロノの払いである。

まだ最初の一軒目だというのに、既にクロノの手には大きな紙袋が二つ持たされており、そこにクロノの物は一つもなく、アリシアとフェイト、それと密かに買わされたエイミィの物しか入っていないのだ。

割合とすれば、アリシアが四、フェイトも四、エイミィは二である。まぁ、フェイトの場合、エイミィとアリシアが無理矢理選んだものばかりだが。

「……まったく」

「ご、ごめんねクロノ。こんなに買ってもらって……」

先を歩いて行くエイミィ達を眺め、どこか呆れたように呟くクロ

ノ。それにフェイトが申し訳なさそうに謝った。だが、それにクロノは表情を変えず、こう答えた。

「謝るのは君じゃない、エイミィだ。知ってるか？　買った量こそ少ないが、金額で言えば彼女は君達とほぼ同じだ。人の奢りだからと思って……」

「……エイミィって、本当に遠慮がないね」

「ああ。それが長所であり短所だ。ま、ちゃんと人によって分別を弁えているからいいんだが……」

「そうだね。でも、クロノには全然……」

「ああ、遠慮しない。それに、今回はこちらも文句を言えない理由もあるしな」

さ、行こうと言ってクロノは歩き出す。いつの間にか二人が大分先へ離れてしまったのだ。その声にフェイトも頷いて歩き出す。その視線の先には、大きく手を振るエイミィとアリシアがいる。

それに笑みを浮かべてフェイトも手を振り返し、小走りになった。離れ行くフェイトの背中を見つめ、クロノは思う。

（彼女も変わったな。初めて出会った時はどこか内向的な感じがあったが、今はアリシアやエイミィの影響かそこまでではなくなった）

はっきりと物言う二人と過ごし、フェイトも少しずつだが意見を伝える事に慣れてきたのだ。既にアースラクルーとは、気後れせず話す事が出来るようになっていた。

そんな事を思い出し、クロノは笑う。まるでこれでは、本当に自

分がフェイト達の兄だと。心配をし、面倒を見、時に突き放す。この一ヶ月強の生活で、クロノはフェイトとアリシアの兄的位置を獲得してしまっていた。別に望んだ訳ではない。嘱託試験のため、プレシアが念のために勉強や訓練などで二人を見る事が出来なくなったのを見て、昔の自分を思い出しただけ。

そして、そうやって世話を焼いている内に、アリシアからは”お兄ちゃん”と呼ばれるようになったのだ。クロノとフェイトはその発言に驚いたが、確かにそう呼ばれても仕方ないとクロノも思い、結局訂正は諦めた。何せ、どれ程言ってもアリシアは直さなかったのだ。

彼は知らない。その裏には面白がったエイミィとアルフの存在があった事を。

（後、出発を一日遅らせられれば、ユーノの奴も荷物持ちに出来たんだがな）

ユーノは、昨日全ての証言を終え、すぐさまスクライア一族のもとへと出発したのだ。一刻も早く安心させ、地球へ帰るために。クロノはユーノに頼まれ、既に管理外への滞在許可を申請した。だが、局員でもないユーノがそれを認められるには、時間がまだまだ掛かる。

ユーノもそれは承知している。だからこそ、クロノへ頼んでいったのだ。執務官のクロノ・ハラオウンではなく、友人のクロノ・ハラオウンへ。

この一ヶ月強の時間で、クロノとユーノは友人にはなった。だが、それはなのはやフェイト達のような”親友”というものではない。むしろ”腐れ縁”がしっくりくるような関係である。

何故かどこか気に食わない。そして、正論にも関わらず反論したくなる。そんな相手だった。まぁ、互いを認めてはいるので友人と

は言えるが、決して”親友”などにはならないだろうとクロノもユーノも思っていた。

（フェイト達は明日地球へ向かう。ユーノの奴はどう早く見積もっても一月はいるな……。滞在費等の問題もあるし、どうしたものか）

そんな事を考えていながら、クロノは歩く。その先には、クロノへ手招きをするエイミィ達の姿があった……

クロノ達とは離れた場所にある紙の本を扱う書店。科学が進んだミッドチルダでは、既に書籍というものがアナログからデジタルへと移行しており、ランサーは地球の技術面を考え、紙の本を求めた。だが、その店でランサーは困っていた。文字が読めないとかではない。そんな事はとうに諦めている。問題なのは、ランサーがリニスに「ライダーへの土産を選んでほしい」と言った直後から始まった、この緊迫感溢れる雰囲気だ。

それまではどこか嬉しそうだったリニスとアルフ。ランサーの腕を自分の腕と絡ませ、上機嫌だった。しかも、ランサーが頼みがあると言った時など、それは良い笑顔を浮かべたものだ。

それが、今はどうだ。リニスだけでなく、アルフさえ全身から怒りのオーラを漂わせ、ランサーを見ている。

（何でこうなっちまった？　俺はただ、どれがどんな本かわかんねえから、選んで貰おうと思っただけなのによ……）

（ランサーがライダーさんへお土産を買うなんて。そういえば、ランサーが本を欲しがるなんて変だと思ったんです。ライダーさんの

ためですか）

（ライダーとは、ね。予想外だったけど、確かにあいつも良い女だもんね……。ランサー、アタシがいるだろ！）

ランサーの行動に内心苛立っているが、二人はランサーがセイバー用にお菓子を買った事を知っている。にも関わらず、問題にはしなかった。むしろ、その時は二人も「こちらがいいのでは」とか「これ好きそうだよ」などと意見を出していたぐらいだ。

如何にセイバーが二人から”良い女”扱いされていないか分かるというものだ。本人が知れば、烈火の如く怒ったかもしれないが。

結局ランサーは二人の怒りの理由に気付かず、素直にライダーへは適当に本を買おうと思ったのだが、一応内容を考えてやった方が良いと思ってリニスに選んで欲しいと伝えた。

その瞬間、二人から漂っていた怒気が一気に霧散し、再び笑顔が戻った。アルフは早くそう言えと告げ、リニスもそうならそうと言ってくださいと言いながら、女性向けの文学作品を選んだ。

そんな豹変した二人を見て、ランサーはどこか呆れたように呟いた。

「やっぱ、女ってのはわからねぇ……」

「では、本当に気をつけてな」

「はい。今までお世話になりました」

転送魔法陣に乗り、ユーノは見送りに来てくれた一族全員へ深く

頭を下げた。それを見て、全員が笑みを浮かべる。たった一日だけの帰郷だったが、ユーノの決意と話を聞き、その旅立ちを心から喜んでいたのだ。

中でも部族の長は、ユーノの顔つきを見てその成長を察し、喜びと嬉しさを表情に滲ませていた。

「ユーノよ」

「はい」

「強さを知り、弱さを知り、そして無力さを知った顔をするようになった。今のお前は、自分の出来る事をきちんと理解したようだ」

「……はい」

「もう無理はせんだろう。新たに得た『家族』を大切にな」

「はい！」

「それと、たまには顔を見せにこい。我らも『家族』なのだからな」

「っ……はいっ！」

微笑みと共に告げられた言葉に、ユーノは瞳を潤ませ力強く頷いた。そして、転送魔法を起動させ、ユーノの体が輝き出す。

それを見て口々に別れや激励を送るスクライアの人々。それに笑顔で答えるユーノ。その想いや心遣いに感謝しつつ、ユーノは最後に大声で言った。

「行ってきますっ！」

その言葉に全員が手を振った。それを見て、ユーノは堪えていた涙を流し、大きく手を振り返す。

（僕は幸せ者だ。家族がこんなに大勢いるなんて……本当に幸せだ！）

そんな想いを抱き、ユーノは目元を拭う。その視線は、既に変わった景色を見つめていた。視界に映るはミッドチルダの転送ポート。それを確認し、ユーノは歩き出す。

帰る場所は高町家。でも、もう一つ帰れる場所があった事を改めて教えられた。だからこそ、思うのだ。自分は幸せだと。帰る場所がある。それがどれ程恵まれている事なのかを実感したのだ。

（さて、と……許可はまだ降りないだろうし、クロノへ言って、また何か仕事の手伝いでもさせてもらおう。許可が下りるまで、色々とお金がいるし。ま、きっと雑務が中心だろうけど……）

こうして、ユーノはクロノへ連絡を入れる。そして、すぐに来いと言われ、フェイト達が明日海鳴へ向かう事を知り、ユーノは間に合ってよかったと心から告げ、それにフェイトが顔を赤くする一幕もあったりした。

そして、ユーノは懸念している許可が下りるまでの滞在費等をクロノに相談。それを受けたクロノがユーノに紹介したのは、無限書庫と呼ばれるデータベース。そこの整理を頼んだのだ。いや、正確には仕事に関して求める情報の検索だったのだが。

それにユーノは検索魔法を使い、応えていくのだが、結果として無限書庫の整理をするはめになるのだ。

これをキッカケに、ユーノは天職とも言える職場と出会う事になるのだが、そこで彼が本格的に働く事になるのは、また別の話……

ーーー

帰還編その1　前編

早朝の海浜公園。そこでいつものように鍛錬をしているザフィーラ。その隣では、なのはがセイバーとシグナムの手合わせを見学中。

それが普段の光景となったのは、今から二週間程前。セイバーとシグナムが初めて出会った日の翌日からである。ザフィーラは元々早朝鍛錬をここに決めていて、そこにシグナムが参加したようなものだ。

ちなみに、現在なのはは魔法訓練を夜のみにしている。結界を張ってくれるユーノがいなくなったためと、夜の訓練が実戦形式に変わった事で疲労が増えたのが大きい。

その夜の訓練相手。ヴィータが早起きが嫌だと言った事も理由の一つだったりするのだが……

「高町、お前はどうして強くなろうとしている？」

「ふぇ？」

「主達のように普通でありたいと思わんのか？」

ぼんやりとセイバーとシグナムの試合を眺めていたなのはだったが、ザフィーラに呼びかけられ意識をそちらへ向ける。鍛えられた肉体を動かし、ザフィーラは守護獣という名に恥じない動きを見せている。それに若干目を奪われながら、なのはは答えた。

「えっと……普通って人それぞれだし、それにセイバーの助けになりたいから」

「……助けに」

「私、昔からセイバーに助けてもらってばかりだったんです。だから、魔法の力でセイバーと助け合えたらいいなって」

そのなのはの答えを聞き、ザフィーラは笑みを浮かべる。実になのはらしいと思ったからだ。ただ強さを求めるのではなく、それを誰かのためにと考えるところが。

故に告げる。それがどれ程尊くまた得難い想いかを。自分達がはやてに出会うまで辿り着けなかった”強さ”を、この歳にして抱いたなのはに。ありったけの尊敬の念を込めて。

「……その想い、決して忘れるな。それは、真の強さへ繋がっているだろう」

なのはは、その声が普段よりもどこか優しかったのを感じ、そこに込められた想いを考え、笑顔で答えた。

「ありがとう！　ザフィーラさん」

それに無言でザフィーラは笑みを見せる。その視線の先では、試合が終わったセイバーとシグナムが肩で息をしているのだった……

再会！　そして……

二人の呼吸が落ち着いたのを見計らい、なのは達は公園を後にしようとして――止まった。

即座に目つきが鋭くなるセイバーとシグナム達。なのははそんな三人の様子から、一つの仮定を打ち立て、身構える。

（もしかして……管理局?!）

転送魔法の反応をレイジングハートも感知し、それをなのはが三人へ伝えると、更に三人の表情が強張る。現在蒐集活動は、管理局に気付かれぬように無人世界で細々としている。だが、それでも運の悪ければ気付かれないとは言い切れない。そのため、シグナム達は緊張しているのだが……

「無事にとうちゃ～く……て、あらま、なのは達じゃないかい」

「あ、アルフさん?!」

現れたのは、相変わらずラフな格好をしたアルフだった。その雰囲気からシグナム達も敵ではないと判断し、構えを解いた。

セイバーもどこか驚きながらも、嬉しそうにアルフへ近付いていく。

「お久しぶりです、アルフ。ところで……一人ですか?」

「あ～、フェイト達は今から。まずアタシが偵察で人がいないか確認して、結界張ってから転送って訳」

「あ、そっか。もしかしたら誰か来るかもしれないし」

「そ～そ～、だからまずアタシって訳。いざとなったら狼になって逃げればいいしね。ところで……」

なのはの言葉に笑って答えるアルフだったが、その視線が後ろにいるシグナム達へ向けられる。その目は不思議そうな眼差し。それを察し、セイバーが簡単に魔法を知る友人と説明し、詳しくはフェイト達も含めてと告げた。それにどこか疑問を感じながらも、アルフは頷いて結界を展開。それを合図にしたのか、再びレイジングハートから転送魔法の反応を感知と告げられた。

それと同時にアルフが現れた場所から……

「うし、着いたな」

「ここは……あの公園ですか」

「眠いよ～……」

「もう、アリシアったら……だから早く寝なさいって言ったのに……」

「仕方ないよ。ユーノともしばらく会えなくなるからって、アリシア遅くまで話してたから」

がやがやと五人の人物が現れた。それは、なのはとセイバーにとって再会を待っていた者達。その中にいる少女を確認し、なのはは笑顔で走り出した。

「フェイトちゃんっ！」

その声で全員が視線をなのはへ向け、笑みを浮かべた。そして、フェイトが弾かれるように走り出す。それは、さながら稲妻の如く。

「なのはっ！」

そして、二人は手を取り合い微笑み合う。たった一月にも満たない別離。だがその間、互いの事を忘れた日はない。また会える日を心待ちにしていたのだ。だからこそ、二人は何を言うべきか理解している。

「……ただいま、なのは」

「……おかえり、フェイトちゃん」

互いに瞳を潤ませても、涙は流さない。これは分かっていた事だから、泣くような事ではない。そう思っている二人だったが、それでも感情は正直なもの。涙を流さないでも互いの気持ちを表情と瞳に如実に表していた。

微笑み合い、手を握り合い、何も言わないなのはとフェイト。それを見つめ、笑みを浮かべるセイバー達。事情を詳しく知らないシグナムとザフィーラさえ、その表情には笑みを浮かべていた。

そうして二人が見つめ合っているのを、面白く思わない人物がいた。その人物は、目をパッチリと開け、二人に向かって走り出す。

「も～、わたしもいるよ～！」

アリシアは、そう宣言すると二人へ向かって飛びついた。それを慌てて受け止めようとするなのはとフェイトだったが、流石に小柄なアリシアといえど、加速をつけた上、中々重量もあるので……

「「「わっ！？」」」

そのまま崩れた。なのはとフェイトを下敷きにし、アリシアは少

し気まずそうな表情。だが、それをなのははは特に追求する事もなく、アリシアの方を向いて嬉しそうに言った。

「アリシアちゃんもおかえり」

「うん！　ただいま、なのは！」

「……アリシア、重いよ……」

そんな二人にフェイトは少し困った声でそう告げるのだった……

再会の挨拶も終わり、シグナム達の事を説明しようとするセイバーだったが、自分よりもアーチャーの方が適任と思い、まずはプレシア達の事を先にと告げた。

どうやら、プレシアはリンディの専任嘱託魔導師としてここに来たらしい。そして、役割はリンディとセイバー達との連絡役と、表向きは監視。

その事を話して、プレシアは高町家に挨拶に行きたいと申し出た。住居の問題等を士郎達にお願いするためだという。資金はあっても戸籍がない。そのため、プレシアが頼ったのは士郎の人脈だったのだ。

セイバーはそれを理解し、プレシア達と共に家に戻る事にした。だが、なのはへはフェイトとアリシアを連れて八神家へ行って欲しいと告げる。その理由こそ、はやてにフェイト達の帰還を教えて欲しいとの事だったが、本当はアーチャーに対する連絡の意味合いが強かった。

それをなのはもどこかで理解しているのか、素直に応じ、シグナ

ム達と共に八神家へと向かった。その後ろ姿を見送り、セイバー達は歩き出す。

「あの姉ちゃん達、何もんだ？」

「……それは後でアーチャーから説明を」

「どうやら、また厄介事が起きたみたいだな。にしても……男はともかく、中々良い女じゃねぇか」

そんなランサーの言葉に、ぼそりとリニスが呟いた。

「またそうやって……貴方は私をどれだけ怒らせれば……」

「リニス、少し怖いよ……」

アルフの言葉にプレシアが無言で頷く。リニスはランサーが関わると、偶に人が変わる。それは微笑みを浮かべ、全身から怒りや嫉妬といった負のオーラを纏うのだ。そのキッカケのほとんどが、ランサーが他の女性を誉めたり気にしたりするといった内容。

ちなみに、そうなったリニスを止められるのは現状フェイトとアリシアのみ。プレシアとアルフは、心情的に理解出来るものがあるので止めないのだ。ランサーは……止められるのなら良かったのだろうが……

（これは……また賑やかになりそうです）

そんな後ろのやり取りを聞きながら、セイバーはそう思った。これからは、きっと賑やかで楽しいだろうとも……

「……おかえり、フェイトちゃん、アリシアちゃん」

「ただいま、はやて」

「はやて、ただいま～」

笑顔で答えるフェイトとアリシア。それにはやても心から嬉しそうに二人へ微笑みかける。なのははそれを見つめ、笑顔を浮かべていた。

まだ朝早いにも関わらず、はやてはもう起きていた。聞けば、アーチャーが起きる時間と三十分しか変わらない時間に起きたとの事。何か目が冴えたらしく、はやては虫の知らせだったかもしれないと笑って言った。

「それにしても……」

「知らない人ばっかり……」

フェイトとアリシアは周囲を見回して呟いた。ヴィータはまだ眠そうにしているが、シャマルから牛乳を貰って飲んでおり、シグナムは洗濯物を洗濯機へ入れて、それが終わるのを待っているし、ザフィーラは庭の手入れをしている。

アーチャーはなのは達が来た時二人に軽く挨拶し、フェイトとアリシアへ再会を祝して近々パーティーでもしようと告げて出かけて行った。

「みんな、新しいわたしの家族や」

「……なのはから簡単に聞いたけど、ロストロギア絡みなんだって？」

「そうなんよ。いやぁ～、まさかわたしの家に、そないなもんがあるとは思わんかったわ」

フェイトと話すはやて。どこか苦笑しているが、それにフェイトは笑みを返す。何せ、先程から話しているのは、全てシグナム達の事ばかり。その気持ちを察し、フェイトも感じていたのだ。家族が増えた事が嬉しくて仕方ないと。

そんな二人から少し離れたソファーでは、アリシアがヴィータへ質問中。

「ね、ね、名前は？」

「……ヴィータ、だけど」

「ヴィータだね。わたし、アリシア・テスタロッサ。仲良くしよ、ヴィータ！」

「お、おう……」

明るく天然元気なアリシアのペースに、さしものヴィータも何も言えず、ただ頷くしかなかった。寝起きで思考が覚醒し切っていないのもあるだろうが、それを差し引いてもアリシアのテンションは、ヴィータには驚きの高さだった。

それを見ながら、なのはとシャマルは笑い合う。ヴィータがそんな風にタジタジなのは珍しいからだ。

「ヴィータちゃん、困ってますね」

「そうね。でも、アリシアちゃんは誰とでも仲良くなれそう」

「にゃはは、確かにそうですね。すずかちゃんが羨ましいって言ってました。あんな風に誰とも物怖じせず話したいって」

「そうよね。確かにあれは一種の才能かも……」

そんな風に語り合うなのはとシャマル。その視線の先では、アリシアがヴィータのお気に入りであるヌイグルミを見せられ、変わったウサギだねと言って首を傾げていた。その可愛さに、シャマルが軽く抱きしめようとしてなのはに止められていた。ヴィータとアリシアが仲良く話をしていたからだ。

そんな風にそれぞれが賑やかになる中、シグナムはやや表情が硬かった。フェイト達の母親であるプレシアが、管理局の魔導師である事を聞いていたからだ。

そのためにアーチャーが直接出向いて事情を説明するのだろうが、最悪の場合は戦いになるかもしれないと思っていたからだ。

そんな事を考えたからだろう。シグナムの表情は深刻さを増していた。それに気付いたのは、なのはから解放されたシャマルだった。

【何を考えてるの？】

【いや、最悪の事態をな】

【……大丈夫でしょ。アーチャーが行ったんだから】

あの日、アーチャーと誓いを交わした時からシャマルとヴィータ

は、アーチャーを呼び捨てで呼ぶようになった。それは、家族だからさん付けはおかしいとシャマルが思ったのと、こいつやあいつは流石にどうかとヴィータが考えたため。
まあ、本人は別に好きに呼べばいいと考えているので、何も言わないが。

【それでもだ】

シャマルの言葉に、どこか不信感に近いものを感じているようなシグナムの返事。それを聞き、シャマルは内心ため息を吐くと、やや怒ったように言い切った。

【私達はあの日誓ったはずよ。みんなではやてちゃんの笑顔を守るって！】

【……ああ】

【なら、信じましょう。この家で、アーチャーが一番はやてちゃんの事を大切に思っているんだから……ね？】

【そうだな……そうだった】

シャマルの言葉にシグナムもまた思い出す。自分達がいない間、はやてを支え続けたのは誰だったか。今の自分達があるのははやてと誰の影響か。それらを思い出し、シグナムは感謝と謝罪の想いを込めて告げた。

【シャマル、すまんな。私らしからぬ言葉だった。気付かせてくれて助かった……礼を言う】

【どう致しまして。でも、当然の事でしょ？　私達、家族なんだもの】

その答えにシグナムは軽く驚き、思わず視線をシャマルへ向けた。すると、シャマルはシグナムに対して微笑みながらウインク一つ。

それにシグナムは呆気に取られるも、小さく笑みを浮かべた。以前のシャマルならそんな事はしなかった。はやて達との暮らしが、ただのプログラムに過ぎなかった自分達を変えた。それを思い、シグナムは願う。アーチャーが吉報を持って帰ると信じて。

その頃、高町家では、アーチャーがセイバー達を交え、プレシア達に現状の説明と理解を求めていたのだが……

「そう……闇の書、ね」

「知っているのか？」

「リンディさんの旦那さんが殉職したのは覚えている？」

そのプレシアの問いかけに頷くアーチャー。確かにその話をアーチャー達は知っている。プレシアとリンディの二人が互いの過去を話していた時、彼らはそこにいたのだから。

彼女は言った。自分も、あるロストロギア絡みの事件で夫を失ったと。そして、それを思い出した時、アーチャーだけでなく、セイバーやランサーまでも表情を変えた。

「まさか……」

「そう。旦那さんを失った事件の原因。それが、闇の書よ」

プレシアの口から告げられた事実は、あまりに重かった。はやてに家族を与え、リンディ達から家族を奪ったものが同じ存在。それは、闇の書の事をリンディ達に理解を得るのは厳しいという事だ。それを理解し、アーチャーの表情が曇る。彼の中では、最悪の場合、リンディ達にも多少の理解を得て、管理局と交渉するつもりだったからだ。

だが、事実を知った以上、その多少すら危うい。自分の愛しい者を奪った物を、いきなり許す事が出来る程、人間とは強くないのだ。

（これは不味いな。リンディ艦長達の協力が得られないとなると、別の方法を模索するしかないか……）

アーチャーの中で組み上げられていた計画が綺麗に消える。だが、それ以外にもまだ策はある。それには、何とかしてプレシアだけでも理解を求めなければならない。

そう結論付け、アーチャーは視線をプレシアへ向けた。だが、視線の先でプレシアは苦笑いを浮かべていた。

「……どうしたのだ」

「私からは、リンディさんに闇の書の事を言わないわ」

「そういう事か……」

「ええ。そういう事よ」

プレシアの言葉に疑問を感じたのはアルフのみ。他の者達は、プレシアの言いたい事を理解していた。プレシアからは言わない。そ

れは尋ねられない限り教えないという事。それを知ればリンディも怒るかもしれないが、プレシアにとって、はやてとアーチャーは娘の親友とその恩人。悪いが現状では、リンディと比べれば、はやて達を取らざるを得ない。

管理局を首になってもいいと言うのもある。何せ稼ぎに関しても、プレシアはその気になれば、研究者としてまだ現役で働けるのだ。しかし、親しくなったリンディに何も思っていない訳ではなく……

（ごめんなさいね、リンディさん。このお詫びは必ずするわ……）

赴任して早々の厳罰行為だが、プレシアは後悔はしていない。そして、アーチャーへリンディへの謝罪とばかりにこう告げた。

「でも、必ず貴方からリンディさんに事情の説明と理解を求めて。いつはやてちゃん達の事を知られるとも限らないのだから」

「……心得ている。そして、配慮に感謝する」

「いいのよ。はやてちゃんや貴方、それに高町さん達がそう言うのだから、今回の闇の書は安全なんでしょう。

でも、確かに気になるのも事実ね……完成後が分からないのは」

プレシアの言葉に空気が僅かに重くなる。それは、誰もが感じている事なのだ。そして、ここに来てプレシアが語った話が、アーチャーの中で一つの可能性を見せた。

（闇の書が原因で命を落とした、か。その原因が蒐集ではなく、他によるものだとしたら……完成後に待つものは、やはり……）

（闇の書、か。リンディさんへ報告出来ないけど……何か私なりに

手は打てないかしら）

二人の想いは違えども、それが目指すものは一つ。少女達が笑顔でいられるため。この時間を守るために、自分達が出来る最善を尽くそうと思っているのだ。

そして、それは二人だけではない。セイバー達は勿論の事、ランサーにリニスやアルフも同じ想いなのだ。

（ったく、少し留守にしただけでこれかよ……退屈しないな、おい。とりあえず、色々とやる事が多そうだな、こいつは）

（リンディさん達の理解を得られればいいのですが、それが出来れば苦労はないですね……）

（頭を使うのは苦手だけど、何とかするしかないか。とりあえず、アタシはフェイト達の傍にいるのが一番いいかね？）

来たる事態に不謹慎ながら心躍らせる者。主人と同じく何か手はないかと知恵を絞る者。自分の苦手を理解し、無難な所へ落ち着く者。それぞれがそれぞれなりに思いを巡らし、最悪に備える。自らの最善を尽くし、守るべき者達を守るために……

そして、再会を果たす者達は他にも……

「……あれ？　なのはちゃんからメールだ」

「ん……？　メール？　……なのはか……何よ、こんな朝から」

「「フェイト（ちゃん）達が帰ってきた！？」」

戻りしは槍騎士とその家族達。それが齎すは次なる流れ。今はまだ、その結末を誰も知らない……

――――――

帰還編その1　中編

いつものように小次郎は、高町家での鍛錬をするため道場へと姿を見せたのだが、そこにいるはずのセイバーがいない事に気付いた。そして、美由希から告げられた答えに、小次郎は苦笑を浮かべた。アリサがそれをなのはから聞けば、八神家に飛んで行くと思ったからだ。故に美由希達へこう言った。

「今日は道場の掃除をさせてもらえぬだろうか。どうもありさの護衛はいらぬとみえる」

「あたしは構わないって言うか、むしろ嬉しいですよ」

「掃除もいいですけど、いっそ試合回数を増やしませんか？」

「俺もその方が……まぁ、小次郎さん次第ですかね」

「そうか。なら、今日は少し長居しよう」

士郎達の言葉に小次郎は軽く笑みを浮かべ、木刀を手にした。そして、恭也がそれに呼応し、小太刀を構える。美由希と士郎は即座に離れ、それを見守る位置へ移動した。

張り詰める空気。それに伴い二人の気迫も静かに高まっていく。その雰囲気に美由希は思う。未だに小次郎の限界が見えないと。腕前は確かに凄い。だが、その全てを見た事はないのだ。

父である士郎が”天才剣士”と断言する程の腕。単純な剣技だけでも超一流にも関わらず、小次郎を天才と言わしめるのは”秘剣燕返し”の存在。同時に三発もの斬撃を繰り出す技。回避はセイバーでさえ容易ではなく、防ぐ事もままならない。

（いつか……あたしも小次郎さんのように辿り着きたいな、自分だけの”閃”に……）

それは御神の最終奥義と呼ばれるもの。いや、本当は技とも呼べるか分からぬもの。その名は”閃”。それを繰り出す事は、即ち勝利と同義であると言われる境地。

その存在を士郎から聞かされ、恭也と美由希は小次郎の”燕返し”がそれに近いものだと考えていた。それを出すと決めた瞬間、勝負を決する技。それは、今の二人にとって燕返しが一番適切な目標だったのだ。

（でも、あたし達が目指すのは燕返しじゃない。あれと同じ”極め技”の習得なんだから……）

美由希の視線の先では、小次郎が鮮やかな剣閃で恭也を翻弄している。それを眺め、美由希は思う。昔、恭也に抱いていた淡い恋慕。それが今は小次郎へと変わった事を。そして、それは既に淡いものではない事を。だからこそ、切なげに小さく呟く。

――負けないで、小次郎さん。

それは剣士ではなく、一人の女としての言葉。高町美由希。彼女もまた、恋に生きる道を歩んでいた……

「すずか？　アタシよ。ごめんね、こんな……そう！　フェイト達が帰って来たって」

「うん。だから、これからはやてちゃん家に行こうと……そう……分かった」

電話をかけ終え、互いに思う事はただ一つ。早くフェイト達に会いたい。そのためにアリサは鮫島へ車を出すように告げ、すずかはノエル達に事情を説明し、アリサを待つ。

そんな二人をそれぞれの傍付きは微笑み混じりで呟く。子供らしくて結構です、と。

一方、なのはは困っていた。そろそろ自宅に戻るべきか否か。フェイト達はこのまま残っていてもいいだろうが、自分は学校がある。その用意もあるし、着替えなければならないのだ。

そして……

（お腹すいたなぁ……）

そう、朝食である。はやて達は気にしないだろうが、なのはにすれば、親友とはいえ人様の家でご飯を頂くのは、やはり気が引けるのだ。それに、今日はフェイト達もいる。ならば、自分は自宅へ戻り、家族達と食べるべきだと思ったのだ。

だから、なのはは携帯を取り出し、電話帳の一つであるセイバーを選択し……

「……あ、セイバー？　うん。私そろそろ帰るから……フェイトち

ゃん達？　いるよ？」

「どうしたの、なのは？」

「何～？」

自分達が呼ばれたので、フェイトとアリシアがなのはの近くへ寄ってきた。それになのはは電話を耳に当てたまま、少し驚いて告げた。

何でも、今日はこのままプレシア達は高町家で朝食を食べていくので、フェイト達は申し訳ないが八神家で食べてほしいとの事。ちなみにアーチャーから許可は出ているので、はやては好きに材料を使っていいらしく、それを聞き、はやてが燃えていた。

なのはの制服や鞄は、食事が終わり次第アルフが持ってきてくれるとの事だった。

「……だって」

「よっしゃ！　なら早速支度せな。シャマル、手伝ってな」

「は～い」

意気込んでキッチンへ向かうはやてと楽しそうに追うシャマル。ヴィータとシグナムはそんなシャマルへ揃って一言。

「「味付けはするな」」

「何でよっ！？」

心の底から頼むと言わんばかりの表情で告げる二人に対し、シャ

マルは憮然とした表情を返す。そこから始まる簡単な口論。
あの時、お前が手を出したからとシグナムが言えば、だって美味しくなると思ったんだもんと返すシャマル。それにヴィータが、何で自分で味見しね～んだよと答えてシャマルが言葉に詰まる。
そんな言い合う三人のやり取りを、不思議そうに見つめるなのは達。そこへ庭の掃除を終えたザフィーラが近寄り、静かに告げた。

「シャマルは以前、味付けで失敗してな」

「「「あ～……」」」

その一言に納得する三人。そして、どこか慰めるような視線をシャマルへ向けた。それにシャマルも気付き、瞳に涙を浮かべて言った。

――私、味音痴じゃないもん！！

その言葉にはやてだけが頷き、ピシャリと言った。

「とりあえず、手動かそうな」

その指摘に、シャマルは涙目になりながらも、無言で野菜を切り始めるのだった……

一方の高町家では、珍しい光景が展開されていた。桃子はのんびりとソファーに座り、プレシアと談笑中。アルフはランサーやセイバーと共にテレビを観賞している。そして、キッチンでは……

「こちらはもう仕上がる」

「こちらもそろそろ終わります」

アーチャーとリニスによる朝食準備が行なわれていた。そのアーチャーの動きに一切の無駄がないのを感じ、リニスは驚くと同時に感心していた。たった一人で、大所帯となった八神家やなのは達との行事で料理を作っていたアーチャー。その凄さの一端を見せられ、リニスは感激したのだ。

（この人から教えてもらえば、私も今以上にランサーを喜ばせるでしょうか……）

その脳裏に浮かぶは最愛の漢。自分を欲しいと言い切ったリニスにとっての英雄。

「よし、これで終わったか」

「……ですね。アルフ、ランサー、運んでください」

「「「待ってました！」」」

リニスの一言に立ち上がる二人。何故かセイバーもそれに続くように立ち上がる。そんな三人に苦笑するアーチャーとリニス。プレシアと桃子は微笑みさえ浮かべている。

桃子達が話していたのはフェイト達の事。学校に行かせるか否かだった。それも含めて士郎の人脈を使う事になるのだろうが、問題が一つあった。

それは、はやての事。フェイト達が聖祥に入学するとなると、はやてだけが学校に行けない事になる。それをフェイト達も気にする

だろうと、二人は考えた。そのため、色々と意見を出しては見たのだが、結局本人達に委ねる事で決着をみた。

「お～っ！」

「旨そうだねぇ」

「リニスの料理は初めてですが、期待してよさそうですね」

料理の載った皿を運ぶ三人だが、その視線は皿に注がれている。匂いが空腹を否応無く刺激し、三人は今にも食べてしまいそうな表情を浮かべていた。

そんな三人とは対照的に、桃子とプレシアはその量に苦笑気味だった。何しろセイバーだけでなく、ランサーとアルフも良く食べるのだ。故にその量が凄まじい事になっている。しかも、これでも士郎達道場組の分はないのだから恐れ入る。

「さ、早く食べてくれ。私は士郎達の分を用意せねばならんのだから」

「あ、アーチャーさん。あの人達の分は私が」

アーチャーの言葉に桃子がそう言うが、アーチャーは自分一人でいいと告げ、キッチンへ戻ってしまう。そんなアーチャーに感謝を述べ、桃子はプレシアと共に食べ始めた。既にランサーとアルフは奪い合うように食べており、セイバーはそれとは違う形で奪うように食べている。そして、リニスはそんなランサー達を見て、ため息を吐くのだった……

「もう、ビックリしたわよ。何せ、朝早くなのはからメールってだけでも珍しいのに」

「フェイトちゃん達が帰って来たって書いてあったからね。でも、嬉しかった」

「アリサ、すずか……」

「えへ、わたしもまた会えて嬉しいよ」

八神家のリビングには、制服姿のアリサとすずかがいた。鮫島運転の車で現れた二人は、はやて達への挨拶もそこそこに、フェイト達へ駆け寄ったのだ。どうやら朝食も食べずに、ここから学校へ向かうつもりで来たらしく、なのははそれを聞いて苦笑い。自分はきっちり朝食を食べ、制服等を持って来てもらう算段になっていたからだ。

だが、そんな二人の話を聞いて、はやてが見過ごすはずもなく……

「なら、二人分追加やな。ちょちょいと作ったるから」

そう笑顔で言って再び調理開始。それにアリサ達は何か言おうとして、互いに顔を見つめ合って苦笑する。

「「ありがとう、はやて（ちゃん）」」

「どう致しましてや」

二人は遠慮するより感謝するべきと思ったのだ。そして、その考えを理解し合って苦笑を浮かべた。そんな二人の気持ちを知ってい

ると言わんばかりにはやては笑う。それになのは達も笑顔を浮かべ、はやての手伝いをするべく動き出す。食器を出し、並べる。またはテーブルを拭いたりした。

そんななのは達を見つめ、シグナム達は笑みを浮かべた。親友であるフェイトとアリシア。その二人と再会し、なのは達が余計に輝いたように思えたからだ。

そんな風に笑うシグナム達を見て、なのはも思う。これから楽しい事がまた増えるだろうと。だからこそ、なのはは考える。どうすればリンディ達とシグナム達が笑い会えるようになるかを。

フェイトの話では、リンディ達もまた地球に来るかもしれないとの事。その時までに何とか和解出来る方法を思いつかなければ、と思う。

（みんなで……笑っていたいもんね）

そう心で呟き、なのはは思いつく。自分も蒐集を手伝おうと。管制人格が起動すれば、もしもの時、セイバー達が打てる手が増えるはず。そして、それはリンディ達が心配する事態を軽減する事にもなるだろうと。そう考え、少しでも早くそれを実現させるべきだと思ったのだ。

そして何より……

（はやてちゃんの家族が増えるんだもんね）

どんな人かは知らないが、きっとシグナム達と同じで、優しい人だろうとなのはは思った。その人とも笑い合えるように、自分も出来るだけの手伝いをしたい。だから、なのはは告げた。

【ヴィータちゃん】

【どうした？　何かあったか？】

突然の念話に思い当たる事がないヴィータは、不思議そうに声を返す。

【あのね……私も蒐集お手伝いしたくて】

【はぁ～？！　……マジで言ってんのか】

【うん。管制人格さんを、早くはやてちゃんに会わせてあげたいの】

【……そっか。シグナム、聞いてるか？】

なのはの決意が本物と分かり、ヴィータはリーダーであるシグナムへ伺いを立てる。それは、なのはを参加させるか否かを決めるだけではない。蒐集に加わるというのは、最悪犯罪行為に手を貸したと取られかねないからだ。

それを知るヴィータだからこそ、なのはを心配していた。だが、自分がそれを断ったとしても、なのはは納得しない事も理解していた。だからシグナムに聞くのだ。なのはが納得するように。蒐集のリーダーであるシグナムが断れば、なのはも諦めざるを得ないと思って。

【どうした？】

【なのはが蒐集手伝いたいんだってさ】

【お願いです。私も手伝わせてください】

【……本気なのか】

【……はい】

シグナムのどこか鋭い声色に、なのはは若干怯みそうになるものの、しっかりとそう答えた。その声に自分の想いを込めて。それを感じ取ったのか、シグナムはしばし黙り、ヴィータへこう問いかけた。

【ヴィータ、高町の力量はどうだ？】

【……下手すりゃ、あたしと良い勝負出来るぐらいは……ってシグナム？】

【高町、蒐集を手伝うのは休日だけでいい。それと、主や家族との予定が入ればそちらを優先しろ】

【シグナムさん……】

【お前の気持ち、確かに受け取った……感謝する】

そう言ってシグナムは洗濯籠を抱えて庭へと向かった。その後姿を眺め、なのはは小さく頭を下げる。それに気付いたフェイトが、その理由をなのはに尋ねるが、なのははシグナムにある事で世話になるから、お礼を述べたらついしてしまったと答えた。

それを詳しく聞こうとするフェイトだったが、そこにはやてとシャマルが料理を運んできたので、そちらへ意識が向いた。なのはもそれに目を輝かせてテーブルへ向かう。

ヴィータとザフィーラはそんなのは達を眺め、小さく苦笑した。

【まさか……蒐集を手伝いたいとはな】

【初めてだよな……こんな事】

【あら、初めてなのは、はやてちゃんと出会った時からずっとでしょ】

そこへシャマルが加わってきた。ちゃんとはやて達と会話しながら念話をこなしている。シャマルの言葉に二人も納得し、内心頷いた。確かにはやてと出会った時から初めてづくしだった。蒐集禁止に家族発言。他者に消滅の心配をされたり、友人や他者との繋がりなど挙げればキリがない。

何より、念話などなくても互いの気持ちを分かり合える等と、以前の自分達では考えられなかったのだ。それを聞いたアーチャーは、どこか微笑みながら言ったのだ。

――心を動かすようになったからだろう。相手を思いやり、分かろうとする気持ち。それが以前はなかったのでは？

その言葉に全員が納得し、そして思った。はやてとアーチャーがその下地を作ってくれたのだと。そこで、シグナムは感謝の気持ちを伝えようとしたが、それを止めた。何故なら、それは口に出すのではなく、行動で示すものだと考えたから。そして、それはシャマル達も同様だった。

だからこそ、四人は思い思いに今を謳歌している。かつて犯した罪。それを忘れた訳ではない。だが、それに囚われ、苦しむ姿を見せても誰も浮かばれない。本当の償い。それは、死した者達の分まで生きる事。その罪を忘れず、哀悼の意を抱き続けて生きる事。

そう四人は思うからこそ、懸命に生きる。プログラムに過ぎない

かもしれないが、それでも心ある限り、はやて達と共に生きていこうと。

【あたしら……幸せだな】

【ああ。だからこそ、主達を守るのだ】

【そう、この心を、温もりを教えてくれたはやてちゃん達に……応えるために】

噛み締めるようなヴィータの言葉に、ザフィーラが続く。それを受け、シャマルが繋いだ言葉に二人が笑みを浮かべて応じた。

優しさに目覚めし騎士達。再会を果たした少女達。そして、再び動き出す英霊達。

それら全ては、みんなの笑顔に繋がっていく……

――

なのは蒐集活動に参加。でも、それは本当にお手伝いレベル。シグナムの姐さんらしさの提案ですね。

これが蒐集に大きく影響する事はないですが、周囲には影響を与え

る事になります。

夏までに管制人格は起動出来るのか。起動した時、何が待っているのか。それはまだ分からないです。

帰還編その1　後編

朝食を終えたなのはは、転送魔法で現れたアルフから制服と鞄を受け取り、着替えてアリサ達と学校へと向かった。それをフェイト達は見送って、久方振りの再会を喜びながら土産話をと思ったのだが……

「あのねフェイト。お母さんが呼んでんだよ。アリシアと一緒に話があるからって」

「母さんが？」

「何だろ？」

アルフに告げられた言葉に、揃って疑問符を浮かべるフェイトとアリシア。その微笑ましい光景に笑みを見せるシャマルとはやて。シグナムは一瞬自分達の事かと思ったが、アルフの雰囲気から違うと判断し、ほっとしていた。

ヴィータはそんなシグナムに微かに笑い「心配性だな」と呟いた。それを聞いたザフィーラが「将という立場故、あらゆる事に気を配るのは突然だ」とシグナムを援護した。

そんなやり取りを他所にアルフはフェイト達にこう言った。多分、これからの事だろうと。

（これから……か）

その言葉にフェイトは思う。魔法を使わない世界。それがどんなモノになるかは分からないが、自分はそれを心待ちにしていたのだ。不安はなく、恐れもない。あるのはただ、親友達や家族と平和に過

ごせるという嬉しさだけ。

（アリシアやリニス、母さんにアルフ……そして……）

思い浮かぶは愛する家族の笑顔。全てがフェイトの宝物。心から守りたいと想うもの。その全てをくれたのは……

（ランサーが……私にそれをくれたんだ）

本人が聞けば笑って否定するだろう。それはフェイトが掴んだ結果だと。だが、それでもフェイトは断言する。今の自分達があるのはランサーのおかげだと。

そんな敬愛する師にも似た存在の事を想い、フェイトは笑う。いつか自分がランサーを助けるのだと。それがいつになるか、また訪れるか分からないが、出会った日、ランサーが自分達の希望になったように、今度はランサーの希望に自分がなろうと。

そう心に決めてフェイトはアリシアへ視線を移す。

「じゃ、とりあえずなのはの家に行こう」

「うん。なのはのお家楽しみだな～」

太陽のように笑ってアリシアはそう言った。それにつられるようにフェイトも笑う。太陽と月。そんな言葉がピッタリくる程、その笑顔は輝いていた。

姉として、友として

はやて達にまた後でと告げ、フェイト達三人は高町家へと向かった。歩きながら、アルフはアーチャーから聞いた事を二人に話した。それを聞いてフェイト達もなのは達から聞いた事を話す。その互いの話を交換し、フェイトははやて達が置かれている状況を考え、軽く頭を抱えた。

フェイトはプレシアがリンディから依頼を受け、ここ地球にいる事を理解している。それにも関わらず、安全とはいえロストロギアを黙認する事になってしまった。

更に悪いのは、そのロストロギアはリンディとクロノの家族を奪った原因。それを知れば、リンディ達がどう思うかなど分かり切っている。だが、それ故にリンディ達には言えないのも分かるのだ。

（はやて、あんなに楽しそうだった……）

かつて自分達が暮らしていた時と同じぐらい、はやては楽しそうに笑っていた。その理由が、闇の書から現れた守護騎士達なのは誰でも分かる。リンディ達に闇の書の事を教えるのは、はやてからその家族を奪う事にも繋がる。それを自分に置き換えれば、決して出来るはずがない。

それはきっとプレシアも同じだとフェイトは考えていた。アリシアを失った事がプレシアの中でどれ程大きな痛手だったか。それを知るプレシアならば、はやてが家族として大切に想うシグナム達を守ろうと思わないはずがない。

（母さんも、リニスもそう。きっと、みんな同じ気持ちのはず……）

だからこそ、フェイトはそう思ってアリシアの手を握る。その温もりが、どれだけ自分の心を癒してくれたかを知っているから。ミ

ッドへ戻っている間、フェイトはアリシアと二人でよく出かけたものだ。プレシアが嘱託試験のために忙しくなったため、リニスやアルフはそれを支えるために走り回り、ランサーは世話になっているリンディ達の協力で、よく傍を離れていたからだ。
仕事がない時や暇を見つけてクロノが相手をしてくれたが、基本二人で行動する事が多かった。

「どうしたの、フェイト？」

「ちょっと……アリシアと手を繋ぎたくて……」

「そうなんだ。わたし、フェイトと手を繋ぐの好きだよ。何か落ち着く気がするから」

「私も。アリシアといると暖かい気持ちになれるから」

「同じだね」

「うん。同じだね」

そう言ってどちらともなく笑い出す。何故かこんな他愛ないやり取りがとても愛おしくて。そんな二人を眺め、アルフも笑みを浮かべる。その光景が本来なら有り得なかった事を思い出し、改めて感じていたのだ。
自分達が”奇跡”を目にしている事を。

（時々忘れそうになるけど、これって凄い事なんだよねぇ……）

共に笑い合うフェイト達。繋ぎあう手と手。その何でもない事がとても尊く見え、アルフは流れそうになる涙を密かに拭った。

「……ちょっと二人共。アタシを除け者にしないでおくれよ」

「あ、えっと……そんなつもりじゃ……」

「そうだよ。アルフが話に参加しないから悪いんだよ？」

「あ、アリシア……」

「む～、なら参加させてもらうよ。で、何を話してたんだい？」

「あのね～……」

先程までのしんみりした気分を吹き飛ばすように、アルフは二人へ声を掛ける。それにどこか申し訳なさそうなフェイトだったが、アリシアはそれとは逆に悪いのはアルフと告げた。それにフェイトが慌てるも、アルフは怒るのではなく、むしろ嬉しそうに二人へ近付いた。

それにアリシアは素直に応じ、フェイトの手を離してアルフを手招きした。それにアルフが応え、フェイトとアリシアの間に入り……

「わたしはこっち。逆はフェイトね」

アルフの手を掴んだ。それに軽く驚くもアルフは内心喜びに満ち溢れていた。フェイトだけでなく、アリシアとも繋がっている。そんな感じを受けたからだ。

伝わる体温がアルフへ伝わる。大切な家族だとそう言っているように、アルフは感じてその手を握り返す。もう一方にフェイトの手の温もりを感じ、アルフは改めて誓う。全てを賭してこの温もりを守ると。この身は使い魔なれど、家族と呼んでくれる少女達のため

に戦おうと。
　例えその相手が神や悪魔であろうとも……
「フェイト、アリシア、アタシが何があっても絶対守ってみせるからね」
「？　う、うん。頼りにしてるね、アルフ」
「わたしもアルフを守るからね。一緒に頑張ろ、お～！」
「お～！」
「お～……」
　どこか恥ずかしそうなフェイトの声に、アリシアが笑い出し、アルフも笑う。それに照れていたフェイトも、楽しそうに笑う二人に影響され、段々笑顔になっていく。そして、ついに笑い出し、三人は揃って笑みを浮かべる。
　柔らかく穏やかな日差しの中、三人の笑い声が空高く響いた……

　フェイト達が高町家に向かっている頃、アーチャーは士郎達と入れ替わりに、ランサーを伴って道場で鍛錬をしていた。実は蒐集を手伝った際、動きが若干鈍っているような気がしたのだ。
　そのため、彼は手近にいたランサーを捕まえ、対戦相手としたのだが……
（くっ！　以前よりも速い。これは……いかんな）

その神速の槍捌きに、アーチャーは防戦一方。以前と同じように敢えて隙を作り、そこに攻撃をさせる戦法を取っているのだが、ランサーの方もそれを熟知した上で、恐ろしい対抗策を打ってきたのだ。

それは、その隙へ以前よりも速いフェイントを混ぜるというもの。当然といってしまえばそこまでだが、その単純な攻撃一つ一つが必殺なのだ。それが虚か実かアーチャーには判断のしようがない。

そのまま捌けばいいのだろうが、フェイントに手を出せば、それが本当に致命的な隙となる。だが、それが本当に当てにきたものなら対応しなければならない。そんな判断を延々繰り返し、アーチャーは悟る。ランサーが狙っているのは、自分の精神の疲弊だと。

「どうした。前よりも動きが鈍いぞ」

「何分戦場から遠ざかっていたものでな。どうやら錆び付いたらしい」

「けっ！　よく言うぜ。それでも俺の攻撃を防いでるじゃねえか」

「何、まぐれにすぎん。私としては、このまま終わりたいのだが……」

「すると思うか？」

「……だからこうして構えている」

ため息混じりのアーチャーの答え。それを合図に再び始まる刹那の戦い。先程と同じ事を繰り返し、互いに一歩も譲らない。攻め続けるランサーに防ぎ続けるアーチャー。しかし、僅かにランサーが押していたため、このままランサーがアーチャーを押し切ると思わ

れた。だが……

（んだとっ?!）

それまでランサーのフェイントを苦労しながら対処していたアーチャーが、何か悟ったかのようにフェイントを見切ったのだ。それも一度ではなく、何度もだ。ランサーの繰り出す攻撃を確かに見極め、アーチャーは笑ったのだ。

何度やってもアーチャーはフェイントには手を出さず、本命は確実に防ぐ。それを何十合と繰り返し、ランサーは一度槍を引いた。それにアーチャーも応え、双剣を下ろした。

「何故、と言いたそうな顔だな」

「……どうして分かるようになった」

「何、フェイントを繰り出す際の体の動きに注目しただけだ」

「……まさか、俺の体の動きから……」

「正確には、君の筋肉への力の入れ方か。力の入れ具合が僅かに異なるのだ。それに気付ければ、何て事はない」

アーチャーは言った。ランサーのフェイントはギリギリまで本命と変わらない。だからこそ、余計に違いが出るのだと。そう、いつも通りにしようとどこかで意識するためか、筋肉への力の入り方が若干変わるのだろうと。それに気付くまでに大分時間が掛かったが、これでもうフェイントには翻弄されない。そう言って、アーチャーは双剣を消した。

「付き合ってくれて助かった。礼を言う」

「……ま、俺もそれなりに楽しかったぜ。またやるか？」

「悪いが遠慮する。次にやる時は、小次郎にでも頼む事にしよう」

「付き合いの悪い奴だぜ……」

そう言ってランサーは、その手を軽くアーチャーへ振りながら道場から出て行く。そんなランサーに苦笑し、アーチャーは道場の掃除を始める。その顔には、どこか楽しそうな笑みが浮かんでいた……

「だから、学校へ行ってみない？」

「……学校」

プレシアの口から出たのは、フェイトもなのは達と同じ聖祥大付属小学校へ編入しないかというもの。それを聞いて、勉強が苦手なアリシアはどこか嫌そうな表情だったが、フェイトはなのは達と同じ時間を共に過ごせる事を考え、表情は綻んでいた。

そんなフェイトへアリシアがふと呟いた。その内容に、フェイトの笑みは消え失せる事になる。

「でも……そうしたらはやてだけ学校行ってないよ？」

「っ！？」

フェイトを責めるのではなく、純粋に思った事を口にしただけ。

そう分かっていても、フェイトは心を締め付けられるような感じを受けた。

ＪＳ事件の際、はやてと共に過ごした日々。その中ではやては確かに言っていたのだ。自分も早く歩けるようになって、なのは達と同じ学校に行きたいと。

それを思い出し、フェイトは自分の薄情さを恨んだ。自分だけなのは達と同じ学校へ行って、親友のはやてだけに寂しい想いをさせようとしていた事に。

（ダメだ。私は行けない……はやてを一人には出来ない）

そう思って、フェイトは意を決してプレシアへその旨を伝えようとして――出来なかった。

「ママ、わたし学校行かない」

「えっ……アリシア……？」

「そう。勉強が嫌いだから？」

「ううん、そうじゃないよ。わたし、フェイトよりもお勉強苦手だから、なのは達と一緒だと、余計楽しくてお勉強しないと思うの。だから、わたしは学校行かない。でも、それだとママ達に怒られるから、はやてと一緒に勉強する。それで、その日のはやてとの出来事をフェイトにお話しするから、代わりにフェイトは、なのは達と一緒に学校行って、その日の事をお話しして」

そのアリシアの言葉にフェイトが一番驚いた。まるで、自分が考えた事を見透かしたような発言だったからだ。それだけではない。アリシアは、フェイトへいつもの優しい声ではなく、どこか諭すよ

うな声でそう言ったのだ。友達としてはやてを一人には出来ない。でも、フェイトがなのは達と一緒に居たいと分かっている。

そのフェイトの気持ちを汲んで、アリシアが言ったのだ。自分がはやての傍で頑張るから、フェイトはなのは達の傍で頑張って、と。

そんな風に思い、フェイトはアリシアを見つめる。それを受けたアリシアから、フェイトは微笑みながらこう言われたような気がした。

――わたし、お姉ちゃんだもん。フェイトは我慢しないの。お姉ちゃんに甘えていいからね！

――アリシア……うん。ありがとう、姉さん。

それにフェイトも心でそう答えた。それが本当にアリシアが思った言葉なのかは分からない。でも、確かにあの時のアリシアの言葉は、そんな想いだったとフェイトは思った。

何も言わず微笑み合うフェイトとアリシア。それを見て、プレシア達は事情が分からないまでも笑顔を浮かべる。

「アリシア、私、頑張るから」

「うん。わたしも頑張って勉強するね」

そう言い合って、二人は笑う。その笑顔は、本当に似ているようで違う輝きを放っていた……

これを聞いたなのは達は、フェイトの編入を喜び、はやては、共に勉強する相手を得た事に喜んだ。

そして、八神家にリニスという家庭教師も来る事が決まり、アリシアはどこか嫌そうな顔をしたとか……

――――――

番外編　マスター達とリリカルまじかる頑張ります2

「まさか……なぁ」

「こうも簡単に会えるとは、ね」

「思いませんでしたね」

場所は翠屋。士郎は仕事中だったのだが、そこにはやてを伴った凛が現れ、それに硬直していると、更にすずかと桜が現れたのだ。そして、何か事情があると判断してくれた恭也や美由希のおかげで、こうして店の一角で話をしていた。

はやてはすずかと仲良くなり、士郎がなのはを呼び出して家で遊ぶように言うと、はやてやすずかと多少ぎこちなくではあるが嬉しそうに頷いた。そして、士郎達という共通点もあるためか、その話をしながら高町家へ向かったのだ。

「……こうなると、あの時にいた人間は全員来てる可能性が高いわ」

「イリヤちゃんやバゼットさんは不安ないですけど……」

「カレンもないぞ。てか、カレンの場合は違う意味で不安だ」

「後は誰かしら。藤村先生はセイバーと一緒に商店街へ行ってたし……」

「セラさん達はイリヤちゃんのためのお泊りセットを取りに行ってましたから」

「……あ、キャスターだ。お邪魔するわって聞こえたから」

士郎の言葉に凛は頭を抱えた。問題がある相手は多いが、中でもキャスターは別格だった。彼女は英霊。それもキャスターのサーヴァントだ。並みの魔術師では互角どころか、一撃浴びせる事さえ厳しい。そんな存在が、この魔術のない世界にいる。

そう考えるだけで、不安が起きるのだ。ここが魔術の使えない世界ならある意味良かっただろう。それなら彼女も不思議な雰囲気を持つ女性に過ぎないのだから。

だが、ここは魔術がないのに魔術が使えるのだ。それは、ここに来れた事からも明らか。ちなみに、凛はこの世界にきてまず試したのは、自宅への電話。次に衛宮家と思いつく限りの場所を調べ、当たってみたが、分かったのはここが並行世界ではなく、完全な異世界であるという事だけだった。

「……とりあえず今は魔力を辿って、調べるしかないわ」

「それなんですけど、実は私がお世話になってるお家がどうも霊脈に建ってるんです」

その言葉に凛が目を輝かせた。霊脈を使えば、この町に監視の目を張り巡らせる事が出来る。そうなれば調査がかなり楽になる。そう考えたからだ。しかし、そんな凛の考えを桜も分かったのか、申し訳なさそうに告げたのだ。

誰かによって、既に抑えられた後なのだと。それを聞いて二人の表情が一変する。それはつまり誰か魔術師がいるという事。そしてそれは、ほぼ自分達の知り合いである可能性が高いからだ。

「残ってる可能性はイリヤかキャスターね。どちらにしろ手が借り

られれば助かるわね」

「なら、そっちは遠坂に任せる。俺は、桃子さん達の手伝いがあるから」

「先輩、ここでお世話になってるんですか？」

桜の問いかけに士郎は頷いた。行く当てもなく、怪しい自分を高町家の人たちは受け入れ、面倒を見てくれた。今、なのはの父親である高町士郎が重体で、その看病を妻である桃子がしているため、店を手伝う事にしたのだ。

士郎がそう告げると、二人は少し笑みを見せる。士郎らしいと思ったのだろう。だからこそ、凛は良い事を思いついたとこう告げた。自分も店を手伝う。その間はやてはなのはと遊んでもらう。そうすれば、二人も寂しくないし、士郎の負担も減ると。

それを聞いて士郎は嬉しそうな表情を見せるが、判断は桃子がする事だからと言った。そして、今日桃子に聞いてみるからと告げ、仕事に戻って行った。それを見送り、凛と桜は当初の目的を思い出し、それぞれシュークリームを購入し、翠屋を後にした。

「桜、世話になってるの月村って家なのよね？」

「はい。大きなお屋敷ですからすぐわかります」

そう言って、二人が向かう先は士郎から聞いた高町家。すずかとはやてを迎えに行くためだ。その道中、話題になるのは、はやてとすずかの事。それぞれの出会いとこの数日間を話し、共に似ている相手と出会ったものだと笑い合う。

だが、どちらも孤独を秘めていた事にも気付いた。はやてもすず

かも”普通”と言うには特殊な環境だったのだ。そして、凛がこんな事を言い出した。

「ね、はやてとなのはだっけ？　その子も纏めてすずかって子と友達になってくれれば、三人を桜が面倒みる事が出来るわね」

「姉さん……そんな都合良く」

「よね……ごめん。言ってみただけよ」

そう言い合って二人は高町家に到着し、はやてとすずかを呼んだ。すると三人が仲良さそうに現れた。それに少し驚きを感じるものの、二人は何があったかを聞いた。

どうも、話してみるとはやてとすずかは共通点が多く、なのはは同い年の子と話す事自体が楽しかったようで、すぐに友達になってしまったとの事。それを聞き、二人は顔を見合わせた。

「……三人の合意をつければ、後は上手くいくわよ」

「でも……いいんでしょうか？」

「士郎、このままだと休みなしで働くわよ」

「聞くだけ聞きましょう」

凛の言葉に桜はそう言うと、三人へ問いかけた。それは、凛の考えた提案。士郎と凛が翠屋を手伝う間、なのはとはやてはすずかと一緒に月村家で桜が監督し、遊んで過ごすというもの。

それに三人は顔を見合わせ、少し考えた。なのはは毎日誰かと遊べるならと頷き、すずかも学校が始まる前に友達が出来て、仲良く

出来るならと了承。はやてだけが悩んでいた。

（わたしは車椅子やし、なのはちゃん達に迷惑になる気ぃする……）

（あれは……ったく、気にしてるのか。仕方ないわね）

はやての雰囲気から考えを悟った凛は、少し微笑みを見せると、優しくなのはとすずかに問いかけた。

「ね、二人に聞きたいんだけどさ。はやてと遊ぶの楽しかった？」

「うん。はやてちゃんお話面白いし、色んな事知っててびっくりした！」

「私も。もっと色んなお話聞かせて欲しいな」

それに笑顔で頷いて、凛ははやてへ視線を向ける。それは、体の事なんて気にしてないから素直に答えなさいと告げていた。はやてはその視線を受け、ややむすっとした表情をするが、なのは達には嬉しそうな笑顔を見せて告げた。

自分ももっと二人と話がしたいと。それになのはとすずかも頷いて、また遊ぼうと約束を交わす。そんな光景に、凛と桜は笑みを浮かべるのだった……

「これなんかどうかしら？」

「……まだ着るの？」

アリサは目の前に差し出された服を見て、嫌そうに尋ねた。キャスターがバニングス家に居候するようになって、既に数日。その間、アリサが着る事になった衣服、実に百を超える。しかも、全てキャスターの手作りらしく、どれもこれも可愛らしい意匠が施されている。

最初は割りと楽しくしていたアリサだったが、こうも立て続けに着させられれば嫌にもなってくるというもの。まぁ、それでも……

「これなんかアリサちゃんの綺麗な髪に映えるわ！」

「着るっ！」

西洋然とした髪や肌、容姿を誉められたり、羨ましがられるような流れになるとこうなのだ。キャスターが世辞で言っているのなら、アリサもいずれ理解したのかもしれない。だが、キャスターは心の底からそう思っている。

アリサは可愛い。綺麗。西洋然としているからこそ、似合う格好がある。キャスターはアリサのコンプレックスを解消するかのように、そう言ってくれるのだ。それがアリサの中にある劣等感を少しずつ自信へと変えていく。

（アタシ、このままでいいんだ。むしろ、この外見を自慢しないと。だって、アタシのこの体は……）

手渡された服に着替えながら、アリサが思い出しているのは、自分がふと呟いた言葉に対してキャスターが告げた言葉。

――貴方の体は、両親からの贈り物なのよ。それは、何も恥じる事ない立派な物なんだから。

愛する両親がくれた最初の贈り物。世界に二つとない大切な自分だけのもの。そう考えるようになってから、アリサはどこかあった劣等感が薄れていくのを感じていた。

キャスターも同じように外国人という外見をしている。だが、それを恥に思う事はなかったと言い切った。その理由が先程の言葉。だからこそ、アリサはキャスターをどこかでお姉様と呼ぼうかと思っている。

人生の先輩で教師。そして、自分の事を可愛がってくれる姉のような相手。それがアリサにとってのキャスターだからだ。

「どう？」

「いいわぁ！　やっぱり女の子はこうじゃないと……」

「ね、どうして葛木さんは着ないの？」

アリサの何気ない一言にキャスターの動きが止まる。それにアリサは何かおかしな事でも言ったかと思い、首を傾げた。すると、キャスターはゆっくりと首を動かし、尋ねた。

「今、何て……」

「だから、何でこういう可愛い服着ないの？　似合う奴もあると思うのに」

アリサの言葉にキャスターは耳を動かし、顔を赤くする。アリサの言葉が本音だと分かったからだ。キャスターはキャスターでコンプレックスを持っているのだ。アリサに着せるような格好は、自分には似合わない。

それがその正体。だが、アリサがそう言った事でキャスターはう

ろたえた。世辞ではなく、本当にそうアリサが思っている。だから自分にも似合うと告げてくれたのだろう。

（で、でも……私にはやはり……）

視線を手元の服へ向ける。フリルのついた可愛らしいものだ。それを着た自分を想像し、首を激しく振る。やはり似合わない。そう自分に言い聞かせて。だが、その間にアリサは服を見立て、キャスターに似合いそうなものを選んだ。

そして、それをキャスターへ差し出し、こう言い放ったのだ。人ばかりじゃなくて、たまには自分も着なさいと。この後、キャスターはアリサのお願いと泣き落としにより、一度だけと言ってアリサが選んだ服を着る。

その格好を写真に残され、キャスターはアリサに本気でこう告げたという。その写真を誰かに見せたら、恐ろしい目に遭わせると。だが、後にこの写真は葛木の目に入る事になる。その原因は言うまでもなくアリサ。ちなみに、その写真を見て、葛木はこういう姿も可愛らしいと思うと告げ、アリサはキャスターの復讐を免れる事になる……

時の庭園。そこでバゼットは憤っていた。原因は先程会ったフェイトの母であるプレシアである。現在バゼットはその魔術の知識と力を買われ、ここでフェイトの先生役をしているのだが、それでもバゼットからすれば信じられなかったのだ。

プレシアのフェイトを見る目。魔術師は、例え子であろうと非情にならなければいけない時がある。だから、バゼットも魔導師も似たようなものだと最初は思った。だが、どうもそれが違うと分かったのは、フェイトが話を終えた後にバゼットを住まわせていいかとプレシアに尋ねた際、呟いた一言。

――その程度の事をわざわざ聞かないで。自分で考える事も出来ないの？

それはどう考えても母が娘に言う言葉ではなかった。魔術の師弟ならば、確かにそういう喋り方もするだろう。だが、そう考えてもどこかおかしいのだ。まるで存在そのものが鬱陶しいと言っているかのような態度。

「……リニスさん、教えてください。プレシアさんは何故フェイトを毛嫌いするのですか」

「……フェイトやアルフには言わないと誓えますか？」

「ええ。赤枝の騎士の名に賭けても」

まだ出会って少しだが、リニスにはバゼットが信頼に足る相手だと理解していた。プレシアの態度を見て、フェイトの事を思って行動しようとする。その姿勢に、一切の迷いや思惑はない。

理性ではなく、本能で感じる。バゼットはおそらくプレシアよりも強い。正面からやり合えば、バゼットは魔導師を圧倒出来るだろうと。それは、先程見せてもらった格闘術。アルフが何も出来ずに懐に入られ、フェイトの攻撃をかわし、距離を詰めるその動き。

拳などを魔力で強化し、想像以上の強度を持たせ、繰り出す一撃。それは、アルフやフェイトが展開した防御魔法を、咄嗟だったとはいえあっさりと打ち砕いたのだから。

（彼女ならば、プレシアの凶行を止めてくれるかもしれません）

そう考え、リニスはふと笑う。出会って間もない相手に、自分は

何故ここまで全幅の信頼を寄せられるのだろうと。だが、どこか親近感を感じるのだ。その理由は分からないが。

「では、落ち着いて聞いてください……」

リニスが語る内容を聞き、バゼットは驚きを感じると同時に納得もした。フェイトがプレシアの娘の複製。それであれば、あの態度にも納得がいく。そして、自分の体が弱っているために、余計焦りがそれを助長しているのだろうと、バゼットは思った。

そして、リニスの話が事実ならもう一つ問題があった。それは、彼女の死。プレシアはフェイト用のデバイスを作らせ、それが完成すると同時にリニスを消滅させるだろうとの事だった。

（そんな事になれば、フェイトが哀しみますね。それに、この世界の知識を教えてくれる存在も……よし）

「分かりました。では、私がプレシアさんと話を着けます」

「なっ？！　本気ですか？」

「ええ。ご心配無く。私は負けませんので」

バゼットはそう答え、手袋をはめ直して歩き出す。目指すはプレシアの部屋。その後姿を眺めて、リニスははっとなる。バゼットは話を着けにいくと言った。にも関わらず、戦闘時につけるといった手袋をしていった。

それが意味する事を理解し、リニスは慌ててアルフへ念話を飛ばす。それもたった一言。バゼットを止めるから急いで来てくれ。それだけ。

「母親として、人として貴女に足りないものを教えてあげます。プレシア・テスタロッサ、覚悟！」

ちなみに、バゼット相手にプレシアは魔法を使って撃退しようとするも、封印指定を受けた者を相手に戦っていたバゼットに、戦闘経験が乏しいプレシアが勝てるはずもなく、更に体の不調も重なったため、簡単に追い込まれた。

リニスとアルフが駆け込んで見た者は、プレシアの背をさすりながら説教するバゼットの姿と、それを聞きながらどこか複雑な表情のプレシアだた……

「大分蓄えも出来たわね」

「うん。でも、これからどうするの？」

アルザスのとある村にある酒場。そんな場所に不釣合いな少女二人組がいる。イリヤとキャロだ。キャロの隣ではフリードが与えられた食事を食べている。

二人の目の前にも注文した食事があるが、それに一切手を付けず、二人はこれまでの仕事で得た報酬を眺めていた。

「まず、ここから移動しましょ。ミッドチルダに行けばもっと楽に稼げるようになるわ」

「管理局に入るの？」

「最終的には、ね。まずは向こうから声を掛けてくるようにするわ」

イリヤが語ったのは、ミッドへ行きそこでも仕事をする。今まで通り依頼の選別はイリヤが担当し、キャロは家事を担当。そこで名を売り、活躍すれば管理局が必ずスカウトにやってくる。それをイリヤが交渉し、それなりに安全で稼ぎのいい職場へ配属してもらう。絶対、キャロとフリードの力が変な風に利用されないようにしてみせる。そうイリヤは言い切って、手元のコップを手に取った。中身は、キャロに合わせ、山羊の乳を温め、バターなどで甘味を微かにつけたもの。

「まずは、今の状況を感謝して乾杯といきましょ」

「あ、うん」

「「乾杯」」

互いのコップを合わせ、二人は笑顔でコップを口に当て傾ける。やや癖のある味だが、もうイリヤもそれに慣れた。このアルザスで二人の名はかなり有名になった。最初はイリヤばかりが働いていたが、それを申し訳なく思ったキャロが必死に頑張り、イリヤの指導もあってフリードの完全制御に成功してからは、もう鰻上りの状態になったのだ。

流れの竜召喚士と謎の魔法を使う魔導師。それがしかも少女とくれば当然だ。しかし、変な依頼や危ない相手は、イリヤの魔眼で動きを鈍らせて脅し、時には本来の姿に戻ったフリードまで使った交渉に、否応なく評判は高まるというものだ。

イリヤは有名になるにつれ、周辺の警戒も以前にも増して怠らずするようになり、そんなイリヤに感化され、キャロも本来の優しい性格のまま、人を見る目だけは養われた結果、ただの心優しい少女ではなく、時に厳しく時に優しくをちゃんと分かるまでに鍛えられ

ていた。

「局に入ったら、キャロは何かしたい事とかある？」

「う～ん……イリヤちゃんと一緒ならそれだけでいいかな。イリヤちゃんは？」

「まぁ、私も同じだから聞いたんだけど……」

そう言ってイリヤはポークソテーを口に入れる。香草を混ぜたソースが肉の甘さを引き立て、ともすればくどいだけの脂を、気にしないように香草の味がいい具合でアクセントになっている。更にブランデーを使っているのか、その香りもあり、イリヤは満足そうに頷いている。

キャロはキノコを使ったシチューを食べている。熱々のクリームシチューだが、その中に入っている人参の甘さと玉葱の甘さが、冷えた体を暖めていく。それだけではない。キノコも二種類入っているので、その味の違いや歯応えの違いも楽しめ、キャロもまた笑顔を浮かべている。

ここは酒場だが、同時に宿でもある。二人が世話になっている宿で、最初はここで手伝いをしながら仕事を探したのだ。宿の主人夫婦は、二人を子供のように接してくれ、一時期二人は宿の看板娘になったぐらいの人気者だった。

キャロの家事はここで磨かれ、イリヤは宿で依頼を受けるようにし、ここを依頼所と指定したので、宿の方も有名になり、夫婦からは礼と共に軽く文句を言われたのだ。忙しくしてくれて嬉しいけど、人手が足りないよと。

「……で、出発なんだけど」

「……うん。いつなの？」

「明日だから」

「そう……て、ええっ？！」

「きゅく？」

突然の申し出にキャロは驚いた。それでも、手にしたフォークから川魚のパイ包みを落とさないのはさすがと言うべきか。隣のフリードも食べていた肉を咀嚼しつつ、視線をイリヤに向けた。

イリヤはそんなキャロに呆れながらも、はっきり告げた。何のために全ての依頼を今日で終えたと思っているのかと。はっきり踏ん切りをつけて動かないと、いつまでも動けないと。

「だから、明日。おじさんとおばさんには言ったから」

「そうか。だからご飯持ってきてくれた時、寂しそうだったんだね」

「……また、会えるわよ」

「そうだね。……うん、会えるもんね」

そう言って二人は揃ってコップを手にして中身を飲み干す。その味が何故か甘くないように感じ、キャロは少し震える声で呟く。

――おかしいな……？　甘くなくなっちゃったよ……

――おかしくないわ……。私も、甘くないもの……

その後、二人はただ静かに涙した。共に親の温もりに飢えていた。それを短い時間とはいえ与えてくれた、宿の主人夫婦。家と呼べる程の親しみを抱いた場所。そことの別れに、感じ入るものがない訳はなかったのだ。

やがて、酒場の営業時間も過ぎ、席に座り続ける二人の傍に夫婦が近付き、そんな二人に優しく声を掛けた。気をつけて行っておいで。もし、駄目だったり辛くなったらいつでも戻っておいで。ここは、いつでもあんた達の帰りを待ってるからね。

その言葉に今度こそキャロが大泣きした。女将さんに抱きつき、泣き続けた。イリヤはそれに影響されるものかと我慢していたが、親父さんに意地を張るのは、明日からにしなと言われて頭を撫でられ決壊した。

こうして、翌日二人は目を真っ赤に腫らしたままミッドへと向かった。この後二人はイリヤの目論見通り管理局にスカウトされる。レアスキル持ちであるキャロの要求として、イリヤが伝えたのは自分達が共にいれるようにする事。そして、自然の多い場所での仕事の二点。

この要求はあっさり受理され、二人は自然保護隊へ配属される。この後、正体不明の魔法を使う魔導師がいると聞いた凛とはやてが、その正体を確かめにイリヤの元を訪れる事で、機動六課は本来に近い形へとなっていく……

修道騎士として一流の腕を持つシスター。それがシャッハ・ヌエラだ。剣の騎士と名高いシグナムをして「模擬戦をするのが楽しい相手」と言わしめる事からも、それが理解出来るだろう。だが、そんな彼女が今苦戦を強いられている。

相手は魔法が使えない相手。それにも関わらず、シャッハは責めきれないでいた。そう、目の前の相手には魔法よりも恐ろしい攻撃方法があるのだ。

「どうしたね？　もう終わりか、シスター」

「くっ……ヴィンデルシャフト！」

カートリッジを排出し、必殺の一撃を仕掛けようとするシャッハ。だが、それを見て対戦相手――言峰は楽しそうな笑みを浮かべ、ゆっくりと腰を落とす。そこへシャッハが疾風の如き一撃を放つ。

しかし、それを完全に出し切る前にシャッハは宙に浮いていた。意識が飛びそうになるのを何とか防ぎ、すぐにこうした原因である相手を捜す。下にも横にもいない。となれば、そう思い視線を上に向ける。

「遅い」

「くっ！」

言峰の繰り出す一撃。それは発剄と呼ばれるもの。咄嗟に防御魔法を展開するも、それと通してダメージがシャッハの体に伝わる。物理的な衝撃は緩和出来ても、それがもたらす震動が殺せない。

それが、言峰が他の修道騎士達から恐れられる理由。デバイス無しで魔導師を倒せる実力。魔法を使わずに空中戦をやってのける。それらは嘘から事実まで入り混じり、言峰を楽しませていた。

地面に叩き付けられるシャッハ。だが、そこへ容赦ない言峰の追撃が襲い来る。それを迎撃しようとするシャッハだったが、急に意識が朦朧となる。先程の一撃は彼女の脳を揺らし、一時的にではあ

るが脳震盪を起こさせていた。
その隙を逃さず、言峰がシャッハの腹部を捉えて……その拳が止まる。それが終了の合図だった。

「……お見事です。騎士言峰」

「何、経験が多いからに過ぎん。実際、シスターが魔法を多用すれば負けていたかもしれん」

「ご謙遜を」

シャッハは言峰の事を尊敬していた。誰よりも信心深く、実力もある。確かに得体の知れない雰囲気こそあるが、信者達にも彼の説法は評判がいい。修道騎士としても先輩に当たるのもあるが、次元漂流者という境遇を意にも介さないその振る舞いは、見ていて清々しい時さえある。

そして二人は歩く。行き先は騎士カリムの執務室。シャッハは彼女の秘書的立場にして、友人であり、言峰はカリムの専属騎士なのだ。これは言峰の危険性を悟ったカリムが下した決断によるもの。
言峰を放置すれば、聖王教会どころか次元世界自体の危機に繋がる。そんな予言が出たためだ。いつもならば良く当たる占い程度だとカリム自身が告げるものだったが、言峰に関しては絶対だと断言出来るものがあるらしく、シャッハはその話を聞いて、不思議に思ったぐらいだった。

「騎士カリム、シャッハです」

「どうぞ」

涼やかな声が聞こえ、シャッハはドアを開ける。そして、先に言峰を入れる。それに言峰は何も言わず入室する。カリムは言峰を見るとやや警戒するように見つめ、その視線を受けても言峰は平然としている。

シャッハはそんな二人の間に入るように立ち、カリムへ今日の予定を告げていく。その間、言峰はただ黙ってカリムを見つめるだけ。カリムもシャッハの言葉を聞きながらも、言峰から視線を逸らさない。

「……以上です」

「そう。……言峰さん」

「何かね？」

「今日はクロノ提督とはやてが見えるので、貴方はいつものように」

「承知した」

そうどこか楽しそうな笑みを口元に浮かべ、言峰は去って行く。いつものようにというのは、ひたすら自己鍛錬に励めという事だ。カリムは一度たりともはやて達に言峰を会わせようとしなかった。

以前その理由をシャッハが尋ねた際、カリムはこう告げたのだ。それは、はやて達の不幸へ繋がる。そうどこか恐れるようにカリムは答えると、シャッハへ厳命したのだ。はやて達へ言峰の存在を教えないようにと。

つまり、言峰の事を知る者は信者達と一部の修道騎士達のみ。ある意味でトップシークレットなのだ。だが、彼女達は知らない。これより数年後、機動六課設立時に前線メンバーとして訓練に励む少

女。彼女は、言峰の事をはやて達に話してしまう事を。
それを聞いた凛達が血相を変えてカリム達の元を訪れる頃には、言峰は誰にも知られずに姿を消していたのだった……

カレンは退屈だった。ティーダは執務官の仕事で、長期間の任務。ティアナは陸士の訓練校で寮生活。自分に課せられたのは、家の留守番とその掃除などだ。だが、それを素直にやる程カレンは純粋ではない。
特に衛宮邸で過ごした日々がそれを更に助長していた。ちなみにティーダは仕事がない時はカレンの世話をしており、その姿を見てカレンは士郎の事を思い出したとか思い出さなかったとか。

「……そういえば、訓練校も休みはあるのでしたね」

何かを思い出したように呟くカレン。そしてカレンダーを見て、休日である事を把握して口元を歪ませる。

――行きますか、ティーダさんにティアナさんの様子を教えてあげるためにも。

「っ！？」

「どしたの？」

「……何か、悪寒が」

休日訓練組といわれているスバル&ティアナ。この日もいつものように訓練に励んでいたのだが、突然ティアナがそんな事を言い出した。そのため、スバルがティアナの額に手を当て熱がないか確かめる。

特に何ともない。そう判断し、スバルがそう告げるとティアナも頷き、中断してゴメンと謝って動き出す。それに気にしないでいいよと笑って返し、スバルも動き出す。

二人はルームメイトとなってすぐに打ち解けた。スバルの人懐っこい性格と、ティアナの面倒見の良さ。それに、カレンのいびりに苦しんでいたティアナからすれば、素直で純粋なスバルは天使にも見えたのだ。

ま、スバルの好物の一つであるアレには、ティアナも耐えられなかったが。つい最近誘われたナカジマ家。そこで出されたそれを、美味しいと言って食べるスバルとギンガ、クイントの三人を見てティアナは軽く眩暈を感じ、ゲンヤにおかしくなんかないと言われて、やっと彼女は理解したのだ。

スバル達三人がある種味覚破壊されている事を。三人が美味しそうにそれを食べる中、ゲンヤと二人で食べたカップ麺の美味しさを、ティアナは一生忘れないと思ったものだ。

「さ、じゃ……やるわよ」

「お～っ！」

気合を入れ直し、二人がそう言い合った瞬間だった。ティアナに教官から念話が入る。何でもティアナに会いに来た者がいるとの事。それを聞いて、ティアナには兄が来たのかとも思った。

ティーダは半年前に執務官になって以来、仕事が終わったり合間を見つけては会いに来るのだ。ティアナはその理由をカレンにある

と思っている。カレンは家事をやろうとしない。そのため、ティーダはカレンの身の回りの世話をするはめになっているのだ。

だがティアナは知らない。ティアナが家を出た後、カレンがティーダをからかうためにある事をし、それがカレンの予想外の結果をもたらした事を。そして、現在ティーダがティアナに会いに来るのは、家事が嫌で来ている訳ではなく、ある事をティアナに切り出すための準備である事を。

「ゴメン。兄さんが来てるみたいだから、ちょっと行ってくるわ」

「あ～、そうなんだ。じゃ、私は自主練しながら待ってるよ」

「別に部屋に戻って休んでてもいいわよ。長話するかもしれないし」

「う～……いいよ。だって、この前も結局ティアすぐ戻ってきたしさ」

そう言ってスバルは手を振って走り出す。そんなスバルに呆れながらも、どこか嬉しそうに笑みを浮かべ、ティアナは背を向けて走り出す。

（でも、確かお兄ちゃん長期任務になったって言ってた気が……？）

それをもっと早く思い出せば良かったと、ティアナはこの後全力で後悔する。そう、久しぶりに再会したカレンは、ティアナを外に無理矢理連れ出し、買い物などに付き合わせたのだ。着替えさせずに。

訓練用のダサい格好でミッドの街を連れ回され、ティアナは疲れ果てた表情で訓練校へ戻る。そこで、部屋で涙目になりながら体操座りをしているスバルを見て、ティアナが必死に謝る事になったの

は当然だった。

――いいんだよ、ティア。悪いのは私だから。ティアが部屋で休んでればいいって言ってくれたのに、ずっと走ってた私が悪いんだ。

そう言ってスバルは涙を流し、小さく「でも、念話ぐらいして欲しかったな……」と呟くスバルの言葉に、ティアナが心からごめんなさいと言うのは、自然な流れだった。

この後からティーダは訓練校へ来ないで欲しいとティアナから厳命される。その理由がカレンにあると知ったティーダだったが、結局カレンに何も言う事は出来ないのだった。

「アタシ、もう二度とあんたを置き去りにしないわ。次に誰か会いに来ても帰ってもらうから」

「ティア……」

「だからさ、今日の事は許して……くれる？　もう、こんな事しないから」

「……うん！」

ティアナの照れくさそうな言葉に嬉しそうに頷くスバル。その笑顔にやや恥ずかしそうではあるが、笑みを返すティアナ。こうして二人の絆は深まっていくのだった……

陸士１０８部隊。ゲンヤ・ナカジマが部隊長を務めるここに、メガーヌはいた。ゼスト隊が壊滅し、行き場を失った彼女は、同僚の

クイントと共にここ１０８に編入されたのだ。最初は色々と迷ったメガーヌだったが、クイントの強い希望と、娘のルーテシアが言ってくれた「お母さんのしたい事をして」の言葉に現場復帰を決断。こうして、今では１０８の頼れる存在になっていた。

「メガーヌさん、これを」

「ありがとうギンガ。貴方もすっかり一人前の陸士ね」

手渡された書類を受け取り、メガーヌはそう言った。それは本来なら明日が期日のものなのだ。ギンガはそれに小さく手を振り、苦笑い。自分は、母やメガーヌのようになるまでは未熟者です。そう答えて。それにメガーヌが悪戯っぽく笑ってこう返した。

「あら、じゃあ私達はやっと一人前なのね」

「あっ！　いえ！　そういう訳では……」

「ふふ、冗談よ。でも、その気持ちは立派ね。いつまでも精進あるのみ、かしら」

「はい。私は母という目標がありますから」

「目標……ね」

ギンガの告げた母が目標と言う言葉に、メガーヌは少し表情を暗くする。それにギンガは気付かず、先輩であるカルタスに呼ばれてそのままその場を去っていく。

それを見送り、メガーヌはぼんやりと視線をデスクの上にある写真立てへ移す。そこには、メガーヌと手を繋いで微笑むルーテシア

の姿があった。

（やっぱり、どこもそうなるのかしら……）

メガーヌの脳裏に甦るのは、昨日の夜ルーテシアから告げられた言葉。

「私、お母さんと同じ召喚師になる」

その言葉を聞いた時、メガーヌは複雑な心境になった。愛しい娘が自分を目指したいと言ってくれた。それは素直に嬉しい。でも、自分と同じ召喚師になるという事は、局員になるという事だ。

それは危険な場所へ行く事を意味する。しかも、ルーテシアは自分よりも下手をすると才能がある。そうなれば、自分よりも危険な状況へ行かされる事にもなりかねない。自分が死にかけた現実。あれを娘にも味わわせる事になるかもしれない。そんな事にはさせたくないのも事実だった。

結局、その時はルーテシアに、ゆっくり魔法を覚えていきなさいと答えたが、メガーヌはまだどうするべきか迷っていた。そんな気分のまま、メガーヌは仕事を終えて帰宅する。家に着くと、ルーテシアが笑顔で出迎えてくれた。

その笑顔にメガーヌも笑みを返し、リビングに入ると、葛木がルーテシアにさせていたのだろう勉強道具を片付けていた。それにルーテシアを叱ろうとするメガーヌだったが、その光景に違和感を感じたのだ。書いてある文字が丁寧なのだ。

それを見て、メガーヌは気付いた。それは葛木が書いたものだと。丁度その瞬間、ルーテシアがメガーヌにこう言った。

「今日は宗一郎にミッド文字を教えたんだよ」

「いつも教えてもらってばかりだからと、ルーテシアが言うのでな」
「でも、あっさり覚えちゃった。宗一郎は凄いんだよ」
ルーテシアは、そこから葛木との勉強話をしだす。それを聞きながらメガーヌは食事の支度を始める。それを手伝いながら、ルーテシアは話を続けた。そんな娘の姿に微笑むメガーヌ。葛木はそんな光景を眺め、テーブルを綺麗に拭いているのであった。

「そうか。ルーテシアが」
「ええ。どうすればいいかしら？」
「……好きにさせるといい」
「え？」

葛木の言葉にメガーヌは軽い驚きを感じた。それに構わず、葛木は言った。子供がどうしたい何になりたいと言い出したのなら、それを黙って見守り、手助けするのが親というものだ。危険だとしても自分で選んだ道ならば、行かせてやればいいと。
一番してはならないのは、危険だからとさせる前に止める事。痛い目に遭わねば分からない事もある。それを教えてやるのも親の役目だと、そう言って。
それを聞き、メガーヌは納得した。自分が考えていたのは、ルーテシアのためと言いつつ、自分の事を考えていたような気がしたの

だ。ルーテシアがやりたい事を全力で支えてやる。それが親の役目であり、人生の先輩としての役割なのだと。

本当に危険な事は言っても理解されない事もある。だから敢えて経験させればいい。勿論、それで最悪の結果にならないよう、こちらが支えてやらなければならないが。

（結構、葛木さんは厳しいのね）

感情をあまり出さないが、それでも今の話には紛れもない葛木の考えが見えた気がしたのだ。そして、それは厳しいがちゃんと相手の事を考えたものだとも。

好きにやらせるのは無責任ではなく、しっかりと見守り支える事が前提にある。本人が望むのなら、その責任は本人にある。痛い目に遭うのも、成功するのも本人次第。親としてしてやるのは、必要最低限のみ。

だが、本人が決めたのなら全力で応援をしてやる。愛情表現は様々だが、葛木のもまた親の愛なのだろうとメガーヌは思った。

「少し奥さんが羨ましいわ」

「ん？」

「もっと早く会えたら……私、葛木さんを夫にしたかったかも」

「それは光栄だが、生憎私にはキャスターがいる」

「ふふっ、分かってる。でも……」

メガーヌはそう言ってどこか子供のような笑みを見せてこう言った。

――葛木さんが奥さんに会えるまで、私を奥さんだと思ってくれます？

その言葉に葛木がどう答えたかは、敢えて書かない。その答えは、きっと貴方の胸の中に……

――――――

幕間5

高町家からさほど離れていないとあるマンション。そのマンションの一室が、テスタロッサ家の新しい住居である。六人で住むにはやや手狭ではあるが、アリシアとフェイトで一つの部屋にする事などで、部屋の確保自体は出来ている。そのため、リニスとアルフも相部屋である。

その内の一つであるランサーの部屋に、部屋の主であるランサーとフェイトが二人して悩んでいた。

「どうしよう？」

「て言ってもなぁ……」

「今からはやての家には行きにくいし……」

「かと言って、俺もこの国の学問に詳しい訳じゃねぇしな」

二人が揃って見つめているのは、フェイト用に用意された問題集の数々。国語や算数だ。学校への編入試験を受けるためにと、アリサやすずかが選んでくれたもの。フェイトはそれをアリシアとやろうとしたのだが、アリシアはヴィータと遊ぶ約束をしていたらしく、フェイトに謝って出かけて行った。

それで一人でやっていたのだが、算数はミッドでも同じ事をやっていたので簡単に終わった。だが、国語は書き取りはともかく、漢字の読みが難しくて中々難航し、それも時間をかけて終わったのだが、俗に言う文章問題でどうしても分からない場所があり、自分よりも日本語が読めるであろうランサーの元を訪れたのだが……

「あ？　いや、俺も全部読める訳じゃないぞ」

と返され、フェイトは軽く途方に暮れたのだ。今日、リニスはプレシアと共に、時の庭園で魔法と魔術の融合研究をしている。アルフはアリシアと共に八神家へ出かけている。出会った日から、ザフィーラから稽古をつけてもらう事にしたらしく、今頃は公園辺りで汗を流しているだろう。

それを聞いた時、同じような存在同士仲良くなっているようだと、フェイトもはやてと喜んだものだ。

そして、なのは達は学校。はやての家に行けば、はやてがいるだろうが、もうそろそろ昼になる。今から訪ねてもすぐにご飯時になり、はやてに迷惑になるとフェイトは考えた。

（でも、このままじゃ進まないし……）

そう思うフェイト。だが、その時ランサーが、何か良い事を思いついたとばかりに告げた。

「本に関する事なら、本好きに聞けばいい」

フェイトの小冒険

ランサーに提案されたのは、良く本を読んでいるライダーに聞けばいいとのもの。フェイトはそれも一理あると思い、早速月村家を訪れた。ライダーは丁度庭仕事を終えたところだったようで、門の前でフェイトがベルを鳴らすと、すぐに現れた。

「フェイトですか。どうしたのです？　スズカは学校ですよ」

「えっと、ライダーさんに聞きたい事があって……」

不思議そうな表情をするライダーへ、フェイトはここに来た理由を話した。それを聞き、納得しつつもどこか申し訳ないような顔をライダーはした。それにフェイトが首を傾げると、ライダーはこう言った。

「生憎、私は読書が好きなだけで、作者が何を考えたのだろう等と考えた事はありません。つまり、読解しながら読んだりはしていないのです」

「そうなんだ……じゃ、誰に聞いたらいいかな？」

「アサシンなどいいのでは？　風流を知り、雅を愛するこの国の人間ですし」

「そっか。ありがとうライダーさん」

「いえ、わざわざ来てもらったのに、お役に立てず申し訳ありません」

「ううん。私こそ忙しいのにごめんなさい」

「いいのですよ。また来て下さい。今度は、スズカのいる時にでも」

そう言って笑みを見せるライダー。それにフェイトも笑みを浮かべて頷いた。そして、小さく頭を下げて歩き出す。その後ろ姿を見

送って、ライダーは思う。
最初会った頃、フェイトはどこか物怖じする節があった。それが今は無くなったのだ。単にフェイトがライダーと親しくなったのもあるかもしれない。だが、それだけではないとライダーは思っていた。

（彼女も成長しているのですね。自分よりも幼い姉を得て……）

それがどこか自分に似ていると感じ、ライダーは小さく笑う。そして、もう一度視線を遠くなったフェイトへと向けた。

――――今度、ゆっくり話をしましょう。

そんな呟きをし、ライダーも歩き出す。今後フェイトが苦労するであろう事に微笑みを浮かべつつ、彼女は思う。どこでも我の強い姉を持つ妹は大変だと。
そう考えるライダーだったが、その顔は心からの笑みを浮かべていた。そのすぐ後、バニングス家までの道を聞きにフェイトが慌てて戻って来て、ライダーは苦笑する事になる。これは、アリシアも苦労するだろうと……

ライダーから道を聞き、フェイトはバニングス家にやって来ていた。月村家に負けず劣らずな外観に、フェイトは少し呆気に取られるものの、気を取り直し、ベルを押そうとしたのだが……

「おや？　ふぇいとではないか。何用だ？」

作務衣姿で脚立に上り、植木を整えている小次郎がその存在に気

付き、声を掛けたのだ。それに視線を上げるフェイト。初めて見る小次郎の姿にやや唖然。それが可笑しいとかではなく、可笑しいと思えなかったため、そうなったのだ。

首に手拭いをかけ、手には枝切り鋏。西洋式のバニングス家の庭にはまったく合わない格好ではあったが、フェイトにしてみれば景観にそぐわないというより、日本ではこういう格好で庭の手入れをするのだと思ったのだ。

無知とは、時に恐ろしい。これをフェイトはしばらく思い込み、アリサ達にふとした事で話すまで訂正されなかったりする。

「あ、その……教えてほしい事があって」

「私に？　承知した。しばし待て」

そう言って小次郎は手入れしていた木を仕上げ、脚立から飛び降りた。そして、フェイトの前まで近寄り、その手にした問題集へと目をやった。

「何だ、それは？」

「学校に行くための問題集。アリサ達が選んでくれたんだ。で、これが分からなくて……」

フェイトに文章問題を見せられ、小次郎は軽くそれを眺めて――頷いた。それを見たフェイトは、小次郎が答えを理解したものだと思った。そして、期待にも似た視線を向けていたのだが、小次郎がフェイトに告げたのは意外な一言。

「すまぬが私には分からん」

「え？」

「生憎寺子屋には通っていなかったのでな。文字の読み書きが出来ぬのよ」

小次郎はそう言って軽く笑う。今の子供は恵まれているのだなと思いながら。その内心を知らないフェイトは疑問符を浮かべ、小次郎を見つめる。そんな視線に気付き、小次郎は笑うのを止め、こう言った。

アーチャーならきっと分かるだろうと。だが、それにフェイトはこう返す。お昼になったから、八神家には行きにくいのだと。それにどこか不思議そうな表情をする小次郎だったが、アーチャーはこの時間なら月村家で料理を教えた帰りだろうから、上手くすれば先回り出来るだろうと告げた。

それにフェイトは納得し、お礼を述べて歩き出す。その離れ行く背中を眺めて、小次郎は呟いた。

――しかし、随分と自分の意見を言うようになったものよ。

以前なら小次郎の意見に迷いながらも、何も言わずに八神家へ向かっただろうフェイト。それが、しっかり自分の思いや考えを告げた事に、小次郎は感心したのだ。

（成長した、という事か。まったく、どこも子の成長は早いものよ……）

どこか笑みを浮かべながら、小次郎は庭仕事へと戻っていく。そして、はたと気付いた。昼食の時間故に、フェイトが八神家へ行き辛いと考えた事に。

その優しさと気遣いに微笑ましいものを感じ、小次郎は思う。ア

リサもそういう所を淑やかに表現して欲しいものだ、と……

「……それで、こうして私を追って来たのか」

「は……はい」

「それは……まぁ、ご苦労だったな」

苦笑を浮かべ、アーチャーはそう言ってフェイトを労った。フェイトは、アーチャーが八神家に着いてしまってはいけないと、バニングス家から走ってここまで来たのだ。幸いにして、アーチャーはフェイトの先を歩いており、フェイトは全力疾走でそれを呼び止める事に成功。

そして、こうして肩で息をしながら会話という形に至るのだ。

そのままフェイトの息が整うまで、アーチャーは黙って待った。しばしフェイトの息遣いが住宅街の静けさの中に響く。それが段々落ち着いていったのを見計らい、アーチャーは用件を尋ねた。それにフェイトは手にしていた問題集を見せる。

そこに載っていた文章問題が分からないとフェイトは言った。それを聞き、アーチャーは一瞬呆気に取られたが、小さく微笑むとフェイトへ告げる。

「何故私ではなく、はやてに聞こうとしなかった？」

「えっと、お昼前だったし、行ったらきっとお昼になって、ご飯を作ってもらう事になるだろうから」

「やはりか。相変わらず変なところで気を遣うのだな、君は」

仕方ないという表情で笑みを浮かべるアーチャー。そして、フェイトの目線にまで屈んで言った。なら、自宅で昼食を食べてから行けばいいだろうと。それを聞いた瞬間、フェイトが「あっ……」と呟いたのを聞き、アーチャーは苦笑する。変わっていないなと思ったからだ。

以前共に暮らした時もそうだったのだ。フェイトはどこか抜けている。簡単に言えば天然と呼ばれるタイプの人間なのだ。だからこそ、フェイトが以前のままで、ある意味安心してもいた。

（度が過ぎれば問題だが、この分ならむしろ欠点ではなく、魅力や個性の範疇だろう）

そんな事を考え、アーチャーはフェイトへ尋ねた。それで、空腹ではないかと。それにフェイトはお腹を押さえ、小さく頷いた。家を出た時から何も食べていない。そう、ライダーに答えを教えてもらったら、帰ってランサーと共に、リニスが作ってくれたサンドイッチを食べるつもりだったのだ。

そんなフェイトへアーチャーはこう言った。実は今日の昼食を作るのは、自分が帰ってからなので、はやてもまだ食べてないのだと。つまり、今から一人増えたとしても大差ないと。

「どうだ。久しぶりに私の料理を食べるかね？」

「……ご馳走になります」

恥ずかしそうに俯くフェイト。それに優しい笑みを浮かべ、アーチャーは歩き出す。それに続くようにフェイトも歩く。その道すがら、アーチャーはフェイトにミッドでの事を尋ねた。最初はどこか

小さい声だったが、話が進むにつれ、声が普通のものに戻った。そして、それを図ったかのように二人は八神家に到着する。

「さ、上がってくれ」

「お邪魔します」

リビングに顔を出したフェイト。そこには、フェイトを見て驚いたような顔のアリシアとヴィータがいた。その反応にフェイトは納得し、二人へ経緯を話そうとしたが、その瞬間フェイトのお腹から可愛らしい音がして……

「あっ……」

顔を真っ赤にするフェイトを、アリシアが可愛いと言って抱きしめる。ヴィータはフェイトの気持ちが分かるので、小さく頷き「あたしも腹へってるからよくわかる」とだけ告げ、その後から現れたアーチャーに昼食を請求していた。

それに笑みを浮かべ、アーチャーは簡単にあしらうとキッチンへ。はやてはどうも借りていた本を返しに行ったらしく、それにザフィーラがついていっているらしいとの事。

「で、勉強は終わったのかよ？」

「それがね……」

ヴィータの質問にフェイトはここに来た経緯と共に説明し、それを聞いてヴィータは一言。

「最初からここに来いよ」

「……私もそう思う」

「フェイトって、時々こういう失敗するよね～」

朗らかに笑うアリシア。それにフェイトが「あぅ……」と小さく呻くの聞き、ヴィータは何となくこの姉妹の関係を把握した。ほとんど姉と妹が逆転しているが、たまにそれが本来の形に戻るらしいと。そして、同時に思うのは……

（仲が良いんだな、アリシア達は）

出会った時から名前で呼んで欲しいと言って、正しく名前を言えるまでヴィータの名前を繰り返し呼んだアリシア。自分はちゃんと名前で呼んでるんだからと、そう言ってヴィータに名前を呼ばせようとした迫力は、中々少女のものにしては強いものだった。

だからこそ、ヴィータが家族以外で初めて名前を呼んだのはなのはだが、出会ってからの速度で言えば、アリシアが断トツトップだったりする。

そんなヴィータの目の前では、フェイトがアリシアに何をしていたかを聞いていた。それにころころと表情を変えて答えるアリシア。そこにヴィータも加わり、フェイトと三人で話し出す。

一通りアリシア達の話が終わると、今度はフェイト達の話へヴィータが話題を変える。ミッドの事やリンディ達との日々、未だに会った事のないユーノの事など、取り留めなく話している内に、はやてとザフィーラが帰ってきて話に加わった。

アリシアとヴィータ、はやてが楽しげに話す中、フェイトはザフィーラにアルフの事を尋ねた。どうもアルフは昼になったのを合図

に、家へと帰ったとの事。それを聞き、フェイトは今頃アルフがランサーと昼寝でもしてるだろうと考えた。そして、自分の分のサンドイッチはアルフのお腹の中だとも。

（出かけにランサーに言っておいて良かった……）

帰りが遅いようなら食べても構わないと言って、フェイトは家を出てきたのだ。それは、用意された量ではランサーが満腹にならないと思ったからだったが、結果的に無駄になっていないならいいと思った。

やがて、キッチンからいい匂いが漂い始め、全員が待ちきれないとばかりにテーブルへ移動を始めた。

「何や、懐かしいな。フェイトちゃんがここにおるの」

「そうだね。私も同じ事思った」

「そっか。フェイト、はやて達と一緒にお泊りしてたんだもんね」

「あ～、そういやそうだっけ。その話、あたしも聞いた」

「私も聞いたな。短期間だったらしいが、主が世話になった」

「そんな……私こそお世話になったし……」

「いやいや、私の方がお世話になったちゅうねん」

そんな風に話す五人。その賑やかな雰囲気に笑みを浮かべ、アーチャーは料理を皿に盛り付けてテーブルへ運んでいく。それに歓声を上げるアリシア達。ザフィーラはアーチャーと共に微笑み一つ。

そして、それぞれに箸が行き渡り……

「「「「「「「いただきます」」」」」」」

こうして、フェイトのちょっとした冒険は終わりを迎えた。彼女にとってこの日は、ライダー達の知らない面を知る事が出来た有意義な日となった。

そして、改めて八神家での日々が、自分の中で大きく影響しているのだと感じる事も出来たのだった……

おまけ

「ありがとうございました～」

笑顔で客を見送るシャマル。そして、片付けをしようと店内に視線を戻すと、何故か寂しそうなセイバーが目に付いた。

「どうかしたの、セイバー」

「……ええ。何故か分からないのですが、疎外感のようなものを感じたのです」

「疎外感？」

「……どうしてでしょう？」

二人は揃って首を傾げる。そして、出た結論は気のせいだろうとの事。そう納得させ、再び仕事を始めるシャマルとセイバー。お昼のピークを過ぎたとはいえ、まだこれから忙しい時間が残っている。それに備えて、今の内に出来る限りの準備をしておかなければ。そう考え、二人は動く。

そこに来客を告げるベルの音が聞こえ、セイバー達が声を合わせて言った。

「「いらっしゃいませ」」

今日も翠屋は盛況です。

――――――

バーの直感発動な話でした。

交流編その3　前編

カレンダーを見つめ、微笑むなのは。七月と大きく書かれたそれに、赤く○が打ってある場所がある。それは、テスタロッサ家と八神家を交えた初めてのお出かけ日。そう、つまり今日である。

ちなみに無事に編入試験を終えたフェイトは、学校とプレシアの協議の結果、二学期からの登校と決まり、クラスもなのは達と同じに決まったらしく、それをフェイトからのメールで知り、なのは達は揃って喜んだ。

「いよいよなの」

今回の出かける先は遊園地。メンバーは、高町家からはなのは、セイバー、美由希に恭也で、月村家は全員参加。アリサと小次郎は当然で、八神家も全員参加。最後にテスタロッサ家はプレシアを除く全員。プレシアは、定期連絡を兼ねてミッドへ出かけるとの事で、アーチャーが何かを頼んだらしいとフェイトがメールで教えていた。

フェイトとアリシアも海鳴で暮らすにあたり、携帯電話を持つ事にした。そして番号等の交換をし、今回のようにメールや電話でのやり取りをしている。ちなみに、アリシアはヴィータにも携帯を持つよう迫っており、それをはやてが検討していたりする。

（一体、何を頼んだんだろう？）

アーチャーがプレシアに頼んだ事が予想出来ず、なのははリボンを手に取る。それはあの別れの際にフェイトとアリシアから貰ったもの。二人と出かける時は、絶対これと決めていたものである。

それを手馴れた感じで着け、なのはは鏡で全体を確認し笑顔で頷いた。

「よしっ！」

「なのは～、そろそろ行くぞ～」

「は～い」

下から聞こえた恭也の声に元気良く返事を返し、なのはは部屋を出る。そして、ドアを閉めようとして一瞬視線が写真立てへと止まる。

それはセイバー達と温泉旅行の際に撮ったもの。視線は、その中の少年へと向けられていた。

（ユーノ君、今頃何してるんだろ……）

そう思いながら、なのははドアを閉めて階段へと向かう。本当なら、ここに居て欲しいもう一人の人物の事を想いながら……

遊園地は、ドキドキワクワクなの！

前編

電車に揺られる事数十分。途中で乗り換え等をし、到着したのは海外資本が経営する大型テーマパーク。夏休みという事もあり、大勢の家族連れがいる。それを眺め、呆気に取られるなのは達。特にはやて達は、初めて来る遊園地の凄さと人の多さに沈黙していた。

「入場券を買ってくる。一日パスポートでいいな？」

「あ、それでお願いします」

それを見てアーチャーが率先して動き出す。その言葉に恭也が応じ、アーチャーは頷いてチケット売り場へ向かう。その後ろでは、なのは達子供組がワイワイと盛り上がっていた。

入口近くで子供達と戯れるネズミをモチーフにしたマスコット。それを見てアリシアが不思議そうに尋ねた。

「ね、あれネズミ？」

「あ～、そやな。ここのメインキャラクターや」

「しゃ、写真撮ってもらおうよ！」

「落ち着いてフェイトちゃん。また中で会えるから」

カメラを取り出し、やや興奮気味のフェイトを見て、すずかが嗜めるようにそう言った。その横ではアリサが人ごみを睨みつけている。

「やっぱ貸し切るべきだったわ」

「あ、アリサちゃん、それは流石にダメだよ～」

大財閥のお嬢様発言になのはがそう答える。そして、こう諭したのだ。今日しか来れない人達もいるし、初めて来る子だって少なくないかもしれない。その人達の事も考えようと。

その考えに、アリサは自分が如何に自分勝手な発想をしていたか

を感じ、その言葉に反省して頷いた。みんな同じ条件だから、仕方ないと言って。

そんな子供達とは離れた場所で違う意味でワイワイしている者達がいた。守護騎士達である。

「これ程までに巨大な城を……さぞ名門の貴族なのだろうな」

「見ろよシグナム。あんなとこをデカイ犬が歩いてやがる……」

「使い魔ではないな。では、この世界の種族なのか？」

着ぐるみという物がベルカにはなかったのか、そんな風に話すシグナムとヴィータ。無論、ここが作り物の場所だとヴィータは知っているが、シグナムは違う。ヴィータ発案の悪戯を面白がったはやてにより、ここはさる貴族が作った道楽の公園だと伝えてあるのだ。

ヴィータはそれを隠し、さも同じ様に知らない振りをしている。そんな二人を見つめ、笑いを堪えているシャマルがいた。

「……ね、ねぇザフィーラ。シグナム、いつ気付くのかしら……プクッ……」

「……趣味が悪いぞ」

そのシャマルに呆れたように返すザフィーラだったが、微かに彼もシグナムを見て笑わないようにしているのだった。そして、何だかんだ言って、彼もシグナムに真実を教えないのだから同罪と言える。この後帰る際に、シグナムが事情を知らないアーチャーへ質問した事で真実が露見し、シャマルとザフィーラの二人がまず成敗される。そして、シャマルの告げ口により、それを考えたヴィータも

同じ目に遭い、はやてはシグナムに帰り道の間、延々説教される事となる。

そんな守護騎士達とは違い、保護者組はそうではない――はずだったのだが……

「凄いものよ。西洋の城は聞いてはいたが、あのような物か」

「雅ですか？」

「ふむ……確かに日本の城とは違う風情がある。だが、雅とは言い難いな」

「そうなんですか？」

「景観よ。些か俗世過ぎる。湖畔などであれば映えたであろう」

そんな感じで、美由希と小次郎は目に付き易い城を話題にしており……

「ね、私達は二人で回りましょ」

「……構わないが、アーチャーさん達に負担が」

「何言ってるの。きっとなのはちゃん達は子供達だけで回るわよ。あ、セイバーとライダーは一緒でしょうね」

忍と恭也は既に恋人気分全開で腕を組んでいる。忍も恭也も美形なものだから、通り過ぎる者達が思い思いに見つめていた。

「ね、ね、どれから乗るんだい？」

「ランサー、これなどどうです？」

「……とりあえずよ、腕を動かし辛いんだがな……」

両腕をアルフとリニスに完全ロックされ、ランサーは場内案内を見てはしゃぐ二人に、力無くそう呟くのが精一杯。

「ファリン、どこへ行くのです？」

「アーチャーさんのお手伝いをしてきます」

「必要ありません。ここで待ちましょう」

「……あ、女性に話しかけられています」

「行きますよ。アーチャー様が困っています」

ファリンの言葉にいつもと同じような反応でありながら、ノエルは素早くアーチャーのいる方へと歩き出す。それを追い駆けるファリン。

実際には写真を撮ってほしいと頼まれただけなのだが、それを知ってか知らずか二人は急ぐ。

そして、そんな周囲を見つめ、ため息を吐くライダー。

「やはり取り残されている感が……」

「ライダー、何故そんな顔をしているのです？」

「セイバーには、きっと分からないでしょう」

「？」

セイバーはライダーの言葉に不思議そうに首を傾げた。その手には、しっかりと場内案内が握られている。しかし、ライダーは知っている。セイバーがアトラクションの紹介ではなく、レストラン等の案内ばかりに目を通していた事を。

故にため息。自分はセイバーと二人で、なのは達と行動を共にするだろうと予想していたからだ。

その予想は正しく、それぞれ入場パスポートを受け取ると、保護者勢が一斉に別れて行動した。ま、それに文句を言う者は表向きは居なかった（ライダーは内心不満だらけ）ので、なのは達子供組は、セイバーとライダーが監督役して随行する事になり、シグナム達ははやてに付いて行くか迷ったが、ザフィーラのなのは達と共に過ごさせようとの提案に、それもそうかと頷き、アーチャーに案内や説明を頼もうとそちらへ行った。

こうして、純粋カップルが二組、トリオが一組、子供組＋α、そして弓兵とメイドと守護騎士達組と分かれる事となった……

「どれに行く？」

「そうだな……この海賊のやつがいいんじゃないか？」

恭也が提示したのは、カリブ海の海賊を主題に扱ったアトラクション。ガイドブックにも乗る程のメジャーなものだ。忍はそのチョ

イスが恭也らしいと思い、内心納得して笑みを向ける。

「じゃ、それにしましょ。ほらほら急ご」

「分かったから、あまり引っ張るな」

嬉しそうに腕を絡ませ、歩き出す忍。それに苦笑しながらも、嬉しそうな恭也。最近は中々二人っきりでという事がなく、忍は今日の行事をデートとするべく計画を練っていたりする。

一方の恭也も、そんな忍と違った意味で今日を恋人らしく過ごそうと決めていて、忍のワガママを出来うる限り叶えてやろうと思っていたりするので、似た者同士と言っておこう。

そんな二人がアトラクションへ向かう中、その後ろを美由希と小次郎が二人に気付かず歩いていた。

二人は腕を組んだりはしていなかったが、その体の距離は近い。ちなみに小次郎はいつもの作務衣ではなく、チェック柄の上着にハーフズボンという格好。流石に行楽地へ行くのに作務衣を許す程、アリサは寛大ではなかった。

「ここまで人が多いとは……」

「そうですよね。あたしもここまではちょっと……」

夏休みという事もあり、普段以上の賑わいなのもあって、美由希も予想以上だと感じていた。だが、どこか呆れた感じの小次郎と違い、美由希は楽しそうだ。そう、小次郎との初めてのデート。そんな風に思っていたからだ。しかも、一度来てみたいと思っていたテーマパークというオマケ付き。

（後は、手を繋げでもしたらいいんだけど……）

そんな事を考え、美由希はちらりと小次郎の方へ視線を向ける。小次郎は美由希の視線に気付かないのか、ただ周囲の風景や人々を眺めていた。

学生達やカップルが多い中、楽しそうな家族連れの姿に、小次郎はどこか優しげな眼差しを見せる。それが美由希の鼓動を高鳴らせた。

（やばいなぁ……あれ見るとしばらく顔赤いんだよね、あたし）

そう思い、小次郎から視線を外す美由希だったが、それを小次郎が気付き不思議そうに問いかけた。

「どうした？　目にゴミでも入ったか？」

「あ、いや……別にそういう訳じゃ……」

「なら良いが……もしそうなら早めに言ってくれると助かる。私だけが楽しんでも仕方ないのでな」

その小次郎の一言に、美由希の思考が一瞬停止。そして、その内容を理解してどこかぎこちなく尋ねる。どういう事ですかと。それに小次郎は先程の優しい眼差しでこう告げた。

「何、美由希殿が楽しめねば意味があるまい。ここは女子供が楽しむ場所だと聞いた。しかし、俗世に疎い私も中々に楽しめておる。ならば、共に楽しめた方が良かろうと、な」

「小次郎さん……」

その言葉に美由希は呆然となる。それは彼女にとっては意外な言葉。自分に対する気遣いや思いやり。その気持ちを感じる事が出来たからだ。

そんな嬉しそうな表情で呟く美由希に軽く微笑むと、小次郎は歩き出す。そして一度立ち止まり、振り向いて一言。

「それに、美由希殿の笑みは見ていて飽きぬ」

「え……？」

その言葉を聞いて、美由希はしばらく立ち尽くす。それを言った小次郎は、既に歩き出していた。そして、美由希はその意味を理解した瞬間、爆発したかのように顔が赤くなった。それに気付かず、小次郎は先を歩いている。その背中を見つめ、美由希は何かを決意したように眼鏡を外した。

そして、先を歩く小次郎へ向かって呟く。

――――さっきの言葉……絶対忘れませんからね。

小次郎と二人の時は、眼鏡を外す。それを美由希は決意した。それは従来の”剣士”としての自分ではなく”女”としての自分になるという想い。

それを意識したのは、小次郎の言葉。恭也の時はここまでならなかった恋慕の想い。その違いは、やはり義理とはいえ”兄妹”というものが影響していたのだろう。だからこそ、小次郎への想いは大きくなる。歯止めがない故に、それをする必要がない故に。

「小次郎さん、待ってくださいよ！」

そう言って美由希は追い駆ける。それに小次郎が振り向き、微か

に驚いたのを美由希は見逃さない。そして、内心の動揺を抑え込んで小次郎の手を掴んだ。
その行動に小次郎が一瞬戸惑ったが、何かを察したように頷いてその手を握り返した。

「あ……」

「共に楽しもうと言っておきながら、置いていくのは少々配慮に欠けたか。それに、これならば人が多くなろうとそうそうはぐれまい」

「……ですね」

（も～、あたしが勇気を出してやったのに！　……まぁ、小次郎さんらしいか）

そう思って美由希は笑う。それに小次郎も笑みを返し、ふと呟いた。

「眼鏡はどうされた？」

「二人っきりの時は、外そうと決めたんです」

そう答えて美由希は小次郎の手を引っ張って歩き出す。それにやや不思議そうな表情の小次郎だったが、その気持ちを声にする事はなかった。何故なら、見つめた美由希の表情は、とても楽しそうな笑顔だったのだから……

その頃、時空管理局本局にある無限書庫では……

「……リンディさん達に秘密で、それに関する事を調べればいいんですね？」

「ええ。アーチャーさんが貴方の現状を知って、そう伝えてほしいって」

ユーノはプレシアの言葉に頷き、笑みを見せた。それは、必ず期待に応えてみせるというもの。それを感じ、プレシアは笑う。どこも男は同じなのだと思ったからだ。

何せユーノの反応は、自分がかつてランサーに頼み事をした時とそっくりだったのだから。

そして、プレシアはフェイト達の近況を伝え、ユーノから伝言を頼まれた。それを確かに伝えると告げ、帰る事になる。その伝言とは……

――――何とか、夏が終わる前に地球に戻れるだろうから、それまで待ってて。

と言うもの。それを思い出し、プレシアは小さく笑みを浮かべる。仕事の話をした時は、どこか大人顔負けの雰囲気だったのに、話がなのは達の事になった途端、歳相応の雰囲気へ変わったからだ。

その変化に微笑ましいものを感じつつ、プレシアは願う。ユーノの調査で最悪の結果が出ない事を。そう、アーチャーがプレシアに頼んだのは、闇の書に関する調査。ユーノが無限書庫と呼ばれるデータベースで働いている事を知った彼は、定期連絡のついでにその事をプレシアに依頼したのだ。

それはプレシアも考えていた事だったので、二つ返事で了承した。そして、ユーノへはアーチャーからの頼みとして伝えたのだ。

（その方が、彼もやる気が出るでしょう）

そう、アーチャーから頼りにされたと思う事で、ユーノのやる気を出させようと考えたのだ。その目論見は当たり、ユーノはクロノからの依頼と並行する形で、闇の書に関する調査にも精力的に乗り出す事にするのだった。

「さて、と……リンディさんへの報告も終わったし、ユーノ君への依頼も済んだ。後は……レティさんにでも会っていこうかしら」

仕事が忙しくなければいいのだけど。そうご近所に遊びに行くような口調でプレシアは呟いた。

そして、彼女はレティへ会いに行き、そこである女性を紹介される事になるのだ。その出会いは来るべき時の備えへと繋がる事になる。

「何も異常なし、ね。まぁ、分かってはいたけど、平和よね。管理外ですもの」

先程のプレシアからの報告を思い出し、リンディは笑う。そして、視線を手元の書類へと落とす。それは、グレアムからのもの。内容は、地球への干渉は極力さけるべし。つまり、本当に必要にならない限り手を出すなというものだった。

それがどういう意味で送られて来たものか、リンディも理解している。

（管理外への余計な干渉は、いらぬ誤解や問題を起こす可能性があ

るものね。提督の懸念ももっともだわ。でも……）

――――何故改めて、こんなものを送ってきたのかしら……？

上層部からの圧力対策なのだろうとは思うのだが、何故かリンディは妙に引っかかるものを感じたのだ。まるで、自分達は地球へ関わって欲しくないとでも言うように。

そんな考えを浮かべ、リンディは「まさかね」と呟き、手元のお茶を手に取って飲み干す。

「もう少ししたら、また纏まった休暇が取れそうだし……そうなったら、アーチャーさん達にでも会いに行きましょうか」

楽しい時間の影で動く者達がいる。出会いを持つ者、期待をされる者、未だ事実を知らぬ者。

幾多の想いが交錯し、いずれ来たる道筋を変えていく。それは、奇跡への序章なのかそれとも更なる悲劇の幕開けか……

――――――

地味に描写大変ですが、そこは何とか頑張ります。忍と恭也は、今回はこれでおそらく出番終了（汗

美由希もこれで出番なしですが、彼女は大健闘です。次回は他の組を描きます。

交流編その3　中編

道行く者達のほとんどが振り向いては、男は何とも言えない顔をして、女はどこか呆れ顔。その視線を注がれているのは、誰であろうランサー達であった。

両腕にリニスとアルフという美人を侍らせているため、その様子は否応無く目につく。しかも、二人はいがみ合うのではなく、楽しそうにしているから余計だろう。しかし、何故かそんな美人二人とは正反対に、ランサーは疲れていた。

腕を組むのは流石に止めてもらったようで、今は二人が腕にくっつく形となっている。

「へぇ、ここは雰囲気がさっきまでと違うね」

「どうやらここは……西部劇というものを意識した場所らしいですね」

楽しそうに周囲を見ている二人。ランサーはそんな事とはお構いなしに、視線を近くの売店用のワゴンへ向けた。そこには、このテーマパークのキャラクターを扱ったグッズが並んでいる。

その中の一つにランサーの目が留まる。それに気付いたのか、二人もランサーの視線を追って……

「あれは……ピンバッチでしょうか？」

「そう……みたいだね。で、あれがどうしたのさランサー」

「いや、記念に買ってこうかとな。あれなら場所も取らねぇ」

そう言ってランサーが売店へと近付いていくので、二人もそれについていく。それに売り子の女性が、営業スマイルの見本のような笑顔で対応する。それにランサーは軽く笑うと、二人の方へ振り向いてどれがいいかと尋ねた。

それにやや驚きながら、二人は少し悩みながら選んだ。ランサーはそれと自分の分も買い、女性に礼を言って歩き出す。

「ランサーが買ってくれるとは思いませんでした」

「アタシも。てっきり自分の分かと」

意外そうに言った二人の言葉に、ランサーはどこか呆れたような顔で返す。

「俺があんなもん欲しがるかよ。ま、それでも一応買ったんだが……」

あれは売り子の姉ちゃんが愛想良かったからな。そう言って笑うランサー。そこには二人も納得の笑み。確かに見ていてこちらも笑顔になるような笑みだったのだ。

そして、ランサーは買ったピンバッチを見せて笑った。

「で、付けてやろうか？」

「「お願い（します）」」

即答。それにランサーも一瞬呆気に取られるも、すぐに苦笑し、リニスとアルフへそれを付けた。胸元に付けるかと思いきや、そこはランサー、首元近くへと付けた。

リニスはネズミのカップルのもの。アルフはアヒルのカップルの

ものを選んでいた。特に理由はないが、何故かそれが良かったのだ。
後で知るのだが、ネズミのカップルは概ね仲良く過ごす恋人関係に対し、アヒルの方は喧嘩が絶えないような恋人関係だった。それが自分達の関係に似ていると感じ、二人は苦笑する事となる。

「さて、とりあえず何か乗るか」

「あ、じゃあアレにしようよ。ここで一番人気だってさ」

「ですが、かなりの待ち時間ですよ？」

「いいさ。話してりゃ意外とあっさり過ぎるもんだ。行こうぜ」

リニスの懸念にランサーはそう笑って言うと歩き出す。アルフもそれに続けと歩き出し、リニスも仕方ないとばかりに動き出す。
この後、夕方の集合時間まで三人は色々と歩き回るものの、アトラクションには数える程しか乗れなかった。原因は、アルフの乗りたがるものが人気の高いものだった事と、ランサーの無計画な行動だった。

それでも、リニスもアルフも満足していた。ランサーがプレシアへの土産に悩み、食べ物を選んだ時などは二人して即座に突っ込んだ程だ。そして、二人にとって忘れられない出来事もあったからなのは言うまでもない。
それは帰る前に見たパレードの最中、ランサーが二人を抱き寄せて言ったのだ。

――――俺は最高に幸せだぜ。

それに二人が心の中で、同じ言葉を返したのは言うまでもない……

キャラクター達が住む町をイメージして作られた一角。そこにアーチャーはいた。備え付けられたベンチに腰掛け、隣にはザフィーラがいる。

そしてその視線は目の前に注がれていた。そこには、ファリンとシャマルが楽しげにグッズの売店を眺めており、ノエルとシグナムは、目の前でポップコーンを作って販売しているのに、やや驚きながらも関心を寄せていた。

残るヴィータはと言えば……

「お～、スゲェ……」

一人待つ事無く入れる遊具や場所などを歩き回っていた。ちなみに、今はリスの双子の家で他の子供達と共に眺めを見ていたりする。

「……楽しんでいるようだ」

「まったくだ。誰だったか、自分は子供ではなく大人だと言い張っていたのは」

現在、そんなヴィータは、二人が座っているベンチからも見える位置にいる。そのため、ザフィーラがそう呟いたのだが、それをアーチャーも聞いていたようで、そう答えた。

それは、ヴィータがここに入ってからすぐに言った言葉。アーチャーが、ヴィータはなのは達子供組と一緒に行けばいいと発言した途端、ふざけるなとばかりにそう返したのだ。

「言わんでやってくれ。ヴィータはヴィータで色々思う事もある」

「そうだな。ま、楽しんでいるなら何よりだ」

「ところで……」

そう言って周囲を見渡すザフィーラ。それにアーチャーも反応し、周囲を見渡す。特に何も可笑しい物はないと思い、視線をザフィーラに戻したが。

「どうかしたか？」

「いや、随分と賑やかだと思ってな」

「それは当然だ。この国で一番人気のテーマパークだからな。年中人が多いらしい」

「そうなのか……ここは平和なのだな」

しみじみと言うザフィーラにアーチャーは軽く笑い、静かに告げる。この国は平和だが、海外には未だに争いが絶えない国もある。どこも平和な場所とそうでない場所があるのだと。

そう語るアーチャーに、いつもはない哀しみを感じ、ザフィーラはつい尋ねた。お前はそういう現状を見てきたのかと。

「……ああ。救おうとしても救えず、救えた時は僅かばかり……そ

んな光景を何度となく、な」

「……すまん」

「いや、気にしないでくれ。ただ、出来れば……」

「分かっている。主達には言わん」

「……助かる」

静寂。僅かに垣間見えたアーチャーの過去。それにザフィーラは思う。自分達も幾度と無く戦乱の光景を見てきた。だが、そこに自分達の感情など無かった。故に分かるのだ。血で血を洗う戦場。そこに生きる者達とは違い、そこに巻き込まれた者達を救おうとしたら、その者はどれ程の苦しみや空しさを抱く事を。

今日救った命が明日には散る。明日救った命もすぐに散る。そんな事が日常的に起きる中、それでも多くの命を救おうと足掻く事は、きっと……

（耐え難い苦行だろうな。特に、アーチャーのような者にとっては）

今の自分ならば少しは分かる。どうして、いつの世もそんな戦場でそんな事をする者がいたのか。きっと、それは嫌だったのだろう。望んだ訳でもない戦いに巻き込まれて死ぬ者が出る事が。傷付き、苦しみ、悲しむ者が生まれる事が。

だからこそ、足掻いたのだろう。自分が出来る事など高が知れている。されど、一人でもそれから救えるのならば……

（そうやって生きていたのか、この男は……であれば、主達の平穏を願うのも頷ける）

あのフェイト達が帰還した日、シグナムからなのはの蒐集協力を聞いたアーチャーは、珍しくやや怒ったように言ったのだ。

「君は、蒐集行為がどんな意味を持つか知らない訳ではなかろう。それになのはを加担させるつもりか。明日にでも協力はいらないと告げろ」

それには、シグナムだけでなく守護騎士全員が驚いた。なのはの想いを汲んだ判断だとアーチャーも理解している。だからこそ、受けてはいけないのだとアーチャーは続けた。

そして、最後にこう締め括った。一度受けたものを完全に拒否するのは、なのはにも悪い。だから、協力が必要な際はこちらから頼むとしようと。その提案にシグナムも賛成し、アーチャーへ謝罪した。自分が浅慮だったと。それにアーチャーはややすまなそうに答えたのだ。

「いや、私も少し言い過ぎた。君の判断も彼女の心を思いやっての事だろう。それは嬉しいのだ。

だが、本当に彼女の事を想うのなら、どうすれば一番誰もが笑っていられるか。それを考えて欲しい」

その言葉に全員が頷き、そして笑った。はやてが主なら、アーチャーは長とも呼ぶような存在になっていたからだ。シグナムやザフィーラが助言を仰ぎ、シャマルと共に知略を練り、ヴィータの抑えとして目を光らせる。

冗談でヴィータが一度「なぁ、団長」と呼んだ時など、シグナム達四人して笑ったものだ。アーチャーだけは憮然としていたが。

そんな事を思い出し、ザフィーラは微かに笑う。それにアーチャ

ーが気付くも、ただの思い出し笑いだと答え、それに応じた。

「アーチャーさ～ん、これ食べますか？」

「ザフィーラ～、何か飲む～？」

そんな二人にファリンとシャマルが呼びかける。どうやらグッズの方から飲食へと移動していたようだ。それに、内心色気より食い気かとアーチャーは思って笑みを浮かべると、隣のザフィーラも同じように笑っていた。

その笑みの理由が自分と同じだろうと思い、アーチャーは「彼女達らしいな」と告げた。それに「そうだな」と返したので、ザフィーラも感じた事は同じだと確信した。

「あ～、疲れた。ガキが多いな、ここ」

すると、ヴィータが嬉しそうな笑みを浮かべて二人の方へと歩いてきた。どうやら、ヴィータからも二人が見えていたようで、休憩がてら近付いたようだった。

そんなヴィータの言葉に、二人は良く言うと思っていたがそれを口にはせず、アーチャーは別の言葉を紡いだ。

「良い所に来たな。ヴィータ、シャマル達が何か売店で買うらしい。君はどうする？」

「お、じゃ……あれ、あれが食いてぇ。あのネズミの形した食べ物」

ヴィータが指差したのは、メインキャラクターのマークを模したプリエッツェルのパン。ここのエリアでしか売っていないものだ。

それに頷き、アーチャーは立ち上がる。そして、ザフィーラもつ

られるように立ち上がり、共にシャマル達の元へと向かう。

二人にアーチャーはアイスティーを頼み、ヴィータをつれて先程のパンを買いに行く。それを二人に説明し、ザフィーラは適当に頼んでおいてほしいと告げると、シグナム達の方へ向かった。あの二人にも聞いてくると言って。

「何か、ああしていると兄妹ですね」

ファリンの言葉にシャマルが視線を追う。そこには、アーチャーからパンを渡され、嬉しそうにかぶりつくヴィータがいた。それを見て、アーチャーは笑みを浮かべている。

「そうね。でも、年齢はヴィータちゃんの方がお姉さんなんだけど……」

「そうなんですよねぇ。まぁ、ヴィータさんは可愛らしいですから」

「……本人は複雑なんだけどね」

ファリンの言葉に苦笑するシャマル。そこへシグナムとノエルがやってきた。ザフィーラに言うより、自分達で直接言いに来たようだ。

そして、二人もどうやら同じ光景を見ていたようで、着くなり「ヴィータは子供と大差ないな」と苦笑しながらシグナムが言った。

それにノエルもやや笑いながら頷いた。どうやら同じ感想を抱いたらしい。

そうしてシグナムもザフィーラのように適当に頼むと告げると、ヴィータ達の方へと歩いて行く。ノエルはファリンと共に受け取る

事を考え、その場に残った。シャマルはそんなノエルに感謝し、注文をしていく。

すると、後ろの方で何やら騒がしさが増した気がしたので、シャマルは振り向いた。そこには……

「パレード、ですね」

「定期的にやってるんですよね、確か」

キャラクター達が大勢歩いていたのだ。どうやらノエル達の言う通り、定期的なものらしく、売店の女性がそうシャマル達に教えてくれた。時間も決まっているので、それを考えて場所取りする人も多いんですよ、と笑顔で告げる女性にシャマルは頷き、時間を尋ねる事にした。

それを聞いて、シャマルは念話を使ってなのはにそれを教える事にする。それが、後でなのは達の予定を決めるキッカケとなるのだが、それはまた別の話。

そんなシャマル達とは離れた場所にいたアーチャー達だったが、その光景には目を奪われていたのは同じで……

「凄いな……これ程の数がいようとは」

「これでも全部ではないはずだ。それに、本当に大掛かりなのは大通りでやるものだからな。これは小規模なのだろう」

感心するシグナム。それにアーチャーが補足と説明を交えた言葉を返し、それにシグナムが再び頷いていた。その横では、ヴィータが去っていくキャラクター達に手を振っていた。他の子供がやっていたのを真似たようだ。

「あ、手ぇ振り返してくるぞ」

「……楽しそうで何よりだ」

嬉しそうに手を振るヴィータを見て、ザフィーラはやや苦笑気味に呟いた。その騒ぎが落ち着いたところで、シャマル達が飲み物等を持ってきた。そして、売店前のテーブルに着き、談笑などをしながらこれからについて話し合う。

アトラクションに乗る事は決まったのだが、どこに行くかが中々決まらないのだ。宇宙を舞台にしたエリアや西部劇のエリアなど、様々な場所があり、頭を悩ませていたからだ。主にヴィータとファリンとシャマルが。

結局、どこと限定するのではなく、近くから見ていこうと決まり、七人は動き出す。当然のようにファリンはアーチャーの横。ノエルはファリンとは反対を陣取り、シャマルとシグナムはそんな二人の後ろ。ザフィーラは一番後ろをヴィータと共に歩いている。

「アーチャーさん、楽しんでますか？」

「ああ……ファリン、腕を掴まれると歩き辛いのだが……」

「そうですよ、ファリン。アーチャー様が困っています」

「な、アーチャーの奴って……」

「おそらくそうなのだろう。だが、意図的に気付かぬ振りをしているようだ」

ファリンに腕を掴まれ、やや困った表情のアーチャーを見て、ヴィータはそう尋ねた。ザフィーラもそれに頷いて、所感を述べる。

一方、シグナム達もそれを見て想う事があるらしく……

（ファリンの行動に困るのなら、そう言えばいいものを。何故言わないのだ？）

（ファリンちゃんってば、大胆なのね。ノエルさんもさり気無く隣歩いてるし……）

どう見てもファリンの好意は明らか。にも関わらず、アーチャーはそれに苦笑で対応している。見る者が見れば、兄妹のようにも見えない光景だが、親しい者が見ればそれが違うものだと分かる。

ファリンは腕にしがみつくだけでなく、胸を軽く押し当てているのだから。先程からのアーチャーの苦笑が段々失せ、今はやや強張ったものになっているのが何よりの証拠。

「シャマル……」

「何？」

「助け舟でも出すか？」

「……そうね。本当に困ってるみたいだし」

そう言って頷き合う二人。それぞれが目の前の相手に近付き、声を掛ける。

「ねぇファリンちゃん。アーチャーが困ってるし、人目もあるからそろそろ……ね？」

「ノエル、お前も姉ならもっと強く言い聞かせたらどうだ」

「う～……はぁ～い」

「そうですね。もう少しきつく言うべきでした」

二人の言葉にどこか渋々という感じで従うファリンと、少し申し訳なさそうなノエル。するとノエルは足を止め、ファリンへ軽く注意を始めた。それに、アーチャーは気付かれぬよう安堵の息を吐き、シグナムとシャマルへ振り向いて礼を述べる。

「……すまんな。気を遣わせて」

「いいのよ。ちょっと行き過ぎてたと思ったし」

「ああ。それにしても……ノエルはもっとしっかりしていると思ったが、見込み違いだったか……？」

シグナムの言葉にシャマルが一瞬呆気に取られ、すぐに念話で尋ねた。分からないの、と。それにシグナムは真剣に何がだと返し、シャマルは確信した。

シグナムが男女の機微に疎いのだと。端から見ればファリンだけでなく、ノエルもアーチャーに好意を抱いているのは分かる。理由は距離感である。ノエルは、アーチャーと触れるか触れないかの距離で歩いていた。それは心の距離である。

おそらくノエルも許されるなら、ファリンのように腕を掴んだりしたいのだろう。だが、それをアーチャーが嫌がると知っているから、距離だけ詰める事で我慢しているのだとシャマルは思った。

（でも、考えてみれば当然よね……）

今まで恋愛など関係ない時代や場所で生きていた自分達。それが突然、平和で人間らしい暮らしに放り込まれたのだ。なら、シグナムのような反応も当然だ。考えたり感じたりする事がない物事。それに段々触れていく事で慣れていくのだから。

【どうした？　何がお前には分かったのだ】

【えっと、シグナム？】

【何だ】

だからこそ言おう。未だにどこか平和に馴染み切れない家族に。

【それは、貴方自身で理解しなきゃダメな事よ】

人から答えを得るのではなく、自分でそれを得て欲しい。いつかシグナムにも、女として好意を抱く相手が出来るかもしれない。そう思って、シャマルは言った。何でも答えを人に頼ってはいけないと。

その言葉にシグナムも感じるものがあったのだろう。何か気付かされたという表情で頷き、笑みを見せて答えた。

【何故かお前に諭されてばかりだな】

【いいのよ。その代わり、私も頼りにさせてもらうわ】

【ふっ、自分で理解しなければならんぞ？】

【もう、シグナムも意地悪言うようになったのね】

そう言いながらもシャマルは笑顔。それはシグナムも同じ。そんな二人に、アーチャーは不思議そうな顔を向けるが、何か思ったのか柔らかな笑みを浮かべた。

それに気付き、シャマルが尋ねる。何か自分達に思う事でもあるのかと。それにアーチャーは嬉しそうな声で答えた。

「何、君達もそんな風に可愛らしく笑うようになったのだな、とね」

「「っ！？」」

「良い変化だ。きっと、その内惚れる男性でも現れよう」

そうからかうように告げ、アーチャーは視線をノエル達へ戻して歩き出す。どうやらファリンが何かノエルに反論したようで、本格的な説教が始まりかけていたのだ。

それを眺め、ヴィータとザフィーラは困り顔。そこへアーチャーが仲裁に入り、ノエルとファリンに変化が起こる。それに安堵するヴィータ達とアーチャー。ノエルはアーチャーへ軽く頭を下げているので、おそらく謝っているのだろう。ファリンも同じ様にしているので、揃って反省はしたようだ。

そんな様子を見つめ、シグナムとシャマルはアーチャーの一言を思い返していた。可愛らしい。そんな言葉を言われた事がなかったからだ。この身は守護騎士であり、ただ蒐集をし、主を守るものでしかない。つまり、”女”として扱われた事はあっても”女性”として扱われた事などなかったのだ。

故に、先程の言葉の衝撃は二人にとっては大きなものがあった。

（可愛らしいなど……私は騎士だ。烈火の将であり、剣の騎士シグナム……だが、今はただのシグナムでもいいと言う事か……？）

（はやてちゃんと出会ってから、初めての連続だったけど……今回は本当に驚いたわ。可愛らしい、か……いいものね、男の人にそう言われるのも）

それぞれに考えながら、視線は自分達に変化を与えたキッカケの一人である男へ向けている。その相手――――アーチャーは、再びファリンにくっつかれ、今度は手を繋がれていた。ノエルもそれは注意する事ではないと静観しているが、その表情はどこか羨ましそうだ。

ヴィータとザフィーラは、互いに苦笑しながらアーチャーを見つめ、アーチャーは諦めたような雰囲気を漂わせていた。

（やれやれ、この分ではいつまでも誤魔化せんか）

内心そう思いながらも、アーチャーは笑う。失ってしまった時間、想い、それらを取り戻すような日々。それに心からの感謝と誓いを新たにする。

”正義の味方”。その一度見失った夢を、今度こそ貫き通すために。

（貴様が言ったように、もう私も”自分”にだけは負けん。お前が貫くように、私も私の道を貫いてみせよう……）

平穏の中、色付く想い達。抱きし想いを深める者。生まれし想い

を感じる者。そして、取り戻せし想いを新たにする者。
　それは、かけがえのない物へと変わり、いつか来る時に備える力となる。

――――――

交流編その3　後編

「まずはどうする？」

「そうやね。とりあえずお土産から見ておくのがええ思う」

散り散りに歩いて行った兄達を見送って、なのはがそう問い掛けた。それにはやてが即座に答える。帰りに土産を見るのは、みんな同じ事を考えるから時間が掛かって大変だから、ある程度買う物を決めておき、帰りにそれを買って帰るのがベストだと。

それに全員が納得すると同時に感心。それにはやては、アーチャーからそう教わったと笑顔で告げた。それに全員が笑い、アーチャーなら納得と口々に告げる。

「じゃ、まずはお店巡りね」

「ここはそういう場所だから丁度いいね」

アリサとすずかが笑みと共にそう言えば……

「フェイト、どういう事？」

「えっと、ここ一帯が全部お土産を売ってるお店なんだよ」

「きっとアリシアちゃんが欲しいものが見つかるよ」

フェイトの説明になのはがそう続け、アリシアが驚きながら周囲を見渡し……

「ライダーさん達、ほんまにわたしらと一緒でええんです？」

「ええ。万が一もありますし、何より……」

はやての言葉に、ライダーは頷いて視線を動かした。その先には……

「……クッキーですか。この缶は小物入れに使えそうですね。こちらは……サブレですね」

店のウィンドウを外から覗き、値札と名称を確認しているセイバーがいた。目にしている物全てが食品関係である事に、ライダーは軽く頭痛を覚えた。

「彼女の抑えもしなければなりませんので……」

どこか疲れたように告げるライダーに、はやては心の底から同情し、ご愁傷様ですと労わるように声を掛けるのだった……

後編　遊園地は、ドキドキワクワクなの！

お土産物を選ぶ事になったなのは達だったが、思っていたよりもあっさり決まった。というのも、店は確かに沢山あるのだが、大抵が同じようなものなので、三軒目辺りで決まったのだ。

それもほとんどが食品系。これは、入れ物が可愛らしく食べ終わ

った後も使える事と、当たり外れが少ない事が理由に挙げられる。
それと、売り切れる心配もないというのも大きな理由。小物系は種類は多いが数が多い訳ではなく、欲しいと思う物が無くなる可能性もあるからだった。

「でも、あれぐらいなら平気だもん」

「アリシア、何言ってるの？」

「だってすずかが、今買うと邪魔になるって言ったから」

ボールペン等を眺めていたフェイトだったが、突然聞こえたアリシアの言葉に振り向いてそう尋ねた。それにアリシアはそう答え、すずかを見る。

その視線を受け、すずかは苦笑しつつ頷いた。そう、確かにそう言ったのだが、それには理由がある。何せ、アリシアが最初買おうと思っていたのは……

「でも、流石にアレは止めた方が……」

そう言ってすずかが指差したのは、メインキャラクターの大きなヌイグルミ。それを見て、フェイトも納得。その大きさでは、邪魔どころか持ち歩く事さえ困難だろう。アリシアよりも大きいのだ、そのヌイグルミは。

ちなみにヴィータも帰りの際、それを見つけ一瞬悩んだが、結局諦める事になる。理由はアリシアとは違い、金額だったが。

そんな三人の後ろでは、アリサとはやてが相談中。キャラクターを模したスプーンやフォーク等を買うか否かで迷っているのだ。

アリサは買っても家では使う機会が中々無い。はやては人数分買

うとなるとお値段が……と言ったところ。故に何か落とし所か無いか案を出し合っていた。

「何とかならないかしら」

「そうやな……あ、こんなんどう？」

はやてが提案したのは、アリサが買った物はアリサ自身のお弁当用にしてもらう。必然的に、お弁当がフォークやスプーンで食べる物になってしまうが、それでも毎日使える。

それを聞き、アリサは成程と納得。そして、今度は逆にアリサがはやてに提案。両方買うと高くつくなら、片方だけにすればいい。それも、使う機械が多い物を。

それにはやてが納得。名案とばかりにスプーンを人数分確保した。ヴィータがよくアイスを食べ、シャマルが翠屋で働き出したため、八神家はデザートが良く食べられる。プリンやゼリー等をアーチャーも作ったりするので、確かにスプーンの方が使うだろうと思ったのだ。

二人がそんな話をする頃、店の外では、先に土産の選別を終えたなのはが、セイバーやライダーとこの後の事を打ち合わせ。

「まず、人気のものから乗るべきですね」

「しかし、それは時間が掛かるし、個人の希望も違うのでは？」

「セイバー、効率を考えれば近いものからです。それに、スズカ達は乗りたい物に乗るより、皆で過ごす事がメインなのです」

そう言ってライダーは視線をなのはへ向ける。それになのはも笑

顔で頷き、セイバーへ告げた。自分も乗りたい物はあるけれど、皆で楽しく過ごす方が楽しいからと。

それにセイバーも頷き、ならばここですねと一番近いエリアを指差した。宇宙を意識したエリア。そこのコースター系のものをセイバーは提案した。それにライダーも同意し、なのはへ意見を求めた。

「そうですね……みんな次第かな？」

「……確か、絶叫系と言うのでしたね。好き嫌いがあるそうですが」

「絶叫？　それ程恐ろしいと言う事ですか……」

「せ、セイバー、身構えなくていいから」

何やら変な想像をしたのか、セイバーは警戒するような姿勢を取る。それに周囲の視線が集まり出し、なのはが恥ずかしそうにそれを止めさせる。そんなやり取りを微笑ましく思いながらも、ライダーは別の事へ想いを移す。

（絶叫系、ですか……どれ程の乗り物なのでしょう。楽しみですね）

騎乗兵、ライダー。未だ知らぬ乗り物への期待と興味において、彼女の右に出る者はいない……

メルヘンな世界が売りのアトラクション。”小さな世界”と呼ばれるその前になのは達はいた。だが、そこに先程までいたはずのライダーとセイバーがいない。代わりにいるのは小次郎と美由希。

実は、あの後行ったアトラクションでアリシアが身長制限で引っ

かかったため、二人も乗るのを止めようとしたのだが、なのはやすずかが折角だからと言って乗らせたのだ。そして、見事に――――はまったのだ、そのスリルや疾走感に。

現在二人は他の絶叫系を求めてエリアを移動中。ライダーは流石にすずか達から目を離すのは嫌だったのだが、そこへ偶然二人が通りかかったのと、なのはがいざとなったら念話で助けを呼べると告げると、どこかすまなさそうにしながら、セイバーと二人で行動したのだ。

「綺麗だったね」

「うん。可愛かったしね」

「まぁ、悪くはなかったわ」

そんな二人とは対照的に、幻想的なアトラクションに満足した様子のなのはとすずか。二人が先程の光景を思い出してそう言えば、アリサがまあまあねと言わんばかりにそう続く。その後ろでは、はやてがアリシアとフェイトと次に行くアトラクションを思案中。

乗り物系もいいけど、他の物はないのとアリシアが言えば、はやては手元の案内に乗っている名前からそれらしいのを探し、フェイトは時折通るキャラクターに手を振ったりしていた。

そんななのは達を見て、小次郎と美由希は微笑み合う。

「ね、写真撮ってもらおうよ」

「フェイトちゃん、ほんまに元気やな。わたしもここのキャラ好きやけど、そこまで興奮せんわ。後、あまり撮り過ぎるとすぐフィルム無くなるで？」

「あ、ブタさんだ～」

そうこう言っていると、また別のキャラクターが通り過ぎ、フェイトはそちらへ視線を向けて手を振った。それに向こうも気付いたようで、手を振り返してきた。

それを見て、フェイトは笑みを浮かべて手を振り続け、見えなくなったところで一言。

――――……大変だろうな、ああいう仕事。

「とか言わへん？」

「い、言わないよ。というか、勝手な想像しないで」

はやての発言に少し困ったように反論するフェイト。フェイトはあの中に人が入っている事は知っていた。いや、今は知っているというべきか。

実は彼女は、ついさっきまで着ぐるみだと知らなかったのだ。それを教えたのは他でもないアリシア。フェイトが嬉しそうにリスのキャラクターに握手して貰って帰って来た際、アリシアがそのキャラクターを見て呟いたのだ。

中の人って、疲れないのかな。その言葉にフェイトは思考停止。そして、若干の間があってから尋ねたのだ。どういう事、と。そして、フェイトは現実を知り、かなりのショックを受けたのだが、それを気の毒に思ったなのはがこう言ったのだ。

――――本物はね、みんなの中にいるんだよ。それを信じる人の心の中に。

その言葉に頷いて、フェイトは立ち直ったのだ。だからこそ、余

計に写真を撮りたがる。あの人達もキャラクターを信じている人達だろうからと。その心は自分と同じだと。

それを知ってか知らずか、はやてはまたからかうように告げた。

「仕事やからなぁ。大人も大変や」

「はやて～」

「フェイトいじめるなら、わたしも怒るよ」

「アリシアちゃんまで怒らんといて。ほんまにごめんなさい」

姉妹揃ってやや怒り顔。それにはやてが両手を合わせ、堪忍してとばかりに謝った。そんなはやてに二人は苦笑。軽く怒ったのは、はやても分かっているのだろう。それでも、確かにやり過ぎたと思ったようだ。だからこそ、こうして心から謝罪しているのだろうと二人は感じ、笑みを浮かべた。

そんな三人のやり取りを眺めていると、なのはに念話が聞こえてきた。相手はシャマルで、どうも定期的に小規模なパレードがあるらしいとの事。その時間と場所を教えてもらい、なのははシャマルに感謝した。

【ありがとう、シャマルさん】

【どう致しまして。あ、それと大きなのは夕方らしいから、集合前に見れるみたいよ】

【そうなんだ。じゃ、それの終わりが帰る合図になりますね】

【そうかも。じゃ、はやてちゃん達と楽しんで】

【は～い】

シャマルから聞いた話を全員へ話すなのは。それを聞き、フェイトが一度そのパレードを見たいと言ったため、場所を移動しつつ、お昼をどうするかの話になる。誰かが、どこかレストランでも入ろうかと言えば、売店で軽く済ませればいいと誰かが言う。

まぁ、結局レストランに決まったところでパレードが見れる場所へ到着。

フェイトはカメラを構えて準備万端。それになのは達が苦笑し、アリシアはフェイトの意気込みに呆れながら、隣に座ってどのキャラクターが好きかなどを聞いている辺り、アリシアも楽しんでいるのが分かる。

はやてはすずかに疲れていないか尋ねていた。はやての車椅子を押しているのは、ずっとすずかだったからだ。それにすずかは悪戯っぽく笑い「夜の一族を甘く見ないで」と囁いた。

そのどこか艶めいた声にはやては内心ドキリとしたが、首を軽く振って「そうやった。すずかちゃんならここでアトラクション出来るな」と同じ様な笑みで返した。

そんな風に笑い合うはやてとすずかの横で、なのははアリサとある事を話していた。それは……

「セイバー、今頃どうしてるんだろ？」

「ライダーさんがいるから大丈夫だとは思うけど……お昼でも食べてるんじゃない？」

「あ～……でも今の時間は……」

「どこも混んでるでしょうから……大変ね」

「ライダーさん、セイバーを良く知ってるから大丈夫だとは思うけどね」

「ま、どちらにせよ心配なかろう。二人も子供ではない」

時刻は十二時を過ぎていて、周囲へ視線をやれば売店も、そして飲食店も人だらけだった。これが後一時間半もすればそこまでではなくなるだろうが、セイバーはきっと我慢出来ないだろうとなのは達は思った。そして、同時にライダーがどうなるかも。

それを考え、なのはとアリサは苦笑い。そういう自分達も、お昼のピークを過ぎるまで我慢出来るとは思えなかったからだ。

一方、小次郎は美由希に、食事の時間までの繋ぎを買ってはどうかと提案していた。それに美由希も頷き、近くの売店へ向かう。

（セイバー、ライダーさんに迷惑掛けてないといいけど……）

なのはのその心配は、杞憂に終わる。そう、何故ならば……ライダー自身もそれをどうこう言える状況にいなかったからだ。

その頃、セイバー達はと言うと……

「中々良かったですね」

「ええ。特に急降下する時の浮遊感がいいです。あれは馬などでは

得られない」

やや興奮気味なライダーと満面の笑みのセイバー。二人は西部劇を意識したエリアで、コースター系を乗り継いでいた。ここには、二つ人気のコースターがあったからだ。

その分、待ち時間は長かったが、それだけの価値ある物だったと二人は感じていた。

「次はどうします？」

「それもいいですが、私としてはそろそろ食事を」

「……それは構いませんが、セイバー、時間を知っていて言っているのですよね？」

そう言われ、セイバーは携帯を取り出した。時計は午後一時を過ぎていた。それを確認し、セイバーは頷いた。昼食を取るのに何の問題もない時間だと。それにライダーがやや呆れたように答えた。

昼食を取るのに問題がない時間という事は、誰もがそう考えると言う事だと。つまり、どこも人が沢山いて混雑しているだろうと。そこまで言われ、セイバーがやっと事態を理解した。

今自分達がいるのは、大勢の人がいる行楽地。しかも休日のため、普段よりも人の数が多い。翠屋で働いているセイバーだからこそ、ランチタイムの恐ろしさは身に染みて分かっている。故に……

「くっ……浅はかでした。貴方に提言し、ランチを外して先に食事するべきだった……」

「いえ、貴方だけの責任ではありません。私も、待ち時間が一時間四十分の時点で考慮すべきでした。

あの時は何故か長いと思いませんでしたが、よくよく考えればかなりの時間です。

あれで短いと判断してしまったのは、ここの雰囲気に流されたせいですね。周囲も意外と短いと言っていましたし……」

「とにかく、ここで過ぎた事を言っても仕方ないです……が！　何か、何か解決策は？！」

鬼気迫るようなセイバーの表情に、ライダーは軽い頭痛を感じるものの、それもまたセイバーらしいと思い直し、息を吐くと告げた。

一つ目は、このままどこかのレストランで待つ。ただ、店を選んだりしていれば、その分時間が掛かり、店は混雑していくだろう。

二つ目は、売店で買って済ませる事。これは手軽な分時間もそこまで掛からない。だが、その分メニューは限られる。

三つ目は、このまま別のアトラクションへ行き、ピークが過ぎるまで我慢する。これはセイバーは辛いだろうが、行きたい店を選ぶ事が出来る。

以上の提案を聞き、セイバーは苦渋の決断を迫られたかのような表情を浮かべる。それにライダーは無表情で、どんな選択肢でもセイバーの選択に従うと告げた。それは、自分には決定を委ねないで欲しいという無言の宣告。

それが意図するものは、セイバーの責任逃れを避ける事。判断に困った場合、セイバーがもしかしたらライダーへ決定権を渡して、自分はそれに従うと言いながら、どこか不満を述べる事のないようにしたのだ。

「……二番目と三番目の複合案はどうでしょう」

「……考えましたね。それなら確かに……」

セイバーが閃いたとばかりに告げた言葉に、ライダーは感心したように頷いた。いいとこ取りな考えだが、現状取り得る方法の中では、一番適していたからだ。貴方も人の上に立っていただけはありますねと、ライダーは言って笑みを浮かべた。

それがライダーなりの称賛と感じ、セイバーはどこか嬉しそうでいて、恥ずかしそうに笑う。そして、ライダーに先立つように歩き出す。それは照れ隠しだとライダーは思ったが、それを口に出す事無くそれに続いた。

歩きながら、何を食べるかや何に乗るかなどと話す二人。場内案内を手にしながら、あれこれ尋ねるライダー。周囲の売店に気を配りながら、それに答えるセイバー。そんなやり取りは、休日を楽しく過ごす友人にしか見えなかった……

日も暮れ、もう外は暗くなっていた。その中をなのは達は歩く。手にした荷物は人により大小あるが、中身は思い出にと買った土産である。あの後、本格的なパレードを全員が見て、それが終わったのをキッカケに集合したのだが、忍や美由希等が土産を選んでないと言い出し、結局時間が遅くなってしまったのだ。

駅への道は混雑、駅までの電車も混雑と、海鳴に帰ってきた頃には、誰も彼も疲れ果ててはいたが、その表情はどこか楽しそうだった。唯一、シグナムとアーチャーを除く、はやて達八神家だけは別の理由でも疲れていたが。

「じゃ、アタシ達は迎えが来るから」

「しかし、本当によいのか？　なのは達は全員送れるが……」

アリサと小次郎は駅前に迎えが来る事になっているので、ここでお別れ。小次郎の申し出は既にアリサからも受けたので、なのは達は揃って遠慮した。そこには、帰りも家族達と居たいという想いがある。

それを理解し、小次郎も笑みを浮かべ頷いた。つまらぬ事を聞いたな、許せと言って。そして、セイバー達へまた明日会おうと告げ、それにアリサもなのは達へ同じような事を言って、二人は手を振った。

「じゃ、アーチャーさん。私達はここで」

「またね、恭也」

「お気をつけてお帰り下さい」

「なのはちゃん達も今日は楽しかったよ。ありがとう」

少し歩いて、ファリンがそう告げ、忍が笑みを浮かべてそう言った。ノエルも微笑みを浮かべ、すずかも笑顔でそう言った。

「では、セイバー達も気をつけて。それと、今度は是非絶叫系が目玉の処へ行きましょう、セイバー」

そして、月村姉妹は手を振り、メイド姉妹は軽く会釈して去って行く。ライダーの一言にセイバー以外は不思議そうだったが、セイバーは嬉しそうに頷き返す。それに笑みを返し、ライダーも去って行った。それをどこか寂しく思いながらも、なのは達は手を振り返した。

「なら、わたしらもここで」

「そうですね」

はやての声にシグナムが応じ、頷いた。それに呼応するようにアーチャーがランサー達へ向き直る。

「今日は中々有意義な時間が過ごせた。機会があれば、今度はもう少し静かな場所がいいがね」

「あたしは遊園地でいいんだけどな」

アーチャーの言った静かな場所というのが、おそらく楽しい場所ではないと思ったのか、ヴィータがそう言った。すると、それにザフィーラがからかうような口調でこう言い放つ。

「ヴィータ、子供みたいな事を言うな」

「んだと！」

「まぁまぁ……ザフィーラ、あまりヴィータちゃんをからかわないの」

「すまんな」

「ヴィータちゃんも。少し我慢しなさい」

「……仕方ねぇな」

シャマルがやや笑みを浮かべながら二人を嗜める。そんな光景を

見て、なのははシャマルから桃子のような雰囲気を感じた。母性。優しさと暖かさをあわせ持つ癒しの象徴。

それがシャマルから強く感じられたのだ。どうもそれはフェイトやアリシアも同じだったらしく、なのはと同じ様に柔らかい笑みを浮かべていた。

「アリサちゃんが言うとったけど、お盆過ぎ辺りに旅行行こうって。な、なのはちゃん」

「うん。今度はプレシアさん達やシグナムさん達も入れてね！　って」

「それは有難いが……主、色々と問題も」

「シグナムの心配も分かる。けど大丈夫や。昔っから、どっかの誰かが遣り繰りをしてくれっとったおかげで、お金の心配はいらん」

そう言ってはやては笑う。アーチャーはその発言にやや不機嫌そうだが、それでも確かに頷いた。そんなアーチャーに全員が笑う。

そして、細かい話はまた後日と言ってはやて達も去って行く。それを見送るなのは達。人数が多かった八神家が居なくなったためか、急に寂しさが強くなった気がなのははしていた。

そして、しばらく歩いたところでフェイト達とも……

「じゃ、わたし達はここでお別れだね」

「そうだね。今日は楽しかったよ。今度は女だけでどっか行こうよ、美由希」

「それもいいね。その時は忍さん達やシャマルさん達も誘おうか」

アリシアの言葉に頷いてアルフは美由希へそう提案した。それに笑顔で頷き、残りの仲が良い者達を挙げる。それにアルフも笑顔で応じ、二人はそんな話を続けていた。

一方、リニスは恭也へ言伝を頼んでいた。実は、アルフは夏休みに入ってから翠屋で手伝いをしていて、士郎や桃子に世話になっているのだ。

「お二人に、くれぐれもよろしくお伝えください」

「確かに伝えておきます。プレシアさんにもよろしくと」

「はい。伝えておきます」

大人のやり取りと言う感じの二人。その横では、セイバーとランサーが現状を考えて語り合っていた。

「……初めて会った時は殺し合ったのにな」

「そんな事も……ありましたね」

「それが今はこうして笑い合う、か……世の中ってのは分からねえもんだ」

どこか楽しそうに告げるランサー。セイバーはそれに同意するように頷いて、静かに呟いた。

「だからこそ、これを守りたいのです……」

「……だな」

その呟きにランサーもそう呟き、共に笑みを向け合う。かつての出会いは敵同士。だが、今は背中を預けられる心強い戦友。故に笑う。この時、この場所、この想いをくれた少女達に感謝して。

その少女達は少女達で……

「じゃ、その旅行は凄い大勢になるね」

「そうだよ。アリシアちゃん達は初めての旅行かな？」

「うん！　フェイトから話は聞いたよ。温泉に行ったんだよね～……いいなぁ……」

来月の旅行に想いを馳せるアリシア。それに微笑ましいものを感じるなのはとフェイト。そして、二人も同じようにあの頃に想いを馳せた。

まだジュエルシードを探していた頃。あの頃でさえ賑やかで楽しかったのだ。きっと、今度の旅行はもっと楽しいと二人は思った。だが、そこで二人揃ってある事を思い出す。

（ユーノ君……いつ戻ってくるのかな……？）

（ユーノ、絶対に今年中には戻ってくるって言ったけど……いつになるんだろ？）

共に思うは唯一の異性の親友。会わなくなってまだ三ヶ月も経っていないが、二人にとってはそれでも大きな時間だった。特に、なのはもう家族のようになっていただけに、余計に寂しく思っている。

（会いたいなぁ、ユーノ君に）

見上げる空には、夏の星が美しく輝いている。それは、あの日見上げたものには及ばないが、それでもなのははは思う。あの時、ユーノ達と誓ったのだと。またみんなで来ようと。その約束を忘れるようなユーノじゃない。

だからきっともうすぐ会える。そうなのははは自分に言い聞かせるのだった……

過ぎ行く時間の中、深まっていく絆達。更に絆を強くする者、今の絆を確認する者、そして絆を確かめる者。

それらはきっと、悪夢から醒める道標となる……

――――――

幕間6

時空管理局本局内　無限書庫。そこは無重力空間となっていて、宇宙空間を遊泳するように一人の少年が動いていた。

だが動きながらも、少年は自分の目の前を追従するモニターと会話していた。その少年の顔色はあまり良くはない。理由は、彼がここ無限書庫を整理するようになってからというもの、有益な情報が湯水のように見つかったからだ。

それに比例して、少年の仕事量も増えた。初めは閑職扱いだった場所が、いまや局の中でも一、二を争う重要部署へと変わりつつあったのだ。

「……それはもう送ったよ」

「そうか。なら、後は……」

気だるそうに答える少年の名は、ユーノ・スクライア。それに事務的に返すモニターの相手は、クロノ・ハラオウン。ユーノを無限書庫へ誘い、そして現状を作り出した少年である。

最初は彼の手伝いだった。だが、ユーノが検索魔法を使い、それに応えていく内に、否応無く評判が高まったのだ。無限書庫は情報の宝庫だとは誰もが知っているが、それを整理して使い易くしている者がいると。

そして、クロノがユーノの協力で仕事を片付けるたびに、その事を上層部に具申するものだから、最初はクロノ専属だったのが、気付けばあちこちから資料請求を頼まれる始末となったのだ。

「……頼めるか？」

「僕に拒否権はないの分かって言ってるよな？　今、どれだけここが忙しいかも知ってて！」

「だから予算も下りた。人を雇ってくれていい。君がそこの責任者だ」

「いつの間に！？　ただの手伝いじゃなかったの？！」

「周囲もそれに賛同した。喜べ、君の地位は司書長だそうだ」

「ちっとも嬉しくない！」

どこかからかうように告げるクロノにユーノはそう反論した。そう、自分は民間協力者として、ここで働いていたはずだったのだ。クロノの紹介があったとはいえ、今の彼は管理局員になるつもりはなかったのだ。

そう告げるとクロノは冗談だと返し、予算が下りたのは本当だが、司書長や責任者の辺りは挙がっているだけで、決定などしていないと言った。

それを聞き、安堵するユーノ。何故なら、彼には……

「僕は帰るまでの間、必要になる資金を得るために働いてるんだ。局員になるつもりはないよ」

帰るべき家があったのだ。それも、管理外に。待ってくれている家族が、友がいる。そこへ帰る間までのこれは簡単な仕事。そう考え、彼はこうして働いているのだ。滞在費だけで考えれば、既に十分な程の収入をこの一月あまりで得ていた。それでも彼が働いているのは、好意によるものだった。

自分が情報を見つけ、それを教える事で悲しむ者や苦しむ者を減らす事が出来る。事件に対し、有効な手立てを考える事が出来たり、予防策や対処法などに役立つ事もある。

そう言われ、ユーノは頑張っていたのだ。クロノやエイミィ、リンディ達の励ましや感謝も支えに。

「……本気で考えてくれないか？」

「もうこれで何度目か忘れたけど、今は無理。せめて、父さん達と相談させて欲しい」

「……そうだったな。確かにそうするべきだろう。君の場合、おそらく並みの局員よりも、休みは融通が利きにくいだろうから」

「僕自身としては、この仕事で誰かを助けられるから、続けてもいいんだけど……」

「家族の意見も聞いてみたい、か」

クロノの問いにユーノは無言で頷く。それにクロノもどこか納得したような表情を浮かべ、こう告げた。

これだけは覚えておいてほしい。ユーノが、無限書庫をある程度整理してくれたおかげで、多くの局員が助けられている。自分を含め、ユーノに感謝している者は少なくない。だからこそ、局ではなく、次元世界全体がユーノの力を必要としているのだと。

そう言われ、ユーノは少し笑いながら答えた。

「……口が上手いね」

「どうかな……案外本気でそう思っているかもしれない」

互いに浮かべるは笑み。だが、それは皮肉げなもの。どこかの槍騎士と弓兵を思わせるような雰囲気が、二人にはあった。

交差する縁と生まれる疑惑

クロノとの会話を終えたユーノは、そのまま日課となった書庫内の整理をする。要求された資料を検索しながら、その一方でそれを行なう。それはもうルーティンワークとなっており、ユーノも慣れたものだった。

そして、求められた資料を見つけ出し、それを即座に請求主へ送信する。何の躊躇いもなく、淀みもない手順で一連の動作を終え、ユーノは一息吐いた。

「さてと……」

そして、また即座に別の資料請求に応えるべく、再び検索魔法を使う。そうして、ユーノは実に半日を過ごす。何もなければ、だが。

たまに緊急を要する資料請求が来る。大抵クロノからだが、それが来ると今のように片手間で整理を出来なくなる。整理が出来ないと、ユーノ自身の負担が結果として増えるのだ。

そして、今日はそんな日ではなかったので……

「……とりあえずこんなとこかな」

資料請求を一段落つけ、ユーノはそう呟いた。整理も予定近く進

める事が出来た。時間は既に四時間程経っていて、昼時をとうに過ぎていた。ユーノはそれに内心苦笑し、無限書庫から出て行く。

行き先は本局内の食堂。この時間ならば空いているので、ユーノとしては実はこの時間の方が有難かったりする。というのも、昼時などに顔を出すと、色々な部署の局員達に絡まれるのだ。

それは感謝や敬意などのものばかりなのだが、それを引っ切り無しに告げられれば、流石にのんびり食事とも行かない。まぁ、人脈が広がり、ユーノとしても、嬉しい事もあって嫌ではないのだが、やはり食事は寛いでいたいと思うのだ。

（まぁ、なのは達と一緒に食べる時も賑やかだったけど……）

思い出すのは高町家での食事風景。士郎と桃子が微笑み、恭也と美由希が話し、なのはと自分がセイバーと三人で魔法関係の事やフェイト達の事なんかを語り合う光景。

そんな事を思い出しながら、ユーノは改めて思う。許可が下りたら、すぐにでも地球に向かおうと。アーチャーに依頼された闇の書に関する情報も既にある程度調べてある。それを早く教えなければ。そうとも考えていたからだ。

（よくは知らないけど、あんな危険なロストロギアを調べてくれって……きっと海鳴にあるんだ。闇の書、いや”夜天の書”が）

ユーノが調べた情報は、確実に闇の書と呼ばれるものが恐ろしい物だと書いてあった。見つけ難い場所にあったが、それも検索魔法のおかげで何とか見つける事が出来たのだ。

だから、ユーノはその情報が見つかった時、変な違和感を感じた。それまでも様々な情報がまったく無秩序に置かれていて、ユーノは整理しながら、どうしてこんな場所へと常々思っていた。闇の書に関する情報は、それが特に顕著故に、検索魔法で見つけられたのが

奇跡に近かったからだ。

それだから、ユーノは余計不安を覚えたのだ。今回は自分が検索魔法を使ったから比較的簡単に発見出来たが、従来通りに探していたら、おそらく発見は困難だったろう。

そこで、ユーノはそれとなくクロノに尋ねたのだ。整理中、ふとした時に目にしたロストロギアに関する情報があって……と。

そして、それに案の定クロノは興味を抱き、ユーノへ尋ねたのだ。

一体何だ、と。

（まさか、クロノに因縁がある物だとは思わなかったけど……）

闇の書の名を聞いた時、クロノが珍しく表情を変えたのだ。それは怒りでも悲しみでもない、何とも言えないもの。そして、聞いたのだ。クロノの父親の最後とその原因を。

全ては闇の書のせいだ。そう最後にクロノは噛み締めるように言った。そこに感情はなかったが、ユーノはそれを聞き終えた後、心から謝った。それにクロノは気にするなと答え、その話はそれで終わった。

（でも、グレアム提督が引き金を引いた、か……。それはきっと……辛かっただろうな）

親友のような関係だったとクロノは言っていた。おそらく、それは本当なのだろう。リンディにもユーノは聞いたのだ。闇の書の事は伏せ、グレアムとクロノの父、クライドの事を。その話を最後まで聞いたユーノが「最後まで立派な人だったんですね」と言うと、リンディは嬉しそうに頷いたのだ。

あの人は私の誇りよ、と。そう笑顔で告げて。それを聞いて、ユーノは考えたのだ。闇の書によって、不幸になった或いは辛い目に

遭った者は少なくない。だが、それにリンディ達が該当すると分かったためだ。

ユーノはそれを知ったからこそ、余計困っていた。闇の書が海鳴にあり、アーチャーが調べているという事は……

（なのは達と関わってる……て事だよね）

あのアーチャーが頼むと言う事はそういう事だ。でなければ、おそらく自分に頼ったりはしない。アーチャーもどこかで闇の書の危険性に気付いているのだろう。だからこそ、情報を欲しているのだ。

ユーノはそこまで考えて、思考を切り替える。既に食堂に着いたためだ。手馴れた感じで注文をし、手近な席へ座る。昼時を過ぎているからだろうか、食堂内はガラガラだ。

（にしても、お腹空いたな。我ながら良く働くよ……）

「いただきます」

「ど～ぞ」

ユーノがそう言って食事に手をつけようとした時、後ろから女性の声が聞こえた。それにユーノは、やや苦笑しながら振り向いた。

そこにいたのは、本来ならここにいないはずの存在。本局ではなく、地上勤務で首都防衛隊所属の女性。

「お久しぶりです、クイントさん。今日は定期検診の日でしたっけ」

「お久しぶりって、まだ二週間よ？　ま、いっか。そう、娘達のね」

クイント・ナカジマ。ユーノが彼女と知り合ったのは、ほんの偶

然。彼女は以前から剣の形をしたロストロギアを調べていて、その情報がないかをユーノに調べて欲しいと頼みに来たのだ。その時、クイントが語った剣の特徴が、ユーノには気になったため、急ぎ気味で調べたのだが、結局クイントの言う条件を満たすような物はなかったのだ。

余談だが、それがなければ、クイントは無限書庫など訪れる事は無かっただろう。そう、永遠に。

「ギンガとスバル……でしたよね。日本語だから、名前覚えましたよ」

「そうでしょ？　でも私は、リーゼ（ベルカ語で巨人の意味）とファル（ベルカ語で隼を意味するファルケン）がいいって思ったんだけどね」

「でも、大宇宙と星座の別名。どっちもいいと思いますけど……」

「あ、そっか。ユーノ君は地球に行った事あるんだっけ」

「それも日本にです。まぁ、半年もいなかったですけど」

クイントの性格もあってか、ユーノはすぐに気に入られた。後、クイントの旦那である”ゲンヤ・ナカジマ”の先祖が地球出身という事もあって、ユーノはクイントとその事で話題も尽きなかったのもある。

ちなみに、クイントがユーノに告げた特徴は”ドリルのような形状”と”次元震を起こしかねない破壊力”の二点。その中でも、後者にユーノは興味を覚えたのだ。そう、セイバーのエクスカリバーに近いモノを感じたからだ。

その後も二人は他愛ない事を話した。最近のミッド地上の事、ユーノの労働環境、ギンガとスバルの事、クイントの調べ物の事など。

そして、ユーノも食事を終えたところで、クイントがこう言った。娘達に会っていくか、と。それにユーノは是非と答えたかったのだが、時間を考えると、そろそろ仕事を再開しないといけなかった。

そのため、クイントにまたの機会にとすまなさそうに言って、無限書庫へと戻って行ったのだ。その後姿を見送るクイント。

「う～ん……どっちかの旦那さん候補にしようと思ってるんだけどな～……」

そう呟く彼女だったが、その呟きには先程までの冗談さは無く、本気だった。きっと、これを夫であるゲンヤが聞いていれば「早過ぎんだろ」と呆れたに違いない。

そんな彼女も手元の時計を見て、慌てて食堂を後にする。そろそろ二人の検診――いや”検査”が終わる頃だったからだ。

（早いとこ戻って、家に帰らないと。まぁ、今日はギルじゃなくギル君だから心配はないんだけど……）

検査室まで走りながら、クイントは、今日は家で大人しく留守番している居候の事を思い出す。娘達と出会ったあの日。それからもう実に三ヶ月が経過していた。その間、クイントはあの事件の報告書を作成する片手間、スバルとギンガの二人を正式に子供とする手続きもした。

ゲンヤとゼストには、あの研究施設での出来事の真実を話した。データは、コピー共々あの崩落のせいで失ってしまったが、その事実を知れただけでも収穫だった。

実際、ゼストはその話を聞き、慎重に調べてみると告げ、個人的に動いている。ゲンヤは表向きには動きを見せていないが、裏社会

との関わりを中心に調べてはいるようで、それを知り、クイントも独自に調べていた事がある。それは、戦闘機人ではなく、ギルガメッシュからの依頼。

――我と同じ存在がいないかどうか捜せ。特に金髪の女騎士だ。

（一体、どんな関係なのかしら？　金髪の女騎士……。ベルカの”騎士”とは違うだろうし……ギルみたいな力を持ってるのよね、きっと）

脳裏に甦るあの時の光景。後になって、あの一撃が次元震を引き起こしたらしいと知った時、クイントは心の底からギルガメッシュに恐怖を抱いた――のだったが。

（まさか、あれ程までに子供に甘いとはね……）

そう、ギルガメッシュはギンガとスバルに弱く、どうも突き放す事が出来ないようで、そのおかげでクイントはギルガメッシュが怖くなくなってしまったのだ。何せ、クイントが困ると二人がギルガメッシュに文句を言い、それにギルガメッシュがうろたえるからだ。

そして、クイントがそんな二人を宥め、ギルガメッシュにも少しは言動を改めるようにと告げた。それからは、もうクイントに敵はなかった。ギルガメッシュが何を言っても、恐れる事無く反論出来るようになったのだ。

そして、どうもギルガメッシュは強く説教された事がなかったらしく、少しずつだがクイントに苦手意識を持ち出したようで、今では論戦勝率もクイントが六割弱と勝ち越している。

「さて、いい子で待ってるかしら」

検査室に辿り着き、クイントはそう呟いて中へと入って行った……

アースラ艦内　艦長室。そこでクロノはリンディにユーノの事を話していた。局員になるつもりはない訳ではないが、今は考えていない事。そして、今の仕事自体にやりがいは感じている事を告げた。

それを聞いて、リンディも頷いた。確かにユーノの心境を考えれば、今は色々決める事が出来ない状況だからだ。

「ユーノ君も確かに稀有な人材だから、局としても是非入って欲しいけれど……」

「ま、あいつも前向きに考えてはいるみたいです。嘱託魔導師ならぬ嘱託司書にでもなるんじゃないですか」

「ふふ、それも面白いわね。でも、意外だわ」

「何がです？」

リンディの言葉に不思議そうな表情を浮かべるクロノ。それは上司ではなく母親としての笑みだったからだ。クロノの問いかけにリンディは微笑みを深くして告げた。

「クロノがユーノ君とここまで仲良くなるなんて」

「なっ！？」

それは心外という反応ではない。どこか恥ずかしがるような反応だった。その証拠にクロノ自身、反論がすぐに思いつかなかったか

らだ。考えてみれば、ユーノが無限書庫の仕事をし出してからというもの、ほぼ毎日のように話をしていたのだ。無限書庫の改善案や仕事の資料請求、更には許可申請の関係まで、実に多く二人は話していたのだ。

それもいつものように言い合いではなく、真剣に互いの考えや意見をぶつけ合ったので、前にも増して理解が深まったのもある。

「にしても、何故今頃になってね」

「……管理外への局員の長期滞在や調査の見合わせ、ですか」

「ええ。おかしなタイミングだと思わない？　まるで……」

「まるで、僕達が海鳴に行くのを恐れているかのようですね」

そう、アースラは明日任務を終えて、クルー達は長期休暇に入る。リンディ達もそれを利用して、海鳴にいるプレシア達に会いに行こうとしていた。そのため、渡航許可を取ろうとしていたのだが、その矢先の出来事だったのだ。

それを聞いて、リンディは何かきな臭いものは感じたが、それならばと、長期に渡るものではなくあくまで短期の許可へ申請し直し、近日中に申請が受理される事になった。

だが、そのためにプレシア達と会うのが若干遅くなってしまうのは事実だった。何せ、旅行を計画しているらしく、それの日取りが決まるまで海鳴に行けないからだ。旅行の話自体は、プレシア経由でユーノからクロノが聞いていた。そのため、リンディとエイミィは昨日辺りから暇さえ見つけては、その話をしている。

しかも、念話でしているものだから、周囲は真面目に仕事をしているようにしか見えないから、余計に性質が悪い。

「考えすぎと思いたいけど……嘱託は除外するなんて妙だし」

「そこはグレアム提督が上層部に具申したそうです。嘱託は協力者に近いから、こういう時ばかり正規の局員と同じ括りにしてはいけないと」

「成程ね。プレシアさんの事情を知る提督らしい意見だわ」

「でも、このところの上層部は変です」

「……噂は本当なのかしら」

「例の上層部に裏で指示を出している存在ですか？　ゴシップのでっち上げだと」

クロノの言葉にリンディも小さく頷きながらも、声を潜めるように告げた。

でも、火の無い所に煙は立たないのよ、と。それにクロノは表情を変え、やや険しい声で尋ねた。何か知ってるのかと。それにリンディは無表情で首を縦に振った。そして、小さく呟く。管理局には、三提督達などの限られた存在しか知らない”何か”がいるらしい。そんな噂は、リンディが管理局に入った頃から流れていたと。

それが意味するものを考えなさい。そうリンディは言ってお茶を飲む。それは、緑茶に砂糖とミルクを入れるという、とてもではないが”茶”と呼ぶ事自体憚られるようなもの。それは、常人なら耐えられない程の甘さを持つのだが、何故か今のリンディはそれすら苦く感じていた。

（もし噂が本当だとして……まさか、アーチャーさん達の存在に気付いたとでもいうの……？）

そんな疑念を抱き、リンディはそれをお茶と共に胃に流し込むのだった……

「お父様、どうして急にこんな指示が……」

「分からん。だが、ある意味で好都合かもしれん。引き続き頼むぞ、二人共」

「任せておいて！」

「はい」

二人の女性――リーゼロッテとリーゼアリアはそう答え、頷いた。それに笑みを浮かべ、お父様と呼ばれた男性も頷いた。

彼の名はギル・グレアム。プレシアの地球滞在を後押しし、クロノの恩人であり、リンディの亡き夫クライドの上司だった人物である。彼は、娘とも思っている二人の使い魔姉妹のアリアとロッテにある事を頼んでいた。それは、もう何年も前からの事。

とあるロストロギアに対する監視と動向の観察であった。そして、それは今も継続中なのだが……

「しかし、何故魔導師を狙わないのだろうか」

「どうも、彼女への配慮のようです」

「ま、確かに優しくていい子だからね……」

「それに……彼らもこれまでとは別人のようになっています」

「……全てはあの男が原因か」

手元にある写真を見て、グレアムは呟く。何が狙いだ……と。それに二人は黙った。そして、その視線を同じく写真へと落とす。そこに写っているのは、笑顔のはやて達とアーチャーの姿だった……

この数日後、ユーノの地球への滞在許可が下りる。それを聞き、ユーノはすぐに荷物を纏め、地球へと向かった。

その見送りには、クロノが行き、近い内に会いに来いとユーノは告げ、クロノはそれに苦笑しながら頷いた。

――――――

次回は、いよいよ彼が帰還します。そして、事態も変化するかも…
…？

幕間7

それは、ユーノが帰ってくる前の事。遊園地で過ごした日から数日後の話……

「今日は、みんなで対戦しようぜ！」

朝食が終わるや否やヴィータがそんな事を言い出した。食器を運んでいたシャマルとはやてが止まり、アーチャーと蒐集活動について話し合おうとしていたシグナムが振り返り、庭の掃除をしようとしていたザフィーラが顔を向け、アーチャーはヴィータの発言に呆れつつため息。

そう、この日は珍しく全員が揃って休みなのだ。よって、ヴィータとしてはここ最近お気に入りのゲームをワイワイとやりたかったのだ。

「……ヴィータ、公園で遊んだ方が健康的だ」

「うっせ。あたしより弱いからって逃げる気かよ、アーチャー」

常識的な意見を出すアーチャーだったが、それをヴィータは切って捨てる。確かに、アーチャーはヴィータに負け越している。ゲームではなく、実戦ならばとよく呟く程に。

その言葉通り、実戦ではアーチャーはヴィータに勝る。だが、ゲームはヴィータの方が上。やりこんでいる量が違うのがその差になっているのだが、アーチャーとしてはそこまでして勝ちたいとは思わないのだ。

そんなヴィータに賛同したのははやて。彼女としては、外へ出か

けるよりも家で出来る事の方が、色々と気を遣わずに済む事もあり、その提案自体には賛成した。
だが、はやてとしては別の考えもあるので……

「そやな。家でみんなで何かするのは賛成や。でも、ゲームやなくて映画鑑賞とかはどうやろ？」

「何見るの？」

「う～ん……アクションかサスペンス、アニメとかでもええな」

シャマルの問いかけにそう答えるはやて。その意見を聞いて、シグナムも頷き、ヴィータへ視線を送る。それは、はやての意見の方が良いと思うぞと告げていた。
それに若干怯むヴィータ。確かに勝ち負けをつけるゲームより、みんなで映画などを見てワイワイする方がいい気がしたからだ。そこへ、ヴィータの様子を見て、アーチャーが笑みを浮かべながら助言を授ける。

「では、午前は映画。休憩がてら昼食を取り、午後からはゲームでどうだ？」

「そ、それそれ！　あたしもそう言おうと思ったんだよ！」

「……では、映画を借りて来なければいけませんね」

アーチャーの意見に勢い良く同意するヴィータ。それを横目にし、ザフィーラははやてへそう告げた。家にあるものは少なく、基本的にレンタルなどで済ませていたからだ。
そのため、はやては少し考え、頷いてシャマルを見つめた。シャ

マルとアーチャー、シグナムの三人で選んで来てほしいと。幸い会員証はアーチャーが作っている。意見としても三人いれば決められるし、ジャンルが偏る事もないだろうと。

その言葉にシャマルとシグナムも納得し、アーチャーはそれに皮肉屋スマイルを見せて「ヴィータではアニメ一択だからな」と告げた。それにヴィータが噛み付くが、周囲の意見も同じだったようで、それに苦笑するのみだった。

「あたしはガキじゃねぇ！」

そんな周囲に反発するように、ヴィータはそう叫ぶのだった……

団欒の時間と芽吹く気持ち

レンタルショップに着いた三人は、まず全員が楽しめそうなものを一本決める事にした。時間を考えれば、一本だけでは少々足りない。そのため二本借りて、残りの一本は少し冒険してみる事にした。

「それで、何にするの？」

「やはりはやても言っていたが、アクションだろう。派手だし、見応えはある」

「では、アクションコーナーだな」

そう言ってシグナムはすたすたと歩き出す。だが、その足がふと

止まった。それに不思議そうな顔で、二人は視線をシグナムが見ているものへ向けた。そこには、特集コーナーとして時代劇の作品がずらりと並べられていた。

それに二人は納得し、苦笑する。シグナムは、小次郎と出会ってからというもの『侍』に興味を覚えた。そして、はやてが冗談交じりに時代劇を見せたところ、見事にはまったのだ。

殺陣は見世物。だが、その華麗さや様式美などは確かに見事なもの。見せる剣舞というものにシグナムは興味を抱き、気がつけば当初の小次郎のような侍を学ぶではなく、その時代背景や剣劇に重点を置いていたのだ。

「……仕事人の映画だと？　そんなものがあったのか……」

普段はうだつの上がらない十手持ち。それが、裏で悪を斬る時代劇。それはシグナムのお気に入りの作品の一つだ。

「シグナム？」

「それは、さすがに君しか喜ばん」

「っ？！　わ、分かっている。少し見てみただけだ」

アーチャーの指摘にやや恥ずかしがりながら、シグナムは早足で歩き出す。それを見つめ、笑みを浮かべる二人。そして、そのまま笑みを浮かべながらその後を追いかけるのだった……

その頃、八神家では……

「へへ～、ザフィーラはやっぱ弱いな」

画面に表示される１Ｐ　ＷＩＮの文字。それにヴィータの勝ち誇る声が重なり、ザフィーラは気のせいか少し小さくなっている気がはやてにはしていた。三人が帰ってくるまで、ヴィータはザフィーラとゲームを始めたのだが、結果はこれである。

そう、八神家で一番ゲームが弱いのはアーチャーではなく、ザフィーラ。彼は元々娯楽に興味がなかったせいもあり、ゲームもあまり参加しない。今日のように全員でやる時や、強く誘われない限りやらないのだ。

「あ～……ザフィーラ、気にせんでええよ。実際は、ザフィーラがすっごい強い事、わたしは知っとるから」

「……主、お心遣い感謝します」

はやての言葉にそう答え、ザフィーラはもう一度画面を見つめて呟いた。

――――今度は、こうはならんぞ。

この後、ザフィーラが誇りを捨てたガチャプレイにより、ヴィータは敗北を喫する。それを見ていたはやては思った。静かに怒る相手程怖いものはないのだ、と……

アクションコーナーでの選択は、あっさり決まった。カンフー系の映画で、笑いありシリアスありの娯楽大作だ。主演の男性は日本でも人気の香港映画俳優で、はやても気に入っている役者の一人だ。

そして、問題はもう一本。そう、シグナムが言い出したのだ。冒険ならば時代劇だろうと。それを大方予想していたアーチャーだったが、確かに冒険作を選んでみるかと言ったのは自分。そのため、強くそれを否定出来ずにいた。

「どうだ。それに私に時代劇を教えてくれたのは主だ。なら、気にいるかもしれん」

「そうとは思えんが……」

言えないのだ。はやてのほんのお遊びだったのだろうなどとは。そんなアーチャーにシャマルは苦笑し、シグナムへ告げた。

冒険と言っても、楽しめるだろうと自信を持てるものにするべきだと。その正論にシグナムは口ごもる。そして、アーチャーはシャマルに感謝し、歩き出す。

「とりあえず、それぞれでこれだと思う物を決めよう。それから判断すればいい」

「分かった」

「そうね」

こうして、三人は思い思いに店内を歩き出す。アーチャーはアニメ方面へ。ヴィータとはやてを優先で考えたのだろう。シグナムはやはり時代劇。その目は、返却しようとしていた店員が躊躇うぐらい鋭い。

そんな二人とは違い、シャマルはと言えば……

「う～ん……どれがいいかなぁ？」

恋愛もの。つまりラブロマンスを中心とした場所にいた。はやてにはまだ早いが、それでもこういう物で『愛』という物を知る事は大事だとシャマルは思っていた。自分も愛など知らないが、だからこそこういう世界に憧れを持ったのだ。

女ではなく女性として扱われる。あの日以来、シャマルは自分がそう思われ、そして扱われている事に気づいたのだ。それは、湖の騎士ではなく、一人の人。シャマルとして接してくれているという事。

（私達にも、いつか恋愛なんてする日が来るのかしら……？）

あの時、アーチャーが告げた一言。惚れる相手が現れるかもしれない。それをシャマルは夢見ている。自分がプログラムに過ぎないと告げても、関係ないと言ってくれる男性。そんな存在が目の前に現れる日を。

ちなみに、あまりに乙女過ぎて、シャマルはこの事は誰にも話していない。シグナムはおろか、この手の話を真剣に考えてくれる桃子にさえ告げていないのだ。

「……でも、そんなのは有り得ない事かもね」

どこか寂しげに呟き、シャマルは視線を棚の作品へ戻す。どれも夢や希望が詰まっていそうなタイトルや内容だったが、シャマルが一際惹かれる物があった。

それは、ラブロマンスではなく、ヒューマンドラマの類。いつの間にか、別のコーナーまで歩いてきていたようだ。それを手に取り、あらすじをみつめるシャマル。

そこに書かれていたのは、ロボットの話。家庭用ロボットとして

ある家庭で働きだすロボットだったが、次第に人間になりたいと思うようになり、様々な方法で機械の体を人間に近づけていく。
それは、まるで自分達にも重なって見えた。どこまでいっても人間にはなれない存在。だけど、だからこそそこに憧れ、手を伸ばす。

（私達みたい……ううん、違う。私達だわ、このロボットは）

あらすじなので結末は分からないが、シャマルはそれが無性に気になった。どうしても見たい。でも、もし結末が恐れているようなものだったら。そう思うと見るのが怖い。
そんな風に迷うシャマルだったが、意を決してそれを手に取った。そして、それを持ってアーチャー達を捜した。すると、意外な程あっさりアーチャーは見つかった。その手には、国民的アニメ映画が掴まれていた。

「シャマルも決まったか」

「ええ。シグナムは？」

「あれだ」

そう言って指差した先には、時代劇コーナーで不動の姿勢を取るシグナムの姿があった。その手には、二本の作品が握られている。

「私が来た時からあれだ。おそらく、十分はああしているのだろう」

その言葉にシャマルは呆れた笑いしか出なかった。何せ、見目麗しい女性が、時代劇の映画を両手に真剣な眼差しで悩んでいるのだから。
近くを通る人もみなどこか驚いている。そんな周囲に気づかない

程、シグナムは吟味しているようで、何度も裏面のあらすじを読んでは、右を片付けようとして止まり、その逆をして止まりを繰り返している。

それを見て、シャマルはこのままでは決まらないだろうと思い、ため息を吐きながらシグナムの近くへ。そして、迷い続けるシグナムにこう告げた。

「早く決めないと私とアーチャーのどちらかで決めるわよ？」

「なっ！　くっ……ならば、こちらだ！」

そう言ってシグナムは左手に持っていた方をシャマルへ向けた。それを受け取り、シャマルは苦笑しつつアーチャーの元へ。それを見ていたアーチャーは小さく苦笑し、まるで母親だなと告げた。

それにシャマルが少しむくれると、アーチャーはそれを微笑みに変えた。慈愛に満ちていると思ったのだと。そう言ってアーチャーはシグナムへ視線を移す。シグナムはどうやらまだどこか納得し切れていないのか、ぶつぶつと呟いていた。

（やれやれ、彼女もたまに子供のような時があるのだな）

そう思って、アーチャーはシグナムへ近付くためにシャマルを横切って歩き出す。そのシャマルは、アーチャーの言葉を噛み締めるように思い出していた。

（慈愛……慈愛？　私が、慈愛に満ちている……）

そんな事を言われた事はない。確かに彼女は癒しを専門とする治療のエキスパートだ。だが、それは役目であり、仕事。決して彼女

の性根が優しいからそうなったのではない。初めからそう作られているのだ。

でが、今の彼女は与えられた役目としてではなく、自分の意志でその在り様を決めた。その事をアーチャーが理解しているのかは分からないが、その言葉はシャマルにとっては間違いなく、今の自分を見てのもの。

作られた存在。そう思っていた。だが、はやてに出会い、なのは達と触れ合い、アーチャーに気付かされ、シャマルは分かったのだ。今の自分達がゆっくりと人に近付いていっているのを。

そう思った時、手にしていた映画に視線を向けた。人ではなく、作られた存在。それが人と触れ合う内に人に憧れ、人になろうとする。ならば、自分達は本当にこの話と同じではないか。

（……そうか。私達、とっくに憧れていたのね。人になりたい。そう……思ってたんだ）

そう確信し、シャマルは微笑む。視線を戻した先でシグナムがアーチャーから時代劇の豆知識を聞いていたからだ。そんなシグナムはまさしく今の彼女だからこそだろう。そう思ってシャマルは二人に近付くべく歩き出す。その手にした映画をそっと握り締めて……

「ね、結局どれにするの？」

話し合いの結果、アーチャーが選んだアニメに決まった。シャマルのも良かったのだが、アーチャーが何故か頑なに拒んだのだ。その理由をアーチャーはやや難解過ぎると語った。

シグナムやシャマルとしてもその意見には納得出来たので、全員

がのんびりと見れる方がいいだろうと結論付けた。

それぞれの作品を元の場所に戻しに行き、シグナムはギリギリまで時代劇コーナーを見ていると言って離れて行った。それに苦笑し、アーチャーがレジへ向かう事になったのだが、その時、シャマルへ向かってアーチャーが告げた。

――あれは、最後人間だと認められる。そして、自分を愛してくれた人間の妻と共に息を引き取る。人として、な。

その言葉にハッとなるシャマル。それにアーチャーは微笑みを見せて、こう続けた。君達もそうなれる。人か人でないかは周囲が決める事ではない。己の心が決めるのだ、と。

そう言い切って、アーチャーはレジへと歩き出す。その背中を見つめ、シャマルは思う。アーチャーが頑なに拒否した訳。それは、その内容に自分達を重ね過ぎないか心配したのだろうと。故に見せたくなかった。変に影響を受けないように。

そして、シャマルだけに結末を告げたのは、きっと……

（私が……あまり気にしないように、ね。もう、お節介なんだから……）

そう思って小さく笑うシャマル。そして、ふと思うのだ。一体、あのロボットはどうやって人間の妻を得たのだろうと。愛したという事は、相手はロボットと知りながらも、伴侶として思ってくれたという事なのだろうか。

そう考え、視線をアーチャーへ向けるシャマル。もしそうなら、相手はアーチャーのような考えを持った人だろうと思ったからだ。外見や生まれではなく、その心の在り様。それを持って相手を判断する。

（私を可愛いと言ったのも、そう考えているからでしょうね……可愛い、かぁ）

あの時の言葉を思い返し、シャマルは知らず頬を染める。そこへシグナムがやってきた。どうやらもう時代劇コーナーは堪能したようだ。だが、シャマルの頬が少し赤くなっているのに気付き、疑問を浮かべた表情をする。

そこへアーチャーが戻ってきた。そして、それを合図に歩き出す二人。歩きながらシャマルは前を行くアーチャーを見つめた。その視線は、やや熱を帯びているようにも見える。

（私が、どうしてあれを選んだのかお見通しって訳、か……。敵わないなぁ～、アーチャーには）

そう思い、一人微笑むシャマル。その隣を歩くシグナムだったが、そんなシャマルの内心を知るはずなく、ただその笑顔に不思議そうな顔をするだけであった……

三人が家に戻ると、はやてがリビングで苦笑していた。ヴィータとザフィーラの姿はない。どこに行ったのか尋ねると、はやてがやや困ったように答えた。ゲームで熱くなり過ぎ、二人は少し熱を冷ましてくるとそれぞれ掃除をしているのだそうだ。

確かにそう言われて気配を探れば、風呂場と二階から気配がする。それに三人も苦笑し、借りてきたものを見せる。それにはやても納得し、準備をするべく動き出す。ジュースやお菓子などを用意し、ホームシアターのような感じにしたいのだろう。

「なら、私はヴィータちゃん呼んでくるわ」

「私はザフィーラを呼んでこよう」

「あ、シグナムやなくてアーチャー行ってくれるか？　シグナムはちょうわたしの手伝いして欲しいんや」

何故かはやての指示が入り、それに疑問を感じるも動き出す三人。そして、シャマル達がいなくなったのを見計らい、はやてはシグナムへ尋ねたのだ。何かあったのかと。それに対してシグナムは戸惑った。何も心当たりがなかったからだ。

そして、その旨を告げると、はやては小さく唸ってこう言った。

――――いや、シャマルのアーチャーを見る目が変わった気がするんよ。

それにシグナムは首を傾げるものの、はやてがそう言うのならそうなのだろうと思い、何も言わない事にした。そして、二人によってリビングに戻ったヴィータ達を交えて、五人は楽しくその日を過ごす。

ちなみに、午後のゲーム大会では優勝がはやて。準優勝がシャマル。三位が僅差でヴィータだった。惜しくも四位となったシグナムは、表面上は平然としていたが、内心ではとても悔しがっており、この後、ヴィータはゲームでのシグナム戦勝率が五割を切る事になるのだ……

――

――――――

帰還編その2　前編

照り付ける夏の日差し。まだ朝の八時だというのに、その日差しは強い。季節は夏真っ只中。後数日でお盆を迎えるという頃だった。

「今日も暑いな」

庭で本を読んでいたすずかは、どこか気だるそうに呟いた。既に夏休みの課題を終わらせている彼女は、趣味でもある読書に勤しんでいた。部屋ではなく、外の空気を感じながらと思って庭での読書にしたのだが、それを少し後悔し始めていたりする。

もう、遊園地になのは達と行った日から、二週間が過ぎていた。あの後は、大勢で遊びに行く事は出来なかったものの、なのは達子供だけでの図書館勉強会やお泊り会。ライダーとセイバーの二人だけの遠出（行き先は何と三重県の遊園地）や美由希達お姉さんズ（美由希、アルフ、ファリン、シャマル、忍）のお出かけなど、それぞれでの交流は欠かさずあった。

（でも、最近アーチャーさんがノエル達を避けてる気がするんだよね）

そう、そんな交流が盛んになる中、何故かアーチャーはあまりそういう事に参加しなかった。はやてがいれば参加するのだが、ファリンやノエルなどからの誘いは、ほとんどと言っていい程断るようになったのだ。

唯一続いているのは、ファリン達への料理教室だが、ここにはライダーもいるからだとすずかは思っていた。何せ、そのライダーが漏らしていたのだ。最近、自分が邪魔者になっている気がすると。

それを聞いた時、すずかは苦笑しながらこう思ったのだ。それでも毎日教わるライダーは凄いと。

そんな事を考えていたからだろうか、すずかは気付かなかった。何者かが自分の背後から近付いている事に。その存在は、静かにすずかへ近付いていく。足音を立てないように慎重に、一歩一歩に細心の注意を払いながら進む謎の人物。

そして、ついにすずかへその手が届くといったところで――。

「っ！？」

その肩に手を置いた。

「久しぶり、すずか……驚いた？」

「ゆ、ユーノ君！？」

振り向いた先にいたのはユーノ。どこか申し訳なさそうな表情をしている。その理由は、先程のすずかの反応。軽く驚かそうと思ってユーノは気配を殺したのだが、セイバーや恭也などから手ほどきを受けたユーノは、常人ではもう気配を捉えられない域には至っていたため、すずかもそれに意識が向いてなかったせいもあり、最後まで気付かれなかったのだ。

とりあえず、ユーノはすずかにその旨を告げ、謝った。軽い悪戯みたいなものだったんだと。それを聞いて、すずかは許すと言った後、改めておかえりなさいと告げた。

それにユーノも嬉しそうにただいまと返し、互いに笑い合った。

そして、すずかが何故ユーノがここに一番に来たのかを尋ねた。

「どうして家に？」

「えっと、人目に付きにくい場所で、広い場所って考えたらここしか浮かばなくって」

「……そっか。アリサちゃん家だと魔法は……」

「そう。アリサや小次郎さんならいいけど、他の人に見つかると、ね」

そして、ユーノは高町家は適当な場所がなかったと告げた。道場も考えたのだが、建物の中と外では成功率や負担が違うからと。故に月村家を選んだのだと。それを聞き、すずかは内心複雑だった。なのは達に一番最初に会いたいとユーノが思っていた事。でも、今自分が一番最初にユーノと再会出来ている事。その悔しさと嬉しさが入り混じって、すずかは笑顔をむける事が出来なかった。

それをユーノは不思議そうに見つめたが、何かを思い出したように告げた。色々面白い話を仕入れてきたから、またゆっくり話をしようと。それにすずかは笑顔を見せて頷いた。

そして、ユーノは早速とばかりに高町家へ戻ろうとするのだが、すずかが小さく悪戯めいた笑みを浮かべて、ユーノへこう言ったのだ。

「なのはちゃん達も驚かせてみない？」

ユーノ、海鳴に帰る　前編

それから十数分後、月村家前になのは達子供組が勢ぞろいしていた。全員すずかからメールで呼び出されたのだ。内容は単純で、大切な話があるから来て欲しいとの事。

それを見た時、アリシアを除く全員が不思議に思ったのだ。もうすずかは自分の秘密とも言える”夜の一族”について話し終えていたからだ。

その上でまだ話す事があるのだろうかと。そう感じたからこそ、逆に気になっているというのもある。ちなみにアリシアはすずかが吸血鬼だと聞いた時、驚くのでも怖がるでもなく、楽しそうにこう言ったのだ。

――――じゃあ、わたしも吸血鬼になれる？

そう言われた時のすずかの表情は唖然。そしてややあってから、嬉しそうな笑顔に変わった。アリシアが言った言葉は、なのは達とは違う意味ですずかの心を強くした。自分だから吸血鬼でも平気。それとは違い、吸血鬼である事をむしろ羨ましがり、同じになりたいとさえ言ってくれる。それもまた、その存在が自分だからこその発言。

そう考え、すずかは「残念だけど無理なんだ」と告げると、アリシアはどこか寂しそうに「そっか」と言って肩を落とした。後で分かった事だが、アリシアはすずかの身体能力の高さは、その血の恩恵だと知って、自分も同じようになってフェイト達と一緒に戦えるようになりたかったとの事。

それを知り、すずかは苦笑しながら告げたのだ。血による恩恵はまちまちだから、必ずしも力が強くなる訳ではないと。

そして、それを聞いてアリシアは「じゃ、わたしは頑張ってすずかみたいになるね」と言って全員に笑みを浮かべさせたのだ。

「ね、すずかちゃんの話って、何だろうね？」

「さあ？　でも、大切って事は何か重要な事でしょ。行けば分かるわよ」

「そやな。とりあえず、お邪魔しよか」

そう言ってはやてはベルを押す。そして、聞こえてきたノエルの声にすずかに呼ばれた事を告げると、門が開いた。そして、そのまま歩き出すなのは達。アリシアは一人先を行くように走り、玄関先で止まると催促するように手招いた。

それにフェイトとアリサが軽く注意し、なのはとはやては笑みを浮かべる。するとその時、なのははレイジングハートからある事を告げられた。

”なのは”

【どうしたの？】

”実は……”

それを聞いて、なのはは驚きを浮かべ、同時に何かを悟った。だが、それを表に出す事無く平然としながら歩く。

玄関に着き、アリサが扉を開けようとする前に、中から誰かが扉を開けた。それはファリンだった。ファリンは笑顔でいらっしゃいと告げ、すずかが部屋で待っていると言ってなのは達を案内し出した。それに何の疑いも抱かないフェイト達。ただ、なのはだけは何かを知っているような笑みを浮かべていた。

「どうしたのなのは。さっきから笑ってるみたいだけど？」

「にゃはは、フェイトちゃんもすぐに分かるよ」

「？」

「すずかちゃん、なのはちゃん達を連れてきましたよ」

なのはの表情に気付き、尋ねるフェイトだったが、それをなのはは誤魔化した。それと同時にファリンがすずかの部屋のドアをノックし、呼びかける。すると、すずかの声で入ってもらってと返事があり、ファリンはドアを開けてなのは達を招き入れた。

それにお礼を述べながら入っていくなのは達。部屋の中では、すずかが椅子に腰掛けて本を読んでおり、なのは達を見ると嬉しそうに笑みを見せた。

「いらっしゃい」

「お邪魔させてもらうな。で、一体どないした？」

「そうそう。一体何よ？　大切な話って」

「せつめーをよーきゅーする」

「あ、アリシア……」

「何かアリシアちゃんだけ幼い感じだね」

はやての挨拶をキッカケにアリサ達がすずかへ尋ねた。それははやてとアリサは不思議そうに、アリシアはどこか面白そうにと違い

はあったが、聞きたい事は同じだった。
フェイトとなのははアリシアの話し方にやや苦笑していたが。そんな三人の声を受け、すずかはやや真剣な表情を浮かべた。そして、全員にベッドに座るよう告げ、ゆっくりと口を開いた。

「あのね……実は……」

すずかが神妙な雰囲気で語り出したその時、なのは達が座るベッドの陰から静かにユーノが現れ、小さく笑みを浮かべて――。

「みんなただいま！」

「「「「っ？！」」」」

「おかえり、ユーノ君」

元気良く声を掛けた。それに驚くフェイト達。唯一なのはだけは笑っていた。余裕の笑みでユーノへ振り向き、悠々と返事さえ返したのだ。
それにすずかとユーノが逆に驚かされた。不思議そうなすずかとユーノだったが、ユーノだけは何かに気付き、困ったように告げた。

「レイジングハートだね」

「うん。転送魔法の反応が残ってたんだって」

そう、先程なのはにレイジングハートはそう伝えたのだ。それを聞いて、なのはは直感的にユーノが帰ってきたと思った。そして、同時にすずかの話も理解した。二人して驚かせようとしているのだろうと。

だから、気を遣ってフェイト達には秘密にしたんだと、なのはは笑みを浮かべて言った。それにフェイトは納得したものの、アリサ達は三人揃って文句をぶつけた。

なら教えなさいよとアリサが言えば、なのはちゃんのせいで寿命縮んだわとはやてが告げて、なのはのイジワル～とアリシアが怒る。それを眺め、フェイトとユーノは苦笑しつつ、ご挨拶。

「おかえり、ユーノ」

「ただいま、フェイト」

微笑みを交わす二人。その横では三人に絡まれ困るなのはの姿。そして、すずかはその光景を見て、楽しそうに笑っていた……

「おかえり、ユーノ君」

「おかえり、ユーノ」

「ユーノ、おかえり～」

「ただいま、はやて、アリサ、アリシア」

なのはを十分懲らしめ、ついでにとばかりに主犯格のすずかにも少し仕返し（くすぐりの刑）をし、ユーノは帰ってきたので不問とした。

それでやっと三人もユーノと言葉を交わし、笑顔を見せ合う。七人が久しぶりに揃った事に喜ぶなのは達だったが、ユーノはそんななのは達へある事を伝える。それは、クロノ達が例の旅行に参加し

たいと言っている事。それを聞いて、てっきりなのは達は喜ぶだろうと思っていたユーノだったが、何故かなのは達は揃って困り顔。

「どうしたの？」

「えっと……」

「ええよ、なのはちゃん。わたしが話す」

はやてが話したのは、闇の書の話。今、はやての家に闇の書があり、既に稼動している事。そして、魔法生物限定とはいえ、蒐集活動を行なっている事などを話した。

それを聞いてユーノは驚きを見せたが、それはやや軽いものだった。全てを聞き終え、ユーノはなのは達にこう語り出す。自分が無限書庫で調べた結果を。それは、闇の書が本当は『夜天の魔導書』と呼ばれていた事。そして、闇の書と呼ばれる原因は、何代目かの主が改竄をした事に端を発している事を。

それらを話し終え、ユーノは告げる。完成させれば、確実に恐ろしい事になると。それを聞いて、はやては断言した。今の蒐集活動は、その完成後を確認するためにやっているもので、管制人格を起動させれば、もう蒐集する必要はないと。

そして、既に万が一の手立てもアーチャー達が考え、暴走に備えているとも告げた。それにユーノも納得し、頷いた。アーチャーが手立てを準備しているのなら、おそらく大丈夫だろうと。

「でも、クロノ達はどうする？」

「えっと、そこは……」

「ええ考えないか、ユーノ君」

フェイトの言葉を受け、言い淀むなのは。それを見て、はやてがユーノへ問いかける。そう、今のなのは達子供組のもっぱらの不安。それは、リンディ達とシグナム達の確執。それをどうやって解消したらいいのか。どうすればみんなで笑っていられるか。それをずっと考えているのだ。

だが、それが中々思いつかない。その要因の一つがプレシアやフェイトから齎された情報。

（クロノ君のお父さんを死なせちゃった原因が闇の書だもんね……）

それが一番の不安要素。そこがなのは達を困らせる最大の原因。これをどうすればいいのかが、未だに思いつかないのだ。故に、はやては現時点で両者を良く知るユーノに意見を求めた。それをユーノは聞いて、どこか苦笑気味に答えた。

「ありのままに言えばいいと思うよ」

その言葉に全員が目を点にした。そんなのは達の反応にユーノは語る。リンディもクロノも闇の書を恨んではいるかもしれないが、それを守護騎士にはぶつけないだろうと。そう、以前闇の書について聞いた時、クロノはこう言ったのだ。

――闇の書が原因で父さんは死んだ。でも、復讐なんかは考えない。それを父さんは望んでいないだろうから。

それを静かに淡々と語るクロノを思い出し、ユーノはそう言った。おそらくクロノの言葉は本心からのものだったと。リンディもクロノもクライドの事を誇りに思っている。だからこそ、復讐などを考

えないのだ。それをその亡くなったクライドが望まないと考えているからだ。
それを聞いて、なのは達もどこか納得していた。復讐などしても、死んだ者が帰ってくる訳ではない。そして、誉めてくれる訳でもないし、喜んでくれる訳でもない。もし、自分がクライドの立場ならこう告げるはずだから。
――幸せに暮らしてほしい……と。
だからユーノの言葉を信じる事が出来る。少なくともなのは達はそう考えた。そんな安堵したかのような表情のなのは達に、ユーノはこう締め括った。
「きちんとはやての口から現状を説明して、完成させない事を明言すればね。普通の局員なら問題だけど、リンディさん達なら大丈夫。確かに闇の書は危険物扱いだけど、それは完成させるからであって、はやてみたいに完成を求めていないのなら手の打ちようはあるから」
――それに、リンディさん達ははやてから家族を奪ったりしないよ。
笑顔でユーノはそう言い切った。それにはやては頷き、そうやなと答えた。ただし、ユーノはこうも言った。出来れば、その時はアーチャーにも同席してもらうべきだと。そして、その時期は地球に来た際にするべきだとも。
理由は、地球は管理外のため、訪れるとしても個人として来るだろうから、万が一交渉が決裂しても時間が取れると。そして、その時間が取れるという事が何よりの交渉材料なのだと。

「どうしてそうなるのよ？」

「ＪＳ事件の結果、リンディさんがアーチャーさん達に要求した事は何か覚えてる？」

「……ランサー達の協力だよね」

「あ、そっか！　リンディさんはセイバー達と戦いたくないんだ！」

「正解。つまりは、セイバー達と管理局との衝突を避けたいんだろうね」

ユーノの言葉にアリサとすずかも考え、頷いた。時間が出来るという事は、それだけセイバー達が準備出来るという事。しかも、今は守護騎士達がいる。戦力としてはあの頃よりも充実しているのだ。

おそらく管理局が本腰になれば、それでも鎮圧するだろう。だが、その被害や代償はかなりのものになるはず。そこまで考え、アリサは思った。

「ユーノ……あんた、アーチャーさんみたいな考えよ」

「結構意識してる。僕は、攻撃魔法出来ないからね。知恵で戦うしかないから」

「ね、一体どういう事話してるの？」

アリシアが浮かべた疑問にユーノは簡単に答える。つまり、リンディ達は局員として職務を果たそうとすると、その局を危機に追いやる事になる。だから、きっと自分達個人レベルで話をつけるだろうと。

それに、もし局員として武力行使を行なおうとした時には、セイバー達サーヴァントの驚異的な力の行使をちらつかせればいい。そう言ってユーノは苦笑を浮かべる。

「ま、これは最後の手段だよ。こうするまでもなく、リンディさん達は受け止めてくれるはずさ」

「は～……ほんまアーチャーみたいやな。そこで皮肉っぽく笑ったら完璧や」

「……誉めてもらったと受け取っておく」

「ユーノ君、凄いね……」

なのはの感心したような声にすずかも頷く。

「ホント。途中からはアーチャーさんが喋ってるように感じたぐらい」

「ユーノ、すご～い」

「やるじゃないの！」

「本当に……アーチャーみたいだった」

周囲の賛辞に照れ笑いのユーノだったが、すぐに気を取り直し、なのはへ告げた。

「父さん達に話があるんだ。今なら翠屋かな？」

「ふぇ？　うん。お父さんもお母さんも今日はお店」

それを聞き、ユーノはすずか達に一言断りを入れ、翠屋へ向かうと言って部屋を後にした。その後姿を見送って、ぽつりとアリサが呟いた。

何か、大人の顔をしてたと。それにその場にいた全員が頷いた。自分達と別れてから、ユーノに何があったのか。それを聞き出さないといけない。そう、誰もが思ったのだった……

――――――

帰還編その2　中編

「ありがとうございました」

笑顔で学生風の少女達を見送る桃子。夏休みも中盤を過ぎ、もう少しでお盆に突入する。それを考え、桃子と士郎は現在プレシアと打ち合わせに余念がない。

そう、旅行の打ち合わせである。アリサの両親は多忙を極め、今回も不参加だが、それでも娘をよろしく頼みますと託されるぐらいには交流がある。プレシアも挨拶回りの際、運良く顔を合わせる事が出来たため、アリサの両親とは知人にはなっている。

「桃子～、もうシューアイスが少ないよ」

「あら、本当。分かったわ、追加もってくるから」

レジを片付けている桃子へ、アルフがそう言って近付いた。アルフの格好はただのエプロンではなく、エプロンドレス。アルフの容姿と性格を考え、ただの格好ではなく、ちょっと可愛い系にしようと桃子が提案したものだ。

実際、これを着たアルフが働くようになってからというもの、男性客が増えたのだ。主に高校生辺りが。それを知ったシャマルが自分も着ようとしたのを、セイバーが慌てて止めた経緯がある。セイバーがシャマルを止めたのは、自分も着せられると感じたため。

実のところ、桃子はそれを狙っており、アルフはそれを聞かされたのもあってこの格好にしたのだが、セイバーはシャマルを阻止する事で自分に害が及ばないようにしたのだ。

二人が話していると、そこへ来店を告げるベルの音がした。

「お、いらっしゃいませ～。二人でいいかい？」

アルフの口調も最初はどうかと思った桃子達だったが、その砕けた感じがいいと言う客も多く、また乱暴ではないためか、他の客からの苦情もないためそのままにしていた。

（でも、格好とのギャップが大きいのよね）

桃子は知らない。そのギャップこそがアルフ最大の売りになっている事を……

朝の混雑も過ぎ、やや落ち着きを取り戻した店内。例年よりも忙しいのは、今年始めた夏限定で販売するシューアイスの存在だ。今年になってから販売に踏み切ったもので、味はセイバーとヴィータの保障付き。そのせいもあり、売れ行きは好調なのだが、困った事に売れすぎて……

「まさか、もう完売とはね」

「仕方ないよ。こう暑くちゃねぇ」

「でも、良かったな。また記録更新だ」

士郎の言う記録とは、シューアイスの完売時間だ。最初は夕方前だったのが、もう開店三時間で売り切れだ。持ち帰りだけでなく、店内での飲食にもセットで注文する人もいるため、ここのところの暑さも手伝い、まさに飛ぶように売れるのだ。

桃子もそれを考え、多めに用意しているのだが……

「だけど、私としては多くの人に食べてもらいたいのよ」

「じゃあ……やっぱ持ち帰り限定にする？」

「それとも、お一人様お一つのみだな」

この話も既に今月に入って七回目。桃子は売れ行きよりも、それを多くの人に食べてほしいと考えている。とくに子供などが売り切れと聞いて、残念そうに帰っていくのが嫌なのだ。

そのため、色々と考えてはいるのだが、どれも欠点があり、中々踏み切れずいたのだ。

「もう、仕事してくださいよ。動いてるの私だけじゃないですか」

そんな風に考える桃子達をシャマルが笑いながら文句を言った。それに三人も笑うが、そこに来店を告げるベルが鳴り、シャマルがそれに対応しに行く。だが、そこから聞こえてくるやり取りに三人は反応せざるを得なくなる。

「いらっしゃいませ。僕、一人？」

「あ、えっと……士郎さんは？」

「え？　士郎さん？」

その声に聞き覚えがあったから。そして、それは聞こえるはずの無い声だったから。故に三人の視線がそちらを向く。そこにいたのは……

「ゆ、ユーノ……」

「ただいま、父さん、母さん」

やや肩で息をするユーノ。汗が出ているとこからも、走ってここまで来たのだろうと理解出来た。そして、何よりもその笑顔と言葉。それが全てを物語っていた。

彼がどういう想いでここまで走ってきたかを。だから、士郎と桃子の瞳に涙が浮かぶ。帰ってきた。自分達のもう一人の息子が帰ってきたのだと。

「おかえり、ユーノ」

「おかえりなさい、ユーノ」

それを理解し、二人もそれに応えた。ユーノが自分達をどう考え、どう想ってくれたのか。それをちゃんと噛み締め、心からそう言ったのだ。

そんな二人を見て、不思議がるシャマルにアルフは念話で教えた。あの少年がユーノ・スクライアであると。それを聞き、シャマルも納得。既に彼女もはやてやアーチャー、桃子や士郎達からその名を聞いていたからだ。

【……家族、なんですね】

【何言ってんだい。アタシだってフェイト達の家族だし、あんただってはやての家族だろ？　関係ないのさ、血の繋がりなんて】

そのアルフの答えにシャマルも頷き、微笑んだ。自分のように、血は繋がらなくても家族と言われる存在が隣にいた事を。それを思い出したからこそ、シャマルは思う。はやて達の周囲は、似た者ばかりだなと。

二人は仕事中だったため、ユーノは再会の挨拶だけをしにきたと告げた。そして、後で相談したい事があると士郎達に言って店を後にした。それを見送り、二人は小さく笑う。

ユーノが臆面もなく父、母と呼んだからだ。それを士郎はともかく、桃子は心から喜んでいた。以前潰えた『高町ユーノ計画』を再始動させる事さえ考えたぐらいだ。まぁ、それはユーノのある決意と想いによって諦めるのだが、この時はまだ絶賛計画中だった。

「大きくなって帰ってきたな」

「そうね。まだ三ヶ月も経ってないのに」

「男ってのはそんなもんさ。三日で変化するって言われるぐらいだしな」

士郎の言葉に桃子は笑う。そしてこう言ったのだ。確かに会って十数分で変化したと。それが初めて会った日の話だと士郎も気付き、笑みを浮かべた。それを見ていたシャマルとアルフは何の事か分からず、疑問符を浮かべるものの、自分達を呼ぶ声に反応し、それぞれ動いていく。

こうして今日も翠屋は賑わうのだった……

その頃、高町家の道場内では……

「これで終いか」

「くっ……もう一本だ」

小次郎とシグナムの試合が終わったところだった。現在、道場にいるのは四人。シグナム、小次郎、セイバーにランサーである。先程まではアーチャーもいたのだが、シグナムと試合を終えると、月村家に料理教室のため出て行ったのだ。

「しかしよ……」

「どうしました？」

小次郎へ再試合を申し込むシグナムを見て、ランサーがどこか呆れながらセイバーに問いかけた。それに不思議そうな表情のセイバー。だが、ランサーの視線を追い、何をランサーが言いたいかを理解し、頷いた。

「シグナムはこういう性格と知っているはずです」

「いや、まぁ俺もやり合うのは嫌いじゃねえが、ちょいと度が過ぎてねえか？」

「……バトルジャンキー、と言うらしいですよ、彼女は」

「……誰が言ったんだ、それ」

「ヴィータです」

「……それ、シグナムの姉ちゃんには言うなよ。言ったらヴィータが燃えるぞ」

やや引きつった表情でランサーはそう言った。セイバーはそれを聞いて、当然だとばかりに頷いた。視線の先では、シグナムと小次郎が再び木刀を交差させていた。

実は、つい最近セイバー達は本気の模擬戦をした。シャマルが結界を張り、場所として月村家の庭を借りた大規模なもの。そこでシグナム達守護騎士の実力をセイバー達も知ったのだ。同時にシグナム達もセイバー達の実力を知り、愕然となったのだ。

セイバー、ランサー、小次郎は個人戦では負けなし。アーチャー、ライダーもとてもではないが、まともにやって勝てる相手ではない。シグナムはそれを知ってからというもの、より盛んに試合をしたがるようになった。その一番の標的はアーチャーとランサー。前者は家族として申し込み易く、後者は同じように強者との戦いを望むからだ。

「さて、じゃあ……俺も行くとしますかね」

「頑張ってください」

「おうよ」

セイバーの声に片手を挙げて応えるランサー。シグナムは小次郎に再び木刀を弾き飛ばされていた。恭也達との試合では、このよう

な事はない。小次郎と中々良い勝負をするのだ。だが、シグナムは良い勝負には、中々ならない。それは、小次郎が加減をしないからだ。シグナムがそれを望んでいるのもある。

故に、シグナムはこのところ連戦連敗なのだ。しかし……

（やはり良い物だ。敗北を喜ぶなど、私らしくないが……それだけこの敗北には価値がある！）

並み居る騎士と言われる相手と古来から戦ってきたシグナムにとって、セイバー達は初めて出会った真の強者だった。心から自分よりも強いと認める事が出来る存在。そして、同時に敬意さえ払える者達。それがシグナムにとってのサーヴァント達だったのだ。

それはヴィータ達も同じで、初めて勝てないと思わされた相手がセイバー達だったのだ。守護騎士達にとって、それは本来なら恐怖。だが、今は違う。自分達でも勝てないと思う存在が協力してくれる。それは絶大な安心感。

故にシグナム達は揃って思ったのだ。セイバー達が敵でなくて良かったと。

「おい、どうするシグナム。しばらく休んでセイバーとやるか、ちょいと休んで俺とやるか選べよ」

「……少し休んで両方はダメか？」

「貴方という人は……」

どこか窺うように尋ねるシグナムに、セイバーは呆れたようにそう言った。それに小次郎とランサーが笑う。その二人の笑い声にシグナムも笑みを浮かべる。セイバーもそんな光景を見て笑みを浮かべるのだった……

「帰って来たんだ……」

ユーノは久しぶりの高町家を眺め、そう感慨深げに呟いた。過ごしたのは僅かに一ヶ月と少し。それなのに、いつの間にか本当の家のような存在になっていた。なのは達や士郎達の顔を見た時とは違う感慨があるのを、ユーノは強く感じていた。

そして、ゆっくり一歩一歩の感触を確かめるように歩き出す。道場を眺め、厳しくも充実していた訓練の日々を思い出し、ユーノはついそちらへ足を向けようとして――。

「あれ？　ユーノ……君？」

声を掛けられた。それに振り向くと、六人分のグラスが載ったお盆を持った美由希がいた。中身はおそらく麦茶だろうか。しばし見つめ合う二人。だが、それから先に脱したのは美由希。

「おかえりユーノ君！　いつ帰ってきたの？　なのは達はもう知ってる？」

「あ、えっと、はい。なのは達とはもう会いました。父さん達にも会ってきましたし」

「そっか。もう会ったんだね。でも……」

そう言ってユーノを見つめる美由希。それにユーノは不思議顔。何かあっただろうか。そう思って美由希を見ていると、美由希は一言。

「完全に父さんって呼ぶようになったんだね」

そうどこか嬉しそうに告げた。それにユーノはやや照れるものの、頷き肯定した。それを見て、美由希は自分もお姉ちゃんと呼んで欲しいと告げる。それを聞いて、ユーノは若干戸惑うものの、何か意を決したように美由希の目を見て……

「姉さん」

「うん。何かな、ユーノ」

「えっと……改めてよろしく」

「うん、よろしく。にしても弟が出来た、かぁ～……何か嬉しいな、こういうの」

そう言って嬉しそうにニコニコしている美由希だったが、ユーノが手にしているお盆について尋ねると、思い出したように道場へ歩き出す。今、セイバー達が試合をしていて、その休憩を兼ねての給水タイムをしてもらおうと持ってきたらしい。

ちなみに恭也は忍とショッピングだそうで、帰りは夕方になるだろうとの事。きっと、ユーノが帰ってきたって知ったら喜ぶよ。そう美由希に言われ、ユーノは嬉しそうに笑みを浮かべるのだった……

一方、月村家では、なのは達がそのまま旅行の話とある人物の話で盛り上がっていた。

「で、どうなのよ。管制人格って人は。間に合いそうなの？」

「う～ん……どうなんやろ。わたしが少し発破かけたから頑張ってはくれとるんやけど……」

はやての言葉は本当で、シグナム達は何とかお盆過ぎの旅行までに間に合わせようと、今月に入り、現在週三だった蒐集を週五に増やし、更に深夜にも出掛けて頑張っていた。

現在、蒐集は三百頁を過ぎており、後少しまで来ているのだが……

「でも、ヴィータちゃんが言ってたけど、最近中々頁が稼げないんだって」

「らしいね。シグナムも言ってたけど、頁を多く稼げる魔法生物は無人世界には中々いないから」

「ああ、そっか。あの模擬戦の後に聞いてたわね」

なのはとフェイトの言葉にアリサも納得。実は、セイバー達の模擬戦の際、なのはとフェイトも参加していたのだ。そこで、フェイトはシグナムに気に入られたのだ。ランサー仕込みの戦闘術や思考など、どこかシグナムに近いものを感じさせるフェイト。フェイトもシグナムの実直な性格から、ランサーに近いものを覚え、意気投合したのだ。模擬戦での互いの戦いぶりを見て。

そう、二人はサーヴァント組ではなく、守護騎士達の側として模擬戦に参加したのだ。理由は、アーチャーとランサーによる考えであった”何をやっても勝てない相手”との戦いの経験をさせるため。それにセイバー達も納得し、二人は初めて何をやっても勝てないという状況と相手を知った。

そして、その時の対処法も同時に実戦で教え込まれた。対抗するのではなく、ただ生き残る事を考え、実践しろ。自分の得意に持ち込めば勝てると考えるな。常に相手は自分より上だと心得ろ。相手の力量を正しく理解出来ると思ったら、それが既に過ちだ。

そんな事を散々に言われながらの戦いだった。そして、それは確かに正しく、二人はアーチャーが双剣の使い手だと知ると、距離を取って戦おうとした。だが、アーチャーが弓を投影して言ったのだ。

――私の名の意味を忘れたか？

その後、二人はアーチャーという名の意味を改めて知る事になった。こうして、なのはは初めて、フェイトは改めて知ったのだ。

”勝てない相手には、何をやっても勝てない”と……

（でも、勝てない相手でも負けない事は出来る……）

（そうランサーも教えてくれた……）

二人は思い出す。終わった後、アーチャーが言ってくれた言葉を。

「勝てない相手は何をしても勝てない。だが、勝てないのなら負けないように戦えばいい。

いつか来る好機……それを信じて待ち続け、耐え切るのも一つの手。今回のような集団戦なら、いつかは信じた仲間や友が助けに来るかもしれん。

何にせよ、諦めずにいろと言う事だ。それに、勝ちに執着せず相手を引き付け続けるのも、考えようによっては立派な勝利といえる」

その言葉を二人は心に刻んだのだ。決して忘れずにいようと。勝

ちを求めるのではなく、最後に勝利出来るように。そう、生き残れるようにと。

「それで……旅行にはエイミィやお兄ちゃんも来るんだよね？」

「お兄ちゃん？」

アリシアの発言にすずかが疑問符を浮かべた。それにフェイトが事情説明。そして、それを聞いて全員がその原因を悟った。

（（（（（絶対エイミィさんだ（や）……）））））

そんな四人を見つめ、フェイトとアリシアは首を傾げた。そして、ふとアリシアが呟いた。行きたい場所があるんだと。そして、その場所を聞いたなのは達は驚くも、全員が笑顔で頷いた。それは、約束を果たす事にも繋がると思い出したから。

こうして、行き先を決めたなのは達は、その日の夜に家族へ報告する。それを聞き、それぞれの家族達も異論はなく、アリシアの希望が全面的に叶う事となる。

――――――

シャマルは速攻で潰されました。それを守ろうとしたザフィーラも……。ちなみに相手はシャマルがランサーでザフィーラがライダーです。

なのは&フェイトはアーチャーが。シグナムはセイバー。ヴィータが小次郎です。ま、個人戦になった時点で勝敗は決まっていたんですけどね。

帰還編その2　後編

「それにしても、意外と早かったのですね」

「何とか旅行までには戻ってきたかったんだ」

高町家　道場。そこでは、ユーノとの再会を喜ぶセイバー達の姿があった。セイバーの言葉にユーノは笑みを浮かべて答えた。それを聞いて、セイバー達も納得。きっとアリシアやアリサ辺りが急かしたのだろうと思ったからだ。

プレシアは定期連絡の度に、ユーノへ伝言を伝えにきた。その内容は、大抵そういう類だと知っていたため、セイバー達も苦笑した。

「それにしても、お前さんも成長したんだな」

「え？」

「うむ。少し精悍な顔つきになってきたな」

「そ、そうですか？」

ランサーと小次郎の尊敬する二人の男からそう言われ、ユーノはどこか嬉しそうに言葉を返す。それを見ていたシグナムがセイバーへ尋ねる。ユーノの事は知っているが、はやてから聞いていた印象と少し違うと感じたからだ。はやてはユーノを優しい学者タイプの少年と言っていた。だが、その身から感じる気配は、どこか戦士の類にも似たものがあると。

それを聞き、セイバーは答えた。ユーノは高町の家にいる間、士郎や恭也、更には小次郎などに手ほどきを受けていたと。それを聞

いて、シグナムも納得した。そして、同時に思ったのだ。どこでも男は同じようなものなのだなと。

そんなシグナムやセイバーとは違い、美由希は満面の笑みでユーノを見ていた。二人が言ったように成長しているのが分かったからでも、ましてや男はみんな同じだと思ったからでもない。弟が誉められている。そう思っているからこその反応だった。

しかも、誉めている相手に自分が尊敬する小次郎がいれば尚の事。

（ユーノは恭ちゃんとは違って、戦う事は好きじゃないけど……でも、いざって時はちゃんと男の子するんだよね）

思い出すのはユーノが小次郎と初めて戦った日の事。自分の全てを出して戦い、力及ばず負けた時、ユーノは泣いた。それを見て、士郎も恭也も後で言ったのだ。あいつは強くなる、と。敗戦の後、励ましてくる士郎や恭也にユーノはこう言ったのだ。

――せっかく士郎さん達に色々教わったのに……

自分の無力さに涙するだけでなく、自分のために手を貸してくれた者達への申し訳なさ。それをユーノは一番悔いていたのだ。だからこそ、二人は言ったのだ。ああいう考えをする者は強くなると。自分のためだけでなく、他者の想いや期待に応え、自分の限界へ挑む者は強くなると。

それを聞いた時、美由希も思ったのだ。ユーノもなのはと同じなのだと。自分のためでなく、誰かのために強くなりたいと思う。それが本当の強さに必要なものなんじゃないかと。

そんな事を思い出す美由希。その視線の先では、ユーノがシグナムから手合わせを申し込まれ、戸惑っているのだった……

月村家　厨房。そこで中華鍋を片手に腕を振るうのは、メイド服のライダー。それをアーチャーが黙って見守る。やがて、その鍋を振るう手が止まり、用意してあった皿へ鍋の中身を移そうとする。大きなオタマを使ってそれを全て集め、皿へと盛り付ける。

そして、静かにオタマをどかすと、そこには見事な山を作るチャーハンがあった。

具材は、卵、ネギ、鮭とシンプル。だが、香ばしく仕上げられたそれは、普通のチャーハンではない事を雄弁に語っている。それをライダーはアーチャーの前へ置く。それを見つめ、アーチャーは黙ってレンゲを手にするとその山の一角を崩す。湯気を出している飯をすくいあげ、おもむろに口へ運ぶ。そして、咀嚼して一言。

「……及第ではあるな」

「そうですか……」

心なしかほっとした様子のライダー。アーチャーの及第は、忍達の美味しいに相当するのだ。初めは簡単なものしか出来なかったライダーだったが、やっとアーチャーにも認められる物を作れるようになっていた。

ノエルは既にそこをクリアし、今はアーチャーから免許皆伝（本人はそんなものはないと否定）を貰うべく、日々努力中。ファリン

は、未だに未熟でライダーにさえ追い抜かれてしまっていた。

そして、現在そのファリンとノエルは買い物へ出かけている。アーチャーはそれと入れ替わりにやってきた。ライダーは、そんなアーチャーへ言った。いつまで逃げ続けるつもりかと。ランサーを見習い、そろそろ向き合うべきではないかと。

それを言われ、アーチャーは珍しく言葉に詰まった。いつもの雰囲気は鳴りを潜め、どこか戸惑うような感じでこう言った。

――私には、彼女達を受け止めるような度量も資格もない。

それを聞いて、ライダーは少しだけではあるが怒りを見せた。妹と想うファリンや親しき家族とも言えるノエルのために。

――そんなものはただの言い訳です。それに、そう思うのなら、そうやって二人に告げるべきです。

その言葉に完全にアーチャーは沈黙した。珍しく何も言えずに。いつもの皮肉屋は消え、ただの”エミヤシロウ”がそこにはいた。生憎ライダーはそれに気付かなかったが。

アーチャーは迷っていたのだ。自分は”ヒト”ではない。そして、この身ははやてを守るためにある。そんな自分が二人の想いを受け取っていいものかと。そして、彼が愛した女性の事もある。彼女は意識していないだろうが、それでも彼にとって彼女は特別な存在だった。

初恋の相手と言ってもいい。永久の愛を誓ったような存在。その彼女がいる以上、彼にとって二人の想いに応える事は出来ないと考えていたからだ。

そんな事を思い出しながら、アーチャーはライダー作のチャーハ

ンを食べ終えた。最初の一口だけは味を感じたが、そこから後はまったく味を感じなかった。それだけ思考に没頭していたのだろう。

そう、彼女――セイバーは、確かに『衛宮士郎』が好きなのだろう。だが、それは『エミヤシロウ』ではない。好きな女性が目の前にいても、その想いを口にする事は出来ない。彼女の思い人は自分でありながら自分ではない。それを知るからこそ、アーチャーはセイバーを『セイバー』として見つめる。

決して〇〇〇〇〇とは思わない。それは、彼なりのけじめ。だが、それでも思ってしまうのだ。自分がどうしようもない程に彼女を愛している事を。

（惨めなものだ。初恋を引き摺り続けているとはな……）

自嘲するように笑う。無様だと。そして思うのだ。何故彼女なのかと。自分が出会った彼女でなければまだよかったのに、と。

しかし、彼女は紛れもなく”あの日”アーチャーがエミヤシロウとして出会った頃の彼女のままだ。まさか異世界に召喚されても尚、出会う事になるとは思わなかった。だからだろうか、無意識に呟いた。

「なんでさ……」

それをライダーは確かに聞いた。だからその言葉を聞いて、ライダーは動きを止めた。その口癖を持つ相手を彼女は知っていたから。そして、その言い方や雰囲気までもがあまりにその相手と似ていたから。

だから彼女も呟いたのだ。そこにある種の懐かしさと淡い想いを込めて。

「士郎……なのですか……？」

「っ！？　……何を言っているのだ、ライダー。私は――――」

「そうですか……そうだったのですね。だから貴方をセイバーは……」

ライダーの声に我に返ったアーチャーだったが、その声を遮り、アーチャーが示した反応にライダーは確信を得た。セイバーがアーチャーの料理を食べる時にふと見せる思慕の顔。その理由と原因を理解したから。何故士郎の腕にアーチャーの腕があんなにも見事に移植出来たのか。その全てが彼女の中で繋がったのだ。

「待てライダー。私は……」

「分かっています。でもアーチャー、一言だけ士郎として聞いてください。サクラもリンも貴方の幸せを望んでいました。だからこそ……今度は自分の幸せのために生きてください」

「……ライダー」

「私も同じです。例え、貴方が私の知る士郎でなかったとしても……」

それだけです。そう言ってライダーは後片付けを始める。それをアーチャーは見つめ、内心で言い様のない気持ちを抱いていた。先程のライダーの目。それに込められた想い。それを感じ取っていたからだ。故に告げる。自分に対して本音を言ってくれたライダーへ。自分もまた本音を返そうと。

「ライダー、”俺”からも一言だけ。お前も幸せにな」

「……分かっていますよ、シロウ」

「？」

「いえ、何でもありません」

その答えを聞いて、アーチャーは不思議そうな顔をするが、離れた場所からノエル達の声がした。買い物から帰ったのだろうと思い、アーチャーはそのまま厨房を後にした。二人にこの想いを告げるべく、そして彼女への想いを残し、先へ進むために。

その遠ざかる足音を聞きながら、ライダーは思った。やはり、アーチャーは自分の知る衛宮士郎ではないと。その理由は、先程の反応にある。

（シロウ、と呼ぶ事を士郎は嫌がりましたからね……）

故に違うと。だからこそ、これで踏ん切りもついた。アーチャーはアーチャーだと。決して”士郎”ではないのだ。そう自分の中で理解する事が出来た。だが、それでも……

「まったく……揃いも揃って本質は同じですね」

先程の言葉。それを聞いた時、ライダーには確かに”士郎”が言ってくれた気がしていた。そんな事を感じ、ライダーは微笑みを浮かべる。そして、心の中で告げるのだ。幸せになってみせると。

いつか再会出来た時のために、多くの幸せを得てみせると。そう想い、ライダーは笑う。本当に世界は捨てたものではないと、強く感じながら……

「暇だな～」

「だから暇潰しにシグナムを迎えに行くのか」

「だってよ、大乱闘も一人じゃつまんね～んだよ。シグナムの奴が帰ってくるかと思ったのに、全然帰ってこねえし」

「すまんな。俺が相手をしてやれればいいんだが」

照り付ける日差しに暑いと表情で示すヴィータ。その隣を歩くザフィーラもやや暑そうな顔をしている。ちなみに、ヴィータははやてと同じく麦わら帽子を買ってもらい、ここ最近の外出時は欠かさず身につけている。どこからどう見ても夏休みの子供にしか見えないのは、言わない約束である。

「お前、本気でゲーム下手だよな。シャマルやはやては強いんだけど、あたしはまだまだだし……シグナムがちょうどいいんだよ」

八神家の家族団欒の定番。それはゲーム。ボードゲームやカードゲーム、それにＴＶゲームだ。中でも、ＴＶゲームは対戦系や協力系など色々あって、中々に人気が高い。

はやてがなのはと知り合い、余計にゲームをするようになったため、一気に家族が増えた事も手伝い、今や八神家はハードが三台になっていた。

その後もゲームの話をするヴィータ。それに相槌を打ちながら歩くザフィーラ。そして、話がやや白熱したものになろうとしたところで、二人は高町家に到着した。

その足を迷う事無く道場へ向ける。そこから聞こえてくる音に二人はため息を吐いた。どう聞いても木刀の打ち合う音だったからだ。まだ誰かが試合をしている。そして、それならばシグナムがいない訳がない。

何故なら、彼女は誰かの試合さえ見ていたがる性格なのだ。それに、普段ならこの時間まで道場を使う者はいない。

（ったく、これだからバトルジャンキーは……）

（やれやれ、些か注意せねばならんか。俺よりもアーチャーか主に頼むとしよう）

二人はそんな事を思いながら、道場の扉を開けて――――驚いた。

「中々やるな！　スクライア！」

「だから！　ユーノって呼んでくださいよっ！」

シグナムの一撃を魔法で防いでいる少年の姿を見たからだ。その片手で持った木刀でシグナムの木刀を弾こうとする。だが、純粋に力負けしたからだろうか、それは叶わず、ユーノの木刀が逆に弾かれた。それを好機と見たシグナムがシールドから木刀を離し、再びユーノへ襲い掛かる。

狙いは、ユーノの持ち手。それをユーノは気付いているのだろうが、弾かれた反動で体勢が崩れたままだ。しまったという表情のユーノ。それとは逆に勝ったという顔をするシグナムだったが――――

「っ？！」

その攻撃を切り上げ、距離を取った。それに疑問符を浮かべるの

は美由希だけ。しかし、それも周囲の雰囲気から察したのだろう。何かに納得し、呟いた。

「バインド、だっけ」

「……先程の攻撃は、敢えて隙を演出した誘いだったのか」

美由希の呟きに答えるようにシグナムがそう言った。その証拠に先程シグナムが打ち込もうとした位置には、チェーンバインドが設置してあった。そして、その問いかけにユーノが頷くと感心したように告げた。途中まで本当に気付かなかったと。

「僕が勝つには、これぐらいしないと。でも、気付かれたら意味がないんです。まさか僕は、気付かれるとは思いませんでした」

さすがはベルカの騎士ですね。それを聞いていたセイバー達はどこか思い出し笑いをし、ヴィータ達は苦笑。

そう、それはシグナム達と初手合わせをした際のアーチャーの言葉に似ていたのだ。内容こそ違え、自身が意図した事を見抜かれ、それを誉める流れまでが。

思い思いに笑みを浮かべるセイバー達。一方、それを知らないユーノと美由希だけが、その場で不思議そうに首を傾げていた。

日も暮れ、やや空が薄暗くなった頃、ユーノは八神家のアーチャーの部屋を訪れていた。理由は一つ。闇の書に関しての報告だった。ユーノの口から語られる内容に、アーチャーは何も言わず、ただ黙って聞き入った。そして、ユーノが全てを話し終えたのを理解する

と、静かに息を吐いた。

「……それは間違いないか」

「はい。少なくとも虚偽の類ではないです」

「そうか……良く調べてくれた。礼を言う」

「いいんですよ。僕、嬉しかったんです。アーチャーさんに頼りにされるなんて……思ってもみなかったから」

ユーノのその一言にアーチャーはやや面食らったようだったが、気を取り直し軽く笑みを浮かべて言った。そんな大層な人間ではないと。それをユーノは聞いて、内心否定したが、それを口に出す事はなかった。言えば、堂々巡りになると予想したからだ。

その後は、なのは達にも告げたリンディ達の話をし、アーチャーにも言った。下手に悩むより、正直に話す方がリンディ達には好印象だと。それを聞き、アーチャーはやや迷いを見せるものの、ユーノがクロノに闇の書の事を尋ねた際の反応からも、その可能性は高いと判断し、ユーノの提案通り、海鳴へやって来た際にはやてと共に事情を話す事に決めた。

そして、話が終わるとユーノは高町家へ帰って行った。それを見送り、アーチャーは思う。闇の書は本来『夜天の魔導書』という。それが闇の書と呼ばれるようになったのは、何代目かの主による改竄が原因。ならば、どうして誰もそのバグを修正しようとしなかったのだろうと。

そして、それを考えた時、アーチャーが思い出したのはあの幻の四日間で知った聖杯の真実。

（アレと同じか。誰もそれが狂ったと気付かなかった。そして、闇の書もそうだとすれば……シグナム達の事も納得がゆく）

そう結論付け、最後に思うのはこれからの事。蒐集も管制人格起動まで残りは少しとなり、終わりも見えた。そうなれば、より正確で確かな情報が手に入ると。だが、とアーチャーは呟く。もしかすると、それは余計事態を混乱させるかもしれないと。

そこまで考え、アーチャーは笑った。悪い事ばかりを考えても仕方ないと。今は、考えうるだけの事を考え、不測の事態に備えようと。そう改めて思い、アーチャーは家の中へと戻る。

はやての望み通り、旅行までに起動が間に合えばいいが……と考えながら。

後に彼は知る。その管制人格の起動こそが、この事件の始まりだったと。

――――――

現在、マテリアルズをどうするかを悩んでます。まぁ、はやてっ子は可能なんですが、他の二人が……ねぇ。

幕間8

次元航行艦アースラ。今、アースラは任務を終え、帰還の時を迎えていた。次元航行艦は、その任務の性質上、長期になる事が多い。そのため、一度任務を終えればそれに見合っただけの休暇が与えられる。

その休暇を利用し、家族サービスをしたり、自己鍛錬に励んだり、ノンビリと過ごすなり、様々な形でクルー達はその時間を過ごすのだ。そして、その中の一人。エイミィ・リミエッタも他のクルー同様に浮かれていた。今度の長期休暇の内、前半はもう過ごし方が決まっていた。

「みんなで温泉。みんなで温泉」

妙な節を付け、鼻歌混じりに歩くエイミィ。そう、プレシアが定期連絡に来た際、日取りと行き先を伝えたのだ。海鳴温泉への二泊三日の旅。

どうもアリシアが行きたいと言い出したようで、それをなのは達も了承し、本決まりとなった。それをプレシアがリンディ達も是非にと言って、二つ返事でリンディがそれに応じた。

欲を言えば、エイミィとしてはもっと共に過ごしたいのだが、渡航許可が短期間しか取れないのだから仕方ないと諦めていた。

（でも残念だなぁ～。混浴ってのがあれば、クロノ君の動揺する姿が見れたのに）

そんな事を考えながら、エイミィは一つのドアの前で止まる。そこは艦長室。リンディとクロノがそこでは待っているのだ。

「失礼します」

入室はあくまで真面目にしっかり。そして、中へ足を踏み入れ、ドアが閉まった途端。

「エイミィ・リミエッタ、ただいま参上しました」

「エイミィ、少しはちゃんとだな……」

「いいじゃないの。丁度、プレシアさんから連絡があったわ。宿の手配も道中の足も、全て向こうで手配してくれるそうよ」

その軽い雰囲気にクロノが苦い顔。だが、リンディはそれを気にせず、むしろ笑ってエイミィを招き寄せる。そして、さり気無くクロノの隣に座るエイミィ。それに小さく笑みを浮かべるリンディだったが、すぐに本題へ入る。旅行中の日程や費用などだ。それを聞いて、エイミィはリンディとあれやこれやと話しては盛り上がる。

それを聞きながら、クロノは思う。これは自分だけじゃなく、アーチャーも大変だろうと……

動き出す者、動かぬ者

うきうきとした心情を隠すつもりのないエイミィ。その横を歩きながら、クロノはやや疲れた表情をしている。かれこれ訓練校からの付き合いで、二人の関係は上司と部下というよりは、男女の親しい友人といえる。まぁ、普通ならばどちらかが恋愛感情なり何なり

を抱くのだろうが、生憎この二人は、それを中々出せないもので……

「楽しみだね、クロノ君」

「僕はむしろ疲れる気がしてきた」

「きっと賑やかだろうし」

「それは否定しない」

「思い出、一杯作ろうね」

「何か誤解を招くような言い方だな」

クロノの方を向いて、少し照れるようにエイミィは言った。それを聞き、普段なら慌てるなり動揺するであろうクロノだったが、本当に疲れているのか反応は薄かった。だがそれでも、やや周囲を気にするぐらいには動揺していたりする。

それをエイミィも分かったためか、嬉しそうに笑みを見せると頷いてこう言った。

「話変わるけどさ……ホントに変だよね」

「……何がだ？」

「いや、ここ最近起きてる謎の連続殺人事件。しかも、全部質量兵器禁止論者のさ」

「……強烈な支持者達ばかりだったな。しかし、一体何が目的なんだ……」

クロノ達が話しているのは、ここ二ヶ月前から散発的に発生している殺人事件。被害者は皆、質量兵器禁止論者で、しかも管理局に影響力のある者達ばかりなのだ。実は、今回のアースラの任務もその事件の関係だった。

現場には証拠の類が一切なく、凶器も不明。共通点は、被害者の主義主張とその死因が心臓破裂である事や、目撃者は無く、しかも、心臓が破壊されているのに、体に傷が付けられた痕跡もない事。そのため、捜査は難航し、進展の予兆さえ見せていない。

そんな中、アースラがこの任務で訪れた世界は一つではない。その事件のあった世界全てであった。そこへ、事件の被害者の遺族を送り届けるというものだった。しかも、その後の迎えまでこなして。

その話を聞いた時、リンディ達も流石に文句を言いたかった。だが、彼らは皆、管理局のスポンサー的立場にいる者達。故に何かあったではいけないという事で、次元航行艦を使っての送迎となったのだ。

その意見に、確かに遺族も狙われる可能性はあると思い、リンディも渋々引き受けた。幸か不幸か遺族達に死者は出なかったが、それだけに謎が残る事件として、未だに捜査は各世界の局員達が続けている。

「何か、気味悪いよね」

「……魔法じゃないのかもしれないな」

「それってまさか……」

「いや、魔術も魔力反応は残る。だが、僕らには理解出来ないような話も、彼らなら理解出来るかもしれない」

クロノはそう言って視線をエイミィから正面に戻した。それに合わせてエイミィも視線を戻す。二人の考えは同じ。セイバー達なら何か分かるかもしれないと。

それを旅行の際に聞いてみようとクロノは思い、その表情を凛々しくする。エイミィはそんなクロノを横目で見て、微かに微笑みを浮かべる。

（今はまだいい。だが、こんな事件が続けば、いずれ表立って質量兵器禁止を訴える者はいなくなる。そうなったら旧暦の再来だ）

実際、この事件が大きく取り上げられるようになってからというもの、管理局の部分的質量兵器容認派は勢いを増し、局に変化を起こし出していた。その筆頭として名高いのは、地上本部で台頭しつつあるレジアス・ゲイズである。

彼は地上の治安維持のため、魔力を持たぬ者達に質量兵器の使用を認め、それで人手不足を解消しようと声高に訴えていた。

その主張は過激だが、現状を知る陸士達の一部には熱烈な支持をする者が少なくない。そして、それを声高に非難する者達こそ、この事件で死んだ者達が多いのだ。

そのため、彼は現在最重要参考人とも呼べる存在なのだが、証拠がない。何せ、彼は魔力を持たない人間。しかも、事件が起きた時、彼はいつも衆人観衆の中にいるのだ。動機は十分。しかし、物的証拠どころか状況証拠さえないのだ。

（……この事件、絶対何かある。だが、僕らにはそれを知る手立てがない……何か彼らから得られればいいんだが……）

そう思い、クロノは息を吐く。胸に抱くは一つの言葉。

――いつも世界は、こんなはずじゃなかった事ばかりだ。

ミッドチルダ西部　エルセア。そこに建つ一軒家に、今日も楽しそうな声がする。庭を走り回るショートカットの少女と、それを追い駆けるように走るロングヘアーの少女。そして、その様子を眺め、退屈そうにしている金髪の男性。

やがて、走り回るのにも飽きたのか、二人は退屈そうにしている男性へと近付いてくる。

「ね～、ギルお兄ちゃんも遊んでよ～」

「そうよ。ギルお兄さんも遊んで」

「ふん！　我と遊ぶだと？　ならば、こんなチンケな庭では足りぬわ。もっと大きグッ！」

スバルとギンガへ自慢げに語ろうとしたギルガメッシュだったが、その途中で頭へ何者かが拳骨を落としてそれを遮る。だが、ギルガメッシュにそんな事をする相手は一人しかいなかった。

その証拠にその人物はギルガメッシュに対してこう言い放った。

「チンケで悪かったわね！」

「クイント！　我に拳を振るうとはいい度胸だな！」

「何よ！　なら今日のご飯はギルが作る？」

クイントの反論にギルガメッシュが言葉に詰まる。これを「そんな事せずとも、我の財力なら簡単に食事出来るわ！」と言えないのだ。そう、今の彼には自由に使える資金がない。決して彼が一文無しな訳ではない。何故ならギルガメッシュは、初日にスバル達の面倒を見るための代金として、僅かに渡された資金を使って株に手を出し、既に恐ろしい程の金額を手にしていた。

クイントとゲンヤがそれを知り、即座に株を売却。得た資金を全て貯金に回し、ギルガメッシュに「二度とこういうものに手を出さないように」と言いつけた程だ。何せ、ギルガメッシュからすれば、金は簡単に手に入るものであり、汗水垂らして働くのは庶民のする事と思っていたからだ。

このままでは、スバル達の教育上よろしくない。そう判断したクイントは、ギルガメッシュの価値観を変えるのではなく、その行動を自粛させる方法を選んだ。そして、クイントの懇願とスバル達のお願いを受け、ギルガメッシュは、資金を得る事をしない事と、クイントやゲンヤがいない時は子供の姿になる事になったのだ。

ちなみに、それを初めて見た時、クイントが何か目の色を変えていたが、少年ギルガメッシュから「子供になるのであって、年齢を調節出来る訳ではない」と言われると、どこか気落ちしたような雰囲気を漂わせた。

「……ちっ」

「分かれば宜しい」

「ね～、お母さんからも言ってよ。ギルお兄ちゃんが遊んでくれないの」

スバルが拗ねたように口を尖らせそう言うと、クイントは笑みを見せてスバルを抱き寄せる。そして、その体を抱え上げ、優しく告げた。

「大丈夫よ。ギルは優しいから公園でなら遊んでくれるわ」

「おい、クイント」

「ホント～？」

「ええ、本当よ。ね、ギル」

「本当？」

クイントの声に合わせ、スバルだけでなくギンガまでがギルガメッシュを見つめる。その視線にギルガメッシュは不機嫌そうな表情にはなるものの、何か諦めたのか背中を向けて歩き出す。それを悲しそうに見つめるスバルとギンガ。だが、その顔が次のギルガメッシュの一言で変わる。

「出かけるぞ、ギンガ、スバル。疾く用意せよ」

「「……うん！」」

満面の笑みで頷き、家の中へ入っていくギンガ。スバルも急いでクイントに下ろしてもらい、家の中へ。それを見つめ、微笑むクイント。そして、視線をギルガメッシュへ向けて笑う。

「ごめんなさいね」

「……我の気が向いただけだ。礼を言われる事ではない」

「そう……今日の夕飯は何がいいかしら？」

「……二人が好きなものにでもしろ。我は知らん」

そう言ってギルガメッシュは玄関へと歩いていく。その離れていく後姿を見つめ、クイントは思う。きっとギルガメッシュは対等な立場で接してくる人がいなかったのだろうと。もしくは、その立場に立てる者がいなかったのではないかと。

だからギルガメッシュに対し、特別扱いをしない子供には彼も優しいのではないか。逆に、彼に恐れや嫉妬を抱く者を雑種と呼んでいるのは、そういう心の在り方が下種だと感じるからではないかと。

（私の事もクイントって呼ぶようになったのは、ギルを怖がらなくなってからだったものね）

そんな事を思い出し、クイントは笑う。スバルとギンガの体について、ギルガメッシュは実にあっさり言ったのだ。機械と人の相の子が何だと。自分は神と人の血を引くのだと。

それをクイントとゲンヤは信じた。色々信じられない事ばかりを見せられた事もある。だが、それ以上に……

（ギル……だものね）

未だに分からない事ばかりの存在だけれど、ゲンヤもクイントもギルガメッシュが悪人ではないと知っている。だからこそ、信じるのだ。今もこうして二人の少女を相手し、この家の五人目の家族として欠かせない存在となっている彼を。

「ええい、あまりじゃれつくなスバル。ギンガ、お前はさり気無く我の服を掴むな」

傍目から見れば、何の変哲もない微笑ましい光景。だが、クイントにとっては、それがどれ程尊い光景だろう。あのままでは、失われていたであろう二つの命。それを助けた異世界の金色の英雄王。そんなおとぎ話のような真実を知る者は少ない。

「お母さん、いってきま～す」

「いってきま～す！」

ギンガが手を振り、それに倣えとスバルも手を振る。その後ろのギルガメッシュは、そんな二人をやや呆れ顔で見ている。そんな対比を見て、それに心から笑顔を浮かべ、クイントも手を振り返す。

「いってらっしゃ～い」

それに嬉しそうに笑みを見せ、歩き出す二人。その手は、ギルガメッシュの両手と繋がっている。その温もりを感じ、ギルガメッシュは楽しそうに呟く。

――――たまには、こういうのも一興か……と。

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――

交流編その４　前編

海鳴海浜公園。そこでプレシアがリニスと二人で立っていた。だが、周囲には人影どころか気配さえない。周囲の色は抜け落ちたようになっていて、結界を展開しているのが分かる。

そう、今日は待ちに待った旅行当日。そのため、プレシアは結界魔法を展開し、待っていたのだ。最後の参加者達を。そして、その者達が来た。転送魔法の魔法陣が現れ、そこから三人の人物が出現した。

「お待ちしてましたリンディさん」

「こんにちは。短い期間ですが、お世話になります」

共に笑みを浮かべて挨拶する二人。その横ではリニスがエイミィとクロノを見て微笑んでいた。

「クロノさんの服はエイミィさんの見立てですか？」

「そうなんですよ。クロノ君ったら服には頓着しないから」

「……別に変じゃなければいいじゃないか」

お姉さんの雰囲気で話す二人。それにクロノは居心地が悪そうで、周囲へ視線を向ける。結界は三人が現れたのを確認して解除したようで、相変わらずのどかな雰囲気が漂っていた。

その空気を感じ取り、クロノは内心息を吐いていた。最近の上層部が、管理外にやたらと過剰に反応しているのは、何か管理外に起きているからではないかと思っていたからだ。

（ま、そんなはずはないとも思っていたが、その通りだったか……）

そんな内心を顔には出さず、クロノは未だに会話している四人へやや呆れながら告げた。そろそろ動こうと。なのは達が待ってるのではないか、と。それを聞いて、プレシア達も少し慌てたように頷いて動き出した。そんな四人を見つめ、クロノは呟く。

今からこれでは、先が思いやられる……と。

出会う縁と過去への決別

「……そう」

場所は集合地点だった月村家。その門の前に止まる四台の車。その傍で、まるで搾り出すようにリンディは声を出した。その視線の先にいるのは、はやてとアーチャー、そして――。

「私達で出来る事なら幾らでも償おう。だが、主達に罪はない」

「あたしらがしてきた事については、何も言い訳しない。確かに罪は罪だから」

「でも、それとはやてちゃん達は無関係なんです」

「だから頼む。どうか主達には」

悲痛な表情で頭を下げる守護騎士達の姿があった。それを見て、リンディもクロノも言葉を失っていた。彼らの知る限り、守護騎士が誰かに謝罪する事などないはずだったからだ。

闇の書の主を守るだけの存在。それが、主のためとはいえ、罪を認め更に謝罪までし、主であるはやてのみならず、その周囲の者達まで考えての言動に、流石の二人も何も言えなかった。

そして、その重たい空気を破ったのはあろう事かクロノだった。

「もういい。僕らは確かに局員だ。でも、その前に一人の人間なんだ。だから……」

「だから？」

クロノの言葉にどこか緊張した声ではやてが尋ねる。それにクロノは真面目な顔で言い切った。

「僕は許す。過去に縛られて生きたくないからだ。君らのした事は確かに重い。でも、それを悔やみ、償おうとするのなら、それを見守る。

それが執務官であり、僕、クロノ・ハラオウンの生き方だ。闇の書に関しては追々話し合おう。今はただ……謝ってくれただけで十分だ」

「クロノ……」

「さ、はやてもアーチャー達も車に乗った方がいい。母さんもエイミィもだ。時間は有限なんだぞ、急げ」

リンディの呟きを流すようにそう言って、クロノは割り当てられ

た車へ向かって歩き出す。それを見つめ、リンディ達はやや呆然としていたが、やがてクロノが言った言葉を理解し、反応を示した。

守護騎士達は黙ってクロノに再び頭を下げ、はやてもアーチャーと共に礼を述べ、エイミィはクロノのそんな行動に笑みを浮かべて後を追い、リンディはシグナム達へ同じような言葉を掛けた。

「私も個人として貴方達を許します。でも、局員として、闇の書を放置する事は出来ません。ですから、そこは追々話しましょう」

「リンディ艦長……」

「あら？　アーチャーさん。今の私はただのリンディですよ。さ、はやてさん達も急ぎましょう。せっかくの旅行なんですもの。楽しまなくちゃ」

そう言ってリンディは笑う。それにはやてが、涙を浮かべながらも嬉しそうに頷いてシグナム達を促した。それに応じ、はやてとシグナム達はリンディにも頭を下げ、車へと向かって動いていく。そして、それを見届けてアーチャーがリンディへ一言礼を述べた。

英断と理解に感謝すると。それにリンディは小さく首を振り、それはクロノの方だと返した。自分は正直迷っていた。守護騎士達が自分の夫を奪った訳ではない。そう理解していても、どこかまだ割り切れない部分があった。それをクロノの言葉が断ち切ってくれたのだと。

過去に縛られて生きて欲しくない。そう亡き夫に言われた気がしたと。それを聞いて、アーチャーは微笑んで告げた。それなら礼を言うのは、やはり貴方の方だと。それに何故という表情を見せるリンディ。その彼女にアーチャーはこう言った。

「クロノがそう考えるようになったのは、今日まで私情と使命を分けて判断を下してきた貴方の存在があればこそだ。そんな貴方がいなければ、クロノはそう思えなかっただろう。故に貴方に礼を言う事は間違いではない」

「アーチャーさん……」

「立派な息子を持ったな。きっと貴方の夫も喜んでいるだろう」

そう笑みと共に言って、アーチャーも割り当てられた車へ歩き出す。その背中を見つめ、リンディは思う。そんな風に言われたのは何年振りだろうと。局員としてのクロノではなく、個人としてのクロノを誉められた事は、クロノの訓練校時代以前までだったからだ。

局員としての働き無しでのクロノの話などは、ここしばらく聞いてなかった。そして、それを含めての自分の話も。今のアーチャーの言葉は、母としても、そして個人としても嬉しかった。それは……

（初めて笑ってくれたわ）

彼女に対し、アーチャーは笑顔を見せた事がなかったのだ。どこか陰があるような笑み。そればかりだったのだ。しかし、最後の笑みは間違いなく心からの笑み。それを見れた事が嬉しかったのだ。自分にも心を開いてくれたのだと。そう思う事が出来たから。

初対面は敵にも近い扱い。次の出会いもまた同じ。三回目はただの交渉相手で、四回目でやっと少し打ち解けたような対応だったのだ。五回目の今日、まさか因縁のロストロギアとの出会いになるとは思っていなかったが。

そんな事を考えながら、リンディも割り当てられた車へ乗り込んだ。

割り当ては、一号車にドライバーとしてライダー、助手席にセイバーで後部座席になのは達子供達。二号車にドライバーとして士郎、助手席に桃子で後部座席にプレシア達テスタロッサ家とリンディ。三号車にドライバーとしてノエル、助手席にシグナムで後部座席にアーチャーと残りの守護騎士達とファリン。四号車にドライバーとして恭也、助手席に忍で後部座席に美由希と小次郎、そしてクロノとエイミィである。

実は、アリシアがクロノと一緒がいいと言ったのだが、エイミィの事を考えたフェイトがそれを考え直させたのだ。クロノ達は来たばかりだから、宿に着くまでは休ませてあげようと。それにアリシアも納得し、エイミィとの二人の時間を邪魔する事無く、車は動き出すのだった……

「何か思い出しませんか」

「そうですね。あの時も似た雰囲気でした」

視線を前に向けながら、ライダーが言った言葉にセイバーも頷いて返した。後ろでは、なのは達七人が楽しそうに話している。シートを完全に倒し、円を作るようにして笑い合っている。今は、ユーノが本局内の食堂での出来事を話しているようで、アリサやはやては感心し、なのはやすずかは笑い、フェイトとアリシアは驚いていた。

「は～、ユーノ君はそんな大人達に頼りにされとったんか」

「まあね」

「あんたが急に大人っぽくなったのは、そんな裏があったのね」

「裏って……アリサちゃん、それは何か違うよ」

うんうんと頷くアリサに、すずかはそう苦笑して言った。だが、それをなのはは柔らかく否定した。

「でも、あながち間違ってないと思うよ？　みんなが頼りにするから、ユーノ君も応えたんだよね？」

それは、かつての自分を思い出しての発言。それにユーノは苦笑して首を横に振る。それに全員が不思議そうにすると、ユーノは穏やかな声で言った。そうじゃない、と。頼りにされるとかは関係ないんだと。自分は、自分の出来る事をしただけだから。そう言ってユーノは笑った。

「ま、それが結果として周囲から頼りにされた訳で……ね」

「ふ～ん……ユーノって凄いんだね。わたしだったら自慢しちゃうよ。凄いでしょ～って」

「あ、アリシア……」

姉の答えにフェイトはやや脱力。でも、確かにアリシアならそうだろうと思うので、否定も肯定もしない。それはなのは達も同じだからだろうか。皆、苦笑いを浮かべながらアリシアを見ていた。

「う～ん……確かに凄いのかもね。でも、僕はこう思うんだよ。本当に凄い人っていうのは、誰にも知られずに凄い事を成し遂げる人

だって」

そう告げ、ユーノはやや憧れるような眼差しでこう言い切った。

――――いつか、そんな人に僕もなりたい。

そのユーノの表情になのは達全員が言葉を失う。それは、男の子ではなく、紛れもない漢の顔。まだその在り様こそ、漢には届かないが、それだからこその顔だった。ユーノに想いを寄せる者は、一様に頬を染め、またアリシアのように想いを寄せぬ者でさえ、それに見入っていた。

（ユーノ君、何かあの時みたいに……ううん。あの時以上にカッコイイ……）

なのはがあの夕日の思い出と比べ、そう想っていれば……

（ユーノ、あれからまた大人になったんだ。あう、ま、また顔が熱いかも……）

（ユーノ君、頼もしくなっただけじゃなくて、少し大人にもなったんだね……）

フェイトとすずかはそれぞれ頬を押さえ、想いを抱き……

（いや、ユーノ君が成長したってアーチャーから聞いとったけど……ほんまやな。中々凛々しいわ……）

（な、何よ……この空気は。ま、まぁユーノも男として成長したのね。仕事を持つと男は変わるんだ……）

はやてとアリサは異性の成長を感じ、微かな変化を見せ……

（ユーノもクロノもお仕事してるんだ。わたしも何かお仕事出来るようにならなきゃ……）

ユーノの表情を見つめ、アリシアは自身の今後を考え出した。

そんな後ろには気付かず、セイバーとライダーはこれからの事を話し合っていた……

「それにしても、こんなに早く会えるとは思いませんでしたよ」

「本当に。リンディさん達は忙しいってプレシアさんから聞いていたので」

士郎と桃子がそう言うとリンディもそれに頷いて、偶々仕事の終わりとこの旅行が近く、休暇を利用して来ようとは思っていたから好都合だったと告げた。それを聞き、納得する二人。リンディはそんな二人へフェイト達の事を尋ねていく。それに笑顔で答えていく士郎と桃子。そんな三人とは対照的に、ランサーはあまり嬉しくない状況にあった。

いつもの如く両側にはアルフとリニス。だが、今回は更に正面を陣取り、ランサーへ笑みを浮かべて話しかける存在がいた。

「それで、今度は別のルーンを……」

「お、おう。あ、アル……」

「あ～、そうそう。この前だけれど、ちょっと困った事があって」

アルフへ話を振ろうとしたランサーを遮って、プレシアは笑顔のまま話しかける。そう、彼女がついにランサーへ好意をあからさまにしたのだ。原因は、例の遊園地へ行った日の夜。

アルフとリニスが嬉しそうにピンバッチの事をフェイト達に話すのを聞いて、プレシアはランサーへ優しく尋ねたのだ。自分にはないのかと。それに何故かランサーは慌てて自分がつけていたものを手渡した。そして、こう言った。プレシアには別の物を買ってあったが、それも良ければ貰ってくれと。

ちなみに、ランサーが焦ったのは女を怒らせると碌な事にならないと思ったからだ。決して、プレシアがとても良い笑顔で尋ねたからではない。そう、決して。

そして、その次の日からプレシアは変わった。言うならば、アリシアのような素直さを全開にした態度に。ランサーがリニスやアルフと仲良くすると微かに拗ね、顔を背けるし、ランサーがプレシアを少しでも頼ろうものなら、それは嬉しそうな表情を浮かべる。

そんなプレシアを見て、リニスとアルフは確信した。アリシアとフェイトは、間違いなくプレシアの子だ、と。

そんな訳で、現在ランサーはプレシアに絶賛迫られ中。勿論、アルフやリニスは何も言わない。それは、その次の日の深夜取り決められた協定によるもの。

その名も『ランサー・テスタロッサ協定』である。つまり、ランサーをプレシアの夫にし、リニスとアルフのもう一人の主人にするというもの。元々動物である二人は、あまり人の倫理観にこだわら

ず、そのためにこの考えにも賛同出来た。一方のプレシアも、研究者としてあまりランサーの世話を出来ないと予想しているため、リニス達の協力は正直有難い。こうして、三人の想いは一つとなり、ランサーは完全に包囲されたのだ。

「楽しみですね、ランサー」

「今度はきっと前よりも楽しいよ」

「色々と楽しみましょうね、ランサー」

それぞれが告げる言葉に、ランサーはどこか嫌な予感を感じるが、それでもある事を思い出して笑った。

「ああ、いいぜ。思いっきり楽しむとすっか」

（考えてみりゃ、こんな良い女達と過ごせんだ。楽しまねえと損だな、こいつは！）

先を行く二台を見つめ、シグナムは思う。はやてとアーチャーの言った通りになったなと。管理局員が来ると聞いた時、シグナム達は揃って不安になったのだ。だが、はやてはそれにこう言った。正直に全部話して謝れば分かってもらえると。そして、自分も一緒に謝るからとさえ言ったのだ。家族のした事だから自分が謝るのは当然だと。

だが、それはアーチャーも含めた全員が止めた。はやての気持ちは嬉しいが、あくまでもシグナム達の罪は過去の主とそれに従事したシグナム達の罪だからと。

そして、はやてはそんなアーチャーとシグナム達の言葉に渋々だが納得し、四人に任せると言った。そして、出会って驚くリンディ達に、四人は謝罪と償いの想いを込めて話したのだった。

（しかし、これからどうするかだな。管制人格の起動は間に合わなかったが、あの様子ならそこまでは蒐集させてもらえるやもしれん）

リンディ達も闇の書をこのまま放置はしないだろう。故に、その全てを知る管制人格の力は必要としてくれるはず。そう考え、シグナムは視線を後ろへ向けた。

そこには、ファリンに絡まれ苦笑するアーチャーの姿がある。シャマルは、アーチャーを助けようとしているのか、ファリンを嗜めているが、返って逆効果になっている。ヴィータとザフィーラはそんな三人を見て、笑みを浮かべていた。

「ね、ね、アーチャーさん。今回は私と卓球やりましょう」

「それはいいが……ファリン、少し離れてくれないか？　その、言いにくいのだが……」

「ファリンちゃん、胸が当たってる」

「……そういう事だ」

あの日、アーチャーはファリンとノエルに告げた。自分には忘れられない女性がいる。その相手への想いを無くす事は出来ない。そんな自分では、君達の想いを受ける資格がないと。それに二人は言葉を失ったが、ファリンはそこから立ち直り、はっきりと言った。

――それでも……それでも私は、アーチャーさんが好きなんです！

それにアーチャーは驚き、そしてとても嬉しそうに「ありがとう、ファリン」と言って微笑んだ。そして、ノエルもそれに同じように答えた。

――私もアーチャー様をお慕いしています。この気持ちを無くす事は、出来ません。

それが自分の言葉を意識したものと理解し、アーチャーは苦笑してから、同じように「そうだな。ありがとうノエル」と嬉しそうに微笑んだ。そして、アーチャーは最後にこう言い切った。二人の想いは分かった。自分は受け止める資格はないが、それでも想ってくれるのならそれを止めはしないと。

そう言ってアーチャーは去って行った。その言葉の意味を二人が理解し振り向いた時には、もうアーチャーはいなかった。

だからだろう。アーチャーの態度がどこか煮え切らないのは。それにシャマルがその表情をどこか拗ねたものにしている。そして、そんなアーチャーの態度に、ファリンは悪びれるどころかむしろ悪戯っぽい笑みを浮かべ、更にアーチャーへ体を押し付けた。

「あ～～～っ！」

それにシャマルが大声を出し、ヴィータとザフィーラが驚きの声を漏らし、アーチャーは完全沈黙。そして、それをバックミラーで見ていたであろうノエルが鋭い目になり、軽くブレーキを踏んだ。シグナムもそのファリンの光景に唖然としていたが、そのノエルの行動に余計事態が悪化したのを見た。

シャマルが体勢を崩し、アーチャーがそれを咄嗟に受け止めたの

は良かったのだが、どうもシャマルもシャマルで何とか体勢を整えようとしたのか、よりによってその手がシャマルの体の一部を触っていたのだ。女性の象徴を。こう、しっかりと。

「「っ？！」」

それに動揺し、声も出せないシャマルとアーチャーだったが、即座にシャマルが離れた。そして、それを見てむくれるファリン。ノエルは何やら呟きながらも運転しているが、その視線は心なしか鋭い。ヴィータとザフィーラはそれを見ていなかったようで、何があったのかと不思議そう。

（これは……色々と不味いかもしれんな）

そう思うシグナムの視線の先には、真っ赤になって俯くシャマルがいた。その視線はチラチラとアーチャーを見ている。ファリンはそんなシャマルに負けまいと、余計にアーチャーへ体を押し付ける。それをアーチャーはどこか諦めたのか離す事もせず、ただ一言「私はもう少しお淑やかな方が好みなのだが……」と呟いた。それにファリンが慌てて離れる。

「……まったく、騒ぎを起こす奴だ」

「まったくです。ファリンは到着したらきつく言って聞かせねば……」

「ノエル、私はファリンではなく……」

「シグナムもそう思いますよね？」

「……う、うむ。そうだな」

自分の言葉を遮って言ったノエルのあまりの迫力に、ついシグナムも頷いた。そう、シグナム達の事をノエルは呼び捨てで呼ぶ。最初は様付けで呼ぼうとしたのだが、彼らは長く臣下として生きていたのでそれを嫌がり、呼び捨てを望んだため、そうなったのだ。

ちなみに、その時アーチャーも同じような事を言ったのだが、そちらは却下された。

（だが、何故だろうな。シャマルの奴、どこか嫌がっていなかったような……？）

そんな事を思うシグナムだったが、思考を切り替えて前を見る。宿に着くまで、後ろの事には関わらないようにと固く誓って。

一方、アーチャーはと言えば……

（やれやれ、素直に引いてくれたか。それにしても、先程は驚いたな。体を支えようとしたのだが、シャマルが自分でも体勢を整えようとしたためにあんな事になるとは……）

そう思い返し、ふと手を見つめるアーチャー。

（意外と大きかった……ではない！　忘れろ。先程の事は事故だ！）

自分の中の邪念と向き合い、一人戦うアーチャー。その彼を見つめ、シャマルも思う。

（どうしよ。さっきから顔が熱いわ。もう、ファリンちゃんがいけないんだから！　あんな事したせいで……もうっ！）

怒りや恥ずかしさが入り混じった感情を抱きながらも、シャマルはアーチャーを見る。その視線は、どこかそれ以外の感情もあるように見えるのだった……

運転する恭也と楽しげに話す忍。それは完全に恋人のそれ。だからだろうか、そんな二人に話を振る者はいない。故に必然的に……

「へぇ、ミッドもあまり変わらないんだ」

「そうなんだよ。だから大きな違いは魔法関係だけ」

美由希とエイミィは歳も近いせいか、前回よりも増して仲良く話していた。それを聞く形で小次郎とクロノも会話には参加する。まぁ、主にエイミィや美由希に話を振られて参加するのがほとんどだが。

今も時折エイミィ達の話に一言や注釈などで口を挟んでいた。小次郎も興味を引く話が出れば、その時はやや積極的に会話に加わるのだ。

「しかし、そちらでも魔法を使えない者がいるのだな」

「はい。でも、別にそれがおかしい訳ではないんです。なのはような高魔力保有者の方が珍しいぐらいなんですから」

「でも、セイバー達も魔力あるのに……念話だっけ？　それが使えないのはどうして？」

「あ、そうそう。それなんだけど……ランサーさんを調べた結果、魔術回路だっけな。それが生み出す魔力とリンカーコアが生み出す魔力は別物って分かったんだよ」

エイミィは美由希達に語ったのは以下の内容。リンカーコアが作り出す魔力は電流兼電波で、魔術回路が作り出す魔力は電流のみの性質関係なのだ。故に、リンカーコアを持つ者はその魔力を通じて会話が出来るが、魔術回路は純粋な電流のため、魔力を使って他者と会話する事は出来ないのだろう。

更に詳しく聞けば、アーチャーが話していたのだが、魔術回路はスイッチを切り替えて使うような感覚がある。しかも、自然と魔力を発生、吸収するリンカーコアと違い、自分でそれを意識的に出来る事からも、その成り立ちは違うと言える。

そのため、リンカーコアは魔力心臓と呼べるもので、魔術回路はその名の通り、魔力を生むための回路、つまり機械のようなものだろうと結論付けた。

「ちなみに、検査はあたしと艦長が同席して、プレシアさんとリニスさんにやってもらったから安心して」

エイミィのその言葉に小次郎は頷いた。下手な事をして、サーヴァントの存在を明るみに出す訳にはいかない。そのため、リンディもプレシアも管理局ではなく、時の庭園でそれを行なったのだ。

結果はある意味で予想通りだった。それは、ランサー達の魔力が自分達と違う事。そう、やはり異世界から、しかもおそらく並行世界からの来訪者であろうと。それは、地球の出身である事と魔力の存在。魔法はないが、魔術はある。そして、地球出身と言う事は、それは根本は同じだった可能性を示していた。

（でも、そんな事どうでもいいけどね。何せ、ランサーさん達はラ

ンサーさん達だし）

エイミィにとって重要なのは、彼らが何者かよりも彼らがどういう人間かにあったからだ。そして、その人間性は既に大よそ理解している。故にエイミィにとって、彼らの正体はそこまで重要ではないのだ。

「にしても夏場に温泉とはな。昔では考えられん話よ」

「そうなんですか？」

「あ、そうだ。温泉で思い出したけどさ。本当に混浴ってないの？」

エイミィの発言に盛大に驚くクロノ。それとは違い、小次郎はやや驚いたのみだったが、最近の女子は大胆なものよと呟いてはいた。

美由希はエイミィの発言に苦笑して頷いた。これから行く場所には、残念ながら混浴はないと。そう答える時、一瞬だけ小次郎へ美由希は視線を向けた。それを見逃さず、エイミィはこう言った。

「あ～あ、残念だなぁ～……折角クロノ君と一緒に入れると思ったのに」

――美由希ちゃんも小次郎さんと入りたかったよね？

そう言われ、美由希はやや苦笑した後、何を言われたかと理解し硬直。一方、クロノは顔を赤くしつつも、少しは恥じらいを持てと言い放つ。それに「あたし、クロノ君ならいいけどな」と返され、呆気なく撃沈。そして、ちゃっかりそれを聞いていた忍も同じ様な事を恭也に囁いていた。

そんな賑やかな周囲とは違い、小次郎はただ静かに呟く。

「……時代も変わったものよ」

こうして、一向は無事海鳴温泉へ到着する。そこで、また様々な出来事が起きるとも知らずに……

――――――

交流編その４　中編

五月に来て以来、三ヶ月振りの温泉。だが、あの時とは違い、人数が大幅に増えていた。その増加数、何と十人。出迎えた宿の人が驚くぐらいになっていた事からも、その事が分かる。

お盆過ぎという事もあり、丁度宿としてもピークを過ぎていて、ここからまた静かになっていくんですよ、と宿の仲居は笑って言った。

そんな会話を桃子や士郎がする間、まず温泉宿初体験の者達が、揃ってその外観を眺めていた。

「ひゃ～、中々歴史がありそうだね～」

「僕らのところにもそういう建物はある。だが、やはり独特だな」

エイミィとクロノは純和風の宿にそう言えば……

「素敵な建物ですわね」

「ええ。静かで穏やかな雰囲気ですし」

「リニス、これが温泉宿って言うの？」

「そうですよ。この中に温泉があるんです」

プレシアとリンディが周囲や宿の風情に心和ませ、アリシアは子供らしくリニスへ尋ねて……

「お、向こうに小川があるみたいだぜ」

「ヴィータ、散策は後にしろ」

「そうよ。まずは部屋に荷物を運ばなきゃ」

「それは俺達男の仕事だろう。お前達は、ゆっくり休んでいろ」

目ざとく案内板を見つけ、はしゃぐヴィータを嗜めるシグナムとシャマル。ザフィーラはそれに苦笑しながら歩き出す。

そこでは、以前と同じく荷物を車から降ろし、手分けして運ぼうとしている恭也達の姿があった。そこへザフィーラも加わり、大きなものは粗方ランサーやアーチャーなどが運んでいき、ユーノやクロノも手伝い、総勢八名の男性により、ほとんどの荷物は運び込まれた。

その様子を見ていた仲居さん達が、揃ってため息を吐いていたのを（敢えて誰とは書かないが）内心嬉しく思っている者達がいた。

今回の部屋割りは、以下の通り。

士郎、恭也、ユーノ、クロノで一部屋。アーチャー、ランサー、小次郎、ザフィーラで一部屋。桃子、プレシア、リンディ、リニスで一部屋。

忍、美由希、セイバー、アルフ、エイミィで一部屋。ノエル、ファリン、ライダー、シグナム、シャマルで一部屋。そして、残りのなのは達子供組で一部屋。

ちなみに、ヴィータはアリシアとはやての要望により子供組となった。大人五人が寝られるので、子供七人でも余裕なためである。

こうして、それぞれまず部屋に行き、自由行動となるのだが、不

穏な空気を醸し出す者がいた。

（リンディさんもプレシアさんも、リニスさんやエイミィさんまでおる。これは……楽しみやな……ふっふっふ……）

告げる想いと受ける想い

リニスの淹れたお茶を飲み、ほのぼのとする桃子達母親組。その格好は既に浴衣へ着替えている。とても子持ちとは思えないような三人だが、話している事は完全に母親のそれで……

「そうなんですよ。クロノったら、あまり言ってこないので」

「分かります。恭也も昔はそうでしたから」

「男の子はまた違うのね。アリシアもフェイトも素直に言ってきますから」

今の話題は子供の事。それを話して盛り上がる三人とは対照的に、リニスは若干の居辛さを感じていた。

ちなみに、プレシアがリンディに闇の書の事を黙っていた事に関しては不問とした。プレシアがジュエルシードを求めた理由を知っているリンディからすれば、はやての家族として精一杯生きようとする守護騎士達を突き出すのは、自分に置き換えれば決して出来る事ではないと思ったからだ。

それに、プレシアは異常なしとは言ったが、それを特に追求せず

鵜呑みにしたリンディにも責任がある。そう言ってプレシアに笑ってこう続けた。

――――でも、今度は無いですよ。

――――覚えておくわ。

それでこの事は決着となった。プレシアの笑みと共に告げられた答えに、リンディが苦笑したのは言うまでもない。そんなやり取りを思い出し、リニスは小さく笑って視線を手元のお茶へと移した。

（とにかく、これではやてさん達を取り巻く不安要素も大分減りました。後は、管制人格から詳しい情報を得てから、ですね）

「これでいいですか？」

「……ああ。問題ないよ」

浴衣に着替え、士郎に確認を取るクロノ。その横ではユーノが恭也にある事を頼んでいた。

「兄さん、ランサーさんを止めるのを手伝ってください。あの人、絶対今回も覗こうとします」

「だが、俺達じゃ……」

「それは理解出来ますけど、それでもやらないと。兄さんは、忍さんが覗かれてもいいんですか？」

思い出されるのは、前回の記憶。覗きをしようとしてアーチャーと激しい戦いをしたランサー。その後現れた士郎がアーチャーと協力する事で不意を突かれ、事無きを得たが、今回もまた同じ事をしようとするに違いない。

そう考えたユーノは、まず恭也の協力を仰いだ。恋人と妹達がいる恭也ならば、ランサーの暴挙を止めるために動くはずだと。実際、前回も忍や美由希が覗かれそうだったのだ。故に恭也は困っていた。自分ではランサーを止められないと。

「……何の話をしてるんだ？」

「クロノ君か。いや、その……」

「クロノ、エイミィさんやリンディさんが覗かれるって聞いたらどうする？」

「どういう意味だ？」

「実は……」

ユーノの口から語られる話に、クロノは軽く眩暈がしていた。ランサーの力は、プレシア達がミッドに滞在した時に見せてもらっている。だからこそ、余計性質が悪かった。自分が尊敬した男の一人。それが覗きをやって止められたと聞かされ、更には今回もおそらくやるだろうと言われたからだ。

（だが、確かにあの男ならやりかねない）

何せ、人前で堂々と子持ちのレティを口説いたぐらいなのだ。ま、

直後にリニスとアルフによってどこかへ連れて行かれたが……
その光景を思い出し、クロノは名案を思いついたように言った。
アルフやリニス達にそれを教えてやればいいと。それに二人が手を打ったのは、当然の流れといえた。こうして、ランサーの覗きは事前に知ったプレシア達によって阻止される事となる。

初めて着る浴衣にどこか嬉しそうにしているエイミィ。それを美由希も笑みを浮かべて見つめる。アルフとセイバーはそんな二人と違い、備え付けのお菓子を食べ、満足そうにしていた。忍はそのアルフの顔を携帯で撮影する。
そして、その画像を確認して頷いた。そして、それをアルフに見せて笑う。

「うん。ほら、いい表情」

「ちょっと忍。アタシを撮るなら有料だよ～」

「お、アルフ、タレントみたいだね」

「そうですね。さしずめ……モデルでしょうか」

「じゃ、あたしがマネージャーやってあげるよ」

美由希の言葉にセイバーが答え、エイミィがそう続ける。それを聞いて、アルフも乗ったのか「あ、事務所通してください」とそれらしく言って忍が笑う。更にそれに続けとエイミィが笑顔で「それじゃ、アルフさんお疲れ様で～す」と言って手を振った。それに手を振り、部屋を出ようとするアルフに四人が笑う。そこまでしなく

てもと忍が言えば、美由希がそこがアルフらしくていいんじゃないと返し、本職を知りませんが、そんな印象はありますとセイバーも頷き、いやぁ～、中々それらしいよとエイミィが話を締めた。

「でもさ、これアタシのキャラじゃないね」

そんな四人の前に戻ってくるなり、アルフはそう言った。そのどこか呆れたような声に、四人は苦笑しながら頷いた。そして、エイミィがふと思い出したようにこう言い出した。

そろそろお風呂に行こうよ、と。それがある意味、悪夢の再来のキッカケとは知らずに……

上機嫌で入浴の支度をするランサー。それを眺め、渋い顔のアーチャーだったが、小次郎はそんな二人とは違い、静かにザフィーラと茶を飲んでいる。ザフィーラは知らないが、アーチャーと小次郎は知っている。ランサーが前回覗きを敢行しようとしたのを。だがアーチャーは警戒し、小次郎は泰然自若としているのだ。この差は、おそらく考え方の違いだろう。

「……ランサーは機嫌が良いようだが、何かあるのか？」

「何、女子達の風呂を覗くつもりであろうよ。前回もそうしようとしておった」

小次郎の答えに納得し、ザフィーラは視線をランサーへ向ける。強さでは、シグナムさえ上回り、その在り方はまさしく戦士。そんなランサーが覗きをしようとしていると聞いても、ザフィーラは幻滅する事はなかった。

それは、ランサーの性格を知っているから。後、アルフから聞いた話も影響している。根は優しく、子供のようなところがある。だが、一度戦いとなれば、誰よりも勇敢に獰猛に挑んでいく。

（成程、その子供の部分がこの行動か）

「んだよ。そんな面しやがって。俺が何したって言うんだ」

「これからするつもりだろう、君は。前回の事で懲りたと思っていたのだがな」

視線の先で繰り広げられるやり取り。それを聞いてザフィーラは思う。幸せというのは、この何気ない時間の事をいうのだろうと。そして、願う。この時間が出来れば永久に続いて欲しいと。

それは、彼だけではなく、この場にいる者達全ての願い。そんなザフィーラへ、小次郎が急須を向ける。

「もう一杯どうだ？」

「……頂こう」

緩やかに過ごす二人の横で、ランサーとアーチャーの言い合いは続いていた……

「温泉か……楽しみだな」

「シグナムはお風呂好きだものね」

「そうなのですか？　では、あの話もご存知でしょうか」

ライダーの言葉にシグナムは何かを悟り、頷いた。それにシャマルやそれを聞いていたノエル達は不思議そう。

「例のスーパー銭湯とやらだな」

「ええ。今年中に開店するそうで、そうなったら一度すずか達を誘って行こうと」

「あ～、あたしも聞いた。じいちゃん達も行ってみるかってさ」

ヴィータがやっと納得がいったとばかりに話に加わる。それにノエルも頷き、ファリンは商店街で聞いたかもと、記憶を辿っている。シャマルは初耳だったようで、興味津々といった雰囲気だ。

何故ここにヴィータがいるかと言えば、はやてからシグナム達を風呂に誘うようにと、仕事を与えられていたのだ。だが、それを実行する事が出来ず、ライダーとシグナムは話しながら段々スーパー銭湯について話題を変えていき、ノエルはファリンとシャマルにある注意をしていた。それは……

「……ですから、はやて様をどうにかしなければいけません」

「そうですね。確かにはやてちゃんは危険です」

「えっと、反論したいけど……どうしてそれが出来ないのかしら……」

「当たってるからだろ……」

どこか悲しそうなシャマルに、ヴィータはそう呟くように告げた。
そう、既にシャマルもシグナムもはやての洗礼を受けている。ヴィータは免れたが、内心は複雑だった。喜ぶべきか悲しむべきか。そんな気持ちを抱いたのだ。あの誕生日の夜に。

（あたし、ガキの体で良かったなんて思う日が来るとは思わなかったからな……）

そう、あの下着の試着から入浴までヴィータは一貫してはやてにいじめられなかったのだ。むしろ、ヴィータははやてに可愛がられ、妹的な位置にいた。それをなのはやアーチャーから言われ、照れ隠しにグラーフアイゼンを振り回したのも良い思い出だ。
幼い外見に感謝する事などないと思っていた。だが、そういう事を抜きにしても、今のヴィータはこの外見で良かったと思っている。はやて達と遊んでいても変に思われず、老人達からは孫のように可愛がられる。そんな生き方も悪くない。
そんな風に思えるようになったからだ。故にこの時間が堪らなく愛しい。家族がいて、友がいる、この時間が……

「な、そろそろ風呂行こうぜ。はや……アリシア達が呼んできてくれって言ってんだ」

それに五人も同意し、準備をし出す。それに内心謝りながら、ヴィータは視線を外へ移す。そこには、夏空が広がっている。

（はやて……あたし、やったよ。だから、約束通りコーヒー牛乳買って貰うからね）

ちゃっかり買収されているヴィータであった……

ヴィータによる誘導が行なわれている頃、なのは達はといえば……

「う～、少し大きいよ……」

「アリシアちゃん、ちょう身長低いからな」

「でも、まだ大丈夫よ。可愛いわよ、アリシア」

子供用の浴衣を着たアリシアだったが、それでもやや大きいようで、若干違和感があった。だが、それもまた可愛さと考え、アリサはそう言った。それを聞き、アリシアは嬉しそうに笑う。

そんな三人と違い、なのは達は入浴の準備を終えて、ある事を相談していた。それは、プレシア達の事。先程はやてがヴィータに頼み、シグナム達を温泉に誘ったのは知っている。だから、いっそみんなでと考えていたのだ。

「じゃ、私が母さん達を呼んでくるね」

「私はお姉ちゃん達に声掛けてくるよ」

フェイトにそう答えるなのは。すずかもそれを聞いて頷くも、どこか不安そうな表情を浮かべた。それに疑問を抱く二人だったが、すぐに何かを思い出し、苦い顔。

「はやてちゃん、悪戯しないよね？」

「にゃはは、しないで欲しいとは思うけど……」

「これぱっかりは、ね」

思い出すのは五月の記憶。その時の混沌さを思い出し、三人は苦笑。確かに色々と騒がしかったが、楽しい思い出になっているのも事実だったからだ。故に、出来る限り悪化しない程度に止めようと言って三人は頷き合う。

その後ろでは、アリシアがアリサの帯を引っ張って遊んで、結構きつく怒られていた……

かなりの人で賑わう脱衣所。今回の旅行で参加した女性全員がいるので、当然といえば当然である。はやてにどこか警戒する者達もいるが、そのはやては大人しく浴衣を脱ぎ、シグナムに抱えられて風呂へと向かう。

それを見ていたなのは達は内心安堵。だが、ライダー（ゴルゴーン済みのド近眼状態）は油断していない。浴衣を脱ぎ終わり、その手をノエルに引かれて歩き出す。しかし、その視線は見えていないがはやてを見つめている（つもり）。

（必ず何か行動を起こすはず……）

そう思うライダーだったが、そんなライダーを見てリンディとプレシアは愕然。その見事な肢体をまざまざと見せられたためだ。自分達も自慢ではないが、人並み以上だという自信があった。だが、それをあっさり超える程の美貌をライダーは持っていたのだ。

しかし、それでも即座に立ち直るのが大人の女である。まぁ、ややため息を吐いたのは仕方ない。

（ライダーさん、美人だとは思っていたけど……まさかここまでな

んて）

（美の女神がいるなら、彼女のような人を言うのね）

リンディとプレシアはそう思い、気を取り直して洗い場へ。だが、そんな二人を見て同じ様な事を思う者達がいた。エイミィと忍、美由希である。

二人がライダーに抱いたのとは少し違うが、三人も二人の肢体には驚愕の一言だったのだ。子供を産んだとは思えない程のプロポーション。若々しい肌。どこからどう見ても三十を過ぎてるとは思えないのだ。

（艦長、わっか！　いや、確かに若いなぁとは思ってたけど……ねぇ）

（桃子さんも相当だけど、あの二人も恐ろしいわ。是非とも若さの秘密を聞きたいものね）

（プレシアさん、あれで二人のお母さんなんだよねぇ。母さんも凄いけど、プレシアさんはその上かも）

三人はそう思いながら、湯船へと歩き出す。彼女達は知らない。自分達も十分過ぎる程美しいと思われているとは。

そして、その湯船の中には既に先客がいる。他のお客がいないと聞いたアルフとリニスが、その動物の耳を隠す事無く浸かっていたのだ。それはさながらおかしな光景だった。狼と山猫の女性が揃って頭にタオルを乗せて寛いでいるのだ。中々見られるものではないだろう。

「どうだい。いいもんだろ？」

「ええ。確かにいいものです。この国の人達が好むのも良く分かります」

気持ちいいと言わんばかりの表情で話す二人。その顔は緩みっぱなしだ。湯船に浮かぶアルフの胸。それよりもやや小さいが、リニスも確かに浮かぶものがある。そして、そこへエイミィ達がやってきて話し出す。美由希と忍は以前ここでフェイトから聞いた事を思い出し、それをリニスへ話し出す。それを聞いて、リニスは嬉しいやら恥ずかしいやらで顔を赤くする。それをエイミィが可愛いと言って更に囃し立てる。

そんな五人とは違い、ノエルとファリン、ライダーは洗い場でそれぞれ体を洗っていた。そんな三人をやや睨むように横目で見ているセイバーとヴィータ。その視線は三人の胸部へ注がれている。

（くっ！　私もせめてファリン程あれば……）

（羨ましくなんかねぇ！　羨ましくなんかね～ぞっ！）

そんな事をセイバー達が思っているとは知らず、ファリンがこんな事を言い出した。

「男性って、どうして胸が大きい方がいいと言う人が多いんでしょう？」

その一言に、浴場内の音が消えた。聞こえるのは湯船へ流れる温泉の音のみ。まるで全員が声を失ったような雰囲気だ。アリシアでさえ、その異常さ故か黙っていた。

「どうしてそんな事を？」

「いえ、アーチャーさんがシャマルさんの胸を掴んでから、ぶつぶつ言ってたんです。大きかったとか何とか」

「……ランサーは大きさを気にしないと思いますが、アーチャーは確かに大きい方が好きかもしれません」

ライダーの口から語られた言葉に、一部がどよめく。ライダーはあくまで推測だがと前置いて語った。ランサーは”良い女”が条件であり、それは身体的なものではなく、人格的なものに重きを置いていると。一方、アーチャーも同じ様に人格的なものに重きを置いているが、身体的により女性らしい方を好む傾向があると。

それを聞いて、セイバーが一瞬何か反論しようとしたが、そのまま黙る事を選んだのか沈黙した。だが、そこに思わぬ声が……

「こ、小次郎さんは？」

「アサシンですか……？　彼は、下手をすると色恋そのものを達観しているかもしれません。女性に興味はあるでしょうが、俗っぽい感情はあまり残ってないでしょう。ま、それでも可能性がない訳ではないでしょうから――」

――頑張ってください、ミユキ。

美由希の声がする方にライダーはそう笑みを浮かべて言った。それに美由希は顔を赤くして小さく頷いた。それを見ていた周囲がどよめき、エイミィやアルフが囃し立て、それに美由希は照れくさそうに反応に困っている。

そして、そんな美由希を何とも言えない表情で見つめる少女がいた。アリサである。

（やっぱり、美由希さんは小次郎が好きなんだ……美由希さん、か……）

自分よりも大人で綺麗で女性らしい。そうアリサは思った。しかも美由希は小次郎と同じ剣士。共通点まである。そう考え、ある光景が頭に浮かびアリサは首を振った。

それは、小次郎と美由希が結婚する光景。自分から小次郎が離れていく。そう考えただけでアリサは涙が出そうになったのだ。小次郎は、アリサにとって単なる護衛ではない。今や家族と呼んでもいい相手だ。両親さえ小次郎をそう考えていて、父親など試しに小次郎に会社経営を教えてみた程だ。

生憎小次郎は学問をした事がなかったので、完全に理解は出来なかったようだが、それでも、現代人では至らない発想や着眼点を持つので、父親もそこは評価していて、たまに小次郎に意見を聞いたりしている。

（……アタシの……小次郎なんだから！）

「美由希さんっ！」

そう思った瞬間、アリサは大声で叫んでいた。それにまた周囲が静まる。心音がうるさいと感じるぐらい、アリサは緊張していた。だが、それでもアリサは意を決して告げた。

「小次郎は渡さない！　小次郎は……アタシのサーヴァントなんだからっ！」

アリサ・バニングス。ついに、己の決意を告げた。それがなのは達に与える影響は未知数である。

そして、それを聞いて美由希はどこか呆然としていたが、それがある種の宣戦布告だと理解すると、真剣な表情で返した。

「いいよ。アリサちゃんが小次郎さんを好きなのは分かった。でも、あたしも負けないよ。どっちが小次郎さんに選んでもらえるか……」

「「勝負！」」

共に浮かべるは笑み。だが、美由希のそれは恋敵を見る目ではない。アリサはそれに気づくもそれで怒りを感じたりしない。確かに今の自分は子供だからだ。

互いに想いを寄せる相手は同じ。しかし、まだアリサは知らない。自分の抱く想いが、この時点から美由希と質の違うものだとは。それを彼女が気付くのは、まだかなり先の事……

――――――

交流編その４　後編

アリサの爆弾宣言。それを聞いてなのは達にも影響が出た。大勢の前で小次郎は自分のものと言ったのだ。それは、どこから聞いても愛の告白にしか聞こえない。
アリサを除く五人の少女は、それぞれに思う事もある訳で……

（アリサちゃん凄いなぁ……私だったら……て、何考えてるんだろ）

（あ、アリサカッコイイよ……私だったらそんな事言えないな……）

（アリサちゃんの事、ずっと凄いと思ってたけど、今回は一番凄いかも。私も……いつか……っ！）

思い浮かべるは、同じ顔の三人。だが、その考え方は違うようだ。共通しているのは、顔がやや赤みを帯びているくらいだろう。

（は～……アリサちゃんは啖呵切るのめっちゃ決まるな。わたしは……アーチャーは家族やしなぁ……）

好きな相手と言えば相手。だが、最近のはやてには、それが何故か恋愛とは違う気がしていた。ドキドキする事が減ったのもあるが、一番の理由はアーチャーの眼差し。
どこかなのはを見る恭也に近いのだ。妹を見守る兄。そんな表現がしっくりくるのだ、アーチャーは。そんな事を考えるはやての横で、アリシアは体を洗いながら、先程のアリサの言葉を思い出していた。

（サーヴァントかぁ……わたしも欲しいな。でも、それは無理だか

ら……そうだ！　お兄ちゃんに代わりになってもらおう！）

我ながら名案と言わんばかりに笑顔を浮かべるアリシア。それに誰も気付かず、なのは達も中断していた行動を再開していた。

気付く想いと繋がる疑問

やや賑やかさを取り戻す浴場内。それぞれ体を洗う子供組の横では、リンディとプレシアが体についた泡を流しながら、ライダーが語った内容を反芻していた。

だが、どこか自信に満ちているプレシアに対し、リンディは何故か戸惑いを見せていた。

（みんなそれぞれに想いを抱いている相手がいるのね。若い、って事かしら……）

そう思い、息を吐くリンディだったが、次の瞬間慌てたように首を振る。

（嫌だわ。私もまだまだ若いでしょ。そう考えるのが老いていく原因よ）

自分も新しい恋をしてみるのも悪くない。そう思い、リンディは軽く笑う。夫クライドを亡くし、もう十年以上になる。今までそう思える相手もなく、ただ仕事と息子だけを生き甲斐にしてきたが、そろそろまた自分の幸せを考えてもいいかもしれない。

決してクライドを忘れた訳ではない。でも、アーチャーに自分が言った言葉を思い出すと、そう考えてもいいような気がしていたのだ。過去に縛られて生きて欲しくない。そう言われたような気がすると。

そんなリンディとは違い、迷う事も悩む事もないプレシアは泡を流し終わり、立ち上がって湯船へと向かう。その表情は自信に満ちている。

（ランサーは、きっと私を受け止めてくれるわ。だって、私も良い女って言ってくれたんだもの！）

まるで少女のように笑うプレシア。それを見て、軽くため息のアルフとリニス。最近、プレシアがあの顔をしている時は、大抵……いやほぼランサーの事を考えているのだ。

それを理解しているからこそ、二人は揃って息を吐く。周囲を見れば、忍に美由希、エイミィまでもそんなプレシアに呆然となっている。ほら見ろと思いながら、二人はシンプルに説明した。プレシアはアリシアが目を覚まして以来、ああなるのだと。

おそらく、今の幸せを噛み締めてああなるのだろうから、何も言わずそっとしておいてほしい。そう言った。それに三人は納得したように頷いてしみじみ呟く。

「「「苦労したんだもんね……」」」

そんな三人の呟きに気付かず、プレシアは笑顔で湯に浸かるのだった……

同じ頃、男性陣はと言えば……

「くそっ……」

「どうしたランサー。何を悪態ついている？」

「うるせぇ！　あの三人に、覗きたかったらどうぞって笑顔で言われて出来る訳ねえだろ！」

湯船に大人しく浸かるランサーとアーチャー。そう、彼は悠々と上機嫌に風呂へ来た。だが、そこに待っていたのはプレシア達三人。それが笑顔で言ったのだ。覗きたければどうぞご勝手にと。その内側から滲み出るものは、恐ろしい程の”何か”があった。

そのため、ランサーは隣の理想郷への侵入を諦めたのだ。まぁ、アーチャーは発案したクロノと実行したユーノを密かに誉めていた。ユーノはともかく、何故かクロノもどこか嬉しそうだった気がしていたが。

そして、今は男性八人でまったり入浴中なのだが、先程からザフィーラが神妙な表情を浮かべている。それを恭也が気付き、どうかしたのかと尋ねたのだが、ザフィーラはそれにこう答えた。

「いや……気のせいなら良いのだが、主の声でそろそろだなと聞こえたものだからな」

「ザフィーラ、それは本当か」

「嘘吐くんじゃねぇぞ」

それに反応したのはアーチャーとランサー。だが、表情は正反対

だ。深刻そうな表情のアーチャーに対し、どこか待ってましたと言わんばかりのランサー。そして、それを見てユーノと恭也は思い出したのだ。前回、ランサーが覗きを決行しようとしたキッカケを。

「兄さん、どうします？」

「……止めようにも相手は向こう側だしな……」

「放っておけば良いではないか。それに今回は桃子殿達もおる。酷い事にはならぬであろう」

「良くは分からないが、そういう事だ」

小次郎と士郎の楽観的な意見に、二人はやや不安そうな表情を浮かべるものの、確かにそれを信じてみるしかないのも事実だった。でも、こっそりと向こう側に近い場所に移動する高町家の三人。それを小次郎は何か面白そうに笑みを浮かべ、視線を向けた。

同じ様にそれにランサーも気付き、三人の傍へ移動する。クロノはそんなランサー達を見て疑問を浮かべた。

「何故あんな場所へ？」

「……向こうの声をより聞くためだろう」

アーチャーの答えにクロノはため息。そして静かにユーノの傍へ近付き、告げた。

「お前はむっつりだったのか」

「ち、違う。これは、万が一に備えて……」

「いいじゃないか。クロノ君も男なんだから気持ちは分かるだろう？」

慌てるように答えるユーノだったが、それをフォローするように士郎がそう告げた。それにはクロノも上手く言葉を返せず、ただ黙った。否定すれば色々とからかわれるだろうし、肯定するのも気が引ける。かと言って決断しないのは、一番問題だ。そんな事を考えるクロノだったが、その場を離れるという事を考えない時点で、彼もまた男だった。

そんな五人を離れて見ているのは、小次郎とアーチャー、ザフィーラの三人。興味がそこまでない者達である。いや、興味がないのではなく、抱かぬようにしているのが一人いる。

本人の名誉のために名は伏せておくが、彼は本音を言えば興味はある。だが、ランサー達のようにはなれない。だからこそ、こうして小次郎達と共にいるのだ。

「仲が良いな、あの二人は」

「そうだな。歳が近いのもあるのだろう」

「……主が動いたぞ」

そのザフィーラの声に、何故か静まり返る男湯。それに内心小次郎は笑っていた。士郎やランサーなど、大人であるはずの者達が率先して楽しんでいるからだ。

（いくつになっても男というモノは童なのだな……）

そう微かに笑う小次郎。その耳には、確かに女湯の騒ぎが聞こえてきていた……

きっかけは、やはりはやて。前回同様、胸を揉んだのだが、相手ははやてに対し無防備なエイミィ。しかも、彼女がお祭り好きな性格をも利用しようとした計画。そして、予想通り、エイミィははやてに何の警戒もせず、近づけさせ、思いっきり胸を揉まれた。だが、ここではやての予想外の出来事が起こった。それは、エイミィも面白がってはやての体をくすぐってきたのだ。

さすがにはやてはまだ胸は成長してきていないので、そうなったのだが、そんな苦しそうに笑うはやてを見て、リニスが止めさせようと近付いて、そのはやてに胸を揉まれた。その時、はやては気付いた。エイミィはリニスが自分に近付いた瞬間だけ、くすぐりを弱めたのを。

視線を向けあう二人。そこに宿る光は同じ。それを感じ、はやては思った。

（エイミィさんを選んで正解や！）

それからはもう一部は前回以上の混乱を見せた。原因の一つはアリシア。はやてが楽しそうにやっているのを見て、フェイトをくすぐりだしたのだ。そして、それを今度はアリサに変更し、仕返しとばかりにアリサがやり返し、フェイトもそんな楽しそうなアリシアに感化されたのか、それとも自分だけは嫌だったのか。近くにいたなのは達をくすぐり出す。こうして、なのは達はなのは達で大変だったのだ。

「……楽しそうですね」

「リンディさん、本当にそう思います？」

「若いわね……」

落ち着いている母親組。どこか苦笑気味で呟くリンディ。それを聞き、同じような顔で尋ねる桃子。プレシアも苦笑しながら目の前の状況を楽しんでいる。

ファリンがシグナムの胸を不満をぶつけながら揉み、それを聞きながらシャマルも文句を述べる。それを聞いて、シャマルを後ろから揉みしだくアルフ。その横では美由希がエイミィへお返しをしていた。はやてを手放し、エイミィは近くにいた美由希を襲ったのだ。笑い合ってる二人。だが、そんな二人とは違い、大きく嫌がっている者がいた。

ライダーである。その豊満な胸を忍に揉まれている。まぁ、この二人は前回と同じ。問題はノエルだ。はやてがずっとノエルを揉み続けているのだ。ノエルは振りほどこうにも、下手な行動ははやてに良くないと分かっているので、これといった対処が出来ないのだ。

以下、その流れ。

「や、止めないかファリン！」

「嫌です！　何でこんなに大きいんですか！　ズルイっ！」

「そうよ！　シグナムはズルイのよ！　私だって結構あるんだもん！　きゃっ！」

「お、ほんとだ！　大きいね、シャマルも！」

「あんっ！　もう、エイミィ……ったら！」

「あっ！　ちょっとちょっと……美由希ちゃん、そこはダメっしょ！」

「やっぱ、ライダーは全体的に凄いわぁ……」

「し、シノブ！　もう止めてください！　っ！！　つ、摘まないでくださいっ！」

「ノエルさんは柔らかいなぁ……」

「そ、その……ふぁっ……は、はやて様……もうそれぐらいで……んっ！」

そんな中、セイバーとヴィータだけが湯船の隅で静かに浸かっていた。見れば、リニスはプレシア達の方へと逃げおおせている。

それを見つめ、視線を中央へと移すセイバーとヴィータ。楽しそうな者達と困る者達、そして怒る者達と実に賑やかだ。

「……な、あたしらは喜べばいいのか……？　それとも悲しめばいいのか……？」

「……お好きな方をどうぞ。ちなみに私は前者にします」

「……ならあたしも前者にする」

そう言って二人はまったく同じタイミングで自分の胸を見つめ、揃ってため息を吐いた。そして、セイバーは思った。前回は止めに

入ったのに、今回は止めにさえ入らない自分がいる。その理由を考えたのだ。

そして、その答えは簡単だった。そう、圧倒的敗北感を感じるからだ。以前にも増して破壊力を持った者が増えた。そう、シグナムやシャマルだ。それに、エイミィやリニスも自分より女性らしい体つきをしている。それに楽しそうにしている者もいる。

それ故、もうセイバーは止める気はなかった。なのは達はなのは達で楽しそうだし、そちらは純粋に微笑ましく見ていられた。

（平和ですね。少なくとも私は……）

（あ～、早く風呂出てコーヒー牛乳飲みてぇ……）

そんな事を二人が思っている内に、桃子やリンディによってこの騒ぎは終結を迎える。それを眺めながら、見事に寛ぐ二人であった……

女湯の騒動も一段落し、湯から上がったなのは達が見たものは、ユーノとクロノが長椅子に座り自己嫌悪に陥っている光景だった。更に恭也も同じような表情をしている。そんな三人とは違い、士郎とランサーは普段の表情だが、どこかそんな三人を見て苦笑している。

だが、そこに小次郎とザフィーラの姿はない。アーチャーもいないところを見ると、どうも三人は先に部屋に戻ったようだ。

そう考え、なのははユーノ達へ話しかけた。どうかしたのかと。それに三人が面白いぐらい慌てて何でもないと返した。

「何が何でもないの、クロノ君？」

「え、エイミィ?!　い、いや、何でもないんだ。何でも」

「恭也もどうしたのよ?」

「……気にするな。大丈夫だから」

それぞれ親しい女性から心配されるが、それがかえって今の二人には辛い。そう、言えるはずがない。声を聞いて興奮したなどと。それはユーノも同じなのだが、彼はある意味ではもっと重傷だった。何せ、二人は特定の人物に過剰に反応していたのだが……。

「ユーノ、どうしたの?　本当に大丈夫?」

「湯当たりでもしたの?」

フェイトとすずかが心配そうに声を掛ければ……

「そうなの?　バカね。どうせクロノ辺りと張り合って長く浸かってたんでしょ」

「ほんま男の子ちゅうのは。ま、とりあえず横になった方がええよ」

アリサとはやてはどこか馬鹿にしながらも、声には優しさが含まれているし……

「ママ呼んでこようか?」

「それは少し行き過ぎかな?　あ、ユーノ君、お水飲む?」

アリシアとなのははは何時も通りだが、その心遣いは思いやりに満ちている。

（僕は……最低だな）

そう、彼はアリシアを除くなのは達の声で反応していた。と言っても声自体ではなく、それを聞いて今なのは達は裸なのだなぁと考えてしまったからだ。

それは、彼がなのは達五人を特別視しているから。同年代の友達がいなかったユーノ。なのは達は初めて出来た友達だったのだが、いかんせん異性である。そして、ランサーの一言も手伝い、彼にとってはそういう発想をしてしまう事になった。

（ランサーさんがあんな事言わなければ……）

ランサーはこう言ったのだ。なのは達も中々聞きようによっては、”女”の声してるじゃないかと。それが、ユーノにそういう考えを余計助長させたのであった。

クロノと恭也はエイミィや忍に連れられ、外の散策へ出かけて行った。桃子は士郎と部屋へ、ランサーはプレシア達三人と共に散歩へ。美由希は小次郎が部屋に戻ったと知ると、笑みを浮かべて部屋へ向かったし、シグナムとシャマルはノエルやファリンと土産を見てくると去って行った。

リンディはアーチャーに話があるからと部屋へ向かい、セイバーは未だに近眼状態のライダーの手を引き、部屋へと案内すると告げて去った。ヴィータはアリシアに卓球でもするかと言い、アリシアもそれに頷き、はやて達と別れた。

こうして、ユーノと五人は残った。というのも、ユーノは軽い湯

当たりも起こしていたのだ。原因は言うまでもなく、興奮したため。なのはが家族として傍にいるからと告げると、フェイトやすずかがなのは一人に任せるのは心苦しいと、付き添いを申し出て、はやてはやっぱり全員一緒がいいと残る事を選び、アリサは小次郎と美由希の事を考えたが、今は友人を取ると決め、残った。

実際は、今の自分が行ったところで何も出来ないと理解しているのもあった。そして、すずかはなのはと二人っきりにしたくなかったというのが本音。

「はい、お水」

「ありがとう、なのは」

笑みと共に手渡される水を飲むユーノ。それを見て、五人は一安心。顔色が先程よりも良くなっていたからだ。

（でも、珍しいな。ユーノ君、体調管理とかしっかりしてるのに）

なのははユーノがミッドに行く前や帰って来てからの事を思い出し、首を傾げた。自分に体調管理で注意出来るようにと、ユーノはその辺りを徹底している。その事を誰よりもなのはは知るからこそ、今回のユーノの行動は不思議でしょうがなかった。

クロノと張り合うと言っても、自分が湯当たりするまで我慢するだろうか。そう考えたのだ。

そんな疑問を感じるなのはを他所に、ユーノは水を美味しそうに飲むのだった……

アーチャー達の部屋。そこにリンディがいた。小次郎やザフィーラもいたが、小次郎は美由希が、ザフィーラは雰囲気を感じ出て行った。今残っているのは、アーチャーのみ。

そして、アーチャーがリンディの前へ湯のみを置くと、それにリンディは小さく礼を述べ口をつける。それにどこか物足りなさそうな表情を浮かべたリンディだったが、湯のみを静かに戻して告げた。

「話は、闇の書の今後についてです」

「……ただのリンディは少しお休みという訳か」

リンディの口調がやや険しいものになったのを感じ、アーチャーはやや残念そうに呟いた。それを聞いているのかいないのか分からないが、リンディはまず現時点での情報を求めた。それにアーチャーも頷き、これは万が一に備えてだと前置いてから告げた。そう、蒐集行為をしていると。

それにリンディは若干表情に驚きを見せるもの、無言で続きを促す。それにアーチャーが告げたのは、管制人格を起動させ、より詳しく確実な情報を手に入れようと考えている事。そのために蒐集はしているのであって、決して完成を目的にしている訳ではないと語った。

リンディもアーチャーの性格を知るからこそ、それが事実だと理解した。だが、もしそうだとしても蒐集をする必要はないのでは。そうリンディは問いかけた。それにアーチャーも頷いた。しかし、アーチャーがその後告げた憶測に、リンディは何か得体の知らない不安を感じる。

「はやての足の事は知っているな」

「え、ええ。原因不明の麻痺だそうね」

「……原因が闇の書かもしれん」

「……その理由は？」

「まず、闇の書がはやてのリンカーコアを内包しているらしい事。ある種の心臓だ。体に無ければ異常をきたす可能性は高い。それにシグナム達は、はやての魔力で存在を維持しているらしい。だからこそ、妙なのだ」

アーチャーはこう続けた。子供にも関わらず、四人もの存在を維持し、尚且つその四人はいずれもその身に宿した魔力が高い。詳しくは話せないが、元々そんな存在に近かった自分達は、一人でもかなりの魔力を消費する。それを例えなのはと同じく魔力保有量が多いとしても、四人も堪え切れるのが不自然だと。

だからこそ、その足りない分の魔力を補うために、更に体に変調を来たすのではないか。そう思っていると言い終え、アーチャーはリンディへ視線を送る。

「……確かに可能性はゼロではないでしょう。分かりました。管制人格までの蒐集は許可します」

「助かる。後、もう一つ頼みたい事があるのだが」

「何でしょう？」

「極秘裏に調べて欲しい人物がいる」

そう言ってアーチャーが伝えたのは、仮面の男。その特徴や行動

から見て魔法世界の住人に違いない。そう言って、アーチャーは低い声でこう締め括った。

――案外、以前闇の書被害に遭った者かもしれん。

その一言にリンディはハッとした。そう、自分でさえ簡単に吹っ切れなかったのだ。恨みを抱き、闇の書を付け狙う者がいてもおかしくない。そう思ったからだ。それに、アーチャーの話には、気になる点もいくつかあった。

まず、相手が守護騎士を知っている事。つまり、守護騎士を見たもしくは存在を聞いた事がある。そして、管理外に滞在し、魔法をあっさり使った事。ここからでもまともな局員や相手ではない。

更に、ジュエルシード事件にも忠告をしに出て来たのだ。闇の書を狙う割には、腑に落ちない事が多い。アーチャーの言った通り、闇の書を奪おうともしなければ、壊そうともしない。何故か監視程度に留めている。

「……分かりました。私個人で調べてみます」

「頼む。くれぐれも誰にも話さないで欲しい。それと……」

「まだ何か？」

「その男、猫の使い魔を持っていてな。それも手掛かりに――どうした？」

「い、いえ、何でもないです」

アーチャーが猫の使い魔と言った瞬間、リンディに一人の人物の顔が浮かんでしまった。そう、それはアーチャーの推測にあまりに

も当てはまる事が多い相手。まず、守護騎士を知っている。当然だ。その者はその事件の担当だったから。次に管理外である地球に滞在。これも出来る。何せ、その者は地球出身だから。猫の使い魔を持っていて、闇の書に恨みを持っている。これもそう。何せ、その者の使い魔は有名な猫姉妹。しかも闇の書が原因で、自分の手で親友を殺さねばならなかったのだから。

（……どうしてこんなにも当てはまるの？　でも、提督は局でほとんど仕事をしているわ。地球に戻った事はそんなにないはず……）

（何かあったか？　……まさか、心当たりがあったとでも言うのか……）

何かを迷うリンディ。それを根気良く待つアーチャー。ここで声を掛ければ、リンディが戸惑ってしまう。そんな感じがしたからだ。

ややあって、リンディが俯いて呟いた。何も聞かないんですね、と。それにアーチャーは無言で返す。その対応にリンディは小さく笑うと、これはあくまで候補の一人ですが、と言って語り出す。夫、クライドの死に纏わるグレアムの話を……

リンディの話を聞き、アーチャーはお茶を飲む。すっかり冷めていた。それはまるで、今の話をし終えたリンディの気持ちを語っているように思え、アーチャーは一気に飲み干してから熱いお茶を入れ直した。

見れば、リンディも湯のみに手をつけ、ため息を吐いている。それを見たアーチャーは、リンディの前に熱いお茶を置き、残ったお茶ごと湯のみを取り上げた。

「あっ……」

「夏とはいえ、出来る限り暖かい方が体にはいい。そっちを飲んでくれ」

（残りは……捨てるのも何か。仕方ない……）

そう思ってアーチャーは深く考えもせず、残りを飲み干すとそこに新しいお茶を注ぐ。それを見てリンディはやや驚くもくすりと笑い、熱いお茶を飲む。

（今のって間接キスね。ふふ、そんな風に考えるのも美由希さん達に当てられたからかしら？）

「ふぅ……」

いつもと違い砂糖もミルクもないもの故、先程はいま一つと感じたお茶が、心なしかその時は美味しいようにリンディは感じた……

リンディからアーチャーに語られた事実。それを聞いて、アーチャーは一計を案じる事にする。

それはこの事態を好転させるキッカケになりえるのか。それとも、更なる混乱を招くのか。

……それは、まだ分からない……

ーーー

交流編その４　ＥＸ１

アーチャーとリンディが話している頃、士郎と桃子は二人っきりで向かい合って話していた。それが、あの時と同じだったものだからか、余計に二人は笑っていた。

話していたのは、この数ヶ月の事。ジュエルシードに関わり、魔法を知ってからの日々。多くの変化や出会いを経て、自分達に起きた出来事を話していたのだ。

「でも、本当に成長したのね、なのはもユーノも」

「……ああ」

「まさか、スクライアって名にそんな想いを込めたなんて、ね」

「あれは俺も驚いた」

あの帰還した日、二人へユーノは今後の進路を相談した。自分は無限書庫で働き、人の役に立つ仕事をしたい。そうユーノは言った。でも、それは様々な問題もある。だから、二人の意見を参考にしてから、いつ入局するかを決めたい。そうユーノは告げた。

それに二人は真剣に答えた。親としての気持ちと大人としての助言。その全てをユーノへ伝え、この話は、ユーノが結論を出したらまた話す事で決着となった。

そして、その後すぐに桃子がユーノへ養子縁組の話を持ち出した。それにユーノは驚き、喜びを顕にした。だが、それをユーノははっきり断った。その理由として挙げたのは、自身の名前。

「スクライアは部族の名前だと、そう……思ってました。でも、違ったんです。これは、僕のもう一つの『家族』の名前だったんです。だから――」

これを無くす事は出来ません。そうユーノは二人に告げた。その言葉に秘められた何かを二人は理解出来なかったが、何かあったのだけは理解出来た。そして、それはユーノの成長の一つだと思い、養子縁組は立ち消えた。桃子は、そのユーノの気持ちを尊重したからだ。

だが、ユーノはこう言った。それでも、二人を自分の親だと思う気持ちに変わりはないと。

「……でも、考えたらこれで良かったかもしれないわね」

「ん？」

その時の事を思い出し、桃子が呟いた一言に士郎は不思議そうな声を出す。それに桃子は茶目っ気たっぷりにこう答えた。

「だって、それならなのはと結婚出来るじゃない」

この一言に士郎が硬直し、大いに悩む事になる。そんな夫の姿を見て、桃子は楽しそうに笑うのだった……

約束の夜空

日も暮れ、大勢での賑やかで楽しい食事も終わり、星を見に行ったなのは達のように、以前と同じような流れになるかと思われたのだが、一部前回と違う者達もいるもので……

「ランサー、話があるのだけれど」

プレシアがそう言ってランサーの傍へと近寄って告げた。それに前も同じような事があったなと思いながら、ランサーはそれに頷き共に外へ。それを見送るリニスとアルフ。だが、それも二人が大広間を出た瞬間まで。二人がある程度離れたと感じると、静かに立ち上がり、同じように大広間を出て行った。

ちなみに、クロノはエイミィとアリシアに連れられて、周辺の散策へと出て行った。リンディはプレシアと共にそれを見て、少しクロノとアリシアの今後の関係に思い悩んだりした。

そして美由希は小次郎に、今回は川の方へ歩いてみませんかと誘い、連れ立って外へ。それに負けじと忍も恭也を誘い、こちらはどうやら卓球をやりに行ったようだ。

そして、アーチャーと言えば、ファリンとノエルが誘いをかけていた。それも大事な話があると言って。それにアーチャーはやや疑問を持つものの、それを受け、二人を連れ彼の割り当て部屋へ。それを見て、ライダーは笑みを浮かべ、セイバーは不思議顔。

だが、その光景に複雑な心境の者がいる。シャマルだ。彼女は、この旅行中のアーチャーの態度が気にかかっていた。以前であれば、ファリンの行為に反応が薄く、もっとはっきりと遠ざけた。だが、何か変わったようにファリンやノエルに対し、対処が甘くなったのだ。

（……もう、何でこんなに気になるのかしら……）

そんなシャマルを見て、シグナムは何かを考え、ふと笑みを浮かべて念話で告げた。

【シャマル】

【シグナム？】

【以前お前に言われた事なのだが、私にもやっと分かった。あの二人はアーチャーに想いを寄せているのだな】

シグナムの言った事があの遊園地での事だと分かり、シャマルは内心頷いた。よく分かったなと。でも、どうしてそれを今言うのだろう。そうも思ったのだ。

それをシグナムも理解しているのだろう。故にどこか苦笑しながらこう言ったのだ。

【そして、お前がアーチャーを見る目は、ノエル達そっくりだぞ】

「ええっ！？」

「ど、どうしたんだよ、シャマル」

「何かあったか」

突然声を上げたシャマルに、ヴィータとザフィーラは驚くも、どうも周囲も同じだったようで、全員がシャマルへと視線を、向けていた。それに気付き、シャマルは慌てて何でもないですと言って手を振った。それだけで周囲は何かあった事を察したが、何も言わずに視線を戻した。

ヴィータもザフィーラもそれに習い、何も言わずにシャマルから

視線を外した。そして、先程まで話していたエアコンの掃除時期について話し出す。この時期は常にフル稼働するため、中々掃除するタイミングが掴めないのだ。

これは掃除を担当している二人にとっては大きな課題。いかに時間をかけず、綺麗に掃除して使えるようにするか。これに対して、旅行終わりまでに対策を考える。そう二人は決めていたのだ。

そんな事を語り合う二人の横で、シャマルは顔を赤くしながらシグナムへ視線を送る。それにシグナムは気付いてないのか、無視しているのか、平然とお茶を飲んでいる。

（私がノエルさん達と同じ目？　じゃ、私は……アーチャーが好き？　そんなはず……）

（人は他者の事には気付けるが、それが自身の事になると途端に気付かぬ者もいるのだな。いい勉強になった）

そんな事を思い、息を吐く二人。その込められたものは、大きく違うのだった……

静かな散歩道を手を繋いで歩く少年と少女。違和感があるとすれば、少女と言っても片方はもう女性と呼んでもいい年頃であり、片方は幼女と呼んでもいいような外見である事だろう。

「アリシア、君は良かったのか？　なのは達と一緒じゃなくて」

クロノは手を繋ぐ事を要求した相手――アリシアへそう問いかけた。それにアリシアは平然と頷いた。そしてこう返したのだ。

「なのは達はね、前来た時の約束があるんだ。だから、わたしはお兄ちゃんと一緒がいいの」

「どんな約束なんだろ？」

「またみんなで来ようねって約束。だからね、何となく邪魔しちゃいけない気がしたの。それに……」

そう言ってアリシアはクロノへ視線を向け、笑顔で一言。

――わたし、お兄ちゃんと思い出作りたいから！

それに驚くクロノだったが、そのアリシアの言葉に何か引っかかるものを感じ、エイミィへ視線を向けた。エイミィはどこか楽しそうにクロノを見つめていた。それにクロノは確信した。アリシアのこの言葉は、エイミィの入れ知恵だと。

そう思ってエイミィへ軽く注意をしようとしたクロノだったが、それを遮るようにアリシアがこう告げた。

――それとね……お兄ちゃん、わたしのサーヴァントになって！

その爆弾発言に、クロノどころかエイミィまでも呆然となり、アリシアを見つめた。それにアリシアは満面の笑みを向ける。そして、クロノとエイミィは心から思うのだ。アリシアの一番怖いところは、底知れない純粋さと素直さなのだ、と……

以前と同じ場所、同じ顔ぶれ。それに何か感慨深いものを覚え、

なのはは笑みを浮かべた。それは周囲の五人も同じだったようで、それぞれ笑みを浮かべて夜空を見上げている。

そこに広がるは、夏の星空。以前とは少し星が違うのだが、それに気付ける者は生憎ユーノくらいだった。今のユーノが夏の星座について少し話していた。それを聞きながら、なのはは思う。まさかこんなに早く約束が果たせるとは、と。

（アリシアちゃんが言ったからだけど……考えてみれば、そのアリシアちゃんがキッカケなんだよね）

自分達とユーノやフェイトの出会い。それの始まりは、アリシアの永久の眠りからなのだ。そう、アリシアの事を誰も死んだなどと言わない。眠っていたのだと、なのは達は声を揃えて言い切る。

アリシアに真相を教える必要はない。そう思っているからだ。少なくともセイバー達はそう考えている。なのは達はどうか分からないが。

「……しっかし、何やな～。まさか約束して半年もせんうちに来る事になるとは思わんかったわ」

「そうだね。私も一年は先かなって考えてたから」

「すずかの言う通りよ。アタシもせめて一年は……って思ってたもの」

「アリシアは、きっと羨ましかったんだろうな。私が話した中で、旅行の話を一番覚えてたから」

「そういえばそうだね。僕も何度か話させられたっけ」

「ユーノ君にまで……アリシアちゃんって相変わらず行動的だね」

六人して夜空を見上げて話すのは、この原因を作った少女の事。

そして、一緒に行こうとフェイトが誘ったのだが、何故かそれを断り、クロノ達と行動を共にしたアリシアの事だった。

六人は知らない。彼女がフェイトやユーノから聞いた約束を覚えていて、そのために自分は遠慮した事を。

様々な話をしながら、なのははふと思った。それは、アリサがフェイトに対し、ちゃんと日本語は読めるようになったかを聞いていた時だ。

（ユーノ君は、学校どうするんだろ？）

おそらくユーノはしばらく地球で暮らすだろう。では、その間周囲の目を納得させるなら学校に通う必要があるはず。そう思い、なのははユーノへ尋ねてみる事にした。今後の事も含めて。

【ユーノ君】

【ん？　何？】

突然の念話に対しても、驚く事無くユーノは反応した。それになのはは、さすがユーノ君と思いながら、思った事を尋ねるべく、言葉を返す。

【学校はどうするの？】

その問いかけ自体は予想外だったのか、ユーノはやや意外そうな表情をなのはへ向け、苦笑しながら考えてなかったと答えた。それ

になのははそれこそ意外だと思い、何故かを尋ねる。
それにユーノはこう答えた。自分は将来管理局で司書として働くので、これからは週に何日か手伝いとして働くつもりだと。だから、学校に通っている暇はないだろうから。そんな事を考えてもなかった。そうユーノは締め括り、最後に告げた。

【ごめんね。なのはが折角心配してくれたのに】

【ふぇ？　……あ、そんな気にしなくていいよ。確かに私もちょっと残念だけど、ユーノ君がそうしたいのなら、私は応援するよ】

【……ありがとう、なのは】

その心からの言葉に、なのはも心からの想いで返す。

【私こそありがとう、だよ。ユーノ君が調べたり教えてくれたから、リンディさん達とシグナムさん達が仲良くなれたんだもん】

【それはまだ分からないけど、でもみんなで笑い合えるといいよね】

【……うん。そうだね】

視線を合わせ、微笑み合う二人。それを見て複雑な心境になるフェイトとすずか。そして、そんな四人を見て苦笑するはやてとアリサ。あの時と変わった事がこんなところにもあった。そう思ってはやて達は苦笑していたのだ。

（あの頃は、ユーノ君はなのはちゃんとばかり思っとったけど……）

（フェイトだけじゃなくすずかまでとは、ね。これは……どうすれ

ばいいんだろ、アタシ達）

視線の先にいる親友二人。その二人が見つめる二人。その事を思い、小学三年生とは思えないような悩みを二人は抱くのだった。そして、フェイトとすずかと言えば……

（なのはも、ユーノが好きなんだね。でも、どうしよう？　私にとって、なのはもユーノも大切な親友だし……またはやてに聞いてみよう……）

（ユーノ君、なのはちゃんが好きなのかな……？　ううん、関係ない。美由希さんみたいに私も負けない。いつかユーノ君に気持ちを伝えよう）

それぞれに想うは、意中の異性と親友の少女。それに多少の違いこそあれ、恨みや憎しみといった負の感情はない。あるのはただ、その想いをどう伝えるか、その術を考えていた。

真夏の夜空。約束を交わした同じ場所。だが、そこで見上げる子供達は以前と違う。たった三ヶ月、されど三ヶ月。大きく成長した者、微かに成長した者。それぞれがそれぞれに、ゆっくり大人へ変わっていく。

誰かが言った。大人になりたいと思う者は、恵まれている。それは、大人の苦労を知らないのだから。

子供に戻りたいと思う者も、恵まれている。それは、子供の苦労を忘れてしまえたのだから。

大人にも子供にもなりたくないと思う者も、恵まれている。それは、苦労を知り、忘れる事もないのだから。

彼らは、そのどれでもない。大人になりたいとも、子供でいたい

とも、どちらにもなりたくないとも思わない。ならば、彼らは不幸だろうか。いや、違う。彼らは彼らだからこそ、幸せなのだ。

そう、大人でも子供でもあろうと思う者。それはきっと一番辛く、厳しく、大変で苦労も絶えないのだろうけど、それに見合うぐらい楽しく、面白く、賑やかで笑顔が絶えないだろうから。

「ね、みんな」

なのはは全員へ声を掛ける。それに五人の視線が集まる。その視線を受け止め、なのはは笑みを浮かべて告げた。

――ずっと、親友だよ。

その言葉を聞き、全員が同じタイミングで力強く頷いた。そしてその後、フェイトが小さく笑みを浮かべて「アリシアも」と告げると、全員が頷いた。その顔に、輝く笑顔を浮かべて……

ミッドチルダ　首都クラナガン。そこにある地上本部に、彼――レジアス・ゲイズはいた。その隣を歩くのは、同じ陸に所属する首都防衛隊の隊長、ゼスト・グランガイツである。

二人は同期であり、親友とも呼べる間柄でもある。正義について語り合い、夜を明かした事さえある。

「ゼスト、最近起きている事件の遺族共だが」

「あの連続殺人か」

「そうだ。お前も予想した通り、局に対して多少の圧力を掛けてきたぞ」

スポンサーの中には、今回のように立場を利用し、捜査への口出しや運営などへ文句を言ってくる者もいる。それ自体は、今に始まった事ではなかったが、今回は少し様子が違ったのだ。

そして、それは二人にとっては予想外の話だった。

「……何故か、質量兵器の運用に対する緩和要求だったらしいが、な」

「何？」

「それと、これはまだ極秘だが……」

レジアスが声を低くしたのに合わせ、ゼストはその姿勢を少し正した。それを受け、レジアスも真剣な眼差しで告げた。

「そうしなければ、次はお前の番だ。そう脅迫されたらしい」

「……よくある類の悪戯ではないのか？」

「そう思ったがな。今、奴らにはそれこそ護衛が隙間無く配置されている状態だ。それにも関わらず――」

レジアスが告げた次の言葉に、ゼストは絶句した。それだけの衝撃がその発言にはあったのだ。そう、それは……

――誰もいないはずの場所で、そう聞こえたそうだ。念話などで

はなく、直接な。

そう告げるレジアスは、どこか信じられないといった表情をしてはいたが、それでも何か思う事があるのか、ゼストへこう言った。お前達は、この事件には関わるな、と。

その表情は心から心配するものだった。だからこそ、それにゼストは感謝しながらも首を横に振った。それを見て、やはりという感じで息を吐くレジアス。そんな彼を見て、ゼストは少し笑みを見せて言った。

「今日は久しぶりに飲むか」

「……割り勘だからな」

そう言い合って二人は夜のクラナガンへ消えていく。その姿を、夜の闇に紛れるように、全身黒尽くめの男が見つめていた……

――――――

次回は一日目の夜と少しだけ二日目の様子をお届け。完全ほのぼのに出来たらいいのと思います。

交流編その４　ＥＸ２

静かな室内。だが、そこにほのかに明かりが灯っている。そして、よく耳を澄ませば小さな話し声が聞こえてくる。

「そうですか。アーチャーは頷きましたか」

「はいっ。でも、デートなんて何をすればいいんでしょう？」

「そこはアーチャー様にお任せする箇所です。ですよね、ライダー」

話し合うは月村家メイド隊。夕食後、ノエルとファリンがした大切な話とは、デートの申し込みだったのだ。最初は、どこか緊張していたアーチャーだったが、二人の話がデートの申し込みと分かると、やや拍子抜けをしていた。

しかし、その申し出を快く承諾し、その報告会となっていた。ちなみにシグナムは入浴しに行っていて部屋にはいない。月夜を見上げながらの湯も中々良いと小次郎に言われたらしく、喜び勇んで出て行ったのだ。

となれば、残されたのは必然的に……

（……デート、か。いいなぁ……って、私、本当にアーチャーの事……）

シャマルであった。シグナムから告げられた一言に、自分の気持ちを見つめ直しているのだが、未だに答えが出ない。しかし、聞こえてくるファリンやノエルの言葉に、言いようのない想いは感じていた。

羨望、嫉妬と言ったものが近いのだろうか。シャマルは嬉しそう

に話す二人に、そんな感情を抱き、ただ黙って布団に潜っていた。
その内心で、シグナムと共に風呂に行けば良かったと思いながら……

同じ頃、女湯ではシグナム以外にも入っている者達がいて……

「それで、いつランサーに？」

「……フェイトやアリシアがいるから家では無理ね。お泊り会をする時ぐらいかしら」

「じゃ、そん時だね……でもさ、お母さんに一つ聞きたいんだけど」

「何かしら？」

どこか恥ずかしがるようにしているアルフに、プレシアは不思議そうに尋ねる。隣のリニスはそんなアルフの様子から何か悟ったのか、やや顔が赤い。

アルフは何か意を決したようにプレシアに尋ねた。初めては痛いって聞いたけど、本当か。その言葉を言われたプレシアは、一瞬にして真っ赤になり、あたふたしながら周囲を見渡した。

この時、冷静になって考えれば分かる事なのだ。念話を使えばいいと。だが、そんな発想が出来ないぐらいに、プレシアは動揺していた。

「え、ええっと、そそそ、そうね。確かに痛いと言えば……でも、入念に準備すれば」

完全に挙動不審なプレシアを見て、リニスは小さく呟く。

「あの……準備とは何をすれば？」

「ええ～っ？！　それも……言わなきゃ、ダメなの？」

「当然じゃんか。お母さんしか経験無いんだから」

アルフの言葉にリニスも頷き、プレシアを見る。それに観念したのか、ぽつりぽつりと話し出すプレシア。それをふんふんと聞き入る二人。

それを横目で見ながら、シグナムは思う。

（……もう少し後で来るべきだったか。まさかこんな会話を聞かされるはめになるとは……シャマルが羨ましいな）

頬を微かに朱に染め、そう思って彼女は月を見上げる。星空の中、優しく照らす月の光。それを浴びて輝く桃色の髪。凛々しき女騎士ではなく、一人の美女がそこにはいた。

そう、彼女は知らない。その思った相手が、まったく同じ事を思っているなどと……

紡ぐ時間は思い出に

椅子に座り話し合う美由希とエイミィ。それとは違い、布団で横になりながらセイバーから好きな相手を聞き出そうとする忍。もう、何度となく忍から聞かれているセイバーだったが、いつも答えは決

まっているのだ。
　そう、今はいません。この答えが常にセイバーの答え。忍はいつになったら出来るのかと思いながら尋ねているのだろうが、セイバーは今はいないとの答えに全てを込めているのだ。

「むぅ、そろそろセイバーを口説きにくるお客さんとかいないの？」

「えっと、それは……」

「いたの？　どんな感じの男よ」

「……笑いませんか？」

　忍の真剣な表情に、セイバーはそうどこか情けない声でそう問うた。それに忍は変な感じを受けるものの、無言で頷いた。それを見て、セイバーは静かに語り出す。
　それは、セイバーがいつものように働いていた時だ。常連とも言える客が、レジを打つセイバーへ意を決してこう言った。私と付き合って欲しい、と。それを聞いた時、セイバーは頭が真っ白になった。幸い、その時店内には他の客はいなく、桃子と士郎は奥にいたため、聞かれなかった。

「……それで？」

「勿論、嬉しかったです。私に想いを寄せ、それを勇気を出して告げてくれた事は。ですが……」

　セイバーは嬉しそうに語っていたのもそこまで。そこから、急に沈んだ表情になり、こう告げた。その相手は、女性だったのだ、と。
　次の瞬間、忍だけでなくこっそり聞いていた美由希とエイミィさ

え言葉がなかった。セイバーはその時の事を鮮明に思い出したのだろう。その視線は遠くを見つめ、物悲しささえ漂わせていた。

ちなみに、まだその女性客は店に来る。セイバーはその客の相手をする度に、どこか居心地が悪いのだそうだ。

「……彼女は、私が少年だと思っていたそうです……」

そう言って、セイバーは内心で呟いた。以前と違って性別を偽っていないのに、と。そんなどこか悩むセイバーに、忍がこう言った。なら、もっと女性らしい格好をすればいいと。そこで話題になるのは、アルフが着ているエプロンドレス。それを着ればいい。その三人の意見に、セイバーは散々悩むものの、苦渋の決断でそれを着る事を選んだ。

そして、それを受けてシャマルや美由希達女性陣は皆、その格好へと統一される事となり、恭也はそんな桃子の暴走を見て、ため息を吐く事となる。ちなみになのは用の子供サイズを発注しようとしたのは、さすがに止められる事となる。

「ねぇ、桃子さん……」

「どうしました？」

「いえ、この歳になると色々考える事があるんですけど、今日、久しぶりに思う事がありまして」

リンディの言葉に桃子は何かを察し、羨ましそうに言った。恋で

もしましたかと。それにリンディはやや驚くものの、やや戸惑いながら答えた。正確には、恋をしてみようかなと考えたと。

だが、それに桃子は苦笑して言い切った。それはきっとそういう相手が出来たんだろうと。それにリンディは少し考えて、やんわり否定した。

「残念ながら、そこまでは」

「あら、残念。ですけど、いい事だと思います。あ、でも士郎さんは駄目ですよ？」

桃子の言葉にリンディは小さく笑う。そして、確かに士郎は魅力的だが、桃子以上にお似合いの相手はいないとリンディは告げた。それに嬉しそうな笑顔で礼を述べ、桃子は尋ねた。気になる相手はいるのかと。それにリンディは楽しそうな笑みを返し、告げた。

「それはご想像にお任せします」

「そうですか。……誰かしら？」

「クスっ、言いませんよ？」

「ふふ、クロノ君にでも教えてみようかしら」

「あら、それは少しズルイですよ。あの子が本気にしてしまいますから」

そう言い合う二人は笑顔。女はいくつになっても女。それを実証するようなリンディの気持ち。それに桃子も心から喜び、リンディへの応援と手助けを約束する。女同士の友情が、こんなところでも

育まれていた……

大浴場の前にある休憩所。そこに座り、ユーノとクロノは熱を持った体を冷ましていた。だが、それとは別の意味での熱が二人には残っている。

「まったく……知っていたんだろ」

「違うよ。確かに調べて欲しいとは言われたけど、知っていた訳じゃない。僕だって、海鳴に戻ってきた日に知ったんだ」

「……でも、確信はあったんじゃないか？」

「さて、ね」

クロノに対し、どこか楽しそうに笑うユーノ。それを見て、クロノはやや憮然とした顔をするが、ため息を吐いて何か言おうとしていたのを止めた。それに気付き、ユーノは尋ねる。言いたい事があるのなら言えばいいのに、と。

その言葉にクロノは皮肉げに笑い、答えた。お前に何を言っても無駄だ。その言い方がどこかアーチャーみたいに思え、今度はユーノが憮然となった。

二人は風呂の中でも同じような話をしていた。闇の書に関連する事を。まぁ、その時はもっと理知的なやり取りだったのだが。

夕食時に決めたクロノとリンディの結論は、現状のように出来る解決法を探す事。闇の書への具体的な対策は、アーチャーが既に持っている。ならば、それ以外の方法を考案し、構築する事がリンデ

ィ達の役目。何せ、アーチャーの方法ではシグナム達が消滅する可能性が大きい。それを避けるための手段。それをはやてもアーチャーも、なのは達も望んでいたのだ。

そのため、ユーノの持つ情報を聞いて、クロノなりに考えようと思ったのだが、相手は過去から何度も災いをもたらしてきた存在。早々良い方法が思いつく訳ではなく、結局はユーノがまた無限書庫で調べるしかないとなった。

それでも、何とか闇の書自体の修正や、守護騎士達の存在を保護する事などは、クロノ達の方で手を打ってみると決まった。

「……しかし」

「どうしたのさ？」

「いや、このままで終わらない気がするんだ」

（闇の書も、例の事件も）

クロノは、そう思って立ち上がった。そろそろ部屋に戻って寝ようと。それにユーノも同意し、立ち上がって歩き出す。歩きながら話すのは、明日の事。魚釣りをすると決まった瞬間、何故か目を輝かせたアーチャー。対するランサーは、どこか嫌そうな表情をしていたが。

そして、クロノは明日、それとなくアーチャーかランサーにでも例の事件について意見を求めようと思うのだった……

薄明かりの中、士郎と恭也は小さく笑みを浮かべながら、ある事

を話していた。それは……

「そうか。ユーノの奴、そんな事を……」

「ああ。あいつも歳はともかく、気持ちだけなら立派な男になったもんだ」

士郎から聞かされた弟の決意。それに恭也は言いようのない喜びを感じていた。ユーノが帰ってきた日。再会を果たした自分を、どこか緊張しながら「兄さん」と呼んだユーノ。それに恭也は驚いたが、周囲が浮かべる笑顔に影響され、それに笑顔で答えたのだ。

自分が言った言葉を覚えて、弟のような存在から弟へと変わったユーノ。その変化の一端を聞かされ、恭也は納得するのと同時に誇らしかった。

「ま、あいつは俺が教えてるから」

「おいおい、お前だけじゃなくて俺も結構教えたぞ？」

「父さんは道場でだけだろう？　俺は、休日とかにも指導してたからな」

「釣りに連れて行ったりしただけだろう……」

「それも立派な指導だ」

ユーノが戻ってきた事で、高町家は比率だけで見れば男女比が均等になった。これで多数決で敗北する事は、表向きは避けられる。まぁ、実質的になのはや桃子に三人が抗える訳はないので、大きな意味はないのだが。

それでも、やはり二人にとってユーノが帰ってきた事は嬉しい事だった。”家族”。この言葉は、高町家で言えば心の繋がりなのだから。

士郎と恭也は親子である。だが、美由希は士郎の血を引く子ではない。そして、桃子となのはは親子だが、なのはと恭也は腹違いの兄妹なのだ。だが、そんな事は関係ないとばかりに士郎達は家族として暮らしている。

血の繋がりではなく、心の繋がり。それこそが家族に必要なものだと思っているからだ。だからこそ、ユーノも家族といえる。本人がそう自覚し、周囲がそれを望んでいるのだから。

「ま、そういう事にしといてやるか」

「ユーノは俺の弟子だからな」

恭也の言葉に士郎は少し面食らうが、すぐに笑みを浮かべ頷いた。そうだな、と。初めて見せた恭也のわがまま。それに親として喜びを感じたのだ。そして、改めて思うのだ。全ての出会いには、必ず意味があるのだと……

「それで、受けたのか」

「ああ。何、他愛ないデートだ。ま、映画辺りにでも行く事にする」

ザフィーラの意外だと言いたそうな声に、アーチャーはそう軽く笑って言った。それを聞いて、悪そうな笑みを浮かべたランサーが噛み付いた。

「とか言って、その後食っちまう気だろ？」

「君と同じにするな。大体、ファリンだけでなくノエルもいるのだ。そんな事は始めから考えん」

「ほう、それはふぁりん殿かのえる殿だけなら考えるという事か」

「……小次郎、何か私に恨みでもあるのか」

小次郎の言った言葉に、アーチャーはやや呆れながらそう返す。それを聞きながら、ランサーはニヤニヤと笑みを見せている。小次郎はアーチャーに対し、からかうような笑みを返すと、別に恨みなどないが、気になったものでなと言った。その笑みが自分の反応を楽しむ類と判断し、アーチャーは何も言わず、ため息だけ吐いた。

ザフィーラはそんな三人を眺め、羨ましそうに思う。自分も、いつかこんな風に過ごせる時がくるといいのだが、と。

そうしみじみ思うザフィーラを他所に、今度はランサーが自慢げに語り出す。プレシア達三人から誘いを受けたと。それが意味する事を理解し、アーチャーと小次郎はやや驚くものの、プレシア達の事を考えると、それも当然かと思い直す。

長らくテスタロッサ家にいた唯一の男、ランサー。それに対して好意を抱く事は勿論、プレシアの年齢やリニス達の素性を知れば、それも納得出来るからだ。

（彼女は高齢だと聞く……。愛する男の子を願うなら、早い方がいいからか）

（使い魔は、そもそも獣であったな。なら、子孫繁栄を願うのは当

然であろう）

そんな風に考える二人だったが、三人はそれだけではない。ランサーの女であるとの証が欲しいのだ。故に求める。まぁ、それに二人が気付く事はないのだが。

覚悟した男、ランサー。覚悟を捧げた男、アーチャー。覚悟入らずな男、小次郎。覚悟が遠い男、ザフィーラ。彼らが、それぞれの女性問題で話をする事が出来るようになるには、かなりの時間が必要だった……

明かりが消えた室内。自宅なら、既に寝ている時間。それでも、今日は違った。あの時と同じく夜更かしタイム。だが、前回の反省を踏まえ、あまり騒がないように。そうアリサが全員（特にアリシア）へ告げた。

そして今話しているのは、ユーノとクロノについて。なのは達海鳴組にしてみれば、二人があんなに親しげにしているのが意外だったのだ。それをフェイトやアリシアから説明してもらっていたのだが、どうも二人もあそこまでなっているとは知らなかったようで、なのは達に教えた後から、でも自分達が知る限りここまでじゃなかったと告げた。

唯一、二人との接点が少ないヴィータだけは、初めて知る事だらけの情報に頷いたり感心したりと忙しかったが。

「それにしても……」

話が一段落したのを見計らい、ヴィータはやや驚いたようにそう言った。それに全員の視線が向く。それを感じ取って、ヴィータは

少し呆れ気味に告げたのだ。
　男の事でよくそんなに話題が尽きないな、と。それに反応したのはフェイトとすずか。アリシアとなのはは軽く首を傾げる。はやてとアリサは何か納得したように頷いていた。

「そ、それは……」

「か、数少ない異性の友達だからだよ」

　口ごもるフェイトに対し、すずかが変わって告げた返答に、ヴィータは納得した素振りを見せる。が、その目はどこか微笑ましい光を宿していた。アリシアはそんな二人を見て、なのはへと話しかける。何で二人はどこか様子が可笑しいのと。
　それになのはは少し考え、こう言った。

――――きっと、照れてるんだよ。二人共、ユーノ君やクロノ君の事を好きだから。

　その言葉を聞いたはやてとアリサは心の中で全力で突っ込んだ。違う！　二人じゃなくて、ユーノだけだと。だが、それをなのはに言えるはずもなく、そのままなのはとアリシアは見当違いの事を話していく……と思われたのだが、そんななのはの発言にアリシアは驚き、こう言ったのだ。

――――そうなんだ。でも、ダメだよ。お兄ちゃんはわたしだけのお兄ちゃんだもん。

　その発言に、全員が沈黙した。そして、フェイトが恐る恐る尋ねる。どういう事、と。それにアリシアは自信満々に言い切った。先程の散歩で、クロノはサーヴァントは無理だが、兄（代わり）には

なれる。それで我慢してほしいと言ったのだ。
アリシアはその肝心の部分である、サーヴァントになって発言を飛ばし、クロノが兄になると断言したとしか聞こえないような話し方をした。

これが原因で、はやては翌朝、クロノにこう言った。色々と大変やな、と……

おまけ　二日目の魚釣りの様子一部

川のせせらぎが聞こえる中、幾多もの竿が川へ糸を垂らしている。賑やかな子供組。楽しげな恋人組と夫婦。そして、めいめいに水と戯れる者達もいる。そんな中、一部のみ漂わせる空気が違う者達がいた。

「おや、どうしたランサー。君はこういう釣りが得意で――――っと、五匹目フィィィッシュ！」

「……またかよ」

「やはりあれだな。腕が互角ならば、後は道具という事だ。見たまえ、このわた――――おおっと、六匹目フィィィシュっ！」

「好きにしろ。俺はもう気にしねぇ……」

項垂れるようなランサーと、どこから出したのか分からない程、

見事なアングラーと化したアーチャーがそこにはいた。
それを見ていたノエル達は、後に語る。あんなアーチャー、初めて見たと。
それは、プレシア達も同じ。あんな自信のなさそうなランサーは初めて見たと。

ちなみに、最初こそアーチャー優勢だったが、ランサーに対してフェイトが応援したため、ランサーがやる気を出した結果、釣果はランサーが一匹多くなり、アーチャーは敗北する。そんなアーチャーへランサーが言い放った一言からの流れは、全員の記憶に刻まれた。

――これからは、アングラーとでも名乗るんだな。あ、でもその前に”ヘタレ”がいるけどな！

無論、そのヘタレの意味は結果ではなく、アーチャーの女性に対する態度だと分かる者は分かった。だが、それを知らないなのはやフェイトなどは揃ってこう慰めたのだ。
アーチャーはヘタレなんかじゃないよ、と。それが、ある意味でのとどめとなるとは知らずに……

――――――

ヘタレアングラー。何か、色々と意味合い的にも合ってますね。当たりがきても、自分で気付けない。気付いても釣り上げる事は出来ない。

……ランサーは食べるために釣りしてますもんね。アーチャーは…

…どうなんだろ？

幕間9

ミッドチルダ西部　エルセア。そこにある一軒家。今日もそこから賑やかな声が聞こえてくる。時刻はまもなく朝の通勤通学タイム。だが、ここの勤め人二人はまだ落ち着いているもので……

「ギル、わりぃがそれ取ってくれ」

「これですか？　はい」

「こらスバル。ちゃんとお椀を持って食べなさい」

「は～い」

「お父さん、お母さん、まだ時間大丈夫？」

ナカジマ家の五人は、ややのんびり食事をしていた。ギルガメッシュは、二人が朝から勤務なので、子供状態だ。だがゲンヤは、ギルガメッシュが普段の状態でも呼び捨てで呼ぶ。ゲンヤは、クイントと違いギルガメッシュに恐れを抱かなかった。それどころか、クイントを助けてくれたと聞き、礼を述べたぐらいだったのだ。

更にゲンヤは、ギルガメッシュをいきなり呼び捨てで呼んだ時も、放った殺気に怯えもせず、気を悪くしたならすまねぇなと謝るだけだった。それがあったものだから、ギルガメッシュはゲンヤを気に入り、特別に呼び捨てにする事を許されたのだ。

「あ～、そろそろ行くか？」

「もうちょっと。後一杯だけ食べてから」

ギンガの問いかけにゲンヤが窺うように尋ねるが、それにそう答え、ご飯を山に盛るクイント。それを苦笑しながら見つめ、ゲンヤは立ち上がる。彼はもう仕事に行く体勢だ。それを横目で見て、クイントはやや拗ねたような表情を見せる。その目は、置いてくつもりと言っていた。

そんな妻の視線にゲンヤは笑みを浮かべつつ、待っててやるからと答え、玄関へ。その言葉に笑顔を返し、クイントも急ぎ目で食事を終えて立ち上がる。その歩き出す後ろをスバルとギンガがついていき、両親が揃って靴を履いたのを見て、笑顔で手を振った。

「「行ってらっしゃ～い」」

「「行ってきます」」

「気をつけて」

「おう。あ、小遣いはいつもんとこな」

「ギル、悪いけど片付けお願い」

ギルガメッシュが最後にそう告げると、ゲンヤは頷き、クイントはすまなさそうにそう言ってドアを閉めた。途端に静まり返る空間。だが、スバルとギンガは即座にギルガメッシュへ向き直ると、笑顔でこう言ってきたのだ。

今日は、何して遊ぶ、と。それにギルガメッシュは苦笑して、まずは後片付けをしようねと言った。それにも嫌な顔せず、二人は笑顔で頷くのだった……

後片付けを終えた三人は、とりあえず家の中で遊ぶ事にした。一応ギルガメッシュは鍵を持たされているが、二人はあまり他者と遊ぶ事が出来ないでいたからだ。

理由は、二人の体。戦闘機人と呼ばれるその体は、常人よりも強い力や身体能力を有している。そのため、興奮したり我を忘れたりすると、子供といえど凄まじい力を出してしまうのだ。

だからこそ、二人は外で遊んでいても、どこかで自分を抑えるためか、あまり楽しそうではない。友達はいない訳ではないが、何も考えずに遊べるとなると、現状ではギルガメッシュしかいないのだ。

「ギルお兄ちゃん、み～っけ」

「もう、ギルお兄さん、隠れるの下手～」

でも、それはあくまで人に対してだけの話。いくらギルガメッシュが二人の全力に耐えられるとしても、家やその他の物が耐えられる訳ではない。そのため、家でやる遊びも、必然的に興奮しにくいものが選ばれるので……

「違うよ。スバルやギンガが見つけるのが上手いんだよ」

「そうかな？」

「そうかも」

「そうだよ」

首を傾げるスバル。それに笑顔で答えるギンガ。それを肯定するギルガメッシュ。そして、そのやり取りがどこかおかしくて、スバルとギンガは笑い出す。その明るく楽しそうな声に、ギルガメッシュも笑みを浮かべる。

ギルガメッシュは知っている。彼女達が無意識に自分達の戦闘機人としての機能を使っている事を。だが、それをギルガメッシュは注意しない。何故なら、二人はそういう事をするのは、ギルガメッシュと遊んでいる時だけだからだ。

普段の生活や、他人と遊んだりする時には、これを二人は使わないようにしているのだろう。だから、ギルガメッシュは何も言わない。自分相手には、何も遠慮せずにしていて欲しいから。ありのままの彼女達を受け止める。そう考えているからだ。

「じゃ、次はかくれんぼじゃなくて、宝探しにしようか」

「「宝探し？」」

ギルガメッシュの提案に、二人は揃って不思議そうな声を上げる。その無邪気さに笑みを見せるギルガメッシュ。そして、その内容を説明していく。これからギルガメッシュが、家のどこかに宝を隠す。それを、二人はギルガメッシュが伝えるヒントを元に探し出すのだ。

そのための準備をすると言って、ギルガメッシュは何枚かの紙を用意し、何かを書き始めた。その間、二人は庭で待つように言われ、大人しく従った。ギル発案の宝探し。これが、二人にとって忘れられない宝探しになるとは、誰も予想出来なかった……

「いいよ～」

ギルガメッシュの声に二人は眺めていた蟻の行列から視線を外し、家の中へと戻った。そして、リビングへ戻った二人へギルガメッシュが伝えたのは、たった一言。

「まずは手を洗おう」

「？」

「ねぇ、ギルお兄さん。ヒントは？」

「くすっ、だから、手を洗おうって言ったんだよ？」

「「？」」

ギルガメッシュの言葉が意味するものを理解出来ず、それでも二人は言われた通り、手を洗うべく洗面台へ。そして、仲良く手を洗っていたのだが、その時、スバルが何かに気付いた。

それは、手を洗い終わり、タオルで手を拭いた時に目に入ったのだ。洗面台の下にある収納スペース。その戸に紙が張ってあるのを。それがギルガメッシュが準備していたものだとスバルは気付き、ギンガへ教えた。そこにはミッド文字（ギルガメッシュは自分が知らない事があるのを許せなかったので、覚えた）で、”下ばかりではなく、上も見ろ”と書いてあった。それに従い、二人は視線を上に向けると、上の棚に紙が張ってあり”次の導きは父の頭に”とあった。

「お父さんの……」

「頭……？」

ゲンヤは仕事に行ったから、紙を持っているはずはない。ならば、これはどういう事だろう。そう二人は考える。だが、中々答えが思い付かない。だが、降参はしたくなかった。ギルガメッシュなら、聞けば答えを教えてくれるかもしれない。でも、それに安易に頼っては、折角の遊びがつまらなくなる。

そう二人は考え、とりあえずゲンヤの部屋へ行ってみる事にした。父という言葉から連想するのは、そこぐらいしかなかったのだ。

やってきたゲンヤの部屋。だが、当然ながら何もおかしなものは見当たらない。スバルもギンガもあまり荒らさない程度に探そうと言い合い、部屋の探索を始める。クローゼット、机、本棚と色々見て行く。そんな時、スバルが何か思いついたように言った。

ゲンヤの頭の高さにあるものじゃないか。その言葉にギンガも頷き、何とかゲンヤの頭の高さぐらいのものはないか探し始める。しかし、それに該当する場所になったクローゼットの中や、本棚の上の方などには何もなかった。

「……どこだろう？」

「お父さんの頭……頭……」

やや疲れた顔のスバルと違い、ギンガは必死に考えていた。とりあえず、部屋の中で探していないもので、条件に当てはまるものを。

そして、視線が机や本棚から、ベッドへ向いた時、ギンガは「あっ……」と声を漏らした。それと同時に急いでベッドへ向かい、枕をどかした。そこには、紙があった。

「お姉ちゃん、凄〜い」

「お父さんの頭って、頭を置く場所じゃないかなってね」

スバルの賞賛に得意げな顔のギンガ。そこには”次の導きは母の下に”とあった。

「行くよ、スバル」

「うんっ！」

笑顔で頷くスバル。ギンガも俄然やる気を出し、クイントの部屋へと向かう。そして、先程と同じ考えでベッドの下を探す。すると、そこには予想通り紙があり”次の導きは風吹く場所”とあった。

それに二人の意見が割れた。スバルは庭だと主張。ギンガはベランダだと主張したのだ。そこでやや喧嘩じみた言い合いをするものの、結局先程の推理を当てたギンガの意見を採用し、ベランダへ向かう二人。だが……

「……ないよ～」

「おかしいなぁ……」

そこには、隠すものもなければ、紙を張っておく場所もそんなになかったのだ。口を尖らせ、不満を滲ませた感じで声を出すスバル。更に小さく「だから庭って言ったのに……」と呟いた。ギンガはそれにややムッとしながらも、どうしてだろうと考える。そんなギンガにスバルは庭に行こうと言って動き出す。それにギンガはついて行くも、ギルガメッシュは準備を終えてから自分達を呼んだのだから、庭にはないはずと告げた。

「そんなの行ってみないと分からないよ」

スバルのその答えにギンガはやや憮然とするも、共に庭へ出る。夏の日差しと風が二人を襲う。それに顔をしかめながら、二人は紙を探す。だが、見つからない。それにギンガがどこかやっぱりと言いたそうな表情を見せるものの、スバルは諦める事無く庭中を駆け回る。そして、あるものを見て気付いたのだ。庭でもベランダでもない”風吹く場所”に。

「お姉ちゃん、分かったよ！」

「どうしたの？」

「キッチンだよ！　換気扇が回ってるって事は、風が入ってるって事だよね？」

そう、換気扇だ。それを見た時、スバルは風という言葉の意味を理解したのだ。外では、いつも風が吹いているとは限らない。でも、換気扇なら常に風が吹いていると。

「……凄いじゃない！」

「えへへ～……」

スバルの発想に心から感心するギンガ。そして、二人は急いで家の中へ戻り、キッチンへ向かう。そして、換気扇を見て、紙を見つけた。紙には”次の導きは水と火が共存する中”とあった。

「水と火？」

「共存する中？」

どんどん難しくなってきたヒントに、二人は揃って頭を捻る。今、自分達がいるのはキッチン。そこには、火も水もある。だが、共存する中というのが分からないのだ。ちなみにギルガメッシュは、二人が宝へ辿り着くまで、リビングで笑顔を浮かべて待っている。

二人はとりあえず、水と火がある場所を調べる事にした。キッチンにいるので、まずここからと。コンロや流し等を見たり、途中で喉が渇いたのでジュースを飲んで、元気を取り戻した二人が次に向かったのはお風呂。

そう、水を温めてお湯にするお風呂は、水と火が共存する入れ物。そして、その中という事は……

「「あった！」」

空っぽの浴槽内に、紙が一枚置いてあった。そこには”最後の導きはリビングに”とあった。いきなりの単純さに驚く二人。これでは、最初のギルガメッシュのヒントと大差ないと思ったからだ。

だが、とりあえず二人は、どこか首を傾げながらリビングへ向かう。そこで待つギルガメッシュへ、紙を見せてどういう事と尋ねるために……

（あ、来た来た）

不思議そうな顔で歩いてくる二人を見て、ギルガメッシュは楽しそうな笑みを浮かべた。予想通りの反応だったからだ。そして、二人はギルガメッシュの前まで来ると、紙を見せて尋ねた。これはど

ういう事なの、と。それにギルガメッシュは嬉しそうに尋ねた。

「その前に……二人共、楽しかった？」

「え？　う、うん。楽しかったよ」

「うん。お姉ちゃんと少し言い合いもしたけど、楽しかった」

その二人の答えに満足したのか、ギルガメッシュは笑みを浮かべて頷くと、二人に告げた。宝は、二人の中にあるよ、と。それにキョトンとなる二人。それに、ギルガメッシュはやや申し訳なさそうに告げた。

実は、自分の持っている宝は、二人にあげるには危ない物ばかりだった事を思い出し、何とか別のものをと考えた結果、思い出なんて方法を取らざるを得ないとなったのだと。

それに二人は呆然となった。それを見て、ギルガメッシュが少し慌てた。もし怒ったなら、これから出かけてアイスでも買ってあげるからと。

だが、そんなギルガメッシュに二人は揃って首を横に振った。怒ってなんかないと。確かに目に見える物じゃなかったけど、宝物は貰ったからと、そうギルガメッシュに告げたのだ。

そして、二人は互いを見合わせ笑い合う。それを見て、ギルガメッシュは安堵の息を吐いた。しかし、それはまだ若干早かったのだ。何故ならば――――。

「「で、いくつアイス買っていいの？」」

と、二人が満面の笑みで聞いてきたからだ。それにギルガメッシュは呆れながらも、一人二段重ねまでと告げて歩き出す。それに手

を合わせて喜び合う二人。そして、三人は仲良く手を繋いでアイスクリーム屋まで歩いていく。

真夏の日差しを浴びながら、楽しげに話すスバル。やや暑さに嫌な顔をするものの、スバルに言葉を返すギルガメッシュ。そして、そんなギルガメッシュにだらしないよと言って、小さく笑うギンガ。

「ね、ね、お姉ちゃんは何と何？」

「そうね～……チョコミントとバニラかな？」

「あ～、いいないいな。ね、少しちょうだいね」

「いいけど、スバルはどうするの？」

「えへ～……ストロベリーとチョコクッキー！」

「ギルお兄さんは？」

「僕は別にないけ「じゃ、オレンジとミルクね！」……はいはい」

ギルガメッシュの言葉を聞き、スバルが自分の食べたいものをチョイスする。それに苦笑しながら頷くギルガメッシュ。同じようにギンガも苦笑している。一人輝くような笑顔で歩くスバル。

照り付ける日差しに負けないような笑顔。それにギンガも笑顔を返し、ギルガメッシュはそんな二人に微笑みを向ける。

この後、三人はそれぞれのアイスを食べあい、和気藹々と過ごす。

これは、そんな三人の夏の日の思い出……

ーーー

対話編　前編

あの旅行から三日が経った。クロノ達は再びミッドに帰り、なのは達も残りの夏休みを満喫していた。照り付ける日差しは、まだまだ夏の暑さを演出している。管制人格起動も目前に迫り、はやて達もその起動を今か今かと待っていた。

そんな中で、アーチャーは洗濯物を干しながら、ある機会を窺っていた。近くでは、はやてが麦藁帽子を被ってみーちゃんと戯れている。シャマルは翠屋、シグナムは剣道教室、ヴィータは公園でゲートボール、ザフィーラは家の掃除中だ。

やがて、はやてがみーちゃんとの触れ合いに満足したような顔をする。それを見て、アーチャーは静かにはやてに近寄った。

「すまないがはやて、私にも少し抱かせてもらえないだろうか？」

「ん？　どないした」

「いや、この前ファリン達に猫の扱いが不慣れだと言われたのでな。少し経験を積んでおこうとね」

「あ～、確かにファリンさんは上手やからな。ええよ、ほい」

はやてからみーちゃんを受け取り、ややぎこちない感じで喉などを撫でるアーチャー。それにはやては小さく笑みを浮かべるが、そろそろ課題を片付けなければと思い、アーチャーとみーちゃんへ一言告げて、家の中へ戻っていく。それを聞きつけ、ザフィーラが絶妙なタイミングで現れてはやてを車椅子ごと持ち上げる。

それを見送り、二人が家の中へ入っていったのを確認し、アーチャーはみーちゃんへ小さく告げた。

――ギル・グレアムと闇の書に関して話したい事がある。

それを聞いた瞬間、みーちゃんが止まった。その漂う雰囲気はまさに青天の霹靂。そこにアーチャーは更に逃げ道を塞ぐべく、言い切った。

以前、この家に使い魔がいた事は知っているだろう。彼女も、君が同じ存在だと証言した。もし、闇の書に対して恨みなどを晴らしたいのなら、私には闇の書に対する切り札がある。

その最後の切り札という部分にみーちゃんは明らかに反応した。それを見て、アーチャーは最後の止めを刺す。リンディから聞いた性格などから判断した、今日のみーちゃんの名前を。

「……さて、連絡役を頼まれてくれるかな。リーゼアリア、でいいかな？」

「……分かったわ」

その返ってきた答えは、異様な程疲れた声だった……

あの旅行が終わった後、なのは達で変化が起こった。まずはアリサ。どこか小次郎を意識したため、ジョギングの速度が落ちた。そのため、必然的に終了が遅くなり、アリサは食事の時間が少なくなった。

二学期が始まる前に、何とかしようと思うアリサだったが、小次郎を少しでも自分の傍に置きたい気持ち故、中々それが出来ないでいた。

すずかも、また変わった。頻繁にユーノへメールを送り、話をしようとし始めたのだ。接点を増やそう。そういう意図が丸分かりだったのだが、それを口にするような大人はいない。

ユーノは気付いているのかもしれないが、それが異性としてのものと思っていないのか、平然としていた。

はやては特にないが、エイミィと更に仲が良くなったようで、こまめに連絡を取り合っている。特に、クロノをからかう事に関してはうまが合うのか、両者共に結構きつい事を提案し合って、クロノを苦しめていた。

フェイトは表立って変化なし。ただ、時々ユーノを見つめ、頬を赤くする事があるぐらいだ。それよりもアリシアである。彼女は、クロノのサーヴァント発言から行動がエスカレート（ま、可愛いものではある）し、クロノが本気で周囲からロリコン疑惑を抱かれない程、積極的に会いに行っていた。

休暇の後半にエイミィと二人でクロノと遊び、その天然さと無邪気さで周囲を癒していた。クロノも、本当に妹が出来たように思い、表面上は文句を言いながらも、アリシアをエイミィと一緒になって可愛がっていた。

そして、なのは。彼女もフェイトと同じ。だが、フェイトは時々に対してなのははは極稀に、という差はあったが。後、ユーノとは家族だからなのか、フェレット状態でなら一緒に寝てもいいと発言し、ユーノを大いに悩ます事となる。

そう、それはフェレット状態なら男と認識されていないからなのか、それともユーノだからいいのか分からなかったからだ。

そんな変化もありつつ、今日も少女達は元気です。ちなみに、ユーノは無限書庫でお手伝いとして司書をしている。週五日の十時間

拘束で。ユーノ自身は気にしていないから良かったが、もしこれを強要し、ユーノが愚痴の一つでも零していたら……きっと、管理局ＶＳ御神の剣士が起きていただろう。

変わり出す時間

「暑いね～……」

「暑いな～……」

八神家　リビング。そこに、ダル～ンと擬音が聞こえそうなくらいの状態ななのはとはやてがいた。見れば、アリサとすずかはそんな二人に閉口しているものの、どこか羨ましそうにしている。フェイトは冷たい麦茶の入ったグラスを持って、表情を緩めていた。アリシアはフローリングの冷たい場所を探し、ごろごろしていた。

どうしてこうなっているのか。それは、ザフィーラが行なったエアコンのフィルター掃除のためである。本当ははやて達が図書館で勉強会を行なっている間に終わるはずだったのだが、図書館が臨時閉館しており、六人は一番近い八神家へと来たのだが……

「あ～、いつになったらエアコンつけられるのよ？」

「ザフィーラさんが言うには、後十分ぐらいだって」

うだるような暑さに、アリサの声にも苛立ちが見える。すずかはそれに内心同意しながら、そう答える。はやての部屋に行けば、エ

アコンはつけられる。だが、それが出来ない理由がある。そう、六人で勉強するには、少々手狭なのだ。

故に、こうしてリビングのテーブルで勉強をしているのだが、結果はご覧の有様である。ちなみに、勉強会の目的はフェイトとアリシアの日本語力向上だった。

「フェイト～、ちゃんと勉強しよ～」

「アリシアが言っても説得力ないよ～……」

姉妹揃って手近な冷たさに逃げるテスタロッサ姉妹。その言っている内容を聞き、なのはが呟く。

「こんな状態じゃ、勉強どころじゃないよね～」

「そやな～、熱でたれてしまうわ～」

「あ～もう、あんた達！　語尾を延ばすの、やめなさいっ！　こっちまでやる気が萎えるわ！」

そう、アリサとすずか以外の四人は悉く語尾を延ばしていた。それがまたアリサの苛立つ神経を刺激していた。

（だからアタシは、なのはの家に行こうって提案したのに！）

この状況を知ったアリサは、全員に言ったのだ。ならなのはの家へ行ってやりましょうと。だが、それになのはとアリシアが反対したのだ。高町家も今は空調を切っているから、あまり大差ない。今日は全員出払っていて、家は完全サウナ状態だ。後十数分で乾くなら、それまで我慢すればいいと。

それにアリシアも続いて言った。それに、高町家では終わった後にみんなで遊べるゲームが少ないと。

こうして六人は、八神家での苦行とも言える状態での勉強会を行なう事となった。始めこそなのはやはやても頑張り、フェイトも耐えていたのだっが、アリシアが早々にダウン。冷たい麦茶を飲んで頑張っていたなのはとはやても、そんなアリシアに影響され、フェイトでさえ二人がやる気を失ったのに感化され、こうしてダメっ子フェイトになっていた。

「んな事言ってもな～」

「こう暑くちゃね～……」

「……フェイト、あんただけは違うと信じてるわ」

だめだ。もうアタシの知ってるなのはとはやてはいない。そう思ったアリサは、残る希望を込めてフェイトへ視線を向ける。それにやや恐怖を感じるフェイトだったが、それが功を奏したのだろう。フェイトは何度も頷いて、手元の問題集とシャープペンを手にした。それを見て大きく頷くアリサと、それに苦笑いのすずか。一方、アリシアはついに転がりすぎて、リビングの端まで辿り着いていた。

「もう冷たいとこないよ～」

「あんたも戻ってきなさい！」

「あ、アリサちゃん、少し落ち着こう？　はい、お茶」

怒り爆発と言った感じのアリサに、すずかは慌てるように麦茶を

渡す。それを受け取り、一気に飲み干すアリサ。喉元を過ぎる冷たさが火照った体に心地良い。そう思ってアリサは息を吐く。

アリシアはアリサの怒った声にやや怯えながらもテーブルへ戻ってきた。まぁ、ごろごろしながらではないので、きっと反省したのだろうとなのは達は思った。

だが、それが間違っていたと、この直後誰もが知る。

「アリサ、わたしにもお茶頂戴」

「あんたはぁぁぁぁ！！」

申し訳なさそうに告げた内容に、アリサは激怒。すずかさえ呆気に取られ、なのは達は呆然。そして、アリサの大声がキッカケとでも言うように、ザフィーラが耳を押さえながらフィルターを持ってリビングに現れるのだった……

なのは達が八神家で騒いでいる頃、アーチャーは一人町外れの高台へ来ていた。用件は一つ。ここで会う約束をしているからだ。そう、リーゼアリアと。

あの後、彼女は観念したかのようにアーチャーへ告げた。どうもグレアム自身も切り札とやらに興味があったようで、おそらく念話の類なのだろうか、即座に答えが返ってきた。そして、後で町外れに一人で来いと言われ、こうして来たのだ。

（さて、本当に話をするつもりがあればいいのだが……むっ）

「待たせたかしら」

「いや、今来たところだ。しかし……」

「何？」

アーチャーの視線に怪訝そうな表情を浮かべるアリア。それにアーチャーが軽く笑みを見せ、こう告げた。

「変わるものなのだなとね。アルフで知ってはいるが、君もかなりの変化だ」

「……アルフ、ね」

「ああ、そういえばもう知り合いだったのだな。安心してくれ。君達の事を話すのは、これからの交渉次第だ」

そのアーチャーの軽い口調に、アリアはやや不信感を抱きつつも、転送魔法の準備に入る。それを見守るアーチャー。もし、仮にこれが罠の類だとしても、アーチャーには構わなかった。そう、今回必要だったのは、みーちゃんがリーゼ姉妹であり、裏にいるのがグレアムと実証する事。

そう、既にアーチャーは目的を終えていた。リンディには、もう今日の事は告げてある。プレシアへ連絡し、自分との連絡が取れない場合、彼女はまずグレアムへ疑いの目を向ける。残りの交渉は、彼個人としての行動なのだ。

そんな事を知らないアリアだったが、彼女はアーチャーの事をよく知っている。優しい心をしているが、いざという時には非情になれる男。そして、何よりはやての笑顔を守るために、その力を尽くす。

そんな事を思い出し、アリアは内心呟く。それだけではないと。

（私のた、大切な場所をはっきり見たんだから！　絶対責任を……じゃなくて、お返ししてやるんだからっ！）

あの日、アーチャーによってお嫁に行けない事をされた事を、アリアは一度たりとも忘れた事はなかった。故に、今回の事も彼女がグレアムに意見したのだ。切り札が当てになるかならないかはともかく、ここまで知られた以上、一度話しておくべきだと。

いつもは自分の意見を参考程度に留めるアリアが、珍しく強く言ってきた事にグレアムも驚いたものの、確かにもう後戻り出来ないところまで来たのかもしれないと、会う事にしたのだ。

「さあ、行くわよ」

「ああ。頼む」

次の瞬間、アーチャー達の姿が消えた。こうして彼は、初めて時空管理局へ訪れる事となる……

同時刻　ミッドチルダ　ハラオウン家。そこの自室でリンディは大きく息を吐いていた。アーチャーから聞いた作戦。それが、今日行なわれているからだ。

アーチャーは、おそらくグレアムと会って闇の書に関する話をするだろう。リンディは、何故グレアムが闇の書を監視だけに留めたかの理由に、おぼろげながら気付いていた。

（……あの時、アルカンシェルで破壊した闇の書が今尚存在する。

つまり、闇の書は再生機能を有しているという事）

それをグレアムは知ったのだろう。だからこそ、破壊せずに監視するだけに留めたに違いない。ならば、その目的は何なのか。おそらく闇の書の完全な破壊。もしくは、その封印だろう。

その方法を見つけるまでの間、グレアムは闇の書がどこにあるかを把握する必要があった。そして、どうにかして見つけ出したのだろう。闇の書の在り処を。しかも、管理外というある意味で管理局に発見されない場所で。

「……はやてさんの後見人をしたのは、そのため……ね」

アーチャーがグレアムの名を聞いた時、やはりと言って頷いたのだ。ギル・グレアムは、はやての後見人をしている男性の名と同じだと。それを聞いて、リンディはグレアムの執念深さを知った。

闇の書を見つけ出し、その在り処を移させないために、少女を援助し、確保したのだ。きっと、はやてが闇の書の主であると気付いたのだろう。

（貴方、グレアム提督にとって貴方は余程大きな存在だったのね。自分で殺さねばならなかった……あの時の苦しみや哀しみを未だに……）

そう考え、リンディは息を吐いた。分からないでもない。だが、今の自分はこう思うのだ。クライドは、復讐など望んでいないと。それよりも、自分が愛した者達が、笑顔で暮らしてくれる事を願っているのではないか、と。

だからこそ、リンディはアーチャーにある事を託した。それは――。

（アーチャーさん、グレアム提督達を助けてあげて。憎しみや哀しみを断ち切って！）

リンディ自身では、きっと伝えられない……伝えきれない想い。それをアーチャーなら伝えられると思ったのだ。どこかグレアムと同じ目をしているアーチャーならば。

そうリンディは思った。それを告げた時、アーチャーは何故かあの皮肉な笑みを浮かべて呟いた。

――貴方も、中々甘いところがあるのだな。

その呟きをリンディは聞いたが、敢えて何も言わなかった。そんなリンディの対応に、アーチャーはどこか懐かしむように笑うと、確かに頷いたのだ。それに、リンディも心からの礼を述べたのだった。

（あの笑顔……信じてますからね、アーチャーさん……）

思い出すのは、皮肉屋ながらも優しい男の笑顔。幼い少女達の幸せのため、危険を顧みず動く赤い弓兵。その頼もしさと心強さを噛み締め、リンディは強く思ったのだ。

動き出した闇の書に因縁を持つ者達。リンディの願いを受け、グレアム達と対峙するアーチャー。

そして、それを知らず、平和に過ごすなのは達。ゆっくりと少女達の知らぬところで、事態は動いていく……

―――――――

対話編　中編

時空管理局本局にあるグレアムの執務室。そこにアーチャーは案内された。ドアを開けた先には、アリアに良く似た女性が一人と、働き盛りよりは、初老と呼んだ方がいいような男性がいた。

アーチャーは目の前の男性が、ギル・グレアムだろうと認識した。そして、その傍らにいるのが、アリアの妹にあたるロッテなのだろうとも。

「初めてまして、というべきか。私は、アーチャー。”ご存知”の通り、八神家の一員だ」

「確かにこうして会うのは初めてだね。私は、ギル・グレアム。”知って”の通り、ここで働く局員だ」

互いに相手の事を調べているのは承知済み。だから、こう言い合ったのだろう。そんな二人の雰囲気にアリアもロッテもやや複雑な表情。立場としては、二人は完全にグレアム側。しかし、アリアが知った事実によれば、アーチャーはアルフ達が来た日から、二人が監視しているのを知った上で、優しくしてくれていたのだ。

無論、それがアーチャーの狙いや策略の可能性はある。だがそれでも、二人にとってみれば、監視対象であったはやてとの触れ合いや、アーチャーのくれる食事は、あの時間での僅かな楽しみでもあった。

しかし、二人は使い魔であり、グレアムの娘でもある。故に、最終的に下す判断は言うまでもなく……

（お父様の計画を邪魔するのなら……）

（あの子を泣かせる事になっても……）

アーチャーの敵になる。彼女達は知らない。アーチャーの本当の実力を。あの日、一度手合わせした時でさえ、彼は全力ではなかった事を。

一方、アーチャーはグレアムの目を見て、リンディがどうして自分にあんな頼みをしたのか理解した。似ているのだ。多くを救うために、少数を切り捨てる覚悟をした自分と。にも関わらず、その切り捨てた存在をいつまでも気にしているであろう目が。

（彼女の見る目は、確かという事か。ならば、おそらく私もそう思われているな……）

小さく笑みを見せ、アーチャーは促されるままソファーに座る。そして、グレアムが座ったのを見て、早速本題を切り出した。そう、腹の探り合いなど必要ない。自分が知りたいのは、闇の書を監視する理由は何かだけだ、と。それにグレアムは一言、次元世界のためだと告げた。

闇の書には、転生機能と呼ばれるものがあり、どれだけ破壊しても封印しても、主が死ねば新たな主を求めて転生する。それを防ぐために、主ごと封印処理をしようとしているのだ。そう、グレアムは全てを語った。

アーチャーはその計画の全貌を聞いても驚かなかった。それは、内容を察していたからではない。グレアムが座った時から、アリアとロッテがアーチャーの前後を取っていたからだ。つまり、妙な事をすればいつでも襲えるような位置に。

そこからアーチャーは、その内容が普通なら自分が激怒したり、またはグレアムに対して何かをしたくなるようなものだろうと踏ん

だからだ。そして、もう一つ。それは、アーチャーが怒りを感じないものだったのだ。

「……成程。だが、一つ聞きたい」

「何かな」

「それで、本当に闇の書は、二度と転生出来ないように出来るのか」

その反論に三人の息が詰まる。アーチャーは、先程までとは一変して鋭い視線となり、グレアムを見つめていた。それからは、下手な誤魔化しなどを許さないという意志が伝わってくる。その雰囲気にアリアやロッテですら、何も言えず黙ってしまう。

グレアムはそれにやや飲まれかけたようだったが、何とか立ち直り、搾り出すように答えた。絶対ではない、と。だが、強力な氷結魔法で闇の書ごと主を氷漬けにし、辺境の無人世界へ極秘裏に封じ込める。そうすれば、余程の事がない限り、復活は出来ないだろうと続けた。

しかし、その答えを聞いたアーチャーに浮かんだのは、落胆。それに怒りを露にするロッテやアリア。だが、グレアムだけは怒りだけではない表情を浮かべている。それに気付き、アリアは疑問を感じた。何故グレアムは怒り以外の感情を抱いたのだろうと。

長年迷い苦しみ、辿り着いた結論。それを何も知りはしない相手が勝手に解釈し、落胆した。そう思ったのは、アリアだけでなくロッテも同じだった。だからこそ、アリアの分も含めた言葉をアーチャーにぶつけた。

「アンタに何が分かる！　お父様がどれだけ悩んで苦しんだか知らないくせにっ！」

「分からん訳ではないが、そうなのだろうな。だからこそ思ったのだ。それだけ悩み苦しみ、出した方法がそれか、とな」

「何だとっ！」

アーチャーの答えに更に怒りを強めるロッテ。だが、その言葉にアーチャーはどこか冷徹な眼差しを向け、こう告げた。

犠牲を出しておきながら、それが解決法ではなく、ただの問題の先送りでは犠牲者達が浮かばれない。それも、余程の事がなければと言ったが、世の中に絶対はない。そして、その余程が意外とあっさり起きるのが世の中だ。君達の立てた予想など、簡単に崩れるだろうと。

その反論にグレアムは言い返す。それ以外の方法などない。闇の書の犠牲者を出さないためには、永久凍結しか道はないのだ。そう必死の形相で告げるグレアムを、アーチャーは物悲しげに見つめ、静かに言った。

「それでは、その後はどうする」

「何？」

「封印するのは、無人世界と言ったな。だが、そこに行く術はあるのだし、いつまでもそこが無人世界とは限らない。あるいは、誰かが訪れる可能性もあれば、偶然立ち寄ってしまう事も有り得るだろう。だからと言ってそこを立ち入り禁止になどすれば、そこに何かあると言っているようなものだ。それに、仮に完全に立ち入れなくすれば監視や観察も無理。さて、どうやってその封印を確実に見守り、また継続するのかね？」

その考えれば当たり前の反論に、グレアム達は返す言葉がなかった。封印するまではいい。だが、それを継続或いは不測の事態への備え。それをアーチャーは指摘したのだ。闇の書の力を知れば、それを悪用しようとする者も現れる。それを防ぐために、無人世界をと考えたのだが、そこが永遠に無人かなど分からない。

グレアムの方で後継者を決めても無理だ。親が立派な人格者でも、子供がそうとは限らないように、その後継者がいつまでも正しい意志の持ち主で続いていく保障はない。それに、その存在を知ってしまう事で野心を抱く可能性がある。何が災いになるか分からないのだ。

その事をアーチャーは暗に告げたのだ。する事はいい。だが、した後の事を考えろ。そう三人は言われた気がしたのだ。

過去を断ち切る剣

「……どうやら、私の言った意味を理解したようだな」

言葉を失い崩れ落ちるグレアムを見て、アーチャーはそう呟いた。だが、その表情は暗い。そう、彼にとって、今のグレアムはかつての自分に重なって見えた。分かっている事を敢えて考えず、ただ自分の恨みだけを晴らそうと考えたあの頃と。

例えそれを成しても、自分が失ったものは戻らない。そんな事は分かりきっていた。それでも、”自分”で自分を殺す事を考え続けたあの頃。そして、崩れ落ちるグレアムの姿は、”自分”が自分で

なくなっていたと気付いた時の己と同じだと、アーチャーは感じていた。

（恨みは、人の目だけでなく、心も曇らせる。これで、少しは昔の自分を思い出してくれればいいが……）

そんな事を思い、アーチャーは自分を内心で嘲笑う。どの口が言うのか、と。自分でさえ、あの『衛宮士郎』に教えられたくせに、と。そう思い、アーチャーはグレアムへ告げた。自分には、ロストロギアに対する切り札がある。もしもの事はそれを使って無力化出来ると。

その言葉にグレアムが顔を上げた。その眼差しには期待と疑念が渦巻いている。そんなグレアムの目を見て、アーチャーは当然だろうと思ってルールブレイカーを投影する。その歪な短剣に三人が注目する。

「すまないが、何か魔力で出来た物はないか。もしくは、魔力で動くものでもいいのだが……。そうだな、使えなくなってもいい物が好ましい」

その言葉に、グレアムが何かを念話で伝えたのかアリアが部屋を出て行く。そして、静まり返る室内。アーチャーはその空気に含まれるものを感じ、内心仕方ないと思いつつも、はっきり告げた。

何故闇の書を無力化しないかと言えば、シグナム達を守るためだと。はやてにとっては家族であり、守るべき存在。それを助けるべく、何とか一番理想的な方法を模索している。だが、万が一の際は、自分一人が汚名を被り、闇の書を無力化するとも考えていると。

その答えにグレアムは打ちのめされた。自分が苦渋の末に出した方法。それと同じく犠牲を出す事を厭わない解決策を持ちながら、

最後の最後まで抗おうとするアーチャーに。そして、自分と違い、はやてや周囲の者達に隠す事無く、それにより嫌われようとも、もしもの時には自分でけりをつけると覚悟している事に。

「……一つ聞かせて欲しい」

「何かな？」

「君は、何が目的だ」

「目的、か……そうだな……」

グレアムの問いかけに、アーチャーは遠い目をした。自分の目的など、とうに失った。今の自分にあるのは、目的などではなく、生きる意味とでも言えばいいのだろうか。そんな風に思ったからだ。だからだろう。出てきた言葉は、一つだった。だからこそ、雰囲気が変わってしまったのも当然と言えた。

「今度こそ”正義の味方”になる、かな？」

その答えに二人は声を失い、そして笑った。それは馬鹿にするでも、羨ましいというものでもない。ただ、何故かその答えがアーチャーらしいと思えたからだ。最後の最後まで最高を追い求め、いざとなれば自分を犠牲にしてでも最善を尽くす。それが、その答えである”正義の味方”に見事なまでに当てはまっていたのだ。

そんな風に笑う二人にアーチャーは無表情だが、やがて小さく笑みを浮かべた。九を救うために一を切り捨てる。だが、それはあくまでも仕方なくだ。もし、全てを救えるのならそれを選ぶ。それがどれだけ辛く苦しい道でも、最後まで諦めずに足掻く。そう、あの

時誓ったからこそ、今の彼はある。

そんな事を思い出していると、アリアが戻ってきた。その手には、ストレージデバイスが握られている。それを手渡され、アーチャーは何か魔法を展開してみた。プロテクションと呼ばれる防御魔法。それをデバイスが展開し、グレアム達に見せた後、デバイスヘルールブレイカーを突き立てた。その瞬間――――。

「なっ?!」

「魔法が……消えた?」

「デバイスを……無力化したのか」

展開されていた魔法が消え、アーチャーは手にしていたデバイスをアリアへ渡す。それを使い、アリアが色々と試してみるも、何も起きなかった。アーチャーはそれを確認する三人へ告げた。これで、信用出来るだろう、と。更に、アーチャーはこう続けた。ロストロギアにも通用するのは証明済みだ。ジュエルシード。残った一つはこれで封印したのだと。

自分が危惧するロストロギアクラスには通用しないとの思いに、アーチャーは先回りして答えた。それが嘘か本当かはグレアムには分からないが、信じる価値はあると思った。

だからグレアムはそれに頷き、アーチャーへ心から告げた。闇の書の悲劇を繰り返す事のないように頼む、と。それにアーチャーは頷いて、こう答えた。

「それもそうなのだが、貴方に伝えておく事が二つある」

「何かね?」

「一つは、今後妙な真似はしない事。もしするのなら、容赦はしない。私達の異常さは既にアリア達から聞いているだろう？」

その言葉にグレアムは黙る。全てではないが、アーチャーの恐ろしさやランサーの力は聞いているのだ。それを見て、アーチャーは意を決したように告げる。

「それと……過去に縛られて生きるな」

「「「っ？！」」」

「これはクロノ・ハラオウンの言葉だ。彼は、自分の過去を乗り越え、恨みや憎しみを飲み込んで歩き出した。貴方達も、ゆっくりでいい。忘れろとは言わんし、そんな資格もない。だが、そうして生きてくれると嬉しい」

アーチャーは最後に笑みを見せ、そう締め括ったのだ。その言葉に、グレアム達も感じ入るものがあったのだろう。幼い頃に父を亡くし、闇の書に対する想いも強いであろうクロノ。それがそう言ったという事実は、三人にとっては大きい事だった。

子供だと思っていたクロノが、知らず大人へ成長している事を感じ、グレアムは嬉しく思うのと同時に、誇らしくも思えた。

（クライド、やはりお前の子だよ。また私を助けてくれるとは、な）

「……君は何も言わないのか」

しかし、アーチャーはまた別だろうとグレアムは思った。彼は家族と思う少女を犠牲にされるところだったのだ。そう考えたからこ

そ、グレアムはそう聞かずにはいられなかった。その言葉に、アーチャーは先程までの笑みを消し、鋭く言い切った。
言いたい事はない訳ではない。だが、それを言わない訳もある。自分が感情を抑えているのは、一人の女性の言葉があればこそだ、と。
――リンディ・ハラオウンに感謝するのだな。
アーチャーはそう言った。その言葉自体は三人へ言わなかったが、おそらくクロノのように、過去に関わるものだと三人は理解した。そうして感慨に耽るグレアムへ、アーチャーはある提案をした。
それは、グレアム達をはやて達に会わせる事。それも、グレアムのこれまでの真意は隠しつつ、魔法世界の人間だと教える内容。それを聞き、グレアムは首を振って断った。自分は、はやてを犠牲にする事を厭わなかったのだからと。
それをアーチャーは否定しなかったが、こう言ったのだ。グレアムの決断は、自分が同じ立場でも考えるだろう。そして、他に有効な手立てが見つからなかったのだろうから、理解は出来ると。
そして、もしはやてに悪いと思うのなら、余計に会ってやって欲しいと告げた。はやては一度でいいから、直接会ってお礼が言いたいと常々口にしていたのだ。
「足長おじさんの、グレアムおじさんとして、な」
「……考えさせてくれないか」
「分かった」
「アリア、彼を……アーチャー君を送ってあげなさい」

「はい、お父様」

グレアムの声に返事を返し、アリアはアーチャーを伴って部屋を出ていく。それを見送って、ロッテはグレアムへ視線を向けた。グレアムはどこかこれまでとは違い、憑き物が落ちた印象が感じられた。

そして、表情にも心なしか明るさが戻ったように見受けられた。ロッテはそれに気付いたが、何も言わず、ただ黙ってグレアムを見つめた。長年に渡る苦悩の日々。それが今日ある意味で報われた。犠牲を最小限にしつつ、闇の書を完全に無力化出来る手段が見つかったのだ。

（ああ、これで安心した……）

ロッテはそう心から思った。グレアムが手を汚す必要はなくなった。それは純粋に嬉しい。そこまで考えて、ロッテははたと思い出す。もし、闇の書を無力化する以外の道がなければ、アーチャーはその手を下す。それは、彼が守ろうとしている少女の家族を、笑顔を失う行為だと。

それを決意しているとはいえ、このままでいいはずがない。グレアムを苦しみから解放したアーチャー。彼だけに任せるのは、この恩に応える事にはならない。

そう思ったロッテは、グレアムに無限書庫の調査を提案する。もしかしたら、何かまだ手があるかもしれないと。そう力説するロッテにグレアムはやや驚いてはいたが、その言動の裏にある想いに気付き、微笑み混じりに許可を出す。

それを聞いて、ロッテは早速とばかりに無限書庫へ。その遠ざかる足音を聞き、グレアムは思う。何故、自分は諦めてしまったのだろうかと。最後まで諦めずに抗う。そんな基本の気持ちを、何処で

置いて来たのだろうか。

（……クライドを……失った時か）

親友とも呼べるクライド。彼を殺したのは、自分なのだ。闇の書の暴走によるものとはいえ、引き金を引いたのは自分。それを忘れた日はない。だが、アーチャーから伝えられたクロノの言葉が、そんな自分に教えてくれた。

――過去に縛られないで生きて欲しい。

きっと、それはクライドが伝えられるのなら、自分に告げただろう言葉。恨みや憎しみは好まない性格のクライドなら、必ずそう言ってきたはず。だからグレアムは気付けたのだ。いつの間にか、クライドを言い訳にし、自分のために闇の書を追い駆けていた事に。その非情な決断もどこかで平和のためと言い聞かせていた事に。

だが、それは最後の最後でなければいけなかったのだ。犠牲を出さずに済む方法を求め続け、その果てがその決断でなければならないと。

「あの男だけでなく、クロノにも教えられる日が来るとはな……」

そう呟くグレアムの表情は、まるで孫の成長を感じた祖父のような微笑みが浮かんでいた……

エアコンから心地良い風が流れ、室内は平穏を取り戻していた。アリシアもアリサとすずかの両先生に指導され、少しずつではあるが、勉強をしている。フェイトははやてやなのはと一緒になって課

題をやっていたりする。
アリサもすずかも課題を終わらせているので、アリシアに全力を注げるため、アリシアは少し嫌そうながらも、頑張っていた。アリサは厳しくし、すずかが優しく支える。まさに飴と鞭。アリシアも出来ないと放り出さずに、今も続けているのは、ちゃんと頑張れば頑張っただけ二人に誉めてもらえるからだ。

「これであってるかな？」

「ん？　……おお、正解や」

「フェイトちゃん、もう大分覚えたね」

はやてに誉められ、なのはに感心され、フェイトはやや照れながら笑う。覚えたのは少しだけど、頑張らないといけないから。そう答えて、フェイトはアリシアへ視線を向けた。
アリシアは負けん気が強い。今もフェイトが出来る事は自分も出来るようにすると頑張っている。そんなアリシアに負けないように、フェイトは勉強面では絶対手を抜けないのだ。抜けば、アリシアのサボり癖を誘発してしまう。そのため、フェイトは一所懸命に日本語を勉強していた。

「それでも大したもんや」

「そうだよ。私だって、本をたくさ～ん読んで、たくさ～ん勉強して中の中くらいだよ？」

なのはは自分の一学期の通知表を思い出してそう言った。元々機械関係に強かったせいか、理数は得意だったなのは。しかし、文系はそれ程でもなく、一年生の頃はあまりよろしくなかったのだ。

それが大きく向上するようになったのは、はやてとの出会い以降。すずかとはやての話す本の話。それにアリサもついていける中、自分だけがあまり話しに参加出来ず、悔しい思いをしたのだ。そこで、すずかやはやてが読んでる本を借り、なのはも頑張って読んでみたのだ。

始めは難しいと思ったものも、読んでる内に楽しさや面白さを理解し、特に猫が出てくる推理小説は、色々な意味でなのはのお気に入りとなった。

「なのはちゃん、良く読むのミステリー系やしな」

「た、たまにはファンタジーも読むよ……」

「なのは、本好きなの？」

普段のイメージからは想像も出来ないと言わんばかりのフェイトの言葉。それになのはは少し落ち込むも、頷いて応えた。

そう、なのはは本は好きだ。ただ、ジャンルが偏っているだけで。マンガは本じゃないとアリサに言われて以来、なのははマンガと本を別に考えるようにした。少なくとも、アリサの前では。

「うん。マンガが多いけど、推理小説とか読むよ」

「三毛猫とか時刻表の奴とかな」

「……面白いの？」

はやての告げた三毛猫や時刻表から連想しようとするフェイトだったが、猫や時刻表がどう推理に絡むのか分からず、そう不思議そうに尋ねた。それになのはは、良く聞いてくれましたと言わんばか

りに目を輝かせ、フェイトにその面白さを語り出す。
そんななのはを見て、はやてはフェイトへ耳打ち一つ。こうなると、結構長いから、覚悟した方がいい。その言葉をフェイトが実感し、なのはにこの手の話題を振るのは、今後無かった……

一方、アリシア達もアリシア達で……

「これあってる？」

「どれ……うん……うん……よし！」

「良かったね、アリシアちゃん」

「えへへ、わたしも出来るんだよ～」

少し難しめの算数の文章問題だったが、アリシアはそれを見事に正解してみせた。それは、アリサとすずかの数々の助言があればこそなのだが、アリシアはさも自分一人でやったような顔をしていた。まぁ、それをうるさく言わないのが二人の良い所なのだが……

「じゃ、今度はアタシ達何も言わないから」

「え～」

「あ、アリシアちゃん……そろそろ国語をやろうか」

アリサの釘刺しに、アリシアは不満顔。それに苦笑しつつ、すずかは別のものを取り出した。漢字や平仮名の書き取り用のノートで

ある。それを見て、一瞬アリシアに嫌そうな色が浮かぶ。そこへ、すずかの言葉がやる気というモノを与える。

「これ終わったら、今日は終わりだから」

「やるっ！」

「……分かり易い子だわ……」

現金なアリシアに頭を押さえるアリサ。すずかはそんなアリサに苦笑すると、視線をなのは達に向ける。三人は既に課題を終わらせたのか、なのはがフェイトに推理小説の面白さを語っている。

それをすずかと同じように見ていたアリサが、どこか寂しそうに呟く。いつか、あの三人が遠くなる気がする、と。その言葉の意味するモノを察し、すずかも小さく頷いた。三人には、共通するものがある。

『魔法』。自分達は持たない力。きっと、それを三人は誰かのために使う道を選ぶだろうと、二人は考えていた。はやては今でこそ魔法を使えないが、その内使えるようになるだろうと二人は予想していた。

夜天の魔導書の主。なら、きっといつか魔法を使えるようになる。そう考えたからだ。今は、管理局に参加していない三人だけれど、いつかはそこへ行くような気がする。そんな感覚をアリサもすずかも感じている。

だからこそ、強く思うのだ。それは、あの言葉。”この絆は変わらない”

（例えなのはちゃん達が、管理局とかへ入ったとしても……）

（アタシ達の絆は変わらない。ううん！　変えるもんか！）

二人の視線の先には、なのはの熱弁にやや驚いているフェイトがいた……

――――――

対話編　後編（前書き）

次回から更新を二日おきぐらいにします。
ストック自体はまだあるのですが、色々と忙しくなり、書く時間が取れなくなる事を加味するとすぐにそれが尽きてしまうからです。
自分勝手ですが、どうかご了承ください。

リンディが自室で複雑な思いを抱いている頃、クロノはエイミィとユーノを伴い無限書庫にいた。休日返上での探索のためである。まぁ、本当は彼とユーノの二人だけだったのだが、エイミィがそれを聞き、手伝いを申し出たのだ。

当然断る理由もなく、事情が事情なので今回はクロノも有難く受け入れたのだ。こうして、三人は無限書庫でユーノが見つけ出したものを、片っ端から読んでいた。

「やはり、考えられる有効な手立ては、改竄された箇所を元に戻すぐらいか……」

「でも、それが出来るのなら、簡単なんだよねぇ」

クロノのどこか苦々しい物言いに、エイミィも同じような声で答える。ユーノは、そんな二人の声を聞きながら、次々と本を探し出しては二人へ渡す。その合間に、整理もしているのは手馴れたから出来る事だろう。

「そういえば、あの事件に関してアーチャーさん達は何て？　何かヒントや助言くれた？」

「……僕らじゃ手に負えないだろうから、迂闊に手を出すな。そう忠告された」

「あちゃ、穏やかじゃないね……」

明るい話題が出ればと思い、クロノへ尋ねたエイミィに、返って

来たのは今まで以上に重い答えだった。
実際、クロノが魚釣りの後、アーチャーとランサーに尋ねた際、二人が揃ってそう言ったのだ。そして、エイミィには言わなかったが、こう二人は断言した。

（サーヴァントの仕業だろう、か。だが、もしそうだとするなら、何故こんな事件を起こすんだ……）

彼にとってサーヴァント達は、癖はあるが皆善人だった。それが何か事情があるにしろ、殺人を起こしている事は信じられない話だった。
それに例の事件は、クロノ達が帰って来た時には、終息した感じさえあった。まるで、今までの事件で目的は達せられたとでも言わんばかりに。その目的が質量兵器の規制緩和だとすれば、確かに納得がいく。
しかし、正直事件が起きる前と今でそこまで大きな変化があったとは言えないのだ。確かに質量兵器使用を推し進める者達には、若干の追い風になっただろうが、所詮そこまでだ。大勢が変わる程ではない。

管理局は、一貫して質量兵器の開発や使用を制限し、その許可には厳しい審査を設けている。レジアスのように、その使用等を声高に訴える者達も、公に処罰などはされないが、厳しい監視等は受けているだろう。
多少なりとも、管理局へ影響があるとするなら、スポンサー達の資金提供の減少だろう。もしくは、クロノは知らないが要求の内容だろうか。

「ま、今は目の前の事をどうにかするぞ。はやて達を泣かせるような事には……したくない」

そう言ってクロノは別の本へ目を通す。その言動に、エイミィは嬉しそうに微笑むと「りょ～かい」と言って本を手に取る。そんな二人のやり取りを、ユーノは密かに眺めて呟く。

「僕、今空気だよね……？」

その呟きに、答える者はいなかった……

目覚めの時、迫る！

出発した時と同じ高台。そこにアーチャーとアリアは立っていた。夏の日差しと風を受け、アーチャーは改めて戻ってきたのだと感じていた。管理局内は初めてだったが、やはり人工物という空気をひしひし感じたのだ。

少しだけ解析してみたかったのだが、何となく情報量が多そうなので止めたのは、ここだけの話。

「送ってもらって助かった。礼を言う」

「……それはこちらの方よ。ありがとう、お父様を救ってくれて」

「それはクロノにでも言ってくれ。私は、別の道を示したに過ぎない」

アリアの感謝の言葉にアーチャーはそう返した。その言葉が本当

にそう思っていると分かり、アリアは小さく笑みを見せる。

（ホント、謙虚なんだから）

この数年に渡り、ロッテと交代だったとはいえ、長い時間見てきた相手。最近現れた守護騎士達よりも、彼女の方が付き合いは長いのだ。

そのため、アリアにとってアーチャーはよく知った相手。考え方や行動も何となくだが予想出来る。今も自分を見て不思議がっているが、きっと何故笑ったのか察しがつかないのだろうと、アリアは思った。

「じゃ、私はそろそろ……」

「待ってくれ。君達に一つ頼みたい事がある」

「何？」

「今後もみーちゃんとして家に来て欲しい。はやては、君達を心から大事に想っている。例の話をグレアム提督が決断するまでは、ただの猫を貫いてもらう事になるが」

そのどこか申し訳なさそうな言い方に、アリアは声を上げて笑った。そんな事をそこまで心配しなくていい。そう言って彼女は笑った。監視を目的とし、時には襲撃までしたのにも関わらず、アーチャーはそんな風に言ってきた。

それに策略や思惑があれば、アリアも笑いはしない。だが、今のアーチャーにはそんな雰囲気が欠片もない。純粋にはやてを思い、アリア達に猫を演じさせるのをすまなく思っているのだ。

アーチャーは笑い続けるアリアを見て、やや呆れ顔だった。しかし、アリアが何に笑っているかは察しているのか、そこに僅かな笑みも混じっている。

（やはり、改めて言うまでもなかったか……。にしても、はやてに言われ、私が確認した方はどちらだ？　早目に謝罪をしておきたいのだが……。いや、しかしそう考えると、私は女性の……いかん！　早々に謝罪せねば、自分の身に危険が……）

そんな風に考えるアーチャー。その思い悩む姿に、アリアは密かに微笑みを浮かべるのだった……

「これで、起動出来るはずだ」

「うしっ！　じゃ、早く帰ろうぜ。はやてに教えてやんなきゃ」

とある砂漠の無人世界。そこにいるのはザフィーラとヴィータ。何とかここの原生生物から蒐集を行ない、頁が四百を超えた。そう、公園でのゲートボールを終えたヴィータはザフィーラを誘い、こうして蒐集活動を行なっていたのだ。

旅行中、リンディ達から管制人格起動までの蒐集を許可され、守護騎士達はその温情に感謝した。生憎、今日はシグナムもシャマルも仕事のため、二人での蒐集となったが、残り頁数からいけばヴィータ一人でも余裕だったぐらいだ。

「これで、主の病気が闇の書絡みでないと分かればいいのだが……」

「だな。アーチャーの悪い予感なんて外れて欲しいかんな」

やや暗い声の二人だったが、気分を変えようとヴィータは一際明るい声で言った。

「にして、これでまた人数増えるな。対戦が熱くなるぜ」

「……俺は、また最下位なのだろうか……」

「悔しかったら練習しろよ。シグナムだって、遊びとは言え負けるのは好かん！　……って言ってやってただろう」

その言葉の通り、初めてやったゲームにおいて、シグナムは何も出来ずシャマルに負けたのが余程悔しかったのか、はやて相手に練習し、勝率を一割から四割に上げたのだ。

今や対ヴィータ戦になると、六割となるのだから、いかにシグナムがゲームの腕を上げたか分かるというものだ。

ザフィーラは、練習していたシグナムを思い出し、小さく告げる。

ＣＰＵなら勝てるのだがと。それにヴィータは呆れ気味にこう返す。

――そんなのアリシアでも出来るぞ。

その情け容赦ない反論に、盾の守護獣は押し黙るのだった……

今日の翠屋は、いつにも増して忙しかった。それは、セイバーを始めとする三人娘が勢揃いしているだけではない。その格好が可愛らしいエプロンドレスになっている事が最大の要因だろう。

アルフはミニのタイプで言わずもがな。シャマルはロングなのだ

が、それもそれで正統派といえる。しかし、一番はやはりセイバーだろう。イメージカラーの青で作られたそれは、ミニスカートになっていて、セイバーの美脚を存分に生かしていた。

そう、それぞれの制服はイメージカラーで作られていた。アルフは赤、シャマルは緑、セイバーは青、美由希が黒、忍が紫という具合に。

「ありがとね～」

レジをしたアルフが出て行く客へ手を振れば……

「はい……はい……畏まりました。確かにご予約承りましたので」

電話対応するシャマルは、どこからどう見ても様になっていて……

「お待たせしました。ガトーショコラとアイスティーです」

柔らかな笑みと共にオーダーをテーブルへ置くセイバー。短いスカートにやや照れているのが、大きなポイントである。

「うんうん。似合ってるわ～」

そんな三人を眺め、桃子は嬉しそうに頷いていた。旅行から帰ってきた日、セイバーが意を決して告げたのだ。自分もアルフのような格好をしたいと。それに喜び、桃子は前々から準備していたエプロンドレスを渡したのだ。

そんな喜色満面の桃子の横では、士郎が客層を見て内心苦笑い。いつにも増して男性が多いからだ。まぁ、実際士郎もセイバー達の格好を最初見た時は思わず呆然としたものだ。……それに気付いた桃子がとてもいい笑顔で見つめてきたが。

「何か、朝はまだ何時も通りだったのに、昼前から男性の比率が増えたなぁ……」

「きっと、口コミでしょ？　可愛い店員さんがエプロンドレスで接客してくれるぞって」

「……だろうな」

苦笑しつつ、注文のコーヒーを淹れる士郎。桃子も同じようにケーキを皿へ乗せる。その二人の視線の先には、大忙しで動き回る三人の姿があった……

夏の暑さを照り返すアスファルト。その上を剣道着姿の三人の子供達が竹刀が入った袋を背負って走っていく。そして、視線を後ろへ向けて、大声で叫んだ。

「シグナム先生、さよ～なら！」

「ばいば～い！」

「また明日～っ！」

元気良く手を振り、笑顔を見せる子供達。それにシグナムも笑みを浮かべて声を返す。

「気をつけて帰るんだぞ！」

「「「は〜いっ！」」」

その離れていく後姿を見送り、シグナムは小さく笑う。夏休みは、子供を変えるのだな。そんな風に思ったのだ。休み前も元気だったが、休みに入った後はそれ以上に元気だったのだ。

この暑さに負けない程の声や動き。それを惜しみなく発揮し、鍛錬や試合に臨む。その姿にシグナムは微笑ましいものを覚えた。自分は本来誰かに物を教える事が得意ではない。剣道でも、それは同じなのだが……

（私のような不器用者でも、子供達はあのように慕ってくれる……）

教え方が悪いや言っている事が分からない。そんな事は一度も言わず、ただ素直にシグナムの言う事を実践し、時に間違えながらもそれを理解しようとする姿勢。そして、子供達が自分の言いたい事や教えたい事を理解した時、シグナムは教える楽しさと喜びを感じたのだ。

そう、今シグナムは”師”というモノの難しさと楽しさを見出していた。不器用ながらも、自分の技術を誰に伝える。そんな未来も悪くない。そう考え始めるぐらいに。そこまで思って、シグナムは笑みを零す。

「私のような存在が……未来を考えるとは、な」

そう呟き、空を見上げる。そこに広がるのは夏の青空。入道雲が浮かび、白と青のコントラストが鮮やかに目に映る。

「……あるのだろうか。私達にも……この空のような眩しい未来が……」

その声に込められた想いは、熱風によって夏空に消えた……

慌しく動くファリン。冷静に作業をこなすノエル。そんなファリンやノエルの補佐をするライダー。ご存知月村メイド隊である。現在、昼食の支度をしているのだが、ファリンが慌てているのには理由があり……

「あ、アーチャーさんが来れないって、どうしてなんでしょう！」

「重要な案件があると言っていましたが？　ノエル、そろそろひっくり返さなければ」

「……え？　あ、はい」

ライダーの指摘にやや遅れて反応するノエル。それを見て、ライダーは苦笑する。ファリンと違い、ノエルはどうやら表情に出さないだけで、十分気にしているのだと分かったからだ。アーチャーは多く語らなかったが、その用事はきっと闇の書絡みだろうとライダーは予想していた。

でなければ、日課となった料理教室まで休んでどこかに行く理由が思い当たらない。二人が危惧しているような事は絶対にないと思っている。そう……

（リンディとミッドでデートなど、あの士郎が出来るはずないでしょう……）

リンディがアーチャーに好意を寄せて始めている。それに誰よりも早く気付いたのは、ノエルだった。アーチャーを見る目が変わっ

た。そうノエルは言って、旅行終わりまでリンディを警戒していたのだ。
リンディもノエル達がアーチャーへ想いを寄せているのを知っているので、それに苦笑しつつも笑みを浮かべてこう告げた。
――考えているような気持ちではないですよ？
その言葉にノエルは少し疑問を浮べ、ファリンなどは大きく息を吐き、良かったと言ったぐらいだ。それを遠くで見ていたシャマルが、何故か大きく息を吐いて、その場から去って行ったが。
ちなみに、それをシグナムも聞いていて、内心アーチャーに手を合わせていたりする。
「……ねぇ、ご飯まだ？」
物思いに耽るライダーの前に、空腹を訴える忍が現れた。それを見て、ライダーはもうすぐと返そうとして、何かに気付いた。そう、焦げ臭いのだ。
「お姉様っ？！」
「っ！？　しまった」
ノエルが手にしていたフライパンから煙が上がる。それを見て、忍はあちゃ～という表情を浮かべ、ライダーへ近付き、小声で尋ねた。何が原因かと。それにライダーはアーチャーです、と短く返す。それに忍はやっぱりと呟くと、落ち込むノエルへ近付き、そのフライパンの中にある焦げたハンバーグを見て、近くにあった皿を出して一言。

「それでいいわ。ノエルにもこういう面があったってだけで、私としては満腹気味だけど、ね」

「お嬢様……」

「でも、それは精神的なものだから。肉体的にはそれが欲しいの。だから……ね？」

ウインク混じりに微笑みかける忍に、ノエルは小さく笑みを見せると、頷いてそれを皿に移し、ソースをかけた。そんな光景を眺めて、ライダーは思う。忍も成長しているのだと。

ノエル達の主人としてだけではなく、人として大きくなっている。そんな雰囲気が今の忍からは感じられたのだ。

（私がこの家に来て、もう三年半ですか。月日が経つのは早いものですね……）

そう思うライダーの耳に、忍の「苦っ！」と言う声が聞こえてくるのだった……

いつものように庭の手入れを終えた小次郎。そこへすっと水筒が差し出される。それを差し出した相手に、軽く笑みを返し、礼を述べて受け取る小次郎。

「すまぬな美由希殿」

「いえ、あたしが好きでしてる事ですから」

美由希はそう答えると、小次郎から返された水筒を受け取り、代わりにアルミホイルで包まれたおにぎりを手渡す。それを受け取り、小次郎は包みを剥がしていく。そこから出てきたのは、少し歪ではあるが、大きめのおにぎりが四つ。

どれも美由希の手作りだ。旅行後、美由希は小次郎が庭仕事をしてから高町家に来るのを申し訳なく思い、こうして自分が小次郎の元へ出向くようになったのだ。それと同時に小次郎が好きな（と美由希は思っている）おにぎりとお茶を持参し、共に昼を取るようになっていた。

「どうです？」

「……今日のも塩加減がやや強いな。しかし、それも私が汗を掻く事を見越しての事であろう」

小次郎の言葉に美由希は少し照れながら頷いた。気温が高くなると水分だけでなく塩分も多く失う。それを考えた美由希は、このところ塩を心持多めにしていた。無論、自分で味見してから持って来ている。

美由希手製の昼食を食べ、笑みを見せる小次郎。それを見て美由希も微笑みながらおにぎりを口にする。激しい日差しが降り注ぐ中、木陰で一時の休息を取る二人。この後、その日差しに身を晒し、激しい剣舞を演じるのだが、それもまた二人らしいといえるだろう。

それぞれが過ごす中、ついに起動準備が整った管制人格。それが目覚める時、古に生まれし闇がその姿を見せ始める。

だが今は、それを知る者はいない……

ーーー

A'ｓ一話　前編

八神家　リビング。時刻は午後九時を過ぎ、普段ならばそろそろ風呂にでも入ろうかと言って、シグナム辺りが動き出す時間。だが、今日はそうではなかった。

昼過ぎに帰宅したヴィータから、四百頁までの蒐集を終えたと報告されたからだ。なので、こうしてはやて達六人は、夜天の魔導書を見つめ、管制人格の起動を行なおうとしていたのだ。

わざわざ夜まで待ったのには理由がある。それは、はやての希望。全員夜に現れたのだから、管制人格も夜に出してやりたい。その言葉を聞いて、五人は笑みを浮かべて納得したのだ。

そして、ついにその時が来た。はやてが夜天の魔導書を手にし、告げる。優しく柔らかい声で。

「お待たせや。出ておいで、リインフォース」

その名は、彼女が考えたもの。管制人格では呼びにくい。そのため、彼女がアーチャーやシグナム達から助言を貰い、名付けたのだ。『祝福の風』を意味する名前。そう、自分に家族をくれた存在に対する想いを込めて。

床に現れる魔法陣。そして、そこからシグナム達のように出現する銀髪の女性。それを全員が見つめる。

「……管制人格起動しました。そして、同時に名称変更も確認」

「あ～、やっぱどこか硬い喋り方や」

「……主、こうして会うのは初めてになりますね。私は、闇の書の

管制人格、これからはリインフォースと名乗らせて頂きます」

跪くリイン。それにはやては初対面時のシグナム達を思い出し、苦笑する。そして、簡単な自己紹介をはやてとアーチャーがし、早速とばかりに本題へ入った。それは、はやての足の事。

それにリインは一瞬だが、躊躇う。それに気付いたのは、はやてを除いたアーチャー達全員。はやてが、夜天の魔導書が原因ではないのかと尋ねると、リインは力強く頷き、こういう事だと思うと告げた。

きっと、はやてが幼いままでリンカーコアを蒐集されたからそうなったので、年齢を重ね、リンカーコアが成長すれば、じきに歩けるようになるはず。そうリインが答えると、はやては嬉しそうに聞き直し、その上機嫌のままアーチャー達へ笑いかける。

――――やっぱ、心配する事なかったわ。それに、大きくなったら、わたし歩けるんやて！

そう言って嬉しそうなはやてを見て、アーチャーはいつもの口調で告げた。

「それは大変だ。今まで以上にはやてが行動的になると厄介になる。主に、女性陣が、な」

「な、何の事や……？」

「忘れたとは言わさん。新年明けての旅行も温泉を希望しただろう。今度はプレシア達が狙いか」

その発言にギクリとするはやて。そのやり取りを見て、笑みを浮かべるシグナム達。ただ一人、リインだけがそんなはやてを見つめ、

哀しげな表情を浮かべていた……

知らされる真実、迫り来る闇

はやてが眠り、日付が変わろうとしている。だがリビングには、アーチャーを始め、残る全員が揃っていた。そう、あの時リインが見せた躊躇い。その原因を聞きだすためだ。

はやての足の話。それを心から信じ切っている者は、ここにはいない。いっそ、そう思えたらどれだけ良かったか。そんな事さえ考えていたのだから。リインは、五人の視線を受け、静かに語りだす。それは、五人を驚愕させるに値する内容だった。

はやての足が不自由なのは、先程の話と類似する。違うのは、このままではリンカーコアが成長する前にはやてが死ぬだろうとの事。理由は、守護騎士や自分の維持。それに必要な魔力を、はやての幼いリンカーコアで賄い切る事は出来ず、徐々にだが麻痺が進行しているはず。そうリインは言った。

その言葉にアーチャーは首を傾げた。通院している病院で、はやての掛かり付けの医師である石田女医は、そんな事は言っていないと。それにリインは搾り出すように返した。おそらく、今後すぐにそれが分かるだろうと。自分まで起動し、負担が増えた。その影響が必ず出ると。

「そんな……」

「何か、何か手はないのかっ！？」

顔面蒼白のシャマル。そして、深夜にも関わらず、大声を出してしまうシグナム。そこからもこの話が持つ重みが分かる。それだけではない。このままではやては死ぬしかない。その事実が守護騎士達には重くのしかかる。

そんな中、ヴィータがアーチャーにしがみついた。その目からは涙を流している。そこには、普段の勝気な少女の面影はない。愛する家族を失ってしまう恐怖に怯える、一人の無力な少女がそこにはいた。

「なぁ、アーチャー……何かないのかよぉ。はやてが死なないで済む方法、ないのかよぉ～……」

「……現状で最善なのは一つ」

「……ルールブレイカー、か」

そんなヴィータにアーチャーは無表情で告げた。その言葉に悲痛な面持ちでザフィーラが答えた。それにヴィータ達の表情が変わる。そして、アーチャーは無言でそれを肯定する。既に聞かされているアーチャーの切り札。どんなロストロギアでも、魔力で作られたり動いているものならば、初期状態に戻し、無力化する短剣。

だが、それを使えば、守護騎士達は最悪消える。だが、それではやてが助かるのなら。そう思うシグナム達だったが、誰もそれを口には出さない。いや、出せないのだ。

（もし……私達がいなくなれば……）

（はやてちゃん……どれだけ悲しむのだろう……）

（それだけじゃねぇ……なのは達だって……）

（きっと、主に負けぬぐらい悲しんでくれるのだろうな……）

以前ならば、躊躇いもせず犠牲になれた。だが、今はそれが出来ない。彼らが人らしくなったのもあるが、それ以上にはやて達を悲しませたくないと思ったからだ。自分達が犠牲になれば、はやてが助かる。だが、それをはやて達が知ればどう思うか。

今の生活で得た友人、知人、家族。その者達の事を想うからこそ犠牲になるとは軽々しく言えない。そして、何よりも言い出せないのは……

「リイン、はやての体が耐え切れなくなるのは、いつ頃だ？」

「……もって秋の終わりまでだ」

「つまり、残された時間は後二ヶ月……いや万全を期すなら一月半と言うところか……」

（はやての安全を考えれば、その時間で終わらせねばならない、か）

アーチャーがいるからだ。どこまでも犠牲を嫌う男。今も一人冷静に状況を把握し、何とかしようとしている。そんな姿を見て、四人も考えを改める。自分達が犠牲になどはただの甘えだ。それは、最後の最後まで足掻いてからの選択肢。

今すべきは、アーチャーのように最高を目指す事。まだ時間はある。ならば、その時まで必死に足掻いて見せようと。

（もしくは、蒐集を終われせれば……）

アーチャーはそう考え、リインから聞き出そうとした。視線を上げ、リインを見つめて――。

「リイン、蒐集を完了させればどうだ？」

アーチャーがまさに言い出そうとした事をシグナムも考えていたようだ。彼が口を開く前に、そうシグナムは問いかけたのだから。それにシャマルが驚きを見せる。それが意味する事はただ一つだったからだ。

「シグナム？！」

「……それならば、主は助かるだろう。ただし、一時的にだ」

「どういう事だ」

その問いに答えたリイン。そのリインの言葉にザフィーラが尋ねる。それにリインは語る。完成した夜天の魔導書は、周囲を巻き込むような強大な力を発揮し、その力で全てを破壊しかねない。故に、主はそれに巻き込まれてしまうから、一時凌ぎにしかならないのだ。そうリインは告げた。

しかし、それを聞いた瞬間、アーチャー達に笑みが浮かぶ。それは、勝利の笑み。リインはそれに驚くが、その雰囲気から何かを察し、呟いた。

「まさか……その暴走を何とかするつもりか」

「ったりめ～だ。力仕事なら、あたしらの出番だかんな」

「そういう事だ。小細工の類は出来んが、正攻法ならば将として本

領発揮出来る」

「癒しが専門だけど、サポートだってお任せなんだから」

「どんな災厄も、防ぎ切ってみせる」

守護騎士達の言葉にリインは驚きを禁じえない。起動する前から眺めてはいた。それで知った気になっていた。だが、やはりこうして直に会ってみて分かった。もう四人は、自分が知っている頃の四人ではない。

一人一人が意志と心を持った人間なのだ。プログラムとは思えない程、いやもうプログラムでもないのだろう。そうリインは思った。

「だが、今までと違い、蒐集の許可はない。事情を説明し、リンディ艦長達にも理解と協力を求めよう。それと同時に完成時の被害や状況などもある程度予測せねばならない」

アーチャーの告げる言葉に、全員が頷く。ここまで来て管理局と揉める訳にはいかない。まずプレシアを通じ、リンディ達の協力を仰ぎ、蒐集の許可を得る。そしてから、出来るだけ素早く蒐集を完成間近までしなければならない。

そこまでして、やっとルールブレイカーに頼らない方法の模索に四人は力を注げるのだ。はやての体が具体的にいつまで持つのか分からぬ以上、あまり時間は掛けられない。

そこで問題になってくるのが、蒐集相手だ。もう魔法生物からでは間に合わない可能性が高い。残り二百五十以上を稼ぐには、毎日でも怪しいぐらいだ。それをどうにかする方法も考えなければならない。

その事はそれぞれで考える事にし、残り時間を考慮して割り振り

を決めねばならないと、アーチャーは言った。

それを全員が分かっているからこそ、その言葉に頷いた。アーチャーやリインとシャマルは、調査チームとして完成時の事を話し合い、リンディ達へ伝えられるようにする事や、ユーノに協力し、別の解決法を探す事となる。シグナム達三人は、蒐集チームとして今後の蒐集行為に備え、出来る限り、平時は体を休める事を告げられた。

そして、また早朝話し合い、細かい事を決める事になった。それと、はやての要望である全員で過ごす事。それを出来るだけ守りつつ、許可が得られ次第、蒐集をする事にし、全員が想いを新たに頷き合い、部屋へと戻っていく。

だが、その最中、リインは全員に言った。全ては自分のせいだと。自分が無力だったばかりに、はやてを苦しめる事になったのだ。そう告げたリインへ全員が口々に答えたのだ。

――お前（貴方）のせいじゃない。そんな事にさせない。

その言葉を聞いて、リインはしばし呆然となった。真顔でそう言った五人は、そんなリインを見て笑みを浮かべて去って行く。そして、リインもあてがわれた部屋に向かい、入るや否やベッドに腰掛け、小さく息を吐く。災いの象徴となっていた自分。それを、家族だと受け入れてくれたはやて。そして、そのはやてを夜天の魔導書が原因で死なせはしないと、それぞれ誓った騎士達。その中心にいたのは……

「アーチャー、か……」

赤い弓兵。あの夜、覚醒した時からずっと見ていた男。はやてを

支え、守護騎士達を支え、この八神家を裏でまとめる存在。誰よりもはやての事を思い、行動する。まさに、守護騎士と言えるような者。

リインは知っている。はやてが自分の名前を決めかねていた際、助言を乞われたアーチャーは、こう言ったのだ。

――君の想いを込めた名前を付ければいい。こうなってほしい。その想いを名に込めるのだ。名の由来を尋ねられた時、自信を持って答えられるように。

それにはやては頷いて、家族をくれた事への感謝と災いを吹き飛ばすような存在になってほしいという想いを込めた。出会う者に、幸福を運ぶ風であれ。

リインフォース。それが彼女の名前にして、はやてからの想いと願いの表れでもあるのだ。そう思い返し、リインは自分に言い聞かせる。この闇の書と呼ばれた存在を、今回で最後にする事。そう、これからは闇の書ではなく、こう呼ばれるために……

「私は、夜天の魔導書。そして、祝福の風……リインフォース」

愛しき『家族』がくれた名。そちらを後世に残すために。忌まわしき名を、今回で終わらせる。そう決意し、彼女は思う。それは、誰にも言えぬ想い。そして、今はまだ誰にも知られてはならない真実。

（例え全てを上手く終えたとしても、私は主達とはいられない……。そう、何故なら私は……）

そっと自分の胸に手を当てるリイン。その顔は、悲しみに彩られている。闇の書と呼ばれてから、初めて知った温もり。そして、家

族の暖かさ。その全てを今まで見てきて、今日実感し感謝する。はやてに出会えた事を。そして――。

（アーチャー、彼さえいれば主や騎士達も……）

おそらくこの家で最初に自分の秘密に気付くと思う相手。その存在にも感謝する。彼がいなければ、きっとまた自分は、主を殺していたのだろうから。それを思い出し、彼女は静かに窓を見る。

そこには、星空と月が見える。その月夜の光をその体に浴びつつ、小さく呟く。決して闇になどならない、と。今の自分は闇ではなく風なのだ。心優しき主が、その想いを込めて”こうなってほしい”と願った名前。それを裏切る事は出来ないと。

「私はリインフォース。そう、リインフォースなのだから……」

その思いを噛み締め、授かった名に喜びと感謝を込め、一人彼女は繰り返した。古の呪縛。それを絶対に断ち切ってみせるのだ。そう強く思いながら……

ついに起動した管制人格、リインフォース。だが、それがはやての命をより危険に近づける事になる。

それを知り、再び決意を固めるアーチャー達。刻一刻と減っていく時間の中、最高を求めて足掻く事を選択する。

破滅の鐘は鳴らされた。それが鳴り止む前に、最善ではなく最高を手にする事が出来るのか……

―――――――

A'ｓ一話　中編

翌朝、朝食を終えたアーチャー達は、それぞれ行動を開始した。アーチャーは、まずリンディへ事態の変化と八神家全員の総意を伝える事と、蒐集の許可を得るために。

シャマルは翠屋の手伝いがあるため、リインはザフィーラに完成後の事を伝え、細かくはアーチャーが帰ってきてからになったが、大体の事を判明させておく事になった。シグナムも剣道教室の仕事があるため出かける事になったが、許可が得られ次第、蒐集活動へ赴く事にした。

ヴィータは、はやてと共に図書館へ出かける事になっているが、その後は、公園で老人達と日課をこなすらしい。アーチャーもだが、守護騎士達もはやてに全てを話すにはまだ早いと考えていた。

はやてが死ぬかもしれない。そんな事を話す事に抵抗がない者はいない。だからこそ、早朝の話し合いで全ての準備が整うまで話をしない事が全員一致で決まった。最後まで黙っておきたいと考えた者もいたが、知らせないのは許さないだろうとアーチャーが告げると、一瞬沈黙し、誰ともなく笑って違いないと納得したのだ。

そんな事を思い出しながらヴィータは車椅子を押す。夏もそろそろ終わりが近い。その日差しを受けながら、目を細めた時だった。

「な、ヴィータ」

「何？」

「何や、リインが出てきてからみんなの様子が変わった気ぃするんよ」

はやての何気ない言葉に、ヴィータは鼓動が一瞬止まったかのような感覚を覚えた。鋭い。そう思うも、それははやてが自分達に常に関心を寄せてくれている事の裏返しでもある。そう思い直し、ヴィータは笑みを浮かべて答えた。

「当然じゃん。家族が増えたんだもん。色々あたし達も考えるんだよ」

「そうか？　ならええんや。何や、リインがかなり気まずそうな顔しとる気ぃしたからな」

「あたし達も馴染むまでに戸惑う事あったし、多分それじゃない？」

「……そやな」

はやての観察眼に内心驚くヴィータだったが、それを表には出さないようにしつつ、自分の実体験を元にそう誤魔化した。それにはやても納得したようで、その話題はそれきりになった。

それに安心し、笑顔で話すヴィータ。それに楽しそうに返すはやて。だが、ヴィータは気付くべきだったのだ。自分が言った言葉を聞いたはやての返事。それが、どこか悲しみを秘めていた事に……

伝えぬ想い、察する想い

ヴィータとはやてがそんな会話をしている頃、アーチャーはテス

タロッサ家にいた。プレシアを通じてリンディへ報告するためだ。フェイトはアリシアを連れて図書館へ行っている。そう、今日も勉強会なのだ。アルフは翠屋、残っているのは、ランサーとリニス、それにプレシアである。

「そう、はやてちゃんの足はやはり……」

「ああ。そういう訳でリンディ艦長に相談したいのだ。蒐集活動だけでなく、今後の事についても、な」

アーチャーから聞かせれた内容に、どこかやはりといった表情で頷くプレシア。聞いていたリニスやランサーもその表情は暗い。アーチャーは来た瞬間、玄関の靴を確認し、頷いていた。その理由が分かったからだ。

この話をフェイト達が知れば、はやてにも知られる事になる。それを避けたかったのだろう。せめて、全ての準備が終わった上で聞かせなければ、優しいフェイト達はその事を気にして、はやてへの対応がおかしくなる。

だからこそ、アーチャーは念のためにはやてが出て行ったのを見計らって来たのだ。フェイト達と出くわさないように。知られる事のないように。

「……いいけど、かなり難しいと思うわ。何せ、貴方達の行動は……」

「分かっている。はやて一人のために世界を危険に晒す行為だろう。だが、まだ何とか出来るかもしれん」

「貴方は……」

そこまで言ってプレシアは口を閉じた。自分にアーチャーを止める権利も資格もないと思い出したからだ。愛する娘のために、自分は次元震を起こしかねない行為をさせた。そんな自分が、何をアーチャーに言えようか。

そう思ったからこそ、プレシアは何も言えない。それを察し、リニスもランサーも無言。プレシア同様、彼らもまたそう思っていたからだ。そんな三人の気持ちを察したのか、アーチャーは何も言わずにプレシアへ視線を向けた。

それを受け、プレシアは静かに立ち上がり、自室へと案内する。そこにある機械を操作し、少し間を置いてからモニターが出現した。

「どうかしたのプレシアさんって……あら、アーチャーさん……？」

「朝早くにすまない。少し艦長に聞いてもらいたい事があってね」

アーチャーの言い方で、何かを理解したのだろう。リンディはそれまでの雰囲気とは違う雰囲気を出し、顔つきを変えた。それは、まさしく管理局員といった面持ちだ。その変わり様に内心感心しつつ、アーチャーは先程プレシアにした話を語った。

それを黙って聞くリンディ。そして聞き終わった瞬間……ため息を吐いた。

「……そうですか。はやてさんの命に」

「ああ。無論、貴方達が許可を出さなくとも我々は動く。確かに暴走は脅威だ。だが、防げない訳ではない」

「そうでしょうね、貴方達ならば……ですが」

「何、確率が普通より高いだけだ。だからこそ、貴方達の力も借りたい」

前半こそ普段の口調だったが、後半はいつになく真剣なもの。それをリンディも受け止め、見つめ合う事数瞬。先にリンディが根負けした。そのアーチャーの視線を外し、苦笑して告げたのだ。

本当に困った人だ、と。その言葉に含まれたものをプレシアは感じ取り、密かに笑みを零す。そして、リンディは言った。あの後実はグレアムに呼ばれ、全てを聞かされたと。アーチャーはその発言に軽い驚きを見せたものの、その真剣な表情のまま、そうかと頷き、それでどうなのだと尋ね返す。

それにリンディはいつもの雰囲気へ戻り、告げた。管理局としては表立って協力出来ない。だが、個人としては協力したい。だから、まずリンディ・ハラオウン提督としての意見を述べると。

それは、拒否。尚且つ阻止するとまで言い切った。その声も表情も偽り無いもの。その迫力にアーチャーも黙った。もし、今後蒐集活動に遭遇する事があれば、全力で撃退もしくは妨害する。そう明言した。

「……さて、ここからはリンディとしての言葉です」

その言い方にアーチャーもプレシアも笑う。そう、おそらく聞くまでもないのだ。リンディ自身がどのような人物か良く知る二人にすれば、個人として彼女がどう言うかなど簡単に理解出来る。

その予想通り、彼女は告げた。何とか方法を探してみせる。そのために、無限書庫にはないアーチャー達の持つ情報が欲しいと。それにアーチャーも頷いた。もう、彼が危惧していた魔術知識の悪用などは難しいと分かったためだ。

リンカーコアでは魔術は使えない。しかも、魔術回路はこの世界に住まう者達にある可能性自体も少ないのだ。よって、今のアーチャーが失って困る情報は宝具や真名に関わるものぐらいだった。

故に、リンディへ伝えても問題ないと言えたため、彼にも躊躇いはない。そうして話し合う二人を見ながら、プレシアは思う。リンディはやはりアーチャーを意識していると。何故なら、今のリンディの目は……

（ランサーへ想いを隠していた私と同じだわ……）

状況を考え、告げられぬ想い。だが、それを完全に隠し切る事は出来ない。そう、どこかにそれは出てしまう。それを分かるのは、プレシアのように、同じ状況に陥った者のみ。

普段鋭いアーチャーだが、色恋はあまり勘が働かないらしく、今もどこかに頼られる喜びを滲ませるリンディに気付いていない。だからこそ、プレシアは察したのだ。リンディがアーチャーへ抱く想いを。故に内心応援する。自分もそうだったのだ。

リニスやアルフがランサーへ想いを寄せているのは知っていた。だから、自分はそれをずっと秘めていようと思っていたのだ。だが、あの日、二人が嬉しそうにランサーが買ってくれたピンバッチを、フェイト達に自慢しているのを見て、つい彼女は抑えられなくなったのだ。

自分も大切にしてほしい。そして、あの行動に出た。その行動の裏には、アリシアの「ランサーってパパみたいだね」と言う言葉も多分に影響している。

「では、細かい話は明日にでもこちらで」

「ああ。こちらこそ頼むリンディ艦「アーチャーさん？」……よろ

しく頼むリンディ」

今はただのリンディという事を強調しているのだろうと感じ、アーチャーは少し苦笑しつつ言い直した。それにどこか嬉しそうに笑みを返すリンディ。それを見て隠れて微笑むプレシア。本来であれば、こんな雰囲気は場違いなのだろう。だが、辛い時こそ笑っていようとするのが、本当の強さなのかもしれない。

そんな事を思いながら、プレシアはリンディに視線を向ける。それに気付き、リンディもプレシアへ視線を合わせる。それだけで何かを伝え合う二人。それを理解出来ずやや不思議そうなアーチャー。

（相手は手強いから、頑張りなさいね）

（ええ。分かってるわ）

そんな想いを互いに抱くが、当然それは分からないものだ。だが、女性の勘は時に恐ろしい程当たる。これもそれと同じような感覚なのかもしれない。唯一アーチャーだけが、その女の空間で取り残されていた……

「それで、今日もロッテは無限書庫ですか」

「ああ。どうやら借りを作ったままが余程嫌らしい」

グレアムの執務室。そこで会話するのはグレアムとアリア。その顔に浮かぶは久方ぶりの心からの笑み。あの話し合いの後、グレアムはリンディを呼び出し、計画の全貌を話した。それにリンディは驚いたようだったが、その判断には理解を示した。

自分も次元世界の平和を守る管理局員としてその判断は支持します。そう言ってさえくれた。だが、こうも言った。個人としては納得しかねますが、と。

それをくどくど言うようなリンディではない。その意見はそれで終わり。しかし、こうは言った。時間が許す限り最後まで足掻く。例え、それしか手段がないとしても、その方法を得ただけで満足すべきではなかったのでは。そうリンディは言ったのだ。

グレアムはそれに苦笑し、同じような事をアーチャーにも言われたと告げた。そして、おかげで最悪の行動を取らずにすんだとも。グレアムはそう言って、リンディへ意を決して語った。それは、万が一アーチャーの取る手段が通用しなかった時の事。

グレアムは、現在開発中の氷結魔法を使えるようにするストレージデバイス『デュランダル』を使い、最終的にはやてごと封印する事を諦めてはいないと告げたのだ。

だが、それは現状で他の解決策が見つからない場合、それもグレアム自身がそれを行なうと断言した。それにはさすがにリンディも驚いた。グレアムは言った。自分の手を汚す事を恐れていた訳ではない。だが、アーチャーに比べれば、自分はやはりどこかでそれを忌避していたと。

「彼女、はやてが身寄りもない存在だと知った時、私は……私は幸運だと思ったのだ。彼女ならば、犠牲にしても悲しむ者がいない。ならば、何の躊躇いもなく封印出来る。そんな考えを抱いたんだよ。今にして考えれば、あの時の私は犯罪者と何ら変わり無い思考をしていたのかもしれない」

「提督……」

「決して死なせないようにと、アリア達に周辺の警護や監視をさせた。飢えて死なないように、父親の知人を装い、彼女の援助をした。それは知っているだろう」

無言で頷くリンディ。それを見て、グレアムは続けた。そうやってはやてを援助していたら、ある時から手紙が来るようになった。そこには、支えてくれるグレアムおじさんへと書いてあったのだ。それが、はやてからの物だと分かった時、グレアムは心を痛めた。自分が見殺しにしようとしているとも知らず、純粋に礼を述べるはやての気持ちに。そして、自分の行いを本当の善意だと信じているその素直さに。

その手紙は定期的に送られてきた。一ヶ月に一度。写真が必ず添えられて。そして、いつも文章の結びにこう書かれているのだ。

――足長おじさんのグレアムおじさんへ。

その手紙を見るたびに、グレアムは決意が揺らいだ。たった一人だと思っていた少女が、友人を得て、知人を増やし、楽しそうな日々を送っている。それを知る程、教えられる程、犠牲にする事に迷いが増えた。

それを、次元世界のためだと言って聞かせ、無理矢理自分を納得させていたのだと、グレアムは語った。

だがそれが、ただの自己を正当化するためだけの文句になっていた事を、アーチャーから指摘されたような気がしたのだ。本当は、ただ自分の汚点を忘れるためだけに、闇の書を狙っているのではないか。そう考えた時、それを心から否定し切れない自分がいる事に、グレアムは愕然となったのだ。

「だからこそ、私は覚悟を決めたのだよ。万が一の際は、私が彼女を封印する。それでどれだけ恨まれようと、憎まれようと構わない。それが、管理局員として、そしてギル・グレアムとしてのけじめだ」

「……分かりました。提督がそこまで思うのでしたら、私からは何も言いません。ですが！」

リンディはそこで言葉を強める。それにグレアムもやや視線を鋭くする。その視線を正面から受け止め、リンディを見つめ返す。

「ですが……そうさせないように、デュランダルが完成した際は、クロノへ託して頂けませんか」

「クロノに……？」

「はい。あの子は魔力変換の経験や技術がありますし、何よりもあの人の子です。計画を話して頂かなくて結構です。でも、せめてこの事件の決着を、あの子に着ける力を貸してやって頂けないでしょうか」

それでも無理だった時は、潔く諦めます。そうリンディは告げた。つまり、アーチャー達と協力し、闇の書を完全に無力化出来なかった場合、グレアムの計画を実行する。その協力をリンディは暗に告げたのだ。

リンディの表情に浮かぶは決意。それは、悲壮なものではなく、希望に満ちたものだ。それを見て、グレアムは小さく笑う。不安を感じさせない顔だ。そう言って。それに微笑みを浮かべ、リンディは頷く。

――――ええ。今の私には英雄達がついていますので。

その答えにグレアムは余計楽しそうに笑った。大いに結構。そう言うと、リンディも笑みを浮かべる。そうして、しばらく執務室に二人の笑い声が響いたのだった。

（私の決断は間違ってはいなかった。だが、それだけに執着したのは間違いだった）

いくつもの方法を模索し、一番有効だと判断したものを実行する。それはよかったのだ。だが、それを確立するだけではなく、最後まで理想的な方法を模索し続けなければならなかったのだ。

自分が間違っていたとすれば、そこ。早々に諦め、犠牲を出す事を前提に考えてしまった事。もがき足掻く事こそ、生命の本質。それをアーチャーの姿勢からグレアムは学んだのだ。

「アリア、ロッテの手伝いをしてやりなさい。少しでも計画を改善出来るのなら、それに越した事はない」

「はい」

「情報は多い方がいい。クロノ達がいるそうだから、個人的に協力する形で手伝ってやりなさい。私がリンディ提督から聞いたと言ってな」

「分かりました。……お父様」

「何だ？」

「やっと、昔のお父様に戻られたような気がします」

そう笑顔で告げ、アリアは部屋を出て行く。その言葉に軽く笑みを浮かべ、グレアムは天井を見上げ、誰にでもなく呟く。

――――クライド、本当の意味でお前の仇を取れるようにしてみせる。出来る事なら、私の手で取りたかったが、な……

静寂。それがこれ程しっくりくる場所はないだろう。そう、ここは図書館。利用する者が読書に勤しんだり、勉学の糧にしたり、或いは憩いの場にもなる空間。そこで、お馴染みの七人がいた。ヴィータは、はやてを送った後、公園へ遊びに行ったため、ここにはいない。

夏休みももう終わりを迎える。そうなれば、フェイトは学校生活が始まるのだ。その前に、フェイトの唯一の弱点とも言える国語力。それを底上げしようと頑張っているのだ。アリシアもはやてと二人だけで勉強出来るように、リニスを納得させる程の知識を見につけようと頑張っていた。

「ね、これって……」

フェイトが隣のすずかへ静かに尋ねる。それにすずかが丁寧に助言を与える。その隣ではなのはが軽く悩んでいた。それを見かねてはやてが少し口を出す。それに閃く物があったのか、なのはは小さく驚きの声を出すと、はやてへ礼を述べ、再びその手を動かしていく。

アリシアは、アリサに睨まれるように問題を解いている。フェイトと違い、アリシアは理数系さえよろしくない。そのため、この中で一番総合力で優れるアリサが、アリシアの監督役（監視ではない）として目を光らせているのだ。

「……出来ました」

「どれ……」

まるでスパルタ教師のようだとは、なのはの感想。実際、アリシアはリニスと同じぐらい勉強時のアリサが苦手になりつつある。

「……終わったぁ」

「お疲れさんや」

ちなみになのはがやっているのは、学習塾の課題。学校のものとは違うので、こちらはこちらで苦戦したなのはだったが、休みが残り一週間を切った時点で全てを終えた。参考までに、アリサは八月上旬、すずかはお盆前に終わらせている。

机に突っ伏すなのはに苦笑するはやて。だが、その表情がどこか暗い事にフェイトが気付く。そして、何気なく尋ねたのだ。何か嫌な事でもあったのかと。何せ、会った当初はリインフォースの事を嬉しそうに話し、なのは達はこの後八神家にお邪魔してご挨拶をしようと思っているのだ。

「あ……うん。ちょうな、リインが出てきてから、アーチャー達の様子がおかしいんよ」

「おかしいって……どんな？」

「何や、わたしに隠し事しとるんや」

はやてはアーチャー達には言わないで欲しいと告げてから、静か

に語りだした。昨夜寝る前までと起きてからの様子が微妙に違うのだ。一番顕著なのはリイン。その次がヴィータで、何か良くない事があったんだろうと予想していると、はやては言った。

それを聞いて、全員が思いつく結論はただ一つ。夜天の魔導書絡みしかない。おそらくはやてもそう考えているんだろう。だからこそ、聞けないのだ。自分に言わないと言う事は、アーチャー達が自分にまだ話すべきではないと考えているからだろうと。

「わたしに隠し事し続ける程、アーチャーは性悪ちゃうしな」

「ま、アーチャーさんはともかく、ヴィータは隠し事下手そうだもんね」

アリサの言葉に全員が苦笑し、頷いた。するとアリシアが何かを思いつき、笑顔で言った。きっとはやてを驚かそうとしてるんだろうと。そのため、今は全員で何かの準備をしてるのではないか。そう言ったのだ。

それに全員がう～んと唸りを上げる。その可能性はない訳ではないが、おそらく低い。そうはやて達は考えていたからだ。しかし、アリシアの言う事が本当なら、どう驚かすのだろう。そうなのはは思い、尋ねてみた。

「ね、アリシアちゃん。そうだとすると、一体どう驚かすのかな？」

「はやてのためのデバイスとか？」

「わたしのための……デバイス……」

アリシアの口から出た言葉に、はやてだけでなく全員が黙り込んでしまった。そう、可能性がない話ではないのだ。はやてがリイン

から聞いた話が本当なら、はやても成長すれば魔法が使えるようになる。そうなれば、確かにデバイスがあった方が便利になる。そのため、アーチャー達がこっそり準備している。

そう考えると、意外と違和感無く当てはまるものがあったからだ。故に全員が考え込んだ。それがアリシアには不満に感じたものだから……

「む～……みんなしてわたしの言う事信じてない」

「そ、そうじゃないよ。すごくそれっぽいから驚いただけ」

アリシアが癇癪を起こす前に、慌ててなのはがそう答えた。それに全員が頷いたのを見て、アリシアは機嫌を直したように笑顔で頷いた。

（アーチャー達が……わたしのためにデバイス……なぁ……）

なのは達がそんなアリシアの笑顔に安心している中、はやてだけはまだどこかで疑問を拭い切れなかったのだった……

――――――

それを聞いて、そんな事にはさせないと告げるリンディ。そのやり取りを経て、グレアムも足掻く事を思い出し、動き出す。

一方、なのは達ははやての気持ちを解決しようとし、アリシアが意外にも納得のいく答えを提示するも、はやての疑問は完全払拭出来ず。

A's一話　後編

翠屋店内。朝の忙しさも一段落し、やや静かささえ感じる店内を見て、セイバーは頷いた。そして視線を後ろのカウンター席へ向ける。

そこでアルフとシャマルが何か話している。どうも昨夜起動した管制人格、リインフォースの事を話しているようだ。その証拠に、シャマルがどこか嬉しそうに見える。

だが、何故かセイバーには、そこに微かな違和感があるようにも思えた。それが何かは明確には分からないが、何か今のシャマルにはある。そんな印象を覚えたセイバーは、二人の会話に加わるべく近付いた。

「何を話しているのですか？」

「あ、セイバー。リインフォースの事だよ」

「今日、帰りにケーキでも買って帰ろうと思って」

シャマルの言葉にセイバーも笑みを浮かべて頷く。確かに、この翠屋のケーキならばきっとリインも気に入る。そう思ったからだ。現に、なのは達の中で、ここのケーキやシュークリームは大人気の品なのだ。

一番のお得意様が、セイバーであるのが中々笑える話ではあるのだが。ともあれ、超甘党のリンディもこれならと太鼓判を押し、本気でミッドに支店を出して欲しいと頼まれたぐらいなのだから。

まぁ、それを少し本気で考えた桃子も桃子なのだが。ちなみに、そうなった場合、支店を任せるのはアーチャーしかいないと言って

いたので、アーチャーの腕は菓子にも通用するようだ。
本人は、頼まれても辞退するだろう。そう考えたからこそ、結局その話は立ち消えたのだ。こうして翠屋二号店は幻と消えたのだった。

「それはいいですね。リインフォースも気に入るでしょう」

「そうだといいのだけど」

「心配いらないよ。あのシグナムだって、ここのケーキには笑顔になるんだろ？　なら同じだって」

アルフの言葉にシャマルも少し笑って頷いた。シグナムだけではない。あのザフィーラさえ笑みを浮かべずにはいられない味なのだ。それを初めて見た時、はやてはこう呟いた。

――――守護騎士殺しや……

それを聞いたアーチャーが「どこの日本酒だ」と突っ込んだのだが、それはさすがのはやても知らなかったのか、疑問符を浮かべてそんな名前の酒があるのかと逆に尋ねた。それにアーチャーはどこか気まずそうに説明した。
どうやら鬼ころしなる酒があるらしく、それをてっきりはやてが知っているのだと思ったそうだ。未成年相手に酒の説明をするはめになったのが嫌だったのか、それとも、突っ込みを外した形になったのが恥ずかしかったのかは、今をもって分からないままだ。

その後、セイバーはシャマルに先程感じた違和感を確かめるべく、問い質そうとしたのだが、そこからまた忙しさが戻ってきたため、断念せざるを得なかった。客を相手にしながら、セイバーは思う。

もしかしたら、はやての事で何か判明した事があるのではないか。
それも、あまり良くない方向で、と。

（いけませんね。すぐに悪い風に考えてしまいます）

自分の癖ともいえる発想に苦笑しつつ、仕事が終わったら聞いてみようと思って、セイバーは接客をしていく。その後ろでシャマルとアルフも忙しなく動いているのだった……

絆、信じる気持ち

八神家　リビング。リインはザフィーラと共に現状を確認していた。蒐集の残りである二百六十五頁。それが完了までの残りだ。リインの考える最長時間ならなんとかなるだろうが、それより早い時期が限界と考えると、かなり厳しい状態だった。

守護騎士達が覚醒してから今まで約三ヶ月弱。それで四百なのだ。残り最長で二ヶ月程。最短では一ヵ月半。それで今までの半分強を稼がねばならない。もう頁が稼げる生物はほとんど蒐集をしてきた。つまり、蒐集が可能な相手は、ほとんどが一回辺り一頁か一頁半が限度のようなものばかり。

これでは、時間が足りなさ過ぎるのだ。どこかで大きく頁を稼がなければいけない。それも十頁以上の大物を。だが、そんな相手は魔導師ぐらいしか有り得ない。つまり、毎日のように蒐集しなければ間に合わない計算だ。

（いや、下手をするとそれでも無理かもしれんな）

ザフィーラは先程から考えていた事に、そう自分で結論付けた。しかし、何とかして方法を考え出さねば、はやてが死んでしまう。それだけは何とか避けなければならない。

「……盾よ」

「……何だ」

「どうすればいいのだ。主を助けるにも、まず蒐集がままならないのでは……」

きっとリインも自分と同じ事を考えたのだろう。そして、行き着いた答えも同じだったようだ。唯一の違いは、自分はまだ諦めずに考えようとした事に、リインは絶望にも似た気分になったぐらいか。

そう判断し、ザフィーラははっきり言い切った。確かにそうかもしれない。だが、そこで不安に押し潰されては、本当にどうにもならなくなると。

「今、考えるべきは蒐集を如何に素早く完了させる事だ。穴があるような発想でもいい。何でも考え、後で改善すればいいのだ」

「……盾」

「それと、俺の名はザフィーラだ……リインフォース」

「……そう、だったな。すまないザフィーラ。礼を言う」

「気にするな。家族なのだからな」

そう言ってザフィーラは再び考え出す。元来彼はそういう役目ではないが、今は役割がどうのと言っている場合ではない。そう思っているからこそ、彼は必死に考えを巡らせる。どんな些細な事でもいい。何かあれば、それを形にしてくれる者がいる。

シャマルやシグナム、そしてアーチャー。知恵ならライダーやランサーからも借りればいい。そう思った瞬間だった。

（借りる……そうか！）

「あったぞリイン。今まで以上の速度で蒐集出来る手が」

「何っ？！」

「借りるのだ、彼らの手を。問題はあるが、俺ではそれしか思いつかん」

ザフィーラの語った内容にリインは納得し、今はそれ以上の考えがないと思った。そう伝えるとザフィーラは首を横に振って告げる。本来ならば、自分達だけでせねばならない蒐集行為。それに大人であろうと他者を巻き込むのはしてはならない事だと。

そこでザフィーラが出した話は、なのはの事。彼女も蒐集を手伝いたいと言ってくれたが、アーチャーがそれを激しく怒った。それは、蒐集が誉められる事ではないからだ。それに無垢な子供を巻き込んではいけない。

「きっと、アーチャーはそう言いたかったのだろう。子供が子供でいられるように。そのために、大人はいるのではないだろうか」

「……ザフィーラ」

リインはザフィーラの言葉に驚きと感銘を受けた。ただのプログラムに過ぎなかった彼が、昔以上にその外見に相応しい存在となっていると感じたからだ。アーチャー達の影響だろうと思う。だが、それもザフィーラが自らの意志を持ったからだ。そう思った。

昔の記憶を呼び覚ますが、そのどれよりも今のザフィーラは輝いていた。リインはそう思い、頷いた。

「お前の言う通りかもしれん。しかし、守護獣ではなく、最早武人の風格さえあるな」

「……アーチャーやランサー、小次郎には及ばん」

どこか照れたように言って、ザフィーラは部屋を出て行く。風呂掃除をしてくると言って、そのまま風呂場へ消えた。それを見送り、リインは小さく笑みを浮かべた。本当に変わったと、心から思いながら。

二人しかいない家に、リインの楽しげな笑い声がする。それは、彼女が起動してから初めての笑い声だった……

「……駄目だ。もうこれ以上は見つからない」

ユーノの落胆にも似た声が無限書庫内に響く。クロノとエイミィもそれを聞いて、どこか同じ顔をした。隣で本に目を通していたロッテも、その声に一度、視線をユーノへ向けた。その目は、ここまで執拗に検索魔法をし続けたユーノを、どこか誉めているようにも見える。

だが、次の瞬間、ユーノが再び検索魔法を展開した。それに三人が疑問符を浮かべた。今、自分でもう見つからないと言ったばかり

なのだ。なのに、ユーノはまた同じ事をしようとしている。そう思ったからだ。

「おい、ユーノ。気持ちは分かるが――」

「今度は闇の書を検索してるんじゃない。夜天の魔導書で検索をかけてる」

「ちょ！　それじゃさすがに……」

そう、それでは解決策に関係ないものが出てくるだろう。そう思ったエイミィはやや疲れた表情。ロッテも元来こういう作業が苦手なのか、少し嫌そうだ。一人クロノだけが、ユーノのその行為の意図を考え、納得していた。

改竄される前では、確かにどう直せばいいかは載っていない。だが、まず自分達は正しかった頃の姿も良く知らない。それを知る事がもしかしたら何かの手掛かりになるかもしれない。そう思ったからだ。

「さすが、未来の司書長は違うな」

「止めてよ。言ったろ。まだ僕は手伝いでいいって」

少しからかうように告げるクロノに、ユーノは軽く笑みさえ浮かべて答えた。そのやり取りを見ていたロッテだったが、まだクロノが近い歳の同性と仲良く喋っている事に違和感があるようで、不思議そうに眺めて首を傾げる。

それにエイミィは気付いて、小さく笑って呟いた。誰でも最初はそんな顔です。それにロッテも頷いて、二人を見つめ、嬉しそうに微笑んだ。クライドが死んで数年後、まだ幼いクロノが魔法を教わ

りに来た頃を思い出していたのだ。
　これと言った才能がなく、魔力量がそれなりに高いぐらい。これではせいぜいなれて武装隊かな。そんな風にロッテは思っていた。だが、クロノはめげなかった。来る日も来る日も努力し、ロッテやアリアが想像するよりも成長し、当初の予想を超えてみせたのだ。

（あのクロ助が、まさか執務官になるなんて。そう思ったからね）

　二人は出来る限りの知識や技術を教え込んだ。それでも、クロノの道は厳しいだろうと思っていたのだ。クロノが目指す執務官は狭き門。高度な知識や判断、技術に経験が求められる。二人は、クロノならいつか合格するかもとは思っていたが、それが一発合格と聞いた時は、我が事のように喜んだものだ。
　その時、二人は思ったのだ。クロノは才能がないんじゃない。それに自分達が気付いてやれなかっただけだ。だから、クロノはそれを自分で磨き、そこまで至ったのだろうと。

　その弊害なのか知らないが、クロノはあまり友人を作っていない。いや、いるのだろうが、歳の近い相手はあまり見た事も聞いた事もないのだ。更にここまで砕けたやり取りをするなんて、ロッテにとっては信じられなかったのだ。
　しかし、同時に嬉しくもある。自分達では教える事が出来ない部分。それをクロノは自分で学んでいると感じられたから。

「……とりあえずこれだけ、かな」

「そうだな。よし、僕はこちらを。エイミィとロッテはそちらを頼む」

「「了解」」

たった三冊。それでも貴重な資料だ。クロノはそう思い、やや疲れた表情のユーノを労う事もせず、てきぱきと指示を出す。それに応え二人はそれぞれ情報を探す。するとクロノは自分もそれを手伝おうとしたユーノの肩に、手を軽く乗せこう言った。

――少し休んでろ。今はお前が一番の頼みなんだからな。

その言葉にユーノも若干驚いたようだが、どこか嬉しそうに笑みを見せると頷いた。ちゃんと「分かったよ、隊長」と軽くからかうのを忘れずに。それにクロノも小さく笑みを浮かべるも、すぐにそれをかき消して手を振った。

そんな光景を見て、ロッテとエイミィは互いに笑みを浮かべる。そんなどこか和やかな雰囲気の中、アリアが姿を見せるのであった……

時間はもう午後九時を過ぎ、はやてがリインを連れて風呂へ向かった。それを見て、アーチャーが全員を見渡した。それが意味する事に気付き、四人は頷いた。そう、ザフィーラがリインから聞き出した事を話し合うためだ。

はやてが寝るのを待ってはいられない。そう、今夜から深夜は蒐集へと出かける事になったためだ。故に、少しでも時間を有効に使わねばならない。

「それで、どうなのだ」

「リインが言うには、完成すると主を取り込み、防衛プログラムと呼ばれる機能が表面に現れ、自分では制御出来なくなるそうだ」

ザフィーラはリインから聞き出した完成時の状況などを語っていく。それを聞き、全員はすべき事を理解していく。つまり、はやてが取り込まれている間、リインとは外見が同じだけの恐ろしい存在になる。そして、それを魔力ダメージで止めなければならない。

そして、それによって停止させた隙を使い、リインがはやてと協力し、闇の書と呼ばれた原因を排除。その後、それが具現化し出現するであろう闇の書の闇と呼ぶべきものを、完全に消し去る事が出来れば、はやては助けられるだろうとの事だった。

シグナム達は、それを聞いてどこか安心したような表情を浮かべた。しかし、アーチャーは確かに希望を抱いてはいたが、どこか腑に落ちないものも感じていたのだ。もし、リインの言う事が正しいのならば、どうして今までそうしなかったのだろうと思ったのだ。

守護騎士達だけでは厳しかったのかもしれないし、そもそもそんな考えを抱く事すらなかったのかもしれない。だが、何かがアーチャーの中で引っかかっていた。言いようのない懸念とも言うべき感覚。それの正体に、アーチャーはおぼろげながら心当たりがあった。

（あまりに都合が良すぎるのか。まるで疑問を抱かぬように組み立てられた筋書き。そして、決まっているかのような大団円……）

ジュエルシードを使ったあの時でさえ、どうなるか分からないと思ったのだ。それが、これまで多くの犠牲を出した闇の書は、その気になれば全てが上手く収まる。そんな流れに違和感を感じていたのだ。

だがアーチャーには、仮にそれが嘘だとしてもリインの意図が分からないのだ。不安を与えないため。それも有り得る。本当にそれが事実。そうかもしれない。

（……何故だ。何故私はこの話を鵜呑みに出来ん。……リインに問い質しても無駄だろうな。だが……やはり気になるな）

アーチャーは一人そう思いながら、シグナム達へリンディの意見を伝えた。局員としては見逃せない。だが、個人としては協力したい。その結論として、出会った際は容赦しないし温情も掛けられない。しかし、これまでと同じく気付かれないようにする分には、口出しはしない。

それがリンディに出来るせめてもの譲歩。それにシグナム達は心からリンディの心遣いに感謝した。だが、まだ問題は残っている。

「それで、何か蒐集の効率化は思いついたのか」

シグナムの言葉にアーチャーがやや苦い顔をする。それを見て、シャマルやヴィータは何かを悟った。シグナムもそれに気付き、二人の気持ちを代弁するように尋ねた。他者を巻き込むのか、と。

それに頷くアーチャー。だが、と前置いて告げたのは、協力を仰ぐのはなのは達ではなくランサー達だ。そう言ったのだ。それに三人も納得した。ランサーや小次郎ならば技量などに不安はない。ライダーも協力してくれれば、シグナム達が安心してバラバラに蒐集出来る。

確かにそれならば、今まで以上に効率は上がる。それでもアーチャーがどこか嫌そうなのは、蒐集行為に巻き込むためだろう。ランサー達とはいえ、今後の蒐集は完全違法行為だ。それをランサー達は構わないだろうが、アーチャーはそうもいかない。その事を考え、シグナムは内心苦笑する。

（まったく、相変わらずだな……）

（相手は気にしないのに、自分が気にするなんて……）

（こいつ、どこまでも他人を巻き込む事を気にすんだな）

（……主もそうだが、アーチャーは特に他者に気を遣い過ぎかもしれんな）

まだ半年にも満たない時間だが、彼らもアーチャーの事を良く理解している。故に、以前ならば呆れたのかもしれないが、今はそんなアーチャーが好ましく、そして嬉しくある。いつでもはやての事を考え、そして周囲の事を考える。

犠牲を嫌い、それを無くすためならどんな危険も恐れない。そんな優しい皮肉屋に全員が苦笑を隠しつつ、改めて現状を把握しようとした瞬間、シャマルが手でバツを作った。前もって、はやてと風呂を出る際、リインに念話をするようにしたのだが、その合図だ。

「いや、リインも中々ええもん持っとるな」

「あ、主……あのような事を今後は控えてくれると……」

聞こえてきた声にアーチャーは小さくため息を吐くと、はやての方へ向かって歩き出す。リインがはやての車椅子を押しながら、困り顔をしている。その原因がいつものはやての行動だと分かっているアーチャーは、ご機嫌なはやてにため息混じりで尋ねた。

いつになったら、相手の許可も得ずに胸を触るのを止めてくれるのだ。それに、はやてはにこやかに断言した。

「死ぬまでこのままや」

その言葉にアーチャーは優し目に拳骨を落とす。それを楽しそう

に痛がるはやて。その光景を見つめ、微笑むシグナム達。リインもそれに微かではあるが、笑みを見せる。それにはやてが気付き、心から嬉しそうな笑顔を向けた。

「良かった。リインがやっと笑ってくれたわ」

「ん？　……本当だな」

その声をキッカケに全員がリインを見つめ、リインはそれにどう対処していいのか分からず、ややうろたえる。それに益々周囲の笑顔も深くなり、余計にリインは困るのだが、やがて観念したのか一緒になって笑みを見せる。

――主には敵いません。

そうリインが言うと、はやて以外が全員して大きく頷いた。それに胸を張るはやて。それにまた笑いが起こる。こうして、この日は過ぎていく。だが……

（やっぱ、アーチャー達に何かある気ぃするな。でも……今は信じて待つか。必ずわたしに教えてくれるはずやしな！）

はやてを助ける道筋。それがすんなり決まった事にアーチャーは疑問を感じ、はやてはアーチャー達の些細な変化に疑問を感じる。だが、優しき少女は信じている故に黙る。必ず教えてくれる。そう家族を信じるから。この絆、これこそが闇に対抗する力となる……

ーーー

幕間１０

バニングス家の庭。そこにアーチャーはいた。そして、彼だけではなく、小次郎にランサー、ライダーもいる。三人はアーチャーから頼みがあると言われて、こうして集まった。場所がバニングス家なのは、アーチャーの指定。

その理由を理解しているのは、おそらくランサーだけだろう。小次郎とライダーはどこか不思議そうにしている。

「頼みというのは他でもない。はやての事だ」

その切り出し方から、三人の表情が変わる。アーチャーは、ランサーにはもう話したが、と前置いて語り出す。はやての体に起きる出来事とその結末を。そして、そのために三人に力を貸してほしい事を。

蒐集行為の手助け。それ自体は三人も問題なく了承した。元々ランサーは、ジュエルシード事件の際、アーチャーにこう言った。この件が片付いたら、手伝ってやると。それを果たすだけだったからだ。ライダーと小次郎も似たようなものだ。アーチャーが協力する際、はやての足の事についてはもう誓いを交わしている。

それに、はやてを死なせる事は二人が守る少女の笑顔を失う事にもなる。そう、故に迷いなどない。

「さて、じゃ早速今夜からか？」

「ああ。だが……」

「分かっています。スズカ達には気付かれないように、ですね」

「言われるまでもない。何、ありさは寝付きがいいのでな。気付く事もあるまい」

笑みさえ浮かべる三人を見て、アーチャーは頭を軽く下げる事で感謝を示した。それに三人は小さく笑い、気にするなと告げる。それにアーチャーは内心でもう一度礼を述べると、蒐集について話し出す。小次郎はヴィータと、ライダーはザフィーラと、ランサーはシャマルと組んで欲しい。そうアーチャーは告げた。

それぞれの能力や相性を考えた結果だと、アーチャーは言った。それに三人は考えて納得。汎用性が高いヴィータは、接近戦しか出来ない小次郎のいいフォロー役になり得るし、格闘戦や耐久力に自信のあるザフィーラは、機動性の高いライダーを支えるにはもってこい。シャマルは癒しと援護の騎士なので、切り込み役のランサーとはいいコンビとなる。残ったシグナムは、抑え役としてアーチャーが組んで行動する。

その案に三人はアーチャーの立案能力を再評価し、素直に誉めた。それにアーチャーは大した事ではないと謙遜する。しかし、そこでふとランサーが口を出した。セイバーはどうするのかと。

それにアーチャーはこう返した。セイバーは仕事をしているため、中々いざという時抜け出せない。そして、セイバーまでが蒐集に参加すると、なのは達に気付かれる可能性も出てくる。セイバーは嘘を吐く事が嫌いだ。隠し事も好きではない。

「確かに最初は、彼女もリインと組んで蒐集に当たってもらおうかとも考えた。だが、色々考慮し、止めたのだ」

「……そうですね。確かにセイバーはこういう事に向かないでしょう」

「隠密行動は得意ではないだろうからな」

「ま、隠れてこそこそは似合わねぇだろうし」

口々にそう言っていく三人。その表情は笑みを浮かべている。それにアーチャーも苦笑気味に頷いた。四人の中では、セイバーは常に堂々としているイメージなのだ。それだからこそ、こんな影の仕事をさせたくないと思ったのかもしれない。

本人が知れば、協力すると言って聞かないだろうが、それを知らせる事は四人がしない。

その後、完成時の事も話し合い、アーチャーはセイバー達には時期を見て自分から話すと告げた。それにランサー達も頷いて、その日はお開きになった。夜にまた会おう。そう言い合って……

忍び寄る不穏な影

アーチャーがランサー達と話し合いを始めた頃、セイバーはなのはとトレーニングを行なっていた。今日は仕事も休みだったため、なのはとの時間を沢山取れるとセイバーは意気込んでいた。

今、二人がしているのは、リニス監修の魔法訓練。道場の中で、シューターを壁に当てる事無く、セイバーだけを狙って攻撃し続けるもの。なのははセイバーを必死に目で追いながら、その軌道を操作していた。

対するセイバーにも、これは訓練なのだ。一切攻撃する事無く、なのはの集中力が切れるまで避け続ける。しかも回避が許されるの

は、なのはの視界内のみ。つまり、なのはの後ろや死角に動いてはいけない。制限された空間のみでの回避運動なのだ。

【レイジングハート、次、クイックアタック行くよ！】

”どうぞ”

セイバーに悟られないように、レイジングハートとの会話は全て念話。なのはの周囲にディバイン・シューターが二つ出現する。それがセイバー目掛けて動き出す。その弾道を読みきり、難なくかわすセイバーだったが、その瞬間何か嫌な予感がし、即座にその場を飛びのく。

と同時に通り過ぎるシューター。なのははセイバーが避ける位置を予測し、既にそこへ別のシューターを回り込ませていたのだ。最初のシューターを囮に使い、セイバーの視線をそちらへ向ける。その間に別のシューターを予測地点に配置し、セイバーの行動終わりを狙って即座に攻撃。

クイックアタックとは、速攻の事だけではなく、その一連を素早くこなす事も意味するのだ。

（あれを避けるんだもんなぁ～）

（今のは中々……。なのはも成長していますね）

内心で互いに感心し合う二人。ちなみに、フェイトはなのはとの模擬戦をやる度に、やったらやっただけ強くなると感じていた。だが、それはフェイトも同じだ、とはなのはの言葉。つまり、見ている者達からすれば、どちらもどちらである。

その模擬戦をプレシア発、リンディ経由で見たクロノが少し焦り、訓練を増やしたのはここだけの話。現役執務官としては、フェイト

はともかく、魔法と出会って半年足らずのなのはに遅れを取りたくはないのだ。

そのまま訓練はセイバーの粘り勝ちで終了。なのはも何度か良い所まではいくのだが、セイバーの直感の前には勝てず、最後は集中力を乱し、シューターを壁に掠らせてしまった。

そして、今は二人で訓練の反省会。自分で自分の悪い点と良い点を挙げるのだ。それは、ちゃんと自分を客観的に判断し、理解するためのもの。これ自体は、セイバーとトレーニングをし始めた頃からの決まり事。

「……て感じかな」

「そうですね。今後は状況に応じた選択が迫られます」

「速度か、命中精度か、威力か。そういう事？」

「ええ。今は何を優先すべきか。それを判断し、的確に実行しなければ、ヴィータやシグナム、フェイトのような相手には通用しません」

なのはが挙げた良い点は、相手の行動などを予測し、攻撃に生かせた事。速度に緩急をつけ、相手を惑わせる事が出来た事などを挙げた。悪い点は、予測したのはいいが、その攻撃自体は普段と変わらないため、かわされてしまった事。惑わせるのは良かったが、それが次の攻撃にあまり生かせなかった事などを挙げた。

それにセイバーはこう答えたのだ。例えば、行動を予測したのならば何よりも優先すべきは攻撃速度。それをいかにして当てるか。そのために求められるのは、その都度違うのだ。

なのははそれを聞きながら、色々と考える。セイバーはこう続けた。シューター一つとっても、速度を重視するもの、精度を重視するもの、威力を重視するもので大きく三つに分けられる。それは、同じ魔法であっても同じではないものとなる。

「勿論、これは極論です。ですが、そう考えると色々と戦術が広がるでしょう」

「……うん。基本的にはスピードシューターでも、精度を落としてパワーを増す事だって出来るし、その逆だって出来る」

「シューターだけではないはずです。バスターもそこまで極端にはならないでしょうが、同じような発想は出来るはずです」

「そっか！　使える魔法が少なくても、技術と発想で沢山の魔法を使えるのと同じに出来るんだね！」

セイバーの言葉になのはは目を輝かせて立ち上がった。未だになのはが使える魔法はそう多くない。でも、一つの魔法でも、バリエーションが増やせれば、それは多くの魔法を使える事と同じ。それに気付き、なのはは嬉しかったのだ。

フェイトはなのはよりも多くの魔法を使える。それがなのはには羨ましかった。でも、無理に多くの魔法を覚えなくてもいい。今ある魔法を使いこなせば、それに勝るとも劣らない事が出来るかもしれない。

そう希望が持てるだけで、なのはの中では大きな希望となった。そして、それと同時にある事をなのはは思い出し、頷いた。それに不思議がるセイバーだったが、なのはが笑顔なので良しとした。

（ディバイン・バスターを威力重視にして、アレみたいにしよう。

名前は……うん！　アレみたいな感じにしたいから……）

一人にこにことアイディアを膨らませるなのは。そんな彼女を、セイバーは微笑みを浮かべて見つめるのだった……

なのはが新しい魔法の発想を得ている頃、フェイトはアリシアとリニスと共に時の庭園にいた。そこで魔法訓練をしていたのだが、フェイトは何かをずっと考えているらしく、最近あまり訓練中の動きに精彩がない。今日も訓練が終わったのだが、まだ何かを考えているのか、フェイトはバルディッシュを元に戻さない。

「フェイト、どうしたのですか？」

見かねたリニスがそんな風に尋ねるぐらいに。実はシグナム達と協力し、模擬戦をした後からそんな感じだったのだ。何か魔法を試しているらしいのだが、それがどうしても出来ない。そんな風にリニスには見えた。

アリシアは生憎魔法は何も分からないが、フェイトが何を悩んでいるかは察している。だから、リニスに何か告げるのを躊躇っているフェイトに変わり、アリシアがこう言ったのだ。

「フェイト、剣が使いたいんだって」

「剣？」

「あ、アリシア……それは……」

フェイトの声にリニスはそれが本当の事だと理解した。そして、

同時にフェイトが魔法を成功させられない理由にも気付いた。

「……シグナムのレヴァンテインのようにしたいのですか？」

シグナムが使うベルカ式のアームドデバイス。それは確かに剣の形をしている。それをフェイトは小さく否定した。違うと。自分が使いたいのは剣は剣でも、輝く剣なのだ。そうフェイトは言った。

その言葉に疑問符を浮かべるリニスとアリシアだったが、フェイトが「セイバーの宝具だよ」と告げると、納得した。光り輝く剣。黄金の輝きを放つアレを、フェイトは魔法で表現したかったのだ。

（あの時見た光……アレを、何とか目指したい！）

未だにフェイトはランサーが宝具を使うところを見た事はない。だが、ランサーはセイバー程の仰々しさはないと、苦笑して言ったのだ。それに、フェイトには似合わないものだからと告げ、ランサーはフェイトに言ったのだ。

お前なら、あっちの方が似合う。そうランサーも言ってくれた。あの全てを斬り開くような輝き。絶望の闇を消し去る光の剣。フェイトの記憶に強く刻まれた一撃に、フェイトは強く焦がれていたのだ。

その想いが伝わったのか、リニスは小さく苦笑すると、フェイトへこう告げた。バルディッシュは可変型だから、何とかして剣の形態を作ってみせます。その代わり、しばらく預かる事になるが、それでもいいかと。

それにフェイトが驚き、そして少し迷った。自分のワガママで、バルディッシュを改造していいのだろうかと。だからだろう。バルディッシュがフェイトへこう告げたのだ。

”迷う事はありません”

「バルディッシュ？」

”力に善悪はない。だからこそ、善き事に力使える者は、悪しき者に力で負けてはならないのです”

「……それって」

”私は貴女の負ける姿を見たくありません。ならば、この身を賭して期待に応えるだけです”

バルディッシュが言いたい事。それをフェイトは理解した。フェイトのワガママだとしても、それがいつかフェイトを助ける事になるのなら、迷う必要はない。自分は、フェイトを支えるためにいる。ならば、躊躇わずに決断を。

そう言いたいのだろう。フェイトはそう理解し、嬉しそうに告げた。ありがとう、と。それにバルディッシュはお気になさらずと返すのだった……

勉強会もなく、アリサはすずかと習い事であるバイオリン教室にいた。楽器の一つくらい出来なきゃ淑女じゃないわ、とはアリサの言。そう、アリサとすずかが初めて二人で話した際、すずかが興味を持ったのがバイオリンだったのだ。

以来、こうして二人は週に一回の間隔で習っている。二人共もうそれなりに上達しており、何度かコンクールへ出ないかと言われているのだが、それを二人は断り続けていた。

「……やっぱ、演奏してると落ち着くわ」

「そうだね。今度、二人でアリシアちゃん達に聞かせようか」

断る理由。それは、興味がないからだ。二人は趣味でやっているのであって、これでプロを目指している訳ではない。それに、近い事ならもう何度かやっているのもある。なのはやはやてには何度か聞かせた事があるのだ。

フェイトやユーノにはまだないのだが、だからこそすずかはそう言ったのだろう。夏休みも後数日。最後にそんなイベントをやってもいいか。そうアリサも考え、頷いた。

「いいわね。じゃ、アタシの家にしましょ。すずかの家だと猫達に迷惑だし」

「そんな事ないけど……」

「それに、何だかんだでユーノもアタシの家来た事ないし」

アリサがそう言うと、すずかが苦笑した。アリサはユーノを驚かせたいのだろうと思ったからだ。自分でも呆然となった豪邸なのだ。ユーノが面食らわないはずがない。

そんな事を考えるすずかに、アリサはやや不満顔。どうやらすずかの笑いの理由に勘付いたようだ。それを見てすずかは謝り、アリサも許すと言ってこの話題は終了した。

二人はその後、鮫島の運転する車で帰路に着き、すずかを降ろした後、アリサは自宅へと戻る。その途中、アリサは何か変なものを見た気がした。それは、月村家を監視するかのように車に隠れて見つめる怪しげな男達。

その姿を見て、アリサは直感的に何かを感じ取る。そう、その男達の目は誘拐犯達と同じ目だったのだ。

（……警察……ううん。ここは小次郎達ね）

頼れる存在。それが自分達には大勢いる。それを思い出し、アリサは携帯を取り出す。そして、かけようとしたところで――。

「あいつ、携帯持ってなかったんだった……」

アナログ人間だった事を思い出し、結局アリサはライダーへかける。ライダーはアリサの連絡を受け、その男達を捜すも、既に男達はその場を離れたようで、その姿は確認出来なかった。

これが、夏休み最後の大事件の始まりだとは、この時誰も思わなかった……

――――――

ついに、ライダーが戦闘を繰り広げる展開が近付いてきました。

A' s二話　前編

深夜の八神家。部屋の主であるはやてと眠るヴィータだったが、はやてが完全に寝入ったのを確認し、静かにベッドを抜け出す。細心の注意を払い、向かう先はリビング。そこには、アーチャーを始めとした家族全員が揃っている。

「わりぃ。遅くなった」

「いや、別に構わん。ランサー達と落ち合う場所は一先ず公園にした。そこからはそれぞれ別れて行動だ」

アーチャーの言葉に五人は頷く。リインは念のためシャマルと共にランサーと蒐集を手伝う事となった。ランサーは最速のサーヴァントだが、それでも万が一後衛のシャマルを守れない場合があるかもしれない。

そう考えたアーチャーが、リインにも手伝いを頼んだのだ。リインがそれに即座に頷いたのは、言うまでもないだろう。

こうして、六人は静かに家を出る。その音を聞く者は、いない。ただ一人の少女の寝息だけが、静けさの中にあるだけだった……

災い、蠢く

深夜の海浜公園。そこに戦闘時の格好をしたランサー達がいた。

それを確認し、アーチャー達も速度を落とす。そこで簡易的に三人へ礼を述べるシグナム達。それに笑みを返し、早速とばかりに全員が動き出す。

転送魔法を使い、それぞれが無人世界へと向かう。互いに頼りにすると告げる小次郎とヴィータ。よろしく頼むと言い合うライダーとザフィーラに、ランサーが美女が二人とはと嬉しそうに笑えば、リインは戸惑い、シャマルが苦笑。

シグナムはそんな三組を見て小さく「これでは遊びにでも行くようだ」と呟き、アーチャーが違いないと返した。そして、次の瞬間全員の姿が消える。はやての命を救う。そのための足掻き。その開幕であった……

同時刻　月村家前。門を眺めている女性がいた。いや、正確には門ではなく、庭に仕掛けられたトラップの数々を探っていた。その目は、赤外線や熱反応などを見分け、トラップの位置などを把握していく。

やがて、それを全て終えたのか、女性は懐から手紙を取り出すと、それを郵便受けに投函する。そして、にやりと笑い呟いた。

「これで良し、か」

そして、門に背を向けて歩き出す。その姿は、実に様になっている。しかし、その目に宿る光は暗い。全てを恨むかのような光。そんな闇にも近い瞳をした女性は、突然歩みを止めた。携帯が鳴ったのだ。

それに舌打ちをし、女性は電話に出る。相手の男は、女性にどこにいるのかと尋ね、言われた通りに月村家の偵察をしていたと告げるや否や嬉しそうな声を出した。その下衆っぽい声に、女性は苛立

ちを感じながら、務めてそれを出さないようにした。

「では、早めに戻ってこいよイレイン」

「分かりました、安次郎様」

そう言って電話を切るイレイン。彼女は、ノエル達と同じ自動人形と呼ばれる存在。しかし、彼女はノエル達と違う事がある。それは――――。

「……チッ！　主人面しやがって。いつか痛い目に合わせてやる」

主人に対して忠義心を持っていない事だろう。その理由には、イレインだけの責任ではないものがあるのだが、それはここでは関係ない。彼女が月村家を下見した理由、それは彼女のある目的のため。

そう思い返し、イレインは振り向き、もう一度月村家を眺めた。その外観を見つめ、イレインは呟いた。何も知らずにいればいい。必ず目的を果たしてみるさ。そう呪詛のように……

夜が明けて早朝。淡く日が差し出した海浜公園。蒐集を終えたアーチャー達は、そこでそれぞれの戦果を夜天の魔導書に蒐集させ、報告し合っていた。四組の合計で十頁半。予想よりはましだった。だが、問題はある。

そう、これでも一組辺り六匹を相手したのだ。それでこれである。つまり、今後も精々稼げて十頁という事だ。それも、今回のようにすぐに相手が見つかればいい。その発見が遅れればそうもいかない。

「……前途多難ですね」

ライダーの呟きは全員の気持ちを語っていた。そう、いつも四組がこの時間まで蒐集出来る訳ではない。シャマルやシグナムはそれぞれ仕事がある日は、早めに帰り休ませたいし、ヴィータも老人会との付き合いがある。

三人はそれを休んだりしようとしたのだが、アーチャーがそれを説き伏せた。翠屋にしろ、剣道教室にしろ、老人会にしろ、特に理由なく休めばはやての耳に入る可能性が出てくる。なのは達がそれを知るだけでも駄目なのだと、そう言って。

つまり、今回のような時間までの蒐集が出来るのは、週に二回程なのだ。それを考えると、今後は色々と大変になる。ランサー達が協力してくれるおかげで、シグナム達の消耗は少ない。しかし、蒐集出来るのが守護騎士達しかいない以上、彼らがいなければ必然的に効率は落ちる。

「……とにかく、今後は組み合わせになっている相手とここで落ち合う事にしてくれ。ランサー達も事情があって来れない際は、私に電話をしてくれればいい」

それに三人も頷き、シグナム達に別れを告げて去って行く。それを見送り、リインは噛み締めるように言った。

「強いのだな、彼らは」

「ああ。ランサーと一緒だったのならば見ただろう。あの神速の槍捌きを」

シグナムが笑みを浮かべてそう言えば……

「小次郎もすげ～ぜ。あれ程の剣士はあたしもしらねぇ」

ヴィータが改めて見せ付けられた剣技の冴えを思い出すように告げる……

「いや、ライダーの変則且つ無駄のない動きも恐ろしい。力もある」

ザフィーラがライダーの変幻自在な挙動を思い浮かべ、そう言い切った。

「それよりも、アーチャーでしょ。近距離遠距離も出来れば、中距離だってこなすんだから」

「……誉めてくれるのは嬉しいが、そろそろ帰ろう。はやてが起きるとも限らんからな」

アーチャーのその一言に全員が頷いて歩き出す。この後、シャマルとシグナムは軽く仮眠を取り、ヴィータは昼近くまで寝て、ザフィーラは逆に昼まで起きて掃除をし、それから夕方まで眠った。リインはアーチャーとはやてが朝食を作る手伝いをし、ザフィーラと共に昼寝をするのだった……

月村家へ走って戻るライダー。徐々に視線の先に屋敷と庭が見えてきた。だが、早朝にも関わらず、何故か忍が庭にいるではないか。それに軽く驚くも、ライダーは速度を落としながら門の前に立つ。

そして、門から入り、忍の下へ。忍もライダーに気付いていたのか、何も言わずただライダーが来た方向を見つめていた。その視線にいつもはないものが含まれていると感じ、ライダーは尋ねた。何

かあったのかと。

「……すずかには言わないで」

「……厄介事ですか？」

「そう。しかも、一族同士の、ね」

忍の口から出た一族との発言に、ライダーは不思議そうな表情を浮かべた。それに忍は静かに語り出す。夜の一族は、実は自分達姉妹だけではないのだ。ライダーも、名前だけは知っている”綺堂さくら”もその一人。そして、月村家自体にも親戚がいるのだ。名を、安次郎といい、経済界ではそれなりに知られている人物。だが、事もあろうにノエル達をよこせと言ってきているのだという。

自動人形の技術は、現代でも通用するオーバーテクノロジーだ。それを安次郎は商売にし、ノエル達をおそらく慰み者として考えているのだろう。そう忍は吐き捨てるように言った。

「……で、今日こんな手紙が来たの。直接投函したんでしょうね」

忍が見せた手紙をライダーは開いて読んだ。そこには、忍が言った内容が書いてあった。ノエル達は月村の財産である。それを管理するのは、大人である自分の方が色々と都合がいい。心配せずとも、悪いようにはしないから、二人を自分に任せろ。

そんな風な内容だった。そして、最後にこう書いてあった。もし、これを受けてくれないと困った事になるかもしれない。

「……脅し、ですね」

「そうよ！　すずかに言わないで欲しいのはそのため。あいつみた

いなクズでも、すずかには親戚よ。あの子には、まだこんな世界は見せたくない」

「気持ちは分かります。でもシノブ、いくら相手が何を考えてもノエル達相手に勝てるとは思えませんが」

ライダーは、安次郎が例えすずかと同じく尋常ではない力の持ち主でも、簡単にノエル達が負けるとは思えなかったのだ。だが、その言葉に忍は苦い顔をして答えた。ノエル達自動人形は、安全装置のようなものがあって、人を傷付ける事が出来ないようにされている。それを安次郎も知っているから強気に出れるのだと。

ライダーはそれを聞いて納得した。つまり、相手はノエル達ではなく、忍やすずかを抑えればいいのだ。殺される心配はないのだから、ノエル達は無視してもいい。しかし、そう考えてライダーは気付いた。

「それにしても、些か腑に落ちません」

「……そうなのよ。ノエル達に勝てるはずはないし、すずかを誘拐でもするのかとも思ってるんだけど、それだけじゃない気がして」

「ノエルのような存在がまだいるのでは？」

「それなら私に……！　そうか、それなのかも」

忍は告げた。ノエル達自動人形はその技術のほとんどが失われていて、本来なら修復するにも途方もない費用と時間が必要なのだ。だが、忍はそれを自力で解明し、何とかノエルとファリンの二人を起動させ、その修復法も確立した。それをノエル達を手に入れる事で自分のものにしようとしている。そして、何故そんな事を決断し

たのかは……

「自動人形を見つけたんだわ、あいつも。だからそれを無理矢理動かして襲わせるつもりなんだ」

「あわよくば、最終的にはそれも完全修復して……ですか」

ライダーと忍の二人はそこまで考え、嫌気が差した。どこまでも自分の事しか考えない相手。それを嫌と言う程理解してしまったからだ。更に、ノエル達の妹か弟か、もしくは姉かもしれないし兄かもしれない。

そんな存在を使い、ノエル達を襲わせようとしている。それが一番腹立たしかった。特に、ノエル達を家族と思う忍にとっては。

その後、二人は家に戻り、ノエルを交えて対策を練った。すずかが出かける際は、極力ライダーが傍につき、安全を確保する。家にいる際は、ファリンがそれを代わる。ノエルは忍と共にさくらに連絡し、連携して事に当たる事となった。

安次郎は裏の世界にも手を出しているので、キッカケさえあれば何とか出来る。穏便に済ませたいと思っているが、最後まで相手にその気がない時は、容赦しない。そんな忍の言葉にライダーもノエルも頷いた。

「おはようお姉ちゃん、ライダー、ノエル」

丁度その時すずかが姿を見せた。それに先程までの空気は消え、三人は笑みを浮かべてすずかへ視線を向けた。その後ろからファリンも姿を見せ、朝食の支度を開始する。

ライダーは二人の手伝いに向かい、忍はすずかから残りの休みの過ごし方を尋ねた。それにすずかはアリサと話し合った演奏会の事

を話し、明日アリサの家でそれをする事にしたと伝えた。
それに忍は頷いて、ライダーを連れて行って欲しいと告げた。それに疑問を感じるすずかに、忍はライダーがすずかのバイオリン好きなのを知ってるでしょと言うと、すずかも笑顔で納得したのだ。

ある時、ライダーは読書をしていた際、すずかのバイオリンを聴いた。それが心地良く、ライダーはすずかのバイオリンの音色は、読書を促進させるとまで言ったのだ。

「護衛って形で私が言っておくから。ね、連れて行ってやって」

「そうだね。ライダーにも聴いて欲しいかな」

嬉しそうに笑うすずかを見て、忍は内心手を合わせた。騙す訳ではないが、どこか心苦しかったのだ。愛しの妹に嘘を吐かねばならない現状に。護衛が本音で、理由が建前。
だが、忍は知っている。ライダーは本当にすずかのバイオリンが好きなのだ。そして、すずかのためなら嘘や隠し事さえ貫き通せる事も。

（頼むわねライダー。すずかだけは何としても守り抜きたいのよ）

忍の視線の先では、今日しっかり練習しないとと笑って呟くすずかの笑顔があった……

突然だが、はやてはやや不機嫌だった。理由は一つ。妹分であるヴィータが未だに起きてこないからだ。アーチャーによれば、眠れないと明け方近くまでゲームをしていたらしく、それを聞いてはや

ては深夜のゲーム禁止令を発令した。
　更に、リインやザフィーラもどこか眠そうに見える。アーチャーは相変わらずだったが、それでも動きが少し鈍いとはやては感じていた。

「……ま、ええか。今日は許したる。ヴィータの分は、後でわたしが作ったるから」

「そうか。その方がヴィータも喜ぶだろう」

　キッチンでそんな会話をする二人。それから離れた位置では、シグナムが新聞を読み、シャマルがアクビを噛み殺し、リインはザフィーラと共にニュース番組を見ている。
　そんな光景をちらりと見て、はやては笑う。どこか変わったと思ったが、こんな光景を見るとやはり心配する必要はない気がしたからだ。根本は変わっていない。いつもの家族達だ。そう思えたから。

「ザフィーラ、これは何だ？」

「天気予報だ。これが晴れ、これが曇り、後は……」

　リインが天気予報士の後ろの記号に疑問を浮かべ、それにザフィーラが答える。古代ベルカにはなかったものばかりの地球、日本。その文化にはシグナム達も慣れるまで驚きと疑問の連続だったのだ。
　そんなリインを見て、シグナムとシャマルが笑う。そして、二人が笑ったところではやてのご飯コールがかかり、四人が動き出す。一人欠けているが、待っていたらいつになるか分からないので、今日はそのまま……

「「「「「「いただきます」」」」」」

六人の声が響く。そしてそのまま食べ始める六人だったが、リインは箸が上手く使えず苦戦。その光景を見たアーチャーが持ち方から教えていく。それを見て、シグナムが自分達もこうだったなと感慨深く呟くと、シャマルとザフィーラも笑みを浮かべて頷いた。はやてもそれを思い出し、頷きながら一番最後までヴィータが苦戦していたと言って笑った。

それに三人も笑って頷く。一方でアーチャーは、リインへの指導を終えたのか、自分の分を食べながら小さく笑う。リインは最短だぞと告げて。

「「「「お～……」」」」

「な、何ですか？　主も、皆も」

そこには箸を正しく持ったリインがいた。その箸はちゃんとご飯を掴んでいる。感心する四人に戸惑うも、その理由を聞いてリインは少し得意そうに笑みを見せた。それに微笑ましいものを感じ、全員も笑う。こうして、その日の朝は過ぎていくのだった……

町外れの高台。そこでユーノは呆気に取られていた。なのはから、セイバーに内緒で魔法の訓練をしたいから結界を張って欲しいと頼まれ、万が一を考え、かなり厳重に張ったのだが、そうして良かったと心から思った程に。

目の前では、なのはがレイジングハートと喜びを分かち合っている。確か、なのははディバイン・バスターのバリエーションだと言っていた。それが、どうだ。完全に別物だと、ユーノは思った。

（集束魔法……しかも、あれはかなりのものだ。セイバーの宝具を目指したって言うのが、実感出来るよ……。並みの魔導師じゃ、まずあんな威力出す事が出来ないし）

視線の先では、なのはが手を振っている。大成功だよ～、と可愛く言っているが、ユーノはどこかで恐ろしいものを感じていた。

「……っと、どうしたのユーノ君？　何か顔色悪いよ？」

「え、あ、ああ。かなり強固な結界を展開して、維持したからかな」

ユーノの返事になのはは不思議そうな表情を浮かべる。そうなのだ。ユーノはこれぐらいで疲れるようなやわな相手ではない。そうなのはは知っている。だが、ユーノが言う事もあながち間違っていないのだろうと、なのはは思った。

先程放った一撃は、想像以上に凄かった。レイジングハートがこれは取っておきにしましょうと言ってくれたのだから。なのはは、その言葉に頷き、同時に心に誓った。この魔法は、無闇には使わない事を。大きな力は、使い方を間違えれば。いずれ自分に返ってくる。そう思ったから。

（それに、セイバーだってアレを使った後は凄い疲れるって言ってたし……）

なのはは今の自分の状態を確認してみる。疲れはあるが、まだまだ平気だ。どこにも異常らしいものは感じない。そう思って、なのはは余計怖くなった。セイバーとは違うにしても、自分も凄い威力の魔法を使ったのだ。それにしては、体に対する負担があまりないように思えたからだ。

「……ユーノ君」

「何？」

「私には……魔法の才能があるって言ってくれたよね？」

「うん。それがどうしたの？」

「才能って、下手をしたらその人を壊すんじゃないかなって……思ったから」

なのはは、自分の負担の少なさを才能によるものだと思った。そう、知らず負荷を抑えているんだと。だが、士郎や恭也から神速の負荷などについて聞かされているなのはにとって、それはむしろ恐怖。

気付かない負荷は、いずれ体を壊す。士郎や恭也が口うるさく休めと言うのは、それを危惧しているからだ。僅かだが気付けずに体に負担を残すのが、一番怖いのだ。そう士郎も恭也も言っていた。

人間は、本来の三割しか力を出していない。何故か。それは、全力を出すと体が壊れてしまうからだ。火事場の馬鹿力は、その制限を無意識に外した状態なんだと、なのはは聞いた事がある。

その状態を続ければ、人間は自分で自分を傷付けてしまうのだ。故に、普段は抑えているらしい。それを思い出したのは、今の自分はそれに近い事をしたのではないかと思ったから。

「なのはの心配はもっともだよ。でも、才能がその人を壊すんじゃない……」

「なら……」

「その人を壊すのは、結局その人自身だよ」

そのユーノの言葉になのははは言葉を失った。考えてみれば当たり前の事なのだ。才能をどう使うのも、その人自身。どう負担を強いて、どう生きるのかもその人が決める事。何かに責任を押し付けたりしてはいけない。

ユーノは、自分にそう言ってくれた気がした。だから、なのはは頷いて答えた。

「ありがとうユーノ君。そうだね。私を動かすのは私だもんね」

「そういう事だよ。なのはは、なのはが決めた通りに行けばいいよ。それが間違ってたり、危ない時は僕らがそう言うから」

そう言ってユーノとなのははは動き出す。この時間では、もう道場の方も稽古が終わってる頃だろう。そう思い、なのはとユーノは急ぐ。朝ご飯が遅くなると、機嫌を悪くする者がいるからだ。

その怒りを買わないように、二人は急ぐ。ユーノが少しなのはに先行するものの、そのペースをユーノが落とし、なのはが転ばないようにする。それに気付き、笑顔を見せるなのは。

こうして、二人は家に戻る。丁度、セイバー達が汗を流した所で二人は玄関に到着し、事無きを得たのだった。

押し寄せる不安。忍び寄る影、様々な事態が交錯する中、日常を守るため動く者達がいる。

彼らの願いはただ一つ。愛する者達の平和の

み……

ーーー

A' s二話　中編

いつものように流れる楽しい朝食の時間。だが、アリサは気付いていた。小次郎の顔に微かな疲れが見える事に。

ジョギング中から妙だとは思っていたのだ。しかし、いま一つ確信を持てなかった。それが、今は確信を持てた。小次郎は疲れている。何故ならば、今日のメニューには小次郎の好物であるコンソメがある。それにも関わらず、小次郎は何も言わず黙々と食べているのだ。

（いつもなら、美味いの一言ぐらい言うのに……）

そう思うも、アリサは口に出す事はしない。小次郎が自分に隠し事をするのは初めてだったからだ。いや、正確には、自分に気付かれるような隠し事は、だろう。それ故に、アリサは黙る事にした。驚かそうとしているのなら、それを待って精々驚いた振りをしてやろう。そう思ったからだ。

「如何したありさ。私の顔に何かついておるか？」

「別に。あ、明日家にすずか達呼んで、バイオリン演奏会やるから」

「ほう、ばいおりんか。あれは洋風琵琶の一種だったか」

小次郎の言い方にアリサは呆れた表情を浮かべるも、否定する事もせず頷いた。そう、エレキギターを、電気三味線と言った小次郎だ。この言い方は、最早直す事は難しい。

そう考えたアリサは、気を取り直して小次郎へ尋ねた。小次郎も聴いてくれるかと。それに小次郎はやや考えたが、またの機会にす

ると断った。それにどこか残念そうなアリサだったが、小次郎は小さく笑みを見せ、こう続けた。

「出来るのなら私一人で聴きたいのでな。その方がありさも気楽であろう？」

「なっ……べ、別に人数は関係ないわよ！　まぁ、いいわ。なら、また今度ね」

そう言ってアリサは食事を終えると部屋へ戻っていく。明日に備え、少し練習するのだと言って。小次郎はその背を見つめ、笑みを向ける。

――――素直ではないな。

その呟きには、紛れもない親愛の情が含まれているのだった……

絡み出す縁

その頃、リニスはプレシアと時の庭園にあるデバイスルームにいた。フェイトに頼まれたバルシッシュの改良。その意見をもらうために。プレシアはそのフェイトが目指しているものを聞き、やや呆気に取られたものの、微笑みを浮かべた。

「そう。セイバーの宝具をね」

「ええ。まぁ、完全再現は厳しいですが、近いものにはしてあげたいと」

リニスの苦笑交じりの言葉にプレシアも頷き、考えを巡らせる。あれだけの威力を持つ斬撃。それを魔法で再現するとしたら、フェイトだけの魔力では、すぐ魔力切れを起こすだろうとプレシアは思った。

かと言って外部から魔力を持ってこれるような機能は、デバイスにない。そう考えたのだ。

（せめてデバイスが魔力を分けてでもくれたら……ん？）

プレシアの中で何かが引っかかる。デバイス自体が魔力を持つ。その発想に。どこかでそんな物を見たり聞いた事があるような。そんな感じがあったのだ。記憶を辿るプレシア。そして、思い出す。どこでそんな話を聞いたかを。そしてそのために何が必要かも。

「リニス、貴方はバルディッシュの可変フレームの開発をして」

プレシアはどこか妙案が浮かんだかのように笑い、リニスへ告げた。そして、そのままその場を離れ出す。それにリニスは疑問を感じ、どこへ行くのかを尋ねると、プレシアは笑みを見せてこう答えた。

――――知恵を借りに本局へ出かけてくるわ。

一方、テスタロッサ家ではフェイト達四人がそれぞれ分担して家事をしていた。フェイトはアリシアと洗い物。ランサーは掃除。ア

ルフはベランダで洗濯物を干している。基本、この家庭はリニスが家事を仕切っており、次にプレシアがやっている。
故に、その二人がいないとこうして全員で分担する事になるのだが……

「アリシア、次はこれお願い」

「は～い」

フェイトが洗った物をアリシアが拭いて戻す。届かない場所は、後からランサーが戻してくれるのだ。姉妹仲良くしている二人だったが、それと違って文句を言っている男が一人。彼は、手にした台拭きでテーブルを綺麗に磨いているが、その表情はどこか不満そう。
思い出すのだ。こうやって家事をしていると、あの時知り合ったシスターの事を。自分を小間使いか何かのように扱い、平然と暴言を吐き捨てるそんな少女を。

（あ～、やっぱ少し疲れたか。ま、これぐらいあの時に比べれりゃ……）

自分の過去を思い出し、体に残る疲れを笑い飛ばす。不眠不休で戦った事もあるランサーにとって、一晩ぐらいの徹夜など何て事はないのだ。そして、視線をテーブルからキッチンで洗い物をしているフェイト達へ向ける。
楽しそうに笑う二人。それを眩しそうに見つめ、ランサーは小さく笑う。あれを守るためにも、今夜も頑張るか。そう思い直して、ランサーは台拭きを手に二人の傍へ。

「わりぃけど、これもついでに洗ってくれ」

「いいよ～」

「あ、アリシア、洗うのは私だよ……」

笑顔のアリシア。少し困り顔のフェイト。それを嬉しそうに見つめるランサー。そして、そんな光景をベランダから眺め、笑うアルフ。平和な時間が、そこにはあった。

本局内　無限書庫。そこにアリアとロッテがいた。二人が読んでいるのは、夜天の魔導書に関する物。もし、この姿に戻せるのなら一番いいと彼女達も考えていた。

しかし、それはどうやら厳しいらしい。アリアが今朝アーチャーから聞いた話によれば、リインにされた改竄は最早完全に修復不可能な状態まで進化してしまっているらしく、はやてと協力しても一部機能を分離させるのが精一杯なのだそうだ。

そうなってしまった原因は、度重なる破壊と転生。それにより、バグがどんどん成長してしまったそうなのだ。そのため、今は少しでも本来の姿に出来るように、二人は夜天の魔導書の機能などを調べていたのだ。

「……お父様の話、聞いた？」

「……これが終わったら、局を辞めるっていう奴？」

アリアの言葉にロッテがどこか疲れたようにそう返した。それに無言で頷くアリア。グレアムは、自分の今までを恥じ、闇の書事件を解決したのなら、潔く自分のしようとした事を打ち明け、職を辞するつもりらしい。

それをアリアは聞かされた。無論何とか考え直すように言った。それでも、グレアムは首を振ってくれなかった。自分は、罰を受けねばならない。そう言って。

「……お父様を止められるのは、クロノぐらいだろうね」

「そうだね。クロ助なら……」

そう言い合って、二人は同時に呟く。

――――過去に縛られて生きるな、か……

二人が無限書庫でそんな事を思っている頃、グレアムはデュランダルを開発している者へ連絡し、完成を急がせていた。自分の計画にも、アーチャー達の計画にも必要とされる力。その完成を急がせるのは、そのためである。

このままではやての命が失われる。その事をリンディから個人的に教えられ、グレアムとしても見過ごせない事態となったためだ。はやてが死んでしまうと、転生が始まってしまう。そうなっては元も子もない。

「……そうか。ああ、頼む。出来るだけ急いでくれ」

いつアーチャー達の準備が終わるか分からないが、それにデュランダルが間に合うようにと。グレアムは二つの計画を同時に進行させるため、必要な要素を揃えていたのだ。

デュランダルは、その最たる物。どちらの計画にも必要となる物。そして、夜天の魔導書に関する情報。それも両方にいる物だ。

「後、一ヶ月か……」

それが、開発者が告げたデュランダルの完成までかかる時間だ。それなら間に合う。そう思い、グレアムは息を吐く。完全破壊にしろ、完全封印にしろ、デュランダルがなければ厳しいのだ。

だが、それだけではない。グレアムの希望であるクライドの敵討ち。それを叶える事は、クロノの手によって闇の書を破壊してもらう事なのだ。そして、そのための力としてデュランダルは必要とされているのだ。

（……願わくば完全破壊だが、無理ならば当初の計画通りに……）

もう迷いはない。自分の中にあった自己を正当化する正義はない。最終的に自分が取る方法。それは正しくなどない。だが、間違ってもいない。ただその報いを受ける事を、覚悟しているのとしていないのでは大きく違う。

犠牲を出さない方法を時間が許す限り模索し続け、それに尽力する。しかし、それが駄目な場合は自分の手で最善を行なう。

「お前を失った後、すぐにこう思えれば良かったのにな」

その言葉に込められたのは、後悔か自嘲の気持ちか。ただ静けさだけが、部屋の中に残るのだった……

ミッドチルダ　居住ブロック　ハラオウン家。そこのリビングで、三人の人物が険しい顔で何かを話し合っていた。

「そう、やはり復元するのは無理なのね」

「はい。今日もユーノ君が調べてくれるそうですが、どうも例のバグ自体が一人歩きしてるらしいんです」

「原因は度重なる破壊と転生だそうです。それによって、少しの歪みがどんどん大きくなったと、彼女、リインフォースも言っています」

エイミィとクロノの言葉にリンディは表情を厳しくする。既に二人も、リンディの口からはやての事を聞かされている。だからこそ、こうして何か方法はないかと動いているのだが、相手は古代ベルカのロストロギア。

そう簡単に事が運ぶはずもなく、現状では打つ手なしに近い。管制人格であるリインがいるおかげで、即座に答えが返ってくるのはいいのだが、考える事の全てが無駄に終わる事に、三人は無力感を感じていた。

リイン自体のデータをどこかに移植し、闇の書自体を無力化するという方法も考えたのだが、リインが言うには、下手をするとそこから別の姿に変化し、想像もつかない事態になりかねないと言われてしまったのだ。

それに、守護騎士プログラムの切り離しなどは、完成した時点でなければ出来ないらしく、それも却下になった理由だった。

「やはり、完成した後に破壊するしかないのかしら……」

「現状ではそうするしか」

「ルールブレイカーだっけ？　あれがさ、どこまでを無力化するか

決められればいいのに……」

親子して同じような表情をする二人を見て、エイミィが心底悔やむように言った。その発言にクロノは呆れ、リンディは苦笑。確かにそうであったのなら、この事件は円満解決だっただろう。だが、そうはいかないのが現実だ。

故にアーチャー達もリンディ達も奔走しているのだ。誰もが笑っていられる結末。それを手繰り寄せるために。

現在、はやての事を知っているのはリンディ達三人とはやてを除いた八神家全員。それとプレシアとリニスにグレアムとランサー達サーヴァント三人だ。アリア達には、グレアムが教える事を迷っている。二人も長年の付き合いで、はやてに情が移っている。それがあるために、グレアムとしては色々と思う事もあるようだ。

セイバーに教えないのは、アーチャーの判断。なのはに近い場所にいるセイバーは、隠し事や嘘を嫌う。そのため、知らせない方がいいとの事だった。

はやて達子供組には、全ての準備が出来るまでは教えない事を、アーチャー達から提案され、リンディ達も同意した。絶望の中で足掻くのは大人の役目。その絶望の中に希望の光が強く見えた時、子供達にそれを掴む手伝いをしてもらうために。

希望までの道筋。それを切り開かねばならない。それが今動いている者達全員の総意。

「ユーノの奴には、いつ頃？」

「……アーチャーさんが、彼には自分から話すと言っていたから」

「そうなんだ。じゃ、待つしかないね」

その場に沈黙が落ちる。それを振り切るように、エイミィが立ち上がる。今日は、いっそ事件の事を忘れて過ごそうと告げて。それにクロノがやや怒りを表そうとするが、エイミィの次の言葉に声を失う。

――――このままじゃ、悪い事ばかり考えるから。

その言葉の意味するものを気付き、クロノはリンディを見る。リンディも軽く苦笑し、頷いた。確かにアーチャーから真実を聞かされて以来、まともに休息を取っていない。クロノはそう思い出し、エイミィを見た。

エイミィはクロノの方に人懐っこい笑みを向け、ウインクする。それにクロノは内心感謝しつつ、表情は呆れ顔。

「まったく……今日だけだぞ」

「やった！　じゃ、早速出かけようか」

「な、僕もか？！」

エイミィに腕を掴まれ、驚くクロノ。少し顔が赤いのは、エイミィの胸が腕に当たったからだろうか。

「当然！　美味しいものでも食べに行こうよ」

【艦長、クロノ君お借りしま～す】

「あら、じゃあお土産頼むわね」

【楽しんでいらっしゃい。クロノをよろしく】

「か、母さんまで！　こら、エイミィ離せっ！　聞いてるのか……」

会話でも念話でも息ピッタリの二人に対し、クロノはそのままエイミィに連れられ、二人はそのまま部屋を後にする。それを見送って、リンディは小さくため息一つ。

それは現状を考えた悲痛なものではなく、どこか羨望を交えたもの。エイミィとクロノを見て、羨ましいと感じていたのだ。エイミィがクロノに好意を寄せているのは、誰が見ても明らかだ。にも関わらず、クロノはまだエイミィを、同期で補佐をしてくれているぐらいにしか考えていないようだ。

（……どうしてこうも男の人って鈍いのかしら）

夫であったクライドの事を思い出すリンディ。彼もそうだったのだ。リンディがよく一緒に食事をしたり、仕事を手伝ったり、オフにデートに誘って、ようやく彼もリンディが好意を寄せている事に気付いたのだ。

その献身さと行動力は局内でも有名になり、クライドは鈍感クライドなる二つ名を付けられ、リンディには甘々リンディという通り名がついたのだ。ちなみに、リンディの場合は、二つの意味がある事は言うまでもない。

それを始終見ていたレティは、良くそこまでやるわと呆れたのだが。そういうレティは、あっさり告白され、特に想ってもいなかった相手と気が付けば結婚だ。リンディとは真逆と言える。

（そういえば、私と同じぐらい有名な陸士夫婦がいたわね……）

リンディがクライドと結ばれた頃、同じように鈍感な男性に尽く

し、有名になった女性局員がいた事を、リンディは思い出していた。
今はどうしているのか知らないが、きっと円満にやっているだろうと思い、リンディは笑う。

「今度、レティに聞いてみようかしら。きっと、知ってるはずだわ」

そう言って、リンディは立ち上がる。二人は出かけたが、自分はアーチャーとの話し合いがあると。そんな事を考えたからだろうか、その表情に何故か輝きが生まれる。迎えに行かなければならない。そう思い、リンディは身だしなみを確認するため、自室へ向かう。
そして、その途中でふと思い出したのだ。さっきの夫婦のファミリーネームを。

「確か……そうよ。旦那さんが魔力無しで、管理外出身の家系だったわ」

――ナカジマ、だったかしら。

――――――

最後は……俺の妄想ですが、クロノの性格は父親譲りなのではと仮定したための話です。

A' s二話　後編

朝食を食べ、いつものように無限書庫へ行こうとしていたユーノだったが、携帯へメール着信を告げる音が鳴る。それに気付き、見ていると相手はすずか。明日アリサの家でバイオリン演奏会をやるので来て欲しいとの事だった。

それに笑みを浮かべて返信するユーノ。返事は勿論了解。送信が出来たのを確認し、ユーノは携帯をしまう。実は、ユーノのメールボックスの六割はすずかからのメールで埋まっていたりする。

残り三割をフェイト。一割がはやてにアリサやアリシアだ。なのははいつも会えるため、メールをした事がない。それに、その気になれば念話があるので、あまり携帯は必要なかったりするのも関係している。

（でも、すずかもフェイトも最低でも毎日一度はメールくれるよね。やっぱり、もう少し時間を取って話をしなきゃ）

なのはとは朝や夜に必ず話をするし、はやてはアーチャーへの報告がてら会う事もある。そのため、最近ユーノはすずかやフェイト達と話す機会がなかったりする。じっくり話をしたのは、旅行中が最後だったかもしれないと考えながら、ユーノは転送魔法の準備に入る。

道場から月村家の中庭へ行き、そこから時の庭園を経由し、ミッドまで向かう。それが、ユーノの通勤ルートだ。それを聞いたなのはは、やや驚きながら大変だねと言っていたが、ユーノからすればこれぐらい何て事はなかったりする。

（父さん達と鍛錬する事に比べれば、ね……）

苦笑を浮かべ、ユーノは転送魔法を展開して消える。静まり返る道場。今日もまたそれぞれの一日が始まる……

”好き”の意味、その違い

本局内にあるデバイスルーム。そこにプレシアの姿があった。隣にはレティの姿もある。そんな二人の視線の先には、緑色の髪をした眼鏡の女性がいる。名をマリエル・アテンザ。以前、プレシアがレティから紹介された相手で、優秀な技術者でもあるデバイスマイスターだ。

今、マリエルがしている事は、プレシアに聞かれた事をシュミレートしているのだ。そう、ミッド式のデバイスであるバルディッシュにベルカ式のカートリッジシステムを組み込む事は可能か。また、それは危険性はないか。それを彼女は入念にチェックしていた。

プレシアは以前会った際、マリエルとは近いものがあったためか、色々な事を話したのだ。デバイスやその発展系、またそのための方法や手段などもその一つ。そこでプレシアは、マリエルがミッドとベルカの良い所を併せたデバイスを作りたいと言っていた事を思い出したのだ。

ミッドのインテリジェントの繊細さと、ベルカのアームドの頑丈さ。それを併せ持つ理想のデバイス。そんな事を考えているのだと。そこにプレシアが注文したのは、ベルカの特徴の一つ『カートリッジシステム』だ。それを使えば、フェイトが望む魔法を使えるように出来る。そう考えたのだ。

「……いけます……ね。危険性はありますけど、バルディッシュ自身も賛成してくれるのなら、あたしはやりますよ」

「そう。一応リニスには、剣形態のフレームを考えさせてるのだけれど」

「そうですか。なら、あたしも考えてみます。それを擦り合わせて、インテリジェントでもアームドでもない。新しいデバイスにしてみせます」

マリエルの意気込みを見て、プレシアは笑みを見せるものの、レティはどこか困り顔。技術屋は、一度集中すると周囲の事を考えなくなるのだ。マリエルもその気がある。そのため、業務に支障をきたさない程度にしてくれと言った。

それにプレシアとマリエルは苦笑し、善処すると返す。それを聞き、レティは大きくため息。簡単に予想出来たのだろう。二人が取り付かれたように、デバイス製作をしている姿が。

レティの反応から二人もその考えを察し、苦笑したまま何も言わない。現に、今マリエルは苦笑しながらも、その手を動かしている。バルディッシュの改良案。攻撃力を強化するため、強襲を意味するアサルトを仮称としてつけたそれを、その手で完成させるために。

「まったく、貴方もリンディも厄介事ばかり持ち込んでくるわね」

「あら？　これが厄介事なら、私が本当に頼みたい時は次元災害になるわね」

「……貴方が言うと笑えないわ、それ」

「ええ。私も笑えないもの」

互いに笑みを見せ合う二人。そう、レティは知っているのだ。プレシアが何をしようとした人間かを。だが、レティは過去がどうであれ、現在を判断する人間だ。つまり、局に手を貸し、真っ当に生きようとするプレシアに変な感情は持っていなかった。

しかも、条件付きのＳＳ。こんな人間を早々失う事はしたくない。何よりも、個人としてもプレシアを気に入っているのだ。リンディと同じく、砕けた喋り方が出来る程に。

「とにかく、必要な部品や技術は提供するわ。その代わり……」

「フェイトの入局の手伝いね。まぁ、考えておくわ。あの子が決める事だし、私はあくまで進路の一つとして教えるだけよ」

プレシアの言葉にレティは頷いた。彼女も無理矢理入局などさせたくない。本人の意思によって来て貰わなくては意味がないのだ。フェイトはおそらく将来有望株の魔導師。そう考えているレティとしては、何故リンディがスカウトしないのかが不思議でしょうがなかった。

ただでさえ人手不足。しかも、年々起きる事件は厄介さを増している。優秀な魔導師は大いにこした事はないのだ。故に、レティとしてはフェイトが話していたなのはも、機会があればスカウトしたいと考えていた。

（あのフェイトさんが天才と認める少女。是非欲しいわね……）

そんな事を考えるレティ。その表情を見て、プレシアは何を考えているかを悟り、低い声で告げた。

――なのはちゃんに手を出すと、下手をすると首が飛ぶわよ？

それは冗談や脅しではない。高町の男達と美由希にセイバー。あの四人だけで武装隊を相手出来るだけの強さはある。空が飛べずとも、きっと彼らならそういう相手への対処も考えているだろう。

プレシアはそう思うからこそ、レティへそう言ったのだ。レティもプレシアが本気で言った事を理解し、やや訝しがりながら問い質す。それにプレシアが簡単に士郎達の話をすると、レティは一瞬引きつった表情を見せた。

質量兵器を使うだけでなく、暗殺者などから対象を護衛する事を続けていた一族。その後継者達と、威力だけならSランクを超える攻撃を所持する騎士。そんな出鱈目な存在がいる。そんな事を聞かされれば、そうもなる。

「……リンディが誘わない理由はそこ？」

「いえ、彼女はセイバーさんに頼まれたのよ。地球の感覚で、本人が自分の進路を決める歳まで勧誘しないで欲しいとね」

「……そう」

レティはプレシアがわざわざ地球の感覚と言った事に、何かを悟った。ミッドでは、就業年齢が低い。下手をすればフェイト達のような歳から仕事をしていたりする。

つまり、子供が子供でいる事が難しいという事。実際、高い魔力があるだけで、どれだけの子供達が管理局へスカウトされているか。それを考え、レティは理解したのだ。きっと、セイバーがそれを考えてなのはを子供でいさせてやりたいと思ったのだろうと。

ならば、こちらの感覚を押し付けるのは良くない。そう考え、レティはなのはの勧誘を諦めた。彼女も子を持つ親である。親として、

願わくば子に平和に暮らしていて欲しいと思う事は、世界も文化も関係ない尊い想いなのだ。

「さてと、私は帰るわ。マリー、フレームの件よろしくね」

「はい」

「レティさんも、また今度ゆっくり話しましょう」

「ええ。出来ればリンディも入れてね」

笑顔でそう別れる三人。こうして、フェイトの希望する魔法の準備は始まった。プレシアが初めてフェイトに贈るプレゼント。それが、リニスがくれたデバイスの改良案なのは、何か縁のようにも思えた。そう、後にフェイトは語る。

母の愛。その想い。それを強く感じる出来事の一つだった。そう笑顔で告げて……

「バイオリン？」

「うん。楽器の名前だって。アリサとすずかが習ってるらしくて、それの演奏会をするから、明日アリサの家に遊びに来てって」

フェイトの言葉にアリシアは小さく感心したような声を出す。フェイトとしても、楽器が演奏出来るなんて凄いと思ったのだ。アリシアの反応は自分と同じといえる。

フェイトへメールを送ってくれたのはアリサ。最後に、ユーノも来るわよ、と書いてあるのは意図的だろう。何せ、アリシアへ文章

を読んでいたフェイトがそれを見て顔を赤くしたのだから。

「どうしたの？」

「えっ！？　あ、えっと……その……な、何でもない」

「ふ～ん……変なフェイト」

そう言ってアリシアは、興味をフェイトから明日の演奏会へと切り替えた。何を着ていくか。そんな事を考えて、楽しそうに部屋へと向かうアリシア。その背中を見送って、フェイトも立ち上がる。

その表情は、アリシアとは違う楽しさがある。ユーノと話が出来る。旅行中を最後に、ユーノとはあまり話していない。メールはそれなりにしているが、送り過ぎて嫌がられたらどうしようと考えて、フェイトは一日多くても八回までと決めている。

しかも、送る前に何度も読み返し、内容を吟味した上で送信するのだ。実は、すずかも初めはそうだったのだが、彼女はユーノがそんな事で嫌ったりしないと確信し、あまり内容は気にせず送っている。回数は……仕事している時間は少なくし、家にいる時間は少し多めにしている。

フェイトはそんな事を知らないが、それに近い思考はしている。この辺りの違いが、アリシアがはやてやアリサに懐き、フェイトがすずかと話が合う理由なのかもしれない。

（えっと、とりあえずユーノにメールしようかな。明日私達も行くよって。後、なのはにもしよう。はやては……送っておこう）

真っ先に浮かぶ相手は、ジュエルシードを集める際、一番頼りになった二人の親友。そして、短いが共に暮らした少女の顔。大切な

親友達の中でも、少し異なる存在。それが、なのは達だった。
無論、すずかやアリサも大切な親友だ。フェイトにとって、初めて出来た友人なのだから。それでも、やはりなのは達三人は魔法なども関係し、少し二人とは感じが違う部分もある。

手馴れた感じで文面を考えるフェイト。なのはとはやてに送り、ユーノへのメールを書き上げ、少し停止。もう一度読み直し、頭の中で繰り返した後……

「送信……っと」

送信が完了したのを確認し、フェイトは息を吐く。そして携帯をしまい、アリシアがいる自分達の部屋へと向かう。そこでは、アリシアが洋服を何着も引っ張り出し、悩んでいた。
色取り取りの服が、ベッドの上に散乱している。それを見て、フェイトは少し肩を落とし、アリシアへ注意する。散らかしたらリニスに怒られるよと。それにアリシアは取り合わず、手近な服を手にして似合うか尋ねた。
それにフェイトはアリシアを見つめ、少し考えて頷いた。似合うと思うよと。それにアリシアは嬉しそうに頷くと、それを明日着ていくと言って畳んでしまう。そして、残った服を見てフェイトも選ぶといいと言って、服をフェイトに当てる。

「……これは？」

「ど、どうかな……私には分からないよ」

「じゃなくて、着たいの？　着たくないの？」

「ええっと、着たい……かな？」

フェイトの返事を聞いてアリシアが不満顔。どっちなの～と可愛く尋ねるのは、フェイトから見ても心和むものがあった。そして、そんな和むフェイトにアリシアが再び尋ねる。どれがいいのと。やや怒りが増している事に気付き、フェイトは少し慌てて服を見繕って、自分に当てた。

これはどうだろうと。それにアリシアがむ～と唸るが、頷いて親指を立てる。その仕草が彼女に妙な違和感を感じさせた。そのため、フェイトは確信めいたものを感じ、こう聞いた。

「それ、エイミィが教えてくれたの？」

「うん。エイミィのマネ～」

「……だよね」

満面の笑みで親指を立てるアリシア。それに苦笑し、フェイトは視線を手元の服へ向ける。それは、ミッドを離れる時の買い物で買った物だ。エイミィが選んだフリルが付いた可愛らしいワンピース。色は惜しくもフェイトの好きな青ではなく、それに近い淡い水色。

それを最初に見せるのがユーノになる。そう考えて、フェイトは顔を少しだけ赤くする。それを見て、アリシアが小さく首を傾げた。

（またフェイト顔赤くしてる……。エイミィが言ってたけど、ああいう時はユーノの事考えてるんだっけ？）

姉のように慕っている女性から聞いた事を思い出し、アリシアはフェイトを見つめる。どうやらエイミィが言うには、フェイトはユーノが好きなのだそうで、アリシアとしてはそれを応援してあげたいのだ。

だが、それを告げるとエイミィはやや苦笑し、あまり手を出さない方がいいと言ったのだ。理由は詳しく教えてくれなかったが、何でもその方がフェイトのためらしいのだ。

アリシアは知らない。エイミィは、既にユーノが複数の少女から想いを寄せられているのを知っている。フェイトとすずかは顕著なので当然なのだが、なのはもそうだとエイミィは気付いている。

そこは、さすがに自分も長く鈍い相手へ想いを寄せているだけはある。それ故に、アリシアが下手に絡むと色々と騒動になると理解し、その行動を制するための楔として、フェイトを使ったのだ。

「ね、フェイト。それ着た姿写真に撮って、ユーノにメールしよ！」

「えぇぇぇっ！？」

「きっと、ユーノも可愛いって思うよ～」

結局、フェイトはアリシアに押し切られ、そのワンピースを着て写真を撮り、メールに添付して送る事になった。ちなみに、その写真はワンピースの裾を両手で掴み、やや俯きながら恥ずかしがるフェイトの姿。それを昼休憩時に見て、ユーノはかなりうろたえた。

それを周囲のクロノ達は気付くも、クロノとアリアは何も言ったりはしなかった。ただ、顔が真っ赤だったので、照れるような事でもあったのだろうと思ったエイミィとロッテには、からかわれる事にはなったが。

その写真付きメールを、ユーノは永久保存する。それをある事がキッカケで知ったなのは達が、ユーノに色々問い詰めるのだが……それはこれから数年後の話。

高町家　リビング。そこのソファーに腰掛け、セイバーとなのはがまったりとしていた。視線はテレビ画面に注がれている。そんな二人の横で恭也が碁盤を見ながら、少し考えている。

士郎や桃子は店で働いている。美由希はバニングス家へ昼食を持って出かけて行った。どうやら学校が始まると、今のような事を出来なくなるので、残る数日を大切にすると言っていた。

「お姉ちゃん、小次郎さんと恋人になるのかな……」

「アサシンとですか……難しいでしょう」

「でも、小次郎さんってお姉ちゃんを好きだと思うよ？」

「そうでしょうが、それだけでは付き合えないのです」

セイバーが返した言葉に、なのはは疑問を感じた。好きと好き。だから付き合って、恋人になって、結婚する。それがなのはの中での発想。勿論、現実はそこまで単純ではないとなのはも思っているが、でも簡単に言えばそうだと思っている。

大切なのは、互いの気持ち。それがあれば、どんな事でも乗り越えていける。そう、マンガも小説も言っている。少なくとも、なのはが読んだりした物では。

そんななのはの心情を察したのか、セイバーはどこか辛そうに告げる。自分達はサーヴァント。故に、色々と考える事があるのだと。それに、好きだからこそ共に居れない事もある。そうセイバーは遠い目をして言った。

その言葉に、ずっと黙っていた恭也が口を開いた。

「だが、好きだからこそ共に居たいと想うのが人だ。そして、そのためにどこまでも抗う事が出来るのが人だ。俺は、そう考えている」

「お兄ちゃん……」

「キョウヤ……貴方は……」

「俺は、忍の秘密を知った時、誓った。何があっても絶対に傍にいる。例え全てを敵にしてでも、あいつを護る。御神の剣士ではなく、高町恭也として」

その宣言を聞いて、セイバーは胸が痛かった。〝愛〟。そう片付けるのは容易い。だが、その恭也の想いは、そんな言葉では片付けられない程、強く、気高く、そして尊いものだ。恭也は、きっと御神の剣士でなかったとしても、同じ事を言っただろう。

愛する女性を護る。それは、一人の男としての決意と覚悟。運命や宿命さえ敵にしても、必ず守り抜く。そんな熱い想いが、セイバーとなのはには届いた。

「……だからなのは、お前の考えは間違ってない。好きだからこそ、その相手のために最後まで抗え。例え自分が勝てない事が相手でも、最後まで諦めずに。大事なのは、結果じゃない。その人の事を最後まで想い続けられるかどうかだ」

恭也はなのはの目を見つめ、優しくそう告げた。それになのはは、確かに頷いた。セイバーはそんな恭也に、衛宮士郎の姿を見た気がしていた。対象こそ違え、考え方は近いものがあった気がしたのだ。

憧れたからこそ、最後まで目指し続ける。例え、どんなに困難でも最後まで諦めずに。求めるのは、結果ではなく、その夢を最後ま

で追い続けられるかどうか。

（シロウもキョウヤもそうなんですね。男性というモノは、やはりどこか同じ所があるのでしょう……）

自分を大切に想ってくれた相手。今は分からないが、きっとどこかで生きているだろう男。自分をアーサーでも、セイバーでもなく、○○○○○と想ってくれる唯一の相手。

その事を思い出し、セイバーは願う。もし叶うのならば、彼に会いたいと。そしてもう一度伝えたいのだ。自分の気持ちを、想いを。

そんな風にセイバーが考えている横では、なのはが恭也の言葉を噛み締め、ある事を思っていた。それは、自分の”好き”に関する事。

フェイト達に対する好き。これは友情。クロノ達に対する好き。これは好意。セイバー達に対する好き。これは家族愛。ならば、ユーノに対する好きはどこになるのだろう。そう考えたのだ。

最初はフェイト達と同じと思ったが、何故か一緒にするのは違う気がした。理由はなのはにも分からない。ただ漠然と同じじゃないと思ったのだ。かといって、クロノ達とも違う。ややクロノに近いものはある気がするが、やはり漠然と違うと感じた。そして家族としての好き。これが一番近いかと思ったのだが、しかしそれさえも違う気がしたのだ。

（何だろう……ユーノ君は、どことも違う……ユーノ君への”好き”は、一体何なんだろう……？）

なのはには分からない。それがどう呼ばれる感情か。きっと、その答えは彼女の中に眠っている。しかし、それが目覚める事があるとすれば、その時待っているのは、おそらく複雑な状況だろう。

フェイトは淡く。すずかははっきり自覚している。アリサはどこか勘違いをし、はやてはそれを抱く相手を見出してはいない。アリシアは、それを感覚的には発露している。そう、それは――。

「恋をした人間は言う事が違いますね」

セイバーが恭也にそう告げると、恭也はどこか照れくさそうに笑い、視線を碁盤に戻す。そんな行動に笑みを浮かべるセイバーだったが、なのはが何かを悩んでいるのに気付き、視線を移す。

その表情は何か理解出来ない事を考えているようにも見え、セイバーはやや不思議そうに尋ねた。それになのはは気の抜けたような声を出し、セイバーを見返した。その間の抜けた表情が愛らしく、セイバーは笑みを向けた。

「む～、それで何か言った？」

「ええ、何か悩んでいるようですが、どうかしたのですか、と」

「う～ん……セイバーに相談しても無理かも」

「何故です？」

「だって、男の子の事だから」

そう言ってなのはは自室へ向かって歩き出す。その背中をキョトンと見つめ、セイバーは少し沈黙。そして、やや時間が経ってから何とも言えない表情になった。自分が男性の事を理解出来ないと言われたからだ。

それに反論したいのはやまやまだが、かと言ってなのはに教えてと返されると不安がある。その板ばさみに合い、セイバーはそこで

思い悩む。それを、恭也は口元に笑みを浮かべながら、黙って見ているのだった……

――――――

A' s三話　前編

ジョギングから帰ってきたアリサだったが、その表情は少し暗い。理由は隣の男、小次郎だ。昨日からどこか様子がおかしい。それに気付いてからというもの、どうも小次郎の事が気になっていた。

何せ、ジョギングの速度を上げると、小次郎もそれに合わせ速度を上げるのだが、その表情はどこか気だるそうに見えたのだ。

「……小次郎、あんた寝不足なの？」

心当たりがあるとすればそこ。昨日も庭仕事を早々に切り上げ、悠々と昼寝をしていたと本人から聞いた。アリサは小次郎が夜更かしをする理由に心当たりはなかったが、小次郎ならば月が綺麗だからとか、星が美しいからとかでそうしても不思議はないと考えていた。

それでも、ここまで分かり易いのがアリサには気になっていた。小次郎は飄々としているが、立派な剣士。寝不足だとしてもそれを簡単に分からせるだろうかと。

「うむ、些か物騒であろう？　ほれ、月村家周辺におったと言っておった」

「あ～、そういう事。確かに昼間は鮫島達がいるものね」

小次郎が告げた言葉にアリサは納得がいった。自分が見た誘拐犯のような連中。それが自分にもないとは限らない。そう考え、小次郎は夜が明けるまで警戒していたのだと判断したのだ。

無論、小次郎はそう言ってはいない。だが、下手に隠し気付かれるよりは、こうしてアリサに気付かせ勝手に納得させようとしたの

だ。その体の良い理由に、先日のアリサが見た相手を出したのだ。

現にアリサはそれで小次郎が何故夜更かしをするかを推測し、納得していた。小次郎はそれを見て、内心申し訳ないものを感じていたが、こうせざるをえない事も事実。

アリサは勘が冴える事がある。それに頭も回る。それ故、こうしておかねば、いずれ自分が深夜起きている事の理由を考え出す。それは、必ずはやての現状を知るキッカケになる。それを恐れ、小次郎はアリサの判断を誘導した。

実際、小次郎は寝不足ではない。彼はアリサが確実に安全と分かっている時間、短く深く眠る事で疲労をなくしている。以前も、門前を守るために同じような事をしていたのだ。

「それで、今日はなのは達が来るのだったか？」

「そうよ。すずかが言うにはライダーさんも来るんだって」

「ほう……」

「何でも念のための護衛ですって」

そう言うとアリサは家の中へ入っていく。それに続くように小次郎も歩き、そのまま二人は他愛ない話をしていく。何気ない風景。だが、その裏で動いている事がある。それはアリサには関係しないが、きっとそれを知れば関わる事は確実だろう。

この日、月村家に大きな出来事が起きるなどと、誰も予想していなかった……

月村家に負けず劣らずの外観。それにユーノは苦笑した。隣のなのは達は特に感慨もないようで、平然と歩いている。一人アリシアだけが大きいと言って興奮はしているが、全員そんなアリシアに微笑むだけだった。

そんな中、なのははユーノの苦笑の理由を理解しているからか、少し笑って告げた。

「ね、大きいでしょ？」

「うん。すずかの家と同じように考えて良かったよ。アリサの思惑は外しただろうけど」

ユーノの答えになのはも頷いた。きっとアリサとしてはユーノが驚く様を見たかったのだろう。現に、今玄関先で出迎えてくれたアリサの表情は、どこか不服そうだった。

だが、それにユーノが心構えをしていたから平気だっただけで、本当なら呆然としていたよと言うと、満足したように頷き、歩き出した。その反応にユーノは苦笑し、なのは達も笑みを浮かべた。

「にしても、貴方が来るとは思いませんでした」

「アーチャー達は手が空いていなくてな。私は何分する事がないもので」

「リインは手が足らんとこの手伝いでええ。決まった仕事はわたしの相手やな」

ライダーの問いかけにリインはそう笑みを持って答えた。それにはやてがそう補足し、ライダーもそれに頷いた。

リインは、家事を分担されていない。これは現状で人手が足りているのもあるが、はやての相手をする事で、リインに残る影のようなものを払拭させてやりたいとアーチャーが考えたからだ。

起動してからというもの、リインはどこか表情が冴えないのだ。いつも影を感じさせる雰囲気。それをはやてもアーチャー達も何とかしてやりたくて、こうしてはやてとの触れ合いで解決させようとしていた。

「アリサちゃん達のバイオリンはええよ。心が洗われるような感じがするんや」

「心が……ですか？」

「ええ。私もスズカの演奏を聞くと心が穏やかになります。癒しの効果があるのでしょう」

「そういう事や」

笑顔で告げるはやて。それに応じるようにライダーも笑みを浮かべる。リインはそんな二人の言葉に頷き、小さく笑みを浮かべ楽しみだと返す。そして、三人は先を行くなのは達に続いて、演奏会場となったリビングへと足を踏み入れるのだった……

一方、その頃月村家では、玄関先で忍が不機嫌極まりない表情である人物と対峙していた。

「な、どうや？　二人をわしに預けてくれればええんや」

「お断りよ。ノエルもファリンも私の家族。二人を財産呼ばわりするあんたなんかに、絶対渡さないわ！」

忍は目の前の相手、安次郎にそう断言する。瞳の色が普段とは違い、真紅のような色になっている。それは、夜の一族としての力が現れている証拠。つまり、感情が昂っている事を意味する。

それを安次郎も気付き、やや怯えるような雰囲気を見せるも、自分では隠せていると思っているのだろう。そのまま忍に告げた。

「そうか……。なら仕方ないな。二人を譲ってもらうのは諦めるわ」

「……すずかに手を出そうとしたって無駄よ。あんたの考えなんかお見通しなんだから」

「何の事か分からんなぁ。ま、それでも一応聞いとこうか。二人に関する事だけでも教える気は……」

安次郎の視線を受け止め、忍はその言葉に口ではなく視線を鋭くする事で答えた。それに頷き、安次郎は一人納得したように頷いた。そして、そのまま外へ向かって歩き出し、数歩歩いたところでその歩みを止めた。

そして、そのまま背を向けた状態でこう告げた。残念だ、と。それが何を意味するかを理解し、忍は鋭く告げる。本当にね、と。

それが最後だった。安次郎はその後何も言わずに外へ歩いていき、忍は玄関から出た瞬間、扉を閉めさせる。ノエルとファリンはそんな忍に何とも言えない表情を向ける。彼女達も安次郎にいい感情は

持っていない。
　それでも、月村の一員である安次郎へ表立った反感や抵抗は出来ない。そういう風になっているからだ。”自動人形”として作られたその身は、基本的には、人に対し危害を加える事が出来ないようにされている。彼女達もそう。

（やはり忍お嬢様が心配したような事態になってしまいましたか……）

（ライダーお姉様がいるから大丈夫だと思うけど、すずかちゃん大丈夫かな……）

　出来るのなら、二人も安次郎を止めたい。だが、それが出来ない。軽く叱る程度の実力行使は出来る。だが、必要以上の力の行使は出来ない以上、二人は安次郎が襲い掛かってきても、完全に抵抗する事が出来ないのが現状だ。
　だからこそ、忍は渡す事等絶対に出来ない。安次郎が汚れた考えで二人に迫った際、それを拒む事が出来ない事を知っているから。二人を物ではなく人として考えているから。

（絶対、あいつなんかに渡すもんか！　二人は、私の家族。だから、私が守るっ！）

　遠ざかる車の排気音を聞いて、忍はそう改めて思う。何があろうと守り抜いてみせると。その瞳は、未だ燃えるように赤かった……

　柔らかで安らぎを感じさせる音色。それがリビング全体を包んでいた。それを奏でるは、二人の少女。アリサとすずかの二人が織り

成す旋律は、なのは達の心に静かに染み込むように優しさを感じさせる。
　アリシアもその音色に終始圧倒されたかように黙って聞き入って、リインもその音色が己が内に秘めた哀しみを癒していくような感覚を覚え、その表情は穏やかな笑みを浮かべてさえいる。

（これが……バイオリンか。確かに癒されるような感覚を受ける。これは……いいものだ）

　そして、やがてその音が余韻を残して消える。それを全員が感じ、惜しみない拍手を贈る。アリシアは元気良く、フェイトは感動したのかやや目を潤ませている。ユーノは心からの賛辞を込めて。なのはとはやては、以前よりも上達したのを実感し、その努力を讃えて。
　ライダーは自分が聞いた時よりも、更に良くなった演奏を聞かせてもらえた事に感謝し、リインは純粋に素晴らしい感激を与えてくれた事に感謝して。

　そんな拍手を受け、二人はそれぞれ照れながらも一礼をし、こうして小さな演奏会は幕を降ろす。その後、ユーノと久々に会ったため、アリサを始め、フェイトやすずかによる質問タイムとなった。
　最近どうしてるのか。仕事は何をしているのか。面白い事はないかなど、実に多くの事を聞かれ、ユーノは少し苦笑しながらそれに答えていく。なのはとはやてはそんな光景を見て苦笑い。
　彼女達は、そこまでユーノと話していない訳ではない。故に、四人のようにはならないのだが、こちらはこちらで話す事があるようで。

「な、なのはちゃん。最近シャマルはどうやろ？」

「う～ん、特に何もないよ。お母さんも何も言ってないし」

そう、はやてはリインがライダーと共に離れた事を確認し、なのはへ家族の事を尋ねていた。なのはが知り得そうなのは、翠屋で働いているシャマルとたまに訓練をするヴィータの事。

だが、ヴィータとの訓練はリインの起動と前後して途絶えていた。理由は蒐集に全力を出すため、魔力の消費を抑えるという事だった。なのはは以降も訓練をしていない事を告げると、はやてがどこか違和感を感じたようだった。

「そうか……もうしてないんやね」

「うん。でも、今はフェイトちゃんとしたりするかな。たまにだけど」

「そうなんや。あ、そうや。実はな……」

はやての反応が妙に思えたなのはだったが、それを尋ねようとした瞬間はやてが別の話題を振ってきたため、そちらに意識を取られた。そうして話している内に、なのはの中に浮かんだ疑問は綺麗に消えてしまうのだった。

だが、それは忘れ去られた訳ではない。なのはは後日、この時のはやての質問の意味を知り、そして同時に知るのだ。親友である少女、その命の灯が消えかかっている事を。それは、残暑が終わり、本格的に秋が始まろうとした頃になる……

なのは達が会話に夢中になっている頃、ライダーはリインと二人で蒐集についての相談としていた。このままでは、毎日蒐集をしても間に合わない可能性が高い。何か蒐集以外で完成させる方法はな

いのか。
　そうライダーはリインに尋ねていた。リンカーコアではなく、魔力そのものを蒐集させるのなら、手がない訳ではない。実際、ライダーは魔力を吸血によって得る事が出来るのだから。だが、ライダーの問いに対し、リインが告げたのはある種予想通りだった。

「それは出来ない。アーチャーにも同じ事を聞かれたが、蒐集行為自体の本質は、魔法の蒐集なのだから」

「……そうですか。純粋魔力ではなく、魔法を使える可能性が必要なのですね」

「そうなのかもしれん。実際、試しにアーチャーから蒐集をしようとしたが、反応は一切しなかったからな」

　リインはそう言ってこう呟いた。リンカーコアでなければ、蒐集対象にならないのだろうと。それにライダーも納得し、再び考える。何か手を考え出さなければ、はやてか守護騎士達かを選ぶ事になる。
　そうなれば、アーチャーもライダー達も守護騎士達もはやてを選ぶしか道はない。そうならないためにも、せめて蒐集を完成間近まで進め、最悪の状況に備えなければならない。

　ライダーがそう思い考えを巡らせるのを見つめ、リインは言いようのない感覚を味わっていた。今まで何度となく主を死なせてしまった自分。それを知りながらも、こうして足掻きもがいてくれる者達がいる。
　そんな事は初めてだったのだ。自分を受け入れただけではなく、自分までも含めて助けようとしてくれる存在など。闇の書と呼ばれるようになってから、自分は災いの象徴でしかなかった。忌み嫌われる存在。だが……

（アーチャー達だけではない。ライダーや管理局の者でさえ私達を助けようとしている……希望を捨てずに）

どうやっても最終的に待つのは消滅。そう思っているリインだが、周囲の姿や言動がそれに少しずつ変化を与え始めていた。もしかしたら、足掻けば、抗えばどうにか出来るのではないか。絶望しかないとしても、最初から諦めてはいけないのではないか。

もし、自分が消える事になれば、はやてはどう思うのだろう。泣かせてしまうのだろう、悲しませてしまうのだろう。それをもしかしたら、回避出来るかもしれない。根拠はないが、そう思えてきたのだ。

（……そうだ。私はリインフォース……祝福の風。ならば、その風が諦めたら誰が幸福を運ぶのだ）

リインの中に小さな、でも確かな風が吹く。希望と言う名の風が。自分に名付けられた名前。それを残すために自分は決意したのではなかったか。そう思い出し、リインは心の中で誓いを変える。それは、名前を残すだけではなく……

（私は主と、家族達と共にありたい。そのために、私も足掻く。例え結末を変えられないとしても、それが少しでも伸ばせるように……）

リインがそう思うと、表情にはその決意が浮かぶ。それをライダーは見て、どこか驚いたような表情を一瞬だけ浮かべるも、即座にそれを笑みに変える。何故なら、その表情はとても良い笑顔だったからだ。

こうして、演奏会の裏でもう一つ起きた出来事があった。リイン

の心境の変化。それは、迫り来る破滅へ対抗する最後の鍵となる……

「にしても、ホント付き合い悪くなったわよね」

アリサの言葉にフェイト達も頷く。ユーノはそれに困ったように笑うだけ。質問攻めが終わり、やっと解放されたと思えばこれだった。フェイトとすずかはユーノに、仕事は分かるがもう少し自分達との時間を取ってほしいと告げた。

アリシアは出来ればクロノにもそう言ってほしいと告げた。それにはユーノも笑顔で頷いた。必ず伝える。そう言い切って。

「僕もそう思ってるよ。でも、無限書庫の整理があと少しでキリのいいところなんだ。そうなったら、時間か日数を減らすから」

「何や、ユーノ君の言い方、お仕事人間のお父さんみたいやな」

その言葉を聞いたはやてが返した一言に、ユーノは沈黙。アリサ達はもう一度ユーノの発言を思い返し、ややあってから頷いた。アリシアは昔のプレシアと同じだと言った。それに全員が益々頷いて、ユーノへ一斉に言った。

「「「「「もう少し子供しなさい（して）（しよ）」」」」」

「……善処します」

「あはは、ユーノが困ってる～」

アリシアがそう楽しそうに言うと、なのは達も笑い出す。ユーノ

はそれにやや困り顔だったが、結局同じように笑う。そこへライダーとリインが戻ってきたのだが、なのは達が楽しそうに笑うのを見て、不思議そうな表情を浮かべるだけだった。

「ええな、イレイン。くれぐれも壊しすぎるんやないで」

「分かっております。最低限の損傷で終わらせます」

安次郎の言葉にそう抑揚ない声で答えるイレイン。そこには、月村家で見せた感情はない。そのイレインの答えに満足そうに頷いて、安次郎は視線を周囲へ向ける。そこには、イレインと同じ存在がいくつも立っていた。

違いがあるとすれば、そちらにはイレインよりも機械らしいというところだろうか。まったく動きも話もしない。ただ黙して動かずに、停止している。それはイレインの量産型にして、彼女が操作する駒なのだ。

「忍の奴、わしが優しくすればつけあがりおって。一度痛い目を見んと分からんらしいな……ぐふふ」

自分が手に入れた自動人形であるイレイン。偶然から発見したのだが、それが完全な状態だったため、安次郎は財産の全てにも近い額を費やし、起動させる事に成功したのだ。

だからこそ、ノエル達の修復技術やその関連物が欲しい。出なければ、彼は破産するしかないのだから。彼も月村に伝わる古文書などは見た。そこには、イレイン達後期型の自動人形が戦闘向きに作られている事や、性能面が書かれていた。

詳しい事は分からなかったが、安次郎にとってはそれだけ十分だ

った。ノエル達を凌ぐ性能。それさえあればいいのだ。

「これでまた財産が増やせるな。笑いが止まらんなぁ～！」

そんな事を言って下品な笑いを浮かべる安次郎。それをイレインは、どこか汚らわしいものを見るように眺めていた……

動き出す野心家。だが、彼は知らない。自分が飼っていると思っている相手。それが既に首輪を外している事を。

そして、彼がそれを知る事はない。それが幸せなのか不幸なのかは、彼にしか分からない……

――――――

A' s三話　中編

日も落ち、家々からは、夕食の時間となっているのか楽しそうな声が聞こえだす。勿論八神家でもそれは同じで……

「うめ～」

「こら、ヴィータ。女の子なんやからもうちょう可愛く言わんとあかん」

「……どう言えばいいの？」

「そやな……美味しいです、とかやな」

はやての言った言い方を聞き、ヴィータはやや躊躇いながらも口に出してみた。

「お、美味しいです……」

「……ヴィータ、自然に言ってもらって構わん」

自分には似合わないと思っているからだろう。どこか照れながら告げられた言葉に、アーチャーは微笑ましいものを感じるが、それを聞いてはやてが何かを想像し、サムズアップしているのを見てそう言った。

上目遣いで躊躇いがちに告げるヴィータを見て、はやてが何を想像したかは分からないが、碌な事ではないとアーチャーは踏んでいた。そんな風に過ぎていく夕食の時間。シグナムとシャマルが互いの仕事の話をし、ヴィータは気兼ねなく美味い美味いと料理を食べ、

ザフィーラはリインから今日の演奏会について話を聞き、アーチャーとはやてはそんな五人を見て笑みを見せ合う。

――ええもんや。幸せってこういう事やな。

――そうだな。これが幸せだろう。

そう言い合う二人。最初は二人だった。それが今はこんなにも賑やかだ。そんな事を思い出し、はやては心から願う。こんな時間がいつまでも続きますように、と……

人と機械の狭間行く者

所変わって高町家。一家七人での食事は、八神家に負けないものがある。無限書庫での仕事がある日は、ユーノが帰宅するまで待ってからなので、今日はいつもより早い時間での食事だったりする。

まぁ、ユーノも仕事を終わらせると飛ぶように帰ってくるのだ。主に誰かの我慢の限界を超えさせないために。

「それで、リインさんも凄く気に入ってたみたいだったよ」

なのはの言葉を聞いて、ユーノ以外の全員が頷いた。リインの事を、なのは達関係者で知らない者はもういない。翠屋ではシャマル。美由希は小次郎。恭也はシグナムから聞いているのだ。

まだ直接顔を合わせた事はないが、物静かで薄幸の美女という雰囲気だとは、ユーノの表現。それを聞き、士郎と恭也が会うのを楽

しみにしたのはここだけの話。

高町家の食卓は、基本話題をなのはが振る。学校の事や友達、今日の出来事などを話し、それを士郎達が聞いてそこから話を広げていくのだ。今日も演奏会からリインへ話題が移り、そこからリインを含めた全員での年明けの旅行に話が移る。

前回から加わったのがリインだけとはいえ、ここまでの団体になると色々と大変だと士郎がやや苦笑して言うと、桃子も同じように苦笑して頷くも、でも楽しいからいいじゃないかと返す。それに美由希と恭也も頷いて、セイバーが行き先はどうするのかと尋ねると、そこで全員が頭を悩ます。

「……何なら、リゾート系の管理世界にでも行きます？」

「そんなのあるの？」

ユーノの出した提案に美由希がやや驚いたように言った。それはどうもなのは達も同じだったようで、視線がユーノへ向いている。それにやや苦笑しながら、ユーノは士郎達に告げていく。管理世界も色々あり、中には観光を財源にしているところもある。そこは四季が地球と異なったり、または年中熱帯気候だったりする所もあるので、バカンスに良く使われるのだと。

詳しい事はミッドの観光案内所等で聞くしかないが、そういう世界もある。そうユーノが語ると、士郎達も納得。地球にも観光を主な収入源として成り立っている国がある。そういう事と同じだと理解したのだ。

「予約とかはどうすればいいのかしら？」

「僕がクロノに頼んでやってもらいます。執務官のあいつなら色々

と知ってるでしょうし」

桃子の問いかけにユーノは答えた。管理世界の事をある程度なら全般的に知ってるだろうクロノ。その彼に情報や予約などを頼み、料金などはその都度教えてもらうなり、パンフレットを貰ってくるなりすればいい。

そうユーノが告げると、全員が納得。なのはは更に思う事があるようで、笑顔を浮かべている。

それに気付いたセイバーが、なのはにどうしたのか尋ねると、なのはは笑顔のままこう言った。

「地球にはない珍しい物や美味しい物があるだろうから、それをクロノ君達に教えてもらえるなぁって」

「……そうですね。確かにそれは楽しみです」

なのはの言葉に目を輝かせるセイバー。それを見て、楽しそうに笑う士郎達。値段にだけは気をつけてくれよと誰かが言えば、食べ過ぎないようにねと誰かが続く。それを聞いてなのはは笑みを浮かべ、その旅行へ思いを馳せる。

見知らぬ世界、見知らぬ場所。何もかもが初めての体験になるだろう事に、期待で胸を膨らませながら、なのははある事を思いつく。

（そうだ。もし、夏みたいな所に行けるんだったら、フェイトちゃん達の水着を選んであげなきゃ！）

既になのはの中では、行き先が決まりつつあるようだ。それを知らずに、ユーノはにこにこと食事を続けるなのはを見て、軽く首を傾げるのだった……

なのは達が夕食を楽しんでいる頃、月村家でも同じように夕食の時間を過ごしていた。だが、すずかは忍達の様子が普段と違う事に気付いていた。どこか落ち着かない。何かを警戒している。そんな雰囲気があったのだ。

ライダーは比較的いつもと同じだが、忍やノエル、ファリンはまさにそんな感じだった。すずかはその理由が分からなかったが、昔の記憶を辿り、何となくだが察しはしていた。

（安次郎おじ様が来たんだ……）

人の良い姉や穏やかなノエルでさえ毛嫌いする相手。その心当たりはすずかには一人しかいなかったのだ。そして、更に安次郎が家を訪ねてくる理由にも、すずかは心当たりがあった。

両親が亡くなった後、安次郎は忍達を引き取ろうとした。だが、それを忍自身が拒否し、綺堂さくらがその自立を援助した事があった、その時、忍が呟いていたのだ。安次郎の目的が、財産と自分達だろうと。

幼いすずかには、忍と自分が目的という意味が分からなかったが、今なら分かる。どういう意味で忍は安次郎を毛嫌いし、何故頼る事無く自立の道を選んだのかを。

「ね、お姉ちゃん」

「うん？　どうしたの」

「夏休み、もう終わるね」

「……そうねぇ。最後に恭也を連れ回すのも、いいかな」

すずかの言った言葉がどこか予想外だったのか、忍はやや面食らうがそれにいつものような笑みを浮かべて答えた。それを見てライダーが小さく笑みを浮かべるが、それを誰も気付かない。

ノエルが程々にしないと恭也に嫌われると言えば、ファリンがそうなったら忍が一人になりますねとからかうように続き、周囲に笑いが起こる。それに忍もファリンに言い返し、そこからいつものような賑やかな食卓へとなっていく。

そんな忍やファリンを見て、すずかは嬉しそうに笑顔を見せると、自分もその話の輪の中へ入っていく。そんなすずかを眺め、ライダーとノエルは顔を見合わせ笑みを浮かべる。

（スズカはやはり優しい子です。雰囲気を変えるため、話題を振ったのですね）

（忍お嬢様もどこかでそれに気付いたようですし……。私もまだまだですね）

二人の視線の先には、楽しそうに話す忍とすずかの笑顔と、ややむくれたようなファリンの顔があった……

そして、時刻は午後十時半。はやてはもう就寝し、アーチャー達はそれぞれ公園へ向かった。その道すがら、ヴィータは何気なく思う。それは、今日の寝る前のはやての事。

いつもならば自分を抱きしめるように寝るのだが、今日は何故か隣で横になるだけだったのだ。それが何故かヴィータには気になって仕方ない。

（何で今日に限っていつもと違ったんだろ？　ま、抜け出しやすいからいいんだけど、少し寂しいよな……）

そんな事を考えている内に、公園が見えてきた。そこにはランサーと小次郎の姿がある。だが……

「ライダーはまだか。ザフィーラ、どうする」

「連絡はなかったのだろう。なら、ここから迎えに行ってみる。途中で合流できれば、そこから出発する」

アーチャーの言葉にそう返し、ザフィーラは月村家へ向かう。それを合図に、アーチャー達はそれぞれに別れて消えた。

ザフィーラは月村家に向かいながら、何か嫌な気配を感じた。それが何かは分からないが、急いだ方がいいような気がし、ザフィーラは速度を上げる。

（何だ……一体何が俺の中で訴えている……）

夜の街を駆け抜けて行くザフィーラ。その視線の先には、小さく月村家が見えていた……

アーチャー達が蒐集のために公園に向かった頃、忍は大きな物音で目が覚めた。それと同時に意識を覚醒させる。先程聞こえた音の正体は衝撃音。何かが力づくで侵入したのだ。

すぐに手元の上着を羽織り、部屋を出る。向かう先は音がした玄関。そして、そこで見たものは……

「安次郎……？」

無残にも顔を潰され、横たわる安次郎の姿。それと大型トレーラーだった。周囲を見渡せば、黒服の男達もいるが、全員安次郎とまではいかないものの、手酷くやられている。

誰がこんな事を。そんな風に思った時だった。忍の目の前に一人の人物が現れた。その姿を見て忍は息を呑む。美しい金色の髪。瞳は紫色で、だがその奥には暗い輝きが見える。服装はチャイナドレスが近いのだろうか、スリットが入っており、中々扇情的でさえある。

「あんた……もしかして……」

「初めまして、月村忍。私はお察しの通り自動人形。名前をイレイン」

イレインの自己紹介に忍は愕然となった。イレインの名前に覚えがあったからだ。忍がノエルやファリンを修復した際、参考にした古文書の中に、その名はあった。後期型として作られた存在で、完成度はかなりのもの。だが、致命的な欠点があったのだ。

それは、主に対する安全性の問題。従来あるはずのロボット三原則にも近い制限である、主を傷付けてはいけないというもの。それをイレインは排してあるのだ。機械らしくなってしまった自動人形。それを機械ではなく、人らしくしようと自分の判断で行動出来るようにしたための事だったのだが、結果は恐ろしいものになったのだ。

「まさか……安次郎はあんたが？！」

「まあね。リミッターなんてもんがあったけど、きっと部下だろう

ね。こいつを馬鹿にしてくれたんだよ。雇われ研究員じゃ、文句の一つでも言いたくなるよね」

そう、彼女は完成した時に、周囲にいた主を含めた全員を殺害したのだ。それ以来、イレイン型は作られていないはずだった。だが、現実にはイレイン型は作られ、リミッターが設けられたのだ。

その理由はその性能を純粋に気に入った者がいたため。だが、そのリミッター解除のキッカケは簡単。主を侮辱される事。どうやら、それをイレインは起動してすぐに近い時点で聞き、リミッターを解除していたようだ。

「そこから嫌気がするような芝居をし、機会を待った」

「機会？　一体何の」

「私が私として生きるためのさ。自動人形ではなく、製作者が望んだ人として生きるためにね」

イレインがそう言った時だった。ノエルとライダーが現れたのは。どうやらすずかを安全な場所へ避難させると同時に、護衛にファリンをつけたらしい。二人はイレインの姿を見ると、頷き合った。

「シノブ、ここは私が引き受けます。貴女はノエルと共にすずかの元へ」

「……分かったわ。気をつけてね、ライダー！」

「ライダー、お嬢様達の事は任せてください」

「ええ。頼みましたよ、ノエル」

忍と共にノエルが屋敷の奥へと向かう。それを横目で見送り、ライダーは前方のイレインへと意識を向ける。イレインはどうやらライダーをスキャニングしているようだ。それを知らないライダーだったが、イレインがノエル達の親戚である事は理解している。

そして、安次郎達を眺めて大方の事情を察した。だが、今のライダーにこのまま許すという選択肢はない。やった事の罰を受けさせなければならないと、そう考えていた。

「あんたも災難だね。この私の相手をするなんて」

「そうですね。早く終わらせ、本来の用事を片付けたいものです」

メイド服の裾についた汚れを払いながら、ライダーはそう返す。その言葉にイレインは少しイラつきを見せる。すると、トレーラーからイレインと同じ存在が複数現れる。その数、十数体。

それらに共通するのは、意志を感じさせないという事。そこからライダーはそれがイレインを模した完全な人形だと把握した。

「ま、いいさ。後悔させてやるよ。私を敵にした事を、ね！」

その声をキッカケにその人形達が一斉に動き出す。ブレードを構え、ライダーへと襲い掛かるも、その攻撃をかわし、ライダーは庭へと向かう。それは屋敷をこれ以上破壊させないためだった。今もトレーラーが激突したせいで、見るも無残な状態だったが、これ以上被害を大きくしたくなかったのもある。

それを知ってか知らずか人形達だけでなく、イレインもライダーを追い駆けてくる。それを見て、ライダーは屋敷とある程度距離を取った所で、その足を止めた。

そんなライダーを取り囲むように、イレインの人形達が立っている。その光景を少し離れた位置から眺めるイレイン。その表情は狡猾そうな笑み。ライダーがどれだけの実力を持っていようと、自分達には敵わない。そう確信しているかのような笑み。

対するライダーは、イレインを視界から外し、周囲を取り囲む人形達を見つめていた。動き自体はノエル達よりも悪いとはいわない。だが、やはりどこか違う。鈍い、と感じていたのだ。それも本質的にではなく、感覚的にだ。

意志を感じさせない動き。それにはライダーが恐れを抱く要素が一つもなかったのだ。殺意も気概も何もない攻撃。それに恐怖を感じるようなライダーではない。

（これなら、士郎の方が余程手強いですね）

（笑った？　私を馬鹿にしてんのか！　やれっ！）

記憶にある少年の姿。それを思い出し、ライダーは小さく笑みを浮かべる。それが自分達を馬鹿にしたものだとイレインは捉え、一斉に襲撃するように指示を出す。イレインからの指示を受け、人形達が手にしたブレードを構え、ライダーへと襲い掛かる。

それに慌てる事無く、ライダーは素早い動きでその包囲網を抜け、後ろを取った人形を容赦なく殴り飛ばす。それだけでその人形は機能を停止した。それにイレインの指示が少し途切れたのを見て、更に追い打ちを隣の人形へかけ、それも沈黙させる。

「……何者よ、あんた」

「私ですか？　そうですね……」

イレインの信じられないといった声に、ライダーは特に気にもせ

ず、手を顎に当てて考えた。何者かなどと聞かれれば、ライダーのサーヴァントと答えるのが常だった。だが、今の自分はそれだけではないと言ってくれる者達がいる。

そう考えたライダーは、少し口元に笑みを見せながらはっきり言い切った。

「私はライダー。月村家のメイドで、この家の一員です」

「メイドだと……ふざけるなっ！！」

その声に反応した残りの人形達が連携を持ってライダーを襲う。二体がライダーの正面から、三体が背面から斬りかかり、残り全てが内蔵された電磁鞭を使ってライダーの自由を奪う。それだけで、終わりのはずだった。

――相手が一人だったのならば。

突然ライダーの動きを封じた人形達が謎の光の輪に拘束され、ライダーへの攻撃が中断される。それに驚き、ライダーから距離を取るイレイン。そんなイレインを見つめ、ライダーは襲い掛かる正面の二体を蹴り飛ばすと同時に、そのままの勢いで後ろへも蹴りを放つ。

ソバットからのローリングソバット。たった一撃で人形達は沈黙していく。見れば、バインドで拘束された残りもそのまま身動き出来ずに、立ち尽くしている。その魔力光を見て、ライダーはどこか嬉しそうに笑みを見せ、声を掛けた。

「迎えに来てくれたのですか？」

「ああ。しかし、余計なお世話だったようだ」

「いえ、助かりました。残りは彼女だけです」

ライダーの言葉にザフィーラはいつもの表情で淡々と答えた。それに感謝を込めてライダーは言葉を返す。その声にザフィーラも頷いて、イレインへ視線を向ける。

思いもよらぬ援軍に、イレインは動揺していた。自動人形である自分が、それも”戦闘機人”の異名までも持つ自分が何も出来ずに一方的にやられる。そんな現実が信じられなかったのだ。

「何だよ……どうして……どうしてなんだ!?　何で邪魔するんだ、お前達はっ！」

「何が目的か知らないが、俺が言える事は一つだ、女」

ザフィーラは喚き散らすように頭を振るイレインへ、そう告げ、はっきりと言い切った。

「お前がしようとした事。それを成すための方法が間違っていた。だから、こうなっているのだ」

「間違っていた……」

「ああ。……俺が言えた事ではないが、な」

「ザフィーラ……」

自嘲するように呟いた最後の呟きに、ライダーは何とも言えない声を出す。複雑な生き方をしているザフィーラ。今までは罪の意識もほとんどなく、ただ盲目的に蒐集をし、今は愛する主を、家族を

助けるために蒐集をしている。
昔は何の疑いもなく、ただ他者を苦しめる事をしていた。今は蒐集そのものをどこかで忌避しながらも、それでしか助けられない命を助けるために足掻いている。そんな彼にとっては、イレインの姿はどこか昔の自分に近いものを感じるのかもしれない。

イレインは自分のしようとした事を思い出していた。人として生きる。そのために自分が自動人形である事を知る者達を消そうと思った。自分が機械ではなく人になるためには、自分を人だと思う者だけにしなければならない。
そう考えたからこそ、イレインは安次郎を利用し、夜の一族を皆殺しにしようとしたのだ。そして、ついでに自分と同じ存在である自動人形も。だから、今日まで芝居をし、機会を待ったのだ。

「私は……私はただ、人になりたかっただけなのにっ！」

イレインの心からの叫び。それを聞いて、ライダーはゆっくりとイレインへ近付いていく。何かそうしなければいけない気がしたのだ。その叫び。それがどこか自分の心に響くものがあったから。
そう、まるでかつてこの身が怪物へとなってしまった際、姉達を前にした瞬間の気持ちと似ていたのだ。

――――私はただ、平和に暮らしていたいだけなのにっ！

「人になりたかったのなら……」

優しい声でイレインへ声をかけるライダー。立ち尽くし、ライダーを見つめるイレイン。その目からは涙が流れている。

「する事が違いますよ」

「する事が……違う……？」

イレインの言葉に頷き、ライダーはその涙を指先で拭う。そして、その目をしっかりと見据えて告げる。人として生きるのなら、まずすべきは自分勝手に生きる事ではなく、誰かを大切に思う事からだと。

優しさ、思いやり、労わり、慈しみ。様々な言い方があるが、その気持ちを理解しようとする事。それが人としての第一歩だから。そうライダーは語った。

イレインはライダーの言葉に返す言葉が見つからなかった。自分を圧倒するだけの力を持ちながら、自分にこんな言葉を掛けてくる。それが分からなかったのだ。イレインにも心はある。だが、それはまだ未熟だったのだ。

何も知らない無垢な子供。それに近い状態。そう、子供だからこそ製作者の、親の言う事をただ忠実に叶えようとしたのかもしれない。人らしくあれ。それを、イレインはただひたすら追い求めたのではないだろうか。

そんな呆然となるイレインの前に、ザフィーラも静かに近付き、こう言葉を掛けた。

「それに、俺から見れば、余程お前の方が人らしい。後はお前の心がけ次第だ」

「……耳が……それに……獣の尾？」

ザフィーラが見せた耳と尾にイレインは驚き、言葉を無くす。それにライダーが苦笑し、肝心なのは見かけではなく、その在り方で

すと言うとザフィーラもどこか苦笑し頷いた。
そんな二人を見つめ、イレインは何か言いようのない気持ちになった。例え自動人形だろうと、人らしく生きる事は出来る。そんな風に言われた気がしたのだ。ライダーが告げた在り方次第の言葉が、余計そう思わせていた。

（ああ……私は勘違いしてたのか……）

自分が人になるために、自分の正体を知る者全てを消さねばならない。その時点から間違っていた。大切なのは、事実ではなく、その在り方。人と機械の狭間の存在だとしても、生き方によっては人になれる。
目の前の二人はそう自分に教えてくれた。そう思った瞬間、イレインは急に体から力が抜けていく感覚を覚えた。それは、機動酔いと呼ばれる現象。忍のようにちゃんと検査する技術があればいいのだが、安次郎は生憎そんな技術がなかった。そのため、起動自体は出来ても激しい運動や長時間の行動をするには、調整不足だったのだ。

「む、ライダー。様子がおかしいぞ」

「そうですね。シノブを呼んできます」

「いや、俺が行こう。俺のような無骨者より、お前が傍にいる方がこいつも安心するだろう」

ザフィーラはそう言うと、屋敷へ向かって走っていく。それを見送り、ライダーは小さく笑みを浮かべる。ザフィーラの言動や雰囲気がどこかアーチャーに似ているような印象を受けたからだ。

「……影響を受けているようですね、彼も」

その声には、紛れもない親しみが込められていた……

――――――

A' s三話　後編

月村家にあるノエル達のための調整室。そこにイレインはいた。正確には、そこまで運ばれたのだ。ザフィーラの手によって。

ライダーにもたれかかるように眠るイレインを見た忍は、即座に原因が調整不足による機動酔いだと判断。それを直すためにイレインを調整室へ運ばせたのだ。無論、忍はイレインのした事を見過ごす訳にはいかなかったが、ライダーとザフィーラから聞いた顛末に何か感じるものがあったのか、一先ず詳しい事は目覚めた後とし、今の状態に至る。

安次郎達は、忍が呼んだ救急車で運ばれた。意識を取り戻し次第、警察の世話になるだろう。もう二度と社会へ復帰は出来ないだろうと、忍は思っていた。安次郎の逮捕で今まで隠していた事が、明るみに出たからだ。

安次郎達を救急車が運んでいったのを見送ってから、忍はイレインに的確な処置をし、こうして目覚めるのを待っていた。すずかはイレインの話を聞き、昔の自分と重ねたらしく、忍へイレインを助けてくれるように懇願した。ライダーやザフィーラだけでなく、最愛の妹や更にはノエルやファリンにまで頼まれたのだ。

――この子は、忍お嬢様に出会わなかった私かもしれません。ですからお嬢様……

――私も、そう思います。だからお嬢様……

「「イレインを許してあげてください」」

同じ存在である二人にまでそう言われては、忍としても許さない

訳にはいかなかった。そんな二人の言葉を思い出し、忍は呟いた。

「結局この子は、主に恵まれなかったのね……」

自分に人らしくあれと望まれ、それを果たすために誤った方法を選んでしまったイレイン。もし、最初に出会ったのが忍であったのなら、彼女は目覚めなかったかもしれない。あるいは、リミッターを掛けられたまま、ノエルやファリンと共に働いていたかもしれない。

でも、忍がイレインに対する正しい処置として考えているのは、二つ。一つは、このまま眠らせてやる事。もう一つは、リミッターを掛け直し、この家で過ごさせる事。だが、忍はどちらもイレインは嫌がるだろうと考えていた。

（……ま、いいか。私も逆ならそうして欲しいし）

今の自分に浮かんでいる処置の内容に、軽く笑みを浮かべて視線をイレインへ向ける忍。そして、小さくイレインに向かって告げた。

――今はゆっくり眠りなさい。起きた時が、本当の貴方の人生よ……

そう言って、忍は時計を見て部屋を後にする。時刻はもう早朝から朝に変わろうとしている。それを確認し、部屋を出た忍だったが、その顔には優しげな笑みが浮かんでいた……

人の心を知った日

忍が調整室を後にした頃、ライダーはザフィーラと共にある無人世界にいた。今も魔法生物を弱らせ、コアを摘出した所だ。

イレインとの戦いで時間を潰してしまった二人だったが、その遅れを取り戻すために昨日以上の速度で蒐集を行なっていた。ライダーの動きで撹乱し、ザフィーラが動きを止め、そこをライダーの一撃が仕留める。機動力と怪力を誇るライダーだからこその戦法だ。

ザフィーラも前線を張るだけの力はあるが、転送魔法などで疲労するため、ライダーがメインとして戦うスタイルになっている。

「……これで、三頁か」

「五匹で三頁ですか。昨日よりはマシでしょう」

「だが……」

「ええ。これでは間に合わないかもしれませんね」

二人して表情が暗くなる。今夜は比較的に頁を稼げる相手に出くわしたのだが、それでもこれだ。時間的には効率は昨日よりもいいのだが、結果自体が芳しくないのは変わらずだ。

アーチャー達が昨日よりも稼いでいるかもしれない。そうザフィーラが言うと、ライダーも頷き、もう一匹ぐらいはいけると答えたのだが……

「いや、今日はここまでにしよう」

「何故です？　まだ私は……」

「イレインだったか。あの者が目覚める前に戻った方がいい。心配はいらんと思うが、念のために……な」

ザフィーラの言葉にライダーも納得し、その配慮に感謝した。だが、それにザフィーラは小さく笑みを浮かべ、今までのはやてに対する協力を考えれば、この程度は礼を言われるまでもないと返した。

その口調はアーチャーとは違い、皮肉めいてはいないが、込められた想いは同じだと思い、ライダーは嬉しそうにザフィーラへ笑みを向ける。それを受け、ザフィーラはやや照れたのか顔を背け、月村家の庭まで送ると告げて転送魔法の準備を始めた。

（反応が素直ですね。アーチャーとは違い、幾分か可愛げがあります）

アーチャーよりは士郎に似ている。そんな事を思いながら、ライダーはザフィーラの好意に甘えるべく、その近くへと移動する。展開される転送魔法。その感覚に未だに慣れないライダーだったが、それもまたどこかで楽しんでいる自分に気付き、微かに笑う。

危機的状況。だが、焦りはあるものの、全員絶望はしていない。必ず手はある。そう信じているからこそ、こうして笑えるのだろう。そう考え、ライダーは眼前に広がる見慣れた景色に頷き、もう一度ザフィーラへ礼を述べる。それに今度はやや呆れ顔をしながら、ザフィーラは同じ答えを返す。

「律儀だな」

「貴方ほどではありませんよ、ザフィーラ」

「……そうだな」

ライダーの返しにやや苦笑し、ザフィーラは手を上げて背を向ける。集合場所である公園へ向かうのだ。それに魔法を使えばいいとライダーが言えば、万一があると答え、ザフィーラは走り出した。

また夜に会おう。そう言い残して。その離れていく後姿を見送り、ライダーは微笑む。思い出したのだ。いつだったか、すずかがはやてから聞いたというザフィーラの人物評を。

（皮肉を言わないアーチャー、でしたか。言い得て妙ですね）

さすがに家族の事を良く分かっている。そう感心し、ライダーは屋敷へと向かって歩き出す。まだ眠っているであろうイレイン。それに対する万一の備えとなるために……

公園に着いたザフィーラを出迎えたのは、守護騎士達だった。念話で簡単に事情を伝えておいたため、こうして待っていたようで、アーチャーは何故ここにいなかったのかを詳しく尋ねた。

それにザフィーラが深夜の出来事を話した。そして、念のためライダーを庭まで送ってから来たのだと伝えた。それを聞き、全員が納得した。ランサー達は既に帰宅したらしく、結果は全員合わせて九頁と少しだった。

「……やはり芳しくないな」

「どうすんだよ。このままじゃはやてが……」

ザフィーラの結果を加え残りを計算するアーチャーだったが、それがかなり厳しい事を確認し、そう告げた。その言葉にヴィータが不安な気持ちをそのままに、そう言い出した。

それに全員の表情が曇る。そして、そんな中でリインがふと呟いた。なのは達に蒐集させてもらうのはどうだろうかと。それに守護騎士達が驚きと躊躇いを見せ、アーチャーはやや憮然とした表情を見せた。

「……本気で言っているのか、リイン」

「……確かに問題はあるだろう。だが、若干余裕を残して蒐集を止めれば命の危険はない」

「彼女達ははやての友人だぞ」

「だからこそ、協力してくれる。主が死ぬかもしれないと聞いて、黙っているような子達ではない！　むしろ、喜んで――――」

その続きがリインの口から出る事はなかった。アーチャーの全身から迸る怒気。その気迫に全員が身動き一つ出来ない。その視線は鋭くリインを射抜いている。

リインは当然ながら、シグナム達も一言も発する事が出来ない。リインが考えた事は、彼らも思った事がない訳ではない。だが、それを実際口に出せる程、彼らはなのは達との関係が浅い訳ではなかった。

（だがリインは……）

（なのは達とはまだ付き合い浅いからな……）

（だから言えるのね。はやてちゃんのために……そう純粋に考えて）

（それが何を意味するかを、おそらく理解していないのだろうな…

…）

四人が何故それを言い出さなかったか。それは、はやての事を考えたからに他ならない。親友と呼ぶ相手から蒐集をする。それを知った時、はやてはどれだけ自分を攻め立てるだろう。いくら死なないとはいえ、下手をすればその可能性がある。

そんな行為を親友にしてまでも生き残った。それを知ればはやてがなのは達に負い目を持ってしまう。だからこそ、シグナム達はその選択を選ぶ訳にはいかなかったのだ。

しかし、リインはそこまで考える事が出来ない。いや、考えないようにしているのかもしれない。ただはやてを生かすために。そのためだけに考えれば、それに行き着くのは当然だ。なのはもフェイトもかなりの魔力を持っている。それを蒐集出来れば、一気に希望が持てるだろう。

しかし、それをすればはやてに嫌でも気付かれる。蒐集されてしばらくは動く事さえ辛いのだから。なのはから蒐集すれば、学校を休む事になり、アリサやすずか経由で、フェイトから蒐集すれば、二人とアリシアからそれを聞かされ、疑念を抱かれる。

二人に口止めを頼んでも無駄だ。はやてに疑念を抱かれた時点で、知られるのは時間の問題なのだから。

「君がはやてを想う気持ちは理解出来る。だが、良く考えてみろ。なのは達は優しく素直な性格だ。はやての事を言わずに蒐集する事はしづらい上、それを隠し通せるのは厳しいだろう」

「それは……」

「君は、彼女達の心に影を落とす事になってもいいと言うのか」

その言葉にリインは項垂れた。自分の考えがはやて達に与える影響を理解したからだ。いくら可能性が上がるとはいえ、まだ分からない状況。それを知って、普段通りに出来る程、なのは達は大人ではない。きっと、どこかではやてに気遣いが出てしまうだろう。

そして、そこまで考えリインは思ったのだ。守るべきは、はやての命だけではない。はやてとその友人達の心も守らねばならない。そう悟った。

それは、覚醒した夜にアーチャーが言った言葉だったのもある。自分達の楽を取るか、はやての笑顔を取るか。それにアーチャーははやての笑顔を取った。つまりはそういう事だ。

「すまない……私は、主の事を考えた気になっていたようだ」

「いや、君が必死で足掻こうとしているのは分かった。私も万が一の方法として考えてはいる。だからこそ、今はそれに頼る事無い方法を模索せねばならないのだ」

アーチャーはそう告げると、全員へ帰宅を促した。それに応じ、シグナム達は動き出す。こうして、この日の蒐集は終わった。アーチャーの最後に言った言葉。それを噛み締め、リインは誓う。

必ず、はやての笑顔を守り抜いてみせると。その笑顔を曇らせる事ないように、どこまでも足掻こうと。諦める事はもう止めたはず。だから最後の最後まで希望を捨てないのだと、改めて思っていた。

（私は勘違いしていた。本当に主の事を思うのなら、安易に彼女達を巻き込んではいけないのだ。それは、どうしようもなくなった時のみ。それも、それ以外に手が無くなった場合だけなのだ……）

守るべき笑顔。それははやてだけではない。その周囲の者達の笑顔もなのだと、リインは感じ取り、一人頷くのだった……

ライダーは調整室にいた。忍が仮眠を取っているのを知り、ライダーは一人でイレインの傍にいる事を選んだのだ。それは、忍も疲れている事を知っているから、少しでも寝かせてやりたいという事でもある。

イレインは安らかに眠っている。それを確認し、ライダーも椅子に座って目を閉じた。少し自分も仮眠を取ろうと思ったのだ。部屋まで戻ると色々と面倒があり、何よりイレインが起きた時に傍にいてやれない。そのため、ここの椅子で眠る事を選んだのだ。

そうしてライダーが眠ったすぐ後、イレインが静かに目を覚ました。実は、彼女はライダーが来た時から目覚めていたのだ。だが、そのまま低電力状態になり、ライダーに気付かれないようにしたのだ。

イレインはゆっくりと体を起こし、ライダーへと近付いていく。そして、その目の前に立ち静かに自分の手をライダーの首へ伸ばし――。

「……止めた」

下ろした。その表情はどこか諦めた雰囲気を漂わせている。ここで自分が何をされたかをイレインは理解していた。丁寧に調整され、リミッターさえ戻されていない。

それが何を意味するのか。それが分からぬイレインではない。自分は生かされたのだ。しかも、リミッターを戻す事無くという事は、自分に好きに生きろという事だ。

（……私に……どうしろって言うのさ……）

主も無く、目標も無く、ただ生きる。人らしくなりたい。それは、つまりそういう事。何にも制限されなくなる代わりに、自分で自分の道を決めなければならない。イレインが望んで止まなかった人らしくなる。それが手に入った途端、イレインは途方に暮れたのだ。

自分のしたい事などない。目指すものも、頼るものもない。気付いたのだ。自分には、何もない事に。

「……そっか……私は一人なんだ」

「いえ、一人ではないですよ」

何気無く呟いた一言に、そうはっきりと答えが返ってきた。それに驚くイレイン。そんな彼女を見て、笑みを見せるライダー。そして、そのままイレインへ告げる。望むのなら、この家で暮らしましょうと。すずかにファリン、ノエルや忍もきっと受け入れてくれますと、そう言って。

それにイレインはどこか信じられないと返す。自分は主であった安次郎へ簡単に暴力を振るい、ライダーを襲ったのだと。そんな自分が許されるのか。そうイレインは叫んだ。

それを聞いて、ライダーは静かに返した。ならば、許されるように償いなさいと。それが今のイレインには出来るはずだ。そう言ったのだ。

「私に出来る……」

「ええ。もう貴方を縛るものはないのでしょう？　なら、出来るはずです。自分の意志で自分のしたい事が」

「私は戦闘機人だ」

「それが？　なら私は怪物です」

ライダーは自分の事を簡単に話した。それを聞いてイレインは言葉を失った。事実かどうかは分からないが、この家の住人は突然現れたライダーを受け入れ、家族とさえ考えているらしい。しかも、彼女はこの世界の住人ではなく、異世界の怪物なのだと語った。

その証拠に昨日の戦いで見ただろうと。自分の分身のような存在が一撃で機能停止したのを。それが何よりの異常さの証だ。そうライダーは言い切った。

「……確かにあんたの体は、自動人形じゃなかった」

「当然です」

「……ねぇ、本当に私も、あんたと同じように受け入れられるかな……？」

どこか不安そうに尋ねるイレインに、ライダーは口元に小さく笑みを浮かべ、こう答えた。

――全ては自分次第です。

その言葉を聞いて、イレインはハッとした。昨夜ライダー達に言われた言葉。その時、自分は答えを貰っていたと気付いたのだ。人らしくなりたいのならする事が違う。だが、自分はそもそも人について知らない事が多い。なら自分がすべきは、人を知る事だと。

そのために、この家の者達から色々と知ればいい。ライダーは、それを止めないだろう。そして、月村家の者達も。

（私は……好きに生きればいいんだ。人らしくある。それを自分で知り、決めればいい）

イレインがそう悟り、どこか嬉しそうに笑う。それを見て、ライダーは一瞬驚きを見せるが、すぐに柔らかい笑みを浮かべて立ち上がる。それに気付き、イレインが後を追う。

そして、ライダーにどこへ行くのかを尋ね、忍を起こしに行くと聞いて、ややその表情に緊張が走る。それに微笑ましいものを感じながらも、そう固くなる必要はないと告げ、ライダーは歩く。

「ついでに、他の事も教えておきます。ノエルやファリンからも後で聞いておいてください」

「分かった。よろしく頼むよ、ライダー」

イレインの言葉に頷き、ライダーは忍の部屋を目指す。それに並ぶように歩き、ライダーの説明を聞いて頷くイレイン。こうして、月村家に新しい同居人が加わった。

家族認定は、イレイン本人が強く断った。これからの自分を見て、本当にそう呼んでもいいと思えたらそう呼んでくれと、そう言って。それに忍とファリンは苦笑し、すずかとノエルは頷いた。ライダーは、そんなイレインを眺め、ただ静かに笑みを浮かべるのだった……

ヒトならざる者。だからこそ、彼らは人に憧れる。人の心を知る時、彼らは知る。人には人の苦しさがある事を。

作られた存在。だが、それも心の在り方によっては人となれる。

そう、彼女達は理解したはずだ。奇しくもそれを教えたのは、どちらもかつてヒトを捨てた者達……

ーーー

番外編　マスター達とリリカルまじかる頑張ります3

翠屋で忙しく働く士郎と凛。それを見ながら、恭也は美由希と共にテーブルの片付けをしていた。桃子が父である士郎を看病して、もう三ヶ月。未だに士郎の退院は叶わない。

しかし、既に高町家には士郎の状態以外の不安がなかった。末っ子のなのはは、士郎と凛、桜の繋がりにより友達を得た。その内の一人が偶然にも、恭也の同級生である月村忍の妹だった事もあり、恭也と忍の付き合いも開始。

今は妹達の事や互いの事を良く話すようになり、周囲からはどこか見守られているぐらいに。今日も月村家でなのははやてと世話になっていて、士郎と凛が仕事終わりに迎えに行く事になっている。

「……最初は色々と信じられない事ばかりだったが……」

「ん？」

ぽつりと恭也が呟いた言葉に美由希が視線を向けた。それに応じるように恭也は、士郎達を見つめて続けた。

「母さんが言ったんだ。士郎さんは、幸せを運んできたんじゃないかって」

「……そうかも。なのはも良く笑うようになったし、凛さんや桜さんは良い人だし、はやてちゃんやすずかちゃんと出会えたし」

「士郎さんは優しいし、か？　諦めろ美由希。士郎さんにはもう凛さんがいる」

「ちょ、何でそんな話に……。別にあたしはそんなんじゃ……」

やや戸惑いながら、美由希は恭也へ反論する。しかし、その顔が微かに照れているのは誰の目にも明らかだ。凛はそんな美由希を見て、小さくため息。並行世界にきても、士郎の天然誑しは健在と実感したからだ。

美由希と士郎は良く鍛錬を共にしている。恭也は美由希と士郎の戦い方の違いを見抜き、互いに何か教え合い気付いてくれればと思い、二人を指導する事がある。

士郎の方が年上だが、士郎は恭也にそこまで気にしなくていいと言ったため、さん付けをする以外は、特に何か気を遣う事はない。よって、鍛錬時は恭也の方が士郎よりも上に立つ事が常だった。

士郎は美由希と手合わせして、その才能に気付き、対する方もその愚直な剣筋に性格を見て苦笑。御神の剣は士郎にとっては得る物も多かった。双剣を使う士郎にとって、小太刀二刀を使って戦う美由希と恭也は願ってもない理想像。

その剣技を模倣する事は出来ないが、知る事で得るものもある。様々な技をその身で受け、覚えようとしたのだ。しかし、そうそう習得出来るはずもなく、現在も士郎は御神の技を一つも使えなかったりする。

「士郎、あんた美由希と鍛錬以外はどんな会話してんのよ」

「いきなり何だ？　美由希ちゃんとは……料理の話かな。初歩的なものを結構」

そう、美由希の料理の駄目さを見て、士郎は何とかしようと決意したのだ。決して美由希の姿が一瞬冬木のトラと被ったためではない。純粋に何とか出来ると信じて、士郎は美由希とたまに料理を作

る。

今ではご飯を炊くぐらいは出来るようになったと、士郎が告げると凛はそれに軽く頭を抑えて頷いた。つまり大河よりはマシレベルになる可能性が高い。そう結論付けて。

その言葉に士郎も苦笑するしかない。実は士郎は美由希の料理の駄目さは、根気良く教える人がいなかったためだと思っていた。剣術に関しては恐ろしい程の才能を見せる美由希だが、料理になるとその欠片もなくなるのだ。

直感で料理をするためだと士郎が気付いたのは、ふとした偶然。料理中に宅配便が来たため、士郎が少しだけキッチンを離れた際、美由希がそこへ現れた。そこで、本人としては善意だったのだが、これを入れれば美味しくなると調味料を勝手に足そうとした所へ、士郎が戻ってきてそれを目撃。何とか大惨事は免れた。

（まさかビーフシチューに、ソースを入れようとするとは思わなかった……。カレーと色が似てるからコクが出ると思ってって……発想が似てるんだよなぁ……）

いつかの出来事を思い出し、士郎は苦笑い。それを見て、凛はややムッとした表情を浮かべてわき腹へ肘打ちした。

「ほら、お会計よろしく。私、向こうのオーダー聞きに行くから」

「と、遠坂、今の結構効いた……」

そんな風に翠屋の時間は過ぎていく……

「なのはちゃん、ゲーム強いなぁ」

「ホント。私達じゃ相手にならないよ」

「にゃはは、それほどでも……」

なのはが自宅から持参したゲーム機で遊ぶ三人。やっていたのはパズルゲーム。所謂落ちゲーという物だ。はやてとすずかの対戦は白熱するのだが、なのは相手になるとワンサイドゲームになるのだ。

それでも、はやてもすずかも善戦はするので、なのはとしては中々気が抜けないのも事実。だからこそ、二人に対して本音でそれほどでもないと言えるのだから。

そこへノックの音が聞こえてくる。それにすずかが返事を返すと、メイド服姿の桜がティーセットと共に現れた。その横にはお茶請けのパイが載った皿を持っているファリンがいた。

「みんな、おやつですよ」

「桜さんが焼いたアップルパイをどうぞ」

ファリンの言葉に嬉しそうな声を上げる三人。桜とファリンはそんな三人に笑みを見せる。そして、先程入った電話を思い出し、桜はすずか達へ苦笑して告げた。

「そうそう、アリサちゃんが明日遊びに来たいって言ってたよ」

「アリサちゃんが？　分かった。後で電話しておくね」

そう、アリサとなのは達は既に顔見知り。凛が魔力を辿り、バニ

ングス家へ辿り着いてキャスターと会ったのだ。そして、その縁でアリサとなのは達も知り合う事になった。

キャスターは、凛からここが並行世界と聞いて納得。そして、アリサが同年代の友達がいない事を相談し、凛がはやてを紹介。そこからなのはとすずかとも知り合い、仲良くなったという訳だった。

ちなみに、キャスターの言葉からまた新たな事実が判明した。それは、あの時キャスターだけでなく葛木も共にいたという事。一度料理を教えている士郎に礼を言いたいと言って、ついてきていたのだ。

キャスターが霊脈を押さえたのは、自身の現界のためと葛木を捜すためでもあった。しかし、葛木はこの海鳴にはおらず、キャスターとしては途方に暮れていたのだ。

だが、葛木は一人でも何とか出来るだろうと凛は結論付け、キャスターへ告げた。もしかしたら、出現時間の誤差があるのかもしれないと。現に、士郎と凛、桜は僅かではあるが海鳴に現れた時間が違うのだ。

それを聞いてキャスターも理解を示し、それを信じて待ち続ける事にした。そして、キャスターの好みに合致するなのはやすずかを見て、彼女が着せ替えをしたくなったのは、言うまでもない。

「はむっ……う～ん、おいひい」

桜が切り分けてくれたパイを頬張り、笑みを浮かべるはやて。その表情に桜は笑顔を見せるが、なのはとすずかは苦笑していた。

「は、はやてちゃん、口に入れたまま喋っちゃ駄目だよ」

「ふふっ、でも美味しいよね」

「はい、はやてちゃんも紅茶をどうぞ」

「……あ、私はお姉様の所へ戻りますね。そろそろ買い物の時間ですし」

桜が淹れた紅茶を飲み干し、ファリンは思い出したようにそう言った。それに桜が自分もそうしようとしたのだが、ファリンがすずか達の世話を頼んで部屋を出て行ったので、小さく笑いながらそのまま元の位置へ戻った。

そして、自分の分の紅茶を淹れて目の前の光景を見つめた。楽しそうに話すなのは達。これが、自分達がいなければ出会っていなかったと考えると、少し寂しい感じがすると、桜は思った。

なのはは、士郎がいるからこそ恭也や美由希が時間を多少取る事が出来ているし、こうして友人を得た。はやては、凛が姉のように家事から何からを仕込んでいるので、もしまた一人になっても暮らしていけるようになっているし、友人を得た今ならそこまで寂しくはない。

すずかは、桜と出会いもう一人の姉を得たように慕っていた。そして、自身の秘密を桜が平然と受け入れた事もあり、その事に対する嫌悪感がいくらか払拭されたのだ。この分なら、いつかなのは達へ言える日も近いかもしれないと桜達は考えていた。

「明日アリサちゃんが来るなら、ボードゲームやろうよ」

「お、ええな。また現実と違って破産させたる」

「はやてちゃん、仕返し止まると絶対アリサちゃん狙いだもんね」

「その言い方も凛さんみたいだよねぇ……」

なのはの言葉に桜が苦笑した。そう、凛はアリサを見てロンドンで出会った金髪お嬢様を思い出し、もし対戦する事があるのなら徹底的にやり込めろとはやてへ告げていたのだ。

そのため、はやてとアリサは友達でありながらライバル。会えば必ず多少の憎まれ口を言い合う関係。でも、その仲は良好という変わった二人なのだ。

（はやてちゃんが、最近小さい姉さんに見えてきたなぁ……）

若干はやての将来を不安に思いながら、桜は紅茶のお代わりを注ぐのだった……

「っくしゅん！」

「……風邪かしら？」

「違うわ。はやての奴がまた何か言ったのよ」

バイオリンの演奏を終えたアリサだったが、それを見計らったかのように起きたくしゃみに、そう断言した。キャスターはその言葉に肯定も否定もしない。アリサとはやてが仲が良いのを良く知っているからだ。

何だかんだ言いながら、アリサははやて達と知り合ってから笑う事が多くなった。どこか子供らしくなったようとキャスターが感じる程に。今日も習い事さえなければ、月村家へ遊びに行っていたぐらいなのだ。

「それにしても、もうすぐ学校ね。はやてちゃんも聖祥を受けるのでしょ？」

「本人は最初嫌って言ったけどね。アタシが、勉強が出来ない事に車椅子を言い訳にするのかって言ったら、悔しかったのか受けるって言い出したのよ」

「そう……」

アリサの言葉にキャスターは微笑みを見せる。素直じゃないと思ったのだ。素直に一緒に行きたいと言えばいいのに、そうやってでしかはやてには思いを伝える事が出来ないのだ。

しかし、同時にそう言われれば、はやても聖祥に行く事が出来る。自分が障害を持っている事を気に病むはやて。それを気にしないと暗に言い切ったアリサ。きっとなのやすずかもはやてが来るのなら、喜んで世話をするだろう。

またはやてもアリサの言葉の裏を感じ取り、内心で感謝していての反論だった事もキャスターは薄々気付いている。まったくもって不器用だと、キャスターは強く思った。アリサもはやても何故か互いに対しては不器用極まりないのだ。

なのはやすずかに対しては見事なまでに気を遣い、素直に言葉を伝える事が出来るのに。しかし、それもまた仲が良いからだと思えば。そう考え、キャスターはアリサへ視線を戻す。

「明日、何して遊ぶのかしら？　またボードゲームだったら、はやての奴を借金まみれにして、この前の復讐をしてやるわ」

「……喧嘩するのだけは止めなさいね」

とても六歳には見えないような表情で笑みを浮かべるアリサ。それにキャスターはややため息混じりでそう告げる。その光景は、どう見ても娘を心配する母にしか見えなかった……

「わ、私に姉さんがいる？」

「ええ。アリシアと言うらしいです。今はある事情のため眠っているのですが、いつか必ず起こしてみせます」

あの後、リニスとアルフが慌てて動いた事を知ったフェイトは、プレシアの部屋へ向かい、そこでプレシアをげんなりさせたバゼットを見つけたのだ。そしてバゼットは、フェイトへ真実を告げたのだ。双子の姉がいると。いきなりそう言われ、フェイトは困惑していた。そして、視線を疲れた表情のプレシアへと向けた。

本当なのかと尋ねるフェイトへ、プレシアはもう思考能力が落ちているのか素直に頷いて返す。そんなプレシアを見て、リニスとアルフは天地がひっくり返ったのかと思うぐらい驚いていた。

フェイトに対してプレシアが素直に反応したのだ。それは、今まで一度としてなかった事。現にフェイトもその反応に頷いて、はたと動きを止めた。そして、恐る恐るプレシアへもう一度声を掛けたのだ。

「か、母さん……疲れてる？」

「……ええ。もう、色々と疲れたわ。説教されたのなんてどれぐらい振りかしら……？」

「や、休んだ方がいいよ」

「そうね。そうするわ。後は頼むわよ、リニス」

フェイトの言葉に普通に言葉を返し、プレシアは平然と隠し部屋へと入っていく。それを唖然と見つめるリニスとアルフ。フェイトは呆然とそれを見送り、バゼットはその隠し部屋の存在に感心していた。魔術師らしいと感じたのだ。

そして、しばらく沈黙が流れ、思考能力を取り戻したリニスがフェイトへ視線を向けた。フェイトはプレシアと初めて普通の会話が出来た事に、喜びと感動を覚えていた。それに、今は会えないが姉もいる。それを知って、フェイトは涙さえ浮かべていた。

(夢じゃないよね？　母さんとお話出来て、姉さんがいるなんて……)

あまりにも色々と嬉しい事があり過ぎて、フェイトは現状に不安を覚えていた。そんなフェイトへバゼットがそっと近付き、その目元を拭った。

「えっ……？」

「どうしました？　何か泣くような事でも？」

一般家庭とは程遠い環境で育ったバゼットだったが、それでも親子の会話ぐらいはあった。それ故にフェイトが今の他愛ない会話で、どれだけ心を動かしていたのか理解出来なかったのだ。

しかし、その涙が辛い事や嫌な事で流すものではないとは分かっていたので、その問いかけは優しく笑みを見せていた。フェイトは

その優しい笑みに思った事を口にした。今があまりに幸せ過ぎて、夢じゃないかと思ったと。

それにバゼットは軽く意外そうな表情を見せるも、すぐに笑みを戻してフェイトの頭を撫でながら静かに告げた。夢ならば、とことん幸せにしてみせなければと。目覚めた時、嬉し涙を流すぐらいの良い夢を見せてみせる。

そう断言し、バゼットはフェイトへ笑顔を向けた。それにフェイトは呆然と視線を返す。バゼットはそんなフェイトへもう一度言い切った。これが夢ならば、幸せはこれからだと。

「私が出来る限りの事をして、アリシアを起こしてみせます。きっと、どこかに私の知り合い達がいるはずです。彼らと再会出来れば、あるいは……」

「何とか出来る、と？」

リニスの問いかけにバゼットは頷いた。そして、まず冬木を探す事から始めないとと言って、リニスへ地図を要求。それにリニスが動いて、アルフは立ち尽くすフェイトへと近寄った。しかし、その視線はずっとバゼットを追っている。

それは、感謝の視線。フェイトへ辛く当たるプレシア。それがフェイトを悲しませる事無く、しかもアルフが望むような普通の会話をさせた事に。よく事情が分からない次元漂流者。だが、それでもバゼットがフェイトの事を大事に思い、動いている事はすぐに分かった。

（ありがとよ、バゼット。アンタのおかげでフェイトが悲しむ事減りそうだ）

フェイトの体を軽く抱きしめながら、アルフは心からバゼットへ礼を述べる。そして、偶然の出会いへの感謝を初めて神へと送る。運命があるのなら、きっとこれは奇跡と呼ばれるものだと思ったから。

本来ならば出会う事のない相手。それが自分達へ与えた影響を考え、アルフは思う。きっと、フェイトを悲しませる事にはしないと。笑顔であり続けられるよう、全力で物事へ挑もうと。

この後、リニスがミッドの地図を持ってきて、バゼットが日本の名を出した事で、期せずして出身世界が判明するのだった……

ティアナは頭を抱えていた。陸士隊３８６へ配属になって一年。相棒のスバルと二人三脚で仕事をこなし、それなりに自信もついてきた矢先、突然兄から送られていた一通の手紙。

わざわざ紙を使わなくてもと思ったのだが、読んでみて激しい後悔に襲われたのだ。そこには、ティーダの字で長々と謝罪文が書かれていた。内容は、カレンと関係を持ってしまったとのもので、責任を取って結婚する事にしたというもの。

そう、実はティーダはティアナが訓練校へ行ってしまったすぐ後、カレンがふとした悪戯心でした誘惑に負け、行為を行なってしまったのだ。カレンとしてはそれをネタにティアナをいびろうと思っていたのだが、ティーダが真剣に責任を取ると言い出したため、それも出来ずにここまできたのだ。

ティーダがあまりにも真剣な眼差しでカレンを見つめ、絶対に幸せにすると言ったのもある。自分が誘惑したにも関らず、ティーダは己が悪いと言って聞かず、カレンさえ良ければとこの話を持ち出したのだから。

それをティアナは知らない。ティーダが、自分からカレンへ手を出したとしか思えないような文面にしたのも影響している。それと、とてもではないが、カレンがティーダを好きだとは思えなかったのもある。

「……嘘だ」

何度も手紙の最後の一文を見つめる。そこには、来月に式を挙げると書いてあった。是非、ティアナにも出席して欲しいとも書いてある。だが、ティアナにとっては複雑な心境だった。

カレンのいびりが嫌で逃げ出したために、兄がカレンと結婚する事になったと思っていたからだ。どうしようとティアナが悩んでいると、そこへ汗を流してきたスバルが現れた。タオルで頭を拭きながら、机に突っ伏すティアナを見て、首を傾げる。

「……どうしたの？」

「……これ」

もう説明するのも面倒だと思ったティアナは、手紙をスバルへ突き出した。それを受け取り、スバルは黙読する。そして、その表情が段々曇っていき、最後には苦い顔になっていた。

そして、手紙をティアナの前に置いて頬を掻きながら一言、おめでとうと告げた。それにティアナは死んだ目を向け、本当にそう思うのかと言いたそうな視線を送る。その不気味な迫力にスバルは小さく声を漏らし、後ずさる。

「……カレンさんがアタシの義姉になるのよ……？」

「てぃ、ティア？」

「それのどこが……めでたいって言うのよっ！？」

「ゴメ～～～ンっ！！」

今にも殺されそうなティアナの声に、スバルは反射的にそう返して部屋を出て行く。それを見送って、ティアナは大きくため息。

――――休暇の申請……出しとくか。

何だかんだ言っても親代わりをしてくれた兄である。相手が誰であろうと、その門出を祝う事に躊躇いはない。それに、少々癪だがカレンはティーダの恩人でもあり、美人だ。自分と歳はそんなに違わないが、妙な落ち着きがあり、凄みも感じる時がある。

きっと、ティーダと上手くやっていくだろう。そんな風に思っていたりもするのだ。ティアナは休暇申請を書きながら、視線を外へと向けた。その星空を眺めながら呟く。

「絶対、幸せになってよね……お兄ちゃん」

「やっぱり見回りはフリードに限るわ」

「イリヤちゃんって、本当にフリードと仲が良いよね」

大空を飛ぶフリードに乗って会話するイリヤとキャロ。スプールスの自然保護隊に配属された二人は、こうして定期巡回をフリードの背から行なうのが常だった。といっても、既に森全体にイリヤが

結界を巡らしているので、不審者が入ってくれば即座に分かる。
つまり、これはただの遊覧なのだ。キャロは一応念のための巡回と思っているが、イリヤにとってはただの時間潰しに過ぎないのだから。

そんな風に会話しながら、二人の話題は今度の休みに変わる。一日本を読んでいようかなとキャロが言えば、イリヤがミッドへ遊びに行こうと返す。そう、二人はほとんど給料を使う物が無いため、その蓄えがかなり出来ていたのだ。
そのため、遊ぼうと思えばかなりの贅沢が出来る。イリヤはそれを使って一日楽しく過ごそうと提案するのだが、それにキャロが渋い顔をした。お金は大切に使うもので、そんな風に使ってはいけないと言ったのだ。

「……分かったわ。なら、アルザスに帰ってみない？」

「アルザスに？」

「そう。おじさん達に会いに行こ！」

「それいいねっ！　元気だよって言いたいし、久しぶりにおじさん達のご飯も食べたいし……」

ミッドへ旅立ってかなりになるが、あれ以来アルザスへは行っていない。それを思い出し、一度顔を見せに行こうとイリヤは考えたのだ。無事にやっている事と、ちゃんと局員として働いている事を伝えるために。
キャロもその思いは同じだったようで、嬉しそうに笑みを返したのだ。そして、イリヤがそこから思い出話をしようとした瞬間、ある反応が起こる。それにイリヤは舌打ちをすると、キャロへ視線を

送る。その視線の質からキャロも事態を理解し、頷いた。

「キャロ、フリード、行くわよ」

「うんっ！」

イリヤの呼びかけに力強く応じるキャロ。フリードも大きく雄叫びを上げ、イリヤの示す方向へと加速していく。森に侵入者が来たのだ。それも、数は五人。きっと密猟者であろうと当たりをつけ、イリヤとキャロは表情を険しくする。

キャロにはバリアジャケット用のストレージデバイスがあるが、イリヤはそもそもデバイスを使う事さえ出来ない。そのため、密猟者を感知した場合、フリードによる制圧が基本となる。ブレスを使って戦意を喪失させ、更にイリヤの魔術とキャロのバインドで動きを封じるのだ。

そのために必要なのは、相手の位置を完全に把握し、一網打尽にする事。なので、フリードをある程度まで密猟者達へ接近させ、一度二人はその背から降り立ち、再度フリードを密猟者達へ向かわせて視認させる。

注意がフリードへ向いた隙を使い、イリヤが魔眼で、キャロがバインドで動きを封じる。それを運良く逃げ延びても、フリードのブレスで逃げ道を塞がれ、結局捕まるのだ。

今回もそう。イリヤとキャロの抜群のコンビネーションで動きを完全に抑え、抵抗しようとした者へフリードが威嚇のブレスを見せ、決着となった。そして、そこへミラとタントがやって来て、後を託して二人は普段の大きさに戻ったフリードと共に隊舎へ帰還する。

その帰り道でちゃんとフリードを誉め、互いの事を労うのもいつもの事。二人が来てから、保護隊には怪我人もなく、検挙率は百％。

全てがイリヤの結界と、フリードの機動性、それとキャロの支援能力の高さにあった。

「にして、まさかブーストがこんなにも魔眼に働くとは思わなかったわ」

「だね。魔術と魔法は相性悪いのかなって思ってたら、そうでもなかったんだもん」

本来、イリヤの魔眼は相手の目を見なければ効き目が薄い。しかし、キャロのブーストを受けると一時的にではあるが、イリヤが見た者の動きを止めたり、鈍らせる事が可能なのだ。

それを知った時、イリヤが小さく「ライダーの気分ね」と呟いたのは言うまでもない。しかし、それはキャロの魔法が優秀だからに他ならない。ただのブーストではなく、イリヤを支えるために組まれた専用補助魔法なのだから。

「そうだ。キャロ、貴方専用のデバイス作ってもらいましょ。そういう事になら、お金使ってもいいわよね？」

「えっと……ブーストデバイス？」

「そう。それならもっとキャロの魔法を活かせるはずよ」

イリヤはそう言って、一度局に行って腕利きのデバイスマイスターを捜さないとと息巻いていた。キャロはそんなイリヤに嬉しく思いながらも、別に無理しなくてもいいと告げた。

それにフリードが同意するように一声鳴いて、イリヤが軽く笑った。そして、フリードを見て自分の意見に反論するとはいい度胸だと優しくその頭を撫でる。

そんな風に楽しそうに話しながら、二人は歩く。幼いながらも、キャロの姉役をこなすイリヤ。だが、その光景はどう見ても仲が良い友人にしか見えなかった……

ベルカ自治区のどこかにあるジェイル・スカリエッティのアジト。そこに言峰の姿があった。前々から言峰はジェイルを追っていた。そう、ゼスト隊壊滅の日からずっとだ。

そして、ついにその居場所を突き止め、こうして単身やってきた。その目的は一つ。この世界に来た意味を見つけるためだ。言峰は、あの第五次聖杯戦争で死んだ。だが、気がつけば見も知らない場所にいて、そこでスバルやギンガと出会ったのだから。

そのため、言峰はジェイルを利用して元の冬木に戻ろうとしていたのだ。と言うのも、彼は未だに諦めていなかったのだ。聖杯を完成させ、この世全ての悪を生み出させる事を。

彼は知らない。大聖杯を破壊され、その可能性は完全に消えた事を。しかし、例えそれを知っても言峰は戻ろうとしただろう。何故なら、彼には一人娘がいるのだ。本人に自覚はあまりないだろうが、彼が元の世界に戻りたいと思う根底には、その事がある。

愛する事が出来なかった。妻を愛そうと思った。でも出来ずに、死が二人を別った。残された娘は妻の故郷の教会へ預け、言峰はそれ以来一度として会っていない。だが、彼にもあったのだ。本人さえ気付かぬ欠片の愛情。気のせいとも思えない程の人らしい感情が。

「……それで、君は元の世界へ戻る術が欲しいと？」

「そうだ。私は自らがいた世界へ帰り、成さねばならない事がある」

ジェイルと対峙しながら、言峰は平然と会話していた。その背後にはトーレとチンク。ジェイルの横にはウーノとクアットロがいる。その視線は皆一様に鋭い。そう、言峰はゼスト隊壊滅の際、チンクと遣り合ったのだ。

つまり、その異常さはジェイル達の知るところである。ただの魔力無しの修道騎士。にも関らず、戦闘機人であるチンクと互角どころか圧倒してみせたのだ。そんな相手を躊躇なく懐に入れたジェイルに、全員が疑問を抱いていた。そのために、ここまで警戒を強めているのだから。

「……それで、君が私達に提供出来るものは？」

「ふむ……さしあたっては助言か」

言峰の言葉に全員が疑問符を浮かべた瞬間、言峰は震脚をした。すると、慌ててセインがそこから現れる。

「……姿を消しただけで油断しているようだ。気配が殺しきれていないな。私には、無防備で攻撃されるのを待っているように思える」

「セインのＩＳを……見破っただと？」

言峰がそう言ってジェイルを見る。つまり、自分がナンバーズを指導してやると告げたのだ。セインのＩＳを見破った事だけでなく、オーバーＳを倒せるチンクを魔法抜きで圧倒出来る相手。それから経験を得られればこの上ないデータになる。

そう判断したジェイルは頷いて、言峰へ手を差し出した。

「歓迎するよ、言峰」

「歓迎はいらん。出来るだけ早く戻る方法を頼む、ジェイル・スカリエッティ」

こうして、虚無だったはずの男は、ほんの僅かにだが人らしい感情を抱きながら無限の欲望と手を組んだ。時に、新暦七十年の春の事だった……

「……そうか。メガーヌがな」

「どうすればいいのか、私には分からなくてな」

クラナガンにある一軒の居酒屋。そこにゲンヤと葛木の姿があった。葛木の相談があるとの言葉に、ゲンヤが選んだのがこの店だった。珍しい日本酒を出す店で、ゲンヤはたまたま立ち寄り、以来常連になっていた場所なのだ。

そして相談内容はメガーヌの爆弾発言。葛木の妻が見つかるまで、自分を妻だと思ってくれないかとのもの。さすがにゲンヤもそんな内容は予想していなかったので、やや戸惑いながらも何とか答えを出そうと考えていた。

メガーヌは、今や１０８の中核的存在だ。クイントが未だに一隊員を続けるため、必然的にゲンヤの補佐をメガーヌがする事になり、その関係は良好といえる。それ故、葛木もゲンヤを頼ったのだが、まさか堂々と不倫しませんかとの相談をされるとは思っていなかった。

（こりゃ……ちぃとばかし不味いかもしれねぇな）

メガーヌが冗談で言ったとすれば、葛木は相談しないだろう。つまり、メガーヌが本気と取れるような感じで言ったからこそ、葛木もこうして相談を持ちかけてきたのだろう。そうゲンヤは考え、頭を抱えたくなった。

既に、メガーヌの一人娘のルーテシアが葛木に懐いていることは、１０８の者ならば誰もが知っている。たまにメガーヌを葛木と共に迎えに来たりするのだから。その際の後姿は、どこから見ても仲の良い親子といった感じで、クイントが冗談混じりに再婚したりしてと言うぐらいだったのだ。

（クイント、お前の言う通りになってきたじゃね～か……）

ゲンヤはそんな事を思い出し、ここに居ない妻に対して文句を言った。無論、クイントがそんな事を考えたからこうなったとゲンヤも思ってはいないが、何かに愚痴を言いたくもなるのだ。

何せ、葛木はクイントを助けてくれた恩人であり、今のゲンヤにとっては数少ない飲み友達でもある。その頼みを何とかしてやりたいと思うが、中々そう簡単にいかない内容。それを考え、ゲンヤは息を吐く。

「……すまん。どうも厄介事を持ち込んでしまったようだ」

「いや、お前さんが気にする事じゃねえ。そういや、どう答えたんだ？　その言葉によ」

「……私にはキャスターがいる。妻を裏切る事は出来んと言った」

実に葛木らしいとゲンヤは思った。単純明快。だが、それだからこそメガーヌは惹かれてしまったのだろうとも思った。どこまでも

実直に想いを貫く。その誠実さにメガーヌは心奪われたのではと。
　昔、ゼストとメガーヌがそういう仲だと言う噂が立った事があった。その時、クイントは実はと言ってそれを肯定した。しかし、あくまでも純粋な付き合いだったので、たまにプライベートを共に過ごすぐらいだった。しかし、二人の間で何かあったのか、結局は元の上司と部下に戻ったとの事。

　それを思い出し、ゲンヤは改めて葛木を見た。寡黙で誠実な性格。不器用だが、優しくない訳ではない。どこからどう見てもゼストと似ているのだ。違いと言えば、葛木はどこか世捨て人のような枯れた雰囲気があるぐらいだろう。
　それ以外はゼストと共通点が多い。そこまで考えてゲンヤは、ある事を思いついた。それをはっきりさせる事でこの悩みを解決出来るだろうと。

「よし、ちょいと耳貸せ」

「……分かった」

　こうして、ゲンヤは葛木へある秘策を授ける。それがこの問題を解決に導き、葛木はゲンヤに感謝する事になる……

ーーー

てくださいな。

次があれば、フェイトがジュエルシード関係無しで海鳴に来るかも……？

A's四話　前編

イレイン事件から一週間。蒐集は大きな進展もなく、焦りは増すばかり。そして、そんな中であった大きな出来事と言えば……

「は、初めまして。フェイト・テスタロッサです。……えっと……今日から、よろしくお願いします」

クラス中の視線を一身に受け、やや緊張しながらも、フェイトは何とか笑顔を浮かべて言い切る事が出来た。始業式と並行し、フェイトは無事に聖祥大付属小学校へ入学した。

初めて大勢の同年代との出会いに、どこか戸惑う事などもあったが、なのは達との触れ合いや会話などで、心構えをフェイトは完了していた。言われた席に座り、隣の男子に笑みを浮かべて色々と教えてと告げるフェイト。

そんなフェイトを待っていたのは、予想通りの質問攻め。だが、それを予測していたアリサが従来の統率力を発揮。聞きたい事を順番に答えさせる。そんなアリサを見て、なのはとすずかは楽しそうに笑うのだった……

そんな風に、フェイトが学校生活をスタートした頃、アリシアは八神家にてはやてと一緒に勉強中。何とか小学校一年生レベルの読み書きが出来るようになってきたアリシアだったが、それではなのは達と同じ学年には追いつかない。

そのため、嫌いな勉強に懸命に取り組み、何とか学力をつけようとしていた。その背景には、なのは達と同じ時間を過ごしたいという気持ちだけではないものがある。

（頑張って勉強して、リニスやママみたいにお仕事するんだ）

クロノやユーノが仕事をして大人になっていくのを見て、アリシアはそれの手伝いをしたいと考えていたのだ。自分が姉らしくなるには、フェイトよりも大人にならなければいけない。そう考えた時、アリシアが目指したのは、母プレシアと姉のような存在であるリニス。

自分には、魔法が使えない。だからこそ、知恵でフェイトを助けてあげたい。そう思ったのだ。そのために、まず必要なのは知識。そう決意し、アリシアはフェイトが学校に通う事になった日を、自分の新しいスタートとしたのだった。

「はやて、ここ教えて」

「ん？　あ～、これやな。これは……」

アリシアのそんな気持ちははやてにも当然伝わった。リニスはフェイトの頼みを叶えるために、家庭教師をしばらく休む事になったが、アリシアの変化を感じ取り、はやてとザフィーラによろしく頼むと託していった。その表情はどこか安心し、嬉しそうな笑みさえ浮かべていた。

そんなリニスの分まで、はやてはアリシアの先生役を務めていた。休み中と違い、アリシアには今まであった緩んだ感じはなかった。それ故に、はやても指導に今まで以上に身を入れた。

そんな風に九月は始まった。まだ夏が残り、茹だる様な暑さを感じさせる日々。その裏で、滅びの足音は着々と忍び寄っていた……

平和な時間、その裏で

初登校から三日経ち、フェイトは新しい生活に慣れ始めていた。クラスの友人も出来、なのは達との昼食や授業など、楽しくも忙しい時間を謳歌していた。そして気付いたのは、自分も含めた四人がクラス中で注目されている事だった。

男子の人気はアリサとすずかで大きく二分されており、なのははその両派と残りから高い人気を獲得している。そこにフェイトが来た事によって変化が起きた。アリサ的外見でありながら、性格はすずか寄り。つまり、両派に大きな衝撃を与えるには十分だったのだ。

結果、アリサの性格がいいのだと主張するアリサ派。すずかの深窓の令嬢といった雰囲気がいいと主張するすずか派。なのはの親しみ易さと可愛さと主張するなのは派。そして、天然でどこか抜けているフェイトの愛らしさを押すフェイト派の四つに分裂したのだった。

無論、本人達はそれを知らない。ただ、何となく見られているとは感じている。それがアリサ達が怒り出さない程度で止まっているため、彼女達は特に何か言う事はなかったが。

「ま、男っていくつになっても子供らしいわ」

「それ、誰が言ったの？」

フェイトが尋ねた男の子の視線をよく感じるとの言葉に、アリサがそう呆れたように答えた。それを聞いて、どこか悟りながらも、すずかがそう尋ねる。なのはもフェイトも同じなのかその表情は苦笑気味。

アリサはそんな三人にやや疲れたように小次郎だと告げた。それ

に頷く三人。確かに小次郎ならそう言いそうだったからだ。そうして一しきり笑った後、なのはがふと思い出したように切り出した。

「あ、そういえばアリシアちゃん、勉強凄く頑張ってるんだって？」

「うん。はやてからも聞いたんだけど、先月とは別人って思うぐらい頑張ってるって」

「アリシアがねぇ……何かキッカケでもあったかしら？」

「ユーノ君の話じゃないかな？　自分もお仕事出来るようになりたいって言ってたから」

すずかの答えに三人が頷き、苦笑する。アリシアがやる気を出したのはいいが、どこまで持つのかと思ったからだ。実際はやても同じ事を危惧しており、何とかやる気を維持させるように腐心していたりする。

そこへ担任の姿が現れ、それぞれが席に戻る。日直の号令で始まる一日。フェイトは席に座り直して、ふと思う。

（来年は、はやてやアリシアも一緒にいるといいんだけど……）

そう考え、フェイトは小さくため息。はやてはともかく、アリシアはまず基礎学力を上げなければならなかったからだ。特に、読み書きである。それを後少なくても三年分は埋めなければならない。

そう思い、フェイトはせめて一年でもいいから一緒に学校生活を送れますようにと願うのだった……

その頃、八神家では、はやてとアリシアがそれぞれシャープペンを片手に、問題を解いていた。他の家人の姿はない。アーチャーとザフィーラは鍛錬と帰りに買い物をしてくると告げ、出かけている。シグナムはシャマルと共に仕事へ。ヴィータは公園で遊んだ後、アーチャー達に合流し買い物に参加するとの事だった。リインは、勉強の邪魔になりそうだからと町内の散策へ出かけて行った。

「……これで終わりだよ」

「どれどれ……」

以前はやてがやっていた、一年生用の通信学校の問題。それを引っ張り出し、アリシアへやらせていたのだが、それを何とか終わらせ、アリシアははやてへと確認を願い出た。

アリシアは以前ならヴィータと遊んだり、早めに勉強を終わらせてゲームをしたりと過ごしていたのだが、本当に人が変わったかのように、勉強ばかりをするようになっていた。

さすがにはやても、三日もそれが続けば逆に心配になるもので、答え合わせをしながら尋ねる事にしたのだ。何故ここまで勉強ばかりするのかと。それを聞いて、アリシアははっきり答えた。

「クロノが言ってたの。努力は自分を裏切らないって」

「……クロノ君が」

「それとね、楽ばかりすると後で苦しい事ばかりしなきゃいけなくなるって」

アリシアは夏休み最後の日、クロノにどうしたら勉強頑張れるようになるかを尋ね、そう言われたのだ。昔からアリシアが勉強を頑

張っていれば、今苦労しないで済んだかもしれない。
今楽しい事ばかり追いかけ、勉強を怠けると、はやてがなのは達と共に学校へ行けるようになった時、自分だけ行けないかもしれない。そうクロノは言ったのだ。何故か、はやての事を引き合いに出した際、どこか辛そうな顔をしたが。

「……さすがクロノ君やな。人生の真理を言い当てとる」

「しんり？」

「あ～、そやな……。ま、正しいって事や」

「そっか。クロノは正しい事を言ってたんだね」

「まぁ、あの歳で仕事しとるからな」

共に笑顔で語り会う二人。その後も、アリシアは多少の休憩を挟みながら、問題集に取り組むのだった……

「お嬢様、これはここでいいのか？」

「ええ。というか、イレイン……その言葉遣い何とかならないの？」

「って言われても、私は礼儀正しくなんて柄じゃないし……」

メイド服姿のイレインは、そう言って頬を掻く。住み込み同居人となったイレインは、忍とすずかをお嬢様と呼んでいる。まぁ、その割に言葉遣い自体は丁寧ではないので、このように違和感が大き

い。
　忍やすずかとしては別に呼び捨てでも構わないと考えているのだが、ノエルやライダーが、イレインに世話になる以上敬うのは当然と言い聞かせたため、このような状態なのだ。

「……よね。ノエルやライダーも変なとこ生真面目なんだから」

「いや、二人はいつも真面目だろ。お嬢様と違って」

「そうか……って、イレイン！」

「ホントの事だろ？　っと、ライダーの手伝いしてくる！」

　忍の怒声にイレインは楽しそうに笑い、それに対して何かされる前に、慌てて廊下へと出て行く。その後姿を眺め、忍は仕方ないという表情を浮かべてそれから笑う。
　本当に不思議なものだと思ったからだ。自分達を殺しに来た存在、イレイン。それがこうして共に日々を過ごしている。家族と思えるようになったらそう呼んで欲しいと、イレインは言った。だが、すずかはその時からそう思っていた。
　忍はライダーの例があるため、すずかがそう思うのならと考えていたが、イレインの態度や雰囲気からその時は保留とした。そして、今はあの時以上にイレインをそう思えるようになっていた。

（あの子を作ったご先祖には、少し言ってやらなきゃ。大切なのは人らしくするんじゃなく、人として思い、扱う事だって）

　機能等ではなく、心を思いやって考えるべき。そう忍は思った。自分が夜の一族として抱えていた苦しみや哀しみ。それを受け止めてくれる相手に出会った時、どれだけ嬉しかったか。

それを知ればイレインの事を他人事と考える事は出来なかった。自分も人らしくありたいと思った事がある。そのために、自分を隠し、偽り、世間を欺いて生きていた。

それを一変させたのは、恭也との出会いとその日々。もっと一緒にいたい。本当の自分を知って欲しい。そう何度も思い、躊躇い、踏み止まって、切り出した。その葛藤は今でも思い出せる。

嫌われたら。恐れられたら。この幸せを、暖かさを無くしたくない。それでも、好きになった相手に自分を偽る事をしたくなかった。だから、忍は恭也へ伝えたのだ。関係を失う事になっても。相手が自分との日々を忘れる事になっても。

（……ホント、あれは今でも大英断と思う。しかも、今はすずかも受け入れてもらってるんだもんね）

そう考え、忍は小さく笑みを零す。本当に自分達は恵まれている。そう思ったからだ。人にも、出会いにも。全てが恵まれていると、心からそう思えたから。

「このまま、みんなで笑って暮らしていきたいわね……」

それは、本当に噛み締めるような言葉だった……

町外れにある高台。そこにアーチャーの姿があった。ザフィーラとリインもいる。そしてその表情は揃って暗い。そう、彼らは今から蒐集に出かけるのだ。ヴィータは公園に顔を出してからなので、遅くなるとの念話があった。

効率を考えれば、ヴィータがいた方が二組に分かれる事が出来る

のだが、それを待っている時間さえ今は惜しい。そのため、三人でまず蒐集に向かい、ヴィータが合流次第、ヴィータとアーチャー、ザフィーラとリインに分かれる事にした。

「何としても今月中に終わらせるぞ」

「ああ」

「無論」

互いに頷き合い、転送魔法を展開するザフィーラ。そして、その視界が変わり、広大な砂漠が広がる。即座にアーチャーが動き出す。砂地で足を取られそうになるが、それを物ともせずに走る。そんなアーチャーと違い、リインとザフィーラは飛行魔法でその頭上を行く。

そんな二人に少しだけ羨望の眼差しを向けるも、すぐに苦笑したアーチャーは、急に足を止める。そして、その手に使い慣れた双剣を投影し、構えた。

「……来るぞ！」

ザフィーラの声と同時に現れるサンドワームとでも呼ぶべき、巨大生物。もう何度か相手をしてきた生物だ。故に、その対処や行動なども理解しているため、三人には迷いがない。

砂に潜り、攻撃の隙を窺おうとするのをザフィーラがバインドで阻止。更にその瞬間にアーチャーが双剣でその体に強烈な一撃を加えた。それで苦しむワーム相手に、更にザフィーラが拳を打ちつけ、そこにアーチャーが追撃を叩き込み、弱ったところへ、とどめとばかりにリインが容赦なく魔法を炸裂させる。

「これで……終わりだ」

それはシャマルが使う旅の扉と呼ばれる魔法。リインがそれを使えるようになったのには理由がある。そう、蒐集が進まない事に焦りを感じたシグナムが、あの後帰宅途中に思いついたのだ。自分達を蒐集させればどうだと。それにリインが可能だと答え、ある種の賭けだったが、余裕を残して蒐集すれば大丈夫とリインは告げ、シグナムがシャマルに頼んだのだ。

結果、それぞれの蒐集に成功し、頁をある程度稼ぐ事に成功した。かなり加減をしたため、劇的ではなかったが、それでも四人で六十近く稼ぐ事が出来たのだ。まぁ、そのため今日まで蒐集活動自体を休む事になったが。

コアを蒐集され、力無く倒れるワーム。それから蒐集出来たのは僅か一頁の半分程。だがそれでも貴重な頁。そう思い、リインは視線を二人へと向ける。アーチャーは周囲を警戒し、ザフィーラは転送魔法の準備をしている。

そう、もうここでの蒐集に見切りを付けたのだ。ワームは手強い割に、頁にむらがある。多いものでは二頁を超えるが、下手をすると今回のように一頁にも満たない。

「次はどこだ？」

「……ここと違い、自然の多い場所だ。その分、様々な生物がいる」

「対処なども異なってくるな。アーチャー、どうする」

「ヴィータにはそちらに来るように伝えてくれ。合流したら、予定通りに二手に分かれよう」

リインの言葉に含まれた心配に、言外に大丈夫と答え、アーチャーは笑う。それに二人も笑みを浮かべた。そして、その姿が消える。はやてのために、一刻も早い完成のメドをつける。それだけが、今の彼らの行動理由だった……

「ねぇ、シグナム先生どうしたの？」

いつもと同じようにしていた。そうシグナムは思っていた。突然された生徒の一人からの質問。それが自分の様子を見て、疑問を感じたからだと理解するのに、そう時間は掛からなかった。

シグナムは何でもないと答えたが、それで引き下がらないのが子供の長所であり、短所。だがこの場合は、前者としての面が強かった。

「でも、先生どこか悲しそうだよ？」

「っ？！　な、何を……」

「そうだよ。嫌な事でもあったの？」

「先生、どこか痛いの？」

気付けば、シグナムの周囲は子供達で囲まれていた。たった四、五人でしかないが、その目は純粋にシグナムを心配しているものだ。その輝きが、今のシグナムには嬉しく辛い。話す事が出来ない事実。それを隠すために、嘘を吐かねばならない苦しみ。それをシグナムは感じていたからだ。

しかし、その純粋さに応えるべく、シグナムはこう告げた。嫌な

事があったが、それももう少ししたら終わる。だから、今はそれまでそっとしておいてほしい。皆の気持ちは良く分かったからと。

「すまんな。教える側の私がこんな事では」

「ううん。悲しい時は悲しいって言わなきゃ駄目だって、お母さんが言ってた」

「うん。言わなきゃ分からないって。それに、誰かに話すと少しは楽になるって家のお父さんは言ったよ」

口々にシグナムへ声を掛ける子供達。その言葉を聞きながら、シグナムは笑う。

（優しさに満ちているのだな、この町は）

そう心から感じ、思ったから。教える側だと思っていたが、教えられる事ばかりかもしれない。そんな風に考えながら、シグナムは子供達に声を掛ける。

「分かった分かった。お前達の親は皆立派だ。さ、そんな立派な親になれるよう、稽古を再開するぞ」

それに大声で返事を返す子供達。それに嬉しそうに笑みを浮かべ、シグナムは竹刀を手にする。子供の目は意外と鋭く物事を見ているのだな。そんな事を思いながら、元気良く竹刀を振る子供達に指導していくのだった……

翠屋で忙しなく動くシャマルとアルフ。セイバーもそれと同じように動いているのだが、その視線はシャマルを見る事が多い。リインが起動してから、どうも様子がおかしいと感じていたセイバー。そして、つい最近セイバーがシャマルに何かあったと確信する出来事があったのだ。

それはつい一昨日の事、前日シャマルは休みだったにも関わらず、どこか調子がおかしかったのだ。まるで疲れて動く事がやっとといったような動き。それを見て、セイバーもアルフも何かあるのだと悟った。

しかし、それを聞き出す事はしていない。気が付いているのだ。シャマルが話さない理由を。そう、それはきっと……

（なのは達に知られないため、ですか……）

自分とアルフに共通するのは、隠し事が苦手だという事。そこから考えれば、簡単に理由を察する事が出来る。自分達には話せても、それを誰かに話されては困る。そして、その相手は誰か。そして、それが分かれば……

（やはりはやての身に何かあるのですね。そして、それはなのは達に知られたくない。とすれば……それは……）

今日暇を見つけて、シャマルに言う事にしよう。そう思い、セイバーは意識を仕事へと戻す。聞く事は出来なくても、思いと考えを伝える事は出来る。今はシャマル達の力になれないとしても、必要ならばいつでも力になる。

それを告げようと。なのはの笑顔を守る事ははやての笑顔を守る事。全てが繋がっているのだから。そう考えた所で来店を告げるベルが鳴り、セイバーは元気な声で言った。

「いらっしゃいませ！」

ーーー

A'ｓ四話　中編

本局内　無限書庫。いつものように、ユーノと夜天の魔導書を戻す術を調べていたクロノだったが、アリアとロッテから聞かされたある事に、驚いていた。

「提督が……辞職しようとしてる？」

「ええ。だから貴方から考え直すよう、話をして欲しいの」

「クロ助、何とか説得してくれよ」

二人はどこか縋るようにクロノへ視線を向ける。そんな視線に、クロノは二人が既にグレアムに説得を試みて失敗したのを悟った。自分に頼るとは、二人では動かせない程、グレアムは意志を固めているのだろう。そう、クロノは思った。だからこそ、自分には出来ないのでは。そう考えてさえいたのだ。

だが、そんなクロノへ二人は言った。クロノだからこそ止められるのだと。その理由は、クロノがこうして闇の書事件を平和的に解決しようと努力している事。そう、二人は告げた。

「そうか……。分かった。明日会ってみる」

（提督はまだどこかで引き摺っているのか。だから、僕に話をして欲しいと二人も……）

そう解釈し、クロノは二人に頷いた。止められるか分からないが、話だけでも聞いてみる。そうはっきりと言い切ったのだ。それに二人は嬉しそうに息を吐き、笑みを見せ合った。

ユーノとエイミィはそんな三人を見て、自分達では入り込めない何かがあるような気がしていた。特にエイミィは、ロッテに抱きつかれて困っているクロノを見て、余計にそう感じていた。

幼年期を過ごした相手。それがどれだけ大きな影響や絆を作ったのかは、エイミィにも分からない。でも、自分だって訓練校時代で負けないだけの絆を築いた。そう思っている。だから……

（いつか意識してもらうよ、クロノ君。そして、あたしをクロノ君の一番にしてもらうんだから！）

今はまだ仲のいい同僚でもいい。いつか、必ずそれを越えてみせる。エイミィはそう強く思いながら、笑顔を浮かべてクロノ達へ言った。

「さぁ！　とりあえず、今日も資料探しと対策会議頑張ろう！」

そのエイミィの言葉に四人が力強く頷いた。僅かでもいい。今は奇跡への可能性を少しでも見出す。そのために、皆足掻いている。絶望ばかりだとしても、決して諦めない。そう誰もが思っていた。

今日も明日も、時間が許す限り最高を求めていく。そのための静かな戦い。それが、ここ無限書庫で繰り広げられるのだった……

揃い出す力

時同じくして本局内にあるマリエルが使っているデバイスルームでは、プレシアとリニスがマリエルと三人で、目の前のデバイスを

見つめていた。ベルカ式のカートリッジシステムを組み込んだインテリジェントデバイス。

ミッド式とベルカ式の融合。あまり例を見ないその姿に、マリエルだけでなくプレシアやリニスも無言で完成を待っていた。そして、マリエルによる細部チェックが終わりを告げ、小さく息を吐く三人。異常無しの結果に、安堵したのだ。

「……可変フレームもリニスさんと私の両方が上手く起動しますし、連動や強度面も問題無し。ただ、カリバーフォームはいいんですが、ザンバーフォームは、少し慎重に使った方がいいかもですね」

「そうですか。しかし、まさか大剣をイメージしてくるなんて思いませんでした」

「私は凄い威力を再現って聞いたから、てっきりそういう大出力を出せる形態かなって。でも、おかげで面白い子になったかと」

リニスとマリエルはそう言い合って苦笑する。そんな会話を聞いて、無理もないとプレシアは思った。プレシアがマリエルに伝えたのは、凄まじい輝きを放つ剣。それを聞いて、誰が普通の剣を想像出来るだろう。

マリエルのように、何とか仰々しい力を出せるようにと考えるのが普通なのだ。リニスはセイバーの剣のイメージだと知っているので、剣自体は普通の物をイメージ出来た。故にアームドに近い頑丈な仕上がりにはなったが。

「それで、もう実戦には耐えられる？」

「問題ないですよ。って、実戦なんてするんですか？」

「模擬戦です。ほら、なのはさんと」

「あ～、例のフェイトちゃんのライバルですね。一度、その子のデバイスも見てみたいなぁ。インテリジェントなんですよね？」

目を輝かせ、プレシアを見るマリエル。それに苦笑し、プレシアは頷いた。そこからマリエルと二人は、レイジングハートの事を話題に話していく。そして、なのはのも強化する事は可能かどうかとプレシアは言い出した。

それに難色を示すマリエルだったが、リニスは何かを察したのか頷いた。一度考えてみて欲しい。そうマリエルに言った。プレシアとリニスは本人の意思もあるから、あくまで草案で構わない。バルディッシュとは違うタイプのデバイスだから、考えるだけでいい。それが参考になる。そう告げて、二人はバルディッシュを手に去って行った。

「……何かあるのかな。その子やフェイトちゃん達に」

まるで強化した方がいいと考えているような二人に、マリエルは何とも言えない感覚を覚えるのだった……

レティの仕事部屋。そこにリンディはいた。というのも呼び出されたのだ。レティから聞きたい事があると。それにどこか変な感じはしたものの、気心知れた相手であるレティに警戒心を抱く事もなく、リンディはこうしてレティの元を訪ねていたのだった。

アースラは、そろそろ任務を与えられて動き出さねばならない。そうなったら、リンディ達はアーチャー達への協力がし難くなる。そのため、クロノやエイミィは出来るだけ時間を作っては、無限書

庫の作業を手伝っていた。

「それで、聞きたい事って何かしら」

「とぼけないで。貴方やクロノ君が調べている物についてよ」

「別に大した物じゃないわ」

「……無限書庫をここまで活用出来るようにしたユーノ・スクライア。その彼を使ってまで調べている事が？」

レティの視線は鋭い。まるで言い逃れは出来ないと言っているように。それを見てもリンディは柔らかく笑みを浮かべ、何でもないように答えた。

「ええ。彼は何だかんだでクロノと仲が良いのよ。だから手伝ってくれているの」

「……私にも言えない事？」

「……貴方を巻き込みたくないのよ」

レティの心配するような声に、リンディの表情が変わる。今までの穏やかなものから、申し訳なさそうなものへと。それを見て、レティも悟る。リンディ達が調べているのは、おそらく局の何かに触れるかもしくは局に対する背信行為なのだろうと。

それをリンディ達は知りながら行なっている。それにレティを巻き込みたくない。そうリンディは考えている。それをレティも悟った故に、何も言う事が出来ない。自分が逆の立場なら、どう思っているかは良く分かるからだ。

（……辛いわね。私も貴方も）

親しい同僚に打ち明けられないリンディ。同じくその同僚を助ける事が出来ないレティ。立場や状況がそれを許さない。互いが互いを思いやるからこそ、これ以上何も言えないのだ。

そんな沈黙がしばらく続き、ふとレティが呟いた。それは、まるで独り言のように、淡々と聞かせるのでもなく、ただ自分に言い聞かせるようなものだった。

「私は、無力だわ。助けたいと思う相手も助ける事が出来ない。そんな思いをする事ないようにと、そう思って入った管理局だった」

「レティ……」

「でも、今度はその局が私にそんな思いをさせる。皮肉なものね……」

目を閉じ、そう自嘲するようにレティは顔を伏せる。それに何も言えないリンディ。だが、次の瞬間、レティが告げた言葉にリンディは目を見開いた。

「だから……いざって時、私は助けたいと思った相手に手を差し伸べる。それで後悔なんかしないわ。だって、守りたい人を守るために私は局に入ったんだから」

「……レティ、貴方……」

「それに、友人一人守れないんじゃ、局員失格でしょ？」

それは、いざと言う時は力になるという言葉。事情が話せないならそれでいい。でも、忘れないで欲しい。自分も局員として、そして人として手を貸したいと思っているのだと。そう、レティは言ってくれたのだから。

リンディはそれに目を閉じ、噛み締めるように告げた。そうね、と。それに万感の想いを込めて。これはレティの独白なのだ。なら、それに礼を述べるのは正しくない。故に、同意する。自分がまさにそうなのだから。

局員として動くのなら、早々にアーチャーの力で闇の書を完全に無力化するべきだ。だが、それをせずにリンディ達は足掻いている。それは、局員ではなく、人としてのエゴ。親しくなった者達を悲しませたくない。その一心でしている行為。

（本当に、私達は色々と恵まれているのね。理解ある友人、同僚、そして……）

リンディの脳裏に浮かぶのは、奇跡を成し遂げた五人の存在。そして、それを結びつけた五人の少女。

――起きるわ……いえ、起こしてみせましょう。もう一度、奇跡を。

そうリンディは心で誓う。こんなはずじゃなかった事ばかりの世界。それに敢然と立ち向かう者達の姿。それを強く思い描きながら……

昼下がりの公園。そこに珍しい存在がいた。ランサーだ。彼は何をするでもなく、ただベンチで横になっている。その隣でヴィータ

が帰り支度をしていた。と言っても、持ってきた水筒などを肩に掛けるだけなのだが。

ゲートボールに多少付き合い、今日は買い物の手伝いをすると言って早めに切り上げたヴィータ。その視線を未だに談笑している老人達へ向け、手を振って別れを告げる。そして、横になっているランサーへ一言声を掛けようとして、逆にヴィータが声を掛けられた。

「なぁ」

「何だよ？」

「これから行くのか？」

「ああ」

ランサーが尋ねているのが何かを即座に理解し、ヴィータはややムスッとした顔で答えた。分かってるなら呼び止めるなと言いたいのだろうか。

それを知ってか知らずか、ランサーはどこか気だるそうに告げた。無理するなと。そこに込められたものに気付き、ヴィータは表情を変えた。それまでの不機嫌さは鳴りを潜め、代わりに意外そうな表情が浮かんでいた。

「魔力の流れがいまいち良くねえ。怪我、すんじゃねぇぞ」

「分かってる。……その、ありがと」

「気にすんな」

そう言ってランサーは手を軽く振った。それにヴィータは小さく

頷き、その場から走り出す。ヴィータの気配が離れていくのを感じながら、ランサーはやり切れない気持ちを抱えていた。

もし、自分にリンカーコアがあれば。そう何度思った事だろう。それはランサーだけでなく、アーチャー達も思った事。尋常ではない魔力。それを持ちながら、それを蒐集させる事が出来ない。

それに昼間の蒐集には、手を貸せない。アーチャーから言われたのだ。昼間に手を借りるようになれば、何かの拍子で見られたり、知られた際に言い訳がしにくいと。守護騎士達は家族で、大勢でいてもそこまで怪しまれないし、誤魔化しもし易い。

それに、ライダーや小次郎などはそれぞれの家で仕事をしている。ランサーは決まった仕事がある訳ではないが、その姿は目立つ。どこかで見られ、それを翠屋や学校で話され、フェイトやアルフの耳に入らないとも限らないと、アーチャーから言われているのだ。

「けっ……もどかしいな。色々とよ」

強敵と死力を尽くした戦い。それを望んで聖杯戦争に参加したランサー。だが、もう彼にその気持ちは薄れていた。無くなった訳ではない。現に小次郎やアーチャーとの戦いは、今も心躍るものがある。

だが、それよりも今彼が望むものは、この平穏だった。長きに渡る戦乱。それを生き抜いていた彼にとって、この平穏がどれだけ得難い物かは、嫌と言う程分かっている。

そして、それがどれだけ脆いものかも。彼は、いや彼らはそれを知るからこそ、足掻くのだ。この穏やかな時間を壊さぬように。この尊い日々を無くさぬために。

――絶対、泣かせねぇからな。もう、誰も……俺の目の前では。

月村家の庭に響く枝きり鋏の音。それを聞きながら、猫達へ餌を与えるファリンとライダー。イレインは猫達に懐かれ、少し困っていたりする。ノエルはそんなイレインに笑みを浮かべ、視線を隣で作業している小次郎へと移した。

作務衣に手拭いといった普段と同じ格好。そんな小次郎を見て、ノエルは手が止まるのを見計らい、用意した緑茶を手渡した。それを受け取り、小さく礼を述べるのを、小次郎は忘れない。

「しかし、忍殿も大したものよ」

「何がです？」

「いれいんの事よ。よもや自分の命を狙った相手を受け入れるとはな」

小次郎の視線を追い、ノエルもイレインへと視線を向けた。イレインは、じゃれついていた猫を一旦ファリンとライダーに任せ、服についた毛を払っている。だが、その表情はどこか嬉しそうだ。

ちなみにファリンはイレインを妹と思っているが、イレインからすればファリンはどこか頼りないため、姉とは思わないと明言した経緯がある。ノエルは好きに呼んでくれて構わないと言っているので、呼び捨てとなった。

「苦手ではないのでしょう？」

「そうだけどさ……あんなに来られると」

「みんな、可愛くて大人しい子ばかりですよ～？」

ファリンの言葉にイレインも分かってると頷き、視線を猫達へ戻す。ファリンの指で喉を撫でられる度、気持ち良さそうに目を細める猫。ライダーも同じようにしている。だが、どこか猫の満足度が違うような気がするのか、しながらライダーは首を傾げている。

それを見ていたイレインがライダーの抱えていた猫の背中を優しく撫でる。それに気持ち良さそうな声を上げる猫を見て、ライダーがどこか驚いた顔をすると同時に、やや悔しそうな表情を見せる。

「？　何でライダーは悔しそうなんだ？」

「ライダーお姉様は、猫の扱いだけがいまいちなんです」

「ファリンっ！」

ファリンがにこやかに告げた事実に、ライダーが珍しく焦った声を出した。それにイレインは邪悪な笑みを浮かべ、ライダーの腕から猫を取り上げる。そして、その猫をこれでもかといわんばかりに可愛がる。

それに嬉しそうに目を細める猫。それをライダーに見せ付けるようにして、イレインはほくそ笑む。それに平然としながら、ライダーは別の猫を抱き抱え、その喉を優しく撫でる。それに嬉しそうに声を上げた事に、ライダーは内心安堵しながら、イレインへ自然体を装って告げた。

「私にだってこれぐらいは」

「へぇ、でも私やファリンの方が猫達も喜んでるように思えるけどな」

妙な火花が散る二人。それを眺め、ファリンは残りの猫達と共にこそこそと避難を開始した。そんな光景を見て、笑みを浮かべあう小次郎とノエル。何とも平和なものだと小次郎が言えば、まったくですとノエルが応じる。

残暑厳しい九月の初め。その日差しの中、五人は多くの猫に囲まれて平和を感じているのだった……

はやてが通っている海鳴大学病院。その一室で、一人の女性があるカルテと診断結果を見て深刻な表情を浮かべている。

彼女の名は、石田幸恵。はやての担当医師であり、はやてにとっては姉のように慕っている相手だ。その彼女が見ているカルテ等は、言うまでもなくはやてのものだ。

「……もし、これが本当ならはやてちゃんは……」

そう呟いて、彼女は首を横に振る。そんなはずはないと。まだそうと決まった訳ではない。そう自分に言い聞かせるように呟く。結果から僅かに判断出来る兆候。それを単なる誤診だと、そう自分に言い聞かせて。

「明日の診察でこれがもっと顕著に分かったら……確定ね」

だが、そう呟いて彼女はカルテから目を離す。そして、静かに椅子を回し、窓の外へ視線を向ける。そこには、青空が広がっていた。その日差しの眩しさに手で影を作る彼女。そして、小さく呟く。

――――きっと、間違いよ。ここにきて、麻痺が進行してるなんて……

その声には、そうであって欲しいという願いが、切実に込められていた……

――――――

A' s四話　後編

昼時を過ぎた頃、少し遅くなったとアーチャー達が帰ってきた。手に抱えた買い物袋の中身を見せてもらい、はやては今夜のメニューを予想する。アリシアはヴィータを見て、勉強を終わらせたら、一緒に遊ぼうと告げる。それに、ヴィータは笑みを浮かべて頷いた。

ザフィーラは荷物を片付けるのを手伝い、リインははやての代わりにアーチャーの手伝いをするべく、自分用のエプロンを着けて何をすればいいかを聞いていた。

そんな光景を見て、はやては小さく頷く。自分が望む平和。それは、まさしくこんな時間なのだと思ったから。

（あ～、ええな。こういう時間、わたし好きや）

こうして幸せを噛み締めるのは何故だろう。そんな風にはやては思う。自分は、この時間をずっと過ごしていけるはずではないか。そう考えた時、思い出すのはとある日の夜に見た事。そして、闇の書と呼ばれるようになった夜天の魔導書の事。

それらを思い出す度に、はやては不安になる。その光景が、その呼ばれる原因が、完成結果だけではないのではないかと。他にも何か恐ろしい事が隠されているのでは。そんな事を思ってしまうのだ。

「どうしたの、はやて。何か顔色悪い気がするよ？」

「ん？　気のせい……いや、そうなんよ。最近アーチャーが優しすぎてな、気持ち悪いんや」

アリシアの指摘を否定しようとしたはやてだったが、それを敢え

て認め笑い話に変えようとした。気付かれたくなかったのだろう。自分が不吉な事を考えた事に。そして、こう言えば必ずそれに返してくれる相手と信じているのもある。

その予想通り、アーチャーがそれを聞き取り、どこか楽しそうに口を開いた。

「ほう、それはすまなかった。なら、今からはいつも以上に厳しくするとしよう」

「あ～、何や余計具合悪くなったかも……」

「嘘だ～。はやて、さっきよりも元気良くなったよ」

アリシアがそう楽しそうに言うと、はやてもそれに影響されて笑った。それに、いつまでも顔色悪くしてると、心配性な家族達が騒ぎ出す。そう思ったから。楽しげに笑う二人。それにヴィータも混ざるべく、近付いて話し出す。公園での事や買い物の時の事を。

それにアリシアやはやてが笑ったり、時に軽く驚いたりする。そんな三人を眺め、アーチャー達は互いの顔を見合わせる。そこに浮かぶは笑み。

はやて、アリシア、ヴィータ。三人が楽しげに話しているのを見て、アーチャー達は思う。決して失わせはしないと。この何気ない時間、それを守るために全力を尽くす。そう改めて思うのだ。この微笑ましい光景を見る度に。

（ルールブレイカーを使わずに済むように……そのための方法を必ず……）

（主もヴィータも助けてみせる。祝福の風の名に賭けて……！）

（本来ならば有り得なかっただろう未来。それを与えてくれた主を、その友達を守るために、俺はこの身を賭せん！）

迫り来る闇。それを防ぎ、打ち破るために三人はそれぞれ思う。希望を捨てないと。目の前で笑い合うはやて達。その笑顔を消さないために……

変わらぬ日常と微かな不安

その頃、なのは達はグラウンドにいた。五時間目の体育の授業のためだ。まず二人一組になっての準備運動や柔軟。それをなのははフェイト。アリサがすずかを選んだのは、自然な流れといえた。

互いに互いの体を押したり、背中で持ち上げたりしながら、今日の事などを話していくなのは達。そして、準備が終わったところで、いよいよ本番。今日の種目はドッヂボール。チーム分けの結果、なのははすずか。フェイトとアリサが同じチームとなった。

「良しっ！　フェイトがいれば勝ったも同然よ！」

「あ、アリサ……それは言い過ぎだよ」

リーダーとしてアリサがそう宣言すれば、エースのフェイトがやや困り顔で否定する。

「が、頑張ろうねすずかちゃん」

「うん。任せてなのはちゃん。私、頑張るよ」

なのはは基本役に立てないと分かっているため、どこか苦笑。それにすずかは笑みを返し、エースとして頑張る事を宣言する。

「それじゃ、ジャンプボール」

担任の教師の言葉ですずかとフェイトがボールを奪うべく、空高く跳び上がる。その跳躍力は、明らかに普通の小学生のものではない。

しかし、ここでそれに不思議そうな声を上げる者はいない。いや、ただ担任の教師のみどこか唖然としていた。だが生徒達から上がるのは、ただ感嘆の声だけだ。フェイトの身体能力に対しての驚き。それが両陣営から漏れる。

ボールは僅かにすずかが出だしで競り負け、アリサチームへ。そして、それをアリサが即座に反応の鈍いクラスメイトへ投げつける。しかし、狙われた子は、そのボールを避けられないと思ったのだろう。何故か立ち止まり、ボールを見てそれを手で自分の足元へ落とした。

それに疑問を感じるアリサだったが、それをすずかが即座に拾い上げたのを見て、危機を感じて距離を取る。

「みんな、当たると思ったらボールを自分のコートに落ちるようにして。そうすれば誰かがそれを拾ってくれるから。一番駄目なのは、当たったボールを相手にそのまま渡す事だよ」

すずかが投げる後ろで、なのはは同じチームの子達にそう言っていた。それを聞いて、アリサは先程の行動はなのはが指示したもの

だと悟った。そう、なのはは自分がボールを止める事が出来ないだろうと思い、そのため当たった時の対処を全員に告げていたのだ。
少しでも勝率を上げられるようにと。それをすずかも分かっているのか、ボールが誰かに当たる度に即座にそれを取りに動き、必ず仕留めていた。

（やるわね、なのは。でもっ！）

「みんな、相手は大抵すずかが投げてくるわ！　だから一箇所に固まらず、姿勢を低くして、狙える場所を限定させるのよ！」

アリサの指示にチームメイト達が頷き、出来るだけ散らばって姿勢を低くした。それは、連鎖で命中し、数で負けないようにするため。アリサの見立てでは、すずかとフェイトの差はそこまでない。
なら、最後に勝敗を分けるのは数だと思ったのだ。だが、それはなのはも同じ事。身体能力で勝てないなら、自分が負けないための戦いをするだけだと、必死に考えていた。

（フェイトちゃんを倒しても、指示を出してるアリサちゃんがいる。相手の気持ちを挫くには、司令塔を倒せば……）

「すずかちゃんっ！　アリサちゃんを狙って！」

「う、うん……そこっ！」

「しまっ！」

「そうかっ?!　させない！」

なのはの狙いに気付くフェイト。すずかはまだ分からないようだ

が、それに従いアリサ目掛けボールを投げる。それを避けようとするアリサだったが、その速度は速く、とてもではないが回避が間に合わないと思ったようで、その場で止まってしまった。

そこへ間一髪フェイトが間に合い、そのボールを上に弾いた。それを見てアリサは一瞬呆然となるが、すぐに意識を上に向け、高く跳び上がる。そして、その手でボールを掴むと、そのまま、その一連の流れを見て驚いていたなのは目掛け投げつけた。

「にゃっ!?」

「なのはちゃんっ!」

それが綺麗になのはの足に命中。しかも、それがいい角度で当たったのか、そのまま反動でアリサチームのコートへ飛んできて……

「あっ……」

「どうしたのよ?」

フェイトが見事に落とさず受け止めたのだが、何故か投げようとしない。それに疑問を感じるアリサだったが、それにフェイトが少し困った顔で尋ねた。

「これって……なのははセーフ?」

「あ~……味方ならそうだけど、敵だった場合どうだったかしら?」

その言葉に外野に行こうとしていたなのはが止まる。そして、生徒達の視線が教師へ向いた。だが、教師の方もやや困り顔。どうやら、どうすればいいのか決めかねているようだった。厳密に言えば

アウト。だが、これは授業であり正式な試合ではないため、そこの判断が教師に委ねられている。

結局、なのははアウトになり、その後も試合は続いた。善戦したすずかだったが、アリサをアウトにした瞬間、電光石火の動きでフェイトが放ったショットに当たり、外野へ送られそのままアリサ達の勝利となった。

授業終わりに、すずかが今度は負けないと言うと、フェイトは出来れば同じチームがいいなと返し、なのはとアリサの二人から同時に……

「「それは駄目」」

と突っ込まれるのだった……

忙しい時間も過ぎ、店内も落ち着きを見せだす午後の時間。シャマルは小休憩を貰い、奥の休憩所で休んでいた。自分達の蒐集によるダメージは、意外と浅いものだったが、それでも三日蒐集を休む事になってしまった。

しかも、未だに本調子になったとは言い難い。それでも、今夜から再び蒐集を再開しなければならない。アーチャーは無理をしなくてもいいと言うだろうが、余裕があまりない今、これ以上休む訳にはいかない。

（残りはまだ軽く百五十以上あるんだから……何としても今月中に……）

自分達で稼いだ頁を加えてやっと二百を切ったようなものだった。

このままでは、本格的に恐れている事態になる。そう、なのは達から蒐集しなければならないという事態に。

無論、シャマルだけでなく守護騎士全員そんな事はしたくない。だが、この分ではせざるを得なくなる。なのは達なら一人で二十は稼げる。そう判断しているのだ。フェイトと合わせればそれだけで四十にもなる。だからこそ、守護騎士達もアーチャーもそれは最後の手段だったのだ。

もう、はやてが危険で一刻も早く完成させるしかない。そんな状況にならない限り、そんな決断はしたくないのだ。

（でも、それも完成が近付いてなければ意味がないもの。絶対、今月中に五十近くまでは減らさないと！）

そうシャマルが思い、立ち上がった時だった。店の方からセイバーが歩いてきた。それを見て、シャマルは自分と入れ替わりに休憩なのだろうと判断した。

笑みを浮かべ、セイバーへ視線を向けるシャマル。今、忙しいかと尋ねると、セイバーは笑みを浮かべ、アルフと士郎だけでも平気なぐらいだと返した。

「そう、じゃあ……もう少し休んでてもいいかしら？」

「いいのでは？　もっとも、忙しくなればそうとも限りませんが」

「ふふっ、そうね。う～ん……じゃ、アルフにも休憩少し多めに取っていいからって言おうかな」

「それなら文句もないでしょう。モモコ達も特に何も言いませんし」

基本、セイバー達三人が仕事をする時はこんな感じだった。これ

に他のバイトなどが入ると、もっと桃子やセイバーもしっかりとした雰囲気で休憩なども取る。だが、身内というか、色々と親しい者達だけだとそれもどこかこうなる。

決してたるんでいる訳ではない。いい意味での解放感。それが三人の時限定の空気だった。

「ところでシャマル」

「ん～？」

少し今日の昼の忙しさについて話し、話の切れ目でテーブルに置いていた水を飲むシャマル。それにセイバーが話を切り出し、シャマルはどこか気の抜けたように声を出す。それにセイバーは微笑むと、静かに告げた。

「私は、いつでも手を貸しますから」

「……セイバー？」

「ですから、必要な時は言ってください」

「それって……」

「言いたい事はそれだけです。さ、そろそろ戻った方がいいですよ」

そう真面目な顔で告げると、セイバーはシャマルを休憩所から追い出すように背中を押す。それに戸惑いながらも、シャマルはエプロンを付け直し、仕事に戻った。それを見て、アルフが少し怒りながら遅いと言うと、それに申し訳なさそうにシャマルは謝り、先程の休憩時間延長を告げた。

それにアルフは仕方ないと答え、口元に笑みを見せる。それに少し嫌な予感がするものの、シャマルは尋ねた。

「何？」

「五分」

「……はぁ、分かりました。ご自由にどうぞ」

「悪いねぇ～、じゃセイバーが戻ってくる少し前に入るから」

そう上機嫌に言ってアルフは水差し片手に歩き出す。それを見て、シャマルも同じように水差しを手にして歩き出す。水のお代わりを注ぎに行くついでに、追加オーダーがないか聞くために。

そして、それをこなしながらシャマルは思う。セイバーが言った言葉の意味を。勘付いている。でも、それを問い質す事も問い詰める事もしなかった。それは、つまり……

（信じてくれているのね。私達やアーチャーを）

そう思うと自然と笑みが零れる。幸せだと、そう思ってしまうから。自分達を信じ、言い出すのを待ってくれる。それが、どういう事かシャマルには分かる。

信頼してくれているのだ、自分達を。それをもう一度噛み締め、シャマルはセイバーの言葉に感謝した。そして、それに必ず応えようとも思った。信頼には信頼を持って返す。セイバーの気持ちを無駄にしないためにも、全力で事に当たろう。それでも、もし厳しいのならその時はセイバーの気持ちに甘えようと。

そう考え、シャマルは視線を休憩所の方へ向けた。自分の居る場

所からは見えないが、その先にいるであろう優しき騎士に心の中で告げた。

――ありがとう、セイバー。

下校時間になり、アリサ達はお稽古事があるので、なのはとフェイトはそのまま八神家へよる事にして、二人と別れて歩いていた。

話題は現在改造中のバルディッシュ。こんなにも手元になかったのは初めてと、フェイトがどこか寂しそうにいえば、なのはも気持ちは分かると頷いた。

「でも、変形パターンを増やすんだよね？」

「うん。リニスが言うには、どうも二つ案があるらしくって。どうなるかは分からないって言ってた」

フェイトに教えられたのは、バルディッシュの改造にマリエルという技師が協力してくれている事。それと、剣の形態案が二つ出ていて、どうなるか分からないという事のみだった。

リニスもプレシアも完成してのお楽しみと言って、詳しい事を教えてくれなかった。まぁ、フェイトにとってはプレシアが自分の希望を叶えるために動いてくれただけで、十分過ぎる程喜んでいたのだが。

「そうなんだ。う～ん……また模擬戦で色々やられるかなぁ……」

「それは私の台詞だよ。なのは、魔法と会ってまだ半年ぐらいであれでしょ？　私、自信無くしそうになるよ」

感心するようなフェイトの言い方になのははは苦笑。同じような事をユーノにも言われた事があったのだ。もっともユーノの場合は、フェイトと違って感心ではなく、どこか呆れたような感じではあったが。

それからも二人は様々な事について話し合う。授業の事、家庭の事、明日の事などなど、挙げればきりがないぐらい話題がある。そんな風に会話をしている内に八神家が見えてきた。

「アリシアちゃん、どうしてるかな？」

「ヴィータとゲームかな」

「あ、じゃあ私ははやてちゃんとゲーム」

予想し合い、笑う二人。そして、呼び鈴を押すと玄関からどちら様ですかとリインの声。それに二人揃って名前を名乗る。それからすぐにドアが開いてリインがお出迎え。

それに笑顔でお邪魔しますと言うと、リインも笑みを返して中へ招き入れる。リビングでは、アリシアとヴィータ、はやてにザフィーラの四人が大乱闘ゲームの真っ最中。それを見てなのは達は苦笑。

「外れたね」

「外れちゃったね」

互いにそう言い合うと、はやてがなのは達に気付いて視線を向けた。

「お～、いらっしゃい」

「はやて、お邪魔してるね」

「ザフィーラさんまで参加してるんだ」

意外そうななのはの言葉に、ザフィーラは真剣な表情のまま視線を画面に向けて頷いた。どうやら言葉を発するだけの余裕もないようだ。見れば、ヴィータもアリシアもザフィーラばかり狙っている。

はやては出迎えの言葉を言った途端、同じように画面へ視線を戻した。そして、標的をアリシアへと定めた。はやての攻撃に楽しそうに声を出しながら反撃するアリシア。その近くではザフィーラのキャラが自滅覚悟でヴィータのキャラへと突進。それをあっさりかわされ、そのまま画面外へと消えていった。

アーチャーは夕食の支度を始めているようで、リインがその手伝いをしている。そんな光景を眺め、フェイトはアリシアの傍に行き、応援を始めた。それにアリシアも応えようとするが、中々はやてのキャラを倒す事が出来ない。

段々フェイトも一緒になって興奮し始め、気がつけば、どこか構図的にテスタロッサ姉妹ｖｓ八神はやてになっている。それをなのはは見つめ、小さく笑う。そして周囲を見渡し、寂しそうに呟いた。

「私も混ぜてよ～」

その声にヴィータが即座に反応し、自分の隣を叩いた。それに嬉しそうに頷いてなのははそこへ座る。ザフィーラはそれにやや文句があるといった表情を浮かべるものの、何も口出す事なくプレイを続ける。

こうして、平和な時間が過ぎていく。笑い合い、語り合って一時間後になのは達は帰って行った。それを見送り、はやてとヴィータ

は互いを見合わせ、笑みを見せ合う。

「いや、なのはちゃんはやっぱ強いな」

「だよなぁ。あいつ、ゲームの時は反応いいんだから」

「魔法もそうやって聞いたけど、ちゃうんか？」

「あ～……ま、確かにそうかも。そうか、あいつゲームで鍛えてたのか」

そう告げるヴィータにはやては突っ込もうとして、突っ込めなかった。そんな気がしてしまったからだ。

（ま、ええか）

そう思って、はやては家へと戻る。すると、キッチンからいい匂いがしてくる。ヴィータもそれに嬉しそうな表情だ。

今夜はカレー。しかも、アーチャー特製チキンカレーだ。基本的に、ヴィータは子供が好むような料理が好物だ。故に、カレーも大好物。特に、アーチャーが作るとなれば尚更だ。

明日の朝が楽しみだ。そんな事を言いながら、キッチンのアーチャーの手伝いをしようとするヴィータ。リインとザフィーラはそんな姿に密かに苦笑。アーチャーはいつものように皮肉を言う事もせず、どこか楽しそうに笑みを浮かべ、ヴィータに食器を並べるように指示を出す。

そうこうしていると、シグナムとシャマルが帰宅し、同じように香りでメニューを理解したようで、共に笑みを浮かべながらリビングへ姿を見せる。それに声を掛け、はやても食卓へと着く。

「久々のカレーだな」

「夏の暑さにはカレーと、ＣＭで言っていたからか？」

ザフィーラの言葉に反応し、シグナムがどこか笑いながら告げた言葉。それにキッチンのアーチャーは苦笑し、頷いた。もっともそれに影響されただけではなく、食材が安かったのもあると付け加えたが。

「残暑って言ったかしら。結構厳しいものね」

「そうだな。まだまだアイスが美味しい季節だ。そうだな、ヴィータ」

「だな。あ、今日はチョコバーが安かったから買っといたかんな。風呂上りに食べようぜ、リイン」

ヴィータの言葉に笑みを浮かべて頷くリイン。チョコバーはリインが好きなアイスではない。だが、リインにとって大切なのは味ではなく、共に笑い合える時間。ヴィータの笑顔も見ていてリインには嬉しいものなのだ。

「さ、みんな席に着いてや。アーチャーがサラダ持ってきたら食べよか」

「……待たせたな」

「ん。なら……」

「「「「「「「「いただきます」」」」」」」」

ーーー

A' s五話　前編

リインが起動して半月以上が経った。蒐集は未だ終わりが遠く、バグに対する有効的な手段も見つからずに、アーチャー達にも焦りの色が濃く出始めた。

そんな朝、いつものように目覚めたはやてだったが、その表情は暗い。いや、暗いのではない。辛そうだった。腹部を押さえるようにし、何かに必死に耐えている。それが今日のはやての目覚めだった。

「っ……」

（……何やろな、この痛み。でも、わたしは大丈夫、大丈夫や……）

突然、痛みが体を襲ってきた。ただ、こうして少し我慢すれば平気な程度。原因は分からない。担当の医師である石田先生も、先週特に何か言ってきてはいない。それに今日は定期健診の日。だからこそ、はやては誰にも言わず、こうして一人耐えていた。

もし、原因がそれで分かれば良し。もし、それで何も分からないようなら、その原因は決まったようなものだからだ。

今、家には心配してくれる家族が大勢いるし、話せば親身になってくれる親友達もいる。だからこそ、はやては言えなかった。もし、彼女が普通の少女であったのなら、あっさり誰かに話せただろう。しかし、それは出来ない。

（言ったら……絶対リインが原因やって思われる。そしたら、アーチャー達に余計な心配させてまう）

そう、はやては知っていた。家族達が未だに夜中に出かけている

事を。一度寝た振りをして確かめたのだ。ヴィータが静かに部屋を後にし、そのしばらく後に、はやては家族達の部屋を見て回ったのだ。

誰もいなかった。靴もない。それを見て、はやては理解したのだ。アーチャー達が自分に内緒で蒐集している事を。そして、そこからはやては何故それを自分に内緒にしているかを考えた。そして、出た結論は……

（わたし……大変な事になるんやろな……）

詳しくは分からないが、きっと良くない事になるだろうとはやては思ったのだ。だからこそ、自分に知られないように、何か手を打とうとしているのだろう。

そう考えているから、はやては何も言わない。何も聞かない。いつかアーチャー達が言い出してくれるのを待っている。そして、それが少しでも早く来る事を信じて、この痛みに耐えていた。

段々と痛みが引き、はやては視線をゆっくりと上げる。そして、隣で静かに眠るヴィータに小さく微笑み掛け、呟く。

――みんな頑張ってくれとるからな。わたしも頑張るわ……

忍び来る闇の息吹

車椅子を押すリインと隣を歩くアーチャー。今日は週に一度の定期健診。アリシアとの勉強会自体は本来お休みなのだが、アリシア

は今日はヴィータと八神家で遊びながら、はやての帰宅後勉強を見て欲しいと所望していた。そのままお昼も食べたいと言っているので、アーチャーとしては、最早もう一人の八神家メンバーとして捉えている。

はやては担当医師である石田先生が大好きなので、今も嬉しそうにしている。アーチャーよりも出会いは早く、自分にとっての姉のような人だとはやては明言していた。

そんなはやてと楽しそうに会話するリイン。そんな二人を見て、アーチャーはリインの変化をしっかりと感じ取っていた。まず良く表情を動かすようになっていた。笑顔が増えた。そして、以前あった影のようなものが消えた。

（いい兆候だ。このまま上手く行けばいいのだが……）

何か自分の内に沸き起こる不安。それを振り払うかのようにアーチャーは首を軽く振ると、はやてに視線を向けた。どうも何か言ってリインを困らせたらしい。その証拠に、リインが少し戸惑うような表情を浮かべていた。

それに小さく笑みを浮かべてから、はやてに対してアーチャーはこう告げた。

「リインを困らせるようなら、石田先生に言って入院させてもらうとしよう」

「お、それはええな。なら代わりに石田先生をからかったるわ」

「からかうではなく、君の場合は悪戯するだろう」

「何や？　羨ましいんか？」

楽しそうに会話する二人を見て、リインは微笑みを浮かべる。そしてそのまま無言で二人のやり取りを聞き続ける。

（まったく、主とアーチャーは本当に仲が良いのだな）

皮肉やからかいの応酬。だが、それを互いに楽しそうに繰り広げる二人。そんな様子に一人笑みを零すリイン。こうして三人は病院へと向かっていくのだった……

重苦しい雰囲気に包まれる診察室。そこでアーチャーは、石田先生から恐れていた事を聞かされていた。

「……そうですか」

「ええ。ここに来て麻痺が進行しています。このまま進行すれば……」

アーチャーはその後、彼女が辛そうに告げた言葉に、返す言葉を失う。内蔵に達して死亡するだろう。その事実は、考えなかった訳ではない。既にリインから聞いていたから覚悟もしていた。

それでも、それでもやはり実際に現実を伴って告げられるのは、重みが違った。その後も彼女は希望を捨てないで欲しいと告げた。何とか自分達も手を尽くしてみるから。そうアーチャーに力強く言った。

それにアーチャーは改めて彼女の思いに感謝し、よろしくお願いしますと答えるだけで精一杯だった。時間の猶予はもう多くはない。リインの予想した最長はもう消えた。ならば、自分が予測した最短

がもっとも近い予測かもしれない。
保って、この秋の中頃。いや、この分だと今月中すら危ないかもしれない。そう思いながら、アーチャーは診察室を後にした。外に出ると、心配そうな表情のはやてとどこか険しい表情をしたリインがアーチャーへ視線を向けていた。

「どないした？　石田先生、何か言うとった？」

「君があまりに女性に対するセクハラが多いのでな。石田先生に相談してもらうのと同時に、警戒を促していたのだ」

そうアーチャーが言うと、はやてはムッとしたような表情に変わる。それを見てアーチャーは、長話をしていた理由を聞いて、はやてを安心させれたと思った。それは、ある意味正しい。はやては自分の謎の痛みの原因でも判明して、アーチャー達に心配させてしまったのかと思ったのだから。
そんな互いの勘違いを正す者はいない。リインはそんな二人のやり取りを聞いて、不思議そうに尋ねた。

「……はやて、まさか先生にもしたのですか？」

ちなみに、リインは外出先なので主ではなく、はやてと呼んでいる。まぁ、どこか違和感を感じて呼び辛そうではあったが。

「ちゃうちゃう！　まだ先生にはやっとらん」

「まだ……？」

「さ～、帰ろか！　ヴィータとかアリシアちゃんがお腹空かせて待っとるからな～」

リインの視線が険しくなったのを見て、はやてはそう言い出し、車椅子を自分で動かした。それを見て笑みを浮かべる二人だったが、それをすぐに消し、小さく話し合う。

「……君の危惧した事が起き始めた」

「そうか……」

夜にでもシグナム達に伝えよう。そう言ってアーチャーは歩き出す。リインもそれに頷き、後を追う。二人の視線の先では、はやてが手を振って早く来るようにと呼んでいるのだった……

昼休みの屋上、なのは達は四人で仲良くお弁当を食べていた。フェイトのお弁当はプレシアの手作り。リニスに言って、お弁当だけはとプレシアが作ったのだ。無論、長い間家事から遠ざかっていたため、その出来はなのはのお弁当などに負けるが、そんな事を気にするフェイトではない。

母の手作りと言うだけで至上の喜びだったのだから。そんな中、なのはやアリサのお弁当が今まで通りの品質を保っているにも関わらず、すずかのお弁当はそうではなくなっていた。

「でも、すごいねすずかちゃん。自分で作るなんて」

「でも、ノエル達に結構手伝ってもらってるから」

「それでもでしょ。アタシは……何故か止められるのよねぇ……」

アリサは自分が料理をしようと厨房に入ろうとすると、何故か止めに来る鮫島達の事を考えていた。アリサは知らない。それは、父親がまだアリサに料理は早いと思い、厨房に立たせるなと厳命したためとは。

アリサが初めて包丁を握るのは、五年生になった時の調理実習になる。その頃には、なのはやフェイトも料理はある程度出来るようになっていて、その実力差にアリサは悔しい思いをし、それから猛練習するようになるのだ。

「それは……何でだろうね？」

「フェイトは止められないの？」

「うん、私は良くお手伝いするよ。アリシアと一緒に」

プレシアやリニスがしているのを見て、フェイトは刃物の使い方などを教わり、アリシアは皮むきをピーラーと呼ばれる器具を使って良くやっていた。フェイト自身は、簡単な事なら一人で出来るぐらいにリニスに仕込まれていた。

アリシアはどこか不安があるのか、プレシアもリニスもあまり危ない事を教えたりやらせようとはしなかったが。

「私もセイバーと良く手伝うな。セイバーはお手伝いと言うよりは、味見役が多いけど」

「あ～、何となく分かるわ」

「最近は、イレインも私と同じように教えてもらってるよ」

そう言いながらも、少しずつ食事を進める四人。ちゃんと口に物

を入れて喋る事をしない辺りは、育ちが良いというべきか。そうしてお弁当が無くなった辺りで、ふとなのはがフェイトへ切り出した。

それは、バルディッシュの事。つい昨日改造が完了し、今夜お披露目も兼ねて、ユーノが結界を張り、模擬戦を行なう事になっていたのだ。無論、全員見学しにいく事になっている。

「で、どんな感じなの？」

「うん。シグナム達みたいにカートリッジが使えるようになったんだ」

「カートリッジって言うと……あの弾丸みたいな奴？」

アリサが以前見た模擬戦を思い出して挙げた表現に頷いて、フェイトは新しいバルディッシュ――バルディッシュ・アサルトの事を話し出す。特に自分が希望し、実現したザンバーフォームはお気に入りらしく、なのはも見たら驚くよとフェイトは自慢げに言った。

だがそれになのはも負けじと言い返す。自分にも出来るなら見せたい物があると。きっとフェイトがビックリするだろうと断言した。そして、そんな二人のやり取りを聞いて、アリサとすずかは揃って苦笑い。

話がとてもじゃないが、女の子らしくないのだ。驚かせる事自体はいいのだが、内容が内容だけに二人としては苦笑するしかない。模擬戦の場所は、おそらく海浜公園。そこで桃色と黄色の魔力光が輝くだろうと想像し、アリサとすずかは小さく息を吐いて告げた。

やりあうのも程々にしなさいと。それになのはとフェイトは互いを見合わせ、苦笑してからアリサ達に視線を移して頷くのだった……。

管理局本局にあるグレアムの執務室。今、そこには何とも言えない緊迫感が漂っていた。原因は、クロノ。グレアムが闇の書事件が解決したら局を辞めようとしている。そうリーゼ姉妹に聞かされたクロノは、グレアムの説得に来たのだ。

まだ局にはグレアムの力が必要で、自分を含めまだまだ導いて欲しい者達が沢山いると。それにグレアムはその気持ちは嬉しいとは答えたが、頑として意見を変えようとはしなかった。問題はその後、クロノがどうして辞める事にしたのか理由を教えて欲しいと言ったためだ。

それにグレアムは、歳も取ったし、自分の心残りであった闇の書事件の完全解決が出来るのなら悔いはないからと答えたのだが、クロノはそれで納得はしなかった。

「提督、何かあったんですね。何か辞職を決意するような事が。出なければおかしいです。あんなにも次元世界の将来を憂いていた貴方が、懸念していた事件を解決出来るだけで辞めるなんて！」

「……クロノ、私も色々と考えた。だが、もう決めたのだよ」

「どうしても、どうしても僕に本当の理由は話して頂けませんか」

縋るような視線。それを受け、グレアムは黙って瞳を閉じた。それが拒否だと思ったクロノは少し驚愕の表情を浮かべたが、それをすぐに消し、俯いた。もう一人の父と思って慕っていた相手。それがグレアムだった。

今、その相手から拒否された。それは、クロノにとって大きな衝撃だった。その悲痛な表情を見て、アリアもロッテも掛ける言葉が見つからない。そしてそのままゆっくりと席を立ち、部屋を出て行

こうとするクロノ。だが、その足がドアの前に着いた瞬間、グレアムの声が聞こえた。

「私は許されない罪を犯した……」

その言葉にクロノが勢い良く振り返る。グレアムは目を閉じたまま、そう語りだした。クロノはそこに立ったまま、その独白に耳を傾けた。

その内容を聞いていくにつれ、クロノの表情が変わる。自分の父を失ってから今までの出来事。それを聞き、クロノはグレアムがはやてをどうしようとしていたかを理解し、そしてグレアムの苦悩を知った。

全てを話し終わったグレアムに、クロノは言いたい言葉があった。それは、彼の中での信条。それが、クロノ・ハラオウンを支えている一つの信念。

「提督、いつだって世界は、こんなはずじゃない事ばかりです。でも、それに立ち向かうのも逃げるのも、その人の自由だから口出しはしません。だけど……」

「……だけど、なんだね？」

「それに他者を巻き込む権利は誰にもない。どうして、貴方ははやてに全てを打ち明け、事態の改善をしようとしなかったんですか。何ではやてを犠牲にする事を許容してしまったんですかっ！　協力して、闇の書をどうにかしようと考えなかったんですかっ！？」

感情を抑えようと思ったが、結局抑えきれずにクロノは叫んだ。自分が尊敬し、目指した人物が選んだ方法。それが今まで犠牲あり

きだった事に愕然となった。はやての事を長い間観察し、その性格も知っているのなら、どうしてそうしようとしなかったのか。

歴代の主と違って完成を考えず、温和で優しいはやて。本来ならば蒐集さえ嫌がる彼女ならば、もっと別の方法があったはずだ。そうクロノは思った。

闇の書に対して、クロノだって恨みや憎しみがない訳ではない。だが、それはあくまでも闇の書に対してであり、守護騎士達に対してではない。

彼らはプログラム。言われた事をただ実直に行なっただけに過ぎない。それに、自分の父を奪ったのは、結果的に闇の書を改竄した過去の主達。なら、余計に恨んだり憎んだりする相手が違う事を、今のクロノは知っている。

一方のグレアムは、クロノから告げられた言葉に返す言葉がなかった。クロノの意見は正論だった。自分は逃げていたのだ。自分のした事から目を逸らし、そのための言い訳に闇の書の完全封印を名目に、はやてを犠牲にする事を決めた。

他者を巻き込む事を、許容してしまった。被害が少なく済む。それを免罪符のように言い聞かせ、自分を正当化しようとしていた。闇の書が転生すれば犠牲者は今後も大勢出る。それをたった一人犠牲にするだけで済む。それを唯一の理想的な方法だと思い込む事で彼はここまで生きていた。

そこに、恨みや憎しみがないのなら良かった。局員としての大局的な見解からの決定であれば。しかし、そこに私怨を交えてしまえば、結局個人の復讐と大差ない。

「今までを悔いて局を辞めるんですか？　ならそれこそ逃げです！　もし、申し訳ないと思うのなら、周囲から何と言われても償うために生きて、そして動くべきだ！　簡単に辞めたり死んだりすれば

許されるなんて認めない。許されないと思っているのなら、それでも許されるために、償うために足掻くべきじゃないんですかっ！！」

クロノの叫びが執務室にこだまする。それにグレアムもアリアもロッテも言葉が無かった。潔く職を辞する。それも一つの責任の取り方なのだろう。だが、グレアムの選んだ方法は、確かに逃げだった。真相を明かさず、はやてにも告げず、ひっそりと姿を隠す。

それをクロノは攻め立てた。その瞳に涙さえ浮かべて。そこに、執務官としての彼はいない。そこに居たのは、もう一人の父と慕った男性に、必死に訴える一人の少年だった。

それにグレアムは言葉に出来ない感情を抱いた。クロノにここまで思われていたという嬉しさ。そのクロノにここまで言わせてしまった悲しさ。幼い頃から知っているクロノの成長に対する驚きと喜び。そして、不甲斐無い自分に対する怒り。

それらが全てない交ぜになって、グレアムの心で渦巻いていた。アリアとロッテも精神リンクでそれを感じ取り、神妙な表情をしている。

「僕は……僕は貴方を、尊敬し続けたい」

だから考え直してください。そう、クロノは掠れた声で締め括った。その言葉に、グレアムは静かに立ち上がり、クロノの傍へと近寄った。そして、その肩に優しく手を乗せて、はっきりと答えた。

――クロノ・ハラオウン、君に頼みたい事がある。

それを聞いて、クロノはハッとした。声が普段と同じ提督としての物だったからだ。その意味する事に気付き、クロノは表情を凛々しくする。それに満足そうに、そして嬉しそうに頷いて、グレアム

はある事を話し出す。それは、今月中に完成するグレアムの切り札。
それをグレアムはクロノへ説明した。それは、凍結魔法を使うために開発中のストレージデバイス、デュランダル。それを使ってクロノに闇の書を完全に破壊もしくは封印して欲しいと。

「……私は責任を取らねばならない。如何な理由があろうと、何の罪もない少女を犠牲にしようとしたのだから」

「提督っ！」

「だから、私はどんな罰を受ける事になっても構わない。全てを明かし、然るべき報いを受けよう。職を辞するのは、いつでも出来る」

「……お父様」

「それじゃ……」

「この命尽きるまで、最後の最後まで足掻こう。誰も犠牲にならずに済む世界にするために」

リーゼ姉妹の言葉に頷くように、グレアムはそう告げた。それに涙を流して喜ぶアリアとロッテ。クロノはその光景を前にし、グレアム達に背中を向け、そのまま出て行く。だが、三人は気付いていた。そのクロノの背が震えていた事に。
しかし、誰もそれを指摘せず、黙って目を逸らす。こうして、ギル・グレアムの辞職は無くなった。クロノの言葉がグレアムを動かし、そしてグレアムの想いが、クロノを動かす。

近付く闇の目覚め。聞こえてくるその胎動に、彼らは臆する事無く立ち向かう。その背にある幾多もの想いを支えに……

――――――

A' s五話　中編

本局内無限書庫。ユーノはたった一人整理をしつつ、情報を探していた。だが、もう夜天の魔導書や闇の書、更には守護騎士などで検索を行い、あらゆる情報は調べつくした。にも関わらず、ユーノは未だに検索を続けていた。

その理由は、整理をした所から、まだ見ていない本が現れるかもという淡い期待を持っていたからだ。その可能性が薄い事はユーノ自身よく分かっている。だが、少しでも可能性があるのなら。その思いが、彼をそうさせる。

（自分の持てる力の全てを尽くし、道を切り開く。まだ、僕は全てを調べ尽くしていないはず！）

ユーノがこうしているのには訳がある。以前取り出した情報を、今日ユーノ自身も再度調べ直したのだ。何か見落としてないか。そう思っての行為だった。そしてその中には、闇の書の所以が記されている物もあった。そこには、完成時の凶悪さや、守護騎士達の蒐集による多くの犠牲なども理由として記されていたが、こんな事も記されていたのだ。

主となった者が一定時間内に闇の書を完成させなければ、主そのものを殺すのだと。それをユーノは知って驚くと同時に悟ったのだ。これを見たはずのクロノは、何も自分達に言ってこなかった。それが意味する事を。

そう、クロノはその事を知っていた。もしくは、知りながらも隠そうとした。その理由を考えれば、答えは自ずと見えてくる。はやての身に起こる事をアーチャー達は知っている。そこから口止めされているのだろうと。自分に言わないのは、きっと何か手を考えて

いるのか、もしくは自分になのは達への隠し事をさせないためのだろうと。

「……あの人らしいや」

自分が目標にする人物を思い出す。皮肉屋であまり感情を見せないが、誰よりも優しく犠牲を嫌い、最後まで最善を尽くす男を。

はやてが危ない事を聞かせ、なのは達や本人に入らぬ心配をさせたくないのだろう。知らせるとすれば、それは二つに一つの状況しかない。そうユーノは考えていた。

（一つは何らかの方法や手が見つかり、不安よりも希望の方が大きい状況。そしてもう一つは……）

最悪の状況しかない。はやての命を守るために、夜天の魔導書を無力化する。つまり、リイン達を消滅させるしかない状況だ。はやてに無断でやれば、はやての心に大きな傷を作る。教えても大きな傷を作るだろうが、まだ言わないよりはやての性格上マシになる。

それを考え、ユーノは首を勢い良く左右に振る。そんな事を考えるな。自分は、絶望する余裕さえないのだと。そう思い直し、ユーノは再び意識を検索に向ける。この事は絶対になのは達に知られる訳にはいかない。そう強く思いながら。

（決して……決して諦めるものか！）

母親の想いと決意

昼食を終えたはやてがアリシアと勉強を開始したのを見て、アーチャーはリインを残し、外出した。行き先はテスタロッサ家。更には、リンディへの連絡だ。はやての猶予が予想以上に少ない。

それを伝え、アーチャーは最後の手段の行使を念頭に置き始めていた。即ち、なのは達への蒐集行為。それも含め、アーチャーは相談する必要があると判断したのだ。

（許可を取る必要はないが、フェイトの母親に知らせない訳にもいくまい。それに、もし何か手が見つかっているのなら、それに越した事はないからな）

自分に言い聞かせるように、アーチャーは内心呟く。そして、テスタロッサ家に着くと、ランサーが出迎えた。それに軽く挨拶をし、中へ上がるアーチャーだったが、ランサーはその雰囲気から何かを悟ったようで、出迎えた時の陽気さを消し、黙ってアーチャーの後を追う。

今日、プレシアが自宅で過ごすのをアリシアから聞いていたアーチャーは、早速とばかりに用件を切り出した。それを聞いて、プレシアとリニスが驚愕する。ランサーはそれに納得したように、だが悔しそうに顔を歪めた。

「そう、はやてちゃんの麻痺が……」

「ああ。それでリンディ艦長にも報告したい。もし彼女の方で何か手が見つかっていればと思ってな」

「……分かったわ」

プレシアは頷くと、立ち上がり自室へと向かう。それにアーチャ

ーも続き、ランサーとリニスは、二人をただ見つめるだけしか出来ない。掛けるべき言葉などない。励ましも悲しみも、今は何の意味も持たない事を知っているからだ。

故に無言。しかし、リニスは気付く。ランサーの右手から血が出ている事に。自分の無力さを噛み締めている。そうリニスは思った。かつてアリシアを目覚めさせる際、感じた感覚。それをまたランサーは味わっているのだと。

（ランサー……）

そう思ったリニスは、そっとランサーの手に自分の手を重ねた。決して無力ではないと、そう言い聞かせるように。優しく、包むようにランサーの手を握るリニス。その温もりにランサーが少しだけ手の力を抜いた。

「リニス……」

「気持ちは同じです、ランサー。でも、お願いだから自分を責めないで。貴方の手は、血を流すためにあるのではありません。誰かを守るためにあるはずです」

リニスの言葉と共に治療魔法がランサーの手を癒していく。それを感じながら、ランサーは左手で、リニスの手を握り返す。言葉にせずとも、それだけでリニスには伝わった。ありがとよ。そんな、ぶっきらぼうだが優しい声が。

（念話などなくても、互いの気持ちは通じ合える。それは、こういう事なのでしょうか……）

リニスはそう思い、ランサーの顔へ視線を送る。するとランサー

もリニスを見ていたようで、目と目が合った。それに何故か照れくさいものを感じ、リニスは視線を逸らしてしまうのだが、ランサーはそんなリニスの反応に小さく笑みを浮かべる。

本当に自分は良い女に恵まれている。そう思い、ランサーは視線をリニスからプレシアの部屋へと移す。今後どう動くか知らないが、アーチャーが手助けした時の約束を果たすだけだ。そう、強く思い返して。

「……そうですか。もう時間があまりないのですね」

「そうだ。何かそちらで手は見つかったか」

「……残念ながら」

リンディの悔しそうな声に、アーチャーは小さく噛み締めるようにそうかと返すだけ。プレシアはそれを見ながら、ある決意を固めていた。おそらくアーチャーが考えているだろう事。それを自分から言い出そうとしていた。

きっと、それなら現状を打破出来る手段に大きく近付くだろうと。そう確信していた。そして、それが自分に出来る最大限の。そう考えてもいたのだ。

「ちょっといいかしら、アーチャーさん」

「どうした？」

「私に一つ提案があるのだけれど」

プレシアの提案の発言に二人が不思議そうな顔をした。それに不謹慎ながらも、プレシアは笑ってしまった。あまりにも、二人の浮かべた感情が同じだったからだ。それを知らない二人の視線に、プレシアは浮かべた笑みを消してはっきりと告げた。

「私から蒐集して頂戴」

その言葉に二人が息を呑んだ。そう、プレシアは条件付きとはいえ、SSランク魔導師。その魔力量は並ではない。それを蒐集出来れば、かなり頁が稼げるだろう。

だが、それにアーチャーは警告と確認を込めて問いかけた。

「……本気か」

「ええ。どうせ、切羽詰まればフェイト達に蒐集をさせてもらうつもりなのでしょう？」

その言葉にアーチャーは黙った。だが、否定をしない事からも、それが正しいと認めているようなものだ。そんなどこか苦しそうな雰囲気のアーチャーへ、プレシアは優しく告げた。

危険があるのは承知の上。それを娘にさせるなら、親である自分が先に受ける。仮に自分が死んだとしても、親は子を守るためなら死んでもいいと思える生き物なのだ。それに、自分はフェイトに何かしてやりたいと考えている。

そのための一つがバルディッシュの改造の手伝いであり、蒐集の代替わりなのだ。そうプレシアは言い切った。

「しかし……」

「以前言っていた暴走時の攻撃手段を心配しているの？　なら、フェイトから蒐集しても同じ事よ。私が使える魔法は、あの子が使えるモノと大差ないわ」

何か躊躇うアーチャーに、プレシアはそう笑って言い切った。だが、こう最後に付け加えた。ただし、今は自分の方が威力等は上だけど、と。

「どう？　どうせやるのなら、知らない攻撃手段を増やされるより、知っている方が都合が良いでしょう」

「……すまない」

「気にしないで。貴方やはやてちゃんがフェイトやアリシアにしてくれた事を考えれば、これぐらい何て事ないわ」

心からそう言い切り、不敵な笑みを見せるプレシアにアーチャーは苦笑した。自分の命を奪いかねない蒐集を、大した事はないと言ってのけるその風格は、まさしく大魔導師と呼ぶに相応しいものがあったからだ。

そんなプレシアの発言から、ずっと黙っている者がいた。そう、リンディだ。彼女はプレシアとアーチャーの会話を聞きながら、何かを考えているようだった。

そして、二人の会話が終わったのを確認し、意を決した表情を浮かべた。その顔は局員としてのものではなく、先のプレシア同様親の顔。

「アーチャーさん」

「……何かな」

「その顔は大体察しているのでしょう？」

「貴女には仕事があるだろう。それに――――」

代わりになるべき相手はいない。そう言おうとした。だが、リンディはそれを遮り、微笑みさえ浮かべてこう告げた。

「桃子さんの代わりです」

「なっ……」

リンディは言った。桃子がもしここにいれば、なのはの代わりにと決意しただろう。だからリンカーコアもなく、蒐集が出来ない桃子に代わり、自分が蒐集されようと。理由は、自分も子を持つ親だからこそだ。我が子を危機に晒す前に、自分がまずそれを取り除こう。それが命に関わる可能性があるのなら、余計そうせねばならない。一番の親不孝は、子が親より先に死ぬ事なのだから。

更に、リンディには仕事の事は心配いらなかった。次の任務の辞令が下るのは三日後と、人事部の同僚からもう聞いているから。そうリンディは言い切り、プレシアと同じように不敵な笑みさえ浮かべてこう締め括った。

「それに、死なせるような事はしないでしょう？」

「……まったく、母親と言うモノは……」

「信じられない？　でも、こういうものよ、母というのは」

プレシアがそう告げると、リンディと揃って微笑みを見せる。そ

の慈愛に満ちた笑みに、アーチャーは言葉を失う。だが、そのすぐ後にはどこか嬉しそうな笑みを浮かべて頷いた。
成程、母親とは強いものだと。その言葉に二人は笑みを深くするのであった……

その頃、ザフィーラはライダーと共に蒐集活動を行なっていた。ヴィータが共に行こうとしていたが、はやてからリインと一緒に買い物を言いつけられてしまった。そのため、ザフィーラは自分一人でと思っていたのだが、高台に向かうとライダーが待っていたのだ。何でもイレインが来た事により、自分の仕事が減ったらしく、蒐集を手伝おうと誰か来るのを待っていた。
昼間はここから蒐集に出かけている事は、アーチャーに聞いたらしい。それを聞いた際、アーチャーは渋っていたが、ライダーが現状を打開したいのは自分も同じだと告げると、感謝の言葉と共に教えたのだ。

「にしても、やはり思わしくないですね」

「ああ。だが、例え一頁でも貴重な頁に変わりはない」

「……そうですね。では、次に行きましょう」

「そうだな」

現在の成果は、三体で一頁。簡単に倒せる相手なのはいいのだが、やはりそれと比例し魔力量は少ないようで、蒐集してもあまり稼ぎは良くない。しかし、自然が多く、相手にも事欠かないので、時間効率はいいのだけが救いだった。

今もこうしてライダーが即座に動き、次の相手を探す。それにザフィーラも続き、行動開始。先程と同じウサギに似た魔法生物を倒し、即座に蒐集完了。だが、三分の一程にしかならない。それでも、二人は動く。少しでもいいから頁を稼ぐそのために。

「そういえば、イレインはどうだ？」

「イレインですか？　もう馴染んでいますよ。メイドとしての仕事は、ファリンより安心して見ていられます」

ザフィーラは周囲を見渡しながら、ライダーへそう尋ねた。それにライダーは少し意外そうな表情を浮かべるが、現状と思ったままの意見を答えた。それに頷きながらも、ザフィーラはライダーの表情に何かを悟り、苦笑して告げた。

自分が少なからず関わった相手を気にしてはおかしいか。その言葉にライダーは納得し、頷いた。そして同時に思うは、やはりこの言葉。

「本当に律儀ですね」

「……いかんか？」

「いえ、私は好ましく思いますよ」

「そうか。にしては、良く言ってこないか？」

「ふふっ、貴方が本当にそう思えるからです」

その微笑みと共に告げられた言葉と同時に、ザフィーラはやや顔を背け、ライダーから視線を外す。それは照れ隠しではなく、意味

あっての行動。その証拠に、ライダーもザフィーラが見つめる先へ視線を動かしていた。

そこに見えるは、大きめの体をした原生生物だった。姿形はどこか蛇を思わせるものがある。大きな違いは、その大きさと皮膚の形状だろう。高さは大人二人分程の身長。全長は二メートルぐらいだろうか。背中の皮膚は鋭く、棘のようになっている。

「……あれはかなりの大物だな」

「そのよう……ですね」

「？　……どうした」

「いえ、特に何も」

ザフィーラのどこか嬉しそうな声に、ライダーはあまり乗り気ではない声を返した。それに違和感を感じ、ザフィーラが問いかけるも、ライダーはその理由を答えない。

だが、その雰囲気に今まで感じた事のない嫌悪感を読み取ったザフィーラは、何かを納得してこう言った。

「あれは俺がやろう。ライダーは周囲を警戒してくれ。さすがにあれを相手にしていて、他から襲われでもしたら敵わん」

それにライダーが何か言う前にザフィーラは原生生物へと向かっていく。それを見送り、ライダーは小さく笑う。そのザフィーラが言った言葉の真意を汲み取っていたからだ。

確かに相手は中々手強いのだろう。ならば余計に二人で戦うべき。にも関わらず、ザフィーラは一人での戦いを提案した。それはきっと……

（私の躊躇いを見透かされましたか……）

ライダーは蛇が苦手だ。と言っても、悲鳴を上げたり逃げ出したくなる訳ではない。ただ、あまり相手をしたくないのだ。それは、彼女の正体が深く関係している。蛇の怪物と呼ばれたメドゥーサ。それがライダーの正体。

つまり、彼女は蛇を倒す事に嫌悪感を感じてしまうのだ。かつての自分に深く関わる象徴、それ故に。

ライダーの視線の先で展開される戦い。相手の皮膚の硬さにやや苦労しているようにも見えたザフィーラだったが、それはどうやらライダーの杞憂だった。魔法で出現させた光の棘で相手の動きを制限し、まずは巨体を生かした巻き付きを防ぐと、更におそらく強度が低いと思われる下腹へ、拳による強烈な一撃を叩き込む。

それがどうも内蔵を捉えたのか、大きな叫びを上げる相手に対し、ザフィーラは終いとばかりに同じ場所へもう一度拳を叩き込んだ。それで完全に泡を吹き倒れた相手から、ザフィーラは蒐集を終えるとすぐさまライダーの傍へと戻って来た。

「お見事です」

「いや、偶然だ。想像以上に奴の皮膚は硬い。たまたま衝撃を与えた場所が急所だっただけだ」

ライダーの賞賛にも、ザフィーラはそう答えて拳を見つめた。まだ痺れでもしているのだろう。何度も握ったり開いたりを繰り返していた。

やがて、その痺れも取れたのか、視線を拳から先程の生物へと向け、こう告げた。

「しかも、あれだけの厄介さにも関わらず、蒐集出来たのは三分の二程度だ」

割に合わん。そうやや憮然とした表情で告げたザフィーラだったが、ライダーの方を向き直ると、どこか意外そうな笑みを見せた。

それが理解出来ずライダーは不思議に思うが、ザフィーラが言った一言でその理由を理解した。

――しかし、お前にも可愛らしい所があるのだな。ああいった生き物が苦手か。

それにライダーは一瞬呆然となるが、反論しようとして止めた。そう、その理由は一つ。

（それ言うなら貴方もです、ザフィーラ。まさか、私のために一人で戦おうとするとは）

思わぬ一面を見たと言って笑うザフィーラ。それにライダーはどこか楽しそうに思いながらも、それを出さないように平然とした表情で、いけないかと返す。それにザフィーラが首を横に振り、また一つはやて達に話す事が出来たと答えた。

それには、さすがにライダーが待ったを掛ける。あまり人には話さないで欲しいと、そう告げた。それにザフィーラは、また勝手に何かを解釈したのか、苦笑しながら頷いた。

そんなザフィーラの反応が気になったライダーは、何を考えたのかを尋ねた。それがやや問い詰める感じになり、ザフィーラは少し戸惑いながらもこう返した。

自分の弱さを人に知られたくないのは、戦士として当然だと思っ

た。それに気付けなかった自分に苦笑したのだ。そして、そこで一度言葉を区切って、呟いた。

――ライダーはやはり女でありながらも戦士なのだな。

そう呟いてザフィーラは歩き出す。その言葉を聞き、ライダーはやや拍子抜けするも、どこか呆れたように笑みを浮かべてその後を追う。

（やはり、どこか似ていますね。考え方や変に的外れな思い込みも）

そう思いながら、ライダーは笑う。それに気付かず、ザフィーラはただ前を歩き続けるのだった……

――――――

A' s五話　後編

涙を流すリーゼ姉妹と、グレアムを中に残しグレアムの部屋を出たクロノ。その目元を強く拭い、歩き出す。すると、エイミィが少し歩いた先で待っていた。エイミィはクロノが歩いてきたのを確認し笑みを見せたが、その目が軽く赤くなっている事に気付いた。

「あれ～？　強く擦ったりした？」

「……ちょっとな」

クロノの声に、やや照れ隠しらしきものが混じっている事にエイミィは気付くと、それを指摘しないように納得した振りをし、その隣に並んで歩き出す。そして、エイミィはクロノへ尋ねた。説得は上手くいったかと。それにクロノが頷いて返すと、その笑みを弾けさせんばかりに輝かせた。

さすがクロノ君と満面の笑み。だが、それにクロノはそんな事はないと普段と同じように言葉を返すが、その声質はどこか違う。謙遜ではない。心からそう思っているというものだ。

（これは……何かあったね）

長年の付き合いで、クロノが少し精神状態が落ち着いてないと判断したエイミィは、その原因を探る事にした。何気ない会話から、その要因となっていそうな事柄を探る。これも、クロノがエイミィを補佐としている理由の一つ。

エイミィはこういう事が非常に上手い。まったく関係ない話から、相手の情報をさり気無く引き出す。これで、クロノは何度事件解決のキッカケや決め手を得た事だろう。

まずは、今後のアースラに関する話。次の任務の辞令がそろそろ下るだろうとの話から、どこへ行く事になるのかを話す。そして、そこからリンディの話へシフトさせていく。レティを引き合いに出し、なるべく楽な仕事を回してくれないだろうかと言いながら。

クロノはそれに苦言を呈するも、エイミィも本気で言っていないのを理解しているからか、その声は幾分呆れている。その声に、クロノが調子を取り戻し始めたのを感じ、エイミィは少し突っ込んだ話を振ってみた。それは……

「でも凄いよね、艦長もクロノ君も。過去をきっちり断ち切って考えられるんだから」

「っ……」

その言葉に微かだが、クロノが反応を示す。それを横目で見て、エイミィは確信した。クロノが心乱す理由。それは、闇の書関連の話だと。

（でもどうしよっかな……？　これ、下手すると藪蛇ぐらいじゃ済まないし……）

エイミィがそう考えていると、クロノがぽつりと言った。

「僕だって……完全に吹っ切れた訳じゃない」

「えっ……」

その言葉は、エイミィにとっては意外だった。あの守護騎士達を前にして告げた言葉。それを聞いて、エイミィはクロノが過去を引

き摺る事無く、今だけを見据えて動いているものだとばかり思っていたからだ。
そんな感情が顔に出ていたのだろう。クロノは少し笑うと、静かに語り出した。今の自分の気持ちを。その本当の想いの全てを……

理解、深めて

「父さんを奪ったのは、闇の書。これは変わらない。確かに引き金を引いたのはグレアム提督だし、事件になるような物に改竄したのは、過去の主達だ。でも、そうやって簡単に割り切れる程、僕は聖人君子じゃない」

クロノは湧き上がる感情を抑えるように、低くそう告げた。そこに込められたのは憎しみ。やり場のない怒りが、そこにはあった。それを感じ、エイミィも黙った。初めて見るクロノの黒い感情。それにエイミィは飲まれた。
いつでも平等で公正さを大事にするクロノ。公私をしっかりと分け、どんな相手であれ、反省を示すのならそれを見守り、罪を犯す事を躊躇わないのなら容赦しない。リンディの姿勢を見ているからだろうが、その在り様はエイミィから見ても立派なものだった。

そんなクロノが、どんな相手にも私情を交えず接していた少年が、今自分に負の感情を見せている。それは、エイミィにとっては衝撃以外の何物でもない。クロノは語る。自分がどう思っているかを。この事件自体へ抱いている想いの全てを。

「出来る事なら、こう言ってやりたいさ。父さんを返せと。でも、そんな事は出来ないし、無理に決まってる。何より、それが出来るならそれこそ魔法だ。はやてに責任を取らせようなんて考えた事もない。守護騎士達を代わりに？　馬鹿げてる。だって、それをした所で……」

――今度は、はやてが僕と同じ気持ちになるだけだ。

そう言ってクロノは天井を見上げる。その横顔の寂しさに、エイミィは思わず息を呑む。捨てられた子犬のような目で、ただ天井を見つめるその瞳。それに秘められた哀しみと空しさに、エイミィは言葉がない。

そんな表情のまま、クロノは続ける。自分は、悲しみや憎しみを生むために局員になったんじゃない。それを終わらせ、自分のような思いをする者を一人でも少なくするために、局員になったのだ。憎しみは憎しみを生む。どこかで誰かがそれを断ち切らないと、永遠に負の連鎖が続いていく。

そのために、自分が断ち切るのだ。執務官としてだけではなく、クライド・ハラオウンの息子、クロノ・ハラオウンとして。

「……もう、沢山なんだ。気丈に振舞う母さん……何事も無かったように僕を鍛えてくれるアリアとロッテ……そして、優しく僕を導いてくれるグレアム提督」

「クロノ君……」

「知ってたんだ。みんな、影でどれだけ悲しんでいるか。僕を悲しませまいとして、悲しいのを隠して笑顔を見せてくれていた事なんて。でも、それをしなくていいなんて、言えるはずないじゃないか。泣きたいのは、みんな一緒なんだ」

そこまで言ってクロノの目から涙が流れる。だが、それに構わずクロノは続けた。父が亡くなった後、おぼろげながらも、どれだけリンディが懸命に働いていたか。それでいて、何とか自分の相手をしようと時間も作ろうとしていたのか。

それを幼いながらに感じたのだとクロノは告げた。無理をさせている。自分が母の負担になっていると。そう思ったからこそ、クロノは物心ついた頃に、グレアムを頼ったのだ。自分が少しでも力をつけ、リンディを助けてやりたい。そう考えたのだ。

だが、そんな簡単に事が上手くいくはずはなく、クロノは来る日も来る日もリーゼ姉妹から教えを乞い、少しずつ自分を鍛えていった。

魔法を使う才能に優れる訳ではない。だから自分に出来る事を正しく理解し、その中で状況に適した物を選ぶ力と技術を磨いた。身体能力も決して自慢出来るようなものではない。それでも、知恵と技術で出来る事を可能な限り学び、自分の物とするために努力した。

訓練だけでは足りず、寝る前や食事中等でもイメージトレーニングを欠かさずに行ない、今日よりも明日は少しでも出来る事を増やそう。そんな風に足掻いていた。

「それが僕の子供時代だ」

「……そして、訓練校へ入学した」

「ああ。アリアもロッテも、その頃から忙しくなってきたのもあってね」

そこからはエイミィも良く知っている。一番ではないが、必ず学力でも実技でも、上位にはクロノの名前があった。その影でどれだ

け努力をしていたかは、傍にいたエイミィが一番知っている。最初の頃は何度となく注意したのだ。体を壊すと。

だが、それにクロノは決まってこう答えたのだ。そうならない程度で止めている。だから大丈夫だ。そう無表情で返してくるクロノに、元来世話焼きなエイミィは、知らず知らずの内に面倒を見るようになっていたのだ。

そして、クロノもどこかでそういう温もりを欲していたのかもしれない。そんなエイミィのお節介に文句を言いながら、少なからず嬉しそうにしていたのだから。そうして過ごしている内に、エイミィはそんな可愛げのない二つ年下の少年が気になっていったのだ。

（小生意気だなぁって、最初はみんな思ったんだよね。でも、話してみればちゃんと優しいし、周囲へ気も配ってる子だってみんな理解して……）

気が付けば、クロノはリーダー的な扱いになっていた。他者の優れた所や良い所を見つけ、自分にない物は純粋に誉める。そして、可能ならその技術やコツ等を教わる姿勢。相手の立場や年齢など関係ない。誰でも、自分よりも優れている事がある。そう言って、クロノは周囲に接していた。そんなとこがエイミィは好きだった。しかし、本来ならクロノはそこまで周囲と関わってはいなかったのだ。エイミィがいなければ。

エイミィが世話を焼き、クロノが孤立しないようにとしていたおかげもあり、彼は今に至るのだから。

「……もういいよ、クロノ君」

まだ語り続けようとするクロノを止めるように、エイミィはその体を後ろから優しく抱きしめた。その暖かさに、どこか虚ろだったクロノの表情がいうつもの物に戻っていく。そこで初めてクロノは

自分が泣いている事に気付いた。
クロノが我に返ったのに気付き、エイミィはそっと指でその涙を拭う。それに気恥ずかしさを感じるクロノだったが、そこで何か言い返す雰囲気ではない事を感じ取り、黙る。

「クロノ君がどんな気持ちで、どう思ってるかは分かったから。この話は、ここでお終い。二人だけの秘密にしよ」

「……君って奴は」

自分の心境の吐露を、どこか嬉しそうにそう提案するエイミィにクロノはやや呆れ顔。それにエイミィは普段と何ら変わらない表情で見つめ返し、軽く笑うとこう言った。

「あたしはいつもこんな感じだよ？　さ、行こう」

言い終えるとエイミィはクロノから離れて歩き出す。それに苦笑するクロノだったが、その後姿を見つめ小さく告げた。

――――エイミィ、君に会えて良かった。

その頃、ユーノは思わぬ人物と食堂で出会っていた。検索を一時中断し、食事を取ろうと思って訪れたのだが、そこに青い髪の女性がいたのだ。そして、その傍には同じ髪の少女が二人いる。

「クイントさん？」

「ん？　あれ、ユーノ君じゃない。遂に局員になったの？」

「いえ、まだ普通のお手伝いです」

以前会った際に、クイントはユーノが局員ではないと聞いて驚いたのだ。何せ、局が投げ出した無限書庫の整理を、たった一人で行いながら、それを何とか実用可能にまでしようとしているのだから。そんな少年がただのアルバイトだと聞けばそうも思う。

なので、クイントはユーノがここにいる事が意外だったのだ。噂に聞けば、ユーノは管理外の居住許可を取得し、そこで暮らしていると思っていたから。クイントがその旨を告げると、ユーノは少し困ったような表情をした。

「誰かが整理しないと、すぐ混沌としますから」

「……そうね」

クイントは以前尋ねた書庫内を思い出し、嫌そうに頷いた。見渡す限りの本の山。それを一冊一冊戻しながら動くユーノを見て、クイントは感心したものだ。まぁ、検索してもらう代わりに少し整理を手伝ったりしたが。

その後も二人は食事をしながら話をしようとしていたのだが、それを阻む者達がいた。クイントの隣で食事をしていた少女達だ。

「ね、お母さん。このお兄ちゃん、誰？」

「お仕事の知り合い？」

スバルとギンガの問いかけに、クイントは優しく笑みを見せると頷いた。

「うん。彼はユーノ・スクライア君。母さんの探し物を手伝ってくれたのよ」

「初めまして。ユーノ・スクライアって言います。えっと、スバルとギンガだね。名前はクイントさんから聞いてるよ」

「あ、初めまして。ギンガ・ナカジマです」

「初めまして。スバル・ナカジマです！」

二人の自己紹介を受け、ユーノは笑みを浮かべた。聞いた通りの雰囲気だったからだ。やや大人しい雰囲気のギンガ。明るく元気なスバル。クイントの話から想像していたイメージが見事に当てはまり、ユーノは内心苦笑した。

その後、何故ここで食事をしているかの話になった。それにクイントはやや苦笑しつつ、こう答えた。どうも、二人が一度本局でご飯を食べたかったらしく、検診終わりに寄ったのだ。理由としては、ここでご飯を食べていれば、クイントのように局員になった気分が味わえると思ったらしい。

それがユーノは何となく理解でき、軽く笑って頷いた。なのはやフェイトもはやて達と食事すると、八神家の一員になったような感じがすると言っていたからだ。

それと似たようなものだろうと思い、ユーノは二人へ視線を向けた。しかし、ユーノはそこでやっと異常さに気付いた。そう、二人の目の前に置いてある空の食器の数に。

（ええっ？！　嘘だろ！？　軽く二人分はあるよ、これ！）

そう、一人につき二人分なのだ。自分よりも幼い少女達が、大人

の食事を二人分を平らげている。それに加えて今も食べているのだ。
そして、更に驚くべき事に、今食べているのをスバルとギンガは平らげた瞬間、迷う事無くクイントに告げる。

「「お代わり！」」

「まだ食べるの！？」

その言葉に思わずそう言ってしまうユーノだったが、クイントは大して驚きもせずに軽い言い方で答えた。それを最後にして、とりあえず止めておきなさいと。それを聞いて素直に頷き、お代わりを取りに行く二人。

ユーノはそんな二人を見て、軽く既視感を覚えた。自分が知る者にもいたからだ。その外見からは想像も出来ない程の量を平らげる存在を。故に、何となくだがユーノは同情した。見た事のないクイントの夫に。

（きっと、食費凄いんだろうなぁ……）

彼が世話になった高町家は、自営業のため基本収入が安定している訳ではない。それでも、セイバーが働くようになってから客足も以前より増え、その財政状態はかなり安定するようになってきていると、ユーノは聞いた事があった。

でも、それに比例して食費も安定して高値を維持するようになったらしい。そう、セイバーが来てから三倍ぐらいに跳ね上がったと、桃子は苦笑しながら言っていた。家計を預かる者は、ここを抑えるために知恵を絞るらしいが、桃子はこう言った。

――下手に質を落とすと、セイバーは無言で怒るのよ。

そう言って、桃子は苦笑い。故に質を下げる事をせず、別の方法で金額を抑える事が必要なのだと。そこまで思い出し、ユーノは思う。クイントは家計を預かる身だ。なら、きっと苦労しているのだろうと。

今もお代わりを美味しそうに食べる二人を微笑みながら見つめ、自分の分を食べている。だが、ユーノはそこで何か変な感じがした。二人はクイントの娘である。それがこれだけ食べているのに、クイント自身が一人前で満足するのだろうかと。

ユーノがそんな事を考えていると、クイントが自分の分を食べ終え、食器を片付けるために返却口へと運んでいく。ユーノはそれを見て、クイントは人より多少大食いなだけで、セイバー並みではないと思った。

そして、同時に失礼な事を考えたなと思い、密かに反省。そして、クイントはテーブルに載っていた食器を全て片付けると、少し物足りなそうに呟いた。

「う～ん……やっぱ四人前は食べるべきかしら？」

（疑問系！？）

その呟きでユーノは前言撤回。自分の予想は間違っていなかったと改めて実感すると共に、三人の食欲と胃袋はどうなっているのかと本気で考える。そして、もう一度心の中でクイントの夫へ同情した。

（強く生きてください。僕が出来る事は何もありませんけど）

そう告げ、ユーノは自分の分の食事を噛み締めるように食べるのだった……

下校時間になり、四人揃って歩くなのは達。話題はなのはがユーノから聞いたリゾート世界の話。それをアリサやすずかも意外そうな反応を示し、フェイトは知ってはいるのか、さほど驚いたりはしなかった。しかし、あまり縁がなかったためか、どこか興味を示してはいた。

常夏の世界でフェイト達と一緒に遊ぶのが面白いかもとアリサが言えば、珍しい景色なんかが見たいとすずかが答える。フェイトとしては、どこでもみんな一緒ならいいと笑顔で言うので、三人が揃って苦笑した。

「え？　え？　わ、私、何か変な事言った？」

「違うわよ。相変わらずだなって思っただけ」

「うん。フェイトちゃんらしいなぁって」

「私もフェイトちゃんと同じ気持ちだよ。みんながいるだけで楽しいもんね」

うろたえるフェイトに、アリサが可愛いわねと言いながら笑う。すずかはそんなアリサに小さく笑みを見せ、アリサも十分可愛いと思うと告げる。なのはは、ここにいないはやてがいれば、どんな意見を出すのだろうと考えていた。

アリシアはきっとフェイトと同じ意見を述べる。はやては、おそらく何処でもいいと言うだろう。ただし、条件に……

（大きなお風呂、って言うんだろうなぁ……）

夏の旅行も、はやてとエイミィのせいで大騒ぎだった。しかも、はやてはどうもプレシアやリンディも巻き込もうとしていたらしく、帰りの際、士郎に新年明けも何処か行こうと提案するのと同時に、出来れば温泉地でと言っていたのを、なのはは聞いていたのだから。

帰りの車の中では、そんな事を欠片も見せず会話の主導権をアリサと握り続け、なのは達を楽しませていたが。

そんな事を思い出して、なのはは一人笑う。今度は八神家が一人増え、更に楽しくて騒がしくなるのが目に見えているからだ。士郎達保護者達は大変だろうが、子供のなのは達にはそれはあまり関係ない。

どこに行くかは決まっていないが、必ず約束されている事がある。それは、絶対に楽しい思い出になると言う事。

「今度はどんな事が起きるかな？」

「ま、はやて次第でしょ」

「クスッ、確かにそうかも」

「アリシアもその要因になりそうです……」

どこか申し訳なさそうに言うフェイトに、三人が笑う。変わらない時間、変わらない日々。この時間を守られていると誰も思っていないから。ただ少女達は笑う。何も知らないために。それを知られないように、動く者達の望むように。何気ない日常。それを噛み締める事なく、少女達は過ごす。

「今回こそは勝ちなさいよ、なのは」

「う、うん。頑張ってみる」

「フェイトちゃんも頑張ってね」

「ありがとうすずか」

四人は歩く。行き先は八神家。アリシアの迎えと、はやてに今日の模擬戦の事を教えるためだ。新しいバルディッシュのお披露目。それを聞いて、イベント好きのヴィータとバトル好きのシグナムが黙っているはずがない。そのための告知でもある。

残暑の日差しの中、四人は歩きながら楽しげに笑う。その裏で、穏やかに闇の気配は近付いていた……

――――――

幕間11

海浜公園から見える二色の魔力光。それが夜空に花火の如く彩りを添える。色は、桃色と金色。なのはとフェイトのものだ。それを公園から見つめるは、関係者一同。士郎とランサーに小次郎は、酒を片手に眺めながら談笑しているし、忍と美由希は団扇片手にその光を見つめている。ノエルとファリンは、イレインにこれまでの魔法との出会いや出来事を話していた。もう、こうなると花火大会の雰囲気だ。

恭也は桃子と共になのはの応援。負けじとプレシアもアリシアやアルフと応援している。リニスは万が一に備え、ユーノの補助。そのユーノは結界を張った後は、ただ黙って二人の戦いを眺めていたのだが、その周囲にはすずかやアリサにはやてがおり、結局ユーノは二人が考えただろう戦術や思考を解説する役になっていた。

一方、守護騎士達とセイバー、ライダーにアーチャーは、その視線に揃って驚きを宿していた。二人の戦い方が、初めての合同模擬戦の頃とは別人のようになっていたのだ。

なのはは自分の得意距離である中遠距離を主体に戦い、フェイトはそうさせないように近距離へと持ち込もうとする。それは、変わらない。だが、そこに持っていくまでが違う。なのはは、フェイトの得意距離である近距離を警戒し過ぎて、距離を取る事に意識を取られる事を危惧しているのだろう。フェイトが距離を詰めると、逃げるのではなくフェイトが接近したくなくなるようにしたのだ。

「……まただ」

フェイトはなのはの懐に飛び込む隙を見つけるも、そう呟いてそれを断念する。視線の先に見えるのは、なのはの姿。そして、その

周囲を取り囲むように動くシューター達だ。
ディバイン・シューターによる壁。それがなのはの懐に飛び込もうとする度に、フェイトを阻む。その威力は大して大きくはないのだろう。だが、一瞬でも怯ませる事が出来ればいい。その隙になのはは再び距離を取る。もしくは、チャージしている砲撃を炸裂させるだけ。

（私の持ち味を完全に理解してるからこそ、なのはは手を打ってきた）

フェイトも中距離が出来ない訳ではない。だが、なのはと比べれば、その強さはややなのはに軍配が上がる。相手を無理に自分の得意に持ち込むのではなく、相手からそこへ行くように仕向ける。もしそれを嫌い、自分の不得手へ挑むのなら、少なくてもダメージを負い、下手をすればなのは自慢の砲撃を受ける事となる。
負けないためにどうするか。それをなのはは、得意を伸ばすのではなく、不得意を補う術を身に付ける事を選んだ。そうフェイトは解釈した。

「やっぱりなのはは凄いね。でも、私も……」

自分だって、このまま終わらない。そう思い、フェイトは手にしたバルディッシュを握り締める。

「バルディッシュ、カリバーフォーム」

”カリバーフォーム”

その声に合わせ、バルディッシュが鎌の形から変化していく。コアを中央に配した柄のようになり、そこから西洋剣を思わせる金色

の魔力光が発生する。それこそ新たな力、カリバーフォーム。だが、これももう一つの姿への前段階でしかないのだ。

「……あれが新しいバルディッシュの姿」

”セイバーの剣をイメージしたと言うのは、間違っていませんね”

「そうだね」

レイジングハートの声に、なのははそう警戒しつつ応じる。そう、ここからだと、なのはは思った。今までは準備段階。ここからが本番。バルディッシュの新しい力と姿。それを見せてもらうための時間なのだと、そう思い直して。

一度息を静かに吐く。そして、視線をバルディッシュから、それを構えるフェイトへ戻し、小さく呟く。全てを出し切ると。

「行くよ、レイジングハート。今度こそ勝とうねっ！」

”はい、なのは”

その声に合わせ放たれるディバイン・バスター。その光芒が、再開の口火を切った……

二人の切り札

「相変わらず派手だな……」

「心なしか、以前よりも砲撃が細くないか？」

「……まさか、魔力消費を抑えて撃ってるの？」

ヴィータはどこか呆れたように呟くが、その隣でシグナムがその僅かな差に気付き、同意を求める。それにシャマルが思いつく事を返すと、リインがそれに頷いて、そうだろうと肯定した。

同じ砲撃でも威力を出そうとすれば多くの時間と魔力がいる。だが、威力を抑えればその分使う時間と魔力を減らせる。そうなのは考えたのではないか。そうリインが言うと、ザフィーラが感心したように呟く。

「末恐ろしいものだ……」

誰に教わったのでもなく、自身でそれを考えて実践したなのはに、守護騎士達は揃って同じ事を思った。

一方、フェイトもなのはの砲撃をかわし、その変化に気付いた。そして、どこか嬉しそうに笑みを見せると、手にしたバルディッシュを下段に構えて叫ぶ。

「プラズマランサー！」

”ゲットセット”

プラズマランサー。それは、バルディッシュが強化された事により、フォトンランサーも強化されたために変更された名前である。そしてそれは、現状でのフェイトの切り札にも共通する名称でもあるのだ。

「貫け！　ファイア！」

出現した魔力の槍。その雷光の数、五つ。それがフェイトの声に呼応し、なのはへ向かっていく。それと同時になのはへ迫撃するフェイト。それを迎え撃とうとするなのはだったが、シューターを向かわせようとして、何かに気付いた。

自分の周囲のシューターを動かそうとすれば、フェイトに接近される事を許すし、かといってこのままでも、プラズマランサーによってそれを相殺される。その事に気付いてしまった。回避は無理。下手に動けばフェイトに隙を見せる。

（こうなったら……アレしかない）

「レイジングハートっ！」

”スタンバイレディ”

なのはの声で求めているものを悟り、レイジングハートはその魔法の準備をする。そこへ向かってくるプラズマランサー。なのはは、それへ自分からシューターをぶつけていく。それにフェイトは不可解な感覚を覚えるものの、そのままの速度でなのはの真下を取った。

それになのはも気付き、シューターを放つ。しかし、その瞬間フェイトの姿が消える。それになのはは慌てる事無く、反応した。背後から振り下ろされるバルディッシュを、レイジングハートの持ち手の部分で受け止めたのだ。

「ブリッツアクション、だよね」

「……さすがに読まれてるか」

”ついでに死角から来る事もです”

”一言多いぞ、レイジングハート”

デバイス同士のやり取りに、互いに苦笑しつつ、鍔迫り合いを展開する二人。だが、それはフェイトがやや加減をしているからに過ぎない。本来ならレイジングハートはひびを入れられている。カリバーフォームは、そのフォルム通り西洋剣と同じ発想で出来ている。つまり、刃の鋭さで斬るのではなく、その頑丈さで斬る方が主なのだ。

「悪いけど……このまま押し込ませてもらうよ！」

「うっ……」

フェイトが少し力を込めると、その刃がレイジングハートに徐々にひびを走らせる。それに内心申し訳なく思うも、事前に実戦だと思ってやれとランサーやセイバーにも言われた事を思い出し、フェイトはそのままレイジングハートを押し斬ろうとして――急にその感覚が無くなった事に気付いた。

「えっ……？」

”後ろです！”

前につんのめるフェイト。それと共に僅かだが、フェイトが呆気に取られる。そんなフェイトへバルディッシュが警告を発した。それにフェイトは咄嗟にバルディッシュを横薙ぎに動かした。それが結果的に良い方へ転んだ。

フェイトの背後を取ったなのはだったが、その無造作の攻撃に軽くバリアジャケットが斬られたのだ。それになのはの体勢が少しだが乱れた。だが、その切れ味に驚きながらも、なのはは何とかシューターを放つ。しかし、無理な体勢から放たれたそれを、フェイトは刃で切り払い、一度距離を離す。だが、それはすぐに飛び込める程度。

互いに警戒しながら、なのははフェイトの、フェイトはなのはの行動に驚いていた。なのはがあの時取ったのは、自身が神速と呼ぶフラッシュ・ムーブ。事前に準備をしてもらい、フェイトがもっとも力を込めた瞬間を狙って発動させたのだ。

きっと、その全てを視ていたのはセイバー達サーヴァント勢、それに守護騎士達と御神の剣士である士郎達ぐらいだろう。なのはは魔法により、即座に横に移動すると同時に背後へ回り、シューターを放つつもりだった。だが、予想外だったのは、バルディッシュがそれを見ていた事。

故に、シューターを放つ前に軽く迎撃され、タイミングを外してしまったのだ。

フェイトはバルディッシュの声に、即座に反応出来た事を喜んでいた。それと同時に、なのはの使った魔法の正体も察しをつけた。自分が使うブリッツアクションと同じ高速移動系の魔法だと。しかも恐ろしいのは、本来高速移動魔法は、使った瞬間すぐに別の動きは出来ないはずなのだ。だが、なのははそれをやってのけた。

（そうか……神速もそういう技だって言うしね）

なのは自身は使えないが、やはり御神の血は受け継いでいるのだろう。どこかでその高速移動へ体が対応しているのだ。それを含め、フェイトは改めて思う。なのはは凄いと。

魔法の才能だけではなく、その身体能力もある意味で恵まれている。更に凄いのはそれに胡坐を掻くのではなく、努力や発想で昇華させている事にある。そうフェイトは結論付け、笑みを見せた。それになのははやや不思議に思うも、同じように笑みを返す。

「なのは、覚悟してね。これが私の取っておき！」

”ザンバーフォーム”

その声と共にカートリッジが排出され、剣の柄が展開する。それに合わせ、刃も西洋剣から大剣へと変わった。それを呆然と見つめる一同。反応が大きいのは、やはりセイバーの宝具を知る者達だ。つまり、ユーノやアルフ、サーヴァント勢にプレシアとリニス。いや、プレシアとリニスは苦笑していたが。

「な、何なのよ……あれ」

「フェイトちゃん……よくあんなに大きな剣持てるなぁ」

「いや、そこちゃうやろ！」

「あれが……フェイトの切り札」

同い歳四人は、それぞれに反応を示し……

「すご～い……」

「お母さん、あれはどうなの？」

「……本人は気に入ってたわよ」

アリシアは大きく口を開け、アルフはややジト目でプレシアを見る。おそらく、女の子が使う武器ではないと言いたいのだろう。それにプレシアはちょっと視線を逸らしながら、そう答えた。

「ほう……確かに意図した方向は間違っておらん」

「そうなんですか？」

「ああ。でも、ありゃ別物だな」

小次郎の言葉に士郎がそう聞けば、ランサーがそれを肯定する。だが、その視線はどこか楽しそうだ。

「うわ……大きいねぇ」

「そうね……大きいわ」

美由希と忍は扇ぐのも忘れ、呆気に取られながらそう呟き合う。自分達よりも小柄な少女。それが身長よりも大きな剣を構えている事に、魔法の凄さを思い知っていた。

「な、あれが魔法か？」

「イレイン、思い込みだけで判断してはいけません」

「そうです。本当の魔法は、ああいう物なんです！」

どこか呆れたように尋ねるイレインに、ノエルは諭すように告げ、それにファリンが続くように断言した。それに、イレインは何かが

自分の中で壊れるような印象を受けながら、力無く頷いた。

「セイバーの剣って……さっきまでの方が近いようなイメージがあるんだけど？」

「だとは思うけど、俺も見た訳じゃないから何とも……」

戸惑う桃子の言葉。それを聞いて恭也は同意するも、もしかしたら本当はああではないかと思い、やや悩んでいた。

「……こうして見ると、やはり仰々しいですね」

リニスは一人苦笑しつつ、フェイトへ視線を送り……

「残念そうな顔すんなよ、シグナム」

「何故だ……何故大剣なのだ、テスタロッサ」

「ま、まぁ宝具って凄い威力らしいから」

「それを表現するには……見た目も必要だったのだろう」

守護騎士達は何故かがっかりした様子のシグナムを見ながら会話し……

「あれはセイバーの宝具に近いのか？」

「いや、形状なら先の姿の方が近い。威力は……きっとあれでも届かんだろう」

リインの疑問にアーチャーは冷静に答えた。その目はフェイトが繰り出す一撃を見極めようとしている。

「どうですか、セイバー。目指された者として、あれは」

「……斬馬刀ですね、あれは。バーサーカー辺りが持てば様になりそうです」

ライダーのからかうような声に、セイバーはそうやや苦笑しながら答えた。

その視線の先では、フェイトがなのはにそれを振り下ろすところだった……

フェイトの振るう一撃の速度と移動速度が予想より遅くなっていない事に、なのはは驚きながらも防御魔法でそれを受け止める。その強度にフェイトは小さく頷き、バルディッシュを構えた。それは、どこかなのはの記憶を刺激する構え。

そう、セイバーが宝具を使ったあの時見せた構えだった。それを理解した途端、なのはは全力で防御魔法を展開した。フェイトが手にしたバルディッシュがカートリッジを排出したのだ。

（大きいのが来る……っ！）

フェイトの表情や雰囲気からなのははそう判断した。避ける事も考えた。だが、となのはは考え直した。これは実戦と同じ感覚とはいえ模擬戦だ。なら、この一撃を自分が凌げるかどうかを試しておくのも悪くない。そう考えたのだ。

実際、フェイトクラスの相手と戦う時、その切り札を耐え切れるか否かは大きな決め手になる。また、セイバー達と模擬戦をする事があるのなら、それぐらいは出来ないと辛い。

（それに……）

脳裏にある者の姿がよぎり、なのはは避けずに真っ向から受け止める事を選んだ。

「避けないんだ……」

「うん」

フェイトはどこか意外そうに言った。なのははそんなフェイトに真剣な眼差しを返した。それは不退転の決意を宿している。その裏には、ただ試してみたい事があるからだけではない。

なのはの行動指針の根底にいる者。その考えや生き方になのはは憧れ、目標にしている。なら、逃げるという事は思いつかない。きっとその者なら、真正面から受けて立つはずだ。そう思ったのだ。

（セイバーなら……絶対そうする！）

そんななのはの内心を知らないフェイトだが、その表情から、なのはが自分の攻撃を凌ぎ切るつもりだと判断した。それが自惚れではなく、何か考えがあると理解し、フェイトは静かに告げた。

「バルディッシュ、やるよ」

”イェッサー”

フェイトの周囲に電撃が発生する。それを見て、なのははレイジングハートを突き出して防御魔法を展開する。その強度は、かなりのものがあるのだろう事を誰もが察していた。フェイトの全身を駆け巡る雷光。それを感じながら、フェイトは掛け声を掛ける。

「エクス……」

”プラズマ……”

それは、ランサーから聞いたセイバーの宝具の名前。それが意味する言葉を聞いて、フェイトは心から憧れた。約束された勝利の剣。まさしくそんな事を信じさせる力と輝きがあったからだ。

故に、フェイトは子供っぽい事だと思いつつも、絶対にこれを使う時はこの掛け声を言いたい。それによって本物の持つ力を借りたいと思ったのだ。そんなフェイトに合わせるように、バルディッシュも魔法の発動タイミングを計る。

「カリバーーーーっ！！」

”ザンバー”

放たれる雷光の一撃。その輝きは本物に遠く及ばないものの、それでも魔法と考えれば、かなりの凄まじさを誇るだろうと見ていた者は感じた。その稲妻にも似た奔流がなのはの展開する防御魔法へ衝突する。

その衝撃になのはの表情が険しくなる。フェイトはそれを黙って見守る。打ち勝って欲しいと思う気持ちと、なのはなら凌ぎ切ってみせるだろうと言う気持ちの相反する思いが、心の中でせめぎ合っていた。

一方なのはは、予想以上の衝撃にフェイトの凄さを再確認していた。サンダー・スマッシャーを受けた時とはまったく違うのだ。重さも衝撃も段違い。レイジングハートも同じ考えだったのか、先程からフェイトを誉める発言をしている。

”彼女は細身なのに、中々重たい攻撃を放ちますね”

「だね……っ！」

”ですが、なのはは負けません”

「っ……レイジングハートも、ねっ！」

互いに励ましあいながら、プラズマザンバーの衝撃に耐える二人。しかし、少しずつではあるが、その防御魔法に亀裂が走り始める。それになのはは慌てる事無く、手にした友と自身を信じ、ありったけの想いを込めて魔法を支える。

ゆっくり広がっていく亀裂。それでも二人は慌てない。むしろ、それを見ているフェイトの方がやや慌てている。いくら非殺傷とはいえ、あれだけの魔法を喰らえば大きなダメージを受ける。

そんな事を考え、少しうろたえるフェイトにバルディッシュが静かに言い切った。

”ご安心を”

「え……」

”貴女のご友人とその友は不屈の心の持ち主です”

「……バルディッシュ」

”凌ぎ切られた後の事を考えましょう”

そう告げる自らのデバイスに、フェイトは小さく微笑むと礼を述べて、その握り手に力を込める。その眼差しはランサーに教えを受けていた頃のもの。戦士の目とでもいうべき、鋭く厳しい目をしていた。

そうだ。自分が相手の心配をするなんてまだ早い。勝負が着くまでは決して気を抜くなと言われた事を、フェイトは思い出した。そして、バルディッシュの言葉通り、これを凌がれた時に備えておこう。そう思い直し、フェイトは待つ。その視線の先では、なのはの防御魔法に見事に亀裂が走りきり、崩壊する寸前だった……

閃光、そして爆発と轟音。それに見ていた者達の一部がどよめいた。しかし、見ればそれは桃子や恭也と言った魔法戦を良く知らない者達だけだ。いや、ユーノやアルフなども同じようにどこか不安そうに見てはいたが。

すると、フェイトは身構えた。それに気付いてユーノは視線をその先へ向ける。そこにいたのは――――。

「っ……やっぱり無理だったね」

”ですが、軽減は出来ました。無駄ではありません”

所々焼け焦げたような状態のバリアジャケットを纏ったなのはだった。それを見てもフェイトはもう動揺しない。どちらかといえば、納得していたぐらいだ。なのはが耐え切った事に。

しかし、フェイトはそんななのはへ攻撃を仕掛ける事はしない。

その目はこう言っているようになのはは思った。次はそちらの番だと。そんなフェイトの視線になのはは頷き、レイジングハートを大上段に構えた。

「じゃあ行くよ！　これが私とレイジングハートの……」

”全力全開です”

なのはの周囲に集まっていく魔力光。それを見て、プレシア達魔導師組の顔色が変わる。集束魔法である事は間違いない。だが、その光景から想像出来る事は、あまりにも恐ろしい事だったからだ。

ユーノはそれを見た瞬間、結界を最大限まで強化した。それに気付き、アルフやリニスは悟る。ユーノはこれからなのはが放つ魔法を知っている。そして、それがどうやら想像通りの威力である事も。

一方、セイバーはなのはの魔法を見て確信した。なのはもまた自分の宝具に影響を受けたのだろうと。何故ならば、集まっていく魔力光が星のように見えたのだ。自分の宝具は星が鍛えし神造兵装。それをなのはは感覚的に感じ取ったのだろう。

徐々に集束していく魔力。それを見て、子供達はただ綺麗だと口を揃え、女性陣も同じように無言でその輝きを見つめている。男達はその目に見える強大さに息を呑み、守護騎士達は見守っている。そして、サーヴァント達でさえその光景には、どこか人を魅入らせるものがあると感じていた。

（成程、なのはもセイバーの宝具を見たのであったな……）

（彼女のは派手ですからね。真似したくなる気持ちも分かります）

（フェイトもなのはも、自分なりのエクスカリバーを、か。……少

し羨ましいものがあるな）

（おいおい、フェイトだけでもすげぇと思ったのによ。どこまで楽しませてくれんだ、こいつは）

四人がそれぞれの思いで、なのはの魔法を見つめる。そして、ついになのはがレイジングハートを集束した魔力目掛けて振り下ろした。

「スターライトっ！」

”ブレイカー”

星光の輝きを冠された砲撃が、フェイト目掛け向かっていく。それに対しフェイトが取った手段は――――。

”ロード、カートリッジ”

「切り裂けっ！！」

プラズマザンバーを使った相殺狙いの行動。自身の最大攻撃での迎撃。それによって最悪でも威力を軽減しようとしたのだ。激突する星光と雷光。天に輝く光と天から輝く光が衝突し、激しく火花を散らす。まさしく花火である。その美しく力強い輝きの拮抗は、なのはが均衡を崩す事で終わりを迎えた。

桃色の魔力光が金色の魔力光を飲み込んでいく。それを見つめながらも、フェイトはどこか満足そうだった。それを見たなのはも満足だった。なのはは思った。きっと、フェイトも自分と同じ気持ちだと。

同じモノに憧れ、目指した。だが、その目指し方が違った。フェ

イトはその斬撃を、なのははその輝きを求めた。その結果、今回はなのはに軍配が上がっただけなのだ。そう、もしフェイトが待たずに、もう一度プラズマザンバーを放っていればなのはが負けていたのだから。

【今日は勝たせてもらうね、フェイトちゃん】

【いいよ。でも、今度はまた私の勝ちにするから】

フェイトへ星光が当たる直前、なのははフェイトへそう告げた。それにフェイトもそう返し、光に包まれる。その輝きが消えた後、ゆっくり落下するフェイトの体を、待ち構えていた者が受け止める。その暖かさに、フェイトは目を開けた。そこにいたのは……

「フェイト、大丈夫!?」

血相を変えたユーノだった。彼はスターライト・ブレイカーを知っていた。そのため、結界をリニスとアルフに託し、撃墜に備えていたのだ。それは、本来動くべきだったプレシアが何故かユーノを指名した事も関係していた。

無論、それを聞いて桃子がやや苦笑したのは言うまでもない。こうしてユーノはフェイトを支え、その無事を確認する事となったのだ。

「あ、えっと……だ、大丈夫」

「本当に？　とりあえず簡単な治療魔法はかけておくから。後でシャマルに診てもらって」

「あの～、ユーノ君。それじゃ、まるで私が悪いみたいに聞こえる

んだけど……」

どこか心配そうなユーノの言葉に、やや気まずそうになのはが近寄ってくる。それにユーノは少し慌ててフォローする。それを聞きながら、フェイトは少し顔を赤くしていた。

その後、どこか微笑みながらシャマルがフェイトを診察し、ゆっくり休めば問題ないと告げて、今日の模擬戦は終わりを迎えた。ちなみに、なのははこれが模擬戦初勝利だった。

それぞれが帰る前の挨拶をしている中、なのはとフェイトはセイバーに言いたい事があると呼ばれた。それに内心ドキドキしている二人。何故かその場所も、ややみんなから離れている所なのもそれに拍車をかける。

何せ、セイバーは二人をここへ連れて来てから無言なのだ。その沈黙が、今の二人には怖い。

【な、何を言われるのかな？】

【怒られる事じゃないと……思いたいよね】

少し怯えるようなフェイトの言葉に、なのはは苦笑い気味に返した。そして、その瞬間セイバーが静かに口を開いた。

「なのは、フェイト。貴方達の宝具、見せてもらいました」

その言葉に二人は軽く驚いた。セイバーの口から出た言葉は、自分達の予想外の言葉だったからだ。確かに意識したのはセイバーの宝具。でも、二人はそれに届いたなどと思ってはいない。それをセ

イバーは、宝具だと言ってくれたのだ。
それを理解し、二人は段々笑顔になる。そんな二人の笑顔を見て、セイバーも笑みを浮かべる。しかし、それをすぐに消してこう告げた。

「以後、あれを使う事は禁じます」

「「ええっ？！」」

「……と言いたいところですが、無闇に使わない程度で許します」

少し笑みを浮かべたセイバーのその言葉に、二人は安堵の息を吐く。無論、セイバーは最初からそんなつもりはなかった。だが、こう言えば二人は、あれを使う事を良く考えてくれるだろうと思ったのだ。
宝具と呼んだのは、あながち冗談ではない。二人が放った魔法は、どちらも人の身で放つには強力なものだった。それ故にセイバーは心配したのだ。それが二人の体に与える影響を。

その後、少しだけセイバーに注意を受け、二人は頷いてそれを了承した。そして、最後にセイバーはこう言った。

「二人のあの輝き、私も驚きました。これからも様々な困難が待ち受けているでしょうが、きっとなのは達なら超えて行けるはずです」

「セイバー……ありがとう」

「うん。私、頑張るよ」

笑顔で頷くなのはとフェイト。それを見て、嬉しそうにセイバー

も笑顔を見せる。こうして、模擬戦は本当に終わりを迎えたのだった……

それから数時間後、同じ場所にアーチャー達がいた。ランサー達の姿も見える。そこで告げられるはやての体に関する事実に、驚愕する守護騎士達と悲痛な面持ちのライダーと小次郎。だが、そこに希望を与える話もあった。それはプレシアとリンディの申し出。

それに戸惑いを隠せない守護騎士達だったが、アーチャーが、ここにきてはその申し出を有難く受けるしかないと告げた。最終手段として、なのはやフェイトから蒐集する事を考えていたのなら、二人から蒐集出来るというのは願ってもない事だと。

「……でも、それでやっと残り百近くまでになるぐらいかしら」

「それなら、まだ望みが持てる」

シャマルの言葉にシグナムが噛み締めるように告げる。それは全員の気持ちの代弁だった。アーチャーはそれを聞いて、ある事を考えていた。それは、リンディが蒐集して欲しいと言った後、本人に確認したある事。

同意が得られれば、人からの蒐集は罪にならないのかと。それにリンディはやや考えながらそうなる可能性が高いと答えた。それを聞いて、アーチャーは頁を稼ぐ相手がまだ残っていた事を思い出したのだ。

（彼女達から蒐集するのなら、彼にも協力願うか。おそらく、それで一気に頁を稼ぐ事が出来る）

そうして、アーチャー達はいつものように無人世界へ蒐集へ出かける。はやての生命の危機。それを回避するために、二人の母の協力を受け、アーチャーは、ある当てを頼る事で残りを少なくする事を決意する。

聖剣に受けた衝撃。それを遂に形にし、セイバーへと見せた二人。その輝きは、闇を砕く光そのもの。

猶予が少なくなるも、希望は消えず。今はただ、奇跡を信じて突き進むのみ……

――――――

幕間12

晴れ渡るミッドの空。その暑さにイライラを極限まで感じている者がいた。その者は、空を睨むように見つめ、手にしたアイスを無言で口に入れる。口に広がるのは甘いミルクの風味。高級と名高い厳選牛乳を使ったミルクバーだ。

それをまるで安売りの特売品のような扱いで食べ、残った棒をその感じる怒りのまま庭に捨てようとして――――。

「どこに捨てる気？　ゴミ箱は反対よ」

「……言われんでも分かっておる」

止められた。そして、言われたギルガメッシュは、手にした棒をぞんざいに投げ捨てる。まったくコントロールされていないのにも関らず、それが見事に様々な物に当たった結果、ゴミ箱へと入る。

その光景を眺め、クイントは満足そうに頷いた。その視線の先には、ギルガメッシュが食べていたのと同じアイスを、美味しそうに食べるスバルとギンガの姿がある。

ちなみに、このミルクバーはギルガメッシュのお金で買った物である。あまりにも金銭で不自由する事が多いため、ギルガメッシュが文句を言ったのだ。楽に資金を稼ぐのが駄目と言ったが、株等の資金運用は、本来ならばかなりの危ない橋を渡る事もある事だと。

それによって多額の資金を得た事は、それを勝ち抜いた証拠であり、何ら恥ずべき事ではない。そう言って、自分の稼いだ資金の返却を求めたのだ。

それにクイントは大困り。それを許せば、おそらくギルガメッシ

ュは、また何か別の方法で資金を増やすだろうと思ったからだ。何とかしてそれを防ぐ事を考えるクイントだったが、ギルガメッシュはそんなクイントの弱点を突いてきたのだ。

それは、ギルガメッシュが稼いだ資金の一部を生活費として渡すというもの。それを聞いてクイントは大いに悩んだ。実は、ギンガとスバルを引き取ってから食費がかなり増えてきており、中々貯金が出来なかったのだ。

今住んでいる家もローンが残っているし、老後の事や二人の結婚費用等を考えると蓄えは少しでもしたい。結果、クイントはギルガメッシュの要望を叶える事になる。そして、現状のようにギルガメッシュは好き勝手に欲しい物を手に入れるようになった。

「ギルお兄ちゃん、これ美味しいね」

「気に入ったか。ならば、今日の風呂上りにでも食すがよい」

「いいの!?　やった～!」

嬉しそうに目を輝かせるスバル。ギンガはそんなスバルに少し苦笑。この調子でいけば、今日届いたばかりのアイスはたった三日ももたずになくなるだろうと思ったのだ。

そんなギンガが手にしているのも、同じアイスだったりする。実は、クイントも既にそれを食べていて、その味と値段に納得した。さり気無くギルガメッシュの名前で追加注文したのはここだけの話。

「それにしても遅いわね……」

「ね～」

クイントの呟きにスバルがそう続いた。今日はクイントが完全オ

フで、ゲンヤが午後オフなのだ。そのため、今日は五人で夕飯を食べるのを兼ねて買い物をする事になっていたのだ。

「お仕事長引いてるのかな？」

「まったく、雑種共など放っておけばいいのだ」

食べ終えてしまったアイスの名残である棒をどこか悲しそうに眺め、ギンガがそう言えば、ギルガメッシュはそうなった場合の原因を考え、そう告げた。

そうこう言っていると、ずっと玄関前を見つめていたスバルが嬉しそうな声を上げた。それに全員が視線を向ける。そこには、汗を流しながら笑みを浮かべるゲンヤの姿があった……

ある日のナカジマ家

ミッドチルダ首都　クラナガン。そこを歩くナカジマ家の姿があった。あの後ゲンヤは軽く汗を流し、着替えると疲れた体のまま再びクラナガンへ戻るはめになった。クイントはそんなゲンヤに苦笑し、だからクラナガンで待つと言ったのにと告げた。

だが、それにゲンヤが小さく笑みを浮かべながらギルガメッシュが絶対じっとしてないと返した。厳密に言えばギルガメッシュではなく、スバルとギンガだろう。しかし、二人が動けばギルガメッシュが動く。そうなれば、大人しく待っている事は不可能だ。

「……ギル君になってもらえば良かったかな？」

「いや、どっちにしろ二人が動くだろうから変わんねぇ」

「それもそうか」

そう言って二人は笑う。それを知らず、スバルとギンガはギルガメッシュの手を掴んで歩きながら、初めてゆっくり見るクラナガンの街に目を輝かせていた。

高層ビルが立ち並び、多くの人が行き交うこの街を二人は歩くこと自体は初めてではない。クイントに連れられて本局へ行く際、この街自体には来ているのだから。だが、こうして観光みたいに歩くのは初めてだった。

「お姉ちゃん、あれ何かな？」

「う～ん……テレビかな？」

スバルが指差したのは、ビルの壁面に備え付けられた大型モニター。そこには、今日の天気やミッドのニュースなどが流れている。だがそれに目を向けている者は少ない。そんな二人の視線を追い、ギルガメッシュもそのモニターを眺めた。

その巨大さに小さく感嘆の声を漏らすも、それも一瞬。後ろでどこへ行くかを話し合っているゲンヤ達へ視線を移す。

「ゲンヤよ、あれはいくらだ」

「あ？　本気で……言ってんだよなぁ」

ギルガメッシュが指差した物を見て、ゲンヤは呆れた感じで呟い

た。そして、それに対する答えとして、ギルガメッシュが納得して諦めるを得ない言葉を返す。

「その前に、買ってどこに置くんだ。家にゃそんな広い場所はねぇぞ」

「チッ、そうだったな」

「それにギル、あんなの家にあったら邪魔なだけよ」

クイントの言葉にも納得し、ギルガメッシュはどこか不満そうではあるが、興味を無くしたようで二人を促して歩き出す。それを見てゲンヤ達は笑い合うと、それを追うように動き出した。

しばらく歩き、五人は高層ビル街の一角にある大型デパートへ入った。そして、五人が目指したのはまず飲食店のフロア。夕食を食べる店を先に決めておこうとゲンヤが提案したからだ。そう、ギンガとスバルが悩む事を予想し、混雑する前に店を決めさせようと考えたのだ。

美味しそうな料理がありそうな店ばかりで、姉妹はあっちへフラフラこっちへフラフラ。それに手を繋がれているギルガメッシュも、連れていかれてあちらこちらにフラフラとしている。それに文句を言いながらも、ちゃんと二人の手を離さないのがギルガメッシュの良い所。

ゲンヤとクイントも微笑みながらそれを見つめていた。そして、やっと二人の意見が纏まり、店を決めた事でもう一つの目的である買い物へと移行した。

「何買うの？」

「お前さん達の服だな」

「それとギルの服。結構ファッションセンス良いのよ。まぁ、きっとお高いの買ってくるんでしょうけど」

手を握るスバルにゲンヤがそう答え、クイントが補足する。その手にはギンガの手が握られている。そのギルガメッシュと言えば、両手を解放されて、今は一人デパートの中を物色している。

先程から見ている店の悉くが高級店ばかりなのは、さすがというか何というか。それを知ってか知らずか、ギルガメッシュは次々と店を訪れては気に入った物を買っていく。値段も見ず、即決で。その振る舞いはまさに王。

店員もその身に纏う雰囲気に圧されながらも、何とか懸命にあれこれ薦めるのだが、ギルガメッシュとしては自分が欲しい物以外は興味がない。それを瞬時に理解し、ギルガメッシュが怒り出す前に退く事が出来るのも、ベテラン店員の凄さだろうか。

「またお越し下さいませ」

「我の気に入る物があればな」

店員の言葉にそう答え、去って行くギルガメッシュ。この様な光景が、この後もそこかしこで見られたと言う……

「ど～お？」

「うん。可愛いわよスバル」

「えへへ……」

「これどうかな？」

「いいんじゃねぇか」

「そう？　ならこれにする」

互いに服を試着し、両親に見せる二人。スバルは飾り気がないシンプルな作りの白のスカート。ギンガも同じようなスカートだが、色が水色だ。それをお互いにも見せ合い、スバルもギンガも笑う。

そして、同時にこう思った。ギルガメッシュにも見て欲しい。何て言うのか聞いてみたいと。それを二人は両親に告げた。それにゲンヤとクイントはやや困るものの、まさにタイミングを読んだとしか言えないようにギルガメッシュがそこへ現れた。

彼は自分を見つめる二対の瞳に気付くと、それが求めているものを理解した。いや、理解したのではなく悟ったのだろう。スバルとギンガの穿いているスカートが行きと違っている事に気付いたのだ。

そして、二人の格好を眺めて何かを言おうとしたのだが、クイントがさり気無くギルガメッシュの後ろに立って呟いた。

「いい？　機嫌を損ねるような事は言わないでね」

「……分かっておる。我とて泣かれたくはない」

その答えに満足し、クイントは静かに離れた。ゲンヤはそれに苦笑した。そんな事をわざわざ言わなくても、ギルガメッシュが二人を泣かさないようにすると思っていたからだ。

その予想通り、ギルガメッシュはこう評した。ギンガは色が髪に

近く、中々似合っている。スバルは単純が故に違和感がない。本当はもっと言いたい事や思った事もあるのだが、ギンガはともかくスバルは簡単に泣いてしまうので、ギルガメッシュもそれ以上何も言わなかった。

こうして、ギルガメッシュに誉められたと二人は喜び、買い物はつつがなく進んでいったのだが、時刻が夕方辺りになった頃……

「お腹すいた～」

「私も」

「私も～」

「お前は大人だろうが」

「ゲンヤ、そういう時は無視せよ。相手にするとつけあがる」

似た者三人が揃って空腹を訴えたのだ。一名大人で親であるにも関らず、子供と同じような発言をしたため、ゲンヤが突っ込んだのだが、ギルガメッシュはその相手であるクイントに、そう冷たく接しろと助言を出した。

それにクイントが軽く不満を述べるも、ゲンヤもギルガメッシュの言った事にも一理あると考え、今度一度試してみるかと考えたりしていた。ともあれ、そのままではスバルとギンガを盾にクイントが五月蝿いので、ゲンヤとギルガメッシュは揃ってため息を吐きながら再び飲食店フロアへ。

案の定、混雑しているフロアの様子にややウンザリするギルガメッシュだったが、何か文句や行動を起こす前にクイントがその手を

止める。そして、視線でこう告げる。その気持ちはみんな同じだと。
その強い視線にギルガメッシュは少し気圧されるも、何事も無かったかのように視線を戻した。ただ、全身から漂わせていた怒りの気配を少しだけ静めていた。

「ゲンヤ……」

「ん？　どうした」

「……今宵は付き合え。我の秘蔵の酒を出す」

「……なら、何か肴を買わねえとな」

ギルガメッシュの誘いにゲンヤはどこか苦笑いしながら嬉しそうに応じる。ギルガメッシュがこう言う時は、大抵愚痴を言いたい事があった時だとゲンヤは知っている。そして、その原因が大抵クイントだという事も。
それを知るからこそ、ゲンヤは苦笑するのだ。自分もクイントにはかなり振り回された。それを知るが故にギルガメッシュの苦労も分かるというものだ。

そんな男二人とは対照的に、楽しくこれからの食事に会話を弾ませる三人がいた。

「ね、何頼むの？」

「えっとねえっとね……」

「いい？　スバル、ギンガ。まずは時間が掛からない物と掛かる物を分けなさい。そして、それを一つずつ同時に頼むの。そうすれば

まず時間の掛からない物が来て、食べている間に時間の掛かる物が来るから、その時に追加をしてきなさい」

「「お母さん、頭いい」」

そんな考えれば分かる事でも、二人にすれば凄い発見だ。クイントはその二人の尊敬の眼差しに笑みを浮かべている。それを聞きながらゲンヤは苦笑し、ギルガメッシュは呆れた。そんな会話をしている内に列は進み、五人は店内へ案内される。

席に着いた途端、ギルガメッシュは選ぶのが面倒だと言わんばかりに一番高い料理をもってこいと告げ、ゲンヤ達に後を任せた。それに苦笑するゲンヤとクイントだったが、払いは自分が持つとギルガメッシュが言った途端、クイントが恐ろしい勢いで注文を開始。

それに聞きながら、ゲンヤは心の中で厨房に合掌。こうして、この店始まって以来の忙しさが始まるのだった……

食事を終えて帰宅したナカジマ家の五人。だが、ゲンヤの背中にはスバルが。クイントの背中にはギンガが背負われていた。初めての大都会での買い物などで疲れたのだろう。二人は食事を終えた後、頻繁に目を擦り出したのだ。

そして、こうしてそれぞれ父と母の背に負われて眠っていた。ギルガメッシュは、そんな二人の寝顔を見て微笑むゲンヤへ何となしに尋ねた。

――――自分の血を引かぬ子を、どうして愛せる。

その問いかけにゲンヤは軽く驚くも、小さく笑って答えた。

――そんな事は関係ねぇ。こいつらが俺を親父と思うのなら、俺は親父なんだからよ。

そう言ってゲンヤは家の中へ入っていく。その後ろ姿を見つめ、どこか呆気に取られているギルガメッシュへ、クイントが嬉しそうにこう告げた。

「あれが私の旦那様よ」

凄いでしょ。そう言ってクイントも家の中へ入っていく。それを見送って、ギルガメッシュは心底おかしいといった感じで笑う。どいつもこいつも馬鹿ばかりだと。そう言いながら、ギルガメッシュは楽しそうに笑みを見せる。

どこまでも飽きぬ奴等よ。そう呟いて彼もまた家の中へ入っていく。ゲンヤと酒を交わす約束をしているので、ちゃんと蔵から秘蔵の酒を出し、それを準備する。ゲンヤとクイントはどうも二人を部屋へ寝かせてきたようだ。

「湯上りにやろうぜ」

「そうだな。それもいいだろう」

そう言ってゲンヤとギルガメッシュは風呂へと向かう。それを見て微笑むクイント。ギルガメッシュは、自分達には位置づけが状況により変化するからだ。ゲンヤにとっては友であり息子。クイントにとっては手の掛かる居候であり頼れる息子。ギンガとスバルには、優しく頼れる兄。

（ホント、ギルと会えて良かったわ。あの人も楽しそうだし、二人にも色々と教えてくれてるみたいだし……）

そして、自分も助けてもらっている。そう考え、クイントは感謝する。自分達を引き合わせてくれた存在に。神と呼ばれる存在に。

ギルガメッシュがその神と人の子だと聞いて、クイントは思ったのだ。ギルガメッシュは、スバルとギンガの持つ哀しみを消し飛ばすために遣わされたのだと。機械仕掛けの人間。そんな風に言われてもおかしくない二人。それを何でもないと言い切ったギルガメッシュ。

その存在が必ず二人にとって大きなものになる。そうクイントもゲンヤも考えている。故に嬉しいのだ。何の繋がりもないギルガメッシュがそう言ってくれた事が。そう、他にも同じように言ってくれる人が、思ってくれる人がいる。そう考える事が出来るから。

「ギルとギンガ、スバルに幸多からん事を……」

クイントの祈りは誰に聞かれる事なく消える。彼女の願い。それは遠い将来必ず訪れる事になる。幾多もの出会いと縁が重なって……

――

幕間。久しぶりのギル登場。海鳴と違い、こちらは平和。

すっかりナカジマ家の一員なギル。黄金律は健在で、金銭面の不満を解消するべく、家計費の援助を餌にするところが賢い。

ユーノの心配はこれで解消されました。

A-s六話　前編（前書き）

誠に勝手ながら、今月から一週間更新へ切り替えます。申し訳ありませんが、何卒ご理解ご容赦の程を……

A' s六話　前編

庭仕事をしているザフィーラと素振りをするシグナム。その隣でみーちゃんと遊ぶはやて。それを眺め、洗濯物を干し終えたアーチャーが、さり気無くはやてに近付いてみーちゃんを取り上げた。それにやや不服そうな表情を浮かべ、はやては文句を述べる。

「何すんや」

「そろそろアリシアが来る頃だ。準備したらどうだね？」

「む～、わたしの楽しみを奪うとは……覚えときっ！」

まるで悪役の捨て台詞のように言い放ち、はやては草むしりをしているザフィーラと、素振りを終えたシグナムへ視線を向けた。そして、その背に向かって一言。

「ザフィーラ、悪いけど車椅子を家の中へ運んでくれるか？　それとシグナム抱っこ」

先程までの雰囲気はどこへやら、そんな風にはやては甘えるように言った。それに二人は笑みを浮かべ、シグナムがはやてを抱え、ザフィーラが車椅子を担ぎ上げて動き出す。

そんな光景を眺め、アーチャーは微笑む。だが、即座に表情を変えるとみーちゃんへ向かって告げた。今日、グレアムに会って頼みたい事があると。それにみーちゃんは頷き、昼過ぎに会う事を提案した。

「……なら、場所は八束神社にしよう。高台ではシグナム達が来る

可能性がある」

「わかった。ならそこでね」

「ああ。……今日からはロッテ、君なのか」

「そ。あ、今日の味噌汁は少し濃かったよ」

ちゃっかり批評をし、ロッテは去って行く。アーチャーはそんな彼女に苦笑すると、いつものように手を振った。それに満足そうに一声鳴くと、みーちゃんは完全にいなくなった。

それを見送って、アーチャーはため息。実は同じ事をはやてにも言われたのだ。この所、深夜の蒐集活動に出ている事を気遣い、シグナム達が塩分をやや多く取れるようにしたのを気付かれたのだ。

（はやても彼女もあまり激しく動いていないからな。……仕方ない。塩分の事は別の物で取れるようにするか）

舌が肥えるのも考えものだ。そう思い、アーチャーは家の中へ戻る。今日、一足先にリインにはグレアムの事を教えねばならないかと、そう考えて……

完成、近付く　前編

静寂に包まれるテスタロッサ家。そこにアーチャーとリイン、それにプレシアとランサーの姿があった。リニスはマリエルに会いに

行っている。レイジングハートの強化案が出来たらしく、そのデータを受け取るためだ。アルフはフェイトと二人で買い物へ。アリシアはいつものように八神家で勉強会。

そして、ここにリインがいるのはただ一つ。プレシアから蒐集を行なうためだった。プレシアを見つめるリイン。その表情はどこか申し訳なさそう。だが、そんな彼女へプレシアは笑みさえ浮かべて言った。

「さ、早く済ませてしまいましょう。ギリギリまでするとなると、動く事も辛いのでしょ？」

「……貴女の優しさと勇気に感謝する。必ず、必ずこの恩を返すと誓う」

プレシアの言葉にリインはそう噛み締めるように告げ、旅の扉を展開した。プレシアの体を強烈な脱力感が襲う。それと共に頁がかなりの勢いで埋まっていく。それを見つめ、アーチャーはやるせない心境だった。だが、それしか道はないと割り切ったのか、表情は無表情のままだ。

やがて蒐集を止めたのか、本の動きが止まる。それと同時に倒れそうになるプレシアを、ランサーが優しく支える。疲れた顔をしているプレシアに、ランサーは小声で何かを告げた。それを聞いて、プレシアは嬉そうに笑う。

「……これで一気に四十は稼いだ」

「そうか。なら、次はリンディの所へ行こう」

嬉しくも悔やむようなリインの声。それにアーチャーは何の感情も込めない声で答える。それは、まさにこれを作業と割り切ったか

のような響きさえ感じる。それにリインはかつての守護騎士達を思い出し、悲しげな目をするが、今はそれしか道がないと思い直して頷いた。

だが、アーチャーはプレシアを支えるランサーへ一言だけ告げた。今夜の蒐集を休んでプレシア達の傍で過ごして欲しいと。それにランサーは小さくだが笑い、片手を挙げる事で応えた。

それに笑みを見せるリイン。アーチャーはそれに反応を示さなかったが、口元が微かに笑っていたようにランサーには見えた。そして、リインの転送魔法で立ち去る二人。それを見送って、ランサーはプレシアを抱き抱えて動き出す。

「ら、ランサー……まだ、動く事は出来るから」

「無理すんじゃねえ。部屋まで運んでやるから、大人しく寝てろ」

「そう、ね……一緒に寝る？」

「おいおい馬鹿言うなよ。……ま、そうしてくれってんなら考えてやるけどよ」

どこか楽しそうに言うプレシア。だが、その顔に赤みが帯びている事にランサーは気付かない風を装い、嬉しそうに返す。そうして二人はプレシアの部屋へと消える。

ベッドにプレシアを横たわらせ、ランサーは笑みを見せる。それにプレシアも笑みを返す。疲れもあるためか、プレシアはその後すぐに目を閉じた。

そのままランサーはプレシアが寝付くまで傍にいた。そんなランサーの顔に浮かぶのは、優しい笑み。プレシアが完全に寝入ったの

を確認し、部屋を出るランサー。おそらくプレシアが全快するのにそこまで時間はかからないだろう。精々二日ぐらいだろうか。

しかし、その間フェイト達へどう誤魔化すかを考えなければならない。と、そう考えてランサーははたと気付いた。そんな難しい事ではなかったと。そう、軽い寝不足からくる体調不良で構わない。プレシアが徹夜で研究をしていたと言ってしまえば、それを納得するだけの条件は揃っているのだから。

（……まぁ、アルフにはそれとなく伝える事も考えないとだな）

自分の愛する女の一人に思いを馳せ、ランサーは小さくため息。おそらく文句を言われる事が容易に予想出来たからだ。そう考え、ランサーは視線を窓へと向ける。そこには、入道雲の浮かぶ夏空然とした九月の青空がある。

その眩しさに目を細めつつ、ランサーは思う。この青空のように眩しい未来を必ず掴み取ってみせると。そう、アリシアの時のように誰もが笑える結末。それをもう一度と……

「……どうだ」

「凄い……彼女もかなりの頁だ。プレシアよりも少しだけ加減したが、それでも三十は超えた」

蒐集され、疲弊したリンディを抱くように支え、アーチャーはリインへ視線を向けた。その蒐集量にリインはどこか驚くように答えた。それを聞き、アーチャーは静かに頷いた。これで何と最低で七十頁も稼いだ事になる。これで残り百を切る事が出来た。

自分達が苦労して一晩で十頁がやっとだったものを、たった二人

で七倍も稼いだ効率の良さに、アーチャーは驚きながらも納得していた。

（確かに、これなら魔導師から蒐集しようと考えるはずだ）

そう考え、アーチャーは疲れた表情のリンディへ視線を戻す。やや顔色も悪いように見えるリンディ。それに申し訳ない気持ちになるものの、アーチャーはそれを口にしてはいけないと思い、ただ一言告げた。

「……協力に感謝する」

「いえ、これも人助けだと思えば……」

「リイン、私は彼女を部屋へ運ぶ。君は一旦戻り、ランサーを連れて来てくれるか」

アーチャーの指示に疑問を感じるリインだったが、きっと何か考えがあっての事だろうと理解し、頷いた。そして、転送魔法を使いテスタロッサ家へ戻っていく。それを見送り、アーチャーはリンディに小さく告げる。

「すまない」

「え……あっ」

戸惑うリンディをアーチャーは静かに抱き抱え上げ、そのままリンディの部屋へ向かう。その間、リンディは現状を理解してやや動揺していた。といっても、内面的にであって表面上は普段と変わらないのだが。

夫であったクライドに結婚式の日同じ事をされた事がある。その時と同じく、男性の逞しさを感じていたのだ。違いは、当然ながら抱き抱えている者の表情。クライドは笑顔だったのが、アーチャーは真剣そのもの。だが、どちらにしてもリンディにとっては、自分に対する想いを感じる事が出来る事に変わりはない。

（私の身を案じてくれているのね……やっぱり責任感の強い人だわ）

リインが言った加減したという言葉をリンディは確かに聞いた。それにも関らず、アーチャーはこうしてリンディを部屋へ運んでいる。実を言えば、リンディは歩く事は出来る。だが、それを言い出す事が出来なかった。それだけアーチャーの行動は迅速だった。

そして抱き抱えられてから言い出す事も出来ず、こうしてリンディは部屋まで俗に言うお姫様抱っこで運ばれてしまうのだった……

高町家　道場。そこでセイバーは久しぶりにシグナムと手合わせしていた。だが、その動きがどこか鈍いようにセイバーは感じていた。迷っている。そんな印象を受けるような剣閃。その理由がはやてにあるのを知るセイバーは、ただ何も言わずその剣を受け続けた。

やがて、シグナムが距離を取るとどこか苦笑しながら尋ねた。

「聞かぬのだな」

「聞いてもいいのでしたら聞きます。が、答えてもいいのですか？」

そのあっさりとした言葉にシグナムは唖然。そして、やや間を置いてから笑い出す。それをただ見つめ優しく微笑むセイバー。やがて笑っていたシグナムが再び木刀を握り直し、セイバーへ視線を向

けた。
　そこには、先程までの迷いなどを感じさせない姿があった。それを見てセイバーは悟る。吹っ切れたのだろうと。何を迷っていたのか知らないが、自分自身で片を付けたのだろう。そう思った。

　セイバーは知らない。シグナムが笑った理由。それは迷いを吹っ切ったからではない。いや、そもそもシグナムは迷ってなどいなかった。ただ、こうしてたまの休みを使ってしていた手合わせを楽しめなくなっていた。それがシグナムとしては悲しく、そして辛い事だった。
　更にはやての事を考え、すぐにでも蒐集に行くべきではないかとも考えていた。それらが彼女の剣閃を鈍らせていたのだ。それをセイバーの言葉で思い直したのだ。考えても悩んでも仕方ない。教える事は出来ないし、相談する事も出来ない。なら、考えるだけ無駄だと、そう結論を出したのだ。

「……今日はこの一本で終わりにしましょう」

「……そうか」

（気付いても黙って待つ、か。下手に問い詰められるよりも辛いな……。だが、その思い無駄にはしない。必ずや、主を……っ！）

　セイバーの提案の真意を感じ取り、シグナムは感謝の思いを込めて強く床を蹴る。そして打ち込まれる一撃をセイバーも敢えて受ける。そして、そのまま視線を交差させ、どちらともなく笑みを見せる。
　これが自分達の本来の打ち合い。そう感じたからこその笑み。嬉しさと喜びを表情に出し、二人は距離を取り、再び睨み合う。最早シグナムに鈍さはなく、セイバーに配慮はない。ならば、ここから

が短くも長い試合の始まりだと二人は思った。

シグナムの袈裟斬りを手にした木刀で弾くように振り上げるセイバー。それでやや体勢を崩すも、即座に立て直しセイバーの斬撃を防ぐシグナム。そこからセイバーを軽く押し込むように体重を掛けていく。それにセイバーも対抗するが、体格差のためかやや分が悪いようにも見える。

だが、それをそのまま信じるシグナムではない。何度もセイバーには敗北を喫しているのだ。この状況は一時的な物でしかない。そう、これが本当に真実なら、彼女は何度となく勝利を掴んでいるだろう。

「いつもよりも気合が入っていますね……っ」

「そうかもしれん……なっ！」

直感が告げた警告を信じ、シグナムはセイバーを弾き飛ばすように力を加えた。それと同時にシグナムは追い打ちをかけるべく打ち込む。それを見てセイバーは……笑った。

振り下ろされる木刀。それを見てセイバーは確かに笑っていた。その理由をシグナムが察した時には、もう遅かった。シグナムの視線が捉えたもの。それは、セイバーの木刀の動き。そう、それは振り下ろされる一撃を完全に狙ったもの。

そして、それが何を考えている行動かを悟り、シグナムも笑った。

静寂が道場内に訪れる。そして落ちてくる木刀の音がそれを破る。シグナムの手には何もなく、セイバーの手にした木刀が振りぬかれたままで止められている。

あの瞬間、セイバーは木刀で木刀を巻き取ったのだ。かなりの技術がいるその行動に気付いたシグナムだったが、セイバーがしくじ

る可能性に賭け、そのまま打ち込んだのだ。あの笑みは賭けに出たものだった。

「……さすが、だな」

「いえ、本当は少し不安でした」

「これでまた黒星が増えてしまったな」

「ですが、本当に白星を取らねばならない時、貴方はきっと負けないでしょう」

「そうだな。訓練や試合の敗北は糧に出来るが、実戦では中々そうもいかん」

そう言ってシグナムは笑う。セイバーはそれに優しそうな表情を見せるも、道場を片付けるために動き出す。そして、二人は道場を掃除し、そのまま別れた。シグナムは町外れの高台へ、セイバーは高町家の中へと。

その際、セイバーはシグナムにもシャマルに告げた言葉をかけた。それにシグナムは小さく笑みを見せ、頷くのだった……

割り当て箇所の掃除を終えたライダーは、次の仕事を片付けるべく動き出す。出来るだけ早く片付け、昼間の蒐集も手伝わないと。そう考えているからだ。昨夜の蒐集時、アーチャーから聞かされた話。プレシアとリンディからの蒐集でかなり頁を稼げるとはいえ、出来るだけ魔法生物からの蒐集もしておくに越した事はないというのが、全員の共通見解だった。

（今日はアサシンも来てくれるそうですし、シグナムとザフィーラが来てくれれば二組で行動出来ますね）

いつも庭仕事をしている小次郎は、毎回ではないが早めに仕事を終える事も出来る。そのため、今日は昼間も参加すると早朝に告げていたのだ。

そんな事を考え、ライダーが厨房を通りかかった時だった。そこにはノエルとファリン、それにイレインがいたのだが、どこかノエル達の表情が暗い。その理由を、ライダーは即座に気付き小さくため息を吐いた。

そう、アーチャーが来ないからだ。はやての現状を把握してからも、アーチャーは料理教室を続けていたのだが、今日はさすがに休むと言ってきたのだ。その理由を知っているライダーとしては無理もないと思うしかない。

「どうしたのですか？」

「……ライダーか。いや、ノエル達がアーチャーが来ないせいで落ち込んでて」

ライダーにやや呆れた表情で答えるイレイン。それを聞いてファリンが泣きそうな顔でこう告げた。

「当然じゃないですか。アーチャーさんが料理教室を休むの、これが二回目なんですよ」

「……私の唯一の楽しみが……」

片や泣きそうなファリンと片や落ち込むノエル。それを見て、ライダーは何か良い案はないかと考える。イレインはファリンの言葉に、まだ二回目だろと返し、もう二回目なんですと反論されていた。

そんな二人を他所に、ノエルは黙々と調理器具を磨いていく。それはもう機械のように正確で丁寧な作業だ。メイド姿の女性が四人もいて、穏やかな雰囲気を漂わせるのがライダー一人だけという妙な雰囲気。

「……なら、今日は自己鍛錬と考えて、アーチャーを唸らせる料理を作れるように練習しては？」

その発言に、ノエルの手が止まる。同時にイレインと言い合いをしていたファリンも動きを止めた。それに少し驚くイレインだったが、それに構わずノエルとファリンは、先程までの雰囲気が嘘のようにイキイキとした表情になった。

そして、そこからキビキビと動き出す二人を見て、ライダーは苦笑しイレインは呆然。そんなイレインにライダーは小さく告げた。これが恋する女性というものだと。それにイレインが納得したように頷いて、二人へ視線を戻す。

「恋……かぁ」

その呟きには、自分の知らない事への憧れにも近い響きがあった……

スーパーで買い物をするフェイトとアルフ。そのカゴの中には、様々な食品や日用品が入っている。やや野菜等に比べ、肉類が多いのはアルフとランサーのせいである事は間違いない。

そして支払いを終えたフェイト達だったが、まだフェイトが何かを眺めていた。そう、子供が好きな売店だ。団子やお好み焼きなどが売られている場所である。今もどれを買おうか真剣に考えている。

そんなフェイトを見て、アルフは少し苦笑い。フェイトとこの店の出会いはつい最近。学校に行くようになり、なのは達と寄ったのが始まりだった。

「……お団子を人数分……でも、アリシアははやての家だから四本かな？」

初めて食べた団子の味を、フェイトはこう評した。

――――ミッドにはない味だ……

和菓子の類は、ミッドにはない。探せばどこかにあるかもしれないが、そもそも地球は管理外。しかも、そこの島国の料理や味などは、様々な次元世界と関わるミッドでは少数の少数。そのため、フェイトはいたくこの日本の味を気に入っていた。

リニスも少しずつではあるが日本食を覚え始めていて、たまにテスタロッサ家の食卓にも上る事がある。どうもアーチャーに教わっているようで、代わりにミッドの料理などを教えているらしい。

「フェイト～、そろそろ帰ろうよ。お肉悪くなっちゃうよ～」

「あ、そうだね。おじさん、お団子四本ください」

「はいよっ！」

フェイトの声に店員は威勢良く声を返すと、手早く団子を五本包む。それを見てフェイトは軽く慌てた。自分は四本と言ったのに一

本多く入れられたからだ。だが、それを指摘しようとした時、店員が笑顔でこう言った。

「お嬢ちゃんが美人さんだから一本オマケだよ」

「えっ？　い、いいの……？」

「ああ。これからもご贔屓に頼むな」

「う、うん。また来ます」

そう言って代金を支払い、団子を受け取るフェイト。そして、手を振って歩き出す。そのやり取りを見ていたアルフがぽつりと呟いた。あの親父、フェイトの性格良く分かってるな、と。

そう、これからフェイトは買い物へ行く度に、本当にご贔屓にするようになるのだ。その律儀さは、言った店員自身も驚く程に。フェイトの売店通いは、彼女がとある事情で海鳴を離れるまで続くのだった……

静かに響く文字を書く音。それを出しているのははやてとアリシアだ。シャマルは今日行けば休みと言って出かけて行ったし、シグナムはセイバーと手合わせをしに行ったので、昼過ぎまで帰らないだろうとはやては考えている。

ザフィーラとヴィータは散歩と買い物。リインはアーチャーが出かけるのについて行った。その理由は、リンディ達と夜天の魔導書についての相談をするためとはやては言われた。安全だとしても、放置しておく訳にはいかない物だからと。

「静かだね～」

そんな事を思い出していたはやてに、アリシアはそう言った。それは寂しいとかではなく、感じたまま言ったのだろう。しかし、はやてにとってその言葉は、少し前までの自分達の状況を思い出すには、十分過ぎる意味を持っていた。

リインが現れる前、いつも家には誰かがいた。アリシアだけではない。ヴィータが、シグナムが、シャマルが、ザフィーラが、アーチャーがいた。リインが現れてからも同じような感じだったはずなのに。なのに、こうしてアリシアに言われるとそれがまるで嘘だったかのように感じてしまうのだ。

「……そやな。ちょう静かや」

「勉強するには持ってこいだね」

明るい笑顔で告げるアリシア。その微笑みにはやては一瞬呆気に取られるものの、それに負けないぐらいの笑顔を返す。

「その通りや。同じ学年は無理かもしれんけど、来年はアリシアちゃんも学校行けるようにしてみせる！」

「お～、はやて先生がやる気だ～」

「そやからビシビシ行くで。覚悟してな」

「は～い、りょ～かいです。……なんちゃって」

「なんちゃってとは何や、なんちゃってとは。真面目に行くで～！」

どこかふざけるようなはやての声にアリシアが笑う。その笑顔にはやてが笑う。そして、はやてはアリシアに心の中で感謝する。きっと、自分だけだったら、この状況に涙しただろう。きっと我慢出来ずに誰かに泣きついてしまっただろう。

そして、家族達の頑張りや気遣いを無駄にしてしまっただろうと。それをアリシアがいるだけでせずに済む。こうして何も知らないが、自分を心から笑顔にさせてくれる。たった二人。されど二人だ。

（最初はわたしとアーチャーの二人やったしな）

一人ではない。それだけでこんなにも違う。そう改めて感じ、はやてはある事を思い出す。それはフェイトと共に暮らした日々。あの時も良く二人でこうやって話したのだ。ここまでふざけ合う事はなかったが、こうして二人で笑い合う事は多かった。

姉妹揃って自分の心を支えてくれている。そうはやては思った。そしてその優しさについ涙が流れた。それに二人は同時に気付き、驚いた表情へ変わる。

「っ？！」

「あっ！　どうしたの？　目にゴミが入っちゃった？」

慌てて顔を背けるはやて。それにアリシアが心配そうに声を掛ける。それにはやては大丈夫と答えるしか出来ない。止めようと思っても止まらなかった。止めようと思えば思う程、フェイトとの、アリシアとの時間が思い出されるのだ。

なのは達とは違い、二人とは共に過ごした時間の密度が濃い。時間だけで言えばなのは達は多い。だが、フェイトは短期間とは言え共に暮らし、アリシアは海鳴に戻って来てからと言うもの、毎日のように顔を合わせていた。

「……はやて、嬉しい事でもあったの？」

「……な、何でそんな事聞くんや？」

「だって、はやての涙が止まらないみたいだから」

「？　それ、どういう意味？」

アリシアの言い出した言葉に疑問を感じ、はやてはそう尋ねた。
それにアリシアは小さく笑みを浮かべて答えた。悲しい事や辛い事で流す涙は我慢出来るけど、嬉しい事で流す涙は我慢出来ない。そうアリシアは聞いたのだ。

「……それ、誰が言っとった？」

「ママっ！」

その笑顔の答えにはやては納得。長年アリシアの目覚めを願っていたプレシア。当然哀しみや辛さは相当だっただろう。そんな彼女が言うという事は、あながち間違っていないのかもしれない。そう思えたからだ。
そして、同時にアリシアの可愛い勘違いにも感謝しようとして、思い直した。そう、何故ならアリシアの感じた事は……

（間違っとらん。わたしは嬉しかったんや。寂しいって思えんような思い出がある。こうして心配してくれる友達がおる）

だからこう言おう。本当なら出会う事が出来なかったはずの、幼い親友に。

――アリシアちゃん、心配してくれてほんまにおおきに。

――えへ、友達だもん。当然だよ～。

微笑み合う二人。もうはやての涙は止まっていた。そうして、二人は再び勉強を再開する。静かな、でも暖かい静寂。それを確かに感じ取り、はやては思う。自分は本当に幸せだと。その顔は、とても嬉しそうな笑顔だった……

――――――

A' s六話　中編

本局内　無限書庫。そこにユーノとなのはの姿があった。なのはは初めて見る光景と無重力に不思議そうな表情。対するユーノは、どこか複雑な表情。いつものように朝食を食べ、ユーノは無限書庫へ向かおうとしたのだが、それに待ったを掛ける者がいた。

そう、なのはだ。折角の休みにも関らず、ユーノが仕事をしに行く事に不満を抱いたのだ。色々と話をしたいし、一緒に出かけたいとなのはに言われ、ユーノは内心嬉しかったのだが、断腸の思いでそれを断った。

（はやてやなのはの笑顔のために、僕は出来る事を精一杯やるんだ！）

そう強く思い、ユーノはなのはへ出来る内に無限書庫の片付けをしたいと告げる。それになのはは残念そうに肩を落としたのだが、次の瞬間何かを閃いたようにこう言った。

――じゃあ、私もお手伝いするよ！

こうして、なのはを連れてユーノは無限書庫へと来ていたのだった。検索と同時に整理を開始。なのはへは、ユーノは指示した場所へ本を戻してもらう事のみをやってもらう。始めは無重力に戸惑うなのはだったが、すぐに順応して楽しそうに動いていた。

そんななのはを見てユーノは微笑むも、すぐにそれを消して検索に意識を集中する。その笑顔を守るために、自分がやるべき事をと。そんな真剣なユーノの横顔を見て、なのはは呟く。

「……やっぱり、ユーノ君変わったな」

以前であれば、もっと自分に話しかけ、楽しく作業をしてくれたとなのははは思う。それだけ、ユーノが大人になってしまったという事だろうかと考え、それを否定する。きっと、仕事用に意識を切り替えているからだ。そう結論付け、なのははは呟いた。

――今のユーノ君も好きだけど、いつものユーノ君の方が好きだな……

それはどこか寂びしくもあり、嬉しくもある。そんな響きを宿していた……

完成、迫る　中編

リインに連れて来られたランサーは、アーチャーに言われるままリンディの部屋にルーンを刻む。それは、かつてプレシアを延命させた太陽のルーン。そう、少しでも早く回復するようにアーチャーはルーンを使う事を思いついたのだ。

「すまないな」

「……ったく、まあいいけどよ」

内心、プレシアにも同じ事を帰ったらしておくかと考えるランサー。それを知らずアーチャーとリインは黙ってその作業を眺め、リンディの様子を窺う。そのルーンの力が、リンディの体を癒してい

く。劇的にではないが、それでも治療魔法とは違う暖かさを感じ、リンディは安らいだような息を吐く。それに三人が笑みを見せ、アーチャーは立ち上がった。

「では、これで失礼する。……ゆっくり休んでくれ」

「ええ。……それとアーチャーさん」

その声に立ち去ろうとしていたアーチャーが振り向いた。ランサーとリインも同じようにリンディへ視線を向けている。それをしっかり見据えながら、リンディは告げた。

最近局内で、無人世界の生物が大人しくなっていると報告が出始めている。今はまだ調査の動きはないが、下手をすればそこから闇の書に勘付かれてしまうと。

それにアーチャーは苦い顔。管理外世界でも、同様の事が言われる可能性もある。そう考えたからだ。リンディの話では、無人世界は定期巡回をしているため、それが少し多くなるだろうと言った。

そのため、今後は蒐集を出来る限り控えた方がいいとも告げた。それに三人が揃って深刻な表情を浮かべる。やっと残りが百を切り、終わりが見えてきたのだから。

「……そうか」

「アーチャー、何か手はねえか」

アーチャーの答えが、どこか諦めたような声にも聞こえたため、リインの表情が暗くなってしまった。ランサーはそれを払拭するために問いかけた。きっと、何か手を思いついてくれるだろうとそう信じて。だが、アーチャーが返した返事は、それを裏切った。

「ないな」

「んだと？」

その答えにランサーが眉を顰めた。リインはやや納得し、リンディは理解しているのか黙っている。ランサーの声にアーチャーは苦い表情で答えた。

「言ったままだ。現状ではこの件に対して打てる手がない。リンディから情報を得て、下手にその巡回時間を外して動いてみろ。それが何かのキッカケで当日ずれたり、また変更されたらどうする。気付かれれば、元も子もない」

そして、従来通りの蒐集が危険なのは、今言われた通りだ。そうアーチャーは悔しそうに締め括った。アーチャーの言い出した事は確かに一理あるものだった。リンディもその可能性を考えたからこそ、口出ししなかったのだから。ランサーもリインもその内容には、頷くしかない。もし、それが現実になれば、事はもう闇の書事件だけで留まらない可能性もある。

管理局の内部情報を教え、蒐集活動を支援している者がいる。そう考える者が出ないとも限らない。そうなったら、とてもではないがはやてを助けられたとしても、その後が色々と面倒になる。

「……そうだな。蒐集に協力してくれただけで感謝し切れないのだ。これ以上迷惑を掛ける訳にはいかない」

リインはそう納得し、リンディへ向き直ってもう一度頭を下げた。感謝する。そして、巻き込んでしまって本当にすまないと。それにリンディは小さく笑みを浮かべ、首を左右に振る。

それは、全てを終わらせてから聞かせてもらいたい。そうリンディは告げた。それにリインは意外な表情を見せるが、はっきりと頷いて見せた。そして、三人はリンディへ体を労わるように告げ、去って行った。

誰もいなくなった部屋に一人、リンディは残された。その脳裏によぎるのは、リインの言葉。巻き込んでしまった。その言葉を言った時のリインを見て、リンディは気付いたのだ。

リインは今回の事を言っているだけではないと。あの言葉は、クライドを失った事件にも言及していた。だからこそ、リンディはああ言った。全てが終わった時に聞かせて欲しいと。

（悪いのはリインさんや守護騎士達でもない。彼らを人として扱わなかった周囲かもしれないわね……）

はやて達との触れ合いで変化した彼らを見て、接したリンディとしてはそう思うのだ。優しく、思いやりのある五人。どうして、彼らを道具としか見る事が出来なかったのかと。

残り百を切った蒐集。それを成す為に、アーチャー達はどうするのだろう。そんな事を考え、リンディは目を閉じる。今は少しでも体を休めよう。そう考えて……

その頃、クロノとエイミィは、なのはが無限書庫にいる事に驚いていた。しかも、なのはは書庫内の整理をしている。一方のユーノは、そのなのはへ指示を出しながら検索を続けている。そんな唖然とする二人になのはが気付き、手を振った。

「あ、クロノ君とエイミィさんだ。二人も調べ物ですか？」

「あ、いや……」

「なのはちゃんはどうしてここに？」

エイミィの問いかけに、なのはは朝のやり取りを話した。それを聞いて二人は納得。ユーノは拒否する事もせず、ここに連れて来てしまったのだろうと。そして、それは無理もないと思ったのだ。

二人はユーノがはやての事を知らないと思っている。だからなのはを連れて来る事をそこまで危険視していないと考えているのだろうと。だが、ユーノはなのはを連れて来る事を本当は拒否したかった。でも、それをするには明確な理由が必要になる。

だから、ユーノはなのはを連れて来たのだ。そして、整理ばかりさせているのは、なのはが退屈しないようにとの配慮から。そんな事を知らない二人は、ユーノへ申し訳なさそうに声を掛けた。

「……そう、次の任務が」

「ああ。それで準備に追われるからしばらく手伝えない」

「ゴメンね。アリアやロッテも手伝ってくれるらしいから、すぐ終わらせられるとは思うんだけど」

リンディから告げられた任務に備え、色々と準備をする事になった二人。そして、同じくリーゼ姉妹もそれに協力する事により、資料探しを手伝えないらしい。そう聞いて、ユーノは笑みを浮かべてこう言った。

もう粗方資料は出尽くしたし、調べる物もないと思う。あったとしても自分一人で十分だからと、そう言い切って。そして、後は、自分の仕事だと。そう力強く二人に告げた。

「ユーノ君、これは～？」

「あ、それはね……」

なのはの声に反応し、ユーノはその傍へ向かう。そんなユーノの背中を見つめ、二人は笑みを浮かべて言い合う。

――まったく、何が後は自分の仕事だ……

――いいじゃん。男の子してるね、ユーノ君も。

そう言って二人はなのは達へ声を掛けて書庫を出て行く。もう自分達が手を出せる事はない。そう思ったから。だが正確には、それはエイミィだけ。クロノは知っているのだ。蒐集が完了する事に備え、リンディとグレアムが話し合って決めたある事を。そのため、密かにグレアムがアースラへの仕事に短時間で終わらせる事の出来る物をあてがったのだ。

エイミィはまだ知らないが、きっとその時が近付けばリンディから教えられるはず。そこまで考え、クロノはエイミィへ告げた。

「準備を済ませて、万全の体制にするぞ」

「オッケ～。それで早く仕事片付けて、はやてちゃん達のために……だね」

そう言って歩いていく二人。その隣り合う距離は、以前に比べて明らかに狭まっていた……

バニングス家の庭。いつものように手入れをしている小次郎の姿がある。その後ろでは、アリサと美由希が微妙な空気を出していた。

「小次郎は、いつも夕方近くまでああしてるの」

「らしいね。でも、あたしと稽古するから、今日は昼ぐらいには終わると思うよ」

「そうなんだ。じゃ、お昼を……」

「大丈夫。あたしと小次郎さんの分は持ってきたから。もし良かったらアリサちゃんもどう？」

アリサの言葉を遮って、美由希はそう笑顔で告げた。それにアリサが一瞬だがムッとした顔をする。だが、それもすぐに消して何でもなさそうに問いかけた。それだけじゃ足らないだろうと。それに美由希は微笑んで十分だと応じた。

そう、夏休みが終わった後、美由希は手伝いのない休日にこうして小次郎の元を訪れていた。勿論、おにぎり持参で。アリサはそれを知らなかったのだが、今日は特に約束等も無かったため、こうして小次郎の仕事でも眺めていようとしたため、出会ったという訳だった。

そうして、現状に至るのだ。美由希が平然とやって来て、小次郎と親しげに言葉を交わす。その内容は分からないが、やたらと二人が楽しそうなのがアリサとしては面白くなかった。

なので、こうして美由希をテーブルに呼び、色々とアリサしか知らない小次郎を自慢しようとしていたのだが、逆にアリサが自慢される形になっていた。

「洋食とかも悪くないけど、やっぱり日本の味が一番だって」

「ぐぬぬ……で、でも小次郎はコンソメが好きなのよ。アタシの家のね！」

「そうなんだ。お味噌汁とどっちが好きか知ってる？」

「えっ？　ううん。知らないけど……」

「そっか。じゃ、後で聞いてみるよ。ありがと、アリサちゃん」

だが、アリサが思っているような感覚は美由希にはない。今も心からの笑顔を浮かべてそう答えた。自慢しているのではなく、互いの情報を交換している。そう思っていたのだ。故に、今のアリサの発言も、美由希にとっては嬉しい話。小次郎は基本好みを言わない。そのため、美由希としては料理を覚えるとしても、何から覚えればいいのか判断出来なかったりするのだ。

（何故か恭ちゃんやセイバーには止められるんだけど……）

たまに料理をしようとキッチンへ立つと、その二人が全力を持って阻止しに来るのだ。原因は言うまでもなく美由希の腕。味付け等に始まる料理に関する全てが壊滅的なのだ。唯一おにぎりだけは失敗せず、食べられる物となっている。

余談だが、一度味噌汁を作った際は小次郎がいなかったせいなのか恐ろしい物が出来上がった。そのため、美由希は現在無断で料理をする事は完全に禁止されている。

そんな大人の対応をする美由希に対し、アリサは子供な反応しか

返せない。今もにこにこと笑顔を浮かべる美由希を見て、何とか自分の方が小次郎を知っているんだと分からせようとしていた。

アリサが知っている小次郎との思い出。それは決して少なくない。だが、同時に美由希しか知らない小次郎の思い出も存在する。そして、その質が完全に違うとすれば、やはり本人達の心の有り方だっただろう。

（何か……何か無かったかしら。アタシだけが知ってる小次郎……）

初めて出会った際の事や初めての食事。現代の事を教えていた頃など二人だけの時間がアリサの中に甦る。そして、最後に思い出すのはやはりあの記憶。自分が小次郎を意識したキッカケ。

翠屋に初めて連れて行った日の事。自分では引き出せなかった小次郎の嬉しそうな表情。それがアリサの心を乱す。あれからもう二年が経つ。それでも、まだアリサはあの顔を自分の力で見た事が無かった。

アリサがそんな事を思い出している間、美由希はその顔を眺めていた。西洋系の整った顔。今は歳相応の可愛いだが、これが後数年もすれば綺麗に変わるのは間違いないと美由希は思う。

小次郎の好みは分からないが、もし東洋系より西洋系の方が好みだとすれば、アリサはうってつけの相手だろう。自分にはない要素を多く持っている点もプラスかもしれない。そんな風に考えていた。

（……って、あたし何で小学生相手にそこまで考えるんだろ。……やっぱ、自分に自信ないのかなぁ？）

アリサは九歳。美由希は十七歳。どう考えても自分の方が小次郎に女性として見られている。そう考えれば、下手にアリサと張り合っても仕方ない。ここだけの話、美由希は小次郎がアリサを妹のよ

うにしか見ていないと考えている。
それをアリサに言うつもりはないが、どことなく昔の自分に似ているのだ。そう、恭也に対し淡い恋をしていた頃の自分と。そう考えると、アリサを美由希はどこかで応援したくなる。だが、それはやはり出来ない。自分もやっと初めて心から好きだと思えた相手なのだから。でも、と美由希はある事を考えた。

「……ね、アリサちゃん」

「何ですか」

「あたし達、仲良く出来ない？」

突然の美由希の言葉にアリサは呆気に取られる。しかし、すぐにその意味を理解して問い返す。

「どういう事です？」

「そうだね……二人で喧嘩するみたいに取り合うんじゃなくて、一緒に支え合っていこって事」

美由希は言った。小次郎はライダーも言った通り、女性そのものにさして興味がなさそうだと。それをまず二人で興味を持たせる所まで持っていこうと、そう言った。それにアリサもやや考え、納得した。

そして、アリサは名案とばかりにこう言った。小次郎が自分達を意識するようになった後も、二人で仲良くして小次郎を困らせようと。そう、それはあの日一人誓った小次郎への小さな復讐。絶対にお返ししてやる。それをする絶好の機会だと考えたのだ。

「……どうです？」

「う～ん……小次郎さんがそれで悩めばいいけど」

「悩ませるんです。あの時代錯誤侍、いつも鋭い癖にこういう時だけ鈍いんだから……」

アリサの言葉に美由希も同意するように頷いた。そこから始まる美由希の小次郎鈍感話。それを聞いて、アリサも小次郎の言ってきた迷言話をしていく。それに互いに笑ったり、時に呆れたりしながら二人は話す。

後ろから聞こえてきた喧騒に、小次郎は手を止め振り向く。生憎内容までは聞き取れなかったが、その楽しそうな光景を脚立の上から眺め、一言呟いた。

「美由希殿もありさも楽しそうで何よりよ」

まさか自分の事で盛り上がっているとは知らず、ノンキに小次郎は再び植木の手入れを開始する。その顔は、とても優しい微笑みが浮かんでいるのだった……

高台へ向かうライダー。すると、持っている携帯が震動する。それに気付き、携帯をポケットから取り出すが、相手の名を見て不思議がる。呼び出し相手はアーチャーだった。どこか変な感じを受けるも、ライダーは通話ボタンを押した。

「どうしました？」

「ライダー。すまないが、高台に行ったら誰でもいい。こう伝えてくれ……」

その後に告げられた言葉に、ライダーは耳を疑った。

――――蒐集行為はもうするな、と。

――――――

A-s六話　後編

高台に到着したライダーは、そこにいたシグナムとザフィーラ、ヴィータへ挨拶をした。自分が来る事を全員が知っていたため、待っていてくれたらしい。それが今回は功を奏したと思い、ライダーは先程アーチャーから言われた言葉を告げる。

蒐集は一先ず中止。それを告げた時、三人に驚きが生まれた。それも無理はないと思い、ライダーは続けた。アーチャーから告げられた理由を。

「……そうか。局が動き出したか」

「ええ。今はまだ闇の書絡みの蒐集とは知らないようですが、今後は動かない方がいいと」

ライダーの言葉にザフィーラは頷いた。もし、管理局に蒐集行為が露見すれば、リンディ達の立場がかなり危うい。本当ならば現段階でも管理局員としては問題行動だ。

それをしているのは、管理局とサーヴァント達との衝突を避けるためと、はやての事を思ってくれているからこそだ。その温情を知る故に、シグナム達もアーチャーの指示の意味は理解した。

「でもよ……どうすんだ」

「ライダー、アーチャーはどう言っていた？」

「……詳しい事は言ってくれませんでしたが、残り頁を考えれば、もう魔法生物からは蒐集しなくても済むかもしれないと」

その発言に三人が驚く。残り頁は百を切ったとはいえ、まだかなりの量だ。それを魔法生物から蒐集せず、どう埋めるのか。それがまったく想像がつかなかったのだ。

ライダーもどこか疑っているのか不安そうな表情。だが、それを見てザフィーラが全員へ向けて告げた。アーチャーは根拠も無しに期待を持たせるような事は言わないだろうと。きっと、何か手がある。そう言い切ったのだ。

それにシグナムもヴィータも納得し、それを見てライダーは小さく笑う。そう、アーチャーに対する信頼度が高い事が見えたからだ。

そして、とりあえず今日はアーチャーの考えを聞く事で纏まり、解散となったのだが、そこへ小次郎が現れた。どうも美由希との約束を忘れていたらしく、断りを入れに来たらしい。

それに苦笑するライダー達。そして、事情を話すと小次郎はシグナムとも試合をしたいと告げたため、万が一を考えヴィータが結界を張る事になり、共に行く事になった。

そのやり取りに苦笑しながらも、ライダーとザフィーラは程々にと告げて早々に去った。それを見送るヴィータ達。だが、既に小次郎とシグナムは臨戦態勢だった。

（あ～あ、あたしも早く帰ってはやて達と遊びて～）

結界を張った瞬間、嬉々としてぶつかり始める二人を想像し、ヴィータは心からそう思うのだった……

「それにしてもヴィータは災難ですね」

「仕方あるまい。元々好戦的な二人だ。ああいう形で発散したくな

るのも分からない訳ではない」

共に歩きながらライダーとザフィーラは苦笑する。蒐集で使おうと思っていた力を試合で使う。小次郎とシグナムがその発想に至るのは、分かりきった事だ。そうザフィーラは言った。

ライダーもその意見に同意し、その足を止めた。月村家に戻るのなら、ここでザフィーラとは別れるからだ。ザフィーラはわざわざ済まなかったと告げ、それに構わないとライダーは返す。そして、互いに小さく笑みを浮かべて別れを告げて歩き出す。

（礼を言う必要はないと言うのに……本当に律儀ですね。アーチャーが素直ならああでしょうか？　ともあれ、また問題とは……）

（あの顔はまた律儀とでも思ったか。……しかし、蒐集をどうするのか。それをアーチャーから説明してもらわねばな……）

互いの事を考えるも、すぐに蒐集の事へと考えを移す二人。それぞれの家路を歩きながら、それに考えを巡らせるのだった……

完成、迫る　後編

アーチャーとリインは、ランサーをテスタロッサ家に送ってから、二人で八束神社に来ていた。はやてには電話で連絡し、昼食はいらないと告げた。どこかそれにはやては疑問を抱いたようだったが、月村家での料理教室ついでにリインと食べてくると言うと、納得したように切った。

そして、現在管理局本局へ行くためにロッテを待っている状態だ。
リインは管理局に行く事にやや躊躇したが、アーチャーがその理由を告げると表情が変わった。

「……ほ、本当なのか。その、プレシアレベルの魔導師から蒐集出来るというのは……」

「ああ。ただ、君に言っておく事がある。これから会う相手の事を、まだはやてには話さないで欲しい」

「……何故だ」

どこか不信感を漂わせるリインに、アーチャーは静かに話し出す。
これから会う相手の主人は、はやての支援者であるギル・グレアムだと。それを聞いてリインの顔に驚きが生まれる。だがそれを無視してアーチャーは続ける。
グレアムは管理局員で、はやてが闇の書の主である事を知り、それを何とかするべく動いていた。そして、そのための方法として封印を考えていたのだが、自分がルールブレイカーという最終手段を持っているため、今はそれを保険に、それ以外の方法考案に協力してくれていると。
自分がグレアムの事を局員だと知ったのは偶然で、家に毎朝来るみーちゃんが使い魔だと分かったからだ。故にその線でグレアムに辿り着いた。そうアーチャーは告げた。

それにリインは驚きを隠せないままではあったが、頷いた。グレアムが完成後の事を考慮し、封印を考えたのは当然とも言える判断だったからだ。だが、何故それをはやてに教えてはいけないのか。
そうリインは尋ねた。グレアムははやてを心配し、行動していたと今聞く限りでは思えたからだ。なら、むしろ教えてやるべきではな

いかと。

「……本人がまだそれを拒んでいる。本人がはやてに伝える気になるまで待ってやって欲しい」

「……分かった。何か事情があるのだな。……シグナム達にも言わぬ方が良さそうか？」

「そうしてくれると助かる」

アーチャーがどこか躊躇うように話すのを見て、リインはそう言った。それにアーチャーは申し訳なさそうに答えた。そして、訪れる沈黙。だが、それを待っていたか、ロッテがそこへ顔を見せた。その表情はどこか複雑なものだった。

リインはその容姿から、目の前の相手がアーチャーの言っていた使い魔だと判断した。そして、それをロッテも感じ取り、苦笑して口を開いた。

「こうして会うのは初めて、だね」

「ああ。知っているだろうが、私はリインフォースと言う」

「リーゼロッテ。今話してたギル・グレアムの使い魔」

互いにどこか気まずそうな表情で自己紹介する二人。それを見てアーチャーが頭を下げた。リインが来る事を事前に話す事が出来なくて済まないと。だが、それにロッテは小さく首を振った。気にしなくていいと。

そう、ロッテはリインがいた時点で、アーチャーが何をグレアムに頼むのか理解していた。だからこそ、謝って欲しくなかった。謝

るとすれば、それはむしろ自分達の方だから。そう考えていたのだ。

（あんたは、お父様を信じてくれた。自分が真実を話すんじゃなく、お父様に話す機会を残してくれた。大切な家族相手に小さい嘘まで吐いて……）

肝心な部分をアーチャーはぼやかして話した。それは、はやてごとの完全封印と支援の内容。そう、グレアムが元々支援していて偶然闇の書について知ったように彼は話したのだ。それをロッテは聞いていた。

それは、現状を悪化させないためなのだろう。だが、それだけではないとロッテは知っている。アーチャーは、グレアムが言った考えさせて欲しいとの言葉をちゃんと覚えていた。だからこそ、自分が肝心な箇所を話す訳にはいかないと配慮してくれたのだ。

ロッテはアーチャーに顔を上げるように告げ、二人を本局はグレアムの部屋へ案内するべく、転送魔法を準備する。それを見つめ、リインはロッテから何故か喜びを感じ取っていた。

そして、その原因がアーチャーだろうと気付いた。そう、ロッテは横目でアーチャーを見ていたからだ。そして、その視線がどこかある者と被り、リインは不思議に思う。それは……

（どこかシャマルに似ている気がする……。アーチャーを信じているのか、彼女も）

こうして二人はロッテの魔法により、グレアムの執務室へと案内された。そこで待っていたのはグレアムとアリア。二人はリインの姿を見て少し驚きを見せたものの、どこか納得したように頷いた。

「頼みがあるそうだな」

「ああ。貴方はかなりの魔導師と聞いた。だから……」

「蒐集をさせて欲しい、か。……残りはどれぐらいだね？」

言い辛そうに告げるアーチャーの声を遮り、グレアムは何でもないように問いかける。それにリインが苦しそうに告げた。九十四頁と。それにグレアムは頷き、アーチャーへと視線を戻した。

それが完成出来る保障はあるのか。そのどこか鋭い声にアーチャーは苦々しくではあったが、確かに頷いてみせた。それにリインは少し呆気に取られるが、状況を考え文句などは後回しにした。

だが、リインがそう尋ねるとアーチャーはこう返した。無人世界での蒐集をする手はないと言ったのだと。それにリインは少し呆気に取られるが、状況を考え文句などは後回しにした。

「……貴方から仮に四十頁蒐集出来れば、残りは五十四頁。こちらには二人で四十頁は稼げる存在がいる」

「それでも残り十四頁。それはどうする」

「……ユーノ・スクライアを知っているな」

その言葉にグレアムは頷き、告げた。確かに彼もそれなりの魔力を有しているが、それでも稼げて十がいいところではないかと。それにアーチャーはそうだとしてもとこう続けた。そうなれば残りは四頁。そこまで行けば、もう完成はいつでも出来ると。

それに全員が疑問を感じた。だが、グレアムだけは何かに気付いたのか感心したように呟いた。

「そうか。君はクロノ達と関係を築いていたな」

「お父様、それって!?」

「まさかクロノを!?　それは……」

グレアムの言葉にロッテとアリアが反応し、そう声を掛ける。それを聞いてリインは納得していた。確かにクロノなら残りも簡単に埋められる。そう思ったからだ。だが、アーチャーはそんな三人に対して、違うと言って首を横に振るとグレアムを見つめた。

それに気付き、グレアムは小さく頷くと三人に対して告げた。それだけならば並の魔導師でも何とか出来ると。それを聞いて、アーチャーも頷いた。戦力として期待出来るクロノをそんな時に弱体化する事は出来ない。ならば、残る相手は一人しかいない。

「そう、彼が考える最後の蒐集相手。それは……」

そこでアーチャーとグレアムの視線が交差する。

「「エイミィ・リミエッタだ」」

「これでどうです?」

「……よくあれだけの話からここまで考えますね」

本局内のマリエルが使っているデバイスルーム。そこでリニスは、マリエルから渡されたデータを見て感心していた。射撃型の魔導師。中距離や遠距離がメイン。それだけでマリエルは思いつくだけの強

化案を提示してくれたのだ。
　ベルカ式のカートリッジを組み込んだ物から、周囲の魔力を取り込み、攻撃や防御に転用する物など、他にも様々な案がある。だが、それら全てはあくまで考えられる案であり、決して実現可能とは限らない物もある。
　そういうマリエルの言葉を聞きながら、それらを見て色々と考えているリニス。そんな姿を見て、マリエルは感じていた疑問をぶつけた。

「リニスさん達は、どうしてそのなのはちゃんって子のデバイスを強化したいんですか？」

「え？」

「……私、おかしいかもしれないですけど、デバイスも一つの命だと考えてます。その子達を改造するのは、どこかで罪悪感も感じるんです」

　マリエルの言葉にリニスは無言で先を促す。それにマリエルは小さく笑って続けた。バルディッシュに関しては、本人も持ち主も望んだ事だから協力した。でも、今回は本人も持ち主も望んでいない。それをもし改造すると言うのなら、自分は黙っていない。
　リニス達がいる所に乗り込んででもそれを阻止する。それぐらいの気持ちを持っているからと、そう告げた。

　その言葉にリニスはまず謝った。自分もバルディッシュを作ったから、マリエルの気持ちは分かると。不快な思いをさせて済まなかった。その思いを込めてリニスは告げた。決して無断で改造するのではなく、本人達の意思があった時のためのものだからと。

「私もデバイスマイスターの端くれです。単なる道具として考える事は出来ません」

「……なら、教えてください。どうして、今、それが必要なのかを……」

マリエルの言葉にリニスは戸惑う。教えていいものか否かで言えば、間違いなく否だ。しかし、ここまで来て言わないのは、マリエルの気持ちに応える事にはならない。そうリニスは思い、必死に考えた。

何とかいい方法はないか。マリエルに真実を話す事無く、納得してもらえる答え。それをリニスは考えた。そして、意を決したように話し出した。

「なのはさんとレイジングハートを助けるためです」

「……どういう事ですか」

リニスはこう語った。フェイトとの模擬戦を見て、カートリッジの便利さは分かった。なのはもそれを感じていたらしい。だからなのはも、それを求める可能性がない訳ではない。でも、ミッド式デバイスとカートリッジシステムの組み合わせが、デバイス本体と体に与える影響はまだ未知数だ。それを考えると、なのはは特に負荷の多い集束魔法の使い手。それも、前回の模擬戦で見せた切り札的な魔法は、大人でもかなりの負担を感じるような魔力を放っていた。

それにカートリッジを併用したら、どうなるか不安なのだ。そのため、カートリッジを使わずに出来る強化案があれば、なのはをそちらへ興味を持ってくれるように誘導出来るかもしれない。そうリニスは言ったのだ。

それにマリエルも納得。確かにリニスの言っている事は理解出来たのだ。集束魔法はかなり負荷を生じる魔法。それを幼い体で多用しては危険性が大きい。更に、そもそも現状ではカートリッジ自体が体に負荷を与える事になる。となれば、確かに簡単にそれを組み込む訳にはいかない。

そうマリエルも考え、リニスへ笑みを見せた。そういう事なら、ちゃんとなのはに説明して理解を深めさせて欲しいと。それにリニスも笑顔で頷き、必ずと返した。

「にしても、その歳で集束魔法を使いこなすとは……」

「天性の才能です。それと、ご家族の支えに本人の努力ですね」

「……有頂天にはならない？」

「ええ。だからこそ、支えたくなるのです」

そう言って微笑むリニス。それにマリエルも頷いて大きく伸びをした。

「あ～、私も会ってみたいな。なのはちゃんとレイジングハートに」

「いつか連れて来ましょうか？」

「……じゃ、レティ提督には内緒で」

「……そうですね。軽く勧誘しそうですし」

そう言って二人は苦笑する。その後、少し話をしてリニスは自宅へ帰った。マリエルのデータ。それを元に、自分なりのアレンジや

考えを組み込んだデータを作るために。それに対するプレシアの意見も聞きたいと。いずれ来るだろう戦いに備え、フェイトだけでなく、なのはの支えになれるようにと。

出会いが、また一つ新しい力を生み出していく。それは、全て愛しき者達の笑顔を守るために……

無限書庫で検索をしていたユーノと、その指示で整理をしていたなのはだったが、ふとその視線が本の山に止まる。そう、どこか気になる物を見つけたのだ。それは、表紙がどことなく夜天の魔導書を思わせる物。

なのははそれを拾い上げ、ユーノへそれを見せる事にした。何故かそれが気になったからなのもある。それと、ユーノがさっきから探しているのは、夜天の魔導書を安全にするための方法らしい事を、なのはも気付いていたからだ。

「ユーノ君、これ何かな？」

「え？」

「ほら、表紙が夜天の魔導書に似てるよ」

「っ？！　なのは、それちょっと見せて！」

ユーノの切羽詰まった声になのははは驚くも、手にした本を持ってユーノの傍へ向かう。そして、手にした本を渡し、その内容を横から眺める。しかし、ミッド文字すら読めないなのはには、ベルカ文字で書かれたそれがまったく読めない。だが、ユーノはその表情を

驚きから喜びに変えていく。

それは、蒐集によって作られた魔法図鑑。そう、夜天の魔導書の原型ともいえる物だったのだ。ただ、それが夜天の魔導書と違うのは、管制人格や守護プログラムと言った物が何も組み込まれていない事。つまり、本当にただの図鑑だったのだ。

（これを元に夜天の魔導書は作られたんだ。もしくは、これを作った人が後世の魔法も蒐集して図鑑に出来るようにしたのかも……）

その証拠に、その背表紙には掠れた字でベルカ魔法図鑑と書かれていた。ユーノは逸る気持ちを抑えながら、検索を行なった。検索対象は、古代ベルカと魔法図鑑。そして、その結果見つかったのは……

「一冊だけ、だね」

「……でも、これがもしかしたら」

どこか残念そうなのはに、ユーノは興奮を隠しながらそう答えた。先程と違い、完全に夜天の魔導書と同じ表紙。だが、違うのは背表紙に何も書かれていない事。それに疑問を感じるユーノだったが、その中を見ようと表紙をめくる。そこには――。

「白紙……？」

「……だね」

何もない真っ白の頁だった。どこまでめくっても白紙のまま。最後の最後まで白紙が続き、結局何も書かれていなかったのだ。なのはもユーノもかなり気落ちして、その本を閉じる。だが、ユーノは

その表紙の文字をよく見て目を疑った。

そこには古代ベルカ文字でこう書いてあった。

”蒼天の魔導書”と……

――――――

A' s七話　前編

急速に埋まっていく頁。それを眺めるアーチャーにリーゼ姉妹。そして、すまなさそうな表情のリインがいた。グレアムは自身を襲う強烈な脱力感を感じながら、その光景を見つめていた。

やがてその勢いが消え、頁の動きが止まる。それを見てリインがアーチャーへ向かって小さく頷いた。それにアーチャー達の顔が真剣なものへ変わる。そう、予想通りの蒐集量だという合図だったからだ。

「……グレアム提督、協力感謝する。しばらくはゆっくり休んで欲しい」

「言われんでも……そうせざるを得んな」

「ぎりぎりまでと言われたが、ほんの少し加減をした。……すまない。貴方達に私は……」

リーゼ姉妹に支えられ辛そうな表情のグレアムに、リインはそう言って俯いた。リンディ達との関わり合いや話で、リインはグレアムの事も薄々ではあるが気付いていた。過去に自分のせいで辛い思いをさせた相手である事を。

だが、そんなリインにグレアムは一度深呼吸をすると、静かだが力ある声で語りかけた。

「闇の書……いや、リインフォースよ」

その呼び名にリインは顔を上げた。視線の先のグレアムの表情は、厳しくもどこか穏やかさが感じられるものだった。それにリインが

言葉を見つけられないままでいると、グレアムはこう告げた。
謝罪する必要はない。自分も同じように非道と言われる事をしようとしたのだ。だが、もしすまないと思うのなら、言葉ではなく行動で示して欲しい。そして、二度と自分のような思いをする者が出る事のないようにして欲しいと。

「……私が最後の闇の書の被害者で終わるように」

「「お父様……」」

その心からの言葉に、リーゼ姉妹は揃って驚きを見せる。リインはグレアムの非道という箇所に引っかかるものを感じた。だが、その最後の言葉には少し驚きを見せた。そして、確かに頷き、穏やかだが力強く言い切った。

「……その言葉を必ず現実にしてみせる」

それにグレアムは頷いてアーチャーへ視線を移す。それにアーチャーも頷きを返し、グレアムは今度こそ満足したように頷いた。アリアとロッテもそのリインの言葉に笑みさえ見せる。
そして、アーチャーとリインはそこから転送魔法で立ち去った。それを見届け、グレアムは自分を支える二人の娘へ話があると切り出した。それにやや不思議そうな顔をするアリアとロッテだったが、グレアムから告げられた内容に声を失った。

――――アースラの任務を手伝い、それが終わり次第リンディ提督に従って事に当たれ。八神はやての……命を助けるために。

無限書庫での作業を一時中断し、ユーノはなのはと共に高町家に戻っていた。その手には蒼天の魔導書が握られている。名前からして夜天の魔導書と関連があると思ったユーノは、リイン達へ見てもらうべく、そのまま八神家へ向かう。

なのはもついて行きたいと言ったので、共に転送魔法で八神家へ。ちゃんと玄関に転送させる辺りユーノの配慮が見える。そこで二人は声を掛け、了承を得てから中へ上がる。

「はやて、アーチャーさん達は！？」

「な、何や？　そんな慌てて……」

「ユーノ、落ち着こ？」

「はやてちゃんもアリシアちゃんも大ニュース大ニュースっ！　リインさんの悪い部分、何とか出来るかも！」

血相を変えて乗り込んできたユーノに、やや引き気味のはやて。アリシアは、いつもと同じ感じでそんなユーノに自分用のお茶を差し出す。それになのはも興奮気味で二人へ告げた。その発言に二人は揃って驚き、はやてはもう飛び掛らんとする勢いでなのは達へ問いかける。

「ほんまに？！」

「まだ可能性があるってだけ。でも、かなり高いかも」

「で、リインさん達に見てもらいたいんだけど……」

はやての言葉にユーノは真剣だが喜びを滲ませて答えた。なのはも笑顔を見せて、周囲を見渡す。だが、どこにもアーチャー達の姿がなかった。それにアリシアが残念そうに告げた。

アーチャー達は出かけていて、まだ帰ってきていない。だがザフィーラとヴィータの二人が買い物中で、お昼も食べずに行っているから、多分そろそろ帰ってくるはずだと。そして最後に、自分ははやてが残り物で簡単に作り、二人で食べたから平気だけどと笑った。

そんなアリシアの言葉になのはとユーノは苦笑。はやては「美味しかったな～」と笑い合っている。それになのはが自分もまだお昼を食べていない事を思い出し、やや困ったようにユーノを見た。ユーノはそれだけで何か分かったようで、小さく笑みを浮かべて頷いた。

そして、はやてにお昼を食べてからまた来ると告げた。それにはやてが必要ないと告げ、戻ってきたらそちらに行くように言っておくと返し、なのはとユーノは感謝して八神家を後にして家路を急いだ。

二人が出て行ったのを確認し、はやては急いで携帯を取り出した。呼び出すのは言うまでもなくアーチャー。数回のコールの後、アーチャーが出た。どうかしたかの言葉に、はやては静かにはっきりとなのは達が言っていた言葉を伝えた。

その瞬間、微かにアーチャーが息を呑んだのをはやては聞き逃さなかった。すぐに帰ると言ってアーチャーは電話を切った。ツーツーという音を聞きながら、はやては確信した。アーチャー達が動いていた理由は、やはりリインにあったのだと。

「はやて、アーチャーに掛けたの？　何て言ってた？」

「ん。すぐ帰るって」

「そっか。あ、どうせなら何か甘い物買ってきてもらえば……」

「ヴィータが買ってくるやろ」

「……アイスだけな気がする」

そう言って少しむくれるアリシア。それに苦笑し、はやては再びシャープペンを手に取った。それを見てアリシアも、同じようにシャープペンを手にし、問題集へと挑んでいく。

それを見つめてはやては小さく笑い、自分も残りの問題を片付けるべく手を動かしていく。だが、その心にはアーチャー達へのある決意が固まりつつあった……

「少し遅くなってしまったな」

「わりぃ。結構いい試合するからさ。少し見てたら遅くなった」

買い物袋を片手にやや急ぎ足なザフィーラ。それについていきながら、ヴィータはそう謝った。ちなみに初戦となった美由希対シグナムはかなり良い試合だったとヴィータは言った。また後で結界を解除しなければならないが、きっと夕方近くまでやっているだろうと告げ、ヴィータは呆れ顔。

そんな表情にザフィーラも苦笑し、頷いた。ザフィーラはあの後買い物をしていたのだが、そこへ息を切らしたヴィータが現れたの

だ。すぐに合流するつもりだったが、二人が中々魅せる戦いをするものだから。そうヴィータは何度も言っていた。

そんな風に会話しながら歩く二人。昼食をどうするかと話し合っていると、前方の曲がり角から真剣な表情のアーチャーとリインが急いで走って出てきた。そして、そのまま八神家へ向かっていく。それを見て、二人は互いの顔を見合わせた。何かあった。そう思うには十分な光景だったからだ。

「ザフィーラ！」

「分かっている！」

先程までの和やかさは消え、二人もアーチャー達を追って走り出す。それと同時にザフィーラがシグナムへ念話を送る。内容は、何か状況に変化があったようだと。それを聞いて、シグナムも小次郎との手合わせを切り上げ、八神家に戻る事にする。

こうして、シャマルを除く全員が八神家に集合する事になる……

バニングス家の庭で、小次郎は一人不完全燃焼といった表情を浮かべていた。美由希とシグナムの試合を眺め、気分が高揚してきたにも関らず、シグナムは急用が出来たと帰ってしまったからだ。

美由希との試合でも満足出来ない訳ではないが、やはり魔法を使うシグナムの方が色々とやっていて面白みがあるのも事実だった。そんな小次郎に美由希は少し不満顔。アリサは美由希の気持ちが分かるため、その横でうんうんと頷いていた。

「小次郎さん！」

「如何した？」

「一本……やりましょう」

目つきを普段以上に鋭くし、美由希は小次郎を睨む。その手に握られているのは紛れも無く本物の小太刀。美由希が小次郎の希望で持って来ている自分の物だ。それに小次郎が楽しそうに笑みを見せ、小さく頷くと木刀ではなく、物干し竿を構える。そう、結界内だからこその真剣での勝負。

一つ間違えれば命に関る死合。それを美由希は提示してきたのだ。だが、美由希にも小次郎にも相手の命を奪うつもりはない。これは、あくまで覚悟を示すもの。しかし、それでもアリサに見せる物ではないと小次郎は思った。

「ありさ、見ておらぬ……」

「嫌よ」

見るのを止めさせようとする小次郎の言葉を遮り、アリサはきっぱりと言い切った。その顔に浮かぶは少し恐怖を感じながらも、それを乗り越えようとするかの如き表情。それに小次郎は黙った。美由希もアリサの言葉にやや驚いていた。

アリサはゆっくりと告げた。殺し合いじゃないのなら平気だ。真剣は確かに怖いが、目を逸らす訳にはいかないと。何故ならば、それは……

「あんたと美由希さんを……疑う事になるじゃない！」

どちらかが傷付き、最悪死ぬ。そんな事はしないと二人の剣士の

腕を信じているから。そうアリサは言い切った。それに二人は一瞬呆気に取られるが、すぐに力強く頷いた。

「アリサちゃん、ありがとう。その信頼、応えるよ」

「うむ。しかと見ておれありさ。真の剣舞を見せてくれよう」

アリサの芯の強さを見せられ、更にその信頼を受けて応えぬ二人ではない。その目には先程よりも強い輝きと決意が見える。決して血を流す結果にはならない。そう自信を持って言えるだけの何かがそこにはあった。

真剣な眼差しで互いを見つめる二人。それをアリサは見つめ、両手でスカートの裾を強く握る。実を言えば、アリサは見ていたくなどない。でも、そこで目を逸らしたら、自分は小次郎や美由希のいる場所を永遠に見る事が出来ない気がしていたのだ。

剣士として小次郎の近くにはいられなくても、その戦いを、生き様を見つめる事は出来る。そのためのこれは第一歩。そう思い、アリサは一瞬たりとも見逃すかと目を見張る。

ジリジリと高まる緊張。小次郎は余裕が見えるが、美由希にはそれがない。だが、その様子は緊張に飲まれている訳ではなく、むしろどこかで喜んでいるようにもアリサには見えた。

（小次郎さんに認めてもらうために……あたしの全てをここにっ！）

（この気迫……美由希殿の本気が見れるか。……これは重畳よ）

（アタシに出来るのは、小次郎の戦いを見る事だけ。だけど、他の誰にもそれは負けない。いつか一つ一つの動きまで覚えてやるんだ

からっ！）

静まり返る結界内。互いにまだ動き出しはしない。だが、美由希が先に動いた。それに反応するように小次郎が動く。その動き、まさに阿吽の如く。美由希の神速を使っての連撃を小次郎の刃が正確に捉え、弾いていく。

本来であれば、御神は必勝が常。そのため卑怯と呼ばれる戦法さえ使い、確実に勝利を掴みにいく。だが、今の美由希は違う。小次郎の言った真の剣舞という言葉にアリサの信頼。それに応えるべく、正攻法だけで攻め立てていた。

それを小次郎も理解している。本来邪道と呼ぶような剣術ではあるが、それでも本来の相手を殺す物ではなく、純粋に剣技を尽くそうとしていた。

初めて見る真剣のせめぎ合い。飛び散る火花にアリサは不覚にも綺麗と思ってしまう。人を殺めるための道具。それを使い、こんな綺麗で華麗で儚い光景を作り出す二人。その事へ思い至り、アリサは素直に感動した。

力に善悪はない。そう小次郎はいつかアリサへ告げた。それがどんな話をしていた時かは、アリサには残念ながら思い出せない。でも、今の光景を見ているとそれが事実だと心から思えるのだ。

（誰かを殺したり傷付けたりする刃物。それがこんなにも凄い光景を作り出すなんて……）

舞い散る火花。煌く剣閃。舞うように動く美由希と小次郎。剣舞という意味を、アリサは心から理解していた。本当の剣士同士の戦いとは、まさに舞なのだと。無駄なく動き、刃を合わす。そこにあるのはただ一つ。

（（この勝負に勝つ！））

アリサと美由希の感じた思いは同じ。アリサは美由希の思いを汲み取り、美由希は自身の思いを浮かべる。相手の命になど興味はない。欲しいのは、ただ自分が相手に勝るという事実のみ。

単純故に邪念などなく、美由希は両手の小太刀を振るう。小次郎はそんな美由希の様子に軽く驚きさえ感じながら、楽しそうに刀を振るう。今まで美由希はどこかで小次郎には敵わないと思い、無意識に気持ちで引いている部分があった。だが、今回はそれがない。

（私に勝ちたいと、心から思ったか。……美由希殿もまた強くなったものよ）

微笑みさえ浮かべて小次郎は一度思いっきり剣撃を弾く。それに美由希も合わせて一度距離を取る。そして小次郎が構えるは、秘剣燕返し。それを見てアリサに驚きが生まれる。そう、それは自分と小次郎が出会った夜に見たものだったからだ。

一方の美由希はそれに頷き、同じく構えた。神速の長時間使用は危険。今も息が大分切れている。だが、まだ終われないと美由希は思った。自分に出来るか分からないが、それでも自分の全てをここで出し切ろうと。

（見ててください……小次郎さんっ！）

ただ美由希にあるのは無心。小次郎へ自分の全てを見せる。その思いだけが美由希を突き動かす。そして、今度は先に動いたのは小次郎だった。繰り出される三つの剣閃。それを美由希は……

「えっ……？」

「何と……」

アリサと小次郎二人の声が重なる。美由希はその剣閃をかわしたのだ。だが、次の動きがこない。美由希は小次郎の前に立ち、そのまま微動だにしなかった。

燕返し自体は、絶対に回避不可能ではない。セイバーも一度避けきった事がある事からも、それは事実。だが、今回美由希がかわせたのは、小次郎が仕留めるつもりがなかった事に加え、万一を想定しいつも以上に加減した事と、もう一つ美由希にしか辿り着けなかったある物が関係していた。

「……今、あたし……何を……？」

まったく覚えていない。小次郎の攻撃を見た瞬間、無我夢中で動いた。そして気がついたら小次郎の前で立ち尽くしていた。そう、美由希はこの時の事を語った。

「……美由希殿、お見事」

「小次郎さん……？」

この話を後で聞いた士郎が思い当たったのは、御神の秘奥義にも当たる”閃”だった。美由希はどうやって小次郎の燕返しを避けたか覚えておらず、またもう一度は出来ないと言っている事からも、彼女が閃に無意識で辿り着いたのではないか。そう結論を出した。

結局、美由希が小次郎に勝ち目を持てたのはこれ一度きり。美由希の”閃”はそれ以来一度として繰り出される事はなかった……

「本当にユーノはそう言っていたのか」
「そや。なのはちゃんとお昼を食べる言うとったから、家におる」
「……分かった。会いに行ってくる」
「ちょう待ち」
はやての話を聞き、アーチャーは頷いて再び出かけようとする。それにはやてが待ったを掛けた。それにアーチャーだけでなく、その場にいた全員がはやてを見つめる。はやては、それに対してはっきり告げた。
「今夜、ちょうみんなに話がある。晩御飯食べたら話すわ。ええな」
「了解した。ではリイン、行くぞ」
「ああ。主、行ってまいります」
そう言って二人は高町家へと向かって行った。そんな二人を見送り、はやては少し寂しそうな顔をするが、ヴィータとザフィーラは何も言う言葉が見つからない。アリシアははやての表情から何か悟ったのか、ヴィータを手招きした。
それに気付き、ヴィータがアリシアに近付くと、こう彼女は切り出した。はやてが寂しがっているから、ちゃんと一緒に遊んであげなきゃ駄目だと。それにヴィータは心が痛んだ。なるべくはやてを寂しがらせる事のないように。そう考えていたつもりだった。
だが、気がつけばアリシアがいる事を言い訳に、蒐集ばかりにかまけていたと気付かされた。そして、そんな自分達の分まではやてを支えてくれていたアリシアに、ヴィータは小さくだがはっきりと

感謝を告げた。

「ありがとな、アリシア」

「うん。ヴィータも今日はもう遊べるでしょ？　ご飯食べたら一緒に遊ぼ」

「……ああ。はやても入れて楽しくな！」

「うんっ！」

そう言い合って笑う二人。それに気付かず、はやてはザフィーラを助手に昼食の支度を開始。手早く出来る五目炒飯となり、ザフィーラは材料を切る事を任された。はやては残りご飯を溶き卵と絡ませ時間短縮。

そこへシグナムが帰って来た。やや慌て気味なシグナムへヴィータが念話で事情説明と同時に昼は食べたかと聞いた。それにまだだと答えるのを聞き、はやてが少し苦笑した。

「シグナムも試合に夢中になるんはええけど、大概にしとき」

「……すみません」

「あ、シグナムも一緒にゲームやろ～。わたしとヴィータとはやてと四人で」

はやての子供を諭すような言葉に、やや気まずそうなシグナム。そんなシグナムへアリシアが誘いを掛ける。それに視線を向けて少し思案するシグナムだったが、ヴィータがアリシアに何か囁くと、それに頷きこう言った。

「負けるのが怖いのか～」

「……いいだろう。それとヴィータ、後で少し話がある」

アリシアの言葉を指示したヴィータへ、シグナムがそう告げると当の本人は何でもないような顔をした。その視線は違うのかと言っているようだった。そこから始まる喧嘩に近いやり取り。そんな会話に苦笑するはやてとザフィーラ。

その後始まる三人のゲーム大戦。それをＢＧＭに、はやては手馴れた感じで炒飯を作り、ザフィーラはテーブルの上を拭いたり、時にはやての指示で食器を並べたりと忙しなく動く。こうして少々遅い守護騎士達の昼食は、賑やかに楽しく準備されていくのであった

……

「そうですか……確かにそれならフェイトも納得したでしょうね」

「アルフには俺から説明しといた。下手に勘繰られる前にな」

ランサーがアーチャー達に送ってもらってルーンを刻んで少しした後、フェイトとアルフが帰宅。それにプレシアの事をそう説明し、フェイトは仕方ないという顔で苦笑した。アルフはランサーが何か伝えたそうな視線を送ると、それに気付き事実を聞いた。だが、それはあくまでプレシアがはやてのために蒐集に協力したという事だけで、はやての体の事は伝えていない。

そして、リニスが帰ってきたため、こうして彼は今まで事情を説明していた。それにリニスも納得した。おそらく、バルディッシュの事でまた何かやっていたのだろうとフェイトは考えたと思ったか

らだ。

「にしても、なのはのデバイスの強化案ねぇ……」

「まだ軽くしか見ていませんが、中々興味深い物でした。今夜にでも詳しく見て考えてみます」

そう言ってリニスはそれまで浮かべていた笑みを消し、小さい声で告げた。完成時の事を考えると、なのはも参加する可能性が高いからと。

それにランサーも無言で頷き、視線をキッチンに向ける。そこには、ランサーの空腹要求に応え、懸命に調理するフェイトとそれを助けるアルフがいた。その微笑ましい光景にリニスも笑顔を見せ、助けるべくキッチンへ向かう。

「ごめんなさいフェイト。遅くなりました」

「あ、リニスお帰り」

「いいとこに来てくれたよ。後、よろしく」

リニスに嬉しそうに笑みを返す二人。そしてアルフは後は頼むとキッチンから脱出。一人ソファーで寛ぐランサーへ後ろから突撃。その首に自分の腕を優しく絡ませ、耳元へ顔を近づける。それにやや驚くランサーだったが、すぐに笑みを浮かべて自分の隣を軽く叩く。

それに笑顔を返し、アルフはランサーの隣へと移動。だが、先程までのじゃれつく雰囲気は既になく、その目はやや鋭ささえ帯びていた。その理由が何となしにさっきの事情説明にある気がして、ランサーは身構えた。

「あのさ……」

「……おう」

「……アタシね、言いたい事があるんだけど……」

「……お、おう」

勘付かれたか。そう思いランサーは心構えをしていたのだが、どうも違うような気がすると感じていた。それはアルフの顔。深刻というよりも妬むようなものだったのだ。

それにランサーは違和感を感じ、やや不思議そうな表情を浮かべる。それにアルフは自分の言いたい事が伝わってないと確信し、それまでの鋭さに軽くむくれるような気持ちを加えてその顔を見つめた。

「最近アタシとあまり話してくれないよね？」

「……なんだ、んな事かよ」

自分の予想と違った内容に、ランサーは毒気を抜かれたようにそう言った。その言葉にアルフは激怒。プレシアやリニスとはよく話してるのに、どうして自分とはあまり話してくれないのか。そう言ってアルフはランサーの腕を抓った。

それに痛がり、ランサーは必死に謝った。それにアルフは簡単には許さないとばかりに抓り続ける。だが、そこには最初の怒りはない。原因はランサーが心からすまないと手を合わせているからだ。

そこからはアルフも許して、抓るのも形だけになり、ランサーも

それを悟って楽しそうに痛がる振りをする。そんな仲良さそうにじゃれ合う二人を見て、フェイトは嬉しそうに笑みを見せ、リニスは少し複雑な表情だ。

「仲良いね、ランサーとアルフ」

「そうですね……」

そして料理を作り終え、テーブルに並べ終わった二人。だが、未だに仲良くしている光景に声を掛けるのをやや躊躇うフェイト。しかし、リニスは少しも躊躇いを見せずに、二人へ近付いてにこやかに告げた。

――食事が冷めてしまいますので、そろそろテーブルに着いてくださいね。

その声は、フェイトが聞いてもどこか怖さを感じるものがあった……

――――――

す

A' s七話　中編

少し遅めの昼食だったが、なのはとユーノは仲良く食べていた。桃子と士郎は店で働いていて、恭也とセイバーは二人で碁を打っていた。ちなみに二人が食べているのは、恭也作のソース焼きそば。セイバーはそれを軽く五人分は食べて、今は満足そうに碁盤を見つめている。

「でも、何であの本は真っ白なの？」

「……まだ何とも言えないね。同じような物なら起動して騎士達が出てきてもおかしくないけど、そんな気配は少しもないし」

互いに口に入れた物を飲み込んで話す。その話題はやはりユーノが持ち帰った本。おそらく食べ終わる頃にアーチャー達も来るのでは。そう考えて二人は再び箸を動かす。

甘辛いソースの味と香り、それにキャベツの甘さとニンジンの甘さ、最後に豚肉の旨味が麺の甘味と絡まる。二人はそれをしっかり味わいながら、笑みを浮かべていた。

その後ろでは、恭也とセイバーの対局がやや終盤に差し掛かっていて、二人の表情が少し険しさを醸し出している。そんな穏やかな時間。どこにでもありそうな平和が、そこにはあった……

それから数分後の高町家　リビング。そこになのは達とアーチャーとリインの姿があった。恭也はセイバーに誘われ、道場で手合わせをしている。それが自分達への配慮だと気付いたアーチャーは、小さく苦笑した。そう、セイバーに既に知られていると悟ったからだ。

そして、その視線は一冊の本に注がれている。蒼天の魔導書と書かれたそれをリインは見つめ、言葉を失っていた。

そう、それは彼女からすれば、もう存在しないはずの物だったのだ。それと同時に過去の記憶を呼び覚まさせる物でもある。

（これは……これは間違いなく私のオリジナル。夜天の魔導書の元々の姿……）

リインの表情から、アーチャー達もこれが夜天の魔導書と関連する物だと判断した。そして、静かにその説明を待つべく全員がリインへ視線を向けた。それを受け、リインは静かに語り出した。自分が忘れていた事を。それは、夜天の魔導書誕生に関わる話……

「私は、元来ただの本だった。最初の主は蒐集と言うレアスキルを持っていた魔法研究者で、それを使い、あらゆる魔法を後世に残す図鑑を創ろうとしたらしい」

そう言ってリインは笑う。そして、何とか完成させた物の、それはその者から見れば不完全だったらしい。それは、全ての魔法を蒐集する前に頁が埋まってしまった事。原因は、同じ魔法を何度も取り込んでしまったなどの簡易的なもの。なので、その者は考えた。どうにかして全ての魔法を蒐集出来るように出来ないかと。

そして、本に様々な機能を付け出したのだ。その最初が本自体の管理能力。同じ魔法が重複したりした場合などの削除能力。更には

主に対し助言を与えるために生み出された存在。

「……それが管制人格」

「そうだ。その時、主はこれを私に見せて言った。これは、万が一のための保険だと」

「どういう意味だ？」

「何らかの失敗や誤作動等を起こした際のバックアップだ。つまり初期状態の原本は保管し、完成した本に問題があった場合はそれを即座に破棄。原本を複製し、残った収集データからより良い物を新たに作り直せるようにと、そういう事だ」

リインの言葉に全員が黙った。ちなみに夜天の魔導書という名は、蒼天から派生したからだそうで、青空の後は夜空という理由なのだそうだと言って、リインは苦笑した。

その後もリインは続けた。更に主は、蒐集行為の手助けや原生生物等から身を守るための手段として、守護騎士を作り出した。モチーフには当時強いと名を馳せていた者達を使ったらしい。

外見や魔法等も参考にし、ベルカで強者のみが名乗れる騎士を目指した。それ故、守護騎士と呼ぶ事になったのだ。その後は蒐集完了し、図鑑の頁が埋まってしまった時の対処法を組み込んだ。それは、魔法をデータに変えて圧縮し保管する事。それもリインに組み込まれていたのだが、そのデータ変換と圧縮機能は現状では失われていた。

「かなりの容量を取っていたのでな。バグが生まれた瞬間、真っ先に入り込まれてしまった。そのため、今は影も形もない」

リインは、そのために蒐集相手に蒐集済みの魔法があったとしても構わないようになっていると告げた。その後、リインは管理者権限について語った。それは、元々不備があった際の修正や改良のためのものだった。だが、それが後の悲劇を生むキッカケになったと。

そうして、初代の主は夜天の魔導書の基本を完成させた。だが、その頃には彼は年老い、自分が死んだ後の事を考えた。

「自分が没した後も様々な魔法が生み出されていくはず。それをこのままでは蒐集する事は出来ない。そのため、私に追加したのが転生機能だ。これは、本来主の血縁者や指定した者の元へ行くようになっていた」

リインはそう言って哀しそうに笑う。だが、それも何代目か主による改竄のせいで狂ってしまったと、そう告げて。更に主は図鑑が異常を来たした時を考え、原本を信頼の置ける相手へ託した。原本は何も知らない者が見ればただの白紙の本。手を加えようにも、出来るのはその時その時の主のみ。

それを悪用出来る者などいるはずもなく、他の主にも見つかる事ないまま原本はこうして無事だった。リインも、原本の存在は万一の時以外は言わないようにと厳命されていたと告げた。

そうして無事だった原本と違い、リイン達はそうもいかなかった。初めの頃は良かった。最初の主は独身だったため、彼が指定した相手の元へリイン達は転生した。そこでは事前に話を聞いていたのか、新しい主も図鑑完成を目標に蒐集活動を行なっていた。

その後もリイン達は図鑑完成を目標に行動していたのだが、問題が起きた。そう、ある時から守護騎士達を戦力として扱う主が出始めたのだ。時は古代ベルカ、戦乱の時代。蒐集そっちのけで戦に駆

り出される騎士達。蒐集を利用した魔法攻撃。
それをリインは見ている事しか出来なかった。唯一主のやり方に対し口を出す存在だったため、口うるさく思った主が起動を騎士達と違い、承認制に改変してしまったのだ。

「……酷い」

なのはは心からそう呟いた。元々から外れた使い方をされ、それを止めようとしたリインを邪魔者扱いで封じ込める。そんなやり方に強い怒りを抱いたのだ。それはユーノやアーチャーも同じ。
特にアーチャーにとって、本来望んだ形ではない使われ方という話は、彼にとっては他人事ではなかった。かつて、彼もそうだったのだ。自分は多くの人を助けたい。そう思い、願ってなった英霊。だが、実体はただの掃除屋。人の汚い部分や醜い部分ばかり見せ付けられるという、そんな状況だったのだ。

（彼女達は……以前の私そのものか……）

その後もリインは続けた。管理者権限を使った改悪は続き、本来蒐集に掛けられていた制限を解除し、蒐集で相手を殺す事が出来るようにしたり、自分が死んだ後の転生先をランダムに変え、簡単に利用されないようにしたりと様々だ。それらが重なり、リイン自体に異変を起こした。だが、バグは極僅かだったため、リインも最初は気付く事が出来ず、気が付いた頃には手の施しようがなかった。

「原本を使おうとは思わなかったの？」

「……あの頃は、夜天の魔導書本来の使い方をする者はいなかった。それ故、原本を教えればそれさえ悪用しかねないと考えたのだ」

ユーノの言葉にリインはそう答えた。その後、バグが大きくなるにつれて自分の記憶もあやふやになり、原本自体の機密扱いも災いし、今まで忘れていたのだと。

そんな風に淡々と語るリインを見て、なのはは涙が零れそうになった。今は明るく過ごしているリイン達。それがそんな辛く苦しい過去を送っていた。そんな事を知らなかったからだ。なのはが知るのは、リンディやクロノ達から聞いた程度の事だから仕方ない。

それも、なのはへの事を考え、幾分柔らかい表現だったり、または聞かされない部分もあったからだ。リインもそこを考えて話していた。だが、やはりどうしても話しておかなければならない部分もあり、そこの周辺は少々キツイ表現もあった。

やがて話が終わり、リインは息を吐いてなのは達へ謝った。

「……すまないな、話が途中から完全に逸れてしまった」

「ううん。私、聞けてよかった。リインさんやヴィータちゃん達の事、もっとよく知る事が出来たから」

「……そうだね。でも、ただの原本じゃ手の打ち様がないか。リインのデータだけでも組み込まれていれば良かったんだけど」

涙ぐむなのはに頷き、ユーノも頷いて目元を拭う。アーチャーはユーノの言葉に頷き掛け、ふとリインを見た。リインはユーノの言葉に何かを考え込んでいたのだ。それが気になり、アーチャーはリインへ問いかけた。

「どうした？」

「……かなり怪しいが、方法はある」

「ホントっ！？」

リインの発言に三人の表情が変わる。なのはの声にリインは躊躇いながらだが、ゆっくり話し出す。それは、蒐集を完成させてはやてに管理者権限を完全に与える事。そして暴走を抑え込み、まず守護騎士プログラムだけを切り離し、その後防衛プログラムを排除する。その防衛プログラムを破壊した後、残るリインの機能の全てを蒼天の魔導書へ移してもらい、それを無力化する事だと。

それにより、リインは何の機能も持たない存在へ変わるが、上手くいけば二度と転生も暴走もしない結末が手に入るだろうと言った。機能を全て移すのは、念のためリインにバグが残っていてもそれを除去するためだと、三人に告げて。

しかし、問題は蒼天の魔導書がそのアクセスを受け入れるか否かだった。既に変質した夜天の魔導書の管理者を、己の管理者として捉えてくれるかどうか。それが唯一にして最大の不安だとリインは言った。

「今、試してみればいいんじゃ」

「……もし成功すれば、現時点では私からバグがそちらにも飛び火する可能性がある」

ユーノの問いかけにリインは悔しそうに答えた。バグは恐ろしい程のしぶとさを持っているため、まずその根幹である機能の移譲させなければならないのだと。それには、完全な管理者権限が必要不可欠なのだ。

だが、それでも可能性がある。そう思い、喜ぶなのはだったが、ユーノとアーチャーは揃って渋い顔をしていた。

「二人共、どうしたの？」

「……つまりそれは、完成が第一条件だよね」

「そして、暴走を食い止める事が必須」

ユーノは心からそう思った言葉に対し、アーチャーは演技である。彼はそもそも完成させようとしているのだから、当然と言えば当然だ。しかし、ここにいるユーノもなのはもそれを知らないため、敢えて反応をユーノと同じくしたのだ。

「そうだ。そして、失敗ならどうか私を……その場で消して欲しい。二度と悲劇を起こさぬように」

ユーノとアーチャーの言葉にリインが確かに頷く。リインもそれを分かっているので、神妙な表情で応じる。だが、アーチャーは知らない。リインの場合は、本心からのものであると。

そんな三人のやり取りを聞いて、なのはも思い出した。完成させる事が何を意味するかを。そして、それを許さない存在を。そして、失敗がリインの消滅に繋がる。そこまで考え、なのはも喜びから沈んだ顔へ変わる。

せっかく見えたリインの安全化。それには、多くの危険を冒す必要がある事を認識したからだ。それをする事がどれだけ周囲に迷惑を掛けるかを考え、そしてその失敗がどうなるかを考え、なのはは黙った。

（どうしよう……これじゃ、はやてちゃんが困っちゃうよ……）

今のままでは、リイン達は危険物扱いのままだ。それははやても

知っている。それ故に、何とかして闇の書と呼ばれる要素を取り除きたいと思っているのだ。そう、はやて以外の主の元に転生すれば、また悲劇を生む可能性があるから。

「……なのは、リインと一緒にはやてに直接会って、一応聞いてみてくれるかな」

「ユーノ君？」

「方法がある事には変わらないからね。あくまで決めるのは、僕らの前に家族で主でもあるはやてだよ」

ユーノの言葉になのはは考え、納得して頷いた。確かに事情をはやてに知らせる必要がある。そう思い、なのははリインを見つめた。リインもそれに戸惑いながらも頷き、二人はリビングを後にした。

アーチャーはユーノが聞きたい事があるのでと引き止めた。その申し出から何かに気付き、アーチャーはそのままリビングに残った。静けさに包まれる室内。ユーノはアーチャーを見つめ、意を決して問いかけた。

「教えてください。はやては、後どれぐらい時間が残ってるんですか」

「何の事だ？」

「無限書庫の資料を調べ直しました。そこには、闇の書の由来が載っている物もあったんです。一定時間で蒐集を完了させない場合、主を殺すと、そこにはありました」

ユーノの言葉にアーチャーは誤魔化しは出来ないと悟り、小さく

息を吐いた。成程、なのはを行かせたのはそのためかと。中々気を回してくれる。そう考え、アーチャーは苦笑した。それにユーノは怒りをやや見せた顔を向ける。

それにアーチャーはすまないと一言謝ってから話し出した。残りはおそらく長く見積もって一ヶ月半だろうと。早ければ一ヶ月とも告げた。リインが予測した最長が秋の終わり。それよりも明らかに早いペースではやての麻痺が進行したため、そう考えていると。

ユーノはそれに驚き、思考を停止してしまう。はやてに残された時間が残り一ヵ月。それを聞いて頭が真っ白になったのだ。そんなに余裕はないだろうと思ってはいた。だが、あまりにも少なすぎる。そう思ったためだ。

自分の予測を超えた猶予の無さ。しかし、ユーノはそこでアーチャーを見て立ち直った。猶予がないのなら余計考えなければならない。そう思い直す事が出来たのだ。それは、目の前の男に考えを巡らし続ける姿を見せられたから。

（そうだ。今の僕に出来るのは考える事だけだ）

そんなユーノを見つめ、アーチャーは小さく笑みを見せる。自分の力量を正しく判断し、その全てを尽くし事に当たろうとする。そんな姿に見えたからだ。それは、自分が常に心掛けている事。

決して絶望しない。希望を捨てず、足掻き続ける。そう、あの日誓った約束を、そして、あの日誓い直した約束を果たすために。

（……私のような思いを、彼らにはさせたくない）

「ユーノ、君に頼みがある」

「……蒐集、ですね」

ユーノの答えにアーチャーは苦笑する。賢いと。そして既に考えをそこまで巡らせている事に、内心で賞賛を贈る。この年頃の自分ならば、ここまで考えを巡らせただろうかと。

そう思いながら、アーチャーは頷いた。既に残り頁は僅かとなっている。残りをユーノとなのは、フェイトの三人で埋めれば後は数頁となるだろうと。それにユーノは考え、何故無人世界での蒐集をしないかを尋ね、もし仮にそうするのなら最後の蒐集はどうするのかと問いかけた。

アーチャーはそれにリンディから聞いた情報を教え、そこから考えた事を告げる。そして蒐集の相手を答えた。その情報と結論にはユーノも納得し、動揺を見せなかったが、最後の相手の名前にはさすがに驚いた。そして、一言告げた。

「クロノが黙ってないですよ」

「……分かっている。だが、彼の説得は私がするから心配はいらない」

「……ならいいですけど」

その後、二人は今後の事を考えて話し合った。そして、ユーノは自分より先になのは達を蒐集するべきだと提案した。そして、それは出来れば来週の金曜の夜にすべきだとも。理由は休養のため。学校が休みの二日間で二人なら回復するだろうからと。

一番の問題である蒐集理由の説明は、その時でいいだろうとユーノは告げた。それにアーチャーも頷いた。既に希望は大きく見えている。ならば、きっと二人もそこまで深く悩む事はないだろうからと。

そこまで話したところで、セイバーと恭也が戻ってきたため、話はこれで終了となった。だが、ユーノは最後に……

「僕は僕なりに足掻きます。だから、何か良い考えがあればまた伝えます」

と告げてアーチャーを見送った。なのはには、また無限書庫の整理に行ったと伝えておいてくれと頼んで。それにアーチャーは苦笑いを浮かべて頷くのだった……

一方、八神家には沈黙が訪れていた。再び現れたなのはとリイン。その二人から告げられた内容に誰も言葉が無かったのだ。アリシアは状況を考えゲームの電源を落とし、静かにはやて達を見つめている。

誰もが言葉を失う中、恐る恐るといった様子ではやてがなのはへ尋ねた。今の話は本当なのかと。それになのははしっかりと頷いて肯定した。リインも同じように頷いてみせる。

「……そうか。リインの悪いとこを何とか出来るんやな」

「はい。ただ、成功するかは分かりませんが」

その言葉にはやては笑って見せた。それに全員が驚いた。決して笑える話ではない。どこにもそんな要素はないと誰もが思った。だが、そんな周囲にはやてははっきり言った。

「何でみんな暗い顔しとるんや？　なのはちゃん、忘れたんか。わ

たしらは、奇跡をやってのけたやろ」

「……そっか。そうだね！」

はやての言葉になのはも笑みを浮かべて答えた。二人が起こした奇跡。それはアリシアを目覚めさせた事を指している。それを悟り、なのはは心から笑みを浮かべた。あの時も、自分達は成功するか分からない事に挑戦したのだ。

ならば、今回も同じ。しかも、あの時と違って今は協力する者達も増えている。そこまで考え、なのはは尋ねた。すずかやアリサも参加させるのかと。それにはやては一瞬困った顔を見せるが、少し考えて苦笑した。

「二人やと、誘わん方が怖そうや」

「にゃはは、そうかも……」

「ま、安全な所で見物……とはいかんか」

「……結構厳しいね」

そう言って二人は苦笑しながら相談を始める。どうすれば二人を納得させられるか。または、参加させるとしてどうするのかなど。そこまで二人が言い合ってやっと周囲が動き出す。二人が希望を失うどころか、むしろ余計に希望を見出そうとしているからだ。

「なぁ、シグナム……」

「……どうした？」

「あたしら、凄い奴らに出会ったんだな」

ヴィータが奴らと言っているのが、はやて達を指していると気付き、シグナムは小さく笑みを浮かべると同時に、軽くその頭に拳を落とす。

「いて」

「その意見には賛成だが、主は主だ。奴らなどと呼んで括るな」

そう言ってシグナムは視線をリインへ向ける。リインもそのヴィータとのやり取りを見ていたようで、苦笑いしていた。ザフィーラはヴィータに近付き、口は災いの元だと言って笑みを浮かべ、アリシアはヴィータの頭を優しく撫でながら笑っている。

そんな周囲を見て、シグナムは笑顔を見せる。はやてやなのはが不安よりも希望を見出したように、自分もそうであろうと。最悪の手段を考えれば、むしろ元来とそこまで変わらない物なのだとそう考えた。

（ん？　元々とそこまで変わらない……だと？）

そこでシグナムは何か引っかかるものを覚えた。リインが自分達に告げたはやてを助けるための方法。それも今のとほぼ同じだった。だが、それと今回の話と違う点がある。それにシグナムは少し考えて辿り着いた。

そう、リイン自身の事が追加されているのだ。前回は完成後切り離した防衛プログラムを破壊した後の事を何も言っていなかった。だが、今回はその後の事が加わっている。それは、リイン自身の機能を失わせる事。

（何故だ。何故それをあの時言わなかった。……忘れていたという事だろうか）

そんな風に考え込むシグナムだったが、おそらく蒼天の魔導書を見た事で思い出したのだろうと結論付けた。しかし、その疑問が完全に晴れた気はしなかった。そのために翌日、彼女はアーチャーへ意見を求める事にするのだ。

それが、あの日リインから告げられた解決方法に対する、アーチャーの疑問を再燃させる事となる……

――――――

A'ｓ七話　後編（前書き）

Ａｒｃａｄｉａの方で完結したので、こちらの更新速度を二日に戻します。もうしばらくお付き合いください。

A' s七話　後編

すっかり明るい雰囲気に戻った八神家を後にし、なのはは家路を歩いていた。その途中でアーチャーに会い、ユーノがまた無限書庫に行ったと聞き、なのはは少し怒りを覚えた。

自分が手伝うと言ったにも関らず、一人でまた戻ってしまったからだ。だが、そんな風に怒りを感じるなのはにアーチャーは苦笑しながら告げた。自分なら待つかと。少しでも可能性を高くしたい。そのために情報を探したい。そう考えたら、なのははじっとしていられるか。そう聞かれたのだ。

「……飛び出して行きます」

「……そういう事だ。あまり責めてやるな」

「は～い……」

反省しなきゃと呟きながら、なのははアーチャーへ礼を述べて歩き出す。その背中を見送り、アーチャーは小さく微笑む。大したものだと今更に思ったからだ。魔法の才能に恵まれ、その気になればそれなりの職に就く事が出来る世界もある。

にも関らず、こうして歳相応の暮らしを選ぶなのは。その後ろには家族や友人の存在があるとアーチャーも知っている。だが、それに加えて本人の性格と何よりセイバーの影響もあるのだろうと。

（セイバーは、もしかしたら、なのはの将来に衛宮士郎の姿を見たのかもしれんな……）

魔法という異能と出会い、それを知り、学び、人と違う道を歩く

事に躊躇いを持たない生き方。そんな事にはしたくない。そうセイバーが考え、なのはを今も導いているのではないか。そんな風にアーチャーは考え、苦笑した。

それはないと思ったのだ。なのははなのはだ。どこまで行ってもそれは変わらない。正義の味方に憧れ、自身を犠牲に他者を助けに動く事はしないだろうと。何故なら、なのはは自分が傷付く事で悲しむ存在がいる事を知っているから。

故に自分を犠牲になどは考えない。そう、自分を犠牲にする事は相手の心に傷を付けかねないからだ。それを優しく聡明なのはは知っているだろうと、アーチャーは考えて歩き出す。

そして、歩きながらこう呟くのだ。そんな生き方をするのは、答えを得ていない自分だけで沢山だ、と……

希望への道標　後編

月村家　すずかの部屋。そこですずかはイレインと話をしていた。内容は、どうすれば恋を出来るか。つまりは、心を動かすにはどうすればいいかであった。それをイレインから聞かれ、すずかは困惑中。

何せ、自分も恋をしたと思ったのは、ユーノに秘密を明かした後の会話なのだ。それを具体的に説明しろと言われたような質問に、すずかはどう答えればいいのか戸惑うばかり。

（私がユーノ君を好きになったキッカケは、あの言葉だよね……）

思い出すのは、八神家での秘密を打ち明けた後の事。すずかに無理に伴侶にする必要はないし、自分は秘密を誰にも話す事はしない。そうユーノは真剣な眼差しで言ったのだ。それにすずかは嬉しく思い、最後の墓まで持っていくの言葉にドキンとなったのだ。

それまでの真剣さを消して、すずかを安心させるように笑顔で告げたその言葉。それが、完全にすずかの心を捉えたのだから。

そんな過去を思い出し、頬を赤らめるすずかにイレインは不思議顔。ちなみにイレインがすずかを相手に選んだのは、絶対に誰かに話さず、からかわず、そして定期的に二人で話す事が出来る事が理由。

ノエルは仕事があるし、恋愛に関しては些か不安がある。ライダーは恋愛をしているのかどうかが怪しい。ファリンと忍は上記の二つに抵触するため問題外。よって、すずかぐらいしかいなかったのだ。

「すずかお嬢様はさ、ユーノって奴が好きなんだろ？」

「……うん」

「その好きって、忍お嬢様やファリン達とは違うんだろ？」

「うん」

「その違いを教えて欲しいんだよ」

イレインはそう困ったように告げた。そう、イレインは好きなら分かる。だが、その違いがまだ良く分からない。好きと嫌いにどちらでもないの基本三択。それでいくと、月村家の面々は、好きがすずか、ライダー、ノエル、猫達。嫌いはおらず。どちらでもないが

忍とファリンなのだ。
だが、好きにも色々あると教えられ、イレインも言葉だけなら学んだ。友情に家族愛と言った様々な言い方の好きがあると。その違いの中でも特に理解しずらいのが恋と呼ばれる物だ。

愛の前段階なのかと思ったが、どうもそう簡単なものではないと言われ、イレインは困ったのだ。具体例を教えてくれと言っても、すずかは中々それが挙げる事が出来ず、今も思案顔。

（異性に対する物だって考えてたら、調べるとどうも同性にも抱く事があるらしいし……）

イレインが調べ物に使ったのは、パソコン。それで色々と調べた結果、恋とは異性だけでなく同性にもする事があるという事だった。しかし、イレインはそれをちゃんと詳しく調べるべきだったのだ。そこには、ちゃんと心理学の見地や医学的な見地からの意見が載っている物もあったはずだから。

だが、唯一の救いはそれをイレインがすずかに聞いたりしない事だろう。何せ、異性に対する恋さえ中々答えられないすずかだ。そんな高度な話を聞いても、余計混乱するだけだろうと考えたからだ。

しかし、結局イレインはそれが気になり、仕方なくライダーへ尋ねる事にする。それを聞いたライダーが、その事を絶対にすずか達には喋らないようにと念を押す。そう言われた時、イレインは思うのだ。同姓への恋慕は基本いけない事なのだと。

「……あのね、多分違いはドキドキする事かな」

「ドキドキ？」

「うん。その……好きな男の人と一緒にいると、胸がドキドキするんだ。それで、心が暖かくなるんだよ」

すずかは、自分がユーノと再会した時の事を思い出しながらそう告げた。イレインは、心が暖かくの部分は似た感覚を経験した事があったので、比較的同意出来た。だが、胸がドキドキはまったく理解出来なかった。

動悸が激しくなる事だとは理解出来る。しかし、何故特定の相手が共にいるだけでそうなるのかは、今のイレインでは理解する事は出来ない。結局、イレインは恋は胸の動悸が激しくなり、心が暖かくなる事だと結論付け、すずかに礼を言って部屋を出て行った。

それを見送り、すずかは改めて自分のユーノへの気持ちを再確認していた。友達としてだけではなく、異性として好きだと。いつかこの気持ちを伝えないといけない。そう考える事はある。だが、そのキッカケや時期は未だに決められないのだ。

ユーノは基本的に無限書庫へ仕事をしに行っている。そしてたまの休みが休日とは限らず、すずかが会う事が中々出来ない。それに何より問題は……

「なのはちゃん……だよね」

きっとユーノを好きであろう親友の顔を思い出し、すずかは表情を暗くする。ただ、なのはがユーノを好きなだけなら、すずかもそこまで悩まずに済む。アリサが美由希に告げたように、負けないからと笑い合えばいいのだから。

しかし、すずかがそれを出来ない訳がある。それは、ユーノの気持ち。きっと、ユーノの心の中をなのはの存在は大きく占めている。そう思っていたからだ。自分が告白した事で、なのはがユーノを強く意識するだけならいい。もし、ユーノもなのはを強く意識したら。

そこまで考え、すずかは小さく違うと呟いた。

（私は怖いんだ。ユーノ君から、なのはちゃんの方が好きだって言われるのが。そして、それがキッカケでみんなの関係が気まずくなるのが……）

この関係を壊したくない。この優しく暖かい雰囲気を。すずかはそう思い、ため息を吐いた。それでも、いつか言わねばならないと。いつまでも子供ではいられない。それをすずかは知っている。

だから、と思う。いつか訪れる、子供から大人になったその時にこの想いを告げようと。それがどんな結果になっても構わない。そう、すずかは信じているのだ。その時の自分達を。

「きっと……親友のままでいられるよね？」

その問いかけは、未来の自分にしたものか。それとも……

お昼も過ぎて、まったりとするテスタロッサ家。プレシアはリニスが傍についていて、ランサーとアルフは共にテレビを眺め談笑中。フェイトと言えば、一人バルディッシュと相談していた。

その内容は、カリバーとザンバーの切り替えタイミングや使いどころ。カリバーは基本ザンバーへの準備段階の意味合いが強い。しかしあの模擬戦で思った事なのだが、接近戦ではむしろ小回りの利くカリバーの方が使い勝手自体は良かったのだ。

現に、ザンバーはなのはにかわされる事が多かった。そのため、バルディッシュとそこをどうしようと話し合っていたのだ。

”まず、剣術を学ぶ事です”

「そうだね。あの時は、シグナムの動きやセイバーの動きを必死に思い出しながらだったから」

あの模擬戦の後、フェイトはたまにではあるがシグナムと対戦をしていた。魔法無しでのものではなく、時の庭園まで移動しての模擬戦を。それもリインが起動する頃から途絶えてはいるが、それでもフェイトの中に焼き付いた剣術のイメージは、間違いなくその影響が強い。

その事を思い出し、どうすればいいかと考えるフェイト。それにバルディッシュが簡潔に答えた。以前のように実地で学べばいいと。

「……でも、最近忙しそうだし」

”この国には、駄目で元々と言う諺があります”

「あ、それなのはが言ってた。テストで分からない時はその気持ちで答えを書くんだって」

バルディッシュの言葉にフェイトは意外そうな声で返す。そして、その意味を良く知らないまま、自分なりに解釈した。

そう、駄目なら駄目でもやってみよう。そういう意味だろうと。

そう考え、フェイトは明日八神家へ行ってシグナムへ頼んでみる事にする。セイバーに頼まないのは、士郎達との稽古風景をなのはから聞いた事があるから。

最初は加減してくれるのだが、劣勢になったり気持ちが昂ってくると本気になる。そうなのはは話していたのだ。だから、自分が訓練する時はセイバーが絶対手出し出来ない物にしないと大変なのだと。

そんな話を思い出し、フェイトは小さく笑う。それにバルディッシュは何も言わず、ただ静かに見守るのみ。その後、フェイトはバルディッシュと今後の訓練メニューを考えた。しばらくはカリバーを主体に練習し、ザンバーはあくまでも決め技としての運用にしようと。

そこには、セイバーの言葉が生きている。プラズマザンバーやジェットザンバーと言った魔法。それは今のフェイトからすれば確かに負担が大きいものだった。故に、それはどうしてもそれを使わないといけない際だけの、本当に宝具のようにしなければいけない。

（私の宝具、だもんね……）

あの時のセイバーの言葉と、帰った後にそれをランサーに告げた時の事を思い出すフェイト。ランサーは、フェイトがセイバーに宝具と言われたと言うと、楽しそうに笑った。そして、フェイトの頭を撫でながらこう言ったのだ。

――なら、迂闊に使うんじゃねぇぞ。最後の最後のとっておき……それが宝具だからな。

勝負を決める。或いは劣勢を覆すような攻撃や武器。それが宝具なのだとランサーはフェイトに語り、フェイトはそれに頷いて心に誓ったのだ。ここぞという時しか、ザンバーは使わないと。

その時の気持ちを思い出し、フェイトは笑みを浮かべてバルディッシュを握る。憧れた騎士の言葉に優しい槍騎士の言葉。それを心に抱きながら……

「シャマルさん、お疲れ様」

「気をつけてね～」

「お疲れ様です。お先に失礼しま～す」

士郎と桃子に笑顔を向けてシャマルは翠屋を後にした。時間も夕方を過ぎ、もうここからは暇になる。明日はシフトに入っていない完全オフ。蒐集に集中出来る。そう思い、シャマルは家路を急ぐ。

今日はアーチャーがプレシア達から蒐集をし、頁をかなり稼いでいる。その結果次第では、今後に大きく希望が持てる。そう考えながら、シャマルは八神家を目指す。そして、しばらく歩くと八神家の明かりが見えてきた。

「……やっぱりホっとするわね」

誰かが待っている。真っ暗な場所に帰るのではなく、明るく暖かい家に帰れる。その事を心から喜びながら、シャマルは笑顔で呼び鈴を鳴らす。どちら様ですかとヴィータの声。それに小さく笑みを浮かべるシャマル。

「シャマルで～す。開けてくれる？」

「……妙にテンションたけぇな。待ってろ」

そう言って少し待つシャマル。するとドアが開き、ヴィータがやや不思議そうに顔を見せた。それに笑みを見せるシャマルに、ヴィータはどこかおかしなものを見るような視線を送る。

そして一言、変な物でも食べたのかと言ってジト目。それにシャマルが軽く怒りながら玄関へと歩き出す。そのやり取りを聞きなが

らシグナムとザフィーラは苦笑い。騒々しいなと言い合いながら、視線は共にリビングへ現れた二人へと向けている。

一方、はやてとアーチャーはキッチンで食事の支度中。既に終わりかけていて、リインが人数分の皿を並べていた。今日はミートソースのスパゲッティ。それと野菜スープの二品。メインははやてが、スープはアーチャーが担当し、手伝いをリインがした本日の夕食。

それを見てヴィータが目を輝かせ、シャマルは待ちきれないとばかりにテーブルに着き、シグナムとザフィーラもそれに続いてテーブルへ。そして、リインとはやて、アーチャーが揃ったところではやての号令で食べ始める。

「美味しい～」

「……肉が多いな」

「少ないと嫌だとどこかの大人騎士が言うのでな」

ミートソースにご満悦のシャマル。ザフィーラはソースの具沢山にやや驚き、それにアーチャーがからかうように笑みを浮かべてそう言った。

「うっせ。はやてのミートソースはギガうまなんだよ。だから余計肉が欲しくなんだ」

「あ～、もう。ヴィータ、口の端にソースついとる」

アーチャーの言葉に恥ずかしそうに反論するヴィータ。だが、その口の端にはしっかりと赤いソースが付いている。それを苦笑しながら、はやてが手にしたティッシュで拭き取ろうとする。それに嬉

しそうな表情をし、拭き取ってもらうヴィータの姿を見て、シグナムが少し悪戯めいた笑みを見せた。

「大人騎士は可愛いのだな」

「んだと！」

「止めろヴィータ。シグナムも、たまにはこういう事を言いたくなるのだろう」

少し言い争うような雰囲気をヴィータが出したのを感じ、リインがそう言って嗜めた。それに渋々だが引き下がるヴィータだったが、リインがシグナムに言った言葉に、その表情が嬉しそうなものへ変わる。

それは、どこか楽しそうなシグナムの方へ視線を向けて、リインが微笑みと共に告げたもの。

――それに、シグナムも可愛い時があると思うぞ。

それにシグナムがむせ、ヴィータは爆笑。ザフィーラとアーチャーは小さく苦笑し、はやてとシャマルは笑みを浮かべながら頷いた。

その後、リインへ可愛くなどないとやや照れくさそうに反論するシグナムと、心からそんな事はないと否定するリインのやり取りが、実に五分は続いた……

食事の片付けを終えたアーチャーは、手を拭いてリビングのソファーへ向かう。そこには、はやて達が全員揃っていた。はやての話

したい事があると言う申し出のためだ。アーチャーが来たのを確認し、はやては全員の顔を見渡して、一度小さく息を整えてから意を決して告げた。

「わたしに何を隠しとる」

その言葉に全員が息を呑んだ。誤魔化せるような雰囲気ではないと、はやての視線が、声が告げていたからだ。そう、アーチャー達が隠し事をしているのを確信している。そう分からせるには、はやての言葉は十分だった。

「……どういう意味だ？」

「それ、本気で言っとるんか？」

それでもと思ってされたアーチャーの問いかけに、はやては少し怒りを見せて問い返す。それに誰も何も言えない。アーチャーでさえ、はやての静かな怒気に答えを躊躇う。

静寂。言いようのない緊迫感。それを全員が感じていた。だが、それに押し潰される事なくはやては力強く言い切った。

「リイン絡みやろ。それも、わたしに関わってくる話や」

今度こそ、誰も何も言えなくなった。その反応に、はやてはやはりと思ったのか力無く頷いた。そして、そこからは怒気を抑えるように語り出した。そもそも気付いたのは、リインが目覚めた日の朝からだと。

夜はどこか嬉しそうだったアーチャー達が、翌朝は暗さが見えた。特にリインの表情はすぐに分かった。そして、自分には何も言わず深夜に蒐集をしている事や、よく昼間に家にいないのもそのせいだ

ろうと。

「……どうや。間違っとるか？」

「……まだ君に知られる訳にはいかなかったのだ」

はやての言葉に、アーチャーが苦々しく答えた。その声には、躊躇いが混じっている。だが、それを聞いても尚はやての怒りは消える事はない。

その後、アーチャーははやてに現状を話した。既に対処法が確立された今なら、そこまではやての受ける精神的ダメージも少なく済むだろうと。その予想通り、はやては自分がこのままでは死んでしまうと聞いても、そこまで驚かなかった。むしろ、納得したぐらいだった。

「そうか。どうりで最近妙な痛みがある訳や」

「なっ？！　それは本当か！？」

「毎朝必ずや。出始めたんはつい最近」

はやての口から淡々と告げられた事実に、アーチャー達は揃って驚愕した。はやてへの影響がそこまで出ていたと、それが意味する事を考えて余裕が本当になくなってきていると感じたのだ。

その後、はやてはどうするのかアーチャーへ尋ねた。それにアーチャーはなのはとフェイトからの蒐集をする事を告げた。それにはやては一瞬眉を顰めたが、何も言わず続きを促した。

そのはやての反応に全員が違和感を感じるものの、滲み出る怒気が増している事に気付き、それを口に出す者はいなかった。その後

もアーチャーがリインが提案した蒼天の魔導書を使った話をし、はやてを助ける事が出来ると締め括った。

だが、それを聞き終えたはやてはすぐには何も言わず、ただ黙って俯いて何かを考えているようだった。それを見つめる事しか出来ないアーチャー達。声を掛けるのも躊躇われるような雰囲気のはやてに、誰も言葉が無かったのだ。

やがて、考えが纏まったのかはやては小さく声を発した。だが、それは全員が予想した内容ではなかった……

「やっぱり……無理や……」

弱々しく消え入るような声。耳を澄ましていなければ、聞き逃してしまいそうなもの。それを全員が固唾を飲んで聞き入った。

「ほんまは怒ろう思った。でも、わたしも隠し事しとった。きっと、アーチャー達が聞いたら心配する思った。ほんまにごめんなさい」

「いや、頭を上げてくれはやて。君の気持ちは分かる。私達と同じ気持ちだったのだろうから」

「そうよはやてちゃん。謝るのは、私達も同じだから」

自身の事を謝罪するはやてに、アーチャー達は揃ってそれを否定した。その思いと理由は自分達と同じだったのだろうと。

そんなアーチャーやシャマルの言葉にはやてはゆっくりと頭を上げた。しかし、そこにあった表情は彼らが想像したものではなかった。

そこにあったのは、怒りと悲しみ。それが自分に対してかアーチ

ャー達に対するものなのかは見ただけでは分からない。だが、その雰囲気に誰も言葉がない。

「何でや……何でわたし達こうなってしまったんや！？」

叫んだ。心の底からはやては怒りと共に声を出した。それは、アーチャー達が驚き、そして苦しい表情へ変わるには十分なものだった。

「わたしを心配して？　アーチャー達を心配して？　やったら余計教えて欲しいに決まっとるやろ！　死ぬかもしれん言われて怖くなる程、わたしは弱ないっ！　わたしが変な痛み感じる聞いて慌てる程、アーチャー達も弱ないっ！」

はやての怒声に、アーチャー達は己の浅はかさを呪った。子供だからとどこかで甘く見ていた。それが、はやての心に影を作ってしまった。そうアーチャーは思った。そんな神妙な顔をするアーチャー達に、はやては益々感情を高揚させ、次々と叫んでいく。

本当は教えてくれるまで待とうと思った。しかし、自分の事だけならまだしもリインの事まで隠すとなればもう黙っていられない。そう考えた。でも、それだけではなかった。何故ならそれは……

「家族やろ、わたし達は。隠し事は極力無しにしたい。でも、それが無理なんは分かってる。分かってるけども……」

家族だと思っていた。それなのに一人だけ知らされなかった。一人だけ隠していた。はやてはそう思ったのだ。自分の事なら、きっと自分が知れば悲しんだり、困ったりする。だから黙っていよう。そう考える事が出来る。それは思いやりだと納得させる事が出来ると。

それと同じく自分の事も黙っていたのは、アーチャー達に対する思いやりだと、そう思っていた。でも違った。家族なら言い合うべきだったのだ。

特にリインの事は別だった。家族の一員で、自分の大切な存在。それの今後に関わる事を何故黙っていたのか。それは、それを話せば自分の事を話さなければならないからと、はやても気付いてはいる。だが頭では理解出来ても心が納得しない。はやては賢く、聡い少女ではある。しかし、忘れてはいけない。彼女は、子供なのだ。

何とか頑張ってしっかりしようとしているだけで、本当はまだまだ甘えたい年頃。それを誰かが考えてやらねばならなかった。はやてが年齢以上にしっかりしていたため、そこをどこかで見誤った。そうアーチャー達は考えた。

同じようにはやても見誤った。アーチャー達は自分のために動いている。なら、自分に異変が起きたとなれば、その動きに悪い影響を与えるだろうと。しかし、思い出すべきだったのだ。彼らは、そんな事でうろたえるような情けない者達ではないと。

はやては涙を堪え、全員へ視線を送る。それに誰も言葉を返せない。今、何を言ってもいけないと、そう理解していたから。

「リイン、ごめんな。わたし、一人で抱え込もうしとったわ」

「主、気にしないでください。私も同じです。抱え込もうと、していました……」

「ザフィーラ、堪忍な」

「いえ、それは私もです。ご容赦を……」

「ヴィータ、心配かけたなぁ。もう、隠し事は無しや」

「はやてぇ……」

「シャマル、おおきに。これからは痛かったら言うな」

「はやてちゃん……ええ！　任せて」

「シグナム、大変やったろ。もう、心配いらんから」

「主……私こそ余計な心配をさせてしまいました。お許しを……」

名前と共にそれぞれへ視線を向けるはやて。その目はもう責めるものではなく、優しいものへ変わっていた。その表情に、その言葉に五人は悲しみと喜びを堪えるだけで精一杯だ。それをはやてはどこか嬉そうな目をして見つめ、視線を最後の一人へ移す。

そこにいたのは、はやてが初めて見る俯くアーチャーの姿だった。その表情は、苦しみとも悲しみとも怒りとも取れるようで取れない複雑なもの。周囲に纏う雰囲気は自責の念だ。

「……な、アーチャー。出会って初めての朝の事、覚えとるか？」

「……ああ。今でも良く覚えている」

「わたしな、あの日泣いたやろ？」

「……ああ」

「……あの時な、アーチャーが言うてくれた言葉が……わたし凄く嬉しくてな？」

そういうはやての声が震えていた。アーチャーはそれに気付き、はやての顔を見た。そして、そのまま言葉を失った……

「家族は、支え合い分かち合うものって……そう、言ってくれたやんか。なのにどうして？　どうして支え合うの忘れてしまったんやろ……どうして分かち合うの忘れてしまったんやろ……」

はやては大粒の涙を流していた。目を閉じてそれを止めようとしているにも関らず、今も次々と涙が流れている。それにアーチャーだけでなく、誰も動く事さえ出来ない。ただ黙ったまま、はやての顔を見つめる事しか出来ないのだ。

「辛かったし……怖かったし……寂しかった……。みんなにそれを言いたい思うた。でも、そうしたら気遣い無駄にする考えたら、わたし出来んかった……」

どこで間違えたのだろう。どこで思い違いしたのだろう。そう全員が思っていた。確かにあったはずの絆。それが、今は見事にすれ違っていた。

はやてはアーチャー達に、アーチャー達ははやてに。言えぬ事と思っていた。だが、言うべきだったのかもしれない。どんな悲しみも痛みも希望も分かち合い、どんな辛さも状況でも支え合う。

それこそが、家族だったはずだから。理想論だが、確かにそれを目指していたはずだった。それが、気がつけば歪んでいた。優しさを遣い間違え、思いやりと盲目的に信じ込む事で、その在り方を忘れてしまっていた。

そんな時、はやてがぽつりと言った。

――――もう一度、家族に戻れるかな？

――戻ってみせよう。もう一度、今日から始めればいい。

アーチャーがそう言ったその次の瞬間、はやては初めて大声を上げて泣いた。声にならない声で泣いた。それは、赤子が生まれた時に上げる産声が如き印象をアーチャーに与えた。そして、それにヴィータがもらい泣きし、シャマルまでがそれに続く。それを見てリインは静かに涙を流し、ザフィーラとシグナムは何とか堪えようとしていた。それでも流れる物を抑える事は出来なかったのか、黙って悔いるように唇を噛み締めていた。

アーチャーは一人、そんな泣くはやてを優しく抱きしめ、静かにはやての耳元に万感の想いを込めて告げた。

――本当にすまない。私は、自分の言った事さえ守れなかった……

それにはやては言葉ではなく、強く抱きしめ返す事で応えた。そうじゃないと、はやてが言ってくれた気がして、アーチャーは久方振りの涙を流す。忘れていた温もり。それを今まで自分がはやてに与えていたと思っていた。だが、違ったのだ。

（ああ……そうか。俺は、間違えていたんだ。与えていたんじゃない。与えられていたんだ……）

本当は、アーチャーの方が与えられていたのだ。かつて失ってしまった温もりを。人らしい心、その日々。それを感じさせていたのは、アーチャーではなく、はやてだった。そう悟り、アーチャーはもう一度心から告げた。

「ありがとう、はやて。俺、もう間違えないから」

「うん……うんっ！」

互いの温もりを確かめ合うように抱きしめあう二人。それに周囲も気付き、涙を流しながら微笑む。こうして、はやてへの隠し事はなくなり、全てをアーチャー達は伝えた。それを聞いて、はやてははっきりと告げた。

絶対にリインを助け、夜天の魔導書を無害にさせてみせると。夜天の主は、自分で最後にしてみせる。そう力強く断言した。それにアーチャー達も頷き、完成への気持ちを新たにした。

気持ちを一つにしたはやて達。だが、まだリインは話していない事があるのを、誰も知らない。

はやてに残された猶予は長くなく、立ちはだかるだろう壁は厚い。

それでも彼らは希望を捨てずに歩き続ける。

全ては、愛する家族のために……

――

後編。アーチャーへのはやてによる怒りの反論。彼女もまた孤独に怯える少女。いかに信頼していても、その心はまだ未熟……

次回は、幕間。なのは達の蒐集関連が少しとほのぼの分を……

幕間１３

あの涙の夜が明けて、早朝の八神家。庭で素振りをするシグナムの姿があった。その隣では、アーチャーが先程シグナムから聞いた疑問について考えていた。リインの提案が最初と前回で僅かに違う。

そう聞いた瞬間、アーチャーは思いだしたのだ。自分があの時、リインの提案をどこか素直に受け入れられなかった事を。そして、それについてシグナムの疑問が一つの可能性を見せた。

（前回と違いリインが挙げた点は一つ。自分の機能を無くす事。それ自体は何ら問題ない。むしろ納得出来るぐらいだ）

転生機能を無くせば、二度と悲劇を起こす事はない。だが、何故それを最初からリインは考えなかったのか。はやてが死ぬまでに方法を見つければいいと考えたのか。そう思い、アーチャーはそれを否定する。そんな楽観的な思考をする性格ではないと、そう思ったからだ。

そう考えれば、今回のリインの考えは納得出来る。自身のバグを除去し、更にバグが巣食っていそうな機能全てを排除する。それならば確かに万全を期す事が出来るだろうと。

だからこそ余計に思うのだ。どうしてそれを今まで考えず、また教えなかったのかと。まるで、話したくない事でもあるかのような感じさえ受け、アーチャーは考える。何故リインは今までこの事を言わなかったのか。その理由と原因を。

一つは、シグナムも言ったように蒼天の魔導書を見て思い出した。これは可能性としてはない訳ではない。リイン自体も自分の事をどこか忘れていた部分があったのは、前日の話し合いで分かった事だ。

だが、もう一つ。アーチャーには浮かぶ可能性があった。それは……

（考えさせる訳にはいかなかった、のだろうか。全てが終わった後の自分の事を……）

最初と最後の案で共通の部分。それは、書を完成させて守護騎士達を切り離し、バグの塊である防衛プログラムを破壊する事。よくよく考えれば、それだけでも十分なのだ。確かに転生機能は厄介だが、何も全ての機能を失う必要はない。

リインの機能自体の説明も、昨夜はやてを交えてリインの口からされた。その一番大きなものが、ユニゾンと呼ばれる機能。これは、はやてと融合し、その力を補助する役割。つまり、リインこそがはやてのデバイスなのだ。

それを失う事は、はやてがその力を十分に振るう事が出来なくなる事を意味する。はやて本人は別にそこまで気にしていないようだったが、それがアーチャーには気になっていたのだ。

はやての今後を思えば、確かに魔法はどちらでもいいのかもしれない。だが、リインがそう簡単にはやてのための力を捨てる事を決断するだろうか。他の手を考え、それが見つからないからこその苦渋の決断ではないのか。そう思ったのだ。

「……どうだ。何か答えは出たか」

「いや、君の言った考えが一番有力だろう」

「そうか。それならばいいのだ。何か、どうも気になってな」

シグナムはそう自分に言い聞かせるように告げ、家の中へ戻って

いく。それを見送り、アーチャーは密かに決意する。リイン本人へ問いかけてみようと。何か反応がなければいい。もしあれば、そこを突破口に真実を聞き出そうと。

それは、秘密を作った事を責めるためではない。はやてに思い出させてもらった、あの日の気持ち。それを実践するために。

「支え合い分かち合うのが家族だから、な……」

家族の時間

朝食を終え、アーチャーははやて達へ告げた。なのは達への蒐集と同時にユーノの蒐集もすると。それにはやてが苦い顔をするが、アーチャーが一番その気持ちが強いだろうと思い、何も言わない。

ただ、はやてのそんな表情から全員が心から思った。優しいと。自分の命に関ると聞いても、大切な親友を巻き込む事に躊躇いを持つはやてに、六人は小さく笑みを見せた。

「主、そんな顔をしないでください。きっと、テスタロッサ達は何故もっと早くに言わなかったと怒るでしょうから」

「そうだよ。なのはもフェイトもはやての事聞いたら、絶対そう言うって。はやての事……好きだからさ」

シグナムとヴィータの言葉にはやても少し考え、苦笑して頷いた。自分も同じような事を言ったのだ。なら、確かに二人も怒るだろうと。優しく強いなのはとフェイト。それがこのままでは、はやての

命が残り少ないと聞かされれば、おそらくそう言うに違いない。
そうアーチャー達も思っていたのだ。今ならば、はやてを助け、リインを安全に出来る可能性がかなり高い。それならば、二人も希望を持って迷い悩む事はない。そうはやても判断した。

そして、問題は誰がなのは達の蒐集と説明をするかとなった。それをアーチャーとはやてが考え出す。すると、真っ先にヴィータが手を挙げた。

「あたしが、あたしがなのはへ説明する」

それにはやてが理由を尋ねた。どうしてかと。別に誰でも構わないのだ。それに説明などはシャマルやリインの方が適任だとも。それにヴィータはそうかもしれないと肯定したが、顔に決意を浮かべて告げた。

なのははヴィータが初めて友と呼べた相手。自分との関わりも、他の者達よりも深い。だからこそ、自分が説明し許してもらいたいのだと。

「……あいつは、なのはは、あたしにとっても大事な友達……だからさ」

「ヴィータ……うん、分かった。なら、なのはちゃんへの説明頼むな」

ヴィータの言葉を嬉しく思い、はやては笑みを浮かべてそう告げた。それを見ていて、今度はシグナムが切り出した。

「ならば、テスタロッサは私に任せてください」

「シグナムが？」

「はい。今のヴィータではありませんが、主を除けばテスタロッサと関係が深いのは私です」

あの合同模擬戦で意気投合した二人は、たまに手合わせをした事がある。それを踏まえ、シグナムは頼んだのだ。歳は違えども、フェイトは自分にとって友と呼んでもいい相手なのだと。ましてや、刃を交え認めた相手ならば、自分がどうしても行かねばならない。

そう強く告げて、シグナムははやてを見つめた。その視線にはやては小さく笑みを見せると頷いた。それにシグナムは礼を述べて頭を下げる。それにはやてが苦笑して、話がユーノの事になった。

それはアーチャーがシャマルを薦めた。ザフィーラやリインと違い、シャマルは回復などが得意。つまり、ユーノを蒐集後に癒す事が出来るからと。それにユーノは既に事情を知っている。その事をアーチャーは全員へ話した。

自分で資料を洗い直し、自力でそれを気付いた事やなのはの見つけた図鑑から検索をかけ、蒼天の魔導書を見つけ出した事までを。その必死さの根底には、なのは達と同じくはやてやリイン達を助けたいという強い想いがあると、誰もがアーチャーの話から感じ取っていた。

「なら、ユーノ君はシャマルに頼もうか」

「任されました」

こうして、二人への蒐集はユーノの提案通りの金曜になり、ヴィータはなのはの家へ泊まりがけの行動に。シグナムは、テスタロッサ家がアルフとアリシア以外事情を知っているため、夕食後に会い

に行く事になる。
　ユーノは、同じ日にヴィータがやってもいいのだが、次の日にシャマルがする方がいいとなった。何せ、ユーノは攻撃魔法が使えない。つまり、防御法はともかく、攻撃方法を増やさずに頁を稼ぐ事が出来る相手だからだ。ならば、その魔力が完全に満ちている時にするのは当然といえた。

「はやて、すずかやアリサに君の事を話すのは、土曜日以降にして欲しい」

「そやな。なら、二人に予定空けといてもらうわ」

　笑顔を浮かべるはやて。それに全員が笑みを返す。悲愴感が漂ってもおかしくない状況だが、それを何でもないように誰もが感じていた。絶望などしない。はやてには、アーチャーを始めとする奇跡を起こした英雄達が、家族がいる。
　そして、アーチャー達には自分達を信じてくれる者達がいる。故に、その心に絶望はない。ただ希望の光のみを信じているのだった……

　プレシアの部屋に二人の金髪少女がいた。一人は横たわるプレシアと楽しそうに語らい、もう一人はその会話を聞きながら相槌を打ったりしていた。

「でね、結局はやてが優勝したんだよ」

「そう、強いのね。アリシアは？」

「わたしは準優勝。三位は同率でヴィータとシグナム」

昨日のゲームの結果を話すアリシア。それに微笑みを見せるプレシア。体の方もルーンのおかげで大分回復し、今はもういつも通り動く事も出来る。しかし、起きて朝食を作ろうとキッチンでリニスと共に調理していたプレシアを見て、フェイトがやや慌てたように言ったのだ。

――か、母さん。まだ寝てないと駄目だよ。

その言葉に一瞬呆気に取られるプレシアだったが、すぐに笑みを浮かべ、せめて朝食を作り終わったらと答え、フェイトはそれに渋々ながらも頷いて手伝いを進んでしたのだ。

勿論、その後から起きて来たアリシアもそんなフェイトを見て急いで顔を洗い、手伝いに参加した。そんな二人にプレシアは嬉しくなり、優しい笑みで調理を続けたのだった。

そして、今はこうしてまた部屋に戻って横になっているという訳だ。リニスはマリエルからのデータを基に、様々な案を作ってみると言って時の庭園へ行き、アルフは翠屋へ仕事に向かった。ランサーは暇潰しに高町家の方へ顔を出すと出かけ、今は母子三人だけだった。

本当はプレシアもリニスと共に、レイジングハートの改良案を考えたかったのだが、二人をあまり心配させてもいけないと思い、こうして横になっている。

「フェイトはゲームをするの？」

「うん、少しだけ。私はレースゲームが好きかな」

「わたしはアクション。あ、なのははゲーム全般で、はやてはシュミレーションだったかな？」

二人の答えを聞き、プレシアはどこか納得したように頷いた。フェイトとアリシアは性格が出ていると思ったのだ。フェイトはランサーに教えを受けて以来、速度を磨く事を心掛けている。その理由は、ランサーに見出されたからと言ってしまえばそこまでだが、フェイト自身の適正もあるのも事実。

何せ、ランサーが認めるのだ。自分でも同じ年頃で同じ動きはおそらく出来なかっただろうと。アリシアは元来行動的な性格のため、体を使った事が基本好きだ。だが、最近プレシアが気付いた事がある。

アリシアには、自分ののめり込む性格が強く遺伝していると。現在の勉強がその良い例だ。一度こうと決めるととことんまで突き進んでいく。将来、アリシアは学者になるかもしれない。そう思うぐらい、アリシアは研究者に向いているのだ。あくまでも、性格は……だったが。

「ママは何が好き？」

「そうね……頭脳系ならきっと強いわ」

「じゃ……パズルゲームだね」

「う～、わたしあれ苦手～」

連鎖が難しいと言って苦い顔のアリシア。それに苦笑し、先の事を考えないといけないからとフェイトが言って、いい頭の運動になりそうねとプレシアが笑う。そんな会話をしながら、その後アリシアがプレシアと一緒に寝たいと言い出し、それにプレシアが了承を

示すと、フェイトがおずおずと同じ事を言い出した。
それにプレシアは微笑んで招き入れ、三人は仲良く昼寝と相成った。初めての体験に、フェイトはドキドキしながらプレシアに抱きつき、アリシアは昔を思い出して嬉しそうにしがみつく。
そんな二人に小さく笑みを浮かべながら、プレシアは二人を優しく抱きしめ告げた。
――今日は一緒にお風呂に入りましょうか。
それに少し驚く二人だったが、すぐに揃って笑顔で頷いた。いつかランサーと一緒に入りたいとアリシアが言うと、フェイトは言えば入れると思うよと返す。そんな二人に、プレシアはやや躊躇うように尋ねた。恥ずかしくないのかと。それにアリシアは全然と答え、フェイトはランサーなら平気だと答えた。
（当然よね。アリシアもフェイトも子供だもの。……でも、フェイトのランサーならってどういう意味かしら？）
そんな疑問を浮かべながら、プレシアはそれを考える。そして、気付いたのだ。いつの間にか二人が静かになっている事に。同じ寝顔の二人を見て、プレシアは囁く。
――愛しているわ、アリシア、フェイト。
そう告げて、プレシアも目を閉じる。失っていたはずの時間。それをこうして生きている。その奇跡を改めて噛み締めながら……

「戦闘機人？」

「物騒よね。イレイン型に付けられた異名だってさ」

忍の研究室。そこですずかは簡単な忍特製のマニュアルを手にして首を傾げた。すずかが今読んでいるのは、言うまでもなく自動人形の調整や修復等のための本。といっても、忍が乱雑に書き記した物なので、目次も順序立てもされていない。

それをすずかが読んでいるのは、今後のためでもある。忍は将来の事を考え、すずかにもファリン達の事を出来るようにしようと思ったのだ。いつまでも自分が一緒に住む事は出来るとは限らないと。

「それって……戦うために生まれたって事だよね」

「でしょうね。ったく、ご先祖様ももう少し考えて欲しかったわ」

可愛い呼び名にしてやればと忍は文句を言いながら、自分が使った古文書の類を引っ張り出す。すずかへの教材として見せるために。忍と違ってすずかは機械方面に強いかどうか分からないが、それでも聡明であると彼女は信じている。

故に自分では思いもよらなかった事を発見、或いは発案してくれるのでは。そう思って、こうして色々と仕込み始めたのだ。キッカケは、すずかがイレインの事を知りたいと言ってきた事。それも、その生まれなどを。

最初、忍はそれを教える事を渋った。しかし、すずかが自分から積極的に何かしたいと思った事を、頭ごなしに止めさせるのもいけないと思い、理由を聞いた。そして、イレインが色々と自分達の事を理解しようとしてくれているのに、自分がそれをしないのは申し訳ないと答えたのだ。

そして、忍はすずかに告げた。綺麗な事だけじゃないと。それにすずかは頷いてみせた。ライダーの話である程度は平気だからと。

（いつの間にか強くなってるのね、すずかも）

成長した妹の姿に喜びを感じ、忍は見えないように笑みを見せる。そして、見つけ出した物を全てすずかに見せ、告げた。これが全部教材だからと。分からない事は教えるし、聞きたい事があれば聞いてくれていい。でも、最初から頼るのは無しだと、忍は言い切ってすずかへそれを手渡した。

それを受け取り、すずかははっきりと頷いた。それに忍は内心微笑みながら、視線をすずかから手元へ移す。それは、忍が最近書き始めたイレイン用のノート。ノエルやファリンと違い、元々戦闘用に作られたイレインは細部が違ったため、こうしてその違い等を書き出していたのだ。

特に大きな違いはＩＳと呼ばれる特殊能力。インヒューレントスキルの略で、イレインの場合は、同型の機体を無線操作する『ダンシングドール』だ。名前はそれを聞いた忍が付けた物だが、イレインも言い得て妙だと納得した。

「……ね、お姉ちゃん」

「ん？」

忍がそんな事を思い出しながらノートを書いていると、後ろからすずかの声がした。それに忍は、何か聞きたい事でも出来たかと思いながら振り返る。だが、すずかはそんな予想とは違う事を尋ねた。

ノエル達は、いつ眠る事が出来るのか。そうすずかは尋ねてきた。それが一瞬忍には、何の事か分からなかった。ノエル達自動人形は、

眠るというより低電力モードに移行し、機能を一時的に停止するだけだからだ。

しかし、そう思った時気付いた。すずかが言った眠るとは”死”を意味しているのだろうと。つまり、いつ死ぬ事が出来るのかと尋ねたのだ。それを死という言葉を使わなかったのは、不謹慎だと思ったのだろうと結論付け、忍は納得した。

そして、同時に困ってしまった。ノエル達の寿命は未だに未知数なのだ。元来長命であった夜の一族と共にある事を前提に作られている事を考えれば、かなり長生きするだろうと思えるからだ。

「……かなり先ね。きっと、私達の孫ぐらいの代でも起きているはずよ」

だから、忍もすずかの表現に合わせた。生きていると返せば、それはすずかの気持ちを踏み躙る。そう考えたからだ。それにすずかも気付き、嬉しそうに笑みを見せた。

「なら、それをまず何とかしないとだね」

「すずか……」

笑顔で告げられたすずかの言葉。それに忍は驚きを隠せなかった。自分が思いもしなかったノエル達の寿命。それに思いを馳せ、その悲しみと辛さを考えた言葉だったからだ。

自然に機能停止まで待つのもいいのだろう。だが、ノエル達を人間と考えた場合、それはどうだろうと。自分を家族と思った者達が死に、その子孫達を見守る。完全なロボットであればいいのだろう。だが、忍もすずかもノエル達をロボットなどと考えていない。

家族。そう考えるからこそ、すずかはそう言った。自分を知る者達が死んでいく中、その子孫を見つめて喜ぶだろうか。確かに喜びもあるだろう。でも、それを補って余りある程の悲しみがあるはず。そうすずかも忍も考えた。

不老不死がどれだけ孤独か。それは、そういう事なのだ。自分と同じ時間を生きた者達が死んでいく。でも、自分は死ねず生き残り続ける。いつかそれは、耐え切れなくなる。元々、自動人形は夜の一族がその孤独を癒すために生まれたのだから。

（まいったわね。私もご先祖と同じだったわ。ノエル達を人だと思うのなら、同じ孤独を味わわせる訳にはいかないものね）

すずかの着眼点に悔しい思いをしながらも、嬉しく思う忍。そして、二人はその後昼食の時間までその事をどうするかの意見を出し合うのだった……

アリサは上機嫌だった。久しぶりに両親が揃って休みになり、三人で外出していたからだ。小次郎も誘ったのだが、親子水入らずで過ごせと言われ、その言葉に甘える事にしたのだ。

今は、三人で買い物の真っ最中。秋物を眺め、色々と意見を出す父親に母親が別の意見を返している。アリサはそんな二人から次々と服を渡され、困惑しながらもそれを着てみせる。

「どうかしら？」

「うむ。似合うな」

「あら、さっきの方が良かったわよ。アリサ、次はこれね」

そう言って別の服を渡してくる母に、アリサは内心少し呆れつつもその笑顔に何も言えない。着せ替え人形だなぁと思いつつ、再び試着室のカーテンを閉める。着替えながら、両親とこうして過ごすのも久しぶりだなと思うアリサ。

だからだろう。さっきからの状況にも怒りより喜びの方が大きいのは。基本会社の経営をしている両親は、家に中々いない。たまに休みになっても片方だけだったり、夜だけだったりと不規則なのだ。

それが、実はアリサの密かな悩み。なのはを始め、親友達はそれぞれの家族がいつも傍にいる。親に兄や姉だ。唯一アリサだけがそうではない。旅行にも一度として家族が参加した事がないのは、アリサだけである。

しかし、それでもアリサはそれを両親に言うつもりはない。不満ではないからだ。自分のために仕事をしてくれている。そして、少しでも時間を作ろうとしてくれているのも、鮫島達からそれとなく聞いていたのだ。

（子供の事を思ってない親はいない。そう、小次郎も言ってたし）

そう、まだアリサがなのは達と出会って間もない頃、二人の家庭を見て羨ましく思った事があったのだ。その時、アリサが言った言葉に小次郎がそう答えたのだ。

――パパもママもアタシなんてどうでもいいんだ。だから、仕事ばかりしてるのよ……

その言葉を小次郎は高らかに笑い飛ばし、告げたのだ。子の事を思わぬ親などおらぬと、そうはっきり断言したのだから。そして、こう言ったのだ。嘘だと思うのなら、他の者に聞けばいいと。

それにアリサは鮫島や他の者達に聞いて回ったのだ。両親が自分との時間を作ってくれないのは何故だと。それに皆が口を揃えて答えたのだ。作らないのではなく、作れないのだ。それは、無理に時間を作れば更に仕事が増え、アリサと過ごせる時間が結果的に減ってしまうから。

それに驚くアリサへ、誰もが絶対にこう続けたのだ。だから寂しいかもしれないが、いつも二人は時間を作ろうとしているのだと。

「ママ、どう？」

そんな事を思い出し、アリサは着替え完了と共に笑顔でカーテンを開けた。それに何かを言い合っていた両親が揃って視線を向け、アリサへ心からの笑顔を見せた。

誉める母と同じように誉めながらもやや不満そうな父。そのやり取りを見つめ、アリサは嬉しく思うもそれを隠して少し強めの声で告げた。

「もう、いい加減にして」

そのアリサの言葉に、両親は揃って黙りごめんなさいと言って謝った。それがとてもおかしくて、アリサは笑った。その笑い声に両親も笑い、三人は楽しくその後も時間を過ごす。決して数多くはない親子の時間。それを、少しでも無駄にしたくないと思いながら……

「今日は大変だったわ～」

「にゃはは、お疲れ様です、お母さん」

帰宅するなり、桃子はそう言ってなのはへもたれかかる。無論、桃子が完全に脱力していれば、なのはは今のような言葉を返す事も出来ず、一緒になって倒れている。

そんな桃子となのはを見つめ、苦笑いの美由希。日曜日とあって忙しかったのだが、恭也とセイバー、それにアルフが奮闘したおかげで乗り切れた。しかし、予想以上にケーキ等が売れたため、桃子はキッチンを奔走。

それを手伝える者は多くないため、桃子はいつもよりも疲労の色が濃かったのだ。セイバーは恭也や士郎と共に店に残って後片付け中。疲れが多い桃子だけ先に帰したのだ。

「ご飯は少し待ってね」

「は～い」

「ユーノももう少しで帰ってくるだろうし、それからでもいいんじゃない？」

桃子の重さを少し感じながら、なのははソファーへと歩く。そして、その近くで桃子へ視線を送ると、それに気付いてソファーへ移動してくれた。美由希はそれに苦笑を浮かべ、弟の帰宅時間を思い出して告げる。

桃子はそれに頷いて、セイバーにも少し我慢してもらおうと呟いた。それに二人は予想を立てる。なのはが我慢出来ると言えば、美由希は我慢しようとするが、五分で決壊と返す。

そんなやり取りを聞きながら、桃子はぼんやりと呟いた。

――セイバーにレシピを教え込んで、お店継いでもらおうかしら……

その発言に二人が驚いた。セイバーは料理が出来ない訳ではない。現に、桃子や恭也が傍について教えれば、ちゃんと食べられる物は作れるのだから。現在、高町家で食事関係が弱いのは美由希だけ。

恭也と士郎はそれなりに出来るし、なのはも簡単なもので良ければ可能。桃子は言うまでもなく、ユーノはその気になればやれない事はない。セイバーは、出来る人間が傍にいるという条件付きではあるが、なのはレベルの腕を持っている。

しかし、お菓子は料理よりもシビア。分量を間違えるだけで味が変わり、時には失敗してしまうのだ。それを誰よりも知る桃子が、セイバーにそれを教えようと言い出した事に、なのはも美由希も桃子の真意を図りかねた。

「……母さん、さすがにセイバーには無理じゃない？」

「そうだよ。セイバー、お料理だってお兄ちゃんに負けてるんだから」

「そうだけど、根気良く教えれば出来る気がするのよ。セイバー、集中力はすごいから」

それに味覚も大したものだし。そう言って桃子は考え込む。それにどう言っていいか分からず、互いを見つめ合う二人。そこへセイバー達が帰ってきた。玄関から聞こえる声に、二人は視線を向ける。

士郎とセイバーが先に現れ、それに続いて恭也とユーノが姿を見せる。ユーノの姿になのはが驚き、美由希は時計へ目をやった。いつもよりも早い事に気付き、その理由を尋ねる美由希。

ユーノは、無限書庫自体に予算が下りた関係で、今日はその使い

道の打ち合わせと人材募集などに奔走していたのだ。スクライアの方へ赴き、何人かに頼み、明日から数人ではあるが整理を手伝ってくれる事に決まったと、ユーノは嬉しそうに答えた。

それと同時に、ユーノはその場にいる全員へ告げた。自分は、四年後の春から無限書庫の司書として働こうと思うと。それに驚くなのは達。だが、士郎と桃子はそれに納得したように頷いていた。

「そうか。決心したのか」

「はい」

「そう。でも、どうして四年後なの？」

桃子のふとした疑問に、ユーノは少しだけ照れくさそうになのはへ視線を向けた。それに首を傾げるなのは。

「学校に行こうと思って、ね。せめて小学校……だっけ？　その間はみんなと一緒に過ごしたいかなって」

「ほんとに!?」

「うん。……いいかな、父さん母さん」

ユーノの言葉に嬉しそうな反応を返すなのは。それにやや照れながらユーノは頷き、視線を士郎と桃子へ向ける。勿論それに二人は反対する訳はなく、ユーノの編入の手続きをしなければと笑みを見せる。

だが、ユーノはそれにこう言った。通うのは来年度からだと。それまでに無限書庫の方をある程度片付けておきたいから。そう告げて。それに全員がユーノへ感嘆の声を上げる。仕事をする男の顔だ

ったからだ。

生意気を言ってと恭也が軽く頭を小突けば、頼もしい弟だねと美由希は頭を優しく撫でる。桃子と士郎は老後の心配はいらないなどと冗談を言い合い、セイバーは成長しているのですねと頷いた。

（……ユーノ君、大人だなぁ……）

なのはは一人そう思い、ユーノへ視線を向ける。美由希に撫でられ恥ずかしがっているユーノだったが、そんななのはの視線に気付いたのか、視線をなのはへ向けた。そして互いに見つめ合う形になったのだが、少しすると何故か照れくさくなってなのはは視線を逸らした。

それを見て楽しそうに笑う桃子。士郎と恭也はどこか複雑だ。セイバーと美由希は微笑みを浮かべ、ユーノは少し意外な表情。

それから桃子が食事の支度をすべく動き出し、助手をしようとセイバーとなのはが動く。だが、なのははともかくセイバーは味見目当てと全員が悟っているので、どこか苦笑していたりする。

そして始まる夕食準備。桃子に色々教わりながら手伝うなのは。セイバーは、手を動かしながら味見がいつかいつかと待っている。恭也とユーノは士郎を交えて今後の鍛錬の事を話し合い、美由希は桃子達の傍へ行き、皿などを出して並べていく。

「それにしても、どうして最近になって料理を覚えようと思ったの？」

「えっと……」

なのはのお手伝いを嬉しく思いながら、桃子はこの所思っていた

事を聞いてみた。それになのははは若干躊躇いながら、視線を泳がせる。しかし、それだけで桃子には十分な答えだった。
だから微笑みを浮かべて頷いた。それになのははは不思議そうな表情を返すが、それに桃子が告げた一言に驚いた。

――お料理出来た方が、男の子は喜ぶものね。

そう、なのはの耳元に囁いて、桃子は笑う。なのははそれに返す言葉が思いつかずに混乱する。そんな様子を眺め、セイバーは美由希へ尋ねた。なのはは何を慌てているのだろうと。それに美由希は少し考えて、小さく笑う。
その笑みがどこか自分を微笑ましく見ているように感じ、セイバーは疑問を浮かべる。すると美由希がにやりと笑って答えた。

「セイバーも女でしょ？　なら、分かるはずだよ」

「む、それは聞き捨てなりませんね。まるで、分からないと私が女ではないと言っているように聞こえます」

「さぁ？　どうだろうね」

そう言って美由希はキッチンから離れていく。向かう先は士郎達のいるリビング。それを追いかけようとするセイバーだったが、丁度それを見計らったように桃子が味見を頼んだ。それに応じ、美由希追撃を断念するセイバー。
一方、なのはは桃子の言葉に頬を赤くしていた。自分が料理を覚えようと思った理由。それは、確かにユーノがキッカケだったからだ。といっても、ユーノに料理を作ってあげたいではなく、ユーノの方が自分より料理が出来る事に衝撃を受けたからだ。
しかし、何故か桃子から言われた言葉に含まれたものは、それ以

外の意図もあるのではないかとなのは自身に問いかけさせた。

（どうしたんだろ。私、何でこんな風にドキドキしてるんだろ……？）

人は知らず恋をする事がある。それを自覚するかしないかは、本人とその相手次第……

――――――

「……そう。話は分かったわ」

凛はそう言って目の前の女性――――バゼットへ頷いた。バゼットの隣にはリニスとアルフがいる。そして、凛の隣には士郎とキャスターがいた。事の始まりは数分前。キャスターが妙な魔力反応を感知した事から始まった。

すぐに凛へ知らせが入り、その反応を追ったところ、バゼット達と出くわしたという訳だ。バゼットは、まず地球は日本へ転移魔法を使って到着。そこから一番魔力反応の大きい場所を目指したのだ。それは当然キャスターの反応。だからこそ、彼女達はこうして出会ったのだから。

そして、凛との再会を喜ぶのも束の間、バゼットは凛達へ相談があると持ちかけた。そして、現在の状況になったという訳だ。フェイトは、なのは達と共に月村家へと行っている。バゼットから同年代の友人がいないと聞いた士郎が、ならばとなのはに頼んだのだ。

フェイトと会ったなのはは、その優しい笑顔で自己紹介。そして、はやてと共に三人で月村家へと向かった。桜はこれでまた賑やかになると思って苦笑しつつ、嬉しそうにしていたのを士郎は思い出した。

「では……」

「まずプレシアだっけ？　母親の体はキャスターにお願いしましょ」

「ま、いいわ。こちらの魔術を知れるのなら対価には十分よ」

凛の言葉にキャスターはそう答え、頷いた。ちなみに、普段と違いキャスターは顔を隠している。士郎曰く”悪の魔術師スタイル”だ。その言葉にリニスが頷き、教えられる事なら全部教えると確約した。それに凛は、こちらの魔術と自分達の魔術の違いを改めて感じていた。

そもそも呼び方からして違うのだ。魔法。そう呼んでいるとバゼットは話し、凛達は揃って驚いたのだから。魔法とは、凛達にとっては容易に使えるものではない力。それが、どうも管理世界と呼ばれる場所では魔力さえあれば使う事が出来、それを秘匿もせず、むしろ教える学校さえあると聞き、眩暈を感じたぐらいだった。

（まぁ、出来る事は魔術と大差ないのもあるみたいだけど、ね）

簡単に聞いた話では、バゼットはそう感じたらしい。しかし、凛もキャスターも興味は尽きなかった。何せ、家毎に受け継ぎ守る事が基本の魔術師と違い、魔法は誰でも使え、それを全員で磨き上げているようなものだからだ。故にその派生は多く、また様々だ。

もし、自分達の世界に帰った際にこちらの魔法が使えれば、それは他に大きな差を付ける事になるのだから。それに、上手くすれば凛の場合は、『宿題』を解く大きなキッカケになるやもしれないのだ。

「あの……それでアリシアの方は？」

「そっちは少し厄介だけど、何とか出来ると思うわ。さすがに私だけでは無理だけど、キャスターがいれば大丈夫」

リニスの窺うような声に凛は笑みさえ浮かべて言い切った。それにキャスターも頷き、リニスとアルフは揃って安堵したのだから。バゼットはだから言ったでしょうと呆れるように言い、士郎と凛は

そんなバゼットを見て変わってないと思って小さく笑った。
そして、そこへ桃子が人数分の紅茶を運んできた。そう、夫である士郎の怪我をキャスターが治したため、彼女は翠屋に完全復帰を果たしていたのだ。

「はい、これどうぞ」

「あ、すみません桃子さん」

「もう、気にしないでいいって言ったのに……」

士郎と凛は揃ってすまなさそうな顔。反面キャスターは隠していた顔を出し、にこやかに笑みを浮かべて紅茶を受け取った。

「ありがとうございます、桃子さん」

「い～え、メディアさんにはあの人がお世話になりましたから」

キャスターは、桃子達には真名の方で名乗っている。士郎達はその理由を聞いて呆れたのだが、キャスターは葛木メディアと名乗りたかったとの事。故になのは達もキャスターさんではなくメディアさんと呼んでいる。
士郎達としても本人が望んでいるのならとメディアと呼ぼうとも考えたのだが、やはり馴染めずこうしてキャスターと呼んでいる。ちなみになのは達へは愛称みたいなものだと説明し、納得させた。

「それにしても……」

桃子はそう言って周囲を見て苦笑した。そして、士郎に向かって一言。

――士郎君の知り合いって、美人さんばっかりね。

その言葉にリニスとアルフが照れ、バゼットは社交辞令とでも思っているのかそんな事はないと返して紅茶を飲む。キャスターはそれにお決まりの返しである桃子も美人だと告げ、そこで花咲く奥様の会話。

凛は桃子の言葉がある種の真実と思い、士郎へ視線を向けた。それに気付き、士郎は不思議顔。

「どうした？」

「……あんた、頼むからあまりリニスやアルフと接触すんじゃないわよ」

「……色々と言いたい事はあるけど、分かった。あまり世話を焼かないようにする」

「よろしい」

模範解答ではないが、及第点だ。そう思い凛は笑みを見せて頷いた。士郎はそれに小さくため息を吐き、視線を天井へ向けた。

（俺、そんなに好かれるような事するか……？）

人間、意外と自分の事は分からないものである……

一方、月村家では新たに加わったフェイトを交え、五人が仲良く

話をしていた。魔法の事を黙っていようとも考えたフェイトだったが、既に凛やキャスターといった魔術師と接点を持ったなのは達は、むしろ魔法の事を詳しく聞きたいとなり、絶賛魔法世界の話をしているところだった。

「……で、私は魔力で電気を作る事が出来るんだ」

「凄いね～」

「電気かぁ……電力会社に就職すれば安泰やな」

「違うでしょ！」

「そうだよ。むしろ、会社作る方がいいんじゃ？」

「すずかっ？！」

素直に感心するなのは。それとは違ってボケるはやてに突っ込むアリサ。だが、それに乗っかるようにすずかまで軽くボケた事で、アリサの顔に驚愕の色が浮かぶ。そんなやり取りにフェイトは軽く呆然となった。

疑うとどこかで思っていたのだ。魔法を知らない者に魔力変換の話をしても信じるはずはないと。だが、考えてみればなのは達は揃っていきなり人が現れるという珍事を経験している。故に、今更魔法だとか言われてもなのは達にとっては、そんなものがあるんだ程度でしかない。

そんな風に騒ぐ五人を見つめ、桜達は微笑んでいた。どこか内気なすずかが、こうして騒ぎの要因にもなるぐらいになった。それは、忍達からすれば劇的な変化だ。自分の体の事を悩んでいるのは相変

わらずだが、それでも少しずつではあるが前向きになってきているのは、月村家の者達全員の共通認識。

「賑やかね」

「ふふっ、フェイトちゃんが少し置いてかれてますね」

「大丈夫ですよ。ほら……」

ノエルがそう指を指す。すると、フェイトの様子に気付いたアリサが、はやてとすずかに何とか言ってやれと話を振った。それに若干戸惑うものの、フェイトははやてとすずかに対してこう告げた。

「で、電力会社って何？」

「「そこか！」」

その発言にはやてとアリサが揃って突っ込んだ。それを聞いてなのはとすずかが笑い出す。あまりにも息がぴったりだっただけではない。フェイトは二人の返しに戸惑うような表情を見せているのだから。今も首を左右に振りながら、疑問を浮かべている。

ミッド生まれのフェイト。だが、彼女は物心ついた時から時の庭園住まい。つまり、魔法の常識は知っていても暮らしの常識には疎い部分があった。電気は知っていても、それを供給して商売をしているなどとは思わなかったのだろう。

フェイトの疑問に、なのはとすずかが説明を開始したのを見て、はやてとアリサが揃ってため息。悟ったのだ。フェイトが天然と呼ばれる性格の人間だと。故に、これからフェイトが苦労するだろうと考えてのため息。

そして、そんな五人の雰囲気を見つめてファリンがぼそりと呟いた。

「フェイトちゃん……こっちに引っ越してきたりしないですかね？」

「……聞けば、桜さん達のお知り合いも一緒とか。どうでしょうかお嬢様、当家でしばらく滞在して頂くのは？　ご友人になってすぐにお別れというのも……」

ノエルの発言に桜が驚く。まさかそんな話になるとは思わなかったのだ。しかし、桜が何か言う前に忍が笑みを浮かべて桜へ視線を向けた。

「すずか次第……ってとこでどう？」

「……もう、それじゃあ決定したようなものですよ」

桜はそう言って苦笑。だが、その内心は嬉しさで満ちていた。もうすぐ学校へ通うすずか達。そこへフェイトも加わる事が出来れば、きっと楽しくなるだろうと思ったのだ。そんな事を考える桜を見て、忍達も笑みを見せ合う。

夜の一族である自分とすずか。それを桜だけでなく、姉である凛や士郎も受け入れてくれた。どうも聞けば桜達の世界にいる吸血鬼はもっと恐ろしい存在らしく、忍達の種族はまだ可愛いものだと揃って笑ったぐらいだったのだから。

（でも、その言葉がどれだけすずかの……ううん。私達の心を軽くしてくれたか、知っている？　桜さん）

恐怖も嫌悪もなく、忍は忍と受け入れてくれた桜達。残念だった

のは、士郎には既に凛という恋人がいるために、忍は別の伴侶を捜さねばならない事。そう、忍としても士郎の事は気に入っていたのだ。

（でも……な～んか桜さんも狙ってる気がするのよねぇ……）

凛と士郎が仲良くしているのを見て、桜がどこか寂しそうになるのを忍は知っている。姉妹で同じ男を好きなのか、と忍としては興味は尽きないところではあるが、それをあまり深く追求すると自分の身が危険だと感じているのだ。

それに、凛とは年が近く性格なども似ているせいで、親近感を強く感じているのもある。忍としては、このまま凛と士郎が幸せになって欲しいとも思ってしまう。だが、桜が士郎と幸せになって欲しいとも思う。

「……何か、上手い解決法はないかしら」

そんな忍の呟きは、五人の笑い声にかき消されるのだった……

遠くで鳴る鐘の音。それを聞きながら、カレンは視線を隣の男性へと移した。その相手であるティーダは、黙ってハンドルと握っている。今、二人は式場の見学を終えたところだったのだ。教会がいいとカレンが告げると、ティーダはその理由を深く聞かずに頷いてくれた。

そして、ここベルカ自治区にある聖王教会を尋ね、予約を取り付けたという訳だ。応対してくれたシスターが、何故か自分に妙な視線を向けていた気がするが、カレンは彼女と会った事もなければ聞いた事もない相手だったので、特に何も言わず過ごした。

「……来週、ドレスの仮縫いに行って来ます」

「分かった。なら……」

「貴方には仕事があるでしょう。それとも何ですか？　まさか私のために無理矢理休むとでも？　執務官補の貴方が？」

カレンはやや楽しそうに笑みさえ浮かべて告げた。ティーダは真面目だ。特に最近は念願の執務官試験に合格し、仕事に精力的取り組んでいる。それを知るからこそカレンはそう言ったのだ。ティーダが悩み苦しむだろうと考えて。

しかし、そのカレンの問いかけにティーダは予想外の回答を返した。

「ああ。仕事より君を大切にしたいからな」

その一言には、躊躇いも迷いもない。カレンに対して真摯に向き合おうとティーダは考えている。それだけの事を自分はしたのだから。故に、迷わない。仕事とカレン。どちらが大切かと問われれば、今のティーダは即答でカレンと言えるぐらいに。

そんなティーダの答えにカレンは呆気に取られたまま、ただその顔を見つめた。しかし、その見つめる表情には、僅かだが朱が入っている。本当ならば、カレンはティーダの申し出を受ける気はなかった。だが、ティーダが責任を取ると言ったのを聞き、それをどこまで貫けるか見てやろうと思った。だから、カレンはティーダと結婚する事にしたのだ。

だがどうも、この分では本当にティーダは自分へ責任を取り続けるだろうとカレンは感じた。その瞬間、どこかそれが悲しく思え、

カレンは顔を伏せた。しかし、次の瞬間には何か思い直したように顔を上げる。

（……何故でしょう？　こんな事は初めてですね。私が相手の行動で心が沈むなどと……）

ティーダはずっと自分に対して責任という名で接し続ける。それは、愛でも優しさでもない。そう考えたのだ。そう考えた途端、何故かカレンは心が沈んだ。それについて、カレンは自分の事で苦しみ悩むティーダが見れないからだろうと納得させる事にした。

それ以外の理由など欠片も思いつかなかったのだから。そう、思いつくはずがないのだ。カレンにとって、それ以外の理由などあるはずはない。彼女が好意というものを寄せた相手は、皆どこか人として壊れているかおかしい者なのだから。

「そうだ。ティアナから返事が来たよ。出席してくれるそうだ」

「……そうですか」

「いい式にしような」

そのティーダの言葉にカレンは何も言い返せなかった。いつもならば、皮肉やからかいの一つでも出てくるはずのカレン。しかし、その時だけはそのティーダの言葉を心から噛み締めたかったのだ。そんな衝動に駆られてしまった。

それがカレンには分からない。だが、それでもカレンは構わなかった。たまにはそんな事もあるだろう。そんな風に自分を納得させ、カレンは視線を外に向けた。広がる青空を眺め、カレンは小さく呟いた。それは、無意識のもの。

――幸せになれるのでしょうか、私は……

「「言峰さ～ん！」」

「……スバルとギンガか。今日はどうしたのだ。仕事は休みかね？」

ベルカ自治区の森。そこに言峰の家はある。本来ならば、彼も修道騎士として宿舎に寝泊りしていたのだが、カリムへ無理を言ってつい最近それを免除してもらったのだ。だが、それは表向き。事実は、ジェイル達との接触をし易くするためだ。

勿論、それをカリムは知らない。しかし、言峰が初めて自分へ要望を出した事には何か嫌な予感を感じてはいる。だが、カリムと言峰ではやはりその辺りの巧妙さが違う。故に、未だに言峰はカリムにジェイルとの接点どころか、興味を持っている事さえ気付かれてはいないのだ。

「うん。ギン姉と話してね」

「休みを合わせたんです。言峰さんに会いに行こうと思って」

そう言って笑みを見せる二人。小さな頃、研究施設から助け出してくれた存在である言峰。その後、少し共に暮らしたのだが、言峰はクイントから聞いた聖王教会に興味を持ち、二人とは別れた。それからしばらく会う事はなかったのだが、あの空港火災でスバルは局員になる決意を固めた後、言峰に師事したのだ。

魔法を使わずに魔導師を倒せる言峰。その格闘術を教わろうと。クイントから教えてもらったシューティングアーツと、言峰の太極拳を始めとする中国拳法を習得したスバルは、ギンガとの手合わせ

でそれを披露。結果、ギンガはスバルの発剄に敗北。そして、ギンガも同じく言峰から中国拳法を教わる事にしたのは言うまでもない。

今日もそのために来たのだ。言峰から手ほどきを受ける。そのために二人は揃って仕事の休みを取った。それは、抜け駆けをしないため。そう、実はスバルもギンガも言峰から何か特別な技を教えてもらうとした事があった。そして、それを互いに言峰から聞いて話し合ったのだ。

共に同じように教えてもらい、そこから先は自分達自身で磨き上げようと。それでも、言峰が気紛れで何か教える事もあるだろうからと、二人は1こうして休みを合わせて来るようにしたのだから。

「で、早速だけど……言峰さん！」

「手合わせ……お願いします！」

二人はそう言って構えた。言峰はそれに小さく笑みを見せると、静かに構える。それに一瞬だが喜びを見せる二人。

「はっ！」

しかし、それを見逃さず言峰が動く。以前ならこれでスバルかギンガは一本取られ、敗北していただろう。だが、今の二人は違う。言峰のそんな行動にも慣れたもの。不意打ちに動揺する事もなく、即座にその場から離れて距離を取る。

そして、スバルは息を吐きながらゆっくりと腰を落とした。ギンガは、言峰の懐に入るべく走る。そんな両極端な二人に対し、言峰が取った行動は……

「セット」

ジェイルに作らせた専用デバイス『レギオン』を起動させる事だった。両手に出現するそれは、黒鍵を模した物。ただ、特殊な機能などは一つとして備わっていない。唯一の特徴は、使い捨てを前提としているために、ある用途で使うと恐ろしい力を発揮する事だろう。

それに、そのために言峰は同じデバイスをいくつも所持している。故に、レギオンなのだ。名の由来。それは、聖書から取ったのだから。

「「デバイス？！」」

それを知らない二人には、言峰の手に突然現れたレギオンは警戒心を生むには十分だった。それを見逃さず、言峰は右手に持ったレギオンをギンガ目掛けて投擲する。更に左手のレギオンを発剄を狙っているスバルへ投擲。

それに二人が僅かにだが呼吸を乱す。それを言峰が狙わないはずはない。まず近くにいたギンガへ掌底を当て、素早くスバルへと接近する。それに気付きスバルが繰り出した拳を紙一重で避け、その腕を極めて落とす。その痛みにスバルが意識を逸らした瞬間、追い打ちとしてその首筋に手刀を一撃。

ギンガが体勢を立て直した時には、もう勝負は着いていた。スバルは意識を刈り取られ、自分の目の前には言峰が悠然と立ち塞がっていたのだから。それでも、ギンガは諦めなかった。そこから言峰へ攻撃を開始する。

素早く右回し蹴りを繰り出すが、それを言峰は避ける事もせず受け止めた。本来ならば、ギンガの力を言峰とて受け止める事は出来ない。しかし、それは魔力を使い身体強化していればだ。今、ギンガ達は魔法を使わずに組み手をしている。

その理由。それは、魔法を何らかの理由で使えなくなった時こそ、己の真価を問われると考えているため。安易に魔法による力を使うのではなく、普段から自分だけの力で力をつける。そのために二人は身体強化の魔法を施していなかったのだから。

「くっ！」

「言ったはずだぞギンガ。勇気と無謀は違うと」

「それでもっ！　退けない時があります！」

言峰の突き放すような言葉にギンガはそう返し、地に着いた左足で蹴りを放つ。しかし、それを読んでいたのだろう。言峰は掴んでいた右足を離し、ギンガのバランスを崩す。それにギンガは慌てる事無く両手を地面につけ、再び両足で蹴りを放つ。

それに言峰は少し感心したように声を漏らしながらも、冷静にそれを回避してギンガの手を蹴り飛ばす。そしてギンガが倒れる前に、言峰はその鳩尾へ強烈な一撃を叩き込んだ。

それでギンガが意識を失ったのを確認し、言峰はスバルへと視線を向けた。それにスバルの動きが止まる。そう、彼女は意識を取り戻して言峰の虚を突こうと、ギンガとの戦いに加わろうとしていた。だが、思いのほか言峰がギンガを早く倒してしまったため、呼吸を一瞬乱した。それを言峰が気付き、現状と相成ったのだ。

「……続けるかね？」

「……参りました」

スバルは潔く敗北を認めた。ここで立ち向かっても勝ち目はない。退くも勇気と教わっているスバルは、そう判断した。ギンガのように退けない時は立ち向かうが、今はその時ではない。だからこそ、スバルは負けを認めたのだから。

「さて……では昼食とするか」

「あ、じゃアレが食べたいです！」

スバルのアレとの言葉に言峰は頷き、ギンガを抱え上げて家の中へ歩き出す。スバルはそれについていき、笑顔を浮かべていた。

そして、しばらくしてギンガが目を覚ました時、スバルは言峰特製のマーボーを食べているのだった……

「はい、これですね」

「わぁ……ありがとうございます！」

キャロは手渡されたデバイスを見て、嬉しそうに身につけた。それは、手袋型のブーストデバイス。名を『ケリュケイオン』という。イリヤが本局でも屈指のデバイスマイスターに作ってもらった、珠玉の一品である。

「ありがとマリエル。キャロにぴったりよ」

「あはは、イリヤちゃんが結構資金を弾んでくれたからね。いい仕事させてもらいました」

マリエルの言葉にイリヤは笑みを返し、キャロを見た。キャロはフリードに自分の専用デバイスを見せて嬉しそうに笑っていた。

「……さ、じゃ行きましょう」

「うん。ありがとうございましたマリエルさん」

「どう致しまして。定期的にメンテするから、また来てね」

「はいっ！」

「キュク～」

元気良く答え、キャロとフリードはイリヤの隣へ寄り添うように駆け寄り、歩いて行く。それを見送り、マリエルは苦笑。何せ、イリヤは一般局員の給与一年分を提供したのだ。それで作るのが、大切な友人へのデバイスと聞けばマリエルが燃えない訳がない。

先日フェイトから頼まれた槍型のデバイス『ストラーダ』と共に、自分の持てる力を使って生み出した自慢の子なのだ。マリエルはそんな事を考え、ふと気になった事があった。それは、イリヤの事。彼女は自分のデバイスはいらないと言った。

その理由は、デバイスを必要としないからなのだと。それを聞いてマリエルは疑問に思った。そう、彼女の知り合いにもいるのだ。魔法のような事が出来るにも関らず、デバイスを必要としない者達が。

（凛さんや士郎さんと同じで、デバイスをいらないと考えてるのかな？）

凛は邪魔と告げ、士郎は使えないからと断られたのを思い出し、

マリエルは苦笑。それは、もう何年も前の事なのだ。まだ闇の書事件が終わって間もない頃。その当時の事を思い出して、懐かしく思った。

そして、そのままマリエルはコーヒーを淹れて、少し思い出に浸るのだった……

その頃、イリヤとキャロは本局内を歩いていた。滅多に来る事のない本局。二人は軽く迷いながらも、転送ポートへ向かっていた。

「マリエルさん、優しい人だね」

「まあ、確かに優しいわね。上司のレティ提督は少し厳しい感じの人だけど」

会話しながら歩く二人。ちなみに格好は普段の民族衣装然としたものではなく、陸士の制服を着用している。女性用なので見た目の違和感はないのだが、着ている本人達にしたら違和感しかない。

特にイリヤは窮屈そうな表情を浮かべている。これでイリヤが陸士の制服に身を包んだのはたった三回目。最初は自然保護隊での初日。次はマリエルへの依頼のため。そして、今回となっている。

「そうなんだ。セラさんとどっちが厳しい？」

「そうね……いい勝負かも」

そう言って笑うイリヤ。キャロもそれに笑みを返す。イリヤから聞いた冬木での話は、キャロにとってはおとぎ話にも近いものがあった。何でも願いを叶える聖杯。それを手に入れるために七組の魔

術師と英霊と呼ばれる存在が戦う儀式。
イリヤはキャロへそう説明した。殺し合うという表現を使わなかったのは、彼女自身がいた場所の状況を考えてである。誰も死んでいない。消えてもいない。そんな状況を見たのだ。だから、真実を話していないが嘘も言っていない。

その後も、二人は転送ポートに着いた後も話し続けた。話題をこの前の休暇に訪れたアルザスの事に変えて。相変わらず宿屋夫婦は元気だった。二人が顔を出すと一瞬驚いた表情を浮かべたが、すぐに笑顔でお帰りと言って迎えてくれたのだ。
そして、たった二日だけだったが二人は宿屋の仕事を手伝ったりして、昔を思い出していた。自然保護隊で鍛えた料理の腕をキャロが披露し、二人から誉められ、イリヤはそれに対して自分が厳しく意見したからだと告げ、二人から苦笑された。

「……楽しかったね」

「そうね。でも、何かお休みだった気がしなかったけど……」

「二人して働いてたもんね」

「ま、おじさんもおばさんも元気そうだったからいいけどね」

共に笑顔で話しながら見慣れたスプールスの森を歩く。目指すは今の家。保護隊の隊舎だ。静かな森を歩き、二人はこの後の事を考える。読書をして過ごすも良し。フリードの背に乗り、空の旅を楽しむも良し。そんな事を話し合いながら二人は行く。
二人は知らない。これから向かう先には、二人にとって運命の出会いとも言える存在が待っているなどと……

陸士１０８。そこは今、不気味な程の静けさを見せていた。いや、正確には隊舎全体ではなく一室。応接室にいる者が原因だった。葛木はメガーヌへ話があると言って呼び出した。それにゲンヤが応接室を貸し出したのだ。

無論、それが単なる好意ではないと葛木は理解している。だが、それをどうこう言うつもりはなかった。例え、今の自分達の様子を外からクイントが興味深々で見ていると知っていても。

対するメガーヌは緊張していた。葛木に対し、妻と思って欲しい発言をした後、メガーヌは彼の顔をまともに見れなくなっていたのだ。そう、強く意識してしまったのだ。自分が葛木を愛してしまっていると。

相手には心から愛する女性がいる。そう知りながらもメガーヌはその想いを抑える事が出来なくなっていた。いや、むしろいるからこそなのかもしれない。人は、他人のものほど良く見えるという意味の諺もある。葛木はそれでなくてもメガーヌからすれば魅力的な男性だ。だから余計に、メガーヌは葛木が良く見えてしまっているのかもしれない。

とにかく、メガーヌは葛木の話というものがそれに関する事だと察していた。

「……この前の話だが」

「っ！」

来た。そう思い、メガーヌは葛木の声を聞き逃すまいと身構えた。

「夫と思ってくれて構わない」

「え……？」

葛木の発言にメガーヌは思わず拍子抜けの声を出す。そう、それはメガーヌが予想しなかった答え。決して聞けるはずないだろうと思っていた言葉だったのだから。

そんな風に戸惑うメガーヌへ葛木は更にこう告げた。それを聞き、メガーヌは言葉を失った。それは、その前の言葉を忘れる程の言葉。

「ただし、キャスターと再会した瞬間には他人に戻ってもらう。それまで何があっても、一切の関係はなしにしてもらおう。それが条件だ。これが飲めないのなら、今まで通りに接して欲しい」

それを聞いて、メガーヌは葛木らしくないと感じた。そして、何故だがその葛木の後ろにゲンヤの姿を見た気がした。

（そうか……これはゲンヤさんの案だわ）

葛木ならば受け入れる事無く拒み続ける。だが、葛木は条件付きとは言え受け入れると言った。しかし、それは期限付きのもの。それも、どれだけ親密になろうと、葛木が妻と再会した途端無かった事にしなければならない。

それは、優しいように見えて一番残酷だ。何せ、葛木の妻はいつ現れるか分からない。明日にも現れるかもしれないのだ。つまり、メガーヌは常にいつ現れるともしれないキャスターの存在に怯え続けないといけない事になる。

「……今まで通りって、ルーテシアにもそうしてくれます？」

「無論だ。世話になっている礼もある」

「……お礼、ですか。やはり、どこまでいっても私達の関係はそれでしかないんですね」

そう呟いてメガーヌは力無く笑う。それは諦め。目の前の男の心を動かす事は出来ないと、そう悟ってしまったのだ。もし、自分が最初に会っていれば分からなかっただろうが、それは言い出せばきりのない話だ。

今言える事は、葛木は自分を愛してはくれないという事。そして、今の関係が一番葛木が望ましいものだという事だ。故にメガーヌは一度だけ大きく深呼吸をし、笑顔を浮かべて告げた。

「じゃ、これからもよろしくお願いしますね。”葛木先生”」

「……こちらこそ変わらず世話になる。”アルビーノさん”」

その呼び方。それはもう男女ではなく、ルーテシアの先生とその母親という関係でいようという遠回しの宣告。それを汲み取り、葛木もそれに応えた。こうしてメガーヌの想いは散った。だが、それを悲しむメガーヌではない。後にメガーヌはキャスターと会った際、こんな事を頼むのだ。

――男の子が産まれたら、ルーテシアの許婚にしてくれませんか？

それにキャスターが言葉を失う事になるのは言うまでもない……

――――――

A-s八話　前編

騒がしい教室。終礼が終わり、帰る者やこれからを話し合う者など様々な声が飛び交う中、なのはは少し嬉しそうに帰り支度をしていた。今日は金曜日。明日明後日と休みなのだ。

それに、昨夜久しぶりに行なわれたヴィータとの魔法訓練で、帰り際にヴィータから明日泊まりに行きたいと言われ、なのはは二つ返事で了承した。ヴィータと仲良くなったとなのはは思っていたのだが、泊まりに来るのは初めてだったからだ。

（今日はヴィータちゃんと遅くまで起きててもいいよね。何しよっかなぁ？）

今夜の事を考え、なのはは弾む気持ちで荷物を纏める。そんななのはを見つめ、すずかとアリサ、そしてフェイトは苦笑した。今日は事ある毎になのはがそういう反応をしていたのだ。

「なのは、あんたさっきからずっと顔が緩みっぱなしよ」

「ふぇ？」

「ふふ、そんなに嬉しいんだね。ヴィータちゃんが泊まるの」

「私は、いつかアリシアが同じ事頼みそうで困るなぁ……」

フェイトはそう言って困り顔。今日の話をアリシアが聞けば、必ず羨ましがると予想出来たからだ。八神家ではやての次にアリシアと仲が良いのはヴィータ。今でも勉強を終え、残りの時間を良く遊んで過ごしている。そんな話を毎晩聞いているため、フェイトはそ

う考えたのだ。

アリシアは、基本行動的だ。そして、夜更かしが好きである。そのため、きっと自室にゲーム機があるなのはの部屋に泊まろうものなら、夜が明けるまでゲームをする。

しかも、それになのはをつき合わせて。それを危惧し、フェイトは困ったのだ。どうやってアリシアの夜更かしを程々にし、なのはへの迷惑を抑えようと。

そんなフェイトはフェイトで、休み明けからシグナムと剣術の手合わせをしている。月曜日にフェイトが頼みに言った所、シグナムは教えるのは得意ではないがと言いながら、その頼みを承諾。その日から毎日夕食後に、高町家道場を借りやっている。しかも、今日はシグナムが稽古終わりに二人だけで話があると言っていた。そのため、フェイトとしては帰りが遅くなる事で、アリシアが不満を述べないかだけがやや不安だった。

そんな事を話しながら四人は歩く。土曜と日曜に何をするかを話しながら、なのは達は笑う。アリサは、明日はやてから話があると言われているのでそれに使い、日曜は美由希と小次郎を連れて買い物へ。すずかも同じくはやてに話があると言われていて、日曜は忍と機械の勉強。というのも、いずれ自分にも必要になる知識なのだとなのは達には説明した。

フェイトは土曜と日曜の予定そのものが未定。おそらく魔法の訓練と剣術稽古に費やすと答え、アリサが呆れ、すずかとなのはは苦笑。なのはは翠屋の手伝いでもしようかなと答えた。

そして、なのは達に同時に起きる疑問。何故なのはとフェイトにははやてからの誘いがなく、アリサとすずかにはあるのかという事。しかし、それに答えを見つけたのは、アリサだった。アリサとすず

かに共通するのはペット持ち。
そして、はやてにも毎朝来る猫がいる。それ関係の話だろうと。
それになのは達も納得。確かにそれなら話が分かると。更にはやてが指定したのもすずかの家。出来ればそこでと。

「きっと、猫の事で聞きたい事が出来たのよ」

「もしくは、ペットを飼う上で知っておいた方がいい事かも」

そうアリサとすずかが笑顔で言えば、なのはとフェイトもそれに頷いて言葉を返す。

「みーちゃんって飼い猫だよね？」

「うん。だから、すずかの家の猫を貰おうかなって思ったのかな」

その後もなのは達は色々と話しながら、校門前でアリサとすずかと別れ、それぞれ帰路へ着く。先月よりも日の落ちるのが早くなったと感じながら、なのはとフェイトは歩く。話題は互いの訓練について。
なのはがヴィータから魔力使用の効率化を教わっていると言えば、フェイトはベルカ式の剣術を少しずつだが覚えてきたと返す。今度の模擬戦は互いのコンビでやろうかなどと言って笑う二人。

「ミッド式対……」

「ベルカ式のコンビ戦」

「……きっとシグナムさんがノリノリで参加するね」

「ヴィータも、何だかんだ言って参加してくれそう」

二人の脳裏に浮ぶ嬉々として頷くシグナムと、ぶつぶつ言いながら参加するヴィータの姿。それがあまりにも違和感がなく、二人はつい小さく笑ってしまう。そして、互いの家への分かれ道で手を振って別れる。今日は、アリシアをランサーが迎えに行く事になっているので、フェイトが迎えに行く必要はなかったのだ。

フェイトと別れて歩きながらなのはは思う。フェイトは新しい力を手に入れ、それを磨いている。自分も、何かスターライトを磨くか、別の何かを考えなければ埋めた差が広がってしまうなと。

（魔法のバリエーションは……すぐには無理だし、もう結構やった。なら、後出来そうなのは……）

【レイジングハート、何か良い強化案とか考えある？】

周囲を気にし、念話を使うなのは。相手は頼れる友。自分には良い考えが浮びそうにないと判断したため、意見を求めたのだ。それに反応し、レイジングハートは少し考えたのか、やや間を置いてこう告げた。

”簡単なのは、バルディッシュのような改良を受ける事でしょうか”

【あ～、ヴィータちゃん達と同じカートリッジだね。あれ、確かに便利だもんねぇ】

なのはは初めてヴィータと訓練した時の事を思い出す。ヴィータが使っていたカートリッジに興味を持ち、それを使うと何が変わるのかを尋ねたのだ。それにヴィータはやや困った顔をしたが、自分

の魔法を使い証明してくれた。
カートリッジを使わない状態では、なのはの展開する防御魔法にそこまで衝撃を与えられない。だが、カートリッジを使うと、それがかなりの威力を持ってなのはを襲ったのだ。

それでヴィータが言ったのは、カートリッジを使うと、魔力を底上げして威力などを一時的に高めてくれる効果があるとの事。それになのはは納得し、頷いて文句を言ったのだ。自分はそんな付加効果なしでヴィータと戦っているのにと。
それにヴィータは一瞬だけ口ごもるが、装備してない方が悪いと一蹴した経緯があった。そこまで思い出し、なのはは笑う。そして考えた。本当にそれしかないのだろうかと。

【……ね、レイジングハートはそれがいいと思う?】

”現状では”

【う～ん……なら、今度リニスさんかプレシアさんに聞いてみようか】

”それがいいかと”

そうしてなのはは自宅の門をくぐる。なのはが帰宅して少ししてからヴィータが来る事になっている。それに備え、色々と準備しようと表情を綻ばせて……

人として、友として　前編

「美味しかった？」

「おう。アーチャーのと同じぐらいな」

夕食を終え、なのはの部屋で寛ぐヴィータ。今はお風呂の時間まで楽しくゲームの時間。セイバーもとなのはが誘ったのだが、セイバーはそれを遠慮した。今日は二人で楽しんで欲しいと。それになのはは礼を述べ、こうしてヴィータと二人で過ごしていた。

対戦に始まり、協力系の物へ変えたりしながら、二人は楽しそうに会話する。そして、いつもなら訓練をしている時間を過ぎ、それを終わらせる頃になった時、なのははふと気になった事を聞こうと思い、ヴィータへ尋ねた。

「そういえば、どうして急にお泊りしたいなんて思ったの？」

「っ？！　あ、あれだよ。訓練とかで付き合いあるからさ、たまにはいいかなって」

「そうか。……そういえば、アリシアちゃんとお泊りした事ないな～」

「なら、今度誘ってやれよ。はやては一昨日してたぞ」

そう、はやてはアリシアを誘い、二人だけのお泊り会を行なったのだ。それがどれだけ楽しかったのかは、フェイトを通じてなのはも聞いている。何でもかなり遅くまで話し合っていたらしく、話題はほとんどゲームやマンガだったとフェイトが苦笑していた。

それを思い出してなのはは苦笑。自分は話ではなく、そのものを

やれる環境にある。そうなれば、夜明けまでゲームをしかねないと考えたのだ。ヴィータにそれを話すと、ヴィータも笑って同意した。

「それ、あたしも誘えよ。三人なら別の事にするだろうから」

「あ、そうだね。トランプとかならまだいいかな？」

「で、考え過ぎて眠くなると……」

「にゃはは、どうする？　意外と最初に寝るのヴィータちゃんだったりして」

「んだと～」

ゲームを一時停止し、なのはへ襲い掛かるヴィータ。それに楽しそうな悲鳴を上げるなのは。そんな二人のじゃれ合いは、そこからしばらく続くのだった……

高町家　道場。その中から聞こえる打ち合う木刀の音。それを出しているのはフェイトとシグナム。元々は、シグナムは竹刀を使おうと思っていたのだが、フェイトが重さがある方が訓練になると言って木刀にした経緯がある。

カリバーフォームを意識した稽古は、本来ならばセイバーが一番適していると二人は思っている。だが、セイバーは魔法を使って戦わない。そのため、純粋な剣技だけで戦う訳ではないフェイトに、総合的な助言を与えるにはシグナムの方が適任となった。

まぁ、以前なのはから言われた事もシグナムへ決定した要因であ

るのだが、それを生憎本人は知らない。打ち合いながら、フェイトは思っていたよりもシグナムが教えるのが下手ではないと感じていた。

始めてまだ一週間にも満たないが、それでも動きが良くなったと感じる事が出来たからだ。カリバーフォームがレヴァンテインに近い長さなのもあり、シグナムの経験や動きは本当に参考になっていたからだ。

しかし、それはシグナムが教える事が上手いからではなく、フェイトもどちらかと言えば頭よりも体で覚える人間だった事が影響している。今もシグナムの体の動かし方や切り返し方などを見て、自分なりに模倣していた。

その学習能力に感心するシグナムだったが、伊達に騎士を名乗る訳ではない。フェイトの素早い動きにやや苦戦するが、それでも捉えられないものではないとばかりに、手にした木刀でその攻撃を防いでいく。

「……やっぱり、今の私じゃ届かないんですね」

「魔法無しでは、な。速度も中々目を見張るものがあるが、私には見える。かと言って打ち合えば、今のお前では勝ち目はないぞ」

一旦距離を取って告げたフェイトの言葉に、シグナムはそう答えた。そこには力量不足だけではなく、体格差もあると暗に告げていた。

それを理解し、フェイトは悔しそうに唇を噛む。自慢のスピード。それがシグナムには通用しない。しかも、まともに打ち合えば確実に力負けする。

（力を増す事は出来ない。それを加える速度も、今のままじゃ足り

ない。何か、何かシグナムよりも勝る部分は……）

絶対に勝てない相手ではない。それは、シグナム自身が認めている。可能性はある。だが、それを掴むための何かがフェイトにはない。魔法ありの手合わせでもそれは言われている。

唯一フェイトが自信を持ってシグナムに勝っているとすれば、それは速度。動きの速さだけは完全に上をいっている。だが、それが今は僅かな差でしかないため、対処され易くなっているのだ。

その事に思い当たり、フェイトは首を横に振った。可能性がある部分なら、考えて道を切り開かないといけないと。絶対勝てない訳ではないのなら、死力を尽くして打ち倒せ。そうランサーから教えられたのだから。

「……あっ」

「どうした？」

「あ、その……ちょっと待ってくれますか？」

「あ、ああ……」

急にフェイトが何か思いついたのか、考え込み始めた。それを眺め、シグナムは戸惑うものの黙って見守る。やがてフェイトが大きく頷いたのを見て、シグナムは考えが纏まったと思い、フェイトへ声を掛けた。

「終わったか？」

「はい。今度の模擬戦、楽しみにしてください」

急に告げられた言葉に、シグナムはやや訝しいものを感じるも、フェイトの自信に満ちた表情から何か考えがあるのだろうと判断し、嬉しそうに頷いてみせた。いいだろうと。

そして、再び始まる手合わせ。その打ち込みを受けながら、シグナムはこの後の事を考えていた。稽古終わりにフェイトへ伝えなければならない事実。それを思い、シグナムは小さく首を振る。

（いや、気に病む必要はない。テスタロッサも、そして高町も必ず……）

希望を失う事はない。そう思い、シグナムはフェイトの一撃を払いのける。そして、それで体勢を崩されたフェイトへ追い打ちの一撃を打ち込んだ。その一撃がフェイトに当たる寸前で見事に停止する。

それにフェイトが力なく参りましたと言ったところでこの日の稽古は終わりを迎えるのだった……

道場の片付けと簡単な掃除をし、フェイトとシグナムは向かい合うように座っていた。シグナムの話を聞くためだったのだが、フェイトにはどうもその内容が自分が想像しているものと違う事を感じ取っていた。

てっきり稽古内容か模擬戦に関するような話だと思っていた。しかし、シグナムの雰囲気がそうではない事を物語っていた。真剣な眼差しにも関らず、どこか躊躇うような表情。それにフェイトが何だろうと考えていると、シグナムは小さく息を整え、告げた。

――――落ち着いて聞いて欲しい。このままでは主が死んでしまう。

その瞬間、フェイトは頭が真っ白になった。今、シグナムは何と言った。誰がどうなると言ったのかという言葉が、フェイトの頭を巡る。そんなフェイトへシグナムはゆっくりと話し出す。

夜天の魔導書が改竄されたため、完成させないとはやての命を奪ってしまう事。既に頁は残り六十を切り、完成間近になっている事。管理局が無人世界の巡回を強化したため、魔法生物からの蒐集が困難になった事。

「そのために……テスタロッサ、お前から蒐集させて欲しい」

「私から……？」

「……ああ。お前なら二十頁は稼げる。それを加えれば、残りは四十を切る」

ゆっくりとシグナムが話す内容を理解するフェイト。そして、その瞳に普段と同じ光が戻り出したのを見て、シグナムは本題へ入る。

完成後の手筈は既にアーチャー達が組み立てている。暴走時の被害を抑える事なども考え、守護騎士の事もきちんと考えている。はやての命を守り、全てが上手く収まるようにする方法も考案済みだと。

そこまで語り、シグナムはフェイトを見つめた。フェイトは何かを考えているようだったが、やがて何かに納得したように頷いた。そして、シグナムに尋ねた。プレシアが蒐集を受けたのは、先週の土曜日かと。

それにシグナムは頷いた。アーチャーから聞いただけだが、と前置いて。それにフェイトは小さく苦笑して呟いた。

――――何でもないって言ってたのに……

心配するような事じゃない。そうプレシアは言っていた事を思い出し、フェイトは笑みを浮かべる。あの時は、自分に気付かれる訳にはいかなかったのだろうと。となれば、ランサーやリニスも知っているのだろうと思い、フェイトは苦笑する。

アリシアの時と同じだと思ったからだ。あの時も希望が大きくなる時まで、周囲は自分に何も教えなかった。その気遣いを悟り、思う。

（また、守られてたんだ）

母に、リニスに、ランサーに。自分が衝撃を受けて絶望しないように。希望を信じて、それだけを見つめられるようにと。そして、その後ろには同じ人物の助言があった事も。

（アーチャーさんらしいなぁ……）

共に暮らした短い時間。その間何度となく受けたアーチャーのさり気無い気配り。それがアーチャーの優しさだと知り、フェイトはそれまで気難しいと思っていたのが、一気に本当は優しい人に評価が変わったのだから。

きっと、今回も自分達へ真実を告げる時期を見計らっていたのだろう。シグナムによれば、既にはやても全てを聞いている。ならば、自分が当人より不安を感じる訳にはいかない。

「シグナム、私だけじゃないよね？」

「……ああ。今頃はヴィータが高町に同じ話をしている頃だ」

「やっぱり……」

シグナムの答えに頷き、フェイトは力強く告げた。蒐集をしてくれて構わない。むしろして欲しいと。はやてを、自分の大事な親友を助けられるのなら、何も躊躇う事はないから。そう、はっきり言い切って。

それにシグナムは心から頭を下げた。それにフェイトが軽く慌てて頭を上げて欲しいと言うと、シグナムが笑った。それにフェイトも笑みを返し、互いの顔を見つめ合う。

「出来れば、もっと早く教えて欲しかったです」

「主へ平然と対応出来る可能性が低いと判断したのだ。許してくれ」

「……アーチャーさんが、ですよね」

「……そういう事だ」

「じゃ、文句はアーチャーさんに言います」

そのフェイトの言葉にシグナムは楽しそうに笑う。フェイトもそれに応じるように笑い、少しの間道場に二人の笑い声が響く。そして、それも落ち着き、シグナムが静かに蒐集を始めるべく準備を始めた。

それを見つめ、フェイトが一言帰りは歩けるかと尋ねてシグナムが止まる。若干の間の後、シグナムが念のため家まで送っていくと答え、フェイトは苦笑しながらお願いしますと返した。

そんなどこか和やかな空気の中で行なわれる蒐集。フェイトの魔力量はやはり多く、急速に頁が埋まる。その数、二十二頁。

「……細かな加減が出来ないので慎重にしたが、それでもこれか」

「役に……立てました？」

「ああ、感謝するぞテスタロッサ。……さ、背に乗れ」

フェイトの前に屈んで背中を向けるシグナム。それに頷き、首に手を回すフェイト。そして、シグナムは道場を後にして一言士郎に挨拶を述べて帰った。士郎にフェイトの事を聞かれた際は、少々やりすぎて疲れさせたと答え、苦笑された。

こうして、フェイトはシグナムに背負われ帰宅する。それに出迎えたアリシアは少し心配そうに声を掛け、事情を把握したリニスはシグナムに頷いてみせた。

【後、どれぐらいですか】

【残り三十一と言ったところだ】

【そうですか。フェイトの事は任せてください】

【助かる】

そう念話で会話しながら、シグナムはフェイトを奥から現れたランサーへ預け、テスタロッサ家を後にした。最後にアリシアが手を振って見送ってくれ、それを微笑ましく思いながら手を振り返しシグナムは帰路につく。

胸に宿るは、絶対にフェイトの協力を無駄にしないという想い。幾多もの者達がはやてを、自分達を助けるために力を貸してくれている。それを思い、シグナムは歩く。

フェイトが蒐集されていた時、何かに耐えるように表情を歪めていた事を思い出し、シグナムはヴィータへ思いを馳せる。覚悟していた以上に辛い光景だった。そして、フェイトを好敵手に近いように見ている自分でさえそうだったのなら、友人と思っているヴィータの心はどれ程痛むのだろうと。

（ヴィータ、思っている以上に辛いぞ、これは。私も……二度としたくはないと思う程に）

きつく拳を握り、シグナムは歩く。それが今まで自分達がやってきた事の持つ痛みと嫌悪感なのだと、強く言い聞かせて。それを感じ、自分達の過去を悔いて生きなければならない。そう、改めて思いながらシグナムは夜空を見上げる。

――償い続けよう。例え、許される事がないとしても……

優しき主や友達と生きるために。許されないとしても、償いきれないとしても、決して罪を忘れずに許しを求め、償い続けよう。日の当たる道。それを胸を張って歩けるようにと、そう、心に誓いながら……

――――――――――――――――――――――――――――――――

ついにフェイト蒐集。残りがまた少なくなりました。完成まであと

少し。

闇の書事件の終わりも見え始めました。

風呂から上がり、少しリビングで涼みながら談笑するなのは達。
ここでも、ヴィータの可愛さを改めて感じた桃子の『うちの子にならない？』が炸裂。それに驚き戸惑うヴィータだったが、即座に全員がヴィータは八神家の子と返し、桃子が残念そうに肩を落とした。
それになのは達が笑い、ヴィータはやや戸惑い続けた。だが、周囲の笑い声に桃子も笑ったのを見てヴィータも笑い出す。そして感じるはやて達とは違う暖かさ。

（あ～、これがなのはの家なんだな……）

親がいる家庭に触れ、ヴィータはその未経験の温もりに心が温められるのを感じて、笑みを浮かべる。それを見て桃子がヴィータを抱きしめる。それに少し驚くものの、その感じた事のない母性にヴィータは嬉しそうな表情を知らず浮かべてしまう。

「あ、母さん。ヴィータが嬉しそうだよ」

「お～、だねぇ。まぁはやてちゃん家にはお母さん役がいないからねぇ」

ユーノの声に美由希が反応し、表情を確認してそう告げて頷いた。だが、その言葉にセイバーがシャマルがそれではと、全員が反応に困る事を言った。唯一桃子だけがそんな事はないと答え、ヴィータの髪を手で優しく梳いていた。
それにくすぐったいやら嬉しいやら恥ずかしいやらと、複雑なヴィータだったが、そこへ玄関からシグナムの声が聞こえてきた。どうやら今から帰るようで、ヴィータをよろしく頼みますなどと聞こ

えてくる。

「くそ……子供扱いしやがって」

「ヴィータ、そこが原因です」

「うっせ」

聞こえてくる士郎とシグナムのやり取りに、拗ねるヴィータ。それにセイバーが優しく笑みを浮かべて言うと、ヴィータは照れくさくなり、そう顔を背けて答える。それになのは達が笑い、ヴィータは益々恥ずかしくなる。

そこへ士郎が苦笑ながら戻ってきた。それに全員が不思議そうな表情をしたので、説明をした。フェイトがシグナムとの稽古で頑張りすぎたらしく、シグナムが背負って送っていく事になったのだと。

「フェイトちゃん、頑張り屋さんだからね」

「なのはも負けないが、あの子も結構だよな」

美由希の言葉に恭也がそう続け、一人を除く全員が頷いた。そう、ヴィータは頷かず、何かを察したような表情を一瞬浮かべ、なのはへそろそろ部屋に行こうと声を掛けた。

それになのはも嬉しそうに頷き、二人は就寝の挨拶を言って二階へと向かう。その後姿を眺めて、セイバーは呟いた。

――――そろそろ、なのでしょうね。

具体的に何かと分かる訳ではない。それでも勘が告げているのだ。大きな事が起きる。その時が近付いていると。それを思い、セイバ

ーは近くアーチャーに尋ねる事を決め、美由希に声を掛けて共に風呂へと向かう。

そんなセイバーと違いながらも、ユーノも決意を胸に携帯を取り出す。そして、メールを送る。相手はアーチャー。内容は今日の朝に送られた物に対する返事。

明日蒐集させて欲しい。その言葉に了承とそのためのある考えを返すために。それを送信し、ユーノは視線を上へ向ける。先程のフェイトの話を聞いて、ユーノは確信した。ヴィータが泊まりに来た理由を。そして同時に思うのだ。

なのはをある意味で騙す形になってしまっている現状。それに対してヴィータがどう思うのだろうと。だが、今はユーノに出来る事は何もない。そう自分に言い聞かせて、ユーノは恭也と士郎へ明日と明後日の早朝鍛錬を休ませて欲しいと告げる。

それに疑問を感じる二人に、ユーノは少し照れ笑いを浮かべてこう答えた。明日はザフィーラに格闘を教えてもらうので。そして、明後日は時間を気にせず寝ていたいと。それに二人は笑みを見せて仕方ないと許しを出した。

「ありがとう、兄さん、父さん」

「ま、確かにその気持ちは分からないでもないからな」

「でも、これはお前がいつも真面目に鍛錬に取り組んでいるからだぞ？」

「はい。分かってます」

そう言って笑みを見せるユーノ。そのやり取りを眺め、桃子は嬉しそうに頷いた。もうすっかり高町家の人間になったと、心から思

いながら……

部屋に戻り、どうしようかとなのはがヴィータに声を掛けたが、それにヴィータは答えず何かを考えていた。それに何か不思議な感じを受けるが、きっとヴィータはこれからする事を考えているんだろうと、そう自分をなのはは納得させた。

そして、何を言い出されてもいいようにゲームを準備し出した時、ヴィータが幾分低い声で話があると切り出したのだ。それに何かおかしな雰囲気を感じて、なのはは顔を上げる。

「あの、さ……はやての事なんだ」

「はやてちゃんの？　何？」

「……驚かないでくれよ」

ヴィータの声が真剣みを帯びている事に気付き、なのははその場に正座し頷いた。その表情を見て、ヴィータは小さく「すまねぇ」と言うと語り出した。それは、はやての事からこれからの事の全て。

なのはは、はやての命が長くて残り二ヶ月もないと聞き、声を失ったが、すぐにヴィータが蒐集を完成させれば助ける事は出来ると告げて、その衝撃を緩和した。

それからは、残り頁が三十程である事や、リインを含めた自分達の事も何とか出来るように既に準備をしている事、更にリンディ達

もそれに協力してくれている事を話し、ヴィータはなのはを見た。

「……つまり、はやてちゃんは助けられるんだね？」

「ああ。絶対だ」

「ヴィータちゃん達も……」

「リインが言うには、確実に近いぐらいにな」

それを聞いてなのはは小さく頷く。そして、同時に言わなければならない事があると、そう思った。故にまだ何かを言おうとするヴィータへ、なのははっきり言い切った。

「ヴィータちゃん、私も蒐集してくれるかな？」

「っ……いいのか？」

「それは聞く事じゃないよ。はやてちゃんを助けたいのはみんな同じ。なら、みんなで力を合わせなきゃ」

「なのは……」

「さ、早くしよ。ね？」

笑顔でそう言ったなのはに、ヴィータはこみ上げるものを必死で抑え込み、無言で頷いた。そして、蒐集のための準備を始める。それを見て、なのはが静かにヴィータへ近寄った。準備として夜天の魔導書を転送してもらっているヴィータ。その後ろから、優しくなのはが抱きしめた。

突然の事に少し驚くヴィータだったが、なのはが呟いた言葉にその理由を理解して言葉を無くす。

――そんな顔しないで。ヴィータちゃんが悲しいと、私も悲しくなっちゃうから……

それにヴィータは、抑えていたものがゆっくり漏れ出していくのを感じていた。頬を伝う暖かいもの。それが涙だと気付くのに、時間はさしていらなかった。初めて出来た”友達”。それを思い出した瞬間、ヴィータの中になのはとの思い出が溢れ出した。

名前が中々言えず、散々練習して呼べるようになった時、満面の笑みで自分の名を呼び返してくれた事。自分が魔法の訓練相手をしてやると言った時、どこか驚いたような顔をしたが、すぐに嬉しそうに笑いお願いしますと頼まれた事。

初めて遊びに行った時にやったゲームで惨敗し、悔しい思いをした事。訓練終わりに他愛のない事を話しながら帰った事。それこそヴィータ自身が意外に感じる程、なのはとの数々の思い出が甦った。

（あたし、こんなにこいつと色々あったんだ……）

いつの間にか自分を友達と言ってくれたなのは。そのいつも向けられる優しい笑み。はやてとは違うその笑顔を思い出し、ヴィータはしゃくり上げるように告げた。今も悲しむ自分を励まそうとしてくれているなのはへ、かけがえのない友達へ。

――ゴメンな。それと、ありがと。……なのは。

――気にしないから。それと、泣かないで。ね、ヴィータちゃん。

そう言ってなのははヴィータの手を優しく握る。それをヴィータも優しく握り返す。その温もりを感じて、ヴィータは残った手で涙を拭い払う。

「じゃ、やるぞ」

「……うん」

そして、開始される蒐集。体を襲う強い脱力感に、なのはの顔が歪む。それにヴィータの心が痛むが、それに気付いたなのはが無理に笑みを作る。大丈夫だからと。それに余計心を痛ませ目を閉じようとするヴィータだったが、それを思い留めた。

（ここで目を逸らしたら、あたしはもうなのはを友達なんて呼べねえっ！）

親友のために、そして自分のためにと蒐集を受けてくれたなのは。その想いに応える事。それが、今のなのはに自分が出来る唯一の責任の取り方だ。そう思い直し、なのはから目を片時も離さずにヴィータは蒐集を終えた。

その瞬間倒れそうになるなのは。その体が揺れたのを見て、ヴィータはただなのはの事だけを考えて動いた。

「なのはっ！？」

手にしていた夜天の魔導書を投げ出してでも、なのはを支えに動くヴィータ。それが間に合い、なのははヴィータの胸に顔を埋めるような形で止まった。なのはは頭をゆっくりと起こし、視線をヴィータへ向ける。そこには、止まったはずの涙を流し、何度も何度もしゃくり上げるヴィータがいた。

ゴメンを繰り返すヴィータ。それになのはは嬉しく思うも、小さくヴィータへ向かって告げる。

――――だから、私まで悲しくなっちゃうって言ったのに……

その言葉がキッカケでなのはも涙を流す。そして、ヴィータを強く抱きしめた。それにヴィータも抱きしめ返す。互いの体温を感じ合いながら、二人はしばらく涙を流し続けた。静かに、ただただ感情のままに。

そして、ヴィータは思った。今までは無理矢理蒐集する事が常だった。その時は心が痛まなかった。なのに、何故許しをもらってした蒐集は、こんなにも心が痛むのだろうかと。どうして涙が止まってくれないのだろうかと。

それが人になったという事なのかもしれない。そうヴィータは思いながら、涙を流す。その痛む胸さえ、どこか嬉しく思いながら……

「……落ち着いた？」

「おう」

互いに目を赤くして見つめ合う二人。なのははベッドにもたれるように座っている。ヴィータはそんななのはから視線を外し、夜天の魔導書へと向ける。そして、それを手に取って確認して驚いた。

埋まった頁は二十四。これで残りは十を切った。だが、その成果にもヴィータの顔はどこか暗い。転送魔法で夜天の魔導書を八神家へ送り返し、ヴィータはなのはへ視線を戻す。

疲れた表情。今にも眠りそうな雰囲気。それを感じて、ヴィータは申し訳ない気持ちになってしまう。しかし、それを顔に出す訳にはいかないと思い、ヴィータはとりあえずなのはをベッドに寝かせようとする。

そして、その体に手を置いた瞬間、ドアをノックする音がした。それに二人の表情が変わる。誰だろうと。すると、相手もそれを分かっているのか小さな声で告げた。

「僕だよ。二人共、ちょっといいかな？」

「ユーノ君？」

「何の用だ？」

共に疑問を投げ掛けるなのはとヴィータ。それにユーノはさっき泣き声がした気がしたからと言いながら、念話でこう言った。簡単な治療魔法をかけるから入れて欲しいと。

それに二人は顔を見合わせた。ユーノの言葉はそれだけではなかった。蒐集は終わったのだろうと。なら、早めに回復出来るように処置する方がいいと告げたのだから。

それに驚くも、事情を知っているのならと、なのはが頷きヴィータが部屋のドアを開けてユーノを中に入れる。中に入るとユーノは真っ先になのはへ近付き、即座に魔法を使い始める。

その独特の暖かさになのはの表情が若干和らぐ。それを見てヴィータが安堵したように息を吐いた。そこからしばらく沈黙が室内を包み、静かに時計の秒針の音だけが響く。

「……残りはどれぐらい」

「七頁ってとこだ」

なのはへの治療が終わった途端、ユーノはそうヴィータへ問いかけた。その声がどこか鋭いような気がして、ヴィータは少し訝しく思いながらも答えた。それにユーノは無言で頷き、視線をなのはに向けて俯いた。そして、小さく呟く。

――アーチャーさん、クロノはきっと、理解はしても納得はしないですよ……

その呟きをなのはは聞いたが、何故かその意味をユーノに聞く事は出来なかった。何故ならば……

（ユーノ君、凄く怖い顔してる……）

なのはの前で強く拳を握り、小刻みに震えるユーノ。それが何かを必死に抑えているように見え、なのはは何も言う事が出来ない。何を抑えているのか分かれば、なのははきっとユーノに声を掛ける事が出来ただろう。しかし、ユーノが堪えているのは怒り。それが理解出来ないなのはには、適切な言葉がないのだ。

（頭では分かってるんだ。なのはが自分の意志で蒐集されたのも、これしか手がないのもっ！　でも、それでも、納得出来ないよ、僕は……っ）

目の前にいる弱った状態の大切な相手。それを見て、自分でさえ強い憤りを覚えるのだ。なら、エイミィを異性として意識しているだろうクロノが、これを納得出来るはずがない。そうユーノは思っていた。

その後、ユーノはなのはへ早めに寝て体を休めるようにと告げて部屋を出て行った。それを見送り、なのははヴィータを見つめて問いかけた。

「何かユーノ君怒ってなかった……？」

「……きっと、お前が辛そうにしてたのが、辛かったんだろうな」

「そっか……」

（蒐集しなくても何とかなる方法を見つけられなかった。それが悔しかったんだろうな、ユーノ君は）

自分が蒐集される事を知りながら、それを黙って見ている事しか出来なかった。それが理由だとしか、なのはは思えない。しかし、ヴィータは気付いていた。ユーノの感情の理由を。ユーノはなのはを意識しているのだろうと。

故に、あれだけの怒りを感じたのだ。何も力になれない自分に。知りながら助けてやれなかった自分に。無力感を覚える時ほど、悔しいものはない。それを良く知るヴィータは、ユーノの思いを汲み取り静かに心の中で呟いた。

（今はそれを噛み締めろ。それがきっと、いつかお前を強くしてくれる……）

今のあたしもな。そう呟いてヴィータはなのはへ視線を向けた。なのははいつの間にかベッドに横になっていて、まどろみ始めている。それに軽く呆れながらも、部屋の明かりを消してヴィータもその横へ移動した。

「今度は、普通のお泊りにしてね……」

「……ったりめ～だ。今日だって本当なら……」

「すぅ……」

なのはが言いながら抱きしめてくるが、それにヴィータは少し照れながらそう返す。だが、なのはは目を閉じてすぐに眠りについてしまったようで、ヴィータはそれにやや呆れるも、笑みを浮かべ、目を閉じる。

最初は一つだった寝息が、二つになるのにそう時間は掛からなかった。安らかに眠る二人。その手は、しっかりと握られているのだった……

「……どうした？」

共に風呂に入るため、部屋でユーノが帰ってくるのを待っていた恭也は、戻ってきたその顔を見るなりその変化に気付いた。出て行く時は、いつも通りだったのに、今は何かに怒りを抱いているように見えたからだ。

ユーノはそんな恭也の言葉に、一言だけ「自分の無力さに呆れて物も言えないんです」と返した。そして、風呂に行きましょうと告げて着替えを手にして出て行った。

それを追いかけ、恭也も部屋を出る。途中なのはの部屋から寝息が聞こえたので、もう二人は寝たのかとやや拍子抜けした。きっと夜遅くまで起きているだろうと予想していたからだ。

階段を下りるユーノと恭也。リビングでは、熱冷ましをしている

セイバーと美由希がいて、桃子と士郎はこれからの新商品などの話し合いをしていた。

「あ、恭ちゃん達お先〜」

「ああ」

「ユーノ、なのは達はどうしてますか？」

「……もう寝たみたい。明日は休みだし、ヴィータとお昼まで遊ぶつもりじゃないかな」

セイバーの言葉にユーノは少し笑みを浮かべてそう答えた。その内容にその場にいた全員が何か感じ取るも、敢えて何も言わない。セイバーはそうですかと頷くだけだった。

そして、そのまま風呂場へ向かっていくユーノ。それを見送り、士郎達の視線が恭也へ注がれる。それに恭也は小さく頷き風呂場へ向かった。

それがいなくなったのを見計らい、士郎が噛み締めるように呟く。また、何かあったなと。それに桃子も美由希も頷いた。魔法絡みだねと美由希が言えば、リイン達関係かもしれないと桃子が続ける。

セイバーはそれを聞きながら、内心で士郎達の観察眼と思考力に感心していた。セイバー自身は何となくアーチャー達の様子から気付いているため、ユーノの事にも気付く事が出来たが、士郎達はそれ無しで事件に気付き出している。

（もしや、なのはの鋭い観察眼は遺伝なのでしょうか……）

自分の思考をよく当ててくるなのは。その理由が両親からの物で

はないかと思い、セイバーは一人納得する。だが、真相は勿論違う。なのはがセイバーの思考をよく当てるのは、彼女が基本的に素直な反応をしているからだ。

故にセイバーが深刻な悩みを考えている時等は、なのはとてそう簡単には気付けない事もある。しかし、長年共に過ごしてきたために、なのははセイバーの思考パターンを熟知し始めているので、その的中率はかなり高いのも事実である。

「ま、恭也に任せてみるか」

「そうね」

「大丈夫かな、恭ちゃん」

何かを考え込むセイバーを他所に、三人はそう言ってまた日常へと思考を切り替えるのだった……

湯船に浸かりながら、恭也とユーノは無言で天井を見つめていた。会話は浴室に入った時から……ない。

「……ユーノ」

「何です？」

普段通りに返事出来たとユーノは思った。だが、恭也はその声に小さくだがはっきり尋ねた。

「俺達には言えない事か？」

それにユーノは何の事だと聞き返せなかった。恭也の声が鋭い物だったのなら、きっとそれは理解されただろう。自分が驚いたと考える事が出来るから。或いは、それが心配する物だったのなら、納得されただろう。自分が迷っていると思えたから。

だが、その声はどちらでもない。そう、無力感を滲ませた声だったのだ。弟の、家族の力になってやる事が出来ない自分への、そしてそうやって尋ねなければいけなかった事に対しての無念さ。それが込められた物だったのだ。

「話せないならそれでもいい。でも、忘れるな。お前には俺が、家族がいる。言えるようになってからでもいい。ほんの少し、いや一言でもいいから」

恭也の言葉にユーノは嬉しく思い、それでもまだ言えないと口を強く閉じる。そんなユーノに、恭也は優しい声でこう続けた。

「それと弱音を吐いてもいいぞ。お前は、まだ”子供”でいいんだからな」

「っ……」

無理しなくてもいい。そう言ってくれたような気がして、ユーノは目を閉じる。そして、急いで手に湯を汲んで顔を洗う。流れ出した物を分からなくするために。それを恭也もどこかで察しながらも、何も言わない。

ただ、ユーノが何度も顔を洗うのを見て、何でもないように告げた。

「また、釣りにでも行くか」

「……はい、兄さん」

恭也はずっと天井を見つめていた。ユーノはその心遣いが嬉しくて、もう一度だけ顔を洗う。その音を聞いても、もう恭也は何も言わずに黙って視線を上に向けるのみだった……

――――――

A' s八話　後編

いつもと違い、ヴィータがいない八神家。先程シグナムが帰宅し、フェイトに関しての話を聞いてはやてが安堵した。ランサーのルーンとリニスの魔法の併用できっと明日一日で全快近くなるだろうと。

そして、今はヴィータがいない事に少し違和感を感じるも、これはこれでありだなとシグナムが言えば、シャマルが少し静か過ぎると返す。ザフィーラとリインはオセロをしているし、はやてはそれを横から眺めている。

「はやて、そろそろ風呂に入った方がいい」

「う～、ええとこなんやけど……」

劣勢になっていたザフィーラが角を押さえた事で反撃を開始し、リインが少し圧され始めたのだ。それにやや感心していたはやてだったが、アーチャーの言葉に後ろ髪を引かれつつ動き出す。

そして、シャマルへ声を掛け共に風呂場へと消えていく。アーチャーはそれを見送りながら、湯上りのために飲み物を用意するべく動き出す。シグナムははやてがいた位置に移動し、オセロを観戦。

状況は僅かにザフィーラ優勢。だが、リインも何とか二つの角を押さえ、敗北を避けるべく頭を使う。置ける場所も少なくなり、いつどこに置くかの駆け引きが加熱する。

そんな様子を眺め、シグナムは呟くように言った。自分には、やはりこういうものの良さが分からないと。それにリインとザフィーラが揃って苦笑。アーチャーもそれを聞いて笑みを浮かべ、こう言った。

「将棋は楽しんでいたではないか」

「あれは駒のやり取りが生きているからな。動きもある。だが、オセロはただ置いて色を変えるだけだ」

「そこに深みがあるのだシグナム」

「単純故に、という奴らしい」

子供のようなシグナムの言い方に、リインとザフィーラがそう反論した。リインはオセロやチェス等のゲームが好きだ。対するザフィーラは、複雑な操作をするテレビゲームよりも、簡単に出来るトランプ等がまだ得意。

そのため、よく二人はこうしてオセロなどをやっていた。後に碁を知ったリインがそれにはまり、恭也やノエルと打つために高町家や月村家へ行くようになる。

オセロは、結局リインが勝利した。最後の最後にリインが後手だったため、多くひっくり返す事が出来たのが勝因となった。ザフィーラも良い所までいったのだが、やや多くひっくり返す事に考えを向けすぎて、足元をすくわれてしまった。

その後は、シグナムとリインが将棋を指し出した。それをザフィーラはリインの後ろから観戦し、アーチャーもする事を無くしたのでシグナムの横に座り観戦する。

「……しかし、残りは三十一か」

「ああ。高町次第だが、これなら完成は間近だろう」

アーチャーの言葉にシグナムが歩を動かして答える。予定以上に

フェイトから蒐集出来たので、この分だと残りが僅かになるだろうと。なのはもフェイトと同じだけだとしても、十頁を切る事が出来るのだ。

そうなれば、もう完成は目前となる。ユーノから蒐集する量を調整しないといけないが、上手くすれば残り一頁や二頁レベルに出来るかもしれない。そう考え、アーチャーは将棋盤へ視線を向ける。

リインはシグナムの動かし方を見て、何を狙っているかを把握したのか、飛車を動かすべく歩を移動させて道を開けさせる。それにシグナムも応えるように、飛車の道を開け始めた。

すると、突然リインが転送魔法を準備しだした。それに三人の表情が変わる。ヴィータが蒐集を開始したと判断出来たからだ。リインが夜天の魔導書を転送するのを見て、少し沈黙に包まれる。

「……はやてが上がったら、リイン達が入るといい」

「そうだな。……そうするか」

「……お前の番だ」

アーチャーの言葉にリインがそう答えた。それを聞いて、シグナムが駒を動かす。その音がやけに響いた気がして、シグナムは何故か気まずさを感じた。

四人それぞれが思うのは、ヴィータの心境。守護騎士の中で一番はやての影響を受けたのは、誰であろうヴィータだからだ。昔は、蒐集にもそれ以外にも無表情を装い、あまり感情を見せないようにしていた。

しかし、はやてと触れ合うようになり、見かけ相応の反応をするようになった。子供扱いされるのは嫌がってはいるが、老人会やはやてにはそう扱われても嫌がる事もなく、むしろ喜んでいる風にさ

え見えるのだから。

一番感情を表に出すようになってしまった。それを考えれば、きっとなのはから蒐集する事に苦しむだろう事は、簡単に予想が出来るのだ。

「そうだ。リイン、聞きたい事がある。今夜少し時間をもらえないか？」

「ああ。別に構わないぞ」

「助かる」

シグナムの動きに考えを巡らしながら、リインはそう答えた。ザフィーラはシグナムの手を見て自分なりに考えているようだ。そんな風に四人が将棋盤を見つめる中、はやてとシャマルが湯気を出しながら戻ってきたのだった……

人として、友として　後編

皆が集まるリビング。そこに寝間着に着替えた八神家の姿があった。勿論、アーチャーとリインの話を聞くためである。全員で話す事ではないと思っていたアーチャーだったが、はやてに隠すよりも聞かせた方がいいと思い直し、止める事はしなかった。

全員が持っているのは、アーチャーが入れたアイスティー。どうもハーブティーを切らしたため、致し方なく紅茶にしたのだ。それ

を飲みながら、アーチャーはリインへ軽く尋ねた。

「少し確認したい事があってな」

「ああ」

「君から最初に聞いた解決法を覚えているか？」

アーチャーの軽い感じにリインも同じように応じた。覚えていると。もう半月以上も経ったかと笑みさえ浮かべて答えた。それにはやて達も思い出し、少し懐かしむように笑みを浮かべた。

それをもう一度話してくれないかと、アーチャーは頼んだ。それにリインはやや変な感じを受けたようだが、頷いて話し出す。それを初めて聞くはやては、以前聞いた蒼天の魔導書を使った物との違いを聞き、意外そうな声を出した。

「蒼天の魔導書無しやと、リインの機能移しはせんのやな」

「はい。する必要がある訳ではなかったのですが、念には念を入れるべきかと」

はやての問いかけにリインはそう答えた。それにはやては納得して頷いたが、アーチャーはそれに疑問を抱いた。念には念を。それは確かに違和感がない。だが、リイン自身が言った言葉がアーチャーにそれを疑わせる。

バグは恐ろしい程しぶとい。それを言ったリインが、どこか簡単にバグを除去出来ると言っているのだ。それに矛盾を感じてしまうアーチャーだったが、その原因は、バグの本体と言われる防衛プログラムの正体が不明確だからだろうと思っていた。

リイン自身も過剰な程の反応をする存在ぐらいにしか思い出せず、蒐集した魔法を躊躇いなく使い、主諸共世界を破滅へと誘う存在。それがバグと呼ばれるまでになった防衛プログラム。

「しかし、どうして今になって……」

「何、蒼天の魔導書が出てきてから聞いた話には、機能云々があったのでね。どうして、最初はそれに言及してくれなかったのかと」

アーチャーがそういうと、リインは少し気まずそうな顔をして頭を下げて告げた。バグが巣食っているのは、最初は防衛プログラムだけと思っていたが、自分の機能全てに及んでいる可能性を忘れていたと。

それにアーチャーも頷いた。確かにそれなら有り得ない話ではない。蒼天の魔導書へバグが感染すると言った時に、その事に思い当たったのだと言われれば、話の筋は通るからだ。

（やはりこれだけでは無理、か。仕方ないな……）

「だが、守護騎士プログラムは本当に無事なのか？」

「それは間違いない。バグの影響は確かに受けているが、記憶関係に関するものだからな」

「では、シグナム達は完成させれば問題ないのだな」

「ああ。誓ってもいい」

力強く頷いてみせるリイン。それにはやてが小さく安堵する。アーチャーが不安を煽るような言い方をしたためだ。シグナム達もリ

インの答えに笑みを見せ、アーチャーの質問は、きっと自分達を安心させるための意味だろうと思った。
そんなどこか穏やか雰囲気が流れる中、アーチャーは一瞬だが苦い顔をした。しかし、それをすぐに消して再度問いかけた。

「成程。シグナム達は問題ない事は分かった。では、君自身はどうだ、リイン」

「……どういう事だ」

その言葉にリインの表情が険しくなる。はやて達も同じくアーチャーの質問の意味を理解しかね――――たところで、シャマルが驚愕の表情で呟いた。

「そうよ……リインは守護騎士じゃない」

「どういう事や？」

「はやて、彼女は管制人格だ。つまり、守護騎士達を司る立場にある。括りは、完全に別物だ」

疑問を浮かべるはやてに答えるように、アーチャーはリインを見ながら告げた。それにシグナムとザフィーラが何をアーチャーが言おうとしているのか気付き、驚きを顔に浮かべてリインへ視線を向ける。
リインは、それを受けても表情を変えない。無表情でアーチャーを見つめ続ける。その視線を向け、アーチャーは更に続けた。リインの話によれば、守護騎士プログラムは完全に切り離し、夜天の魔導書の影響下から抜け出す事が出来る。つまり、もうバグに侵食される事無く存在出来るようになる。

しかし、リイン自体は守護騎士ではない。にも関わらず、最初リインは自分の事へは言及しなかった。理由は先程リインが述べた。だが、そうだとしても納得出来ない事がある。そうアーチャーは言った。

「彼女は、バグのしぶとさはともかく、その恐ろしさは最初から知っていた。であれば、必然的にそれが簡単に消せる相手ではないと分かるはずだ。そこから派生し、記憶が甦ってもいい」

「……それは、本当に……」

「忘れていたのか。では、こう聞いてみるか。何故、簡単にはやての役に立てる力を捨てる事を選ぶ」

「っ！？　それは……」

その問いかけに、リインは確かに言葉を詰まらせた。関係ないと言う事は出来る。だが、瞬間とはいえリインはそれに動揺してしまった。はやてはアーチャーの言った事がユニゾンを指していると思い、リインへ視線を向けた。

はやて自身、別に魔法の力はそこまで欲しいものではない。しかし、アーチャーの言葉を聞いてどこかで同意もしていた。リインが自分の役に立つ力を躊躇いもなく捨てる事を選んだ事に。

蒼天の魔導書へ機能を移す話に関連し、リインが語った自身の機能。その中ではやてに大きく関わるのがユニゾンだった。リイン自体がデバイスであり、はやてのための存在。

それを思い出し、はやてはふと思った。リインがユニゾンさえ捨てる理由。それは、バグだろうと。しかし、それにしても迷いが無

さ過ぎると。あの話をした際、リインは少しも躊躇う事無く自身の機能全てを失う事を決断した。

（もしかして、リインはそうせんとあかんって最初から知っとったんやろか……？）

自分は機能を持ったままではいけない。それを知っていたからこそ、迷う事もなく機能を失う事を選んだ。それが、自分のためになる。そう判断して。はやてはそう考え、リインへ問いかけた。

どうして、ユニゾンだけでも残せるようにしないのかと。それに、リインはバグが残留している可能性があるからと返すが、少しのバグなら修正出来るのではとはやてが反論すると、何か困ったように表情を曇らせる。

「大体、バグの本体は防衛プログラムなのだろう？　ならば、それを破壊すれば、後は何とでもなると思うのだが」

「いや、それは……」

「まさか”不滅”などと言う訳でもないだろう」

アーチャーの言った単語に、リインが完全に言葉を失った。そう、アーチャーは冗談でも言うかのような声を出してリインを見つめた。だが、その表情は口調とは違い、とても真剣なもの。シグナムやシャマル、ザフィーラもそれに気付き考えた。

もし、アーチャーの言った事が正しいのなら、リインが何故機能全てを失う事にしたのかが分かる。きっと、リインの機能がどこに残っていればそこからバグは再生するのだろうと。

（バグはリイン自身にも手の施しようがない。そう確かに言ってい

た。つまり……）

（そうか。バグを消滅させる事が出来ないのね。だから……）

（最初の提案時、自身の事に言及しなかったのは気付かせぬため。最後に、自分を消さざるを得ないと知っていたから……）

三人がそう思い至るのと同時に、リインもアーチャーが自分の隠し事を探るために、ある程度当たりをつけてきたと理解した。

そして、表情を見るにどうやら核心へ近付いたらしいとリインは気付いた。見れば、はやても何かを悟ったのか不安そうな顔を向けていた。それにリインはもう言い逃れは出来ないと思い、どこか苦笑しながら告げた。

「……やはり、お前が最初に気付いたか」

「いや、確信に近い物を得たのは私だが、キッカケを得たのはシグナムだ」

そのアーチャーの言葉にリインは少し驚いて、そうかと言って頷いた。そして、リインは語る。自分の中のバグ。それがどうなっているかを。

バグは防衛プログラムという姿へ変わり、完成時にリインを支配する。それを今まで消滅させなかった訳ではない。だが、出来なかったのだ。夜天の魔導書に組み込まれた転生機能。それを使い、防衛プログラムも何度となく甦る。

ある時はアルカンシェルと呼ばれる管理局が有する強力な魔導砲で。ある時は、主そのものと共に世界と消えて。そんな事になりながらも、転生機能を使い、バグは消える事なく復活するのだ。更に、

一度としてバグを除去した事がない。
あくまで予想でしかないが、リインからバグを除去して破壊しても、自分の中へ転生するだろうと。そのために自身の中にある、全ての機能を捨て去ろうと思ったのだとリインは語った。

「……では、蒼天の魔導書へ機能を移せば消滅させられると？」

「……正直何とも言えない。私の転生機能を使って復活しているのか。もしくは、私自身のデータを使って復活しているのか。それさえ定かではない」

そのリインの答えにはやてがアーチャーへ視線を向けた。それは、その言葉を否定してくれという願いを込められた瞳。希望を与えて欲しいという祈り。それを感じ取り、アーチャーは苦い顔を返す事しか出来ない。
確かにここで、全員に希望を与える事は出来ない訳ではない。しかし、説得力を持たせるには情報が無さ過ぎる。リイン自身も語ったが、今までバグを除去した事がそもそもない。つまり、除去して破壊すれば、消滅させられるのか否かさえ分からないのだ。

（何か……何かないか。リインを助けられる確実な方法は……）

自分が夜天の魔導書へ使える手段は、ルールブレイカーただ一つ。しかしそれでは、現状リインを消滅させる事しか出来ない。魔力で作られた存在であるリイン。もし、仮に彼女が生身の存在だったのなら簡単だった。その体にルールブレイカーを突き立てれば終わるのだから。
だが、そうではないから、アーチャー達は足掻いているのだ。魔術による契約や魔力によって作られた存在を無力化する最終手段。アーチャーが持つ暴走に対する最後の切り札。

だが、それではリインを助ける事は不可能。そして、それを今使うぐらいなら最初から使っている。それだけ、現状に希望が見えてきているのだ。それを諦める訳にはいかない。

（くっ、家族さえ助けられんのか、私は！）

アーチャーの心に、静かな怒りがこみ上げる。零か一が。極端な選択肢しか元々無かったアーチャーにとって、リインを助ける術はない。だがそれでも諦めず、何かないかと考える。

自分の持つ全てを思い出し、考え、頭の中で試行錯誤する。それでも、良い考えは浮かばない。どうしても、ルールブレイカー以外でロストロギアに干渉可能な物が思いつかないのだ。それに、彼の投影は基本的に攻撃へ転用する事が主。アーチャーの属性は”剣”なのだ。

「リイン、何か情報はないか。バグに関する事でも何でもいい。私達が知らない事を一つでもアーチャーへ」

アーチャーが悩むのを見かねたザフィーラが、そう告げた。それにリインも何か無いかと思い出し始める。はやてはそんな二人を見て、ふとアーチャーが持っているという奥の手を思い出す。

それは、ロストロギアの天敵ともいえる宝具。だが、はやては生憎そこまでは知らない。だからなのだろう。アーチャーのそれを見てみれば、何か思いつくかもと思ったのは。

「な、アーチャー」

「ん？　どうした」

「ルールブレイカーやったか？　それ、一度見せて」

突然のはやての申し出に全員が不思議顔。それにはやては自分が思った事を告げた。実物を見れば、何か思いつくかもしれないからと。それにアーチャーはあまり乗り気はしない。何しろ、あれは見た目が歪んでいるので、良い印象は与えない。

それを伝えても、はやては見せて欲しいと言った。それが興味本位ではなく、どんな事でもキッカケになればとはやてが思っていると感じ、アーチャーは小さく息を吐いて、その手にルールブレイカーを投影した。

「これが……」

「そういえば、我々も実物を見るのは初めてだったな」

「そうだな。しかし、確かに歪んでいるな」

アーチャーが持つ短剣をまじまじと見つめる四人。ザフィーラが思い出したように呟いた言葉にシグナムが頷き、シャマルとリインはそれから禍々しい雰囲気を感じて、やや表情が強張っている。

「何か、嫌な感じがする剣ね」

「そう、だな。だが、確かに何か妙な力を感じる」

「……どうだはやて。何か考えは浮んだか」

全員がそれなりに見たのを確認し、アーチャーははやてへ問いかけた。それにはやては少し考えて、小さく首を傾げた。それに全員が笑みを浮かべた。微笑ましい仕草だったからだ。しかし、はやてはそんな周囲を気にせず、自分の中に生まれた疑問をぶつけてみた。

――何でルールブレイカーって言うんや？

歪んだ短剣。そうとしか見えない物に付けられた名前。意味を考えると決まりを破るとなる。どうしてそんな名前が付いたのか、はやてには気になった。これが、ジュエルシードを無力化した事はなのはやフェイトから聞いている。だからこそ、余計気になったのだ。

ルールをブレイクする物なのに、何故ロストロギアを無力化出来るのか。そう聞かれ、アーチャーは少し苦笑した。少し難しい話になるぞと言って。それにはやては無言で頷き、続きを促した。

そこでアーチャーは簡易的にではあるが、ルールブレイカーの効力を説明した。これは、魔力で出来た物を初期状態へ戻す力を秘めている。名前の由来は省略したが、はやてが考える意味での使用もあったと教えた。

それは、サーヴァントの本来の姿の説明と成り立ちから始まり、マスターとの契約を話した。そして、その契約を無効化した事。それを聞いて、シャマルが不思議そうに尋ねた。サーヴァントは元々自分達と似たような存在。そうアーチャーは以前言った。なら、どうして魔力で留まっているサーヴァントにルールブレイカーを突き刺して、契約しか効果が出ないのかと。

「だって、ジュエルシードは魔力を持たない石に変わったんでしょ？　サーヴァントだって、魔力で動いているのだから、消えるか動けなくなるかしないとおかしいじゃない」

「……言われてみればそうかもしれんな。アーチャー、何故だ」

シャマルとシグナムの言葉に、アーチャーはサーヴァントは厳密には魔力で出来ていたのではなく、魂が具現化した物だと答えて過

去を思い出した。それは、魂を喰らう事でサーヴァントは力を増す事。実際、それに似たような事を行い強化を図ったサーヴァントがいたのだ。

更に、精気を吸い取り己の魔力に変えた魔女まで思い出し、アーチャーは考えた。サーヴァントの魂は高純度の魔力だったはずだ。故に聖杯へ捧げられるのだから。ならば、サーヴァントもある意味では魔力で作られた存在なのではと。

そう考えた瞬間、アーチャーの中にある仮説が生まれた。それは、最後の不安を振り払う事が出来るかもしれない可能性。

（もしこの仮説が正しいのなら、リインも何とか出来るかもしれん。だが、そのためには……）

自分の手で防衛プログラムのとどめを刺す必要がある。そう思い、アーチャーははやて達へ笑みを見せた。それは、不敵な笑み。

「私にも一つ博打な考えが出来た。まだ詳しくは伝えられないが、希望は捨てないで欲しい」

その声には、微かだが確かに自信が込められていた……

リインの抱えていた秘密。それは、バグの復活。自分の全てを失っても甦るのかもしれないとの不安。

その不安を何とかすべく、限りなく細い道を見つけ出したアーチャー。その可能性とは果たして何なのか。

ーーー

幕間１４表

早朝の海浜公園。ザフィーラと手合わせをしているのは、ユーノ。とは言っても、ザフィーラがアルフとしているような本格的なものではない。ユーノに好きなように打ち込ませているだけだ。しかも、これはいつもやっている事でもない。

昨夜、アーチャーから連絡を受けていたユーノが、蒐集場所としてここを指定。恭也達にザフィーラと早朝訓練をすると告げて、ここへやってきたのだ。そのため、ベンチにはシャマルが座っていて、二人へ視線を注いでいる。

「……どうですか？」

「良くもないが悪くもないといった所だ。やはり、お前は支援向きだろう」

一しきり動いて、ユーノがした質問にザフィーラは正直に答えた。そこに世辞も気遣いもない。だからこそユーノは納得したように頷いた。

自分でも前線を出来るとは思っていない。士郎や恭也からも、剣を使えばそれなりに戦えるだろうと言われている。だが、それなりならしない方がいいとユーノは考えていた。

今後、なのは達がどんな進路を進むかユーノは知らない。だが、もし管理局へ行く事になるのなら危険が付き纏う事になる。そうなった時、今のままでは自分がなのは達に出来る事は少ないのだ。

そのために、ユーノは無限書庫で働こうと決めた。なのは達が局に来た時、力になれるようにと。来ないとしても、クロノの助けにはなってやれる。そして、それが多くの人達の笑顔に繋がると知っ

た以上、彼がその道を考えないはずがなかった。

「そうですか。ありがとうございます」

「いや、礼には及ばん」

頭を下げて礼を述べるユーノに、ザフィーラは素っ気無く返す。

それを聞いて、シャマルは小さく笑みを浮かべるが、それもすぐに消して二人へ問いかけた。

「……そろそろいい？」

それにユーノは頷いて、シャマルの隣へ座った。その瞬間、展開される結界。ザフィーラはそれに構わず、そのまま自己鍛錬を開始。それを見ながら、ユーノはシャマルへ念を押して頼んだ。

残り頁が少なくなったから、くれぐれも慎重にと。それにシャマルは無言で頷き、蒐集を開始した。埋まっていく頁。そして、それが後残り一頁となった瞬間、停止する。

シャマルはそれを見て、安堵の息を吐き、即座にユーノへ治療魔法を使用する。それを受けながら、ユーノは不安があると話し出した。それにシャマルだけではなく、ザフィーラも動きを止めて視線を向ける。

それは、プレシアやリンディといった者達の魔法を使いこなす存在になった防衛プログラムの事。いくら対策や手段を知っているからとはいえ、本当に無事で済むのかと。

その言葉に二人も沈黙。確かにそれは彼らだけでなく、アーチャーも不安に思っていたのだ。聞けば、プレシアは次元跳躍魔法さえ使え、リンディも次元震を抑え込む事が出来るような力を持ってい

る。それを攻撃に使われれば、いくらサーヴァントといえど苦戦は必死。

今日は、それに対する準備としてアーチャーがセイバーへ事態の説明と理解、協力を申し出に行く事になっている。おそらく、かなり手痛い出費が起きるだろうから覚悟しておいてくれと、アーチャーははやてに割と真剣な表情で告げた。

セイバーがそれを快諾するのは間違いないが、その後要求されるであろう事を考えればあながち冗談ではない。それを良く知るからこそ、はやても苦笑を返すしか出来なかったのだから。

「……それと、明日はプレシアさんとアーチャーで完成後の打ち合わせをするわ。多分だけど、プレシアさんの魔法を使ってこられた際は、本人が迎撃する事になると思う」

「……海鳴大決戦になりそうですね」

「笑えんが、そうだろうな」

ユーノの苦笑いの表情から告げられた言葉に、ザフィーラは苦い顔で答える。なのはを始めとする魔導師組に守護騎士達。更にはセイバー達にアルフやリニスといった使い魔さえ総出の戦い。

いくら結界を展開しての事とはいえ、その激しさは想像を絶するだろう事は容易に分かる。だから、そこまで戦力が揃っていても不安が残るのだ。正直、出来る事なら別の場所、無人世界などで完成させて戦いたいが、それは事情を考えれば出来ない。

管理局へ知られる訳にはいかないし、無人世界で夜天の魔導書が完成すれば、否応なくその反応を感知される。そのため、このまま海鳴で完成させ、管理局の察知を遅らせる必要があるとユーノは考えていた。

ユーノは知らないが、アーチャーはその事に関してプレシアと話し合い、リンディへある事を打診していた。だからこそ、エイミィを最後の蒐集対象に指名したのだから。

「これで大分楽なはずよ」

「ありがとうございます」

ユーノへの治療を終えたシャマルは、同時に結界を解除した。周囲の風景に色が戻り、小鳥の囀りや風の音が聞こえ始める。それを感じて、ザフィーラは視線を空へと向けた。

もう日が差し込んでいて、時間はまだ早朝にも関らず、普通の朝と思えるような明るさを見せていた。夏も終わり、この頃やっと暑さも弱まってきた。完成はもう目前となり、後は準備を整えてその時を待つのみ。

はやて達八神家を助けるべく、多くの者が動いている。それを改めて感じながら、シャマルとザフィーラは感謝する。はやてとの出会いやなのは達との出会いを。

（全ての出会いには意味がある。そう、士郎さんが言ってたけど……本当ね）

（血塗られた我らに、それを償い許される道を指し示してくれた主達。この戦い、持つ意味は大きい……）

過去の自分達と決別し、新たな道を歩くための戦い。そう、ザフィーラは思っていた。故に負ける訳にはいかないのだ。優しき主とその友達と歩くためにも……

微かに聞こえる衣擦れの音。そして、何かが動く気配を感じてヴィータは眠りから目覚めた。普段ならば起きないであろうような事だが、やはり慣れた自宅ではなく、人様の家という事もあってか若干眠りが浅かったようだ。

目を開ければ、トレーニングウェアに着替えたなのはがいた。それに目を擦り、ヴィータはぼんやりと声を掛けた。

「おはよ……」

「おはよう。……もしかして起こしちゃった？」

「あ～……どうも眠りが浅かったみたいだ」

なのはのすまなさそうな顔に、ヴィータは寝惚け顔で答えた。そして、その格好を良く見て目を見開いた。

「お前……もしかして、これからトレーニングするつもりかよ」

「ふぇ？　う、うん……」

ヴィータの目つきが鋭くなっていくのを見て、なのははやや怯えたように答えた。それを聞き、ヴィータは一度息を吐いて、まったくと小さく呟いた。それはなのはには聞こえなかったが、雰囲気から自分のしようとしている事でヴィータが怒っているのは感じていた。

そして、その理由も何となくではあるが理解している。昨夜された蒐集が原因だろうと。確かに体はまだだるいし、どこか本調子ではないと分かっているが、セイバーを待たせている。そのため、なのははトレーニングへ行こうとしていたのだ。

「……なのは、頼むから今日は魔法使わないでくれ」

「大丈夫。朝は基本体を使う物しかやらないよ。それに今日は魔法訓練中止だし」

「？　どうしてだよ」

なのはが言った言葉に納得しつつも、疑問を抱くヴィータ。それになのはが笑顔で答えた。美由希が朝起こしに来た時、ユーノがそう言っておいて欲しいと頼んだらしいと。それを聞いて、ヴィータは苦笑しなのはも笑みを見せる。

どう考えても昨夜の事を踏まえてだと分かるからだ。愛されてるなとヴィータがからかい混じりで告げると、なのははそれに何の躊躇いもなく頷いた。そんななのはにヴィータは驚くも、すぐにやや呆れて告げた。

「お前、ユーノどう思ってんだよ」

「……か、家族、かな？」

なのはの自分に問いかけるような答えを聞いて、ヴィータは少し意外な表情を見せる。しかし、それを更にどうこう言う事はしないで、ヴィータはもう一度ベッドに横になった。

もう少し寝ると、そう言って。それになのはは苦笑するが、朝ご飯になったら起こしてあげると返し、部屋を出ようとする。ドアを

開け、閉めようとした瞬間、横になっているヴィータがぼそりと告げた。

――気をつけろよ。

それに嬉しくなったなのはは、笑顔でありがとうと返してドアを閉めた。離れていく足音を聞きながら、ヴィータは思う。はやてだけじゃなく、自分が命を賭けて守らなければならない存在が出来てしまったと。

それは、守護騎士としてではなく、ヴィータとしての想い。自分のために泣いてくれたかけがえのない友達。それを守りたいと心から思った。

（あたしがあたしとして、初めて守りたいって思えた友達。絶対、昨日の事は忘れね～からな、なのは）

なのはがどんな道を選ぶか知らない。それでも、ヴィータは自分に出来る範囲で、なのはの力になろうと強く思った。鉄槌の騎士ではなく、ただのヴィータとして……

セイバーはなのはの動きを見て、何かあった事をすぐに悟った。鈍いのだ。動きや反応がいつもに比べて。それでも、懸命に体を動かすなのはを見て、セイバーは小さくため息を吐いた。

一方のなのはもそんなセイバーの反応に、少しドキドキしていた。気付かれないと思う程、自分は自惚れていない。今も動きを見てセイバーが苦笑さえ浮かべている。それを見て、なのははどうしようかと考えた。

素直に事情を話すべきか否か。しかし、下手に自分が話すよりも

アーチャー辺りに頼む方がいいと判断し、そのままセイバーに止められるまでトレーニングを続けようと決めた。

（疲れてからが、本当の訓練だってお父さん達も言ってたし……）

それに、本当に駄目なら自分よりも早くセイバーが待ったを掛ける。それを知っているからこそ、なのはも、こうして自分の限界を考えながらトレーニングに励む事が出来るのだから。

信頼する相手。それに少し甘えながら、なのははそのままトレーニングを続行した。そして、家への帰り道でセイバーに言われたのだ。今日はもうトレーニングは終了ですと。それになのはは少し苦笑して、嬉しそうに頷いた……

朝食を終えた高町家。士郎と桃子は美由希と共に翠屋へ。セイバーは尋ねて来たアーチャーに話があると言われ、話し終わってから翠屋へ向かう事になった。恭也は忍とデートらしく、少し嬉しそうに出かけて行った。

ユーノは今日明日とのんびりすると言って、恭也の部屋で本を読むと言ってこもっている。なのははヴィータと家族達を見送って、共に自室で過ごす事にした。と言っても、ゲーム等ではなくおしゃべりで。それは、なのはが疲労している事を考慮したため。なのははベッドに座り、ヴィータはその向かいに座る形で話し始めた。

「レイジングハートの強化か……」

「うん。今はそれが一番早いって言うんだ」

話題はなのはの強化案について。ヴィータの意見も聞いてみたい

と思い、なのはが尋ねたのだ。何かないかと。それにヴィータが自分では何を考えてるのかと問い返され、昨日レイジングハートから告げられた言葉を教えたのだ。

ヴィータはそれを聞いて、腕を組んで考え出した。そこになのはが追加としてカートリッジを考えていると告げると、ヴィータは納得したように頷いた。

「成程な。フェイトと同じ方向でって事か」

「それだとそうなるね。別の方法があれば、それでもいいけど……」

そう言ってなのははあのフェイトとの模擬戦を思い出す。カートリッジを使った攻撃の重さ。それは、自分の全力防御でも貫かれてしまった。でも、もし自分にも同じ物があれば、貫かれる事は防げたかもしれない。

そうなのはは考えながら、ヴィータを見つめた。ヴィータは自身のデバイスに元から組み込まれていたものだ。なら、何か意見を貰えるとなのはは期待して視線を送る。それにヴィータも気付き、やや困ったような表情を見せた。

（あれ？　どうして困ってるんだろ……）

そんなヴィータの反応に、なのはは疑問を感じた。すると、ヴィータが少し拗ねたような声で呟く。

――あたしはそういう事詳しくね～んだよ。

その答えになのはは呆然。ヴィータはそんななのはに軽く怒りを見せて、悪かったなと不機嫌に言い放つ。それになのはは我に返り、慌てて宥めようとする。しかし、それが微妙にフォローになってい

ないので、ヴィータは余計怒りを燃やす。
何しろ、ヴィータはそういう事を知ってる必要がないからしょうがないとか、大体でもちゃんと使いこなしているから構わないとかなのだ。これでヴィータが怒らない訳がない。結局、ヴィータが落ち着くまでしばらくそんな時間が続くのだった。

「……成程、そうでしたか」

「ああ。すまないな、今まで黙っていて」

リビングで話し合うセイバーとアーチャー。今、全ての事情を明かし、セイバーはその考えと判断、理由に納得していた。自分が隠し事が苦手である事や、なのは達への対応が変化するだろうとの事には、色々と反論はあったが、概ねアーチャーの行動に理解出来た。
それよりも大事なのは、今後の事。蒐集を完了させる前に結界を張り、被害を最小限に抑える。それから、魔力ダメージで一度防衛プログラムを停止させ、はやてとリインが作業を終えた後から再び戦闘再開。バグの本体である防衛プログラムを破壊する。

その流れを聞いて、セイバーは自分の出番は最後の破壊の部分だと感じた。自分達サーヴァントはその攻撃の威力が大きい。そのため、加減が難しい状況では、中々思うように戦えない。更に、非殺傷が原則の魔法と違い、セイバー達の攻撃はそんな気の利いた事は出来ない。
だからこそ、何の気兼ねもなく攻撃出来る最後が自分達の出番。そう判断したのだ。どうもそれをアーチャーも感じ取っているようで、最初は苦しい展開だろうと言った。

「それで、肝心の蒐集は？」

「今の時点で残り一頁。いつでも完成させられる」

「……なのはからも蒐集したんですね？」

「ああ」

「……そうですか」

セイバーからの問いかけにアーチャーは躊躇う事なく断言した。それは、躊躇うのはただの言い訳にしかならないと思ったから。セイバーに対し、これ以上言い訳はしたくない。その思いからアーチャーは一切躊躇う事無く答えたのだから。

それをセイバーもどこかで感じ取ったのだろう。アーチャーを責める事も恨む事もしない。知っているのだ。なのは自身がはやての事を聞けばどうするかなどと。

（困っている人を助ける力があるのなら、それを迷う事無く使う……。なのはも御神の血筋ですからね）

まさか、自身の命を危機にまで晒してとは思わなかったが。そうセイバーは考え、小さく苦笑する。いや、なのはは信じていたのだろうと。決して自分を死なせないようにすると。ヴィータの事を、更にはアーチャー達の事を。

だからこそ何も言わない。アーチャー達の事だけではなく、なのはの決断にも。自分はなのはの選ぶ道を共に歩くと決めたのだ。なら、その決断を支え、助けるだけだ。そう、思い返して。

セイバーが自分の気持ちを新たにしているのを、アーチャーは見

つめて微かに笑う。この高町家と関わるようになって、確かにセイバーは変わった。だが、やはり本質は変わらないと。

素直で実直。曲がった事を嫌い、どんな相手にも礼儀を尽くそうとする。そして、本当はとても心優しく少女らしい面もある。今も、なのはの姉のような立場として、その道を歩かせてやろうとしている。

（……変わって欲しくないところは、変わらないのだな）

それを嬉しく思い、アーチャーは笑みを浮かべてセイバーは見る。それにセイバーが気付き、少し不思議そうに首を傾げた。

「私に何か？」

「いや、好ましく思えただけだ。なのはの姉らしくなったと思ってね」

アーチャーの姉と言う表現にセイバーは軽く照れ、それにアーチャーが内心微笑みを浮かべるも、表情は普段のままでこう続けた。だが、たまに妹にも見えるがねと。それにセイバーが一瞬口ごもり、動きを止める。

それが本当におかしくてアーチャーはつい笑いを抑えられず、声を漏らす。それにセイバーが反論出来ずに、情けなく小さくなるのを見て、アーチャーは心から微笑みを見せた。生憎それをセイバーは見る事はなかったが、見ていればきっと違う意味で言葉を失っただろう。

そこにいたのは、紛れもなく『エミヤシロウ』だったのだから……

月村家の中庭にあるテーブル。そこに座りながら、はやてとすずか、アリサの三人はその膝に猫を乗せて話していた。最初は、他愛のない話。アリシアとの出来事や学校での事などだ。しかし、それをある程度した所で話が切れ、はやてが少し困ったような表情を浮かべた。

その表情に二人は不思議顔。そんな表情になるような要素がどこにもなかったからだ。すると、はやてはどこか戸惑う二人に対してこう切り出した。

「あのな、ちょう大事な話があるんよ」

「大事な話？」

「何よ？」

「落ち着いて聞いてな」

はやての言葉に益々戸惑う二人。それにはやては真剣な眼差しで告げた。夜天の魔導書に関わる事情の全てを。そして、自分の状況を。そのあまりの内容に二人は言葉を失うが、はやてが語っている事を思い出し、徐々に冷静さを取り戻していく。

更に、内容が終わりに近付くにつれ、希望が大きくなっていった事もある。話しているはやて自身さえ、それに伴い笑顔へと変わっていったのだから。

そうして全てを伝え終わる頃には、二人にも笑顔が浮んでいた。確かに恐ろしい事態にはなっているが、既にそれを解決する手段は見つけられていて、その準備もほぼ完了している。

更には、自分達も良く知るセイバー達が協力している。それが一

番大きな希望。アリシアを目覚めさせる時、二人はその目で目撃した。セイバー達は凄まじい光を抑え込み、目覚めるキッカケを作った事を。

（小次郎達やなのはにフェイト。シグナムさん達やプレシアさんまでいれば大丈夫ね。アタシは……今回は傍にいない方がいいかしら……）

（はやてちゃんが死んじゃうかもって、言われた時はびっくりしたけど、もうそこまで準備してるんだ。今度は、なのはちゃん達と一緒は無理かな……）

互いに希望が大きい事に喜びを感じるも、何の力もない自分達が戦いに参加する事は難しいと思い、同時に悲しみも感じていた。

それをはやても感じ取っていた。だからこそ、何か手はないかと思ってなのはと話したのだから。魔法を使えないにしても、身体能力が人並み外れたセイバー達なら参加出来る。しかし、御神の剣士である士郎達には、アーチャーもそしてなのはも首を縦には振らなかった。

それは、身体能力以上に大きな問題があったのだ。攻撃方法と手段。相手が空中に常時いるだろうと仮定すると、士郎達では分が悪すぎるのだ。だからこそ、空を飛べずとも何とか出来そうなセイバー達しか参加させる事が出来ない。

「……ね、アタシ達はどうすればいい？」

はやてがその事を思い出していると、アリサが真剣な眼差しでそう切り出した。その目に宿る光ははっきり意見を言って欲しいと告げている。それにはやてが言葉をなくしていると、すずかもそのアリサの視線を受けて小さく頷いた。

そして、同じようにはやてへ視線を送る。どう言われてもいいから、正直な意見を聞かせて。そんな思いを込めた目を。二人の気持ちを感じ、はやては少し考え、意を決して告げた。

「わたしは、二人の好きなようにすればええ思っとる」

その言葉に二人がどこか納得した表情に変わる。更にはやては続けて言った。でも、危ない事になるから無理強いはしない。それに二人は頷いた。はやては、それを決めるのは自分ではなく、二人自身だと思っているのだ。

ちゃんとライダーや小次郎にそう告げて、許されるのなら来ればいい。自分に出来るのは、二人にもし参加するのなら、アーチャ達にも言って、二人にもしもの事がないようにしてもらう事。そして、それを見守るも安全な場所で勝利を願うも立派な戦いだろうからと言って、はやては締め括った。

その言葉にやや呆気に取られる二人だったが、言われた事を理解し笑って見せた。はやては二人を止める事はしない。それは、本人が決める事だから。故に、自分の意見は言った。参加しなくてもいいし、参加してもいいと。

危険な事は伝えた。来ないでくれとも来てくれとも言わない。それは、どちらを言っても二人の意志に影響してしまうから。なので、どちらでもいいようにはやては自分の出来る範囲で手を打つ事しか出来ないのだ。

「さて、帰ったら小次郎に聞いてみなくちゃ！」

「ライダー、許してくれるかな？」

「アリサちゃん、すずかちゃん、ほんまにおおきに」

しかし、もう参加する気でいる二人を見て、はやては心から嬉しそうに笑う。どちらになるにしろ、その気持ちは伝わった。それだけではやてには十分だったから。故に礼を述べた。そして、これだけは忘れてはいけないと思い、はやては力強く言い切った。

――二人の気持ちが、もうわたしを助けてくれたわ！

その言葉に、アリサとすずかは揃って力強く笑う。丁度そこへ、イレインがティーセットを載せたワゴンと共に現れるのだった……

「この任務もそろそろ終わりだねぇ」

「そうだね。クロ助も頑張って働いてるし」

アースラ艦内を歩く二人の女性。エイミィとロッテだ。今彼らが担当しているのは、管理世界の一つで起きたとある事件。質量兵器の密輸組織の裏取りに近いものだ。摘発した組織と繋がっていた企業があり、その取引の証拠を掴むためのもの。

どちらかと言えば、陸士隊の仕事に近い。だが、地元の局員では万が一の際不安があるとの事で、執務官であるクロノへ要請が来たのだ。

本来、彼は次元航行艦付きのためこういう仕事は来ないはずなのだが、グレアムからの手回しと本人が承諾した事。更に、艦長であるリンディが許可したため、こうしてアースラで担当する事になったのだ。

実際、相手の企業は他にも質量兵器に手を出していて、別の組織

と連携してクロノの調査を邪魔しようとしてきたのだ。しかし、事前情報を得たエイミィの活躍、クロノだけではなくリーゼ姉妹もいた事により、武装隊が無事にそれを鎮圧。

その企業だけでなく、別の組織の情報と証拠も手に入り、今は報告書を作成している最中。それさえ終われば、アースラは任務完了として帰還の途につけるのだ。

「でもいいの？　アリア、怒るんじゃない？」

「あ～、ま、いいでしょ。少しぐらい休んだってさ」

そう、アリアとクロノは現在報告書作成の真っ最中。ロッテもそれをやっていたのだが、それを放り出し、こうしてサボっているのだ。エイミィは休憩時間なので、何も恐れる事もなくこうして歩いている。

二人はそのまま食堂へ行き、飲み物を買って席に座る。そして話し出すのは休暇の事。エイミィがはやて達のために調べ物に時間が出来ると言うと、ロッテは少し気まずく思いながらもそうだねと返す。

（エイミィには、まだ言えない事が多いからね）

あの時、グレアムから告げられた言葉。はやての命を助けるために。その意味を聞いて、ロッテは言葉を失った。蒐集を完了させなければはやてが死ぬ。更に、完成させてもアーチャー達の計画失敗なら、はやてごとの氷結封印を実行する。

そう聞かされ戸惑う二人に、グレアムは言ったのだ。ここまで来たのなら、失敗はしたくない。全力で事に当たって、はやての未来を氷で閉ざす事にならぬようにして欲しいと。

その後、グレアムから色々な事を教えられ、二人はアースラへ乗艦した。リンディやクロノと情報をやり取りし、任務終了した後の行動までを。デュランダル完成をもって、アーチャー達に連絡し夜天の魔導書を完成させる。

その際、管理局上層部への報告に手を加える事が出来るように、アースラを地球に向かわせる事になっていた。そう、プレシアがおかしな魔力反応を感知したので、その調査のためにリンディ達が訪れたとして。

本来ならば、そんな事はしたくない。だが、リンディだけでなくグレアムも今の上層部に、微かな不信感を抱いていた。そのため、セイバー達の事だけでなく、闇の書に関する事も色々と事実を伝える事ははばかられたのだ。

「……でも、おっかしな話だよね」

「何が？」

これからの事を思い出しながらエイミィと話していたロッテだったが、急に告げられた言葉に疑問符を浮かべた。それにエイミィは理解に苦しむといった表情で答えた。

何故航行艦付きのクロノに、わざわざこんな依頼をしたのか。確かにクロノは優秀な執務官だし、管理世界を移動するにも都合がいいのは理解出来るが、少々海より陸寄りの事件ではないかと。

「……陸じゃ手に余ったんでしょ」

「う～ん……そうかもしれないけど……何かね」

「納得出来ない？」

「そんなとこ」

そこまで話してエイミィは立ち上がる。そろそろ休憩時間が終わるからだ。ロッテに手を振って「ちゃんと仕事しなよ～」と言い放ち、エイミィはブリッジへ戻っていく。その背中を苦笑いで見送るロッテ。

そして、その背中が見えなくなると表情を崩し、大きく息を吐いた。気付かれていると感じたのだ。全てではないが、この案件自体が無理にあてがわれた物だとはエイミィは気付いている。

（……クロ助が補佐にするはずだよ。あの勘の良さ、確かに補佐向きだわ）

執務官自体は警戒されたりする事が多いのに対し、補佐官はそこまででもない。故に相手も補佐にはどこかで油断し、ぼろを出す事があるのだが、エイミィのように鋭い者がそれを見れば、それをキッカケに丸裸にされる事もある。

クロノはきっと、そういう所を見込んで補佐につけたのだろうとロッテは考え、すぐに苦笑した。そう、本当に理由はそれだけだろうかと思って、こんな事を考えたからだ。クロノはエイミィを気に入っていて、傍に欲しがったのでは。もしくは、エイミィがクロノの世話を焼きたくて補佐になったのかと。

（どっちもありそうだ。クロ助にカマでも掛けてみようかな）

そんな事を考え、楽しそうに笑みを浮かべるロッテだったが、その笑みが固まり尻尾が震えるように起立した。恐ろしい程の怒気を感じ取ったからだ。そして見上げる視線の先にある人物がいた。

「楽しそうねロッテ。じゃ、その気分のまま仕事してくれる？」

「あ、アリア……あたしね、今から戻ろうと……」

そこにいたのは、何とも言えない表情のクロノと怒りを抑えながら笑うアリア。その笑みに、ロッテは何とか声を絞り出して言い訳しようとするが、そんな対応にそれまで何とか怒りを抑えていた彼女が、無表情で言い切った。

――――問答無用。

こうして、ロッテはアリアにバインドで拘束され、引き摺られて報告書作成へ戻るのだった……

――――――

幕間１４裏

この日、フェイトは何かが鳴っている音で目を覚ました。見れば携帯のアラームが鳴っている。気だるいながらも、それに手を伸ばしてアラームを止める。視線をアリシアへ向け、起こしてないかを確認してほっと一息。

そして、いつもなら意識が覚醒しているのに、未だに体が眠りを欲している事に気付き、フェイトはベッドへ横になりたい欲求に駆られる。それを何とか振り払い、ゆっくりベッドから降りて伸びをした。

（……だるいな。やっぱり蒐集の影響が出てる）

昨夜リニスに治療魔法を使ってもらい、ランサーにルーンを使ってもらったためか体の方はかなり良いのだが、やはり本調子とは言えない。どうしても何か違和感に近いものを感じるのだ。

しかしそれでも動けるだけましと考えた所で、何やら先程聞こえた音がする。その音のする方へ視線を向けて笑みを一つ。アリシアの携帯が鳴っているのだ。だが、一向に起きる気配がないので、枕元にある携帯を手に取り、そっとアラームを解除する。

「……起こした方がいいかな？」

止めたは止めたが、起こすべきか否かを考え、フェイトはそのまま悩み出す。結局、アリシアはフェイトがアラームのスヌーズを解除し忘れていたため、その鳴り響いた音で目を覚ますのだった……

「……ゴメンね、アリシア」

「あはは、いいよ。わたしもこれぐらいの時間に起きるつもりだったから」

パジャマから着替え終わり、二人はそう言いながら部屋を出て洗面台へ向かう。先程の出来事で起こした事を謝るフェイトに、アリシアは笑って許した。何せ、今日はリニスから起こされずに済んだのだ。そのため、アリシアはまだ若干眠い目を擦りながら、笑みを浮かべていたのだから。

リビングでは、ランサーがソファーに座ってアクビを噛み殺し、アルフはその隣で同じようにアクビをしている。キッチンでは、リニスとプレシアがエプロンを着けて朝食を作っていて、いい匂いが漂い始めていた。

それを眺めて、フェイトは笑顔を浮かべた。アリシアも同じように笑顔で全員に向かって声を掛ける。

「おはよう」

「おはよ～」

二人の声に四人がそれぞれ顔を向け、笑みと共に返事を返す。それを受けて、二人は洗面台に行き、まずアリシアが顔を洗い出す。タオルをアリシアへ手渡し、フェイトは入れ替わるように顔を洗う。

そして、顔を洗い終わるとキッチンへ。二人はプレシア達の手伝いをするため、行動を開始。フェイトはリニスの指示で皿を用意し、

アリシアはその手伝い。そんな微笑ましい光景に誰もが笑みを見せると、こうしていつもテスタロッサ家の時間は過ぎていくのだ。

フェイトがアリシアを基本支える形の姉妹。でも、それが時にきちんとした形になるのも二人の特徴。似ているようで、似ていない。双子と呼んでもおかしくない二人ではあるが、その性格や思考はまったく違う。

アリシアは楽観的で行動派。その上人見知りもなく、我が強い。フェイトは理性的で慎重派。人見知りする性質で基本我を抑える。そんな二人だが、共通している部分も確かにある。

それは、優先順位の付け方などに代表される優しさ。必ず自分よりも他者を上にしたがるのだ。フェイトは元来の性格故に。アリシアは人に優しくしなさいというはやての言葉が影響して。だが、これは本来から二人が優しい人間だったからの共通点。

はやてとの日々も多分に影響しているのだろうが、そこも共通点といえない事もない二人。今も仲良く次々と料理が入れられる皿を運び、テーブルへ並べている。

「これで終わり」

「じゃ、ランサー達を呼ぼうか」

「そうだね。ランサ～、アルフ～、ご飯だよ～」

「アリシア、それじゃまるでペットだよ」

アリシアの呼びかけがどこか犬などを呼んでいるように聞こえ、フェイトは少し笑いながらそう言った。それにリニスやプレシアも笑みを見せ、視線をランサー達へ向けた。呼ばれた二人もそれが聞

こえていたのか、やや苦笑しながらテーブルへ移動し、アリシアへ軽く文句。

聞こえてるから変に語尾を延ばす必要はないとランサーが言えば、アタシは使い魔だけどペットじゃないよとアルフが続く。だが、その表情は二人共に笑顔。アリシアはそんな二人に少し悪いと思ったのか謝って、それにプレシアが微笑みを浮かべて頭を撫でる。

リニスとフェイトはそれを見つめ、笑みを見せてテーブルへ。それに反応してランサーやアルフも座り出し、最後にプレシアが席に着いて食事開始。体の調子はどうだと聞かれ、かなり楽になったと笑うフェイト。今朝は早く起きたんですねと尋ねられたアリシアが、フェイトの軽いドジを話して笑いを取る。

そんな和やかな時間。念のため今日は部屋で寝ているとフェイトが言うと、アリシアが傍についてると言って笑顔を向ける。それにフェイトは嬉しく思い、感謝しようとしてはたと止まる。

「でも、退屈しない？」

「……フェイトと一緒なら平気」

「アリシア、今少し考えただろ」

退屈の一言にアリシアが一瞬しまったという顔をしたのを、アルフは指摘。それにアリシアがそんな事はないと反論するも、説得力がない。そして、フェイトはアリシアと一緒に家でのんびり過ごす事になり、アルフはリニスと共にショッピングへ。ランサーは誰かに会いに行って時間を潰すとし、プレシアは部屋でちょっとした仕事をする事になった。

「母さん、仕事って局関係？」

「そうね……そうとも言えるわ」

「どういう事？」

「さぁ？　それは終わってからのお楽しみかしら」

フェイトとアリシアに笑いかけて、プレシアは部屋へと入っていく。それに揃って首を傾げるフェイトとアリシア。局の仕事だとすれば察しがつかないし、他の仕事なら教えてくれるはずなのだ。それに対して、ヒントさえくれない事を二人は不思議に感じた。

だが、いくら考えても思いつかないだろうと判断したアリシアが、フェイトの手を掴んで自分達の部屋へと引っ張った。とりあえず部屋に行こうと。それに頷いて動き出すフェイト。その手に感じる温もりに、言い知れぬ喜びを感じながら……

「で、ここに来たのか？」

「ああ。ライダーんとこは止めた。あいつ、あんま手合わせしたがらねえからよ」

「ふむ、確かに」

日課である植木の手入れをしながら、小次郎は答えた。ランサーもそれを眺めて、苦笑している。改めて見ると中々笑えると思ったからだ。何せ、小次郎はアサシンのサーヴァント。それが真昼間に堂々と作務衣を着て庭仕事をしているのだ。

これをもし冬木の関係者が見れば、きっとこういうだろう。似合

い過ぎて違和感がまったくないと。今ならば、山門で立っていても誰にも不思議に思われる事はないのではないか。そんな風にさえ思えるのだから。

（一度坊主や嬢ちゃん達にも見せてやりたいもんだぜ……。あ、バゼットはともかくカレンは勘弁だな）

思い出すのは自分が関わった魔術師達や冬木の人々。そして自分のマスターだった女性の顔。元々のマスターだった女性はともかく、次にマスターになった（と本人が言い張っていた）少女を思い出して、やや閉口。

そんな風に表情を苦々しくしているランサーを見て、小次郎は笑みを浮かべる。何を考えているかしらないが、おそらくいい事ではないと分かったからだ。故に告げた。

「ランサーよ。顔が死んでおるぞ」

「げ、考えるだけでそうなるのか。こりゃ、もう思い出さねえ方がいいな」

「何の事だ？」

「カレンって奴の事だ」

ランサーのうんざりした声に小次郎は頷き、記憶を辿る。しかし、小次郎はカレンに会った事がないため、結局断念。それに気付いたランサーが特徴だけを簡単に教え出す。

銀髪で金色の瞳。色白にパッと見はかなりの美少女。だが、簡単に悪口雑言を吐き、罵倒する事に躊躇いがない。食べ物は極端な味しか好まず、完全味覚音痴。終いには、人の嫌がる事を嬉々として

行なう。

それを言い終えて、ランサーは本気で嫌そうな顔をする。どうも色々と思い出したようで、何かをぶつぶつ呟いている。小次郎はランサーから聴いた特徴を総合し、一つの結論を出した。

「それは……中々楽しげな話よ」

「……お前、人事だと思って……」

からかうように告げた小次郎に、ランサーは少し怒りさえ覗かせる。しかし、それに小次郎は余計に笑みを深くした。その通りよと言って笑い出す。そんな反応にランサーは怒りを爆発させる――――事なく大きくため息。

自分も逆ならこうして笑うからだ。英霊ともあろう者が、成人もしていない女に苦しめられているなど、どこからどう考えても笑い話にしかならないからだ。そう考え、ランサーも笑い出す。

小次郎の言葉に違いないと思ったのだ。楽しい話。そう考える事も出来る。だから笑った。もう会う事はないだろう相手に対し、どんな形であれ出会ったのだから、それに意味はあるだろうと思いながら。

そうして、しばらく笑っていた二人だったが、どちらともなく笑いを止めた。そして、先程までの雰囲気が嘘のように静まり返る。

「……それで、いつ頃か聞いたか？」

「いや、私もまだだ。近く言いに来るだろうとは思うのだが」

「そうか……」

蒐集の残りがどれ程か、あの日以来ランサー達はまったく知らされていないのだ。プレシアやリンディから蒐集し、昨日フェイトからも蒐集し、なのはからもしたであろうとランサーが話すと、小次郎は少し驚いたが納得したように頷いた。

「……強き娘達よ」

「本当にな」

そして、リニスがシグナムから聞き出した話によれば、フェイトを蒐集した時点で残り三十一頁。つまり、今はもっと少なくなっているだろうと予想し、二人は共に頷いた。決戦の時は近いと。

そこまで考え、小次郎はふと思った疑問を口に出す。それは、今日アリサがはやてから話があると呼ばれている事。それの場所は何故か月村家だと。それを聞き、ランサーはフェイトとアリシアは呼ばれていないと返す。

それから二人が悟るのは、はやてが話す内容は自身の事だろう事。そして、それを聞いてアリサ達が何を考えるかという事だった。

間違いなく、はやての事を知ればその全てを見守りたいと考えると。それを止めるはやてではない。きっと二人の意志に委ねる事にし、強くは止めたりしない。

何故なら、二人はジュエルシード事件の際、アリシアを目覚めさせる時に参加したのだから。例え危険だとしても、出来る事なら関わりたいと言い出すだろう。そう考え、小次郎は笑みを浮かべ、ランサーは苦笑。

「これは中々骨の折れる事になりそうよな」

「だろうな。ま、精々楽しもうや」

「ふむ、それも然り。少々厳しくなければ、な」

アリサと口論になったとして、折れる事になるのはおそらく小次郎。一方のライダーはすずかと口論までにはならない。そう思ったからこその掛け合い。守りながら戦うのはきつく、辛いだろうが、それでも本気で見守りたいと思うのなら、それを支えるのがサーヴァント。

小次郎もランサーもあまりそう思われる事はないが、忠義は尽くす人間だ。故に互いの事はある程度分かろうもの。守れないのなら守れないと告げ、出来ないなら出来ないと告げる。しかし、もし相手が命がけでそれを望むのならば、彼らも自身の命を賭けてそれを成す。

その後、ランサーは小次郎の庭仕事が終わるのを待って、手合わせをするのだった……

はやてがアリサとすずかに自身の事を話し出した頃、月村家のキッチンではライダーとイレインがお茶の準備をしていた。ノエルとファリンは買い物に出ていて、忍は恭也とデートのため外出していた。

そして、そんな二人が作業しているのを眺めている者がいた。リインだ。はやての車椅子をここまで押してきて、今は話の邪魔にならないようにとライダー達の所へ来たのだが、少々戸惑いを感じていた。

「その、別に私に気を遣ってくれなくても……」

「何を言うのです。リインも立派な客人ですから」

「そうだ。そんなに気にするなよ」

お茶の用意を終えた二人は、ティーセットが載せられたワゴンを押して歩き出す。イレインはすずか達へ、ライダーは客間へと運ぶために。リインは少し申し訳なく思いながらも、ライダーの後をついていく。

イレインと別れ、二人は歩く。その途中、ライダーが何気なく尋ねた。憑き物が取れたような気がするが、何かあったのかと。それにリインは一瞬だが驚いて歩みを止めてしまった。しかし、ライダーはそれに気付かぬ振りをしてそのまま歩く。

それにリインが気付いて少し急ぎ気味で歩き出し、昨日悩んでいた事を話す事が出来たと返した。それにそうですかと柔らかい笑みを返してライダーは答えた。

「それにしても、どうして分かった？」

「何となく、人に言えない悩みを持っている相手の事はよく分かるのです」

「……経験か？」

「ふふっ……そうかもしれません」

そう言って優しく笑うライダー。リインもそれに同じような笑みを返し、二人は歩く。そこから話すのは、ライダーの思い出話。それを聞きながら、リインは軽く笑った。何故なら、ライダーの話す光景はどれも楽しそうで幸せに満ちているように感じられたのだ。

それをリインがライダーに告げると、ライダーも嬉しそうに笑みを見せ頷いた。幸せの意味を改めて教えてもらえたのだ。そう答えて。

客間に着き、そこのテーブルに腰掛けて二人は話を続ける。今はリインの話に変わっていた。はやて達との過ごした時間。それを一つ一つ思い出し、ライダーへ話していく。それを聞きながら、ライダーは紅茶を淹れる。そして、注ぎ終わるとリインの前にカップを置き、自分の分を手にして相槌を打つ。

「それで、ハヤテが驚いたのですか」

「ああ。そこまで驚くとはヴィータも思わなかったらしい。だが、どうも主は最初から分かっていたようでな。わざと大きく驚いた振りをしたのだ」

そう言ってリインは笑みを浮かべた。ライダーもはやてらしいと言って頷く。そして、共に紅茶を飲み視線を外へ向けた。そこには、気持ちのいい青空が広がっている。その空を見つめ、リインはライダーへ問いかけた。

自分達は、こんな空の下で生きる権利があるのかと。それにライダーはリインの方は見ないではっきり告げた。そんな事は誰かが決める事ではなく、自分で決める事だと。

ライダー自身もそう思う事がある。それでも自分を受け入れ、家族と呼んでくれる者達がいるのなら、生きていこうと決めたのだから。そうライダーはリインへ言い切った。そこには、一切の躊躇いがない。

リインはその言葉に衝撃を受けた。それは、シグナム達と同じ答えだったからだ。家族と呼んでくれた者達のため、愛する者のため

に必死で生きようとする事。その決意と覚悟。それが、ライダーからの言葉に込められていたから。

（そうか……シグナム達が変わった要因は、主やアーチャーだけではなかったのだな。ライダー達の存在……それも大きく影響していたのだろう）

そう思い、リインは心から言った。良い言葉だったと。胸に響いたとリインが告げると、ライダーは少し悪戯っぽく笑ってこう返した。

――胸ではなく、心に、でしょう。

それにリインは心底おかしいという風に笑い、力強く頷いた。

――そうだな。確かに心だ。

そう、はっきり告げて。そのまま、二人は他愛もない事を話して過ごす。リインはライダーの話す衛宮邸の話が気に入り、セイバーの話には苦笑しつつ納得し、桜の話には笑みを見せ、凛の話には驚きと感心をした。イリヤにはヴィータに似たものをどこか感じ、大河には呆れるしか出来なかった。

士郎については、アーチャーに近い印象を受けた。何故かは分からない。皮肉屋ではないし、聞いただけでは考え方も違う。だが、ライダーの話し方や表情を見ていると、どことなくアーチャーを思い出すのだ。

（朴念仁で家事が得意。自分を蔑ろにしてでも他者を助けにいく。何故だろうか、共通点は家事が得意な事ぐらい……朴念仁もだろうか？）

そんな風にリインが考えているのを眺めながら、ライダーは小さく笑う。初めて出会ってからまだ一ヶ月もしていない。それにも関らず、ここまで変化したのだなと感じていたからだ。最初は感情の起伏がほとんど見られず、機械のようにも見えた。それが、今やここまで表情が出るようになった。

（ハヤテ達のおかげですね。彼女は本当に心を溶かすのが早い……）

そう思ってライダーは苦笑した。何せ、はやての傍に昔からいる者が生前はそうだった事を思い出したのだ。頑なだったはずの凛達の心を、魔術師から女へ変えてしまった男。

それがはやてと共にいればこうなるのだろう。そう考えてライダーは紅茶を飲み干した。見れば、リインのカップも空になっている。それに代わりを注ぎつつ、自分のカップにも注いでいく。

緩やかに過ぎていく時間。それを感じながら、二人は話す。静かな休日。出会えた事の奇跡を噛み締めながら……

沈黙が制する室内。そこに響くは何かを打つ音のみ。音を出しているのは、一組の男女。クロノとアリアだ。動かしていた手を止め、クロノは小さく息を吐いた。

「……よし、これでこちらは終わった」

「そう、じゃあ私ももう終わるから。そうしたら休憩しましょう」

二人が書いているのは、つい先日終えた事件の報告書。とはいっ

ても、クロノは担当者として事件全体を、アリアは協力者としてクロノ達アースラクルーの対応などを書いているので、内容はまったく異なるのだが。

後一人、ロッテは武装隊の練度について書かねばならないのだが、ちょっと飲み物を取ってくると告げて出て行ったきり、戻ってこなくなっていた。

勿論、ロッテがサボっているのは理解していたが、それを追い駆けるのは自分の仕事を終えた後だと思っていたので、二人は今まで黙々と報告書とにらめっこしていたのだ。

アリアも書き終わり、二人は連れ立って部屋を出る。向かうは食堂。朝食の時間にはやや遅いが、早めの昼食だと思えばいいだけの事。そう考えた二人は、いなくなったロッテの事を話しながら念話で別の事を話し合う。

「まったく、相変わらずロッテはこの手の仕事を嫌がるんだな」

【じゃあ、これが終わればデュランダルも？】

「そう。まぁ、いつも私が手伝う事になるんだけどね」

【すぐにって訳じゃないけど、完成は近いよ。アーチャーにも言って、軽く試しをしてから投入かな】

アースラの中では、誰に聞かれるか分からない。そのためにこうして念話を使わざるを得ないのだ。内容が内容だけに今は知られる訳にはいかない。いずれ関わる事になるだろうが、それは予定されている事ではなく、あくまで突発的な出来事でなければならない。

それでも、伝える事や話し合いたい事はあるので、こうして二人は意見や情報を交換する。グレアムからはやての状態を聞いて、ア

リアは衝撃を受けた。自分に優しく微笑み掛けた少女。その命が尽きようとしていると。

アーチャー達が足掻いている。アリアはそれを知っているからこそ、思いを新たに動き出しているのだから。グレアムの苦しみ、クライドの犠牲。そんな悲劇を終わらせるために。

おそらく、その気持ちはクロノも同じはず。そう思ってアリアはクロノへ視線を向ける。成長するにつれ、益々クライドに似てきたクロノを見て、アリアは思う。

（蛙の子は蛙って日本じゃ言うけど、その通りね。クライド、きっと喜んでるわ。クロノも立派になったもの）

考え方も性格も、知らないはずなのに父親に似ていくクロノ。リンディやレティも同じ事を思うだろう。そう考え、アリアが視線をクロノから前に戻した。すると、前からエイミィが歩いてきた。

二人に気付いて、エイミィは苦笑した。それに疑問符を浮かべる二人だったが、エイミィの告げた言葉に納得。食堂に行くなら程々にしてやって欲しいと言われたのだ。それが意味する事を理解し、クロノは大きくため息を吐き、アリアは呆れた。

「じゃ、あたしはこれで」

「ああ」

「情報ありがとう、エイミィ」

アリアの声に疲れと怒りを感じ、エイミィはやや引きつった笑みを浮かべて足早に去って行く。それを見送り、クロノとアリアは歩き出す。少し行くと、席に座り何か楽しそうに笑みを浮かべている

ロッテがいた。
それにクロノが声を掛けようとして、それを止めた。隣から静かな怒気を感じ取ったからだ。視線を動かせば、アリアがロッテへ笑みを向けている。だが、それが本当に笑顔に見えるのなら良かった。

（ロッテ、僕は何もしてやれないからな）

怒りを隠し、アリアがゆっくりロッテへ近付く。それに気付けないロッテ。だが、その距離が逃げ切れないものに変わった瞬間、アリアがその怒気を全開にした。それを受け、ロッテの尻尾が思いっきり起立する。
アリアの言葉にロッテは恐怖で言葉が上手く話せないようになっているように、クロノは感じた。自分だって、あんなアリアに迫られたらはっきり意見を言う事が出来るか不安だ。
アリアがロッテをバインドで拘束し、引き摺っていくのを眺めていたクロノ。その横をアリアが通るとこう言った。

「クロノ、悪いけど部屋に私の分の飲み物と食事持ってきてくれる？」

「あ、ああ……」

「ごめんなさいね。……行くわよ、ロッテ」

クロノへは優しく申し訳なさそうに告げるアリアだったが、ロッテには冷え切った声で言い放つ。その落差が、クロノには凄まじく恐ろしいものに思えた。女は怖い。そう思わされるクロノ。
そして、遠ざかるアリアとロッテを見つめ、心から思うのだ。自分は、ああならないようにしようと。そう心に誓い、クロノは気を

取り直して歩き出す。

――――さて、食事でもするかな。

先程見た光景のせいで、余計に空腹感が強くなった気がすると思いながら、クロノは呟く。心無しか、その声には空元気のようなものが含まれていた……

――――――

A' s九話　前編

「よし、完全復活！」

”そうですね”

日曜日の朝。いつもの時間に目覚めたなのはは、体の調子が戻っている事に笑顔で告げた。それに対するレイジングハートの答えが、どこか笑みを浮かべているようにも聞こえ、なのはは嬉しくなった。

昨日はヴィータと話し合った結果、携帯でフェイトへメールを送り、プレシアかリニスにレイジングハートの事で相談があると伝えてもらう事にした。そして、今日はそのためにテスタロッサ家へ行く事にしたのだから。

「何か良い案あるといいね」

”ええ。私もそう願います”

レイジングハートの答えに頷きながら、なのははトレーニングウェアへ着替えていく。昨日出来なかった分も魔法訓練をしようと思っているのだが、ユーノが早朝訓練を休んで寝ているので、フェイトに頼んで模擬戦をさせてもらおうと考えていた。

今は自分に出来る事をとことん突き詰め、強化する事になったとしても、それに甘えるだけにはしたくないと、なのははそう思っている。レイジングハートが強くなるのなら、自分もそれに伴って強くなりたい。そう考えているから。

着替えを終えて階段を下りていくなのは。向かうのはセイバーが待っているリビング。日課のランニングに向かうためだ。レイジン

グハートをポケットに入れて、セイバーへ笑顔を向けて元気よく告げた。

「おはよう、セイバー！」

「おはようございます、なのは」

「じゃ、行こうか」

「そうですね」

並んで歩き出す二人。話すのは士郎達の事。既に三人は鍛錬に出かけていて、ユーノは本当に寝ているらしく、恭也が言うには死んだように眠っているらしい。それを聞いてなのははセイバーと真剣な表情。

既に事情を知る二人としては、色々と思う事がある。なのはは、はやての体とその残り時間がどれだけなのか。セイバーは、完成後の防衛プログラムの力やその強さ。そして共通するのは、本当に無事に終わらせる事が出来るのかという事。

（蒐集した相手の魔法を使えるんだよね。スターライトやザンバーを使われるとしたら……）

（プレシアやリンディの魔法を熟知しても、厳しいかもしれない。……宝具を使わざるを得ないでしょうか……）

いつか来る戦い。それに備えて思いを馳せる二人。抱く危機感の方向性は違えども、考える事は同じ。絶対に負ける訳にはいかない。はやてのためにも、リイン達のためにも。

やや明るくなり始めた空の下を二人は走る。会話はなく、その表

情は真剣なまま。だが、それは不安の色だけではなく、確かな希望の色も浮んでいた……

なのは達がランニングを始めた頃、はやては自身を襲う強烈な痛みで目を覚ました。今までの比ではない痛み。声を抑えようとしても抑えられないぐらいの激痛。それが、幼いはやての体を襲う。

その声に共に寝ていたヴィータが目覚めるのと、アーチャー達が部屋に来るのはほぼ同時だった。

「はやて!?　はやてっ!」

「どうした!?」

「いつもの発作だと思うけど、はやての様子がおかしいんだ!」

苦しむはやての背中を擦りながら、ヴィータが一目で分かるぐらい動揺していた。アーチャーはすぐにシャマルへ対応を託し、はやての手を握る。大丈夫かと尋ねるアーチャーに、はやては苦しみながらも笑みを浮かべて応える。

シャマルの魔法がはやてを癒すが、あまり効果はない。それでも、シャマルは懸命に魔法をかける。それを見つめる事しか出来ないシグナム達。はやての痛みはその後止まったものの、全員が時間が無くなって来た事を感じ取っていた。

「……はやて、今日のような事は……」

「初めてや。いつもは我慢出来るぐらいやった」

確認を取るアーチャー。それにはやてははっきり答えた。そう、いつもと違うと。だが、シャマルが魔法を使ってくれてから、微かにだが痛みが和らいだとも。それに感謝するはやてだったが、シャマルは表情を強張らせたままだった。

その理由、それははやての感じた感覚にある。シャマルは苦しむような表情で、静かに告げた。あれで微かにしか変化が起きないのなら、もう自分では手の施しようがないと。

「……リイン、主の容態から猶予はどれぐらいと考えられる」

「……長くて一月。早ければ……」

「今月中、か……」

苦々しくシグナムが告げた言葉にアーチャー達は黙るしかない。しかしはやては、そんな六人へ笑顔を見せて言い切った。

「大丈夫や。完成はいつでも出来るし、準備も出来とる。わたしの覚悟も完了や。絶対わたしは死なん。そうやろ？」

はやての明るい声に、アーチャー達は若干の驚きを見せるも、すぐに笑みを浮かべて頷いた。自分達よりも恐怖が大きいだろうはやて。それがここまで言ってくれたのなら、不安に思う訳にはいかないと。

そんな風に立ち直ったアーチャー達に、はやては力強く告げる。家族がいれば、何も怖くないと。それに全員が笑顔を見せて、はや

てもそれに笑顔を返した。

「リンディ達へ連絡がつき次第、計画の実行に移ろう。私はその旨をプレシアから伝えてもらう」

「ならば、我々はどうする？」

「なのはちゃん達の訓練相手ね。あの子達に足りないのは、対人戦闘だから」

「なら、俺はアルフを鍛えるとしよう」

「あたしはなのはか」

「待て。いつもヴィータが高町では経験にならん。今週は私がやろう」

「では、私は今の内にライダー達へ蒐集した魔法を詳しく教えておく」

口々に意見を出し、決めていくアーチャー達。それを見て、はやては満足そうに頷く。やはり強い家族達だと思ったのだ。自分があれだけ苦しんでも動揺が少なく、今もこうして少しでも出来る事をしようと考えを巡らしている。

自分は本当に人に恵まれているのだと、はやては強く感じながら頷いて、少し苦笑しつつこう言った。

――――そろそろ着替えるから男子禁制や。

その言葉にアーチャーとザフィーラは苦笑して出て行き、リイン

達は楽しそうに笑ったのだった……

「やはり、あの子も同じ答えにたどり着いたのかしら」

「まだ分かりませんが、はやてさんの事を聞いた今なら、余計にその気持ちは強いでしょう」

プレシアの部屋で話し合う二人。フェイトからなのはの事を聞いたプレシアは、リニスと最後の纏めに入っていた。そう、レイジングハートの改良案だ。候補は二つあり、一つがベルカ式のカートリッジを使うもの。もう一つが大気中の魔力を自動で吸収し、攻撃と防御に使うというシステムを搭載したもの。

だが、後者には明確な欠点があり、一度使用した魔力は吸収出来ず、更に吸収した内の半分程しか利用出来ない。更に、システム自体がかなり精密なため、ちょっとした事で動作不良を起こす事もあった。それがあるために、このシステムは正式採用されなかったのだ。

それでも、プレシアとリニスがマリエルがくれたデータを基に改良を加え、何とか六割強まで利用可能には出来るようにした。それと共に動作不良の発生率も減らした。しかし、結局総合的に見れば、圧倒的にカートリッジの方が優れているのだ。

なので、プレシアもリニスも後者を薦める気はない。かといって前者も薦めない。二人は、ただなのはに事実を伝え、聞かれれば意見を述べるだけ。あくまでも、決定の意志は本人にあると思っているからだ。

「レイジングハートは、何て言うかしら？」

「……両方組み込めと言うかもしれませんね」

リニスの答えにプレシアは笑って否定しようとして、それを止めた。何となくそんな気がしたのだ。バルディッシュさえ、整備中にこの事を知り、自分にそれも搭載して欲しいと言ってきたのだ。

さすがにそれは色々と無理があると言って諦めさせたが、プレシアはそれを思い出して、レイジングハートの事を考えると同じ事を言い出すような気がしたのだ。

「……どうしました？」

「いえ、なのはちゃんは慎重派なのに、デバイスは過激な性格しているといると思っただけよ」

急に大きくため息を吐いたプレシアに、リニスが苦笑しつつ尋ねた。その返ってきた答えにリニスは納得し、少し意外そうに告げた。

それは、なのはが昔は他者のために自分を抑える性格をしていたという事。リニスはそれを美由希から聞き、驚いたのだ。自分の意見をきちんと伝えるなのは。それが、昔は我を抑えていたとは思えなかったのだ。

それはプレシアもだったようで、若干意外そうに思ったのか、続きを促す。それにリニスは、美由希が言っていた結論を告げた。なのはが今のようになった原因は、セイバーだと。セイバーが言いたい事や伝えたい事は、口にしなければ分からないと。そう強く高町家の者達に言ったのだと。

「それでなのはさんは、今のように思った事はちゃんと告げ、出来る限り隠し事などもしなくなったそうです」

「成程ね。フェイトが変わるはずよ」

「？」

「今のあの子も、どこか自分を出そうとする時があるでしょ。きっと、なのはちゃんに影響されてるのよ。もっと自分もなのはちゃんみたいに……って」

プレシアが言う事を考え、フェイトの日常を思い出すリニスだったが、言う程そうは思えなかった。そんなリニスへ、プレシアが嬉しそうな笑みを見せて呟いた。

――――私にしか分からないのね。

喜びを感じ、笑顔を浮かべるプレシア。それを見て少し呆気に取られるリニスだったが、その幸せそうな表情に笑顔を見せる。今や嘱託魔導師としてひっそりと暮らすプレシア。だが、その力は未だに現役で通用するレベル。

あの現場から昇進したリンディさえ、もし自分と同じ年だったのなら手が出せないと実感する強さ。実戦を経験した事がないのだけが唯一の救いだと、クロノやリーゼ姉妹も太鼓判を押す魔法の厄介さ。

（そんな大魔導師が、今は普通の母親してるんですから不思議ですね）

視線を戻せば、そろそろフェイトが起きる時間だと言っていそいそと部屋を出て行くプレシアの姿。それに微笑み、リニスも後を追う。今日はなのはが来るので、フェイトは自宅で待機。アリシアは八神家へ遊びに行き、アルフは仕事。リニスは、なのはへの説明終

了後、その作業に入る事にしている。そしてプレシアはランサーと、アーチャーを交えて完成後についての打ち合わせがある。

完成はもう目前に迫った。ならば、出来るだけ早くレイジングハートの強化を終わらせなければならない。残り時間はそんなに多くない。その残された時間で、出来うる限りの事を。そう思っているから。

――――奇跡を再び……起こすために。

そう噛み締めるように呟いて、リニスは歩く。その視線の先では、エプロンを手に取る笑顔のプレシアの姿があった……

日差しを遮るカーテン。それを動かし、窓からその眩しさを部屋に差し込ませるライダー。その光に軽く見じろきをし、すずかは目を覚ました。

「おはようございます、スズカ」

「……おはよう」

「ふふ、着替えて顔を洗ってきてください。今日はシノブと勉強するのでしょう？」

寝惚けているようなすずかの顔を見て、ライダーは微笑ましく思いながら声を掛けた。それにすずかは頷きを返し、ゆっくりとベッドから起き上がった。九月も半ばに近付き、日差しも弱くなりつつあってか、そろそろ秋が近いと感じるようになっていた。

着ていたパジャマを脱ぎ、着替え始めるすずか。ライダーはそのパジャマを受け取り、着替え終わるのを待つ。そしてすずかが着替え終わったのを見計らい、部屋を出る。それに続くようにすずかも部屋を出て、共に歩き出す。

「それで、一体何を教わっているのです？」

「うん。自動人形の事。私もいざとなったらノエル達を”治して”あげれるようにって」

「そうですか。難しくはないのですか？」

ライダーの質問にすずかはそう笑みと共に答えていく。その言葉にライダーも笑みを見せて頷いた。そして、次の問いかけにすずかは苦笑した。確かに難しいが、思っていた程ではないと。それに、その勉強はすずかにとっても必要な事。

「だって、家族の事だから」

その笑顔の言葉に、ライダーは嬉そうに頷いてすずかと別れた。洗濯物を片付けるためだ。すずかもそれを知っているので、また後でと歩き出す。それを見送り、ライダーは小さく笑みを浮かべた。

きっと、すずかも忍と同じように知識を正しく使えるだろうと。自動人形を家族と思い、機械とは思わないその気持ちがある限り。そして、おそらく自動人形は、もうノエル達で最後だろうとも。作れる技術があったとしても、忍もすずかもそれを破棄するだろうから。

命をある意味では弄ぶような行為に近い自動人形。今の時代では、その存在は災いをもたらしかねない。それを知るからこそ、忍はその技術全てを公にしようとはしないのだから。

（秘匿するべき事。それを正しく理解しているのですね、二人は）

自動人形の技術が世にもたらす利益よりも、不利益の方が大きい事を予測出来るからしない。人を信じていない訳ではないが、全面的に信じる事は出来ない。現に、夜の一族である月村家さえそれを巡って騒動があったのだから。

これが世界規模になればどうなるかはすぐ分かる。戦争や紛争にノエル達の技術が使われ、多くの命を奪うだろうと。そんな事は絶対にさせたくない。ライダーでもそう思うのなら、二人は余計だろう。

（そういえば、イレインは戦闘機人と言う戦うために作られた存在でした。それに、そもそも夜の一族はどこから来たのでしょう……）

その出自に謎が多い夜の一族。自動人形を作れる技術や長命であった事などを考えると、些か疑問が多い。まず、大前提からして違うのかもしれない。そう、夜の一族は本当に地球出身なのかどうか。

魔法世界の話を聞いた時、忍もどこかで思ったのだ。もしかしたら、夜の一族は次元漂流者かもしれないと。とすれば、その謎も頷けるものがある。地球では考えられない技術の数々。それを使って存在していた夜の一族。

――スズカ達の先祖は……次元世界の住人だったのかもしれませんね……

そんな事を呟いて歩くライダー。今度リンディ達に会う事があれば、それとなく聞いてみよう。そう考えてライダーは歩く。もうその頭には、今日の行動予定が浮かんでいた……

「……これで任務完了ね」

「そうですね」

アースラの中にある艦長室。そこで出来上がった報告書を確認し、リンディとエイミィは共に笑顔を見せ合った。後はこれを上層部に提出し、帰還するだけだ。そう思い、二人は揃って伸びをする。

長い間、書類仕事をしていたせいか、体が硬くなっている気がし、エイミィはやや多めに体を動かし始める。そんなエイミィにリンディは苦笑した。訓練でもするとリンディが冗談めかして告げると、クロノとならしてもいいかもとエイミィがおどけて答える。

「……で、艦長」

「何？」

エイミィが普段通り砕けた口調で問いかけるので、リンディもそれに応じて砕けて返す。それにエイミィは笑みを見せて、こう言った。

「何、隠してるんです？」

その言葉にリンディは何も答えない。そんなリンディへエイミィは自分の推測を語り出す。この事件担当が何故クロノになったのか。そして、どうしてそれをリンディが許可したのか。更に、何故かリーゼ姉妹が協力する事になった事。

それらは全部、夜天の魔導書絡みではないか。そして、この事件が終わった後、何か動きがあるのではないかと考えている。そうエ

イミィは告げた。

リンディはそれを聞いて、どこか嬉しそうな笑みを返す。それにエイミィは少し拍子抜けした。何か誤魔化したり、否定したりと何らかの反応があると思っていたからだ。そんな意外そうな顔をするエイミィに、リンディはその浮かべた笑顔のまま告げた。

「だとしたら？」

「へっ？」

リンディは言った。エイミィのそれは憶測でしかない。証拠がないものに一々反応していては、疲れるだけだと。それにエイミィももっともだと思いつつ、手強いと思っていた。

その後もリンディから情報を聞きだそうとしたのだが、リンディはのらりくらりとそれをかわす。そして、エイミィは気付いた。リンディがここまでして自分に教えないという事が持つ意味に。

（そっか。”まだ”あたしには教えられないんだ……）

そう考え、エイミィは最後に一つだけ確認をする事にした。それは、自分の予想が当たっているかの確認。

「分かりましたよ艦長。あたし、思い違いしてたんですね」

「そうなの？」

「ええ。また、日を改めて聞きにきます」

エイミィはまたという部分でウインクをしてみせた。それにリン

ディは苦笑し、頷いた。それを確認し、エイミィは笑顔で艦長室を後にした。それを見送り、リンディは小さく息を吐く。自力でこの事件依頼の本質に気付いたエイミィ。それに対して感心と納得をしたのだ。

きっと、エイミィなら気付くと思っていた。だからこそ、こちらの事を理解して言ってくれた言葉に苦笑したのだ。そう、まだ言えない。エイミィは今回の決戦のキッカケになるのだから。

グレアムから出発前に聞かされた、エイミィを最後の蒐集対象にする話。それにリンディは反対出来なかった。アーチャーがどうしてエイミィを選んだのか、またどうしてエイミィではなければ駄目なのか。その理由はあまりにも明確だった。

エイミィは非戦闘要員。つまり、蒐集による疲労もその後の戦いには影響しない。更に、ここが一番重要なのだが、完成時期を自分達で決められる事にある。全員の準備を整え、万全の態勢で防衛プログラムと戦う事が出来るのだから。

（でも……クロノは辛いでしょうね）

エイミィが蒐集されるとなれば、きっとクロノはそれに反発する。しかし、それは心情面でだ。表面上は理解し、何も言わないだろう。それでも、その怒りや憤りは簡単には払拭出来ないだろうと、リンディは思う。

そして、おそらくその事はアーチャーが説明するだろうとも思った。その時、クロノの心をどう納得させるのか。リンディはそれだけが不安なのだ。大事な決戦を前に、二人の間に妙な亀裂が走っては上手くいかなくなる可能性が出る。それを分からぬ二人ではない。

（アーチャーさん、クロノの心をどうやって納得させるんです？）

今回の事件の中心にいる赤い弓兵。その男の考えている事に対し、リンディは問いかける。信じたいが不安は尽きない。その不安をどうか無くしてくれるように、と……

――――――

A's九話　中編

「お邪魔しま～す」

「どうぞ。上がって」

久々のテスタロッサ家。なのははその雰囲気を感じながら、フェイトの後を追う形で歩く。食事を終えて、なのはは早速とばかりにこうしてプレシア達を訪ねたのだ。

ちゃんとレイジングハートをポケットに入れて。良い案があれば、すぐにでも作業出来るようにと。まぁ、それはレイジングハート自身の希望でもあるのだが。

そして、なのはが案内されたのは、当然ながらリビング。実は最初こそプレシアの部屋の予定だったのだが、ランサーと共にアーチャーとの話し合いで使っているため、変更となった。

そして、ソファーに座り、なのはの横にフェイトが座る。二人の向かいにはリニスが座っていた。なのははレイジングハートをポケットから取り出し、その手の平に乗せた。

「それで、聞きたい事とは？」

「レイジングハートと話し合って、早く私達も強くならなきゃって。本当は、そんなに早くになんて考えてなかったんです。でも……」

なのははそこで口を噤んだ。なのはが急遽力を求める理由。それは、はやてのため。蒐集が完了すれば、その後しばらく主戦力として戦うのは自分達魔導師。セイバー達は、リインとはやてがするべき事を終えた後からしか、大っぴらに攻撃出来ない。

そのため、なのははは決めたのだ。その戦いだけでもいつも以上に無茶をしようと。親友やその家族を助けるために。そして、自分が友達と思っている騎士のためにも。

「今度の戦いは、絶対負けられない。だって、はやてちゃん達を助ける戦いだから。絶対勝てない相手でも、勝てるようにしたいんです。そのために、知恵と技術を貸してください！」

なのははリニスを見据え、まっすぐな言葉をぶつけた。その眼差しと想いを感じ、フェイトもリニスへ視線を向ける。力になってあげてと、そう気持ちを込めて。それを受け、リニスは頷き、なのはへ告げた。

考えた案は二つあると。それになのはとレイジングハートが揃って反応する。なのははは喜びを見せ、レイジングハートは点滅した。フェイトは、きっとなのはと同じ反応をしたのだろうと思い、小さく笑う。

リニスはなのはへ、カートリッジを使った強化案と、大気中の魔力を利用する強化案の二つを提示した。それぞれの利点と欠点をきちんと告げて。それを聞いて、なのはは考えた。

聞いた話から考えれば、どう考えてもカートリッジの方が優れている。後者では、安全かつ確実な魔力運用が出来る。しかし、動作不良を起こす可能性があり、しかも組み込むための改良時間がかかりかかる。それに対し前者では、強力かつ瞬発力に優れた魔力運用が出来る。改良時間もバルディッシュの応用が利くので、そこまで掛からない。

ただし、カートリッジは現状、体に対する負担が大きい。更にベルカ式の騎士であるシグナム達は、そもそもカートリッジとの相性がいいアームドを使っている。体の方もそれに耐えられるだけの下

地がある。
しかし、ミッド式魔導師は、基本カートリッジに適応していないデバイスばかり使っている。それ故に、まずデバイス自体への影響が不明。更に、なのはの場合は体が出来上がっていないため、その負荷が体に良くない事は分かりきっていた。

「……でもカートリッジってフェイトちゃんも使ってますけど、それは大丈夫なんですか？」

「確かに少々負担は増していますが、フェイトはクロスレンジを主体とする戦い方です。ベルカに通じるものがありますし、カートリッジも頻繁に使用しないでしょうから、そこまで心配はいりません」

なのはの少し不安そうな声に、リニスは笑顔で答えた。それを聞いてなのはは安堵する。フェイトは苦笑し、なのはへ心配性だよと告げた。そんな少し和やかな雰囲気が流れるが、それをやや引き締めるように、リニスはなのはへ言い切った。

「ですが、なのはさんの得意魔法は集束系。それ自体が元々体に負荷を強いるものです」

「……じゃ、私がカートリッジを使って魔法を放つのは……」

「体に相当の負担を掛けるでしょう」

リニスの言葉になのはは納得して頷いた。スターライト・ブレイカーを初めて使った時、体には思った程負担が残っていなかった。それを考え、なのはは思ったのだ。あれにカートリッジを使ったのなら、自分の体にどれだけの負荷を強いるのだろうと。そして、それを考えるようになった事に感謝もした。

自分がもしセイバーや父達の教えを受けていなければ、それを意識せずいただろう。体がそこまで疲れを感じないのをいい事に、平気でスターライトだけでなくカートリッジまで使う自分。それは、どう考えても自滅する道だ。

（ユーノ君が言った通りだ。私、下手したら自分で自分を壊してた……）

セイバーに出会っていなかったら。そのたった一点から想像出来る自分の怖さ。なのははそれに思い当たり、リニスへ答えた。

「リニスさん、正直に聞かせてください。今のままのバスター二回と、カートリッジを使って撃つバスター一回だと、どっちが結果的に負担を少なく出来ますか？」

なのははそれだけが知りたかった。現状でも戦えるとは思う。だが、それはおそらく、常に全力で挑まねばならない状況。ならば、魔法の使用回数もかなり多い。バスターも片手で足りるだけとはいかないだろうと、そう考えた。

だからカートリッジを併用したディバイン・バスターの負担が、二回分よりも少ない程度で済むのなら、そちらを使っていきたいと思ったのだ。攻撃を数多くするのではなく、一撃一撃の重さを重視したい。そう考えたのだ。

リニスはその質問にやや考えて、こう答えた。カートリッジを一つしか使わないとすれば、二回分よりも少ないと。それを聞き、なのはは頷いた。そして、即座にレイジングハートへ問いかける。

「レイジングハート、どうする？」

”なのはが決める道が、私の道です”

「……ありがとう」

”どういたしまして”

セイバーと同じ言葉を告げるレイジングハートに、なのはは心から嬉しく思った。きっと、誰も信じないだろう。レイジングハートが、最初なのはをマスターと呼んでいたなどと。今や単なるデバイスではなく、なのはにとっては友人の一人。

初めて出会った頃から共に魔法の道を歩いてきた相棒であり、大事な友達なのだから。そう思い、なのはは真剣な表情でリニスへレイジングハートを手渡した。

「お願いします」

「……分かりました。ですが一つだけ」

「分かってます。出来る限り多用はしません。私、レイジングハートも、自分の体も、壊したくないですから」

なのははそう言って笑顔を浮かべた。それは、決意の笑み。決してリニス達を心配させたり、悔やませたりしないという意志の表れ。それを感じ取り、リニスも笑顔で頷いた。

そして、念のために一週間欲しいと告げた。カートリッジシステム自体は比較的早く組み込めるのだが、色々と確かめたい事などもあるからと。それになのはは頷いて、頭を下げた。大切な友達をよろしく頼みますと。

そんなやり取りを見つめ、フェイトは微笑んでいた。自分とバル

ディッシュとは違う形だが、なのはとレイジングハートもちゃんと絆で結ばれていると。自分達がパートナー関係だとすれば、なのは達は半身といってもいいぐらいにも見える。

（何せ、名前で呼び合ってるもんね）

おそらくデバイスが担い手を名前で呼ぶ事なんてない。もしかしたらあるかもしれないが、極めて稀だろうとフェイトは思う。それだけ、なのはとレイジングハートの関係は特別なのだ。

多分、絆で言えばどんな魔導師達にも負けない強さを持つだろう、なのはとレイジングハート。それに自分も負けないような絆を持っている。そうフェイトは思ってバルディッシュを優しく握る。

【バルディッシュ……】

”何か？”

【……少し、呼んでみただけ】

”そうですか”

素っ気無い自分のデバイス。だが、そこには確かに他者には分からない何かがある。感情と言えるかどうかは分からないが、フェイトには伝わるものがあるのだ。

「なのは、この後どうするの？」

「それなんだけど、模擬戦してもらおうかなって考えてたんだ。でも、レイジングハート預けたから、お店の手伝いしようと思うの」

「そうか。じゃあ、アルフによろしく」

「うん！　あ、そうだ。何ならフェイトちゃんも来る？」

なのはの突然の提案にフェイトは呆気に取られる。目をぱっちりと開けて、言われた事を考えているのか、思考が止まってしまったのか分からないが、それだけなのはの言った事は、フェイトにとっては予想外だった。

なのはとしては、フェイトにお客さんとして来ないかと言う感じだったのだ。一度、アルフが働いている所を見に来ればいいと。しかし、フェイトは違った。なのはが手伝う。そこに自分が行く。つまり、自分も手伝ってみないかと言われたと結論付けていたのだ。

（わ、私、お手伝いとか出来るかな？　えっと、いらっしゃいませと……お待たせしました……それと……）

懸命にこれまでの翠屋で見たセイバーや美由希達を思い出し、何度もシュミレーション。無駄にその状況設定が細かいのは、魔導師としてのマルチタスクやイメージトレーニングの成果だったりする。

そんなフェイトへなのはがどうすると問いかけると、フェイトはやや緊張気味に行くと答え、連れ立って歩き出す。それを見送るリニスへ挨拶をして出て行くなのは。フェイトも夕方までには帰ると告げ、そのまま外へ。

「……何となく、フェイトとなのはさんの間に認識のずれがあった気が……」

小さく苦笑し、リニスは手にしたレイジングハートを見つめた。

「では、行きましょうか」

”お願いします”

そう言い合って、リニスは転送魔法を展開する。行き先は時空管理局本局。マリエルの協力を得るために。そして、なのはの決意とレイジングハートの思いを伝え、手を借りるために……

不屈の心に輝きを　中編

なのはがリニスと話し合っていた頃、プレシアはアーチャーとランサーの三人で自室を使い、完成後の事を打ち合わせていた。自分達の魔法を使うだろう防衛プログラム。それに対する作戦や対応策などから、最終的にどうするかを決めるべく意見を出していく。

ランサーは主に攻撃面で、プレシアは防御面で意見を出し、アーチャーはそれを聞きながら質問したり反論を出したりして、話し合いは進められていた。

今の課題は、リインがはやてと防衛プログラムを排除した後の事。おそらく自身で何らかの形を取り、行動するだろうと予想されているのだが、それがどのような物になるかまでは、まったく予想出来ないのだ。

リインと同じ姿になる可能性もあるし、まったく別物になる事もある。その形状もさることながら、大きさも不明。恐ろしく巨大になるかもしれないし、目に見える大きさではないかもしれない。情報がなさ過ぎるため、考える事が多いのが問題だった。

「仮に小型だとして、どれぐらいまでになると思う？」

「……元はプログラムなら、下手をすれば目視が出来ない可能性もあるわ」

「でかくなるなら、どれぐらいになるんだろうな……」

「想像もつかないが、天に届く程ではないと願いたい」

冗談のような内容だが、本人達は真剣だ。現実に、対応策も相手の事が詳しく分かる排除前はともかく、予想出来ない排除後の事はまったくといっていい程何も意見が出ない。

決まっている事と言えば、そうなった所からサーヴァント達が本気で攻撃する事。しかし、相手が目視出来なければ手の打ち様がない。そうアーチャーが呟いた時だった。ランサーが馬鹿にするようにこう言った。

――いざとなりゃ、俺の宝具を使えばいい。

それを聞いてプレシアが疑問を浮かべた。見えない相手にどう対処するのかと。それにランサーは絶対に関係者以外に話すなと前置いてから、宝具の話をした。

――魔槍ゲイボルク。

それは、影の国に伝わる呪いの槍。真名を開放すれば、必ず相手の心臓を貫くという『因果』を操作する力を秘めたランサーの切り

札。本来は刺すのではなく、投擲する事で力を発揮するようになっている。

聞く者が聞けば、これだけでランサーの正体に気付く程、有名な武器。故にランサーは、プレシアに他言無用にも近い意味で強く言ったのだから。

その話を聞いてプレシアが納得したのを見たアーチャーは、得意そうな表情をしているランサーへはっきり言い切った。それはしないでほしいと。その言葉にランサーだけでなくプレシアまでが驚いた。

それ以外に良い方法が思いつかないのだ。目視できない相手に対する手段として、ランサーの宝具はこれ以上ない決定打になる。そう思ったからこそ、ランサーは自分の宝具の使用さえ提案したのだから。

事情を説明してくれと言うランサーへ、アーチャーは自らが考えているリイン生存への博打を話した。それを聞き、ランサーもプレシアも反論出来なかった。確かにそれに可能性を見出すためには、アーチャーが防衛プログラムへとどめを刺さなければならないからだ。

故に二人は黙った。確実と言えないリイン生存への道。蒼天の魔導書を使っても尚不安が残るバグの存在。その恐ろしさを感じたのだ。だからこそ、他の方法を考える。仮に見えない程小さな状態になるのなら、それをどうやって動きを止めて倒すのか。また、巨大になった場合はどうするのか。

「前者はともかく後者はまだ何とかなるか。大きいだけなら戦いようはいくらでもある」

「だな。セイバーと俺だけでも余裕かもしれねえ」

「そういえば、プログラムを切り離した瞬間に無力化する事は出来ないの？」

巨大な相手に対しては余裕を見せる二人。その会話を聞きながら、プレシアは思った事を口にしてみた。何も無理に戦わなくても、そこでルールブレイカーを使えばどうにか出来るのではないかと。それにアーチャーは何かを思い出し、少しバツが悪いような表情をした。

それにランサーとプレシアが不思議に思う。プレシアの言った事が可能だったというよりは、どこかそれに関する事で何かを思い出したように見えたのだ。

「……それは出来ん。何でもリインが言うには、バグは防衛プログラムの外側に擬態するらしい。そして、バックアップとして防衛プログラム自体を内側にしているのだろう」

「成程。つまり殻を壊して核を出さないと、貴方の確認は出来ないという訳ね」

「面倒だが、だからこそここまで残ってきたんだろうな」

アーチャーの言葉に二人はそう言って納得した。そして、そんな二人へアーチャーはこう告げた。そのため、おそらく目視出来ない大きさにはなれないはずだと。場合によってはリインそのものを乗っ取るバグ。それが形を成す以上、確実にそれより小さくなる事は出来ないだろうと。

それに確証はないが、プレシアもその意見には同意した。バグは小さなものではなく、既にリインの手を離れてしまう程のものになっている。ならば、それがリインよりも小さい訳は無いのだ。

リインは管制人格。つまりプログラムの一種だ。それを乗っ取り、操作する事が出来る以上、その容量はリイン以上になっている可能性が大きい。そう結論付けたのだ。

つまり、必然的に話し合うのはリイン以上の大きさの相手への対応策。そして、そうなった瞬間、ランサーは獰猛な笑みを見せて呟いた。

――――久々に派手に暴れられるぜ……

その声に、プレシアは背筋が逆立つような感覚を覚えるが、同時に嬉しくもなる。その荒々しさこそ、ランサーらしさだとプレシアは思っているから。いつか向けられた殺気にも近い気迫。

リニスを欲しいと告げた時のあの雰囲気。あれを思い出し、プレシアは懐かしくなって笑みを浮かべる。あれから自分の運命は変わったのだと。そして、今の時間への道が始まったのだから。

（あれからもうどれぐらい経ったのかしら。まさか、私がランサーを好きになるなんて思ってなかったものね）

もし過去の自分に会ったのなら、言ってやりたい。ランサーと愛し合うようになるのよ、と。きっと信じないとプレシアは思った。何せ、自分がまだどこかで信じられないのだ。アリシアが目を覚まし、フェイトを愛し、リニスやアルフを家族として思う、今の自分を。

夢ではないかと思った事もある。本当は、自分もあの事故で死んでいて、この生活はその後見ている夢のようなものではと。アリシアが目を覚ました後しばらくは、本当に眠るのが怖かったのだから。

（でも、あの子達の温もりが、笑顔が教えてくれた。これは現実だ

と）

ミッドでの暮らし。リンディ達の世話を受けながら、プレシアは嘱託のための準備や勉強に追われた。自身の知る魔法知識は何年か前で止まっていたからだ。アルハザードへ行く事を考えてからは、そればかり考えていたのだから当然なのだが。

その間の生活で、プレシアはフェイトとアリシアと別の部屋で過ごした。だが、寝る前に必ず二人はプレシアへこう言いに来てくれたのだ。

――おやすみ母さん（ママ）。また明日。

その言葉と笑顔。それが、プレシアの中から不安を徐々に拭い去ってくれたのだ。そんな事を思い出し、プレシアはその全てのキッカケを見つめる。自分の隣で、アーチャーと他愛のない話をするように物騒な話をするランサーを。

「で、セイバーの宝具となのはの魔法で外側を一気に削っちまって、核になってる部分を俺が突き刺してやるからよ」

「それで破壊したらどうする」

「そんときゃ……もう一回再生させて同じ事でもやるか」

「……君はそれを本気でやろうとするから性質が悪い」

冗談でも言うかのようなランサーの言い方に、アーチャーは苦い顔。これが本当に冗談ならばいい。だが、ランサーは本気で言っているのだ。全力で倒す事の出来る相手。それは、ランサーが求めて止まない存在。

今、ランサーが全力を出して戦える相手は、アーチャー達のみ。
しかし、それは全力で戦えるだけであって、ランサーが真に求める物ではないとアーチャーは思っている。死力を尽くした戦い。それこそがランサーが望む物だろうと。

確かに、ランサーはそれを望んでいる。だが、それが叶わない物だとも知っている。なのは達が大切に思い、家族として慕っているセイバー達。それと死力を尽くした戦いをすれば、どちらかが死ぬしかない。
本来戦いとはそういう物。試合と戦いは違うのだ。今、ランサーがしているのは、全て実戦形式の試合。戦いなどフェイト達と出会ってから一度もしていない。

それを不満に感じていない訳ではない。だが、今のランサーはそれだけではない楽しみがある。そう、自分の全てを叩き込んだ一人の戦士を作り出す事。つまり、フェイトの成長だ。
自分と同じ槍こそ無理だが、戦い方には少しランサーの教えが生きている。いつか自分と同じぐらいになってくれたら。そう思いながら、今でもランサーはフェイトへ手ほどきしている。

（そういや、今日の朝、フェイトの奴が一度見て意見を欲しい事があるって言ってたな）

自分に対し、アーチャーが苦言を呈する中、ランサーは適当に受け答えながら、そんな事を思い出すのであった……

「……はやて」

「ん？」

アリシアの言葉にはやては返事を返し、時計を見た。時刻は午前十時になるかならないか。まだお昼には早いし、休憩を言い出した感じではない。そう考えて、はやてはアリシアへ視線を戻す。

「来年になったら、二人で学校行けるかな？」

「そうやね……頑張れば行けるやろ」

「どれぐらい？」

「う～ん……この調子をちゃんと春まで続ければ」

はやての言葉にアリシアは頷き、手にしたシャープペンを握り締める。そして再び問題集へと取り掛かる。はやてが使っていた問題集は、既に残った分量が半分を過ぎ、アリシアが順調に知識を深めていっているのを示していた。

気を抜くとケアレスミスをする事が多いが、それでも最初の頃に比べれば格段に進歩している。そんな風に懸命に勉強するアリシアを見つめ、はやても自分の分を片付けようと視線を手元に落としたのだが、その時ふと思ったのだ。アリシアが、どうして今になって学校の話をしたのかと。

「な、アリシアちゃん」

「何？」

「どうして急に学校の話なんかしたんや？」

はやてのその問いかけにアリシアは少し考えて、自分もまだどこかで疑問を持っているような感じで答えた。ここ最近、はやてがあまり先の話をしなくなった気がすると。

以前は来年の旅行の話や学校の事など、よく話していたのに、この一週間ぐらいはまったくそういう事を話さなくなったように思った。そうアリシアは告げた。

「もしかして、このままだとわたしが学校行けないから、はやてが話をしないのかなって」

「……そっか。それは変な心配させてしもたな」

アリシアの言葉を聞いて、はやては自分でも気付いていない間に、未来へ不安を抱いていたと知った。無意識に先の話をしないようになっていた。それが意味する事を考え、はやては申し訳なく思った。

それは、家族を信じていないという事。自分は助かると言われているにも関らず、未来の話をしない。それが家族を信じていない以外の何物でもないと思ったからだ。

（あかんな。わたしがしっかりせんと、上手く行くもんも失敗してまうわ）

アーチャー達から聞いた話では、完成後リインと協力する形で、はやてが様々な事をしなければならない。つまり、自分がシグナム達やリインを助けなくてはいけない。そうはやては思っている。

だからこそ、余計こんな風に気弱になっていてはいけない。今の自分には頼れる家族達がいて、手を貸してくれる親友達がいるのだ。なら、考えよう。未来を、絶対に来る明日の事を。

（来年には、歩けるようになって、みんなと学校に行きたい！　な

のはちゃん達と仲良く六人で学校に！）

自分に強く言い聞かせる。決して弱気にならないように。もう未来へ不安を抱かぬように。自分は生きるのだと、心に刻み込ませる。

そんなどこか意気込むはやてを、アリシアは微笑むように見つめていた。

（良かった。はやて、明るくなったや）

アリシアは思ったのだ。最近はやてがどこか以前よりも暗い気がすると。だから、その原因を考えた。そして、真っ先に思いついたのは自分が原因ではないかという事。はやて自身の事をアリシアはまだ聞かされていない。

故にはやてが暗い原因は、自分しかないと思ったのだ。そう考えると、真っ先に思いつくのは勉強方面。その事を考えた時、はやてが最近旅行や学校の話をしなくなったと思ったのだ。

以前は勉強しながら先の出来事の話題をしたのだ。学校に行くようになったらどうするや、来年の旅行はどこになるのかなどと楽しく話しながら、二人は勉強をしていた事が多かったのだ。

しかし、それがここのところない事を思い出し、アリシアははやてへあんな事を聞いたのだ。自分が原因なら、直したい。はやてが前のように明るくなって欲しいと、思ったのだ。そして、はやての答えは学校の事は心配していないというもの。

それならば、どうすればいいのだろうと思っていたのだが、今見る限り、はやては自分で明るくなった。つまり、自分に原因はなかった。そう思ってアリシアも嬉しそうに笑みを見せた。

「さて、じゃあ早速やけど、旅行の希望とか考えて士郎さん達へ言ってみよか」

「さんせ～」

「どこがええかな？」

「う～……山、山に行こう！」

アリシアの言葉にはやては考え、少し嫌そうな顔をした。冬場の山は寒いイメージしか出来なかったからだ。その旨をアリシアに告げると、ならば暖かい所で大人数対抗のゲーム勝負を提案。

しかも、それだけではなく、ボードゲームやカードゲームなどをワイワイとやりたいと。アリシアとしては、大晦日の話を出して大勢で沢山話をしたいとも言って。

「そやね。それはわたしもしたいな」

「でしょでしょ！　わたし、ママに言ってみる」

「なら、わたしはアーチャーに言っておくわ」

そう言って二人は笑い合う。すると、はやては何か思ったのか小指を差し出す。そして、絶対に旅行に行こうと約束をしようと提案するのだが、アリシアはそれに小首を傾げた。それにはやてがやや意外そうな顔をして、指きりをしらないのかと聞いた。それにアリシアはコクンと頷き、はやてが説明。

それを理解し、アリシアもはやての小指に小指を絡ませる。そして、はやてが口ずさむ指きりの歌。それをアリシアは不思議そうに聞きながら、はやてが指切ったと言って放そうとするのに気付いて、指を放す。

「……これ、約束破ったら針を千本飲む事になるの？」

「そや。こ～んな大きいお化けが約束破った人んとこ来て、針をこうザ～って飲ますんや」

「わたし、針なんて飲みたくない！」

「わたしもや。そやから約束守ろうなって事や」

アリシアをからかいながら、はやてはそう言った。その内容にアリシアは恐怖を感じるが、すぐに笑顔を浮かべて頷いた。約束を守ればいいだけだねと、明るく言って。それにはやても頷いて、笑顔を返した。

それで話は終わったと、そうはやてが思ってアリシアから視線を外した時だ。そんなはやてへアリシアがこう言ったのだ。何かで約束守れなくても、いざとなれば、ランサー達がそんなお化けやっつけてくれるだろうからと。

それは他愛もない言葉。だが、何となくはやてにはこう聞こえたのだ。何があってもランサー達がいれば大丈夫と。そう思い、はやては心の中で「そうやな」と呟いた。そして、視線をもう一度アリシアへと戻す。

もうアリシアは勉強へ意識を向けていて、真剣な表情で問題集を解き始めている。その横顔へ向かって、はやては小さく告げた。

――――またアリシアちゃんに励ましてもらったわ……。ほんまにおおきにな。

優しげな笑みを浮かべ、はやても問題集へ意識を向けた。ここまで自分の不安を指摘し、取り除いてくれるアリシアのその純粋さと

素直さ、そしてある種の鈍感さに心から感謝しながら問題を解いていく。

本当に出会えて良かったと、そう思いながら……

――――――

A' s九話　後編

「「「いらっしゃいませ！」」」

「い、いらっしゃいませ」

明るく声を出すなのは、セイバー、アルフ。それにかき消されながらも、フェイトも懸命に声を出す。翠屋に着いたなのは達だったが、フェイトを席に案内しようとしたところ、フェイトが何故か少し緊張気味にこう言ったのだ。

――わ、私に出来る範囲で頑張るよ。

一瞬その言葉の意味が判らなかったなのはだったが、フェイトがそのまま店の奥へ向かっていくのを見て、何となくだが理解し、慌ててフェイトへ説明。自分は客としてアルフの働く所を見てみて欲しいと思ったのだと。

それにフェイトは納得すると同時に恥ずかしがった。だが、そんなやり取りを聞いていた桃子がなのはの予備エプロンを出し、フェイトへ「やってみる？」と尋ね、現在の状況となっているのだ。

フェイトに与えられた仕事は、オーダー提供。なのはがフォローする形で傍に付き、二人は愛らしい笑顔で動く。それを眺め、アルフはどことなく嬉しそうに目を細める。

以前のフェイトなら見知らぬ相手を大勢相手する事に、若干気後れなどをしていただろう。それが、いくらなのはと一緒とはいえ、少し戸惑うぐらいでそれに順応しているのだ。

（フェイトも大きくなってるんだね……）

目に見えぬ成長。それを感じ、アルフは優しい笑みを見せる。そんなアルフにセイバーが気付くも、その視線の先にあるものを理解し、同じような笑みを浮かべた。視線の先には、二人の女性客に可愛いと言われ、少し動揺しているフェイトがいた。

なのははそんなフェイトを嬉しそうに見つめ、オーダーを確認していた。そんな光景にセイバーも顔を綻ばせる。だがそれも一瞬で戻る。自分達を呼ぶ声を聞いたからだ。

「はい、ただいま参ります」

そのセイバーの声でアルフも意識を仕事へ完全に戻し、それに続くように動き出す。そして、そんな光景を眺めて桃子と士郎は微笑みを浮かべあうのだった……

不屈の心に輝きを　後編

時空管理局　本局内にあるデバイスルームの一室。マリエルはリニスが連れて来たレイジングハートとの挨拶もそこそこに、早速本題へと取り掛かった。なのはの想い、レイジングハートの願い。その二つをリニスから聞かされ、マリエルは納得した。

自分がもし戦う事になった時、相手に負けたくない気持ちよりも、自分が守りたい人達を守れない事を防ぎたい気持ち。勝つのではなく、守るために力が欲しい。決して自分を蔑ろになどしない。自分もデバイスも揃って笑い合うために強化を望むのだ。

そうリニスが告げるなのはの想い。だが、それはそのままではなく、言い換えたもの。しかし、それでも嘘ではない。その想いを聞いて、マリエルは何も言わずにレイジングハートの強化を開始した。レイジングハート自身がそれを肯定し、こう言ったからだ。

――なのはの歩く道が私の道です。

それこそが、マリエルを動かす最後の決め手。デバイスでありながら、使い手を名前で呼ぶ。それも望んだのはなのはから。しかも、リニスへなのははレイジングハートを大切な友達と告げた。であれば、マリエルにとっては今まで以上に重い仕事だ。

託されたのは、道具ではなくなのはの友人。物ではなく人。故に、マリエルはいつも以上に繊細かつ丁寧に作業へと取り掛かった。リニスによって提示された、なのはの切り札に近い威力を出せるシステム。それは、スターライトに近い威力を出しながらも、負担を軽減出来るようにという矛盾した注文。

それに対し、マリエルは負担を軽減する事に重点を置いた。威力はやや落ちる事になっても、負担は抑える事が出来るようにと。なのはがカートリッジを使う以上、負担は抑えたい。なのはは威力を重視しているが、マリエルはカートリッジ使用の判断を委ね、通常の負担を減らす事にした。

カートリッジは使用する事もしない事も出来る。ならば、状況に応じて負担を増減出来るようになる。そのためにも、基本となる負担は少ない方がいい。きっと、そう伝えればなのはは理解してくれるだろうと、マリエルは思っていた。

「……エクセリオンモード、ですか」

「はい。それと……スターライト・ブレイカーでしたっけ？　それ

とは違う切り札を用意しますよ。敢えての接近用装備付きの」

マリエルはそう言ってある物を見せる。それを見て、リニスは苦笑した。負担を減らすと言いながら、いざという時のために用意する物がかなり負担を掛けるものだったのだ。

しかし、そこに込められた意味を理解しているので、苦笑した。なのはがそれを使う状況。それは、それに頼らざるを得ない危機。故に、求められるのはそれを打開出来る力なのだ。

「この時のフレームは、リニスさんのカリバーフレームが応用出来るので、時間は短縮出来ます」

「強度も……大丈夫ですね」

共にデータを見つめながら、意見を交し合う。そして、レイジングハートの改良が終わり次第、マリエルが連絡するという事になり、リニスは後を託して部屋を去った。一人残ったマリエルは、レイジングハートを見つめながら呟いた。

――貴方はもしかしたら、世界で一番幸せなデバイスかもね。

女性向けの小物店。そこにアリサと美由希はいた。小次郎も店内にいるのだが、ここも周囲に女性しかいないので少し面食らっている。そんな小次郎には一切構わず、二人は様々な商品を見てはこうでもないああでもないと言い合っていた。

二人が探しているものは、特にない。ただ、何か掘り出し物はないかと思って、先程から色々な女性向けの店を見て回っているのだ。しかし、それに小次郎は動じる事も無く、いつも堂々と店内にいる

のだから大した者である。

「これ可愛いんじゃない？」

「う～……でも、こっちの方が良くないですか？」

星を模ったイヤリング。値段からして大量生産の安物だろうが、中々見た目は可愛らしい。それを美由希に見せられ、アリサは目に付いた別の品を提示する。それは三日月を模ったイヤリングだった。

それをアリサは手に取り、美由希に見せる。確かにそちらの方が可愛いよりも綺麗だろう。そう思い、美由希は小次郎へ視線を向けた。小次郎は小物類を眺め、今の女性の好みなどを知ろうとしていたが、髪留め一つ取っても多種多様になっているため、やや驚いていた。

「小次郎さん、これどうです？」

「ん？　どれ……」

アリサが持っていたイヤリングの評価をしてもらおうと、美由希は小次郎へ声を掛けた。それに反応し、視線を美由希達へ向けて、小次郎は小さく何か呟いた。

「……良いのではないか？　ありさに似合うだろう」

「……だって」

「アタシ買うわ。でも、小次郎が誉めたからじゃないわよ。アタシ、元々欲しかったんだから」

美由希の言葉にアリサはやや嬉しそうに笑みを浮かべ、それを持ってレジへ行く。その答えを聞いて、美由希は微笑ましく思って笑顔になる。小次郎はイヤリングを見つめ、耳飾りとはと感心していた。

そして、美由希が最初選んだ星のイヤリングを手に取り、小次郎は小さく頷く。それに美由希がどこか不思議そうな表情を返すと、小次郎は軽く笑みを見せて告げた。

――――何、ありさが月なら美由希殿は星が良いかと思ってな。

その言葉に美由希は笑みを返し、小次郎からイヤリングを取り上げてレジへ。自分もこれが欲しくなったと、そう笑顔で言って。小次郎はそれに若干呆気に取られるも、美由希の後姿が嬉しそうに見えたのでよしとした。

こうして、二人は共にイヤリングを購入し、別の店へ。小次郎とアリサが手を繋ぎ、その片手を美由希と繋いで歩く。端から見れば、後姿だけは親子にも見える三人。しかし、アリサは小次郎と美由希が手を繋ぐ事をさせたくない気持ちがどこかにあり、一方の美由希はそんな事よりもアリサとこうして仲良く出来る方が嬉しかった。

（こうやって、いつまでも歩けたらいいな）

自分が小次郎に振られる事になっても、アリサが小次郎へ想い破れる事になっても、三人で歩いていたい。そう美由希は心から願う。なのはと同じく、アリサも美由希にとっては妹と同じ存在。

いや、アリサだけではない。すずかもはやてもフェイトもアリシアもそうだ。美由希にとっては守りたいと願う愛らしい妹達だ。故に守る。なのはの友達だからだけではなく、自分が愛しいと想うから。

美由希がそう思って歩いている横で、アリサもまた思っている事があった。それは、奇しくも美由希と同じ。

（美由希さん、ホントにお姉さんみたいだわ。なのはが自慢する訳よ。優しいし、強いし、頼りになるもの）

今日の買い物でも、それを強く感じたのだ。ふとした事にも反応を返し、自分が困ったりするとさり気無く声を掛けてくれる。さっきの店でもそうだったのだ。何気なく見ていたイヤリング。それを自分に似合うと言って一つを取り上げ、意見を述べた。

そこから自分の気に入る物に対し、小次郎に意見を出してもらって、決め手にしてくれたのだ。小次郎が兄の立場なら、アリサにとって美由希は、間違いなく姉だった。

「……さて、お昼どうする？」

「小次郎は？」

「ふむ……ふぁみれすとやらが良いのではないか？」

小次郎の妥当な意見に美由希もアリサも反論はなく、そのまま近くのファミリーレストランへと向かう。途中、食事を終えた後の予定を話しながら、三人は歩く。次は服とアリサが言えば、小次郎の服を見ようと美由希が言って、小次郎は別に必要ないと返す。

そんな風に会話して歩く光景は、どこからどう見ても仲の良い家族にしか見えなかった……

忍の研究室。そこですずかはイレインと楽しく話をしていた。忍

との勉強は休憩となり、今はイレインが運んできたティーセットで紅茶を飲んで寛いでいる。二人の話題は、基本人間の社会について。どういう物があるなどから始まり、決まりや礼儀などにも渡る。イレインはそれを聞いたり、また逆に問いかけたりして話をするのだ。今日は、すずかの日常を話していた。

学校生活の話やなのは達との関わり。それに習い事などを簡単に教える。そこから派生し、今までの思い出も話していると、イレインがどこか羨ましそうに呟いた。

「私も……そんな時間が欲しいな」

「じゃあ、新年の旅行で作ればいいよ。きっと、楽しい思い出が出来るはずだから」

寂しそうなイレインに、すずかは笑顔でそう告げた。かなりの団体になるが、それだからこそ楽しいものになる。また自分達で色々話し合って、行き先や内容を決める事をしよう。そう考えながら、すずかはイレインを見つめた。

すずかの言葉を受け、イレインは少し考え、笑みを見せた。ライダーやノエル達が出来たのなら、自分に出来ないはずはない。そう考えたのだ。それに、よくよく考えれば自分にも思い出はあるのだから。そう思い出し、イレインは笑う。

（私の思い出。そう、ライダー達と戦った事も、諭された事も私の思い出だった……）

もう、自分にも思い出はあった。そう思い、イレインはすずかへ言った。楽しい旅行になるといいなと。それにすずかは苦笑し、こう返す。みんなで楽しい旅行にするんだと。

イレインはそれに一瞬呆気に取られるが、すぐに笑みを浮かべて頷いた。誰かではなく、自分で楽しくしようとする気持ち。それをすずかは教えてくれたのだから。

「あ、そうだ。イレインに聞きたい事があるんだけど……」

そんな時、ふとすずかが何か言い辛そうにそう切り出した。その雰囲気にイレインは疑問を感じながらも、視線を向ける。

「どうしたんだ？」

「えっと……イレインは、ずっと”起きて”いたい？」

すずかの言葉にイレインは不思議そうな表情を浮かべるが、そのすずかの表情から、それが自分達の稼動を意味していると悟った。

「……正直、私にはまだ決められない。確かにすずかお嬢様達と一緒にいたいとは思う。でも、お嬢様達がいなくなった後もここに居たいと思うかは……」

「……だよ、ね。ノエル達もそう答えたんだ。まだ決められないって」

「でも、その気持ちは嬉しいよ。私達を人間と同じようにしたいって思ってくれてるって、分かったからさ」

イレインの噛み締めるような声。それを聞いて、すずかはイレインの手をそっと握る。それに反応し、イレインが視線を上げると、すずかは柔らかな笑みを浮かべていた。そして、イレインへはっきりと言った。

自分達は、イレイン達を人間と思っている。だからこそ、その一生をいつまでも続くようにするのか、それとも自分達と同じぐらいにするのか決めて欲しいのだと。

忍やすずかの子孫達が生まれてきて、忍やすずかが死ぬとしても、イレイン達は整備や調整を続ける限りかなり長く生きる。その間、何度も愛しい者達との別れを経験しなければならない。それに、いつまでも耐えられるのか。

それだけがすずかの心配だった。すずかとしても、自分の子供が出来るのなら、イレイン達と過ごさせてやりたい。でも、イレイン達が苦しみ悲しむのなら、その日々の終止符をどこかで付けてあげたい。

「私とお姉ちゃんは、孤独の辛さを知らない。でも、思いやる事は出来るよ？　もし、自分がそうなったらって考えるんだ。なのはちゃん達も死んじゃって、その子供達も死んじゃって……でも、自分は生きてるなんて……絶対辛いと思うから」

「すずかお嬢様……」

「だから、決めたら教えて。私は、イレイン達がどんな生き方を選んでもいいように勉強するから」

目を微かに潤ませて、すずかは笑顔でそう言い切った。イレインは、そんなすずかの笑顔に声を失う。ただ、その思いが自分の中の何かを暖めてくれた事だけを、静かに感じながら……

「どうですか、スズカの調子は？」

「うん、まあまあね。あれなら普通の修復程度は出来るようになるわ」

すずかとの勉強を一時中断し、ライダーの淹れた紅茶を飲みながら、忍はそう答えた。現在、ノエルとファリンは昼食の支度中。先程アーチャーが来たので、今は三人で仲良くやっているだろうとライダーは思っていた。

そんな風にライダーが紅茶を飲んでいると、忍が気になった事を思い出し、ふとライダーへ尋ねた。それは、最近ライダーがやっている行為。

「ね、ライダー。一つ聞きたいんだけど……」

「何です？」

忍の言葉にライダーはやや不思議そうに問い返す。それに忍は大した事ではないと前置いて、こう聞いた。

――最近、自分の血を輸血用パックに詰めてるのは何故？

それにライダーは妖しげに笑って、こう答えた。ある事の確認と準備のためだと。その妖艶な笑みに、忍はどこか恐ろしさと頼もしさを感じた。だからこそ、それに同じように笑みを返して頷いた。

そして、こう告げた。何をしてもいいが、周囲にだけは気をつけて欲しいと。その言葉にライダーはおかしそうに笑って頷いた。自分が何をするか知らないにも関らず、忍は直感でそれが公に出来ない事だと理解しているからだ。

「ご安心を。極力大事にはしません」

「頼むわよ？　ただでさえ、この前の安次郎のせいで警察に色々と言われたんだから」

「ええ。私もスズカを悲しませたくありませんので」

互いに笑い合いながら、語り合う。過去の嫌な話も今では軽い笑い話にして。イレインという新しい家族が出来たのもあり、あの事件はもう月村家では良い思い出となりつつある。

その後も二人は、今までの事やその事件後のイレインの変化について、時に笑い時に驚きながら話し合ったのだった……

「……そう。はやてさんの容態が……」

「ええ。だから、出来れば早目に行動したいのよ」

アーチャーが帰り、プレシアは一人自室からリンディへ通信をしていた。どうも、つい先程リンディは休憩になったらしく、丁度良かったと言われたのだ。リンディはアーチャーからの報告も聞き、表情を曇らせた。

クロノへ手渡されるデバイス、デュランダル。その完成はまだ時間が掛かるのだ。早ければ今月中にもはやての命が危ないと言われ、リンディとしてもある種の決断を下さねばならなかった。

（グレアム提督へ掛け合って、何とか間に合うように出来るかしら……？　とにかく、今は答えるのは無理ね。一度提督と相談してからだわ）

そう考え、リンディはプレシアへこう告げた。グレアムと一度話し合い、それから結論を出すと。時間はそこまで掛からないようにする。だから、信じて待っていて欲しいと。それにプレシアも事情を理解し、頷いた。

アーチャー達へは自分が伝えて、理解を得てみせるからと、笑みを浮かべて。その笑みにリンディは心から感謝し、礼を述べた。

「……こちらの準備はもう粗方整っているから。後は……」

「無人世界で完成、と行きたいけど、未だに巡回が厳しくて……」

蒐集による無人世界の生物の衰弱。それに妙な印象を受けて始まった警戒態勢。それは、未だに続いている。まったく何も動きがないため、余計に怪しんでいる者もいて、警戒を緩めるどころか、強めている節さえあるのだ。そのため、完成を被害の少ない場所でとはいかない。

リンディ達も出来る事ならそうしたい。しかし、前もって書の存在を知っている事になると色々と厄介な問題が出る。確かに、プレシア経由で闇の書を知り、それを完全に無力化出来る方法を得たから協力していたと言う事は可能だ。しかし、その一番の問題は、アーチャー達の存在を明らかにしなければならない事。ロストロギアを無力化出来る能力や、次元震レベルの一撃などを始めとする宝具の事を管理局上層部に知られる訳にはいかない。

そのため、結局は偶然を装い、処理をしなければならないのだ。現地の民間協力者達の手を借りて、リンディ達が当代の主と協力して事件を解決したとするために。

「……やはり、海鳴で完成させるしかないのね」

「現状を考えれば、それしかないわ」

共に苦い顔。最悪の保険はあるとはいえ、一歩間違えれば地球は消滅する。そんな最悪の結末を互いに一瞬考え、苦笑した。そう、そんな事を考えても仕方ないのだ。それに自分達には、心強い味方がいるのだから。

更に、高ランクの魔導師にベルカの騎士もいるのなら恐れる事はない。そう思い返し、二人は笑みを見せ合う。それは、決意の笑み。必ず最高の未来を掴み取るとの思い。

「……これを終わらせたら、次の大きなイベントは新年の旅行ね」

「そうね。はやてさんの悪戯に気をつけなくちゃ」

そう言って、共に楽しそうに笑う。まだどこに行くかは決まってないが、どんな形であれはやては悪戯をするだろうと、そう思ったのだ。それは即ち事件の完全解決を意味している。自分達には、明るい未来しかない。

そう互いに強く思い、二人は最後にある言葉を交わして通信を切る。その言葉とは、たった一言。

――また、奇跡を掴みましょう……。

はやてに起きる状態の変化。それは、残り時間が少ない事を意味する。それに対し、それぞれで動きを見せる八神家。

一方、なのはは自分の決意を固め、大切な友と共に強さを身に付けるべく覚悟を告げた。

絶望が忍び寄る影で、希望を強くするなのは達。奇跡を起こすため、その想いは止まる事はない……

―――――――

幕間15

ランサーはコメントに困っていた。と言うのも、今目の前にいるフェイトの格好が問題だったのだ。夕食を終えた直後、フェイトが意見を欲しいと言っていた事をお披露目したのだ。それは、バリアジャケットのデザインチェンジ。

フェイトは音速を意味するソニックフォームと名付けたと告げた。ただでさえ防御力が低いフェイト。それが、より速度を出すためにその防御力を極限まで減らそうとした結果、この姿に辿り着いたのだ。

ちなみに、リニスとアルフはそれを見てから即座にプレシアへ視線を向けた。どことなく以前のプレシアの姿に近い物を感じたからだ。特に露出的な部分で。そのため、プレシアはフェイトの格好を見て言葉を失っていたのだから。アリシアは寒くないのと見当ハズレな意見を言って、フェイトが苦笑していた。

「……あ～、フェイト」

「何？」

「発想は悪かねえ。自分の長所を伸ばす事で相手に勝とうってのは、着眼点としては間違ってねえが……」

ただ、とランサーは続けた。その声は真剣そのもの。自然とフェイトの顔に緊張が走る。ランサーが告げたのは、たった一言。絶対に攻撃を受けないで戦うしか生き残る道はない。そう言い切ったのだ。

フェイトもそれにゆっくりと頷いた。元々フェイトは昔から高速

戦闘をランサーから叩き込まれてきた。一撃離脱。ヒット&アウェイが信条の戦い方。ランサーとは違い、リーチがそこまで長くないフェイトにとって懐に居続けるのは危険と隣り合わせ。
　更に万が一の防具を薄くし、速度を増したため、耐久力は格段に落ちた。こうなると、一撃当たっただけでも致命傷となりかねない。そうランサーは告げたのだ。覚悟はあるのかと。

「でも、こうしないと今の私はシグナムに勝てない。競り負けるなら、競り合わないようにする。こっちだけが攻撃し続ければ、いつか相手を倒せる。シグナムの攻撃は遅くないけど、避けられないものじゃないから」

「……実戦投入は来週か」

　ランサーの問いかけにフェイトは頷いた。今日翠屋が終わった後、なのはが念話でヴィータ達に告げたのだ。レイジングハートが戻って来たら、前々から言っていた事をしようと。それで、来週ヴィータとシグナム対なのはとフェイトのコンビ戦をする事になったのだ。
　おそらくシグナムは砲撃メインのなのはを潰しに来る。なら、それを自分が迎え撃ち、これを使ってみせようと。総合力で劣るのなら、一点特化で立ち向かう。ランサーはそのフェイトの言葉に楽しそうな笑みを浮かべ、頷いた。

「っうし。思う存分やってやれ」

「うんっ！」

「フェイトなら勝てるよ！」

　ランサーが差し出した拳に自分の拳を合わせるフェイト。それを

見て、アリシアが元気良く励ましを送る。そんな光景を見て、笑みを浮かべるプレシア達だったが、やはりそのフェイトの格好だけは、少し問題があるようにしか見えなかった……

雷光、瞬く

「残念だったな、なのはがデバイス預けちまって」

「……だが、来週のコンビ戦は楽しみだ。テスタロッサも高町も強くなっているだろうからな」

八神家のリビングでソファーに座ってにやにや笑うヴィータ。なのはの訓練相手をしようとしていたシグナムだったが、レイジングハートを改良のために手放していて、それが出来なくなったのだ。だが、シグナムはヴィータのどこかからかうような声にも、そう嬉しそうに言葉を返す。それを聞いて、はやて達は苦笑した。シグナムの試合好きがこんな所にも出ているのだから。

今日のフェイトとの稽古もあるので、そろそろシグナムは出かけていく。それを思い出し、ヴィータが帰りにコンビニでアイスを買ってきてくれと頼んだ。それをシグナムがやや呆れながらも承諾すると、それを皮切りにシャマルが、リインが、果てははやてまでがあれこれと頼んだのだ。

それを聞きながら、アーチャーとザフィーラは小さくこれだから女という者はなどと呟き、洗い物を片付けていた。その後もしばらく女性陣が賑やかに話すのを聞きつつ、二人は笑う。

とても悲愴感がないのだ。装っているのでもなく、自然と明るくなっている。誰も疑っていないのだ。はやての、リインの無事を。故に笑う。この時間がいつまでも続くようにと思いながら。

「……アーチャー」

「ん？」

「不謹慎かもしれんが、俺もシグナムと同じ気持ちを抱いている」

「何に対してだ」

「完成時の事だ」

ザフィーラはそう言って皿を棚に戻した。アーチャーはザフィーラが言いたい事を何となくだが察し、苦笑した。それは、初めてセイバー達の全力を見る事が出来るから。それ以外にも、宝具なども見る事になるだろうと予想していたからだ。

ザフィーラはそう言って告げた。生まれて初めて奇跡と呼ばれる光景を見る事が出来る。そう心から信じているのだと。それにアーチャーは苦笑を崩さず、言葉を返した。それは、自分達ではなく全員で掴み取る光景でなければならない。

一人一人が全ての力を出し切る事で、今回の戦いは勝利を掴む事が出来るはずだと、アーチャー自身が思っているのだから。その思いを込めて、アーチャーはそう言葉を返したのだ。

「……そうだな。誰一人欠けてもいかんのだ」

「そういう事だ。我々全員がいるからこその、この時間なのだから」

他愛のない日々。その時間。それが今はどれだけ得難い物かをアーチャーもザフィーラも感じていた。だから守りたい。失いたくないと心から思うのだ。刻一刻と失われていく猶予。だが、焦りはしない。必ず何とかしてみせる。その思いが全員にはあるのだから。

「では、そろそろ行って参ります」

「うん。気ぃつけてな」

「アイス頼むな～」

「後、大きなプリンを」

「あ、ワッフルもね」

その声にやや苦笑混じりに頷くシグナム。それを見送り、いそいそとヴィータとはやてはテレビをつける。リインはオセロを取り出し、ザフィーラを待っているし、シャマルはアーチャーの傍へ行き、明日の朝食は洋食がいいと意見を述べていた。

テレビから流れるのは、人気のクイズ番組。これを見ながら答えを言い合うのが、最近のヴィータとはやての常だった。何気にリインやシャマルもこれは好きで、何かしながら答えをふと言う時がある。ちなみにアーチャーは、芸能関係がボロボロだったりする。

今もはやてとヴィータが二人して答えをテレビに向かって言い合っている。ザフィーラとリインはオセロしながら、たまにテレビを見て答えを呟き合っていた。シャマルとアーチャーはそんなオセロ組を見つめ苦笑しつつ、全員分の飲み物を準備していた。

回答者の芸能人が答えを間違い、はやて達が正解を聞いてやっぱりと頷いた。そんな風に過ぎる日常。それを感じながら、アーチャ

ーは静かにお茶を飲むのだった……

道場に響く音。いつものようにシグナムとフェイトの剣術稽古の音だ。シグナムはフェイトの動きに感心していた。始めた頃は、素人にしてはというレベルだったのだが、今は独特の剣筋を持ち始めていて、中々打ち合っていて楽しいと思えるぐらいにまでなっていたのだ。

これで体が大きくなり、自分と同じぐらいになった時はどうなるのだろうと考え、シグナムは嬉しくなった。以前であれば、先の事を考えるなど笑うしかなかったのだが、今はそれを心から信じる事が出来る事に喜びを感じていた。

（主が危険だというのに、何故かここまで落ち着いていられるとはな。それどころか未来まで信じる事が出来る……変わったな、私も）

フェイトの中々鋭い剣閃を捌き、シグナムは笑みを見せた。それにフェイトはやや不思議そうな表情だが、何か思う事があったのか同じように笑みを浮かべた。

「……さて、そろそろいくぞ」

「はい」

声を掛ける。それが意味するのは、稽古ではなく試合になるという合図。シグナムとフェイトの視線が鋭くなり、木刀を持つ手に力がこもる。先に動くのはフェイト。これはいつもの事。速度で勝るフェイトが動かないと、シグナムは動かない。

これは試合でありながら、フェイトの訓練なのだ。純粋な剣技だ

けでシグナムに勝つ事は出来なくても、追い詰める事は出来るようになりたい。その思いでフェイトは持てる全ての力を使って動く。

繰り出す一撃をいなされ、時に捌かれ、或いは防がれながらもフェイトは攻撃を続けた。それにシグナムは、どこか違和感を感じながらも相手を続ける。いつもならば、フェイトは我武者羅に攻め立てたりしない。

ある程度攻めた後は、一度距離を取って体勢を立て直したり、或いはシグナムの攻撃をかわしながら隙を窺ったりするのだ。だが、今日はそうではなく、シグナムが攻めに転じる事をしないように攻撃の手を緩めない。

（何だ……？　何を考えている……）

（初見の相手には、何をやってもある程度は通用する。でも、何度も戦っているシグナムには通用する方法がほとんどない。だからっ！）

フェイトの普段とは違う行動に、疑問を持ちながら動くシグナム。一方、フェイトはそれを感じ取り、一層攻撃を激しくする。雷光と呼ぶに相応しい速度でシグナムの周囲から攻撃を繰り出す。それをかわし、避け、時に受けながらシグナムはフェイトの状態を見つめ続けた。

あまりに激しい行動にフェイトの息が上がってきているのを、その目で確認しているのだ。いつか集中力が切れ、この猛攻が途切れた瞬間に勝負を決する一撃を放つ。そう考えているからだ。

そして、ついにその瞬間が来た。フェイトの動きが僅かにだが鈍ったのだ。疲れからくるものだろうと踏んで、シグナムは即座に木刀で鋭い突きを放つ。それがフェイトの鳩尾へ決まる――――かに見

えた。

「なっ？！」

「はっ！」

しかし、その突きはフェイトに届かなかった。いや、届くはずだったのだ。フェイトがそのまま前に倒れなければ。その突きを前転する事でかわしながら、フェイトはシグナムの腹へ木刀を突き当てた。

一つ間違えれば、頭部に突きが当たる可能性さえある行動。しかしそれ故に、シグナムは感心した。フェイトの違和感のある行動は、全てはこのためにあったのだ。シグナムを攻め続け、一撃で決めるように仕向ける。そして、その一撃が速度を重視したものになると予想し、更に狙う場所も意識を刈り取れる部分を選ぶと考えた。

「……最初から狙っていたのか」

「……っ……は、はいっ」

肩で息をしながら、フェイトは道場に横になった。荒い息のまま、フェイトは自分が考えた戦法を告げた。何度も遣り合ったシグナムには、自分の小手先の戦法などは通用しない。ならば、逆にシグナムの戦法を絞らせようと考えたのだ。

どうすれば、どう動くかを思い出しながら、なるべく自分の考える戦法を選ぶように動いた。自然な隙を作るのは出来なかったが、速度だけはシグナムよりも上。それはシグナム自身が証明してくれた。ならば、隙を作るのではなく、シグナムが反応した瞬間に動けばいい。自然な隙を作れないなら、相手の反応だけに集中しようと。

「……そう……っ……考えたん……って です」

「成程。お前なりの私攻略法、という訳か」

魔法無しでもまだ負けないと思っていた相手。それが、こうも見事にしてやられた事にシグナムは悔しさよりも嬉しさを感じていた。だが、そんな言葉に、フェイトはやっと呼吸を落ち着けて答えた。

「……そんな良い物じゃないです」

「謙遜するな。自分を信じ、そして私を信じるからこその戦い方だ。複雑な気分だが、悪くはない」

「でも、次があるとは思っていませんから」

「ふっ、中々正直な奴だ。ああ、もう同じようにはいかん。一撃で仕留められる相手などと二度と思わんからな」

そう、今までシグナムはフェイトを一撃で仕留める事が出来る相手と見ていた。だからこそ、最後も疲弊したところを打ち合って仕留めるのではなく、一撃で倒そうとしたのだ。

それをフェイトも理解している。故に次はないと言ったのだから。シグナムがある種の慢心を無くした以上、今後フェイトが付け込む隙はない。それでも、フェイトは諦めず挑むだろうと思い、シグナムは満足そうに笑みを見せる。

「さて、では掃除をして帰るとしよう」

「はい」

「あの時考えたのは、これだったのか？」

「……いえ、それはまたコンビ戦の時に」

シグナムの問いにフェイトはどこか楽しそうに笑ってみせた。その笑みを見て、シグナムも笑みを返す。来週が楽しみだと、心から思って……

フェイト達が道場を後にし、それぞれ自宅へと戻って歩き出した頃、なのはは自室で手元にいないレイジングハートの事を思っていた。

以前、バルディッシュを手放していた時のフェイトの気持ちが今は良く分かったのだ。あの時でも寂しいだろうと思っていたのだが、実際になって余計寂しく感じていた。

「……取りに行く時、私もついていこうかな」

リニスが本局へレイジングハートを取りに行く際、自分もそれに同行しようとなのはは考えていた。レイジングハートを改良してくれている相手――マリエルの事は、簡単にしかなのはは聞いた事がない。それでも、バルディッシュを丁寧且つ大胆に改良し、愛情を持って仕上げた事はリニスを通じてフェイトが教えていた。

だからこそ、なのははレイジングハートの面倒を見てくれている事に対し、礼を述べたいと考えているのだ。自分の大事な友人。そのために様々な案を考えて提案してくれたマリエル。その熱意と誠意に自分が直接会って応えたいと。

（フェイトちゃんも言ったら来る気がするなぁ……）

バルディッシュの礼は、リニスが代わりに告げたらしいが、なのはが直接言いに行くと言えば、確実にフェイトも共に行くと言い出すだろうと思った。その辺り、フェイトは純粋だからだ。

そんな事を考え、なのはは思う。強くなって戻ってくる自分の友人に負けないように、自分をもう一度しっかり鍛えないといけない。単純に機能を強化しただけではなく、カートリッジの負荷に負けない体に少しでも出来るようにと。

そんな時、ノックの音が聞こえてきた。それになのはがどうぞと声を返すと、ユーノがドアを開けて中へ入ってきたのだ。意外な訪問者になのはは少し驚きを見せる。何の用か分からなかったからだ。

そんな風にどこか戸惑うなのはへ、ユーノは静かに問いかけた。レイジングハートを強化に出したのかと。それは責めるでも、咎めるでもない声。ただ、確認したいといった感じの声だった。

「……うん。ゴメンね、ユーノ君。相談もなしに」

「いや、いいんだ。もうレイジングハートは、なのはの友達で相棒だ。僕の許可を取る必要はないよ」

「でも……」

「僕が聞きたいのは、なのはがそれをしてどうするかって事なんだ」

申し訳なさそうなのはへ、ユーノは真剣な眼差しを向けてそう言った。そこには、なのはの決意を聞かせて欲しいという気持ちが、ありありと浮かんでいる。それを感じ取り、なのはも表情を真剣なものへ変えて静かに告げた。

はやてを助けるのだと。完成した夜天の魔導書は、恐ろしい力を発揮する。その時、自分が足手まといにならないように、そしてはやてを助ける力になれるようにと思って、レイジングハートと決めたのだと。

本来ならば、強化についてはゆくゆくというぐらいにしか考えていなかったなのは。しかし、状況がそれを許さなかった。はやてを助けるためには、魔導師の力が必要。非殺傷でなければ、はやてとリインを助ける事は難しく、更にその後待ち構える相手は、想像も出来ない。

ならば、現状のままの自分では戦力としては厳しいと言わざるを得ない。士郎達でさえ、セイバーとアーチャーが事情を話すのは決行前日ぐらいとしたのだから。

「……魔法が使えるからってだけで、お父さん達でも難しいって言われた戦いに参加するんだよ？　だったら、少しでも私も力をつけないと」

「なのは……」

「私、無理はしない。でも、無茶はするよ。だって、この戦いは……絶対負けたくないからっ！」

大切な親友とその家族。その将来が掛かった大事な一戦。そして、古より続く闇の連鎖を断ち切る意味合いもあるのだ。そんな子供が挑むべきではない戦場。それでも、なのははそこへ赴く事に少しも迷いはなかった。

守りたいモノが、失いたくないモノがある。そのために出来る事があるのなら、全力を尽くして望むだけ。そういう事を話すなのはを見て、ユーノは確信した。なのはは、きっと魔法を使えなかった

としてもこの戦いに参加しただろうと。それは気持ちの上での戦い。

（なのはは、本当に誰かのために力を尽くす人間なんだ……。僕も……精一杯出来る事をしないと……）

支援魔法しか使えぬ自分。相手を倒す力はなくとも、なのは達を守り助ける事は出来る。そう改めて思い直し、ユーノはなのはへ笑みを見せて告げた。

「分かった。頑張ろう、なのは。絶対、はやて達を守り抜こうっ！」

「うんっ！」

互いに笑顔を見せ合い、二人は誓い合う。共に信じるは誰一人欠ける事無い結末。また全員で笑い合える時間。故に不安を排除する。欠片さえ抱かぬようにと。希望でその心を満たし、奇跡を掴み取るために。

「そうか。彼女の残り時間が……」

グレアムはそう言うと、目を閉じて天を仰いだ。リンディからの報告を聞き、もう猶予がそれ程ないと理解したのだ。切り札となり得るデュランダル。その完成は未だ先。今月中には完成し、クロノへ渡して多少のテストをするとなっているが、それでは最悪間に合わない可能性が出てきた。

そう考え、グレアムは完成次第デュランダルを実戦投入し、計画を実行する事を決意する。リンディへそう告げ、クロノへの説明と理解を求めてもらうように。

「……アルカンシェルはどうしますか？」

「あれを使う事は出来ん。あくまでも我々は、偶然闇の書と遭遇し、その主や民間協力者達と協力して穏便に事を解決しようとした事にする。ならば、アルカンシェルの事など申請出来ようはずがない」

アルカンシェル。それは、次元航行艦に搭載される恐ろしい程の威力を持った超兵器。使用された事は闇の書関係の事件でしかないため、暗に闇の書殲滅兵器と言われているものだ。

本当は、闇の書以外でも使われる事があってもいいのだが、許可が下りたのは闇の書絡みしかない。故に、それを使いたいとなれば、闇の書と遭遇したと告げる事にも等しい。

それをリンディも分かっているのだろう。それでも、一応念のために尋ねたのだ。アーチャー達の計画が失敗し、グレアムの計画まで失敗した時の備えとしてアルカンシェルを用意するかと。

それにグレアムは明確な否定を示した。つまり、信じているのだ。どちらかの計画の成功を。もしくは……

（失敗した時の事を考えたくないのね。……自分を追い詰めて、事に当たろうとするつもりでしょう……）

そう考え、リンディもまた思う。成功だけを信じる事が出来ないのは当然なのだ。上に立つ者ならばそれが失敗した時の事を想定し、手を打たねばならないのだから。だが、それでもリンディもグレアムも出来る事なら誰も犠牲にならない道を歩きたい。

かつて失った者達の想いを、命を無駄にしないためにも。闇の書と呼ばれる存在の終幕。それを、完全に降ろすために。

願いの宝石が繋げた絆。それがもたらした今の時間。今度は、闇を冠する本が導いた絆を守るために、その力を、輝きを結集する。英霊達と少女達。そして、それを見守り支える者達。それぞれの想いが、願いが、祈りが重なって、必ず奇跡を呼び起こすのか……

――――――

A' s十話　前編

リニスと共に、なのはとフェイトは時空管理局本局へとやってきていた。レイジングハートの改良が終わったのを聞き、リニスがなのはへその旨を伝え、近く渡しに行くと告げたのだが、それになのはが自分もついて行きたいと言い出した。

そして、その理由を聞き、リニスは納得と理解をし、なのはを連れて行こうとしたのだが、フェイトがそれに同行を申し出たのだ。なのはの理由を聞き、自分も直接会って礼が言いたいと。

こうして、二人はリニスの後をついていく形で歩いていた。共に本局を歩くのは初めてに近く、少しキョロキョロと辺りを見回しながら。それをどこか微笑ましく思いながら、道行く局員達が笑みを向けていた。

やがて、リニスの足が一枚のドアの前で止まる。そこがマリエルがいるデバイスルームだった。リニスが先に入り、その後を追ってなのはとフェイトが入る。その瞬間閉まるドア。丁度、その音が合図になったように背を向けていたマリエルが振り返った。

「あ、待ってましたよリニスさん。……それと？」

「こちらがなのはさん。そして、こちらがフェイトです」

リニスの言葉に二人は揃って頭を下げる。それにマリエルが嬉そうな笑みを見せ、頷いた。会いたいと思っていた二人の少女。それと出会わせてくれたリニスへ感謝を述べながら、マリエルは改めて二人を見つめた。

なのはとフェイトはそんなマリエルにやや戸惑いを見せるも、明るく自己紹介をした。そして、なのはもフェイトもこう告げたのだ。

自分達のわがままを聞いてくれてありがとうございますと。

「……私はわがままを聞いたつもりはないよ。バルディッシュもレイジングハートも望んだからこそ、私は強化した。貴方達だけが望んだからじゃない。互いに話し合って決めた事だから協力した。それだけ」

マリエルはそう言うと、そっと机に置いてあったレイジングハートを手に取り、なのはへ手渡した。それを受け取り、なのははもう一度礼を述べる。そして、その場でその強化を確かめようとした。だが、それに気付いてマリエルが苦笑しつつ、ある事を教えた。今回の改良で名前が若干長くなったから、それだけは覚えておいて欲しいと。その名前を聞いて、なのはは頷き、その手にレイジングハートを掲げて告げる。

「レイジングハート・エクセリオン……セットアップ！」

”スタンバイレディ。セットアップ”

なのはを包む魔法の光。そして、現れるのは以前と同じ姿のなのは。ただ、手にしたレイジングハートが若干変化していた。組み込まれたカートリッジシステムのため、やや無骨さが増していたのだ。

それを見て、フェイトがバルディッシュよりもカートリッジの部分が目立つかもしれないと思っていた。なのはは新しくなったレイジングハートの姿に、少し複雑な表情を浮かべた。以前よりも強くなったような印象を受けるのはいいのだが、どうしても自分が思う魔法使いから一段と離れたと思ったからだ。しかも、自分の使う魔法も砲撃系ばかり。

（これじゃ……魔法じゃなくて魔砲だよ……）

あながち冗談でもないと考えながら、なのはは苦笑。魔法少女だと思っていたら、気がついたら魔砲少女になってましたなんて、笑い話にもならない。更にデバイスにカートリッジまでついて、それに拍車が掛かってしまった感さえあるのだから。

そこまで思って、なのはは少しだけ自己嫌悪。砲撃系の魔法ばかりになったのは、自分が得意な属性が集束だったからなのだ。つまり、こうなったのは自分のせいだと、そう考えた。

「……どうしたの、なのは。何か落ち込んでるみたいだけど？」

「何でもないよ。少し、自分の得意属性が違えば良かったのになぁって思っただけ」

フェイトの疑問になのははそう苦笑いで返す。リニスもマリエルもフェイトもその答えに不思議そうな表情だったが、なのはの雰囲気からそこまで気にする事ではないと感じ取り、詳しく聞きだそうとはしなかった。

その後、マリエルから強化された事で変わった点を教えてもらい、新たに加わったエクセリオンモードの説明とその奥の手であるＡＣＳの説明を受けた。ＡＣＳ――― Ａｃｃｅｌｅｒａｔｅ Ｃｈａｒｇｅ Ｓｙｓｔｅｍの略で、加速突撃仕様とでも訳せばいいだろう。要するに、最後の切り札として限界以上の性能を引き出させる事になるものだ。

それを聞き、なのははマリエルの想いを感じ取っていた。自分が下した決断。一見それに反するシステムであるＡＣＳ。だが、それはなのはの決断を尊重したからこそのものだと分かったからだ。

普段は負担を抑える。だが、いざという時には負担を無視してでも状況を打破出来るように。そのために考えて備えられた装備だっ

たのだから。故になのははは感謝した。だからこそマリエルの想いに応えたいと思ったのだ。

「マリエルさん、私、絶対これを多用しないで戦ってみせます。私のために、レイジングハートのために、そして……マリエルさんのためにも」

「……ホント、いいマスター……じゃなかった。いい友達を持ったね、レイジングハート」

”ありがとうございます”

なのはの言葉にマリエルは嬉しそうに頷き、レイジングハートへ声を掛ける。それにレイジングハートはそう答え、周囲に笑みが浮かぶ。そして、フェイトもバルディッシュの事で改めて礼を述べ、マリエルは苦笑した。リニスを通じて既に礼を述べたにも関らず、実際に会って再び感謝を告げるその律儀さに。

こうして、なのはとフェイトはマリエルに感謝を伝えて、デバイスルームを後にした。リニスもマリエルへ礼を述べてそれを追う。三人が出て行くのを見送って、マリエルは静かに息を吐く。初めて会ったなのはとフェイト。その優しい心に感心すると同時に、彼女は思ったのだ。

高い魔力を持ち、優秀なデバイスを使いこなすその能力。あの年頃にしてはしっかりした考え方。それらを知れば、管理局が放っておかないと。現にレティは出来る事ならフェイトを局へ入れたがっている。なのはに関しては、半分諦めているが、それでももし機会があればと考えているだろうとマリエルは思っていた。

（……出来る事なら、平和に過ごして欲しいけど……ね）

個人としては、なのはもフェイトも穏やかに平和の中で過ごして欲しいと思う。だが、局員としては是非手を貸して欲しい二人でもあるのだ。その二つの考えがせめぎ合い、マリエルは苦笑する。

自分もすっかり局員らしくなってしまっているなと感じたのだ。そこで気持ちを切り替え、意識を他の事へと向ける。それは、最近回ってきた仕事。それまでそれを担当していた者が異動となるため、マリエルへそれが割り当てられたのだ。それはとある陸士からの依頼。内容は、彼女の家族に関する事。

――娘さん達の定期検査、か……

激突！　ミッドＶＳベルカ！　前編

海鳴に戻ったなのはは、一旦フェイト達と別れ、自宅へと向かっていた。今夜、約束通りミッド式対ベルカ式のコンビ戦をやるのだが、そのための準備として、実際に魔法を試してみなければと思ったからだ。

（セイバー、今日はお休みだったはずだけど……）

道場でシュートコンセントレーションをしようと考え、なのはは門をくぐって玄関へ。靴を素早く脱ぎ、ちゃんと揃えてからリビングへ向かい、セイバーを捜す。すると、そこにいたのは意外な人物だった。

「もう帰って来たのか、高町」

「シグナムさん？」

ソファーに座り、湯のみを片手にしたシグナムがそこにはいた。向かいにはセイバーが同じように座り、お茶を飲んでいた。どこか事情が分からないなのはに、シグナムがやや苦笑混じりに話し出す。

今日行なわれるコンビ戦を前に、一度なのはと模擬戦をしたいと考えて来たのだと。とはいえ、夜に本格的なものをするので、新しいデバイスの試しに付き合う程度の軽い訓練みたいなもの。そう言って、シグナムはなのはの目を見た。

その視線は、なのはへ今すぐやるかと問うもの。それを理解し、なのはは少し戸惑いながらも頷いた。何故ならば、なのはは今まで一度もシグナムと手合わせした事がなかったからだ。

そのため、今日の模擬戦のために情報を得ておこうとも考えた。ヴィータとシグナム双方の情報を得ておけば、少しは良い勝負が出来るかもしれないと思って。

（何せ、相手は歴戦のベルカの騎士だもんね）

完全に経験では自分達の上をいっている。それをなのはもフェイトも熟知している。故に勝てるとは思っていない。勝ちたいとは思っているが、勝てるなどとは思い込まないようにしているのだ。

今回のコンビ戦の意味は、なのは達とヴィータ達で捉え方が違っている。なのは達は、純粋に自身の実力を試す事。対するヴィータ達は、なのは達の対人戦の経験を積ませる意味合いがある。

「セイバー、道場を借りるぞ」

「ええ。なのは、気をつけて」

「うん」

どこか嬉しそうに歩き出すシグナムを見て、共に苦笑しつつなのはとセイバーは声を掛け合う。そして、シグナムを追ってなのはも玄関へ向かう。その離れていく背中を見つめ、セイバーは小さく息を吐く。

そこに込められたのは、安堵。なのはが手にしたであろう新しい力。それになのはが特に変わった様子が無かったからだ。早く試そうと思っているのだろうが、それは喜びではなく義務感のようなものからきている気持ちだと理解出来たからだ。

その証拠に、なのははシグナムの提案に即答はしなかった。しかも、応じた時の表情は、とてもではないが嬉しそうではなかった。やはり、力を使う事を根本的に好んでいない。そう思い、セイバーは笑みを浮かべた。

（困っている者を助ける事に躊躇いは無くとも、無闇に力を使う事には躊躇いを持つのですね。このまま、優しく強いなのはであって欲しいものです）

本当の強さ。その意味はそれぞれで違うだろう。しかし、セイバーにとってなのはの在り方は、強い者のそれであった。力を望まず、使う事を良しとせず、他者のために動きながらも自分を労わる。

出来る事なら安全で平和に過ごしていたいと思っているのだろう。そう考え、セイバーは小さく笑う。それは誰も同じだと思い出したからだ。フェイトも、はやても、すずかも、アリサも。少女達だけではない。自分も、ランサーも、アーチャーも、ライダーも、小次郎もそうだ。皆が皆、平和を望んでいるのだから。

「……闇の書の悲劇。それを……必ず」

そう呟き、セイバーは一人決意を新たにする。もう二度と不幸を繰り返さぬように。主を愛しく思う優しい騎士達。それが幸せに暮らせるようにと。強く強く思いながら……

シグナムは内心なのはの誘導技術の高さに舌を巻いていた。セイバーとやっている訓練を自分が代わりにしてやると言い出したのだが、それをいざやってみると思いのほか難しいのだ。

なのはの死角へ移動出来ない事だけではない。ただ回避しか出来ないのは、シグナムのように打ち合いを好む性格の人間には辛いものがある。しかし、セイバーがこれをしている理由を悟り、シグナムはそれでもひたすらなのはのシューターをかわす。

（アクセル・シューターと言っていたな。以前に比べて誘導性能が増している……高町のために改良されたのは間違いない）

（凄い……ディバイン・シューターよりも楽に思った所へ動いてくれる。これなら……っ！）

フェイントを織り交ぜ、緩急をつけ、シグナムを追い詰めるなのは。以前にも増して自分の意志通りに動くようになったシューター。その性能に驚きつつも、その欠点も同時に悟っていた。それは、高い誘導性を確保するには、動きを止めている必要がある事。

明確なイメージと高い集中力が求められるアクセル・シューター。今までのような戦い方が一部出来なくなった事を踏まえ、なのはシグナムを攻撃しながら、自身の戦闘スタイルの変更を考える。

「やるな、高町。しかし……まだだっ！」

「……分かってます。でもっ！」

シグナムへ殺到する四つのシューター。上、下、右、左と四方からシグナムを襲う。それをギリギリまで引き付けてかわそうと、シグナムは身構える。なのはもそれは分かっている。だが、それでも攻撃速度を落とさない。

その事に気付き、シグナムは微かに疑問を抱いた。その瞬間、もう一つのシューターが前方へ放たれる。完全にシグナムの逃げ場を塞ぐように。そこでシグナムは合点がいったとばかりに笑みを浮かべた。

なのははシグナムの逃げる方向を一箇所へさせ、そこに時間差でシューターを配置して包囲したのだ。だが、それでもまだシグナムからすれば、逃げ場はある。そう、それは……

（やや上方が他と比べて開いているな。あれぐらいの隙間ならば……）

四方を覆う囲み。だが、僅かに上のシューターと前方のシューターとの間隔が他よりも開いているのだ。そこをシグナムは使ってこの攻撃をやり過ごそうとしていた。眼前に迫るシューター。それをしっかりと見据え、シグナムは跳んだ。

その瞬間、なのはが小さく声を漏らす。それを聞き、シグナムは違和感を覚えた。何故ならなのはが上げた声は、自身の失態を気付いたものではなく……

「これで……」

「何ッ！？」

シグナムがかわそうとした瞬間、上方のシューターからもう一つシューターが姿を見せたのだ。それを見て、シグナムは全ての流れを悟った。なのはは、最初からこれを狙っていたのだと。四方を覆うようにシューターを放ち、自分が跳ぶしか出来ない回避場所を作る。そこを、重ねるように配置したシューターで攻撃する。空中では、魔法を使わない限り自由な動きは出来ないし、何よりも不意を突いた攻撃には咄嗟の行動も単純になってしまう。

それでもシグナムは迫り来るシューターを何とかかわそうとする。体を捻り、その軌道を避けようとするのだが、相手は誘導性に優れたなのはのシューター。もう、勝負はついていた。

一度はかわしたシグナムだったが、即座に反転しシューターが襲い掛かると、もう何も出来なかった。シグナムの体を掠めていくシューター。それを感じながら、床に降り立つシグナム。なのはは、手応えを感じて笑みを見せた。

「……してやられた。まさか、意図的に隙を作ったとはな」

「にゃはは……実はあれ、本当に意図してなかったんです。シューターを重ねる事に集中したら、自然とあそこだけ制御甘くなったみたいで」

「……テスタロッサと同じで、自然な隙を上手く利用したか……」

なのはの答えを聞いて、シグナムはそう呟いて苦笑した。どこまで似ていると思ったのだ。ただ、フェイトはどこかそれを利用しようと思っていたのに対し、なのはは期せずしてだったが。

どちらにしろ、末恐ろしい相手だと思いながら、シグナムはなのはを見つめる。なのはは、レイジングハートと今回の訓練について意見交換をしているようで、アクセル・シューターの有用性とその活かし方を述べ合っていた。

「これを軸に戦うってなると、足を止める必要があるね」

”必要に応じ、シューターを使い分ければいいのでは？”

「う～ん……そうなると今以上に判断力と集中力がいるかな？」

”なのはならば出来ます”

「にゃはは、頑張るね」

そんな会話を聞きながら、シグナムは微笑みを浮かべる。まるで悲愴感がないのだ。どこまでも前向きに考え、行動する。はやての身に迫っている危機も、必ずどうにか出来ると信じている。そう言っているようななのはの姿に、シグナムも心が引き締められる思いがしていた。

幼いながらも親友を助けようとするなのは達。その心には不安や恐れよりも強く希望が輝いているからだ。故に自分もそうであろうと思う。大人として子供達を守りたいと思うから。

（巻き込んではいけなかった者達。だが、巻き込んでしまった以上、必ず守り抜いてみせよう。それが……先に生まれた者の勤めだ）

そう思い、シグナムは道場の掃除を始めた。それに気付いて、なのはも動き出す。共に今夜の模擬戦が楽しみだと言い合って。

海鳴大学病院。そこにアーチャーとはやてがいた。担当医の石田女史の都合で、定期健診がずれて今日となったためだ。そして、今は診察の結果を聞くため、アーチャーとはやては共に石田女史からの言葉を待っているのだが……

「……はやてちゃん」

「何です？」

どうも様子がおかしいのだ。いつもはどこか明るく話をしてくれる彼女が、少しも笑わない。それどころか思い詰めたような表情さえしているのだ。だが、アーチャーもはやても何となくだがその理由は察していた。

それでも、それを表面には出さず、はやては明るく聞き返した。その声に石田女史が何かを伝えようとして、戸惑った。しかし、それを理解したアーチャーとはやては互いを見合わせ、頷き合う。

「先生、気にせんでええよ。わたし、何言われてもええ覚悟は出来とる」

「はやての言う通りです先生。どうかはっきりと教えてください」

「……麻痺の進行が恐ろしい程早いの。このままじゃ……早ければ来月初め。遅くても来月半ばで……？」

その言葉にはやてもアーチャーも驚かなかった。むしろ、予想通りだったのだから。そんな二人の反応に石田女子は違和感を感じるも、違いに頷き合っているのを見て、その絆の強さと心の強さに感

心していた。
何せ、二人は不安を感じるどころか改めて諦めない事を確かめ合っているのだ。奇跡は必ず起こる。絶対諦めない。そんな言葉を言い合ってさえいるのだから。

「先生、おおきに。わたし、諦めんよ。先生達も頑張ってくれとるなら、わたしも頑張るから」

「はやてちゃん……」

「先生、私も同じです。奇跡とは、最後まで諦めない者にこそ掴めるものだと思いますから」

二人の強い眼差しを見て、もう彼女は何も言わなかった。ただ、黙って頷き、全力を尽くすと意志を示すだけ。それに二人も笑みを浮かべて頷いて、その場は終わった。
念のため入院をと勧められたが、はやては出来るだけ家族といたいと言うと、その言葉に何か感じるものがあったのか、石田女史は笑みを浮かべて頷いたのだった……

病院を後にし、アーチャーとはやてはいつものように会話を交わす。そこには、悲愴感など欠片もない。出会った頃と同じような穏やかな雰囲気。それが二人を包んでいた。
今日はこのまま買い物へ行きたいとはやてが言えば、アーチャーが発作が起きたらどうすると返す。それにはやてが迫真の演技で誤魔化してみせると返せば、アーチャーが大根役者では無理だと切って捨てる。そんな風に話しながら車椅子が動く音が響く。

「……信じとるからな」

「それはこちらの台詞だ。土壇場で怖気つかないで欲しいのだがな」

「何を！　そっちこそ情けなく負けたりしたら承知せ～へんからなっ！」

「やれやれ、元気なものだ。朝はあんなに弱っていたというのに」

「ちゃんとご飯食べたからな」

喧嘩のようなやり取り。だが、それは互いの励まし。不器用で素直になれないアーチャー。それに対するはやてなりの気遣い。出会った時からどこか喧嘩腰な二人。だが、その根底には絶対の信頼がある。

穏やかな秋風を感じながら、二人は行く。先程までの雰囲気はどこへやら。話題を今日の昼食と夕食の献立に変え、互いに意見を出し合っていた。無くなる時間。迫る決戦の日。だがもう少し、もう少しだけは日常を過ごしていたい。そう思いながら、二人は話す。何でもないこの瞬間を噛み締めるように……

――――――

た。

この話が終われば、いよいよ完成の時を迎える事に……

なのはがシグナムとの訓練をしている頃、月村家にリインの姿があった。ライダー達と完成後の事を打ち合わせるためである。アーチャーではなく、リインがその役目を負ったのは、彼女が語る方がより説得力が増すからだろう。

そして、ランサーと小次郎もそこにはいた。ランサーはリインの補足要員としての意味合いが強く、小次郎はライダー同様に事態の経過を聞くためだ。

そして、今、その説明が終わったところだった。リインの口から語られる完成後の状況。それにランサーがあの話し合いで決めた事や考えた事を付け足し、ライダーと小次郎も納得した。

はやての残り時間が少ない事に二人は少し表情を険しくしたが、それでもアーチャー達の判断と気持ちを考えて理解を示した。焦る必要はない。はやて自身が強く心を固めているのなら。そう判断し、ライダーも小次郎も何も言わなかったのだから。

「……それで、いつ頃完成させるのです？」

「それは私も聞いていない。ただ、望むのなら近い内に出来るとアーチャーは言っていた」

「……リンディ待ちだ。向こうと連携して事に当たるからよ」

リインの答えにライダー達が若干不信感を抱いたように見え、ランサーはそう告げた。それにリインも成程と頷いていた。ランサーは語る。リンディも蒐集されたため、その対策としてもリンディの協力が必要だろうと考えたのだ。

そして、出来る事なら初期の戦闘の要になる魔導師も多い方がいい。なので、クロノにも参加してもらう事を決めた。本人もそれを了承していて、後はリンディ達の準備が出来次第、行動を開始する事となっているのだと。

そして、ランサーの話を聞き、ライダーと小次郎が同時に抱いた疑問があった。それは、完成をどうさせるのかという事。それを聞かれ、ランサーは少し息を吐いて答えた。

「……エイミィだとよ」

「成程……そうですか」

「残りもほんの僅か。であれば、確かにあの娘でも問題無いか」

「そうか。それでアーチャーはいつでも完成させられると……」

三者三様の納得をしたところで、ふとリインがある事に気付く。それは、エイミィ自身が蒐集される事を知っているのかという事。そして、それに関連してクロノもそれを理解しているのかどうかだった。

リンディが知っているだろう事は、リインも気付いている。リンディ達と連携して事に当たると言っている以上、その事はリンディも聞いているだろうと。だが、本人達はどうか分からなかった。おそらく情報を隠されているだろうと思ったからだ。

クロノもエイミィも関係者とはいえ、リンディの部下である事には変わりない。であれば、きっと情報をある程度統制されているだろうと考えたのだ。そして、それはこの自身が蒐集される事にも及んでいるはず。

そう思い、リインはランサーを見た。その視線でランサーもリインが聞きたい事に察しをつけたのだろう。やや真剣な眼差しを向け、首を横に振った。それにリインは少し悲しそうに頷いた。

「……どうやら、決戦前に最後の難問があるようですね」

「心配あるまい。アーチャーが何とかしよう」

そして、そんなリインとランサーのやり取りだけでライダーと小次郎も大体の事を察してそう言い合った。特に、その小次郎の気楽な言い方にリインは小さく苦笑した。

これだけ事態が切迫して尚余裕を持てる小次郎。その豪胆さと、そしてそれが自分に対する配慮だと理解して。

（だからあまり気にするな、か。まったく……アーチャーの知り合いは、皆どうして素直ではないのだ）

そう思って笑うリイン。その表情を見て三人は小さく笑みを見せあうのだった……

中編

激突！　ミッドｖｓベルカ！

リイン達が帰った後、ライダーは少し前にすずかから頼まれた事について考えていた。それは、はやて達の戦いを見守りたいというもの。同じ事を小次郎も頼まれていて、それについて二人の意見は

共通していた。
そう、それはすずかとアリサの願いを叶える事。既に二人はその覚悟と決意をライダー達に告げた。アリシアの時とは違い、もっと直接的に危険が迫るかもしれない。それでも、あの時と同じように守りたいのだ。そう強く思うからこそ、二人の言葉にライダーも小次郎もそれを了承したのだから。

「……スズカやアリサまで参加するとなると、二人の傍には最低二人いた方がいいでしょうね……」

それは正直に言えば戦力を分散させる事になり、悪手でしかない。だが、最初はライダー達は全力で攻撃出来ないので、そういう意味では好都合だった。二人の護衛を空中戦への対処が厳しい小次郎とランサーが引き受ければいいのだ。
念のため、ユーノのような防御魔法が使える者もいれば尚の事。それに、二人の見守る位置は何も戦場の真っ只中でなくてもいいのだ。どこか距離を取った戦いが見える場所。そこから観戦するだけでも構わないと二人も言ったのだから。

「本当ならば止めさせるべきなのでしょうが……」

ライダーはそう呟いて苦笑。それを頼んで来た時のすずかの表情を思い出したからだ。

――なのはちゃん達がはやてちゃんと一緒に戦うように、私も一緒に戦いたいの。気持ちだけでもいい。ただ、はやてちゃん達と同じように立ち向かいたい。だからライダー、力を貸して！

己の無力さを知りながらも、それでも心を共にしたいと告げたすずか。その表情は、意を決した桜をライダーに思い出させるのに十

分だった。それ故、ライダーは頷いたのだ。すずかの決意や想いを支えるために。

あの大空洞の中での戦いで、桜と共に戦えなかった事の雪辱を晴らすために。戦いから遠ざけるだけが優しさではないと知った今、ライダーにとって重要なのは本人の意志を叶えてやる事。

今度は愛する者の願いを、想いを支えるために。そう誓い、ライダーは準備を進めているのだ。己の切り札を使うための準備を。争いを好まない優しい仔。それにまた望まぬ事をさせる事になると分かっていながらも。

ライダーが空中戦をするには、その力がどうしても必要となる。そして、それを呼び出すために使う方法は、今のライダーでは色々問題がある。そのために、彼女は自分の血液をある程度溜めて使う事にしたのだ。

（まさか、いきなり頚動脈を切る訳にはいきませんからね……）

その光景を目の前で見せ付けられたのなら、すずか達は一生ものの心の傷を負う事になりかねない。それに、受肉した今、無闇に体に傷を付ける事は避けるべきとも考え、ライダーは試しにと自身の血液をある程度集め、召喚を行なってみたのだ。

結果は成功。なので、また同じ量を輸血用パックに詰め、本番に備えている。その全ては……

――リイン達が幸せに暮らせるように。そして……スズカ達の笑顔のために……

「……そうかい。そんな事になってたんだね」

「まさかまだ聞いていなかったとは思わなかった。ランサーが教えているものだとばかり……」

海浜公園での手合わせを終えたザフィーラとアルフ。互いに水分を補給しながら、はやての事について話し合ったのだが、認識の違いがそこには存在していた。アルフはまだはやての状態が危険になった事を聞いていなかったのだ。

蒐集をフェイト達からした事は薄々気付いてはいたものの、はやての命の灯が消えかかっているなどとは、夢にも思っていなかったのだ。だが、フェイト達から蒐集するという事から、その危険性を予想していたのか。アルフは、ザフィーラから事情を聞いてもそこまで動揺はしなかった。

「ランサーは、きっとアタシの性格を理解してたから後回しにしたんだろうね。ま、確かに驚きはしたけどさ……不安にはならないよ」

「……信じているのか」

「当然」

ザフィーラの笑みと共に呟かれた言葉にアルフはそうはっきり答えた。その表情は笑顔。そう、ランサーはフェイトだけではなく、プレシアもアリシアさえ助けた存在。故にそれに対して不安など欠片もなし。

アルフにとってランサーとは、まさに奇跡そのものなのだから。それに、今のアルフにはランサーだけなく頼れる男がいる。未熟な自分を鍛え、共に家族のためにと戦う仲間が。そう、それは……

「だから、頑張るとしようじゃないか。使い魔と守護獣として。何

より、こんなアタシ達を家族なんて言ってくれる存在のために、さ」

ザフィーラ。きっと、ランサーと出会っていなければ惚れたであろう相手。気高く強く寡黙。しかし、その内に秘めたる闘志はランサーに負けるとも劣らないものがある。そんな尊敬出来、尚且つ信頼出来る漢へアルフは笑みを向けてそう言った。

同じように作られた命。だが、だからこそその命を与えてくれた者のために。そして、守りたい者達のために賭ける事が出来る。そう思い合う仲なのだから。

「そうだな。我ら二人、共に家族を守る盾ならん」

「相変わらず硬いねぇ～……でも、アンタらしくていいけどさ」

「そういうお前はもう少し礼節を覚えろ……と、言いたいが、お前もその方がらしいか」

「だね」

「ああ」

そう言って二人は笑みを浮かべる。互いに思うはこの時間を失いたくないというもの。平和な日々。穏やかな時間。それを守るために戦う。そのためにも、自分達の出来る限りの事をしておきたい。そう考えた。

そして、同時に互いへ視線を送り合って苦笑い。同じ事を思ったと理解したからだ。そう、もう一勝負しようと。故に苦笑。そのまま立ち上がり、先程と同じ場所へ移動し、構える。

そのまま、二人は弾かれるように動き出す。拳が、脚が、相手を

倒さんと唸りを上げる。手合わせを始めた当初、アルフは動きに無駄が多く、ザフィーラにいいようにあしらわれていた感があった。しかし、今はその頃の面影が欠片もない。

ザフィーラの動きを見て、それに対して絶妙な返しを打ち出す。しかし、それをザフィーラは分かった上での動きだったので、それも危なげなく捌く。

（む……中々出来るようになったか）

（チッ！　今の結構自信あったんだけどね……）

互いに思う事はあれど、表情は揃って真剣なもの。こうして、二人は日が暮れるまで鍛錬を続けるのだった……

静かな住宅街を行く車椅子。はやての膝の上には買い物袋が乗っている。久しぶりに二人だけの買い物をしたため、はやては上機嫌でニコニコ笑っている。更に鼻歌まで口ずさんでいるので、余程嬉しかったのだろう。

アーチャーはそんなはやてに笑みを浮かべ、何も言わず車椅子を押していた。穏やかな雰囲気が流れる秋の昼下がり。残暑も終わりを迎え出し、日差しもそこまで強くはない。

「……あ～、眠くなってきたわ」

その陽気に眠気を誘われたのか、はやてが大きくアクビをしてそう告げた。それに微笑みを見せるも、アーチャーの声はどこかからかうように返される。

「そのようだ。あれ程大きく口を開けるとはな。はしたないとは思わないのか？」

「いや、相手がもっと良い男やったらそうするけど……アーチャーはなぁ……」

「ほう。では誰なら良いのだ？」

「う～ん……士郎さん」

「年上が好みか、君は」

はやての意外な答えにアーチャーは素の言葉を返す。それにはやてはしてやったり顔で笑みを見せた。その表情に気付き、アーチャーは自分がはやてにからかわれたと気付き、苦笑。

やるようになったとアーチャーが皮肉混じりに言えば、はやてはまだまだ色黒男には勝てないと返す。そんないつもの空気感。それに互いに楽しさと嬉しさを感じながら会話を続ける。

時に皮肉を、時に笑いを。そして、時に温もりを感じ合いながら二人は歩く。ふと出会った頃を思い出し、はやてがその事を話し出すと、アーチャーもそれに懐かしく思い、優しい表情で相槌を返す。

悲しみの傷癒えぬ頃に会ったはやてとアーチャー。両親を失った事で大人しくなったはやてを、徐々に元の活発な少女へと戻したアーチャー。そんな事も話し、家まで歩く。

そして、家に入ると誰もいなかった。アリシアはヴィータと共に今日は公園へ行っていて、シャマルは翠屋での仕事。シグナムはセイバーと手合わせをすると聞いているので分かってはいた。アーチャーもリインがライダー達と話すために出かけていると知っている

ので、それに対しては何も思わなかったが、ザフィーラがいなかった事ははやてと同じで意外だと感じていた。

「……出かけとるのかな？」

「鍵も掛かっていたからそうだろう。まぁ、おそらく公園で鍛錬でもしているのではないか？」

「あ～……それが一番可能性高いな」

買った物を冷蔵庫にしまい始めるアーチャー。その背を見つめ、はやてはそう答えた。そのまま、はやては今日の夕食の献立を思い出し、作業の分担をアーチャーへ伝えようとして、声が出なかった。

いや、正確には出せなかったのだ。体を襲う激痛によって。痛みのために車椅子から崩れ落ちるはやて。その音を聞き、アーチャーは何事かと思い振り返る。そして、そこで痛みに苦しむはやての姿を確認し、表情を険しくして駆け寄った。

「はやて。しっかりしろはやてっ！」

「だ……だいじょう――――っ？！」

「はやてっ！」

アーチャーを安心させようと答えようとしたはやてだったが、断続的に襲う激痛にその言葉が途切れる。それにアーチャーは更に表情を険しくし、携帯を取り出す。

（仕事中だが、仕方ない！）

相手はシャマル。仕事中なので時間が掛かると思ったが、予想に反して三コール程で繋がった。

「はやてちゃんね」

アーチャーが何か言う前にシャマルはそう言った。

「そうだ。何とかすぐに戻って来れないか」

「……桃子さん達に頼んでみるわ」

「頼む！」

アーチャーの声に冷静さが欠けているのを感じ取り、シャマルは意を決してそう告げる。それが意味する事を理解したが、アーチャーにとってはそれよりもはやての事の方が優先だった。

桃子達にはやての事をある程度話せば、詳しい事情を話さない訳にはいかない。そして、それをすれば予定よりも早く状況を説明しなければならなくなり、高町家の者達へ余計な心配を掛ける事になると思った。

しかしそれを考えながらも、アーチャーは目の前のはやての体を優しく擦る事しか出来ない。すると、シャマルが突然目の前に現れた。転送魔法を休憩所で使ったのだ。そして、はやてを見るなり治療魔法を使い出す。

その淡い光を見つめ、アーチャーは無表情。だが、その拳は強く握られていた。はやてに我慢を強いる状況。いつ死ぬか分からないという極限状態。それを僅か九歳の少女に強いているという事実。それを改めて思い返し、自分を激しく攻め立てていた。

（最高を目指す。そのために私ははやてにこんな思いをさせている。……プレシアの話ではリンディ達の返事待ちだそうだが……こうなっては）

計画を多少早めてでも。そんな考えを一瞬アーチャーは浮かべる。しかし、それは出来ないとばかりに強く目を閉じる。万全を期すのなら、リンディ達の協力は最低限でも欲しい。更におそらくだが、アーチャーはリーゼ姉妹も手を貸してくれると踏んでいる。

となれば、その力は是非とも借りたい。それに、はやてにここまで我慢をさせた以上、結果はそれに見合うものでなければならない。そう思い直し、アーチャーはシャマルへ問いかけた。

「どうだ？」

「……はやてちゃん、どう？」

「……す、少し楽になった気がするわ。おおきにな、シャマル」

まだ痛むのだろう。それでもはやては気丈に笑みを見せた。それに二人は内心の無力さを噛み締めながら、それを押し殺し笑みを返す。そして、シャマルによる治療が終わったのを見て、アーチャーははやてを抱き抱えて部屋へと運ぶ。

その間、はやては珍しく何も言わずただ黙ってアーチャーの胸にしがみ付いていた。そうして、部屋のベッドへ寝かしつけられた瞬間、はやてははっきりとこう告げた。

――――負けへんから。

その言葉にアーチャーは振り返らず、黙って頷いた。それにはやては苦笑しつつも、嬉しそうに頷き返す。そして、はやての部屋の

ドアをゆっくり閉め、アーチャーはリビングへと戻った。そこでは、シャマルが顔を両手で覆い隠して泣いていた。

「……シャマル、泣くな」

「無理よ……はやてちゃん、あんなに無理して笑って。私、癒しが専門なんて偉そうな事言って……はやてちゃん一人……」

助けられない。そう言おうとした瞬間、アーチャーがシャマルの肩に手を置いた。それにシャマルがゆっくりと顔を上げる。そこには、真剣な表情のアーチャーがいた。眼差しは迷いもなく真っ直ぐにシャマルを見つめている。

そのあまりの迫力にシャマルも言葉がない。アーチャーは、そのままシャマルを見つめて静かに語り掛ける。ここまで来た以上、何が何でもはやてを、リインを助ける。それを目指しているのではないのか。もしそうなら、決して弱音は吐いてはならないのだと。

「はやては……先程こう言った。負けないから、と」

「っ！？」

「ならば、私達がそれに続かない訳にはいかないだろう。はやての行く道は、私達の行く道なのだから」

「……そうね。そうだわ。負けない……負けられないのよ、私達は」

アーチャーの言葉にそう自身を奮い立たせるように言って、シャマルは静かに立ち上がる。その表情には、もう先程までの弱さはない。代わりに、何者にも屈しないような力強さがあった。それを感じ取り、アーチャーは小さく頷く。

そう、負けられないのだ。今回の戦いには、後がない。失敗は即ちリインの消滅を意味する。下手をすれば、守護騎士達さえ失うかもしれないのだ。それは絶対許されない。はやてに強いた我慢。それに対し、アーチャー達が出来る精一杯のお返しは、誰一人欠ける事のない決着なのだから。

「……今夜、シグナム達がコンビ戦をやるな」

「ええ、そうだけど？」

「そこで話そう。はやての状態を知らない者達へ、全てを」

アーチャーの言葉にシャマルは驚きを見せるが、すぐにその意図に気付き頷いた。今回のように、いつはやてが発作に襲われるか分からない。ならば、関係者全体にちゃんと事情を話す方がいい。

余計な心配を掛けるよりも、このままはやてを苦しめる事に繋がりかねない方が問題だと判断したのだ。それをシャマルも理解し、この事を夕食後にまずシグナム達へ話す事にした。今夜の模擬戦後に完全な状況説明をする事を告げるために……

――――――――――――――――――――――――――――――――

ついにコンビ戦。ですが、あのなのはとフェイトの時と違い、純粋に楽しむだけとはいきません。

次回、コンビ戦の場面からスタートです

A' s十話　後編

あのなのはとフェイトの模擬戦の記憶も新しい海浜公園。そこになのは達が全員揃っていた。目的は一つ。なのはとフェイトのミッドコンビとヴィータとシグナムのベルカコンビの戦いを見るためである。そして、普段中々会う機会を作れない者達の歓談の場でもあるのだ。

そんな和やかな雰囲気の中、どこか少し雰囲気がいつもと違う者達がいた。守護騎士達だ。彼らは、模擬戦をするシグナムとヴィータだけでなく、シャマルやリイン、ザフィーラまでやや表情が強張っているようにも見える。

「……アーチャー、みんなやっぱり」

「ああ。気にしているのだろう。君の体の事を、な」

はやての窺うような言葉にアーチャーはそう答えた。嘘を言っても仕方ない。帰宅した騎士達は全員アーチャーからはやての発作の事を聞き、表情を険しくしたのだ。それだけではなく、アーチャーからこの模擬戦後に事情を説明すると提案され、その決断に至る理由を考えて誰も何も言わなかった。

気付いたのだ。このまま黙っていれば、周囲の者達に余計な心配を掛ける事になると。故に事情を話し、理解と納得をしてもらおうと考えたのだ。既に決戦の時は近付いている。ならば、ここで全てを伝えておくべきだとも思うのだ。

ここにいる者達がどれだけ自分達によくしてくれたのか。また色々と教え、助けてもらえたのかを思い出して。それに応えるためにも、隠し事はもう無しにいたいと、そう誰もが考えていたのだ。

ちなみに桃子と士郎へは、このコンビ戦の後に全てを話すと告げ、一先ず納得してもらった。

「なのは！　フェイト！　負けんじゃないわよ！」

「怪我しないようにね」

親友二人の声援になのはとフェイトは揃って頷き、デバイスを準備する。一方、ヴィータ達にも応援する者はいた。アリシアだ。

「ヴィータもシグナムも頑張ってね。わたし、応援するから」

「フェイトの応援はいいのかよ？」

アリシアの言葉にヴィータはどこか納得しかねると思い、そう問いかけた。それにアリシアは力強く頷いた。フェイト達も応援している。そう言って、アリシアはヴィータを見る。

その目は、いつも遊ぶ時に見せるものではなく、たまに見せる真剣なもの。そこに込められたのは、両者共にいい戦いをして欲しいという願い。怪我などをする事無く、互いの全力を出し切って欲しい。アリシアはそう思っているのだ。

「……ふっ、これは嫌でも気合を入れん訳にはいかんな」

「ああ。アリシア、お前の気持ち伝わったかんな」

騎士二人は、幼い少女のそんな思いを、その両方応援しているとの言葉から感じ取った。故に笑みを見せる。それは、見る者を安心させるもの。アリシアも二人の笑顔に嬉しそうに笑みを返す。

戦う四人はもう気持ちを切り替え、表情も凛々しくなっている。
そんななのは達とは違い、残りの者達は夏の模擬戦同様に寛いでいた。美由希はアリサと共になのはサイドで観戦するらしく、未だに二人でなのは達へ声を掛けていた。すずかはユーノの隣で、色々と新しいレイジングハートについて質問していた。無論、ユーノの隣にいたいとの想いもそこには隠れている。

アリシアはプレシアとリニスの間に立って、フェイトへ声を掛けていた。アルフはファリンとどっちが勝つかと予想し合っている。その決め手から流れまでを想像しているようで、その論戦は少しずつだが熱を帯び出していた。

ノエルはそんな二人を宥めながら、イレインと共に飲み物を準備していた。緑茶や紅茶、それに模擬戦後の事を考え、スポーツドリンクも用意してある所に、ノエルの心遣いが見える。

恭也は忍と寄り添うように座っていた。その雰囲気は、さすが恋人同士というような甘いもの。士郎は桃子と笑みを見せ合いながら同じように座っている。そんな穏やかさとは対照的に、ザフィーラはリインとなのはの強化について話し合っていた。その根底にあるのが来たるべき戦いを見据えてだろうと考え、二人は複雑な気持ちを抱いた。はやてを助けたいと思うからこそ、カートリッジという力を手にしたなのは。しかし、それが危険である事を知って尚、それを行使するその姿に二人は感謝すると共に申し訳ない気持ちになったのだ。

本来戦いを好まないなのは。それが力を追い求める事になった要因には、自分達の未熟さがある。今日の模擬戦さえ、なのはにとっては、新しい力を実践的に試すためのものなのだ。故に、なのはは今日の模擬戦で新しい力の全てを試すつもりなのだから。

フェイトは、新しい姿の有効性を試すため。そして、シグナムとヴィータにとっては、これは対人戦の経験を積ませるためのもの。故に、止める事は出来ない。リインと同じ姿で襲ってくるだろう防衛プログラム。それに対する技術と知識、そして経験を積ませる事。それこそが、二人にとってのこの戦いの本来の目的なのだから。

「……さて、楽しみよな」

「なのはの奴の新しいデバイス。その力、か……」

「心苦しいのは分かります。ですが、今回ばかりは……」

ランサーの声に苦いものが混じっている事に気付いたライダーは、そう言って嗜めた。自分達の力では強すぎるのだ。完成した後待ち受けるだろう戦い。その緒戦は非殺傷が出来るなのは達魔導師が要になる。

それはランサーとて理解はしているが、納得はしていない。いや、したくないの間違いだ。相手を殺さず加減する。それが出来ないランサー達ではない。だが、今回の場合はただ加減するだけでは駄目なのだ。ちゃんと魔力ダメージを与え、防衛プログラムを追い詰める必要がある。それには、魔法が使える者達でなければ無理。

「わぁ～てるさ。それに、一番心苦しいのは俺じゃねえ」

「……アーチャー、でしょうね」

セイバーがそう言って視線をアーチャーへ向けた。アーチャーはシャマルと共にはやての傍で何か話している。そんな光景を眺め、セイバー達四人は揃って決意を新たにする。殺し合うしかなかった

聖杯戦争。それから解放されたかのような平和な日々。それを与え、充実したものにしてくれている少女達。その笑顔を守るために、必ず闇を打ち倒してみせようと。

「結界準備完了……いつでもどうぞ」

ユーノの言葉に四人が頷いて、戦闘態勢へ入る。こうして、ミッド式対ベルカ式のコンビ戦の幕が上がった……

後編

激突！　ミッドＶＳベルカ！

開幕の一撃は、シグナムが放った斬撃。それをフェイトがカリバーフォームで受け流し、そのまま剣舞の如き様相を呈するのかと思いきや、即座にシグナムが距離を取る。そこへ飛来する幾多もの小さな鉄球。だが、それを打ち砕くように桃色の魔力光が迎撃した。

アクセル・シューター。なのはの魔法だ。ヴィータがフェイトの隙を狙ったように、なのははシグナムへの追撃としてそれを放っていた。だが、フェイトの安全を優先し、その軌道を変更してみせたのだ。

「やるな、なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

互いに狙った事を潰され、本来なら悔しさや怒りが先に立つもの

なのだろうが、なのはにもヴィータにもそんな感情はそこまで強くない。むしろ喜びなのだ。自分の狙いを潰してくる。つまり、自分の狙いを理解もしくは悟り反応してくれる相手が、来たるべき戦いでは味方にいる。

これを考えれば、怒りや悔しさよりも嬉しさや頼もしさが大きいというものだ。そんな事を考えながら、再び行動を開始するなのはとヴィータ。その上空では、フェイトとシグナムが激しく刃を交えていた。なのはのシューターがヴィータの魔法を迎撃した瞬間、シグナムはなのはを狙い素早く動いた。だが、それは既にフェイトに気付かれていた。故にこうして上空で剣を交えているのだから。

「ちっ……これではいつもと同じだぞ、テスタロッサ！」

「そうですね。でも、タッグにさせないのも立派なコンビ戦のやり方じゃないかな」

「……言うようになったな」

「ええ。先生が先生ですから」

フェイトはそう言って楽しそうな笑みを見せる。それにシグナムも同じ笑みを返し、レヴァンテインを構え直す。信頼する相手がいる。それを信じて、その援護を待つのもまた戦い。フェイトはそう思っていた。きっとなのはは自分を助けに来る。もしくは、自分がいざとなれば助けに行ってみせる。互いが互いを信じるからこそ、個人戦を挑めるのだから。

だが、フェイトもこのままシグナムが言うように、いつものような状況で終わるつもりはなかった。しかし、まだ奥の手を見せるには早い。故に耐える。そして、シグナムへ視線を向けながら一方で

なのはへも意識を向ける。
そう、ヴィータは近接戦もこなす万能型。故になのはも多少相性が悪い。そのため、本当に危険と判断した際はそのフォローをしようと考え、フェイトはバルディッシュを握りしめた。

「……行きます！」

「来いっ！」

雷と炎。それが夜空を美しくも危険に彩った……

四人の攻防を眺め、戦闘そのものに造詣の深い者達は揃って感心し、桃子や忍のようにそこまで詳しくない者達でさえ、その動きには驚きが途切れる事はなかった。初めてのコンビ戦というのに、互いに息を合わせて個人戦へ持ち込んでいるなのはとフェイト。対するベルカコンビも個人戦に持ち込まれているにも関らず、むしろそれを好機として徐々に二人を押し始めていた。

「中々魅せる戦いするじゃねぇか！」

「ああっ！　フェイト、そこで……そう、そうです！」

手にした缶ビールを握りつぶさんばかりにランサーが立ち上がれば、セイバーもフェイトとシグナムの戦いを見て、拳を握っていた。

「……落ち着いてください」

「いやいや、それは無理と言うものだライダー。私も血が騒ぐよう

な良き試合よ」

興奮する二人を見て、ライダーがそうやや呆れながら告げると、小次郎がそれにそう答えて笑みを見せる。そう、なのは達の劣勢になりつつあるのだが、中々追い詰められてからが長いのだ。

なのははアクセルとディバインの二つのシューターを使い分け、ヴィータを牽制しつつ、時折バスターを放ちその勢いを削いでいたし、フェイトはシグナムの剣閃を紙一重で防ぎ、凌ぎながらたまに鋭い反撃を繰り出し、シグナムへ後一歩を踏ませない。

そんな状況を見つめ、アリサと美由希は大声でなのは達二人へ声援を送る。それに続けとユーノとすずかも声を出した。アリシアは両方へ向かって声援を送り、ファリン達も両者に向かってエールを送る。アルフはフェイト個人へ精一杯の想いを込めて声を張り上げ、はやても負けじとシグナムとヴィータそれぞれに励ましを送る。

「……凄いわ。まさかここまでやるなんて」

「意外だったか？」

「ええ。シグナムとヴィータちゃん相手によくもってるわ。しかも……」

シャマルの言葉にアーチャーも頷いた。なのはもフェイトも何かを待っているような感じがしていたのだ。故に、二人をシグナム達が攻め切れない。最後の決め手を打とうとすると、嫌な予感がするのだろう。

現に二人の動きを見ていれば分かる。後一歩が踏み込めない。そんな風に躊躇いが見えるのだから。アーチャーには、その躊躇する気持ちが良く分かった。無謀と勇気は違う。何も考え無しで踏み込

むのはただの蛮勇。

（だが、このままでは埒が明かないぞ二人共。どうするつもりだ……）

アーチャーの視線の先では、四人が一旦仕切り直すように互いの距離を離しているところだった……

「……なのは、エクセリオンいける？」

「……うん。そろそろヴィータちゃん達も本気でぶつかってくるだろうし、出し惜しみはしないよ」

「そう……私も切り札があるんだ。それ使って、シグナムを最低でも止めてみせるから」

「なら……私は絶対ヴィータちゃんに勝ってみせるね」

そう言ってなのはは笑ってみせた。フェイトもそれに笑顔を返し、頷いた。一方、シグナムとヴィータはそんな二人の雰囲気から決着が近い事を感じていた。

「何かやるつもりだな」

「そのようだ。だが……」

「正面から迎え撃って、叩き伏せる！　……だろ？」

「そういう事だ！」

もう言葉はいらない。互いに抱いた思いは同じもの。正々堂々と正攻法で打ち破るのみ。それがベルカの騎士としての誇りであるが故に。

両陣営共に、この戦いの終局が近い事は分かっている。だからこそ、ここからが正念場。その思いを胸に、勝利を掴むためにそれぞれが動き出す。なのはの魔法とヴィータの魔法が相殺し合ったのを皮切りに、再びフェイトとシグナムが刃を交える。

「こうなったら、少し飛び込んでみようか！」

”虎穴に入らずんば、虎子を得ずですね”

レイジングハートが告げた諺に、なのはは苦笑しつつヴィータへ突撃する。そんなのはらしからぬ行動に誰もが思った。なのはは、勝負に出るつもりだと。フェイトもそれを感じつつ、なのはに負けじと自分も切り札を切った。手にしたバルディッシュへ、力強く告げる、それが、今の自分の決戦スタイル。

「バルディッシュ、ソニックフォーム！」

”イエッサー”

その身に纏うバリアジャケットが薄くなり、最低限の守りしか残さない。それを見て、シグナムは悟る。フェイトが何を狙ってその姿を考案したのか。そして、模擬戦を楽しみにしていろとの発言の謎も、それで全てを理解した。

「守りを捨て、速さに賭けたか！」

しかし、フェイトが動き出す前に、シグナムはレヴァンテインをバルディッシュへと叩きつける。その衝撃にフェイトは僅かに表情を歪めるが、それに負けじと叫ぶ。

「バルディッシュ！」

”ザンバーフォーム”

レヴァンテインに押されていた刃が巨大化した事で、掛かる力が分散したため、フェイトが押し返した。そして、そのまま上昇した速度を持ってシグナムを翻弄し始めたのだ。大剣を持っているとは思えない速度で動くフェイトに対し、シグナムがとった反撃手段は……

「レヴァンテイン！」

”シュランゲフォルム”

カートリッジを一つ排出し、剣から連結刃と呼ばれる鞭にも似た形態にする事だった。それで自分の周囲を守るように動かし、フェイトの攻撃を妨害する方法に出た。フェイトは初めてみたその姿に驚きを感じるが、それを押し留めて果敢に挑む。

しかし、その連結刃の壁に阻まれてしまい、シグナムへ攻撃出来ない。プラズマザンバーを使おうとも考えたが、フェイトはそれをしなかった。それは、セイバーとの約束のため。安易に使わないと誓ったからだ。それに……

（それに……宝具はここぞって時まで使わないんだ）

ランサーの教えもあればこそだった。しかし、このままではシグナムへ攻撃を加える事が出来ないままだ。それを何とかしなければと考え、フェイトはある事を思いつく。それは、一か八かの賭け。失敗すれば大きなダメージを負うだろう行動。

それでも、フェイトは決断した。実際、実戦で同じような状況になった場合、やるしかないからだ。やらなければ負ける。それは、死を意味する事。どうせ死ぬなら、精一杯足掻いてやろう。その思いがフェイトにはあるのだから。

「はあぁぁぁぁ！」

「何?!　真っ直ぐ向かって来ただと?」

連結刃を避けるどころか、むしろ進んで当たりにいくフェイト。その行動にシグナムが動揺する。だが、それでもそれを好機と考え、フェイトの体を縛り上げようと連結刃を動かして、フェイトの狙いに気付いた。

「まさかっ?!」

「今だっ！」

自分を縛ろうとするレヴァンテイン。それにフェイトはザンバーをぶつける。すると、レヴァンテインが刀身に巻きつくようにザンバーを動かしたのだ。そして、レヴァンテインを完全に巻きつかせた事で、シグナムの攻撃手段を奪う。

更にバインドを施し、連結刃を元に戻せないようにもしたのだ。完璧なまでに雁字搦めになったレヴァンテイン。だが、フェイトもバルディッシュを動かせない事に変わりは無い。

それを見て、シグナムはフェイトの思い切りの良さに感心していた。互いのデバイスを封じ合う結果を躊躇いもなく決断した。その裏には、そのままでは自分が不利でしかないという冷静な判断があった。

しかし、そこからの攻撃手段を無くしてどうするのだろうと、シグナムは思っていた。実は、シグナムにはまだ攻撃方法はある。しかし、フェイトにはない。故に、シグナムはフェイトが動き出すのを待った。

（まだ何を隠しているか分からんしな……）

様子見ではなく、最終確認。もしフェイトに何の動きも変化もなければ、打って出る。そう考え、シグナムは注意深くフェイトを見つめた。

（どうしようか。ここから下手な動きは……出来ない）

シグナムの鋭い眼光を受け、フェイトは自分の中にあった戦法をいつ使うか考えていた。それは、シグナムの剣を封じた事からの電光石火の行動。勝利を掴むための最後の決め手。

そのために、フェイトはわざわざカリバーではなくザンバーでレヴァンテインを巻き取ったのだから。

「……バルディッシュ！」

”カリバーフォーム”

バルディッシュが大剣から西洋剣へ変化した瞬間、フェイトは動いた。絡まっていたレヴァンテインが、大きさが変わった事で緩み

そこからバルディッシュを抜き取る事が出来るようになったためだ。
シグナムはそれを見て一瞬驚くも、急いでレヴァンテインを手元に戻そうとする。しかし、フェイトの方が速い。未だにシグナムの手元にレヴァンテインはないのだから。

（勝てるっ！）

「はぁぁぁぁぁっ！」

勝利を掴んだと確信したフェイト。だが、思い出すべきだったのだ。自分とシグナムの違いを。それは、彼女は騎士。故にその剣を納める鞘がある事を。

「そうはいかんっ！」

フェイトの一撃をその手にした鞘で弾くシグナム。その瞬間、フェイトは自身の敗北を悟った。何故ならば、その弾いた後、シグナムの手にはレヴァンテインが握られていたのだから。

「紫電一閃っ！」

体勢を立て直す暇を与えず、繰り出されるシグナムの剣閃。それを何とか回避しようとするも、間に合わず。咄嗟の防御魔法も少し拮抗しただけで貫かれてしまった。
その体をシグナムの放った攻撃が襲う。そして、防御力を落としたフェイトがそれに耐え切れるはずもなく……

「……終わった、か」

意識を失い落下しようとするその体を受け止めて、シグナムはそ

う心から呟いた。最後の戦術は中々良い物だったと小さく呟き、シグナムは視線をなのはとヴィータへ移す。どうやら、向こうも終わりが近いようだ。

そう感じ取り、シグナムはヴィータの援護に行こうとして――止めた。コンビ戦ならば、二対一を経験させるのも悪くないと思ったのだが、フェイトの頑張りを考え、そして何よりなのは達の方も大詰めなのを理解し、自分ならばどうして欲しいかと考えたのだ。

（手を出せば怒るだろうな。ヴィータ、気を付けろ。高町もテスタロッサも追い詰めてからが怖いぞ）

紅い魔力光と桃色の魔力光が激突しては消える。それが原因で起きる煙。そんな視界を悪くする状況の中、なのはとヴィータは互いに間合いに苦戦していた。最初こそ、なのはの突撃からのフラッシュ・ムーブを使った攻撃にヴィータも驚いたが、今は既にその動揺から立ち直っていた。

故に、なのはは得意の距離で戦う事に主眼を置き、ヴィータはなのはの不得意の距離へと詰めようとする。その度になのはのシューターがヴィータを阻み、その隙になのはが距離を取ろうとすれば、ヴィータの魔法がそれを阻む。

一進一退の攻防。もし、これがシグナムとの戦いであれば、なのははまだ戦い方を変える事が出来ただろう。接近戦からせめて中距離しか攻撃方法がないシグナム。それならば、なのはも自分の得意距離への移動を諦め、何とか中距離で戦おうとしたはずだ。

しかし、ヴィータは全ての距離に対応する万能型。その得意こそ近距離に置いているが、中距離も遠距離もそれなりにこなす。なのはにとって、それは厄介極まりない。近距離はまったく不向きなな

のは。中距離は出来ない訳ではないが、やはりやや不向き。自分が絶対の自信を持って戦えるのは、遠距離なのだ。

「でも……」

ヴィータは、近距離中距離共になのはの上をいく実力者。距離を取ろうにも近距離から中距離で必ず動きを止められるのだ。

「どうしたなのは。諦めんのか？」

「……うん。諦めるよ」

ヴィータの軽い挑発に、なのははそう答えた。それに一瞬だが、ヴィータは表情を変えた。しかし、即座になのはが何を諦めたのかを悟り、嬉しそうに笑みを見せた。

「距離を取るのは、ね！」

”アクセル・シューター”

足を止め、自身が誇る誘導性の高い魔力弾を放つなのは。それを回避するヴィータだったが、その軌道が変化し、もう一度ヴィータへ襲い掛かる。それに驚きを見せるヴィータだったが、自身の防御魔法なら耐え切れると踏み、それを展開しようとして――思い留まる。

（駄目だ！　んな事したら、なのはの砲撃の的にしかなんねぇ！）

さすがになのはのバスターの直撃を受けては、自分の防御魔法といえど無事ではすまない。そう判断し、ヴィータはシューターをか

わす事に専念する。無論反撃も試みたのだが、その行動に入ろうとするとシューターが迎撃されにくるのだ。
　よって、ヴィータはしたくもない反撃をする事しか出来ず、狙った攻撃が出来ないでいた。しかし、なのはもなのはでそこまでだった。アクセル・シューターの高い誘導性を発揮するには、足を止める必要がある。つまり、他の行動が出来ない。

「……どうしようか？」

”このままでは、先にこちらが参ってしまいます”

「だね」

　アクセル・シューターの操作には、高い集中力が必要となる。そのため、なのはの神経は極度の緊張状態を強いられているのだ。今はそれが持続しているからいい。しかし、それが少しでも切れれば、或いは鈍ればヴィータの反撃を許す事となる。
　だが、このままではなのはの集中力が途切れる方が早い。故に、現状を打開する術を見出さねばならなかったのだ。

”勝負に出ましょう。エクセリオンを試してみるのです”

「……それしかないか」

　最大出力を出せるようにするエクセリオン。その力を更に発揮できるＡＣＳを使う事も視野に入れ、レイジングハートはそれの使用を提言した。なのはもその提案の理由を理解し、決意を固める。シューターの精密な制御を止め、なのははレイジングハートへ告げた。

「エクセリオンモード、ドライブ！」

”エクセリオンモード”

杖の形状をしていたレイジングハート。その形状が変わり、どこか槍にも似たような形になる。一方、ヴィータはやっとシューターとの追いかけっこから解放され、なのはへ視線を向けた。制御が甘くなったのを感じ取り、なのはへ反撃を試みたのだが、執拗に追い駆けてくるのでそちらを先に全て迎撃したのだ。おかげで少し時間を取られてしまったが。

「ったく、なのはの奴の厄介さは相変わらずだな。てか、あれ何だ……？」

そして、その手にしたレイジングハートが変形している事に気付き、嫌な予感を感じ取る。それに従い、なのはへ攻撃を仕掛けようと動く。だが、その瞬間ヴィータが知らない攻撃をなのはは放った。

「エクセリオン、バスタァァァァ！」

「んなっ？！」

従来のディバイン・バスターよりも強力な砲撃。それも、カートリッジさえ使わずに、だ。それにはヴィータも驚きを隠せない。慌てるようにかわすが、その際帽子が取れ、その閃光に飲まれて消えてしまう。

（嘘だろ……これにカートリッジまで使ったらどうなるってんだよ……）

その光景を見つめ、ヴィータは微かに恐怖と希望を感じる。今は

戦う相手だが、来たるべき時はこれが味方に変わるのだ。なら、今自分が抱いた恐怖は、その時の相手が抱く感情だ。

はやてがデザインし、自分の好きなのろいうさぎをあしらった騎士甲冑の帽子。それが無くなった事に対し、ヴィータはなのはの新しい力を感じてそういう感想を抱いた。

なのはも、ヴィータと同じく自分の放った魔法の威力に驚いていた。ディバイン・バスターの強化版程度にしか考えていなかった。しかし、実際見て理解した。もう、これは別物だと。体に対する負担はそう変わらないが、発射までに掛かる時間に対して威力が高いのだ。

更に、この状態からもう一つの形態にも変わる事が出来る。それを考え、なのはは改めて強化されたのだと実感した。そして、よりその使い方を考えなければならないとも。

（力に善悪はないんだもんね……）

この力が誰かを不幸にする事がないようにと、そうなのはは強く思い、視線をヴィータへ向ける。丁度ヴィータもなのはを見たようで、その視線がぶつかる。

「中々すげ～じゃね～か」

「うん。だから……勝たせてもらうね」

「言うじゃねぇか……やってみろ！」

”ラケーテンフォルム”

そう叫び、ヴィータはグラーフアイゼンを構える。そして、カー

トリッジが一つ排出された。それを見て、なのはも表情を厳しくする。そう、それはなのはも良く知るヴィータの攻撃方法の一つ。
変形させたグラーフアイゼンを使い、全身を独楽のように回転させて相手を襲うもの。その名は……

「ラケーテン！　シュラークっ！」

高速回転しながらなのはへ向っていくヴィータ。それになのはが選んだ方法は、防御魔法。ただし、普通の防御ではない。カートリッジを一つ使用した強化版。自身の売りである強固な防御魔法。それがどれ程変わるのかを知るいい機会だと判断したのだ。
なのはの展開したプロテクションに、ヴィータが激突する。その衝撃に耐えながら、なのははひたすらに待つ。そう、ヴィータの回転が弱まるのを。しかし、なのはの防御魔法にも少しずつだがひびが入り始める。

（まだ……まだ大丈夫っ！）

（くそっ！　かてぇ……）

徐々に回転が弱まっていくヴィータ。それに気付き、なのははレイジングハートへフラッシュ・ムーブを準備させる。そして……

「何っ!?」

自分を阻んでいた力が消え、ヴィータは予想していた感触がない事に気付いた。それは自分が防御魔法を打ち破ったのではない。なのはが敢えて消したと悟ったのだ。そして、視界の中には当然ながらなのはの姿はない。

「……上か！」

即座に反応し、ヴィータはその場から急いで離れる。

「逃がさない！」

”ディバイン・バスター”

そうはさせじとなのはが上空から放つ砲撃。それにヴィータは慌てる事無く対処した。

「アイゼンっ！」

”パンツァーヒンダネス”

ヴィータが展開したのは、強固な防御魔法。周囲を覆う事も出来るものだが、今回はそれを前面のみに出現させた。それになのはの砲撃が激突する。しかし、鉄槌の騎士は伊達ではない。

完全に防御に徹すればシグナムさえ勝てないと言わしめる強さがそこにある。なのはのバスターを受け止め、ヴィータは思う。本当に強くなったと。初めて訓練に付き合った際、ヴィータにとってなのはは、ただの魔力が多い魔導師でしかなかった。

それが、今やここまで自分と渡り合うようになっている。そう感じ取り、ヴィータは誰にも気付かれぬよう笑う。考えてみれば、誰かに物を教える事などした事がなかったのだ。初めての友にして、初めての教え子。そう考えてヴィータは思う。出会えて良かったと。

「……っ！　向こうは終わったみたいだな。……どうする？」

「そうだね……なら……」

バスターを耐え切り、ヴィータは視界の隅に映ったシグナム達の姿にそう問いかけた。なのはもそれに気付いたようで、意を決してヴィータを見つめる。

（残った中で、試してない手段はＡＣＳだけ。本番で使う前に、ここで試しておくのがいいよね……）

そう思い、なのはがレイジングハートへＡＣＳの使用を告げようしたその時だ。にわかに下が騒がしくなったのだ。それに二人が視線を向けると、はやての周囲を皆が囲んでいる。

「はやてっ！？」

それを見て、ヴィータが弾かれるように飛び出した。なのはもその様子から只事ではないと感じ、その後を追う。見れば、もうシグナムも向っている。

一体何が起きたのか分からぬまま、なのはは急いではやての傍へと向かうのだった……

シグナムとフェイトの決着が着き、なのはとヴィータにもそろそろ決着が訪れるだろうと、誰もがそれに注視していた矢先だった。はやての体を、あの発作が襲ったのだ。

苦しみ呻くはやて。それをシャマルが治療魔法を施し、何とか緩和しようとする。アーチャーははやての背中を優しく撫でるしか出来ないが、それでも励ますように声を掛けていた。

それを見て、士郎達もはやての傍へと駆け寄った。シャマルだけなく、リニスも治療魔法を使いそれを支え、ランサーは急場凌ぎではあるが癒しの効果をもたらす太陽のルーンを刻む。

はやての手をすずかとアリサがしっかりと握り、アリシアは泣きそうな顔ではやてへ励ましの声を掛けていた。ユーノも結界維持をアルフに託して、治療魔法を使い始める。それを黙って見つめるしか出来ない大人達。その表情は、一様に悔しさと無力感を出していた。

「……かなり楽になったわ。ほんまにおおきに」

そうしている間にヴィータ達もそこへ現れ、模擬戦は中止となった。そして、事情を知らぬ者は言うに及ばず、知っている者達でさえ説明を求めるような視線をアーチャーへ向けた。

「……まずは、今まで黙っていた事を謝罪する。全て、私の判断によるものだ。だから、全ての責任は私にある。本当に……すまなかった」

そう言ってアーチャーは全員へ頭を下げた。そして、頭をゆっくりと戻し、アーチャーは語る。リインの目覚めから今までの簡単な話と、はやての状態を。余命いくばくもない。そう聞いて、士郎達は言葉を失った。

九歳の少女が背負うには、あまりに残酷な話だと思ったからだ。しかし、それでも誰も絶望を抱かないのは、信じているから。

「既にリンディ達との連携を視野に入れた対策を講じている。だから、信じて欲しい」

アーチャーの締め括りの言葉に、全員が頷いた。そして、士郎達はなのはを見た。リイン達を助けるためには魔導師の力が必要。つまり、幼いなのはは本当に危険な戦場へと向かう事になると分かったからだ。

なのはもなのはで家族の視線の持つ意味に気付き、真剣な面持ちで頷いて見せた。決して無理はしない。絶対に無事に戻ってみせるからと、最後には笑顔さえ浮かべて。

「心配しないでください。私が必ず守り抜いてみせます」

「セイバー……」

「頼むな、セイバー」

桃子と士郎の言葉にセイバーは確かに頷いてみせ、恭也と美由希は、その力になれない事に微かな無力感を感じていた。その二人へ、ユーノは自分が二人の分までなのはを支えてみせると告げ、恭也からは軽く頭を叩かれ、美由希からは弱く頬を抓られた。

「「生意気言うな」」

そう言われるユーノ。だが、すぐに二人は笑みを見せて、ユーノへこう続けた。なのはを頼む、と。

こうして、はやての事を考慮した桃子は、シャマルにしばらくバイトを休むように告げた。その代わりにとリインが手伝いを申し出て、翠屋に新たな顔が加わる事になった。そして、そのまま解散となったのだが……

「……あのな、実はちょう言い難いんやけど……」

家路を行きながら、はやてがそう切り出した。それに全員が何事かと思い、視線を向ける。それを受け、はやては告げた。それは、先程の総動員での治療の事。

シャマルだけでなく、リニスにユーノまで魔法を使い、更にルーンまで使ってのもの。故に相当効くと思われていたのだが、はやては自分もそう思っていたと前置いて、こう言った。

――あの時はかなり言うたけど、何故か、初めてシャマルが魔法使うてくれた時とそこまで大差なかったんよ……

残された時間、それはもうあまりない。はやてから告げられた言葉が意味するのは、決戦の狼煙……

――――――

A-s十一話　前編

グレアムに呼び出され、クロノは彼の執務室にいた。その表情には、どこか険しさがある。悟っているのだ。自分が何故呼ばれたのかを。

「……提督」

「クロノ、まずは謝ろう。すまない」

「どういう事です？」

グレアムの謝罪にクロノは疑問を隠す事無く問い返す。それにグレアムは待機状態のデバイスを取り出し、クロノへ手渡す。それは、つい先程完成したばかりのデュランダルだ。

それを受け取り、クロノは余計に違和感を感じた。一体グレアムが何について謝罪したのか分からなかったからだ。グレアムもそんなクロノの気持ちが理解出来たのだろう。突然の謝罪の訳を話し出した。

それは、はやての容態の悪化による事から始まる話。そう、グレアムは碌なテストもしないでデュランダルの完成を急いだのだ。つまり、クロノは安全性を確保出来ていないデバイスを使う事になったという訳だ。

グレアムが聞いた話によると、問題はデュランダルの重要な部分。氷結魔法を使う際に不安が残っているらしい。余程制御を上手くしなければ、使用者諸共氷漬けにするのだ。それをクロノは聞いても、表情を変える事はなかった。

「……では、制御してみせればいいんですね」

「クロノ……」

「ご心配なく。僕は自惚れてやしません。昔から魔力変換の技術は嫌になるぐらい練習しています。氷結は得意ではないですが、それでもやってのける自信はあります」

心配そうなグレアムを安心させるように、クロノはそう力強く断言してみせる。その声に不安も恐れもないのを感じ取り、グレアムも小さく頷いた。そして、その場でクロノは聞かされる。アースラに地球への調査任務が言い渡される頃だと。

アーチャーからの要望で出来る限り早めに行動を開始したいと言われたため、グレアムとリンディはデュランダルの完成を以って動く事にしていたのだ。クロノはアーチャーが焦っているように思え、事態が切迫している事を改めて感じていた。

「リーゼ達もそのままアースラに同行させる。頼むぞ、クロノ」

「はい。必ず、闇の書の悲劇を終わらせてみせます」

敬礼し、退出するクロノ。それを見送り、グレアムは心から願う。

（クライド、クロノ達を守ってくれ……）

決戦の夜　前編

コンビ戦から僅か三日。しかし、アーチャーはもう動く事にした。リンディ達の状況を聞き、既にいつでもアースラは動けるようになっている。ならば、もう迷う必要はなかった。九月も残すところ後数日。可能ならば、今月中にもけりをつけたかったのだ。

はやての容態は、あれ以降悪化する事はなかったが、その苦しみは見ている者の心を痛めていた。朝だけだった発作が昼、夜と必ず出るようになり、その度にシャマルが懸命に治療魔法を使う。ランサーに頼み、はやての部屋に太陽のルーンを刻んでもらい、痛みを軽減出来るようにしたが、それでもやはりはやての痛みを無くす事は出来なかった。

今、八神家にはサーヴァント達が集合していた。プレシアとリニスもいる。今夜、ついに闇の書を完成させる事となっているためだ。

「リンディさんから連絡があったわ。夕方には来るはずよ」

「そうしたら、アーチャーが事情を話して……」

「エイミィから蒐集、ですか。クロノをちゃんと納得させてくださいね、アーチャー」

ランサーの言葉を継いで、ライダーがそう視線を向けて告げた。それにアーチャーは無言で頷いてみせる。

「それで、どうするのだ？　闇の書が完成すれば、しばらく我らは手出し出来ぬ」

「アリサとスズカの事はどうします？　ミユキとキョウヤが二人の護衛ぐらいはやらせて欲しいと言っていますが」

「アリシアも同じような事を言い出したので、私が纏めて守るつもりです。でも、美由希さんと恭也さんも居てくれた方がいいですね。いざとなって逃げ出す時、お二人を運んでもらえますから」

セイバーの言葉にはリニスが答えた。それにセイバーは頷き、そう伝えておくと返す。小次郎の問いかけに関しては、前もって決めていた通り、なのは達魔導師達が対処し、サーヴァント達は援護に回る。魔力ダメージを蓄積し、はやてとリインがプログラムへの修正などを終えたところで、大きな一撃を加えて動きを止める。

そして、はやてによって防衛プログラムを排除した瞬間から、サーヴァント達を中心に総攻撃。バグの本体とも言える核をアーチャーがとどめを刺して終了。口で言うのは簡単だが、実際はどうなるか分からない。そのため、誰もその話に対して楽観的な事は言わない。

それでも、誰も絶望などは抱かない。抱く必要はないからだ。自分達がいる。それだけで、決して負ける事はないと信じているのだから。自分一人ならば、不安は尽きないだろう戦い。しかし、ここには自分以外のサーヴァントが四人もいる。それがどれ程心強いか誰よりも知っているのは、他ならぬ彼ら自身だ。

（空中戦はあまり得意ではないですが、アーチャーとライダーがいれば……）

（ま、基本はアーチャーとライダーに任せるか。いざとなりゃ、フェイト達の魔法で出来る魔法陣を足場にしてでも……）

（弓兵の本領発揮、か。やれやれ、本来ならば遠距離からが基本なのだがな。護衛に期待するとしよう……）

（あの仔を召喚するのは早い方がいいでしょうか。背に私以外を乗せてくれれば、アサシンを戦力に出来たのですが……）

（この中で空の敵に対処出来ぬのは私だけか。ふむ……では、アーチャーの守りでもするとしよう）

互いに自分の状況を確認し、自分のやるべき事を理解する。本来ならば有り得ない共同戦線。異なるクラスのサーヴァント達。それが力を合わせて事に当たる。それを思い返し、五人は苦笑。

そう、不謹慎ながらも心が躍ってしまったのだ。それと同時に、それが出来る事を喜んでしまったのもある。余裕があるものだと、五人は揃って感じていた。逆を言えば、五人で力を合わせなければならないとも言えるにも関らず、それに不安ではなく嬉しさを感じている自分達。それに、思わず苦笑いしてしまったのだ。

「……本当に凄いわね」

そんな五人を見てプレシアがぽつりと呟く。

「何がですか？　プレシア」

「この状況でもまったく気負いしてない事が、よ」

リニスの問いかけにプレシアはそう微笑みを見せて答える。視線の先では、セイバー達五人が揃って苦笑しながら、様々な事を打ち合わせている。そこには、緊張感も緊迫感も不安感も一切ない。

あるのは、まるでこれからどこに出かけようかと話し合う友人達のような雰囲気だ。それを見て、リニスもプレシアと同じく笑みを浮かべる。どこか消え切らない不安。それを忘れさせるような光景。

その安心感に、二人は確信する。何があっても大丈夫だろうと。

【リニス……】

【なんですか？】

突然の念話にリニスは少し不思議に思うも、問い返す。それに、プレシアは噛み締めるように告げた。

【勝つわよ、今回も。奇跡を掴んで……ね】

【……はい】

不可能を可能に変える存在。その事を誰よりも知る二人だからこそ、その想いは誰よりも強い。奇跡を掴む。それがセイバー達には出来ると心から信じながら……

セイバー達がリビングで様々な打ち合わせをしている頃、はやては自室でシャマルとリインの二人を交えて雑談をしていた。内容は、新年の旅行の事だ。アリシアと話し合って出た意見。それを教え、二人の意見を得ようと思ったからだ。

しかし、その裏には不安が付き纏う現在を乗り切るために、未来の事を強く思っておきたいという考えもある。それを理解しているのだろう。二人もはやての意見へ積極的に意見を述べていた。

「雪山のホテルで大勢で夜明かしかぁ……いいわね、それ」

「やろ？」

「私は、恭也と碁を打ちたいです。聞けばノエルも碁を打つとか」

「あ～、将棋とかもやってくれるやろな」

出来たらいいなどとは一切言わない。当然だ。それは全員で参加するのが当たり前なのだから。誰一人欠ける事無く新しい年を迎える。それはもう、はやて達の中では決定事項なのだ。未来は未定のものだが、今回に限ってはそうではない。

未来は一つなのだ。少なくても八神家の者達の中では。はやては死なず、守護騎士達は残り、リインも無事。それだけが真実になる。その未来しか、彼らにはないのだから。

「でも、出来るならお布団で寝たいかも」

「普段と違う方が旅行のような気がするからか？」

シャマルの言葉からリインが予想した事はどうやら当たりらしく、シャマルは笑みを浮かべて頷いた。いつもはベッドなので、出来れば布団で寝たい。その理由は、やはり違いが欲しいからなのだと、シャマルは楽しそうに告げた。

その言っている事が分からないはやてではない。同意するように頷き、確かに布団で寝るのは悪くないと言い出した。リインだけは未だに布団で寝た事がないため、二人の言う事がどこか理解出来なかったが、それでも雰囲気だけは伝わったようで、何度も頷いていた。

「……となると」

「やっぱりあそこかしら……？」

そこまで話してはやてとシャマルの視線が交錯する。一人、リインだけはそれに疑問しか感じない。

「「海鳴温泉！」」

「……温泉？」

はやてはもう二度も。シャマルは一度夏に行っている場所。リインはその説明を聞き、思い出したように手を打った。はやて達から何度か聞いた思い出話の一つ。それと思い二人へ尋ねると、はやてとシャマルがそれだと答えてリインは少し嬉しそうに頷いた。

そして、三人はそこから思い出話と共に温泉の事を話し出す。そして、語られるはやての所業の数々。リインがそれに苦笑してみせれば、シャマルが笑い事じゃなかったと軽く拗ねて返し、はやてが今度はリインも犠牲にしてやると笑って告げた。そんな和やかな時間を過ごし、三人はそれぞれに思う。

（やっぱ、こういう時間はええな。……絶対、無くしたりせえへん！）

（来年かぁ……迎えてみせるわ、みんなで！）

（主には困ったものだ。ふふっ……困ってみたいな。いや、困ってもいい。私も、今度は主達と共に……）

高町家　リビング。そこでは、セイバーを除く高町家の者達が勢揃いしていた。勿論、今夜行なわれる闇の書との決戦について話し

合うためである。学校は休んで、全てを決戦に合わせていた。
　士郎と桃子は翠屋の営業を半日だけにして、早々に切り上げてきたのだ。恭也と美由希もそれぞれ学業を休み、疲れが残らない程度にユーノとの鍛錬をしていた。なのははそれを眺め、ユーノの動きや行動を改めて把握していた。

　今回の戦いで、ユーノはなのはの護衛をする一人。セイバーとユーノが前衛として攻撃と防御を分担する事になっていたのだ。
　それは、かつてジュエルシードを封印し始めた頃の戦い方。何せ、三人してそれを決めた時に、その事を思い出して懐かしく思ったぐらいだったのだから。

「……そうか。やはり無理か」

「はい。父さん達は空を飛べませんし、何より非殺傷が出来ないですから。それに……」

「いいよ。はっきり言ってユーノ。あたし達は、むしろ邪魔でしかない……だよね？」

　美由希の言葉にユーノは躊躇う事無く頷いてみせた。それは、躊躇えば余計に士郎達に失礼だと思ったからだ。下手な同情や気遣いは不要。家族であるのなら、本心で話して欲しい。そう考えてくれるだろうと思ったから。
　そんなユーノの気持ちを察してか、恭也達は悔しさよりも納得の色が強かった。桃子は、士郎達が戦場に行かなくて済む事に安堵したものの、なのはとユーノ、セイバーがそこへ行く事を思い出したのか、複雑な表情を浮かべた。

「……母さん、心配はいらないよ。なのはもユーノも自分の身は守

れるぐらいには強くなった。それに、なのは達にはセイバーが、アーチャーさん達がいる」

「そう、ね。そうだったわ」

士郎が手を握りながらそう告げると、桃子もそれに柔らかく笑みを浮かべ、なのはとユーノへ視線を移す。それに二人も力強く頷いてみせ、笑顔を返す。それに全員が笑みを見せて、穏やかな空気が流れる。

士郎も恭也も美由希も、内心では傍で守ってやりたい。だが、それがかえってなのは達の負担になると分かっている以上、それは出来ない。そんな悔しさと無力感を感じるが、それを自分達よりも感じる者がいる事を三人は知っている。だから、それを口にしない。

それは桃子。戦う力など持たず、ただ無事を祈って送り出す事しか最初から選べない存在。その心境は如何ばかりだろう。愛する娘と息子。それを危険だと分かっている場所に送り出し、いざとなっても助ける事が出来ない。

母親として、その心はどれ程辛いか。想像が容易なだけに、三人は自分達の事は言い出す事はしなかった。それに、桃子とは違う意味で同じように、自分達よりも悔しさを抱いている者がいる事も薄々だが気付いている。

（ユーノも……辛いよね）

（なのはを守るしか出来ない、か。男としては、代わりに戦ってやりたいだろうな……）

（……しかし、守る事もまた戦いだ。きっと、ユーノはそれを理解している。それでも、出来る事なら自分が……と、そう思うのが、

男だからな）

三人は互いにユーノの気持ちを推し量り、そう結論付けた。それを知ってか知らずか、ユーノとなのはは互いに今夜の事を相談し合っていた。なのはは、バグとの戦いまではエクセリオンを温存しようと思っていた。

その理由。それは、エクセリオンの危険性。最大出力を出すという事は、レイジングハートと自分に負担が多く掛かる事を意味する。ならば、それは短期決戦時に解放するべきだと。ユーノもそれに賛成はした。だが、条件を出した。それは、状況が切迫した場合には限定的に解除し、エクセリオンを使う事。

常に使い続けるのではなく、必要な場合のみ使用して危機を乗り切る。そういう判断も必要だとユーノは告げた。それになのはも頷き、負担を掛ける事を避け続けるのではなく、状況に応じてちゃんと判断すると心に決める。

そんな二人の会話を聞きながら、士郎達は小さく安堵の表情を浮かべた。やはりユーノは、なのはの見えない場所を見てくれていると思ったからだ。なのはは意外と視野が狭い。広く見ているつもりでも、気が付くと一点しか見ていない事が多々ある。それをユーノがきちんと指摘し、支え合っているのだ。

「……じゃ、ユーノ君達が基本相手の攻撃を防いでくれるから……」

「その隙を狙ってなのはが攻撃。セイバーには、相手の動きを制限してもらうように動いてもらうつもりだから」

「あ、それでも防げなかったりしたのをユーノ君が？」

「そういう事。僕は、なのはの盾になるよ。出来るなら、剣にもな

りたかったけど、ね」

そう苦笑しながら告げるユーノ。その言葉に、なのははある言葉を思い出す。それは、忘れもしないあの夜の事。セイバーが自分へ告げた誓いの言葉。

――――私は、なのはの剣にもなります。そして盾にもなります。

（ユーノ君、セイバーと同じ事を思ってくれたんだ……）

そう思った瞬間、なのはは微かに胸が高鳴った気がした。何故かは分からない。でも、確かになのはは心が躍った。ユーノが自分を守り、戦いたいと思ってくれている。それを知っただけで。

セイバーは自分を守る姉や友達のようになってくれた。ならば、ユーノは何になるのだろうか。そう考えて、なのはの頭に浮かぶものは無かった。似ている存在がない。家族と言えばそうなのかもしれない。だが、何かが違う。それが何かはやはり分からないが、それでもなのはは構わなかった。そう、何故なら……

（何だろう？　すごく心が暖かいな……うん、何も怖くない感じだよ。あれ？　何か似たような事が……）

そして、思い出す。ジュエルシードを使った儀式の際、不安を抱いた自分。それを落ち着けてくれたのもユーノだった事を。

（……そっか。私、ユーノ君にいつも大事な時は励ましてもらってたんだね）

（なのは、どうしたんだろ？　さっきから嬉しそうに笑ってるけど……？　まぁ、いいか）

突然自分を見て笑顔を見せるなのは。それにユーノは不思議そうな表情を返す。だが、すぐにそれに同じく笑みを浮かべた。しかし、そんな二人を見ていた桃子と美由希は気付いた。なのはの視線が、先程と微かに変わった事に。それは、共に愛する男を持つからこそ分かるもの。

だから、二人はどこか嬉しそうに笑みを見せる。それに士郎と恭也はその視線の先に気付くも、どこか苦笑して何も言わない。そんな周囲の暖かい視線を受け、二人は互いに笑みを見せ合う。

――絶対勝とうね、ユーノ君！

――うん。絶対勝とう……みんなで！

フェイトはアルフと共に海浜公園でシグナムとザフィーラと話していた。話題は決戦の事――ではなく、クリスマスの事についてだった。

「冬には、そんな催しがあるのか」

「そうなんだ。私もなのはに聞いただけなんだけど、とても楽しいんだって」

シグナムの少し意外そうな声に、フェイトは楽しそうに言葉を返す。それを聞き、アルフが更に付け加えた。

「後ね、子供にプレゼントくれるじいさんもいるらしいよ」

「……どういう事だ？」

「えっとね……美由希が言うには……」

ザフィーラの疑問を晴らすべく、アルフは聞いた知識を披露する。二十四日の夜、闇に紛れて赤い服を着た老人が、世界中の子供達にプレゼントを配っていく。そんな言い伝えが地球にはある。そう言うと、三人は揃って感心した。

善意で世界中の子供へ贈り物をする存在。そんな話があり、しかもそれを信じる者達がいる事にだ。どう考えても夢物語でしかない。それでも、確かにその話には夢がある。それに、美由希はプレゼントを貰えるのは良い子だけと言っていたのだから。

「……教訓めいた言い伝えだな」

「良い子にしてなきゃあげないよって事？」

「おそらく、な。いや、だが……」

苦笑するようにザフィーラが言えば、フェイトはどこか残念そうにそう問いかけた。だが、シグナムはそれを肯定しておきながら、どこか神妙そうな表情で考え出す。そして、こう告げた。

――もしや、その老人は魔導師では？

その言葉にフェイトがはっとなる。転送魔法を使えば、確かに一晩で世界中を移動する事は可能だからだ。それに、ここにはなのはのように凄まじい魔力を持った者もいる。であれば、その老人もそんな存在だったとしてもおかしくない。

そんな結論を笑うような事が出来る者はいなかった。それは、ザ

フィーラもアルフも気付いていたからだ。シグナムがそんな事を言い出した理由。それは、フェイトの事を考えての事。

今もシグナムの発言から、赤い服の老人――サンタクロースを実在の存在と思い、色々と想像しながらぶつぶつと呟いているのだから。

そんなフェイトを微笑ましく見つめる三人。その空気は、この数時間後に世界の命運を賭けた戦いをするとは思えない程静かだ。

（クリスマスか……。冬を迎え、新しい年を迎える事が出来るか否かが今夜決まる）

（主のため、家族のため、そして親しき者達のためにも……この戦い、負けられん！）

騎士と守護獣が思いを新たにしている隣で、アルフも思いを新たにしていた。

（フェイト達の笑顔を守る事。それがアタシの役目。家族として、絶対に守り抜くからね！）

そして、フェイトもそんな三人と同じように、今夜に対する気持ちを固めていた。気付いていたのだ。シグナム達が、今は戦いの事を考える事がないようにとしてくれた事に。だから、フェイトはそれに感謝してサンタの事を考える事が出来たのだから。

故に、その事に関する感謝を含めて心で告げる。

（シグナム、ザフィーラ、アルフ。三人共ありがとう。私、頑張るね。今夜、絶対みんなではやてとリインを助けて、クリスマスを迎えよう。絶対にっ！）

フェイトはそう誓い、三人へ笑顔を向けた。それに三人も微笑みを返す。フェイトが、クリスマスが楽しみだと告げると、それぞれがそれに頷いてみせる。考えるは、今夜の事を乗り越えた先。決して立ち止まらないと、そう心に誓って……

「今夜、かぁ……」

「そうだね」

月村家の客間。そこでアリサとすずかは、どこか緊張した面持ちで紅茶を飲んでいた。学校は休んだ。アリサの方は鮫島に気迫で頼み、すずかは忍が二つ返事で了承した。今夜、ついに闇の書を完成させる。そう聞いたのは、昨夜の事。

プレシアとリンディの話し合いが決まって、すぐにアーチャー達へそれが伝えられたのだ。しかし、小次郎は生憎携帯を所持していなかったため、アリサがそれを伝える役目を負ったのだから。

「一応、私達にはファリンとイレインが傍にいてくれるって」

「あ～、そっか。確かに並のボディーガードよりも安心ね」

そう、すずかの決意を聞き、ノエル達三人も護衛を名乗り出た。しかし、忍がノエルを除外してファリンとイレインだけにした。その理由は、忍も観戦するため。恭也や美由希が黙っているとは思えない。そう言ったのだ。

そのため、忍は屋敷から移動して、結界内で公園が見えるぎりぎりの場所へ行く事にしていた。危険だからとライダーも止めたのだ

が、すずかがよくて何故自分が駄目なのかと言われれば、ライダーも引き下がるを得なかった。結局、忍も嫌だったのだ。知り合いが命がけで戦う事を知った以上、自分だけ安全にのほほんとしていられないと。

「……どうしたの？」

「ライダーからメール。えっと……」

すずかがポケットから携帯を取り出した。そのメールの送信相手にどこか意外そうな印象を受けるアリサだったが、その内容を聞いてすずかと二人で笑顔を浮かべる。

それは、恭也と美由希が護衛についてくれるというもの。しかも、アリシアも同じように戦いを見届けると言ったため、リニスが防御魔法役として傍についてくれる事になったという。それを知り、驚きと共に嬉しさがこみ上げる二人。

すずかは、忍へ早速とばかりに恭也の事を教えるため、その内容を一部コピーして送信する。アリサは、美由希の護衛を聞いて喜びを噛み締めていた。小次郎が好きな者同士、仲良くしようとは言っていた。だが、まさか命がけの戦場へ来るとは思わなかったのだ。

それが自分を守るためだとなれば、余計に。姉のようだと思っていた相手。それが、本当に姉みたいな行動をしてくれる事に、アリサは心が暖かくなるのを感じた。

「……すずか」

「何？」

「アタシ達、恵まれてるわね……」

それが、生まれではなく状況だと悟り、すずかはゆっくりと頷いた。そう、恵まれている。異なる種族である事に理解を示してくれた友人達。まるで自分達の家族のように接してくれる多くの大人達。そして、奇跡としか言えない絆を作ってくれたサーヴァント達。

これを恵まれていると言わずして、何を恵まれていると言おう。出会いは、全て奇跡に繋がっていたのだから。すずかはライダーとの、アリサは小次郎との出会いから全てが変わり出した。親友と呼べる相手を得たのも、あの夜の出会いがあればこそ。

そう思い返し、二人は強く願う。はやての無事を。リインの無事を。そして、愛する家族と友人達の無事を。

（はやてちゃんを、そしてなのはちゃん達を守って……ライダー！）

（アタシの代わりになのは達を守るって言ったんだから、絶対守り抜きなさいよ、小次郎！）

決戦まで後僅か。数時間後には、この海鳴を舞台に大決戦が行なわれる。それを考えても、二人には不思議と恐怖はない。思い出すのは、あの時の庭園での絶対的な安心感のみ。故に笑う。これが終わった後の事を考えて。

全員できっと苦笑しながら語り合うのだ。あの時は大変だったと。アリシアの目覚めの時のように。心から懐かしむように……

テスタロッサ家　フェイトとアリシアの部屋。そこでアリシアはヴィータと遊んでいた。留守番をしていたアリシア達だったが、シグナム達がフェイトを簡単な稽古に誘い、残ったアリシアの相手を

ヴィータがする事になったためだ。
そんな二人がやっているのはジェンガ。崩した方が負けの単純な積み木ゲーム。集中力と決断力、そしてある種の運が必要になるこれを、二人はもう三回もやっていた。
最初こそアリシアが優勢だったのだが、時間が経つ毎にその勢いが無くなり、今はヴィータが二勝と勝っていた。アリシアはそれでも何とか食いつこうと頑張っている。

「……っと、どうだ」

「む～……えいっ……やった！」

「やるじゃね～か」

自分は吟味しての成功に対し、アリシアは直感で成功を掴んでみせた。それにヴィータは感心するように頷いて、その思い切りの良さに心地良いものを感じていた。

「じゃ、あたしは……これ……は駄目だな」

「今、すごいグラグラしたよ」

いけそうだと踏んだ場所が予想に反して固く、ヴィータは諦めた。それにアリシアが少しドキドキしたようで、緊張気味にそう告げる。それにヴィータも頷いて、違う場所を考え出す。それを見つめ、アリシアがぽつりと呟いた。

――ヴィータは勝てると思う？

それが何を言っているのか、ヴィータには一瞬理解出来なかった。

だが、アリシアの表情からそれが今夜の事を指していると気付き、アリシアの頭に手を置いて告げた。

――ああ、勝てるさ……

その優しい笑みを見て、アリシアは嬉しそうに頷く。ヴィータもそれに応じるように笑顔を返す。そして、その後も二人はゲームを続ける。結果は、互いに二勝二敗の引き分け。その後はアリシアがはやてと話した旅行の話をして過ごした。

そんな話を聞きながらヴィータは思う。なのは以外にも友人がいたと。それはアリシア。魔導師でも何でもない存在。それが自分とここまで仲良くなった事を考え、ヴィータは不思議な縁を感じていた。

（アリシアも……アーチャー達がいなけりゃ、こうしてあたしと話してないんだよな……）

簡単だが聞いたアリシアに関わる話。それを思い返し、ヴィータは強く思う。決して偶然ではないのだと。自分とアリシアが出会ったのも、アーチャー達がはやて達と出会った事も、全て今夜の戦いを乗り越えるためにあったのだと。

（絶対負けねぇ。あたし達は、必ず勝って旅行に行くんだ！　リインと一緒にっ！）

最悪の結末などを振り切るように、ヴィータはそう自分に言い聞かせる。こうして、それぞれが決意を固める。そして……

アースラ艦内　艦長室。そこにエイミィとクロノは呼び出されていた。視線の先にはどこか険しい表情のリンディがいる。そして、そんなリンディに対する二人の表情も険しい。今、リンディの口から今回の作戦を聞かされたところだったのだ。

そして、一番の問題となり得るだろう箇所。それをこれからリンディは言おうとしていた。そう、それは……

「……完成は、私達が到着後に行なわれます」

「それで、そのための蒐集相手はどうするんですか。まさか、僕と言う訳ではないですよね？」

「それとも、残りが少ないからってアルフ達からじゃないですよね？」

クロノとエイミィの半信半疑の声に、リンディは静かに首を横に振った。そうではないと。それに二人は納得はしたが、ではどう完成させるのだろうと疑問を感じた。

「海鳴に着けば、きっとアーチャーさんから説明があると思うわ。詳しい話はそこで二人が聞きなさい」

リンディのその雰囲気から、二人は何かに気付く。それは、リンディの声には若干ではあるが申し訳なさがある事。それに気付いた二人は、その理由を考え、同じタイミングで互いへ視線を向けた。

――まさか……

――最後の蒐集相手って……

そう告げ合う二人に、リンディは小さく頷いて答えた。

――――貴女よ、エイミィ……

――――――

A' s十一話　後編

異様な雰囲気に包まれる月村家の中庭。そこには、アーチャー達だけではなくリンディ達アースラ組の姿もあった。だが、この緊張感を醸し出しているのは、クロノとアーチャーだ。互いに視線を逸らす事もせず、黙って見つめ合っているのだから。

本来なら今は、海鳴へやってきたリンディ達を交えた最後の打ち合わせのはずだった。だが、クロノの質問がこのキッカケを作ったのだ。

――エイミィから蒐集するというのは、いつ決めたのか教えてくれるか。

それになのは達、事情を知らなかった者達は驚きを見せ、セイバー達、知っていた者達はやはりと納得していた。アーチャーはそれにあっさりと答えた。それは、プレシア達から蒐集した時だと。

同意さえ得られるのなら、蒐集行為自体は犯罪にはならない。そう知った時、蒐集出来る者の中にエイミィがいた。そして、なのはやフェイトからの蒐集をする事になった時、残りの事を考えて蒐集相手を選定した際、戦闘能力をほとんど持たないエイミィを最後の相手にする事を思いついたのだ。

「……危険はない。残り頁は一頁。それでも、君が心配するのは無理もないかもしれないな」

「どういう意味だ？」

アーチャーの言い方にいつもの雰囲気が感じられず、クロノはそう尋ねた。それにアーチャーはどこか穏やかな表情を浮かべ、ちら

りとエイミィへ視線をやって、告げた。

「何、男ならば誰しも女性を守りたいと考えるものではないかと、そう思っただけだ」

「……そうか。確かにそうかもしれない。僕はエイミィに少しでも危険な事をさせたくないんだろうな」

「……ありがとクロノ君。でも、あたしは構わないよ。むしろ、望むところだね。管制には魔力は関係ないし、最後の決め手って何か凄い気がするしね」

神妙な声でそう答えたクロノ。それを聞いて、エイミィがやや嬉しそうにそう返す。クロノもそれに視線を向け、呆れながらも確かにと頷いてみせた。それを見守っていたリンディやリーゼ姉妹は、クロノとエイミィの雰囲気から何かを悟って軽く驚きをみせた。

なのははそんな二人の雰囲気に何故か恭也と忍を思い出し、不思議そうに首を傾げた。恋人同士である恭也と忍と、クロノとエイミィを重ね合わせる要素はないように思ったからだ。自分が抱いた感覚に疑問を拭えない。でも、クロノとエイミィの穏やかな雰囲気は見ていて心安らぐものだった。

こうして、予想に反して、クロノはエイミィへの蒐集について納得した。しかし、それは当然でもあった。ユーノが抱いた気持ち。それは、彼がなのはへ好意を抱いているだけではなく、自身への無力感もあったためなのだから。

クロノは自身への無力感などはない。エイミィへの好意があるから納得出来ないのではない。むしろ、好意を抱いているからこそ納得したのだ。エイミィが希望し、歩く道。それを尊重し、手助けする。そんな風にさえ考える事が出来たのだから。

「……じゃ、もういいかな。私達の自己紹介だけしておくわね」

「あたしはリーゼロッテ。こっちは双子の姉でリーゼアリア。クロ助の昔の先生ってとこ」

そして、アリアが簡単に説明を始めた。自分達はクロノ達と共に、闇の書の悲劇を終わらせるために手助けにきたのだと。その理由と事情を聞き、それにアーチャーやリインといった二人を知っている者達はともかく、知らない物達は納得した。

しかし、はやてだけはその二人が話したお父様の事に引っかかる物を覚えた。そう、プレシアが言った「グレアム提督の計らいに感謝ね」との言葉を聞いたからだ。その名が、自分を昔から援助してくれている足長おじさんと同じ響きだったからだ。

（偶然かな。ま、外国の名前やし、こっちでいうとこの鈴木とかみたいなもんかもしれんな）

そもそもミッドと地球の違いがある。そう思い、はやてはそれ以上考えるのを止めた。今はそれよりも頼もしい味方が増えたと喜ぶべきだと、そう考えたのだ。そして、リンディ達はすずかやアリサなどが観戦する事を聞き、さすがに止めようとした。しかし、それに対してすずか達が毅然と自分の決意と覚悟を告げ、尚且つ観戦する場所は戦場から距離を離し、恭也達が護衛について万が一の際は撤退する事も視野に入れていると告げると、リンディ達ももう何も言わなかった。

最後に、完成させる場所を決めた。それは、町外れの高台。そこからリインがシャマルの旅の鏡を使用し、アースラ内のエイミィから蒐集をする。そして、それからなのは達魔導師達と守護騎士達を

中心に防衛プログラムを攻撃。はやてとリインが作業を終えたとの報告をし、それを合図に強力な一撃を加えて完全に動きを止める。
そして、リインが防衛プログラムを排除し、最終決戦となる。その戦いで重要なのは、とどめをアーチャーに刺させる必要があるという事。そのため、防衛プログラムの核をシャマルが抜き取り、それを転送魔法でアーチャーの前に運ばせる。その流れを確認し、全員がもう一度それぞれの役割を確かめ、頷きあった。

「……では、準備に入りましょう」

リンディの声に全員が頷いて動き出す。闇の書と呼ばれた悲劇の魔導書。その悲しみと憎しみに終止符を打つために……

決戦の夜　後編

町外れの高台。そこが見える場所など、数える程しかない。その内の一つである霊園にすずか達の姿があった。恭也と美由希、忍もそこにはいる。ノエルにファリン、イレインも一緒だ。アリシアはリニスの傍に寄り添うように立っている。
実はリンディからアースラから観戦する事も出来ると言われたのだが、それをすずかとアリサ、アリシアは断った。理由は簡単。何かの影響で見れなくなる可能性があったからだ。何せ相手はロストロギアと呼ばれる失われた技術の遺産。しかも、闇の書はその中でも有名なものだ。故に何が起きてもおかしくない。
そう結論を出して、すずか達はこうして自分達の目で見る事を選

んだのだ。すずかの隣にはアリサが立っていて、反対にはイレインが立っている。そんなアリサの隣には美由希が立っている。ノエルは忍の後ろに控えるように立っていて、ファリンはすずかの後ろに立っている。

恭也は忍と寄り添うように佇み、その視線を高台へと向けている。それは、その場にいる全員が同じだった。士郎と桃子はリンディの配慮でモニターで観戦している。自分達の子供が戦うのだ。それを見守る事ぐらいはしたいだろうと、そうリンディは考えたのだ。

「……いよいよだね」

「そうね」

「みんな、頑張れ～っ！」

声よ届けとばかりに叫ぶアリシア。それにその場にいる者達が小さく微笑み、高台に向けていた視線をアリシアへと向けた。

「可愛いわね、アリシアちゃん」

「そうだな。フェイトちゃんのお姉さんとは思えないぐらいだ」

「恭也様、それは少しいかがなものかと」

そんな風に話す三人。その表情は柔らかく笑みを浮かべている。どこか場違いなのかもしれない。だが、それをおかしいとは誰も思わない。こんな風に話す事が出来るのは、信頼する者達が戦うからだ。

絶対に誰も犠牲にならずに戦いを終わらせてくれるだろう存在。それを知っているからこそ、恭也も忍もノエルも不安はないのだか

ら。

「……戦闘機人なんて呼ばれてるのに、こういう時に役立てないなんてな」

「イレイン、そんな事を言っちゃ駄目ですよ。役に立ってない人なんていないです。みんながいるから今があるんです！」

「そうですよ。誰一人欠けても、この戦いはいけないのです。それは、私達も同じですよ」

「信じて見守る事もまた戦い。そういう考え方もあるんだよ。だから……」

悔しそうに呟くイレインへ、ファリンとリニスが諭すように告げた。更に美由希が告げた見守る事もまた戦いとの言葉。それにイレインは何かに気付き、視線を高台へ向けて呟いた。

――私達も一緒になって戦ってる……そういう事か。

それに美由希とリニスが頷き、ファリンが笑顔を見せる。そして、そんな中ついに完成の時がやってくるのだった……

円陣を組むように散っているなのは達。その中心にいるのは当然はやてとリイン。なのははユーノとセイバーの後ろに控え、フェイトはランサーとアルフと隣り合うように。ライダーはザフィーラと共に。小次郎はヴィータと。そしてシグナムはアーチャーの前方に立っている。

プレシアとリンディは円から離れるような場所に位置していて、クロノはロッテと一緒になり、いつでも切り込めるような位置取りだ。アリアはシャマルと共にプレシア達の守りと全体の支援役を担う事になっている。

「……やるぞ」

リインの声に全員が頷きを返し、それを見て魔法により、アースラにいるエイミィから蒐集が開始される。そして、残り一頁が即座に埋まり、リインとはやての周囲に魔法陣が出現する。それに飲み込まれるように消えるはやてとリイン。だが、それもほんの一瞬だった。次の瞬間には、リインとそっくりな外見の存在がいたのだ。

きっと、何の知識もなくそれを見たのなら、なのは達は攻撃を躊躇っただろう。しかし、それが外見だけを模した恐ろしい存在と知っている以上、誰もそれに対し躊躇いはない。

「詠唱の暇を与えないように、絶え間なく攻撃を！」

ユーノが告げた言葉に全員が頷くように動き出す。それを迎え撃つように放たれる魔力弾。それは、プラズマ・ランサーだ。それを全員が思い思いに回避や防御などをして、攻撃するために動く。

そう、彼らが一番恐れているのはプレシアの使える広範囲魔法などの大魔法。しかし、そういう魔法の使用には詠唱が必要となる。それを知るユーノの指摘は、実に的確だった。

そして、まず届いたのは小次郎を初めとする接近戦を主とする者達。その攻撃が防衛プログラムを襲う。しかし、それが届く前にその体が空高く飛び上がる。しかし、それを予測していたように桃色と金色の魔力光が襲う。

更に紅い魔力光を纏った鉄球がそれに続き、防衛プログラムへ殺

到する。それを展開した防御魔法が完全に無力化した。それを見てリンディが苦い顔をする。そう、それは彼女の防御魔法だったのだから。

それでも動きを止めた瞬間を見逃さず、セイバーとランサーが空高く跳び上がる。剣が、槍が防衛プログラムを捉える。しかし、それを防衛プログラムは受け止めるのではなく、更に高度を上げる事でかわす。それを予想していたシグナムがその頭上から斬りかかる。

その動きと連動するようにクロノのスティンガースナイプが放たれる。防衛プログラムはそれを転送魔法を使って回避してみせた。それに全員が驚愕の表情を浮かべるが、エイミィが即座に出現位置を特定し、全員へ告げた。だが、どうもその様子を見たのか、続く声に動揺が見えた。

『まずいよ！　結界を突破しようとしてる！』

「……見えた。任せろ。こちらを倒さず、そんな事が出来るなどと思うな！」

アーチャーはそう告げて、投影した弓と矢を引き絞り、狙いを付ける。

「喰らい付け、赤原猟犬（フルンディング）」

真名解放と共に放たれる矢。それは、まさに獲物を追い駆ける猟犬の如く防衛プログラムへ向かった。そして、それを追うように全員が動き出す。このままでは、結界を突破されてしまう。もしくは詠唱を開始し、完了されてしまうかもしれない。故に、アーチャーの放った攻撃はあくまでも移動のための時間稼ぎだと誰もが理解している。

被害を出す訳にはいかない。故に走る。プレシアとリンディはアースラへ一度退き、作戦の修正などをする事になった。また後でと告げ、二人を置いてなのは達は急ぐ。その視線の先では、アーチャーの矢が防衛プログラムを捉えようとしていた……

「……どうや、リイン」

「はい。守護騎士プログラムの切り離しは成功です。ただ、やはり防衛プログラムの方はまだ……」

外で行なわれている激戦は、既に場所を高台から市街地に変えていた。そして、それとは異質の戦いがここでも展開されている。取り込まれたはやてとリインは協力し合い、少しずつではあるが目的を果たしつつあった。はやてには、外の様子は分からない。だが、リインが時折聞かせてくれるので、ある程度は知っていた。

今は結界を突破しようとした防衛プログラムをアーチャーの攻撃が襲い、それを阻止する事に成功したらしい。どうも、防衛プログラムが回避したにも関らず、執拗に矢が追い続けたようで、しかも迎撃される瞬間爆発までしたらしい。はやてはそれを聞いて驚くと同時に安心していた。

（やっぱ、アーチャーは弓矢を使うんやな。外出たら見せてもらわんと）

そのためにも、出来るだけの手を打ちたい。そう思い、はやてはリインと協力し合って様々な事に手を出していく。出来る出来ないではなく、全ての可能性と手段を試すために。少しでもアーチャー達の援護になるようにと、そう考えて。

「……駄目です。やはり改竄のせいで手が出せません」

「そか。せめて転生機能だけでもと思ったんやけど……」

今は万が一にも失敗した時のための保険を作ろうとしていた。決して不安からではない。失敗とは、アーチャーの考える賭けの事。リインからバグが復活しないようにする。そのための行動。おそらく転生機能を使っているだろうとの判断から、それを無くすかもしくは変化させてしまえばリインの安全を確保出来る。そう思っての行動だったのだが、やはりそう簡単にはいかないようだ。

「ま、ええわ。なら、他や。片っ端から手を出してこか」

「はい。少しでも力を削いでおきたいですからね」

完全な管理者権限。それを活用し、自分の出来る事をする。それが、はやての戦いであり役目だった。

（待っとってなみんな。絶対、一番ええ時に手助けするわ！）

最初にリインから聞いた事を思い出しながら、はやてはそう強く思う。そう、それは自分達がここから出る時の最後の置き土産なのだから……

結界を破壊する事を阻止したなのは達だったが、戦況はやや思わしくなかった。というのも、やはり空中戦という事もあり、セイバー達が軒並み苦戦を強いられていたからだ。更に、全力を出せれば

違うのかもしれないが、手加減をしなければならない以上、その攻撃には普段の鋭さがない。

一方、なのは達魔導師達も中々有効打が与えられずにいた。一度、フルンディングに戸惑った所をディバイン・バスターやプラズマ・スマッシャーなどで攻撃したのだが、それさえリンディの魔法である強固なシールドの前には無力だったのだ。

それに、ここぞとなると転送魔法を使って距離を取ったり、場所を移動したりすると考えられたために思い切った攻撃が出来ないのもある。しかし、そんな矢先、防衛プログラムに変化が起きる。まるで停止するように動きを止めたのだ。

「……どうしたのだ？」

それに小次郎が訝しむような視線を向けた。

「わかんねぇな。何かの準備か？」

「罠、という可能性もありますね。こちらを誘っているのかもしれません」

ランサーがそう言えば、ライダーは慎重な意見を述べる。

「その可能性も捨て切れんが、好機ともいえる……か」

「もどかしいですね。相手の出方でここまで困る事になるとは」

アーチャーの苦い声に、セイバーも同じような声を返した。その突然の停止に、サーヴァント達は揃って慎重な構えを見せる。本来ならば、ここで勝負を決めるべく動くのだが、相手は様々な魔法を使う相手。関係者のものはともかく、原生生物の魔法はどこか未知

数な部分がある。そのため、五人は様子見をする事にした。

「……妙だ」

「だな……」

ザフィーラの呟きにヴィータが応じる。それにシャマルも頷き、表情を険しくする。

「そうね。さっきから使っている魔法のほとんどが防御魔法ばかりよ」

「何故攻撃に転じてこないのだ……？」

守護騎士達は防衛プログラムの反応を思い出し、揃って違和感を感じていた。その気になれば、凄まじい攻撃魔法を使う事も可能な防衛プログラム。それが、ここまで防戦一方だったのだ。確かに詠唱を出来ないように戦い、更にはサーヴァント達にクロノ達を加えたため、戦力も充実している。

だが、だからといって有利にはなっていないのだ。何故ならば、どこまでいっても今のままでは、防衛プログラムはリインとはやてを人質にしているようなもの。故にセイバー達が全力でぶつかる事は出来ないのだから。

結局、騎士達もしばらく様子見をする事にした。自分達よりも実力者であるセイバー達が軒並み動きを見せないためだ。しかし、いつでも動けるようにするのは忘れない。警戒心を薄れさせる事無く、四人は視線を防衛プログラムへと向けるのだった。

「どうするの、クロノ」

「……僕らも様子見だ。もしかすると、はやて達が何かやってくれたのかもしれない」

アリアの問いかけにクロノはそう返し、防衛プログラムを見据える。その相手は、先程から少しも動こうとしない。

「でも、変だね。あいつ、あまり自分から攻撃してこないじゃないか」

ロッテの感想は全員がどこかで感じていた事だった。反撃はするが、自分から攻撃を仕掛けようとはしない。それどころか、何故か不自然な程こちらに攻撃をさせようとする。そんな印象さえ受けるのだ。

クロノもそれを感じているのだろう。先程から魔法をあまり使わず、使うとしても消費魔力を抑えているのだから。そう、防衛プログラムはセイバー達の事を知ろうとしていたのだ。まったく情報のない存在。しかも、アーチャーの放った攻撃は警戒心を与えるに十分なものだった。故に、防衛プログラムはセイバー達の力量と能力を推し量ろうと攻撃を控えていたのだから。

「とにかく、今はどう相手が動いてもいいように備えるぞ」

「そうね。警戒だけは怠らないように、ね」

「はいはい。……偉くなったもんだよ、あのクロ助が」

そうロッテはどこか嬉しそうに小さく呟いて、視線を再び防衛プログラムに戻す。すると、それに向かっていく者がいた。それは……

周囲が、防衛プログラムの突然の行動停止に不気味なものを感じていた頃、なのは達も同じように戸惑いを隠せなかった。

「どうしたんだろ……」

「分からない。でも、用心するに越した事はないよ」

ユーノの言葉に頷きを返し、なのははレイジングハートを握り締める。そう、なのはもまた感じていたのだ。先程から相手が不思議なぐらい攻撃してこない事に。反撃に使う攻撃も、魔法ではなく直接的な打撃が多い。

まるで魔力を消費する事を抑えているようにも見えるその行動に、違和感が拭えないのだから。それは、おそらく全員の共通見解だろうとなのはは思っている。現に、アーチャーはあの一撃以降攻撃を控えているし、クロノ達も魔法を使うのを少なくしている。

（私も、エクセリオンを使う事を今は考えてないしね……）

一時は、ディバイン・バスターが通用しなかったので、エクセリオンを使いそのシールドを破ろうとも考えたのだ。しかし、何か手の内を見せ過ぎる事に嫌な感じを受け、なのはは、今は少なくてもエクセリオンを使う気はなくしていた。

「でも、今が絶好の機会ってのは事実だよねぇ」

「だから皆戸惑っているんだよ。いきなり何の前ぶれもなく、だからね」

アルフのもどかしさを感じさせる声に、ユーノは苦笑しながらも視線を防衛プログラムから逸らす事無く答えた。もし、この現状が激しい攻防の果てに訪れたものなら、誰も躊躇う事無く攻撃を加えただろう。しかし、これがさしてダメージも与えていないにも関らず起きたために、ここまで戸惑っているのだ。

しかし、このままでは無駄に神経をすり減らす事になるとユーノは思っていた。セイバー達はいい。戦いに慣れているだろうし、余裕さえある。クロノやリーゼ姉妹、守護騎士達もそうだ。多くの戦いを経験してきただろう彼ら。ならば、神経を張り詰める事にもある程度慣れている。

問題は、自分達だ。戦いそのものが未経験に近い。そう、こちらの命を奪いかねない相手との対峙などした事がないのだ。今まで経験してきたのは、全て知っている者達との試合。自分達を殺す事などないと知っている戦いだった。しかし、この戦いはそうではない。下手をすれば死に繋がるのだ。

（それに、相手にはやてとリインが捕まっているようなものだし……）

早く助け出したい。そんな思いが余計に焦りを生む可能性はないとは言い切れない。如何になのは達がセイバー達から教えを受けているとしても、子供には変わり無いのだ。親友を助け出したいという気持ちが、少しずつだがその行動を焦らせるなどあっても不思議ではない。そうユーノが考えた時だ。

それが的中したのだ。好戦的なランサーやシグナムといった者達に影響を受けたフェイトが、意を決したように呟いたのだ。

「……私が攻撃して出方を見るよ」

それに三人が何か言う前にフェイトはソニックフォームへと変わって、動きを見せない防衛プログラムに向かって行ったのだ。現状を打開したい。その思いは誰にもあった。当然フェイトにも。だから、フェイトは動いた。それは考え無しの行動ではない。

自分の得意とする高速移動。それを使い、即座に離脱するつもりだった。バルディッシュにその準備をさせて、フェイトは停止する防衛プログラムへと攻撃した。

「はっ！」

それに対し、防衛プログラムが取った手段は……

「掛かったのは、小娘が一匹か。まぁいい。眠れ……」

夜天の魔導書をその攻撃へ向ける事だった。それにフェイトの攻撃が当たる瞬間、その体が光に包まれて消えた。

”吸収”

無情に告げられる言葉。訪れる静寂。それに一瞬全員が声を失い、驚愕する。そんな中、ランサーとアルフが叫んだ。

「「フェイトォォォォ！！」」

その叫びを聞いて防衛プログラムは冷淡に告げる。

――――さぁ、次に眠るのは誰だ。

一方、高台から離れた位置で観戦していた者達は、場所が移ったためにそこからはあまり見る事が出来ず、アースラが表示してくれたモニターからその光景を見ていた。

「「「「フェイト（ちゃん）っ！？」」」」

すずか、アリサ、アリシア。三人の悲痛な声が重なる。リニスと恭也達は息を呑んで、悔しそうに拳を握る事しか出来ない。忍やノエル達は、ただ目の前の映像から目を逸らす事無く見つめていた。見れば、まだなのは達は諦めていない。

今も防衛プログラムを取り囲むようにしながら、攻撃を続けていた。それに気付き、すずか達もその表情に希望の色が戻る。きっと、フェイトは無事なのだろう。そう信じているからこそ、なのは達は戦い続けているのだ。そう考える事が出来るのは、彼らの顔に少しも不安がないから。

（私も戦うって決めたんだ。だったら、信じないと……フェイトちゃんの無事を、みんなの勝利を！）

（……そうよ。驚く事は無かったわ。はやてだって同じように吸い込まれたんだし……フェイトは無事よ！）

（ランサー、アルフ、ママ……わたしの分までフェイトを助けてあげて！）

少女達は両手を強く握り締め、画面を見つめた。それに周囲も気付き、一瞬だが笑みを見せる。

（すずかちゃん達でさえ勝利を疑っていない、か……。俺がなのは

達を信じるように、この子達も信じているんだ）

（アリサちゃん、やっぱり心が強いね。あたしも信じるよ、小次郎さん達の勝利を！）

高町兄妹は互いに小さく頷いて、視線をすずか達からモニターへ戻す。

（アリシアは、やはり姉ですね。ここぞとなると芯の強さを見せます）

リニスは、力強くモニターを見つめるアリシアにそう思いながら、視線を同じようにモニターへ向けた。

（アーチャーさんもみんなも絶対無事に戻ってきてください。まだ楽しい行事が沢山あるんですからね！）

（アーチャー様、皆様……必ず勝つと信じています……）

メイド姉妹は、想いを寄せる男と親しい者達の無事と勝利を願う。その眼差しに、強い輝きを宿して。

（ライダー、頼むわよ。すずかを悲しませる事だけはしないでよね！）

（ライダーもザフィーラも負けんなよ！　私は、お前達が負けるとこなんて見たくないぞ！）

忍は家族の一員へ心の中で激励を送り、イレインは自分に勝った二人へ想いを送る。

そして、モニターの先では雷雲が立ち込め、何かが起ころうとしていた……

防衛プログラムによるフェイトの消失。そして、その後告げられた言葉に、全員が身構える。ただ、ランサーとアルフの瞳には先程まではなかった色が宿っている。それは怒り。互いに拳を握り、防衛プログラムを睨みつける。しかし、ランサーの肩を抑えるようにアーチャーが手を乗せた。

「んだっ！」

「落ち着けっ！　……君まで、同じ目に遭うつもりか」

そのアーチャーの言葉でやや怒りを沈め、ランサーは槍を構え直して防衛プログラムへ視線を向ける。思い出したのだ。同じように防衛プログラムに取り込まれた存在を。それに対し、不安がアーチャーにもある。だからこそ、ランサーも自分を抑えた。

一方、先程の光景を見たためか、全員が迂闊に接近戦を挑めないと判断。シグナムやヴィータ達は、やや距離を取って戦うように戦術を変え、ザフィーラやアルフなどはもっぱら支援に従事している。

そんなアルフの動きだが、やはり苛立ちが大きいようにランサーには見えた。出来る事なら先陣を切って拳を振るいたいのだろう。だが、自分までがフェイトと同じ目に遭えば、周囲に良くない影響を与えると分かっている。だから、アルフも自分を律して行動していた。

それをランサーは見つめ、槍を持つ手に力を込めた。

「……だがよ、少しでもお返しはしないと気がすまねぇ！」

「なら、書に気をつけろ。おそらくだが、あれに触れるとああなるはずだ」

「応よ！」

それさえ分かれば十分とばかりに、ランサーはシグナム達とともに攻撃へと加わった。それを見送り、アーチャーはふと何かに気付き、横へと視線を向けた。そこには高層ビル群があるのだが、その内の一つの屋上に見慣れた二人の女性がいたのだ。

それは、転送魔法によって転移してきたプレシアとリンディ。今まで二人はアースラの中で現在の作戦の修正と、そして防衛プログラムの行動を分析していた。だが、フェイトが吸収されたのを見て、それを切り上げて再び戦場へと戻って来たのだ。

「フェイト……待ってなさい。今助けてあげるから」

「プレシアさん、あまり強力な魔法は……」

「大丈夫よ。これは、あれだけを攻撃する事が出来るから」

そう断言し、プレシアは詠唱に入る。それを聞き、リンディは天候操作系の魔法かと思った。しかし、それだけではないだろうと思い、万が一に備えてなのは達魔導師組へ念話を使って、プレシアがかなりの広範囲魔法を使うだろうと告げた。

それになのは達がやや驚きを示すものの、それに慌てる事無く周囲のセイバー達へ近付いてその旨を伝えていく。そして、その間にプレシアは詠唱を終えた。結界の中に暗雲が立ちこめ、如何にも雷

が鳴りそうな雰囲気を醸し出す。

（私の娘を……よくもっ！）

フェイトが消えた瞬間、プレシアの中にアリシアを失った時の喪失感が甦ったのだ。それ故に、プレシアはこの中の誰よりも怒り狂っていた。しかし、それでも術の制御を疎かにするような愚は犯さない。

だが、放つ声にその想いのありったけを込めて告げた。それは、大魔導師の自慢の一撃。未だに現役と言わしめる片鱗を見せるには、十分過ぎる魔法。

「サンダーレイジっ！！」

プレシア渾身の魔法が発動し、空から無数の雷が降り注ぐ。しかし、それは全て狙ったように防衛プログラムへと殺到する。退避が遅れたなのは達を器用に外し、その全てが意志を持つかのように動いていた。

その代償は、かなりの負担。体力と魔力の大幅な消費。もう戦闘に参加する事は出来ないだろう程の疲れ。だが、プレシアはそんな事はどうでもよかった。愛する娘を目の前で失うなどと言う光景を見せられたのだ。我が力よ吼えろとばかりに、その魔法が猛威を振るう。それは、母の愛の為せる技。いくら体が万全とは言え、プレシアはもう全盛期ではない。それでも、それだけの大魔法を制御してみせている根底には、娘を助けたいとの強い想いがあればこそ。

防衛プログラムはその魔法を前に、リンディ譲りのシールドを展開しようとする。しかし、それが展開された瞬間、何故かそれが消える。その光景に僅かに動揺を見せる防衛プログラム。それを為したのは、リンディ。

「残念だけど、そうはいかないわ……っ！」

彼女は防衛プログラムの周囲にある魔法を展開したのだ。そう、その名はＡＭＦ。アンチマギリングフィールドと呼ばれる魔力結合を阻止する防御魔法。リンディは、防衛プログラムが自分のシールドを頼りにしている事を逆手に取ったのだ。

絶体絶命の状況だとしても、シールドを展開出来る状況ならば、必ず転送魔法ではなくそれを展開すると。だから、それを阻止するべく自分のありったけの魔力を注いでその無力化に挑んだ。アースラの支援がない状態ではあったが、リンディの想いはそれを成功させた。その母親魔導師二人の連携に、防衛プログラムは始めて大きなダメージを負った。

「フェイトの分、上乗せさせてもらうぜっ！」

そして、それを見てランサーが動く。雷の直撃を受け、動きを止めている防衛プログラムへその跳躍力を活かし、肉迫した。それに相手が気付き反撃のプラズマ・ランサーを放つ。しかし、それをランサーは派手に避ける事はしない。矢避けの加護。それを活かし、ランサーは最低限の動きだけで接近。そして、その神速の一撃で相手の体を叩き落す。

「レイジングハート！　エクセリオンモード、行くよっ！」

”エクセリオンモード、セットアップ”

凄い速度で落下していく防衛プログラムを見て、誰もが好機と捉えた。なのはもそう。大ダメージを与えるのなら今しかない。そう思ったからこその決断。変形していくレイジングハートを横目に、

なのははは急いだ。
体勢を整えられる前に攻撃しなければ、自分もフェイトと同じように吸収されてしまう可能性があるからだ。そのため、なのははは更なる力を解放する。

「エクセリオンモードＡＣＳ、ドライブっ！」

”ドライブイグニッション”

槍のような形状の先端から、なのはの魔力光で出来た刃が出現し、更に魔力光の翼のようなものが展開する。それこそが、なのはの切り札。レイジングハート・エクセリオンＡＣＳ。その加速力を加え、なのはは矢のように防衛プログラムへと向かっていく。
視線の先では、地面に激突した防衛プログラムが立ち上がるところだった。そのふらつく体に、先端の刃――ストライクフレームが突き刺さる。それに微かにたじろき、目を見開く防衛プログラム。

「エクセリオォォォン……バスタァァァァッ！！」

なのはの声に呼応し、光の翼が一際輝く。零距離からのエクセリオン・バスター。それは、なのはにもダメージを与える諸刃の剣。しかし、なのはに迷いも躊躇いもない。今恐れるのは、自分が傷付く事ではなく大切な親友達を助ける事が出来ない事。

（はやてちゃんとフェイトちゃん、リインさんを返してもらうからっ！）

なのはの想いを込めた一撃が防衛プログラムへ炸裂する。直後起きる爆発。その煙の中からなのははは少しよろめきながら離脱する。
だが、それを狙い防衛プログラムが射撃魔法を放つ。ディバイン・

シューターだ。すると、その体を守るように二人の人物が駆け寄った。

「無茶し過ぎだよ、なのは」

「まったくです。ですが、中々良い踏み込みでした」

ユーノが簡単な治療魔法を使い、セイバーが二人を守るように防衛プログラムの攻撃を切り払う。その二人の姿と言葉に、なのはは苦笑いしながらも安心感を感じた。そんなのはの目の前では、三色の魔力光がまるで動きを封じるように防衛プログラムを縛り付けていた。

「もう一押しだ！」

「アタシらが抑えてる内にっ！」

「追い打ちをっ！」

ザフィーラとアルフ、アリアの声に応えるように、シグナムとヴィータ、それにロッテが動く。

「はぁぁぁっ！」

「んなろぉぉぉ！」

「しぶといんだよっ！」

シグナムの剣が、ヴィータの鉄槌が、ロッテの拳が唸りを上げて防衛プログラムを襲う。それに何とか反撃を試みようとする防衛プ

ログラムだったが、その動かした手が書に伸びたところで本物の鎖がその動きを封じる。

「それは使わせません」

それはライダーの短剣だった。見た目に反した怪力を発揮し、防衛プログラムが書を使う事を阻止するライダー。だが、防衛プログラムが残る手を使おうとした。それを阻止すべく、緑色の魔力光が出現する。

「そっちも駄目なんだから！」

シャマルのバインドが駄目押しとばかりに、その手を鎖で封じられた手と共に封じる。そして、炸裂する三人の攻撃。それにやや防衛プログラムが怯んだように見え、クロノが頷いて手にしたＳ２Ｕを構えた。

「これで、どうだっ！」

”ブレイズキャノン”

放たれる青の閃光。すると、それに重ねるように一筋の剣閃が煌いた。小次郎の刃を返して放たれた一閃だ。

「私も忘れてもらっては困るぞ」

その二つの鋭い一撃を受け、防衛プログラムに変化が起きる。何かに苦しむような反応を見せ出したのだ。そして、それに全員が再び警戒したのだが、思わぬ声が聞こえてきた。

「みんな、聞こえるか。こっちは出来る事全部終わったわ。フェイトちゃんと一緒に外に出るから」

それは、はやての声。それに全員が喜びと驚きを隠せなかった。フェイトもはやて達と共にいる。それが意味する事は、どうにかしてフェイトとはやてが出会ったという事だろう。同じように吸収されたからと考える事も出来た。だが、誰もがそんな単純な気はしなかったのだ。

しかし、今はそんな事を考えている場合ではない。そう、はやて達が脱出する事が引き起こす出来事を思い出したのだから。それは、予想だにしない相手との戦い。

こうして、決戦は第二幕を迎える。古から続いた闇。その終幕は近い……

――――――

A' s十一話　EX

眩しい光がフェイトを包む。それにゆっくりと目を開けていくフェイト。そして、その光景に言葉を失う。見慣れた自室。だが、そこにはベッドが一つしかなく、更にそこにいたのは……

「あら？　起こしちゃったかしら」

「り、リンディさん……？」

何故かリンディがいた。しかも制服ではなく私服だ。だが、リンディはフェイトの言葉に少しだけ不思議そうな表情を返した。

「どうしたのフェイト。リンディさんだなんて、他人みたいな呼び方して？」

「えっ……？」

「この前、母さんって呼んでくれて嬉しかったのだけど……やっぱり恥ずかしくなったのかしら？」

そう言ってリンディはくすくすと笑う。それにフェイトは戸惑いを感じるばかり。リンディは自分の事をさん付けで呼ぶからだ。しかも、何故自分が他人のリンディを母と呼ぶのかも分からない。冗談としても理解出来ない。自分には、本当の母がいるのだから。

それに何よりも、もう一つあるはずのベッドがないのが気になる。とりあえず部屋を出てリニスかアルフ、もしくはプレシアやアリシアに聞かなければ。そう思い立ちあがるフェイトだったが、その時何かが自分の中で引っかかった。

（あれ……もう一人誰か相談出来る相手がいたような……？）

おぼろげに思い出す青い姿。だが、何故かはっきりと思い出せない。それが無性にフェイトには気になった。しかし、その思考を遮るようにリンディの声がフェイトの意識を引き戻す。

「とりあえず朝食にしましょ。もうクロノもアルフも待ってるから」

「……はい」

アルフの名を聞き、現状を聞ける相手がいると思い、フェイトはリンディの言葉に頷いた。何かがおかしい。そんな感覚を感じながら……

それは、有り得たはずの結末

テーブルに並ぶ料理の数々。それを思い思いに食べるリンディ、クロノ、アルフ。フェイトはそんな三人の会話を聞きながら、拭い切れない違和感を必死に抑えていた。

「次の任務はどうなるか分からないけど、それで艦長を引退する事にしたわ」

「……薄々そうじゃないかと思った。後任は……僕か」

「お～、大出世だねぇクロノ。アースラの未来はアンタにかかってるよ」

三人の仲が良いのは構わない。だが、何故かそれはフェイトの知る雰囲気ではなかった。まるで家族のようだと、フェイトは感じた。それに、先程念話でアルフに聞いた事も違和感に関係しているかもしれない。プレシアやリニス、アリシアはどこにいるのか。そうフェイトが尋ねると、アルフは一瞬驚きと悲しみを見せた。そして、こう言ったのだから。

――――もうあの女もリニスも、フェイトのお姉ちゃんもいないよ……

それにフェイトは目の前が真っ暗になるような感覚を覚えた。だが、ふと気付いた事がそれを何とか食い止めた。アルフのプレシアの呼び方と声である。アルフはＪＳ事件後、プレシアの事をお母さんと呼んでいた。にも関らずあの女と呼び、しかも声にはどこか憎しみや怒りが込められていたのだ。

それは、フェイトが知る限りアルフが見せるプレシアへの態度ではない。そう、ランサーが彼女達と出会ったために、アルフはプレシアへの憎しみや怒りを大きくする事なく生活していた。そのため、フェイトは虐待を受ける事無く、アルフもプレシアの事を少し嫌う程度で済んだのだから。

故に、フェイトは知らない。このアルフは、プレシアを心から憎んでいたとは。

フェイトは食事を終え、リンディ達になのはに会いに行くと告げて外へと出た。自分の親友達に会おう。会えば、何か分かるはずだ。そんな気持ちがフェイトを動かしていた。

見慣れた道を走り、視界に見えてくる日本家屋に安心感を覚えながら、フェイトは高町家の門をくぐる。そして、道場から聞こえて

くる音に安心感を強め、そちらへと足を運ぶ。するとその脳裏に、金髪の誰かの姿が一瞬思い浮ぶ。それにはたと立ち止まり、フェイトは疑問を抱いた。

（あれ……なのはの家に金髪の人なんていたっけ……？）

何とか思い出そうとするが、金髪の誰かとしか思い出せない。そこまで考え、道場に行けば思い出せるのではとフェイトは思い直し、その戸を開けた。

「ん？　フェイトちゃんじゃないか」

「なのはなら家の方だよ？」

そこにいたのは恭也と美由希。彼女が予想した者はどこにもいなかった。二人はフェイトが道場に来た事に違和感を感じていた。それに構わず、フェイトは二人へ尋ねた。金髪の人がこの家にいなかったかと。それに二人は互いを見つめ首を傾げた。

そして、二人同時に苦笑しながらいないと首を振った。フェイトが、勘違いか見間違いでもしたのだろうと考えたのだ。フェイトはそれに何故か悲しみを抱くが、それを振り払い礼を述べて道場を後にした。なのはに会おう。そうすればきっと何か分かるはず。そう思い、フェイトは高町家の中へと上がる。

桃子も士郎もフェイトが知る雰囲気のままだった。だが、フェイトは気付いた事があった。そう、玄関にユーノの靴がなかったのだ。外出しているのだろうかと思い、フェイトがユーノの事を尋ねると、士郎と桃子は少し不思議そうな表情をしたものの、なのはの部屋にいるはずと答えた。

フェイトはそれ安堵して頷き、なのはとユーノから話を聞けると

部屋へ向かった。そして、ドアをノックして入った先には自分の親友がいた。だが、何故かユーノの姿はない。代わりにフェレットのような動物がいるだけだった。

「フェイトちゃん、どうしたの？」

「なのは聞いて。アリシアもリニスも、母さんもいなくなっちゃったんだ。どこに行ったか知らない？」

悲痛な面持ちで告げるフェイトに、なのはは驚いた顔をした。それを見てフェイトは安堵した。なのはが自分の告げた内容に驚き、関心を示してくれたと思ったからだ。確かにそれは正しい。なのははフェイトの言葉に驚きを感じたのだから。しかし、それはフェイトの望む方向ではない。

「……フェイトちゃん、良く聞いて」

「なのは？」

「もう、プレシアさんもアリシアちゃんもいないよ。一緒に見たよね？　虚数空間に落ちていくのを……」

今、なのはは何と言った。フェイトはそう思った。虚数空間を知らないフェイトではない。無論、そこへ落ちればどうなるかも。故にフェイトは小さく首を横に振る。震えるように、受け入れられないとばかりに。

「フェイト、どうしたのか知らないけど、事実だよ。リニスって人の事は知らない。でも、その二人に関してはなのはの言った通りだ」

「……ユーノの声？」

「え？　フェイト、僕を忘れたって訳じゃないよね」

突然なのはの隣にいた動物が話し出したのを見て、フェイトは呆然とそう呟き、それにユーノがやや困惑するように返した。それにフェイトは、初めてなのはとユーノが出会った時、変身魔法を使っていたという話を思い出していた。

だが、もうその必要性はないはずだと思い、フェイトはそうユーノへ告げた。すると、二人はどこか驚いたように互いに顔を見合わせた。それに疑問が消えないフェイトだったが、こう続けた。ユーノは高町家に魔法の事を話して、本当の姿を教えたじゃないかと。

だが、それに二人の困惑は大きくなるばかり。それを見てフェイトは、何故か自分がここにいるべき人間ではないような気がした。だが、最後の望みとばかりにある事を尋ねる。

「なのは、この家に金髪の人がいたよね？」

それになのはもユーノも不思議そうな雰囲気を漂わせる。そして、なのははフェイトへこう答えた。

――家に金髪の人なんていないけど……？

その言葉にフェイトは打ちのめされた。そんな様子に戸惑う二人へ別れを告げ、フェイトは逃げ出すように高町家を後にする。次に目指すは自分と姉が世話になった八神家。そこなら何か分かる。そう信じて……

「……あれ？　フェイトちゃんや」

「はやてっ！」

八神家についた時、庭に丁度はやての姿があった。それに喜びを感じ、フェイトは思わず声を大きくした。傍には、何故か狼状態のザフィーラとシグナム達もいる。しかし、そこに二人足りない気がして、フェイトは周囲を見渡した。

「ちょ……どうしたん？　何かおかしいで、今日のフェイトちゃん」

「ご、ごめん。それとはやて、家に誰か残ってる？」

「？　いや、これで全員や」

その言葉にフェイトは一瞬だが呆気に取られてしまった。確かにここには、はやてと守護騎士達以外にもう二人いたはずなのだ。銀髪の誰かと紅い姿。それがフェイトの脳裏にちらつくのだ。特に紅い姿は、はやてにとって大切な存在だったはずなのにと。

そんな風に戸惑うフェイトを見て、はやて達は不思議そうな表情を見せる。すると、何かに気付いたのか、シャマルが小さく笑ってこう言った。

「すずかちゃんならまだ来てないわよ」

「お～、そうか。今日はすずかちゃんが遊びに来る日か。その事を忘れとった」

「確かにここに早めに来る可能性は高いですね」

「何だ、すずかさんに用事かよ」

「生憎と、今日は約束通りの時刻になりそうだ」

五人の話を聞いても、フェイトはやはり違和感を拭えない。自分が捜している者達が悉くいない。しかも入ってくる情報は、どれも信じたくない内容ばかり。

「……はやて、銀髪の人は？」

「え？　……リインの事か」

フェイトが意を決して尋ねた事にはやては一瞬だけ呆気に取られたが、すぐに気付いて表情を曇らせた。だが、フェイトはそれに気付かずにいた。はやての告げたリインとの言葉を聞いて、やっとその名を思い出せたのだ。だが、何故か肝心な事が思い出せないような気もしていた。

自分は、そのリインのために何かしている最中ではなかったか。そんな事を考えるフェイトだったが、周囲の雰囲気に気付き、やや怪訝そうな目を向けた。

はやてだけではなく、シグナムもシャマルも、ヴィータやザフィーラさえどこか悲しそうな表情をしていたのだ。それにフェイトが疑問を感じていると、はやてがぽつりと話し出した。そして、その内容にフェイトは言葉を失う。

リインは、自分の消滅と引き換えに防衛プログラムの復活を阻止した。それは、フェイトにとっては強烈な痛みとなった。はやてにそんな辛い事を聞いてしまった事。そして話させてしまった事。更に、それを阻止出来なかった事に対して無力感を感じたのだから。

「……はやてゴメンね。そんな事聞いて」

「ええよ。でも、どうしてそんな事を聞いたんや？　フェイトちゃんもそこにおったやんか」

その言葉にフェイトは驚いた。自分の記憶の中には、そんな思い出はないからだ。あるのは、リインと出会い嬉しそうに笑うはやて達の姿。

「……はやて、紅い服の人って覚えてる？」

「は？　紅い服……？」

フェイトの問いかけにはやては心底分からないという表情を見せた。それにフェイトは先程のなのは達とのやり取りを思い出し、強くこう感じた。

（違う……ここも私の知ってるはやての家じゃない……）

違和感しか感じない八神家。自分が僅かとはいえ過ごした思い出の場所。だからこそ、余計にフェイトには疑問しかなかった。はやて達に別れを告げ、フェイトは走る。次に目指すはアリサの家とすずかの家。そこにいるであろう和服の似合う誰かとメイド服を着た眼鏡の誰かを頼って……

「は？　和服の人間なんて家にはいないわよ……？　庭師？　それはいるけど……作務衣なんて着てないし……」

「メイドは昔からノエルとファリンだけだよ？　眼鏡の人？　ううん。雇った事もないけど……」

親友二人に否定された事を思い出しながら、フェイトは肩を落として海浜公園目指して歩いていた。それと、薄っすらとだが感じた事がある。

（なのは達との距離が……微妙に遠い気がする……）

自分の中にある親友達との心の距離感。それが、ずれている気がした。そして、その原因にずっと頭から離れない五人の姿が関係しているような気がしていた。自分達五人を強く結び付けていたはずの絆。それが、まったく感じられない。

親友と思い合ったはずの、その心が感じられない。そう思ってフェイトは知らず涙を流す。こんなはずじゃなかったと。自分が知っている日常。それが何もない世界。確かに友人はいる。でも、絆が薄い。確かに知り合いがいる。でも、何かがない。

辿り着いた公園のベンチに座り、フェイトは夕日を見つめた。自分の中では秋だったはずなのに、もう年も終わろうとしているらしい。それにフェイトが気付いたのは、月村家に行った時。カレンダーが十二月の終わりを指していたのだ。

「クリスマス……過ぎちゃったんだ……」

思い出すのは、ここでの会話。シグナムとザフィーラ、それにアルフを交えた決戦前の穏やかな時間。そこまで思い出し、フェイトは勢い良く立ち上がった。思い出したのだ。自分がどうしていたのかを。

リインを、はやてを助けるために戦っていた。そう思うと同時に、

霞みがかっていた五つの姿が鮮明に甦っていく。小次郎が、ライダーが、アーチャーが、セイバーが、そして……

「ランサー！　思い出したよ……私、思い出した！」

その声に呼応するようにフェイトの手に光が集束していく。それを見つめ、フェイトは優しく微笑む。そこには、待機状態のバルディッシュがいた。

「……待たせたね、バルディッシュ」

”お気になさらず”

その相変わらずの返事に、フェイトは堪らない程の嬉しさを感じ、目を閉じる。そして、その目が開いた時には、フェイトの体はバリアジャケットに包まれていた。その手に、ザンバーフォームのバルディッシュを携えて。

「確かに……ここも私がいる場所なんだろうけど……」

そう告げて、フェイトは一度だけ呼吸を整えて叫ぶ。

「でも……”私”がいた場所じゃないっ！！」

”ジェット・ザンバー”

排出されるカートリッジ。振り下ろされる大剣。迸る電撃が、作られた世界を……あったはずの可能性を壊していく。ここは、自分がいたい場所じゃないとばかりに、フェイトの魔法が暴れまわる。金色の雷光は、闇を貫き、外を目指す。本来いるべき場所を求めて

……

フェイトが書に吸収された頃、はやてはリインの報告でフェイトの救出に力を注いでいた。聞けば、フェイトがされたのは本人の望む幸せを見せる事で、そのまま書に完全に取り込むものらしく、時間が経てば経つほど危険が増すのだ。

故に、はやてはリインにそれをどうにかして止めさせようとしたのだが、一度取り込んだ者を書が手放す事はなく、はやてに出来る事は一つしかなかったのだから。

「これでええの？」

「はい。……違和感を大きくし、本人が気付くようにするのが精一杯です」

本来ならば気付かないようにするイメージ。それをリインははやてと協力し、出来るだけ望まぬようにする事が限界だった。それは、セイバー達の存在を排除する事。それがどうなるのかは二人にも分からない。だが、フェイトならば気付いてくれるだろうと信じていた。

おそらく、自分達の中で五人の影響を強く人生に受けたのはフェイト。プレシアの体を、アリシアの眠りを、それら全てを今の形にしたのはセイバー達五人がいればこそ。ならば、それがいない事がどれだけフェイトの未来を変えるのかは未知数。

しかし、これだけは言える。それは、絶対に現状よりも不幸な結果しか導かないと。

「フェイトちゃんが気付いて脱出する時、わたしらも一緒に出る。ええな？」

「はい」

はやての言葉にリインも頷き、そのための準備を始める。防衛プログラムの排除と、それに対する最大限の介入。それこそがはやてとリインの出来る最後の攻撃。完成した後の暴走の時間を少しでも遅らせる。それがはやてとリインの置き土産。

故にその時期は慎重に見極めなければならない。今はなのは達が相手をしているため、暴走出来ないがはやてとリインが脱出した後はそうもいかない。排除された防衛プログラムがどう動くのかは誰にも分からないのだから。

やがて、リインが何かに気付く。それは、フェイトの状況。そして、彼女がバリアジャケットを纏ったのを見て、時は来たとリインは悟った。

「主、準備を。脱出します」

「分かった。なら、なのはちゃん達に伝えるな」

そう告げてはやては外のなのは達に呼びかけを始める。フェイトが共に出てくると聞いてなのは達が驚くのを見て、リインは無理もないと思った。一緒に出るだけだが、さも共にいるように言ったからだろうとは思う。だが、細かい事を話している時間はない。

なので、はやては安心させるためにそう言った。そして、フェイトの魔法が発動したのを感じて、リインが防衛プログラムの排除を同時に開始する。はやてはそれを感じながら、意識が飛ぶような感覚を覚えていた。

「……主、ここからですよ」

「分かっとる。絶対……負けへんからな」

薄れ行く意識の中、はやてはそう告げて笑ってみせた。それにリインも頷き、二人は雷光の中に消えるのだった……

一瞬、防衛プログラムが痙攣したかと思うと、そこから二つの人影が出現した。光から再構成されるように、フェイトが、はやてが姿を成す。それを見てなのは達に安堵の笑みが浮かぶ。だが、それをすぐに消して視線を鋭くした。

防衛プログラムから何かが飛んでいったのだ。それは、海の方へ消えて行く。それを見つめ、セイバー達は更に表情を険しくした。感じたのだ。巨大な魔力を。

「……排除は完了した。今出て行ったのがバグだ」

「先に行っています！　なのはとユーノはフェイト達と！」

「うんっ！」

リインの言葉にセイバーが呼応し、なのはへ指示を出す。それになのはが頷き、倒れるように伏している二人へと駆け寄った。走り出すセイバーやランサー達。クロノ達もそれに続く。アルフとシグナム達は少しだけ逡巡するも、それぞれの家族ならばどう言うかを察したのだろう。セイバー達に続くように海の方へ向かって行った。

それを見送り、なのははフェイトを、ユーノははやてを抱き抱え

た。その温もりに二人は目を覚まし、視線を互いを支えている者へ向けた。

「なのは……？」

「フェイトちゃん、大丈夫？」

「ユーノ君……？」

「はやて、無事で良かったよ」

それを見つめ、リインは視線を海の方へ向けた。そこには、恐ろしい程の巨体がそびえている。

「……主、どうやら相手はセイバー達の欠点に気付いたようです」

「どういう事や？」

「足場です。海ならば、セイバー達はほとんど無力化出来ると踏んだのでしょう。ランサーやライダーの跳躍力も、海面では発揮出来ません」

リインの指摘に四人が息を呑む。セイバーが海面を走れる事は知っているから、そこまで不安はない。だが、ランサーやライダー、小次郎は確かに指摘通りだったのだから。

そう思い、なのは達は揃って視線を交錯し、頷いた。そして、三人ははやてに笑みを見せた。それがはやてには耐え切れなかった。そう、それは自分を置いて行く事を告げる目だったのだから。だからこそ、三人を代表してなのはが口を開こうとしたのを遮り、はやてが声を発したのは当然とも言えた。

「わたしも行く！」

その言葉に三人が驚きを浮かべる。はやてはそれに構わず、視線をリインへと向けた。覚えていたのだ。以前聞いたリインの能力。それがあれば、自分も戦う事が出来る事を。

「リイン、わたしに力を、力を貸してっ！　ユニゾンや！」

それにリインは一瞬戸惑うが、はやての瞳に宿る光に気付き、意を決して頷いた。愛する者が自分を求めてくれている。その事を考えた瞬間、体中に感じた事のない何かが駆け巡った。それが何かはどうでもよかった。リインにとって重要なのは、はやての気持ちに応える事が出来る事、その一点だけ。

「……分かりました。行きましょう、主。家族の、アーチャー達の傍へ！」

その言葉にはやては嬉しそうに頷き、笑顔を見せた。

「「ユニゾン・イン！」」

重なる声。体と心をリインと一つにし、はやては静かに魔法陣の上に浮かぶ。その目を普段と違う色に変え、どこか威圧感さえ漂わせてはやては告げる。

「リイン、わたしの甲冑と杖を！」

”はい”

瞬時に装着されるはやての騎士甲冑。そして、その手に現れる一本の杖。それに頷き、はやてはなのは達へ視線を向けて笑みを見せた。

「行こか。わたしも戦う」

それになのは達も笑顔を見せて頷いた。こうして三人の少女達は、それぞれの大切な者が待つ戦場へと向かう。それを後ろから見つめ、ユーノは思う。この戦いの終わり。その結末。それを最高のものにしようと手を伸ばすその姿に。

自分は非力でしかない。戦う術は無く、守る事が精一杯。それでも、目の前の者達を支える事は出来る。そう思い、ユーノは知らず拳を握り締める。眼前にそびえる異形の巨体。その前には、自分の力など無に等しいかもしれない。それでも、それでも彼は……

（守ってみせる！　なのはも！　フェイトも！　はやても！　僕に出来る事を……最後の最後までっ！）

男の意地。剣になり得ないとしても、盾にはなれる。ならば、それに全身を以ってなり切ろう。そんな誓いを一人立てるユーノ。それと同じくして、なのはも誓いを立てていた。

（もう少し……もう少しで終わるはず。みんなを困らせる全てが！）

手にしたレイジングハートを握り締め、なのはは思う。困っている人を助ける力があるのなら、迷う事無く使う。それは、もう御神の教えだけではない。それはもうなのはの行動理由の一つになっているのだ。

故に、今は力を使う事に躊躇いはない。そう思えば、自身を苛む痛みがあまりない事に感謝しなければならない。才能の賜物か、或

いは幼い頃からの鍛錬の賜物か。どちらにせよ、今は自分の状態に喜ぼう。全力で戦える事に。

「……行くよ、レイジングハート！」

”ええ、なのは”

目指すは海上に佇む異形の巨人。災厄が姿を成したそれを、全ての力と想いを持って打ち倒すそのために……

闇が見せた世界。それを打ち破り、フェイトは帰還する。その影に、はやての援護を隠して。

そして、ついに始まる本当の決戦。セイバー達の力を封じるように戦場を移したバグ。

それに立ち向かうは、五人の英霊達に三人の魔法少女、それに守護騎士達とユーノ達。古より続いた闇。その終止符を打つため、ここにその力を結集する……

――――――

げてみます

A' s十二話　前編

海浜公園に着いたセイバー達だったが、その眼前にそびえる巨体に、一瞬だが息を呑む。まるで神話に語られる天を支える巨人アトラスを思わせる印象を受け、セイバー達は気持ちを切り替えた。

先程までとは違う戦いになる。そして、ランサーと小次郎が揃って苦い顔をしていた。その理由を悟り、セイバーは無理もないと思った。相手は海上にいる。その距離はここから跳躍しても届かない程だ。セイバーは加護のおかげで海上でも戦えるが、二人はそうではない。以前のように魔法陣を足場にとも考えたが、相手があの時とは違い意志を持ち、考えて行動するのならそれは悪手でしかない。

「……私は先に行っています」

「ああ。私はここから援護に徹しよう」

故にセイバーは申し訳なく思いながらも、そう告げて海へと躍り出る。それを見送り、アーチャーは再び弓を投影する。ライダーはそんな会話を聞き、胸元から輸血用の容器を取り出した。そして、それを上に投げたかと思うと、手にした短剣でそれを引き裂く。

すると、その血液が形を成していき、魔方陣を作り出す。そして、そこから純白の天馬が出現した。それを見て、ランサー達が感嘆の声を上げる。神話時代の幻想種たるペガサス。ライダーの奥の手を効果的に使うためには欠かせない存在だ。

「私はこの仔と共に、セイバーの援護へ回りますので」

「……俺も一緒に、と言いてぇが無理そうだな」

ランサーはそう苦い顔で告げ、視線を防衛プログラムへと向けた。既にセイバーとアルフや守護騎士達が合流し、戦闘を開始していた。しかし、周囲に展開している触手から砲撃が放たれ、やや苦戦を強いられている。

「急げライダー。セイバー達が苦しんでおる」

「ええ。では……」

小次郎の言葉に頷き、ライダーはペガサスの背に乗り、あっという間にそこからいなくなる。それを見送ったランサーと小次郎は、揃ってこれからどうするかを考えていた。アーチャーのように遠距離戦が出来る訳ではない。かといって、セイバーのように水面に浮く事も出来ない。ライダーのような空を飛ぶ術も持たない以上、完全に自分達が出来る事は無かった。

そこへ、クロノ達がやって来た。そして、ライダーの乗っている物について聞きたそうな表情をしていたので、アーチャーが簡単に教えた。あれはライダーの召喚獣。こちらでの空想上の生き物を模した物だと。それに驚きを見せるも、クロノ達も納得して視線を防衛プログラムへ向けた。

「……ここからは空戦だ。ランサーと小次郎さんは、ここで万一に備えアーチャーの護衛を。僕らは守護騎士達と共に、あれを無力化する！」

「おう」

「心得た」

「「了解っ！」」

クロノがそう告げると、ランサーは気だるげに、小次郎はいつもの調子で、リーゼ姉妹が揃って返事をし、三人はセイバー達の元へ。ランサーと小次郎は、クロノの指示が一番即しているかと思う事で自分を納得させた。なので、やや不服そうではあるが、アーチャーの前方に立つ。

その二人の雰囲気に苦笑いさえ浮かべ、アーチャーは弓を構えた。狙うは、海面から出現している砲台のような触手。それ目掛け、アーチャーは強化した矢を放つ。

それを防衛プログラムは防ぐ事もしない。触手はそれに貫かれ沈黙する。だが、それが瞬時に再生を始め、元に戻ったのだ。それに驚きを見せる一同。

「……どうやら、生半可な攻撃は意味を成さないようだ」

「けっ……陸地なら思う存分暴れられるのによ」

「言うなランサー。そんな愚痴を言ったところで、海が丘に変わる訳ではない」

小次郎の何気ない呟きにアーチャーは何かを考えたのか、神妙な表情を浮かべて黙った。ランサーと小次郎はそれに気付き、揃ってアーチャーを見つめた。そして、アーチャーは小さく息を吐くと、決意を込めた視線を二人へ向けて告げた。

――海を丘に変えられるかもしれん。その後に少々無防備になるが、頼む。

それに二人は軽く笑みを浮かべる事で応える。それにアーチャーも同じような笑みを返し、視線を防衛プログラムへと向けた。丁度その時、三人の頭上をなのは達が通り過ぎて行った。巨大な闇が待つ戦場へと……

顕現する錬鉄の力

防衛プログラム相手に、セイバーは苦戦していた。傷を与えた端から再生され、多くの触手のような砲台からは、絶え間なく砲撃魔法のような攻撃をされる。それを回避しながら海面を走り回っているのだ。いかにセイバーといえど、これには舌打ちをしたくなるような状況だ。

今もライダーが砲撃をある程度引き付けているにも関わらず、自分やシグナム達にもそれが少しではあるが放たれているのだから。絶対的に決め手に欠けると、セイバーはそう考えていた。何か大きな一撃を与えたい。だが、自分の宝具はそれには相応しくないのだ。

（あれでは、威力が大きすぎますからね。もし核まで破壊してしまったら……）

明確に核の位置が分からぬ以上、下手に聖剣を使う事は出来ない。核を破壊するのはアーチャーの役目。出なければ万一の際、リインを助ける事が出来ないかもしれないと聞いているからだ。故に、セイバーは大きな威力の攻撃をシグナム達にして欲しいと思っているのだが、守護騎士達もどうやら決め手を使うのに、何か事情があるのか使う気配が一向にない。

それでも、セイバーはシグナム達にも何か考えがあるのだろうと信じ、砲台からの攻撃を回避し続ける事に専念する事にした。好機を待つそのために。

そう、シグナム達もセイバーと同じ結論を導き出していた。相手に大きな一撃を加え、再生力を上回るようにしなければ競り負けるだろうと。だが、単にそれだけでは駄目だろうとも思っていた。やるのなら、一気呵成に攻め立てて決着をつけなければと。

だからこそ、そのタイミングの見極めに苦労していた。攻撃は絶え間なく続き、下手に動きを止めれば致命傷になりかねない状況。故に、四人は未だに時期を窺っていた。クロノ達が合流し、戦力が増える事で相手の注意が散るその時を。更に、いずれ来るだろうなのはとフェイトを待って。そのために、四人は無駄な魔力消費を抑え、逃げに徹しているのだから。アルフには念話でその旨を伝え、その援護に回ってもらっている。

「ちっ！　厄介だな」

「あれ、砂漠で蒐集した奴そっくりだぜ。蒐集って、こんな利用法も出来るもんなのかよ？」

砲撃をかわし、シグナムは舌打ちして防衛プログラムを睨む。ヴィータは砲台の役目を果たしている物を見つめ、防衛プログラムの厄介さと恐ろしさを改めて感じていた。シャマルは念話でクロノ達にも先程の作戦を伝え、その準備のために後方へ下がるつもりでいた。

「私は、アリアさんと一緒に全体の支援に戻るわ」

「分かった。ならば俺は、アルフと共に全体の防御に徹する」

シャマルの言葉にシグナムとヴィータは無言で頷き、ザフィーラはそう返事をしてアルフへ念話を送りつつ、ペガサスに当たりそうだった砲撃を魔法で防ぐ。それにライダーが一瞬だけ視線を向けるが、ザフィーラは既にアルフの隣へと動き出していて、それに気付かない。

（あれぐらいならばかわせたのですが、心配性ですね）

だが、助けてもらった事には違いないと思い、後で礼は言おうとライダーは考えた。そして、視線を防衛プログラムへと向ける。砲撃の大部分を自分とセイバーに向けているのは、やはりこちらを一番警戒しているからなのだろうと思い、ライダーは小さくため息を吐いた。

そう、本当に警戒すべきは自分達ではないとライダーは思っている。それは、今遅れて現れた存在。この中で現状を打開する手段を所持しているだろう少女達だ。

（ナノハ、フェイト、それにハヤテまで……。髪の色が若干変化しているのは……ああ、リインと融合したのですか。こちらには、興味深いものが多いですね）

ライダーがはやての変化にそう考えているように、セイバーも三人を見て驚きと喜びを感じていた。

（あの魔力は……リインフォースですね。成程、ハヤテも見ているだけは嫌でしたか。ユーノの姿がないようですが、彼も彼で何か動いているのでしょう）

そして、すぐに笑みを消して、セイバーは近くにあった砲台向か

って走り出す。それが三人を狙っていたからだ。その手にした剣が煌きと共に砲台を斬り落とす。即座にその場から走り出し、セイバーは跳んだ。

　すると、先程までセイバーがいたそこを、再生した砲台が薙ぐように攻撃を放つ。それを少しだけ見やり、かわせた事にセイバーは安堵した。いかに対魔力に優れる自分とて、あれを正面から受けてみようとは思わない。

　そう、薄々だがセイバーは気付いていた。この世界の魔法は魔術とは違う。故に、自分の対魔力が作用しないのではないかと。その理由は魔法が万遍なく自分達に効果を示すという事実。対魔力に劣るアーチャーと対魔力に優れるランサー。彼ら二人は共にバインドを受けた事があるが、その効果時間はほぼ同じだったのだから。

　それを聞いた時、セイバーはおぼろげではあるが、魔法は『魔法』なのではないかと考えたのだ。即ち、『世界』の定めた概念ならば、どれだけ魔術と似ていても、魔法と呼ばれるのならば『魔法』なのだと。

「セイバー、ありがとう！」

　そんな事を思い出しているセイバーの耳に、なのはの声が聞こえてきた。それに意識を切り替え、セイバーは優しげな笑みを返し、海面に着地した。そして、疑問に感じた事を尋ねた。

「なのは、ユーノはどうしました？」

「ユーノ君は……ほら」

　なのはが指差した方へ視線を動かすセイバー。そこにいたのはユーノとアルフ、そしてザフィーラだ。彼らは三人で全員のフォロー

をするべく集まっていた。攻撃の要である者達。それが攻撃のみに魔力を使えるように。そう話し合う三人を、セイバーは見つめた。

「……そういう事ですか」

それを見たセイバーも、何となくだが理解した。三人に共通する事柄は守り。つまり、それぞれが守りの間に合わない場所や者を助けるつもりなのだろう。そう結論付けたセイバーに、二つの声が聞こえてきた。

「セイバー、私達はどうすればいいかな」

「わたしは初めての戦闘やし、今一どうすればええのか……」

フェイトとはやての言葉にセイバーが何か答えようとした瞬間、結界内にエイミィの声が大きく響き渡った。

『みんな聞いて。アーチャーさんが何かやるらしいから、時間稼ぎをして欲しいって。ランサーさん達も攻撃に参加出来るようにしてみせるからってさ』

それになのは達が揃って驚きを見せた。海では空を飛ぶか、セイバーのように何か特殊な力でもない限り戦えない。それは、アーチャーも理解しているはず。それなのに、そう言ったという事は何か方法があるのだろうと。

そう考えた時、セイバーの心に何かがよぎった。あまりいいものではない気分。それが一瞬だけ。その原因を探ろうとするセイバーだったが、その横から砲台が出現したため、否応なく意識を切り替える。

「はあぁぁぁっ！」

砲台が横薙ぎに攻撃しようとしたのを、自慢の聖剣が捉えて両断する。そして、セイバーは思考に没頭する暇はないと思い直し、移動したなのはの近くへと向かう。フェイトとはやても共に動いているようで、三人の周囲には砲台が現れてはその魔法の前に消える。

それを見て、セイバーは少し頼もしいものを感じるが、油断は出来ないとばかりに急ぐ。途中阻むように現れる砲台を切り伏せ、あるいはかわしながら。

「これ、きりがないよ！」

「再生してる……？　違う。ただ再生してるだけじゃない。少しずつ増殖させてる……」

「リイン、何かええ方法ないか？」

三人は迫り来る砲台を相手に、互いの背を合わせる事で対応していた。三方向から放たれる魔法が砲台を消し払うが、そのすぐ後に砲台が先程よりも少しだけ数を増やして襲ってくるのだ。このままだと、いずれ魔力がなくなり海に落ちるかその攻撃にやられるかしかない。

そう考え、はやてはリインへ意見を求めた。リインはそれに少し考え、苦渋の決断を下す。それは、なのはとフェイトにとっては問題ないが、はやてにだけは大きく負担のかかる方法。

”……アーチャーの準備が出来るまで逃げ続けてください。下手に反撃しては、フェイトの指摘通り相手の増殖を促します”

「それって……」

「はやてちゃんに飛び続けろって事だよ！？」

今の飛行魔法さえリインの補助でこなしているはやて。その疲労や負担は二人よりも大きい。それは、リインが一番良く知っているはずなのだ。なのはが初めて飛行魔法を使った時も、かなり体が疲れたのだ。車椅子生活のため運動不足にも近いはやてに、長時間の飛行がどれだけ負担になるのかを考え、なのはとフェイトは共に暗い顔を浮かべた。

しかし、はやてはそんな二人に笑顔を向け、力強く断言した。逃げ切ってみせると。自分にはリインがついているし、なのはとフェイトもいるのだから。それに何よりも……

「わたしは、アーチャーに負けへんって言ったからな」

それが答えだった。それを聞いて、なのはもフェイトも何も言わず、頷いて動き出す。三人は素早い動きで触手の攻撃をかわし、逃げ続けた。それを見て、悔しげにしている者がいた。

ユーノだ。守ると決めたにも関らず、下手に防御魔法を使って助ける事が出来ない。そう、彼らはアーチャーが総攻撃の手筈を整えた時に備え、魔力をギリギリまで使わない事にした。肝心な時に魔力切れを起こさぬために。だがそれでも……

（いざって時は出し惜しみしないで助けるから。だから……なのは、フェイト、はやて……頑張って！）

アルフやザフィーラも同じように何かを我慢するようにしているのを見て、ユーノは信じて待つのも戦いだと思い直し、視線を防衛プログラムへと向けた。相手は、完全になのは達三人とセイバーにライダーといった戦力として機能している者達を標的にしているよ

うで、自分達には攻撃があまりこないのだ。
それを確認し、ユーノは視線を公園の方へと向けた。そこで準備しているだろう男に。その瞬間、誰もが言葉を失う事が起きた。結界に異変が起きたのだ。防衛プログラムさえ動揺を見せるような現象が。

（これは……一体……）

疑問を誰もが抱く中、ユーノの視線の先で景色が変わっていくのだった……

その頃、アースラでもそれによる影響が出ていた。リンディとプレシアを回収し、二人は現在医務室で渋々ながらも休養中。見事に体力と魔力を使い切ったプレシアと、久々の大規模魔法を使ったためか、疲労の色濃いリンディ。
それでも、二人は最後まで結果を見届けると言って聞かなかったのだ。それを強引にエイミィが武装隊員に頼んで回収させたのだから。それからエイミィが解放されて間も無く起きた異常事態。それは……

「何これ……モニタリング出来なくなってく……」

エイミィは呆然と自身のコンソールを眺め、そう呟いた。アーチャーを中心とした何かが、結界を内側から変質させているのだ。そのせいで、アースラのモニターが結果内の様子を映し出せなくなった。
それに戸惑いの声がブリッジのあちこちから上がる。それを聞きながら、エイミィは苦笑した。やはり自分は運が良いと。おそらく、

この後展開されるであろう光景は、とてもではないが上層部に報告出来るものではないだろうから。

なら、それを合法的に記録出来ないのは都合が良い。今回は自分が違法行為をする必要がない。そう思い、エイミィは小さく笑う。

（あ～、いつからあたしこんな風に考えるようになった……って、元からか。でも、助長させたのはアーチャーさん達だ、うん）

自己解決し、エイミィはふと視線を上へと向けた。自分の出来る事はもう何もない。後あるとすれば、それはただ一つ。

――無事に帰ってきてね、クロノ君。

愛する者の無事を祈る事。もし、本当に見事事件を終わらせてきたら、あっと驚くご褒美でも考えてやろう。そんな事を考え、エイミィは一人楽しそうに笑う。その顔は、少しもクロノ達の勝利を疑っていないものだった……

なのは達がセイバーと合流した頃、アーチャーは全身の魔術回路を開き、己の奥の手を使おうとしていた。

Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｒｎ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ.（体は、剣で出来ている）

その詠唱を聞いて、ランサーと小次郎が揃って表情を変える。そう、感覚的に悟ったのだ。これは、『魔法』にも近い何かだと。故にその表情には驚きと信頼が混ざっている。きっと、何かしでかし

てくれると。その期待を込めて、二人はアーチャーの詠唱を背に受けながら、視線を防衛プログラムへと向けた。

「……ま、邪魔が入らねえとも限らないしな」

「確かに、無粋な真似をしそうな相手ではあるな」

何かしてきても、必ず防いでみせる。そんな頼もしさを全身から漂わせ、二人は佇む。絶大な信頼感。それを感じながら、アーチャーは小さく笑みさえ浮かべて詠唱を続けた。

Ｓｔｅｅｌ ｉｓ ｍｙ ｂｏｄｙ, ａｎｄ ｆｉｒｅ ｉｓ ｍｙ ｂｌｏｏｄ.（血潮は鉄で、心は硝子）

Ｉ ｈａｖｅ ｃｒｅａｔｅｄ ｏｖｅｒ ａ ｔｈｏｕｓａｎｄ ｂｌａｄｅｓ.（幾たびの戦場を越えて不敗）

朗々と響く声。その内容に、二人はやや聞き捨てならないものを感じるが、それを隠してただ眼前の光景へと意識を向ける。

どうも、防衛プログラムは自分に痛手を負わせる可能性のある者や、攻撃を加えている者ばかりを狙っているようだ。そう察して二人は軽く呆れるように笑みを見せた。もし、防衛プログラムの勘が良いなら、今一番倒さなければいけない相手が分かるはずなのだ。しかし、相手は所詮プログラム止まり。リインのような心は持っていないため、機械のようなものだ。

（気付かないのだろうな。まさか、ここに己を窮地に追い込む術を持った者がいるとは）

（ったく、強そうなのは見かけだけかよ。ま、それでもしぶとそう

ではあるか。倒し甲斐があればいいんだがな……）

そんな事を考える二人の後ろで、アーチャーの魔力がどんどん強大になっていく。

Ｕｎｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｄｅａｔｈ.（ただの一度も敗走はなく）

Ｎｏｒ　ｋｎｏｗｎ　ｔｏ　Ｌｉｆｅ.（たたの一度も理解されない）

そして、少しずつではあるがアーチャーの周囲に異変が起き始める。空間が歪むとでも言うのか、それとも何かによって捻じ曲げられるとでも言うのか。ともかく、それを感じて、二人はいよいよかと待ちわびていた。

Ｈａｖｅ　ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ　ｐａｉｎ　ｔｏ　ｃｒｅａｔｅ　ｍａｎｙ　ｗｅａｐｏｎｓ.（彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う）

Ｙｅｔ，ｔｈｏｓｅ　ｈａｎｄｓ　ｗｉｌｌ　ｎｅｖｅｒ　ｈｏｌｄ　ａｎｙｔｈｉｎｇ.（故に生涯に意味はなく）

そこで、空気が止まった。一切の息吹が息を呑んだかのように静まり返る。この後紡がれる力ある言葉。それを待ちわびるように。

Ｓｏ　ａｓ　Ｉ　ｐｒａｙ，ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ.（その体はきっと剣で出来ていた）

世界が塗り変えられていく。空を、大地を、海を紅

く染めて……

固有結界と呼ばれる大魔術。

『魔法』にもっとも近いと言われるそれが、あらゆるモノを飲み込んでいく……

紅く染まった空。無数の剣が突き刺さった大地。

これぞ、アーチャーの宝具にして、彼を象徴する光景

その名は、無限の剣製

誰もが、言葉を失っていた。セイバーの宝具とは違った意味での凄さを目の当たりにしただけではない。眼前に広がる景色の、何と物悲しい事か。それを全員が感じ取り、何とも言えない気持ちになっていた。

セイバーは、その光景に見覚えがあるような気がしたが、どこで見たのかを思い出せない。ただ、何かがその時と違うようにも感じていた。そんな風にセイバーが悩む中、なのは達はアーチャーがやってのけた事の凄さを改めて実感していた。

（ホントに……海がなくなったや）

ランサー達も攻撃に参加出来るようにしてみせる。その言葉に嘘は無かった。実際、広がっていた大海原は綺麗に消えてしまったの

だから。そうなのはが抱いた感想を誰もが思っていた。
だが、そんな中、はやてだけがある事に気付く。それは、空。所々ではあるが雲に切れ間があり、光が差し込んでいる。そして、その先には目も眩むような青空が見えているのだ。

（は～……キレイやな……）

周囲の光景とは対照的なその部分を見て、はやては小さく感動した。今まで見てきた青空の中で、一番綺麗な気がしたのだ。どこまでも続いていそうなその空。きっと、この厚い雲が無くなればそれが一面に見えるに違いない。そう思って、はやては視線を空から後ろへ向けた。
この光景を作り出したであろう者。その者がそこにいるだろうと思って。はやてのいる場所からは見えないと分かっていてもだ。絶対全てが終わったら、この景色のからくりを説明してもらおうと密かに誓い、はやては心で告げた。

（わたしにどれだけ隠し事すれば気ぃすむんや？　帰ったら、リイン達と一緒にお説教や！）

彼女は知らない。これがアーチャーの宝具であると。そして、この景色をある赤い少女が見れば、驚きと共に笑みを見せただろう。この景色を、ある赤い髪の少年が見れば、驚きと小さな喜びを見せただろう。これは、アーチャーの心象風景を映し出すもの。つまり、切れ間から見える青空は、彼の心に光が差し込み始め、人として磨耗してしまった”何か”が戻りつつあると言う事なのだから。
しかし、それを知る者はここにはいない。その変化を知る者は、誰もいない。本人は、気付きもしない。彼の中では、この景色が変わるなどと考えるはずもないのだから。

だが、それを消し飛ばすように、一筋の閃光がアーチャー達のいる方へ向かっていった。防衛プログラムの放った砲撃だ。それに誰もが視線を後方へと動かした。

「アーチャーぁぁぁぁぁ！！」

はやてが絶叫と共にアーチャー達のいる場所目指して飛んでいく。誰もがそれに意識を切り替え、そして動いた。例え間に合わないとしても、アーチャー達を助けるために……

「……凄いな、こいつは」

「……見事よ」

展開された現象に感心したのか、二人は無意識にも近い声でそう呟いた。しかし、その顔が即座に戦士のそれへと戻る。そして、互いに近くから何かを手に取り、得物として振りかざす。槍が、刀が、迫り来る砲撃を迎え撃つ。小次郎の剣閃がその勢いを削ぎ、残りの残照をランサーの槍が相殺する。

二人が敢えて別の武器を手にしたのには理由がある。ランサーは近くに見えた見覚えのある武器の効果で魔力の砲撃を迎撃しようと考えた事。小次郎は、自分の武器が万が一にでも使えなくなる事を避けるために。

そう、二人が手にしたのは、妖刀として名高い村正とゲイジャルグだった。ここには、アーチャーが知る幾多もの武器がある。それらは全て贋作なれど、こと剣に関しては決して本物に劣るとは限ら

ない。しかも、それを担い手ではないにしろ、稀代の使い手が振るえばその真価はご覧の通りだ。

そう、防衛プログラムは、周囲の景色が変化してようやくそれを成した存在に気付いた。そして、それが一番の脅威だと判断したのだが、それは既に一手遅れていた。詠唱を終えて無防備なアーチャーを狙って、防衛プログラムが放った攻撃。それは、確かにアーチャーを仕留める事が出来たのかもしれない。

だが、彼の前にはそれを許すような者はいない。本物に迫る贋作を使い、その攻撃を完全に無効化した事からも、二人の技量の高さとアーチャーの投影の精密さが窺える。だが、二人は手にした武器を少し見つめ、丘へと戻した。

「やっぱ、俺にはこっちの方がいいわ」

「同感よ。先程の刀も私と同じで真っ当なものではなさそうだが、こちらの方が慣れておるしな」

二人の護衛は、そう言い合って防衛プログラムを睨む。もう、そちらの攻撃は意味を成さない。そう言わんばかりに。そして、アーチャーを狙える最初にして最後の機会を逃した以上、防衛プログラムにもうこの結界を破る術はない。

そう、何故なら彼は一度として敗走した事のない男。如何なる戦場からでも生き残るのだから。故に、もう敗北はない。そして、きっとこれが彼にとって初めての勝利になるのだ。

唸り声を上げる防衛プログラム。それを合図に、アーチャー達が一斉に紅い大地を走り出す。こちらへ向かってくるはやて達と合流するために、一路防衛プログラム目指して走る。増殖しようと関係ないと言わんばかりに、それぞれは邪魔な砲台を排除しながら。

やがて、アーチャー達を加えたなのは達は、全員が威嚇するように唸り声を上げる防衛プログラムを見据えた。そしてそんな中、アーチャーがはやてに告げた。

「はやて、私について来れるか？」

「何言うとる。そっちこそついて来いちゅうんや！」

互いに見せるは不敵な笑み。それになのは達は苦笑にも似た笑みを浮かべた。そして、それをキッカケに全員が動き出す。

なのはが、セイバーが、ユーノが、昔のような連携を取るために集まり、フェイトが、ランサーが、アルフが、自分の持ち味を活かすように展開し、はやてが、アーチャーが、守護騎士達が、自分達の手で決着をと言わんばかりに構え、ライダーが、小次郎が、少女達が互いに託した想いに応えようとする。

そして、アリアとロッテが複雑な想いを抱きながらも、その巨体を睨んだのを確認し、クロノが大声で叫ぶ。

「哀しみの連鎖をここで絶つ！　みんな、最後まで気を抜くなっ！」

それに全員が頷き返す。ある者は家族を助けるために。ある者は友人を助けるために。ある者は過去に決着を着けるために。ある者は絆を守るために。それぞれがそれぞれの想いを、信念を胸に闇へ立ち向かう。

明日への灯火と愛しき者達の笑顔。かけがえのないそれを守り抜くために。そして、奇跡を願う祈りを叶えるために。その胸に、消える事無き勇気の炎を灯して……

――――――――――――――――――――――――――――――――

ーーー

A' s十二話　後編

この時を待っていたとばかりに先陣を切ったのはランサーだ。最速のサーヴァントの全力。それを初めて目の当たりにするなのは達は、揃って驚きを見せた。フェイトが雷光ならば、ランサーは閃光だ。瞬く間に防衛プログラムへ手にした槍を突き当てた。

しかし、それが何かによって阻まれる。多重層の防御魔法だ。本来ないはずのリンディ譲りのシールドもそこには組み込まれ、さしものランサーの一撃も、それを全て突き破る事は出来なかった。何故なら、ランサーの槍がそれに阻まれた瞬間、防衛プログラムが好機と判断し、攻撃してきたのだから。

「ちっ！」

すかさず第二撃をと考えていたランサーだったが、それにより中止を余儀なくされる。ランサーが退くのと入れ代わりに切り込んだのはセイバーと小次郎の和洋剣士組だ。

「「はぁぁぁぁっ！」」

重い剣閃と鋭い剣閃が交差する。それにより、一層は貫いたものの、完全突破するには至らない。それに悔しげに顔を歪めるセイバー。小次郎はやや感心したような表情でその場を離れる。ならばと、シグナムとヴィータがそれぞれの相方を振り上げたのを見て、なのはとフェイトが同時に魔法を放つ。

「ディバイィィィン……バスタァァァァッ！」

「プラズマっ！　スマッシャー！」

その二色の光芒が狙ったのは、防衛プログラムの砲台。シグナムとヴィータを攻撃するべく出現したものだ。あのコンビ戦で、ある程度とはいえ互いの動きや考え方は理解出来たからこそ、なのはとフェイトは二人の動きを邪魔しないような射線で攻撃を放つ事が出来た。

ベルカの騎士達は、その援護に内心小さく笑みを浮かべながらも、表情は凛々しいままに力強くその武器を振り下ろす。それもやはりある程度防御魔法を弱める事が出来たものの、完全には突破出来ない。

そんな光景を見つめ、アーチャーが視線を自分と同じく後方に位置するシャマルとアリアへ向けた。

「あの光景を見て、何か意見はあるか？」

「……これだけいるのだから、突破は可能よ。問題は、その後かしら」

「私もアリアさんと同じ意見。突破したとして、その後の止めまでの流れを組み立てないと駄目」

それにアーチャーも頷き、視線を前方に戻した。やはり、なのは達の方も同じような結論に至ったクロノが中心になり、散発的な攻撃をしなくなっている。それを確認して、アーチャーは指示出しをクロノに一任する事にした。

自分がやってもいいのだが、ここは闇の書との因縁を断ち切る気持ちの強いクロノの方が適任だと思ったのだ。それに、今の自分の気持ちも司令塔などではなく、八神家の一員としてこの戦いに参加したいと思っているのもある。

「アリア、指示は君に任せるとクロノへ伝えてくれ。シャマル、君はクロノとアリアと協力して最後の止めまでの組み立てを頼む」

「アーチャーは……」

そんなアーチャーの言葉に、やや疑問を浮かべて問いかけようとするアリアだったが、それを遮るようにシャマルが告げた。

「行くのね」

「……ああ。ここからは打って出させてもらう」

そう言ってアーチャーはその手に双剣を投影し、走り出す。その背を見送り、シャマルは少しだけ微笑みを浮かべると、力強い眼差しをアリアへ向けた。

「私は最後の止めのために核を取り出します。アリアさんは、それをアーチャーの前へ送る転送魔法を担当してください」

「え、ええ……」

その迫力にアリアは少しだけ飲まれる。だが、すぐに気を取り直して、真剣な表情でクロノへアーチャーの言葉を伝えだす。今すべき事。それは、闇の書の悲劇を終わらせる事だと思い返したのだ。

それこそが、自分とロッテ、父と慕うグレアムの願い。そして、もう一人。闇の書によって愛する家族を残して散ったクライド・ハラオウンも、それを心から願っているはず。そう思い、アリアは持てる力の全てをここで使い切る覚悟を抱く。

（復讐なんて、クライドは望まない。なら、私達がすべきは闇の書の封印ではなく完全破壊。二度と誰も……私達と同じ想いをしないように！）

クロノと防御魔法突破の段取りを念話で話し合いながら、アリアは改めてそう誓う。シャマルとアリア。本来ならば並び立つはずのなかった二人が、共に力と思いを重ねて闇に挑む。自分達の視線の先で戦う者達を支えるために……

ＢＲＡＶＥ　ＢＬＡＺＥ

多重層の防御魔法を破るために、それぞれが同じ結論に達してはいた。一気に破る事が出来ないのならば、分担して破るしかないと。そのためには、防御魔法を修復する暇を与えずに攻撃するしかない。しかも、それだけではなく、アーチャーが核に止めをさせるように考えなければならない。

そのため、誰もが手出しを控え、アーチャーの指示を待った。こういう時、彼らに的確な指示をしていたのはアーチャー。故に誰もがその言葉を待っていたのだが、クロノが突然表情を驚きに変えたかと思うと、周囲に大きな声で告げた。

「アーチャーが僕に指示を出せと言ってきた！　異論がなければそうするが、どうだ！」

その言葉になのは達魔導師組は戸惑うが、セイバー達はあっさり

と頷いてみせた。信じているのだ。選んだアーチャーを、そして選ばれたクロノを。そんな風にセイバー達が了承を返すのを見て、なのは達もクロノへ視線を向け、頷いてみせる。

それにクロノは小さく頷き、即興ではあるがいくつかのコンビに分かれるように告げた。なのはとヴィータ、ランサーとフェイト、はやては自分と。シグナムは遅れてきたアーチャー、セイバーとアルフ、ザフィーラとライダー、そして小次郎とロッテだ。

「ユーノはアリアと共に、最後の止めの補助を頼む！」

「分かった！」

返事を返すや否や、ユーノはシャマル達のいる位置まで急いで向かっていく。そのほんの一瞬、ユーノはなのはの方を見て念話を送る。

――――気をつけて。

それになのはは念話ではなく、笑顔を見せる事で答えとした。その笑顔にユーノも笑顔を返して、後方へと下がっていく。

「まずは、フェイト達が先行してくれ！　指示はそれぞれに念話で伝える！」

そう、声ではなく念話を使い、聞き逃す事のないように指示を出す。そのために、クロノは相性だけではない組み合わせを指示したのだから。そんなクロノの声に、ランサーとフェイトが光となって動く。手にしたのは、槍と大剣。だが、その動きはどこか似ている。防御プログラムがそれを迎撃する事も出来ず、ただその攻撃を受ける事しか出来ぬ程の速度で突撃する二人。

「貴様の守り、突き破るっ！」

「これでっ！」

共に手にした武器に力と想いを込める。いや、ランサーは本当に魔力を込めている。そして、それが意味するのは、たった一つ。

「刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルク）っ！！」

「ジェットザンバーっ！！」

宝具を解放するランサー。因果を操作し、相手の心臓を穿つその一撃は、防衛プログラムの多重層防御魔法に阻まれる。しかし、それでも雷光と共に一つ突き破ってみせた。そう、ランサーは別に心臓を狙った訳ではない。自分の持つ宝具の効果ではなく、出し惜しみはしないとの思いからの真名解放だったのだから。

その攻撃に防衛プログラムが恐怖した。本能的なものだろう。ランサーの一撃に込められた死の因果。それを、闇の書の闇たる故に感じ取ったのかもしれない。だが、即座に二人はその場を離脱すると、それを知っていたかのようにセイバーとアルフの攻撃が炸裂する。

「風よっ！　薙ぎ払え！」

「ぶち破れぇぇっ！」

セイバーの聖剣が唸りを上げ、竜巻を巻き起こして周囲の砲台を薙ぎ倒せば、アルフのバリアブレイクが防衛プログラムを守る盾に

ひびを入れていく。更にアルフの隣へロッテが現れ、同じ場所に拳をぶつけた。セイバーの隣には小次郎がいる。その構えを見て、セイバーは後を頼むとそこから離れる。それに気付き、アルフも飛行魔法を使い離脱。

「さて、全力で剣を振るとしようか」

「アルフに負けてらんないんだよ！」

ロッテの攻撃もバリアブレイク。そして、小次郎は必殺の構えから、この海鳴に来てから初めての全力での剣閃を放つ。それは、彼を”佐々木小次郎”たらしめる技。ひたすらに剣の才を磨き続けたが故の一撃。

「秘剣……燕返し！」

小次郎の宝具とも呼べる一撃。それがアルフとロッテが作った守りの綻びを大きくする。そして、それが二層目を突破してみせるが、それを見届ける事無く二人は撤退する。そして、間髪居れずに聞こえる声。それは、共にデバイスのもの。

なのはのレイジングハートが、ヴィータのグラーフアイゼンが、カートリッジを排出したのをキッカケに、揃って形を変える。エクセリオンモードとギガントフォルム。今の二人の全力だ。

「エクセリオォォォォン」

「轟天！　爆砕っ！」

なのはとヴィータは、共にカートリッジを排出させ、一度だけ互いを見やり頷いた。

「バスタァァァァァッ！！」

「ギガントっ！　シュラァァァァク！！」

桃色の魔力光を押し出すように、巨大な鉄槌が防衛プログラム目掛けて振り下ろされる。恐ろしい程の魔力を、その鉄槌が加速させるかの如く押しやった。魔力と打撃による同時攻撃。これが第三層を突破した。それに防衛プログラムが絶叫にも似た声を上げる。恐怖を表現しているかの如きその声は、ここまでの攻撃が効いている証拠だ。

しかし、それに気を抜くような者はここにはいない。まだだ、まだここからだと言うように、全員が視線を鋭くしていたのだから。そして、その雄叫び響く中、残った防御を全て貫いてみせようと、アーチャーとシグナムが地上と空中で同じように構えた。

シグナムのレヴァンテインが鞘と繋がり、弓へと変わる。そして、流れるように構えるシグナム。その姿にアーチャーは感心したように笑みを見せ、共に弦を引く。シグナムの弓に番えられるは魔力の矢。対するアーチャーの弓に番えられるは歪な矢。

「翔けよ！　隼っ！」

”シュツルムファルケン”

「偽（カラドボルグ）・螺旋剣！！」

放たれた二つの矢は、防衛プログラムの纏う魔法に衝突する。中々、それを二つの矢が突破出来ず、シグナムが少し苦い顔をした時だ。アーチャーは意を決して小さく呟いた。

――壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）……

それをキッカケにアーチャーの矢が大きな爆発を起こす。それこそ、フルンディングが起こした爆発の正体。投影した宝具を敢えて破壊する事で、恐ろしい程の威力を発揮させるアーチャーにしか出来ない攻撃だ。

それが防御を脆くしたのか、シュツルムファルケンがそれを貫通してみせた。これを以って四層を突破。残るは、一つ。それを悟り、爆発の余波が残る中、ライダーは自身の乗るペガサスの背を一度だけ優しく撫でると、宝具を解放した。

「騎英の手綱（ベルレフォーン）っ！」

その白い彗星のような姿を見て、防衛プログラムは瀕死ながらも反撃を試みた。その砲撃がライダーへ当たるものの、それをものともせずに白い彗星は進む。それに慌てるように、もう一度砲撃の数を増やして反撃をしようとする防衛プログラムだったが、その行動が叶う事は無かった。

何故ならば、展開させた砲台全てが光の鞭のようなもので切り落とされたからだ。それをやってのけた者は、防衛プログラムへ突撃するライダーへ視線を向けて叫ぶ。

「行けライダー！　お前の道を邪魔するものはないっ！」

ザフィーラの声を背に、ライダーは残った防御魔法へ突撃し、それを見事に突破してみせた。これで、防衛プログラムを守るものは何もない。それを認識するや、クロノとはやてが動く。止めのための行動。そのための時間を稼ぐために。

それ故、はやてはリインからこの状況で一番いい魔法を教えても

らい、その詠唱を開始していたのだから。クロノも、持てる魔力のほとんどを費やし、手にしたデュランダルへ意識を集中させていた。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け……」

「悠久なる凍土。凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ。凍てつけ……」

はやては、初めての強力魔法使用にその神経を使いながら、リインの補助を受けてそれを必死に成功へと導こうと努力する。しかし、その表情には、欠片も不安はない。それどころか、その視線は一度たりとも防衛プログラムから逸らす事はなかったのだから。

一方クロノも、デュランダルの制御に細心の注意を払いつつ、己の持てる全てを使いその真価を発揮させようとしていた。彼の視線も、鋭く防衛プログラムを睨んでいる。

（わたしに力が無かったせいで、戦う事しか出来ひんでごめんな。でも、代わりに一つ約束するわ……）

（父さん、今度会いに行った時、貴方の一番聞きたかった事を報告してみせます。だから……）

同じように今回の戦いに複雑な想いを抱く二人。だが、それでも共通するのはただ一つ。

（（絶対、闇の書の悲劇は終わらせる……今日、ここでっ！））

この因縁を断ち切るという確固たる決意。

「石化の槍、ミストルティン！」

「エターナル・コフィン！」

はやての、クロノの、それぞれの想いを乗せた魔法が防衛プログラムを襲う。はやての魔法がその巨体を石に変え、クロノの魔法がそれを凍りつかせていく。その光景になのは達が驚きながらも、その狙いを理解して視線をクロノへ向けた。

その周囲の視線の意味を理解し、クロノは先程の氷結魔法の疲れを少し感じながらも力強く告げる。

「次で最後だ。奴へ大ダメージを与えて核を露出させるか、最低でも位置を特定させる。それをシャマルが捕まえ、アリアとユーノが転送する」

「そして、私の前へ……か。了解した」

アーチャーはそう言うと、その手にルールブレイカーを投影した。それを横目にしながら、セイバーが尋ねた。何でその大ダメージを与えるのかと。セイバーは自分の宝具は使えないと告げた。その理由は、この状況にある。

エクスカリバーでは、固有結界を吹き飛ばしかねないのだ。その意見にアーチャーも同意した。固有結界が消えれば、再びここは海に戻る。そうなれば、色々と面倒にもなりかねない。よって、セイバーは自身の宝具は使用不可と言った。

ライダーやランサーも同様だ。彼らの宝具は固有結界を破壊する事はないが、些か核を残せるかは微妙なところ。小次郎は、火力が違いすぎるので当てにするなと言い切った。すると、なのはが意を決して告げた。

――私がやるよ。スターライトにカートリッジを使って。

それに周囲が納得する中、フェイトがならばと続く。

――じゃ、私も協力するから。全力のザンバーなら、きっと……

その言葉になのはが嬉しそうに頷き、それを聞いたセイバーが優しく笑みを浮かべた。自分が二人の宝具と呼んだもの。それを、ここで使う事に微笑ましく思ってしまったのだ。きっと、二人は自分達が宝具を使えないと聞いて、それを意識したのだろう。

ここぞという時しか使ってはならない。その言葉を正しく理解し、また使いどころを弁えている。そんな風にセイバーが考えていると、はやてがそんな二人へこう言った。

――わたしも参加する。けじめは、わたしが着けなあかん思うし。

その声に込められたものを感じ取り、なのはとフェイトは真剣な表情で頷いた。そして、三人は三方に散開し、準備に入る。セイバー達は念のために三人の護衛についた。三人から魔力の高まりをはっきり感じ、セイバー達はそれぞれ終わりが近いと思っていた。

それと同時に思い出すのは、この夏からの出来事。リインが覚醒した時から始まった一連の流れ。それに、やっと終止符が打てる。一時はどうなるかと不安に思った時もあった。それでも、こうして多くの絆が合わさって、最高の形での結末を迎える事が出来そうだ。そんな風に一人を除いて全員が思っていた。

「行くよ、レイジングハート！」

”いつでもどうぞ”

「やるよ、バルディッシュ！」

”心得ています”

「リイン、ええな！」

”はい。これで終わりにしましょう”

それぞれが自分達の大事な存在へ声を掛ける。その答えは、どれも力強さを秘めている。それに頷くように、感謝するように、三人は構えた。

「「「これが私（わたし）の全力全開！」」」

揃って告げるは、意思表明。全てを出し切る。それに呼応するように、レイジングハートとバルディッシュからはカートリッジがありったけ排出された。その力と想いを込め、なのはは手にした杖を、フェイトは剣を掲げた。はやても微かに浮かんだ哀しみを振り払うように、杖を高々と掲げる。

視線の先にいるのは、動かぬ防衛プログラム。石にされ、氷で包まれ、身動き一つ出来なくなった存在。それでも、油断も同情もしない。夜天の魔導書を闇の書という名に変えた要因。それに、対して終わりを与えて眠らせてやるために。

「スターライト！　ブレイカァァァッ！！」

「プラズマ！　ザンバァァァッ！！」

「響け、終焉の笛！　ラグナロクッ！！」

三色の輝きが、防衛プログラムへと迫っていく。その光景を見つめ、セイバー達は何も言わない。ただ信じているからではない。確信したのだ。勝ったと。もう、それは誰が見ても明らかだったのだ。氷を砕き、石となった部分を吹き飛ばし、三つの魔力光が闇をかき消していく。

そして、それと共にシャマルが旅の鏡を使い、中心にあるであろう核を掴もうとしていた。やがて、その探るようだった表情が一変した。

「捕まえ……たっ！」

「アーチャーっ！」

「後は頼みます！」

アリアが転送魔法を展開し、ユーノはその間も再生するであろう核の周囲に、防御魔法を展開する事でそれを少しでも抑える。そして、生物のようなおぞましい姿の核がアーチャーの前へ出現する。それに躊躇う事無く、アーチャーはルールブレイカーを突き立てた。

――破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）！

万全を期して、核相手に真名解放を以って望んだアーチャー。それは、核を綺麗に消滅させた。それを見届け、アーチャーは安堵した。自分の中での懸案がこれで消えたからだ。バグ本体が魔力で出来ていて、ルールブレイカーで無力化出来る事が判明したのだから。

それこそ、アーチャーが知りたかった事だった。もしもの時のための保険。それが、これで有効かもしれないという可能性が持てる。そう思い、満足そうに頷くアーチャーだったが、すぐに思考を切り

替え視線をはやてへ向けた。

「はやて、まだ終わってはいないぞ」

「分かっとる。蒼天の書やな」

その言葉に全員が思い出した。リインの機能全てを蒼天の書へ移し、それを無力化する。そうしなければ、リインを母体にバグが復活してしまうのだから。はやてからリインが分離する。そして、はやての体をなのはとフェイトが支えた。

そこへシャマル達も合流した。シャマルの手には蒼天の書が握られている。転送魔法で取り寄せたのだ。それを受け取り、はやてはリインの機能移転を開始する。懸念されたはやてを管理者として認めないのではとの不安もなく、機能移転は滞りなく終了した。

そして、アーチャーはそれと同時に、蒼天の書へもルールブレイカーを突き立てた。それが蒼天の書から全ての機能を失わせる。そこに残ったのは、ただの古びた本となった。念のために確認し、もう何の変哲もない白紙の本と判断された瞬間、はやては眠るように意識を失った。

それに周囲が慌てるが、リインが、魔法使用による疲れが緊張の糸が切れるのと同時に一気に出たのだろうと告げると、安堵の息が周囲から漏れた。

するとアーチャーがやや申し訳なさそうな表情をした。それに気付いたクロノがどうしたのかと尋ねると、アーチャーはどこか苦い顔をしながら答えた。

「何、少々魔力を使いすぎたようだ。そのために、もう少しで結界が維持出来なくなるのでな。陸まで運んでくれると助かる」

「おい、俺達はどうなってもいいのかよ」

「言うなランサー。私達には走れと言いたいのだろうよ」

「では、君達も頼めばいい。シグナムかヴィータ辺りにでもな」

やや呆れるようなランサーの指摘に、小次郎は楽しそうに笑って答える。それにアーチャーは苦笑しながら、否定も肯定もしない。仕方ないとでも思ったのか、ランサーと小次郎は先に戻ってると告げ、陸地だった場所辺りを目指して走り出す。

ライダーはペガサスから降り、ザフィーラへ何事かを告げて苦笑されていた。それを横目にセイバーは、ユーノへなのは達を転送魔法で送ってやって欲しいと頼んだ。それは、激戦と最後の魔法による疲労を考えての事だった。ユーノはそれに頷いて、セイバーはそれに笑みを返し、ランサー達のように陸地目指して走り出す。

「じゃ、行くよ。なのは、フェイト」

「うん」

「お願いするね」

はやてをシグナム達に託し、二人はユーノと共にその場から消える。アルフはそれを見送り、ロッテとアリアへ視線を向けた。

「助かったよ。二人がいなきゃやばかったかも」

「そんな事ないわよ」

「そうそう。でも、これで全部終わったんだね……」

アリアはアルフへ疲れた顔で返事を返す。ロッテも同じような顔だったが、最後の言葉には万感の思いが込められているように、アルフには聞こえた。いや、アルフだけではない。シグナム達にもそう聞こえたのだから。

しかし、それを聞き出す前にクロノが軽くよろめいたため、二人はそんなクロノを支えて、アースラへ戻ると言って転送魔法で消えた。ライダーもそれに呼応し、すずか達のいる場所まで行ってみると告げ、走り出した。

「では、我々も行こう。はやてを休ませなければならないしな」

「そうだな。主の予定していた祝勝会は……」

「しばらく延期かしらね。もし翠屋でやれるなら、そうしたいけど」

シグナムの言葉にシャマルがそう応じる。その内容にヴィータが呆れながら告げた。

「別に忍さん家でもいいじゃねぇか。ま、あたしは美味いもん食えるなら、どっちでもいいけどな」

「……言い方はともかく俺もヴィータの意見に賛成だ。それよりも今は、主を休ませる方が先だろう」

ザフィーラの苦笑いと共に告げられた言葉に全員が頷き、動き出す。アーチャーはシャマルが転送魔法で運ぶ事になり、はやてはリインが家まで運ぶ。シグナム達はなのは達と合流し、今後の事についてリンディ達から話を聞いてくる事になった。

アーチャー達もそれに合流するため、はやては完全にリインが傍についてやる事になった。そのため、六人は出来る限り早めに戻ると告げた。

「リイン、主を頼んだぞ」

「出来るだけ早く帰るかんな」

「すまんな。我々も話が終わり次第、すぐ家に戻る」

そう告げて三人はセイバー達を追うように飛んで行った。その背を見送り、シャマルがアーチャーへ視線を向ける。

「じゃ、私達も」

「ああ。リイン……」

シャマルの声にアーチャーも応じるが、視線をリインへと向けた。それにリインは不思議そうな表情を浮かべる。

「どうした？」

「……いや、何でもない。はやてを頼む」

「心配性だな、お前達は。安心しろ、ちゃんと主の様子は見ているから」

それを合図にシャマルとアーチャーもそこを後にする。それと同時に紅い景色が消えていく。それを眺め、リインは感心した。だが、その表情がはやてへ視線を移した時、一瞬だけ少し暗いものへ変わ

る。

――――多少は時間が稼げた……か。

その呟きは、誰に聞かれる事無く、明け始めた空に消えた……

総力戦の末、打ち倒した闇。だが、その根は想像以上に深い。リインの呟きが意味するものは、避けられぬ永遠の別れか。

古よりの闇。その繋がりを断ち切るのは、不可能だったのだろうか……？　その答えは、夜が明けた先にある……

――――――

A' s十三話　前編

あの戦いの後、リンディはアーチャー達がやってきた蒐集行為についての処分を告げた。とはいえ、管理局上層部への報告としての体裁を整えるためのものであり、実質は形式的なものだったが。

その内容は、情状酌量の余地がある事と、第一級危険指定のロストロギアを相手にし、犠牲者無しで完全破壊を成し遂げた事もあり、かなり温情のあるものとなった。結果が良かったためでもあるが、それでもリンディとしてはこれが予想通りだった。

グレアムやリンディの計らいで、今回の事はあくまでも主の命を助けるために守護騎士達が独自で動いた事となり、蒐集相手を魔法生物にし、被害や迷惑を抑えようとした事も考慮に入れる事になった。はやての罪はなく、むしろ管理局に協力して闇の書を破壊するべく助力したとして、それを以って闇の書は完全に歴史の表舞台から消える事になった。

守護騎士達は闇の書の完成を以って主を助けたいだけだった。主はそれを知らず、完成した後はその危険性を知り破壊に尽力した。プレシアは嘱託魔導師として活躍し、なのは達現地の民間協力者も先のジュエルシードの時と同じく、その力を貸して事態の収拾に務めた。

リンディは上層部へは概ねそんな内容の報告になると告げた。恐らく守護騎士達への判決は、比較的軽いものになるはずだとも。そして、そんな話が終わり、それまで黙っていたクロノがゆっくりと口を開いた。

「……本当に、終わったんだな」

「そうだね。リインさんの機能を全て蒼天の書へ移したし、バグも無力化した。これなら、もう大丈夫っしょ」

エイミィの明るい声に、全員が笑う。だが、そこになのはやフェイトと言った子供の姿はない。流石に激戦だった事もあり、ゆっくり休ませようとリンディが判断。そのため、なのは達はそれぞれ自宅に帰り、今頃は安らかに眠っているだろう。

セイバーは高町家の者達へ報告するために。ランサーはプレシアが休んでいるための代理として。アーチャーははやての代わり。ライダーと小次郎はそれぞれ結末を気にしているだろう少女のために。その理由でこのアースラに残っていた。

「僕らは、もう少しここに残り、闇の書事件の調査等を行なう」

「念のため、残留しているものがないかどうかを確かめるためにです」

「ま、でもすぐ終わると思うよ。だから……きっと一週間もいないと思うから」

三人の言葉にセイバー達は頷き、何なら手を貸すと申し出るが、それをリンディ達は丁重に断った。ここからは完全に管理局の管轄だからと。それにセイバー達も理解を示し、納得した。

ジュエルシードとは違い、今回はその危険性が認知されている闇の書が相手。しかも、表向きはプレシアが報告して地球へ来ている。であれば、その行動はあの時とは違い本格的なものとなるのだ。そこに、民間協力者の出る幕はない。

「……では、早い内に祝勝会をしなくてはなりませんね」

セイバーが柔らかい笑みと共に告げた内容に、全員が同じような笑みを浮かべた。それは、あの時の翠屋での一時とは違い、本当の意味での祝宴。今回祝うのは、困難な相手と戦い、全員で掴んだ勝利なのだ。それにリンディ達の顔がないのは考えられない。

だが、そんな風に話すセイバー達と違い、リーゼ姉妹はどこか表情が暗い。自分達の事を何も知らないセイバー達。その気持ちを感じる度に、嘘を吐いている罪悪感がのしかかるのだ。そんな二人の心境を知っているアーチャーとクロノだったが、それは自分達が口を出す問題ではないと思っているので、敢えて何も言う事はしない。

だが、二人はリーゼ姉妹に対して、揃って同じ事を考えていた。それは、祝勝会にグレアムを招かせる事。真実を話す事は望まないが、ある程度の事実は話させるべきだ。でなければ、グレアムもリーゼ姉妹もいつまでも負い目を感じながら生きなければならないと、そんな風に考えていたのだから。

「祝勝会には、リーゼ姉妹の主も呼んでみてはくれないか。今回の影の功労者のようなものだ。こちらも感謝を述べたい」

アーチャーの言葉にリーゼ姉妹の表情が驚きに染まる。だが、周囲はそれをアーチャーの提案が予想外のものだったからだろうと思った。

しかし、その提案自体は確かにと思ったのだろう。セイバー達も守護騎士達も揃って同意し、是非伝えて欲しいと告げた。それにリーゼ姉妹はやや困った声で一応伝えてはみると返した。

そうして、話は終わりと見てランサーが体をほぐすように肩を回し始める。

「とにかく、一先ずは休むとすっか。派手に暴れた事だしな」

「ふむ、確かに刀の手入れをしたい所でもある」

「祝勝会の事は、また後日にでも」

ライダーがそう締め括ると、リンディ達は笑みを浮かべて頷いた。

「ええ。最低でも帰る前日には連絡はしますから」

「そうしてくれ。場所は、翠屋よりも月村家の方がいいかもしれんな。人数も増えた。翠屋でも、些か狭いだろう」

「そうですね。では、モモコ達にはそのように」

「私はシノブに話をしておきます。まぁ、即座に了承するでしょうが……」

「間違いないね」

ライダーの苦笑混じりの言葉にエイミィが即答した。それでまた小さく笑いが起き、その場はそれで解散となった。シグナム達はリンディ達へ頭を下げ、温情に心から感謝した。アーチャーも同じようにリンディ達へ感謝を告げ、五人ははやてが気になるからと急ぎ目に帰って行った。

それを見送り、セイバー達もリンディへ別れを告げて去った。そして、アースラ関係者以外がいなくなったのを確認し、クロノがエイミィへ少し休んで欲しいと告げた。蒐集による疲れもあるだろうからと。それにエイミィが少し嬉しそうな反応を返し、リンディへ許可を取って自室へ向かう。

その背中が見えなくなるのを待って、クロノはリーゼ姉妹へ真剣な眼差しを向けた。それに二人は一瞬だが体を震わせる。

「……アーチャーからの言葉をグレアム提督に伝えてくれ。是非出席して欲しいものがあると」

「クロノ……」

「それは……」

それが何を意図しているかを察し、二人は言い淀む。だが、それにクロノははっきり告げた。

「いつまでも隠し通して、自分や周囲を騙して生きるつもりか。はやても守護騎士達も理解はしてくれる。だから、納得までするかは君達と提督次第だ」

「……クロノの言う通りよ。アーチャーさんもきっとそう考えているはず。確かに色々と思う事はあるわ。でも、だからといって過去に縛られたまま生きるのは駄目。きっと提督も、それを気付いているはず」

そのリンディの言葉に二人は互いの顔を見合わせ、若干の躊躇いを見せる。だが、同時に意を決して頷き合うと、視線をクロノ達へ向けた。その眼差しの強さに、クロノとリンディは嬉しそうに笑みを見せた。こうして、決戦の夜は明けていく。そして、決着の時が静かに近付いてくるのだった……

早朝の八神家。その庭に、リインの姿があった。視線は昇った朝日を見つめ、その眩しさに軽く目を細めていた。

「……良い朝だ」

あの後、リインははやてを部屋へ寝かし、その傍で寝顔を見つめていた。その安らかな表情をリインは嬉しく思いながら、ずっと見つめていた。アーチャー達が帰ってくるまで、ただそうしていた。リンディ達の下した処分内容を聞いて、リインは改めてリンディ達の計らいに感謝した。

数ヶ月の管理局への勤労奉仕。それだけで済ませてくれるのだから。そのメンバーの中に自分の名が入っているのを聞いた時、リインは不覚にも嬉しく思ってしまった。自分がこれからもいるものだと考えてくれている事に。

そっとリインは自分の胸に手を当てた。機能のほとんどを無くし、今やこの身はただの管制人格の出来損ないとなった。転生機能もユニゾン機能さえももう失った。今、リインに残されているのは、魔法を使う能力だけだ。

これからは、はやて達と共に生きていく。残された時間が尽きるまで。そう考え、リインは小さく笑う。それは、達観の笑み。そう、薄っすらとではあるがリインは気付いたのだ。あの時、アーチャーが蒼天の書を無力化した瞬間、自分の中でバグが再生を始めたのを。原因は分からない。だが、何となくだが、リインは理由に思い当たる事があった。

（あれは、私と密接に繋がっているのだろう。だから、私がいる限り機能に関係なく甦る。その繋がりがある限り……何度でも……）

だが、本来ならばすぐにでも復活するはずがそうならないのは、やはりリインの体にそれを促す機能がないからだろう。それをリインも感じ取っている。それ故に少しは時間が稼げたと言ったのだから。そして、その残り時間も……

「後、半年程か……」

何とか旅行には行ける。そんな風に思い、リインは何かが頬を流れている事に気付いた。それにそっと手を当て、視界の中へ入れた。

「涙……？」

何故涙が出るのだろうと、そんな風に思い、リインは軽く疑問を浮かべる。だが、その原因へすぐに思い当たった。自分の考えた事。それが、きっと涙を流させたのだろうと。年明けの旅行には行ける。だが、それは裏を返せば、はやてが歩けるようになるのを見る事は出来ない事を意味する。

それだけではない。四月から通うだろう学校。その晴れ姿も見る事が出来ない事を意味するのだから。つまりリインは、自分がこれから様々な事を経験するであろうはやての傍に居られなくなる事を感じ、無意識に悲しく思ったのだ。

そして、もう一つ。それは、自分が消える事ではやてを初めとする多くの者達が悲しむだろう事。皆が自分を助けるために尽力し、戦ってくれた。だが、それを無駄にしてしまう事にリインは悔しさと申し訳なさを感じていた。

「……残された日々を、精一杯生きよう。それが、せめてもの恩返しだ」

自分へ言い聞かせるように呟くリイン。その視線は、明々と大地を照らす太陽を見つめていた……

それから半日後。八神家前には、なのは達六人の姿があった。はやてのお見舞いだ。学校を終えたなのは達はこうして一度帰宅し、なのはとユーノは士郎達から差し入れ用にケーキを渡され、フェイトとアリシアは果物。アリサは花束ですずかはお勧めの本と見事に被る事無い選択をしていた。

それにアリサが軽く感心し、すずかはなのは達は予想出来たから食べ物系は避けたと告げた。それにフェイトとアリシアが果物は不味かったのかと少しだけ慌てるが、なのはがお見舞いに果物は定番だから大丈夫と告げ、それを落ち着かせた。ユーノはそんなやり取りを横目に、チャイムを押し玄関を開けてもらおうと呼びかけた。

『どちら様ですか？』

「あ、ユーノです。みんなではやてのお見舞いに来たんだ」

『そうか。今開ける。少し待て』

ザフィーラの声にユーノは返事を返し、後ろの五人へ視線を向けた。なのはの持ってきたケーキが気になるアリシア。それを止めるフェイトとアリサ。そんな四人を見て微笑むすずか。その光景を見て、ユーノは笑みを浮かべた。またこうして平和な時間が戻ってきたのだと実感したのだ。

もうこれで何も問題はないはず。ロストロギアが地球にそう何個もあるとは思えないし、あったとしても早々闇の書クラスのような物があるとは思えない。これからは、自分達も歳相応の生活が出来るはず。そうユーノは思った。

「待たせたな」

そんな事を考えていると、玄関が開いてザフィーラが姿を見せた。それにユーノは軽く首を振った。

「いえ、そんな事ないです」

「ザフィーラ、はやては？」

そんなユーノの言葉にかぶせるように、アリシアが開口一番そう尋ねると、ザフィーラは苦笑を浮かべて中へ視線を向けた。それに全員が倣い、視線を玄関の中へと向けた。そこには、車椅子に座って笑顔を見せるはやてがいた。

「いらっしゃい」

「「「「「はやて（ちゃん）！」」」」」

六人の嬉しそうな声に、はやては浮かべた笑みをより深くするのだった……

「いやぁ～、起きたらめっちゃ気分良くてな」

「ホント元気そうだね、はやてちゃん」

「何か心配して損したわ」

にこにこと笑顔でそう告げるはやてに、すずかとアリサが嬉しそうに笑って言った。なのは達も笑顔ではやてを見ている。八神家一同は、朝からはやてが元気なのを知ると、それぞれがいつものように動き出した。

アーチャーは、朝方に一人リンディ達と祝勝会について話すために出かけ、今はリインと二人で月村家へ向かったとの事。おそらくそちらも祝勝会関係の話だろうとはやては語った。シグナムは昼過ぎにバニングス家へ行き、小次郎と手合わせすると言って出て行ったきりまだ戻っていない。アリサが帰宅した際、小次郎は外出したと聞いたので、おそらく高台辺りで試合をしているのではと告げた。

シャマルは翠屋で仕事。復帰一日目だからと気合を入れて出て行ったとザフィーラが言うと、全員が笑みを見せた。ヴィータは公園で老人達とゲートボールをし、そのまま今日はゆっくり話してくるとの事。故に家に残っていたのはザフィーラだけだった。

「でも、本当に回復が早いね」

「それなんやけど、ルーンやったか？　あれ、部屋に刻んでもらったからやないかってアーチャーが言うとった」

「そっか。ランサーが太陽のルーン刻んだね」

ユーノの意外そうな言葉にはやてが告げた内容。それにフェイトはその効果を思い出しながらそう言った。自分の母の体を支えた力。その効力は彼女が良く知っているのだから。それを聞いてなのは達

も納得した。何せ、ルーンがかなりの効果を有しているのはセイバー達から聞かされていたのだ。

本来ならば手の施しようがない状態になるはずのプレシア。その病気の進行を食い止め、最後の方まで吐血する事無く延命させたのだ。仮にそれが無くてもプレシアはセイバーのアヴァロンで助かったはずだが、もしかすると色々な事が細々と変化したかもしれないとランサーは考えていた。

そういう事を簡単ではあるが、なのは達は間接的にそれぞれの家族達から聞かされていた。なので、はやての驚異的な回復能力にも心から納得出来たのだ。

「にしても、不思議なもんや。わたしらがアーチャー達と出会った事が偶然やなくて、実は運命だった気ぃしとるんよ」

「……それは私も思う。セイバーと会って、そこから色々と変わった事が沢山あるし、フェイトちゃん達と友達になれたのもその一つだと思う」

「うん。私もそう考えてる。ランサーが来て、あの日から全部変わったから。ジュエルシードの時も、今回の時もそうだった」

「ライダー達が私達の縁を繋いだ。それは、絶対間違いないよ。ううん、それだけじゃない。私の場合は生まれの事まで話す事が出来たんだから」

「そうよね。小次郎達がいたからアリシアとも友達になれたし、フェイトのママの事も解決出来た。更に今回の怪物は、なのは達だけじゃ結構厳しかっただろうしね」

「何が奇跡って言われたら、セイバー達がなのは達と出会った事そのものが奇跡だったのかもしれないね」

なのは達の言葉をユーノが締め括るように告げると、それに五人が神妙な表情で頷いた。アリシアは、アリサの言った内容に不思議そうに首を傾げていたが、その雰囲気を感じ取り、笑顔で言い切った。

「じゃ、みんな奇跡だね！」

「……そうだね。アリシアが言う通りだ。僕らの出会いも、セイバー達との出会いも、何もかもが奇跡だったんだ」

「出会いは奇跡……そう言う事？」

ユーノの言葉を聞いて、すずかがそう尋ねる。それにユーノは頷いて、全員へ視線を向けた。そして、こう言った。もしかしたら、この結末を掴み取るためにセイバー達はこの世界へやってきたのかもしれないと。多くの人達が哀しみに暮れる事無いように。その未来が失われる事の無いように。

ジュエルシードも闇の書も一つ間違えれば多くの次元世界を破壊するもの。それが、何故か管理外の地球。それも海鳴を舞台に事件を起こした。それを神が止めるためにセイバー達を遣わせたのでは。そんな推測をユーノは告げ、最後にこう締め括った。

「だから、きっとこれからも何かあるとしても、セイバー達と僕らが協力すれば絶対大丈夫」

それに周囲が力強く頷いた。本音を言えば、もうそんな事にはなって欲しくない。だが、誰もそれは同じ。だからこそ、また何か問

題が起きた時、今回のように全員で乗り越えていけるだろうと、そう強く思うのだ。

「じゃ、とりあえず持って来てくれた物をみんなで食べよか」

「やったぁ～！」

はやての言葉にアリシアが嬉しそうに両手を上げた。それに誰もが苦笑する。それにアリシアが自分の行動にやや恥ずかしさを感じたのか、ゆっくりとその手を下ろした。それに全員が笑う。そんな穏やかな時間。これが取り戻したかったものだと、誰もが口に出さずとも思った。

他愛ない日常。それこそが一番の幸せだと、心から実感しながら……

忙しく動くセイバー、アルフ、シャマル。翠屋三人娘は、忙しさを感じながら喜びを噛み締めていた。平和な日々が戻ってきたのだと感じる事が出来たからだ。いつもの仕事、いつものやり取り、いつもの笑顔。それらを体で、心で感じながら動く。

昼のピークを三人で乗り越え、緩やかな午後の時間を休憩と軽い談笑で過ごし、これから最後のもう一頑張りとなる。そんな慣れた時間。だからこそ、余計に三人に日常が戻ったのだと思う事が出来たのだから。

「セイバー、三番もう使えるよ」

「分かりました。……お待たせしました。こちらへどうぞ」

アルフの声に笑顔で頷き、待たせていた二人組をテーブルへ案内するセイバー。その後ろでは、シャマルがレジの真っ最中。

「はい、では千円ちょうど頂きます。こちらレシートです」

「戻ってきたんだね、お姉さん。ほら、今まで二日以上いない事が無かったからさ」

「あ、ちょっと家庭の事情で。でも、もう大丈夫ですよ。またよろしくお願いしますね」

ケーキの入った箱を手にしたサラリーマンの男性へレシートを手渡し、シャマルはとびきりの笑顔を向ける。常連の男性が自分を心配してくれていた事に、何とも言えない程嬉しくなって、シャマルはいつも以上に笑顔を浮かべた。

「ありがとうございました！」

「無理しないで頑張ってよ」

心から感謝を込めて告げる。それに笑顔で空いた片手を返し、男性は店を去って行った。その背中を見送り、シャマルは思う。この街は本当に優しく良い場所だと。だからこう心から思う。守れてよかったと。

誰も知る事ない戦いだったが、犠牲が出なくてよかったとシャマルは思った。自分達のせいで起きた事件。だからこそ、そのせいで犠牲になる者を出したくなかった。結果として、被害は無し。まさに信じられないぐらいの結末になったのだから。

（もう、この街を戦場にはしたくないわ……）

きっと、もう自分達が関わる戦いなどはないだろうとはシャマルも思う。だが、絶対という訳ではない。何がキッカケで事件は起きるか分からないのだから。故に願う。もうこの平和を壊す事が起きないようにと。

そんな事を考えていると、背中から声を掛けられた。それにシャマルが振り向くと、そこにはセイバーとアルフがいた。

「何を考えているのです？」

「何か難しい事を考えてたのかい？」

そのアルフのからかうような言葉に、シャマルは少しむっとした表情を見せ、どういう意味だと返した。それにアルフは言ったままの意味だと返して、二人は軽い口論をし始める。それを見てセイバーは嗜めるでも、止めるでもなく微笑みを浮かべて見つめるだけだった。

何故なら、二人はどこか楽しそうにしているのだ。まるで、こんなやり取りさえ愛おしいといわんばかりに。だからセイバーはそれを止める事はしない。自分もそうなのだ。こんな事が堪らなく嬉しいのだから。

今も桃子や士郎さえ二人の軽いじゃれあいを見て微笑んでいる。あの戦いをモニターで見ていた二人は、それが何も映さなくなった時、揃って心配ではなく勝利を信じたと語った。理由は特にない。だが、強いて挙げるとすればセイバー達が負けるところが想像出来ないからだと、二人ははっきり言い切った。

そんな二人だったが、なのはとユーノが帰ってきた時、なのはを桃子が、ユーノを士郎が強く抱きしめ無事を感謝した。それに二人は驚きを見せたものの、それに照れながらも抱きしめ返した。そん

な光景を見て、恭也、美由希は改めて士郎達の心情を感じたのだから。

（何気ない時間。それこそがもっとも尊いものだと、シロウ殿達は知っているのですね）

そんな風にセイバーが考え、シャマルとアルフを見つめていると、来店を告げるベルの音が響く。

「「「「「いらっしゃいませ！」」」」」

それに即座に反応するセイバー達。こうして、また彼らは動き出す。待ち望んだ時間。それを噛み締めながら……

連れだって歩くヴィータとライダー。ライダーは買い物帰りで、家に帰る途中のヴィータと出くわしたのだ。そして、今のように隣り合うように歩いて会話をしていたのだった。

「そうですか。ハヤテは元気なのですね」

「おう。今後はリハビリをして、歩けるようにしてくんだってさ」

「医者に怪しまれないように、アーチャーがまた何かでまかせでも言うのでしょうか？」

「かもな。ま、あたしははやてが無事で、リインも助かっただけで何も言う事はね～」

ヴィータの心からの言葉にライダーも頷き、笑みを見せた。唯一の不安材料だった可能性もないようで、今朝リインは全員へ現時点でバグが再生する事はないと言ったのだから。それにはやてやヴィータ達は安堵し、完全勝利を確信したのだ。

だが、ヴィータには気になる事があった。それはそれを聞いた瞬間のアーチャー。どこか驚くような表情を見せたかと思えば、真剣な眼差しをリインへ向けながらも、何も言わずにいたのだ。

その強烈な違和感がヴィータは何故か無性に気になっていた。リインが嘘を吐いている様子は無かった。心から事実を告げているような印象しかなかったからだ。しかし、それをライダーに話す気にはなれなかった。もしかしたら、それは自分の杞憂に過ぎないのかもしれないのだ。

それにアーチャーは元々リインのバグについて疑り深い所もある。そのためにそんな反応をしたのかもしれない。そんな風に考え、ヴィータは自分を納得させようとしていた。

「それで、例の話はやはり？」

「ああ。きっとアーチャー辺りが段取り組むはずだ。場所はお前んとこだろうぜ」

「……かなり賑やかな事になりそうですね」

夏の旅行を思い出し、ライダーがそう呟くとヴィータも同じ事を思い出したのか、嬉しそうに笑顔を浮かべて頷いた。

「今度はリインとイレインもいるしな。アリアとロッテだったか。あいつらも来ればかなり楽しくなるし」

「ふふっ、そうですね。では、少し早いですが月見を兼ねましょうか」

「あ、それいいな。チュウシュウのメイゲツって奴だろ？」

ヴィータの言葉にライダーは頷き、簡単な説明をした。時期としてはまだ早いのだが、それでも満月に近いものが見れるだろうと。ヴィータはそれに感心したが、興味は月見団子などの食べ物関係が大きいようだ。ライダーはそんなヴィータにセイバーを重ね合わせ、小さく笑みを浮かべた。

そんな話をしながら二人は歩く。そこには、穏やかな日常の空気が漂っているのだった……

「もうこんな刻限か」

「む、そうだな。ここらで切り上げるとしよう」

町外れの高台。あの決戦の記憶も新しい場所で、小次郎とシグナムは心地良い疲労感を感じながらそう言い合って歩き出した。昼過ぎから始め、気がつけば夕日が姿を見せていたのだから、相当の時間していた事になる。

万一を恐れ、魔法の使用こそしなかったが、それでもシュランゲフォルムだけは使い、小次郎を少しではるが苦しめる事が出来た。そのため、シグナムとしては今日の手合わせは実に気分が良かった。小次郎は小次郎で、滅多に手合わせ出来ぬ得物相手に楽しみを見出し、満足していたのだから。

「しかし、鞭にもなる剣とは面妖なものよ」

「私からすれば、そんなに長い剣を自由自在に扱う方が面妖だ。特に燕返しは未だに理解出来ん」

「理解されても困るのだがな。何せ、あれは私の唯一の取り柄故」

小次郎の言葉にシグナムは苦笑した。唯一のと言っているが、シグナムからすれば小次郎の取り柄はそれだけではないのだ。鮮やか且つ鋭い剣技。悠然とした頼もしい雰囲気。邪道と蔑みながらも、決して邪剣ではないその太刀筋。

それらは全て素晴らしいものだ。シグナムは正々堂々を信条とする騎士。だが、小次郎の戦い方は決して否定出来ない程見事なものなのだから。純粋に剣技を尽くし、自身の極限へ挑むかのようなその在り方は大いに見習うものがあるのだ。

「あれぐらいにならないと取り柄にならんのなら、私は何一つとして取り柄がないぞ」

「何、魔法があろう。あれはそなただけの取り柄よ」

「……まぁ、そういう事にしとくか」

小次郎のさらりとした言い方にやや呆れつつも嬉しそうに笑みを返し、シグナムは視線を小次郎の方へ向けた。それに小次郎がどこか楽しそうな笑みとある言葉を返すと、シグナムは声を出して笑った。何せ、小次郎はこんな風に言ってのけたのだから。

――それに、所詮取り柄などと言っても、世の中上には上がおる。

それにシグナムは心から納得した。自分も剣技においてかなり自

信を持っていたが、セイバーや小次郎と出会い上には上がいると思い知ったのだ。その言葉は実に愉快だった。小次郎はまったく驕る訳でもなく、自分もまだ下にいると言っているような雰囲気だったのだから。

飽くなき向上心。どこまでもひたすらに上を目指す実直さ。それこそが小次郎の強さの根底を支えている。そう感じたからこそ、シグナムは笑いながら頷いた。正論だと。そう言ってシグナムは嬉しそうに告げた。

「まだ世界には、お前やセイバー以上の剣士がいるかもしれんしな」

「そうよな。一度機会を見て管理世界とやらを放浪し、武者修行してみるも一興か」

「……美由希達へ許可を取るようにな」

そう楽しそうに言ってシグナムは小次郎と別れた。それを見送り、小次郎は小さく笑みを浮かべた。アリサや美由希がそんな事を知れば、確かに色々と煩そうだと思っただけではない。暇を持て余しているランサーを誘い、小旅行と洒落込むのもいいかと考えたのだ。

もう自分達の周囲を襲う災厄はない。ならば、しばらくそんな風に過ごすも悪くない。そんな事を思って、小次郎は家路を歩く。すっかり歩きなれた道。それを感慨深く思いながら……

月村家での話し合いを終えたアーチャーとリインは家路をゆっくり歩いていた。忍はアーチャーの提案をすんなり受け入れた。関係者全員での祝勝会。その会場として月村家を提供する。それに即答で許可を出したのだから。

ノエルやファリン、イレインも楽しみにしておくと言っていたので、かなり気合の入った会になるだろうとリインは思っていた。そう考え、はやて達がどれだけはしゃぐだろうかと思った時だ。隣のアーチャーがはっきりこう尋ねた。

「残り時間はどれ程だ」

それが何の事かリインには理解出来なかった。しかし、視線が一度たりとも自分へ向けられない事からその意味する内容に当たりをつける。だが、それを口に出す前にアーチャーはこう続けた。

「今朝、君はこう言った。現時点で再生する事はないと。何故現時点と言った？　もう再生しないのなら……」

「嘘は吐けん。現時点では再生する事はない。だが、おそらく遅くても半年後には再生を完了するだろう」

アーチャーの言葉を遮るようにリインはそう断言した。それを聞いてアーチャーはやはりと苦い顔をした。嫌な予感はしていたのだ。バグがリインそのものを模した姿をした時から、こんな状況をどこかで予想していたのだから。

バグはリインそのものに巣食っている。ならば、機能を無くしたとしてもその存在が健在なら再生するのではないか。そんな嫌な予想が的中してしまった。リインは淡々と告げる。転生機能を無くしたため、驚異的な再生能力は失ったバグは、本当に緩やかな速度で再生を開始している。

本来ならばほんの数日だったものが半年にもなったのは大きな助けだ。そうリインははっきりと言って感謝した。約束した通り、新年明けの旅行には行けそうだからと。その言葉にアーチャーはある

事を尋ねようとして、その口を閉ざした。何故ならば、アーチャーへ語りかけるリインは泣いていたのだ。

両の目から涙を流しながら、リインは嬉しそうにはやてと半年も過ごせると言っていた。旅行や買い物、外出などにも共に行ける。家族七人で半年とはいえ過ごす事が出来るのだから。そう、リインは涙を流して告げた。だから、何も悔いはない。そう涙ながらもはっきりと言い切ったのだから。

それを見て、アーチャーは押し黙る。確かに数日が半年ならば大きな進歩だ。だが、それでも根本的な解決にはなっていない。自分は、自分達は半年の猶予を得るために戦ったのか。いや違う。はやてとリインが末永く笑って暮らせるようにと願って戦ったのではなかったか。

そんな風に思い、アーチャーは心の中で呟く。まだ諦めないと。自分の考える賭け。それを試すしかないと、そう考え、アーチャーはリインへ一つだけ尋ねる事にした。

「リイン……」

「何だ？」

「……本当にそれでいいのか」

アーチャーはリインの目を見つめて問いかけた。本心を聞かせて欲しい。そんな思いを込めた眼差しで。それにリインも気付いたのか、どこか苦い顔をしながら頷いた。だが、はやての事を思い、共に生きる事を目指していたリインがそんな簡単に諦められるはずはないと。そうアーチャーは考え、やや強めの口調でこう言った。

「本当にか。はやてが歩けるようになるのを見守る事もせず、彼女

が大きくなり、愛する男を得て幸せになる晴れ姿を見ずともいいと。君は本当にそう言えるのだな」

「……ならば、どうしろと言うのだ」

消え入るようなリインの声。自分とてそう出来るのならそうしている。その声はそう告げていた。それにアーチャーは真剣な声で告げる。

「君はこう言ったな。失敗した時は消滅するしかないと。なら、その役目を私に委ねてくれないか。上手くいけば、今度こそ防衛プログラムを消滅させる事が出来る」

「ほ、本当か……？」

「あくまで可能性があると言うだけだ。だが、ゼロではない」

そのアーチャーの言葉にリインは力強い表情で頷いて告げる。頼むと。それにアーチャーも頷き、それをするのは祝勝会となった。その提案の裏に込められた意味に気付き、リインもそれに納得した。アーチャーはせめて関係者全員に事実を話すべきだと考えたのだ。

成功しようと失敗しようと、リインの存在に関わる重要な事なのだ。今回の戦いで誰もが目指した目的の一つはリインの生存だったのだから。それを無に帰すのなら、ちゃんと全てを説明する必要がある。

「……リイン、君に一つだけ守ってもらいたい事がある」

「何だ？」

「生きていたいという気持ちを強く持っていてくれ。生への想いが、もしかするとこの賭けに勝つ可能性を秘めているやもしれん」

「……分かった。私は自分の生存を決して諦めない。何があろうと、主が、お前達が助けようとしてくれた命だ。バグなどに屈してなるか」

そのリインの強い口調にアーチャーは嬉しそうに笑い、頷いた。その意気だと。こうして二人は歩いていく。消えず残っていた闇。それに今一度立ち向かう気持ちを固めるアーチャーとリイン。そして、それをはやて達へ告げる時、この闇の書事件と呼ばれる出来事は本当の終わりを迎えるのだ……

――――――

A' s十三話　後編

その日、月村家の中庭は賑やかな喧騒に包まれていた。そう、今日はかねてより話していた祝勝会。あのアリシアを目覚めさせた時よりも人数を増やし、総勢三十名を超える状態となったため、翠屋よりも広い月村家の庭を会場としたのだ。

ここならば、それぞれの交流や談笑もし易い。そして、庭に並べられたテーブルにはアーチャーやノエル、桃子を初めとした者達の料理の数々がある。飲み物も子供達用のジュースを始め、ビールなどのアルコールもある程度用意されていた。

「さて、全員グラスは持ちましたか？」

その言葉に場にいる全員が手にした飲み物を軽く掲げた。今回の乾杯の音頭を取る事になったのはリンディ。クロノやエイミィの姿も当然ながらここにある。そして、そこにはリーゼ姉妹とグレアムの姿もあった。グレアムはリーゼ姉妹からクロノの言葉を聞き、決意を持ってこの場へ来ていた。

それは、この場で自分の事を話す事。はやてに全てを打ち明けようと思っていたのだ。許してもらうためではない。ただ、このまま何も言わずにいる事はしたくないと思った。アーチャーから聞かされたはやての想い。自分を恩人として慕ってくれている少女へ、誠意を持って応えようと。

「では、はやてさん達の無事とこの勝利に……乾杯っ！」

その声に全員が声を返し、近くにいる者同士でグラスを合わせる。重なり合う笑顔と笑顔。嬉しさと喜びがあちこちで花を咲かせる。

そんな中、グレアムは静かにはやてへと近付いていく。それに気付

いたアーチャーがさり気無くはやての傍へと動き始める。
なのは達と談笑していたはやてだったが、グレアムが近付いてきた事に気付き、視線をそちらへと向けた。その視線にグレアムは優しく笑みを返し、はやての前にしゃがみ込んだ。

「初めましてはやて君。私はギル・グレアムと言うんだ」

「こちらこそ初めましてです。八神はやて言います」

グレアムの名前が恩人と同じ事に内心驚きながら、はやては笑顔で名乗る。それにグレアムは頷き、少しだけ真剣な眼差しを向けた。

「実は、君に話さなければならない事があるんだよ」

「何です？」

「……私の名に聞き覚えはないかい？」

グレアムのその問いかけにはやては言葉を返す事が出来なかった。もしやと思っていた。グレアムと言う名を聞いた時から、どこかで考えていた事。それが、今現実のものとしてはやての前に現れた。

「……もしかして、グレアムおじさんですか？」

「そうだよ。君の手紙、いつも嬉しく読ませてもらっていた」

グレアムがそう告げた瞬間、はやては声を無くし、涙を流した。嬉し涙だ。是非会ってお礼を言いたいと思っていた相手。それが、リインを助ける手助けもしてくれた。リーゼ姉妹を送り、最後の決戦の決め手の一つとなったデュランダルをクロノへ託してくれた存

在。

それが、目の前の男性。そう思った途端、はやては嬉しさのあまり涙が溢れたのだ。グレアムが自分の事を知り、影ながら手を貸してくれた事。昔から自分を支え、見守ってくれていたのかとそう思って。

だが、グレアムはそんなはやての反応に、辛そうな表情を浮かべる。これから話す事は、目の前の少女へ少なからず傷を作るだろう。自分を援助していた相手が、復讐のために自分を犠牲にしようとしていた。そんな現実を知れば、この涙は悲しみの涙へと変貌する。そんな事を思いながらも、グレアムは意を決して話し出した。

「はやて君、実は私は昔から君を監視していた。アリアとロッテを使ってね」

「……えっ？」

突然語られた監視という単語に、はやては耳を疑った。しかし、グレアムはそんなはやてへ話を続けた。毎朝やってきていた猫。それが二人の仮の姿だった事。更に、父の古い友人というのも嘘。ただ、自分ははやてが闇の書の主だからこそ、その生活を守っていたのだ。そして、本当ははやてを犠牲に闇の書を凍結封印しようと考えていたのだと。そこまでグレアムは語った。

それにはやては何も言わず、ただ黙ってグレアムの顔を見つめ続けた。傍で聞いていたなのは達も言葉がない。守護騎士達は途中からその原因に気付いて、リーゼ姉妹へ視線を向けていた。それにリーゼ姉妹は逸らす事無く視線を返す。だが、そこには憎しみも怒りもない。互いに思うは、それぞれの立場と状況。

（彼らも辛かったのだろうな。もし犠牲を出す事を厭わないのなら、

こんな表情をしないはず……）

（そっか。闇の書の被害に遭ったんだろうな、あのおっさん）

（憎しみもあったでしょうけど、それでもはやてちゃんへ真実を語ったと言う事は……）

（アリアもロッテも複雑な心境だったに違いない。そうか。あの時の呟きは、そのための……）

守護騎士達はグレアムやリーゼ姉妹がやろうとしていた事へ理解を示した。多くの被害を出さないために、闇の書を永久に封印しようとした。それ自体は良く分かる。はやてを犠牲にという点は納得出来ないが、十分理解した。一人を犠牲に何万を超える命を守れるのなら、それは大局的には正義だろうから。

（お父様のしようとした事。それは決して正しいとは言わない。もし、彼らがそれを許せないのなら、それでもいい）

（あたし達はあの時の最善を尽くそうとした。アーチャーがいなきゃ、きっとデュランダルはあの子を氷漬けにしてたんだから……）

リーゼ姉妹は、守護騎士達の眼差しから自分達への理解を感じ取った。しかし、当然ながらそこに完全な納得はない。自分達も逆ならきっと納得は出来ないからだ。故に、二人に出来るのは向けられた視線を受け止め、真摯な態度で返す事だけだった。

（主ごとの凍結封印。そうか……あの時言った非道な行いとはこの事か。いや、私に彼らを責める権利も資格もない。過去に私達が殺めた者達は、それこそ世界の一つや二つでは済まないのだから）

一方、リインだけはグレアム達の心情とその行いへ違う感想を抱いていた。一度出会った際のグレアムの言葉。その意味を理解し、同時に自分が過去にしてきた事を考えれば、その決断に文句など言えようはずはないのだから。

だから、リインだけはグレアム達の行動に納得していた。因果応報という言葉を頭に浮かべ、リインは思う。本来ならば、そうなっていたはずだったのだと。自分ははやてと共に永久に眠る事が決まった道だったのだ。

「……一つだけええですか？」

グレアムの話を聞き終え、はやてはそうはっきりとした声で尋ねた。それにグレアムは頷いた。

「なんだい？」

「最後の戦いに、アリアさんやロッテさんを送ってくれたのは、もしもに備えてですか？」

「……そうだ。だが、それだけではない」

グレアムの答えにはやては一瞬だけ深い悲しみを見せる。しかし、その後にグレアムが続けた言葉に視線を思わず上げた。

「少しでも君を犠牲にせずに済む可能性があるのなら、それを成し遂げたいと思った。許されずともいい。納得など求めない。私は、私自身のために君を助けたかった。誰も犠牲にせずに済むのなら、いかな罰も受ける覚悟で」

「……はやて、それが彼の本心だ」

グレアムの告白にはやてが言葉を無くしていると、アーチャーが静かにそう言ってはやての肩で手を置いた。それは、はやてへその思いに応えてやれと言っているように思え、はやては表情を真剣なものへ変えた。

それに周囲の空気が微かに緊張する。はやては黙ってグレアムの目を見つめた。それを固唾を飲んで見守る守護騎士とリーゼ姉妹。

「わたしを犠牲にしてちゅうのは正直どうでもええ。最悪、闇の書を止めるにはそれしかなかったんやろと思う。それでも……私は簡単に許したらあかんのやと思います」

はやての言葉は強くグレアムの心へ響く。幼い少女から告げられた許してはいけないとの言葉。それは当然だ。自分を犠牲にしようとしていたのだから。恨まれても仕方ない。そんな風に思い、グレアムは頷いた。

「……そうだろうね」

「そして、グレアムおじさんはリイン達が昔した事が許せない。やから……これでおあいこです」

はやてはそう笑顔で言い切った。それに誰もが言葉を失う。そんな周囲へはやては告げた。

「グレアムおじさんにも、わたしにも許せん事がある。許せん事をすぐ許しても嘘になるだけやし、無理に納得したってどこかでそれは消えへん。やから、今日からわたし達の中では、昔おじさんのした事とかリイン達のした事とか全部言いっこ無し！」

その言葉にグレアムもアーチャーも黙って聞き入っていた。たった九歳の少女。それがこんな結論を出した事に驚きを感じていたからだ。

「それに、日本には終わり良ければ全て良しって言葉もあるんです。グレアムおじさんも最初はどうであれ、最後は誰も犠牲にしたないって思った。なら、それでええ。少なくても、今のおじさんとわたしの気持ちは一緒やと思うから……」

「はやて君……」

「わたしは、おじさんとこれから一緒に笑っていきたい思う。いつか許しあえたらとも思う。それに……やっと会えたんやし、お話したい事一杯ありますから」

「……ああ。ゆっくり聞こう。時間は、これから沢山あるのだからね」

互いに笑みを見せ合うはやてとグレアム。だが、はやてにはもう涙はなく、反対にグレアムには涙がある。許す事が出来ないのなら、許す必要はない。だが、それを理由に憎み合う必要もない。まずは共に話をしよう。いつか許せなかった事も許せるかもしれない。納得出来ない事も納得出来るかもしれない。そんな可能性を捨てないためにも、今はゆっくり話そう。そんな想いを込めて、はやてはグレアムへ言ったのだから。

そんな二人を見て、シグナム達もリーゼ姉妹も互いに笑みを見せ合い、グラスを向け合う。アーチャーはそれを見て嬉しそうに笑みを浮かべ、リインも同じように頷くのだった……

はやてとグレアムのやり取りが終わり、周囲は概ね先程のような雰囲気へ戻っていた。不安を抱いていたクロノやリンディだったが、守護騎士達がはやての言葉に賛同したようにリーゼ姉妹と話しているのを見て、安堵していた。

グレアムははやてと話していて、その光景は孫と祖父のようにも見える。なのは達はそんなはやて達を見て、嬉しそうな笑みを浮かべていた。アーチャーはリインと共にそんな周囲を見て微笑みを浮かべるものの、この時間の最中に話す内容を考え、その表情が少し険しくなる。

「……今は楽しもう。何、私は大丈夫だ。今日の事をただの思い出にしてみせる」

「君も強くなったものだ」

「強くしてくれたのはお前達だ」

そう笑って言ってリインはライダー達の方へ歩き出す。その後姿から感じる力強さにアーチャーは少しだけ呆気に取られるが、やがて笑い出す。本当に自分の周囲にいる女性達は気の強い者達ばかりだと思ったのだ。

そして、ライダー達と楽しげに話すリインを見て、アーチャーもまたランサー達の方へと向かって歩き出す。今日をただの思い出に

する。それは、これを最後にしないという意思表明。それを思い出しながら、アーチャーは笑みを浮かべる。

「何だ？　ニヤニヤしやがって」

「何、君のはしゃぐ姿が実に可愛らしく見えたのでね」

ランサーの言葉にアーチャーがそう返すと、それに小次郎と恭也が笑った。確かにランサーははしゃいでいたのだ。両脇にアルフとリニスを侍らせ、プレシアがリンディ達と話しているのをいい事に、今も嬉しそうにしているのだから。

「そうかよ。ま、いいさ。今日は気分がいいからな」

「ランサー、これをどうぞ」

「あ、これなんかいいんじゃない？」

両脇の二人がそれぞれ食べ物をランサーへ差し出す。それにランサーは笑みを浮かべて、一度で口に入れた。それにアーチャー達が呆れるが、すぐに笑みを見せる。そこへ、美由希とアリサが小次郎を呼ぶ声が聞こえ、それに小次郎が歩いて行く。

それに恭也は小さく笑みを見せ、忍の方へ行くと告げて去っていく。残される形となったアーチャーだったが、ノエルとファリンがそこへ現れ、その両脇を確保した。

「アーチャー様、こちらの品評を」

「頑張って作ったんです！」

「……頂くか」

二人の迫力に少しだけ気圧されるように頷いて、アーチャーは言われるままに料理を食べ始める。その様子を見て、ランサー達三人が笑みを浮かべるのだった……

「どうだ？」

「……美味いな」

「ええ。上出来ですよ、イレイン」

ザフィーラとライダーに誉められ、イレインは満足そうに笑う。ノエル達に教わりながら作った簡単なスープ。だが、それでもイレインにとっては初めての料理。その評価を自分にとっての恩人とも言える二人にしてもらうのは、イレインにとっては緊張するものだったのだから。

そんなイレインの反応を見て、二人は揃って笑みを見せる。最初に出会った頃に比べて、本当に人らしくなったと感じたのだ。表情も豊かになり、明るくなった。リインと同じぐらいの時期からの付き合い故に、余計にそう感じるのだ。

「……良く笑うようになったな」

「そうですね。今ではファリンとよく喧嘩をしています。実に賑やかになりました」

共に微笑みを浮かべ、談笑するザフィーラとライダー。そこから

ライダーが普段のイレインの事を話し出し、それを聞いてザフィーラは相槌を返したり、疑問を尋ねたりと忙しい。そして、最後には兄と姉のような表情でイレインを見つめる二人。それにイレインが不思議そうな表情を返し、二人はそれに笑みを浮かべてまた話し出す。

そんな二人を見ながら、イレインは首を傾げるものの、視線を二人から外して三人分の料理を紙皿に盛り付け始めた。しかし、その手がふと止まり、視線を後ろへ向ける。

「やっぱ、あの二人ってどこか仲良いよなぁ……」

優しげな笑みを浮かべながら話すライダーとザフィーラを見て、イレインはそう強く思うのだった……

美由希とアリサから渡された大小のおにぎりを見て、小次郎は不思議そうに二人の顔を見つめた。

「これは？」

「あたしと……」

「アタシが作ったの。具は美由希さんが梅干。アタシが昆布よ」

その言葉に小次郎は合点がいったと頷いて、早速とばかりにまずは美由希作だろう大きな方から食べ始めた。それをニコニコと見つめる美由希。もう何度となく作っているからか、その表情には余裕しかない。

「……これは塩加減が絶妙よ。腕を上げたな、美由希殿」

「そうですか？　良かった」

小次郎が味を誉める事はあまりないため、美由希はそう言っていつも以上に嬉しそうに笑う。それにアリサが頷き、自分の分のおにぎりを指差した。

「じゃ、次はアタシのよ」

「承知」

まるで何かの勝負のような雰囲気さえ感じさせるアリサの言い方。小次郎はそれに応え、小さめのおにぎりを口に入れる。一生懸命握ったせいだろう。固くなったそれを小次郎は何も言わず黙々と食べる。

その様子をどこか不安そうに見つめるアリサ。そして、小次郎はおにぎりを食べ終わると、笑みを浮かべて告げる。

「初めてにして上出来よ。何せ食べられるのだからな」

「なんですって！」

「今度はもう少し力を抜いて握るとよい。美由希殿から教わるといいだろう。期待しておる」

そう言って小次郎はアリサ達に背を向けて歩き出す。行き先は士郎のいる方だ。それを見送りながら、美由希はやはり小次郎は優しいと思っていた。アリサも最後の言葉の意味を悟ったのだろう。どこか戸惑うような表情で自分を見ている。

それに美由希は微笑みを返し、頷いた。その笑みにアリサも嬉しそうに頷くが、すぐに小次郎の歩いて行った方へ視線を向ける。そして、小さく呟いたのだ。

――ったく、素直じゃないんだから。

それに美由希が、それはお互い様だよと思ったのは当然と言えた……

「はい、クロノ君。あ～ん」

「……あ～ん」

エイミィの差し出した唐揚げを口に入れてもらうクロノ。そんな熱々カップルのような事をしているのには、ちょっとした訳があった。あの後自室で休んだエイミィは、ブリッジに戻るとクロノへ念話でこう告げたのだ。

――クロノ君、あたし決めたよ。今回の事件解決のご褒美、あたしってのはどう？

その内容にクロノが驚いて椅子から落ちたのは言うまでもない。だが、それに拒否を示す事が出来なかったのも事実。そして、こうしてエイミィにされるがままになっているのだ。何せ、少しでも嫌がる素振りを見せると……

「え、エイミィ……もういいだろ」

「あたしとこうするのは嫌？」

潤んだ目でクロノへこう問いかけるのだ。無論それが芝居だと分かっている。だが、その言葉は本音だと言う事も分かっているのがクロノの辛いところ。故に周囲に気付かれないような場所で食べているのだから。

しかも、クロノは他の者達を背にしている徹底振り。そうでもなければ、クロノがこんな事をしてくれるはずもない。そう分かっているエイミィだからこそ、この位置取りにしているのだ。

「じゃ、次はこのサラダね……」

「……好きにしてくれ」

投げやり気味に返すクロノだったが、そんな彼にエイミィはどこか悪戯っぽく笑って告げる。

――ちなみにデザートはあたしだから。

その言葉にクロノが声を失って、赤面しつつも思わず周囲に聞いている者はいないかを確認した。その様子を見て、エイミィは嬉しそうに笑みを浮かべるのだった……

クロノ達がそんな風に恋人らしくなっている近くで、リーゼ姉妹はシャマルと共に話していた。話題は今後の事。シャマル達は少しの間だが管理局の仕事をしなければならない。リーゼ姉妹はそれについて助言をしていた。まぁ、正確には今の管理局の説明なのだが。

「そう……じゃ、基本私達は……」

「全員一緒に動かされるはずよ。お父様やリンディさんがそう働きかけてくれるはず」

「それにさ、あんた達は全員揃って本当の力を発揮するんだからね」

ロッテの言葉にアリアも頷き、シャマルはそれに笑みを見せた。グレアムの話を聞いた時は若干戸惑いや不安もあった。だが、こうして話して分かる。リーゼ姉妹は何も自分達が憎い訳ではないのだと。ただ、闇の書が憎かった。それだけだったのだと。

シャマルがそう思っているのと同じように、リーゼ姉妹もまた思っていた。シャマル達はもうプログラムなどではない。独立した人間だと。自分達が敵視する相手だった守護騎士プログラムではなく、八神家の一員。そう思う事が出来るからこそ、二人にもう守護騎士達を憎む気持ちはなかった。

「それにしても、アーチャーは人気者だね」

「ノエルさんとファリンさん……完全に両脇を確保してるわ」

呆れるようなそれでいてどこか羨ましそうにロッテがそう言えば、アリアがそれと同じような声で続く。

「アーチャーとは昔からの仲だから。でも……少し度が過ぎてるわね」

シャマルはそう言うと、アーチャー達の方へ歩き出す。それに二人も互いの顔を見合わせ、少し楽しそうな笑みを浮かべて後を追う。先を歩くシャマルへ近付き、二人はシャマルへ念話である事を提案

する。それにシャマルが軽く驚きを見せるものの、すぐに楽しそうな笑みを返して頷いた。
そして、三人はノエルとファリンに翻弄されるアーチャーに対して揃ってこう告げた。

「「「少しは男らしくしなさい！」」」

それにアーチャーが面食らい、ノエルとファリンが動きを止める。
それに三人はしてやったり顔をし、戸惑うノエルとファリンへこう続ける。

「「「二人も少しはお淑やかにする」」」

その言葉にノエルとファリンは意外そうな表情を浮かべるが、シャマル達が笑っているので何となくその意図に気付いた。そして、二人は頷くとアーチャーから離れて、シャマル達の横へ行き、少し三人と話し合う。すると視線をまだ少し状況に戸惑うアーチャーへ向けて笑った。
そう、シャマル達はアーチャーをからかうつもりなのだ。それにノエル達も少し乗っかろうと考え、笑みを浮かべたのだから。

「では……アーチャー様」

「えっと……何かな？」

ノエルの問いかけに、アーチャーは少し嫌な予感を感じて答える。

「聞かせてくれませんか？」

「……何を？」

それにファリンがそう続き、アーチャーは嫌な予感が強くなっていくのを感じた。

「言わないと分かんないの？」

「……それはだな」

ロッテからの言葉は、ある意味最後通牒だ。アーチャーは何とかこの状況からの脱出を図ろうとするが、それを遮る形でアリアが告げる。

「じゃ、シャマルさんお願い」

「私の話を……」

「聞かない。で、二人にくっつかれて、本音はどうだったの？」

女性五人に詰問のように迫られるアーチャー。そこに普段の面影はない。そんなアーチャーの姿に五人は揃って楽しそうに笑う。そんな五人を見つめ、アーチャーは困惑しながらも思う。こんな時間も、悪くはないと……

「楽しい時間だ」

「まったくです」

シグナムの噛み締めるような言葉に、セイバーはそう返した。賑

やかな輪から少し離れ、二人は静かに庭に座って月夜を眺めていた。

「誰一人欠ける事無く、こうして家族全員で多くの友人や知人達と過ごす事が出来る。それだけで、私の心は言いようのない喜びを感じている」

「そうですか。では、大変ですね。これからは喜びだらけですよ」

「……違いない」

手にしたグラスを一気に傾け、シグナムは笑う。セイバーもそれに倣うようにグラスを煽り、笑みを見せる。あの決戦から僅か数日。だが、それだけでも平和を感じるには十分過ぎる時間だった。何も鬼気迫るものもなく、ただ日々を懸命に生きるだけ。それがどんなに嬉しく、どんなに得難いかを痛感したのだ。

そして、これから待っているのははやて達と過ごす初めてのクリスマス。そして年末に新年だ。更にはやてが歩けるようになれば、年中行事の幅が大幅に増える。そんな事を考え、シグナムは笑みを零す。あの夏の日に思った事。それが、現実のものになろうとしていると。

（眩しい未来……歩いてもいいのだな、私達は）

そんな風に遠い目をするシグナムを見て、セイバーは優しく微笑むと、視線を同じように遠くへ向けて言い切る。

「誰にでも幸せになる権利があります」

「……セイバー」

「ですから……幸福になる事を恐れてはいけません」

「……そう、か。そうだな」

その言葉に秘められた思いに感謝し、シグナムは嬉しそうに笑顔を返す。セイバーもそれに頷き、二人は揃って視線を後ろへ向けた。そこには、思い思いに騒ぐ愛する人達の姿があった……

士郎達との話を終えて、プレシアとリンディは静かにグラスを合わせていた。いつか約束した事を果たすためだ。

「闇の書の因縁を断ち切った事に……」

「そして、全ての出会いに……」

「「乾杯」」

澄んだ音を立てるグラス。それに二人は笑みを浮かべ、その中身を飲み干す。

「……やっと飲む事が出来たわね」

「ええ。こんなに美味しいお酒は久しぶり」

プレシアの言葉にリンディは心からそう告げた。その言葉にプレシアも頷き、近くに用意したワインボトルを手にした。それにリンディが小さく笑みを浮かべて空いたグラスを差し出す。それに紅い液体が注がれる。そのお返しとばかりに、今度はプレシアのグラス

にリンディがワインを注ぐ。
互いのグラスに注がれたワインを見つめ、二人はもう一度だけグラスを軽く合わせる。今度は、今回の事にではなく約束を果たせた事に対して。

「ご主人も喜んでいるでしょう」

「そうね。きっとそうだわ」

「それに、これで少しは肩の荷が下りたし」

「……気付いていたの？」

プレシアがクロノを見ながら告げた言葉に、リンディはどこか意外そうに言った。そう、リンディはそろそろ前線を退き、クロノを後任に指名して後方へ下がろうと考えていたのだ。しかし、それを誰かに話した事はない。故に、プレシアがそれに対して告げたのは、驚きでしかなかった。

「何となくよ。でも、クロノ君はしっかりしてるし、後を任せてもと考えても仕方ないわ。次元航行艦の艦長は、想像以上に激務だもの」

「それだけじゃないのよ。そろそろクロノを昇進させたいって上が考えているの。でも、適当な場所がなくて……」

「それで自分が後方に、ね。まだ現場を続けたいの？」

プレシアの言葉にリンディは少し苦笑しながら頷いた。正直、後方に行くのはまだ先と考えていたのだ。せめてクロノが自分からそ

ういう立場になりたいと思うまで。そんな風に考えていたのだから。
しかし、今回の戦いでクロノの精神面の成長を強く感じる事が出来た。何よりも、ややぶっきらぼうな所があるクロノに、エイミィという支えがずっと傍にいる事が決まったのは大きい。まぁ、まだずっとかは未定だが、恐らく大丈夫だろうとリンディは思っている。

「でも、これでクロノへ話すキッカケにもなるわ。プレシアさんも、そろそろ覚悟した方がいいかも」

「そうね。フェイトも、今回の事でロストロギア事件に対して思う事があるだろうし……」

「なのはさんも……ね」

「そっちは士郎さんと桃子さんに任せるわ。でも、きっと結論はフェイトと同じよ」

「でしょうね」

そう言って二人は苦笑。勧誘しない方が、かえって行く気にさせるかもしれない。そんな風に考えたからだ。そうして、二人はしばらくそのまま他愛もない話をするのだった……

「これ美味しいね、ヴィータ」

「おう。てかアリシア……口にクリームついてるぞ」

「え？　取って取って～」

二人してケーキを食べているヴィータとアリシア。もうご飯はいらないとばかりに、桃子のお手製ケーキを笑顔で食べ続けている。そんな二人は、どこからどう見ても仲の良い子供だ。これが本当ならば共にいい年の大人になっているはずなのだから、世の中というのは分からない。

一方、そんな二人とは違い、なのはとフェイトは、すずかやユーノと談笑しながら食事を楽しんでいた。話題はユーノの来年度からの入学。それを聞いた時、すずかは驚きと喜びを顔一杯に表したのだから。

「この分でいくと、はやてもアリシアも来年度からは聖祥に通えそうだね」

ユーノがアリシアの最近の学力を聞いて、そう楽しそうに告げる。それにフェイトが頷いて言った。

「うん。それにはやては、絶対に四月までには歩けるようになってみせるって」

「ふふっ、はやてちゃんらしいね」

「アリシアちゃんは……きっと一年生だね」

さすがに自分達と同じ学年は無理だろうとなのはは思った。それはフェイト達も同じ意見のようで、苦笑しながら頷いていた。学力的なものでも、身体的なものでもアリシアは一年生からだろうと思ったのだ。

周囲との差があまりない方がきっと上手くいく。そんな風に思い、四人は少しだけ残念に思う。アリシアだけ学年が違う事は、やはり

分かっていても寂しい。

「でも、行きは私と一緒だから」

フェイトが明るくそう言うと、なのは達もそれに頷いてみせた。それに、学校で一緒の時間は過ごせなくても、休日などで過ごす事は出来る。これからは本当に平和な時間が続く。だから、今まで以上に楽しい思い出が沢山作れるはず。そう思い、なのはは心からの笑顔を浮かべた。

フェイトもすずかもユーノもそれに同じ笑顔を返す。大きなイベントはクリスマス。そして年明けの旅行がある。そんな風にそれぞれが考え、視線を動かす。それは空。秋空に綺麗な月が浮かんでいる。

「あ～っ！　忘れてた！」

その時、一際大きな声が周囲に響く。それに全員が視線を向けた。その声の主はファリン。

「月見団子、用意するの忘れてましたぁ～！」

「……ファリン、少しは空気読みなさい」

「まぁまぁ……ファリンらしくていいじゃないか」

その告げられた内容に対して忍が頭を押さえて言った言葉に、恭也がそう言ってフォローする。

「そうか。今日は月見を兼ねてるんだったな」

「あら、ならススキも用意しないと」

士郎の思い出したかのような言葉に、桃子がそう言って笑う。そんな和やかな雰囲気を感じ、誰もが笑う。ファリンは軽くノエルとライダーに叱られ、イレインがそれに苦笑する。そして、そのまま皆が再び思い思いの時間を過ごそうとした時だ。

ここしかないと思ったのだろう。一度空気が崩れたここでしか言う機会はないかもしれないと。だから、アーチャーは少し大きめの声で周囲へ呼びかけた。

「すまないが、少し全員に聞いて欲しい事がある」

アーチャーが真剣な表情でそう切り出すと、その顔を見て、誰もが何か違和感を感じた。祝勝会に相応しくないとでも言えばいいのか。何か、これから大変な事が起きるとでも言いたそうな雰囲気に、全員が言葉を発しない。

「リイン、君から言った方がいい」

「……分かった」

アーチャーはそんな周囲の戸惑いを感じ取り、無理もないと思いつつ、リインへ視線を向けた。それに頷き、リインは意を決して告げる。

「バグは消えていなかった。瞬時の再生は出来ないようだが、今もまだ私の中で息づいている」

その発言に、空気が凍った。水をかけられたような静寂。しかし、誰にも同じ表情が浮かんでいる。嘘だと言ってくれと。信じたくな

いと言わんばかりの感情が、誰にもありありと浮かんでいる。
そんな中、最初に口を開いたのは、やはりはやてだった。強気な表情ではなく、震えるような眼差しでリインを見つめて尋ねた。

「嘘やろ……？　な、リイン」

「……本当です。遅くても半年後には再生を完了します」

その言葉にはやては目を見開く。だが、次の質問を放つ事はなかった。それは視界に映った男の顔を見たから。希望を失っていないその表情に、はやては最後の希望を見出したのだ。

「アーチャー、何か手があるんやろ！？　な！」

「ああ。可能性は未知数だが、一つだけある」

「そうか。あの夜に言っていた賭けとやらだな」

ザフィーラがそう告げると、それにアーチャーは頷いた。だが、こうも言った。失敗すれば、リインは消滅すると。それに誰もが息を呑むが、当のリイン自身が少しも不安を見せていない事に気付き、その緊張感が若干だが緩和された。
そして、アーチャーは周囲に対して告げた。その賭けを今ここで行なうと。それは、残っている半年の猶予を完全に捨てる事。だが、それに誰も何も言わない。どうせいつかやらねばならないのなら、早い内にするべきだと考えたのだ。半年もあれば、旅行にも行ける。しかし、リインの最後の思い出になるかもしれないような雰囲気の中で行きたくはない。
そう、全員が揃って思ったのだ。ここで闇の書に本当の意味での

決着をつけようと。そんな周囲の視線を受け、アーチャーが投影したのはルールブレイカー。それに誰もが息を呑む。知らぬ者はその異様な外見に。知る者は、それがもたらす結果は一つしかないはずと知っているからだ。

そんな周囲の思いを良く知るからこそ、アーチャーは静かに告げる。命の持つ可能性を信じて欲しいと。

「……リイン、いいな」

「いつでもいい。私は……決して消えない」

その言葉に頷き、アーチャーはリインの胸へルールブレイカーを突き立てる。その瞬間、リインの体から光が放たれた。それに全員が目を閉じ、視界を塞ぐ。訪れる静寂。ただ秋風が辺りを吹き抜け、頬を、髪を撫でて行く。

誰もがそれにゆっくりと目を開けていく。それが、恐る恐るといった感じになるのは仕方ないのかもしれない。はやてもそうだった。もし開けた先にアーチャーしかいなかったらどうしようと思いながら、その目を開いた。するとそこには……

「り、リイン……」

「はい……お呼びですか、主」

そこには無事な姿のリインがいた。それに喜びと疑問が同時に起こる。アーチャーはそんな周囲へある仮説を話し出す。それは、彼が経験したキャスターとの経緯。契約を無効化するだけしか効力を発揮しなかったルールブレイカー。それは、本来契約だけではなく、魔力で出来た物を無力化したり初期状態に戻す物。

それにも関らず、一度刺しただけではサーヴァントとマスターと

の契約しか無効化しなかった。そう、何故か契約が一番先に無力化されたのだ。魔力で出来た聖骸布はまったく消す事無く。その一点にアーチャーは賭けた。

「この場合の契約は、リインとバグの関係に当たる。そして、その関係が切れれば今のバグには何も残らん。元々バグはリインを母体に生まれた。つまり、分身ではあっても本体ではない。再生はリインと繋がるからこそのものだからな」

「確かに、アーチャーが私にルールブレイカーを刺した瞬間、私の中で何かが切れた感覚があった。すると、即座にバグが消滅したのだ」

「……もしかすればと思った賭けだ。魔力で構成されたサーヴァントに対し、ルールブレイカーがまず効力を発揮したのは契約だけ。そして、その名前の意味は決まりを破る。つまり、魔力による決まり事……契約などにもっとも効果を発揮するのだ」

そう言って、アーチャーは視線をはやて達の方へ向けた。

「まず、シャマル達が契約のみの有効性に気付かせてくれた。そして、ルールブレイカーの意味。それをはやて、君が思い出させてくれた。最後の最後にリインを助けたのは、私の力ではなく君達の言葉だ」

その言葉を聞きながら涙を流しているはやてを抱きしめるリイン。そこへヴィータ達八神家が集まり、はやてを中心に寄り添う。それに笑みを見せ、アーチャーは静かにルールブレイカーを消した。そして、それを見届けたランサーが大きな声で周囲へ叫ぶ。

「おいおい、どうして揃いも揃ってボサッとしてんだ！　酒だっ！　酒持って来いっ！」

「そうです！　リインが完全に闇の鎖から解き放たれたのです！　盛大に祝いましょうっ！」

「そうだね！　もう一回乾杯しよっ！」

ランサーの声にセイバーが応じ、グラスを高々と上げた。それになのはも呼応し、手にしたグラスを掲げる。そして、全員が笑顔で同じようにグラスを掲げ、一斉に視線をリインへ向けた。主役はリインだと言わんばかりに。それにリインは一瞬驚きを見せるも、すぐに嬉しそうに笑みを見せて頷いた。

「みんな、ありがとう。私は、世界で一番幸せな魔導書……いや、幸せな存在だ。本当に……ありがとう！　乾杯っ！」

――――乾杯っ！

もう一度ありったけの想いを込めて叫ばれる言葉。それを聞きながら、リインは涙を流す。闇の書としての悲劇の旅は終わりを告げた。これからは、本当に祝福の風としての日々が始まるのだ。愛する家族達や愛しい者達と共に過ごす時間が。

そう思い、リインはしっかりと前を見つめる。その視線の先には、自分へ向けられる多くの笑顔達がある。それら全てが、自分をそうさせてくれたのだと感じて、幾多の出会いと多くの者達との絆に心から感謝しながら、リインは笑顔を返すのだった……

こうして、後に闇の書事件と呼ばれる出来事は終わりを告げた。

誰もが、もう危険な事件は海鳴では起きないと確信しながら。
それは、まったくもって正しい。この事件を最後に、海鳴では魔法絡みの大事件は起きなくなるのだから
だが、それはあくまで海鳴では、だ。なのは達にではない。だが、それはまだ先の話。

英霊達と少女達の物語は、まだ終わらない……

――――――

A' s最終回

あの祝勝会から明けて一週間。なのははいつものように目を覚ました。そして、視線を机の上にある写真立てへ向けた。そこに飾られているのは、あの後全員で撮った物だ。そこに写る者達はみな心からの笑顔を見せている。

なのは達子供達は全員で固まって、セイバー達英霊達はそんな子供達の後ろで微笑みを浮かべ、家族達もそれぞれ柔らかい笑みを見せている。リンディ達やグレアム達も何か憑き物が落ちたかのような安らぎの笑みを浮かべていて、見ている者が知らず笑顔になれるそんな写真だ。

「……もう、これで何も起きないよね？」

だが、何故か不安が起きる。ジュエルシードから始まった魔法絡みの事件。それはこの前の闇の書との戦いで終わったはずなのだ。それでも、なのはには何か嫌な感じがあった。それは、セイバー達から聞いたサーヴァントの話。

全部で七つのクラスがあり、その内の五つがセイバー達五人なのだが、残る二つのクラスもどこかに召喚されている可能性があるらしい。そう聞いた瞬間、誰もが一抹の不安を覚えた。何せ、セイバー達の存在はある意味で生きるロストロギアなのだ。

（リンディさん達は独自に調べてみるって言ったけど、どうやって見つけるんだろ……）

セイバー達の話によれば、おそらく残る二つのクラスのサーヴァントは、自分達の知る相手だろうとの事。その特徴をセイバー達がリンディ達に伝えていた時、最後にこう言っていたのをなのはは良

く覚えている。

――――決して接触しようとするな。

見つけたら、まず自分達に連絡して欲しい。そうセイバー達は口を揃えて告げたのだ。それは残る二人のサーヴァントが恐ろしい程の力を持っているから。特にその内の一人は、セイバー達でもまともにやりあったのなら苦戦するしかない相手だと言っていた事を思い出し、なのはは少し身震いした。

「……一体、どこにいるんだろ。えっと、キャスターさんにバーサーカーさん……だっけ」

出来る事ならセイバー達のように優しい人達だといいな。そんな風に祈りながら、なのははベッドから出て、トレーニングのために着替え始めるのだった……

今はただ、穏やかな日常を

徐々に弱くなった朝の日差し。それを浴びながらなのははフェイトと共に海浜公園に来ていた。あの戦いの後、フェイトはなのはと同じように早朝トレーニングへ参加する事にしたのだ。理由はシグナムが剣の稽古をつけてくれるから。

今もフェイトとシグナムはその手に高町家道場から借りた木刀で、激しく打ち合っている。なのははそれを整理運動をしながら見つめ、視線をそこから別の場所へ移した。

そこではザフィーラがセイバー相手に鍛錬中。格闘戦を主体にしてくる相手と戦った事があまりないとセイバーがいったため、ザフィーラが自分の稽古も兼ねて始めた模擬戦のようなものだったのだが、これが意外と接戦になっていた。

何せ、セイバーが手にした木刀で斬りかかると、ザフィーラは手のひらだけに防御魔法を展開し、それを防いでいるのだ。そして、そうやって攻撃を防ぐと同時に木刀を掴み、足蹴りでセイバーへ反撃する。それを避けようとするセイバーだったが、木刀を掴まれてはそれも思うようにいかない。

こうして、今もセイバーはザフィーラへ迂闊に攻撃する事が出来ないまま、何とか隙を作ろうとしていた。なのははそれを熱心に見つめる。自分がセイバーの立場だったらどうするか。また、その逆ならどうするか。

そんな事を考える。これも一つの立派な訓練。接近戦が不得意であっても、出来ないままで良い訳がない。そう考えているからこそ、二人の動きや攻撃は参考になる生きた教材だ。

「……でも、これって普通の小学生の考えじゃないよね」

ふと思った事になのははは自分で指摘し、軽くため息をついた。

「なのは～！」

「？　……ユーノ君！」

突然聞こえた声に振り向くと、そこには額に汗を浮かべたユーノがいた。どうもランニングの帰りらしい。周囲に士郎達の姿がないので、ユーノだけこっちに来たようだ。そうなのははは理解した。

「どうしたの？」

「……っはぁ……はぁ……うん……一緒に帰ろうと思って、ね」

「もうそんな時間なんだ。セイバ～！　フェイトちゃ～ん！　もう時間だよ～！」

ユーノの言葉になのはは軽く驚きを浮かべ、家族と親友へ呼びかける。ザフィーラはともかく、残る三人は戦いとなると時間を忘れる傾向がある。それ故、なのはは大きな声で呼びかけた。シグナムへ呼びかけないのは、フェイトが止まれば向こうも気付いて止まるからだ。

なのはの声にザフィーラが気付き、セイバーへ同じ事を伝えたのだろう。セイバー達はその動きを止め、礼を述べ合っていた。フェイトの方は気付いたものの、シグナムが中々止まってくれないようで、困惑しながら打ち合っている。

それを眺め、苦笑するなのはとユーノ。ザフィーラが仕方ないとばかりに二人の間へ割って入り、強制的に試合を終了させた。こうして早朝トレーニングは終わりを告げた。もう少しで綺麗に終わる事が出来たとブツブツ呟くシグナム。それに呆れつつも、そう上手くはいかないだろうと反論するザフィーラ。

フェイトはユーノから腕は上がったのかと聞かれ、自信を滲ませて頷いた。なのははセイバーにもうすぐ運動会だと告げ、少しだけ苦い顔をした。未だに走ったりする事は苦手なのはにとって、運動会はあまり歓迎出来ないイベントだった。

「でも、今年は私達のクラスが学年優勝するよ。すずかちゃんにアリサちゃん、そしてフェイトちゃんがいるからね」

「そこは、嘘でも自分が頑張ってと言うべきですよ、なのは」

「う、嘘はいけないって思うな。人間、正直が一番です」

「では、意気込みを本音でどうぞ」

「う～……セイバーがいじめるよ～」

そんな二人のやり取りを聞いて、フェイト達が揃って笑った。そんな和やかな雰囲気のまま、なのは達はそれぞれの帰路につくのだった……

真っ白なシーツが風になびく。それを見つめ、リインは満足そうに頷いた。あの日以来、リインは積極的に家事などに参加するようになった。既に管制人格としての力を失ったため、家事などではやての力になろうと決めたのだ。

「干し終えたのか？」

「ああ。見ろ。気持ちいいぐらいの白さだ」

アーチャーの言葉にリインは自慢げにそう言ってシーツを指差した。それを見つめ、アーチャーは小さく微笑みを浮かべて頷いた。洗濯はシグナムとシャマルの受け持ちだったのだが、リインが既に二人に代わって受け持つようになっていた。

原因は二人が仕事をしているからだが、それだけではない事をアーチャーは知っている。二人はリインが生きる意欲を強く持った事

を感じ取り、その気持ちを尊重して、家の仕事をしてもらおうとしたのだ。

そのため、シャマルとシグナムは洗濯をリインに委ね、自分達は他の家事へシフトしていた。シャマルは炊事へ、シグナムは掃除だ。無論、リインの補佐として洗濯も受け持っているが、余程がない限り手は出さない事に決めていた。

「確かにな。もう色物と白い物を混ぜて洗ったりはしないようだ」

「あ、あれは……知らなかっただけだ。第一、お前も教えてくれなかったじゃないか」

「何、誰しも失敗を重ねて成長するのだ。私とて初めから今のように出来た訳ではない。君にもそれを知って欲しかったのだよ」

アーチャーがそう言って軽く笑みを見せると、リインはやや憮然としながらも分かったと頷いた。そして空になった洗濯籠を抱え、部屋へ戻っていく。その後ろ姿を見送り、アーチャーはもう一度小さく笑みを浮かべた。

バグが完全に消えたあの日以来、リインは見違えるぐらい更に明るくなった。口数も増え、表情もよく変わるようになった。それを一番喜んだのは、はやてだった。はやてはリインを連れて行動するようになり、リハビリはリインを供に連れて行っている。

アーチャーは最初の時だけ同行し、石田女史にはやてが身体が軽くなった気がすると言い出したと誤魔化しをし、検査の結果麻痺が徐々に消えていっていると理解させた。そこから少しずつではあるが、はやて自身の強い希望もありリハビリがスタートしたのだ。

そんな事を思い出しつつ、アーチャーはふと視線を上へ向けた。

そこには、気持ちの良い秋空が広がっている。

「……まさか固有結界に変化が生じていたとは、な」

青空を眺め、アーチャーは呟く。あの祝勝会の後、はやてから色々と質問を受けた。その中には当然固有結界の事も含まれていたのだが、その話ではやてが告げた事実に、アーチャーは一瞬思考を停止したのだ。

――あの結界から見えた青空はどういう事や？

はやてが知る限り、結界は色をくすませるものでしかない。それが綺麗な青空を見せる事に疑問を抱いたのだが、その質問がアーチャーに対して与える衝撃は大きかった。固有結界は術者の心象風景を映し出すもの。

つまり、それが変化したという事はアーチャーの心が変化したという事に他ならないのだ。しかも、それが聞く限り良い方向への変化となれば余計に。

（私の心など変わるはずはないと思っていた。変わるとすれば、もっと悪化するしかないとも。だが、はやて達が少しではあるが私に変化を……いや”人らしさ”を与えてくれたようだ）

そこまで考え、アーチャーは嬉しそうに笑みを浮かべた。思い出したのだ。はやての声とある女性の声が同じ事を。

（凛にはあの日の誓いを思い出せてもらい、はやては無くしてしまったモノを少し取り戻させてくれた。君達は、本当に私と何か繋がりがあるのかもしれんな）

そんな馬鹿げた事を思いながら、アーチャーも家の中へと戻る。
もしかしたら、自分を少しでも人らしくするために、凛がはやてと出会わせてくれたのではないか。そんな風に考えて……

テスタロッサ家のキッチンは賑やかだ。何故なら、プレシアとリニスの手伝いをアリシアがするからだ。今も少し眠そうではあるが、二人へ何をしたらいいかを尋ねている。

「ね～、テーブル拭いたよ～。次は何をすればい～？」

「そうね。じゃ、お皿を出して並べてくれる？」

「は～い」

プレシアの言葉に返事を返し、アリシアは食器棚へ移動する。それを見つめ、微笑むプレシアとリニス。だが、同時に一抹の不安を感じたので、二人揃って念話でアルフを呼んだ。

【【アルフ、アリシアの事を見ていて（ください）】】

念話のハモリという珍しい現象を受け、やや妙な感じを受けるアルフだったが、ソファから立ち上がりアリシアの傍へと動いた。丁度食器棚から大きめの皿を出そうとしていたらしく、手が中々届かず苦労していた。

それを微笑ましく思いながらも、アルフはアリシアの取ろうとしていた皿を取り、その手へ渡した。それを受け取り、アリシアは嬉しそうに笑みを返す。こうしてアルフも手伝いに参加する事となった。

「ただいま」

そこへフェイトが帰宅。まず洗面台へ向かい手洗いなどをする。そして、やや急ぎ足でキッチンへと歩き出す。目的は一つ。プレシア達の手伝いのためだ。

「おかえりなさいフェイト」

「ただいま母さん。何か手伝える事は？」

「もう特にはないわ。少し休んでなさい」

フェイトの申し出に微笑んで、プレシアはそう告げる。それにフェイトは頷いて、リビングへと歩き出す。リニスはアリシアとアルフがつまみ食いをしないようにやや厳しく目を光らせているし、それに二人が少し残念そうな表情をしている。

プレシアはベーコンエッグを綺麗に皿に載せる事が出来て、小さく笑みを浮かべていた。フェイトはそんなキッチンの光景を見て笑みを見せる。

ランサーはそんな女だらけのキッチンを見て、少し苦笑していた。自分が来た事から女所帯だったテスタロッサ家。故に、気が付けば自分がそこの大黒柱になっていたのだ。無論、その原因が自分にもある事はランサーも理解している。だが、一番の原因はプレシアの自分に対する扱いだ。

そう、彼女はランサーを完全に自分の夫。更にはフェイト達の父親として扱っているのだ。それをランサー自身も受け入れているのだが、やはりどこかむず痒いものがある。

（ったく、親なんてもうする事はねえと思ってたのによ。……あの時出来なかった分まで、精々良い親父をしてやるか）

生前の苦い思い出を思い出し、ランサーは一人呟く。

――コンラ、お前の分までフェイト達を俺なりに愛すると誓う。これが、俺からのお前に対する最初で最後の誓約だ。

自らの手で殺してしまった我が子へ、ランサーはそう誓いを立てる。決して忘れないと。父親として愛してやる事が出来なかったが、だからこそ騎士としてではなく、一人の漢として、その償いをするために。

横に座ったフェイトの頭を軽く撫でながら、心からそう思うのだった……

「ね～、ご飯まだ～？」

「お姉ちゃん、少しは我慢しようよ」

月村家の食堂。そこで忍はすずかと朝食を今か今かと待っていた。厨房ではノエルとライダーが主に動き、その手伝いをファリンとイレインがしているだろう。ちなみにまだ待ち出して五分と経っていない。それにも関らず、忍は同じ事をもう三回も口にしていた。

さすがにすずかもそれには苦笑。なのでそれを少し嗜めるように声を掛けているのだが、忍はそれをむしろ面白がっていた。すずかをからかうように笑っているのだから。

「でもお腹空いたのよ」

「それは分かるけど、ライダー達も今準備してくれてるから」

「今日は何かしら？　最近はパンよりもご飯が多くなってるから、和食かな」

「ライダーが、今日はイレインとパンを焼いてみるって言ってたから洋食だと思うよ」

そうすずかが言った瞬間、二人に香ばしい匂いが漂ってきた。それがパンを焼く匂いだと理解し、二人は笑みを浮かべた。それと共にお腹の鳴る音がした。すずかはそれに恥ずかしさを感じるが、聞こえた音が自分のだけではない気がして、忍へ視線を向けた。

すると、忍はやや照れながらも何も無かったかのように済ました顔をしている。そんな忍の反応にすずかは小さく笑みを浮かべた。

そして、こう言った。

「別にそこまで気にしないよ」

「……まぁ、家族だし聞かれてもいいんだけど。どうしても……ね」

二人してその言葉で笑い出す。そこへライダー達が料理を運んできた。二人の楽しそうな笑い声に、ライダー達は少し不思議そうな表情をしたが、そのまま料理を並べ出した。二人が楽しそうだったので、特に何か疑問を浮かべる事もなかったのだ。

「何か面白い事でもあったのですか？」

「うん。まぁ、そんなとこよ」

「じゃあすずかちゃん、後で教えてくださいね」

「えっと……どうしようか？」

ファリンの言葉にすずかはやや困ったように忍へ視線を向けた。それに忍は苦笑混じりに、すずかの好きにすればいいと返した。それを聞いたノエルは何となく二人の笑っていた理由に気付いたのか、微笑みを見せてファリンへ告げた。

二人しか面白くない事だから、聞いても仕方ない事だろうと。それにライダーも何か気付いたのか、頷いてそういう事もあるのですと言った。イレインとファリンはそんな二人の言葉に少し疑問を感じながらも、そんなものかと納得した。

そうして料理を並べ終え、六人揃って食事を始める。本来使用人であるはずのライダー達。それが普通に忍やすずかと会話をしている。そんな光景が月村家では普通の光景。メイドと言ってはいても、すずかと忍にすれば家族と同じ。

なので、何も知らない人間には違和感しか感じないだろうが、それがここでは日常風景。今も六人で賑やかに話しながらの食事中。

「もうすぐ運動会ですね、今年もスズカはクラス対抗リレーのアンカーでしょうか？」

「どうだろう？　フェイトちゃんもいるし、私はアンカーじゃないかも」

「ま、どっちにしろすずかのクラスがリレーはもらったわね」

「すずかちゃんにフェイトちゃん、そしてアリサちゃんですもんね！」

「……小学生離れした速度だすもんな、フェイトは」

「魔法を使わないで、ですからね。それよりも私は保護者参加の競技が心配です。ランサー様が出場するとどうなるかと……」

そんなノエルの言葉に全員が笑った。ランサーが参加するとなると、小次郎やセイバーにライダーさえ全力を出す事になると思ったのだ。毎年運動会の保護者参加競技で、出場するサーヴァント達は適度に加減をしていた。しかし、ランサーがそれをするとは思えなかったのだ。

ランサーは勝負になると子供のような部分を見せる。そうなれば、それを止める事は出来ないと誰もが思ったのだ。そして、待つのはサーヴァント達の全力戦だ。借り物競争ならばいいのだろうが、これが純粋な短距離走となると話は別。ランサーは最速のサーヴァント。それに勝てる者はいないのだから。

何とかアルフ辺りにしてもらおうとファリンが言えば、士郎でも十分反則的なんですがとライダーが返し、来年は八神家がいるからもっと大変だとイレインが笑い、誰が出場するかで揉めたりしてと忍が続く。

すずかとノエルはそんな話に笑みを浮かべていた。どちらにしても楽しい運動会になるだろうと、そうすずかが締め括ると、それに全員が頷くのだった……

「そうか。もうそんな時期だったか」

「ええ。またなのはが少しブルーになる時期です」

「まぁ、あの子も少しは楽しみに出来るようには……なったはずなんですがね」

士郎の苦笑混じりの言葉に、小次郎は頷いて笑みを浮かべた。出会った頃から、毎年この時期になるとなのはが決まって少し暗くなるのだ。それは運動会の存在が原因。それを小次郎も知っている。

何せ、アリサを通じてなのはの運動能力は聞かされていた。そして、そのためになのはが運動会を苦手としている事も。だが、セイバーとのトレーニングの成果か、なのはは少しずつではあるが運動能力を上げていて、去年などは短距離走で初めて二位を取る事が出来たのだから。

「でも、今年は色々大変かも。何せフェイトちゃんのとこは、保護者が保護者だから……」

「ランサーさんなら、出るからには勝ちにくるだろうし、アルフも似た部分があるもんな」

「俺も相当なんだが……ランサーさんには勝てないなぁ」

高町家の三人がそれぞれにテスタロッサ家に対して思う中、小次郎は一人来年の事に思いを馳せていた。はやての足は、ルーンの効果もあってか予想以上に早く治るとの見方が強い。となれば、来年の同じ時期には今以上の盛り上がりがあるだろうと。

シグナムやヴィータは負けん気が強い。はやてもお祭り好きな所があるので、きっとそれを助長するだろう。そこまで考え、小次郎は呆れたような笑みを浮かべた。

（来年の事を言うと鬼が笑うと言うが、こちらには鬼よりも恐ろし

い娘がおったな。少しは淑やかさが身についてきてはいるが、あれを嫁にもらおうとする強者はおるのだろうか？）

自分の妹のような少女を思い浮かべ、小次郎はそう思った。アリサの家が資産家である事は小次郎も重々理解している。故に、アリサが自分の好きな男を婿にする事が難しいと理解していた。

それと同時に嫁にいく事の難しさも。政略結婚が当然の時代だった小次郎からすれば、アリサはそういう存在に見えていたのだ。だが、実際は両親共にアリサを無理矢理結婚させるつもりなどなく、極論を言えばアリサに事業を継がせる事も強要しないつもりなのだ。

それを小次郎は知らない。なので、小次郎としてはアリサがこのまま成長していく事に不安を感じていたのだ。自由奔放なアリサ。物怖じせず、誰にでも意見を述べる事が出来る勝気な性格。それらは小次郎からすれば好ましいものだ。

しかし、それが将来に災いする可能性は捨てきれない。そのため小次郎は、ゆっくりでもいいからアリサに先の事を考えるように促していた。正直な話、家を捨てる事さえ視野に入れさせて。

「……さ、話はここまでにしよう。すまんが、私はそろそろ暇させてもらう」

「あ、そうですね。アリサちゃんによろしく」

美由希の言葉に頷き、小次郎は道場を後にする。その背中を見送り、美由希は未だに運動会の話をしようとする士郎と恭也へ告げた。

――保護者参加の競技は、セイバーが出ればいいよ。恭ちゃんやお父さんは大人しくビデオに録画でもすれば？

その言葉に二人はやや考え、それもいいかと納得。それを聞いて美由希は軽く呆れながらも笑みを見せるのだった……

八神家　リビング。そこでは総勢七人にもなる家族が勢揃いし、楽しく食卓を囲んでいた。

「今日行けばリハビリも三日目か。はやて、調子はどうだ？」

「絶好調や。ただ、まだ歩けるんはかなり先やけど」

「大丈夫だって。石田先生も言ってたじゃん。この感じなら本当に春には歩けるようになるって」

はやての声が少し落ち込んだのを受け、ヴィータが明るくそう言った。ランサーによって刻まれたルーン。それがはやての回復に一役買っているのは、誰の目にも明らかだった。リハビリでどれだけ疲れて帰ってきても、翌日には何事も無かったように回復しているのだ。

それだけではなく、はやての足の麻痺自体もそれがゆっくりと癒しているらしく、本来よりも早い時間で歩けるようになると石田女史も驚いていたぐらいなのだから。

「ですが、あまり無理はしないでください。慌てず、焦らず、慎重に進めてくれる事を願います」

「分かっとるよ。シグナムは心配性やな。リインもおるし、わたしもそこまで焦っとらんから」

「でも、出来る事なら年明けにはって思ってるでしょ？」

「……主、まさかその目的はいかがわしい事ではないですよね？」

シャマルの言葉に、リインが何かを思い出して続けた。それを聞いて、はやては平然としながらそうではないと返すが、アーチャーだけは気付いた。そう聞かれた瞬間、はやての顔に僅かな動揺が見えたのだ。

「……まぁ、信じるとしよう。はやてもまさか三度目をやるはずはない」

「そ、そうや。アーチャーの言う通りや。三度目の正直ちゅう言葉がやな……」

「二度ある事は三度あるともいいますが？」

はやての言葉を遮り、ザフィーラが尋ねた言葉。それにはやてが止まる。アーチャーはそんなはやてに何も言わず、黙って食事を続けている。リインもシャマルも、シグナムにヴィータさえそんなはやての反応から全てを察した。

はやてが三度目を狙っていると。そう、確かに三度目の正直なのだろう。それは、三度目はないという意味ではなく、今度こそ全員の胸を触ってみせるという決意だと。そう理解したのだ。

一斉にため息を吐く守護騎士達。それにはやてが開き直り、何がいけないと言い出した。触って減るものではないと力説するはやてに、誰もが呆れつつもどこか楽しそうに笑みを浮かべた。

今度ははやての両手を押さえていようかとシャマルが言い出せば、それではあんまりだからと、セイバーに見張りを頼もうとシグナム

が提案。それにヴィータが賛同し、自分も一緒に傍にいると告げた。リインがそんなやり取りを聞いて、セイバーは安全なのかと尋ねれば、ザフィーラが初めての旅行での話を聞かせ、納得させた。

「……どうでもいいが、まだ行き先が温泉と決まった訳ではないからな」

既に行き先が温泉と言わんばかりに話を進める家族達へ、アーチャーは少し苦笑しながらそう告げるのだった……

ランニングを終えて汗を拭きつつ、アリサは小次郎から高町家での会話を聞かされていた。

「……確かになのははまた苦い顔するんでしょうね」

「だが、それでも逃げる事はなかろう。そこがあの娘の強き所よ」

小次郎の言葉にアリサも頷いた。なのはは嫌な事から逃げる事だけはしない。どれだけ厳しく辛い事であっても、必ず立ち向かうのだ。それは、アリサとて良く知っている。

「でしょうね。でも、今年は余裕だわ。フェイトがいるんだし」

「ふむ。確かにあの娘は韋駄天の如き速さであったな」

「韋駄天って……例えが相変わらず古過ぎるわね」

小次郎の表現に軽く呆れながら、アリサはため息を吐いた。もう

かなり慣れた感があるが、それでもこう思うのだ。古風と言えば聞こえはいいが、実際は時代遅れそのものだ。しかし、小次郎はこの数年で現代に少しずつではあるものの、順応しているのも事実。

そこには、小次郎の高い知性とアリサのものを教える事の上手さ。そして、何よりも毎晩のように開いている現代教室の影響が大きいのは、言うまでもないだろう。

二人は歩きながらこれからの事を話す。運動会にクリスマス、そして大晦日に正月と挙げればキリがないぐらいイベントが目白押しなのだ。小次郎としては、本当の満月を肴に月見酒と洒落込みたいのだが、それはアリサには無理なため、言わずにいたりする。

だが、紅葉狩りはアリサも乗り気。キッカケは一年生の時にすずかから聞いた話。それをアリサが小次郎へ聞かせたため、当然のように小次郎は興味を抱いた。しかし、生憎小次郎は車の運転が出来ないし、アリサは他の者を連れて行く気はなかった。

「……今年もまた近くの山にでも行くか？」

「今年は美由希さんも来るだろうから、少し遠出でもいいわ。駅前の旅行代理店分かる？」

「うむ。外来語三文字の看板の場所であろう？」

小次郎は何度か訪れた事のある駅前の光景を思い出しながら、そう答えた。赤い看板に白い文字でアルファベットが書かれた店構え。それをはっきりと思い出して。

そんな小次郎の答えにアリサも頷いて、そこへ行って紅葉狩りのパンフレットをもらってきて欲しいと告げる。行き先を選定するのにも役に立つし、どうやって行けばいいかの指針にも出来るからだ。

「相分かった。ならば、今日の仕事が終わり次第行くとしよう」

「そうして。アタシも一緒に行きたいけど、今日は塾だから。帰って食事したら、二人でゆっくり考えましょ」

「成程、それで決めたものを美由希殿へ尋ねるのか？」

「まぁ、美由希さんならどこでも頷いてくれる気がするけどね」

アリサの嬉しそうな言葉に小次郎も然りと頷き、二人は食堂へと向かう。出来る事なら両親とも行きたいとアリサが漏らせば、小次郎が言ってみればいいと返す。意外と行けるかもしれないと、そう笑みを浮かべて。

それにアリサは少し考えるも、言うだけならいいかと思って頷いた。この後、アリサの言葉を聞いた両親が何とか一日だけでも休みを合わせようと躍起になったおかげで、アリサは小次郎と四人での外出を実現する事になるのだが、それはまた別の話。

「暇だね～」

「……なら、どこかに行くか？」

任務終わりのための長期休暇。それにやや退屈そうにエイミィが告げると、クロノは少し呆れつつもそう答えた。場所はミッドのハラオウン家は、クロノの部屋。リンディ公認の仲となった二人は、この休暇中、ほとんど共に過ごす事になっていた。

エイミィがクロノと二人の思い出を作りたいと言い出したのもある。リンディはこの休みの間に色々と済ませておく事があると告げ、

忙しく動き回っていた。今も家に居らず、本局へ出かけているのだから。

「う～ん……それもいいけどさ」

「何だ？」

「一度立てなくなるまで愛されたいとか……駄目？」

そのエイミィの言葉にクロノは何も言えない。言われた瞬間、今日のリンディの予定を考えてしまったからだ。今日は本局へ行った後、レティと久しぶりに飲んでくると楽しそうに言っていたのを思い出したのだ。

それは、恐らく朝まで帰らないだろうと。故のエイミィの提案だと理解してしまったのだ。それを昔のクロノであれば何を馬鹿なと呆れただろう。だが、今のクロノはそれが出来ない。彼はもうエイミィとそういう関係になってしまったからだ。

（まさか、あの後本当に部屋に来るとは思わなかった）

思い出すのは、あの祝勝会の後の事。アースラへ戻り、リンディへ就寝の挨拶をしてエイミィと共に歩いていたのだが、何故かエイミィがそのままクロノの部屋までついてきたのだ。そして、戸惑うクロノへこう告げた。

――あの提案、本気だからね？

その言葉を言われた後の事を、クロノは明確には覚えていない。ただ、気がついた時にはエイミィとベッドに横になっていて、翌日後始末を二人でしながら気恥ずかしかった事だけははっきりと思い

出せる。

「……ロノ君？　クロノ君！」

そんな事を思い出し、やや顔を赤めるクロノ。それにエイミィが少し不思議そうな表情をして声をかけるが、反応が無いためやや強めに声をかける。それにクロノがやっと気付いて、エイミィへ視線を向けた。

「すまない。少し考え事をしてた」

「もう……で、どうする？」

「……後悔しないか？」

「すると思う？」

クロノのやや真剣な目を見て、エイミィは嬉しそうにそう返す。それを聞いた瞬間、クロノはどこか諦めたように息を吐いて、エイミィへ告げた。

――したくてもさせない。君が僕の隣に居る限りは。

それにエイミィが驚いた顔をしたのを見て、クロノはその顔へ自分の顔を近付けた。そのまま重なるように倒れる二人。こうして、二人は翌朝まで部屋を出る事は無かった。食事さえ忘れ、互いを求め合ったのだ。

翌日リンディが帰ってきたのだが、かなり飲んでいた事に加えて疲れていた事も幸いし、二人の事には気付かなかった。ただ、その日から二人の雰囲気が余計に親密になったのは感じ取ったので、密

かに孫は早いかもしれないと期待するリンディだった……

「マリエル？」

「うん。今度から検査してくれる事になった人」

「優しくて美人だよ」

スバルとギンガから聞かされた聞き覚えのない名前に、ギルガメッシュが疑問を浮かべると、二人はそう笑顔で答えた。以前から二人の事を診てくれていた者が異動となったため、後任としてマリエルが指名され、つい先日クイントと共に二人はマリエルと初対面したという訳だった。

最初はどこか気後れした二人だったが、マリエルと話している内にそれも徐々に無くなり、最後には笑顔で別れる事が出来るまでになっていた。クイントもマリエルの人柄に触れ、彼女なら安心だと太鼓判を押したぐらいだ。

「まぁ、誰であろうと構わんが……しかし、そろそろ冬か」

「「冬？」」

四季を詳しく知らない二人。その声にギルガメッシュはやや呆れたような表情を返すものの、どこか楽しそうに四季を説明していく。ま、途中で冬物のコートでも買うかなどの脱線もあったが。それでも概ね二人へ説明を終え、ギルガメッシュは満足そうに告げた。

「と、こんなところだ。理解出来ただろう」

「寒くて、雪が降ったりして……」

「雪って言うのは、白くて冷たいっていうのは分かった！」

元気一杯のスバルの答え。それにギルガメッシュは、一瞬理解させる事が出来なかったかと思ったのだが、もう詳しく説明する気も失せ、それでいいとばかりに頷いた。

そんな三人を見つめ、クイントはゲンヤと苦笑していた。後でもう一度教えないといけないとクイントが言えば、あまり情報を多くすると同じ結果になるぞとゲンヤが笑う。

もうギルガメッシュ達三人が来て、半年が経った。夫婦二人だった暮らしが、一気に三人もの家族が増え、五人になってもうそれだけになる。この半年の間、様々な事があった。大抵がギルガメッシュ絡みだったが、それさえも今では良い思い出だ。

ギンガやスバルもギルガメッシュのおかげか、自分の身体にそこまで重い気持ちを抱く事もなく、すくすくと育っている。問題などがぶつかるとすればこれからだとも思うが、クイントもゲンヤもそこまで心配はしていない。

何故ならば、その理由は……

「ね、明日は公園で遊ぼ！」

「それよりも、また冒険のお話を聞かせて！」

「スバル、まずは服から手を離せ。生地が伸びる。それは良いがギンガ、今度は同じ話はせんからな」

笑顔でじゃれつくスバルとギンガ。それにやや文句のような声で応じながらも、どこか楽しそうなギルガメッシュ。そんな光景を見ていればそうも思う。きっと、二人は何があってもギルガメッシュがいるだけで乗り越えていくだろうと。

頼れる兄であり、一番の友。絶対の守護者でもあるのだ。そして、それはクイントとゲンヤにとっても言える事だった。ギルガメッシュは頼れる息子であり、スバルとギンガの事を相談出来る友人なのだから。

「……ね、貴方」

「ん？」

クイントの声に普段にはないものを感じ、ゲンヤは視線を向けた。

「幸せよね、私達」

「……ああ。性質の悪い事に、何が起きてもそう感じる事が出来るぐらいにな」

二人はそう言い合って、優しく前を見つめる。そこには、スバルとギンガにくっつかれ、軽い怒りを見せるギルガメッシュの姿があった……

ーーー

A' sエピローグ。空白期への序章も兼ねていますが、意味合い的には最終回です。

これを以って、本当にしばらくのお別れです。ここまで読んで頂き、本当にありがとうございました。

いつかこの続きを書きたいと思いますが、基本的に自分は感想を糧にする事でしか書けない人間です。

なので、厚かましいとは思いますが、一言でも続きが読みたいという声を頂けると再開も早いかもしれません。

番外編　マスター達とリリカルまじかる頑張ります5

「嘘……本当に……」

キャスターの魔術によりプレシアの体は完治した。士郎はどうやったのか聞いたのだが、自分には理解出来ないだろうと凛に返され、その通りと思ったのかやや悲しくなりながらも引き下がった。

リニスやプレシア自身は未だに信じられないようだったが、それでもキャスターが稀代の魔術師と言ったのは嘘ではないと感じていた。現在、士郎達は時の庭園に来ていた。あの後、フェイト達は月村家で厄介になる事になり、今もフェイトは月村家ですずかの帰りを待っている。

そう、学校が始まったので、フェイトはアルフと共にすずか達を待つ事しか出来なくなっていたのだ。何とか戸籍を取得し、学校に通わせてやろうとしたのだが、その前にフェイトには大きな問題があった。

――――えっと、これは何て読むの？

そう、彼女は日本語がまったく出来なかったのだ。故に学校に行く以前の問題があった。算数は問題ないどころか、得意なのはが軽く落ち込むぐらいの優秀さをフェイトは持っていたのだ。

なので、今は月村家で桜を先生に日本語の勉強中。アルフはそんな桜に代わり、メイド服を着て屋敷の仕事をファリン達と共に励んでいた。

「これでまずは一つ問題解決ね」

「ですね。さて、後はアリシアですが……」

「一度実際に見てみたいわ。案内してもらえるかしら？」

キャスターの言葉にリニスは視線をプレシアへ向けた。プレシアはやや躊躇ったが、不治の病とまで言われた自分を治してみせたキャスターに賭けてみたくなったのだろう。小さく頷いて、隠し部屋のある方向を指差した。

それに頷いてリニスがそこへ近付き、その部屋への扉を開けた。それに小さく感心する凛やキャスター。士郎は先程興味本位で解析したため、その扉の事を知っていたので、あまり驚きは見せなかったが。

リニスの案内で歩き出そうとした士郎達だったが、それを止める者がいた。プレシアだ。彼女は椅子から立ち上がり、士郎達の前へ移動すると自分が案内すると言って歩き出した。その後を追うように歩き出す士郎達。

そして、やがて一同は大きなポッドの前に辿り着く。そこにはフェイトに瓜二つの少女の姿があった。それを見てキャスターと凛が揃って頷いた。キャスターは正確に、凛は女の直感で、それぞれがこの少女の魂はまだ生きていると感じ取ったのだ。

「……いけそう？」

「やってみるわ。これなら……魔力次第ね」

二人の交わす言葉にプレシアとリニスの表情が驚愕に変わる。そんな二人とは違い、士郎とバゼットは納得していた。士郎は魔術的な事は分からないに等しい。それでも、二人がそう言うのならそうなのだろうと思っている。

士郎はアリシアが死んだとは考えていない。それは、バゼットが眠っていると告げたからだ。バゼットは医学的ではなく、魔術師的見地からそう表現している。士郎はそれを知らないが、凛やキャスターからしても同じ結論を告げているだろうから、問題はない。

かつてやり直しを否定した士郎。その性格を知るからこそ、バゼットは彼へアリシアの真実を教えない。きっと士郎もどこかで気付いている。アリシアが常識的に考えれば死んでいる事を。それでも、彼はそれを目覚めさせる事に迷いはない。

そう、それはやり直しではなく取り戻す事なのだ。失ったものを取り戻すチャンス。それを手にするだけ。あった事を無しにするのではない。だからこそ、士郎はこの行動に協力しているのだから。

「本当に……出来るの？」

「ま、問題はそれを可能にするだけの魔力の確保ね。海鳴の霊脈でどれぐらい掛かりそう？」

「私の現界に使う分を抜いて、宗一郎様の広域捜索もあるし……厳しいわね」

「そっか。下手すると間に合わないかもしれない、か」

キャスターがやや渋い表情をしたのを見て、凛も同じ表情を返す。それを聞いて士郎が不思議そうに返した。凛の宝石を使えばどうだと。それに魔術師三人が呆れた。だが、その理由を知らない士郎とプレシアにリニスは疑問符を返す。

そんな三人に凛が教えた。宝石に込めた魔力は確かに使える。ただ、それはあくまで従来の魔術師からすれば多いだけ。キャスターに供給出来るとしても、一体どれだけあればいいのかが分からない

と。

「それに、その宝石をどうやって用意すんのよ。そして、私はどれだけそれに血を注げばいいのよ」

「あ……そっか。遠坂が倒れちまうな」

士郎は凛の呆れた声に申し訳なさそうに項垂れた。プレシアやリニスもそれにつられるように肩を落としている。そんな三人を見て、バゼットは小さくため息を吐くと、キャスターへ問いかけた。

「それで、どれぐらいまでがタイムリミットですか？」

「そうね……もって三年ぐらいよ」

「嘘……それだけあれば何とかなるかも。あ～、桜が間桐に染まってなきゃ手伝いを頼めたのに」

凛が予想以上に猶予があった事にやや驚きつつ、悔しそうに告げる。士郎はそれに苦笑し、自分に出来る事はないかと尋ねる。それにキャスター達は揃って何もないと返し、それに士郎が沈黙。

その様子にリニスが笑い、プレシアは一人キャスターへ近寄ってその手を握った。そして、ゆっくりとだが頭を下げてこう言った。

――娘を、アリシアを頼みます……

それにキャスターが何か感じ入るものがあったのか、柔らかい笑みを浮かべて優しい声で返した。

――ご安心なさい。必ず助けてみせるわ。

かつて自分の愛する者達を悉く失ったキャスター。だからだろう。娘を助けて欲しいと心から訴えるプレシアの姿に、かつての自分を重ねたのだ。故に魔術師ではなくメディアとして答えた。

忌み嫌った魔術の力。それを使って悲しむ母親を助ける。それは、遠い昔自分がどこかで望んだ魔女の姿。その力で困った者を救ってくれる。そんな夢のような存在。それに今キャスターはなれるのだと、そう思い密かに笑う。

（魔女と呼ばれ、裏切りしかなかった私が誰かに頼られるなんてね。いいわ……この力、一度だけ他者を助けるために使おうじゃない）

この母娘の前だけ、自分は良い魔女となろう。そう誓い、キャスターはプレシアの手を握り返して視線を周囲へ向けた。

「さ、まずは帰って色々と準備をしないといけないわ。お嬢さんは一応宝石の用意を、坊やはお嬢さんが魔力切れを起こした時に、魔力を注いであげなさい」

「「なっ！？」」

キャスターの言葉に揃って顔を赤くする士郎と凛。バゼットはそれにやや頬を朱に染め、歩き出す。プレシアとリニスはそれが理解出来ないため、疑問を浮かべている。しかし、バゼットはそれに見てみぬ振りをした。

キャスターは顔を赤くする二人に少しだけ羨ましそうな視線を送るものの、何事もなかったように歩き出す。こうして、士郎達はアリシア覚醒のために動き出すのだった……

士郎達が時の庭園に居る頃、翠屋で奮戦する者がいた。忍だ。彼女は士郎と凛を欠いた翠屋で必死に動き回っていた。二人に頼まれたためだ。恭也もそれに協力している。マスターである高町士郎はもう翠屋に復帰していて、今は忙しく動き回る息子とその友人を見つめ、やや苦笑している。

先程まで美由希も同じく動き回っていたのだが、今は小休憩。なので、高町夫妻に恭也と忍の四人で店を回していた。客の入りは上々。そのため、先程から中々息を吐く暇さえない。

「ね、それが終わったら次は五番さんの片付け頼める？」

「分かった。月村は美由希が戻ったら休んでくれ」

「アリガト。なら、高町君のお言葉に甘えるわ」

同じ高校だったが、なのはとすずかが接点を持つまでは、あまり関る事が無かった二人。それが今はこうしてバイト仲間のようになっていた。本来よりも早い段階での繋がり。最初はどこかぎこちなかった二人も、今は自然と苗字で呼び合える仲になっていた。

そこへ休憩を終えた美由希が戻り、それを見て恭也が忍へ視線を向ける。それに気付き、忍が小さく笑みを返し歩き出す。そして、美由希とすれ違い様に軽く手を叩き合う。

「じゃ、少しの間よろしくね」

「はい、忍さんはごゆっくり」

互いにクスクスと笑いながら言葉を交わす。それを見つめ、恭也は小さく苦笑。すっかり仲が良くなったと思ったのだ。そんな光景

を眺め、高町夫妻は微笑んでいた。

「いいもんだな、こういうのも」

「士郎君が来てからよ、こうなったの。さすが貴方と同じ名前よね」

「確かに彼はいい青年だよ。残念だなぁ。凛さんさえ居なければ美由希の相手にと思ったんだが」

「こら、そんな事は言っちゃ駄目よ。あの二人、お似合いなんだから」

「はい、すみませんでした」

互いに笑みを見せ合いながら会話をする二人。そんな光景を見て、恭也と美由希は軽くため息。だが、何も言わずに仕事に戻る。ピークは過ぎたとはいえ、まだこれからが忙しいのだ。平日の手伝いは初めてではないから、二人はそれをよく知っている。

互いに気合を入れ直し、動き出す恭也と美由希。それをこっそりと見つめ、忍は呟いた。

――高町恭也、か。異常としか言えない事態を受け入れたし、もしかしたら彼なら……

「これで合ってますか？」

「見せて……うん、大丈夫」

「良かった……」

フェイトは桜の言葉に安堵の息を吐いた。今、フェイトはあてがわれた部屋で日本語の勉強中。今は国語の問題を解いていたのだ。平仮名と片仮名の読み書きは出来るようになってきたのだが、まだ漢字の方がやや弱く、そこを桜に教わっている真っ最中。

正直、平仮名と片仮名だけもいいと桜は言ったのだが、出来るだけ遅れを取りたくないとフェイトは言って、現状に至る。そう、フェイトは二学期からの合流を考えているのだ。戸籍などは忍や高町士郎が伝手を使い、どうにか出来る。そのため、フェイトは今は初めて出来た友人達との学校生活のための準備を進めているのだから。

「でも、フェイトちゃんは凄いね。ミッド文字だったっけ。それも読み書き出来るのに、日本語もなんて」

「ミッド文字の方が簡単ですから。それに、私もみんなと一緒に学校に行きたいし……」

フェイトの消え入るような声に桜は微笑むと、優しくその頭に手を置いた。そして、その綺麗な金髪を手櫛で梳きながら、静かに告げる。

「大丈夫。必ず行けるから」

「……はい」

桜の言葉に心が暖かくなるのを感じ、フェイトは嬉しくなって笑顔を返す。それに桜も笑顔を返し、視線を窓へと向ける。そこには、春の青空が広がっている。同じ空を今頃なのは達も見ているだろうと思った時、聞こえてきた声に桜は小さく笑う。

見ればフェイトも笑っている。それは廊下から聞こえてくるものだ。声の主はアルフとファリン。それも喧嘩しているのだが、笑っているのはその内容が微笑ましいものだったからだ。

「だ～か～ら、みんながよく使う場所は入念にでいいじゃないか。あまり使わない場所は軽くでいいのさ。汚れだって酷くないんだし」

「だ・か・ら！　余計にそういう所は入念にやるんです。埃とかが溜まってるんですからね」

どうも掃除の仕方で揉めているようだ。そう思い、桜とフェイトは苦笑した。まだフェイト達が月村家に来て数日。それでここまで溶け込んでいるアルフとそれに順応しているファリンに、感心と同時に呆れもしたのだ。

だが、とりあえず喧嘩の仲裁をしよう。そんな風に二人は思い、視線を向け合って頷き合う。そして部屋のドアを開け、揃って言い争いを始めようとしていたアルフとファリンへ告げた。

――喧嘩してないで、掃除をしてね。

その言葉に二人が動きを止め、ややバツが悪そうにしながら互いを見つめ合う。そして、どちらともなく謝った。そんな光景に小さく笑みを浮かべ、桜とフェイトが頷いた。そこへノエルも現れ、二人に対して何をしているのかと尋ね、アルフとファリンがやや慌てる。

それにくすりと笑い、桜とフェイトが二人で掃除を頑張ろうと話していたと告げる。それに二人も慌てて頷き、それを見てノエルは少し不思議がるも納得し頷いた。お説教を免れたと思い、密かに安堵の息を吐くアルフとファリン。それに小さく微笑む桜とフェイト。そんなこんなで今日も月村家は平和だった。

何気ない午後の休み時間。教室でなのははは、見事同じクラスとなったはやて達三人と談笑していた。車椅子であるためにからかわれる事を覚悟したはやてだったが、そんな事は一切なかった。

アリサやすずか、なのはがそんな事がないようにと、自己紹介の際の最後にこう締め括りで言った事がその背景にはある。

――友達に障害を持った子がいます。それを馬鹿にしたり、からかうのなら私（アタシ）は絶対に許さないから。

この言葉を聞いた時、不覚にもはやては泣いてしまった。しかも、それを一番に言ったのはライバル関係であるアリサだったのだから。無論、それについてお礼を言う事はしない。だが、感謝は伝えた。言葉ではなく、視線で。

それをアリサも分かったのだろう。いつもならば見せないような驚いた表情を一瞬見せ、顔をはやてから逸らしたのだから。でも、その手が気にしなくていいと言うようにヒラヒラと振られていた。それに、はやてから見ても分かるぐらい、顔に赤みが差していたのだから。

「いやぁ、それにしても思ったよりも辛くなかったわ」

「そうなんだ。はやてちゃん、どんな想像してたの？」

「うん。もっとこう問題が起こるとかな。例えば……車輪盗まれるとか」

「んな訳あるか！」

はやてのボケに見事な突っ込みを入れるアリサ。それにはやてがニヤリと笑い、やるなと告げる。アリサはそれに同じような笑みを返し、当然よと返した。そんなやり取りになのはとすずかは苦笑。

何だかんだでこの二人が仲が良いのは知っているのだが、その関係性は時々分からなくなるのだ。敵対しているような時もあれば、今のように以心伝心のような場合もある。どういう状態が二人にとって自然なのだろうかと、そう思うのだ。

「ホントにはやてちゃんとアリサちゃんって息ピッタリだよね」

「うん。本当に漫才コンビでも作る？」

「「それは勘弁して」」

見事に声が重なり、またなのはとすずかが笑う。はやてとアリサは互いにやや苦い顔を見せたが、やがて笑い出す。教室に響く四人の笑い声。そして、一しきり笑った後、誰ともなく呟いた。

早くフェイトもここに来れるといいのにと。それに残りの三人も頷いて、揃って視線を外へ向ける。中途半端な状態で行きたくないと、そう言って二学期からの参加を決意したフェイト。それが同じクラスになれる事を心から願いつつ、四人は思う。

――こんな風に五人で過ごせますように、と……

「騎士言峰、貴方に聞きたい事があります」

「何かな、騎士カリム」

「……最近、無断でどこかへ出歩いているようですが、どこへ行っているのですか？」

カリムの質問に言峰はふむと頷き、視線を窓へ向ける。外はすっかり日も落ちていて、後一時間程で夜が訪れるだろう。そんな風に思い、言峰は何事も無かったように答えた。

「言う必要が？」

「ええ。貴方は私専属の騎士です。その行動範囲を私が把握していないのは、問題でしょう」

にこりと笑いながらカリムはそう言い切った。それに言峰は小さく楽しそうな笑みを浮かべ、成程と答えた。そして、静かに告げる。自己鍛錬のために人目に付きにくい場所で訓練しているのです。そんな風に平然と言いのけ、言峰は更にカリムへこう告げた。

「それに、自己鍛錬を指示したのは騎士カリムの方でしょう。私はそれに従っているだけに過ぎません」

「護衛を蹴散らしてでも、ですか？」

「おや？　あれは護衛だったのですか。てっきり賊かと思い撃退したのですが……」

カリムの言葉に不敵な笑みを浮かべて答える言峰。そう、それは護衛ではない。万が一に備えカリムがつけた監視なのだ。それを言峰も分かっているのだろう。だが、カリムが監視と言えばそれを理由に言峰が反論出来る。

しかし、それを許す訳にはいかないので、カリムはそれ以上何も言えなくなった。そう、言峰がこう締め括ったのだ。護衛対象よりも弱い護衛など必要ないと。その言葉にカリムは完全に沈黙した。

「話は終わりですかな？　では、私はこれで」

「……騎士言峰」

部屋を後にしようとする言峰へ、カリムはやや低い声で呼び止めた。それに言峰は振り返る事無く、足を止める事で応じた。

「最近夜が物騒になりました。なので、夜の無断外出は禁じます」

「……承知した」

そう微かに笑いを混じらせた声で言峰は返事をして部屋を出る。それにカリムは悔しそうに唇を噛み締める事しか出来なかった。自分では、言峰を出し抜く事が出来ない。そんな風に感じながら……

新婦の控え室。そこでカレンは不思議な感情に包まれていた。純白のドレスを見た時は何も感慨は沸かなかったのに、ティアナがそれを着た自分を見て悔しそうに綺麗と誉めてくれた時は、何故か嬉しく思えたのだ。

今もティアナはカレンの身だしなみをチェックし、頷いている。カレンはそんなティアナへいつもの調子で声を掛けた。貴方はいつ着る事が出来るのでしょうねと。それにいつもであれば何らかの反論や抵抗を見せるティアナだったが、この時は違った。

――当分無理ですね。いや、下手したら着れないかも。

どこか憧れるようにそう返してきたのだ。それにカレンは拍子抜けするものの、そうですかと返す事は出来た。だが、それ以上何も言えなかった。普段であれば浮かんでくるはずの言葉が、何一つとして出てこなかったのだ。

ティアナはそんなカレンに微かに疑問符を浮かべるも、きっと結婚式なので戸惑っているのだろうと思い、それ以上何も言わなかった。そして、ティーダの様子を見てくると告げ、部屋を出て行った。

それを見送り、カレンは自分へ問いかける。何故自分はティアナへいつものような事が言えないのか。どうしてこんなにも心が弾むような感じがするのか。そんな風に自問するカレン。

そこへ誰かが入ってきた。カレンはてっきりティアナが戻ってきたのだと思い、平然と視線を向けてティーダはうろたえていましたかと、尋ねようとした。だが……

「ティーダは……」

「俺がどうしたって？」

そこに居たのはタキシードを見事に着こなしたティーダの姿だった。それにカレンは言葉を失う。いつもであれば違和感しかないだの、着ているよりは着られているだの言えるはず。だが、何故かその姿に何も言えなくなったのだ。

カレンもシスターの端くれ。結婚式は何度か見た事はある。ティーダと同じ格好をした者が自分と同じ格好をした者と夫婦となり、幸せそうにしているのを何度となく見た事はある。だから、それを思い出し、自分がそれらと同じになる事を改めて思い知ったのだ。

そんな風にカレンが考えている間、ティーダはカレンを見て言葉が無かった。純白のドレスが似合うだろうとは思っていた。白い肌のカレンには、誰が何と言おうと似合う。そうティーダは確信していたのだから。

しかし、その予想以上にカレンはドレスが似合っていた。ティーダはその姿を見て、小さく心から呟いた。両親にも見てもらいかったと。事故死した両親。その二人へ、自分の晴れ姿と妻となるカレンの姿を是非見て欲しかった。そう思い、ティーダはカレンへ万感の思いを込めて告げる。

――綺麗だよ、カレン……俺は、君に出会えて良かった。

その言葉がカレンの心を揺さぶる。今まで人の言葉には必ず裏がある。そんな風にさえ考える事があったカレン。しかし、士郎達のような言動に裏表がない者達との触れ合いが、時間が、その思い込みにひびを入れ、今のティーダの真心からの言葉がそれを完全に打ち砕いた。

――そうですか……では、私も出会いに感謝しましょう。私の伴侶との出会いを……

カレンはそう言って手を組んで目を閉じ、俯いた。それは礼拝。ティーダはそれに苦笑した。こんな時までシスターらしいカレンにだ。だが、ティーダは知らない。カレンのその行為は、流れ出る涙を悟られないためのものだという事を。

ティーダは思いのほか長く祈りを捧げるカレンを見て、最後には小さくため息を吐いて、その隣で同じように祈りを捧げ出した。カレンはそれに気付いたのか、ティーダを横目で見やり、本人さえ気付かぬぐらいに嬉しそうに笑みを浮かべてその目を閉じる。

そうして二人は、式の開始時刻が迫った事をティアナが告げに来るまで隣り合ってそうしているのだった……

自然保護隊隊舎前の軽い休憩用のテーブル。そこにイリヤと凛の姿があった。キャロとはやては隊舎内で別の話をしている頃だろう。そう、機動六課へのスカウトだ。レアスキルである竜召喚。それを使えるキャロを、是非戦力として欲しいと凛は考えていたのだから。

正直言えば、はやては幼いキャロを誘うとは思っていなかった。だが、実際会ってみて決めたのだ。自分と同じように突然現れた存在を受け入れ、共に歩む事を決めたその在り方に近しいものを感じたが故に。

「そう……お兄ちゃんもいるのね」

「ええ。にしても、まさかこんなにも時間と場所がずれるとは思わなかったわ」

凛から聞かされた今日までの簡単な話に、イリヤはどこか嬉しそうに返した。それに凛は頷き返し、イリヤの状況に呆れ混じりの声を漏らす。それを聞いたイリヤは、そんな凛の言葉にやや呆れたような表情を返した。

「それは私の台詞よ。まったく、気がついたら雪原に一人きり。魔力を感じたから歩いてみれば、狼に襲われるキャロと出会った。それから私がどれだけ苦労したと思ってるの」

「ゴメンなさい。でも、まさか竜がいるとはね……」

「こっちじゃ滅んではいないみたいよ。キャロの部族は元々竜召喚士の一族みたいだし」

そこからイリヤは、キャロから聞いたルシエの話を聞かせた。それに凛が様々な相槌を返す。そして、そんな話が終わった後、凛はイリヤを見てある事に気付く。

「ね、イリヤ」

「何？」

「もしかして、大きくなった？」

凛がそう問いかけるとイリヤは少し自慢げに胸を張った。背が三センチも伸びたのだと、そうはっきり言い切ったのだ。凛はそれに成程と苦笑した。自分もこの十数年で変わった事がある。それと同じ事がイリヤにも起きたのだろうと。

しかし、何故か自分達の変化は経過した年数と一致しないレベルなのだ。なのは達が一年で一年分成長するのに対し、凛達は三年で一年分程の変化しか起きていない。それは髪の伸び具合から見ても分かるのだ。

そのため、最初は完全兄妹や姉妹と見られるような差があったなのは達と士郎達だったが、今はそこまでの差がなくなり、下手をすれば同年代に見られる事も珍しくないのだ。

その原因は未だに分かっていないが、凛は並行世界移動の影響だと思っている。それにキャスターも同意したので、凛としてはそれ以上追求する気は無かった。それよりもその頃はやらなければならない事が沢山あったのだから。

まずはジュエルシード事件の関連で管理局との交渉。リンディが話の分かる人だったおかげで何とかなったのだ。と思ったら、次は闇の書事件。それもキャスターの力で何とかなったが、シグナム達が過去の罪を清算すると言って、管理局へ滅私奉公を始めたのだ。

そして、はやてが主としてシグナム達だけに働かすのは嫌だと言いだし、今の流れに至る。そう、凛ははやてが管理局に利用されないかを心配し、表向きは嘱託魔導師となって、こうしてはやての傍にいるのだ。

「で、機動六課だっけ？　それにどうしてキャロを誘うのよ？」

「詳しくは長くなるからパス。簡単に言えば、管理局崩壊の予言が出たのよ」

凛はカリムがレアスキルを使って出した予言を簡略し、イリヤに告げた。その言葉にイリヤは微かに表情を変えただけで、それ以外の反応を示さなかった。それが魔術師としての反応だと理解し、凛は内心で協力を望めそうもないかと苦笑する。

実際凛もはやて達が絡まないのなら、管理局がどうなろうと関係ないのだ。リンディ達のように個人的な繋がりがある者達は助けようとするだろうが、多くの管理局員を全て助ける事など考えないのだから。

だが、一人だけそれを成そうと動く者を知っているので、凛はおそらく手を貸す事になっているともどこかで思っている。

「……そう。それでリン達は部隊をね」

「そ。キャスターにも声を掛けたけど、あっさり振られたわ。まぁ、最初から期待してなかったんだけどね」

「はぁ～……サーヴァントなんてこっちじゃ反則みたいなものよ。でも、キャスターでよかったかも」

「そうね。まだ魔導師って誤魔化せたもの」

そう言って二人は笑う。自分達も魔導師と誤魔化しているのだ。それが嘘だと知っているのは、ほんの極一部。イリヤに限ってはキャロ以外は知らないのだから。そのまま、二人は話を続ける。内容はイリヤにも六課に来て欲しいというもの。

本来は保有魔力の兼ね合いでリミッターを掛けられるが、正直自分達は魔術回路さえ閉じてしまえば、そこまで魔力がない人間と同じになれる。なので、是非イリヤも来て欲しいと凛は告げた。イリヤも士郎や桜に会えるのは嬉しいし、正直凛の家族とも言えるヴォルケンリッターにも興味があった。

だが、イリヤは自分一人だけで結論を出すつもりは無かった。なので、こう返事を出した。

――キャロが行くって言ったら行くわ。

それに凛は一瞬呆気に取られるが、すぐに笑みを返して「交渉成立ね」と告げる。そこへキャロとはやてが現れ、キャロ自身の口から六課への参加を表明されたイリヤは、それに頷いてはやてへ手を差し出した。

それに凛もキャロへ手を差し出し、疑問符を浮かべる二人へ告げた。これは互いの挨拶みたいなものだと。それにはやてとキャロも納得し、その手を握り返す。

「よろしく、ハヤテ」

「よろしくな、イリヤちゃん」

「よろしく、キャロ」

「よろしくお願いします、凛さん」

繋がる手と手。それは、そのまま絆となっていく。だが、六課設立まではまだ時間があった。そのため、その後キャロは、イリヤと共に休日を利用しミッドへと出かける。理由は自分の上司となるフェイトが一度会って話がしたいと希望したため。

そこでキャロは運命の出会いを果たす。自分と同じような孤独の苦しみを味わいながらも、立ち直って強く生きるエリオ・モンディアルとの出会い。それこそがフェイトの本当の目的だった。はやてから聞いたキャロの境遇。それと共通点を持つエリオ。そんな二人の接点を早めに設けておこうと考えたのだ。

そして、二人が会話する横でフェイトはイリヤから士郎達の昔話を聞く。イリヤはフェイトから自分と似た何かを感じたのもあってか、すぐに打ち解けるのだった……

その日、陸士１０８隊の隊舎に客人が来ていた。とはいえ、その人物の目的は隊員ではなくとある男性。そのため、彼は今日ここへ呼び出されていた。はやてから頼まれたゲンヤによって。

「キャスター……か」

「宗一郎様っ！」

そこで世話になっている葛木に会いに来たキャスターは、その無事な姿に歓喜の声を上げた。葛木は相も変わらずの表情だが、それでもどこか安堵したように見えた。彼も彼で心配していたのだ。見も知らぬ世界へ飛ばされた自身と同じように、妻であるキャスターもここへ来ているだろう。

そう考え、無事でいるかを心から案じていたのだ。キャスターは稀代の魔術師。だが、接近戦はほとんどと言っていい程出来ない。自分が傍にいない時に近接戦を得意とするような実力者と遭遇し、戦う事になったら。そんな事をどこかで危惧していたのだ。

「よく……よくご無事で！」

「運良くこちらのメガーヌ達と出会えてな。以来世話になっていた」

「最初はびっくりしました。突然隊舎内に現れたんですから」

メガーヌの言葉に葛木もその時の事を思い出し、頷く。確かに自分も驚いたと。キャスターはメガーヌへ視線を向け、葛木を今日まで世話してくれた事に礼を述べた。それにメガーヌは苦笑し、当然の事をしたまでと返す。

そして、自分も娘の世話をしてもらっていたのでおあいこだとも告げた。その言葉に葛木がキャスターへ視線を向け、予想だにしない事を頼んだのだ。

――キャスター、ルーテシアに魔術を教える事は可能か？

それにキャスターだけでなく、メガーヌさえ言葉がない。それでも何とかキャスターは立ち直り、おそらく無理だと返した。この世界の者達にはリンカーコアと呼ばれる魔力を生み出すものがあるの

だが、代わりに魔術回路が一切無いのだ。
　これについては凛とキャスターの共通見解として、この世界の者達は魔術回路がリンカーコアとなっているのだろうと考えていた。何故ならば、リンカーコアは魔力を生み出すだけでなく、無意識に大気中の魔力を勝手に吸収するのだ。

　魔術師もやろうと思えばやれない事もないのだが、向き不向きがある。それを無意識で全員がやってのける事から、凛とキャスターはそう判断した。他にも細かな違いはあるが、凛もキャスターはそれから考えて、こちらの世界の人間には魔術回路はないと判断していた。

「実際、私もこちらで何人かの魔導師と出会いましたが、誰一人として魔術回路を持つ者はいなかったのです」

「そうか。もし可能ならばルーテシアの身の安全に繋がるかと思ったのだが……」

　葛木の言葉にメガーヌが軽い喜びを見せた。魔法だけでなく、あまり周囲に知られていない魔術を使える。それはいざとなった際の切り札にもなり得る。そう考えて、葛木がキャスターへ提案してくれたと理解したからだ。
　キャスターは葛木の言葉から、彼がルーテシアの事を大事に考えていると悟った。なので、興味が湧く。なので、視線を葛木から母親であるメガーヌへ向け、一度直接会ってみたいと告げた。

「分かりました。なら、今日家にお越しください。きっとあの子も喜びます」

「ありがとうございます」

「いえ。でも、葛木先生はキャスターと呼ぶのに、お名前はメディアさんなんですね？」

「え、ええ……キャスターは愛称のようなものでして」

メガーヌの指摘にやや焦り気味に答えるキャスター。それにメガーヌは照れているのだろうと思った。愛称で呼ばれる事が恥ずかしいのだろうと。なので、それ以上その事は追求しなくなり、代わりにこんな事をキャスターへ頼んだ。

「あの、メディアさん。一つ、相談があるんですが……」

「はい、なんでしょう？」

若奥様スマイルで応じるキャスター。それにメガーヌはやや悪戯っぽく笑みを浮かべ、耳元で囁いた。

――男の子が産まれたら、ルーテシアの許婚にしてくれません？

それにキャスターは真っ赤になるが、同時に何故と返す。それにメガーヌが葛木の方を見て、きっと葛木そっくりの頼もしくて強い男になってくれるだろうからと返した。その言い方に何かあったと感じ取るキャスターだったが、今のメガーヌから感じるのは葛木に対する信頼感だけ。

なので、きっともう心配はいらないだろうと思うのと同時に、やはり葛木は最高の男性だと思っていた。自分以外の女性からも好意を寄せられても、それに動ぜず、寡黙に自分を待ち続けてくれた事を察して。

なので、キャスターはメガーヌへこう告げた。構わないが、本人達次第にして欲しいと。それにメガーヌも納得。本人達が望むのなら、それをこちらが全力で支援しよう。そんな風に捉えたからだ。

こうしてメガーヌとキャスターは、共に同じ男へ好意を抱く者として意気投合する。ルーテシアもキャスターに親近感を感じ、打ち解けるのに時間はあまりかからなかった。この後、キャスターは葛木と共にバニングス家で暮らす事となるが、アルビーノ母娘とも親交を深めていく。

それが結果的に管理局を助ける事になると知らずに……

――――――

番外編　マスター達とリリカルまじかる頑張ります6

高町家の食卓は賑やかだ。士郎が桃子という先生を得て菓子作りの腕前を磨き、家庭料理のコツやレシピを教わる事で話題を作り、美由希がなのはと共にそれらを食べたいと希望し、恭也は父の士郎と揃って笑みを浮かべて相槌を打つ。

五人家族は士郎という異邦人を加え、六人となって更に賑やかさを増していたのだ。それだけではない。士郎と恭也は数少ない男の味方を得て、美由希となのはは恭也と違うタイプの兄を得て、桃子は家事の手伝いを出来る息子を得たようなものだったからだ。

「士郎君、醤油を取ってくれ」

「どうぞ、士郎さん」

「すまんな」

「いえ」

二人の士郎が会話する。その呼びかけが最初は違和感しかなかったなのは達だったが、今はもう慣れたもの。故に平然とそんな会話を聞きながら箸を動かしていく。今日の朝食は純和風。士郎と桃子の合作である。

「どうかしら？　どれが私の作った物で士郎君の物か分かる？」

桃子が二つの料理を指差して全員へ楽しそうに問いかける。それを受けて、全員が思い思いに箸を伸ばすのを見て、士郎はやや苦笑していた。何せ、四人は真剣な眼差しだったからだ。そこまで入れ

込まなくてもと、そう思う士郎だったが、これも軽い楽しみの一つなのだろうと思って口には出さない。

やがて、全員が両方を食べ、何故か一旦四人で集合した。そこで小声で交わされる意見調整会が開始される。それを見つめ苦笑する桃子と士郎。そして意見がまとまったようで、四人は頷くと席へ戻って同じ物を指差しながら士郎の作った物はこれだと告げる。

残った方が桃子の作った料理だと、そう断言したのだ。それに桃子と士郎が正解と告げると、なのは達に笑みが浮かんだ。士郎は一人そんな光景に家族らしさを感じて、どこか懐かしむような表情を浮かべるもすぐにそれを消した。

（セイバーと藤ねえ、どうしてるんだろ？　遠坂は時間の流れが一緒じゃない可能性もあるって言ってたし、もしかすると戻ったら向こうでは時間が過ぎてない可能性もあるって言ってたっけ）

凛の予想を思い出しながら、士郎は白米を口へ運ぶ。もし後者ならばそこまで心配はない。セイバー達の胃袋を満たす必要がないからだ。だが、万が一前者の場合だと少し不安が残る。今の衛宮邸には家事が出来る人間がいないのだ。

セイバーやライダーではおそらく無理。大河は論外だ。唯一の希望はイリヤ付きのメイドであるセラだが、果たしてイリヤのいない衛宮邸で家事をしてくれるかは微妙なところと言える。

そんな士郎の横では、美由希達が同じように食事を進めながら、先程の桃子の思いつきで感じた事を話していた。

「やっぱり母さんが作った物と士郎さんの作った物は分かるね」

「味が若干違うからな。俺はどちらも好きだが」

「私もどっちも好き。お母さんの味も士郎さんの味も優しい味だもん」

高町兄妹の意見に高町夫妻が微笑む。一方、兄貴的立場の士郎としては、そんな三人の言葉に照れるやら嬉しいやら。まるで母親の味と言われたような気持ちになったからだ。

しかし、それを拒否するのも何か悪い気がし、結局士郎は頬を軽く掻いて笑うだけしか出来ない。そんな彼を見て五人が笑う。そんな穏やかで緩やかな高町家の食事風景だった……

「うん、やっぱり桜さんの料理は美味しいわ」

「ふふっ、そう言ってもらえると作った甲斐があります」

忍の言葉に桜はそう笑みを浮かべて返す。フェイトはすずかと話しながら料理を食べている。今日のメニューは桜の得意な洋食だ。リニスとノエルの三人で作ったので、正確には桜の料理だけではないのだが、忍は的確に桜の作った物ばかりを食べていた。

ファリンはアルフと共に今日の掃除区域を話し合っているし、バゼットは一人何かを考え込んでいた。そう、ここにいないフェイトの家族であるプレシアの事を考えていたのだ。

（フェイトはプレシアがここに来ない事を疑問に思いつつある。そろそろ誤魔化すのも限度がありますし……）

アリシアの傍を離れたくないと言い張るプレシア。それをどうやってこの月村家まで連れ出すか。それをバゼットは考えていた。と、そこでバゼットの思案顔に気付いたノエルが問いかけた。

「どうしたのですか、バゼット様。何か悩み事でも？」

「え？　あ、いえ、大した事ではないのです」

「そうですか。ですが、もし魔術絡みならば、メディア様に相談されるのが良いと思いますよ」

バゼットの答えにノエルはそうさらりと返す。ノエルには、バゼットが悩む事がおそらくそういう方面だと分かった。何せ、バゼットが考える事は魔術絡みかフェイト関係しかないからだ。そんなノエルの言葉にバゼットはやや呆気に取られるも、成程と頷いた。

（キャスターはプレシアに信頼されている。彼女からならば、プレシアも動くかもしれませんね）

アリシアの事を託され、プレシアにかなりの信頼を寄せられているキャスター。彼女ならばその智謀を使って、フェイト達とプレシアが共に暮らせるように出来るかもしれない。そう判断したのだ。

だが、そのキャスターへ頼みを聞いてもらう方法がバゼットにはない。どうしようかと思うバゼット。そこへフェイトとすずかの会話が聞こえてきた。

「でね、アリサちゃんはかなり着せ替えをさせられたんだって」

「そうなんだ。メディアさんは洋服を作る事が好きなんだね」

「みたい。でも、作る度にアリサちゃんへ着せようとするみたいで、ちょっと困ってたよ」

「それですっ！」

突然の大声。それに全員が視線を動かした。バゼットはそれに意識を向ける事もなく、フェイトへ視線を動かすとこう告げた。プレシアをここへ呼ぶために手を貸して欲しい事があると。それにフェイトが即座に頷いたのは言うまでもない。

だが、そんな会話を聞いてアルフとファリンは何か嫌な予感を感じ取り、こそこそと話し出す。勿論、バゼットに聞かれないためだ。ちなみに、視線はフェイトへ耳打ちするバゼットへ向けられている。

「ね、絶対碌な事にならないよね、この話」

「ですねぇ。きっとフェイトちゃんは気にしないでしょうけど、後でリニスさんは頭抱えるような気がします」

「そう思うのなら止めてあげればいいんじゃない？」

そんな二人の会話へ忍がやや苦笑混じりに参加する。それを眺め、桜とすずかは共に笑みを浮かべる。リニスは既にバゼットの行動がプレシア関係と気付いたのか、平然としながら食事を食べていた。

「とりあえず、まずは食事を終わらせましょう。冷めてしまってはいけませんから」

リニスのその言葉に全員が納得したように席へ戻る。そんな賑やかで騒がしい月村家の朝食風景だった……

「あ、これ辛いけど美味しっ！」

「でしょ？　私の自信作なんだから」

はやてが凛が作った特製蒸し餃子を口に入れて驚いたような声を出す。それに凛は嬉しそうな笑みを見せて胸を張った。中身は豚肉や筍といったありきたりの物。だが、アクセントとして少量の豆板醤が入れてあるのだ。

それでややくどいかもしれない肉の脂を気にならないようにし、食欲増進効果も狙った一品だったりする。これから先は暑さで食欲が減退する時期。それを考慮しての物だった。

それを笑顔で食べながら、はやてはふと何かを思いつき凛へ視線を向けた。

「な、これの中へにこごり入れたらもっと美味しくなるんちゃう？」

「……いいかもね。ただ、普通の味付けじゃ辛味を薄くするだろうから……」

「なら、にこごり自体を辛い奴にするんはどうや？　で、餡は辛くない奴にすればええ」

「成程、辛味スープか。じゃ、大量に作っておきましょ。凍らせておけば他のにも利用出来るわ」

「おおっ！　さすが凛さんや。これからは辛い物が美味しい季節になるもんな」

共に笑顔を浮かべる二人。たった二人しかいないが、それでも寂しいと思う事はなかった。凛は長い間一人で暮らしていた経験があるし、はやては一人で暮らす事を覚悟していたためだ。

二人しかいないではなく、二人もいる。それが凛とはやての共通認識だった。孤独を何ともないと思って暮らす事が出来る二人だが、それは思う事が出来るであって平気な訳ではない。故に凛ははやての傍にいたかったのだ。

八神家の食事は基本中華が多い。凛の得意料理だからなのだが、はやてがそれを気に入ったからでもある。その理由は、外食の雰囲気があるからだ。車椅子のため、あまり外出自体をしなかったはやて。

だから、凛の作る本格的な中華料理などは口にする事がなかった。料理店のような雰囲気がする。はやては初めて凛の料理を食べた時、涙ながらにそう言ったのだから。

「今日の夕食はどうする？」

「あ、わたしがカレー作る。チラシ見たら今日は牛肉安かったから、ビーフカレーや」

「へぇ、なら私はサラダを作りますか。今日は桃子さんへ言って少し早上がりにさせてもらうから、買い物は二人で行くわよ」

「うんっ！」

はやての笑顔に凛も笑顔を返す。凛ははやてにどこか幼い頃の桜

を重ねていた。本来ならこんな会話をして、姉妹で色々と過ごせたかもしれない相手。もう取り戻せない時間。それをはやて相手に取り戻させてもらっているような感覚を抱いていたのだ。

決してはやてを桜の代わりと思っている訳ではない。でも、少しぐらいその分も可愛がるぐらい罰は当たらないだろうとも思う。凛はそう考え、小さく息を吐く。自分が戻る手段を手にするまで、出来るだけはやてに幸せな思い出と時間を作ってやりたい。そう思う事しか出来ない事へ悲しみと悔しさを滲ませるように。

「さて、じゃあちゃっちゃと食べましょ。バスの時間に遅れるといけないし」

「せやな」

広い一軒家。そこに響く二人分の食事をする音。だが、それは少しも悲しいものではない。そこにいる二人は共に笑みを浮かべているのだから。そんな静かで優しい八神家の朝食風景だった……

広い空間にたった二人しかいないバニングス家の食堂。そこの長いテーブルに座り、アリサはそれを平然と受け入れている。キャスターもそれに特に何か言う事もなく、黙々と食事を進めている。それでもアリサの表情に微かな寂しさが見えるのを、キャスターは気付いていない訳ではない。

なので、一旦ナイフとフォークを置いてアリサへ視線を向ける。それにアリサも気付いて、不思議そうに視線をキャスターへと向け

た。

「どうしたの？」

「……アリサちゃん、場所を移りなさいな」

「どこに？」

「ここよ」

キャスターの示したのは自分の隣。それにアリサは少し黙り込み、何かを迷っているようだった。その理由を瞬時に察してキャスターは小さく苦笑すると更にこう告げた。離れていては女同士の内緒話も出来ないからと、そう母親のような笑みを浮かべて。

それにアリサが一瞬だが嬉しそうな笑みを見せてから、すぐにいつも表情へ戻し、そういう事なら仕方ないと周囲へ言い訳するように言いながら移動を開始する。それに周囲の者達も小さく苦笑するものの、アリサに気付かれないようにしていた。

「で？　話って何？」

「そうね。アリサちゃんに好きな人が出来たかなと思ったのよ」

キャスターの言葉にアリサはやや呆気に取られる。だが、どこか残念そうに息を吐いていないとだけ返した。それにキャスターが気になる相手もいないのかと尋ねるも、それに肯定の頷きをアリサは返す。

「だって、どいつもこいつも子供なんだもの。アタシの相手には十年早いわね」

「そう。十年ね」

アリサの言葉に優しい笑みを浮かべながらキャスターはそう返す。子供なのだから、アリサの言う事はある意味当然。しかし、それを指摘しないところがキャスターなりのアリサへの接し方だ。

中には年齢以上に精神が成長している者もいるかもしれない。そう考え、キャスターは内心苦笑する。そんな相手がいるとしたら、それはそれでアリサの反感を買う気がしたのだ。

（もっと子供らしくしなさいよ！　って怒りそうよね）

そういう部分も含めてアリサらしさ。そう思ってキャスターは小さく笑う。それにアリサが気付き、ややムスッとした顔をした。どうやら直感的に自分の事で笑っていると悟ったらしい。勘のいい子だと思いながら、キャスターは時計を指差してアリサへバスの時間が近い事を告げる。

それに少し悔しそうにだが、仕方なくアリサも理解を示して残りの食事を片付けるべく手を動かしていく。

「そういえばメディアさんってさ」

「何かしら？」

「どうして士郎お兄さん達の前だと顔を隠したがるの？　気になってたのよ」

「……坊や達の前ではそうする方が常だったからよ。癖になってるの」

キャスターのどこか焦るような声にジト目を向けるアリサだったが、これ以上追求しても無意味だと理解しているのだろう。そこで納得するように声を返し、代わりに別の質問をぶつけた。それはキャスターの夫の事。

既にある程度はアリサも聞いた。だが、今一つはっきりしないのが二人の出会いだ。何しろ、行き倒れていたところを葛木に助けられたとキャスターは告げたのだから。

「ねぇ、どうして行き倒れたの？」

「それは……」

「お腹が空いてなんて言ったら、しばらく口利かないから」

その瞬間、キャスターから小さく呻く声が漏れる。事実を教えても構わないと言えば構わない。だが、やはり抵抗はある。キャスターはそう思い、どうするべきかと悩み出す。と、そこでアリサが小悪魔的な笑みを見せてキャスターへ告げた。

――別に今教えてくれなくてもいいわ。でも、絶対にいつか教えてね、メディアさん。

――え、ええ！　約束するわ。いつか必ず教えてあげるから。

アリサから差し出された小指を見て、嬉しそうに耳を動かすキャスター。そのまま二人は指きりをした。そんな少し悪戯心を感じさせるバニングス家の朝食風景だった……

「どうしたのだ、騎士カリム。食が進まぬようだが？」

「……これらを食べて、どうして貴方は平気でいられるのです！」

「か、カリム、落ち着いてください！　これなら何とか食べられますから！」

「シャッハ、それも十分辛いですよ！？　まさか、舌が麻痺し始めているのですか？！」

場所はベルカ自治区内にある言峰の家。そこでカリムは、怒り心頭とばかりにレンゲを持ちながらそう叫んだ。今日はカリムがシャッハと共に言峰から招きを受けての朝食会だった。言峰からの誘いという事で警戒心を抱いての行動だったが、そこについた二人を待っていたのは、真っ赤ではなく真っ黒のマーボーだった。

その色に恐怖を抱いた二人だったが、言峰が毒など入っていないと言いながら平然と食べた事に安堵し、二人も出された物を食べない訳にはいかないと手をつけた。それが地獄の始まりだった。

強烈な辛味が二人の舌を襲い、カリムとシャッハは比喩ではなく本当に一瞬気を失ったのだ。だが、すぐにカリムは言峰の家にいるのだとの気持ちで立ち直り、シャッハは修道騎士としての誇りから立ち直った。それを見て言峰は不敵な笑みを浮かべて、次の料理を差し出した。無論それも辛い物だった。

こうして現在に至る。何を食べても極端な味しかしない。辛いか苦い。そうカリムが告げると今度は嫌に甘い物が出てくる始末。自分の舌が壊れるのではと思うような料理ばかりなのだ。シャッハは

言峰を尊敬しているからか、何とか食べようと頑張っている。
いや、それだけではなく、食べるのを止めようとすると言峰がこう告げるのだ。世の中には食べたくても食べられない者もいる。それにいつ食事出来なくなるか分からぬ人生。ならば、食べられる時に食べておくべきだと。

「ふむ、どうやら騎士カリムは相当舌が肥えていると見える。私のような下賤の者が口にする物は食べられぬか」

「くっ……そういう訳では」

「それは良かった。では、遠慮なく食べて欲しい。私が腕によりをかけて作ったのだからな」

いっそ殺せとばかりに思いながら、カリムは眼前のスープを口にする。恐ろしい程の酸味と辛味が口内を満たす。それを何とか耐えながら飲み干し、中に入っていた鶏肉を噛み締める。そこからはスープを吸ったためか若干和らいではいるが、強烈な味が押し寄せる。
だが、そこでカリムはふと気付いた。慣れたせいなのか、舌が麻痺したのか、不思議と美味しく感じるようになってきたのだ。しかし、そんなはずはないと思い直し、カリムは次の料理へ手を伸ばした。すると……

「……美味しい？」

「えっ！？」

「……ほう、どうやらやっと四川料理の旨さが分かってきたようだな」

自分でも信じられないとばかりに首を傾げるカリム。シャッハはそんな彼女の言葉に心からの驚きを見せた。一人言峰だけは意外そうな表情で二人へ説明していく。この料理は辛味の中にある旨味を味わってもらうために作った事を。

確かにそれは通常の料理に比べればキツイものがあるが、その分癖になる味だと。それに二人が食べている物は、言峰が食べている物とは違い辛味を抑えてあるのだ。そう言峰が締め括ると、二人は確かにと頷いた。

言峰の前にある物と自分達用に用意された物は色が違うのだ。それが辛味を抑えてあると言われれば、納得が出来る。最初のマーボーだけは悪戯的な意味合いで食べさせたが、後は全て純粋なもてなしだと彼は語った。

「……そうですか。ならば、まずは謝罪を。騎士言峰、貴方の心遣いを疑ってしまい申し訳ありません。この食事、しっかりと味わう事を約束します」

「いや、私も自分で語るのは憚られたとはいえ、初心者には厳しい物を出した。謝罪をするならば私もだ、騎士カリム」

互いに謝罪する言峰とカリム。それを見てシャッハはどこか嬉しそうに頷いた。この後、カリムとシャッハは出された料理を完食し、言峰の家を後にした。だが、それからカリムとシャッハに異変が起こる。

そう、スバル達がなったのと同じ現象だ。一ヶ月に一度辛味が効いた料理を食べないと気がすまなくなってしまったのだ。その被害を受ける事になったのは、言うまでも無くカリムの義弟であるロッサだ。二人が美味しそうに食べるのを、苦しむようにロッサは眺める。それを言峰がどこか愉快そうに嗤って見ていたと知らずに……

「……味がしません」

「あ、そっちは俺の分だ。カレンの分はこっちだった」

ティーダの作った料理を口にし、カレンはやや不満そうに表情を歪める。それにティーダがすぐにその原因に気付き、自分の前に置いていた皿とカレンの皿を交換した。それにカレンはどこか悲しげな目をするも、黙って皿を受け取る。

カレンがかなり味付けを濃くしないと分からないと知った後、ティーダはこうやって自分と彼女の料理を分けて作っていた。それはカレンが言ったからではない。ティーダ自身が始めた事だ。

「……どうだい？」

カレンが料理に口をつけたのを見て、どこか緊張気味にティーダは問いかける。それは、結婚する前からもあったいつもの問いかけ。だが、結婚してからは、より緊張度合いが増した問いかけ。

カレンはその理由を知らない。知ろうとしない。でも、どこかで知りたいと思っている。ティーダが緊張を増した理由は、きっと自分にあると思っているから。自分が他人ではなく、妻になったからこそのものだと。

「……ええ。これなら味を感じます」

だから答える。素直に思ったままを。それではティーダが喜ばな

いと知っているのに。だが、それ以外では嘘になる。自分は味を感じるだけ。それが極端でなければ感じない程に感覚が弱ってしまっているから。

それでも、ティーダは気にしない。カレンが常人とは違う体質だと知っても関係ないと言い切ったのだ。カレンの五感代わりになるとさえ言いのけたのだから。カレンがそんな事を思い出す中、ティーダは彼女の言葉に頷いて問いかける。

「そっか。で、美味しいか？」

これがティーダが聞きたい言葉。カレンに美味しいと言ってもらいたいのではない。カレンに美味しいという味を知って欲しいからのものだ。カレンの味覚の事を知りつつも、ティーダは微調整を繰り返して、何とか美味しいと思ってもらえるようにと努力していたのだ。

カレンはそんなティーダの言葉と視線で何となくだが、彼の望んでいるものが分かった気がした。なので、もう一度料理を口にする。気のせいか、いつもよりも味が濃く感じた。そして、何故か体が少し温かくなった気がした。なので、噛み締めるようにカレンは頷いて告げる。

「……はい」

それにティーダはしばらく呆然となり、カレンを見つめ続けた。カレンもそんなティーダを見つめ続ける。やがて、ティーダが心から嬉しそうにガッツポーズをして喜びの声を上げた。それを聞いてカレンは騒々しいと思うも、口にはしない。

（まったく、これぐらいで喜ぶなどと……大袈裟ですね）

目の前で満面の笑みを見せるティーダへ心の中でそう告げるカレン。しかし、そんな彼女の表情はどこか嬉しそうに微笑んでいるのだった……

大自然の中、湯気が立ち上る。そこで大きな鍋を相手に格闘中なのはキャロだ。フリードは彼女から離れ、テーブルで本を読んでいるイリヤの頭の上に乗っている。そんな彼女の周囲ではキャロを手伝うミラの姿がある。

タントはテーブルのセッティングなどをしていた。自然保護隊の朝食時間は、いつも大体こういう風景だ。他の者達はそれぞれの仕事があるため、朝は寝ている者や見回りに出ている者などもいる。

「……キュク～」

「フリード、我慢しなさい。もう少しでご飯だから」

頭上の重みが心なしか増したように感じ、イリヤはそう苦笑混じりに告げた。おそらく今まで座っていたのが、寝そべったのだろう。そう予想し、イリヤは視線を本からキャロへと向けた。キャロはミラと二人で談笑しながらシチューの様子を眺めている。

もう冬も終わりが近付き、イリヤとキャロの六課への異動も近付いてきた。凛とはやてからの申し出を受け、二人はミラとタントへ一年間の異動を許してくれるように頼んだのだ。二人は最初こそ驚いたものの、二人が六課解散後は戻ってくると告げると笑顔で頷いてくれた。

（でも、本当に戻ってこれるかしら？　キャロはともかく、私は少し不安だわ）

凛の話では、自分達がここへ来た要因は、宝石剣の暴走だけではないかと言っていた事を思い出しながら、イリヤはそう考えた。それの根拠こそ六課設立の裏にあるカリムの予言。そこには、イリヤ達が訪れる事まで予言として書かれていたらしいのだ。

「八騎の主、異界より現れり。かの者達出会いて災いを退けるなり、か」

凛から聞いた予言の一説を呟き、イリヤはふと思う。八騎の主が意味するのが自分達だとすれば、来ている人間は士郎、凛、桜、自分、カレン、バゼット、キャスター、葛木だ。人数は八人で合っている。だが、不安が残る。それであれば八騎とは、セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカー、ギルガメッシュのはずだ。

しかし、カレンがマスターをしていたギルガメッシュはイレギュラーとはいえ、アーチャーだった。であれば、厳密には八騎ではなく七騎になる。それが何故か気になるのだ。確かにギルガメッシュはイレギュラーだ。それでも、予言に八騎と書かれていた以上、何か見落としている事があるのではないか。そんな嫌な予感を覚えるのだから。

「イリヤちゃん、出来たよ」

「悪いけど、他のみんなを呼んできてくれるかい？」

「ええ。行くわよ、フリード」

「キュクキュク」

キャロとミラの声に思考を中断し、イリヤは席から立ち上がって隊舎の方へ歩いていく。それに供をするようについていくフリードを眺め、タントは小さく微笑む。

「フリードもキャロ以上にイリヤに懐いているね」

「そうなんですよ。たまに、どっちの竜って思うぐらいイリヤちゃんにベッタリするんです」

「まぁ、仕方ないんじゃない？　イリヤはどこか不思議な雰囲気があるからね」

ミラの言葉に二人も頷き、そこから今日の事を話し合う。そんな話が終わりに近付いた頃、イリヤに率いられるように他の隊員達が姿を見せ、キャロがシチューを人数分器へと入れていく。

辺りに漂う食欲をそそる匂いに誰もが笑みを浮かべている中、イリヤだけはどこか浮かない顔をしていた。それに気付いてキャロはミラへ配膳を託してそこから動く。

「イリヤちゃん、どうかしたの？」

「うん、ちょっとね。考え事よ」

「……あまり良くない感じ？」

「そうね。そうとも言えるわ。でも大丈夫。私にはキャロがいるんだもの」

どこかお姉さんのようにそう言ってイリヤは笑みを返す。それにキャロは頷きながらも、そっとイリヤの手を握る。それにイリヤは少しだけ不思議そうな視線を向けた。どういうつもりなのだろうと、そう感じたのだ。

それをキャロも理解しているのだろう。イリヤへ小さくだがはっきりと言い切ったのだ。でも、出来る事なら教えて欲しいと。一人じゃ分からない事や不安な事も、二人なら分かったり怖くなくなったりするはずだから。そうキャロは告げると、イリヤへ微笑みと共にこう締め括った。

――だって、私がそうだったんだからね。

その言葉にイリヤは少しだけ言葉を失い、キャロへ視線を向け続けた。そんなイリヤへキャロはいつもの笑みを見せると、手を引いてテーブルへと歩き出す。その手の温もりを嬉しく思いつつ、イリヤは密かに思う。

いつの間にかキャロがここまで成長しているなんて、と。自分の心を支えてくれるような言葉を言える程、キャロは精神的にたくましくなっていた。そう実感し、イリヤは心からの笑みを浮かべて手を握り返す。

――生意気言うようになったじゃない。キャロのくせに。

――イリヤちゃんの傍にいるからだよ。これでおあいこだね。

そう言いながらテーブルへ向かう二人。それを眺め、誰もが微笑む。そんな微笑ましい自然保護隊の朝食風景だった……

（居辛い……）

それがアリサの正直な感想だった。何故なら、今の彼女の目の前では、新婚さながらのやり取りが繰り広げられているのだから。

「そ、宗一郎様？　これはどうですか？」

「……美味い。腕を上げたな、キャスター」

「そ、そんな……私はただ宗一郎様に喜んで頂きたくて……」

ピコピコと聞こえてきそうなぐらい激しく耳を動かしているキャスター。それに目も向けず、葛木はキャスターが作った料理の数々を食べていく。アリサはそれを眺め、心底この状況を呪った。

昨日、葛木をキャスターが連れて帰ってきた時には、アリサも我が事のように喜んだ。姉代わりも母代わりもしてくれていた相手。その夫が無事見つかり再会出来たのだから。しかし、しかしである。

（これは無いわよ……アタシがいるのに眼中にないみたいな雰囲気だし）

未だに恋人がいないアリサにとって、眼前の光景は当て付けにしか思えない。昨夜は久しぶりの再会だからと思い我慢出来た。それに、どこか羨ましくも思えたのだ。自分もいつかは愛する異性と。そんな風に感じる程に。

だが、こうもいちゃつかれれば話は別である。傍目から見れば、俗に言うバカップルだ。救いがあるとすれば、葛木がそこまでキャ

スターと違って淡々としているぐらいだ。

もし許されるなら、二人揃って出て行けと言いたい。だが、アリサにはそんな事を言う事は出来ない。もし自分が逆だったら。そう考える事が出来るからだ。最愛の男性と十年以上も離れ、その安否を気遣っていたのだから。

故に黙って耐える。キャスターの作った料理への感想を聞かれる度に、さらりと返す葛木の答えに嬉しさ爆発といった雰囲気で微笑む彼女を見ても。そんなキャスターを見て、葛木がどこか微笑んでいるように見えても。

「……ご馳走様」

苦行のような食事を終え、アリサは静かに席を立つ。そして、後片付けを頼み食堂を出ようとした時、一度だけ彼女は後ろを振り返った。そこには、自分へ手を合わせて謝罪するキャスターの姿があった。

どうも、アリサの言葉で周囲の状況を思い出したようだ。それにアリサは少しため息を吐いた。そして、苦笑を浮かべて手を振ったのだ。気にしないでいい。でも次回はないからと、そう口だけを動かして。それにキャスターがやや苦い顔で頷きを返したのを見て、アリサは食堂を後にする。

「……彼女には悪い事をしたようだな」

「はい。後でもう一度謝っておきます」

「私も行った方がいいか？」

「いえ、私だけいいですわ。女だけの方が上手くいく問題ですし」

キャスターの言葉に葛木も納得し、任せると返した。その後、二人は最初の賑やかさが嘘のように静かに食事を終える。そんな不思議な葛木夫妻の朝食風景だった……

――――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7682o/

英霊達とリリカルまじかる頑張ります

2011年8月8日06時16分発行